

イントロード・デimon

捻れ骨子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

CGSを乗っ取ったオルガたち参番組の元に、ある男が訪れる。悪魔と呼ばれたその男の乱入によって、物語は捻れ狂っていく。

鉄血な短編から名前を変更、連載にしてみました。原作のストーリーを結構はしょっていますので、鉄血のオルフェンズを視聴してからご覧頂くことをお奨めします。また物語の改変、独自設定、多数のオリキャラなどが存在しますので、閲覧には十分ご注意下さい。

※おかげさまをもちまして、完結いたしました。

目次

1・タイミングが良いのか悪いのか	1
2・よう、久しぶり	10
3・踊りのお相手を務めましょうか、マダム？	20
4・家族つてのは『在る』ものじゃなくて『成っていく』ものさ	31
※本編とは全く関係ない、突飛な嘘予告	45
5・いい男つてのは、それなりの過去があるものさ	50
6・たのしいたのしい、狩りの時間だ	63
7・一難去つてまた……つてのはお約束でね	79
8・ひとまず落ち着いて考えようぜ	94
9・細工は隆々、仕上げをごろうじろつてな	112
10・喧嘩というのは押し売るもの	129
11・右も左も狸ばつかか	145
12・お前の覚悟を見せてみる	164
13・止めてみる。止められるものならばな	179
14・往くも戻るもお前ら次第	196
15・さあて、火花散らそうか！	214
16・決めたら往け、怯まずに	235
17・それがお前の答えかよ	251
18・ほんじやあでかいのかましてやれや！	271
19・世の中ナメンのも大概にしとけ	287
20・そろそろ締めるとしようかね！	303
21・勝つて兜のなんとやら	321
おまけ・こっそりとオリキャラの紹介なんかしてみちやつたり	

年明けにいきなり嘘予告

22・安穩無事とはいかないねエ

23・売られた喧嘩は買っただけ

24・さてもたのしく海賊退治……といけばいいけど

25・鍛え方が違うんだよ

26・楽しませてくれるじゃねえか

27・休む暇すらありやしない

28・バレてる悪巧みつてのは救いようがねえ

29・当然のことだと思うんだが

30・ストレスの貯まるモグラ叩きさ

31・狐狩りといこうじゃないか

32・あとの始末が大変だ

33・根回しは、派手に地道に。

34・空気読めよ、いやマジで

35・狩りの、時間だ

36・宴終わって後始末、と。

37・ここから先を、どうするって？

嘘予告ですが何か。

38・殴り返すぞ？ 答えは聞いてない。

39・樂をさせては、くれねえか

40・思い通りにや、させねえよ

41・万倍にして返してやんよ

42・そのままそこで朽ちていけ

43・祭りの始まりだ

44・こいつはまったく驚いた	755
45・誰にだって理由はある	773
46・『せいぎのみかた』なんてどこにもいない	792
47・チップは命の賭博場	814
48・出すのはエースかジョーカーか	829
49・イカサマはお互い様	844
50・反則技で、勝てると思うなよ?	861
51・出し抜いてやるさ	878
52・まずは桂馬。それともナイトかな?	894
53・王手を打つか、打たれるか	910
54・ちよいと地獄(そこ)まで付き合えよ	927
55・どう終わらせるのか、見せてもらおうか	944
56・お前の旗(意思)を掲げろ!	963
57・明日は未来(あした)の風が吹く 前編	980
58・明日は未来(あした)の風が吹く 後編	1002
第2部からのオリキャラ紹介	1037
最終的な後書きという名の言い訳	1048
嘘予告	1063

1・タイミングが良いのか悪いのか

CGS（クリュセ・ガード・セキュリティ）。火星の一民間警備会社であるその組織は、現在大幅な転換期を迎えていた。

火星独立運動の中心人物である「クーデリア・藍那・バーンスタイン」を護衛する依頼。それを受けた直後に行われた治安維持組織「ギャラルホルン」火星支部による襲撃。混乱の中社長である「マルバ・アーケイ」は社内の金品を持って逃走し、同じく逃走したが戦闘が一段落したため戻ってきた実働部隊は、配下である非正規の少年兵達——通称「参番組」に反旗を翻される。

実働部隊の大人達のほとんどを放逐、あるいは『排除』しCGSの実権を握った参番組。その彼らがこれからどうしようかと頭を付き合わせているところから物語は始まる。

「オルガさーん！ 客です！」

「あ？ こんな時になんだ？」

ドアをノックし年少組の少年が告げる。参番組のリーダーで現在暫定的にCGSの代表を務める「オルガ・イツカ」は怪訝そうな表情を見せた。

現在CGSはオルガの元再編成を始めたばかりで、客を迎える予定などあるはずもない。であれば。

「壱番組（実働部隊）か、マルバのおっさん目当ての奴か。……適当にあしらうってわけにもいかねえな」

「あん？ 追いついたらいいだろ？」

今後の方策をオルガと相談していた参番組の中心人物が一人、「ユージン・セブンスターク」はそう言うが、オルガは「いや」と首を振る。

「もしかしたら仕事関係かも知れねえ。流石に受けるってわけにはいかないだろうが、コネの端っこくらいは掴めるかもだ。……で、どういう相手だ」

席を立てて問うオルガの言葉に、少年は困ったような顔でこう告げ

る。

「それが……なんか『ガンダムフレームを買いに来た』、とか言ってます」

「はア!? 社長（マルバ）が逃げたア!?!」

怪しみ疑念を持つ少年達の視線が刺さる中、その男は素っ頓狂な声を上げた。

それほど長くない髪を適度に逆立てた、二十代後半から三十代前半ぐらいの男。軍用ジャンパーにタンクトップ、カーゴパンツにブーツというその出で立ちはいかにも傭兵といった風情だが、オルガは何か違和感を覚えている。

（吉番組の連中とは、どっか違うなこの男）

「くっそあのおっさん」とか言いながらあたまをぼりぼり搔く男には緊張感の欠片もない。流石に銃器こそ向けられていないが半ば殺気じみた視線の集中砲火を浴びていながら、だ。子供だと思って舐めているのかそれとも……。

「それでアンタ、ウチにあるガンダムフレームを買いに来たって話だが……」

「ん？ ああ、お前さんが代表かい。とんずらぶっこいた社長とそういう話をしていてな。具体的などころはまだだつたんだが襲撃を受けたって話を聞いたんで、慌てて飛んできたって寸法さ」

少年（オルガ）が交渉相手と言うことを気にした風もなく、男は応対している。どうにも読めないなと思いつながら、オルガはちらりと視線を男の背後に向けた。

さりげなく男にいつでも襲いかかれる位置に陣取っているのは、オルガの相棒である少年兵「三日月・オーガス」。戦闘センスの塊と言っても良い少年であり、先日は急ぎしらえで仕上げたCGS所有のガン

ダムフレームMS（モビルスーツ）【バルバトス】を駆り、ギヤラルホルンMS部隊を退けた人物だ。

その彼が『最大限の警戒』を男に対し見せている。その事実にも、三日月に全幅の信頼を寄せているオルガは内心肝を冷やす思いであった。

（ただモンじゃねえってことだよな。さてどうするかね）

ギヤラルホルンに目を付けられている以上、現在CGSの最大戦力であるバルバトスを手放すわけにはいかない。が、この男が強引に持ち出そうとした場合止められるのかどうか。正直その自信が持てなかった。

しかしオルガの不安を余所に、男はあっけなく諦める姿勢を見せる。

「……しゃあねえ。予備機が欲しかったところだが、今回は縁がなかったと諦めるさ」

溜息を吐きながらそう言う男を、オルガ以下参番組の少年達は目を丸くして見る。

「あ、その……いいのか？」

「社長が逃げてお前さんらが所有権握っちゃった以上、アレはお前さんらのモンだ。どこのどいつが相手だか知らねえが、喧嘩にや要る得物だろう。餓鬼からオモチャぶんどるほど大人げねえ真似する気はねえよ」

呆然とするオルガ。肩をすくめる目の前の男、あまりにも自分たちの知る大人とは違いすぎた。茶化すような言い方だが子供だからと言つて舐めているわけではない。その気になればこの男、人手を雇うなりなんなりして強引にバルバトスを手中に収めることだって出来たはずだ。しかしこの様子では演技でもなく本気でバルバトスを諦めたように見える。

自分たちに対して筋を通す大人。予想もしなかった存在に面食らってしまうのは仕方のない事だったかも知れない。

少年達が懸念したような混乱もなく、男との話は終わりを迎えようとしていたが……この世界軸では妙な縁が繋がってしまったよう

ある。

再度の襲撃。それが男をこの場につなぎ止めた。

「——そちらの代表と、一対一の決闘を申し込む！」

左手に持つシールドに赤い布を巻き付けた一機のギヤラルホルン量産型MS【グレイズ】を駆る男、「クランク・ゼント」二尉が言う。決闘。古き時代に揉め事を解決するため行われたというそれを、少年達に対し申し込んだ彼の要求は、クーデリアの身柄と先日撃破されCGSに回収されたグレイズの返還であった。

それに対し渦中にあるクーデリアは投降を望んだがオルガに止められた。彼が決闘を受けようとしたその時、話はねじ曲がる。

「ギヤラホが相手たあな……しゃあねえ、おい兄さん」

声をかけてきたのは件の男。こんな時になんだと鋭い眼差しを向けるオルガに向かって、彼はこう言い放った。

「時間を稼いでやる。その間にやりあうでも逃げ出すでも、準備しな」
言うだけ言うと、止める間もなく男は傍らの戦車もどき——MW（モビルワーカー）により登り、ハッチを開いて通信機器をいじってマイクを引きずり出した。

「あー、あー、そのグレイズ、聞こえるか」

目を丸くする少年達を余所に、男はグレイズに向かって語りかける。

「ゼント二尉と言ったな？ 貴官の行動は、明らかにギヤラルホルンの規律に反しているが、それを理解した上でのことか？」

「……無論だ。処罰も非難も覚悟の上で、私はここに参った」

その返事を受けて、男の口元が意地悪く歪む。

「ほう、つまり貴官は法と秩序の守護者たるギヤラルホルンの一員でありながら、場末の無法者のような真似を是とするのだな？」

「ぐっ!？」

男の言葉にクランクは呻いた。そして男の『口撃』が怒濤のごとく放たれていく。

「そもそも貴官の要求するバーンスタイン嬢の身柄だが、一体どういった理屈で要求している。彼女に何かの罪があるのであれば、正式に逮捕状を出して身柄を拘束すればすむだけのこと。わざわざMSを持ち出してまで襲撃する必要性はどこにもないはずだが？」

「うっ!」

「さらに言えば先程の要求に対し、貴官からはCGS側に差し出す利益が呈示されていない。これは決闘の作法にすら反している。その程度のことすら頭になかったとか言うのではなからうな？」

「ぬうっ!」

「まさかとは思うが彼女の身柄と引き替えにCGSを見逃す、などと言い出すなよ? 言っちゃなんだがたかだか二尉ごときにそんなことを決定する権限はないだろうが」

「あぐっ!」

「第一民間組織に襲撃をかけるなんて言う暴走を止められなかった貴官程度が、これから先も火星支部を押しえられるとはとても思えないのだがどうよ」

「むはっ!」

「まあもつとも、これで貴官が勝ったとしても帰れば独断専行の咎で良くて謹慎。その間に口封じとかでCGSが壊滅してもなーんも出さないわな。口約束守れないこと確実じゃねえか」

「ほうっ!」

「これで逆上して襲いかかったりなんかしたら、恥の上塗りどころじゃ済まないんじゃないか? ま、目的は果たせるから良いかも知れん。プライドもクソもないご立派な法と秩序の守護者のやりかただ。すげえな。ん?」

「はうアっ!」

なにかがグレイズのコクピットにぎくぎく刺さっているような気がする。オルガを筆頭とする少年達とクーデリアの後頭部に、一筋の

汗が流れた。

「え、えげつねえ。……いやそうじゃなかった。ミカ、頼めるか？」

「いいけど受けるの？ アレそのまま倒れそうな雰囲気なんだけど」

三日月の言葉に、オルガは溜息を吐く。

「さすがになんか気の毒になってきた。あのまま言葉責めされるより決闘でぶったおしてやったほうがマシなんじゃねえかなあ」

こうして、オルガたちは決闘を受けることと相成った。

「ギャラルホルン火星支部、実動部隊、克蘭ク・セント！」

「あ？ ええっと……CGS参番組、三日月・オーガス」

グレイズとバルバトスが対峙し互いが名乗りを上げ、決闘が始まる。克蘭クが敗北したときの条件は、己が機体を譲渡すること。さすがに最初は渋ったが、男の「あ？ 貴官他になんか差し出すものあんのか？」という至極もつともで無慈悲な横槍に、同意せざるを得なかった形だ。

重厚な鋼と鋼が唸りを上げ、巨大なメイスとマチェットが激しくぶつかり合い火花を散らす。

一見互角。しかし戦いを見守るオルガは、グレイズの動きが精彩を欠いていることに気付いていた。

恐らくは先程の会話により、相手のパイロットは僅かながらも戦意を削がれているのだろう。これを計算してやったのだとすれば、とんだ狸だ。

(この男、何者だ？)

さりげなく横目で見やるオルガの視線を知ってか知らずか、戦いを見物しながら男はのんきな口調で言う。

「今時決闘って発想が出てくんのはギャラホくらいだが……まさか本気でやる奴がまだ残ってたあな」

口元は笑っているようだが、戦場を見守るその目つきは鋭い。オルガは探るように問うた。

「……詳しいな？」

「そりやそうさ、何しろ『前の職場』だ」

あつさりと応える男の言葉に、オルガ以下参番組一同はぎよつとした表情を見せる。気にした風もなく男は続けた。

「上司に楯突いてね、首になったのさ。まあ物理的に命(くび)狙われたが、上手いこと逃げ出して傭兵稼業に転職ってわけよ」

なにをやった。いや本当に何をやった。ものすごく気になるが、深く突っこむとなんだかろくでもないような気がして、少年達は押し黙るしかない。

まあそれはおいておきましょうと、いち早く気を取り直したクーデリアが、オルガに問う。

「これからどうするのです？ あなた達、CGSは……」

「いや、もうCGSじゃねえ」

彼女の問いにオルガは応える。同時に斬り飛ばされたメイスの柄が宙に舞い少年達のすぐ傍に勢いよく突き刺さるが、誰も戦き下がったりはしない。衝撃の風に煽られながらもオルガは戦いから、いや自分たちの先に待ち受けるものから目を反らさず、強い眼差しで告げた。

「鉄華団」。そう、俺たちは鉄華団だ」

「てっか……鉄の火、ということですか？」

「違うな、鉄の華。決して枯れず、散ることのない鉄の華さ」

思いを込めたオルガの言葉に、男が「ほう」と声を上げる。

「なかなか詩的だな。いい名じゃねえか」

確かにと、クーデリアも思う。粗野に見えるこの少年が口にするには不似合いとも思えるが、しかしそれは存外にしつくりと馴染む。

この少年達なら、もしかしたら。希望に似た何かを胸に、クーデリアはオルガに向き直った。

「では改めて鉄華団に依頼致します。私を、クーデリア・藍那・バーンスタインを地球に連れて行ってはもらえないでしょうか？」

彼女の言葉に少し驚くオルガであったが、すぐさまその表情を不敵な笑みに変えた。

「変わらぬご愛顧、誠にありがとうございます」

そう答え、気取った一礼。芝居がかったその背後で、バルバトスがメイスの頭をグレイズの胸部に叩き付け、先端のパイルバンカーを作動。コクピットを貫きそのまま地面に押し倒す。

完膚無きまでの勝利に、少年達が歓声を上げる。そんな中、男が「く」と笑い声を上げた。

嫌味のない楽しげな笑い。ひとしきり笑った後、男はオルガに声をかける。

「気に入った。……おい兄さん、いや大将。俺を雇わないか？ ギャラホでそれなりにならしたパイロットにMS一機。格安にしとくぜ？」

オルガは眉を寄せる。これからのことを考えると、確かに戦力はあればあるほどいい。だがこの男を信用して良いのかどうか。それに何より……。

「そういや、アンタの名を聞いていなかったな」

その言葉に、男はにかりと笑みを浮かべた。

「ランデール。【ランデール・マーカス】だ。【リボン付きの悪魔】と呼ぶ奴もいるがね」

イレギュラーは、物語にねじ込まれた。

つづくない。

※今回のえぬじい

「ギャラルホルン火星支部、実動部隊、クランク・ゼント」

「え〜つと、睦月型駆逐艦十番艦、三日月です」
「少年兵どころか可愛いおにゃのこ出てきた!？」
特に意味のない艦これとのコラボが克蘭クを襲う!

本当に終われ。

2・よう、久しぶり

「なーとーちゃん、この飾ってある絵、なに？」

父親の仕事場にて、幼い少年が問いを放つ。

壁に掛かっているのは古ぼけた額縁。風景画などではなく何かのマークのようなそれは、妙に少年の心に引つかかった。

「ああ、そいつはウチの大昔のご先祖様が飛行機乗りで、機体に付けてたっていうエンブレムさ。なんでももの凄い腕利きだったらしくてな、御利益があるかもってんで飾ってあるのよ」

「ふーん……」

まあ眉唾だがなという父の言葉を聞き流し、少年はそれに見入る。

彼は、そのエンブレムを忘れなかった。

クーデリアの護衛任務を改めて受け直したオルガたち鉄華団。彼らは地球に赴くための準備に追われていた。

「持っていく物資はこれで全部か？ デクスターさんに確認してくれ」

「そっちのコンテナは消耗品だから、後の方に回して」

「三番の便、だすぞー」

まだ満足に戦闘訓練を受けていない年少組や数少ない非戦闘員など最低限の人員を残して彼らは宇宙へ向かう。それも一応の目処が付き、オルガは一息ついていた。

「お疲れさん。何とかかなりそうだね」

コーヒーが入ったマグカップを差し出しながら、鉄華団の参謀役【ビスケット・グリフォン】が言う。カップを受け取りながら、オルガは口元を緩めた。

「ああ、流石に初めてのことばかりなんで手間取ったが、ここまでく
りやあ後は上に上がるだけだ」

「……まあちよつと、懸念材料はあるけどね」

ちらりと意味ありげに視線を横に向けるビスケット。その先では
調子の良いことを言いながらユージンに絡む一人の男がいた。「ト
ド・ミルコネン」。鉄華団に残留した数少ない大人の一人だが、日和見
主義者でどうにもうさんくさい。彼の手引きで地球への先導を請け
負う業者と渡りが付いたのだが、いまいち信用されてはいなかった。

オルガは分かっているさと頷く。

「……まああの男以上の懸念材料つてのはないんだが」

「あー、うん。なんかこう、信用とかそう言うのとは別の意味で不安に
なるよね」

どよくと微妙な空気を背負う二人。彼らはランディールと契約
を結んだときのことを思い返していた。

「これで契約成立だが……本当にこの内容で良いのか？ その、ラン
ディールさん？」

「ランディールでかまわんよ。雇い主はおまえさんだ」

契約が成ったというのに、なぜか困惑顔のオルガとビスケット。そ
の原因はランディール——ランディールとの契約内容によるものだ。

その内容を簡単に説明すると。

・ランディールは鉄華団に属するのではなく、あくまで雇われた傭兵と
して従事する。

・三食支給。消耗品、機体の整備修理などは鉄華団が持ち、基本給
は鉄華団団員に準ずる。

・敵機撃墜等戦果に対するボーナスはなし。ただしランディールが撃破
し回収した機体、奪取した物資の所有権は彼に属し、その処遇は彼の

自由裁量に任される。

というものだ。はつきり言つて、雇う方からしてみれば破格と言つてもいい。ゆえにオルガたちは不安すら覚えた。なぜここまでサービスするのかと。

ランデイはこう答える。

「言つたら、おまえさんらが気に入つたと。こういう状況で普通に考えたら残つてる物資うっぱらつておさらばつてのが常道だ。自分らで仕事して経営していこうなんてのはなまなかじゃねえ。将来性を見込んだ投資つてやつさ」

それになど、彼はぎぬらと歯をむき出す。

「おまえさんらと連んでりや、ギャラホとぶつかるのは必至だろ？」

俺の命（タマ）取ろうとした下手人は始末したが……意趣返しは、しとかんとなあ？」

げっげっげと、不気味な笑い声を上げるランデイ。

正直どん引きするしかなかった。

不安である。実に不安である。が、同時に異様なまでに頼もしい。不安だけど。

「うんまあ、ちゃんと仕事はしてくれそうだしな。そのあたりは期待してもいいんじゃないかな」

自分に言い聞かせるようにオルガは言う。気持ちは良く分かるといふか多分同じのビスケットはうんうんと頷いた。

「それはそれとして……昭弘たちとも上手くやつてるみたいだし、人間関係で問題はなさそうだね」

「ああ、「ヒューマンデブリ」や「阿頼耶識」に関しても気にした様子はないしな」

「地球出身つていうからどうかなつて思ってたんだけど……」

言葉を交わす二人。さて、その話題に上ってる当の本人はどうしているかというところ。

「慌てて降りてきたからなあ、まずは機体のチェックか」

クリュセ市郊外の宇宙港。彼は鉄華団の少年達と共にそこに赴いていた。

火星の軌道上にある宇宙港、通称【箱船】に預けてある自身の機体を引き取るためである。そしてそのまま鉄華団の船、強襲装甲艦ウイール・オー・ザ・ウイプス改め【イサリビ】に積み込む予定であった。そんな彼の背中を、共に付いてきた【昭弘・アルトランド】は少々複雑そうな思いで見つめていた。

昭弘と、共に付いてきた【チャド・チャダーン】、【ダンテ・モグロ】はヒューマンデブリと呼ばれる一種の奴隷であった。オルガはそんな彼らを区別することなく仲間として鉄華団に迎え入れたが、彼ら自身は未だに引け目のようなものを感じている。

が、ランディは全く気にした風もない。そのことに関して恐る恐る気にならないのかと尋ねてみれば、彼は苦笑と共にこう答えた。

「俺は元々品の悪い所でジャンク屋やってた家の出でな。孤児やストリートギャングにや慣れたもんさ。それに金がなくて再生手術を受けられず、サイバネどころかお粗末な義肢で凌いでる奴らも大勢いた。お上品な連中みたいな忌避感ってやつはねえよ」

驚く話だった。地球ではみんな良い暮らしをしていると、そう思っていたのに。

「どんな人間でもゴミは出す。ゴミが出りゃゴミ溜めが出来るのは当然だろ。火星でも宇宙でも、地球だって変わりやしねえ」

そう言っただけランディは笑う。そんな言葉で全てが割り切れるはずもないが、もの見方が少しだけ変わったのは確かだ。

まあどちらにしても。

(変な男だ)

そう言った感想を抱くのは仕方のないことではあったが。

シャトルで宇宙に上がった鉄華団であったが、ここではクーデリアの命を狙うGH（ギャラルホルン）火星支部支部長【コーラル・コンラッド】率いるMS部隊と、トドの密告を受けて裏切った案内役、【オルクス商会】の艦が待ち受けていた。

しかしそれを予測していたオルガは、いつでも戦闘が行えるようシャトルで用意していたバルバトスで迎撃するよう三日月に指示を出した。さらに昭弘達に前もってイサリビを出させて即座に合流できよう手を回し、修理した鹵獲機のグレイズをも投入して敵を迎え撃つ。

その戦場にて、三日月はグレイズの上級機、【シユヴァルベ・グレイズ】と交戦していた。

「貴様！ あのと時のガキか！」

「あ、もしかしてチョココの隣の人？」

「ちよ!? 妙な呼び名を！ 俺はガエリオ、【ガエリオ・ボードウィン】だ！」

「えつと……ガリガリ？」

「ガエリオだ！」

どこことなく間拔けな会話を繰り広げながらも、二体のMSは激しく斬り結ぶ。機体の出力とメイスによる打撃力はバルバトスが上回っているが、機動力に置いてシユヴァルベ・グレイズが上回り、三日月を翻弄していく。

三日月もさるもので、最小限の動きを持つて致命打をかわす。しかしその機体の足首にガエリオの機体から射出されたワイヤーアンカーが絡みつく。

「火星人は火星に帰れ！」

咆吼しバルバトスに一撃入れようとしたその時。

「相変わらず上から目線だな紫の坊や」

響いたその声に、ガエリオはぞつと総毛立つ。

閃光が駆け抜ける。それはイサリビに向かって攻撃を仕掛けようとしていたコーラル率いるMS小隊に襲いかかった。

「なに、がっ!？」

一瞬にして4機のMSが吹っ飛ばされた。と判断するより先にガエリオの元に飛び込んでくる影。

咄嗟に回避行動。しかし。

「うおっ!」

衝撃。直撃こそ免れたが、左腕のワイヤーアンカー射出機が根本から吹っ飛ばされた。だがそれと引き替えに、ガエリオは影の正体を見出す。

宇宙の闇に溶け込むような、濃紺を基本としたカラーリングのシユヴァルベ・グレイズ。いくらか改装してあるようだったが、その機体とその動きに覚えがある。いや、『忘れられるはずがない』。

短時間で最高速に持っていく神があったというか明らかにおかしいスロットルワーク。敵機を蹴りつけることによって攻撃と軌道変更と加速を同時にやってのける絶技というか最早狂つてるとしか言いようのないテクニク。何より機体の左肩に記された、8の字を横倒しにしたようなリボンを思わせる『メビウスの輪を模したエンブレム』。

該当する人間は、一人しかない。

「ランディール・マーカス! ランディ先輩!」

GH士官学校時代に『色々な意味で』関わってしまった人物に対し、ガエリオは悲鳴のような声を上げる。

「なぜ貴方がここに!?! というか生きてたんですか!?!」

「おう、化けて出てきてやったぜ坊や!」

言いながら稲妻のように機体を駆り、昭弘駆る鹵獲グレイズ——【グレイズ改】に攻撃を加えていた2機のグレイズを瞬く間に蹴り飛ばしてさらに加速するランディ。

「その様子じゃ監察局かア! こういう連中のさばらしておくとか、仕事しろや!」

「ぐ……貴方こそ! こんな無法者の集団に手を貸して!」

一瞬言葉に詰まるガエリオであったが、なんとか言い返してみる。しかしランディに対しては馬耳東風もいいところで。

「俺の性格は知ってるよなア。……殺(や)られかけたからにやあ、死ぬまで殴り返すのみよ」

そうだった。この男は普通に接している限り気つ風の良い先輩であったが、敵対行動を取れば鬼畜外道へと瞬時に変わる。しかもかなり執念深く、士官学校時代だけでも被害者は数知れない。

閑職に回され、出自から忌み嫌うものたちに罠にはめられ相打ちとなりM I A (行方不明)と聞いていたが、生きていれば確かに何年かかってでもG Hに牙を剥きに来るだろう。そして立ちふさがるものには容赦しない。

現に。

「俺の前に立ったってことは、お前敵だよなあ」

ぬたりとした感じでそう言う。確かに友好的とは言い難い関係であったが、仮にも知り合いに対して容赦の欠片もなさそうだ。

「だが、それでも……」

「よそ見してる余裕、あんの?」

絶望的な戦いに挑もうとしたガエリオの不意をついて、バルバトスが打ちかかってくる。何とかそれはガードしたが、強い衝撃を受け機体は吹き飛ばされた。

「ぐっ! ひきよ……」

卑怯な、そう言いかけたガエリオの脳裏をある言葉が駆け抜ける。

——馬鹿か貴様ら。敵がこっちの都合とか考えて動くと思ってるの? ——

かつて先輩であった男の言葉。それを思い出し、ぎ、と歯を噛んで堪えた。

「正道非道と勝ち負けは関係ない、そうだったな先輩! いやランディール・マーカス!」

あの男は敵だ。それもとびっきりの強敵だ。認識を改めろ、死力を尽くせ。でなければ、死ぬ。甘い考えを斬り捨て、ガエリオは死にもぐるいでスロットルを開けた。

「動きが変わった?」

邪魔者から片づけようと言うのか、ガエリオの機体はバルバトスに打ちかかる。途端に荒々しくなった動きに三日月は眉を顰めるが。

「どっちみち、いい加減邪魔」

突き出されたランスをメイスで受け止め——そのまま手放す。

「なっ!？」

バランスを崩したガエリオの機体は前のめりになり、そのコクピットに向かってバルバトスが拳を叩き込もうとして。

突然浴びせられた銃撃に、三日月は機体を後退させる。

「無事か、ガエリオ」

「マクギリス! すまん、助かった!」

ガエリオを救ったのは、青いシュヴァルベ・グレイズからの射撃。それを駆るのはガエリオの同僚であり長年の友人「マクギリス・フリド」。その彼に対してガエリオは鋭く警告を放つ。

「気を付けろマクギリス! ランディール・マーカスが、リボン付きの悪魔がいるぞ!」

「ああ、今機体のエイハブ・ウエーブを確認した」

マクギリスの視線は、戦場を縦横無尽に駆ける濃紺の機体に注がれる。こちらの様子を気にすることなく、悪魔が駆る機体は獰猛に得物に襲いかかっていた。

「ひっ!？」

敵を目で捉えることも叶わず一方的に攻撃を受け続けていたコーラルは、突如眼前に現れたシュバルベ・グレイズの姿に短い悲鳴を上げる。

モニターアイが不気味に輝く。

「ひと〜っ」

ぬたりとした声で宣言すると同時に、目にも止まらぬ速度で左腕が動いた。幅広の、鈍のごとき厚みを持つ両刃剣。それは容赦なく装甲の隙間からコクピットに突き込まれる。

一撃でコーラルは絶命。主を失い力の抜けた機体をイサリビの方へと蹴り出して、さらにランディはこっそりと後ろから襲いかかろう

としていた機体に回し蹴りを喰らわせた。

為す術もなく吹っ飛ばされるグレイズ。その先には。

「なるほど、吹っ飛んできたのを殴ればいいんだ」

回収したメイスを構え、待ちかまえるバルバトスの姿が。

真正面から殴り飛ばされるグレイズ。破片をまき散らしながら吹っ飛ぶその姿を遠目に確認して、ガエリオは呻くような声を上げた。

「無茶苦茶だ」

「だが、彼らしい」

マクギリスは微かな笑みを浮かべた。まるで待ちこがれていたものが現れたかのように。

「しかしどうしたものかな。真正面から相手に出来るものでもない」
顎に手を当て考え込むマクギリス。そうしている間にも、状況は大きく変わる。

小惑星を利用し速度を落とさぬまま急激な方向転換を行ったイサリビが、戦場に割り込みそのままMSを回収して飛び去る。ついとばかりにオルクス商会の船に至近距離から砲弾を浴びせ痛打を与え、まんまと逃走を果たした。

「これでは追跡は無理だな。……しかし鉄華団といったか、彼らもやるものだ」

小さく呟くマクギリスの声は、宇宙に解けるように消えた。

この後、イサリビから放り出されたトドを、マクギリスたちは回収することとなる。袋だたきにされ気を失った彼の服には「お前らの仲間だから返す」というメッセージに加え、もう一つ汚い字で一文追加されていた。

曰く、「仕事しろ金髪小僧」と。

それを見て、マクギリスが大笑いしたのは言うまでもない。

つづかぬい。

※今回のえぬじい

「どんな人間でもうんこするだろ。うんこすりやうんこだまりが

……」

「うんこうんこ連呼すな！ 流石に引くわ！」
ノツブか。

終われなさい。

3・踊りのお相手を務めましょうか、マダム？

「ランデイル・マーカスが生きていたよ」

その台詞を聞いた「石動・カミーチェ」は眉の一つも動かさなかった。

「そうでしようね」

「驚かないのだな」

通信の向こうで楽しそうに言う上司——マクギリスに、彼は表情を変えぬまま返す。

「あの人が寿命以外で死ぬなど、GHが今すぐ清廉潔白な組織に生まれ変わるよりもあり得ない話です」

「言い得て妙だ」

くつくつと笑うマクギリス。彼はそのまま石動に問うた。

「私は絶対にやらないが……もし彼を説得しろと言われたらどうするかね？」

その問いに、石動はまじめくさった表情のままこう答えた。

「そんな無駄なことをするくらいなら、白旗掲げて全裸で土下座した方がましですね。げらげら笑いながら踏みつけにされるでしょうが」

「違いない」

ひとしきり笑った後、マクギリスは態度を改めて告げる。

「彼が表舞台に再び現れるというのであれば、少し計画に変更を加える必要があるだろう。すまないが一働きしてもらおう」

「お任せを」

それからしばらく今後のことを話し、通信は終わった。これから忙しくなるなど、大して心を動かすことなく石動は呟く。

「さて、どうなることやら」

元ランデイルの部下であり、『かつてメビウス4と呼ばれた男』は、微かに鼻を鳴らした。

辛くも窮地をくぐり抜けた鉄華団であったが、その結果彼らは地球への先導役を失うこととなる。

これを受けて、オルガはGHすら手出しを躊躇するという、木星近海を中心とした外惑星域——圏外圏を牛耳る大企業「テイワズ」と接触し後ろ盾にすることを提案した。

他に手だてもないが、どちらかと言えば消極的なメンバー。だがランデイが——

「一応伝手はあるんだが」

そう発言したことにより、それを頼りに接触する事を決める。しかし。

「きさまらあああああ！ 俺の、俺の会社と船をよくもおおおお!!」
「マルバさん、少し静かにしちやもらえませんか」

通信の画面越しに吠えたくる元CGS社長マルバと、その横で艦長席に座るスーツ姿の伊達男。それを見たランデイはあつちやあと渋面を作る。

「社長はともかく……あつちも知り合いか？」

訝しげな顔になり小声で問うオルガ。ランデイは画面を指さしてこう答えた。

「伝手」

何がどうなっているのかと言えば、鉄華団が宇宙に上がる直前で、行き詰まったマルバはある組織に泣きついた。「タービンス」。運輸を基本的な生業とし同時に武闘派と知られるその組織は、テイワズの下部組織でもある。つまり現状で敵対するわけにはいかない相手なのだが。

「要するにこの船を含むCGS時代の財産を引き渡せと、そう言うんだなあんたは」

「そう言う依頼だ。まあお前らが大人しく引き渡してくれるんなら、悪いようにはしないが？」

オルガの言葉に通信を入れてきた伊達男——タービンの長である【名瀬・タービン】は長髪を後ろに流しながら応えた。そして視線をランデイに向ける。

「しかしお前さんがそんなところにいるとはね。ヤキが回ったかりボン付き？」

「イカレてんのは最初からだと自負してるがね名瀬の旦那。あんたにや世話になってるが、まあそれはそれこれはこれだ」

「まいったね。お前さんほどの廃品回収者（スカベンジャー）は滅多にいないんだが」

交わされる言葉。疑問に思ったビスケットが、そつとランデイに尋ねる。

「ランデイさん傭兵だったんじゃ？」

「なに廃品回収業者に伝手があつてな。金がないときやよくデブリ帯からエイハブリアクターのサルベージすんのを手伝ってたのよ。それを売り払うのに旦那と通じてたつてわけさ」

「それじゃあ！ 何とか名瀬さんの説得を！」

「そいつは聞けない話だな。リボン付きも言つてたろ？ それはそれこれはこれ、だ。その男の腕が惜しいのは事実だが、そつちに付くつてんなら容赦はしねえ」

会話に割つて入った名瀬の鋭い目線は、脅しても何でもないと告げている。その気迫に便乗したか、マルバが再び喚き始めた。

「そーだてめえリボン付き！ そのガキども煽つて俺の船と会社乗っ取りやがったな！」

「人聞きわりいなおい。社長が無責任にも夜逃げしやがったんで、残った社員が何とか会社を維持しようとして涙ぐましい努力をした結果って奴じゃねえか。人材が不足してつから俺が雇われてるつてだけだ」

白々しく言い放つランデイの言葉に、名瀬が呆れたような視線を向ける。

「火事場泥棒もものは言いようつてか。相変わらず凶々しいというか」

「おいおい、目先の金品だけ持ち逃げして肝心の権利書関係全部置いていったのはその間抜けなおっさんだろ？ 盗（と）ってくれって言ってるようなもんじゃねえか。最低でもウチの田舎じゃ包装してリボン巻いてプレゼントするって言ってるようなモンだぞ」

一瞬どんな修羅の国だと言いたげな空気が流れたが、いち早く己を取り戻したオルガが真っ直ぐ名瀬を睨み付けながら告げる。

「そんなことより、俺たちにも通さなきゃならねえ筋ってもんがある。それを邪魔するってんなら、無理矢理にでも押し通らせてもらう」

「ほう、俺たちと事構えるってのか？ リボン付きがいるからって勝てる。甘く見られたもんだ」

にやりと自信ありげに笑う名瀬に、しかしオルガは怯まない。

「違うな。見せつけるのは鉄華団（おれたち）の力だ。……マルバ、てめえにもな」

凄むオルガに対して「ひいっ」と情けない悲鳴を上げるマルバ。く、と唇を歪ませる名瀬が告げる。

「おいたしたガキには、お仕置きしてやらないとな。……覚悟しろよ？」

通信が切られ緊迫した空気が僅かに緩む。最初に言葉を発したのは、溜息を吐いたランディだった。

「すまねえ大将。役立つどころじゃねえやこりや」

頭を掻きながら言う彼の言葉に、少々頭に血が上っていたオルガと、早々に交渉を諦めたことを非難しようとしていたビスケット。双方の頭が冷える。

「……いや、マルバが先に泣きついてたってんなら、どのみちこうなってたさ」

「そうだね。今からどうするかを考えなきゃ」

前向きに思考を切り替えた二人。ランディの謝罪が冷静さを取り戻させたようだ。狙ってやったのかどうかまではわからないが。

「でもどうする？ 相手は少し改造してあるようだけど、基本は同型の強襲装甲艦。砲雷撃戦じゃ千日手だし、MS隊も相応の戦力があるはずだよ。ランディさんがいても良いところ五分ってところだ」

ビスケットの分析に、「だろうな」と応えるオルガ。

「だから『出し抜く』。作戦はこうだ」

オルガから説明された作戦を聞いたランディは、少しだけ眉を顰める。

「また綱渡りだな。……出来るつてののか？」

その問いに、オルガは不敵に笑う。

「宇宙ネズミの面目躍如つてところさ。イサリビは、ユージンに任せろ」

「俺エ!？」

突然指名されたことに驚きの声を上げるユージン。そんな彼の肩を叩いて、オルガは本人よりも自信満々に断言した。

「こういうときは、お前が頼りだ。当てにしているぜ」

邪気のない信頼に、ユージンは溜息を吐いてから「しかたねえな」と口元を歪める。

「前の時もそうだが無茶振りしやがって。……いいぜ、やってやろうじゃねえか」

火星軌道上の戦闘で、彼が小惑星に食い込んで抜けなくなったイサリビのアンカーを、MWで強引に爆破し引っぺがしたのはランディも確認している。確かにあんな離れ業をやったのけたのであればと、ランディは納得した。

「よし！ それじゃあみんな準備にかかるぞ。ミカ、昭弘、ランディさん、MSで出てくれ。時間を稼ぐだけでいい」

「分かった」

「応!」

「任された」

オルガの言葉に応え、三人はブリッジを出る。

格納庫に向かう道すがら、ランディは二人に向かって言った。

「三日月、昭弘。多分相手のMS隊にやピンクの【百鍊】がいるが、それについては手を出すな。『まだ』お前らにや手に負えない、俺が相手をする」

「何?」

「強いのか？ そいつ」

眉を顰める昭弘。そしていつものように淡々と問うてきた三日月に対し、ランディは少し緊張感を漂わせて応えた。

「ああ、『ルージュのアミダ』。テイワズで、いや圏外圏で最強クラスの名付き（ネームド）パイロットだ」

艦首に衝角（ラム）を兼ねた装甲ブロックを備えるタービンスの強襲装甲艦【ハンマーヘッド】。そこから出撃したMSは三機。ピンクとダークブルーに染められたテイワズを代表する汎用MS百鍊二機と、背部に巨大なブースターユニットを備えた高機動MS【百里】。両腕をユニットに収納し巡航形態となった百里のコクピットで、「ラフタ・フランクランド」は不満げに唇を尖らせていた。

「もー、大人しくダーリンの言うこと聞いてればいいのに。生意気」
まだ若い、少女の面影を色濃く残した女性である。彼女はタービンスでも指折りのパイロットで、扱いの難しい百里を任されていた。

そんな彼女を鍛え上げた人物は、苦笑を浮かべながらたしなめる。
「そう言うものじゃないさ。相手にはあのリボン付きがいるんだ、油断は出来ないよ」

【アミダ・アルカ】。名瀬の『第一夫人』であり、名瀬とタービンスを立ち上げた女傑である。かつては名うての傭兵で、タービンスを設立後も最前線に立ち続けた結果ルージュのアミダなどという二つ名で呼ばれるまでに至った。

その彼女が僅かながらも『緊張している』。その事実には僚機の百鍊を駆る【アジー・グルミン】は、眦を鋭くする。

「話には聞くけど、それほどのもの？」

「ああ、あたしが知ってる中じゃ恐らく最強のMS乗りだ。もっともそれだけじゃないけどね」

「？」

「——と、言ってる間に来たよ！」

ラフタとアジールの疑問が解消されぬ間に、レーダーに感。速い。ラフタの百里にも匹敵するような速度で一機突っこんでくる。

宇宙に溶け込むような影に向かつてアミダの機体が加速。目にも止まらぬ速度で交錯し、火花が散った。すり抜け様に抜き打たれた幅広剣を、これまたアミダが抜き打った片刃のブレードで弾き飛ばしたのだ。

そのまま二機のMSは繰り返し交錯し斬り結ぶ。その速度は並の人間では追えないほどのものだ。そうしながらも二人のパイロットは、刃と共に言葉を交わす。

「よう、ルージュの姐さん！ 元気そうでなによりだ！」

「は、そっちもね。子供に肩入れする質じゃないだろうに、どういう風の吹き回しだい！」

「なに、あいつらギヤラホに一発かましにいくってんでな、便乗させてもらってんのよ！」

「なるほどね。アンタらしいけど、こっちも依頼だから手は抜かないよ！」

「俺も人妻相手にする趣味はねえんだが……ちいとばかし、火遊びに付き合ってもらおうか！」

軽口のように聞こえるが互いに本気。一瞬たりとも油断の出来ない命の削り合いであった。

それをよそ目に、ラフタとアジールはイサリビへと向かう。指示を待つ必要もない、阿吽の呼吸でやらねばならぬ事を悟った二人は、猛然と目標に襲いかかろうとした。

「来た。……昭弘、ここは任せる。俺はあっちの速いのをやるから」

「お、おう！」

飛び出していくバルバトス。昭弘のグレイズ改はその場で青い百錬を迎え撃つ。

しかし勢いよく飛びだしていったものの、バルバトスは早速苦戦を強いられていた。

「ちよこまかと……うざいな」

苛ついた三日月が毒づいた。

バルバトスが現在装備しているのは、長大な300mm滑空砲。通常MSが使用するライフル系の武器より威力は絶大だが、大型故小回りがきかず機動力の高い相手に対しては不利な武器である。それに機体自体も長年放置してあったせいもあって、劣化などで本来の性能が出せない。鹵獲したグレイズのパーツなどを使って応急処置はしてあるものの、満足なスペックに至っていないのが実情だ。とてもではないが百里の速度に対応しきれるものではなかった。

だがその相手をしているラフタも苛立ちを覚えている。

「このおー、いい加減墜ちなさいよー!」

速度で翻弄することは出来ている。だが致命打を与えることが出来ない。それはバルバトスの動きが原因だ。

ぬるりと、まるで生物のように有機的に動き、直撃を避けている。その独特なマニユールを生じさせているのは【阿頼耶識システム】の恩恵だった。

パイロットの脊髄にインプラントされた有機デバイスを介して機体とパイロットを接続し、機械的なプログラムに縛られない生物的な操作を可能とするこのシステムは、地球圏では忌み嫌われ非合法な少年兵やヒューマンデブリに対し施されることが多かった。しかしその効果は絶大で、全くMSの操縦を習ったことがない人間でも即座に熟練のパイロットのごとく機体を扱うことが出来る。またこのシステムは施術の回数が多いほど伝達される情報が増加し、そして本人の反応速度も向上する。三日月はこれを三回受けており、本人の鍛え上げた技量も相まって、圧倒的に不利な状況にありながら互角の戦いを繰り広げるほどの力を与えていた。

「邪魔をするなよ」

「あなたがあたしたちの邪魔をしてるのよ!」

一方的に見える戦いは、その実膠着状態を迎えている。

そして昭弘の方であるが。

「なかなかしぶといね」

「まだまだあー！」

こちらもまた、アジールの有利に戦いが展開されているように見える。実際百錬の攻撃が一方的にグレイズ改を捉えて着実にダメージを与えているのに対し、グレイズ改の攻撃はまともに当たっていない。この機体には阿頼耶識システムが搭載されておらず、また昭弘自身もMSの操縦になれていないと言う事情があるにしても、ただがむしやらに突っこんでいくだけである。

しかし昭弘には怯む様子がない。どれだけ叩かれても向かってくる相手に対し、アジールは戦慄を覚えていた。

「なんでそこまで！」

「ここを任せられたんでなあー。あいつに！」

三日月に対しライバル心のようなものを抱いている昭弘は、彼からここを任せられたという状況を、実力を認められ信頼されたと判断していた。元々責任感の強い少年であり、その上でヒューマンデブリとして使い捨ての駒のごとく扱われていた自分に信を置いてくれたことに対し、全力で応えねばという意志を持ったのだ。

故に死力を尽くして食い下がる。それは技量の差を覆すとまでは行かないが、アジールの百錬を足止めするには十分な成果を出していた。

「いい加減！」

百錬が振るったブレードが直撃し、グレイズ改の頭部が大きくひしゃげ、機体が仰け反る。

「ま、まだだと言った！」

ぎぎいと軋みながらグレイズ改の左肩後方にマウントされていたバズーカが起きあがり、砲口が百錬へと向けられた。

「くっ！」

極至近距離からの不意打ちはしかし、かろうじて回避された。再び距離を取った二機は仕切直しを……といったところで新たな動きが生じる。

突如二隻の戦艦が戦っていた空域で派手な色の煙幕が広がった。それと同時にハンマーヘッドとのLCS（レーザー通信）にノイズが

走り、ラフタが焦った声を上げる。

「ナノミラーチャフ」!? あれは実戦じゃ使えないって!」

レーザー通信や光学索敵を妨害するとされているジャミング技術であるが、使い勝手が悪く実戦での使用は難しいと言われていた。しかしそれは確かにハンマーヘッドの視界を遮り、イサリビの姿を一瞬見失わせる。

その直後、チャフの煙幕の中からイサリビが飛び出してきた。体当たりを目的とした不意打ちだったのか艦体をロールさせながらハンマーヘッドに迫る。かろうじてそれは回避され、ラフタはほっと安堵の溜息を漏らした。

「もらった」

「しまっ!」

軽い衝撃。一瞬の隙を突いて、バルバトスが左腕のワイヤーアンカー——先の戦いでシユヴァルベ・グレイズから奪ったもの——をすれ違い様に射出し、百里の脚部を捉えたのだ。

激しい機動でそれを引き剥がそうとするラフタであったが、三日月はしぶとく食い下がる。ややあって、その『トローリング』は不意に終わりを迎えた。

高速で小惑星に迫り、バルバトスを叩き付けようと試みるラフタ。それは成功するかに思われたが、三日月は冷静に滑空砲を破棄し機体のバックパックにマウントしていたメイスを引き抜く。

激突。しかしバルバトスは直前でメイスを小惑星に打ち付ける事によって衝撃を緩和し、ダメージを最小限に留める。逆に叩き付けられたことを利用して自身をアンカーとし、百里の動きを制しようとした。

果たしてそれは目論見通りに働き、ワイヤーに引つ張られる形で百里は大きく機動を歪められ、バルバトスのすぐ眼前に同じく叩き付けられた。

「終わりだ」

「あんたがね!」

メイスを振り上げるバルバトスと、ブースターユニットから巨大な

クローアームを展開する百里。互いが相手の機体に攻撃を叩き込もうとしたところで。

「そこまでだ！ 双方戦闘を中止しろ。俺はこいつらの話を聞くことにした」

そんな名瀬の言葉が響く。

鏢迫り合いをしていた百鍊とシユヴァルベ・グレイズが、凄惨とも言える打撃戦を繰り広げていた百鍊とグレイズ改が、そして百里とバルバトスが動きを止める。

百里のkokopittoの中で、ラフタは再び唇を尖らせた。

「ちエっ、いいところだったのに」

不満そうに聞こえるその声の中に僅かな安堵があったと感じるのは、果たして気のせいだったのだろうか。

つづかなかったりしちやったりしてこのお

※今回のえぬじい

「そんな無駄なことをするくらいなら、ふりふりのゴスロリでコスプレして「魔法少女イスルギ☆カミーチエ！」とか言いながらびすとポーズ取る方がましですね。大爆笑されるか全力でどん引きされるでしょうが」↑真顔

「いやまって流石にそれは同意しかねる」

それにしてもこの石動、ノリノリである。

終わって頂きたい。

4・家族つてのは『在る』ものじゃなくて『成っ てい』ものさ

ナノミラーチャフで目くらましを行い、そこから突撃……と見せかけて、すれ違い様にMWでハンマーヘッドに飛び移り、内部から制圧する。そんな曲芸じみた芸当をオルガたちはやってのけた。

当初名瀬は彼らを鎮圧しようと考えた。しかしマルバの言動がそれを思いとどまらせる。

「殺して下さいよオー。あの宇宙ネズミどもを！」

その言葉から鉄華団の少年達に阿頼耶識の手術が施されていると悟った名瀬とハンマーヘッドのクルー達は、嫌悪感を露わにした。

阿頼耶識の手術はじゃんけんにも負けるのくらいの確率で失敗し、身体に障害が残る。また成人の肉体では使用されるナノマシンが定着せず、施術は未成年に対してしか行うことが出来ない。加えて施術に置いては麻酔などを使用する例も少なく、最早拷問に近いものでしかなかった。当然ながらいくらMS類の操縦が可能になると言っても、自らそれを望んで受ける人間などほとんど存在しないと云っている。

そんなものを受けさせられた上扱いも悪いとなれば、それは下克上の一つも考えなくなるだろう。名瀬たちに同情めいた心が芽生えるのも当然と言えた。

それに曲芸じみたことを平然と行う度胸も手際も悪くない。頭の中でそろばんが弾かれ、結局名瀬はオルガたちを受け入れてみることにしたのであった。

「マルバの奴は資源採掘衛星の鉱山で、借金返すまで働いてもらうことにした。まあ色々とフカシもかましてくれたことだしな」

ハンマーヘッドの応接室にオルガたちを招いた名瀬は、彼らにそう告げた。

タービンスに依頼する際、マルバはいかにも自分が一方的な被害者

でオルガたちがあくどいか、あること無いこと織り交せて話を盛っていた。あの様子ではもしかして財産を取り戻した後、踏み倒してとんずらする可能性もあっただろう。

「それに俺の『女房達』にも色目使ってやがったからなあのおヤジ。ちいと念入りにお仕置きしておいた」

にやりと笑う名瀬。オルガたちは何とも言えない様子である。

タービンの構成員は名瀬を除きほぼ全員が女性であり、しかも過半数が名瀬と婚姻関係を結んでいる。名瀬曰く「俺のハーレムだからな」とのことだが、スケールが大きすぎてオルガたちは圧倒されるしかなかった。

それはさておいて、名瀬は鉄華団をティワズの本拠地、大型惑星間巡航船「歳星」へと招き、ティワズの傘下に薦めると言った。

「ありがとうございます」

「まだ許されるかどうかは分からないがな。ま、そいつは歳星に着いてからの話だ。取り敢えず、お前らが鹵獲した機体の見積もりが上がったから確認してくれ」

名瀬から受け取ったタブレット端末を覗き込んだオルガたちは、目を丸くした。

「こんなに……いいんですか?」

尋ねるオルガに、名瀬はこう返す。

「GH純正のリアクターだからな。相応の金になるさ」

現在エイハブリアクターの製造技術を保持しているのはGHのみで、その純正リアクターの入手手段は限られる。三百年前の大戦、【厄祭戦】当時のリアクターをレストアして使うしかない圏外圏などの勢力にとっては、喉から手が出るほどの価値があった。ゆえに売買を行うとなればかなりの値が付くと、名瀬はそう言う。

そういうものか。納得しかけたオルガたちであったが。

「これで当座はしのげるな」

「火星の本部にメールを入れておこう。きつとデクスターさんも喜んで……ん?」

ふとビスケットが気付く。

「……あれ？ ランデイさんの取り分、少なくともありません？」

鉄華団が鹵獲したグレイズは火星地上での戦闘と軌道上で計4機。そのうち軌道上での2機はランデイが撃破したものとビスケットは認識している。そしてグレイズ改として運用している1機を除いた3つのリアクターを売り払うはずだった。だが見積もりを見てみると、ランデイの取り分は1機分だけである。しかしランデイは肩をすくめながらこう言った。

「俺が墜としたのは最初の1機だけだろ？ あとののは三日月がとどめを刺したじゃねえか」

だから自分の取り分は1機分だと、彼は主張する。そう名瀬に言っ
て見積もりを出すよう頼んだのだと。それを聞いて壁際で木の実らしきもの——火星ヤシの実を頬張っていた三日月が、きよとんとした表情で尋ねた。

「いいの？ あれ最初の蹴りでコクピットほとんど潰れてたけど」
「確実に潰したのはお前さんだ。それに他人のスコア横取りは俺も結構やってたからな。自分がやって人にやるな、つてのはおかしな話だろ」

その言葉にぼかんと目を丸くするオルガたち。名瀬は「相変わらず妙な奴だ」などと呟きながら、ふつと笑みを見せた。

ランデイール・マーカスという男、敵に対しては容赦なく冷酷であったが、その一方でこのように筋が通らないことを嫌うという面もあった。そういった面がGH内でも疎まれ、結局命を狙われる羽目になったとも言えるが、本人は全く反省する気はないようだ。

「……あんたがいろいろってんなら、俺らにも異存はねえ。ありがたく頂戴させてもらう」

戸惑いがあったが、ここでごねてもランデイは首を縦に振るまい。短い付き合いだがそれぐらいはオルガにも分かる。ここは好意に甘えさせてもらおうと、彼は頭を下げた。

それから細々したことを話し合った後、イサリビとハンマーヘッドは歳星へと進路を向ける。

歳星に向かう間、別に皆ぼんやりしているわけではない。

特に火星軌道上からこつち、イサリビもMSもダメージを受けたままろくに整備もしていない。まずはそれを片づけねばならなかった。致命的な損傷はないし、歳星で本格的な整備を受けさせてもらえろという話も付いていたが、放つておいて良いものではない。そんなわけで、鉄華団の整備班総出とタービンスからの手も借りての整備補修が行われていた。

その中にランデイの姿もある。

「お前さんが予備機を欲しがつてた理由も分かるわ。なんでえこの関節部の摩耗は」

呆れたようにランデイに向かって言うのは、鉄華団に残った数少ない大人の一人にして整備責任者「ナデイ・雪之丞・カツサパ」——通称おやつさんである。

ランデイのシュヴァルベ・グレイズは、現在装甲の一部を取り外しオーバーホールの真っ最中だ。調べてみれば、特に膝や足首の関節があり得ないくらい摩耗している。これは彼独特の技術によるものであった。

敵の機体を蹴りつけ攻撃と軌道偏向と加速を同時に行うという化け物じみたテクニク。この技術は機体に本来想定されていた以上の負担を与える。MSというものほとんどもなく頑強に出来ているものだが、それを摩耗させる負荷がどれほどになるか、想像に難くない。

だから彼は予備の機体を欲していたのだ。

「火星や圏外圏じゃグレイズのパーツは手に入りにくかったからな。ロデイ系だと反応がどうしても鈍いし、耐久性も考えたらガンダムフレームくらい頑丈なのがいいかって思ってたわけよ。滅多に見つかるモンじゃないからマルバの話は渡りに船だったんだが」

タブレットとにらめっこしながら話すランディ。かれはにやりと笑いつつ言う。

「しかしまあ、おかげさんでグレイズの予備パーツは確保できた。まだ暫くはこいつが使えるさ」

「だからボーナス代わりに撃墜した機体をつてわけかい。確かにお前さんにとつちや予備パーツが向こうからやってくるようなもんか」

まあそいつはいいんだがなと、雪之丞は頭を掻く。

「あいつらすつかりハマってやがるなあ」

彼が見上げるのは、傍らのグレイズ改。ひとまずの整備が終わったそのコクピット周りには鉄華団の少年達と、なぜだかタービンスでパイロットを張っているラフタとアジীর姿もある。

集った皆の視線が集中する中、グレイズのコクピットハッチが開いた。

「だめだあああああ！ マジ激ムズどころじゃねえぞこれ!？」

吠えるように愚痴りながら這い出してくるのは「ノルバ・シノ」。鉄華団創設以前、CGS時代から最も長い古参メンバーで、その人格からムードメーカーの役割に収まっている人物だ。

彼が挑んでいたのは機体を実稼働させなくとも操縦を疑似体験できるシミュレーションプログラム。それ自体は別に珍しくも何ともない。

問題はそのブツが、『ランディが自分で組み上げて自己鍛錬に用いている物』だということろだ。

前回の戦闘終了後、鉄華団とタービンス双方から「なんであんなことできる」とランディに詰め寄る人間がラフタ中心に大勢出たのだが、そこで「だったらちよつとやってみるか?」とランディが呈示したのが件のプログラムだった。真っ先に意気揚々とそれに挑んでみたラフタが、終了してから開口一番言い放った台詞が。

「殺す気かあああああ!!」

であったところから内情を察して欲しい。

ともかく出鱈目に過ぎる。これでもかと無理難題を次から次へと叩き込まれる内容なのだ。具体的には初っ端からノーマル通常武装

のグレイズで一個大隊（36機）のシユヴァルベ・グレイズ相手に戦えとか、そんなのが基本なのである。

かてて加えてこのプログラム、ランディのセッティングに合わせる事を前提としていた。このセッティングがまた気が狂ってんのかつてくらいにおかしい。

ともかく操縦系がやたらと敏感でタイト。遊びが全くない上異常に反応が早い。操縦桿を撫でるように動かした程度で反応するほどだ。このセッティングで自機をシミュレートしてみたラフタが。

「ぬっひよわあああ!?!」

とか悲鳴を上げながらプログラム上で明後日の方向に吹っ飛んでいったところから察して欲しい。だがランディ本人曰く。

「手足ほとんど動かさなくて良いから楽なんだがなあ」

なんてほざいてやがる。そんな狂人のセッティングなんか使いこなせる人間なんかいるかと思いきや。

「ああ、こんなセッティングじゃなきやあんな曲芸できないか」

様子見に顔を出したアミダ姐さんがあつさり乗りこなしてたり。

「……ん、慣れればなんとかなるかな」

三日月が結構あつさり順応しそうだったりする。

それに刺激を受けたのか、昭弘を中心に鍛練を重ねようとする者が鈴なりというわけだ。シノを含め本来パイロットじゃない者も多く混じっているが、これはランディのオルガに対する具申が原因であった。

「このままだと戦闘で三日月と昭弘に負担がかかりすぎるな。予備のパイロットを何人か見繕っておいたほうが良いと思うんだが、どうよ大将」

たしかに鉄華団の戦闘力は、特に三日月頼りな部分が多い。彼はこの歳で異常なまでの戦闘適正を見せるが、別に疲れないわけでもましてや死なないわけでもない。万が一がなくなるとも、怪我や病気で動けないなんて事もあり得るのだ。そう指摘されたオルガは納得し、ランディに「やる気のある奴をちよつと見てくれないか」と頼んだ。

そんなわけで、取り敢えずは興味のある奴にシミュレーターをやら

せてみているわけである。娯楽も少ないと言うこともあって、結構盛況であった。

「バルバトスが他の人間にも使いりやもつと良かったんだがな」

「こいつはもう三日月くらいしか扱えねえ。歳星で上手いことコクピット周りに手を入れられりやいいんだが」

GHがCGSに襲撃をかけたおり、突貫工事でMWのコクピットブロックを収め阿頼耶識システム搭載機となったバルバトスだが、急場しのぎも良いところだったせいもあり調整が非常にシビアで煩雑になってしまった。阿頼耶識も汎用調整が効かず、マニュアルだけだと所々コントロールを受け付けなくなることもある。結局阿頼耶識を接続した三日月くらいしかまともに動かせなかった。ランディをして「こりゃコクピット入れ直して一からフルオーバーホールと再調整しねえと駄目だな」と言わせるほどだからかなりの難物であろう。

「ま、その辺も含めてまずは歳星にたどり着いてから、か」

そう締めて、ランディたちは再び作業を再開した。

テイワズ。表向きは圏外圏を牛耳る大企業であるが、その実態はほとんどマフィアと言ってもいい。表裏双方の社会に広く勢力を広げ、その影響は地球圏も無視できないほどのものだと言われる。

その本拠地である歳星は、後部に小惑星を利用した工場区画を、中央に都市区画をもつ巨大な船だ。そこにたどり着いたオルガたちとクーデリアはテイワズの長、「マクマード・バリストーン」と面会を果たす。

とても宇宙船の中とは思えない広大な屋敷にて、彼らを案内した名瀬は。

「親父、俺はこいつと杯を交わそうと思うんだが」

と告げた。つまりオルガと義兄弟の関係を結び、鉄華団を丸ごと

タービンの傘下におさめようと言うのだ。

オルガやクーデリア、そして三日月と言葉を交わしたマクマードは彼らをそれなりに気に入ったようで、名瀬とオルガが義兄弟の杯を交わすのを認め、さらにはバルバトスが無償で整備するよう手配した。

一息ついた鉄華団は一時の休息を得る。オルガは主要メンバーを引き連れて繁華街に繰り出し、大いに盛り上がったようであった。その結果翌日二日酔いでダウンしたのはご愛敬であろう。

まあ今まで気を張っていたのだ、ちよつとぐらい休ませても構うまいと気を遣ったビスケットは、彼の代わりに武器弾薬の補給の手筈を進める。

幾度か歳星を訪れたことのあるランディの案内で、彼はとある場所に訪れていた。

「……加えてMS用の150mmアンチマテリアルライフル一丁に通常弾、徹甲弾、それぞれ200発。以上確かに注文承ったね。在庫あるから出航までには用意できるよ」

妙な訛りのあるしゃべり方で言うのは、中華風の服を纏い丸サングラスにドジョウ髭の、いかにも怪しい中国人風味の男であった。

自称「ワン・チャン」と名乗るこの男は、歳星にてテイワズ直営の武器店を営む人物だ。胡散臭いことこの上ないが、商人人としてはそれなりに信用できる人物、らしい。本当に大丈夫なのかなと、ビスケットは心配せざるを得なかったが。

「ついでになんか他にも見ていくかね？ このへんなんかお奨めよ」

差し出されるタブレットを覗くランディ。その眉が顰められる。

「おい、このコンテナ型ミサイルランチャーだが……」

「ああそれ一番の売れ筋ね。通常の大型コンテナと全く同じ規格だから、これあればコンテナ船舶（ランチ）もあつという間にミサイル艇に早変わりよ。しかも圧搾空気式アポジモーターで付きである程度自力航行も可能。その上リモートで外部からの操作もタイマーでの作動も可能という優れたものね」

むふんと胸を張るワンだが、ランディの眉は顰められたままだ。

「これ中古のコンテナにあまりモンのミサイル詰め込んだだけじゃね

えのか？」

「あらあさりバレたね。ま、そんな代物でも性能は間違いないよ。元が元だけにかなり安いしね。どう、一つ買わないか？」

堂々とセールスするワンに向かってはたばた手を振ってみせるランディ。

「大型コンテナ担いで戦闘しろってか。いらんいらん……って」

タブレット覗いたままだったランディの眉が、さらに顰められた。「ちよつと待て、マストライバーは武器じゃねえだろ」

低重力の衛星や小惑星の採掘基地から、資材をコンテナに詰め軌道上に打ち出すための設備がマストライバーだ。確かに基本構造はリニアレールガンと同じだから武器として応用は利くであろうが、なにごん本来設備だからでかい。戦艦に搭載できるかどうかだって怪しい。なぜそんな代物が武器屋のラインナップにあるのか。

「あ、それとあるアホが艦載砲と間違えて発注したモノね。納品寸前で気付いてキャンセルしてくれたのよ。迷惑千万な話ね」

おかげで倉庫で埃被ってるよと、ワンはぶちぶち文句を言った。

「どういうアホだよそいつあ」

「とてつもないアホね。なんてつたつて折角伝手で手に入れたハーフビーク級戦艦をこれでもかって重装甲に改造した挙げ句、艦橋収納機能オミットしてしまうくらいのアホよ」

どこかでケツアゴのおっさんがくしゃみやみをしているような気がするが、それはさておきワンはやれやれと頭を振る。

「それがティワズでも結構幅効かせてるヤツだから世も末ね。ま、金回りは良いからマクちゃんも吸い取るだけ吸い取る気だと思っよ」

(ティワズも色々ありそうだなあ……)

一抹の不安を感じるビスケット。その横で。

(このおっさん、あの親分さんをマクちゃん呼ばわりとはな。それなりに深く古い付き合いってことか)

ランディは先日のことを思い返していた。

オルガたちとは別口で、ランデイはマクマード邸に招かれていた。「お前さんがリボン付きかい。一度会ってみてえなとは思っていた」恰幅の良い、和服姿の初老にさしかかった男。穏やかに見えるがランデイを値踏みするその眼光は鋭い。向かいのソファアに座するランデイは、彼を前にもいつもの様子だ。

「圏外圏でもっとも恐ろしい男に名を知られてるたあ、光栄だね」

「そんだけのことをやらかして来たってことさ。で、早速本題だが」

マクマードは葉巻を一吹き。そしてランデイに問う。

「単刀直入に聞くが……お前さん、何を企んでいる？」

そう聞かれたランデイは、肩をすくめすつとぼけて見せた。

「さて？ 何の話やら」

「今まで俺が聞いた話で判断するならば、お前さんはむしろ一人で暴れ回るのが性に合ってる人間だ。GHに一発かますにしても、『やるんだったら一人でやる』だろうよ。そんなお前さんがあの小僧どもに便乗？ なにかあるって思うのは勘ぐりすぎかね」

マクマードの指摘に、ランデイは慌てず騒がず「流石慧眼」と言つてのける。

「親分さん、あんたが知ってる中で、相手がGHだと分かかっていて喧嘩が売れるモンがどれだけいる？ 俺は自分以外にそんな馬鹿が存在するとすら思ってた」

その武威、権力。GHは現在社会の実質的な支配者と言っても過言ではない。それにちよつかいを出そうなんぞ、テイワズですら躊躇する事だ。例外はランデイのような頭がおかしい人間だけであろう。あるいは……。

「あいつらとバーンスタインのお嬢さん、合わせて突き進めば話は段々とでかくなる。首尾良くアーブラウとの『商談』が纏まっちゃえば、さらに倍ってな。そうなりや一人で殴り込むよりも、もっと手痛い目をGHに見せてやれるんじゃないやねえかと思つたのさ」

そうなりや奴らの面目は丸つぶれと、ランディは唇を歪めて見せた。

「それにあいつらがやり遂げて見せたなら、火星の独立つてのに大きく近づく。もし『圏外圏の大企業なんか協力すれば』存外夢幻じゃなくなるかもよ？ ……見てみたい、とは思わねえか？」

マクマードもまた、口元に笑みを浮かべた。

「与太話だな」

「与太話さ」

表情は笑み。しかし実態はにらみ合いが暫く続く。

ややあつて、マクマードは紫煙と共に一息吐いた。

「ふん、お前さんの考えは分かった。敵に回りさえしなきゃあ、俺としては文句ねえ」

席を立ち、話は終わったとばかりに背を向け、窓辺に立つ。

「ま、これからも『よろしく』な。うちの連中とも仲良くやってくれや」

「可能な限り、期待は裏切らないようにするさ」

ランディが部屋を退出してから、マクマードは大きく息を吐いた。

油断ならない男。ランディの印象はそのような物だ。彼の言ったことがどこまで本気か分からないが、あり得る可能性だけに笑い飛ばすことも出来ない。たしかにGHは強大だが、圏外圏を含めた人類領域全体にまんべんなく手を伸ばせるかは疑問だ。事実火星支部など目が届かないことを良いことに不正のやり放題であったのだ。ただでさえ一枚岩ではない組織である。十分な用意があれば隙を突くことも出来よう。

彼の言葉には、人を動かすほどではないにしろ揺るがす何かがある。匂わせる可能性がそう感じさせるのであろうが、もしその気になって人を扇動し始めたら本気で一大勢力を築き上げてしまうかも知れない。

危険ではある。だが同時に。

「……面白いと思っちゃうのは、俺も乗せられてるからかねえ」

マクマードは鉄華団の少年達やクーデリアと同等の関心を、ランディに向けていた。

一方退出したランデイであるが。

「……ビビったあ。さっすが圏外圏一怖い男」

ほっと胸をなで下ろしている。実の所彼が言った言葉は、まるっきりの嘘ではないが与太話を越える物ではない。目に見えて自分を警戒するマクマードに対して何も企んでないなどと言つても信じまい。むしろ益々警戒するだけだ。であればある程度それっぽい『企みじみた話』をすれば納得するだろうと考えを巡らした末の、半ばでっち上げである。

漠然と言つたようなことは考えちやいるが、実際GHをおちよくるのに全力を尽くしているというのが大半を占める。ガキに出し抜かれた気分はどう？ どう？ とやるためだけに鉄華団に手を貸しているのだ。最悪であるこいつ。

まあとにもかくにも、マクマードは納得してくれたようだ。ようだがなんか関心を向けられてしまったような気もする。

「えらいのに目をつけられちまったなあ……」

絶対あの親分さん敵に回すのは止めておこう。ランデイは堅くそう誓った。

（こういうのも若気の至りっていいのか？ 違うような気もするけど）

考えているうちにも、商談は滞りなく済んだようだ。ビスケットがサインを記している。

「商談成立ね。……ま、テイワズ入ったなら、これからちよくちよく世話したりなったりよ。よろしく頼むのことね」

「は、はい、よろしくお願ひします」

戸惑いながらも頭を下げるビスケット。これから長い付き合いになるだろうが、このおっさんに振り回されなきやいいけどと、余計な

心配をするランディ。

と、ワンがランディに向かつて、手に持ったタブレットを指す。

「で、これ（マスドライバー）買わないか？」

「買わねーよ」

数日後、歳星の会場にて名瀬とオルガの杯が交わされた。

厳かな雰囲気の中、スーツ姿のランディは見届け人の一人として会場の端に鎮座している。

（カンジアートはどうにも分からん）

御留我威都華だの三日月王我主だの書かれた掛け軸のようなものが掲げられているが、ランディにとってはちんぷんかんぷんであった。そもこういった場での作法もよく分かっていない。付け焼き刃でよくやるなど、オルガを見て感心するほどであった。

それにしても、神妙に儀式を進めているオルガたちを見て思う。首尾良くここまでこぎ着けた彼らであるが、どうにも危なっかしいというか脆さのような物が見え隠れしている。ほぼオルガのワンマン体制だからというのもあろう。彼がいなくなれば即座に瓦解する危険性もある。

「流れた血が鉄のように固まって、離れられない関係」とオルガは自分たちをそう表し、そんな関係を名瀬は「家族」と言った。歪だが、故に強い繋がりを持ち、同時に危うさを秘めた彼ら。テイワズの後ろ盾を得たからといって油断はならない。その行く先は苦難が待ちかまえていることだろう。

（GHにかますまで潰れちゃ困るからな。適度に手助けしてやるか）
改めてそう考えるランディ。

彼は自分が鉄華団の少年達に相当入れ込んでいるという自覚がなかった。

後日、テイワズからの仕事も受け入れた鉄華団は、ハンマーヘッドの先導の元歳星を発つ。

往くは正規航路ではない、タービンス御用達の裏航路。その先に待ち受ける物を、彼らはまだ知らない。

続くかも知れなかったり。

※今回のえぬじい

「単刀直入に聞くが、ここのBGMゴツ●ファージャーと仁●なき戦いのどっちが良いと思うよ?」

「ブラッ●ラグーンで良くね?」

雰囲気は大事。

終われです。

※本編とは全く関係ない、突飛な嘘予告

あれから平穏な時が続いた。

世界はきつと少しずつ良い方向へ向いている。誰もがそう信じていた。

だが傷跡は、未だ残り、微かに疼いている。

異変は、ギャラルホルン研究施設の封印区画から始まる。

「だめです！ 隔壁が破られましたトーカ主任！」

「ばかな……あの機体は、ジャンクも同然だったって言うのに！」

再び目覚める、破壊されたはずの悪魔。

「あんた、何者だ？」

「[アルミリア・フアリド]と申します。あなたの力を借りに参りました。ライド・タムラ。……いえ、元鉄華団団員、ライド・マッス」

闇に潜み、未だ尽きぬ憎悪と憤怒を抱える男の前に現れた、かつて無力だった女。

「クラツカ、どうしても行くの？」

「……ごめんクツキー。でも、このままじゃ私が私を許せないの」
道を違える姉妹。

「モンタークの遺産？」

「ああ、実の所旦那は連中の表向きの頭を張ってたってだけだな。あいつら本当は……」

語られるモンターク商会の真実。

「アジー姐さん、俺、行くよ」

「ああ、しっかり見てくるんだ。これからの世界がどうなっていくかを」

若き後継者が、発つ。

「ラスタル様！ お考え直しを！」

「現在（いま）をいくら重ねたところで、過去（つみ）は消えないと言
うことだ」

過去の因縁からは逃れられないのか。

「おいおい、なんて顔してんだヤマギ？」

「そんな……生きて……」

死したはずの男が黄泉帰るのか。

「ありえるはずがない！ データにないガンダムフレームなど！」

「これは我等が意志の形。憎悪と憤怒の具現。……【ガンダム・セイタ
ン】」

73番目の悪魔が産声を上げる。

忘れられたはずの怨念が、未だに尽きぬ怒りが、再び世界に混乱を導く。

その裏で、蠢くものたち。

「認められるか。あの方の行動が無駄であったなどと
愚かなる男の意志を継いだ者。」

「くく、良い商売になりそうじゃないか」
いつの時代にも存在する、拝金主義者。

「あれこそが、悪魔の姿を借りた天の御使いなのです」
現実より逃避し、偶像を崇拜する夢想家。

「待ったのだよ。我々は、三百年の時をな」
遙かなる過去より訪れる、逆襲の徒。

そして――

「暁！ 行っちゃ駄目！」
少年の前に降り立つのは、希望か、絶望か。

「ぼる……ぼとすっ。」

機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ くアカツキく

全ての答えは、あの紅い月にある。

だから嘘ですって。

おまけ

ライド「最強がヒットマンであるというなら対策は一つ。

……俺自身が、ヒットマンになることだ」

ノブリス「なん……だと?」

おまけ2

アルミリア「あの世でマツキーに詫び続けろお兄様ああああ!!」
ガリガリ「逆恨み感はんばない!?!」

5・いい男つてのは、それなりの過去があるものさ

地球圏軌道上にあるGH基地【グラスヘイム2】の格納庫。そこに【アイン・ダルトン】三尉の姿はあった。

彼が見上げているのは、改めて受領したシュヴァルベ・グレイズ。それは以前ガエリオが使用していた機体だ。

「俺のシュヴァルベを預けるんだ。しつかり使いこなしてくれよ？」

傍らにいたガエリオが、アインの肩を叩く。彼自身は背後に佇む機体、【ガンダム・キマリス】を実家から持ち出し、使用する腹積もりであった。

火星支部に属していたアインは、敬愛していた上司であるクランクを鉄華団に討たれ、その仇を討つことを誓っていた。しかし火星軌道上の戦いに置いて名実共に一蹴され、それでも諦めきれずにガエリオたちに同行し鉄華団と戦いたいと願い出た。クーデリアの身柄を確保したいガエリオたちの思惑とも一致したためそれは認められて、ガエリオ直属の部下として迎え入れられたわけだが。

そんな彼に、ガエリオは真剣な表情で言う。

「お前は本懐を遂げる事だけ考えろ。まかり間違ってもリボン付きの悪魔を相手にしようなどと思うなよ？」

その言葉に思い出す。敬愛する上司の機体を奪い運用していた敵。それに挑みかかった直後に襲った衝撃。意識を取り戻せば仇は遙か彼方で、何も出来なかったという無力感だけが残った戦いとも言えぬ無様。仇と己に対する憎悪と憤怒だけが積み重なって、それを与えた相手に対し挑むなど言われれば反感を覚えても仕方が無かろう。

それを飲み込んで、アインはガエリオに問うた。

「いかなる人物なのですか、リボン付きの悪魔……ランディール・マーカーカスとは」

それに応えるガエリオは、苦虫を噛みしめたような表情であった。「有り体に言えば『化け物』だ。あの男より強い人間を、俺は知らない」

「隔絶したパイロットであるか?」

「それもある。が、問題はそこじゃない」

言いながらガエリオは過去を思い起こす。

「出会ったのは士官学校で、もうその時点で色々やらかしてくれていたが、その後には比べれば温いものさ」

士官学校卒業後ランデイが最初に配属されていたのは、広域パトリール艦隊。だがその実態は、一般からの入隊だったり出自の怪しい者、コロニー出身者などの被差別者達ばかりで構成された通称『標的艦隊』。演習の名目で引つ張り出されては一方的に叩き潰されるのが主な役目と考えられていた掃きだめであった。

配属されてから二年。彼は表立った動きは見せなかった。流石の彼もあまりの環境に凹まされたかと、ガエリオたちは思っていたのだが。

ある演習で、彼は虎視眈々と研いでいた牙をむき出す。

「月外縁軌道統合艦隊・アリアンロッド」と「地球外縁軌道統制統合艦隊」による合同演習。とはいってもアリアンロッドが出してきたのは1艦隊6隻。地球外縁軌道統制統合艦隊も旗艦を含む少数であった。対する広域パトリール艦隊は二世代は前の旧式艦である旗艦「ケストレル」を含む3隻のみ。そもそもこの演習は地球外縁軌道統制統合艦隊指令「カルタ・イシュー」の伯付けのためだけに行われたのだ。最初から勝負の決まっている出来レースである。

そこでランデイが行ったことは。

「合わせてMS72機、2個大隊規模の半数以上を『あの男は一人で撃墜判定に追い込んだ』」

しかもほぼノーマルの、十分な整備も行われていないはずのグレイズで、である。当時監察局に入ったばかりで模擬戦の視察に参加していたガエリオは度肝を抜かれた。士官学校時代から図抜けた技量を誇っていたランデイであったが、それが衰えるどころか気狂いの領域に達していたのだから。

彼独特の攻撃と機動が一体化したテクニック。こういった演習、いや何もかも足りない現状で多数の敵を相手取るために編み出された

のがそれだ。『弾丸や推進剤の消費を可能な限り押さえ、かつ有効打撃を効率よく与える』それが日の目を見たのがこの演習であったのだ。飼い殺しにも等しい二年間、目に物見せるため彼はただひたすら己を鍛え続けていたようである。

それだけではない。これまでただ一方的に戮られるだけであったパトロール艦隊全体——と言ってもMSで言えば1個中隊12機だけだが——が、まるで中身が歴戦の強者に入れ替わったかのように錬度が上がっていたのだ。

後で分かった話だが、どうやらランディは配属からこっち、同僚や上司を煽てたり扇動したり脅したり物理的に説得したりしてケツをひっぱたき、自分と同様に鍛え上げたらしい。最低でも、準エース級の猛者にまで達している有り様だった。

最終的に、一応アリアンロッドと地球外縁軌道統制統合艦隊の連合は勝利判定を得た物の、MS部隊は壊滅状態。艦隊もほぼ全滅に近い状態にまで追い込まれたという、実質的に敗北に等しい結果となった。

演習後、標的艦隊の主立った面子は査問じみた聴取を受けたのだが、一様にへらへらとした態度で。

「いやそちらが勝ったじゃないですか、何か問題でも？」

「そもそも勝っちゃいけないとかいうルールないでしょ？」

などと微妙に腹の立つ態度で正論を展開しながらのらりくらりと対応した。(どうやら人格面でもランディの影響を多大に受けてしまったらしい)実際PTSDを発症したりする人間が結構な数出たりしているので問題はあるのだが、相手側のプライドと面子がそれを理由に責めることを許さず、結局の所有耶無耶な形で幕が引かれる。

その後、状況から誰が原因なのか察しが付いたガエリオと、納得のいかなかったカルタ——彼女もランディの後輩に当たる——が直々にランディの元を訪れ詰め寄ったのだが、彼は小馬鹿にしたような態度で「敵が自分の都合通りに動くかどあほう(意識)」とけんもほろろに言っただけであった。暴論だが同時に正論であり、結果を出した以上ぐうの音も出ない二人は言い負かされて退散するしかな

かったのだ。

「そこからだ、彼がリボン付きの悪魔と呼ばれるようになったのは。メビウスのリボンは恐怖の象徴と、あの演習を知るものは震え上がったものさ」

だがその結果が不評を招いたらしく、広域パトロール艦隊は一旦解体され再編成されることとなった。当時のメンバーはばらばらに各所へ配属され、病原体もとい演習の主犯であるランディは重い処分を受ける……かと思いきや。

「そこで何をまかり間違ったのか、アリアンロッド指令『ラストル・エリオン』の直属に引き抜かれたんだ。なんでもエリオン公直々の抜擢だったらしい。普通なら大出世だったんだろうが……」

ガエリオは、頭痛を堪えるように人差し指で額を抑えた。

「あの男、なにをやらかしたんだか『配属後たった一週間で』不興を買い、辺境哨戒任務なんていう閑職に回されたんだ」

最後に彼と会ったのはその任務に赴く直前、ちやっかり先に受領していたシユヴァルベ・グレイズをもつて移動しようとしていた矢先であつた。

じゃ、達者でなと手を振りながら向けられた背中。その三日後、彼は所属していたMS小隊と共にMIAとなった。

「今思えば、彼は理解していたのだろう。自分の属していた小隊が『己を快く思わない者ばかりで構成され』、『人目の届かない任務であるのをいいことに、命を狙っていた』のだと。逆にそれを利用して、行方を眩ませたに違いない」

「いえつくしー！」

→普通に退職できないだろうしできたところで大して退職金貰えないだろうから、奸計を利用してこれ幸いと逃げ出すついでにシユヴァルベ・グレイズをパクったと外道。

「所属部隊の母艦は、彼らが海賊の奇襲を受けたおり殿となつて民間船を逃がして栄誉の戦死を遂げたのだとか報告していたが、あれは部隊を丸ごと置いてきぼりにして逃げ出したんじゃないかな。運良く生き延びられたにしても、デブリ帯なんかはMSだけでは生き延びることすら難しいからな。そこからどうやって生きながらえたのやら」

「いえつくしー!」

→前もって手配していた廃品回収業者に救助を頼んでおいた。それで報酬代わりにぶちのめしたグレイズを山分けし、うっぱらったまさにゲスの極み。

ともかく彼は生きていた。生きて、帰ってきた。それがどれほどの混乱を呼ぶのか想像も付かないとガエリオは言う。

「パイロット、サバイバー。そして扇動家として超一流。敵に回せばあれほど恐ろしい男はいない。まともに相手取るのは愚の骨頂だろうが……それでも我々は、彼を出し抜かなければならないんだ」

そのための、ガンダムフレーム。骨董品ではあるが、厄祭戦時代の技術で製造されたその性能は、大量生産を前提とした現在のMSとは比較にならない物だ。その性能を引き出し、さらに有利な条件が整うのであれば勝ち目はある。ガエリオはそう睨んでいた。

もつとも鉄華団を討ち、クーデリアの身柄を押さえるだけであれば彼と正面切って戦う必要はない。キマリスはあくまで保険。彼と直接戦わないか、戦っても時間稼ぎに徹することこそが、自分たちの『勝利』への道筋だろう。彼さえ押さえられれば鉄華団など単なる無法者の集団。容易に事を為し遂げられるとガエリオは信じている。

「しかしそれにしても……あの男は本当、士官学校時代から悪い意味で変わっていないな……」

そう言う顔が昔を懐かしがる物ならば、アインも複雑な思いを抱い

ただろうが。

ガエリオの顔は、道ばたの犬の糞を踏みつけたような苦々しいものだった。

一体どんな目に遭わされたのだろうか。アインは別な意味で不安になるしかなかった。

「風邪かなんかですかランデイさん？」

「いや、いきなり鼻がむずむずしてな。……誰か噂でもしたか？」

整備班の「ヤマギ・ギルマトン」に問われ、ランデイは首を傾げながら答える。

歳星での用事を済ませ補給や新たな仕事を受けた鉄華団は、ハンマーヘッドの先導の元地球圏への進路を取っていた。彼らが行くのは宇宙灯台を基点とした航行管制機構「アリアドネ」を利用する正規航路ではなく、タービンズの航行者が長年の勘と技術でもって切り開いた独自の裏航路である。GHに目を付けられている以上、航行記録の残る正規航路に行くのは危険だと判断したオルガたちは、輸送業務にてタービンズが良く使用するそれに便乗させてもらうことにしたのであった。

その間も彼らは忙しなく動いている。特に正規パイロットである昭弘と適正があると見込まれた連中は、イサリビとハンマーヘッドを往復し、アミダ指導による対人シミュレートとランデイの教練を受け続けていた。

どちらか片方だけでも結構ハードな教育だが、合わせると地獄の特訓と言っても過言ではない。特にランデイは僅か二年で底辺部隊を歴戦の強者に変えた手腕の持ち主だ。当然ながら生半可なものではない。後に『ランデイ・ブートキャンプ』と称されるようになる訓練を容赦なく施していた。それは大の大人でも音を上げそうなもので

あつたが、鉄華団の少年達はよく食らいついてきている。

「なかなか良いガッツだ。お嬢さんが教えてる勉強も真面目に取り組んでいるようだし、こりや化けるかも知れんぞ?」

ランディはそうオルガや名瀬に零していた。年少組を中心に文盲なものをたちへ文字の書き方から教えているクーデリアと共に、人に物を教えることに向いているのかも知れない。大分厳しめというかスパルタではあるが。

「一番受けて欲しいのは三日月なんだがな。あいつはわりと無茶しいだし」

「バルバトスの改修は終わったって連絡入りましたから、程なく合流できると思いますよ」

「長距離ブースターまでサービスとは、大分親分さんに気に入られたな。それまでは今のメンバーで回すと。……次の哨戒は昭弘か。デブリが増えてきたが、機体の方は問題ないな?」

「はい。それとタカキと一緒に出たいって言ってますけど」

「タカキが? そりやグレイズにMWを曳航してもらえば航続距離は問題ないだろうが」

ヤマギと話していたランディは眉を寄せる。「タカキ・ウノ」は年少組のリーダー格で、パイロットの適正があると見込まれた一人だ。早々出しやばる性格ではないのでそのようなことを自ら言い出すのは珍しいことであつたが。

「妹さんからメールが届いて張り切っているんですよ。あいつ常々妹さんを良い学校に行かせたいって行っていましたから」

「なるほどな。……報告があるから、ついでに大将には俺から言っておく。大将はブリッジだな?」

「えっと、多分?」

「まあいいさ、いなきや捜せば済むことよ」

ヤマギと別れ、ブリッジに向かうランディ。しかしそこにはオルガの姿はなく。

「ん? あんただけかフミタンさん」

ブリッジのオペレーター席に座しているクーデリアのメイド「フミ

タン・アドモス」一人。通常航行中なので問題はないだろうが、少々不用心だなとランディは眉を顰めた。

「ええ、オルガ団長は13時間近く休息を取っていなかったのだから、ビット女史が休息を取るようにと。ダンテさんはチャドさんと交代。チャドさんはトイレですのですぐ戻ってくるかと。他の子たちはメリビット女史にオペレーティングの基礎を習っているようです」「そういうことか。まあ寝てなかったんだなあの大將」

淀みなく答えるフミタン。納得したランディは、報告は後にするかと考えながらふとあることに気付いた。

「ん？ どこかから通信でも入ったのか？」

フミタンが操作していたコンソールのモニター画面を目に入れたランディ。ほんの僅か、フミタンはぴくりと身じろぎしたように見えた。

「いえ、火星の知り合いに連絡を取って、現状の確認をと」

「なるほど、邪魔したな。……大將への伝言があるから、ちとチャドを待たせてもらうぜ」

言って壁に背中を預けるランディ。その視線はフミタンの後頭部に注がれていた。

なんとというか、この女『匂う』。態度は真面目、鉄華団の面子にも柔らかに接しているし、クーデリアを見つめる目には確かな慈しみがある。だが、ランディの勘が警笛を鳴らしていた。

(何かがあるとは思うが、ね)

恐らくはどこぞの間諜で、クーデリアの監視をしているか情報を流しているかだろうと当たりをつける。しかし確たる証拠がない以上、無理にそれを暴くつもりもない。

(ある程度相手の動きが予想しやすくなるしな)

情報が流れているという前提があるのなら、それを元に相手も動くと推測できる。であればそれを逆手に取ることも可能だ。まあ現状で考えるのであれば。

(この先で襲撃がある。ってところか)

そう結論づけた。確証はないが、まあ大体そんなところであろう。

それとなく大将（オルガ）に具申しておくかと、ランディは思考を巡らす。

彼の予想が当たったのは、数時間後のことであった。

「医療用のナノマシンを！ 急いで！」

「それと再生ポッドの準備だ！ 2、3人ついてこい！」

二つの声が格納庫に響く。昭弘のグレイズ改と共にMWで哨戒に赴いたタカキであったが、謎のMS部隊に強襲され、MWごと捕らえられそうになったのだ。丁度イサリビに合流しようとしていた三日月が偶然参戦した事によりそれは防がれたが、攻撃を受けたタカキは重傷を負ったのであった。

狼狽える団員達をよそのてきぱきと処置を施したのはランディと、テイワズから鉄華団のお目付役として派遣された「メリビット・ステーブルトン」である。軍属であったランディはともかく銀行部門で働いていたというメリビットの処置も手際よく、タカキは一命を取り留めた。

「才女ってのか？ フミタンさんといい最近の女ってのは芸達者なこった」

タカキを再生医療ポッドに放り込んで一息吐いたランディが零す。アリアドネを利用した通信ネットワークの構築をこともなくやってのけた——本人曰く、メイドの嗜みらしい——フミタン。並の女性なら目を背けるような重傷を目の前に冷静に対処したメリビット。それぞれが多彩な人間を見てきたランディも舌を巻くような技術の持ち主である。

まあ技術を持つ人間がいるってのはありがたいことだと、さほど深刻になっていないランディであるが、団長であるオルガはそうもいかないようだ。

「ランディさんに忠告されてたつてのにこの様か。……情けねえ」

俯いてぎり、と齒噛みするオルガ。しかしこの場合全てが彼の責任というわけではない。襲撃があると予想されていてもそれがいつあるか、どのような形かまでは予測が付かないし、四六時中気を張っているわけにもいかない。何より彼らはまだ経験不足の少年。全てを無難に乗り切れるよう対処するなど出来ようはずがなかった。

「そうね。……最低でも、船医は用意しておくべきだったかしら」

オルガの様子にあまり厳しい言葉をかけるわけにもいかないが、それでも一つ言っておくべきだろうと思つたメリビットがそう言葉をかけた。オルガはぐうの音も出ないと肩を落とす。ランディはしようがないなといった態度で口を開いた。

「まあそのあたりは気を配れなくても当然だな。大将たちや『治療を受けるって発想自体がなかった』だろうし」
「え？」

ランディの言葉に、メリビットは目を丸くする。実際オルガたちは幼少のころから病気や怪我があつても医者にかかるほどの金はなく、CGS時代だつて命に関わる重傷を負つても大人達からは放置されていた。そのまま死んでしまうと言うことも珍しいことではなかったのだ。簡単な手当ぐらいなら出来るがそれも応急処置程度で、本格的な治療など想像もしたことがない。

ストリートマフィアなど、似たような状況を知っているランディは容易く想像が付いたが、流石にメリビットはそう言つたことを思いもしなかつたらしい。慌ててオルガに頭を下げていた。

「その、ごめんなさい。無神経なことを言つたわ」

「いえ、あの、俺らが至らないのは確かだし……」

メリビットの態度に少し狼狽えるオルガ。このように素直に謝られるのはどうにも困る。そう顔に書いてあつた。それをフオローするわけでもないだろうが、ランディが頭を掻きながら言う。

「むしろ船医に関しちゃ気を配れなかった俺らのミスだ。自分が医者と縁遠いと、どうにもそのあたりが雑になっていけねえ」

その様子にオルガとメリビットは顔を見合わせ、どちらからともな

くくすりと笑った。

空気を変えるつもりか、メリビットは茶化すようにランデイに向かつて言う。

「前から思ってたんですけど、ランデイさんって団長さんや団員の子たちに甘くありません？」

「え、!？」

彼女の言葉に、オルガとランデイはおろか、医務室で作業に従事していた団員達も含めた全員が、ぎよつと目を剥いた。

「……なにこの反応」

メリビットの後頭部に、でっかい汗が一筋流れた。

ランデイ・ブーツキャンプの現状を知り、彼女が納得するのはもう少し後のことになる。

事後、落ち込んでいたのはオルガだけではない。

「俺が……俺の、責任だ……」

タカキを引き連れて哨戒に出向いた昭弘。彼はタカキを護りきれなかったことを後悔していた。

そして。

「……昌弘……」

ぽつりと、名前を口にする。自分たちを襲撃してきたMS部隊。その中に、生き別れた自分の弟「昌弘・アルトランド」がいることを知ったのだ。

元々輸送船団生まれで、海賊の襲撃により攫われた挙げ句ヒューマンデブリにさせられた彼ら。必ず助けにいくと告げたものの、生きて再会することは絶望的であると思っていた。それがこんな形で再会することになるとは。

勘違いしていたと、昭弘は思う。鉄華団の一員として迎えられ、『自

分たちは人間であると思いがついていた』と。

「姐さんたちや、ランディさんにしごかれて、辛かったがそれが楽しくて。……そんなことを思っていたから罰が当たったんだ。ヒューマンデブリなんか、人並みの生活をしようなんて……っ！」

血を吐くような言葉。激しい自責が昭弘の心中を埋める。

だが、彼はそうやって落ち込むことを許されなかった。

「一人で勝手に結論付けてんなあほう」

ぼこん、と結構景気のいい音を立てて昭弘の頭に拳が叩き込まれた。「ぐお!」とか呻いてたたらを踏んだ彼が振り返るとそこには。

「ら、ランディさんに団長? それにみんなも……」

鉄華団の主要なメンバーが勢揃いしていた。狼狽える昭弘に向かって、オルガは真っ直ぐな視線を向けて言う。

「話は聞いた、水くさいぜ昭弘。お前の兄弟なら俺たちにとつても家族同然だ。一人で抱え込むんじゃねえよ」

「そうそう、みんなで助けてやりやいいじゃんよ。俺らなら上手いくつて」

オルガの言葉にシノが便乗する。傍らのビスケットも頷いた。

「みんなで考えようよ。昭弘の弟を救い出す方法をさ」

そしてこういうことに関心がなさそうに見えた三日月も、素っ気なくではあるが言葉をかけてくる。

「オルガが助けるって言ってるんだ。だから助ける。絶対に」

彼らしい、オルガに対する信頼と、同時によせられる信頼に応えようとする静かな気迫が感じられる言葉だった。彼らの背後から、ユージンが呆れた様子で言う。

「こいつらこうなったら梃子でも考え曲げねえぞ? だから大人しく助けられとけ」

「お前ら……」

言葉を失う昭弘。ランディはそんな彼の胸元に人差し指を突きつけた。

「ヒューマンデブリだとかそんなんは関係ねえ。お前さんは今ここで生きてるし、お前さんの弟も生きてる。生きてる以上、『死んでるより

は何かが出来る』んだ。みつともなからうが何だろうが、足掻いてみな

ぽかんと呆ける昭弘だったが、みるみる生気をみなぎらせ、勢いよく皆に向かつて頭を下げる。

「すまねえみんな！ 恩に着る！」

がやがやと騒がしく策を練る少年達。そんな彼らを見ながらランデイもまた考えを巡らせていた。

話を聞くとところによると、敵は恐らく「ブルワース」と称する宇宙海賊だ。武闘派として名高いと言うことだったが蓋を開けてみればなんと言うことはない、ヒューマンデブリの兵を前面に押し出して使い潰し、疲弊したところを叩くという戦術を用いるくされ外道だったというだけだ。

気にくわない。実に気にくわない。しかし。

(だからこそ、叩き潰しがいつてのがあるよなあ)

ランデイが浮かべるのは凄絶で底意地悪い、正しく悪魔のごとき笑み。

※こんかいのえぬじい

「ん？ あんただけかフミたん」

「なんですかその微妙に齟齬がある呼びかけは」
だれもが思った事だと思う。

終われ下さい。

6・たのしいたのしい、狩りの時間だ

ハンマーヘッドのブリッジにて、名瀬はある通信を受けていた。モニターに映っているのは、艦長席に埋まっている——と表現したくなるほどの——肥満体な男と、その傍らの気持ち悪いメイクをしたマツチヨ。宇宙海賊ブルワースの首領「ブルック・カバヤン」と、組織のナンバー2「クダル・カデル」である。

彼らは名瀬に対し、クーデリアの身柄の引き渡しを要求してきた。「テイワズの下でいい気になっているようだが、こっちにもでかいバックがあるんでなあ」

などとブルックは自信满满であったが、当然名瀬は彼らの要求を蹴り、交渉とも言えない会話は打ち切られる。

「わざわざ待ちかまえてるって教えてくれるとは、サービス旺盛だな」
くく、と笑みを漏らしながら名瀬は言う。確かに戦艦2隻に中隊規模を越えるMSの数は脅威ではある。が、種が割れているのであれば打っ手はあった。

「それで、その弟つてのを助けなきゃならないってんだな？ となれば全力で潰しまくるってわけにもいかないか」
「すいません、ご面倒をかけます」

居合わせたオルガが頭を下げるが、名瀬は気にするなど返した。「だがどうしても、つてなると手加減は出来ない。分かってるな？」
「昭弘もそれは覚悟の上です。優先しなきゃいけないことを、間違えるつもりはありません」

「ならいい。で、こっちも考えてるが、お前も無策つてわけじゃないんだろ、オルガ」

こうして、ブルワースとの激突は決定づけられる。しかし。
「？ どうしたりボン付き」

やはりブリッジに居合わせたランデイの様子に違和感を覚え、名瀬は彼に声をかけた。ランデイは、腕組みしてなんだか妙に渋い顔し

てる。

「……真正面から宣戦布告とか、なんなのあいつら馬鹿なの？ おまけに簡単にバック勾わすとか、世の中ナメてんのいたぶり尽くしてほしいの？」

「いやいや適度なところでやめてさしあげて」

名瀬とオルガは声を揃えてランディを止めにかかる。放っておいたら勝手にブルワース壊滅してくれるかもだが、多分見てたら心臓に悪いレベルの酷い事になるだろう。確証はないが確信はあった。

と、いきなりランディが表情を元に戻す。

「まあかなり本気の混ざった冗談はさておき、これではつきりしたな」
「なにがだランディさん？」

オルガの問いに、ランディはこう答えた。

「やつらのバックさ。お嬢さんの身柄を欲しがってる奴らなんぞ、一つしかねえだろ」

「……ギャラルホルン！」

「裏家業にも手が伸びてる、つてこつた。行く先々でちよつかい出してくんぞこりゃ」

「そこまでして……」

オルガにはまだ政治的な話はよく分からない。ただ火星の独立が面白くないから邪魔をする程度のことではないのは理解できるが、法の番人が自ら法を犯してまで止めねばならぬほどのことなのか。いや、そういったことは前々からあったのかも知れない。しかし火星からこつち、彼らは形振り構っていないように思える。クーデリアは、『そんなに悪いことをしているのか？ どう考えてもそうは思えなかった。』

自分でもよく分からないが、なにかこう胸にもやりとするいやな感覚抱えるオルガは小さく唸った。その様子を見て、名瀬はくすりと笑みを零す。

「ま、連中にも都合があるつてことだ。だがそいつはこつちにや関係ない。やるべき事をやる、だろ？」

「は、はい」

気にはなるが、いつまでもそれに拘っているわけにもいかない。オルガは気持ちを切り替えて名瀬らとともに策を練る。

デブリ帯で待ちかまえているブルワースに対し、長距離巡航が可能な百里と、大型ブースターを兼ねた輸送用ユニット【クタン参型】を用いたバルバトス。そしてそれに便乗したシユヴァルベ・グレイズの3機による奇襲をかけイニシアチブを取る。その後ハンマーヘッドとイサリビの全戦力で追撃。それがオルガたちの立てた作戦であった。

それを実行する準備が、今急ピッチで進められている。

「……それでバルバトスなんだがな」

三日月と共に歳星に居残ってバルバトスの改修に従事していた雪之丞が、ランデイに向かって言いにくそうに頭を掻く。

「結局コクピット周りも入れ替えて新規にして、マニュアルも使えるよう調整してもらったが、阿頼耶識を三日月に合わせたら他の人間に使えねえつてのは変わらなかった。おまけにあいつ、マニュアルのセッティングもお前さんのに準じてやたらピーキーに仕上げさせやがったぞ」

「阿頼耶識は俺にやよく分からねえから仕方ないが……マニュアルは、なんとか使えんこともない。俺はともかく他の連中鍛えまくらにやいかんが」

「おいおいそっち方向に話行くのかよ」

ともかく現状では、バルバトスは三日月の専用機と言える。交代要員がいけないのは少々きついが、それは後の課題として今はやれるようにやるだけだ。

「あと、マクマードの親分から追加の武装が送られてきた。なんでも太刀とかいうブレードなんだが」

「太刀……カタナソードか。高硬度レアアロイ製なら、使いようによつちやあMSもぶった切るらしいけどな」

使いこなせればMS戦で有効な武器だが、そのためには相応の技術が必要となる。主にメイスをぶん回す戦い方をする三日月では、まだ使いこなすことは出来ないだろう。

「ま、積むだけ積んでおけばいいんじゃないか？ 一度使ってみれば相性ってのも分かるだろ」

「確かにメイスよりもウエイトバランスは取りやすしな。背中に背負わせとくぜ」

三日月がすでに一度使用して使いにくいなどと文句を言っている事などつゆ知らず、二人は作業を開始した。

そして作戦決行の時は訪れる。

デブリ帯の狂った重力場の影響で、高速で接近する3機のMSの発見は遅れた。泡を食ったブルワースは急ぎ迎撃のためのMS部隊を出撃させる。

クダルが駆る濃緑の重装甲MS【ガンダム・グシオン】を筆頭に、同じく丸っこいデザインをした量産型MS【マン・ロディ】の部隊が続く。

その中で、ヒューマンデブリの少年【ビトー】は憤っていた。

彼らはブルワースで消耗品として扱われ、生きるために最低限のものしか与えられず使い潰され死んでいく。そのような存在であった。そんな中で心のよりどころは同じヒューマンデブリの仲間達しかなく、中でもビトーは一層仲間思いである。先のグレイズを襲った戦いの時、バルバトスによって仲間の一人が殺された。それに対して怒り憤っているのがあった。

「ペドロの仇を討ってやるー！」

操縦桿を握る手にも力がこもる。そんな彼、いやブルワース全体に
対し、突然広域のLCS通信が入る。

「ブルワースのみんなア、ウあ、そオ、ぶオ、！」
なんかとてつもなくヤバいの来た。

一瞬にして怒りの代わりに悪寒を覚えるビトーであった。

「ラフタ、お前さんは相手の艦に一撃離脱でプレッシャーをかける！
三日月は頭張ってるあのごつついガマガエルをやれ！俺は残り
の相手をやる！」

戯けた通信を入れた人間とは別人かと思わせるような鋭い指示を
出し、ランディは己の機体をクタン参型から離脱させ、一気に加速し
戦場へと向かう。

「勝手に仕切るな！もー！」

「二人でいけるの？」

文句を言いながらも指示に従うラフタ。クタン参型から機体を出
した三日月は、バルバトスにメイスを担がせながら尋ねる。

「お前らじゃ手加減は難しいだろ？ここはおぢさんに任せな！」
にい、と凶悪な笑みを浮かべ、彼は凜猛にマン・ロディの部隊へと
襲いかかる。

そして三日月は、クダルのグシオンと相対していた。

「奇襲とは味な真似してくれんじやねえか！小生意気なガキが、ぶ
ちイって潰してやんよオ！」

独特のテンションで迫るクダル。彼が駆るグシオンの得物は巨大
なハンマーだ。バルバトスのメイスよりさらに高い打撃力を持つが、
その分重く取り回しが難しい。それを遠心力を利用して振り回し、バ
ルバトスに向かって打ちかかる。

それを回避しながら、三日月はぼそりと呟いた。

「頭はこいつでいいんだらうけど……ガマガエルつてなんだろ？」

戦闘中にもかかわらず、彼は非常にマイペースであった。と言うより、緊張して戦う相手ではないと見ている。

「うん、機体もリアクターの調子も悪くない。なによりこいつ、『トロイ』」

阿頼耶識からの感覚。同時に操縦桿を通じての感触が機体の状態を知らしめていた。以前の調整不足の時とは比べものにならないほど出力も反応も向上している。そしてタービンスとの合流からこつち、暇を見ては鍛錬とランディ謹製シミュレーションに明け暮れていた三日月の技量も、相応に上がっていた。そんな彼の目から見るとグシオンは、「腕は悪くないけど機体の動きが遅く鈍い」という評価になる。

はつきり言って倒せない相手ではない。

「ま、こいつには手加減しなくて良いみたいだし」

大振りのハンマーをするりと回避して、三日月はメイスを思いつきリグシオンに向かって叩き込んだ。

ハンマーヘッドとイサリビがはせ参じ、戦場はさらに混迷を極める。

とうるか、ほぼ一方的にブルワースが翻弄されていた。勿論原因はこの男である。

「ヒヤッハー！ 向かってくる奴は小僧だ！ 逃げる奴は訓練された小僧だ！」

「なんだよ！ なんだよこいつなんで当たらないんだよオ！ 阿頼耶識もな……ぐアっ!？」

縦横無尽に戦場を駆け、一方的にマン・ロディへと打撃を叩き込む。その攻撃は全てコクピットを外され、今のところ死人は一人も出てい

ない。しかしそのことが逆に、ヒューマンデブリ達の恐怖を煽っていた。

阿頼耶識を備える自分たちは高い反応速度と機体と一体化したような操縦技能があるはずだ。だというのにあの黒い機体を捕らえることが出来ない。数では圧倒的に有利なはずだ。相手は阿頼耶識を備えていないはずだ。だというのになぜ、なんで、一方的に戮られる!?! 歯牙にもかけられていないという事実が、無力感が、徐々に心を犯していった。

種明かしと言うほどのものではないが、ランデイが圧倒的な強さを見せているのには理由がある。

まず第一に、ランデイはマン・ロデイのスペックを『ほぼ全て見切っている』。ジャンク屋で生まれ、MWやMSの実物をオモチャにしてシミュレーターをゲーム代わりに育った彼は、MSに造詣が深いどころか一見ただけで大体の性能が分かるほどだ。例え阿頼耶識を備えていたとしても『その能力は機体のスペックを決して超えない』。相手の動きなど、手に取るように予測できた。

さらにヒューマンデブリの少年達は、『まともな訓練を受けていない』。使い捨ての駒である彼らにそんなものを施すブルワースではなく、結果彼らは『基本能力は高いが素人に毛が生えたほどの技量』しか持たないのだ。阿頼耶識と数に頼った拙い戦術では、ランデイを捉えられるはずもなかった。

かてて加えて、このデブリ帯というシチュエーションは、『ランデイの技術を最大限に発揮できる』。ただでさえ彼の蹴りつけ機動は本来の想定以上の動きを発揮させるものだ。その上で散乱するデブリという『足場』が無数にあるこの状況となれば、最早FCS（ファイヤーコントロールシステム）すらも追尾できない機動力をもたらし手が付けられない。

「さあさあさあさあ！ 『生き延びたい奴』 からかかってきな！」

とはいっても、欠点が全くないわけじゃなかった。

「……あいつ、なんか全然銃を使ってないね？」

ラフタの援護に回ったアジーが、それに気付いた。実の所、ラン

デイの銃の腕前は人並み程度しかない。全くのど下手と言うわけではないが、高機動域で目標に当てられるほどのものではなかった。つまり彼は『自分の機動で銃が当てられない』という欠点を抱えているのだ。

彼が銃を使うのは、『絶対に当てられる状況下』にある時のみ。その上殺さないように手加減しなければならぬとなれば、現状で銃はデッドウェイト以外の何者でもなかった。もはや万が一の時のためのお守りと同等である。まあ銃を使わずとも圧倒できるのだからいいのだろう。多分。

ともかく戦況は鉄華団とタービンスに有利であった。なにしろブルワースが主力であるマン・ロデイの部隊はランディ一人に押さえ込まれている。それを指揮するクダルは三日月のバルバトスと交戦中。残りの戦力はブルワースの艦に集中することができた。ゆえに余裕が生じる。

「昭弘！ 行け！」

機会を伺っていたオルガが吠える。それに応えて待機していたグレイズ改が、一直線に飛び出していく。

目標は一機のマン・ロデイ。それを駆っていた昌弘は、『敵』の接近に気付き慌てて反応しようとして。

「この機体は!?!」

誰が乗っているものかを思い出し、一瞬動きが止まる。その隙にグレイズ改は武器をかなぐり捨て、体当たりするようにマン・ロデイに組み付いた。

そして通信機からずっと聞きたかった、しかし今一番聞きたくなかった声が響く。

「昌弘！ 迎えに来たぞ！」

その様子は他のマン・ロデイも確認していた。しかし救助に向かうことなど出来そうにない。

「昌弘！ くそ、がアッ!?!」

「はいはい邪魔すんなよ。お前らはおぢさんが遊んでやつからな
〜」

ランデイのシュヴァルベ・グレイズにボールのように蹴り飛ばされ、弄ばれる。連携することも隙を突くこともさせてくれない。さらに仲間が捕らえられたと言う事実が焦りを生み、それがまた自身の隙を大きくしてランデイに付け入れられる。彼らは悪循環に陥っていた。

「このまま何も邪魔がなければ……と言うときに限って、空気の読めない馬鹿が現れる。」

「くそー！ くそー！ くそがああああ!! なんなんだよこいつはああああ!!」

バルバトスと交戦していたクダルのグシオンだ。見れば機体の各部の装甲が凹まされ、ぼろぼろにされている。その原因は。

「堅いししじぶとい。面倒くさいな」

グシオンの後を追うバルバトス。泳ぐように宇宙を駆けるそれはグシオンの攻撃を完全に回避し、一方的にメイスを叩き込んでくる。そもデブリ対策で重装甲にしたところを大出力のスラスターを増設して無理矢理機動力を上げたグシオンとバルバトスでは小回りの効きが違う。その上三日月はデブリを利用し、見よう見まねとはいえランデイの蹴りつけ機動をそれなりに再現していた。かなりの技量を持つとはいえ阿頼耶識もないクダルでは、とてもではないが反応しきれない。

結果彼は半ば逃げ回る状態に陥っていた。プライドが高く同時にヒステリックな彼にとって屈辱の極みである。ハンマーを振り回しても当たらない。内装火器はかすりもしない。今まで圧倒的な暴力で全てを屈服させてきたクダルは悪夢を見ているような気分だった。「殺す殺す殺す殺す殺すうううううア！ 絶対にこいつ殺してやるうううううア!!」

もはや半狂乱となって打開策を見出そうとするクダル。血走ったその目が、グレイズ改と組み合っているマン・ロディを捉えた。

昌弘を説得しようとする昭弘であったが。

「俺が、俺たちが死にそうな目に遭ってる最中にも！ あんたは新しい家族を作って！ ぬくぬくと過ごしていたんだろ！」

「違う！ それは！」

鉄華団という新たな家族に迎え入れられた昭弘。思い出の家族に絶るしかなかった昌弘。その差が齟齬を生み、話はこじれていた。

元々昭弘は口べたな方で、説得などは不向きである。そんな彼の拙い言葉に昌弘は頑なになっていく一方だ。昌弘だつて分かつてはい。同じヒューマンデブリだ、昭弘だつて相応の地獄を見てきたのだと。だが心が追いつかない。妬ましき、悔恨、怨み。様々な感情がぐるぐると渦を巻き、それは拒絶という形で現れる。

それでもこのまま根気よく続ければ……と言うところで。

「昌弘オ！ そいつそのまま捕まえてろおお!!」

ハンマーを振りかぶったグシオンが迫る。昌弘ごとグレイズ改を葬り、三日月の動揺を誘う腹積もりであった。

しかし生憎ながら、『話はすでに歪んでいる』。

「邪魔すんなつってんだろがこのイボガエル」

「おごオっ!?!」

横合いからの衝撃がグシオンを吹っ飛ばす。やらかしたのはもうおなじみ、ランデイのシュヴァルベ・グレイズだ。

続けて彼は援護か昌弘を救おうとしたのか寄ってきたマン・ロデイを蹴っ飛ばしつつ跳び回る。そこにグシオンを追っていたバルバトスが飛び込んできた。

「ありがと。あいつしつぶとくつてさ」

「装甲分厚いもんなく。背中 of 得物で隙間狙つたらどうよ」

「これ使いにくいんだけど」

言いながらも素直にメイスを離し、三日月は背中 of 太刀を引き抜く。目にも止まらぬ高機動 of 最中、交わされる会話は妙にのんきなものに思えた。クダルには理解できない。こいつらは、こいつらは一体

『なんなのだ』？

混乱と、自覚してはいないが恐怖に支配される中、クダルは喚くように吠えた。

「お前ら……お前ら楽しんでるだろ！ 殺すのをよオ!!」

「……はあ？ 何言ってるのこいつ？」

三日月は言葉通りの表情を見せる。そして。

くく、と笑い声が響いた。

「ああ……楽しんでるさ。楽しんでるとも」

その声は、総毛立つような怖気を感じさせる。

に、と愉悦感満載のサディスティックな笑みを浮かべるランデイ。

「お前みてえなドクスを、おちよくりコケにしいたぶり尽くしてなぶり殺しにするのは実に楽しい」

どきっぱりと言いつりやがったこの男。ほらみろ、周り一瞬戦い忘れてどん引いてんじゃねえか。

「おら隙見せてんじゃねえよ、もうちよつと楽しませやがれ！」

一瞬入ったギャグシーンすらも見逃さず、グシオンを蹴りつけるランデイ。悪魔というかど鬼畜である。

さしものの三日月も、ぽかんとした表情を見せるが。

「……まあいいか」

いち早く我を取り戻して流し、グシオンを追う。結構大物かも知れない。

そんな状況も、この二人の目には入っていないなかった。

「ビューマンデブリなんか！ まともな生き方を！ 家族を！ そんなものを掴めるわけがないんだ！」

吠える昌弘。彼は猛っていた。猛りながら泣いていた。

怒りのままに、あるいはだだっ子のように、彼は吠え（泣き）続ける。

「ゴミのように死ぬんだよオ！ 俺も！ あんたも！」

「死なねえ！」

切り裂くように、昭弘の言葉が放たれる。

「俺は死なねえ！ 死なねえし、お前も死なさねえ！ 掴んだものを離さないためにも、お前に明日を見せるためにも！ 俺は、俺たちは死ぬわけにはいかねえんだ!!」

野獣のような、魂の咆吼であった。

一瞬唾然とする昌弘であったが、すぐに憤怒が彼の心を塗りつぶす。

「んなわけねえだろうが！ 死ぬんだよ俺たちは！」

怒りのまま機体を操り、無理矢理拘束を解いてグレイズ改を殴りつける。しかし強かにコクピット近辺へと衝撃を受けても、昭弘は怯まない。己は手を出さず、殴られるままに吠え続ける。

「死なねえ！」

「まだ言うか！」

再びがつんと衝撃。

「死なねえ！」

「死ぬんだ！」

がつん。

「死なねえ！」

「死ぬ！」

がつん。

「死なねえ！」

「死ねよ！」

がつん。

繰り返し拳が打ち込まれ、繰り返し言葉が交わされる。意地と意地の張り合い。そして恐らくは気付いていないだろうが、彼らにとって久々の『兄弟喧嘩』であった。

「お前らあああ！ 俺を——」

「助けなんか来るわきやねえだろぶわア〜か！」

クダルはすでに、哀れな贅でしかなかった。

逃げようとすればその行く先から蹴り飛ばされ、斬りつけられる。助けを求めようとすれば、その先の僚機が蹴り飛ばされてまた自分が斬りつけられその後には蹴り飛ばされる。

何も出来ない。いや、『なにもさせてくれない』。全ての行動が、事前に潰される。恐るべき牢獄に落とし込まれていた。

ランディからしてみればマン・ロディ部隊を押しさえ込むついででしかなく、三日月からしてみれば太刀が使いにくくて有効打撃を叩き込めないだけなのであるが、そんなことが分かるはずもなかった。分かったところで何の慰めにもならないのだが。

ともかくクダルは足掻く。足掻いて足掻いて足掻き続けたつもりであった。

そんな幻想を、ランディは打ち砕いていく。

「駒にしてきたんだろ足蹴にしてきたんだろ踏みつけてきたんだろ？」

助けようと思うかよそんなどクズをよオ！」

因果応報でしかないのだと、打撃と共に刻み込む。この言葉ですらついでだ。ランディにとってクダルとは『その程度の価値しかない』。遊べるオモチャ。足掻いて苦悶して絶望するところを指さして笑う存在でしかない。

三日月はもつと残酷だ。

「……うまいこといかないなあ」

彼にとってクダルの駆るグシオンは『据えもの斬りの藁束と同等の存在』でしかなかった。オルガの願いを叶え、共に往く。それ以外のことは些末。三日月は基本そう言う人間である。その課程の努力——『折角もらった太刀を、上手く使えるようになる』ための試し斬り

の材料としか見ていない。

だからどれだけ喚こうが訴えようが、クダルの言葉など響かない。「ん、斬るのは後の課題としてだ。装甲の隙間からさくつとぶっ刺す感じでやってみな」

「やっぱそっちの方がいいか。……分かった。やってみる」

どこまでもものんきに見えて。それ故に残酷さが際だつ。

「て、てめえらあ！ どこまでもナメくさりやがってええええええ!!」
死にもものぐるいでハンマーが振りかぶられる。

それも無駄に終わった。

どがりどと無造作に太刀が振るわれる。それはグシオンの右手首に深々と食い込み、ハンマーを離させ彼方へ飛ばしていく。

「やっぱり斬れないや」

「おま、おま、お前ええええええ!!」

唯一のよりどころと言っても良いハンマーを失ったクダルの言葉は、もはや意味を成さない。「うわうつぎ」と嫌悪感を露わにする三日月であったが。

「まあいいや。こいつ死んでも良いヤツだし」

そう淡々と呟いて、するりとバルバトスをグシオンの懐に潜り込ませ、逆手に持った太刀を胸元装甲の隙間に突き込んだ。

「ぎいえあああああああああ!」

断末魔の音が響く。

停戦信号がブルワースの艦から発せられた。

全面降伏。実質的な主力であるクダルが討たれ、ブルックの乗る艦が制圧されてしまったら彼らはもう抵抗は出来ない。ヒューマンデブリたちも次々と投降し、戦いは終わった。

そして。

……ごん。

「なんでだよ……なんで死なないんだよ……」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになりながら、昌弘は呻くように言う。

マン・ロデイの拳はぐしゃぐしゃに潰れ、グレイズ改のコクピット周辺もボコボコに凹んでいる。

だが、それでも。

「……言ったら、死なねえって」

各部がスパークし、警告灯が紅く照らす中。額から流血してる昭弘は荒い息の元、苦しいながらも笑って見せた。

ごん、と再び力無く装甲表面が殴られ……そこでマン・ロデイの動きは止まった。

「うあ……」

涙で視界が見えない。溢れそうなものを必死で堪える中、昭弘の声が届く。

『『お帰り』、昌弘』

もう、堪えることは叶わない。

「あ……あああああああああああああ!!」

昌弘は泣いた。

その声は、染み渡るように宇宙（そら）へと響き渡っていく。

※こんかいのえぬじい

「よし銃の腕前は勝った!!」(ガッポ) ↑メインキャラクター一同

「お前ら全員そこ並べ」(怒)

弱点があるところこそとばかりに突かれるぞ！ みんなも気を付けよう。

おわれよし。

7・一難去つてまた……つてのはお約束でね

「旦那、やっぱ予想通り連中ブルワースを退けたようですね」

通話を追えた男——トドが振り返りながら言う。彼の視線の先には、フクロウを模した仮面を付けたスーツ姿の男。

男は笑みの気配を漂わせながら応えた。

「当然だろうな。彼が共にある以上、真つ向からの戦いで鉄華団に適う者などいない」

断言するその言葉には、状況を楽しんでいる心持ちがにじみ出ている。

「GHをやり過ぎし、武闘派と謳われる海賊を退けた。これで彼らにちよっかいをかけようとする存在は暫く現れることはないだろう。最低でも、ドルトにたどり着くまではね」

「しかし良いんですかい？ あの嬢ちゃんの身柄を押さえたかったんじゃない」

トドの問いに、男はくつと口元を歪めた。

「建前上は、さ。実際の所『彼らには地球にたどり着いて欲しい』。その方が色々と都合が良くなる」

「やいば」

トドは肩をすくめてそれ以上の追求を止めた。自分を雇ったこの男、どうにも何を考えているのかいまいち読めない。GHでも頂点に立つ、セブンスターズが御曹司のはずだが、相方の坊やに比べてなんというか『捌けている』。自分のような裏社会に浸っている胡乱げな人物を『正式に』雇用した時点で変わっているとは思っただが……それ以前に、どうにも『こちら側』に近い気配があるように感じていた。へつらいながらも油断なく様子を伺うトドの視線を感じながらも、なんと言うことのないように振る舞う男は一人眩く。

「さて、ドルトあたりで接触できればいいが……彼のことだ、予想もつかない方向に状況を導いてくれるだろうな」

それまでは高みの見物といくかと、男は虎視眈々と機会を伺う。

戦闘終了後、捕縛されたブルツクは、オルガら主要メンバーの前に引きずり出されていた。

「艦一隻にヒューマンデブリ全員、それとMS全機に武器弾薬洗いざらいってところか？ そんなもんでどうよ兄弟」

名瀬がそう提案する。圏外圏ではこのように武力衝突が起こったとき、損害賠償として相手の資産を要求し巻き上げるとは往々にしてある。それも交渉次第であるが、今回はかなり法外と言っても良い。当然ながらブルツクは難色を示した。

「そんな！ 無茶苦茶言いやがって!？」

「あゝア!? なんだったらためえを肉屋に売り払ったっていいんだぜ？」

抵抗するブルツクの胸元を掴み上げてオルガが凄む。

その背後では。

「こいつだと人食(カニバル)用じゃあ良い値つかねえな。無駄に脂身多いし。スナッフムービー用の資材としてならまあそこそこ……」

「いやにリアルで生々しい話やめて!？」

とてつもなくヤバげな事を呟いていたランディ。本気で肉扱いでする彼に対して名瀬とオルガからツッコミ入った。まあ当然である。

それを受けて、ランディはぼん、と手を叩いた。

「じゃあ間(あいだ)取って、資産全没収した後連絡艇(ランチ)に乗せて放逐ってのはどうよ」

「マジもんの悪魔か!？」

当然ながら非常時には脱出に使われるとはいえ、連絡艇ごとくではデブリ帯からの離脱など、ましてや生きてどこかにたどり着くなど不可能に近い。遠回しどころかダイレクトに死ぬと言っているような

ものだ。

名瀬と共にツツコミを入れた後、オルガは沈痛な表情になってブルックに向き直り告げた。

「優しく言ってる内に頷いておいた方がいいぞ？ あの人が本気になつたら多分……いや絶対俺らでも止められねえ」

その言葉にブルックはぶんぶんと首を縦に振るしかない。

こうして取り敢えず賠償問題は片づいた。後は……。

ブルワースでこき使われていたヒューマンデブリは全員、鉄華団預かりとなった。格納庫の一角に集められた数十人ほどの彼らは、座り込んだままどのような目に遭うかと、戦々恐々としている。

そんな彼らに対し、オルガはしゃがんで目線を合わせると穏やかに語りかけた。

「火星はまあ、そんな良いところでもねえが、ここよりはマシだぜ」「え？」

オルガの手前に座っていた頬に傷のある少年が目丸くする。

「最近懐具合も良くなってきたから飯にはスープが付くし、毎回じゃねえが野菜も食べられる。給料だって……まあその、多くはないが出してやれる、と思う」

「な、何を言ってる……」

「団長、じゃあ」

「ああ、名瀬の兄貴には話を付けた。こいつらは俺らが預かる」

オルガの言葉に、少年達はどういうことだと戸惑った。先の少年が、おずおずと言葉を発する。

「どうして……俺たちはさっきまであんたらとやりあってたのに……」

敵艦制圧のおり、抵抗した彼らと突入した団員達とで銃撃戦が行わ

れ、双方にそれなりの死傷者が出ていた。当然恨みやわだかまりもあるはずだ。

それでもオルガは穏やかな態度のまま、少年に言う。

「お互い仕事だったんだ、おまけに死にもものぐるい。だったら仕方がねえ。……それともお前ら、やりたくてやったのか？」

「違う！ けど……」

少年は悲痛なまでの声で訴えていた。

「……今までそんなこと考えたこともなかった。だって俺たちは……」

その様子に、チャドやダンテは眉を寄せる。彼らも同じ立場だったのだ、気持ちは痛いほどに理解できた。しかし。

「ビューマンデブリ。宇宙で生まれ散ることを恐れない、誇り高き選ばれた奴らだ」

オルガはそう断言してにと笑った。

「ようこそ誇り高き男達。鉄華団はお前らを歓迎する」

その言葉に、少年達の多くは泣き出した。そのようなことを言われるとは思っていなかったのだろう。自分でも分からない感情で胸が詰まり、涙がこぼれたのだ。

だが、全員が全員そうだったわけではない。

「ふぎげんな……ふぎげんなよ！ 情けをかけたつもりか！」

立ち上がって吠えたのは、前髪一房にメツシユの入った少年——ビトー。彼は仲間を殺された恨みを忘れることが出来なかった。そして弄ばれた憤りも。

馬鹿なことをしていると自分でも分かっている。いつも通り頭を下げて媚びへつらったふりをしてやり過ぎせよいと。

それでも、それでも。自分でも制御できないほどの感情が、彼をいきり立たせる。

「そんな簡単に割り切れるもんかよ！ お前らに情けをかけられるくらいなら死んだ方がマシ……」

「ほ……」

ビトーの咆吼は最後まで続かなかった。いきなり背後からわしり

と頭を掴まれたからである。

そのまま強制的にぐりんと後ろを向かされると、悪魔の笑顔がお待ちかねであった。

「おちさんが折角苦勞して手加減して生き残らせてやったのに、それを台無しにしてくれちゃうつもりかなアボクウ?」

「あだ、あだ、あだだ!」

ぎりぎりと、頭を掴んだ手に力が込められていき、ビトーは悶絶する。

「ちやあんと生きて鉄華団で勤勞してくれるって約束してくんないと、おちさんとっても悲しいなア」

「わ、分かりましたすんませんナマ言いましたああああ!!」

少年達は感涙にむせび泣くのをやめ、啞然と後頭部に汗を流している。色々と台無しだなあと思いながら、オルガは再び口を開いた。

「まあアレだ、色々と思うところはあるだろうがこれだけは守つてくれ」

そこで彼は沈痛かつ真剣な表情となって、心の底から大真面目に告げる。

「この人には絶対逆らうな」

少年達は全力で頷くしかなかった。

まあ確かに、鉄華団の方は皆受け入れることに意義はなかったが、わだかまりがすぐに解けるものでもない。特に突入班を指揮していたシノなどは珍しく落ち込んでいるようであった。

さりとてすぐさま解決する手段などもない。時間が緩和してくれるのを待つしかないかとオルガなどは考えていたのだが。

「お葬式をしましょう」

彼らの様子を見て、メリビットがそう言う提案をしてきた。

「はあ？ なんすかそれ？」

オルガは意味が分からないといった態度だが、メリビツトは諭すように言う。

「お葬式っていうのはね、死んだ人間が安らかに眠れるように、新しく生まれ変われますようにって意味もあるけれど、生きている人間のためでもあるのよ」

つまり鉄華団とヒューマンデブリの少年達、双方の死者を合同で弔いवादかまりや壁を少しでもなくそうという事だった。

そんなことでオルガは気が進まない様子であったが、当事者であるシノや多くの団員達が賛成し、葬式は行われる運びとなった。

イサリビの甲板上、そこに鉄華団一同と名瀬以下タービンスの主要メンバー、そしてヒューマンデブリの少年達が集められる。

遺体と遺品が詰められたカプセル。それを前にオルガは言葉を発した。

「よし、これでいいな。じゃあ皆祈ってくれ。死んだ奴らがいくべき所に行けるように、そして次はまともなところに生まれ変わるように」

拙いまでも黙祷を捧げる一同。そうしてからカプセルは宇宙に流された。

「弔砲用意、撃て」

手向けの砲が放たれる。そしてそれは宇宙に花を咲かせた。

「なんだあれ!? すげー！」

「綺麗……」

ヤマギが色々と細工して作った花火。皆それに魅入られていた。

「生まれ変わり、か……俺たちも死んだら、生まれ変わるのかな」

オルガに言葉をかけられていた少年が、ぽつりと呟く。その言葉に応えるものはない……と思われたが。

「んなこと考えんのはまだ早えぞ」

突然放たれた台詞に、少年達は傍らを見上げる。そこに立つのはランデイ。

彼は花火が消えゆく宇宙を見据えたまま、言葉を続けた。

「お前らは生きてる。折角拾った命だ、死ぬまでは大切にかつ全力で使ってみろや。死んだ後の事ア死んでから考えりゃいいだろ」

そっけなく、だが何かしらの思いが込められた言葉であった。

自分たちを散々弄び脅しをかけた、傍若無人の権化としか見えない男から放たれた言葉とは思えず、目を丸くする少年達。近くで聞いていた団員達も同様であった。

キャラじゃねえだろ。多くの人間がそう思ったが流石にツツコミ入れられる度胸のある人間はいない。それ以前に――

なぜか彼の言葉が胸に響いていた。

「え!? うえ!? き、き、キス!? な、なにを、いきなり!」

「可愛かったから。……嫌だった?」

「い、嫌とかそう言う問題ではなくその……」

動力区画の片隅で、三日月とクーデリアが――主にクーデリアが一方的にだが――騒いでいる。

クダルに言われた人殺しを楽しんでいるという言葉……よりもラウンディと同列に扱われたことが妙に納得できなくてもやもやしていた三日月を、クーデリアが抱きしめて慰めようとしたのだ。

食堂で年少組の少年を慰めていたフミタンに影響されてのことであったが、それ対し三日月はいきなりキスをぶちかますという行動に出た。彼もまたハンマーヘッドでいちゃついていた名瀬とアミダに影響されての事だが、どうにも直情的というか素直すぎる行動である。前から思っていたがこの少年、本質はかなり天然なんじゃなからうか。

そんな彼らの様子を、フミタンは出入り口の影で伺っていた。

勿論クーデリアの監視という意味がある。彼女の『本来の仕事』から言ってそれは必須だ。冷静に、冷徹に、事を運ばねばならない。

運ばねばならないはずなのに。

(情に流される……お笑いぐさですね)

分かっている、自分が揺らいでいるのが。これまでの生活でクーデリアの性質、その意志に惹かれていると。そのことが自分の胸中に疼きのような痛みを与えているのだと。

忘れようとした。嫌おうとした。現実を見せて心をへし折ろうとした。だがクーデリアという少女は幾度壁にぶつかっても、へこたれたり落ち込んだりはするが歩みは止めない。そして何か一つ乗り越えるたびに確かに成長している。それを自分のことのように喜んでいのに気付いたとき、フミタンは内心愕然とした。

だが、だからといって全てを告白する勇気もない。こんな薄汚い自分でも、クーデリアはきつと許すのだろう。であるならば、自分に対する『報い』はどこから来るのか。それが恐ろしい。

自分一人が命を失う、で済めばいいが、周りの人間……クーデリアが巻き込まれるのは身を切られる思いだ。それは避けなければ……と考えて気付いた。

このまま進めば、それどころではなく直にクーデリアの命が危険であると。

どうしたらいい、どうすればいい。フミタンは一人思い悩む。

こんな時に、現れる存在は一つだ。

「どしたアこんな所で、道ばたのありんこでも数えてたのかい？」

悪魔だ。悪魔がやってきた。かけられた声にはっと振り返れば、

「よっ」と片手を上げるランデイの姿。

「お嬢様がこちらにおられるようでしたので。今取り込んでいますよすが」

冷静なメイドの仮面を被り、何事もなかったかのように対応するフミタン。彼女の隣で動力区画を覗き込んだランデイは「あ、そなんだ」と言っているから。

「ところでよ、あんた『これからどうなるか知ってる?』」

「っ!？」

不意打ちの言葉に、フミタンは身を強張らせる。薄暗がりの中ゆっ

くりと彼女に向き直ったランデイの表情は陰り、よく分からない。ただその目は射抜くような光を放っていた。

「……何をおっしゃっているのか、分かりかねますが」

口調はいつも通り。だが彼女は自分が後ずさっていると気付いていない。

「しらばっくれるならそれでもいいさ」

背中が通路の壁に当たってから、追い込まれていると悟る。迫るランデイは、軽くフミタンの肩口付近の壁に右手を当てた。そしてこう言葉を放つ。

「今のあるたの主は、忠誠を誓うに価するのかい？」

「な、何を言ってる……」

やっとフミタンにもランデイの表情が分かった。

嗤っている。口を弓の形に歪め、彼はおぞましいとすら感じる笑みを浮かべていた。

彼はそのままフミタンの耳元に口をよせ、蠱惑的とも思える声色で言う。

「まさしく『悪魔の囁き』ってヤツさ。己の心そのままに従えってな」

言ってからすっと身を離す。そして何事もなかったかのように彼は動力区画へと姿を消した。

残されたフミタンは壁に背中を預けたままだ。彼女は右の拳を握りしめ、そっと胸元に当てる。

薄暗がり彼女の表情は分からない。ただその拳が微かに震えていた。

「お、三日月ここにいた……あれ、邪魔だったか？」

三日月と共に動力区画の窓からなんとなく外を眺めていると、気楽な様子ランデイが姿を現した。

「あ、いやその別にそう言うわけではないのですけれど……」
「ん？　なんか用？」

クーデリアはわたわたと言いつつ、三日月の方は全くいつも通りだ。なんかどっかから「やっぱすげえよミカは」という声が聞こえたような気がするが、空耳だろう、多分。

それはともかくランディは、「今タブレット持ってたか？」と三日月に尋ね、三日月は「持ってるけど？」と懐からタブレットを取り出す。「例のカタナソード……太刀ってヤツの使い方、色々調べてみた。ひとまず目を通して参考に見たらどうよ」

そう言いつつ自分のタブレットから三日月のものにデータを移してやるランディ。それを確かめてみると、ほとんどが動画データのようだ。

「なにこれ、えっと……」

覗いてみれば、居合い、青竹斬り、兜割りなどなど日本刀を使った多種多様の演舞や型の動画だ。どうやらいつの間にか集めていたようである。しかも文字の読めない三日月に合わせてか、動画と画像のみで構成された資料であった。

「折角の『贈り物』だ、使っちゃった方が親分さんの印象も良いだろうさ」

「そんなもんかな？　……まあそれはいいんだけど」
「どうしました三日月？」

興味を惹かれて三日月の肩口からタブレットを覗き込んでいたクーデリアが問う。問われた三日月は、眉を寄せた表情で応えた。

「刃物の練習って、どうすればいいんだろ？」

「そういうことなら任せてー！」

むふんと張り切って胸を叩くのは、鉄華団の厨房を預かる少女【ア

トラ・ミクスター」である。ひよんな事から三日月に助けられる形で職を得て、それ以降彼を慕っている彼女は鉄華団創設の折自ら雑用、飯炊きとして売り込んできた。そのまま雇用されて現在に至っているわけだ。

「まあここで刃物を扱えるつったら厨房しかねえもんなあ」

言い訳するようにランディは頭を掻く。三日月の素朴な疑問にどうしたらいいのもかと頭を悩ませた末がこの様だった。彼は万能器用型の人間であるが、予想も付かない問題が提示されると微妙な方向に舵を取る習性があるようだ。

ともかく刃物であるなら包丁は基本だろう、多分。というわけで厨房を訪れ、アトラに使い方を教わってみればと言うことになったのである。

「それにしても似合いますね、三日月」

「そう?」

あんな事(三日月ズギウウン事件)があつた後なのでアトラと顔を合わすのは少し気まづかつたクーデリアであつたが、今の三日月の格好を見てそれも吹き飛んだ。

なんのことはない。いつものジャケットを脱いでタンクトップの上にエプロン付けた姿である。たしかにこう、異様に似合っていた。

(か、可愛い……)

端から見ればどうなのかは分からないが、なんかクーデリアの琴線に触れたようであつた。ときめいた視線が向けられる中で、三日月はアトラと並び包丁で材料に挑む。

「上から押しつけるんじゃない、こうやってそつと刃の根元を押し当ててから引くように切るの。力みすぎちゃだめだよ?」

「ん」

アトラはアトラで(うわ、なんか新婚さんみたい)などと内心ときめきまくりながら三日月に指示する。それを受けて彼は素直に包丁を扱った。

「押し当てて、引く」

さすればするりと人参が切れる。ふむ、と三日月は頷いた。

「押し当てて、引く」

切れる。思い出すのは動画。流れるように刀を扱い、見事青竹を斬り飛ばした女性。

「押し当てて、引く」

切れる。斬れなかったグシオンの腕。その時に阿頼耶識から感じた感触。

「押し当てて、引く」

再調整した機体の操作感、操縦桿の指先で感じる反応。阿頼耶識の一体感。

「押し当てて、引く」

それらを総じて練り上げて、ただ無心に斬れば――

「押し当てて、引く」

すぱん。

「……あれ？」

きよとんと目を丸くする三日月。彼の刃先では、人参どころか『まな板まで真つ二つになつていた』。

「あー！ なにしてんの三日月！」

「えっと、ごめん？」

「いくらなんでも力みすぎ！ もー、こうなったらちゃんと思えるようになるまでとことん教え込むからね！」

ぷりぷり怒るアトラに気まずそうに頭を下げる三日月。その様子を見ていたランディは後頭部に一筋汗を流した。

「え〜つと……上手くいつてるようだから、俺はこのへんで」

もしかしたら、とんでもないことしちゃったかも知れない。なんかこー斜め上の方向に三日月の成長を促したような気がするが、そんな事実から目を背けてランディはそっと厨房から退散した。

さて、ひとまず色々と片づいた後、整備班は総出でてんてこ舞いとなっている。

何しろ中隊規模のMSが丸ごと手に入ったのだ。そもイサリビクラスの強襲装甲艦は最大で中隊級、12機前後のMSを運用するように作られている。そのままならキャパシティがオーバーしてしまうのだ。

そこで破損が大きい何機かは解体して売り払いあるいはパーツにし、残った機体を運用前提で整備することにしたのだ。何しろ阿頼耶識搭載機だ、現在予備パイロット候補として訓練を受けている連中にも使えるだろうと、オルガたちは考えたのである。

ヒューマンデブリの少年達が使っていた機体とあって、皆色々と思うところはあったのだが、これからのことを考えれば戦力は少しでも欲しいし、何よりも機体にも乗り手にも罪はない。それにサバイバリテイの高いマン・ロディは未熟な乗り手でも生き残る可能性は高いものだ。上手く使えば有効な戦力になるだろう。

そんなこんなでマン・ロディの戦力化は決定され、ついでのとばかりにグレイズ改の本格的な改装などにも着手され始めたわけだが。

「頼む、ランディさん！俺に、俺にこいつを使わせてくれっ！」

見事な土下座であった。格納庫の奥に鎮座するグシオンの前でオルガと話していたランディは、いきなりのことに目を丸くする。

突如土下座ってきたのは昭弘。共に付いてきたらしい昌弘も、何かなんだかと目を丸くしている。

どういう事なのかと詳しく聞いてみれば、強奪……じゃなかった譲渡されたグシオンを、自分に使わせて欲しいとの訴えであった。

「俺は馬鹿だ。馬鹿だから力に任せる事しか出来ねえ。そんな俺が弟やその仲間、ひいては鉄華団を守るために出来る事といやあ、それこそ力に任せて敵を殴りつけるだけだ。そのために、少しでも強い力がある！勝手なことを言ってるとは思いますがそれでも頼む！こいつを俺に譲っちゃくれねえか！」

「兄貴……」

「あ、うん……えくと」

土下座(げざ)る兄に感極まる弟。そう必死こいているところを悪いのだがと、ランディは僅かに居心地の悪さを覚えつつ応えた。

「いいんじやねえか？　なあ、大将？」

「うんまあ、それなら話は早いかな」

実の所、グシオンは三日月がとどめを刺したから鉄華団のものだと主張するランディと、いやいい加減ボーナスもなしってのは気が悪いから貰ってくれというオルガとでちよつと意見が対立していた形であつたのだが、押しつける相手がいるのであれば双方文句はない。

決してキモいオカマが乗っていたから押しつけあつていたわけではない。本当に。

「ならこいつも阿頼耶識仕様にする感じか。同じガンダムフレームならバルバトスのデータが使えるだろうよ」

「ありがてえ、ありがてえ！　一生恩に着るぜ！」

「おうさ、そのうち纏めて返して………つてああっ!？」

貸し一つげとー、とか思っていたランディは、『とあること』に気付いて声を張り上げる。

「テイワズから預かった荷物！　確かめねえとヤバいんじやねえか!？」

「いやいくら固定してあるからつてもよ、戦闘(ドンパチ)やった後だけ？　どんな影響出てるか分かりやしねえって」

「妙な所で心配性ですね。衝撃や振動に注意をと注文があつたわけではないんですから。コンテナも対衝性のものですし」

「ま、なにもなけりやそれでいいさ。ヤマギ、開けてくれ」

先の戦闘により、テイワズから預かった荷物に対する影響がないか心配したランディ。それを受けてオルガは一応確認することにした。事務手続きを請け負ったメリビットに確認してもらうため同行して

貫い、揃って開け放たれたコンテナを覗き込む。

途端に凍る面々。ややあつてランデイが口を開く。

「……………大将、こいつアヤバいんじやねえ?」

コンテナの中に鎮座していたのは、戦闘用のMWであった。

※今回のえぬじい

「……………私を作ったのより、美味しいような気がする……………」

「クーデリアさん! 三日月材料切っただけだから! 調理したの私だから! クーデリアさん!?!」

予想外の攻撃がクーデリアにダメージ。

8・ひとまず落ち着いて考えようぜ

ハンマーヘッドの応接室。そこに鉄華団の主要なメンバーは集まっていた。

深刻な表情の彼らを前に、腕組みした名瀬はふうむと鼻を鳴らす。

「なるほど、そう言う状況なら確かめたくもなるか」

オルガたちには教えていなかったが、タービンスのような裏街道に片足突っこんだような輸送業者が仕事の途中で、預かった荷を改めるのは控えるべしという不文律がある。

正規航路を使う場合ならともかく、今回のような裏航路で運ぶ荷物の中には、所謂『ご禁制』の品が含まれている場合が多々ある。そう言う品は当然ながら送る方も受け取る方も臍に傷ある訳ありだ。そう言った相手を敵に回すのも拙いし、わざわざ火中の栗を拾うような真似をしたくもない。故に後ろ暗そうな荷は『見なかったことにする』のが一番無難なやり過ぎし方であった。

そう言うわけだから、よほどのことがない限り輸送中に荷を確認するなんて事はやらない。そんな事情を知らないランデイと鉄華団だからやったことだ。

まあ今回の場合、『荷物自体は問題ない』。この時代、武器そのものは別にご禁制の品ではないからだ。治安も悪く、海賊やそう言った類の存在が横行している昨今。自衛のために武器を持つことは場合によっては推奨すらされる。でなければCGS——ひいては鉄華団のような組織は存在することが出来なかつただろう。

問題は。

「何らかの資材って『偽装してた』ことなんだよなあ」

ランデイがそう指摘した。もしたただ単に武器が必要であると言うのなら、偽装する必要など全くない。逆に言えば『偽装する必要があった』ということだ。そう言う場合、大概後ろ暗い。

「これ受け取り先ってどうなってるの？」

「えつとですね……ドルト労働組合!? 代表者が……ナボナ・ミンゴ!? ナボナおじさん!」

ランデイに問われて受け取り先を確認したビスケットが、素っ頓狂な声を上げる。その反応に皆眉を寄せ、オルガが問うた。

「知り合いかビスケット?」

「う、うん。父さんの友人で、僕らもお世話になった人だ。けど、なんで?」

「……ちなみに聞いておくけど、ドルトの労働組合って武器いるほど物騒なところか?」

「そんなわけではないです! 武器なんて使うどころか見たことすらない人たちばかりですよ!」

食って掛かるようにランデイに返すビスケット。彼はドルトコロニーの出身であったが、幼いころ事故で両親を亡くし、まだ物心つか付かないかの妹二人と共に火星の祖母を頼って移住してきた。その頃から状況は変わっているかも知れないが……。

「そも労働者が住んでるドルト2つって経済的に苦しいから、あんな大量の武器なんて購入する余裕があるのかどうかだって怪しいものです。なにかの間違いじゃあ」

「あるいは……届け先も偽装って可能性がある、か」

顎に手を当て、オルガが呟くように言う。これまで散々自分たちを騙したり利用したりする大人達ばかりを相手にしてきたので、今回のこと自体はさほど驚いていない。考えながら彼は名瀬に向き直った。

「名瀬の兄貴、今回の荷物について何か聞いていることはありますか?」

「いや、特には何も聞いていないな。今回の荷物は、お前さんらが地球に向かうからって言うんで便乗させて貰ったものだ。確かに滑り込みではあったが」

肩をすくめる名瀬。しかしながら裏航路に便乗する荷物だ、どんな事情があってもおかしくはない。だがそれを口にするつもりはなかった。

(あるいはこのこと事態が、こいつらの試金石かも知れないからな)

自分は聞かされていないが、マクマードは何か事情を知っているかも知れない。だとすると、このことに対して鉄華団がどう対処するか。それを見定められている可能性がある。そうでなくとも自分あまり口出しするのは控えておいたほうが良いだろう。この仕事は鉄華団が請け負ったものだ。まだまだ駆け出しとは言え彼らには責任というものがある。最低限の口出しと手助けに留めておくべきだと、彼はそう判断した。

そうやって名瀬が見守る中、オルガたちは深刻な様子で言葉を交わしている。

「じゃあ、送り主の方はどうなってる?」

「フォルクス・マーケット。火星を中心にして手広くやってる小売業者グループだね。資材も武器も、両方扱ってるからどっちだとしてもおかしくはない」

「だったらよ、『間違い』なんじゃねーのもしかして」

口を挟んできたのはシノだ。気楽そうに言う彼に対してそんなわけないだろうと言いかけたオルガだったが。

「んなわきやねえ——」

「いや、そう言う可能性もあるか?」

「——つてええ!?!」

代わりにと言うわけではないがツツコミを入れようとしたユージンが目を丸くする。オルガは至極真面目な表情で続けた。

「そもそもの注文が本当に資材だったとしたら、ドルトの労働組合宛でもおかしかねえ。何らかの手違いで荷物が入れ替わったんなら……」

「ありうるかなあ?」

オルガの言葉にランディはうーむと考え込む。基本捻くれていて彼からしてみれば裏があると思えない事態だが、そんな間抜けなことが起こってもおかしくないのが世の中だ。そしてそんな間抜けなことが原因でとんでもない事態を引き起こすのもセットだ大概。

疑い始めればなんでもきりが無い。さりとてこのまま荷物をドルトに持ち込むわけにもと、少年達と奇人一人は頭を悩ませる。

と、そこでぽつりと発言するものがいた。

「聞いてみればいいんじゃない?」

その言葉にはつと顔を上げる全員の視線が向く先には、いつも通りの三日月。彼は何を悩んでいるのか分からないといった風情で再び言う。

「だからさ、そのくみあい? の人に聞いてみたらいいんじゃないかな」

しん、と応接室が静まりかえる。そして。

『それだああああ!!』

爆発するように皆の声が唱和した。

「そうだよ受け取る本人に確認してみりゃいいんだよ! なんてこんな事に気付かなかったんだ俺ら」

「あまりにも基本過ぎて盲点でしたね! 穿ったことばかり考えてたせいかな」

「やっぱすげえなミカ! 良く気が付いた助かったぜ!」

「うん……うん?」

歓声を上げるオルガたち。三日月はやっぱりよく分かっている顔で疑問符を浮かべていた。

「わざわざご連絡を頂けるとは感謝致します。鉄華団の皆さん」

イサリビのブリッジ。通信向こうから聞こえる弾んだ声に、オルガたちは少し戸惑う。

商売相手に対する愛想……と言うにはどうにも、浮かれすぎている感があった。やはり何かおかしい。少年達の嗅覚は的確に危機の匂いを嗅ぎ付けていた。

それをおくびにすら出さず、オルガは上機嫌のナボナと相對する。

「この度は我々の願いを聞き入れて下さり……」

「おっと、ご丁寧な挨拶痛み入りますが、少々込み入った事情がありましたので連絡を入れた次第です。早速仕事の話に移りたいのですけれど」

「おお、これは失礼。それでどのようなご用件でしょうか」

「はい、実は今回請け負った荷物なのですが……運搬の途中にアクシデントがありまして、大変失礼ですが中を改めさせて頂きました。依頼書には資材とありましたが、確認したところ依頼書とは別の品物が納められておりましたので、手違いがあったものかと思ひまして連絡させてもらつたという状況なのですが」

「え!? 資材!?」

素っ頓狂な声を上げるナボナ。続いて彼は泡を食つたような様子で問うてくる。

「武器の類ではないのですか!? クーデリア・藍那・バーンスタインさんが我々に協力するため、「ノブリス・ゴルドン」さんを通じて供給してくれるという話で!」

「はア!?!」

ナボナの台詞に、オルガは思わず素で声を上げた。

「ちよつと待ってくれ! 俺たちやそんな話は聞いちゃいねえ! 今回の仕事は地球に向かうついでで、荷物はお嬢さんの指示どころか全くのノータッチだ! ましてや武器を供給とかなんでそんな話になつてる!?!」

「そんな! ノブリスさんはGHの奸計を叩き潰し退けた英雄であるあなたが、希望を運んでくると……」

「おい、英雄だつてよ。なんか凄いいことになつてんじゃん」

「凄いつてかどんどん話がヤバイ方向に流れていつてるような気がするぞ?」

シノとユージンがひそひそと言葉を交わす間にも、雲行きは徐々に怪しくなっていく。

「大体なんであんたらが武器を必要とするんだ。聞いた話じゃ、ドルトじゃ武器を扱つたどころか見たこともないような人間ばかりだつてのに」

「そこから!? 本当に何も聞いてらっしやらない!？」

「聞いてたらこんな話にやなつてねえでしょうが。で、一体何がどうなつてんです?」

「わ、我々ドルトの労働者は酷い労働環境の元苦しい生活を強いられている。それを是正するために前から雇い主であるドルトカンパニーと交渉してきたが、これと言った成果はなかったんだ。それで本格的なデモ活動を行うつもりで、武器を持って訴えれば我々の本気が伝わるかと……」

「ちよつと待つて下さい! おじさん、僕です! アルフォートの息子のビスケットです! 覚えてらっしやいますか!？」

会話に割つて入るビスケット。それはナボナにさらなる混乱を与える。

「ビスケット!? あのビスケットかい!? なんで鉄華団!? え? ええ!？」

「火星に行つてから色々あつて、今は鉄華団で仕事をしてるんです。それよりもカンパニーに対してデモとか言つてましたけど、兄は? 兄はどうしているんです? カンパニーの工場責任者の養子になつたはずですけど、そこから交渉に繋がれば武装デモなんてしなくても!」

ビスケット達の兄、「サヴァラン・カヌーレ」は両親が亡くなった後、ドルトの経営側の家庭に引き取られた。労働者側でも学業成績などが優秀であればこのように有力者の養子となつて、身を立てるということも希にあつた。カンパニーでそれなりの地位になつていれば力になつてくれるやもと思つての発言であつたが。

「その、サヴァランはカンパニーで役員になつて、我々との交渉の窓口になつていてくれたんだが、それでも芳しくなくて最近はまともに連絡も取れていない状態なんだ……」

「そんな……」

すでももう手は打たれ、それが不発に終わったことに愕然とするビスケット。混乱した状況の中、黙つて話を聞いていたランデイが口を開く。

「どうにも行き違いじゃすまない話になってきたな。大将、一端双方落ち着いた方が良くないか？」

「あ、ああ。このままだとこんがらがったままで話が進まねえ。……ナボナさん、お互い一度ちゃんと情報を纏めてから、改めて話をしたい。それでいいか？」

「確かに、何がどうなっているのやら。すまないがこちらからもお願いしたい。また後ほど……」

「っと、少し待ってくれ。……ナボナさんだったな。俺は鉄華団で世話になってるランディール・マークアスつてもんだが、一つそちらで確かめて欲しいことがある」

「ランディールさん、ですか。一体何を……？」

訝しげな声で問うてくるナボナに、ランディールはこう返した。

「今、ドルトコロニー近辺で『アリアンロード艦隊が、演習または定期パトロールの名目で展開していないか、あるいはその予定はないか』。それを調べておいて欲しい。噂話程度で構わん。どうだ？」

「それぐらいなら……分かりました、調べておきます」

「ありがとう。大将、俺からはこんなもんだ」

「そうか。じゃあナボナさん、また改めてこちらから連絡する」

「ああ。……その、すまない。何か巻き込んでしまったようで……」

「いや、そちらも何やら大変そうなのは分かるさ。……早まった真似だけは、慎んでくれよ？」

通信を終えたオルガは艦長席に体重を預け、天を仰ぎつつ額に手を当てた。なにかどつと疲れた。この数十分で一気に何歳か老け込んでしまったような気がする。愚痴の一つも口からこぼれよう。

「ったく、なんだってんだ一体……」

「それなんだがな大将」

声をかけてきたランディールに視線を向けて、オルガはまた眉間に皺を作る羽目になった。

彼の視線が、これまでになく鋭いものだったからだ。

「俺の予想が正しければ、くそつたれな事になってやがんどこれ」

「はい？ ……はいっ!？」

あ、こりや全力でシロだ。事情を説明されたクーデリアの反応を見て、皆がそう思った。まあ聞くまでもなく、最初から関わっていないと確信はしていたのだが。

一応の確認を取るため、クーデリアとフミタンを呼び出し事情を説明したらばこれである。そうだろうなあ自分が同じ立場だとしたらこういう反応をする。っていうか似たような反応をした。そう思いながらオルガは話を続ける。

「もう確認するまでもないんだろうが、お嬢さんに心当たりはないよな？」

「全くありません。それどころかドルトがそんなことになっていたなんて……」

悔しいような悲しいような、複雑な表情になって俯くクーデリア。うすうす彼女も察しているのだろう。武装デモのダシに、自分の名前が使われたのだと。

「ノブリス氏からは七月会議以前から後援して頂いていましたが、このような形で私の名前を使うために行っていたと言うのでしょうか……」

「それもあるんじゃないかな。つつてもまだ推論と勘の域を出ないが」

ランディの言葉にはっと視線を向けるクーデリア。彼女だけでなく全員から視線を向けられたランディは、頭を掻きながら説明を始めた。

「ドルトの件な、ありや多分『アリアンロッドの仕込み』だ。武装デモをテロか内乱だつてでつちあげ、鎮圧して点数と経験を稼ぐ。つてところじゃねえか？」

『なっ!?!』

ほぼ全員が驚愕の表情を見せる。当然だろう、仮にも法と秩序の守護者を謳うものたちがそんな真似をやらかすなど。

クーデリアの命を火星支部長が狙う、というのはまだ何とか理解できた。独立運動を活性化させた人物などを放っておけば自身の統治能力を疑われ、ひいてはそこから数々の不正が明らかになってしまいかも知れないと思っただろう、と。が、それ以降の行動は理解しがたいもので、その上でさらにこれだ。高圧的でいけ好かないお偉いさん、と元々良いイメージではなかったが、さらにそのイメージすらがら崩れそうな悪辣さだった。

「本当なのか、そりゃ」

「ドルトの周辺で艦隊が展開してりや確実だ。連中前々から似たような手口でマッチポンプやってやがる。退職前に『総司令に直接聞いた』」

『はあア!?!』

さらなる衝撃が、オルガ達を襲った。

「いやあんた、なんでまたそんなことを……」

「それ系統の下準備的な『裏の仕事（ウエットワーク）』にスカウトされたんだよ。出自も出自だし、向いてると思われたんじゃないかね？ 速攻で蹴って小馬鹿にしまくったが」

最後のあたりでなんか気になる台詞があつたような気がするがそれは置いておいて。

「その、言っちゃなんだが実際向いていたんじゃないか？ どうして蹴るような真似を？」

おずおずと尋ねるオルガに対し、ランデイははんと鼻で笑って見せる。

「俺ア確かにどクズだが、クズにはクズなりの矜持と仁義ってモンがあらア。自分と同レベル以下のクズをハメるんならともかく、堅気をハメて罪なすりつけた後皆殺しってな糞にも劣る真似なんざおもしろくもねえいや違った、そこまで腐り墜ちるつもりはねえよ」

あまりにも堂々としすぎていてある意味潔いように聞こえるが、よく考えてみたら最低の台詞だ。

よし、深くツツコミを入れるまい。そんな感じでそろそろスルー能力が鍛えられてきた鉄華団の面々であった。

「話を戻そう。ドルトのデモでリアンロットが仕込みをしてるってのは分かった。だがそれとお嬢さんがどう繋がる？」

「確かお嬢さんは火星での労働環境の改善も訴えてたな？ それを聞いてたドルトの労働者がこの話に飛びつきやすかった。つてのはあるだろう。そしてノブリス・ゴルトンから話が回されてきた……こいつはちよつと考えりや分かるだろう？」

「っ！ ノブリスが裏切ってるつてのわか!？」

「そう考えりや辻褄が合う。お嬢さんの行動がある程度読めて、タイミング良く荷物を仕込める伝手と権力を持つ人間。他に当て嵌まらんだろう」

確かに、後援者であればクーデリアの行動を随時調べていてもおかしくはないし、怪しまれない。空気が重苦しくなっていく中、ランデイは言葉が続けた。

「こいつは完全に推論だが……基本ノブリスはお嬢さんが生きていても死んでしまっても『どちらでも良い』んじゃねえか？ 生きてりや旗印として使えるし、死んだらそこから生じる混乱も利用できる、つてな」

「そんな！ クーデリアさんが死んだら火星の独立運動は！」

叫ぶようなビスケットの指摘に、ランデイは皮肉げな視線を向ける。

「活性化するだろうさ、『悪い方向で』。例えば革命の乙女がテロの凶弾に倒れた、なんてことになってみる。取り敢えず一つに纏まってた独立運動の各勢力が怒りに駆られたり疑心暗鬼になったりでばらばら。下手すりゃ火薬庫で花火大会だ。武器商人としちや商売繁盛で笑いが止まらなくなるだろうよ」

ノブリスは様々な事業に手を出しているが、基本的には武器の売買で成り上がってきた男だ。言われてみればそう言った状況でもっとも利を得る人間である。

「さらにちよいとギヤラホと繋がってりや、状況を読みやすくもコン

トロールしやすくもなる。今回みてえにな。……まあもつとも、アリアンロッドが展開してるつてのが大前提の推論と勘だ。場合によっちゃ大外れって線も——」

「いえ、それで大体合っています」

消して大きくはない、しかし鋭い声が、ランデイの台詞を遮った。それを発したのは。

「フミタン……？」

呆然と見上げるクーデリアの視線を受けながら、傍らに控えていたフミタンが一步前に入る。その態度は普段と変わらないように見えたが、いつものように前で組まれている手が、血がにじみ出そうなほどに強く握りしめられていた。

「……皆さんに、お話しせねばならないことがあります」

そう前置きし彼女は語り出す。

自分は元々、クーデリアの父でありクリュセ代表首相の「ノーマン・バーンスタイン」の動向を探るために、ノブリスから送り込まれた間諜であったこと。クーデリアが成長し、頭角を現してから彼女の監視に目的が変更されたこと。さらに今まで皆の目をかいくぐり、密かに情報をリークしていたこと。

そして……ランデイの推測通り火星の独立運動を暴走させるため、ドルトにてクーデリアの『悲劇的な死』がお膳立てされていること。その全てを、淡々と吐き出した。

「そんな……嘘でしょう、フミタン」

蒼白になったクーデリアが、信じられないと言った様子で声を発するが、フミタンは頭を振る。

「いえ、私はそういう人間なのです。こうやって告白したのは『命乞い』。このままでは計画は潰え、その影響で遅かれ早かれ私の行動は露見する事になるでしょう。そうなればノブリス氏から制裁の手が伸びるのは必須。その前に全てを打ち明け、庇護を請う。そういった打算からのものですので」

彼女はそう囁く。言葉もなく黙って話を聞いていたオルガであったが、何か言おうとする皆の機先を制して口を開いた。

「そう言う割りにはあんた、『辛そうに見える』がな」
「っ！」

今度こそはつきりと、フミタンはびくりと反応した。彼女は自身の仮面に罅が入っていると、自覚せざるを得ない。

その様子を見て、オルガは溜息を吐きつつ頭を掻いた。

「まあ……裏もあるだろうがあんたにや実際色々世話になったし、うちのチビどもも懐いてる。差し引きゼロって言ったところだろう、鉄華団（俺たち）にとつては」

オルガはこれまで色々な人間を見てきた。出自はストリートチルドレン。物心ついたときから糞溜めのような場所で悪意と欲望に晒されつつ生きてきた。CGSに入ってからもうそうだ。マルバを筆頭にはほとんどの大人が自分たちを消耗品扱いし、悪意の元に害をぶつける。彼にとつて多くの大人が害悪でしかなかった。

しかし、雪之丞のように気を使ってくれる人間が僅かながらもいた。デクスターのように何も出来ないまでも、仲間の死に心を痛めてくれるものもいた。まあその、ランディみたいなのは例外としても、大人の中にもまともな人間がいると理解できるようにはなっている、と思っっている。

だからと言うわけでもないが人を見る目はそれなりに厳しく、かつ肥えているという自負があった。そんな彼の目から見て、フミタンは『良心の呵責に耐えかねてこのようなことを自白する』程度には善人だろうという見積もりがある。その全てが演技であるという可能性もあったが、疑い出せばきりが無い。第一自分なんかよりよほど人の闇を見てきて底意地の悪いランディが何も言わないのだ。妙な嘘はないと確信に近い判断を下している。

その上で、彼は視線を鋭くして言った。

「けどな、『お嬢さんがどう思うかは別問題だ』。俺らにとつて、そしてあんたにとつても雇い主であるクーデリア・藍那・バーンスタインがどう判断するか。全てはそこだろう？」

多くの視線がクーデリアに向く。彼女はそれにたじろぎ、俯き、思考した。

世間知らずで無力な小娘。彼女は最初そういうものでしかなかった。様々なものを見て、少しずつ知り、壁にぶち当たったり失敗したりしながら歩んできて、まだ未熟者ながらも出来ることをしていこうという意志を育ててきた。

そしてここに来て大きく彼女の運命は揺るがされている。父の裏切りによるGHの襲撃に始まり、テイワズとの契約、海賊の襲撃。そしてノブリスの策略とフミタンの裏切り。才女とは言え16歳の少女にはいささか重すぎる運命であろう。

だが『自分はまだまだまし』だ。鉄華団のような少年兵や、それにもなれないストリートチルドレン。それどころか大人でも飢え喘ぎながら生きて行かねばならない世界。そういったものに比べれば、よほど恵まれている。オルガや三日月、鉄華団の面々に触れ、現実を目の当たりにした彼女は、僅かながらも『強かさ』を内包するようになってきた。このくらいで折れない、芯のようなものが出来つつある。

そんなクーデリアは考える。フミタンに対してどうするべきか。

確かに彼女の告白はショックであった。しかし、彼女のこれまでが全て嘘だったとは思えない。いや、『思いたくない』。これは自分の臆目だという自覚はあるが、それでも自分に対する気遣いや、鉄華団の少年達に対する柔らかな態度には、確かに慈愛のようなものが込められていた。それを信じたい。

だから彼女はこう言葉を吐く。

「私は……フミタンを許したいと、そう思います」

「お嬢様！」

クーデリアの言葉に、フミタンは悲鳴のような声を上げた。

「なりません。そのお気持ちは嬉しく思いますが、私のやったことは許されてはいけないこと。示しがつきません。それに」

いつもの冷静さがなりを潜め、早口でまくし立てるフミタン。そうしてから彼女は力無く肩を落とす。

「……許されてしまったのは、私がこれまででしたことの報いはどこからくるのですか」

その姿は、行き先を見失った幼子のようにであった。

クーデリアはふ、と微かな呼気を漏らす。笑みを浮かべそうになったのを堪えたのだ。やはり間違っていない。この人は、フミタンは信じるに価する人だと改めて思う。

ならばやることは一つ。クーデリアは突如立ち上がると――いきなり真正面からそつとフミタンを抱きしめた。

「おじよう……さま？」

目を見開き、硬直するフミタン。その彼女の背中を小さい子供をあやすようにぽんぽんと優しく叩いて言うクーデリア。

「許されるのが辛く、苦しいというのであれば、きつとそれがあなたへの罰なのです。フミタン」

その言葉が、染みていく。クーデリアの肩に顔を埋めるように伏せたフミタンの声は、震えていた。

「私は……わたしは……」

「いいのです。いいのですよ」

やがて微かな嗚咽が漏れ出す。オルガたちはなんとなく居心地の悪さを覚えて目を逸らすしかなかった。

「……ひとまず、休憩しとこか」

さすがのランデイも空気を読んだのか、そんな提案をする。

誰もそれに反対しなかった。

洗面所で顔を洗い、手早くメイクをやり直す。そうしながらフミタンは顔から火が出るような羞恥心を覚えていた。

なんとも格好悪い有り様だった。まるで自分がだだをこねていた子供のようにも思える。謀殺された方がまだしもましな居心地の悪さであった。確かにこれは罰になる。消え入りたくなるのを堪えて彼女は眼鏡をかけ直した。

すう、と深呼吸。収まりの悪い心を胸の奥に押し込め、彼女は再び

ブリッジへ向かおうと洗面所を出た。すると。

「……あなたは」

通路の壁に寄りかかって腕組みしている一人の少年。その少年——ユージンは、フミタンに向き直ることなく口を開いた。

「一応言っておく。オルガたちはあんたを信じるようだが……俺はあんたを信用しない」

その言葉に対してフミタンが何か言うより先に、ユージンは言葉を続けた。

「もし、あんたが何かやらかすようであつたら、俺が背中から撃つ」

果たしてフミタンは——

微かに微笑んで見せた。

「その時は、よろしくお願いします」

頭を下げる。彼女は安堵したのだ。このように自分に釘を刺してくれる人間もいる。ならばきつと、彼らはしつかりクーデリアを護つてくれるだろうと。

面食らつたのか「お、おう」と応えるユージンに微笑ましさすら感じつつ、彼女は会釈をしてからブリッジに向かった。

残されたユージンは壁により掛かったまま慥然とした表情を浮かべている。そうして彼は、口を開いた。

「なんか文句あつか？」

「いんやちつとも」

応えながら物陰から現れるのはランディ。彼は何が楽しいのか、にたにた笑いながら続けて言う。

「むしろ安心したぜ、お前さんみたいな事を考えるヤツがいたんだつてな」

「オルガを筆頭に、どいつもこいつもお人好しばかりだからな。誰か一人でもこういうのやる人間が要るだろうが」

照れているのかそっぽを向きながら言うユージン。進んで嫌われ役を買って出るお前も十分お人好しだという事実は指摘しないでおく。その方が面白そうだから。代わりにランディはにたにた笑いを深めた。

「……お前さん、いい男になるぜ」

「な!?! ちよ、気味が悪いいな」

「褒めたんだよ素直に受けとつとけ」

にやにや笑うランディといちくらられるユージンは、じやれあいつつ揃ってブリッジに向かった。

「そん、な……」

ランディの推論とフミタンの証言から纏められた情報を伝えたならば、通信機向こうで絶句する気配。さもありませんとオルガは同情のようなものを覚えた。

再びドルトとの通信。今回はナボナ一人が相手ではなかった。

「馬鹿な、そんなはずは……証拠は、証拠はあるんですか!?!」

ビスケットの兄、サヴァランである。ナボナから連絡を受け事情を聞いた彼は、仕事を半ば強引に休んでドルト2に赴きこの相談に加わっていた。

彼の言葉にランディが応える。

「まあ武器を押しつけられてるって時点で武装デモを誘導してるってのは分かると思うが、それ以外に証拠って言えば……そうだ」

証拠と言えるか怪しいがと前置きして、ランディは問う。

「過去にドルトでテロか暴動が起こったとき、『何でか都合良くアリアンロッド艦隊が介入して短時間で事件が終結した』、って事があったんじゃないか?」

その問いに僅かな時間考え込む気配がして。

「……あ!?!」

「あの時!?! じゃあ親父とお袋は……」

ナボナとサヴァランがほぼ同時に声を上げる。それをビスケットは聞き取った。

「兄さん？ 父さんと母さんがなにか……？」

「いや、それは……」

不安げな言葉に言いよどむサヴァランであったが、意を決したのか言葉を紡ぐ。

「お前達には事故だって教えておいたが、親父とお袋はテロに巻き込まれたんだ……」

「当時親父さん、アルフォートが労働組合長だった。会社との交渉も上手くこなして、もう少しでというところで……」

「そんな！ じゃあ！」

驚愕しながらランディに向き直る。彼は難しい表情をしてこう応えた。

「100%そうだとは言えん。が、可能性は高エな」

がくりと肩を落とすビスケット。改めて知らされた事実は、彼に大きな衝撃を与えたようだ。

重苦しい空気が、ブリッジに満ちる。多分向こうもそうなのだろう。オルガは一息吐いてから、口を開いた。

「……それで、あんたらはどうする？ 力になれるとまでは言わないが、相談には乗れるぜ？」

その言葉に対するナボナとサヴァランの返事は――

「さて、楽しい楽しい悪巧みの時間だ」

悪魔が、嗤う。

※今回のえぬじい

「……………」

→一から十までさっぱり話が分からないので黙ってる昭弘君。(筋肉)

9・細工は隆々、仕上げをごろうじろってな

ドルトコロニーに到着するまでまだ幾ばくかの時間が必要であった。その間、オルガはナボナやサヴァランと連絡を取り合ってたなやら画策をしており、さらに彼の命を受けた整備班がなにやら細工している。

そんな中、ハンマーヘッドの方では。

「おっし、5分越えた！」

「へへ、調子上がってきたじゃねえか！」

最近はおつぱらシミュレーターと化している百鍊2機のコクピットが開き、汗まみれの昭弘とシノが姿を現す。二人はブルワースの件が片づいて以降、多くの時間を鍛錬に裂いていた。元々鍛錬馬鹿である昭弘はともかく、ちやらんぽらんに見えるシノまでが懸命に鍛錬に打ち込んでいるのは、正規パイロットに昇格したから……だけではないようだ。彼はブルワース戦のおり、突入部隊を率いて旗艦に乗り込んだが、その際内部で相手のヒューマンデブリたちと壮絶な銃撃戦を行ったようで、なにやら思うところがあつたらしい。表面上の態度は変わらないにしても、所々何か、今までにない真剣みのようなものを感じさせるようになっていた。

成果は着実に現れており、今では2人ともランディ謹製シミュレーションプログラムを平均して4分以上は持ちこたえられるようになってる。（なお三日月は10分以上持たせられる模様）

「地球までにやあ10分いっときてえなあ」

「ああ」

休憩しチューブドリンクを煽る二人。軽口を叩くシノに昭弘は言葉少なに返して、虚空を見上げた。

「あいつらにや、格好悪い所を見せられねえからな」

昭弘が思いを馳せるのは、弟の昌弘を含むヒューマンデブリの少年達。彼らは今、鉄華団とタービンスで手分けして世話をしている。ま

ずは何が出来るのか、何をしたいのか。そこから手探りで勉強させたり教え込んだり色々ときかせていた。

鉄華団は年少組の子供達に様々なことを教えた経験があるが、それは主に戦闘や兵器の扱いに関することである。だからどうしても偏りが生じてしまう。対してタービンスは受け入れた人間（女性に限るが）に様々な仕事のやり方を教え込んだ実績があった。元々世話好きな人間が多いこともあって、彼女らの手を借りてしまうのはやむを得ないことと言える。

ありがたいことであると、オルガ以下鉄華団の主要な面々は感謝すること然りだ。同時にいつまでも頼ってばかりもいられない。この仕事がち落ち着けば自分たちにも出来ることを増やしていけるようにしなければ。そういう考えを持ち始めてもいた。

昭弘はさほど複雑なことを考えているわけではない。あいつらを、鉄華団を護ると誓ったのだ。であれば最大限に努力するのみ。大言壮語になつてはそれこそ格好悪いと奮起しているのである。シンプルであるが、だからこそ余計彼の意志は強く、堅かった。

「それにここまでして貰った。気合いを入れなきゃ面目が立たねえ」「へへ、確かに気合いが入るってもんだ」

彼らが視線を向けるのは格納庫の奥。そこでは2機のMSが急ピッチで仕上げられていく真つ最中だ。

新たな乗機。その姿に感慨深い何かを感じつつ、昭弘は大きく頷いた。

「……おし！　じゃあもう一本行くぞー！」

「張り切ってんねえ。……んじや、付き合おうとしますか」

ドリンクのパッケージをくしゃりと潰してダストシートに放り込み、2人は再びコクピットへと潜り込む。

その様子をキャットウォークから眺めていたラフタは、ふうんと呼気を漏らした。

「まったく、よくやるわね。……コクピットが汗くさくなっちゃうじゃない」

ぶつくさと文句を口に出す。しかしその目は、不満とは何か違った

色を宿している。

彼女の隣で手すりを背に寄りかかっていたアジーがからかうような調子で言った。

「気になるかい？」

「うーん、気になるって言うか……」

ラフタはべたりと手すりに顎を乗せる。

「あいつ頑張ってるよね」

最初に交戦した時点では、根性こそあるものの秀でた技量を持つわけではなかった。しかしランディやアミダにしごかれ、めきめきと腕を上げつつある。それは全て鉄華団と兄弟——『家族』を護るという強い意志からのものだ。

そんな昭弘に、ラフタは共感じみたものを覚え始めていた。なぜなら彼女もまたタービンスという家族を護るため、戦うことを選んだ人間であるから。その上で、彼女の耳に残った言葉がある。

「死なねえ」という昭弘の言葉。命を投げ出して護るのではなく、生きて救い、護るという言葉。それに衝撃を受けたのだった。

ラフタは楽天的に見えてどこか、『家族を護るためなら死んでも良い』と考えている部分があった。自分の命を、心を救ってくれた名瀬に、アミダに、報いるためであれば迷わず命を投げ出すであろう。昭弘がそうしないと言うわけではない。ただ彼は最後まで生きて戦うのを諦めそうにないと、そんな気がした。

「うん、頑張ってる」

言いながら、なんかもやりとするなあと頭の隅で思うラフタ。

彼女がその気持ちに気付くのは、かなり後のことになる。

ボードウィン家が所有するハーブビーク級戦艦【スレイプニル】は、現在アリアンロッド第7艦隊に合流し、ドルトコロニー群に向かって

いた。

その艦橋で、アインを従えたガエリオは、不満げに鼻を鳴らす。

「統制局らしいやり方だ」

第7艦隊が現在従事している任務。その内容聞いた彼は不快感を隠そうともしない。

平たく言えばマッチポンプ。もつとも統制局から言わせてみれば、本格的なテロ行為に及ぶ前に不穏分子を纏めて処分し、未然に防いで平穏を保つということであろう。

気に入らないやり口だ。ガエリオはそう思う。元々正義感の強い彼は、現状におけるGHの内部腐敗に前々から反感を抱いていた。いずれその内に改革をと、僅かずつながら準備を進めている最中ではある。

しかしながらガエリオはGHのやり口に反感を覚えていても、その行動による犠牲や被害などにはあまり目を向けていない。それにヒューマンデブリや少年兵達に対し、阿頼耶識を付けているからという理由で偏見の眼差しを向けていた。彼らがなぜそのようなものを付ける羽目になったのか、知識はあっても想像も共感もしていない。つまるところ自分の目線でしか物事を見ていないのだ。

思慮が足らず青臭い。ランディから未だに坊や扱いされているのはそのあたりが理由なのだが、彼には未だ自覚がなかった。

「情報によれば奴らの船はドルトに寄港するようだ。ここで奴らを仕留め、クーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を確保する。いいな」
「ですがかの人物の妨害が……」

戸惑いながら問うアイン。それに対して正面のモニターを睨み付けたまま、ガエリオは答える。

「あの男はアリアンロッドに任せる。放出した責任は取ってもらわないとな」

「よろしいので?」

「それくらい非情にならねば、あの男は出し抜けない。肝に銘じておけ」

「はっ!」

力のこもった返事を返すアインの反応に、満足げに頷くガエリオ。しかしまあ当然の事ながら、彼らの思惑は根底からひっくり返される。

ドルト2に入港してきた強襲装甲艦。それから運び出されたコンテナを確認して、GH警務局の武装隊員2人は頷き合う。

任務の概要を聞かされたときには半信半疑であったが、ここまで想定通りであれば疑うべくもない。情報通り、武装テロに使われる武器の受け渡しが行われているようだ。

彼らは知らない。この任務そのものが虚偽であり、自分たちが捨て駒にすぎないのだという事実を。

「動くな！ GH警務局だ、そのまま両手を上げて大人しくしろ！」
抵抗はあるだろうが、ここで僅かでも足止めして増援が来る時間を稼ぐ。義務感と功を求める内心に従って、2人は物陰を飛び出し銃を向けた。すると意外なことに、荷物の受け渡しをしていたものたちは驚いた顔をしたものの素直に両手を上げた。

「な、なんですかいきなり!? 我々は何もやましいことなどしていませんが!？」

受け取り側の代表らしい男が抗議の声を上げるが、2人はそれに取リ合わず威嚇しながら一方的に言う。

「ここでテロに使われる武器の取引があるという通報があった。荷を改めさせて貰うぞ！」

「は、はあ?」

船側の責任者らしい女性——その他は年若いものばかりだった——が眉を顰めて疑問の声を上げる。かまわずコンテナの前に立ち、適当な人間に「開けろ」と高圧的な態度で命じる。

前髪で片目が隠れた少年がそれに応え、コンテナのロックを外し

た。ゆっくりと開かれていくコンテナ。それを覗き込んでみれば。

「……………え？」

武装隊員達は目を丸くする。そこには武器が満載……………されてなどおらず、整然と並んだ無骨な鋼材が鈍く光っていた。

どう考えても武器ではない。まあ持ち上げてぶん殴れば立派な鈍器であろうが、バルバトスじゃあるまいし人間が素手でそんなこと出来るはずもなかった。隙間に混在させているもかとも考えたが、部材の合間は以外と広く、結構奥まで見通すことが出来る。まるつきりスペースがないとは言わないが、さほど多くの武器を隠せるとは思えない。どういう事だと2人は再び顔を見合わせた。

「どこからの通報なのかは知りませんが、我々の運んできたのはただの資材です。全部のコンテナを開けて調べて頂いてもかまいませんよ？ それに注文書の方もこの通り、不備はないと思いますが」

どことなく無然とした様子で、責任者の女性がタブレットを差し出す。そこに示されていた注文書には確かに資材だと記されていたが、隊員達は納得しない。

「ば、ばかな！ い、いやまだ船の中に積んであるのだろう！ 調べさせて貰う！」

その言葉に対し、女性はついに呆れたと言うような態度で反論する。

「そりゃ積んでありますよ。今回は輸送の仕事をしていますけれど、鉄華団（うち）は基本民兵組織です。武器があるのは当たり前じゃないですか。……………まさかと思えますけれど、それを理由に難癖を付けようとかいう話じゃないでしょうね？」

「そ、そんなわけはないだろう！ 失礼な！」

「では令状を拝見させて下さい。正式なものがあれば捜査に協力するのもやぶさかではありません」

「え!? れ、令状!？」

だんだんと疑念の視線になってくる女性の言葉に、武装隊員2人は慌てる。緊急の強制捜査（と言う名の生け贄）ということで、捜査令状の発効は後回しにされていた。このあたりのいい加減さもGHの

形骸化による手抜きを示していたが、大方に置いて令状の提示を求められる事も滅多にない。ほとんどの相手がGHの威光に尻込みするからだ。

故に面食らう。そんな隊員達を見る女性の目はますます冷ややかなものになっていく。

「もしかして令状を持ってきていない、と言うのですか？ それでは捜査に協力どころかお話にもなりません。一体全体どういう事なのか、管轄支部に問い合わせさせて貰います」

「い、いや待ってください！ これは何かの間違いで……」

「間違いでしたらさっさと連絡して確認を取るなり令状を発効してもらいに行くなりして下さい！ こちらも暇じゃないんです！」

とうとう隊員たちを怒鳴りつける女性。その剣幕に混乱している2人は腰が引けてしまう。彼らもそれなりの経験は積んでいるが、真っ向からこのように反論されたことはない。聞いていた話とまるつきり状況が違っていることもあって、強い不安と心細さを感じているようだった。

と、彼らの通信機から呼び出し音が響く。

「あ、う、ちよ、ちよっと待ってください。……はい、こちら……」

少し場を離れ、ここそそと連絡を受ける隊員2人。それを油断なく見据えながら少年——ヤマギは傍らに立った女性——メリビットに小声で話しかけた。

「なかなかの名演技ですね」

その言葉に、メリビットは溜息を吐きながら言う。

「半分は本気よ。なんて杜撰なのかしら」

まあだからこそ、『付け入る隙』があったわけだが。

「彼の言ったとおりね。『撃つ気がない銃』なんて、お飾りにしかならないもの」

隊員達の持つアサルトライフル。それはしっかりとセーフティがかけられたままだということ、メリビットは確認していた。

「まあまず間違いなく『先に撃たない人間』をよこすだろうな」

ランデイの言葉である。自分たちから手を出すことによつて後の

検証等で立場が不利になるのを防ぐためだ。あわよくば相手が撃つてくれたらそれを理由に堂々と力業で押しつぶすことも出来る。彼はそう断言していたし、どうにもそのように事を運ぼうとしているようだ。でなければたった二人だけ、しかも素人に毛が生えたような隙だらけの人間をよこしたりはしないだろう。

一応鉄華団側でも、万が一を考えて船の影に狙撃手を潜ませてはい。しかしこの様子では出番はなさそうだ。上手く事が運んでいるのであれば『そろそろ』のはずであるし。

果たして。

「はあ!? 『デモが始まっている』!? どうなっているのかって、それは我々が聞きたいです!」

隊員が上げた素つ頓狂な声に、メリビットとヤマギはこっそり、にまっとした笑いを浮かべた。

「まあMSの壊れたパーツとか、材料はいくらでもあるからな。『資材でつちあげてコンテナの中身をすり替える』なんざさくつと出来るわな」

ドルト3にあるドルトカンパニー本社社屋前で警備に当たっていたGH警務局陸戦隊員達は緊迫の中にあつた。ドルト2の労働者達によるデモ。それが始まったという連絡が入ったからだ。

事前の情報によれば、労働者達はクーデリア何某とかいう人物から武器の供給を受け、武装してデモに挑んでいるとのことだ。場合に

よつては戦闘になつてしまふかも知れない。その緊張と恐怖が、彼らの表情を堅いものにしていた。

幸い、と言つて良いのかどうか、彼ら陸戦隊は上層部から自分たちが『消耗品』扱いされていることを知らない。コロニーや下級市民の出自である彼らは『出世を餌に幾らでも補充できる駒』としか見られていなかった。今回の任務に置いて何割か『消耗』することが織り込み済みであつたのだ。

だつたのだが。

——1時間後。

「……来ない」

ひゆう、と人気のない正面道路に冷たい風が吹き抜ける中、隊員の誰かが零した言葉が虚しく響いた。

緊張の中待てど暮らせどデモの労働者達は現れない。情報はガセであつたのか。いやいや確かに労働者達はドルト3の港に現れて、こぞつて内部に繰り出したはず。であればなぜ彼らは現れないのか。命の危険とはまた別種の、奇妙な不安感が隊員達の中に蔓延しだした頃、焦れた隊長格が出した斥候が戻つてきた。

「おお、どうなつている?」

車から降りた斥候の隊員二人は隊長格に問われて、戸惑つた様子で状況を告げる。

「それがその、デモは行われてはいるんですが……奴らドルト3の繁華街を練り歩きながら、労働環境の改善を訴えているだけでこちらに来る様子は欠片も……」

『はあ?』

隊長格だけでなく、聞いていた隊員全員が素つ頓狂な声を張り上げた。

「あ、だ、だがしかし、武器は?! 最低でもMWがあるはず……」

「い、いえ、普通のトラックくらいで、武器など影も形も……」

何とも言えない空気が、場に蔓延する。誰かがぼつりと言葉を放つた。

「それつて、ごく普通のデモじゃあ……」

ひゆう、と再び冷たい風が人気のない道路を吹き抜ける。

今回陸戦隊員達に課せられた任務は、基本カンパニー本社社屋を含む重要施設の警備である。武器を持って迫り来るのであればともかく、ただ普通にデモを行っているだけの相手を捕縛するような命令は下されていないし、カンパニーからの要請もない。故に動くわけにも行かなかった。

もしかして、自分たちはいま超無駄骨を折っているのかも知れない。言いようのない空気が段々と場を重くしていく。

その様子を伺っているものたちがいた。

「……全然聞いていた話と違うんだけど」

本社正門前。その傍らに留まっている中継車の前で、報道機関「ドルトコロニーネットワーク」のディレクター「ソウ・カレ」とアナウンサーの「ニナ・ミヤモリ」は首を傾げている。

彼らは労働者達が武装デモを行うとの情報を聞きつけ、それを取材し中継するためにこの場を訪れた。だが推測された予定時間を大幅に過ぎてもデモ隊は一向に現れない。嚴重な警備を行っているGHの部隊も何やら様子がおかしいし、一体どうなっているのか。さっぱり事情が分からない状態だ。

と、そこにカメラマンの「ハジメ・ツジ」が慌てて駆け寄ってくる。「ディレクター見て下さい！ 今確認したんですけど、デモ隊は繁華街の方で普通にデモを行ってるみたいです！ ほら動画サイトで実況してますよ！」

「何!？」

慌ててハジメが持つタブレットを覗き込んでみれば、確かにデモの参加者らしき投稿者が動画を実況していた。繁華街の真ん中で練り歩きながら、主張を訴え続ける労働者達の姿が映し出されている。

それを見てソウは暫く考え、そして結論を出した。

「……行ってみるか。上手くいけば労働者達から直接話を聞けるかも知れない」

思い立ったが吉日とばかりに、彼らは即座に撤収しデモが行われているという繁華街へと向かう。マスコミらしいフットワークの軽さ

であった。

後に残されるのは人気のない通りと、ただひたすらに無駄な時間を過ごし続けるGH陸戦部隊。

冷たい風が、三度通りを吹き抜けた。

『武器も持たない重要施設にも赴かないデモ』なら、連中も手出しのしようはねえさ。ああ、まかり間違っても警備用のMSをパクって使おうとしたり重要施設に向かうなんて事はしねえ方がいいぞ？ 十中八九罨が用意されてっから」

「…………このようにデモ隊はドルト3の繁華街で労働環境の改善を主張し…………」

モニターの中、女性アウンサーが淡々と現状を告げていた。それを背中にサヴァランは重役達に詰め寄っている。

「ご覧の通り彼らは武器を捨て、本社にすら近寄らぬという妥協を見せました。それに対し我々は誠意を見せるべきではないでしょうか」
冷静に、しかし熱さを込めた言葉を放つサヴァラン。対して重役達は渋い顔だ。

「だがこれも経営の妨害には違いない。ドルト2の工場を1日止めただけで、どれほどの損害が出ると思うのかね」

「やもすれば暴動に発展するかも知れなかった状況で、工場が止まる程度のことがいかにほどのものでしょうか。それに…………お渡しした資料が事実であるならば、むしろ積極的に労働者との関係改善を図るべ

きだと思いませんが」

「それなのだが……確かなのかねこの資料、『何者かがドルトの生産効率を落とすため、労働者達を煽って暴動を誘発することを画策していた』という話は」

手にした資料を見ながら重役の一人が疑念の声を上げる。サヴァランは自信を持った態度で頷く。

「そう考えるのが一番辻褃が合う、ということ。今回の件については偶然にもクーデリア・藍那・バーンスタイン氏には直接コンタクトを取り確認することが出来ましたが、労働者に話を持ちかけたというノブリス・ゴルドン氏が本人であるかどうか確認できておりません。確かにゴルドン氏は火星の労働者の地位向上を謳うバーンスタイン氏に支援を行っていますが、それは利権の関係があつてのこと。しかし彼がドルトの武装デモに協力するメリットは無きに等しいものです。『誰かが名を騙り煽った』と考える方が自然でしょう」

とんでもないでっちあげであった。が、そんなものでも辻褃が合えば理屈として通る。確かに言われてみればと思わせるくらいのは出来るし、GHが自身の利益のために謀略を仕掛けたなどという『事実』よりはよほど信じられるものだろう。

サヴァラン・カヌーレ。労働者の出でありながら役員まで上り詰めたのは伊達ではない。

「これは8年前に起こった、テロから発展した暴動にも似た状況です。労働者との交渉が難航していた最中、テロにより交渉を行っていた両陣営の代表は死亡。そこから労働者達の統制が取れなくなつて暴動が起こり、結果ドルトの生産力は1年近く落ち込みました。……それで損をしたものは誰か、得をしたものは誰か。色々と推測できることはありませんが……」

胸中によぎる思いを押し込めて、彼は言葉を続ける。

「要因となつたのは、労働者達の不満が溜まつていふこと。これが解消できなければ元の木阿弥。同じ事の繰り返しになるでしょう。長期的に考えれば、ここで彼らとの関係改善を図ることはカンパニーの利益に繋がることではないでしょうか」

サヴァランの言葉に、重役達は額をよせて話し合う。やがてそれも
終わり――

「……いいだろう。ものは試しだ、彼らとの交渉を行おうではないか」
「――ありがとうございます！」

返された言葉に、サヴァランは全霊を込め頭を下げた。

まだこれは一歩目にしか過ぎない。だが手応えはあった。これを
切っ掛けに交渉を軌道に乗せ進めて行ければ。彼は希望が見えてき
たことに胸が熱くなるのを押さえられない。

同時に――

（お前らの思い通りにはさせるものかよ、ギャラルホルン）

胸の中に宿る憤りが、静かに燃え盛っていくのを感じていた。

「水面下の交渉で武装デモを押さええられた、ってことにしとけば『あんな
たの手柄』にできるんじゃないか？ そっからまあ、どう話をもって
いくかはあなたの手腕次第だろうが……上手くいきやあ、親の仇をと
るとまでは行かなくとも意趣返しくらいはできるかもよ？」

アリアンロッド第7艦隊所属のハーブビーク級戦艦「フェアラー
ト」。その艦橋では現在、苛立ったような空気が蔓延していた。

「ええい、一向に動きを見せんではないか！」

いらいらと肘掛けの先を指で叩きながら言うのは艦長。演習ついで
の哨戒という名目でドルト宙域を訪れた艦隊であるが、肝心のドル
トではなんのアクションもない。予定では『テロを画策した反抗分

子』が警備用のMSを奪い、大規模な破壊活動を行うのでそれを制圧する、という運びになるはずだったというのに。

待機したまま時間だけが無為に過ぎていく。と、そこに旗艦からの連絡が入った。

「か、艦長。ドルトに展開している陸戦隊より入電があつたそうです」
「なに？　状況は？」

「それが……現在テロや暴動の兆しは全く見られず、それどころかテロを行うと見られていたデモ隊が、カンパニーと和解し交渉にはいると……」

「なんだと!？」

驚愕の声を上げた艦長は思わず席から腰を上げる。カンパニーの本社や重要施設、そして警備用MSや戦闘艇には、事前に作業員による細工が施してあり、デモ隊が訪れれば連動して作用することになっていたはずだ。それが全く動いていないということは、彼らはそれらを全て避けていたということになる。

嫌な予感を強く覚えた艦長は、オペレーターに問いかけた。

「武装は？　デモ隊は武装しているという情報があつたはずだ！　ならばそれを理由に介入を……」

「いえ、デモ隊は全く武装していません。それにカンパニーとの交渉が始まった今、改めて鎮圧の要請が出るとも思えません」

「ど、どうなっているんだ一体……」

がくりと力無く席に腰を落とす。そのまま暫く脱力していた艦長であつたが、ふとあることに気付いて眉を寄せた。

『情報の漏洩』か

何者かがデモ隊に情報を流し、行動を変更させた可能性。それに思いついたのだ。であれば早速具申を……と思つたところで再び連絡が入る。

「艦隊司令より任務変更の通達です！　ドルトに武器を密輸しようとした容疑者であるクーデリア・藍那・バースタインの身柄を確保せよとの事！　なお容疑者は現在ドルト2から出航しようとしている

民兵組織の強襲装甲艦に搭乗している模様！ 停船を呼びかけ、抵抗するようであれば撃沈しても構わないと」

「……なるほど、そう言うことになったか」

恐らくは司令も同じような結論に至ったのであろう。しかし子供のお使いではないのだ、大山鳴動して鼠一匹すら出ないなどと言う結果に終わらせるわけにはいかない。であれば目標を変更するしかないだろう。

幸いにして、『何もかも罪を被せられる相手』は都合良く存在した。「総員、戦闘配置につけ！ 対艦、対MS戦闘準備。単艦とは言え油断をするな！」

水を得た魚のように指示を飛ばす艦長。彼は勝利を疑っていない。ゆえにこの後、地獄が待っているなどと予想できるはずもなかった。

「まあそうするだろうよお前らとしては」

最低限の計器が灯ったコクピットの中、エイハブセンサーから艦隊の動きを見て取るランディは、にんまりと笑みを浮かべた。

「ライド、作戦通りだ。俺が出た後合流予定空域に向かえ。ねえとは思うが敵と遭遇した場合には逃げの一手だ。余計な色気だそうとすんなよ」

「う、うっす！ 了解っす！」

クタン参型の操縦を任せられたライドに告げる。彼の返事を聞いて、ランディはコンテナを解放させた。

ドルト2寄港前にイサリビから発艦し、慣性航行でここまで流れてきた。位置取りはぴったり。艦隊の上面から襲いかかれるポジションだ。アリアンロッドの間抜けどもはまだ気付いていない。まあ当然と言えば当然だ。ランディの機体のリアクターは現在スリープ

モード。粒子反応を検出することは出来ない。

それにしてもランディはほくそ笑む。第7艦隊とは『実に都合が良い』。どうにも今回はかなりツキが乗っている。ならばそれを最大限に生かさせて貰う。ランディの笑みは、いつしか歯を剥きだした獐猛なものへと変化していた。

「さて、ランディプレゼンツのパーティーはお楽しみ頂けているかな? ……それじゃあいよいよクライマックスといこうか!」

シユヴァルベ・グレイズのリアクターに火が入った。

「艦隊上方よりエイハブ粒子の反応! MSです! ……な、は、速い!?!」

オペレーターが悲鳴のような声を上げる。それに対し「報告ははつきりとせんか!」と苛立った声で怒鳴る艦長。

「し、失礼しました! 上空より所属不明のMSが高速で接近! つ、通常の三倍の速度です!」

「リアクターのナンバー、照合出ました! ……!?! こ、これは!?!」
「どうした、続ける!」

苛立つ艦長の声に、オペレーターは震える声で照合結果告げる。

その結果を聞いたスタッフの半数以上が青ざめた。

「ば、かな……」

血の気に引いた顔で呻く艦長。彼らはその機体に覚えがあった。いや、覚えがあったどころではない。

統制統合艦隊との合同演習にて散々コケにされ、その後自分たちの司令官に召し抱えられたが一週間で閑職に回された男。恨みや妬みを持つものと共に行った自分たちの奸計により、その男はデブリ帯の藻屑と化したはずだった。

こんな所に現れるはずがない、何かの間違いだ。必死で現実を否定

しようとする間にも、状況は進む。

「も、目標よりLCS全域通信！」

回線が開かれる。そこより放たれたのはただ一言。しかしそれは、第7艦隊全てを震撼させるには十分なものであった。

「メビウス1、エンゲージ」

宴（サバト）が始まる。

※今回のえぬじい

「ドーモ、アリアンロッドのミナIIサン。メビウス1DEATH」どおんっ！

「アイエエエエ!? リボン付き!? リボン付きの悪魔ナンデ!？」

ランディ・リアリテイ・ショックがアリアンロッドに奔る！（シヤレになってない）

終わるし。

10・喧嘩というのは押し売るもの

「取材に^ご協力頂きありがとうございます^ごございました」

デモを終えた労働者達に対して頭を下げるソウ以下報道スタッフ。思ったような事態ではなかったが、これはこれでスクープだ。カンパニーと労働組合との交渉。これまでなかなか実現しなかったそれが行われる運びとなった今回のデモは、ドルトの歴史に刻まれるかも知れない。大げさに聞こえるがそれくらいの大事だと、ソウは感じている。

しかしまあこの現状も大きなネタだが、その他にも気になる事があった。

(クーデリア・藍那・バーンスタインに鉄華団、ね……)

労働者達が所々で口にしていた名前。聞けば火星で独立や労働者の環境改善を謳っていた女性と、彼女を護衛している民兵組織らしい。今回のデモを支援し成功へと導いた立役者、いや恩人のようなものだとデモ隊の主要なメンバーは口を揃えて感謝の意を示していた。

火星の現状は噂でしか聞いたことがないが、ドルト2より酷い環境にあつて、人々は苦しい生活を強いられるという。そこから立ち上がろうとする意志を持つものたち。ジャーナリストとしての好奇心がむくむくと鎌首をもたげ始めているのを自覚する。

だが、今現在の自分の立場では、彼らを追う事は出来なかった。精々がコロニー群と地球方面につぶしがきく程度で、圏外圏や火星方面にはほとんど縁がない。仕方がないとはいえ、惜しいことだとは思ふ。

その代わりと言つてはなんだが。

(こういうのが好きそうなヤツがいたな。焚き付けてみるか)

マスコミ関係者らしく、存外に強かであった。

突然の強襲。それを受けた第7艦隊はパニックに陥っていた。

その中心となっていたのはフェアラート。

「撃て！・撃て！・撃てええええ!!」

戦術も何もあったものではない指示……というか喚き声を上げる艦長。それを受けるオペレーターも半数は狼狽えまくっている。

無数の対空砲火。それをものともせず濃紺のシユヴァルベ・グレイズは大きく螺旋を描きながら加速を緩めず突っこんでくる。直撃はなくとも全てを完全にかわせるわけではない。時折機体を掠める弾丸が火花を散らしていた。だがそれに怯む様子など欠片もない。

「な、なんなんだ、なんなんだあいつは!」

過去を知らないグレイズパイロットの一人が、怖気を感じつつ言葉を放つ。ハーフビーク級6隻。それだけでも多大な火力がある上に、搭載しているMSは合わせて最大72機。2個大隊である。そんな戦力に対して単体で突っこんでくる存在など、正気の沙汰とは思えない。だが『それをやってのける』。理解しがたいどころか狂人を眼前にした心境であった。かてて加えて当たらない。銃撃がまともに相手を捉えられない。FCSはちゃんとロックオンしているにも関わらずだ。

単純に『加速に緩急を付けているので照準がずれる』だけなのだが、半ばパニックに陥ったアリアンロッドの兵達は、それに気付くことはない。それでも艦長の誰かが指示を出し、誘導ミサイルが山と放出される。

ランデイは慌ても騒ぎもしない。機体の速度を緩めることなく、左手に持つ得物を構えさせた。ドラムマガジンを備えた大口徑ショットガン。迫るミサイルの群れに向けて、無造作に引き金を引く。

散弾による『面』の攻撃は、大体の狙いがあっていれば目標を巻き込む。その分散弾一発一発の威力は弱い。MSであれば大したダメージを与えることは出来ないだろう。が、ミサイル程度であれば問

題はない。先頭から次々と宇宙（そら）に花を咲かせる。

爆煙が視界を遮った。と思う間もなく、煙をぶち抜いて現れる影。「爆発を突っ切った……うわあ!？」

近場のグレイズの懐に飛び込み一蹴り。一瞬のことに皆ランディの機体を一瞬見失う。感覚的にはほぼ直角に軌道が曲がったようなものだ。分かっているも思考が付いていかない。その間にも濃紺の機体は次の獲物に襲いかかる。

再びの蹴りつけ機動。それが繰り返されれば隊列が完全に崩れ、混乱に拍車をかける。体勢を立て直す間もなく、ランディのシユヴァルベ・グレイズは艦へと迫る。

「墜とせエー！ なんとしても墜とせえええ!!」

無駄に響く艦長の悲鳴。対空砲火を悠々とくぐり抜け、濃紺の機体は右の得物を構える。

150mmアンチマテリアルライフル。右腰のオプシオンラッチから伸びたフレームによって支えられたそれは、片手での運用が可能なよう手が入れられている。ただし命中率は死ぬほど悪い。

「まあ普通に狙って当たらないんなら——」

にい、と獣の笑みが浮かぶ。

次の瞬間、フェアラートのブリッジを地震のような衝撃が揺るがした。

「うわああああ!!」

「ひイ!？」

「た、助け……」

次々と悲鳴が上がり、警告灯の赤色がブリッジを染める。アラート音が響く中、なんとか冷静さを保とうと努力しているオペレーターの一人が、なけなしのプロ根性で状況を知らしめる。

「ブリッジ近隣に直撃弾！ その直後に敵機に『蹴りつけられ』ました！ その、損傷は軽微！ しかしながら伝達系の一部に異常発生！」

大したダメージは無かったようだが、ブリッジ近辺に攻撃を与えられた、物理的・心理的双方から来る衝撃はクルーの心を揺さぶる。直に感じる命の危険。アリアンロッドという強者の地位にあってそれを

感じた経験のあるものはほとんどいない。故に彼らには恐怖に対する耐性が低かった。

「撃て！・追尾して撃ちまくれ！」

「し、しかし！」

「命令が聞けんというのか！」

「は、はっ！」

艦長の剣幕にほとんど条件反射で砲撃システムを操作するクルー。主砲がランデイの機体を自動追尾し砲撃を放つ。しかしその先は。

「うおお！」

「フェアラートからの砲撃が!？」

小馬鹿にするかのように舞い踊るシュヴァルベ・グレイズの背後には、アリアンロッド僚艦の姿。完全に頭に血が上っているフェアラート艦長の目には、その姿は入ってこないようだ。味方だというのに容赦なく弾幕が降り注ぐ。

「何をしている！・こちらを攻撃してなんとするか！」

「うるさい！ ヤツを、ヤツを殺さねばならんだ！ 邪魔をするな！」

ついには味方同士で仲違いすら始めた。その隙を縫ってランデイの機体は他の僚艦に襲いかかる。

艦橋付近に至近弾。そして蹴りつけの衝撃。どの艦にとつてもそれは絶大なプレッシャーとなり、パニックを呼ぶ。圧倒的な戦力差にあつてそれを易々と成し遂げている——ように見えるランデイは笑いが止まらない。

「ゼロ距離ならあほでも当てられるってなあ！ おらおら、ビビってんじゃねーぞアリアンロッド！」

足場として蹴りつけるついでに極至近距離で大口径ライフルをぶつ放す。ランデイのやっているのはそれだけだ。いくら高速域とは言え、これだけでかい目標を、しかも至近距離なら外しようがない。その上で彼は艦橋に直撃させることに拘っていないかった。

『ここで沈める気は全くなかった』からだ。

火星や圏外圏と違いドルトはGHのお膝元。しかも最大戦力を誇

るアリアンロッドの管轄である。下手に戦艦を沈め大きな損害を与えてしまつては、全力で対処されてしまつたらう。ランデイ一人でしかも『準備が整っている』のであればそれもやぶさかではないが、鉄華団と共にある今は派手な喧嘩は出来ない。だから『いざというとき言い訳が聞く程度』に押さええているのだ。

それともう一つ。彼らには『重要な役』を担つて貰わなければならない。そのためには『多量に生き残つて貰つたほうが都合が良い』。パニックに陥っている彼ら相手なら、殺さない程度の手加減は十二分に可能であつた。

これが第7艦隊以外であつたらばこうも上手くはいかなかつたらう。だが演習の時に刻んでやつた敗北の記憶が、そしてフェアラートに至つては殺したはずなのに生きていたという恐怖が、それぞれ判断を鈍らせる。数では圧倒的に上回つているのだ。いくら化け物じみた相手でも冷静ささえ保てれば対処できるはずだつた。それが出来ない、出来なく『させられている』。運と実力、その双方が噛み合つてランデイの翻弄は最大限の効果を発揮していた。

「さて、もう少し遊んでもらおうか！」

八艘飛びを繰り返し、彼は全力で艦隊をおちよくり弄ぶ。

スレイプニルより発艦した数機のMS。先頭のキマリスに次いでグレイズの小隊。そして最後にアインの駆るシュヴァルベ・グレイズが続く。

「俺とアインでやつらのMSを押さえる。お前達は艦を制圧しろ！」
「ですがよろしいのですか、アリアンロッドの方は……」

「情けは捨てる！ あれに巻き込まれればただではすまん、アリアンロッドだから保っているようなものだ。それより一刻も早く目的を果たした方が、結果的には彼らの援護になる！」

「りよ、了解！」

具申してきた部下を諭して、ガエリオはスロットルを開ける。すぐさま目標を視認。ドルト2を出航したばかりの赤い強襲装甲艦——イサリビ。まだ十分な速度の出ていない今のうちなら、取り付くことは容易い。相手がMSを出す前にと迫るガエリオ達であったが。

「っ!? 散開！」

突如レーダーに感。ガエリオは条件反射的に部下に命を下すが、突然のことに彼らは一瞬反応が遅れる。

そこに銃撃。弾雨がグレイズの小隊に降り注ぐ。

「ぐわっ!?!」

「上から!?!」

泡を食って回避する小隊。その間を、二つの影が高速で突き抜けた。

「伏兵!? どこから来た!?!」

イサリビからはまだMSは発艦していない。であればどこに潜ませていたのか。いや今はそれを考えている場合ではなかった。

「一方は……ガンダムフレームだと!?!」

リアクターを2基備えている独特の反応。であればバルバトスかと構えるガエリオであったが。

「いや、別の機体か。どこで手に入れた?」

形状の一部は確かにバルバトスと似通っていたが、茶色に塗り上げられた機体は明らかに別物だし、何よりエイハブウェーブの波長が合っていない。

そしてもう一方は。

「特務三佐! あれ機体は自分が!」

『それ』に気付いたアインが、言うが速いか止める間もなく後を追う。見ればその機体は色が派手なピンクに塗り上げられ機体の細部も変更されているが、確かにグレイズであった。どうやら鹵獲した機体をさらに改修したものらしい。

「アイン! ちっ、お前達は構わず艦に向かえ! もう一機は俺が押さえる!」

「し、しかし！」

「二度は言わん！ 急げよ！」

「りよ、了解！ ご武運を！」

部下達がイサリビに向かうのを確認してから、ガエリオは機体を向き直らせる。キマリスの両足が展開し、複数のスラスタノズルが現れ、咆吼するように火が入る。

「来た！ 向こうもガンダムフレームか……相手にとって不足はねえ！」

茶色の機体――バルバトスの予備パーツなどを使つて大幅に改造したグシオン、【グシオンリベイク】を駆るのは昭弘。解体したマン・ロデイから移植した阿頼耶識システムを搭載したこの機体は、本来のものに近い性能を引き出せる。乗り換えたばかりの自分がそれを引き出せるのかどうかは未知数であるが、昭弘は怯えや気後れとはほど遠い心境にある。

「これまでの成果、存分に試させてもらおう！」

今まで積み重ねてきたものが無駄ではないと、そう信じる彼は臆することなくスロットルを開けた。

さて、一方。

「クランク二尉の機体をそのような下品な色で汚して……許さん！」

怒りにまかせて改装グレイズに襲いかかるアイン。彼の中では尊敬する上司は神聖化されており、それを奪った鉄華団は不倶戴天の怨敵であった。前後の状況や相手の事情など全く考えていない、独りよがりな義憤と言つても良い。上司が以前口にした「罪無き子供を手にかけてはいけない」という台詞を曲解し、「罪があるのだから子供でも殺して良い」などと言うくらいだ。一見優男で常識人に見えるが、この男もなにかがどこかおかしい。

ともかく改装グレイズに銃撃を浴びせるがしかし、ピンクの機体は弾雨をすりと回避し反撃してくる。その動き、そして正確な射撃を見てアインは眉を顰めた。

「あの動き、阿頼耶識を積んでいるのか！ どこまでもクランク二尉のグレイズを汚す！」

相手の反撃をかわしながら左腕のアンカークローを射出。これは予想外だったのか回避しきれなかったようで、アンカーはグレイズの左足に絡みつく。

「二尉のグレイズ！ 返して貰おうか！」

組み付こうとするシヴアルベ・グレイズを引き抜いたマチエツトで弾き飛ばす。そうしながら改装グレイズのパイロット——シノは、不敵に笑みを浮かべて吠えた。

「こいつはもう、グレイズなんてダサイ名前じゃねえよ！」

「何!？」

「こいつの名は【流星号】！ 二代目流星号だ！」

「名をも汚すか！ 咎人が！」

アインもまたマチエツトを引き抜き、2機は激しく斬り結ぶ。

そして。

「艦隊はランデイさんが引きつけてる。俺らは近寄ってくる奴らだけ相手にすりゃあいい。行けるな、ミカ？」

「ん、分かった」

カタパルトに乗せられたバルバトスのコクピットで、指示を出すオルガに対し三日月は気楽に返事を返した。彼にとってはいつものこと。例えアリアンロッドの全艦隊を前にしても彼は同じ調子だろう。そら恐ろしいが同時に頼もしい。

「グレイズ小隊4機、接近中。迎撃をお願いします。……ご武運を」

すっかりイサリビのオペレーターが板に付いたフミタンに「了解」と軽く答え、操縦桿に手をかける。

「三日月・オーガス、バルバトス出る」

カタパルトで打ち出され、白き機体は宇宙へと躍り出た。

即座に敵機を視認。散開して接近してくる最中バルバトスを確認したらしく、銃撃を加えながら接近してくる。

「こういうのって、なんて言うんだったかな？」

少し奥歯に物が挟まったかのような感覚を覚えながら、三日月は機体を駆る。余計な挙動無く、水流に流されるような自然体のまま宙を駆けるバルバトスは、しかし全ての銃撃を軽やかにかわして見せた。

「なんだ!?! あの動きは!?!」

相対しているパイロットの一人は驚愕の声を上げる。彼らはボードウィン家付きの兵であり、それなりの訓練は受けているもの大した戦闘経験はない。阿頼耶識を搭載したMSとの戦闘はこれが初めてだ。ゆえに面食らう。

その戸惑いは、三日月にとって十分な隙を生む。

「獲った」

虚空にて踏み込み。阿頼耶識を媒介にして機体が応えスラスタが吠える。それは正しく疾走したようで、一瞬にして先頭のグレイズとの間合いを詰めた。

「な!?!」

回避も反撃も間に合わない。慌ててマチェットを引き抜こうとした姿勢で、その機体は振り抜かれたメイスを叩き込まれる。

「まず一つ」

一撃でコクピットを潰された僚機。それを見た小隊は動揺してか動きが完全に乱れる。それを見て三日月は唐突に思い出した。

「……ああ確か、『かもねぎ』だった」

自ら料理してくれと飛び込んでくるような阿呆をそう称すると、ランデイが言っていた。なるほどこういう事なのかと納得。確かに斬った張ったの最中にあんな乱れ方をしていては『喰ってくれ』と入っているようなものだ。

「じゃ、遠慮無く」

三日月は淡々と、次なる獲物へと襲いかかる。

「ひいひいひい!?!」

「当たれ! 当たれ! 当たれええええ!!」

第7艦隊のMS部隊は、恐慌のまっただ中であつた。

たった1機。たった1機のMSが捉えられない。攻撃が当たらないどころか予測も付かないところから飛び込まれて蹴りつけられる。それがただ単に『足場』として使われているからだという理解すら及ばない。『死人が一人も出ていない』と言う状況がさらに恐怖を煽っていた。死んだ人間は恐怖しない。錯乱しない。『死んでいる以上の被害をもたらさない』。恐怖が、混乱が、生きている人間の間次々と伝播し『感染』する。

死ぬことよりも、『死にそうな目に遭わされる方が恐ろしい』。そしてそのような目にあつて恐怖する人間が多い方が感染は広まる。ランディの一方的な優位は心理的な計算の元成り立っていた。

彼とて無敵ではない。もし第7艦隊が相手でも今の倍……いや、1.5倍の戦力があつたら苦戦は免れなかつたであろう。相手が心理的な圧迫も何もない万全であれば、キルレシオはMS換算で1対100が精々。優位に慣れすぎて相手を嘗めてかかっているGHだからこそ、これほどまでに翻弄できているのだ。

だから『さほど時間はかけられない』。ランディはGHと言う存在を馬鹿にしても舐めてはいない。時間的な猶予があればいくら恐慌の中にあつても、立ち直るものが出てくるという確信すらある。そうなる前に『徹底的に心をへし折る』。幸いにして、でかい『生贄』は存在した。

「か、艦橋を収納しろ！ 直撃を避けるのだ！」

フェアラートの艦長がヒステリックに命じる。厄祭戦時代から、宇宙戦艦は艦体の上部に突き出た艦橋を備え、緊急時にはそれを収納する機能が当たり前のものとして備えられている。最初からメインブリッジを艦内に備えていればこのような機能は無用のものなのだが、エイハブウェーブによる電波障害が横行する現在の戦場では、有視界認識も重要な索敵要因となるゆえ、いまだ旧時代的艦橋は備えられる傾向にあった。

その上GHでは艦橋を収納せずに戦うことこそ誇り、収納するものは臆病者であるというような見解が広まっていた。だからこそ未だこのような無駄に見える機能が残されているのだが。

恐怖に駆られたフェアライト艦長はそのようなことなどすっかり意識の外で、思いついたが吉日とばかりに迷い無く命令を下した。クルーの中にはそれに反感を覚えるものもいたが、それが具申できるような組織であればこうはなっていない。盲目的に下された命令に従事するだけであった。

がこん、と艦橋が沈み込み始める。幸いにしてランディは他にかまけているようで襲いかかつては来ない。しかし油断ならぬと緊張しながら、クルーたちは固唾を呑んで収納が終わるのを待つ。

やがて艦橋が完全に収納され、装甲ハッチが閉じようとした。これでもはや奴は自分たちには手が出せぬと艦長はほくそ笑み。反感を覚えるものすらいいたクルーたちも密かに安堵の息を吐いていた。

そこそが、『ランディの狙っていた最高のタイミング』であることに気付くことなく。

突然がん、という音と衝撃。同時に再びアラートが鳴り響く。「ひい」と悲鳴を上げた艦長は、椅子から転げ落ちそうになるのを何とか堪えながら、虚勢を張りつつ怒鳴り散らした。

「何だ！ 何が起こった!？」

「そ、装甲ハッチに何か障害物が挟まったようです！ 閉鎖が妨げられています!」

悲鳴のようなオペレーターの返事。安心できると思った途端にこれだ。動揺せずにはおられない。

果たしてハッチに挟まった物の正体とは、ランディの機体が装備していたショットガン。閉鎖しようとするタイミングに合わせて投げ込まれたのだ。

ぎぎ、と軋み歪むショットガン。MSの武器だけあってかなり頑強に造られているものだが、装甲ハッチが閉じようとする力に耐えられないほどのものではない。安全装置が働きハッチの閉鎖が中断しようとする前に、弾倉が押しつぶされた。

爆発。小規模ではあるがそれでも、ハッチの内部に衝撃を与え破片が飛び散るには十分であった。

「うわあああああ!？」

「ひいひいひい!?!」

そしてそれは、ブリッジ内に恐慌を呼ぶには十分に過ぎた。衝撃。霰のように叩かれる装甲とウィンドウ。アラートの音が鳴り響き警告灯の赤色すらも恐怖を煽る。実質的なダメージはほとんどないにもかかわらず、パニックは最早止められない領域にまで達する。

「こっ、後退だ! 全速力で後退し戦闘空域を離脱しろおおお!!」
ついに艦長が形振り構わず逃亡を命じる。プライドも軍紀もなにもあったものではない。クルーたちも半泣きに成りつつそれに従った。なぶり殺しにされる。その実感が完全に心を塗りつぶし、恐怖が逃亡を求める。フェアラートは勝手に戦列を離れ、後退を始めた。

「フェアラート! 何をしている! 戦列を乱すな!」

「通信受け付けません! リンクを切断しているようです!」

「何を……うわあ!?!」

敵前逃亡を咎めようとした旗艦に衝撃。フェアラートを止めるタイミングを失う。

これにより艦隊の陣形すら崩れ始め、戦場はさらなる恐慌の渦へと叩き込まれていく。戦闘開始より10分足らず。第7艦隊は完全に恐怖に飲まれた烏合の衆となり果てていた。

「速えエな。機動力じゃ勝負にならねえか」

グレイズのを改造した長大なライフルを撃ちながら、昭弘は咳く。

大幅に装甲を削ぎ落としたグシオンリベイクは、継続戦闘能力と共に機動性も向上している。が、キマリスはそれを遙かに上回っていた。グシオンの射撃はほぼ全て回避され、一撃離脱でランスを叩き込んでくる。

しかしキマリス——ガエリオの方も、思った通りに事が運んでいる

わけでもなく。

「良く避ける！　これだから宇宙ネズミはっ！」

一方的に攻撃を叩き込んでいるようには見えない。だが相手はここぞと言うところでひらりと身をかわし、直撃を避けていた。阿頼耶識の効果である、ガエリオはそう判断している。

しかしそれだけではない。ブルワースとの戦いからこっち、積み重ねた鍛錬は確かに昭弘の力になっていた。追いつけなくともキマリスの動きを見切り、その攻撃を弾き飛ばせるくらいには。

互角である。が、ゆえに双方決め手がない。このまま時間切れで痛み分けかと思われたが。

「お待たせ」

「三日月、そっちは終わったのか？」

援軍に現れたバルバトスを確認し、昭弘が問いかける。コクピットの中で三日月は頷いた。

「うん、かもねぎだったから」

「？　なんだそりゃ？」

「ん〜……楽勝ってこと」

軽口をたたき合う二人は、機体に迎撃体制を取らせる。自然と格闘武器しか装備していないバルバトスが前衛を、グシオンが後衛という形になる。その様子を見て、ガエリオは舌を打った。

「まさかもうグレイズを全機片づけたというのか!?　あの小僧……っ！」

ぎり、と奥歯を噛みしめる。バルバトスのパイロット、彼とは少々 の因縁があった。調査のため降り立った火星。そこで車にて移動中、二人の子供が目の前に飛び出してきた。慌てて車を降りて無事を確かめていた最中、いきなり現れて自分の首を締め上げてきた少年。それがかの小僧だった。

暴力的で礼儀を知らぬ餓鬼。同行していたマクギリスの取りなしで一応和解はしたが、その有り様と阿頼耶識を体に埋め込んでいるという事実が嫌悪感を覚えさせずにはいられない。

「どこまでも邪魔をしてくれる！」

苛立ちを隠そうとしないまま、ガエリオはスロットルを開けた。一対二となり状況は不利だが、ここで引くつもりなど毛頭無いのだから。

そしてアインの方も苦戦を強いられていた。

「は、やんじゃねえか。けど甘エー！」

ふざけたマーキングを施されているグレイズ。だがそれに見合わず乗り手は強敵であった。アインも訓練を重ねその技量は向上しているが、それと互角に渡り合っている。

その事実を、アインはおぞましいとすら思った。

「無法者風情が！」

このようなふざけた連中が勤勉に努力していた、等と言うことは認められないどころか想像すらしていない。ただひたすらに許せない。罪を償わないことが、抵抗することが、自身の視野がどんどん狭まってきたる事に気付かず、アインは荒れ狂う。

「自分が、俺が！ 貴様らを裁くっ！」

咆吼と共にマチェットを振るう。火花を散らしてそれを弾き飛ばしながら、シノは苦笑を浮かべた。

「やっぱ実戦ってのは感覚が違うってかあ？ なかなかしぶてエー！」

自分の技量が上がっている実感はある。相手と互角以上に渡り合えている手応えも。しかしなんとというか、相手の『執念』。その食い下がりが予想を超えて戦いを長引かせていた。

ブルワースとの戦いでシノはヒューマンデブリの少年達と相対したが、彼らも死に物狂いではあった。しかしそれともまた何か違う気迫がこの敵にはある。ただ経験を積んだだけであれば押し切られていたかも知れないが。

「悪リイが、あんたの事情には付き合っていないんでね！」

目の前にいる敵より『恐ろしい存在』を知ってしまった今では、ただやたらとしぶとい敵にしか過ぎない。敵に都合があるのは『いつものこと』だ。一々それを鑑みていればそもそも戦えない。故に付き合わず、ただ押し通る。覚悟や信念と言うほどのものではないが、なにか芯のようなものがシノの中には出来つつあった。

こちらの戦いは良い勝負と言つてもよかつたが、状況はそれを続けさせてはくれなかつた。

突然の停戦要請。それはドルトコロニー群の所有者であるアフリカユニオンから発せられたものだ。それを確認した途端、第7艦隊は渡りに船とばかりに全力で撤退を始める。

それを告げられたガエリオは苦々しげに表情を歪めるしかない。

「ええい！ 彼一人を押さええる役をも満足に出来ないか！ アイーン、撤退するぞ！」

「特務三佐?! しかしこいつらを！」

「法の守護者たる我等が立場を忘れるな！ ここで停戦要請を無視すればそれこそこいつらのように無法者だ！ 生きていれば次の機会もある！」

「……了解しました」

引き潮のごとく撤退する敵勢力を確認して、オルガは溜息を吐きながらシートに身を沈めた。

「なんとか上手くいったか。……問題は残ってるが、取り敢えずは乗り切つたな」

「ハンマーヘッドより入電です。予定通りグレイズとグシオンを回収の後、時間をずらして合流空域へ向かうと」

「了解した。ミカに暫く警戒するように伝えてくれ」

オルガの指示を受けた三日月は、イサリビの上部甲板にバルバトスを待機させ、去っていく第7艦隊に油断なく視線を向けていた。

楽な戦いであつた。だがそれが自分の力でないことは重々承知している。もしもランデイがいなければ……オルガに命ぜられれば臆することなく艦隊に突つこんでいったであろうが、あれほど混乱をもたらし押さえ込めただろうか。いや絶対に出来ないだろうというところという確信すらある。さらに『殺さず』というのはどういう手品なのか。心理的な戦術など欠片も分からない少年には想像も付かない。

脱帽。そういつた言葉すら知らない少年はただただ感じ入るだけだ。

「……すごいな、あいつ」

た。いつの間にか戦場を離脱した男の業績を鑑みながら、三日月は呟いた。

ドルトコロニーの顛末を聞いた直後に入れられた通信。端末を前にしてマクマードは微かに笑んだ。

「それで、何用かなクーデリア嬢」

通信の向こうで応える少女の声には、余裕すら感じさせる。

「ええ、一つご相談したいことがあります」

捻れは、さらに歪んでいく。

※今回のえぬじい

「……旦那、次回こそ出番あるんでしょうね？」

「ああ、間違いなくな」↑実はめっさ不安なモニターク仮面。

終わります。

11・右も左も狸ばっかか

ドルトでの顛末を聞いたアリアンロッド総司令ラスタル・エリオンの反応は、苦笑いであった。

「死んではおるまいと思っていたが……やれやれ、厄介な男が帰ってきたものだ」

その反応に控えていた副官は疑問を抱く。厄介などと言いながら、ラスタルはさほど不機嫌な様子ではない。報告によれば、第7艦隊はたった一機のMS相手に敗退し、大恥をさらしたという事なのに。

「治に置いて乱を忘れず。良い薬だよ。劇薬ではあるがな」

くく、と忍び笑う。フェアラートの艦長などは、PTSDを発症し病院に叩き込まれたらしいが、それでも生きているだけましだろう。そこから学ばないようであればそれこそ『これから先のこと』にはついていけまい。篩い分けと思えばさほど腹の痛む話ではないとラスタルは思っていた。

「しかしながら、なぜあの男を指名手配などなさらないので？ 明らかなる『公共の敵（パブリックエネミー）』とした方が遠慮無く対処できるのでは」

現在ランデイの扱いは、『MIAであるランデイル・マーカス一尉の名を騙る傭兵』である。奴はごく丁寧にも圏外圏で不正に戸籍を取得し、堂々と名と姿をさらしていた。見るものが見ればどころではないバレっぶりである。

だがそれに関してラスタルは何の手も打っていないかった。その気になれば脱走逃亡だけでなく様々な罪をでっち上げ犯罪者とすることも容易いのだ。副官が疑問に思うのも当然であろう。

それに対するラスタルの応えは。

「そんなことをしてみろ、『奴のたがが外れるぞ』？」

「はっ。」

あれでもまだ、『ランデイは手を抜きまくっている』。それは一応曲

がりなりにも、なんとか法の下に収まっているからだ。グレーゾーンというかダークサイドにどっぷり漬かっているような気がするが。

もし犯罪者として仕立て上げてしまったら、それこそ筋が通らないことを嫌うという信念っぽいものすらかなぐり捨てて全力で殴りに来るはずだ。海賊とか犯罪組織とかを片っ端から潰しまくって資金と物資を集め、ヒューマンデブリをかき集め自由を餌に一流の戦士に仕立て上げて辺境あたりからゲリラ戦を展開、GHを寸断し、さらにはGHに反感を持つものを煽ってテロの多発を誘い混乱を産んでその隙を突く、くらいはやってのけるだろう。最悪条約禁止兵器あたりをどこからか引つ張り出して、ヴィーンゴールヴ（GH本拠地であるメガフロート）やアリアンロッド本拠などを星間域から直接爆撃とかやりかねない。

「そんな、それほど大それた事を……」

「やるさ、あの男は。野に放たれた方が手の付けられない野獣だよ」

思い出すのは彼を直接スカウトしようとした時のこと。話を聞いたあの男は、こう言つてのけたのだ。

「傑物と聞いていたが……ラスタル・エリオン閣下、あんた実につまらない男だな」

その態度は明らかに小馬鹿にしたもので、その目は完全に見下していた。

そのような目を向けられたことはなかった。ラスタルとて己が大義の下、非道を行つているという自覚はある。それは乱が起こる前に最小の犠牲で平穏を保つためという理由があるが、ランディはそれを否定するスタンスだ。

血が流れることを否定するのではない。全く逆で『乱を起こしたければ起こさせたらいいのだ』という思想からだった。

火星の独立？ コロニーの自治？ やりたければやらせればいい。それが真に望まれていることであれば暴虐の果てにあらうとも叶えられることだろうし、間違つているのであれば叩き潰せばいい。声を上げる前に不穏だからとかき消すなど『面白くない』。ランディール・マーカスとは平気でそのようなことを宣う男だ。平穏とはほど遠い

危険思想と言っても良い。GHとは、いや、ラスタル・エリオンという個人の思想とも決して相容れぬ。それが理解できたから彼を謀殺しようとする動きを止めなかった。上手くいくとは決して思っていなかったが。

そんな男が帰ってきた。準備を整え殴り込みをかけてくるまで10年は時間があるだろうと思っていたが、いやはやあくまで予想を上回るか。度肝を抜かれたと言って過言ではない。

だが。

「この状況は、利用できる」

報告によれば、現在ランディが荷担しているのは火星のアーヴラウ管理領域における特殊鉱物「ハーフメタル」の採掘関係の利権を求める勢力らしい。であれば現在アーヴラウが野党勢力と綿密な関係を結ぼうとしている己が政敵、現フアリド家頭首「イズナリオ・フアリド」に対して強烈どころではない打撃となるだろう。ゆえにここは静観しておくべきだとラスタルは判断している。

それでも将来的な不安は残る。彼の帰還を機にGHは大きく揺るがされるであろう。その影響力を考えれば軽視は出来ないが、数だけ送り込んでも返り討ちに合うのが関の山だ。であれば。

「手の付けられない野獣には、それ相応の『猟師』が必要だろう」

にい、と歯を剥きだして笑む。なにも『化け物は彼一人だけではない』。今はまだ準備が整っていないがしかし、ほどなく『仕上がる』であろう。恐れるに足らずとまでは言わねども、対応は十二分に可能だと判断している。

それまでは静観しておこう。まだ頃合いではないのだから。

GHで恐らく最高峰の策士は、来るべき災厄を真っ向から見据えている。

なぜこうなった。ノブリス・ゴルトンは噴き出す汗を抑えられない。

「一体全体どういう事なのか、説明して貰おうか」

通信向こうの相手は、GHの高級将官。ドルトを巡る策謀のおり、情報提供や武器の供給など密約を交わして便宜を図った相手だ。事が無事に済めば——最低でもドルトの武装デモを鎮圧するという『成果』があれば、GHとの取引に融通を利かせてくれると言う話だったのだが、その絵図面は完全に崩壊してしまった。

「武装デモなど起こらなかつたどころか、ランディール・マーカスなどという災厄まで呼び込んでくれた。この責任、どう取ってくれる」「今回のことは私にとっても完全に予想外のこととして、しがたない武器商人の身ではないかんともいたしがたい事態ですな」

平然を装っているものの、内心は焦りまくっている。クーデリアの暗殺が失敗したというのは良い。予想外ではあるが全く想定しなかつたことではないのだから。だが武装デモが空振りに終わったというのはどういう事なのか。例えば武器が何らかの手違いで届かなかつたとしても、ドルトの警備部門や重要施設にも仕掛けが施してあつたはずだ。それでテロをでつち上げ労働者に罪を被せるという二段の構えであつたのに。

そしてランディール何某とかいう傭兵に関しては予想外どころか出鱈目に過ぎる。誰がたつた一人でGH艦隊を翻弄する人間の存在など信じられようものか。加えて言えばそんな出鱈目な人間が現れたことに対して自分は全く関係がない。そんなことに対して責任を取れと言われてもどうしようもないのだ。

ノブリスにも分かつてはいる。これが『八つ当たりに近い言いがかり』である。そもアリアンロッドの策略に協力はしたが、その結果がどうなるかまでは保証できる立場にはないし、その責任もない。策略が失敗したのは相手が予想を上回ったからであり、アリアンロッドがそれに対応できなかつたからだ。恐らくは今回のことで難癖を付けてこちらから譲歩を引きずり出す算段であろう。

ここで全面的に譲歩すれば、今後足元を見られる一方だ。冗談では

ない。勝手に失敗した分際でこちらに当たられるのは至極迷惑である。ノブリスは内心苛つきながらも『交渉』を進めていく。

(それにしても、何を考えているあの小娘)

頭の隅で思考する。暗殺が失敗に終わったとなれば、クーデリアには事のいきさつが露見してしまったと考えて良いだろう。だがあれからこつち、彼女からは何の反応もない。同時に傍付きにさせている間諜(フミタン)からの連絡も途絶えていた。事が露見したときに始末されたか、それとも……。

ともかく現在クーデリアの周辺状況は分からないままだ。何らかの反応があれば対処出来るのだが、実になんというか、不気味であった。

(マクマードから入れ知恵でもされたか？ ふむ、テイワズに鞍替えされると少々面倒になるな)

彼女が生きているなら生きているので対策を練らなければなるまい。交渉しながらも心の隅でそろばんを弾くノブリス。

それがまたしても根底からひっくり返されるなど、彼は想像もしていなかった。

「よう、随分と面白いシナリオ書いてくれたじゃねえか？」

GH将官との交渉を終えて一息つく間もなく、新たな連絡が入った。

相手はマクマード・バリストーン。奇遇にも丁度思いを馳せていた人物だ。勿論友好的な思考ではない。訝しがりながら回線を繋げてみれば、挨拶もそこそこに上記の台詞である。喧嘩腰というわけではない、むしろ面白がっているような気配すら感じさせたが、どうにも雲行きが怪しかった。生き馬の目を抜くような世界を生き抜いてきた長年の勘が告げる。状況は、よろしくない。

「さて、何のことかな？」

分かっているとぼける。向こうも察していることは十分に承知だ。これは刃こそ交えないが『戦争』である。引いたら負けだ。狡猾な武器商人としての才覚を武器に、ノブリスはこの戦いに挑む。

「フォルクスを仲介にしてうちに預けた荷物。ドルトの方で方針の転換があったらしくてな、受け取り手続きでちよいと話がこじれて、全部バレちまったぞ？　せめて労働者相手には偽名でも使っておくべきだったな」

「さて、フォルクス・マーケットの経営には口出ししていないのだが、誰かが儂の名を騙ったのではないか？　儂の名を使えば商売はしやすいだろうよ」

いざというときは『そういうことになるように』手筈は整っている。そもフォルクス・マーケットの所有権は表向きノブリスのものではない。もっとも公然の秘密というやつではあるが。

のらりくらりとかわそうとする彼に対して、マクマードは余裕をもってこう返した。

「そうかい、じゃあ仕方がねえ。『クーデリア嬢に洗いざらいぶちまけて、ハーフメタルの利権は丸ごとこっちで頂くとするか』」

「!?」

どういふことだと問いたただそうとして、堪える。ここで食い付けば相手の思うつぼだ。あくまで予想の範囲内であり、大した痛手にはならないと、そう思わせなければならぬ。それにはったりや嘘という可能性もある。いくら衝撃的な内容でも簡単に釣られるわけにはいかなかった。

「おや、彼女はすでに知っているものと思っただが？」

『航海中に海賊の襲撃があつて、そんなときに庇ったメイドごと怪我した』らしいぜ？　本人はかすり傷程度だがメイドは重傷。そのせいか船に籠もりっぱなしでドルトの騒動にやあ顔出しすらしてねえそうだ。一応うちのモンには口止めしてある。気付いてる可能性は低いと思うがね」

その話が事実ならば間諜から連絡がなかったのも頷ける。その上

で主導権が完全に握られているのを理解した。間諜と連絡が取り合えないのであればクーデリアは向こうの手の内。自分たちの都合の良いように情報を与えれば、容易く鞍替えするであろう事は目に見えていた。

方針を全く変え、完全に切り捨ててしまえばいいのだろうか……どうにもマクマードは彼女の交渉が上手くいくことを前提としているようだ。ノブリスとしては逆で、そもそもが絵に描いた餅に近い戯れ言だと思っていた。人望とカリスマは高くそれなりに利用価値があつたが所詮は世間知らずの小娘。地球にたどり着くことすら難しいはずだった。

テイワズが全面的にバックアップしても、かの組織とて地球圏では一企業にしか過ぎない。だがなにか勝算があるのか。それともはったりなのか。判別は付かない。

「ふむ……なにが望みだ？」

あくまで様子見と言った態度で問う。はったりだと思いたいところだが、万が一上手くいけばハーフメタルの利権は惜しい。のるかそるか、ここが分水嶺だという感覚がある。

果たしてマクマードは、得たりとばかりに言葉を紡ぐ。

「ハーフメタル関係の商売。取り扱いや加工技術はうちや圏外圏の企業にノウハウがある。だが、こっちは火星での伝手が弱えエ。何とかならないでもないが……下手な諍いは慎みたいのよ。後は分かるな？」

「こちらで土壌を整えろと、そう言うことか。……しかし儂がそれを受けると思つかね？」

話が確たるものであれば喉から手が出るほどのものだが、浅ましくも飛びつけば足下を見られるだけだ。こちらにも相応の考えがあると匂わせて見るが。

「おいおい、お前さんにやあ『貸し』があるだろう？ そいつを返して貰いたいだけなんだが」

「貸し？ はて何の事やら」

「とぼけなさんな。ドルトの件、下手すりや『うちに飛び火するとこ

ろ』だったんだぜ？　そうなたらちよいと『落とし前』をつけなきやならんところだ」

む、と小さく唸る。現在クーデリアの身柄を預かり、そしてドルトに武器を運び込もうとしていた鉄華団はテイワズの傘下だ。事がまともに進んでいれば確かにテイワズに疑いの目が向けられる。いざとなれば鉄華団ごと切り捨てるだろうが、それを理由にこちらと敵対するつもりがあるのか。しかしこちらには――

そこまで考えて、ノブリスは『致命的な失策』に気付く。

「今回のことで、お前さんGHからの信頼をちいとばかし損ねたんじゃねえか？　それに蜜月の関係にあった火星の本部長様はお亡くなりになってる。後任の人間と似たような関係が築ければいいがなあ」

確かに。先程将官と交渉を終えたが、手応えはあまりよろしいものではなかった。この先力にならないとまでは言わないが、積極的な助力は控えられるかも知れない。素の武力で言えばテイワズは圏外圏でも頭一つ抜き出ている。表でも裏でも勝負にはなるまい。

それを読まれているという不覚。ノブリスは密かに奥歯を噛みしめ、内心の悔恨を押し殺しながら平然を装った。

「話は分かった。しかしクーデリア嬢が上手くこなせなければ話にならない。そのあたり何か確たるものがあるのか？」

「詳しくは言えねえが地球までたどり着かせるだけなら伝手はある。なに、上手くいかなくとも我々の腹は痛まねえさ。それでな……」

狸と狸は化かし合う。

この後、ノブリスとマクマードはそれぞれ役割と分け前を話し合う。それはお互い損のない話に思われたが。

この時点でノブリスの目には、鉄華団など箸にも棒にもかからぬちんぴらの集団としか映っていないかったし、ランディは異常な腕を持つが一介の傭兵としか映っていないかった。彼の視点からすればそれはやむかたないことではある。

しかしノブリスはもう少し目線を広げるべきであった。この時点で彼らを過小評価したことが、結果的にこの後の転落人生を決定づけ

る事になったのだから。

会談を終えたマクマードは椅子に体重を預け、葉巻を吹かせた。

「上手くいったと思いたいが……いやはや、『嬢ちゃんの予想通りの反応を取る』たあな。末恐ろしい事だよ」

先の会談、実はマクマードの独断によるものではない。最初はそうするつもりであったのだが、いざノブリスと連絡を取ろうとする直前で、クーデリアから相談という形で話を持ちかけられたのだ。

事のあらましを聞いたマクマードは、彼女にどうするのかと問うてみた所。

「事を荒立てたくはないのですが……流石に命を狙われた、となると捨て置くわけにはいかないと」

「ふむ確かに。今までの恩も帳消しにされるくらいのこったな」

「名前を利用される、というだけならある程度のこと目は目も瞑れます。しかしここまで来ると逆に『落とし前』が必要になるのではないのでしょうか」

こちらに合わせたのか、そのような言葉を吐く。マクマードはくく、と笑い声を漏らした。

「リボン付きにでも入れ知恵されたかい？ らしくない物言いだがい」
帰ってくる返事はすました声で。

「むしろ相談しようとしたら突き放されました。「あんたみたいな人間が、俺の真似しちやいかんだろ」って。「まず現状を鑑みて、自分がベストだと思う事を考えてみな」とも。スパルタですよ、彼」

「……面倒くさいから放つただけじゃねえだろうなああの男」

まあ実際、ランディがこういった話で役に立つとは思えない。自分がその立場だったらまず間違いなく倍返しに報復行動に出るであろう事は確かだが、流石にそれをやれとは言い出さないだろう。クーデ

リアが変に染まっても困るし、間違った対応ではない。

「まあいい。それで、お嬢さんはどうするつもりだい？」

「そうですね。私は今回の件を『知らなかったこと』にしたいと思っています」

「……ほう？」

意外な発想だった。知った上でノブリスを利用する、くらいのこと
は言い出しかねないと思っていたが。

「暗殺については見逃す、ってことかい？ ノブリスを無条件で許す
と」

「まさか。暫くは『無力な小娘と侮っていて欲しい』ということですが」
「話が見えんな。わざわざ侮られる事に意味が？」

「今回の件でノブリス氏は利害が絡めば平気で裏切ると判明しまし
た。それに物申す気はありませんけれど、馬鹿正直に全てをさらけ出
す事は危険でしょう。侮っていてくれれば逆にその動きは読みやす
くなります。幸いにして彼の間諜……私に付いているメイドはこち
らの手の内にありますのである程度の情報操作は可能となりました
が、それだけでは不足でしょう。ですので『説得力を持つ方にご助力
頂ければ』と」

いずれノブリスと袂を分かつかも知れない、そんなことすら匂わせ
ている。マクマードは目を細めた。

「……だから俺かい。しかしいいのか？ 胡散臭さではノブリスと
どっこいどっこいの男だぞ？」

その言葉に、クーデリアはくすりと笑みを零す。

「いざと言うことがあるのなら、私の見る目が曇っていたと
いうことでしょう。馬鹿な小娘が身を持ち崩した。それだけのこと
です」

剛毅と言って良いのか。開き直っただけも知れないがすっぱりと
思い切りの良いことである。

度胸が据わってきたなど、彼女の変化に何らかの手応えを感じなが
ら、マクマードは機嫌良く返す。

「いいだろう。だがノブリスが素直に話に乗るかね？」

「十中八九乗ってくるのではないのでしょうか。今回のことで彼は多少なりともGHから疑念の目を向けられるはずです。そこで圏外圏最大の勢力を持つ組織であるテイワズから話を持ちかけられたのであれば、抵抗は難しいと考えるでしょう。そんな状況で五分の取引を持ちかければ、疑いを持ちながらも乗ってくるのは間違いないと思います」

なるほど言われてみれば確かに可能性は高い。その上で、クーデリアは「それに」と言葉を続けた。

「火星の利権というパイの大きさは限られています。ここで優位に立てば『分け前』も相応の見返りがあるのではないですか？」

「それは俺に交渉の全権を渡すって言うてるのと同義だぜ？　好き勝手に火星の利権を切り売りするようなモンだ」

「どのみちアーヴラウとの交渉が上手くいっても、私だけの采配では手に余る話です。であれば『できる人』に任せの方がスムーズに行くのではないのでしょうか」

例えばクーデリアがフミタンを失い、一人で事を考えていたら方針は変わっていたのだろう。だがフミタンは生き残って親身になってくれるし、ランデイのような普通は出来ないことをしゃらりとやってのける存在も目の当たりにしている。それらに影響を受けた彼女の思考は変革しているとと言ってもよかった。持てるカードを見せる相手を選び、あるいは伏せて、あるいは全賭けする。強かさや狡猾さ、未熟なれどそのような物が備わりつつあった。

面白い人間になってきた。あるいはこのように思わせるのも彼女の手の内かも知れない。だが、それに乗ってみるのも悪くない。久方ぶりに、女にときめかせられるといった感覚をマクマードは覚えていた。勿論色気など全くないが。

「そこまで言われてやらなきや男が廢る。その話、乗ってやろうじやないか」

「ありがとうございます。そう言っ頂けると信じておりました」

「だが吠えたからにやあそれなりの結果は見せてくれねえとな。さしあたってはアーヴラウとの交渉か」

「ええ、私は暫くそれにかかりきりとなるでしょう。その間マクマードさんにはいくつか頼みたいことが……」

そして彼女と密約を交わしてから、ノブリスとの会談に挑んだわけだ。蓋を開けてみればクーデリアの見込み通りの反応であった。寝返ったメイドからいくらかの情報を得ていたとはいえ、恐るべき読みである。

マクマードは口元を笑みの形に歪めた。

「こいつは俺も、うかうかしていらねえなあ。……ちいとばかり、禪を締め直さにやあならんか」

笑顔の中にも、その瞳はぎらぎらとした光を宿している。

若き革命の乙女に当てられたか、かつて闘争の果てに圏外圏の覇権を手に入れた男は、最盛期の『熱さ』を取り戻しつつあった。

「……と言うことで、マクマード氏は快く引き受けて下さいました。これで暫くは後ろから撃たれることを心配する必要は無いと思います」

会談の顛末を簡単に説明したクーデリア。話を聞いた鉄華団幹部（除く三日月と昭弘）と名瀬は何とも言えない表情だった。

（ぶつちやけ、ノブリスを親分さんに押しつけたって言わんかそれ？）
ランデイはそのような感想を抱いたが、口にするほど愚かではなかった。なんかお嬢さんこんなキャラクターだっただろうか。うん、微妙に怖い。実は内心結構怒っていらっしやるのであろうか。

藪をつつくのはやめておこう。他のメンバーと同じく賢明な結論に至ったランデイは、気持ちを切り替えるかのように声を出した。「ともかく後顧の憂いは無くなったってこった。後は前に進むだけだ
が……」

「地球へ降りる伝手には今当たっている。程なく返事が来るはずだ」

気持ちを切り替えたかランディの後を継いで名瀬が言う。彼の言う伝手とは月のコロニーで定期航路を管理する会社らしい。なんでもその頭目がマクマードと旧知であり、『裏家業』のほうでも何度か取引があつて悪い関係ではないようだ。話の分かる御仁でもあるので、きちんとした取引をすれば力になつてくれるだろうとのことだ。「まあそれにしたつてGHの事だ、しつこく追っかけて来るだろうな。最低でも降下の時にやあ一戦やらかさにかんかも知れん」
「つてことは地球外縁軌道統制統合艦隊が相手になると？ 連中実戦経験のないお飾りで、張り子の虎つて噂だが」

名瀬の言葉に、ランディは皮肉げな笑みで応える。

「あく、以前ちよいとばかりし連中を『揉んでやった』事があつてな？ 連中の頭（司令）から結構怨まれてんだわ俺」

『おいちよつと待て』

流星に一斉にツツコミが入った。

「お前さんほんともう、なんでそんなあつちこちに火種ばらまいてくれんの」

こめかみを指で押さえた名瀬はそう言うが、勿論ランディに堪えた様子はない。むしろドヤ顔で。

「は、俺が相手見て人おちよくつてると思うのか？ 自慢じゃねえが老若男女立場階級関係なく、おちよくるときは全力でおちよくるぞ」
「確かに自慢じゃねえよそれは」

まあそれはそれとして、ランディは表情を真剣な物に変えた。
「逆に言やあ、連中は『俺を優先的に狙つてくる可能性がでかい』つてこつた。囷にはなれると思うが？」

『!?!』

彼の言葉に全員が目を剥いた。戸惑いを隠せないまま、オルガが問いかける。

「それは、『地球には降りない』つてことか？」
「場合によつてはな。統制統合艦隊の司令が懲りない馬鹿だったら簡単に出し抜けるんだが……あの麿肩、馬鹿は馬鹿でも全力な素馬鹿じゃないからな。下手すりゃ一皮剥けてるかも知れん」

「その口ぶりからすると、知り合いですか？」

「士官学校時代の後輩さ。俺がなんかやるたび突っかかってきた変わり者だった。毎回やりこめてやったが」

まるっきりの無能じゃないとランディはそう言う。そのような人間を彼は決して嘗めてかからない。オルガに次いで問うたビスケツトはうむむと考え込む。ランディが一目置いている相手となればどのような奇人変人いやいや強者か分かったものではない。そのような存在を相手にするのは実にぞっとしない事だ。

「策というか、降下の時には一つ工夫せんといかんかもな。……つと？」

ランディが話を続けようとしたその時、ハンマーヘッドのブリッジから連絡が入った。その内容で皆、また頭を悩ませることになる。

「おいおい、『タントテンポ』の頭目が亡くなったってのかよ」

話を聞いた名瀬は天を仰いだ。タントテンポ——これから助力を仰ごうとしていた企業のことである。どうにもその頭目が暗殺されたか何かで亡くなってしまったらしく、現在てんやわんやの大騒ぎで、とてもではないがこちらの助けになってくれそうにはない。第一頭目がいなくなったかの企業が協力してくれる保証もなかった。

「振り出しに戻ったか。……名瀬の旦那、他に地球に降りる当てはあるかい？」

「大なり小なり取引してるところはあるが……どこもGHの警戒網をくぐり抜けられるかどうか微妙だな。そもそも引き受けてくれるかどうかかも怪しいさ」

「となると……仕方がねえ、か」

何かを決意したらしいランディが再び口を開く前に、またしても動きがあった。

「今度はイサリビに通信？」

まるでタイミングを計っていたかのように、鉄華団にコンタクトを取ってくる者があったというのだ。

「はい、それが……」

イサリビのブリッジに戻ったオルガ達。通信を受けた少年が戸惑

いながら報告すると、オルガは眉を顰める。

「今更何のつもりだ？ ……ともかく繋いでくれ」

結構近場からのようで、映像を伴った通信だ。モニターに現れたのは。

「ようお前ら、なんか困ってるらしいじゃねえか」

かつて鉄華団をGHに売ろうとした男、トド・ミルコネン。厚顔無恥にも過去のことなどなかったかのように、へらへらと軽薄な笑みを浮かべて言葉を投げかける。以前とは違い妙にこざっぱりとした様相を内心訝しみながらも、オルガはしかめっ面のまま相對する。

「で、何の用だ？ こっちは今立て込んでいる最中なんだが」

不機嫌に言うオルガに対し、得たりとばかりにいやらしい笑みを浮かべたトドは言う。

「話は聞いてるぜエ、地球に降りる手段がねえってんだろ？」

「だから何だ。あんたが用意してくれるとでも言うのか？」

「おうよ。正確に言えば俺じゃなく『ウチの旦那』が、だがな」

「旦那？」

益々顔を顰めるオルガ。どういう事だと顔を見合わせ戸惑う面子。それに満足げな表情を見せて、トドは宣った。

「おうとも。ウチが、『モンターク商会』が慈悲深くも手を差し伸べてやろうってんだ。ありがたく思いな」

「本当に『あの』モンタークなのかね。100年以上続く老舗の」

「あの男(トド)を雇ってる時点で怪しいモンです。…けど、策略にしちゃ回りくどすぎる」

合流した『自称』モンターク商会の船。そこから客を迎え入れるため名瀬とオルガは格納庫に向かっていた。

「ランディさんと戦いたくねえからじゃねえの？ 手に乗ったら途中

でとっつかまるとか」

共に付いてきたユージンが言う。まあそんな可能性は……正直高いと思う。しかし。

「このタイミングでコンタクトを取ってきたことは、どっちみちこっちの現状は筒抜けってことだ。だったら接触を試みて、相手の反応を見るってのは悪い手じゃねえ」

まあまだ打つ手はありそうだしなど、意味ありげな視線をランディに向ける名瀬。それに対してランディは肩をすくめてみせる。

そうこうしている間に格納庫につき、連絡艇を迎え入れる。ハッチから悠々と降りてくるトド。それに続いて降りてきたのは。

「初めまして。故あってこのように顔を隠していますが、私がモントーク商会の会長を務めている者です」

灰色の長髪を無造作に伸ばしフクロウを模した仮面を付けた男。

その姿を見てランディと、そして一緒について来た三日月は。

『……なにしてんの「金髪」「チョココの人」』

空気も読まずに呆れたような声を揃って上げた。

グラズヘイム1。地球外縁軌道統制統合艦隊が駐屯するGHの軌道基地である。その管制司令室にて氣勢を上げる者達がいた。

「我ら地球外縁軌道統制統合艦隊！」

『面壁九年！ 堅牢堅固！』

中心にて威風堂々と立つ女性。彼女の発した台詞に続いて、直立不動で控えていた周囲の部下が一斉に唱和する。それは一見一糸乱れぬ有り様であったが、女性はお気に召さなかったようで微かに眉を動かした。

「左から二番目！ 0.5秒遅れたわよ！」

「は、はっ！ 申し訳ありません！」

ちゃんと聞き分けていたらしい。凄いのだから凄くないのだから微妙だが、女性が次に続けた台詞で印象が変わる。

「些細な連携のミスが、戦況を分けるときもある。最低でも職務が始まった瞬間、常時戦場と心得なさい」

「はっ！ 了解致しました！」

ただの氣勢ではなく、部下の調子をも見ていたようだ。この女性、外観はなんか平安貴族っぽいおかしなもとい独特なメイクを施している人物だが、もしかしたらなかなかのやり手なのかも知れなかった。

カルタ・イシュー。地球外縁軌道統制統合艦隊司令にしてGHを牛耳る7家「セブンスターズ」が第一席イシュー家の長女である。

病養中の父に代わりイシュー家頭首の名代を務め、若くして一佐という地位にあるが、実際にはイシュー家の箔付けであり、指揮する艦隊自体も常に後方に置かれ式典などでしか動かないお飾りと言われていた。

しかしそのような評価に腐ることなく、彼女は凜とした態度で日々の職務と研鑽に邁進している。

「それで、本日の予定は？」

「は、09:00より艦隊各部よりの報告、およびミーティング。10:00より通常訓練の……」

きびきびと報告する部下の言葉を聞くカルタ。そこにオペレーターから声かけられた。

「お話し中の所失礼しますカルタ司令！ 監察局のボードウィン特務三佐より、入電がありました！」

「ガエリオから？ ……分かった、繋ぎなさい」

訝しみながらモニターに対峙する。程なくして通信が繋がり、ガエリオの姿が現れた。

「お忙しいところ時間を割いて頂き感謝致します。……久しぶりだな、カルタ・イシュー一佐殿」

「そちらも息災そうで何より、ガエリオ・ボードウィン特務三佐。……貴方一人とは珍しいわね。『相方』はどうしたの」

相方、の所に妙に力を入れて尋ねるカルタに、この辺は変わらないかと内心苦笑しつつガエリオは答えた。

「休暇だよ。暫く働きづめだったからな、このあたりで纏めてと。妹も望んでいたことだ」

彼の回答に、呆れたような、あるいは機嫌が悪そうな様子で鼻を鳴らすカルタ。

「婚約者とはいえ、わずか8歳の子供のご機嫌伺いとは、ご苦労なことです。……それで、何用かしら？ 監察を受けるようなヘマはやっていないのだけれど」

露骨な話題変換だったが敢えてそれを指摘するようなことはしない。これでもフェミニストを自称する身だ。無粋はすまいと話に乗るガエリオ。

「話を聞いているかも知れないが、ドルトコロニー域でアリアンロツドが『出し抜かれた』。相手は火星の独立を目論むテロリスト……いや、回りくどい言い方はやめておいたほうが良いな」

溜息を一つ。そうしてからガエリオは真剣な表情となった。

「還つてきたぞ。ランディール・マーカスが」

その言葉を聞いた途端、司令室がざわめく。戦慄、あるいは恐怖。各々が様々な表情を見せる中、カルタは眦を鋭くする。

その表情はまるで、親の敵にでも挑まんとするような厳しいものだった。

※今回のえぬじい

「なるほど……騙くらかせばいいのですね」

→ランディープレゼンツ騒動の様子を見ながらうんうん頷いているクーさん。

「お、お嬢様？」(汗)

やっぱランデイのせいじゃねえかよああなったの。

12・お前の覚悟を見せてみる

グラスハイム1にてガエリオより事の詳細を聞き出したカルタは、面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「こちらが調べたのと大体同じね。……全く、不正を放っておいたツケを我々が払わされるはめになるなんて」

「そう言うな。ランディール・マークスがいなかったとしても、火星植民地から直接交渉など前代未聞だ。下手をすれば独立運動の名目でテロの活性化を招きかねん。最悪……紛争ということもあり得る」

「確かに地球へ向かうだけでこれほどの騒動を起こしているというのは問題だわ。望むと望まざると関わらず、ね。……そしてどちらにしろ、あの男を放っておくわけにはいかない」

ぎしりと歯ぎしりのような音が聞こえた気がしたが、ガエリオは敢えて無視する。

「圏外圏に逃げ込んで三年……衰えるどころか益々化け物じみてきた感すらある。まともに相手取って勝てるものじゃないぞ」

「分かっているわ。けれども、決して引くわけにはいかない相手よ」
その目には、爛々と燃え盛る闘志が感じられる。やはりこうなるかと、ガエリオは諦めにも似た心境を抱いた。

士官学校時代に出会ってから、カルタは先輩であるにもかかわらず、破天荒な行動を繰り返すランディに対し度々食って掛かって物申していた。

しかしながら。

「あん？ お前の銃は相手見て殺傷能力変わるの？」

「馬鹿かお前。法（ルール）守らないから無法者（アウトロー）ってんだろが」

「戦闘中に格好付けて名乗り上げなんかしてっからボコられんだろうに。その変な眉は飾りか」

常に正論ではあるがむかつく言いざまで叩き返されて完封されていた。相手が例えセブンスターズが第一席の跡取り娘であろうと容赦なく叩き潰すランデイの様子は、むしろ周囲をはらはらせ恐れさせる。カルタの方は持ち前の負けん気と正義感、そして己の立場から生じる気負いもあつて、叩き潰されるたびにむきになってさらに突っかかるという悪循環が生じていた。ガエリオやマクギリスはその様子を見て苦笑いしたものだ。（たまに巻き込まれるのだけは勘弁して欲しかったが）

その後ランデイが標的艦隊に配属され、カルタは暫く後に地球外縁軌道統制統合艦隊司令として任に就く事になる。そして行われた演習。恐らくカルタはかなりの自信があつたはずだ。大した任務もこなさず自堕落な生活を送っているランデイに、鍛練を重ね錬度を上げた自分と部下が負けるはずはないと。

だが、結果は実質的な全滅。実際ガエリオの目から見ても、カルタの指揮は形式や名誉を重んじる部分が十分控えめになり実戦的なものに仕上がっていた。しかしそれはあくまで正攻法。真正面から戦つてもただでさえとんでもない技量を持つランデイは、自身と同僚部下を鍛え抜き、さらなる強者として立ち塞がったのだ。

その惨敗とも言える戦いが終わった後、ガエリオより先にランデイの下を訪れたカルタはまたまた食つて掛かつていた。流石にあればやりすぎだと思つたガエリオも参戦し、二人して責め立てたのだが暖簾に腕押し糠に釘。まるで堪えた様子はなかった。

それ以降だろう。カルタが本格的に変わり始めたのは。ただ貪欲に力を求めるだけでなく、己に足りない部分を埋め、より高みに至ろうとするその姿は鬼気迫るものにすら見えた。元々完璧主義者であつたが同時に潔癖であり、卑劣な手段や裏工作、根回しや情報収集と言つた事は苦手どころか思いつきもしない人間であつたのに、己が手を汚すほどではなくともそう言つた方面にも気を配る、よく言えば柔軟性、悪く言えば小賢しさが身に付いてきたようだ。

彼女にとってランデイ打倒の思いは最早執念である。当然ながら彼が死亡した等という話を全く信じていなかった。生きて必ず現れ

ると確信し、己を鍛えることを怠っていない。

逆にそれが、危うさを感じさせるとガエリオは思う。ランディを打倒することに拘るあまり目的を見失うのではないか。ついそのように邪推した彼は、釘を刺そうと口を開く。

「カルタ、分かっていると思うが目的はあくまで……」

「クーデターなんちゃらとかいう小娘が身柄の確保、と言いたいのではないか？　心配しなくてもそれを忘れるつもりはないわ」

「クーデリア・藍那・バーンスタインだ」

すでもうこの時点で不安が増した。

やはり彼女はどこまで行ってもカルタ・イシューなのか。ガエリオはちよつと頭を抱えたい気分になった。

鉄華団に接触してきた仮面の男。即座に正体が看破されたその人物に対し皆の警戒は全力。

しかし敵も然る者というか、敵意の視線が突き刺さる中、その男は悠々と応接室のソファアに身を沈めている。部屋の端に控えているトドの方がよほど普通に思えるあまりにも堂々とした有り様であった。

「そう構えることはない。……と言っても無理だろうね」

ぎつくばらんと言うか妙に馴れ馴れしい言葉を放つ。対面に座っているオルガは腕組みしたまま仏頂面だ。

「おふざけにしても、随分と舐められた話だ。これ以上戯れ言に付き合うつもりはねえ。だから単刀直入に聞かせて貰う。……なんの真似だ？」

噛み殺したいとでもいうような喧嘩腰の言葉に、まるで意に介した風もなく男——モニタークは応える。

「最初に言ったとおりだよ。地球に降下する手段を提供するので、そ

の見返りに火星のハーフメタルの取り扱いに関する利権に我が商會を参入させて欲しい。と言う話だ。……この交渉自体は『GHと関わりのない話だと思つて欲しい』」

「は？ それこそふざけた話だろうが」

何を言っているのかさっぱり読めないが故に、言葉にはつきりと苛立ちがでる。相手がそう言う反応をすると分かっているだろうに、モニターは余裕を崩さない。

「信じては貰えないだろうが、実の所私個人としては君たち……：……といつかクーデリア嬢に『無事交渉を終えて欲しい』のだよ。その方が都合が良いという事情がある」

「確かに信じられねえな。今まで散々俺らの邪魔をしてきた連中の一味であるあんたが、組織の意に反する事を申し出るつてのが不可解すぎる。何らかの企みがあると考えるのは当然だろう」

「無論企みはある。それが今回『君たちの意向と合致した』、そう言うことなのだよ。言い方を変えれば君たちが目的を果たすことは私の企みに都合よく利用できると言うことさ」

その態度から真意は読めない。真摯には見えないがさりとしてふざけている様子でもなかった。

毘だと疑えばいくらでも疑える。というか全面的に怪しい。それは自身も分かっていることなのだろう。モニターは仕方がないなとばかりに息を吐いた。

「もう少し踏み込んだことを言おう。『私はGHを牛耳りたい』。そのために排除しなければならぬ存在がいくつかある。……後は大体分かると思うが」

「……なるほど。俺たちが地球に降りるついでに始末して貰おう、つて腹か」

「そこまでしなくとも、『出し抜くだけで十分だ』。不穩分子を地球に侵入させた。その失策は幾人かを引きずり下ろすに足る十分な理由となる。後は私の仕事さ」

もつとも、とモニターは続ける。

「この話を断つたとしても、私は君たちの行動を阻害しないと誓おう。」

君たちの存在は渡りに船というやつだが、いないならいないで何とかするさ。元々そのつもりだったんだ、気にする事はない」

一応話の辻褄は合う。GHと一枚板ではないだろう、であれば内部で色々と権力争いがあったもおかしくはない。それに利用できる存在——『己の手を汚さずに事をなしてくれそうな存在』があれば利用しようと思えるのは当然の流れだ。

(どうにも気にくわない話だが……)

オルガはいつもの癖で片目を瞑り、考える。

地球に降りる手段を模索しようとした矢先に接触を凶つたと言うことは、こちらの動向が完全に把握されていると言うことだ。その上で、目の前の男は邪魔をしないとは言ったが、『情報をリークしないとは言っていない』。話を断り地球に降りたら、GHがこぞってお出迎えなんて事もあり得る。

つまりは乗るのも断るのもリスクのある話だ。ではどちらの方がGHを、そして『目の前の男をも出し抜ける』？ 暫し黙考し、オルガは溜息を吐いた。

ちらりと視線を左右に走らせる。参謀役のビスケットは苦い顔をしながらも頷き、ユージンも眉間に皺を寄せつつ否定的な態度は取っていない。そしてランディは壁際で状況を見守りながら黙したままだ。三人とも意見を求められないうちから口を挟むつもりはなく、全面的に自分の意向に任せると言うことだろう。そして。

三日月はいつもの通り、ただ黙って視線を向けているだけだった。その視線は「次はどうするの」と、いつもの通り訴えてくる。

腹は決まった。

「……分かった。あんたの話に乗ろう。ただしいくつか条件がある」
踏み込む。畏はあるかも知れないが、障害があるのはいつものことだ。踏み込んで食い破っていく。ただ食い物にされるだけの存在ではないぞと、そのような意志を込めてオルガは真っ向からモニターに対峙する。

果たしてモニターは、すました態度のまままで応えた。

「そうか、こちらとしても助かる話だ。それで条件とは？」

「まず降下で使う船だが……」

こうして、モンターク商会との交渉は成立する運びとなった。勿論不安はある。ある程度の思惑は聞けたが、それが全てとは思えない。体よく利用されているという感があったが。

こちらにも向こうを利用するだけだ。オルガは『全力で無茶振りすること』を決めていた。

「いいんですかい旦那、あいつらの要望を全部飲んじまつて」

「確かに想定以上の要求だったが、応えられないほどの無茶ではない。むしろ彼らにはこれから死地に飛び込んで貰わなければならないんだ。そう考えれば安い投資さ」

交渉を終え格納庫に向かう通路の中、トドを従えたモンタークは言葉を交わしながら歩いていった。交渉と言っても一方的な要求を突きつけられただけではないかとトドなどは思うのだが、主にとってはそのうでもないらしい。むしろ気のせいかな、機嫌がよいようにすら思えた。

と、通路の先、壁により掛かって腕組みしている人物の姿がある。それを確認したモンタークの笑みが深まった。

「お元気なようで」

「おう、死んでる暇はないからな」

だれあろうランディである。彼は皮肉めいた笑みを浮かべたまま、語りかける。

「モンターク商会が『GHのマネーロンダリングを受け持つ組織』だったとはな。いや、フェアド家のか？」

「ご名答。モンタークの長は代々フェアド家の者が務めていた。今は私がというわけですよ」

「道理で裏に伝手があると思ったよ。そっちのおっさんだけじゃ名だ

たる海賊は動かせねえだろうからな」

「裏取引に人身売買、その他後ろ暗いことも数多く手がけていますので。話を持ち込むくらいは出来るわけでして」

暗にこのあいだ海賊をけしかけたのはお前だろうと問いかけられ、それを否定しないモンターク。だがランディはそれを咎めるつもりはない。

「まあいいさ、結果的にありやこつちの戦力強化に繋がった。差し引きゼロって事にしておいてやる」

「感謝を。あなたに睨まれたら生きた心地がしませんのでね」

「ふん、言ってくれる。……まあそれはそれとして、だ」

ランディの目が、鋭く細められる。

「お前さん、『俺の敵』か?」

その言葉に、モンタークは笑みを崩さずこう返す。

「願わくばそうなりたくはありませんね。かといって己の手の内に引き入れたいとも思えません」

そう言つて再び歩き出す。おいおい良いのかと言いたげなトドを率いて、彼はランディの前を通り過ぎていく。そうしながらも言葉は続いた。

「我々は互いに利用し合う。それくらいが丁度良いとは思いませんか?」

「は、お互い背中にナイフを隠してか?」

「そうでなければ、逆に利用し合う価値もない」

そこまで言つて背中を向けたまま、モンタークは立ち止まる。

「ただ、私は『あなたを越えたい』。私のやり方で、ね」

そうしてから再び歩み出すモンターク。その背中にランディは声を投げかけた。

「お手並み拝見と行こうじゃないか。小僧」

『挑戦状』は叩き付けられ、それは受け取られた。

それがどのような形で果たされることになるのかは、まだ見えな
い。

グラズヘイム1近海。地球外縁軌道統制統合艦隊は軌道上に広く展開し、警戒を強めている。旗艦【ヴァナディース】にて構えるカルタは、今や遅しと鉄華団の……いや、ランディール・マーカスの襲来を待ちかまえていた。

「持ち上げられてのぼせ上がった挙げ句、わざわざ地球まで強引にやってくるのか。シャンテリアとかいう小娘、世間知らずにもほどがあるわね」

「あの、司令。クーデリア・藍那・バーンスタインです」

「覚えにくい名前ね。まあいい、ともかく度胸だけは買うわ。容易く通らせるつもりはないけれど」

彼女はランディを、彼に率いられた集団を舐めてはいない。いや、そもそも正面切つて勝てるなどとうぬぼれていなかった。

かつて受けた屈辱。それから彼女は自分に何が足りないのか、どうすればランディを打倒できるのか。それだけを考え貪欲に鍛え、模索し、知ろうとした。しかしながらどうにも……いささか『知りすぎてしまった』かも知れなかった。

基本的にカルタが情報を集めたり知識を得ようとする、まず自己より先に部下が動く。彼らはそもそもがイシュー家に長年仕えてきた家の者が多い。その目から見ても必要と思われる情報は先に排除されてしまうため、結局は当たり前障りのない、フィルター越しのものが手に入れられなかった。戦術関係からして正統的で王道的なものしか上がってこない。これでは話にならないと、カルタは考えた。そんなもので勝てるのであれば過去の昔に勝っている。ここで彼女は自分の周囲のものが戦い方に『凝り固まっている』事に気付く。

『見せるだけの戦い』であればそれで良い。だがそれは『勝つための戦い』ではない。彼女は部下に頼らず、暇を見て独自に情報を集め出した。元々家人を出し抜き散々『おてんば』をやらかしてきた経歴が

ある。四角四面な周囲を出し抜くなど、やろうと思えば不可能ではなかった。主に覗き込んだのはGHのデータバンク。イシュー家の権限を使えば、相応の情報を得ることが出来るのだ。

そして彼女は知ることとなる。GHの『闇』を。それは実態に比べればほんのさわりでしかなかったが、カルタにとってはショックを受けるには十分な内容であった。

それは自身の足下が崩れたような衝撃を彼女に与える。しかしそこで彼女は踏み堪えた。事前に何も知らなければ、GHの誰彼構わず当たり散らし、下手をすれば精神を病んだものとされて病院にでも叩き込まれていただろう。だが、ここで『ランディとの交流が生きる』。

『世の中は自分の思い通りにはいかず、また真正面から馬鹿みたいにぶち当たっていても目的は果たせない』。彼との交流から、カルタは我知らずそれを学んでいた。勿論全てを飲み込めたわけではないが、吠えたくるのを堪え、我慢し黙するくらいの事は出来た。

彼女は才に溢れた人間ではないかも知れないが、決して無能でも愚かでもない。そこから視線を変えて周りを見れば、今まで分からなかったこと、気付かなかったことも見えてくる。部下や周囲の思惑、後見人を請け負ったイズナリオの野望。そして……決して自分に真っ向から視線を向けようとしないう『友人』マクギリス。

それらに対して何が出来るのか。そう考えたときに驚くほどに自分が無力であったことに気付いた。部下や身近な周囲はまだ良い、己は無力であってもイシュー家の威光には従い、忠誠を誓うものが多い。だがそれ以外には——自分と同等、あるいは立場が上のものには何の影響力もないと肌で感じたのだ。

セブンスターズの第一席。イシュー家はそのような立場にあるが、己はその後継者ではなく『名代』にすぎず、職務もお飾りと称されている有り様だ。そのような立場に置いた周囲の考えは分かる。兄弟のいない自分に取り敢えず名代を務めさせ、いずれは7家のうちから伴侶を迎え入れさせ家を継がせる腹なのだろう。

それは己が認められていないことだと、カルタは判断する。屈辱であった。ランディに敗北したことよりもよほど屈辱であった。

であるならば、『覆す』。彼女の中に生まれたのは反骨心だ。名代などではなく真にイシュー家の後継者として万人に認めさせる。そうすることで自力で家を建て直し、確たる地位をGHに築いて……その上で、何かを抱えているマクギリスと対等に向かい合うと、そういった結論に至ったのだ。

そのためには実績が必要となる。誰にも文句を言わせない実績が。どうすればそれを得られるか……それを考えたときに真つ先に浮かんだのが、やはりランデイの事であった。

彼女が足掻き始めるとほぼ同時に姿を消した男。勿論彼女もそれに関して情報を集め、彼が死んでいないと言う結論に達した。そして策略にて放逐されたのであれば、必ず逆襲のために戻ってくると確信していた。

GHの敵となつた彼を打倒することが出来れば、またとない実績となろう。何よりもGH最大勢力であるアリアンロッドに対し優位を取ることが出来る。無論容易い話ではない。昼行灯に成り下がったと見せかけて己を鍛え上げた男だ。圏外圏で研ぎ上げた牙がどれほどのものか想像に難くない。

だが、是が非でも勝たなければならぬ。真正面から戦って倒すのではなく、『彼の目的を阻害する』。それが適えば光明は見えると彼女は絵図面を描いている。

今のカルタにとってランデイは最早ただの怨敵ではない。己の人生に置いて、絶対に越えなければならぬ『壁』となっていた。

モニターク商会の船と再度合流し補給物資や降下船の手配をすませた鉄華団は、いよいよ地球近海へと向かう事と相成った。

準備がほぼ整い、モニタークとオルガたちは最後の通信を交わしている。

「残念ながら降下時、そして地球に降りてからも、GHの襲撃を全て押さえることも情報をそちらに流すことも難しいだろう。あまり動けば私のことも露見してしまう危険があるからな。しかし可能な限り襲撃の回数や規模を押さえるように動いてみよう。あとは君たち次第だ」

「こっちの無茶を聞いてくれただけでもありがたいさ。あなたの思惑は別として、感謝する」

社交辞令ばかりでない礼の言葉をオルガは口にする。実際モンタークはオルガの無茶振りに良く応えてくれた。例え何らかの裏があったとしても、そのことには素直に頭が下がった。

「さて、名残惜しいが我々はこのあたりでお暇させて貰おう。もしなにか助けが必要となれば先に教えた連絡法で頼む。可能な限り力になろう」

「何から何まで世話になる。借りを返せる宛が確實じゃないのが申し訳ないところだ」

「そのあたりは君たちを信じているさ。悪魔を操り、悪魔が背後に立つ、君たちをな」

その台詞にオルガは複雑な気持ちになる。確かに多くの部分を未だランディに頼っていると思う。彼がもし地球に降りられなかったら……そう考えると不安が残った。

らしくないと心の中で自分を叱咤。自分たちもただひよこのようにランディの後を付いてきたわけじゃない。それなりに場数を踏んで、やりこなせるようになってきたはずだ。後はぶちかますのみと、弱気な部分をふるい落とす。

「期待には応えられるよう、努力はするさ。……所で、つまらないことなんだが」

気分を変えるように、気になっていたことを問うてみる。

「あなたの『本当の名前』はなんてんだ？ GHの将官でもない、裏の商會を牛耳るものでもない、あなたをなんて呼べばいい」

どうしてそれが気になったのか、オルガ自身にも分からない。ただ底の知れないこの男の本質、それに少しでも触れてみるべきだと思っ

たのか。

オルガの問いに、モンタークは微かに目を見開いたかに思われた。しかしすぐに元のすました顔に戻り、応える。

「そうだな、今は……いや、『未だにまだ、私は本当の名を持っていない』」

「名前を、持っていない……う？」

その言葉の意味を計りかね、オルガは眉を寄せる。

続けるモンタークの様子は穏やかで。

「お互いが首尾良く目的を果たせたならば、いずれそれを語ることもあるだろう。……では武運を祈る」

そうして通信は終えられた。

踵を返し去っていくモンターク商会の船団。それを見送る最中、ここまで随伴してきたハンマーヘッドから通信が入った。

「俺たちが付いてやれるのもここまでだ。さすがにテイワズ直系のタービズが堂々とやらかすわけにはいかないからな」

モニターに映る名瀬の言葉に、オルガは頭を下げる。

「ありがとうございます。兄貴には迷惑をかけっぱなしで申し訳ありません」

「気にするな。むしろお前らは良くやってる。ここまで乗り切れたのは決してリボン付きの力だけじゃねえ。胸を張れ」

そう言いながらも、だがなと釘を刺しておくのを忘れない。

「ここから先は完全にアウェイだ。一瞬の油断が命取りになりかねない。手拔かりなくやれよ、兄弟」

「肝に銘じます」

深々と頭を下げる。本当に出会ってからこっち、名瀬には世話になりっぱなしだった。いつかは恩を返さなくてはならないと深く心に刻む。そのためには。

「……よしお前ら！ いやいよ地球に降りるぞ！ 手筈通り降りる組と残る組、それぞれ準備を始めてくれ！」

果たすべき事を果たす。オルガの言葉を受け、鉄華団の少年達は慌ただしく動き出す。その様子を見ながら、クーデリアはオルガに言っ

た。

「ありがとうございます团长さん。ここまで連れてきて頂いて」

「……その言葉はまだ早えエ。あんたを地球に下ろすまでが俺たちの仕事だ」

「そうでしたね。ですがこの先お礼を言える暇があるかどうか」

クーデリアの言葉に、オルガは片目を瞑って応えた。

「ここに来て合流地点の変更するのは確かに気にはなる。【蒔苗 東護ノ介】だったか、アーヴラウの代表、病養でオセアニアのほうにいるってことらしいが」

「何かがあると考えておいた方が良さそうですね」

「いずれにせよ、俺たちは俺たちの仕事を果たすだけだ。必ずあんたを送り届ける」

「どうか、よしなに」

地球に降りても簡単には終わらない。漠然ではあるが、そのような予感を二人は感じている。

彼らの旅、その終わりはまだ見えず、先行きは不透明であった。だが、それでも歩みは止まらない。それが運命であるかのように。

警戒網に捉えられた艦影。その通達を聞いたカルタの反応は早かった。

「敵艦の進路を特定！ 正面に当艦から6番艦までを展開、対艦戦闘用意！ 7番艦と8番艦、9番艦と10番艦でそれぞれ組軌道上の警戒に当たれ！ 地球に降りるのであれば降下船を出す。定期便以外のものでもタイミングを合わせてくるならばそれだ！ 見逃すな！」

的確と思える指示を飛ばし、部下もそれに合わせて整然と動く。この数年間、実戦を想定した訓練に明け暮れていたのは伊達ではない。続いて回線を開いたカルタは、モニターに映るガエリオに向かって言

葉を放つ。

「来たわよ。予定通り降下船の確認を待つて先行した艦に合流なさい。こちらからもMS部隊を出すわ」

「了解した。協力に感謝する」

「ここまでお膳立てを整えたのだから、しくじったら折檻よ」

「おいちよつとまで折檻ってなんだ折檻て——」

何かまだ言いつのろうとしたガエリオの通信を遮断する。実の所カルタはガエリオに期待はしていない。昔から彼はどうにもお人好しで詰めの甘い部分があった。その本質は今でも変わっていないと思う。重要なところでしくじる、という可能性もある。

(まあそれは、私自身にも言えることだけだ)

内心で自嘲。周りが見えていなかった自分の空回りは、周囲から見ればさぞや滑稽に映っていただろう。いまでもそれが、全て払拭されたとは思っていない。まだ何も、結果を出していないのだから。

最善を尽くしたとは言わない。だが出来ることはやってきた。たとえ準備が整っていなかったとしても、敵がこっちの都合を鑑みてくれるわけではない。今発揮できる力を最大限に絞り出す。ここが正念場だ。

「さあ来なさいランデイル・マーカス！ 箸にも棒にもかからなかった小娘がどれだけ出来るようになったか、目にも物を見せてくれるわ！」

カルタは壮絶な笑みでもって、怨敵を迎える。

果たして。

「敵艦進路、真っ直ぐこちらに……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：！」

「降下進路を取る船舶複数！ すべて船籍不明です！」

「降下軌道付近よりエイハブウェーブ反応、MS数機を確認！」

早速相手も動きを見せる。今のところは想定内、しかしここからどのような動きを見せるのか予想も付かない。

だがカルタは一筋の汗を流しながらも、その笑みを崩すことはなかった。

軌道上会戦、その火ぶたは切られる。

※今回のえぬじい

「騎士道大原則ひとつ！」

『違っ！ カルタ様違います！』

カルタ様が何かを大幅に間違えたようです。

続くのでせうか

13・止めてみる。止められるものならばな

ミレニアム島。太平洋上に位置する、四大経済圏が一つ【オセアニア連邦】領の島である。その島に建てられた邸宅にて、一人の男が杯を傾けていた。

禿頭に立派な髭を蓄えた老齡の男は、傍らに控える部下から注がれた酒をゆつくりと味わう。

「ふむ、向こうは了承したか。……楽しみじやのう」

「は。……しかしながら、現状では交渉もままならないかと」

「それを含めて彼女……彼女らには期待しておる。ふふ、まるで救いの手を待ち望む姫君のようである事よ」

言いながら老人は酒の注がれたグラスを翳してみる。炭酸の泡を弾けさせる酒は、宝石のような輝きを見せていた。

「革命の乙女とそれに付き従うものたち。儂の、いやアブラウの窮地を救う力になれるか否か。見せて貰うとしようか」

南国の日差しがさす縁側。そこで老人は静かに待つ。

「停船信号、放て！」

カルタの号令の元、信号弾が放たれる。しかし目標の船は止まる様子を見せない。規定に沿った行動以上の期待などしていないカルタは軽く鼻を鳴らした。

「当然ね。進路は？」

「以前変わらず。いえ、待って下さいこれは……エイハブウェーブが二つ？ て、敵艦は二隻！ 前方の艦の陰に隠れてもう一隻、縦列を

組んでこちらに突撃を敢行してくるようです！」

「前方の艦を盾にするつもりか。どこから調達したか知らないが味な真似を。4番艦から6番艦は先行する艦に砲撃を集中。打撃により進路がずれたところで残りの艦は後方に打ち込め！」

「りよ、了解！」

敵の行動に対し即座に反応しようとする最中、上がる声がある。

「具申をよろしいでしょうかカルタ様……司令！」

「なにか。手短に！」

「はっ！ 降下船が確認された以上、前方の目標は囷である可能性が高いかと思われませんが！」

配属されてまだ日が浅い部下の言葉だった。当たり前に考えればそれは至極真つ当な言葉である。それを指摘できるだけ良い素質を持っていると思うが、それでもその言葉を否定しなければならぬ。なぜならば――

「――普通ならばそれが常道であろうが、相手はランディール・マークス率いる輩だ。降下船が本命と見せかけて、目の前の艦が軌道上ぎりぎりをすり抜け様に本命を放出するくらいのことにはやってのける。可能性は全て潰さねばならぬ」

「は、はっ！」

具申した者は完全に納得できた様子ではないが、構ってはいられない。一瞬たりとも目の前に迫る敵を見逃すわけにはいかないのだから。

それにどちらにしろここから降下する船の方に戦力を回しても間に合わない。先に派遣した艦とガエリオ達に任せるしかないのだ。であればここで、成すべきを成す。

「囷であろうとも何をしてくるか分からん！ 可能な限り短時間で黙らせる！」

容易くはいかないだろうという予感を抱えつつも、砲火の雨は叩き込まれる。

「うおっ!?! なんて砲撃だ！」

激しく揺さぶられるイサリビのブリッジで、オペレーターを担当して

いるダンテが悲鳴を上げた。

ブルワースとの戦いで接収した艦。それをイサリビと有線で繋ぎリモートコントロールで操船し盾とする。簡単に言ったが無論容易きことではない。着弾の衝撃でぶれる進路を安定させ、イサリビと同調させなければならぬからだ。マニュアルによる制御ではおのずと限界が生じる。

「このままじゃ前の船が保たない！ どうすんだユージン！」

同じくオペレートしているチャドが艦長席のユージンに問う。阿頼耶識によつてイサリビをコントロールしているユージンは、迷わず告げた。

「なら前の船のコントロールもこつちに寄せせ！ 同時制御で合わせろ！」

無茶な発想だ。艦の制御はMSほど複雑ではないにしろ、二隻の同時制御などどれほどの負荷がかかるか。

「無茶言うな！ 死ぬ気か!？」

「ここで無茶しないでいつ無茶するつてんだ！ オルガから任せられた仕事だ、きつちりこなさにや格好つかねえだろ！」

吠えながらユージンは思い返していた。作戦前のMS格納庫、降下の準備を行っているシノとだべっていた時のことだ。

「お前がそんなにオルガに憧れてたなんてなあ」

ユージン本人としてはオルガに対する不安や文句を言っていたつもりだったのだが、シノはそう取らなかつたようだ。「はあ？ なんとそうなるんだよ」とユージンは眉を顰めたが、シノは構わずにと笑みを浮かべる。

「いいじゃねえかよ。誰かに憧れる、誰かに認めて貰いたいって気持ちちは大事なモンなんじゃねえか？」

そう言われて不意に脳裏をよぎった言葉があつた。

——お前さん、いい男になるぜ——

からかい気味の言葉であつたかも知れない。だが自分たちの聞いた中では初めての賞賛だつたように思う。それを思い出して何となく口ごもる。気恥ずかしさというか、何かくすぐったいような感覚を

覚えたからだ。

複雑な心境で顔を顰めるユージンに、シノはこう言つてのけたものだ。

「カッコつけようぜ。オルガみたいにおっかなびつくりを腹ん中に沈めて、踏ん張ってな」

まったく、気楽に言つてくれる。思わず格好つけたくなつてしまふじゃないか。

ユージンは我知らず、獰猛な笑みを浮かべていた。

「ああもう、どうなつても知らねえぞ!」

半ばやけっぱちで、ダンテがユージンに制御を渡す。途端に脳が破裂するかのような衝撃が奔る。それを堪え、鼻血を流しながら、ユージンは咆吼した。

「行くぞオルア!!」

ブルワース艦の動きが突如生物じみたものになる。同時に追従するイサリビと完全に同調し、砲撃を完全に受け流すようになった。

「何だあの動きは!?!」

オペレーターが驚愕の声を上げる。直撃を避け、なおかつ後方の艦の完全な盾となる動き。生きているかのようなそれを目の当たりにしたカルタは、ぎ、と歯を噛み鳴らす。

「あの動き、阿頼耶識? しかし完全に同調していると言ふことは、LCSが有線で同時制御しているとでも言ふの!?! なんて出鱈目な!」

阿頼耶識による制御は脳神経などに負担がかかるはずだ。通常の操船ならまだしも二隻同時に操るなど正気の沙汰ではない。そこまですら無茶をやるように仕込んだのかランディール・マーカスは。それが勘違いだと気付かぬまま、彼女は指示を下す。

「全艦前方の艦に砲撃を集中! 阿頼耶識の動きであろうとも艦の機動力の限界は超えられん、飽和攻撃で奴らの盾をそぎ落とせ!」

いくら動きが良かろうが、強襲装甲艦というものは全ての砲撃を避けられるほど機動性が高いわけではない。訓練を重ね鬼のように錬度を上げた統制統合艦隊の集中砲撃は、徐々になれど確実にブルワース艦へとダメージを与える。

しかし時すでに遅し。

「予定位置に到達！ 『起爆』しろ！」

「あいよオ！」

突然ブルワース艦の装甲が弾け飛び、爆煙がまき散らされる。一見砲撃に耐えきれず爆発四散したのかと思われたが。

「!? センサー類の反応が消失！ 艦同士のデータリンクが一部断絶しました！ これは、ナノミラーチャフ!?!」

「あれは実戦では使い物にならないと！」

以前タービンスとの戦いでも使われたそれは、一時的に艦隊に対し目くらましの効果を与える。ブリッジのスタッフは動揺するが、カルタは怯まない。

「狼狽えるな！ 要は煙幕だ、後退しながらチャフが散布された空域に砲撃を叩き込んで吹き飛ばせ！ もう一方の位置を捕捉せよ！」

チャフを散らすと同時にその中から突撃されるのを防ぐ。そのかいあつて程なくチャフは拡散し始めたが。

「センサー類回復します！ 敵艦を捕捉——」

「熱源反応！ これは……さっきの艦の残骸です！」

視界とセンサーが回復したのを見計らったかのように、艦隊の方へ流れてきたブルワース艦の残骸がタイマーにより起爆。再びナノミラーチャフがまき散らされ艦隊の目が損なわれる。

「っ！ 急速後退！ チャフの範囲から離脱し索敵をやり直せ！」

迂闊。一度爆発したものはもう一度爆発しないという思いこみ。さすがこちらの裏をかくことに関しては図抜けていると、口惜しさの中にも半ば感嘆すら覚えながらカルタは舌を打つ。

「センサー類復帰！ 敵艦、捕捉しました！ ……こ、これは!? 敵艦最大加速でグラスヘイムIへと突撃を敢行します！」

「なんだと!?! いかん、間に合わない！」

艦隊への突撃、あるいはすり抜けての離脱ではなく、防衛線を突破した先、『敵の基部そのものに突貫する』。突撃し体当たり（ラムアタック）することを前提とした強襲装甲艦だからこそその発想。ランデイの薫陶が効いているのであれば、『それが出来るのならやる』。

ハーフビーク級戦艦の運用に慣れきっていたカルタの、痛恨の失念であつた。

「往けよやあああ!!」

ユージンの雄叫びと共に、イサリビはグラスヘイムIへと強かにぶちあたる。そのまま表面上を引つ掻くように滑り、離脱する。数瞬遅れて衝突したあたりから炎が噴き出した。

「グラスヘイムI、軌道より外されました! このままだと重力に捕まります!」

「救難信号を確認! グラスヘイムI内部に火災発生、その他被害多数!」

「やってくれる……っ!」

こちらが救助に向かい、後を追えないことすら計算に入っていたのだろう。完全にしてやられたと、カルタは歯噛む。

「……これより当艦からら6番艦はグラスヘイムIの救助に向かう。MS部隊を先行させ作業に当たらせろ」

「は、はっ!」

この場は負けだ。それを認めよう。だが。

(まだ、終わりではないわ)

カルタの瞳は闘志を失っていない。

一方、突撃を敢行した後、またしてもナノミラーチャフをばらまいて逃亡したイサリビでは。

「どうよお前ら! 格好よかつたか!」

してやったりと満面の笑みでそう言い放ったユージンが、盛大に鼻血を吹いてひっくり返った。

「ユージン!」

「おいしっかりしろ!」

取り敢えず、命に別状はなかったようである。

「最高にかしてたぜユージン！」

イサリビが首尾良く目的を果たしたと連絡を受け、オルガは喝采の声を上げた。

作戦の第一段階は成功。ここからが本番だ。

「さて、ない知恵絞った愚策って奴が通じるか否か。一発大勝負といこうか！」

氣勢を上げるオルガが乗るのは降下船（シャトル）——『の1隻』。彼がモニター商會に頼んだ『無茶振り』の一つ。それは。

「降下船が『10隻』だ?!? くそ、これではどれにクーデリア・藍那・バースタインが乗っているか分からん！」

背中に大型ブースターパックを追加装備して機動力を上げたキマリスを駆るガエリオが呻く。2隻や3隻なら護衛に出てきたMSの動きなどから当たりをつけられるが、これだけの数があるとどれが本命なのか予測できない。カルタが寄越したMS部隊総出でかかれれば止めることも可能だろうが。

「……そうは問屋が卸さない、か」

高速で接近するMSの反応。ランディール・マーカス率いる鉄華団のものに違いない。他はともかくランディールを押しさえ込まなければ降下船に手は出せないと思案するガエリオ。そこに通信が入った。

「ランディール・マーカスは我々が押しえます！ 特務三佐殿は目標の搜索を！」

カルタの部下達だ。降下軌道に間に合った二個中隊の半分が、迫る先頭の敵に対し果敢に挑まんとする。

「待て！ 彼の相手は俺が……」

「特務三佐殿にはお役目があるでしょう！ それに奴は我等地球外縁軌道統制統合艦隊が怨敵。雪辱を晴らす機会なのです、お察し下さい」

そうまで言われては、引き留めることなど出来なかった。

「……分かった。武運を祈る」

「感謝を。……総員、疾風怒濤がごとく往くぞ！ これまでの成果を見せろ！」

中隊長の号令と共に加速する改装型グレイズ——「グレイズリッター」中隊。それを確認したランディは不敵な笑みを浮かべる。

「来たか。……先頭の連中は俺が相手をする。お前らは降下船に近づいてきた奴らを片っ端からぶん殴れ。戦闘時間はせいぜい10分、高度に気を付けろよ！」

「了解」

「応！」

「あいよ！」

三日月達の返事を背に、機体を加速させた。モニタークへの要求で持つてこさせた大型スラスターユニットを両足に装備したシユヴァルベ・グレイズは、重力に引かれる最中でありながらもこれまでと同等以上の加速力を見せる。

「調子は良好。さあてどれだけ出来るようになったか、見せて貰おうか磨眉の手下ども！」

目に見えて速度を上げた濃紺の機体を確認した中隊長は、背中に流れるいやな汗を感じながらも命を下す。

「各機散開！ 動きを留めるなよ、目で追おうとすれば見失う。レーダーとセンサーで常時位置を確認、距離を保て。無理に反撃しようと考えな」

『了解！』

鳳仙花が弾けるように散る部隊。そのままそれぞれがランダムな動きでシユヴァルベ・グレイズから一定以上の距離を保ちつつ囲い込もうとする。

「良い判断だ。だがな」

く、と僅かな動きでスロットルを全開に持つていく。急激な加速だけで、一機のグレイズリッターの懐に飛び込んだ。

その勢いを殺さずに機体を捻って蹴りを食らわせるランディ。しかし。

「なんとおおおお！」

装備した剣（バトルブレード）を盾にするように蹴りを受け止めるグレイズリッター。勿論堪えきれずに吹っ飛び、ランデイの機体は彼方だ。

蹴られた機体は即座に体勢を立て直し、再びシュヴァルベ・グレイズの動きを追う。

「それでいい、コクピットに直撃さえ喰らわなければなんともなる！ 恐れず奴にまとりつけ！」

蹴りつけられることすら考慮に入れた、対ランデイ用の戦術。倒すためのものではない、足止めを喰らわせるためだけのそれは、かつての統制統合艦隊では絶対に選択しなかったであろうやり方だ。

ランデイは感心したように鼻を鳴らす。

「ふん、ちいとは頭が回るようになった。こいつは俺の方が誘い込まれちまったか？」

そう言いながらも、彼は余裕の態度を崩さない。

「いいだろう、付き合ってやろうじゃねえか！」

彼には確証がある。鉄華団の少年達は、そう簡単には打ち倒されないと。自分一人が足止めを喰らったところでどうと言うことはあるまい。そのくらいには仕込んだ。『彼らが使うシミュレーションプログラムは、こつそり上げ続けていたのは伊達ではないのだから』。

味方に対しても結構鬼なランデイの思惑はともかく、三日月達もまた戦いの時を迎えていた。

「来た。ガンダムフレームは俺がやる」

「あいよ、俺はあつちのグレイズっぽいのだな」

「応、こっちは任せろ！」

降下船の護衛に付いた昭弘のグシオンを残し、バルバトスと流星号は一気に飛び出す。全機が腰回りや両足に追加のスラスタユニットを装備しているため以前より機動性は向上していた。これらもまたモニターク商会に無理を言って取り寄せたものである。

突貫工事で備え付けたにしてはスムーズに反応する機体に、おやっさんに感謝しないとなとか思いつつ、三日月は敵を迎える。

「昭弘が戦(や)った時のデータで見たとおり速い。いや、もつと上か」
「またお前か！ いい加減鬱陶しい！」

高速で迫るキマリスのランスを、メイスで弾き飛ばす。そのまま2体のガンダムフレームは目にも止まらぬ速度で斬り結ぶ。

一方アインのシュヴァルベ・グレイズと相対したシノも激しい戦いを繰り広げていた。

「今日こそ貴様らに鉄槌を下す！」

「は、そう簡単にやらせるかよ！」

ノーマルのグレイズより高い性能を持つシュヴァルベ・グレイズだが、百鍊の予備パーツなどを使って改修され阿頼耶識を搭載した流星号の性能も劣るものではない。そしてランディの特製シミュレーションとアミダ達からのしごきを受けたシノ自身の技量も向上している。結果繰り広げられるのは互角の戦いであった。

「神の国への引導を渡し、克蘭ク二尉の無念を晴らす！ 覚悟！」

「勢いだけあってもなあ！」

激しく火花を散らしてぶつかり合うマチエット。決着は簡単に付きそうにない。

さらに降下船の護衛に付いた昭弘だが。

「1個中隊が丸々相手か。ちときついがやるしかねえ」

両手に持った300mm滑腔砲を迫る敵部隊に向かって放つ。放たれた砲弾は、かろうじて回避された——所で炸裂。多量の金属片を周囲にばらまく。

「近接信管か！ 各機怯むな、散開し四方から当たれば一機では対応しきれん」

『了解！』

大口径の砲を恐れず挑みかかるグレイズリッターの群れ。それを迎え撃たんと砲を向けるグシオン。しかし本格的な交戦が始まるうとしたその時、上方からグレイズリッター部隊に向かって弾幕が張られる。

「なに！ 新手か！」

回避する敵。何事だと眉を寄せる昭弘の前に現れたのは、2機のM

Sであった。その機体から通信が入る。

「やつほー、助けに来たわよ」

「ラフタ……さんか？ その機体は？」

昭弘の疑問に、もう一方の機体に乗ったアジーが応えた。

「百鍊のままじゃティワズでございと宣伝しているようなものだからね、ちよつといじつてきたのさ」

「そんなわけでこれからは百鍊改め『漏影』ってことで、よろしく」

言うやいなや、ダークグレーに染められた2機のMSは舞うような機動で迫り来る敵を翻弄し始める。「……ありがてえ」と呟いてから、昭弘は再び砲をぶっぱなした。

重力が働き始め、突入の時間は刻一刻と迫る。

そのタイムリミットに焦りを覚え始めたのはガエリオであった。

「まずいな、時間がない」

さしもののガンダムフレームも素で大気圏に突入すれば無事ではすまないし、その用意もない。時間がかかりすぎたのは未だ目標の所在を確認できていないのと、目の前の敵が手強すぎるからであった。

そのバルバトスを駆る三日月であったが、彼にはまだ幾分余裕がある。

「うん、大体動きが読めた」

大出力のスラスタを惜しみなく使うことで、キマリスは高度な機動力を確保している。見た目だけであればバルバトスは一方的に翻弄されているように見えただろう。だが改修されたバルバトスの機動性はキマリスに勝るとも劣らない。一方的に見える状態は、偏に三日月がキマリスを『見極める』ために受け手に徹していたからだ。

そして、大まかではあるが見極めは付いた。

「速いけど、雑だな」

機動力こそ高いが、速度に任せた一撃離脱を繰り返すことに拘っている。恐らくはランディ仕込みであるこちらを警戒してのことだろうが、消極的で決め手に欠ける。その上。

「それに動きがちよつと崩れてきてる」

焦りによる僅かな動きの乱れ。それが見抜かれていた。ガエリオの擁護をするわけではないが、彼の技量は決して低いものではない。一般の兵より相当上のランクに位置する。しかしながら死に物狂いで生き延び、実戦を重ねてきた三日月はそもそもものあり方からして違う。かてて加えてランディやアマミダの教練を受け、経験を積んだ彼は爆発的に技量を伸ばしていた。全く同じ条件でぶつかれば、ガエリオの勝率が高いものではなかった。

だからといってそう簡単に倒せるかとなれば話は別だ。乱れは出てきているが隙があるわけではない。まともに倒そうと思つたら手間がかかるし確実ではないだろう。

「だったら」

『隙がなければ作る』。三日月の目が鋭さを増した。

再度の突撃。それを前にバルバトスは――

『持っていたメイスを、軽くキマリスの進路上に放り投げた』。

「なんだと!?!」

投げつけた、とかではない行動に虚を突かれるガエリオ。しかし迷いは一瞬。どのみち邪魔な代物だと速度を落とさずそのまま弾き飛ばすが。

「!? 奴は!?!」

ほんの一瞬目を反らしただけ。メイスに注意が向いたその刹那でバルバトスは姿を消していた。しかしリーダーからの反応がその存在を示している。

「上か!」

瞬時に加速し回り込んだのだと気付くが遅い。その時すでにバルバトスは背中にマウントしていた太刀を引き抜き、背面からキマリスに斬りかかっていた。

「がアッ!」

衝撃と破砕音。キマリスの背中に装備された追加スラスターユニットが破壊され爆発する。しかしまだ致命傷ではない。

「浅いか。やっぱり宇宙（そら）じゃ踏ん張りが効かない」

思い通りの手応えが得られないことに舌を打つ三日月。だが今の一撃で生じた勝機を逃すつもりはなかった。

「終わりだ」

とどめを刺さんと突きの構えで突撃するバルバトス。体勢を大きく崩したキマリスの回避行動は間に合わない。

「特務三佐殿！」

その時ガエリオの窮地を察したアインが、強引にシュヴァルベ・グレイズでキマリスの前に割って入る。

太刀の切っ先が、コクピットを貫いた。

「アイン！」

力を失ったシュヴァルベ・グレイズを、キマリスが受け止める。ガエリオは必死でアインに呼びかけていた。

「アイン！ なぜ俺を庇った！」

「あなたは……俺に再び立ち上がる力をくれた。……見殺しには、できない……」

ごぼりと血の塊が吐き出される。

「おい！ しつかりしろアイン！」

イジエクトが作動し、シュヴァルベ・グレイズのコクピットが射出される。それを掴んだキマリスは身を翻し、即座にその場を離脱した。それに僅かに遅れてシノの流星号が駆けつけてくる。

「すまねえ！ いきなりそいつが……って片づけちまってたか」

漂うシュヴァルベ・グレイズの様子を見て、彼は状況を察したようだ。三日月は漂う紫の機体に手をかけると、降下軌道に放り投げる。

「船に回収してもらおう。ランデイが喜ぶ」

「降下中に無茶振りするねエお前」

言葉を交わしてから彼らは戦場に向かう。戦況は膠着状態。ランデイはMS中隊と戯れ、グシオンと2機の漏影は降下船を護りつつ交戦中。統制統合艦隊の錬度は高いが漏影の二人は百戦錬磨、しかし数

の差が優位を阻む。結果互いに決め手を欠いていた。

そこに乱入する2機。戦況は傾き始める。

「特務三佐が撤退!? こいつら想像以上にやる」

ランデイの事を重視していた統制統合艦隊の中隊長は、知らずの内に鉄華団を舐めていた事を自覚した。敵を甘く見るなどなんたる無様と気持ちを改める。

「だが簡単に地球へといかせるわけにはいかん！ 我等が意地を見せる！」

「しぶといし、結構こなれてる。面倒だな」

グレイズリッター部隊の猛攻に眉を寄せる三日月。と、そこに新たな乱入者が現れた。

三日月の隙を狙っていた機体の背後を突き、一撃で仕留めた影。華麗とすら言える技の冴えを見せたのは、赤い細身のMSであった。

「今の動き……もしかして、チョココの人？」

「ほう、分かるのか」

以前ちらりと一瞥した程度の動きから、赤いMS——「グリムゲルデ」の乗り手が誰だか察したらしい。その乗り手、モニターは軽く笑みを浮かべた。

「そちらに合わせる。蹴散らすぞ」

「ん、助かる」

2機のMSは、まるで長年バディを組んでいたかのように息の合ったコンビネーションを見せる。攻め手であった統制統合艦隊の部隊は逆に防戦一方とならざるを得ない。

やがて。

「そろそろ時間だ、もういいよ」

「了解した。ではいずれまた」

突入の摩擦と圧力で機体の表面温度が上がり出す。頃合いを見計らってグリムゲルデは撤退していった。

「くっ、ここまでか。総員引き上げだ！ 仕切直す！」

「引き際は心得ているか。……よし、俺らも船に戻るぞ」

鮮やかに撤退していく部隊を見送り、ランデイは戦闘の終了を告げ

る。それを受けて鉄華団と2機の漏影は降下船に向かおうとする。しかし。

「まだだ！ まだ終わらせん！」

1機のグレイズリッターが命令を無視して突貫をかけてきた。

「三尉!? 何のつもりだ、このままでは重力に捕まるぞー！」

「……先の交戦でメインスラスターをやられました。どのみち軌道上には戻れません」

「なんだと!?!」

「カルタ様万歳！ 地球外縁軌道統制統合艦隊に栄光あれ！」

スラスターから煙を噴きながらも、その機体は覚悟を乗せた突撃を敢行する。

「貴様らには、せめて一太刀！」

振り上げた剣で、降下船に収容される直前であつたバルバトスに打ちかかる。咄嗟に引き抜いた太刀でその斬撃は受け止められるが、結果バルバトスは船から引き剥がされることとなった。

「ミカア！」

『三日月！』

三日月の身を案じるオルガとクーデリア、アトラの声が響く中、船の窓にシャッターが降りる。

「1機だけでも！」

「しつこい、なっ！」

大上段に振り上げられる剣。瞬時、三日月の集中力が高まった。

虚空を踏み込むと同時に脚部のスラスターが作動。まさに空を駆けるような加速が生じる。それに乗せた一撃は、見事グレイズリッターの胸部を袈裟懸けに切り裂いていた。

「ふ、不覚……」

パイロットは事切れ、機体から力が抜ける。仕留めたことを確かめた三日月は、不思議そうな顔で己の手の平を見つめた。

「今のは……」

感じた妙な感覚に戸惑いを覚えるが、今はそれどころではない。降下船から離れ重力に捕まったバルバトスはこのままだとロースト。

三日月は蒸し焼きだ。

「こんな所で終われないよな、バルバトス」

三日月のその言葉に応えたかのように、バルバトスの両眼に強い光が灯る。

上層部を抜け、熱が収まる。窓のシャッターが開くのを今や遅しと待ちかまえていたオルガたちは一斉に窓辺へと詰め寄った。

「バルバトスは、三日月は!?!」

「いた! あそこだ!」

船から少し離れた位置。夜空の中舞うバルバトスは、倒したグレイズリッターの上にサーファアのごとく乗り、大気圏突入の盾としたのであった。

「一時は冷や冷やしたが、やるもんだ」

ランディの言葉に安堵の溜息を吐く鉄華団の面々。

一方無事窮地を切り抜けた三日月は、モニター越しに夜空を見上げていた。

「あれが俺と同じ名前の、三日月か」

光学的と物理的、二重の意味で欠けた月が、夜空に朧気に浮かんでいる。

鉄華団は地球へ降り立った。

だが彼らの戦いは、まだ終わりを迎えてはいない。

※今回のえぬじい

「リアクティブアーマー……折角作っただがなあ……」
「たまにはこういう事もありますよ、おやつさん」
筆者が忘れていたわけではない。決して。

14・往くも戻るもお前ら次第

フアリド家が所有する人工島。そこに用意された邸宅へ、マクギリスは足を踏み入れた。

「マツキー！ お帰りなさい！」

「アルミリア、待たせてすまなかつたね」

マクギリスの姿を確認した途端彼に飛びついてきたのは、まだ幼さを残した少女。「アルミリア・ボードウィン」、マクギリスの婚約者であり、ガエリオの年の離れた妹だ。

まだ10才に満たない少女との婚約は、明らかに政略的な思惑が見て取れてるのだが、それとは関係なくアルミリアはマクギリスを心から慕っている様子であった。

己の腹にやっと届く背丈の少女を抱きかかえ、マクギリスはまんざら演技でもなさそうに優しい表情で語りかける。

「今日は1日ゆっくり出来る。今まで待たせたお詫びに、何かして欲しいことはあるかな？」

「じゃあ今日はマツキーにお茶をぐちそうして上げる！ クッキーも焼いたのよ、食べて！」

「ああ、ぐち相伴にあずかろう」

危なっかしい手つきながらも、心の底から楽しそうに茶の用意をするアルミリア。そんな彼女を見守るマクギリス。

様々な思惑によって形作られた歪な空間。だがそこには、確かな暖かみと安らぎがあった。

暗闇の海岸線で蠢く影がある。

「そつち引っかけてくれー」

「おーし、ゆっくりだぞゆっくり！」

フロートを付けたコンテナが、次から次へと引き上げられる。モンターク商会の降下船から投下された物資。夜陰に紛れ海上に投下することによって、衛星軌道上からの目を誤魔化したのだ。もつとも大した時間稼ぎにもならないだろうが。

「ま、やらねえよりはましか。MSは全部格納庫に入れたな？」

「はい、武器弾薬も運び込みました。後は細々した日用品とかですね」
頭を掻きながら言うオルガに、確認していたヤマギが応える。無事ミレニアム島に上陸した彼らは、休む間もなく物資やMSをすぐにも使えるよう整えていた。

まだ終わらない。クーデリアを送り届けたその先、『なにかがある』。それは漠然とした予感ながらも確信的なものであった。

「まあどのみちこっから火星に帰る算段も考えなきゃならんわけだな。……あまり借りは作りたいかねえが、場合によっちゃ『あの男』に頼む事になるか」

「それですけど、ランデイさんがなんか心当たりがあるって言ってましたね。いま連絡（つなぎ）を取ってるはずですよ」

「そつちの景気はどうだい？」

「まあぼちぼちと言ったところさ」

用意された宿泊施設の一室、そこでランデイは何者かと通信を交わしている。

「ふん、お前から連絡とは珍しいこともあるものだ」

「またまた、大体話は聞いているんだろ？ 予想はできるんじゃないやねえか？」

『いざというときに地球から逃げ出す算段』か。コブつきじや留まっ

て地下に潜るのも難しいだろうしな。……で、そうなった場合報酬は？」

『中古のシュヴァルベ・グレイズ1機』。……とおまけでグレイズとかそのあたりのが何機か分つくってところか。そのくらいならコロニーあたりまで連れてく『逃がし屋』雇えんだろ」

「自分の愛機を差し出すとは大盤振る舞いだな。随分入れ込んでるじゃないか鉄華団とやらに」

「ああ、あいつらが『俺の目的に一番近い』。鍛え上げりやあモノになる」

「は、やっかいなのに惚れ込まれたなそいつらも。……用意はしておく。必要となったら声をかけろ」

「ああ、頼むぜ『大尉殿』」

「火遊びは程々にしておけよ、『ジャンクヤードプリンス』」

どうやら話は纏まったようである。通信を切ったランディはにやりと笑って席を立った。

「っていうわけで、こいつはバラしてパーツ揃えておいてもらえねえか？ 売らなかつたとしても今んとこ予備パーツにしかならねえしな」

そういうランディが指し示すのは、コクピットブロックが損失したシュヴァルベ・グレイズ。キャリアに寝かされたそれを見ながら、雪之丞はぼろぼろと頭を掻いた。

「ちいと勿体ねえような気がするな。誰か適当な奴を乗せる……つてわけにやあいかなええか」

「今からじゃ阿頼耶識搭載しても、前みてえに機種転換訓練の時間なんかねえ。おまけにこいつはノーマルのグレイズよりじやじや馬ときてる。乗りこなせそうな奴はこぞつてパイロットやってるし、整備

したところで今のところ宝の持ち腐れさ」

予備機にしておくという手もあるが、そうすると一機分余計に整備や運搬の手間がかかる。平時ならともかく余裕のない現状では控えていた方が良さそうだ。

「まあおかげでうちとしてもグレイズ系のデーターが手にはいるから、ありがたい話なんだけどね」

キャリアから降りてきながら言うのは「エーコ・タービン」。名前から分かる通りタービンのメンバーが一人で、主にMSなどの整備を担当している。ラフタ達と共に地球へ赴いた彼女は、鉄華団にとって大きな助けとなっていた。

「それで、これはバラすとして、『飾り付き』の地上用パーツはあんたの機体に移植でいいのよね？」

三日月が倒して大気圏突入時の盾にした機体はかなり損傷していたが、多くのパーツが流用可能であった。地上での戦闘を前提としたそのパーツのいくつかを、ランディのシュヴァルベ・グレイズに移植しようと言うのだ。

「ああ、ぶんぶん跳び回る必要はあんまねえからな。ホバリングで高速移動するほうがガスの消費も押さえられる。取り敢えずブツの移植だけして貰えりや、調整（アジャスト）はこっちでやるさ」

「ん、りよーかい。まあバルバトスでもちよつと試したいことがあるから、どっちにしろあまり手間はかけられないんだけど」

「足回りに手を入れて走破性を高める気か。今の三日月ならその方がいいかもな」

機体のセッティングなどの意見を交わしていく。彼らにはまだ、暫く休む間もなさそうだ。

翌日、蒔苗からの差し入れという魚を食事に出された鉄華団の少年

達の多くが拒否反応を示したり、それにムカついた料理人のアトラと魚平気なランデイとでほとんどを平らげたりと一悶着があったが、その暫く後に蒔苗 東護ノ介本人との面会は成った。

老齡にしては隆々とした体軀と威圧感をもつ蒔苗は、好々爺とした様子を見せてクーデリアたちを招き入れる。

「遠いところをよう来てくれた。儂が蒔苗 東護ノ介じゃ」

「お初にお目にかかります、クーデリア・藍那・バーンスタインと申します」

クーデリアと共に蒔苗の元を訪れたのは、メイドであるフミタン。鉄華団から代表としてオルガとビスケット。そしてテイワズの代理人としてメリビットが参加している。この中で緊張しているように見えるのはビスケットのみ。オルガは開き直ったか堂々と構え、他の面子は自然体である。

「待ちわびておったよ、一日千秋の思いでな。……差し入れなどさせて貰ったが、十分であつたかの？」

「はい、ありがたく頂戴致しました」

「ほっほ、それは何より……」

「話の途中申し訳ないが、蒔苗さん、ゆっくりしている時間はあまりねえ」

口を挟んできたオルガに対して、蒔苗は余裕の態度を崩さない。

「GHのことかの？ それであつたら心配はいらん。ここはオセアニア連邦の管轄地でな、連邦の許可がなければ立ち入ることはできませんよ」

「連邦が俺達を匿う理由はないはずですが」

「それが実は大ありなのじゃよ」

蒔苗の話によると、鉄華団がドルトで起こした一連の騒動のおかげで一時的にドルトの生産力が落ち込み、そこに乗っかる形で連邦は利を得たのだという。いわば鉄華団は恩人と言ったところか。

「それに以前より連邦を含む経済圏はGHに対し、不満をため込んでおる。あの一件でどれだけのものが溜飲を下げ喝采を挙げたことか。感謝状の一つも出したいくらいじゃろうて」

どうにも経済圏は経済圏で色々ありそうだ。ビスケットは嫌な予感に眉を顰めた。

「いやいや愉快痛快。それで……ふむ、お前さん方が来た理由はなんだったかな？」

わざとらしくとぼけてみせる蒔苗。それに動じた様子もないクーデリアは、微笑すら浮かべて口を開いた。

「はい、以前からクリュセ自治区より打診していましたが、火星ハーフメタル採掘規制の解放についてのお話ですが……」

「おお、そうじゃったの。それは儂も前々から推し進めたいと考えておった」

「ではー！」

「しかし今は無理じやの。何しろ儂は現在失脚して亡命中の身。つまり『何の権限も持つておらん』」

「はア!？」

何でもないように吐かれた蒔苗の台詞に、オルガは思わずすつきょうな声を漏らした。何かがあるとは思っていた。が、流石にこれは予想外だ。しかし考えてみれば兆候はあった。なぜアーヴラウの代表である蒔苗がこんな所で養生していたのか。そこから辿るべきであったかと内心ほぞをかむ。

こうなると大体次の展開も読めてくる。苦虫を噛みしめるような心境でオルガは口を開いた。

「俺達は骨折り損のくたびれ儲けか。……って言いたいところだが、何の考えもなしに話の席を設けたわけじゃねえでしょう。何を考えてるんですかあんたは」

「ふむ、思ったよりも聡いのお。となれば話は早い。儂が代表に返り咲く手段があるのじゃよ」

その手段とは近々カナダのエドモントンにて行われる、アーヴラウ代表選出会議に蒔苗が出席し選出されること。そのためにはエドモントンまで足を運ばなければならない。

ただし。

「儂の政敵がGHと手を結んでおる。妨害があると考えて間違いはな

いのお。何しろ儂が蹴落とされたのは、GHの裏工作に嵌められたからよ。その上でアーヴラウに留まっておれば命を狙われる危険もあった。ゆえにここで機会を伺っておったのさ」

「……なるほど読めた。だから俺達にそこまでの護衛を頼みたいって腹だな？」

何か言いたげなビスケットを手で制し、オルガは話の続きを促す。

「その通り。GHの妨害をくぐり抜けこちらのお嬢さんを地球まで送り届けたお前さんらを、儂は買うておる。その力を是非とも貸して欲しい」

「……その選挙ですが、勝算はあるのですか？」

まるで動じた様子のないクーデリアがそう尋ねる。この状況を予想していたのか、彼女には迷いも揺るぎもない。

応える蒔苗はその様子を興味深い目で見ていた。

「うむ、勝算はほぼ10割と言ってもいい。今の議員達はほとんど全てGHに対し反感を覚えているか不満を募らせておる。政敵の「アンリ・フリユウ」に付いているのはGHに媚びを売って取り入ろうとするごく少数のみじゃよ。選挙時に儂が議会へとたどり着けば、それで勝ちじゃ」

そう言つて老人はにやりと笑つた。

「儂が代表に戻れたならば、相応の報酬を用意しよう。それに国家中枢へと繋がりが出来ることは、『お前さんらの後ろ盾』にとつても旨みのある話ではないかの？ 上手いこと話が回ればかなり大きな取引も期待できようさ」

テイワズにとつても悪い話ではないと、そうほのめかす。それを言われればけんもほろろと断るわけにもいかない。オルガはむう、と考え込む。

「ま、のんびりとは言わないが、時間はまだある。よく考えるがよからう」

そう言つてひとまずはこれまでと、蒔苗は席を立った。

残されたものたちはそれぞれが思いにふける。のるかそるか。重い選択肢が彼らには突きつけられたようだ。

「ふざけるな！ こいつを、アインを機械仕掛けの化け物にするつもりか！」

前回の戦闘の後、アインは集中治療室に放り込まれ一命を取り留めた。だがそれもかろうじて命を繋いでいる状態で、その命の火は今にもつきようとしていた。

その事実を受け入れられず、直せ戻せ仇を討てる体にしろと無理難題をふっかけるガエリオだったが、医師から提示された妥協案に対してさらに激昂する。

臓器の一部を機械化することによる延命。再生治療ではとてもではないが間に合わないがゆえの緊急的な措置。しかしながらGHでの教育を受け感化されているガエリオにとっては、肉体の機能を機械に置き換えるなど死よりもおぞましいものであった。

基本GHが事実上支配する地球において人体改造は禁忌とされているが、何事にも例外はある。再生治療を受ける金のないものは、未だに旧式の動力すらない義肢を使わざるを得ないし、再生治療が間に合わなかったり使えなかったりする状況で、『無理矢理延命せざるを得ない時』には使用されたりする。ゆえにそう言ったことに対するノウハウや用意は十分になされていた。そのような事実に思い当たりもしないガエリオに対して医師の提案は火に油を注ぐ行為に等しい。さらに食って掛かろうとするガエリオだったが、その時緊急の連絡が入ったとの知らせを受ける。憤りを隠さぬまま通信を受けてみれば、その相手は休暇を取っているはずのマクギリスであった。

「状況を確認するために連絡を入れさせて貰ったが……話は聞いた。アイン・ダルトン三尉の件、なんとかなるかも知れない」

「なに!? 本当か!？」

即座に食い付くガエリオに対して、マクギリスは深刻な表情で告げ

る。

「ああ、だが人道的かどうかは疑問が残る……いや、はっきり言おう。『悪魔に魂を売る所業かも知れない手段』だ」

これまでにない、重苦しい雰囲気。我知らずガエリオはごくりと喉を鳴らす。

「話を聞けば、後戻りはできない。だが、このまま何もしないよりは可能性はある。それを踏まえてガエリオ、『君はどうする』?」

正しく悪魔の囁きのごとき言葉。それを受けてガエリオは――

どうするべきか。オルガにしては珍しく、今後のことに対して深く迷っていた。

もしここで地球を脱する手段がなかったとすれば、逆に迷わなかっただろう。蒔苗を助けることでしか、状況を打開する事は出来なかったはずであるから。しかしいつでも逃げられるという選択肢は、これから先へ進むことを足踏みさせてしまう。

クーデリアをここまで送り届けたことで最低限の義理は果たした。このまま帰ってもそれなりに仕事を続けることは出来るだろう。火星支部が混乱し地球もこの様子では、暫くGHも手を出すことは難しくなる。その間に細々とでも安定した生活基盤を整えることは可能だ。ここでリスクを負ってまで名を上げる必要があるのか。

かてて加えてクーデリアが、「護衛はここまでで十分」などと言い出した。

「逆に少人数の方が、GHの目をかいくぐりやすいと思うのです。幸いにして、伝手はあるのです。油断ならない相手ですが、上手く利用すればエドモントンまでの足は確保できるでしょう」

GHに通じているであろうモンタークを利用することを躊躇わない考え。彼の危険性を考慮してなおそう言うのであれば、それなりの

勝算はあるのだろう。だがそれでも、不安を覚えずにはいられない。確かに少数で忍んでいけば捕捉はされにくいだろうが、武力にて阻まれた時、彼女らだけでは押し通ることは難しい。自分たちが共にあれば忍び参る事は難しくともいざ争いが生じたときでも対処できる。だがそれは、団員に命を張れと言うことだ。それだけの価値と理由があるのか。ただ目の前の障害をくぐり抜けるために武力を振るってきただけの自分たちにとって。

ぐるぐると思考が巡る。答えが出ないもどかしさ。プレッシャーとも急かされているのとも違う、焦りにも似た何か。そういったものが心の中に渦巻いているようだ。やはり一人で考えるのは限界があるのか。

「……通信が終わったら、ビスケットと話してみるか」

オセアニア連邦所有のコロニーにイサリビごと潜伏しているユージンから入った通信。ビスケットはそれに対応していた。

彼一人にしたのはわけがある。ユージンがとある人物からのメールを預かっていたからだ。

サヴァラン・カヌーレ。ビスケットの兄からのものである。

『このメールを見ていると言うことは、無事に地球にたどり着いて一息入れていると言うことだろう。それならば一安心と言ったところだがどうだろうか。』

こちらは何か無事交渉を進行させることが出来そうだ。もちろんそれですぐさま全てが解決するわけじゃない。きつと長い時間がかかることだろう。だが今までより前進したことは確かだ。これもお前達のおかげだろう。

お前達が武器密輸と裏の事情に気付いてくれたことで、無益な争いと犠牲を避けられた。改めて礼を言わせてもらいたい。そちらの団

長さんにもよろしく言っておいてくれ。俺だけではなくナボナさんや労働者一同皆感謝していると。

こちらはそう言った感じだが、お前の方はどうだ？ 危険な仕事だし、無茶をしなければならぬことも多いだろう。だが決して無理をするな。無理は視野を狭くして焦りを呼ぶ。少し前の俺のようにな。何事もなく……というのは厳しいだろうが、無事に仕事を済ませて帰れることを祈っている。

まだ暫くは忙しいだろうから、火星の方に顔を出すのは難しいだろう。だが時間が出来たら必ずそっちに行く。そうクツキーやクラツカ、ばあさんに伝えておいてくれ。』

メールを読み終えたビスケットは、ほう、と息を吐いた。

「兄さん……良かった」

自分たちのやったことがちゃんと役に立ったと、ビスケットはこの時初めてその手応えを得た。今までは目まぐるしく変わる状況に翻弄されて、流されるままに対応してきただけのような気がする。ただ闇雲に暴れ回って何とか乗り越えてきた。しかしそれも、終わらせることが出来る。

「そうだよな。……もうこれ以上付き合う必要はないよな」

火星に帰るべきだと、ビスケットはそう考える。与えられた仕事はこなした。そりゃあこの後どうなるか心配ではある。しかしだからといってこれ以上のリスクを背負うのはどう考えても割に合わない。GHが再び動き出す前に退散するべきだ。

そうするべきだと分かっているのに。

—— 親父とお袋は、テロに巻き込まれたんだ——

—— 100% そうだとは言えん。が、可能性は高エな——

棘のように引つかかるものがある。それは逃げるべきだと主張する自分の心を足止めするかのようになり、じくじくと痛みのようなものを与えてきた。

「……くそっ」

吐き捨てるように言っ頭を抱える。今更敵討ちとか、何をナンセンスな事を考えているんだ自分とは、打ち消そうとしても頭の中から

消えてはくれない。微かに覚えている貧しいながらも温かい家庭。それが奪われてからの日々。むくむくと鎌首をもたげる感情は、弱気な自分をまるで底なし沼に引きずり込むかのような。

「だめだ。……考えが纏まらない」

少し頭を冷やそう。ビスケットは席を立ち、外へと足を向けた。

宿舎から少し離ればそこは浜辺だ。ビスケットはそこに転がっていた丸太に腰を下ろす。

潮の香り。寄せる波の音。何もかもが初めての経験だった。しかしそれをゆっくりと感じ取る暇はなかったように思う。

「はは、随分と慌ててたからなあ」

夕べはたつぷりと塩水を味わっていたというのにと、妙なおかしさがこみ上げた。少しだけ笑って……そうしてから空を見上げる。随分遠くまで来た。宇宙や火星でみる星空とはまるで違う天の光景に暫し見とれるビスケット。

そのままぼんやりと天を見上げるその背中に、声をかけるものがある。

「あれ？ どうしたのビスケット」

振り返ればそこには上半身裸で棒きれを担いでいる三日月。うつすらと汗をかいているのは運動していたせいだろうか。ここまできて鍛錬を続ける彼の姿に、安心感のようなものすら覚える。

「ちよつと考え事をね。……三日月は？」

「ん、素振りつてのをやってた。カタナ使うときの基本の練習なんだって」

「そっか」

普段はぼんやりしているように見える三日月だが、鍛錬は欠かさないし目的があればさらに勤勉になる。難しいことを考えるのは全部

オルガに任せると言つてのけるけれど、その言葉は鋭く物事の本質を突くときがある。オルガが彼の目に急かされているようなプレッシャーを感じるのは、そういった本能的な気質を見て取るからではないだろうか。

そんなことを思いながら、我知らずビスケツトは言葉を発していた。

「……俺はさ、ここらが潮時だと思ふんだよ」

何を言っているんだと、自分でも思う。だが、きつと誰かに聞いて貰いたかつたのだろう。聞いた三日月はきよとんとした表情を見せた。

「蒔苗のじいちゃんの話、受けないってこと？」

「うん。今までも綱渡りだったけれど、ここは地球だ。GHの懐の中つて言つてもいい。どうするにせよ、俺達にとっては一方的に不利だ」

この地球でGHの目をかいくぐるのはとてつもなく難しい。その上で蒔苗をエドモンソンに送り届けるなどできっこない。ビスケツトの理性はそう訴え続ける。

だというのに。

「……だけど、『ここで降りられない』つて、そんな気がして、それがずっと引つかかつてるんだ。どう考えてもさ、危ないだけで、得よりも損が多いって思うのにおかしいだろ？」

自嘲気味に笑う。ここでやめようとか言つたらオルガはむきになるかも知れないけれど、三日月はどうなんだろうと、そんなある種の期待を込めた視線を向ける。

果たして三日月は、やつぱりよく分かっている様子でうんとか唸つた後、こう言つた。

「……それつてさ、『ビスケツトが降りたくないつて考えてる』からじゃないの？ よく分かんないけど」

その言葉に、なんだかすんと胃の腑に落ちたようか感覚を覚えるビスケツト。それがはつきりとした何かになつたわけではない。ただ三日月に問い返す。

「そういうモンかな？」

「そういうモンでしょ」

「……そっかあ……」

もやりとしたまま、しかし何かガビスケットの心の中で形になろうとしている。

少年達の様子を木陰で伺いながら、ランディは一人満足げに頷いていた。

「良い感じで頭回してるじゃねえか。……あんたもそう思うだろう？」

暗闇に向かって声をかければ、現れる人影が一つ。

それはいつもの乗馬服にも似た様相のフミタンであった。何か思い詰めたような様子であるが、特にそのことに触れるでもなくランディは問う。

「その様子だと、『鉄華団が依頼を断ったら』って考えてのことか？」

「……まるで何もかもお見通しと言った様子ですね、あなたは」

「自分の理解できる範囲しか見られんさ俺は。今回のことはその範疇に過ぎんよ。……それで、多分俺にお嬢さんの護衛を頼みたいって話なんだろうが」

「はい。お嬢様はむしろ護衛は要らないだろうという考えですが、何事にも万が一というものがあります。……あなたは正式に鉄華団に所属しているのではなく、別個に雇われていると聞きました。であれば一旦契約をうち切るといふ形でこちらに再雇用という形も取れるのではないかと思っただのです」

フミタンの言葉に、ランディはくっつと嫌らしげに口元を歪めてみせる。

「その場合、俺は『高い』ぞ？ そのあたりどうする気よ？」

フミタンは、何かを覚悟したかのように唇を噛みしめた。

「今即座に前金として払えるものはありませんが……その、わ、『私のこの身』でよければ、手付けとして好きにして頂いても……」

視線を逸らし、僅かに頬を赤らめる。よほど恥ずかしいのか筆者としては超萌えしかもほのかにエロス漂わせて分かつてるなこんちくしようといった有り様である。普通の童貞であれば一発で陥落なのだろうが。

空気読めてないのか、ランディは微妙に渋い顔であった。

「なんかそれ受ける方向だと、俺ものごっついど畜生的なアレじゃねえか。いやど畜生なのは否定しないが」

そう言ってからしようがないなあと言った風で鼻を鳴らす。

「まあそう心配すんな。『俺の見込み通り』なら、あいつらは断らんよ」「見込み……?」

おずおずと尋ねるフミタンに、ランディはにかりと笑って見せた。「万が一そのへんの勘が外れちまったんなら、出世払いで依頼受けてやらあ」

堂々と宣う。それにほつと安堵を覚えると同時に。

(……私は魅力がないのでしょうか)

微妙にむかついた。女として見られていないのかと言う感覚は、沽券に関わるというかプライドを刺激するというか。ともかくなんか気にくわない。

自分でもよく分からない苛つきを抱えたフミタンが何かを口にしようとした矢先。

「いたいたランディさん！ 大変です！」

がさがさと茂みをかき分けて現れたのはヤマギ。随分と慌てた様子の彼に「どうした」とランディは問うてみる。

「あいつらが、GHがここに来るそうです！」

「……やっぱりか」

緊急の事態に、大して慌てもせずランディは鼻を鳴らす。

やっぱりお見通しじゃないですかと、フミタンは密かにむくれた。

グラズヘイム1。なんとか軌道を立て直し修繕作業に追われている最中、カルタは廊下を歩きながら副官の報告を聞いていた。

「地上部隊、ミレニアム島の周囲に配置完了しました。ご命令があればいつでも動けます」

「よし。明朝我々の降下準備が完了するまで待機。日の出と共に作戦を開始する」

「了解しました。……差し出がましいようですが、本当によろしいのですか？ やつらもすぐには動けないでしょうし、連邦の許可を待つからでも」

本来であれば、GHと言えども地球上での活動に置いては活動領域それぞれの経済圏に許可を得なければならぬ。だがカルタはその許可が降りる前に作戦行動を始めようとしていた。

「動けぬ今だからこそだ。時間が経てばそれこそ向こうに付け入る隙を与えるだろう。全ての責任は私が取る。お前達はただ任務を遂行することだけを考えろ」

時間の勝負とカルタは考えていた。汚名を返上するという焦りがないとは言わない。しかしそれ以上にランデイ達に時間を与えることを彼女は恐れていた。地球は確かにGHのお膝元であるが、同時に『ランディール・マーカスのホームグラウンドでもある』。時間を与えれば一体どのようなコネを使つて、どういった行動に出るか分からない。ミレニアム島に釘付けになっている今が、恐らく最大にして最後の機会であろう。

この機を逃せば完全なる敗北となる。だが、勝てると確信は出来なかった。

「地上に降りている間、艦隊の指揮は二佐、貴官に任せる」

「了解致しました。それと選抜されたメンバー以外にも作戦に参加したいと具申してきたものが多くおりますが」

「人数ばかり増やしてもあの男に餌を与えるようなものだ。それにこ

の機会に乗じる何者かが存在しないとも限らん。我等地球外縁軌道統制統合艦隊が本分を忘れて奴ばかりにかまけるわけにもいかぬ。皆に言い含めておけ」

「はっー」

選抜されたメンバーとは言うものの、自分を含めて半分決死隊のようなものだ。他のセブンスターズのものたちはこの期に及んで様子見。被害を被ったはずのアリアンロッドですら動きを見せない。下手をすれば政敵の閥に属する自分が死ぬことを期待しているのかも知れなかった。

馬鹿馬鹿しい話だ。秩序の守護者である自分たちが、下らぬ政治ごっこで足を引っ張り合っている。高潔でありたいという望みは最早彼方。ただ貫き通したい意地だけが、カルタを支えている。

(私も相当に愚かよね)

自嘲するが、自分を曲げる気もなかった。今更賢く生きられるなどと思っていない。胸張って前のめりに倒れるまで進むだけだ。

ふと、通りすがりに窓の外の光景が目に入る。無限の宇宙と青く輝く地球。カルタにとって見慣れた、だが美しい光景。

この光景を見るのも最後かも知れないわねと、カルタの胸にはそんな思いがよぎっていた。

※今回のえぬじい

「これこっちでいいですかギャン子……じゃなかったエーコさん」

「次はどうするっすかギャン子……エーコさん」

「ちよっとまであんたらそのギャン子ってのはなによ」

似てると思ったのは俺だけか？

終わるし続くし。

15・さて、火花散らそうか！

ガエリオを伴ってマクギリスが訪れたのは、某所にあるGHの研究施設であった。

そこに至る道筋で、マクギリスはアインを延命させる手段について説明していた。その手段とは。

「阿頼耶識だ?!」

「ああ、あのシステムであれば、肉体の欠損を補う事が出来るし、体が動かせなくともMSを操縦することすら可能となる」

「だがあのシステムは!」

「我々GHにとって禁忌……』ということになっている』。だがね、それは厄祭戦後に意図的に広められたものだよ。過去の技術……厄祭戦を引き起こしたそれを危険視するあまりの愚行と言っても良い」

施設に着いたマクギリスは、話を続けながら迷い無く通路を進む。

「本来阿頼耶識は、単なるマン・マシーニンターフェイスにしか過ぎない。禁忌とされたおかげで現在では不完全な技術のみが残り、流通している。だから施術に関してあれほどの危険性があるのさ。それも施術の環境を整えてやるだけで、成功率は格段に上がるものだ」

嚴重にロックがかかった隔壁を開ける。そこは広大な格納庫であった。その中央に鎮座していたのは。

「これは……」

「EB—AX。グレイズをベースとした阿頼耶識システムの研究機。危険な禁忌の技術に対抗するためという名目で、阿頼耶識の研究は密かに続けられていた。これはその成果の一つだ」

言葉も出ないガエリオに、マクギリスは鋭い視線を送りつつ言う。

「この機体に搭載されているシステムと接合可能であれば、アイン・ダルトンの延命を計ると同時に相応の力を与えることが出来るだろう。今のところそれ以外に彼を助ける手段はない。いや、命を繋ぐことは

出来るだろうが、それだけだ」

確かに、『アインを戦わせ続けるのであれば』、これしか手段はない。選択肢を突きつけマクギリス語外で問う。「どうするのか」と。

ぎ、とガエリオは歯噛む。

その目は迷いに揺れていた。しかし。

彼は、選択した。

GHが現れたことによつて、鉄華団は寝る間も惜しんで対応に追われていた。

「なんであいつらすぐに襲つてこないんですかね？」

「夜戦で罨仕掛けられてると厄介だからだろ。弾もただじゃねえ、無駄撃ちはしねえだろうさ。……おつし、基本設定はできた。後はぶつつけで仕上げるか」

機体のセッティングを一応終わらせ、ランディはコクピットからはい出る。彼の機体は両太股に備えられたスラスタ―ユニットと足首そのものが交換されており、地上での高速ホバー移動が可能となっていた。しかし正式な換装ではないため、細かいアジャストは結構煩雑である。だがどうやら戦いながらそれをやるつもりらしい。

今更この人が何やっても驚かないけどと、調整を手伝っていたヤマギは肩をすくめた。

「さて、こっちはよしとして大将はどうしてる？」

「今作戦を詰めてます。なんでも蒔苗さんの邸宅に仕掛けを施すとか」

「贅沢にいくねえ。となると陸戦隊をハメて、揚陸艇を強奪つてところか」

「上手くいきますかね、それ」

「いかせるのさ。多分向こうは朝駆けで仕掛けてくる。それまでにで

きることはやっておくさ」

そう言つてランディは、後は任せると言い放つて身を翻した。

向かった先は宿舎。その会議室でオルガたち鉄華団の主要メンバーと、クーデリアが対策を練っていた。顔を合わせたときには互いに何か言いたそうなオルガとビスケットであつたが、すぐさまそんなことをしている場合ではないと気を取り直す。これからどうするにしても、この場を切り抜けなければ話にもならない。故に彼らは気持ちを切り替え知恵を巡らす。

「……モニターク商会はこちらの要求通りに動くそうです。早速偽装した輸送船を向けるよう、手筈を整えると」

「となれば、後は首尾良く俺達が脱出するだけか。MS部隊をどれだけ引きつけられるかが勝負所だな」

「それなんだがよ大将、今回は俺にMSの指揮を預けちゃくれねえか？」

姿を現した途端、そう言うランディ。今まででもかなり好き勝手やってきた彼だが、指揮権をねだる事はなかった。今更なんだと訝しむオルガは問うた。

「構わないが……どういふ風の吹き回しだ？」

「今回は多分MS同士の乱戦になる。お前さんがMWで指揮を執つてたら巻き込まれちまう可能性があるからな。悪いがちよつと遠慮してもらいてえ」

鉄華団はほぼオルガのワンマン体制の組織だ。それは今後改善していかなければならない問題だがひとまず置いておくとして、ともかく今オルガを失つてしまうことは絶対に避けなければならぬ。用心はしておくに越したことはないとランディはそのように説明した。「海岸線での攻防になると踏んでいたんだが、そんなに侵攻されるつてののか？」

「なに、地上の奴らだけならそうなたんだらうが、連中『上から降つてくるぞ』」

「上から!?!」

ビスケットが驚きの声を上げる。

「大気圏突入用の装備をもって直接MSで現場に降下する、そう言う訓練も受けてるんだよ連中は。まず間違いないくこつちの陣のど真ん中目指して突っこんでくるさ」

「無茶すんなオイ。……確かにそりやあ知らなかったら不意打ち喰らってたかもだ。助かるランディさん」

「札はここを切り抜けてからだ。このあいだの戦闘から見て連中の錬度は高エ。決して油断ならない相手だと肝に命じとけ」

これまででない強敵だと、他ならぬランディに言われて固唾を呑む面々。激闘の予感が背筋を凍らせるようだった。

そんな中でも変わらぬものがある。

「どっちみちなんとかしなきやならないんでしょ？ だったら今までと同じだ」

いつもの調子で言い放つのは三日月。彼にとっては例えGH全軍を目の前にしても同じ事なのだろう。出来るか出来ないかは悩ましい。ただやらねばならないのであればやる。どこまでも彼はぶれない。

そんな三日月の様子に目を丸くするオルガたち。ややあつてオルガがぷつとおかしそうに噴き出した。

「やっぱすげえな、ミカ。そう言つてのけるのはお前だけだよ」

「そうかな？ ランディも言いそうだけど」

自然体な三日月の様子に、緊張した空気が和らぐ。たいしたもんだとランディは内心思う。

鉄華団の頭を張っているのはオルガだが、その原動力はもしかしたらこの小柄な少年なのかも知れない。頼られるのでも支えるのでもなく、しっかりと立って背中から押す存在。あるいは結構な大物になるかもだと、そんなことを考えた。

ともかく方向性は決まった。不安は多くあれど、少年達は微かな光明を頼りに突き進む。

何とかなるかも知れない。いや、『何とかする』と。

翌朝。LCS中継用のドローンが無数に舞い、戦いは始まろうとしている。

装備を手にして次々と仲間が配置に付こうとする中、三日月は少しだけ悩んでいた。

「う〜ん……これ一本じゃ心細いな」

軌道上の戦闘で、今までの主要武装であるメイスは失われた。以前なら回収できたのだが、流石にそんな余裕はなかった。残されたのは太刀一本。

ランデイと違い別に三日月は銃器が苦手というわけではない。MSに有効なダメージを効率的に与えられるのはMSでぶん殴るのが一番効率がよいから鈍器を愛用していたと言うだけの話である。太刀もそれなりに使えるようになってきたという自覚はあるが、やはり使い慣れたものの方が安心感があるし、太刀一本だけというのはどうにも心許ない気がする。

これがあと数本予備の太刀があれば変わったのであろうが、生憎今持っている一本のみ。折れるとは思わなければいけれど不安に思ってしまう。

と、彷徨っていた視線が解放されたコンテナの端に留まった。

「なんだ、いいのあるじゃん」

コンテナの端に転がっていた『それ』を手取る。角張った無骨な、いかにも鈍器でございと言う代物。「レンチメイス」と言う名のそれを2、3度素振りして、三日月は頷いた。

「ん、いけるな」

太刀を背中にマウントし、バルバトスはレンチメイスを担いで所定の位置に着いた。

浜辺から見える海上に、数隻の戦艦の姿がある。島の表側に3。裏に2。基本的には表から責め立てると見せかけて裏から上陸部隊を送り込む体制に見える。しかしながら事はそう単純なものではない。

「降伏勧告に対する反応、ありません。まもなく作戦開始時刻となります」

「想定通りか。さて、ここから先もそうなればいいが……期待はできません」

海上に展開する艦隊の指揮を執っているのは【コーリス・ステンジャ】三佐。以前火星にてCGSの襲撃に参加し、撃破された【オーリス・ステンジャ】の兄である。

地球外縁軌道統制統合艦隊地上部隊に配属された当時は尊大な性格であったが、彼もまたカルタの影響を受け自身を鑑み改めた人物だ。この作戦に対し油断を見せていない。

「愚弟とは言え弟の仇。もののついでに討たせて貰おうか。……全艦武器使用自由（ウェポンズフリー）。飽和砲撃で敵の目をこちらに引きつけろ」

まず始まったのは表側に陣取る艦からの砲撃。砲弾とミサイルが雨霰と海岸線に向かって叩き込まれる。狙いもなにもあったものではない、しかし密度の濃い攻撃はまるで海岸線そのものを削っていくかのようだ。

「早々当たるもんじゃないが、それはこちらもか。……昭弘、そっから狙えるか？」

弾雨の中回避行動を取るでもなく構えていたランディは、小高い丘の上に陣取るグシオンの昭弘にダメ元で問うた。その問いに「む、やってみる」と答え、昭弘は両手に装備する滑空砲を構えさせた。

撃つ。しかしその砲撃はあっけなく外れる。

「なんか、感覚が違うな」

「バカ、なにやってんの」

「地上じゃ重力と大気の影響を大きく受ける。そのあたりの修正をしないと当たらないよ」

射撃の感覚に戸惑う昭弘に、ラフタとアジーがそう声をかけた。彼の様子を見た三日月は、ふむと頷いて昭弘にアドバイスする。

「さっきの感覚覚えてるだろ？ それに合わせて撃てばいいんだよ」

「む、こうか？」

勘で補正。だいたいこんなもんかと当たりをつけトリガーを引く。
今度は見事に命中した。

「あれま。当たっちゃったよ」

「勘だけで照準補正をやるなんてね」

「……やっぱ阿頼耶識つてずっこい」

阿頼耶識付けてない組は感心したり拗ねたりだ。

割りとのんきな鉄華団だが、当てられた方はそうはいかない。

「左舷前方、格納ブロックに被弾！ 浸水、止められません！」

「く、あの位置から当ててくるとは、やはり一筋縄ではいかんか。予定より早いがMS部隊を出す！ その後に総員退艦、指揮権を僚艦リヒトに移行。同時に残りの艦は後退し敵の予想射程範囲から離れろ。急げよ！」

戦闘継続が不可能なほどのダメージをいきなり与えられ、泡を食って退艦を進めつつ後退する。その代わりとでも言うかのように、次々とMSを出してきた。

「は、長々と留まるほど間抜けじゃねえな。……ようし諸君、巢から鴨どもが飛び出してきたぞ。丁重にお出迎えしようじゃないか。各員予定通りで敵を島の中に引きずり込む。数が多いから囲まれないよう注意しろ」

応だの了解だのそれぞれの返事が返ってくる。そして本格的な戦闘の火蓋が切られた。

海面上を滑るようにホバリングで高速移動してくるグレイズの群れに対し、まずは300mmの洗礼が襲いかかった。大口径で精密射撃が出来るものかと高を括っていたパイロット達の一部が、まず犠牲になる。

一度コツを掴んだ昭弘の射撃は正確無比であった。脚に、肩に。いくつかの命中弾がグレイズを海面に叩き付ける。ホバリングでの高速移動、おまけに海上というシチュエーションがさらに拙かった。ただでさえ安定感の危うい高速移動でバランスを崩し転倒すれば相応の損傷を与える。海面でのそれは地上と遜色ないし、そのまま海中へと没してしまう。地上であればダメージの具合にもよるが立て直し

は可能だろう。だが一回海中に没してしまえば再起はかなり難しく、場合によつてはそのまま海の藻屑だ。

「なんという技量か！ 総員、全力で回避行動を取れ！ 避けねば当てられるぞー！」

泡を食つてMS部隊は散開する。これにより、上陸までの時間を少しだけ稼ぐことが出来た。

「お手柄だ昭弘。……さてこれで連中はバラけて上陸してくる。昭弘はそのまま上から支援。俺と三日月で前に出て連中を引っかき回す。残りの三人は撃ち漏らしの相手だ。適当に『苦戦してみせろ』よ？ あまり用心されたら話にならん」

「面倒な注文だねえ」

「一気に片づけたらいいのに」

不満げなアジーとラフタに、ランデイは苦笑で返す。

「俺に関しては用心しまくってるだろうが、お前さんらはノーマークだ。出来るだけ戦力を低く見積もっておいて貰った方が向こうを『引っかけやすい』。まあやつらを引き込むまでは堪えてくれや」

「ま、今の指揮はあんただ、やってやるよ」

「後でなんか奢つてよねー！」

安月給に無茶を言うのと、ランデイは忍び笑う。まあ彼女らなら問題はなからう、ああ見えてタービンスで鳴らした凄腕だ。

「さてさて、ほんじゃ往くとしますかね」

悪魔のごとき男に率いられ、無法者達は戦場に足を踏み入れた。

壊滅的被害。控えめに言つてそう表現するしかない惨状であった。

まず最初にグシオンからの砲火をくぐり抜け上陸が叶った集団は、シユヴァルベ・グレイズとバルバトスの2機による強襲を受ける。鬼神のごとき2機に正しく一蹴と言つた感じで2個小隊規模があつと

いう間に蹴散らされた。が、その間に部隊の残りは迂回し散り散りに上陸を試みる。

こちらは散開した漏影2機と流星号にそれぞれ迎え撃たれた。ランデイや三日月のように化け物じみた戦闘力を持つわけでもない3機は、海岸沿いの樹林に身を潜めるようにして細かく移動を繰り返しつつ迎撃してきた。さほどのプレッシャーもなく、火力も並となれば、与しやすいと見られても仕方がないだろう。事実数機がかりで襲いかかれば、揃って反撃しつつも後退を始める。

上陸し足を踏み入れた森林地帯。そこには地獄が待ちかまえていた。

なんのことはない。MSの全高に匹敵する高さの樹木が密生する森の中に、これでもかとトラップの類が仕掛けられていただけである。本来であればそれは警戒してしかるべきことなのだが、ランデイが前に出てきたことで逆に警戒心が薄れた。つまり『最大戦力をもって水際で殲滅戦を挑む』と見たわけだ。それにモニターク商会との接触を知らない攻め手から見れば、鉄華団の物資はさほど余裕がないように見える。夜陰に紛れての局地的なものならともかく、森林地帯全域に渡って大規模な罠を展開する余裕はないと踏んでいたのだ。ゆえにランデイが前に出たと、そう誤解を誘われたのである。

実際補給があつたとはいえ、派手にMSを撃破できるような罠を用意するのは時間的にも難しかった。しかし『動きを阻害する程度の罠』であれば、そう物資も労力も必要としない。

まあ簡単に言えば、『草を結んで脚を引っかける程度の罠』が、『無数に』配置されているだけのことだ。

この場合、それが致命傷となった。

「しまっー！」

「貫ったよー！」

派手に転倒した機体のコクピットを、アジীর漏影が叩き潰す。

「と、投網!? こんなものでー！」

「隙ありってねー！」

手足に絡みついた投網が動きを封じた一瞬、ラフタが胸部を強かに

蹴りつける。

「あらよつとー！」

「なっ!?」

「ぐわっー！」

流星号が引いたロープの先に仕掛けられた罠に引っかかって、数機のグレイズが巻き込まれて転倒する。

逃げ回ると見せかけて3機は敵を森の中で引っかき回し、少しずつ打撃を与えていく。この期に及んで全力を見せないことが、相手を術中に誘い込んだ。逃げ回り罠に頼らなければ戦えない弱兵だと、心のどこかにそういった驕りが生じたのだ。そのような相手に好きにやられていると、兵達から冷静さが失われようとしている。

指揮権を移した艦でコーリスが現状を把握したときには、ほぼ手遅れの状態であった。

「1個大隊の半数が喰われただど!? 地上戦でこれかあの化け物は！」

いや、と激昂しそうな感情を抑え、コーリスは考えを巡らす。

「地上ではリボン付きの悪魔と言えど、その機動力は落ちる。であればこれは奴一人の戦果ではない……?」

そこではつと思いつく。

「鉄華団！ 新規の民兵組織と見せかけて、『奴の口利きで腕利きの傭兵を集めたか』！ ならば想定以上の手練れが揃っているはず！ 先の狙撃で気付くべきであった！」

勘違いである。まあアジーとラフタは確かに手練れだし、三日月以下鉄華団の少年達も相応に鍛え上げられていた。しかしながら下地があったとはいえ数ヶ月で一流の域に手が届くパイロットを育て上げたなどと想像するより、そう考えた方が納得は出来るので無理もない。

「残ったものたちに伝えろ！ 無理に交戦せず時間稼ぎに徹しろと！」

カルタ司令が参られるまで奴らを足止めするのだ！」

そう指示を出しながらも、壊滅は免れないかも知れぬとコーリスは覚悟を決める。

(すまぬがカルタ様のために、奴らを少しでも疲弊させ、死んでくれ)
お前達の犠牲は無駄にはしないと、非情の判断を下す。
ほどなく彼の予感、現実のものとなる。

最後の1機を屠って幅広剣を一振り。そうしながら周囲を警戒しつつ、ランディは指示を出していく。

「おっし、今のうちに補給できるモンはしておけ。昭弘、弾は残ってるか?」

「いや、もうそんなに残ってねえ」

「なら長物を破棄して適当な得物を持っていけ。そろそろ来るぞ」

言いつつ機体を上向かせる。頭部が展開し、グレイズ系の特徴的なセンサーユニットが顔を出した。ぎゅいいと音を立てて回転する球状のユニットが、天空にきらめく反射光を確認する。

「来たか。……あと20秒! 急げよ!」

彼らが今展開しているのは、島の中央にある飛行場。中型までの航空機が発着するに十分なスペースがあり、MS部隊が戦闘出来るくらいの余裕があった。そこでランディと鉄華団の少年達が駆る『4機』のMSは即座に戦闘態勢を整え、降り来る敵を待ちかまえる。天に記された点は即座にその大きさを増し、やがて。

「サーフボード!?!」

「大気圏突入用のシールドグライダーだ。あれで盾としちや優秀だし、ぶつけられたらペしやんこだぜ?」

高速で飛来する敵の姿に目を丸くするシノをたしなめるランディ。そうこうしている間に相手から銃撃が浴びせられた。

「うおっとお!」

「あの速度から当てにくるか! 散開しながら回避だ! ぬかるなよ!」

スラストターを吹かし地面を滑るように回避行動を取る4機。そのままばらける彼らを追って弾雨は降り注ぎ、その直後、次々とグライダーが地面を穿つ。

「我等地球外縁軌道統制統合艦隊！」

『面壁九年！ 堅牢堅固！』

「治安を乱さんとする無法者どもよ！ 我等が鉄の裁きを受けよ！」

咆吼しながら銃を乱射しつつ、次々と着地するグレイズリッターの部隊。その数16機。

1個中隊と1小隊。ランディを相手取るにはあまりにも心細い数であるが、着地しながら銃撃しまくる技量は相当のものだ。回避するランディ達が隙を突くことが出来ない所からそれは伺える――

「頭はこいつか」

迷い無く三日月が行った。銃撃をすり抜け地を這うようにバルバトスを奔らせ、最速で中央のカルタ機に向かって駆ける。

「貴様！ カルタ様を――」

「構うな！ イツヒ隊はランディール・マーカスを！ 残りは他の機体を押さえろ！ こいつは私が相手をする！」

制止しようとする部下に構わず、駆け出して真っ向からバルバトスを相手取るカルタ機。駆ける最中に手に持つアサルトライフルを破棄し、腰からバトルブレードを引き抜く。そのままの勢いで2機は激しく激突し――

カルタのグレイズリッターが全力で振り抜かれたレンチメイスに弾き飛ばされる。が。

「!? なんだ？」

妙な手応えを感じた三日月は眉を顰める。妙、と言うか手応えが『軽い』のだ。

「まともに入っていない……のか？」

対するカルタは危なげなく着地し、剣を構え直す。

「あの得物であの鋭い打ち込みか。奴が引き連れているのは伊達ではないわね」

打ち込みの衝撃に逆らわず、打撃に合わせて『飛んだ』のだ。これ

によりダメージはほぼ受けていない。が、それで楽勝と思える相手でもなかった。

再び激突する2機。今度はカルタが仕掛け三日月が受ける。早く鋭い打ち込みは容易く防がれるが、さらに斬り返しで2撃、3撃と連続して打ち込みが入る。三日月は器用にレンチメイスを盾のごとく使ってその全てを凌いだ。

「こいつ、速い！」

「良く凌ぐ！ 真っ先に仕掛けてきただけはある！」

一瞬の隙を突いて振り抜かれるレンチメイスを、カルタの機体は後退して避ける。そして互いに油断なく相手を見据え、じりじりと間合いと機会を計りだした。

目の前の相手は、強敵だ。それが相対する二人の共通した見解であった。

そして昭弘とシノの元にも敵は殺到する。

「んじゃ、気張るとしますかねー！」

「……来い！」

アサルトライフルとマチェットを備えた流星号が、大型のアックスと専用のシールドを構えたグシオンが、それぞれ迫り来る敵に相対する。

ほぼ1個中隊が二手に分かれ、数機がかりで襲いかかる。対する二人の対応は、正反対であった。

「だーれがまともに相手するかってーの！」

左右にスラロームしながら後退する流星号。実は地味だがかなり高度なテクニクである。後方を見ずにホバリングしながらそれが出来るのは、さほど多くはない。

「やる。が、技術だけでしのげると思うな！」

追いつがるグレイズリッターは流星号を包囲しようとその後を追う。その内の1機が足止めしようとして流星号に打ちかかり――

「はいそーおー！」

突然『足下の地面が爆発した』。

「なっ!?!」

バランスを失った機体にマチェットが叩き込まれる。まともに喰らった機体は吹っ飛び地面に転がるが、最早それには目もくれず流星号は次に獲物に狙いを定める。

「くっ、センサー反応式の地雷か！ 各機足下に注意を払え。地雷が埋設されているのなら必ず違和感がある！」

敵も然る者、対処が速い。ホバリングでの高速移動を捨て、センサーで地面を確認しながらの移動に切り替える。それで速度が落ちることは百も承知。しかしながら器用な立ち回りで地雷を避けつつ流星号に追いつがっていく。

「流星号は無策で突っこんではきやしねえか。ならこんなはどうよ！」

コンソールに追加されたリモートコントローラーが操作されると、空港周囲の森林からミサイルが放たれる。

「うおっ!？」

「まだこのような仕掛けが!？」

泡を食って回避行動を取る敵に対し、シノは流星号にて襲いかかる。

「オラオラー！ まだこんなモンじゃすまさねえぞ！」

戦場になることを前提として、空港の周辺にもトラップが仕掛けられている。その操作はシノに預けられていた。そういつた目端が利くとランディに判断されたからである。その判断は間違っていないなかったようだ。

一方昭弘のグシオンはと言うと。

「おおっ！」

「ぐうっ！ なんてパワーだ！」

獅子奮迅、とはまさにこのことだろう。巨大な斧を振り回し、数で勝る相手に対し果敢に挑む。機体の出力に物を言わせた、型も何もない強引な攻め。だが猪だと侮ることは出来ない。バトルアックスの一撃は、まともに食らえば剣が折れかねない勢いであるし、シールドもただの防御手段ではなく時折鈍器のように振るわれる。一撃一撃が鋭く、重い。まともに打ち合うことを許さぬほどに。

「これがガンダムフレーム。だがな！」

2機のグレイズリッターが、正面からグシオンに挑みかかる。それに対してアックスとシールドを振るうグシオンであったが。

が、と言う耳障りな金属音が響く。

「む？」

「止めたっ！」

「今だ！」

バトルブレードが大きく欠け機体の間接が軋み火花を放つ。しかしそれでもグシオンの動きは僅かながらも阻まれる。その隙を突いて、背後から2機のグレイズリッターが襲いかかった。

「これもお役目！ 覚悟！」

「なん、のお！」

グシオンの背中に突き出た、一对のブースターポッド……らしきものから何かが飛び出して打ち込まれたブレードを弾き飛ばす。それは。

「腕!? 『4本腕』だと!？」

グレイズの腕をそのまま流用したサブアーム。阿頼耶識搭載機ならではの有機的な動きで、シールドの裏に備えられていたショートライフルを取り背面に向かって牽制射撃を行う。慌てて距離を取ったMS部隊の面々は、動揺を隠せない。

「あれが阿頼耶識の力か。まるで阿修羅だ」

その姿、その気迫。確かにそう称されても違和感がない。一瞬気圧されたグレイズリッターの群れに、グシオンは一步踏み出す。

「悪いがそう簡単に倒されてやるわけにやあいかないんでな。もう少し付き合ってもらおうか！」

こうして少年達がそれぞれ敵と相対している中、ランデイもまた激戦に身を投じていた。

「乱舞の陣！ 電光石火のごとく参る！」

『了解！』

ランデイに挑むのは1個小隊。統制統合艦隊の中でもえり抜きの『決死隊』だ。一斉にはなく1機ずつ斬りかかってくる。

しかしながらその速度が並ではない。基本的には一撃離脱を繰り返されているだけだが、それが間髪入れず四方八方から襲いかかってくるのだ。まかり間違つて何か一つタイミングが狂えば味方を斬りかねないほどの猛攻であった。

ランデイの超絶とすら言える反応速度に対する答え。彼らが見出したのは綱の上を走るようなぎりぎりのラインで成り立つ連携だ。ランデイはそれに、いつもの幅広剣とマチェットの二刀流で立ち向かう。

激しく火花が散る中、それでもランデイは余裕の表情を崩さない。

「は、良い感じで手下鍛えてんじゃねえか磨眉」

正直ここまで鍛え上げているとは思わなかったが、カルタの完璧主義者な部分を考えればなるほど分かる。僅かでも勝率を上げるため知恵を絞り鍛練を積んだのがこの結果なのだろう。ここまで骨のあるものたちが今のGHにどれだけいるやら。

惜しいとすら思う。が、勝負はまた別な話だ。

「んじゃちよつと、本気でいくぜ」

激しく火花が散る戦場。その上を横切る影があった。

「無線封鎖解除！ 第三段階に移行します！」

「降下開始！ 着地と同時に展開、急げよ！」

「ハッチ、開けろ！」

レーダーに囚われぬよう低空で飛来した大型輸送機から、歩兵と走行車、MWの混成地上部隊が飛び降りていく。パラシュートではなくグライダーやジェットパック、ロケットモーターなどを用いて着地までの速度を稼ぐ強襲降下。増援の陸戦隊であった。

蒔苗の屋敷の裏手に強引に降下し、海岸から上陸する部隊とで挟み撃ちにする。確実に蒔苗とクーデリアの身柄を押さえるためにカル

夕が用意した策だ。

これまでにない規模の陸戦隊で鉄華団を圧倒する。言ってみればそれだけのことだがこと歩兵同士の戦いともなれば数の優位は絶対に近い。その上屋敷の周辺を囲むように隊を展開すれば逃げ場も潰せる。そう目論んでのことだ。

しかしながらどうにも様子がおかしい。海岸と裏手の森林に部隊が展開しているというのは分かっているだろうに、何の抵抗もないどころか人っ子一人の気配もなかった。

「逃げた？　だが逃げ場などないだろうに」

「空港は現在カルタ様率いるMS部隊が戦鬪をしております。あちらに身を潜めているとは考えにくいのですが」

ふむ、と陸戦隊を率いる司令官は考える。この様子だと屋敷を放棄しどこかへ身を隠した可能性が高い。しかしどこに潜んでいるのか分からないのであれば、部隊を分散するのは悪手だ。ゲリラ戦を仕掛けられて各個撃破などとなったら目も当てられない。それに気配がないからと言って屋敷に潜んでいる可能性がないわけではない。

暫く考えた後、司令官は判断を下した。

「……海岸側の歩兵部隊とMWを1個中隊突入させる。あるいは屋敷内に抜け道の類があるのかも知れん。徹底的に探れ」

「はー」

手を出して様子を見る。あるいは突入させたものたちを犠牲にすることになるかも知れないが、このまま手をこまねいているわけにも行かない。こちらが動けば何らかの反応を引きずり出せると、そう考えてのことだ。

果たして突入した部隊は、がらんとした屋敷の様子に空振りかと落胆していたようだが。

どん、と言う破裂音。そして火の手が上がる。屋敷に仕掛けられた爆薬が一齐に起爆したのだ。炎を纏って吹き飛ばされる歩兵。後退するが焼け落ちた栈橋と共に水中に没するMW。業火に包まれる屋敷は一瞬にして地獄絵図と化した。

そして。

再びの破裂音。そして瞬時に広がる炎。それが生じたのは、『屋敷の周囲の森林』。つまり現在『大規模の陸戦隊が展開している森のまっただ中』である。

「ばかな!? やつら正気か!？」

確かにこれなら一網打尽にできるであろうが、南方の湿気った樹林とは言えこれほどの規模の火災が広がれば島全体に被害が及ぶ可能性がある。下手をすれば自分たちも巻き込みかねない暴挙だ。

あまりのことに訓練を受けた兵達がパニックを起こす。それでも何とか押さえつけて動ける者だけでも海岸線に脱出してと司令官は動こうとしたが、それよりも先に次なる手が打たれた。

「よっしやあー！ 行くぞお前らー！」

屋敷から少し離れた海岸沿いの岩場。そこから暗い色のシートが剥がされ次々と鉄華団のMWと少年達が飛び出してくる。上陸予定地点を予測し強襲できるよう潜んでいたのだ。悟られぬようライトも使えない暗がりの中苦労した甲斐があったぜと、MWの上で指揮を執りつつオルガはほくそ笑む。

「鳴撃ちだ！ 片っ端から仕留めるぞ！」

予想外の場所からの襲撃に、まともに反応も出来ないで打ち倒されていくGHの兵達。燃え盛る森の中から逃げ出してくる兵達も、パニックが収まりきれず統率が取れていないため、組織だった反撃は出来なかった。

かてて加えて。

「あんたらの相手はこっちだ！」

「じゃんじゃんかかってらっしやい！」

陸戦隊を支援しようとした海上の艦に、アジーとラフタの漏影が襲いかかる。このために彼女らは離れていたのだ。

海上と屋敷周辺。虚を突いた襲撃はGH陸戦部隊を削り取っていく。

形勢は、一気に傾いた。

轟音を立ててグレイズリッターが地に伏せる。バルバトスと激しく競り合いながら状況を確認しているカルタは、舌を打った。

「半数が喰われたか。覚悟はしていたけれど」

ランディ以外の戦力を低く見積もりすぎた。だがまだ引くわけにはいかない。

「陸戦隊が目的を果たすまでは！」

今回自分たちは『時間稼ぎのための囮』だ。ランディを倒せるなどと非現実的なことは考えない。ただ奴の目的を打ち崩すことが出来ればそれが勝利だ。そのために彼女は命を賭ける覚悟で挑んだのだった。

しかしそれは叶わない。

「か、カルタ様！ 陸戦隊が壊滅！ 海上の艦も襲撃を受け、戦闘の継続は困難です！」

緊急の通信が、カルタの意志を一瞬逸らす。

「そっ」

ばがんとレンチメイスの先端が開く。内側に並ぶチェインソーじみたクラッシャーが放つ耳障りな音が、カルタを現実に取り戻した。

ブレードが挟み込まれ、砕かれる。が、咄嗟にそれを手放して後退するカルタ機は無傷。下がりながら地面に突き刺さっていた味方機のブレードを回収し、構え直す。

その間にも。

「足下がお留守ですよ、ってなあ！」

僅かな隙を突いて射出されたシュヴァルベ・グレイズのワイヤーアソナー。それは一撃打ち込み離脱しようとしたグレイズリッターの足下を掬う。

「しまっー」

転倒する機体。咄嗟の判断で巻き込まれじと飛び退く残りの機体に損傷はない。が、連係攻撃は完全に中断せざるを得ない。そして。

「まず一つ！」

起きあがろうとしたグレイズリッターのコクピットは、無慈悲に潰される。これで絶妙なところで保たれていた均衡が完全に崩れた。

乾坤一擲の作戦は、失敗に終わったと判断せざるを得ない。しかし、ここまで来て下がれるのか。玉砕してでも一矢報いるべきではないのかと、プライドと負けん気がこの場を逃げ出すという選択を否定する。

その迷いは粉碎された。

「おおおおお！」

「カルタ様！ ここはおさがり下さい！」

ぼろぼろのグレイズリッター数機が、ランデイの機体に挑みかかる。シノや昭弘の相手をしていたものたちだ。無茶苦茶とも言える動きでブレードを振り回し、死に物狂いで打ち込み続けながら、彼らは口々に訴える。

「この場から離脱を！ お急ぎ下さい！」

「殿は我等が！ カルタ様は生き残りの兵を！」

「お前達！ しかし！」

「貴女様のご無事であれば、地球外縁軌道統制統合艦隊は持ち直せませす！」

「ここは恥を忍んで、後の挽回を！」

命を賭けてカルタを逃がそうとする男達。言葉に詰まるカルタであったが、そうしている間にも状況は動く。ランデイと戦っていた小隊の残りがカルタ機を護るように位置し、バルバトスを牽制する。先の戦闘で疲弊し肩で息をしているような有り様だが、彼らの目は全く闘志を欠いていない。

「カルタ司令、っ！ 決断を！」

小隊長に促され、カルタは唇を噛む。

一瞬の迷い。そして。

「……撤退だ！ 状況を破棄しこの場を離脱する！」

悲鳴のように吠え宣言する。それに応え周囲の機体はカルタ機を護りながらスモーク弾と信号弾を放ち後退を開始する。

同時に前触れもなく雨が降り出す。南国特有のスコールだ。それに打たれながら、カルタ達は島を離脱した。

無様だ。俯くカルタは唇を噛む。リーダー上では部下の反応が一つ、また一つと消えていく。

グレイズリッターの頭部を雨が流れ落ちる。それはまるで、泣けぬ主の代わりに涙しているようであった。

※今回のえぬじい

「なんだ、いいのあるじゃん」

ゴルデイ●ンハンマー。

「回答権が佐藤さんに移ります」

「だれだ今の」

なんか色々混ざりすぎ。

しーゆーあげいん？

16・決めたら往け、怯まずに

アーヴラウはエドモントン。そこにある野党本部の建物の廊下を歩む人物がいる。

「アンリ・フリユウ」。野党党首であり、今回の選挙で蒔苗が戻ってこなければ代表に選ばれるであろう人物であった。

蒔苗派は一応ナンバー2である「ラスカー・アレジ」の元ひとままりになっていように見えるが、その実蒔苗がいなければ右往左往するしかない連中の集まりだ。この状況で選挙を行えば票が割れるのは目に見えている。現状ならば十分な勝ち目があると、アンリは睨んでいた。

ゆえに今必要なことはどうやって蒔苗の身柄を押さえ、彼の参戦を阻むかだ。彼女は色々と算段しながら建物を出て、玄関前に止まっていたリムジンへと乗り込む。

「首尾はどうだったかね？」

リムジンに乗っていた『先客』が語りかけてくる。アンリは対面のシートに腰を下ろしながら応えた。

「まずまずといったところね。所詮蒔苗がいなければ烏合の衆、選挙までに意見を統一することは出来ないでしょう」

「それは重畳。我々も色々と動いた甲斐があったという物だ」

満足そうに頷くのはGHの上級仕官服を纏った初老の男。現ファリド家当主にしてGH地球本部司令官、イズナリオ・ファリドである。彼はGH内での権力掌握に止まらず、アンリの後ろ盾として彼女の政権を擁立させ、実質的にアーヴラウの実権を手に入れようと企んでいる。各経済圏の政治には関わらないというGHの基本理念に背く行為であるが、それを何の迷いもなく行う剛胆さであった。

どこまでも欲深いその本性をおくびにも出さず、彼は済ました顔で話を続けた。

「現在こちらの手の者が蒔苗 東護ノ介の捕縛に向かっている。ほど

なく吉報が入るだろう」

クーデリアと鉄華団を取り逃がし、それを追って地球に降りたカルタの行動は、イズナリオから見れば『それを理由に蒔苗の捕縛に動いた』と捉えられていた。お飾りだと思っていたが案外使える駒だと、若干の勘違いで悦に入っている。そうと知らないアンリは、いやらしい笑いを浮かべた。

「期待しているわ。これで議会の掌握は叶ったも同然」

「まだ最後の詰めが残っている。油断はせぬようにな」

言いながらイズナリオは、己の隣に座らせた『養子として引き取った身よりのない子供』の頭をなでつける。その子供が微かに怯えの色を瞳に浮かべていることなど、二人は歯牙にもかけていない。

彼らの夢想は、当然取らぬ狸の皮算用でしかない。

それが証拠に程なく届けられたのは、カルタ敗退の知らせであった。

降り出したスコールはこのほか長く続いた。このことが、ミレニアム島を脱出する鉄華団にとって有利に働く。

雨に紛れた脱出行はGHの追跡を断念させ、また雷雲により衛星からの監視網も役に立たない。豪雨の中、前もって多量のコンテナに詰めていた物資をピストン輸送でモニターク商会の船に運び込み、彼らは島を離れ海原に赴く。

嵐が過ぎてやっと一息吐いた……とところで再燃する問題がある。無論、今後の進退についてだ。GHの襲撃により有耶無耶になっただが、いつまでも先送りにしていて良い物ではない。最早決断をせねばならぬ時に来ていた。

タンカーに偽装した輸送船の一室で、オルガとビスケットは対峙していた。いつもであれば他の主要なメンバーも参加しているはずの

話し合いであるが、今回は二人きりだ。そうする必要性を、共に感じている。

「……正直、迷ってる」

しばらくの沈黙の後、口火を切ったオルガが零したのはそんな言葉であつた。

ビスケットは目を丸くする。オルガがここまで長々と決断できずにいるところを見るのは初めてだったからだ。

オルガ・イツカという少年は迷いを持たない。持ったとしてもすぐにそれを振り払い即決する人間だ。周囲の人間に相談という体で話を持ちかけることもあるが、大体的場合はすでにその腹は決まっている。

今まではそうだったのだ。

「悪くない話だとは思う。上手くすりやあーヴラウにでかい恩を売られて、テイワズの覚えもめでたくなるだろう。……けどな、これから先、GHの追撃は激しさを増す。逃げ回ったとしても、どっかで絶対にドンパチやらかさなきやならない」

ぎ、と歯噛みする。

「そりや俺達は傭兵だ。今までだって命張って仕事をしてきた。『そうしなけりや生きられなかつた』からな。……けど今回は、『別に降りちまつても構わない』。最低限の義理は果たしているし、逃げ出す手段もある。地球までGHの妨害をかくぐりお嬢さんを送り届け たつていう、この事実だけでそれなりに箔も付いた。そこそこの仕事はやっていけるはずなんだ」

椅子の背もたれに体重を預け、天井を仰ぐ。今までこれほど頭を悩ませたことはあつただろうかと自問しながら、オルガは話を続けた。「ここで命を賭けてじいさんを送り届けるべきなのか、それとも降りて火星に帰るべきなのか。……いや、火星に帰るべきなんだろうな、やっぱ」

かかっているのは自分の命だけではない、地球に降りた団員達全員の命がオルガの判断にかかっている。ちよつと関わっただけの年寄りのために、命を張れと言えるのか。

慎重になったと言うべきなのか、それとも臆病になったと言うべきか。オルガの意志はここで引くことに大きく傾いていた。だが、踏み切りが付かない。心の中にわだかまるもやりとした感覚が、逃げ出すことに歯止めをかける。

このもやりとした感覚を覚えたのはいつからだっただろうか。ドルトでGHの行いを知ったときか、海賊をけしかけられたときか。いや……もしかしたらもっとずっと前から抱え込んでいたのかも知れない。それは収まることを知らず、ここにきて考えに待ったをかけるくらいには大きくなっていた。

姿勢を戻してビスケットに視線を向ける。多分ビスケットは諸手をあげて降りることに賛成するだろう。オルガはそう思っていた。しかし。

「そうだね。俺も帰るべきだと思う。……『思ってたつもりだった』」その言葉に今度はオルガが目を丸くする。元々ビスケットは慎重な性格だ。だから危険を避けられるのであれば避けようとするし、そのことをしつかりと意見もする。だが今回は、どうにも歯切れが悪かった。

『オルガと同じように』。

「俺も、迷ってる。それで三日月に言われたんだ。迷ってるのは俺が降りたくないって思ってるんじゃないか、って」
「ミカが？」

オルガの問いに、ビスケットは頷く。

「多分ね、ドルトのことが……俺の両親のことが引つかかっているんだと思う。でもこれは、俺の、『俺だけの都合』だ。それを理由にして、みんなに命を賭けるなんて言えるわけがない」

しかし、それでも。そう理性では判断していても。

迷いは、晴れない。

はは、とビスケットは力無く笑った。

「なんか初めてだね、二人揃って悩むなんて」

「そうだな。いつも意見合わせてばしつと決めてたもんな」

「……俺は時々反対してたよ？」

「え？ ……そ、そうだっけか？」

「そうだよ。オルガが聞いてくれなかっただけ」

くく、と今度は二人して笑い声を漏らした。

ひとしきり笑った後、オルガは再び天を仰ぐ。

「あく、やっぱすつきりしねえ。 ……行っても逃げて後にも後に引きそう
な気がするぜ」

「このままだとするね、後悔。どっちでもさ」

意見は揃っている。答えが出ないだけだ。しかし出さねばなら
ない。時間はいつまでも待つてはくれないのだから。

「……ちよつと外の空気吸つてくらあ。気分変えないと煮詰まっ
ちま
う」

「ん、少し休憩しようか」

ビスケットに見送られ、オルガは部屋を出る。そのまま彼は船の甲
板上上がる。

夜の潮風が吹き付ける中、適当な段差に腰を下ろしてオルガは息を
吐いた。

「頭張ってる人間ってのは、みんなこんな事考えてんのか……？」

組織の長という物は、これほどまでに頭を悩ませるものだったの
か。あのマルバですらCGSと言う組織を運営していく上で、いくつ
もの取捨選択があつたのだろう。その行く末があの結果だとしたら、
道を誤ればいずれ自分も……。

そんな未来を予測して、オルガは身震いした。自分一人ならまだい
い、しかし団員を、『家族』を巻き込んだの破滅など、想像するだにお
ぞましい。今になって背負っている物の重さを自覚したのか、色々ず
しりと何かがのし掛かってくるような、そんな感覚を覚えていた。

頭をかきむしる。悩みは増える一方、解決する手段など思い当たり
もしない。こんな時に限ってランディは放置の姿勢であつた。戦術
や運営上のアイディア、あるいは何らかの思考誘導的なことは口にし
ても、組織全体の決断に対して彼は口を挟まない。団長であるオルガ
を立てたとも考えられるが、こういった面倒から逃れるためじゃねえ
だろうなど、ついつい邪推してしまう。

はあ、と溜息。見上げる空に瞬く星はただ輝いているだけで答えをくれたりはしない。しばらくぼんやりと夜空を見上げていたオルガの耳に、微かな音が捉えられた。

「……………」

それは規則的な風切り音。最初は船のどこかが風に煽られての音かと思っただが、どうにも違和感がある。妙に気になって、オルガは立ち上がり、音の源を捜す。

広い甲板、パイプや構造物をいくつか抜けた場所。ちよつとした広場になっているそこで、三日月が一心不乱に鉄パイプを振るっていた。

「ミカ?」

「ん? オルガ、どうしたの?」

オルガに気付いて素振りをやめる三日月。「悪い、邪魔したか」という言葉に彼は頭を振る。

「そろそろ終わろうと思っただから。話し合いは終わった?」

「いや、ちよつと休憩つてところさ」

答えながら、オルガは傍らの構造物に腰かける。

「なかなかすつきりといかなくてな」

ふう、と溜息を吐く彼の様子に、三日月は眉を寄せた。

「もしかして悩んでる?」

「……分かるか?」

「なんとなくね」

三日月も隣に腰を下ろす。そうしてから彼はこう言った。

「オルガはどうしたいのさ?」

「そりゃあ、これから先鉄華団にとって益になる立ち回りを……」

「そうじゃなくて、『オルガ自身はどうしたいのか』ってこと」

「あん?」

思わず三日月をまじまじと見る。彼はいつもの通りぼんやりとした表情のまま、だがどこか真剣な目をして空を見上げつつ続ける。

「俺はオルガがどういう道を選ぼうとついていく。『あの時』オルガが手を差し伸べてくれたから俺は生きてる。だから俺の全部はオルガ

に預けたんだ。……もしも『みんなと違う道を選んだ』としても、俺は最後までつきあうよ」

それは鉄華団との決別すら考慮に入れた言葉。オルガは目から鱗が落ちたような感覚を覚える。

三日月はオルガの方を向いた。その目はいつものように問いかけてくる。だがなぜか、いつものようなプレッシャーは感じない。

「オルガはどうしたい？」

その問いかけもいつもの言葉ではない。『自分たちがどうするか』ではなく『自分がどうしたいのか』、鉄華団にとつて現状の最適解ではなくオルガ個人の望み。そういったものが問われている。

ああそうか、とオルガは何となく察した。きつと三日月が言いたいのは『初心に帰れ』ということなのだろう。次から次へと突きつけられる困難。それは覚悟の上であったが、予想以上に荒々しく押し寄せられ自分たちを翻弄してきた。その勢いにいつしか『何か』を見失ってしまっている。そんな風に感じられたのかも知れない。

「俺のやりたいことか……そうだな」

ゆっくりと噛みしめるように考える。鉄華団の事を一時棚上げし、最初に歩き出した時から鑑みれば――

存外あっさりと、答えは出た。

施術が行われ数日後。アインの意識が戻ったと聞かされたガエリ才は、施設の研究用ハンガーに急行した。

そこで待ちかまえていた物は。

「ボードウィン特務三佐！」

「アイン、お前なのか!？」

改修作業が進む目の前の機体から響く声に、動揺を隠せない。

「成功したのか……良かった……」

口ではそう言ったものの、これで良いはずがないという思いが心の底に澱がごとく積もっていく。

そんな彼の心境を知るよしもない技術者達は、淡々と現状を報告する。

「こちらがダルトン三尉の現在の状況となります。阿頼耶識との同調は滞りなく進んでおり、GHのデータバンクに残されている本来の同調率には及びませんが、それに迫るほどの数値に至っております。これならば十分に実戦に耐えうるでしょう」

「本当に感謝いたします特務三佐！ これでクランク二尉の無念を晴らす事も特務三佐のお役に立つ事も出来ます！ 心から尊敬出来る方に人生の中で2人も出会えた、これ以上の幸せは有りません！ この御恩とても返し切れるようなものではありませんが、この命を持つて必ずや返し切って見せます！」

「そうか……期待している」

熱の入ったアインの言葉に、ガエリオは気の乗らない返事を返しつつ端末の画面に見入る。そこに記されたアインの現状は、正しく『MSのパーツとして切り刻まれ機体に埋め込まれた』としか表現できないものだった。

それに気を取られていたせいだろうか、ガエリオは『アインの発言が微妙におかしいこと』に気付かなかった。

これからの方針を技術者達と打ち合わせてから、ガエリオは施設を後にしてマクギリスと合流する。

「……随分と気に病んでいるようだな。後悔しているか？」

「実際にあのような光景を目の当たりにすれば、気分も滅入るさ。……だが、後悔なんぞするのは、あいつにとつて侮辱となる」

自分に出来るのは、せめてアインが本懐を遂げられるよう舞台を整える事くらいだ。彼が己の存在を賭けて戦うのであればそれに応えなければならぬという、使命感のような物があつた。

座して虚空を睨み付けるガエリオは気付かない。そんな自分をマクギリスが痛ましい表情で見ていることに。

「……あの機体の調整にはまだ暫く時間がかかる。だが彼らもそう簡

単にエドモンontonにたどり着くことは出来ないだろう。カルタとの交戦の後、足取りが掴めないと言うことは、非合法的なルートを使っているはずだ。正規の手段と比べれば相応の時間がかかる」

「カルタは無事なのか？」

「ああ、率いていた部隊は壊滅的な被害を受けたが、彼女は無傷で離脱している。今頃はヴィーンゴールヴに向かっているだろう。私もそちらに向かい、フォローするつもりだ」

「やはりまだ諦めていないのか。だが奴らの行方が知れぬのでは」

「代表選出会議に間に合わそうとするのであれば、自ずと使える手段は限られてくる。そのあたりから絞り込みをかけるさ。もつともカルタの方でも目星を付けているかも知れないがね」

少なくともエドモンontonにたどり着くまでには捉えられると、マクギリスは断言する。

「分かった。俺も用意が整い次第出る。カルタにもそう伝えておいてくれ」

「ああ、では先に行かせて貰う」

そう言つてマクギリスは部屋を後にする。人気のない廊下を歩む彼の表情は、厳しい物であった。

（やはりその道を選んだかガエリオ。……できれば諦めて貰いたかったが）

しかし彼は『選択した』。それは自分と彼との『決別』を意味する。最早振り返るまい。マクギリスはただ前に進む。

数日ぶりにすつきりと晴れた朝。オルガは団員達を船の甲板に集めていた。何事なのかとざわめく団員達。その様子を見ながらビスケットは考えていた。

（オルガは、話を受けることにしたのかな……？）

昨夜部屋に戻ってきたオルガは、妙にすっきりした顔をしていた。腹は決まったのかと問うビスケットに対し、彼は頷いて「明日みんなを集めてそこで言うさ」と応えたのだが。

集まった団員達の様子を、少し離れた位置で蒔苗やクーデリア、それにランディや雪之丞などの大人達が見守っている。ランディやメリビットはともかく雪之丞は確実に鉄華団の団員であるはずなのだが、今回は外様を決め込むらしい。まあオルガがどういう判断を下すにしろ、しょうがねえとか言いながらついていくのは間違いないだろう。

「みんな揃ったか？　じゃあちよつとばかり俺の話聞いてくれ」

おや、とビスケットは思う。まずは今後の方針を決めたと宣言するのかと思っていたのだが。彼の疑問をよそに、オルガは語り出す。

「蒔苗さんからの依頼だが……正直、迷った。いや、ぶつちやけ断って火星に帰っちまおうかと思っていた」

団員達のざわめきが大きくなる。実の所多くのもものたちが依頼を受けてエドモントンまで赴くのだろうと思っていた。オルガの性格ならそうするのはと予想していたのだ。

「今までは何とか乗り切ってきたが、いい加減GHも本腰を入れてくる頃だ。こつから先進むってんなら、無事ですむ保証はねえ。……誰かがまた犠牲になっちまうことも、あると思う」

確かにそうなのかも知れないがと、団員達は戸惑いを隠せない。いままですみませで物事の舵取りをしてきたオルガが言うのだからなおさらだ。誰かが何かを口にしようとする前に、まあ待ってくれとオルガは手で制して話を続ける。

「そこまでの義理はあるのかって、思った。だが考えてみりゃクーデリアお嬢さんも蒔苗さんも、火星のためになるよう動いている。つまり巡り巡って俺達の将来のためになるって事だ。そいつを分かってて放り出しちまうってのは……不義理って奴じゃねえのかなあつて気がするんだ」

一つ一つ自身が確認しながらなのか、オルガは考えながら言葉を紡ぐ。

「それにな、俺はどうにもGHのやり口が気に入らねえ。火星からこつち、海賊をけしかけたりドルトの人らにいわれのない罪をおつ被せようとしたり、好き放題やりやがる。あれじゃまるで……『マルバ達みてえじゃねえか』」

己の立場を笠に着て、弱い者を足蹴にする。その有り様がかつてのCGSで受けた仕打ちを思わせると、オルガは感じていた。

そう、『かつてのCGSとGHは似たような有り様にしか見えない』のだ。CGSも創設当時はそれなりの理念と節度があつて、マルバも少しはまともな性格であつたらしい。そこから転げ落ちるような腐敗の様相は、時間と規模の差はあれど、確かに現在のGHの有り様とよく似ている。

「そんな連中が蒔苗さんの国を乗っ取ろうとしてる。気に入らねえ。気に入らねえし納得がいかねえ。GHだからって、そんなに好き放題させていいのか、ってな」

そこまで言つて、けどな、と続ける。

「そんな理由で蒔苗さんたちを助けたい、つてのは……俺のわがまま』だ。本来の仕事は終わつてんのに、これ以上必要のない、命がけの仕事に団員を、お前らを巻き込むのは団長としてやつちやいけない事だ」

火の粉を払うために戦い、テイワズに認められるために戦つた。そこまではいい、必要なことだったのだから。だがここから先はそうじゃないとオルガは言う。

だから――

「だからここから先は、『俺とミカだけで行く』」

『……は?』

オルガの言葉に、鉄華団の少年達だけではなくメリビットやフミタなどにも唾然とした表情を見せた。

これがオルガの思いついた『もつとも冴えたやり方』である。団員を巻き込むのがいやならば団員を連れて行かなきゃいいじゃない。突飛と言うか極端な発想であつた。

このへんまだまだオルガは見通しが甘い。そんなことを言つては

いそうですかと大人しく引き下がるような人間は、ここにはいないのだから。

「俺たちが帰ってくるまでは、ユージンに任せる。あれであいつはしっかりしてるからな、へたすりゃ俺よりも——」

「ちよーつと待ったア！」

オルガの言葉を遮って声を張り上げたのはシノである。彼はいつもの調子で言葉を続ける。

「ここまで来て帰れっつのはちよつといけずじゃねえか？　俺も噛ませろよその話」

「シノ!？」

「GHにむかついてんのは何もお前だけじゃねえぞ団長。俺だつて一発カマしてやんなきや気が済まねえ」

ばしんと右の拳を左の手の平に打ち付けて、シノはにやりと笑う。さらに。

「俺も行く。いや、連れて行ってくれ団長」

「昭弘？」

次いで言葉を発したのは昭弘だった。彼は覚悟を決めた様子で言う。

「団長には恩がある。俺と、昌弘を救ってくれた恩が。命（タマ）張るつてんなら丁度良い、俺に、少しでも恩を返させてくれ」

言われたオルガは一瞬返答に困る。その僅かな間隙を縫うようにして団員達から次々と声が上がった。

「俺も！　俺も行きます！」

「置いてくなんてなしですよ団長！」

「シノが行くんなら俺も……」

「カマすんならみんなでやろうぜ！」

「水くせえつすよ団長！」

「お前ら……」

団員の反応に、今度はオルガが啞然とする。その様子を見て、ビスケットはふつと笑みを浮かべた。

「みんな『巻き込まれたいんだよ』オルガ。もちろん俺も」

自分の気持ちはすっかりオルガに代弁されてしまった。そう、自分も納得できなかったのだ、今の世界の有り様が。逃げ出そうという気持ちにブレーキをかけていたのがそれだった。きつと団員のみんなも、大なり小なり思うところがあつたのだろう。

世界を変える、などと大層なことは言わない。しかし目の前に出来ることがあり、それが少しでも自分たちの未来を良くしてくれる物であればやってみる価値はあるのかも知れない。なにより。

(GHの鼻をあかせば、きつとすつきり出来るだろうしね)

敵討ちとまでは行かないけれど、とビスケットはこれまでにない不敵な笑みを浮かべる。色々と吹っ切れたようだ。

オルガは困った顔をして視線を大人達の方に向ける。視線を向けた先の雪之丞は、いつのまにやら煙草を吹かせながら言う。

「俺が行かなきゃ誰が整備の指揮とるんでえ」

その隣のメリビットもどこか呆れた様子で。

「私は鉄華団の動向を報告する義務がありますから。もちろん付いていきますよ」

らしいことを言っているが、実の所少年達が心配なのだ。それが分かつてる雪之丞などは片眉をぴくりと動かし肩を聳めた。

かてて加えて。

「当然あたしらも行くよ」

「ダーリンから面倒を見てやれって言われてるからね」

アジーとラフタも付き合う気満々であった。これにはオルガも泡を食う。

「ちよ、ちよつと待って下さい！ 二人は兄貴からの大切な預かり物だ！ なんかあつたら……」

「はっ、自分の身は自分で守れるさ」

「GHとやらかすのなら、腕利きは一人でも多い方が良いよね？」

これは梃子でも動きそうにない。おどけた様子だが瞳に有無を言わさぬ力がこもっている。オルガは二人を留めるのを断念せざるを得なかった。

狼狽えるオルガの様子を見ながら、くく、と忍び笑うランディ。そ

うしてから彼はどうよとドヤ顔をフミタンの方に向ける。彼女はちよつとむつとした様子を見せてから、ふいつと視線を逸らした。それにまた笑い、ランディはオルガに向かって声をかけた。

「大将、契約の更新はしてくれるんだよね？」

あんたもか。絶望にも似た表情をオルガは浮かべた。と、傍らの三日月がこちらを見上げているのに気が付く。

その目はいつもの通りに訴えかけていた。だが同時に……。

(ああ……もう『分かっている』さ)

オルガはふう、と溜息を吐く。そうしてから、にい、と獯猛に歯を剥いた。

「どいつもこいつも大馬鹿野郎が……いいぜ、やってやろうじゃねえか」

全員を見回す。そして彼は咆吼した。

「ここにいる全員で、エドモントンに殴り込みだ！ GHに一発カマして、火星の、『俺達の未来』を獲りに行くぞ！」

『おおーっ!!』

雄叫びが天に響き、数多の拳が掲げられた。その光景を見ながら蒔苗は顎髭をなでつける。

「ほっほっほ。期待通りの、いや、それ以上の展開じゃのう」

その横のクーデリアは、どこか誇らしげな表情でこう答えた。

「ええ、これが鉄華団です」

これからの方針が決定した後、オルガは名瀬に連絡を取り、状況を伝えていた。

「すいません兄貴。勝手なことをしました」

「いや、うちもアーヴラウで商売してんだ。蒔苗氏みたく風通しの良い人間が代表だったらありがたい。渡りに船ってところさ。ま、多少

無謀だとは思いますが、リボン付きもいるんだ、何とか無理を押し通せるんじゃないかね。……それに無策ってわけじゃないんだろ？」

「はい、クーデリアのお嬢さんの案を下地にして、話を詰めているところですよ」

「ほう、あのお嬢さんそんなことを言い出したのか」

「……もしかしたら一番『化けてる』かも知れません。あのお嬢さんなら本当に火星を変えちまうかもって、思います」

「親父の見立ては間違ってたかったって事だ」

くく、と笑みを零してから、名瀬は真剣な表情を作った。

「アジールとラフタの事なら気にするな。あいつらはそんなにやわじやない」

「ですが……」

「こいつはな、『未来への投資』ってやつだ。自分たちによりよい未来を引き寄せるため、大切な物を賭けて事に挑む。お前達が命を張るのも同じ事だ。何も賭けずに得られる物なんて無いに等しい。でかく張らなきゃいけないってことは、見返りもでかいつてことさ。今回の話にはそれだけの価値がある」

「未来への、投資……」

鋭い視線を向けたまま、名瀬はこう締めめた。

「抜かるなよ。この大勝負、テイワズにとつても分水嶺になるかも知れねえ。気負いすぎるのも問題だが、心の端には留めておけ」

「……肝に銘じます」

オルガとの通信を終えた名瀬は、笑いながら傍らのアミダに語りかけた。

「賭けにやなんなかつたな？」

「そりゃあの子があんたでも同じ事しただろうからね」

地球の状況を調べた彼らは、オルガたちがどういう行動に出るか予想していた。結果はどんぴしゃ。自分たちでもそうしただろうし、恐らくはマクマードもそう判断する。

さあてどうなるかなど、二人は事の推移を見守る事にした。

「賭け金はベットした。あとは天命を待つばかりってね」

そう言って名瀬は、帽子の鍔をぴんと弾いた。

※今回のえぬじい

「ボードウィン特務三佐、おはよう……ございましたっ！」
「違っ！ それ違っ!?!」

なんか混ざったけどいいよねサンライズだし。

続くのデス。

17・それがお前の答えかよ

アンカレツジ。アラスカにあるその港湾都市に、鉄華団を乗せた輸送船は密かに到達していた。

この地よりテイワズが現地で運営している鉄道の大規模定期便を利用しエドモントンまで赴く。それがクーデリアが提案した順路であった。アンカレツジに赴くこと自体がかなりの大回りとなり、加えて定期便を使うことで経路が露見するリスクを回避する。そうといった思惑であったが。

「まあ十中八九どつかで襲撃を受けるだろうな」

ランデイはあっさりと言ってのけた。

「どっかから情報が漏れてるってのか？　だがモンタークには最小限の情報しか流してないはず……」

洩面を作るオルガに、ランデイは応える。

「奴が情報をリークしなくとも、代表選挙に間に合う手段ってのは限られてる。そっから逆算すりゃあ、ある程度の目処はつくさ。そうでなくてもエドモントンで待ちかまえてりゃいい話だからな。まあ途中で襲撃する分にはあ戦力を分散させないといけねえから、来たとしても撃退するのはそう難しいモンじゃねえだろ」

領土外であったミレニアム島ならいざ知らず、アーヴラウ本土でG Hの活動は大幅に制限される。そもアンリがごり押ししテロ対策の名目で無理矢理戦力を展開させている状態だ。多くの政治関係者も非協力的であり、また地球外縁軌道統制統合艦隊以外の派閥は様子見を決め込んでいるため、領土全体を警戒するのは難しい。的を絞ったとしても人海戦術とは行かない以上限界がある。付け入る隙は十二分にあるとランデイは睨んでいた。

「途中の襲撃は小手調べ程度に考えとけ。本番はエドモントンに着いてからさ。向こうは蒔苗のじいさんが議会に入るのを絶対に阻止しなきゃならねえ。死に物狂いで防衛するはずだ」

「ただの力押しは通用しないな。……ビスケットがなんかアイディアあるらしくて、整備の連中と相談してるが」

「この際使えるものは何でも使つて、知恵は絞れるだけ絞ろうぜ。モータークからは出せるだけの物資は出して貰ったんだ。精々使い潰してやろう」

「大盤振る舞いも良いところだな」

現在鉄華団は受け取った物資を搬入する作業でてんてこ舞いである。少年達がほとんど総出で作業する中、選挙前の忙しい最中を縫つて蒔苗派のナンバー2であるラスカーが直々に、蒔苗と打ち合わせのため訪れていた。

「先生ー、ご無事でなりよりですー!」

「おお、おかげさまでぴんぴんしとるよ。それで、議会の方はどうじゃ」

「なんとか落ち着いてますが……やはり先生がおられない事が堪えております。体制を一度見直す必要があるかと」

「そうさのう。儂もいつまでも生きてはおられん。出来れば早急に後継者を見繕つておきたいが……」

「私では精々次の世代までの繋ぎにしかなれませんでしょうな。若手もまだ育つてはおりませんし」

「ま、それは此度の事を乗り越えてからじゃな。……おっと、忘れてはいかな。こちらが件のクーデリア嬢じゃ」

「クーデリア・藍那・バーンスタインと申します。この度はわざわざのご足労、痛み入ります」

「お初にお目にかかる、ラスカー・アレジです。あなた方の助力で我々は窮地を乗り越える事が出来るやも知れませんが、感謝致します」

「まだそうと決まったわけではございませぬ。乗り越えるためには、アレジ先生を始めとした議員の方々にもご協力して頂く必要があるかと」

「無論可能な限りの協力は惜しみませぬ。して、我々はどうすれば？」

「はい、まずは……」

それぞれが着々と嵐に備える。少しでも、一つでも、己に出来ることを。

俺達は止まらない。ここで終わらないと、かつてオルガは言った。それを現実の物とするべく、彼らはあがき続け、走り続ける。

アンリに後を任せヴィーンゴールヴに戻ったイズナリオは、早速カルタを呼び出していった。

「此度の失態、申し開きようもありません」

「詫びるのであれば私ではなく、君の父上に詫びるのだな。さぞかし失望されることだろう」

それはどうかしらねと、跪いた殊勝な態度の下カルタは皮肉げに思う。

イズナリオからの強い勧めがあったからと言って、自分を後継者ではなく名代とした父だ、病床でなければこの失態を理由に喜び勇んで席を辞することを促し、縁談をねじ込むくらいはやりかねない。

それが一人娘を思う親心であることは分かる。だが目の前の男にそのあたりを上手く突かれて良いように操られているのが現状だ。病床にあつて心身共に弱っているという理由があるとしても情けなさ過ぎる話であつた。

「君はセブンスターズの一角を担うイシュー家、ひいてはギャラルホルン名に泥を塗つたのだ、分かつているな？」

現在進行形で泥を塗り続けている人間に言われたくはないが、ぐつと堪える。目の前の男に対抗するためには何もかもが足りない。そんな状態で抗する事を企んでも叩き潰されるだけ。いまはまだ雌伏の時であると己を律する。事実結果を出せなかったのだ。今は何を言われても仕方がない。

「しかしながら、君の後見人である以上黙って見ているわけにはいか

ないのでな、今一度名誉挽回のチャンスを与えよう」

「……はっ！　ありがたき幸せ！」

恩着せがましく言うイズナリオ。まあ『そうするしかない』のでしようけれどねと、カルタの内心はどこまでも冷めていた。

地球本部司令官を務めるイズナリオ——ファリド家であるが、自身が所有する戦力は驚くほど少ない。これはファリド家がどちらかと言えば政治家寄りの家系であったことに起因する。故にイズナリオは武門であるイシュー家や監察局に影響力を持つボードウィン家との繋がりを強めたのだ。そんな彼が動かせる武力の駒はカルタ率いる地球外縁軌道統制統合艦隊しかないと言っている。アリアンロッドや他の勢力が静観を決め込んでいる現状では、結局カルタだよりにならざるを得ないのだ。それが分かっているけどどこまでも高圧的に振る舞うイズナリオの姿は、滑稽にすら映る。

己も似たような物だがと自嘲気味に思いながらも、カルタは跪いた姿勢からイズナリオを睨め付けるように視線を合わす。

「すでに我が部下が、蒔苗　東護ノ介とその郎党がエドモントンに向かってしていると予測しその経路の割り出しを行っております。お許しが頂けるのであればすぐにも出陣致したく」

「う、うむ。こちらでも同様の情報を得ている。マクギリスも是非とも君にと薦めるのでな。対処を任せよう。マクギリスと協力し、事に当たれ」

「はっ！　恩赦のほど、感謝致します！」

カルタの勢いに、僅かにたじろぐ様子を見せるイズナリオ。敗退によりカルタの心が弱まっていると思っただろう。そこにつけ込み恩をなすりつける腹積もりだったのだろうが、そんなものにいつまでも付き合っていられない。礼もそこそこにカルタはさっさと退出した。

「司令、いかがでしたか？」

「許可は出た。私はこれからファリド特務三佐と会わねばならん。貴様らは準備を整えよ」

「はっ！」

外で控えていた部下に告げながら、カルタは歩みを進める。

今はただ、前に進むことだけを考えて。

アンカレッジを発った大型輸送便は、一路エドモンソンへと向かう。その車内では、戦いの準備が着々と進められていた。

「これだけの数があると壮観ですね」

臨時の格納庫と化した車内の中にひしめくMWを見ながら、メリビットが溜息を吐くように言った。

ドルトのデモに使われる予定だった物をパク……譲り受けた数台に加え、モンターク商会から供給された多数。それらの整備が今急ピッチで進められている。その進行状況を確認しながらオルガが応える。

「これでもまだ足りねえ……つてのは贅沢な話か。モンタークにも結構無理をさせたみたいだし、今あるモンだけでなんとかやるしかねえな」

GHに露見しないようこれだけの数を集めるだけでも、かなりの苦労があつただろう。利用し合う間柄ではあるが、このあたりは素直に感謝しておくべきだと、わりに律儀なオルガは考えていた。

「阿頼耶識は積まないのですよね、これ」

「ああ、時間もねえし、『作戦通りにいけるんなら、そもそも必要ねえ』からな」

「上手くいくのでしょうか」

「いかせるつきやねえのさ。でなきやちびどもをこいつに乗せなきやならなくなる。生身よりはましつっても、出来るんなら避けてえ」

命をかける覚悟はあるとはいえ、生存の可能性が少しでも上がるのであればやっておきたい。そう言った方面での欲が、今のオルガには生じていた。

良い傾向なのでしょうとメリビットは考える。出会ってからこつ

ち、この少年を筆頭に鉄華団の面子は生き急いでいるように感じている。出自や経歴からして仕方がないのかも知れないが、自身の命すらちり紙程度に軽く扱っているように見えたのだ。

それが変わってきたのはやはり――

(彼の影響、なんでしようね)

破天荒というのも生ぬるい男、ランディール・マークス。未だに彼の人となりは把握しきれしていない部分が多い。というか理解の範疇をぶっ飛ばしている。だが、それでも分かることがあった。彼の戦い方は、冷徹な計算と恐ろしいまでの気配りが両立している。

敵には甚大な被害と恐怖を、そして味方に対しては損害を押さえ勝ち筋を与える。ただ前に飛び出して味方を庇護するのではなく、味方に戦いの準備を整えさせ戦力を底上げするように動いていた。彼がいなければ、鉄華団はただがむしやらに戦い酷い損耗を出していただろう。彼のやり方を見た少年達は、少しずつではあるがそのやり方を自分たちなりに昇華しているように見えた。

その上で彼は団長であるオルガを立て、自分はアドバイザー程度にしか口を出さない。やろうと思えば鉄華団そのものを手中に収めることも出来るであろうに。それは人情的な所から来ている物ではなく、何らかの打算的な思考が見え隠れする行為であった。

(鉄華団に何かをさせよう……いえ、何かを『期待している』のかしらね)

どちらにしろ、彼には注意を払っておかなければならない。我知らず鉄華団に入れ込んでいるメリビットにとって、ランディは危険人物のままであった。

もちろん間違いいではないが、彼女はこれから思い知ることになる。危険の方向性がなんか違うと。

「久しぶりだなカルタ。無事で何よりだ」

「生き恥をさらしているわ。……気を使ってくれたみたいね。その助力に感謝を」

改めて言葉を交わすマクギリスとカルタ。微妙に目線を合わさない目の前の男に、やはりかと内心落胆を覚えるカルタだが、気を取り直して会話を続けた。

「話は聞いているわね？ 蒔苗 東護ノ介の捕縛を改めて許されたわ」

「ああ。……最早君には必要のない物だろうが、可能な限りの情報を収集し纏めておいた。一度目を通して欲しい」

マクギリスから渡されたタブレットに目を通す。

「部下が予測した物とほぼ同じ、いえ、それ以上ね。監察局で揉まれたのは伊達ではない、と言う事かしら」

マクギリスに何か裏の伝手があると言うことを理解しながらも、わざと的のずれた事を言う。このような物は腹芸とすら言えない。ただ相手の真実に踏み込むのを躊躇する、臆病さから来る物だ。我ながら度し難い物だと自嘲する。

「むしろ即座にここまで予測できるよう部下を鍛え上げた君に驚嘆を覚えざるを得ない。見事な物だよ」

「お褒めに預かりと言いたいところだけれど、それで失態を挽回できるわけではないわ」

「あのランディール・マーカスを相手にここまで張り合えるのは他にない。相手が悪すぎるのだよ」

「そんなことは言い訳にならないわね」

賞賛を斬って捨てる。例えマクギリスの言葉でも認められない。自分たちは本来敗北を許されないのだから。

「二人の兵としては彼らに驚嘆、いえ、敬意すら覚えるわ。けれども、だからといって好き勝手を認めるわけにはいかない。今回のことはGHの威信だけではない、地球の、世界のあり方にすら罅を入れるものよ。例えそれが、薄氷の上に成り立っていたものだとしても」

カルタも分かっているのだ。クーデリアや鉄華団の行動、いや

『その存在そのものを産み出した』のが、『今の世界の歪みから生じたもの』だと。

『この戦いに、大儀などない』のだと。
しかし、それでも。

「……分かっていて、君は往くのだな」

マクギリスが吐いた言葉には、苦渋の気配すら籠もっている。それを感じながらもなお、カルタは止まらない。止まらない。

「これは私の意地。つまらない矜持(プライド)よ。だけでもそれすら捨ててしまつたら、私はもう何者とも向かい合えない」

言つて彼女は席を立つ。全ての迷いを振り切るように。

「話が出来てよかった。……マクギリス・フアリド特務三佐、貴方の協力を改めて感謝を」

「武運長久を、祈る」

互いに敬礼を交わし、そしてカルタは去つた。

残されたマクギリスは、夕日に赤く染まる部屋の中、一人呟く。

「カルタ、ガエリオ。君たちがもつと賢しい人間であれば。……あるいは、セブンスターズでなければ……」

夕日を背にしたマクギリスの表情は陰り、読みとれない。

真夜中の雪原を、複線仕様の大量輸送列車が往く。

鉄華団の少年達は、交代しつつ24時間体制で警戒を続けている。団長であるオルガに至ってはほとんど休息らしい休息も取っていない。団長たる者、皆の模範にならなければいけませんよとメリビットから小言を貰わなければ、仮眠すら取らなかつただろう。

「……団長だから休めねえっーの」

オルガの責任感の強さは長所ではあるが、逆にこう言つたときに融通の利かない部分を見せる。修羅場を潜ってきたとはいえ、そこらあ

たりはまだ若いと言えた。

「気持ちには分かるけどね、ずっと張りつめてたら倒れちゃうよ?」

コーヒーマグのマグを差し出しながら、ビスケットが言った。しかし、かくいう自分もオルガと大して変わらなかつたりする。

彼らも人間だ。いつまでも緊張を保っていられるわけでもない。来るなら早く来いという心境にすらなりかけていた。

「今は……ランディさんとミカが警戒してるか。あの二人なら心配ねえって分かっちゃいるがな」

「不意を突かれるよりはマシだと思うしかないね」

互いに苦笑。敵は強大、用心に用心を重ねたとて不安がぬぐいきれる物ではない。自分たちは結局、まだまだ子供なのだ。そう思い知らされる旅路であつた。

気分を切り替えるつもりか、オルガが話題を変える。

「それで、例の『小細工』の方は?」

「必要な部品とプログラムは組んでる最中。実際に組み上げてテストって事まで考えたら1日余裕があるかなってところ」

「そこはおやつさんと整備班だよりか。余裕があるんなら……」

そうやって言葉を交わしている最中、突如爆発音が響く。

機体のセンサーに感。薄暗がりの中で、ランディに口元が笑みに歪む。

「……来たか」

軌道の周囲に炸裂弾が派手にばらまかれ、列車が急停車する。進行方向の先、雪舞う荒野のまっただ中に轟音を立てて降り立つ影。

グレイズリッターが1小队。その先端を位置取るのは、通常の物より大型の肩装甲を備え赤いラインが一筋入った機体、カルタ専用機である。

「鉄華団に告げる！ 蒔苗 東護ノ介の身柄をこちらに引き渡して貰おう！ でなければこのまま列車を破壊する！」

選挙の期間中に到着し、MSを含む大量の物資を一度に運び込める手段。であればこの定期便しかないとカルタの部下とマクギリスは予測した。それは見事に的中したのだ。

宣告しながらカルタは機体に剣を構えさせる。告げたことは張つたりではない、何の反応もなければ即座に機関車を破壊するつもりであった。それはあり得ないと分かっていたが。

案の定、反応は早く。

「ミカー！ ランディさん！ 頼む！」

列車の急制動に顔を顰めながらも、オルガはインカムに吠える。それとほぼ同時に貨車の一部から爆発するような勢いで飛び出す2機のMS。もちろんバルバトスとシュヴァルベ・グレイズだ。

飛ぶように駆けるバルバトスの姿は、グレイズリッターのパーツや追加装甲、装備を纏い大分変化を見せている。だがその機動力にはいささかの衰えもない。

「やはり貴様か白いガンダムフレーム！」

その突撃を真っ向から受けて立つのはカルタ。ミレニアム島での焼き直しがごとく、ブレードとレンチメイスが激しく火花を散らす。そして残りの3機はランディの方へと殺到した。

「昭弘！ シノ！ 急いで機体を立ち上げて二人の援護を……」

「いや！ 残りの連中には周囲の警戒をさせてくれ！」

指示を出そうとしたオルガの言葉を、交戦しながらぶつた切るランディ。

「こっちの戦力が分かかっていてこの数つてのはおかしすぎる！ 増援とかの可能性があるぞ！」

ランデイの指摘にはつととなるオルガ。確かに罫を張っていたとはいえ大隊以上を壊滅させた自分たちに対して、たった1個小隊で襲撃をかけるなど無謀にもほどがある。戦力を分散させていたにしても少なすぎると言っている。何の考えもない馬鹿ならいざ知らず、このあいだの戦いから見れば相応のやり手だ。であれば何かがあると見て間違いはないだろう。ランデイの考えを理解したオルガは、改めて指示を出す。

「機体を立ち上げたら、列車の周囲を警戒だ！ 視界が悪い、レーダーから意識を外すな！」

貨車から流星号とグシオンが身を起こし、急ぎ指示を実行せんとする。その間にも激戦は続けられていた。

「は、この間とは随分と様子が違うじゃねえか！ なに企んでやがる！」

幅広剣とマチュットを振り回しながら、ランデイは挑発するように言葉を投げかける。

相対しているのは3機のグレイズリッター。それがランデイの機体を中心に正三角形を描く形で位置取った。そして積極的に攻め込まず、ランデイの動きに合わせて三角形を保ったまま間合いを維持し、戦闘はあくまで受けに徹する。消極的な戦い方は明らかに時間稼ぎを目的とした物だ。だが同様の目的があつたミレニアム島と比べてお粗末と言つても良い。何よりも。

「欠員を補充もしてねえたあ、ナメられたモンだなア！」

そう、今相対しているのはミレニアム島で交戦した小隊である。潤沢と言える人材を抱えているGHであれば、欠員を埋めることなど難しくはないはずだ。そしてカルタの配下であれば、ランデイを虞ても尻込みするような人間はいないだろう。この状態でランデイを押しさえ込めると思うほど愚かではない連中だ、必ず何らかの思惑がある。とはいえ挑発に乗ってくるとは思えなかったが。

「は、容易く思惑を口にすると思つてもいないだろうが貴様は！」

幅広剣を受け止めた機体——小隊長機からの返答。なんとか重さのある斬撃を弾き、彼は咆吼する。

「この場に我等だけが現れた意味、どのみち貴様はいやでも知る事となる！」

「随分ともったいぶってくれんじやねえか！　楽しみは後に取っておくタイプってわけじゃあるまいしよー！」

「黄泉路で酒盛りも楽しかろうさ！　それまでは我等に付き合ってもらおうか！」

火花を散らしながら交わされる言葉には、己が命を捨てる覚悟が乗っている。死兵。彼らは最初から討ち死にする覚悟でこの場に挑んでる。

ただ命を捨てるだけではない、そこに必ず意味はあるのだ。ランデイは機体を舞うように操りながら、後ろに向かって警告を飛ばす。

「昭弘！　狙撃モードで遠距離を探れ！　こいつら『自分たちをマーカーにして、遠距離砲撃を叩き込む』気かも知れん！」

「!?　りよ、了解！」

グシオンの頭部が変形し、額に当たる部分に備えた長距離索敵システムを主とする狙撃モードとなる。天候により視界は悪いが、現段階では彼らが持つ最大の索敵手段だ。それを用いて昭弘は警戒を強める。

ランデイが予想したのは現状で最悪に近い一手。味方の識別信号を頼りに長距離砲撃を行う。つまり『接敵している味方を狙って砲撃を行うことによって、結果的に敵に打撃を与える』という外道。『ヒューマンデブリを前面に押し立てて戦闘を行う海賊などがよく使う手』だ。列車は動けず自分たちも足止めを喰らっている現状であれば、効果的な手段である。相手の覚悟のほどを見て、これくらいはやりかねないとランデイは判断したのだ。

(可能性は低いと思うがね)

眦を鋭くしたランデイは思考を巡らす。GHはどういうわけだか『蒔苗の殺害ではなく捕縛を目的としている』。どれだけ正確な砲撃でも彼を巻き込む危険性がある以上、それを行う事はなかりと思う。だがもし状況が変わり蒔苗の生死を問わないということになったのであれば、と可能性は捨てきれない。その他にも考え得る要素は

いくらでもある。それに全て対処できるわけではないが打てる手は打っておく。

激戦の中、それでも思考を巡らし気を配るランディの負担は生半可な物ではない。だが。

（太刀筋、動きに揺るぎの一つも出んか！ 敵ながら天晴れと言うしかないな！）

猛攻の中、小隊長は内心舌を巻く。最低限の人員で襲撃をかけたのはランディの思考を揺るがすという目的もあった。だが思考はともかくその戦いぶりには全く衰えがない。このままでは遠からず圧倒されると、小隊長は判断せざるを得なかった。

しかし。

（我等が命が落ちた時こそ、貴様の負けよ！ 『あとはカルタ様がケリを付けてくださる』！）

負けると知っていて、なおも彼らは不敵に笑んだ。

壮絶なまでの覚悟でランディに挑みかかる3機。そこから離れた場所ではカルタ機とバルバトスが激しく鎬を削っていた。

「やっぱり速いなこいつ」

「基本性能はともかく、出力では話にならんか！」

本来であれば厄祭戦時代に製造されたガンダムフレーム——バルバトスは、大量生産を前提とした現代の機体より高い性能を持っていた。しかし今は経年劣化により性能の多くが低下している状態にある。それこそグレイズと同レベルに近い。

『出力以外は』。

ツインリアクター機であるガンダムフレームは、単純に考えてもシングルリアクターのグレイズの倍は出力がある。現状、『とある事情』によりガンダムフレームのリアクターは本来の最大出力を出すことは出来ない。それでもそのパワーはグレイズとは比べ物にならない。それを下地に繰り出される打撃は一つ一つが必殺と言っても良い。それを凌ぐカルタは、刃の上で綱渡りをしているような心境であった。

「機体だけではない……こいつ、剣を交える度に技が冴えてくる！」

振り回されているレンチメイスの速度が、技そのものが、徐々に鋭さを増してくる。まるで巣立ち前の若鳥が翼をはためかせ、飛び立つ寸前であるかのように。

ただの傭兵風情がとは言えまい。彼らは火星から困難をくぐり抜け、ここまでたどり着いた紛う事なき強者。ランディール・マーカスと同じく全身全霊を持って相対せねばならない強敵だ。

同時に。

（ああ、全く度し難い。……敵の有り様を『羨ましい』と、そのひたむきさを『美しい』とすら思ってしまうなんてね）

自分のようなしがらみのない、愚直なまでに突き進む勢い。最早失われた、いや最初から持っていなかったのかも知れないそれを持つ彼らに、羨望すら覚えた。

その感情を、無理矢理心の底に押し込む。ここは譲れぬ。今はただ、己を押し通すことだけを考えると歯を剥きだし、カルタは剣を振るいレンチメイスを弾き飛ばしながら咆吼する。

「意地があるのよ！ 女にはア！」

粉雪を吹き飛ばしながら舞い踊る巨人達の戦いを、鉄華団の少年達は固唾を呑んで見守っていた。

少しでも視界を確保しようと列車の屋根の登ったオルガは、思考を奔らせる。

「あいつら、一体何を企んでやがる」

ランディに指摘された違和感。明らかに何らかの策があるのだろうが、それが読めない。たかだか1小隊で出来ることなど限られている。足止めして増援などの類を投入する様子もない。このままだと彼らはただ無駄死にするだけだ。そんな遠回しな自殺をやる連中でもないはず。

「考えろ、考えるんだオルガ・イツカ」

奴らの思惑を見切れと、オルガは自分に言い聞かせる。GHの通常の思考ではない。あの敵はそんな物を越えた連中だ。であれば当て嵌まるはずもなかった。自分たちに置き換えてみる。あの数で、この状況でどういった手段を取るか。選択肢は数あれど、どれにも当て嵌まらないような気がする。

ではこの状況でもっとも効果的……いや、『もっとも読みにくい思考とはどういうものか』。オルガの脳裏に一人の男の名が浮かぶ。

「『ランデイさん』……?」

あの破天荒な男なら、戦力も個人的な技量も届かない状況であれば。

『絶対嫌がらせをやるためだけに行動する』！
それに思い当たったとき、戦況が動いた。

ついに回避できなくなった一撃が、小隊長機の右肩口を捉える。そのまま溜まらずグレイズリッターは膝をつくが。

「捉えた……ぞー！」

額から流血し血を吐きながらも、小隊長は不敵に笑む。コクピットに届くほどに食い込んだマチェットを、両手でがっしりとホルドしたのだ。これで一瞬でも動きが鈍れば……と言う考えはやはり甘かった。

小隊長が笑んだその瞬間、ランデイはすでにマチェットを手放し――

目にも止まらぬ速度で小隊長機の立て膝を足場にして駆け上がるように宙に舞うと、グレイズリッターの側頭部に膝蹴りを叩き込んだ。

「シャ、シャイニングウイザードだとお!？」

偶然にもその技を知っていた小隊長が驚愕の声を上げ、次の瞬間にはグレイズリッターの胸部を強かに蹴りつけ踏み台とし、ランディの機体はさらに宙に舞っていた。後ろから襲いかかろうとしていた小隊長機のブレードは空を斬り、蜻蛉を打ったランディ機の幅広剣がその機体に真上から叩き込まれる。

頭部を粉碎されて小隊長機と共に沈む僚機。その姿を見てなお最後の機体は怯まなかった。

「叶わずとも、一矢は報いる！」

腰溜めにブレードを構えての突貫。無論そんなものが通用するはずもなく。

砕かれた機体のパーツと折れたブレードが、雪舞う夜空に散った。

それとほぼ同時にもう一つの戦いも決着を迎える。

激戦の中、三日月は機体を操ると同時に思考を巡らせていた。

「まだ追いつけない、どうすればこいつの速度を超えられる？」

単純に使う得物の重量差……というわけではない。常に自分がメイスを振るう軌道を先回りされているというか、見切られていると感じる。この間戦ったときよりも、確実に強い。

後ちよつと、あるいは僅かな隙があれば届きそうな手応えはある。しかしその僅かが遠い。焦るなど、三日月は自分に言い聞かす。

「力任せに、腕だけで振ってるんじゃないやダメだ。もっと体全体を使って、運ぶように」

幾度も見た動画を思い出す。

「重さに逆らわないで、流す……」

幾度も振るった素振りを重ねる。

「踏み込みと、腕の振りを同時に」

大気圏に突入するときの、あの感覚。

がちり、と何かが噛み合った。

「まだ速く!？」

カルタ機の剣線をかいくぐるように、轟、とレンチメイスが奔った。振り下ろしから突きへの動作。雪を蹴散らし体の入れ替えと同時に終わったそれは、その瞬間確かにカルタの剣を越える。顎のように開いたクラッシュャーは、回避しきれなかったカルタ機の左腕を捉えた。

しかし。

「たかが片腕でエー！」

自ら機体を捻って左腕の関節をへし折り、さらにブレードを叩き込んで断ち切る。さしものの三日月も、その行動に虚を突かれた。

血のようにオイルをまき散らしながら後退するカルタ機。丁度その時ランデイに挑みかかっていた最後の機体が地に伏せた。

「……………ここまで、か」

まだ自分は戦える。が、それも長くは保たない。部下同様叩き伏せられることは目に見えていた。最初から分かっていた結末。口惜しさはある。

だがそれでも、カルタはまだ不敵に笑む。

「やはり我等は貴様達には届かなかったようだ。……見事なりランデール・マーカス、見事なり鉄華団！」

オープン回線で告げるカルタ。その時にいたってやっとな、ランデイとオルガは『彼女の狙いに気付いた』。

「ミカア！」

「三日月！」

「されどもここは！ 我等の勝ちだ！」

『そいつを止めるオ!!』

二人の言葉に応え、三日月は最速で打ちかかる。それより早く、カルタ機は剣を高々と掲げ――

『地面に向かって叩き込んだ』。

間欠泉のように雪と土がぶちまかれる。次の瞬間、バルバトスが振るうメイスが、強かにグレイズリッターへと叩き込まれた。

胸部装甲を凹ませて吹っ飛ぶカルタ機。糸が切れた人形のように幾度か地面をバウンドしてから転がり、そして倒れ伏してそのままぴくりとも動かない。

メイスを振り抜いた姿勢のまま、油断なく見据えるバルバトス。その機体の中で、三日月はぽつりと呟いた。

「……間に合わなかったか」

それと同時に、レーダーに感。

「ちっ！ 三日月下がれ！ 昭弘！ シノ！」

ランデイの声に応えて後退するバルバトスの後を追うように、砲弾が着弾し派手に爆煙を上げる。滑空砲を構えたグシオンとアンチマテリアルライフルを備えた流星号が現れた何者かに対応しようとするが。

「速い!？」

「くそ、しかも視界が効かねえ！」

巻き上がる雪の向こうを高速で移動する何者か。それは砲弾をまき散らしてさらに視界を遮ってから、あつという間に姿を消した。レーダーに映る反応から、どうやらカルタ機を回収していったらしい。

静寂が戻る。そしてややあつて雪のカーテンが消え去った後、大地に残されたのは。

『断ち割られた、線路』。

雪原を高速で駆ける紫の機体。下半身を高速ホバー形態に変形させたその機体——地上用に改修されたキマリス、「キマリストルーパー」を操りながら、パイロットであるガエリオは懸命に通信機に向かって語りかけていた。

「カルタ！ カルタ！ しっかりしろ！」

小脇に抱え込んだぴくりとも動かない機体。損傷の様子からコクピットにまでダメージが浸透しているのは明白。まさかと焦るガエリオの耳に、微かな声が響いた。
それは。

「くく……くはははははー！」

笑っていた。半ば押しつぶされ、口から血を吐きながら、カルタは笑っている。

「は、ははは、『してやった』わ！　ざまを見なさい！」

そう、全ては彼女の計画通り。ただこのために、『ランディたちの目の前で、線路を断ってみせるためだけに』、彼女は最低限の戦力を引き連れて現れたのだ。

経済圏のインフラを破壊する。法の守護者であるGHが『行っては成らない手段』だ。露見すれば当然、カルタは何らかの処分を免れない。場合によっては今の役職はおろかセブンスターズとしての立場すら危うくなる。それを理解して置いてなお、彼女はやった。『己の保身よりも、ランディに一泡吹かせることを優先して』。

その上で、わざわざ窮地に陥ってまで彼らの目の前で事をなして見せた。『勝利を確信したその瞬間に、盤上をひっくり返すために』。

己の命を的にしてまで、ただこれだけのことをなすためだけに行動した執念。それは確かに結実した。

「……これで……奴らは動けない。……議会にたどり着けなければ、我等の勝利……」

「カルタ！　もう喋るな！」

懸命に叫ぶガエリオの言葉など耳に届かない。カルタは朦朧とする意識の中、満足げに微笑んで見せた。

「……………マクギリス、これで……………貴方に……………」

その眩きは、雪原の中に消える。

呆然とする鉄華団の少年達。列車の屋根の上、オルガは歯噛みしながら足下に拳を叩き込む。

「くそー。やられたー！」

三日月達に迎撃を任せる中、無理にでも強行突破するべきであった。だが全ては後の祭り。この荒野の中、緊急に連絡を入れたとて線路の修復には時間がかかる。それを待っていては『絶対に議会には間に合わない』。

カルタの策。その全てを悟ったランデイは呻くように呟く。

「やってくれんじゃねえか、『カルタ・イシュー』」

最早彼女は小娘ではない。己の思惑を越えて見せた強者であると、さしものの彼も認めざるを得ない。ああ、ここは負けだ。よくもやってくれたとランデイは感嘆すら覚えている。

しかし。

「…………だが詰めが甘めエ」

にい、と寧猛な笑みをランデイは浮かべる。

それは決して、諦めた者には出来ない笑みであった。

※今回のえぬじい

「…………ね、ねえどんな気持ち？ 舐め腐っていた小娘にしてやられたのはどんな気持ちゲハア！」

「カルタア！ 無茶すんなア！」

血反吐吐きつつNDK的煽りをしようとするカルタ様マジリスペクト。

続かあよ。

18・ほんじやあでかいのかましてやれや!

深海から浮かび上がるかのように、意識が戻る。目を開ければ、映るのは廃墟の中の薄汚れた天井。

ぼんやりとした意識は瞬時に復帰し、少年は身を起こそうとするが。

「うあいたたたた!」

「あ! ダメだよ無理しちゃ!」

少年は痛みと悲鳴を上げ、それをアトラが留める。そこは廃墟の一室に設けられた簡易の治療所。負傷を受けたものたちが幾人か横たわり手当を受けている。

呻きながら再び毛布の上に横たわる包帯だらけの少年。彼は顔を顰めつつ口を開く。

「くそ、ドジっちゃまった。……戦況は、どうなってる? 団長は、みんなは?」

少年の手当を続けながら、アトラはそれに応える。

「大丈夫、オルガさんは予定通りにいってるって。今は休むことだけ考えて」

「情けねえ……こんな大事なときに……」

少年は目元に手を当てて嘆くが、アトラは胸をなで下ろす。意識を取り戻して本当によかったと。そんな彼女に背後から声がかかった。

「アトラさん、そろそろ一旦休んでは」

同じように負傷者の治療に当たっていたフミタンである。彼女に加えメリビットまでがここを切り盛りしていた。アトラを気遣った言葉だったが、かくいう彼女もほとんど不眠不休である。

フミタンの言葉に、アトラは気丈に頭を振る。

「大丈夫です。みんな頑張ってるんだから、私も頑張らなきゃ」

笑顔を作って応えるアトラに「そうですか、無理をなさらぬよう」と

言って会釈し己の仕事に戻るフミタン。彼女が背を向けたのを見計らって、アトラはそつと呟いた。

「そう、大丈夫だよね……三日月」

エドモントン攻防戦。後の歴史に刻まれたその戦いは、鉄華団が都市郊外に展開するGH地上部隊に奇襲を仕掛けるところから始まった。

鉄道の定期便を警戒していたMS部隊は全く別方向、荒野からの奇襲に不意を突かれ防衛戦を崩され、開いた穴をトレーラーとMWに乗り換えた鉄華団が一気に突破していく。

かつてのエドモントン市街を二分するように流れている大河。その南東方面、現在は廃墟と化した旧市街地に鉄華団は陣地を設営。市街地に展開していた陸戦隊との交戦を開始する。同時に鉄華団のMS部隊も防衛戦を展開。GHの部隊と火花を散らす。

戦闘開始より2日。議会選挙の開始は、あと数時間に迫っている。

鉄華団陣地から市街に侵入する最短のルート、河にかかる大橋を中心に攻防戦は続いていた。

市街地を（正確には議会を）防衛しているGH陸戦隊の隊員達は、時間が経つごとに脅威というか不気味さをひしひしと感じている。

「なんなんだあいつらは。いくらMWを破壊されても懲りずに前面に押し出してくる。死ぬのが怖くないとでも言うのか」

たかだか傭兵がなぜそこまでと、戦慄すら覚えた隊員の言葉であ

る。そう、橋の対岸に陣取る鉄華団は、障害物に隠れながらとはいえ惜しげなくMWを前面に押し出して果敢に攻撃を加えていた。被弾どころか撃破されても構わないと言うがごとく。

現在の地上戦にて主力であるMWであるが、旧世代の戦車に比べて小回りがきき高い機動力を持つのと引き替えに、その防御力は紙にも等しい。勿論通常の歩兵火器程度では破壊するのは難しいので、そういったものに関しては十分に対応できる。が、同程度以上の兵器に関しては装甲などあつてなきがごとしだ。

故にMWの戦闘は機動性に任せて攪乱しつつ攻撃を行うか、遮蔽物に隠れながらの射撃戦。あるいは完全に後方支援に徹するか。運用方法としてはそういったものが適切とされる。しかし鉄華団はそのセオリーを半ば無視して、損害などおかまもなくMWを突っこませてくる。当然ながら突っこんでくる最中に撃破されるが、そこから搭乗員を救助する様子もなく、損害が酷ければ回収すらせずに遮蔽物として利用している。冷徹と言うよりは無機質なまでの戦いぶりに、陸戦隊の中に不気味さというか気後れのような空気が蔓延し始めていた。

まあしかし、種を明かせばなんとと言うほどの物ではなく。

「18台目、沈黙…」

「よし、『遠隔操作（リモート）の回線』を次に回せ。回収はできるか？」

「アンカーの打ち込みはちよつと難しい位置です。遮蔽物として使った方が」

「あんま置きつぱにするといい加減おかしいと思われるかも知れねえが……へまこいて弾喰らうよりはマシか」

部隊が展開している後方、天幕下の作戦指揮所でオルガは指示を飛ばしていた。

彼らが行っているのは『無人のMWを遠隔操作して敵の砲火に突っこませる』という、実に単純だが現在では忘れ去られた戦術である。制御機構を無線操作できるようにすれば、MWはでっかいラジコンへと即座に変わるのだが、なぜだかこの手を使おうとするものはほとんどいない。最低でもGHでは『機動兵器は必ず人が乗って動かす物』

という風潮が頑固なまでに徹底されている。それを逆手にとってオルガたちは多量のMWを突つこませ、GHの動揺を誘っているのだ。しかしながら、全く人的に損害なしと言うわけにはいかなかった。無人の車両ばかりでは相手に策が露見してしまうと言う危険もあったので、遠隔操作のマスター機も兼ねていくらかの有人機も混ぜねばならなかったし、随伴兵も必要となる。その数は少ないとはいえ、被弾の危険は常にあったし、実際10人近い負傷者がすでに生じていた。幸いと言うべきか死者こそなかったが、GHと比べ人員が限られている鉄華団の団員達は徐々に疲労を積み重ねている。

「……ふむ、予定通りとは聞いているが、やはりどうにも落ち着かんのお」

陣地の後方、拠点としている駅の廃墟で、蒔苗は顎髭をしごきながら言う。それに応えるのは、ドレスに着替え直つ直ぐ戦場の方向を見据えたクーデリア。

「焦りは禁物です蒔苗先生」

「分かっておるよ。……しかし時間が経てば経つほど無益な血は流れる。少年達の血も、そして『向こうさん』の血もな」

本来であれば、『GHと戦う必要など全くなかった』。上が余計なことをしたが故に、前線の兵達は良い迷惑であろう。蒔苗は同情などしていなかったが、無益であるなど嘆きのような感情は覚えていた。同時にGHの上層部に対して反感を強めている。やはり彼らの増長は見過ごしすわけにはいかぬと、密かに内心の決意を改めていた。

「それにしても、彼らの発想には驚かされる。MWの遠隔操作もそうであるが、『列車をMSで担いで運ぶ』などなかなか思いつくものではないぞ?」

「MSを『人と同じ事が出来る機械』と捉えるのであれば、思いついてしかるべき事ではあるのですが……それが出来る人間は少ないのでしようね」

そう、1日遅れとはいえ鉄華団が議会選挙に間に合った理由。件の戦闘で破損した線路の上を、切り離れた車両を一両づつMSで担いで運んだのである。後処理は鉄道会社に丸投げし、ロスした時間を取り

戻すべくほぼ途中停車なしの強行軍を敢行し、なんとか1日の遅れだけでエドモンソンにたどり着いたのだった。これには肝の据わった蒔苗も驚くやら呆れるやらである。あとでそのあたりの面倒事をあれこれするのは儂なんじやろうなあと、じいさんちよつと遠い目にならざるを得ない。

「さて、その突飛なことを考えた人間は、出ずっぱりのような気がしますけれど」
「彼については心配するだけ無駄なような気がしますけれど」

二人は後方で陣取りMS戦闘の指揮を執っている男について思いを馳せる。

轟音を立てて、陸戦仕様のグレイズが地に伏せる。

「くっ！ 各機散開しながら後退！ 後続と入れ替われ！」

潮時と見計らって部隊の指揮を執っているコーリスが命じ、中隊は追撃を警戒しながら後退していく。それを見送りながらランディのシユヴァルベ・グレイズが幅広剣を振り収めた。彼の機体は現在左腕に盾を備えており、一見騎士のような様相に見える。勿論中身はバーサーカーであるが。

「ふん、俺が2日で3機しか喰えないとはな。よく鍛えてやがる。

……昭弘、ラフタ。そろそろお前らは下がって休息と補給だ」

「まだ俺はやれるぜ」

「こつちも余裕だつて」

「二人とも長期戦にや慣れてねえだろ。待ってる間にも肩に力が入つてんのが丸分かりだぞ？ いいから休んどけ。……丁度交代要員も来たことだしな」

そう言うと同時に、陣地の方から土煙が上がる。補給をすませたシノの流星号とアジীর漏影だ。

「おう、おまっどさん」

「やっぱり『同じ状況』だね。……1機仕留めたみたいだけど」

「ああ、連中中隊規模で不規則に奇襲を仕掛けてくるのは相変わらずだ。積極的に攻めてこねえが、『落とされれない』ことに最重点をおいた良い連携取ってきやがる」

指揮を執ってるヤツアなかなかのもんだと、相手を褒めるランデイ。対処しやすい敵というものは、それはそれでおちよくりがいがあって良い物だが、骨のある敵というものはなかなか巡り会えるものではない。それがさんざんこき下ろした後にはい上がってきた者ともなれば感慨もひとしおだった。ボコリがいがあるの意味で。相変わらず最低というか狂った男である。満面の邪悪な笑みがなんか色々物語っている。

これにそんなことで一々目くじら立ててもしょうがないと、周りは早々に諦めて気持ちを切り替えた。

「まあいいや。ラフタ、代わるからここは下がんな。まだいけるはもう危ない、姐さんもよく言ってたろ?」

「……むく、分かったわよう」

アジーに言われ、渋々と後退するラフタ。同様に昭弘と交代したシノは、周囲を警戒しているように見えるバルバトスに通信を入れた。

「三日月、お前も交代……」

「ふおお? まふあふあいほうふはって(まだ大丈夫だった)」

「って戦場のど真ん中で飯食ってんのかよ!」

画面の向こうでソイバーをもきゆもきゆと頬張っている三日月に、思わずツツコミを入れるシノ。緊張感がないにもほどがあった。

その様子を見てランデイはくく、と笑う。

「三日月は緩急の付け方が上手いからな。もう少し踏ん張れるだろうさ。……じゃ、俺も一休みさせて貰うぜ」

言うが早いか彼は盾を地面に突き立て、それに身を隠すように機体を跪かせる。そして。

「……くか〜」

寝た。どこぞの眼鏡少年かと思わせるような見事な寝落ちであった。確かに暫くは再襲撃はなからうが、それにしても度胸があるとい

うか狂ってる。

「こっちはこっちで戦場のど真ん中で寝てるし」

「……もうなんか色々と言うだけ無駄だね、うん」

あまりの非常識さにげんなりするシノ。アジーは警戒しながらも遠い目だ。

戦況はまだ予断を許さなはずなのに、緊張感はどこか遠くへ投げ捨てられている。

あるいはこれは、嵐の前の静けさなのかも知れなかった。何かが大分おかしいが。

後退し補給を受けるGH部隊。解放されたコクピットでドリリンクチューブを口にしながら、コーリスは戦況を顧みる。

「6機落とされたか。リボン付きを相手取っているにしては、よく保たせていると思うが」

消極的な戦法が功を奏した……と楽観視は出来ない。向こうが防衛に徹しているからこそこの程度の損害ですんでいるといった方が良いだろう。ここで投入されたのは1個大隊。コーリスはそれを中隊規模に分け、交代で不定期に波状攻撃を仕掛けている。幸いにして、まだ『最悪の状況には至っていない』が、それも相手が『最低限の節度』を守っているからだ。

「条約に反してMSを市街地に突っこませるような外道でなかったのが幸いだな。『負傷兵の解放』といい、思ったよりも道義をわきまえている」

先にカルタが行った襲撃の後、鉄華団は撃破したMSを回収すると同時に生き残ったパイロットを手当てし、途中停車した駅で解放していた。打算的な物もあろうが、ただの無法者ではないと言うことは見て取れる。条約によって禁止されているMSの市街地への投入など

も行っていないところから、かなり理性的な人物が指揮を執っているか、参謀格にいるのだろうか。寡兵と侮れるものではない。

「しかしそうであるならば、『あの位置に陣取っている』のが解せんな。守りはしやすいだろうが、攻めには向かんだらうに」

いかなる手段を使ったのかは分からないが、カルタが乾坤一擲の策を乗り越えエドモンソンまでたどり着いた彼ら。そのまま勢いで市街地になだれ込まなかったのは分かる。エドモンソンに展開しているGH陸戦隊はごく一部とはいえ、それでも鉄華団に比べれば大規模。真正面の戦いでは勝負にならないことは明白。自分たちを囿とし、蒔苗を密かに議会へと送り込むというのであればそれを敢行することもあるだろうが、そのような行動に対しては十二分に警戒を行っていた。向こうもそれを読んだのか、旧市街地に陣取り腰を据えて攻略する腹積もりのようだ。そこまではいい。

『陣取っている位置』が問題なのだ。現市街地と旧市街地を隔てる大河にかかる大橋の根本。その近辺に他に渡河できるような橋の類はなく、市街地に侵入するのであればどうしても正面の大橋を使わねばならない。当然ながら一度に投入出来る兵力は限られるため、互いに守りやすいが攻め込むことは困難だ。そしてそれが分からない連中ではない。

何かがある。一体どのような手段でこの状況をひっくり返すつもりなのか。口元を笑いに歪め——それに気付いて頭を振るコーリス。(なにをばかな。これではまるで『奴らが防衛陣を突破するのを期待している』ようではないか)

連日の戦闘で疲れが出たかと自嘲する。と、そこに部下の一人が仮設のキャットウォークを伝って現れる。

「三佐、伝令です。カルタ様が意識を取り戻したと」

窮地を救われたカルタはしかし、重体の上意識不明であり、集中治療室で絶対安静という状態であった。一命は取り留めたものの、恐らくもう2度とMSを駆る事は叶わぬ。だがそれでも生きてさえいてくれればと、部下達の誰もが祈るような気持ちで吉報を待っていた。

コーリスは安堵の息を吐く。

「峠は越えたか。まだ予断を許さないが朗報ではあるな。兵に伝えよ、地球外縁軌道統制統合艦隊が命脈、未だ健在とな」

カルタが生きている限り、負けてはいない。彼女が意識を取り戻したという知らせは、兵を奮起させるだろう。と、そう考えていた彼の目に、どこか迷うような表情をした部下の顔が映る。

「どうした？」

「は、いえ……このまま、戦い続けて良いのでしょうか。今回の作戦は明らかにアーヴラウに対する内政干渉です。その上カルタ様の指揮下でないというのは……」

その言葉に、コーリスは一瞬口ごもる。彼が、いや戦っている兵の多くがそんな不安や不満を心の奥に押し込んで今回の戦いに挑んでいる。だが戦っていく内にそれは徐々に大きく膨れあがってきていた。目の前の部下だけではない、恐らく兵の中にも戦いに対して疑問を抱き始めた者が多く出てきていることだろう。カルタが倒れたと言うことが、それを加速させているという部分もある。

気持ちは分かるがしかし、それでも自分たちはGHの兵だ。コーリスは同調しようとする心を押さえ込んで口を開いた。

「……今のは聞かなかったことにしておく。我々はただ命令に従い役目を果たすことを考えていればいい。分かるな？」

「っ！ は、はっ！」

泡を食って敬礼しあふたと役目に戻る部下の背を見送って、コーリスは再び頭を振った。惑わされるな。だから先程のような敵に期待を寄せる妄想を浮かべたりするのだと、自身を叱咤する。

しかし心の底に貯まる鉛のような感覚は、晴れてくれなかった。

交戦が散発的に続く中、指揮所の天幕に駆け込んでくる者がある。「団長、予測通りです！ 『水が引いてきました』！」

乱れる息の中、それでもしつかりと報告するのは偵察に出ていたライド。彼の言葉を聞いて、オルガは大きく頷く。

「よし！……ビスケット、そっちの準備はどうだ？」

インカム越しに問えば、間髪なく答えは返ってくる。

「結局ぶっつけ本番だけど、機構に問題はなし！ やってみせるさ！」

「頼んだぞ。……みんな聞いてくれ！」

通信を全員に向けたものに切り替え、オルガは宣言する。

「いよいよ大詰めだ！ これより鉄華団は最後の勝負に出る！ 予定通り負傷兵や非戦闘員から順次撤退準備！ 残りはビスケットが『かました』後俺達突入班を支援。突入後はGH陸戦隊を牽制しつつ撤退を始めてくれ！ いいか、ここまで来たんだ。つまんねえポカでくたばるんじゃないぞ！ 石にかじりついてでも生き延びろ！ 以上だ！」

そう告げて、オルガは席を立つ。そして指揮所に詰めていた団員達に言う。

「後は任せる。撤収しきれない資材は放棄して構わない。時間の勝負だが慌てるなよ」

了解だのおすだのいう返事を背に、オルガは天幕を出ながらついてくるライドに問うた。

「突入班の準備は？」

「ぼっちりつす。団長のMWはタカキが乗るって言ってます」

「んじや、ドライブとしゃれ込むか」

「えつと……ご武運を？」

「おう」

無理に難しい言葉を使おうとするライドの頭をぽんぽんと叩いて、オルガは突入班の元に向かった。

数台のMWと装甲車。最後の整備をすませたそれに駆け寄り、オルガは準備を整えていたタカキに声をかける。

「待たせたな、これからビスケットが仕掛ける。それを合図に一気に出るぞ。操縦は任せませ」

「はいっ！」

勢いよく返事をし、タカキはコクピットに潜り込む。オルガは上部ハッチから身を乗り出した形で陣取り、周囲のMWも次々と起動し始める。彼らの役目は議事堂まで蒔苗を護衛すること。その本人はクーデリアに促されて早々に装甲車へと乗り込んでいる。それに続いてクーデリア本人も乗り込むが。

「え？ アトラさん!？」

次いで運転席に乗り込んだのはアトラである。彼女はシート位置を調整してから腕の筋を伸ばしつつ、クーデリアに語りかけた。

「車の運転なら慣れてますから任せて下さい」

「でも、非戦闘員は撤退という話では」

「運転手に一人回せばそれだけ団員みんなの負担が増えちゃいますから。それにこっちは運転だけで戦うわけじゃありませんし」

それでも危険なことに変わりがない。何とか思いとどまらせようとするクーデリアであったが。

「ふむ、ならばお嬢さん、しかと頼むぞ」

「はい!」

「蒔苗先生!」

思わず咎めるような声が出るが、蒔苗はほっほっほと笑って返す。

「議事堂までたどり着ければむしろ安全となるよ。それに彼女も鉄華団なのじゃろう？ 信じてみるさね」

肝の据わった物言いに、それもそうかとクーデリアは思い直す。一息はいて、彼女はアトラに言う。

「分かりました。よろしく頼みます」

「うん、任せてください!」

ひまわりのような笑顔で応える少女に委ねる。そして一団は動き出した。

戦場となっている大橋。そこから少し川上に当たる地点。堤防ぎりぎりの雑木林に身を隠し、オルガたちは戦場と、河の様子を伺っていた。

「……よし、これなら十分に渡れるな」

この季節、エドモントンを割る大河は時間によって流れる水量が変

化し、ほとんど川底が見えるくらいまで水が引く。オルガは橋を使わず、水が引いた河を直接渡ろうと考えたのだ。しかしそれも敵に察知されたらば妨害される可能性が高い。

ゆえに、『度肝を抜く』。

「各部正常！ ビスケットさん、行けます！」

「よし。みんな、MWの動きはスレイブプログラムに任せるんだ。射撃の反動処理と修正を最優先に。接合部の累積ダメージに注意して！」

『了解！』

橋の元に居並んでいた一部のMWが後退し、『それ』が姿を現した。対峙していたGH陸戦隊は思わず唾然としてしまう。

「……じよ、冗談だろ？」

隊員の一人が思わず呟いた。確かにそれは一見冗談としか思えないものである。

『4台のMWに支えられた、グレイズ用のアサルトライフル』。そう、ビスケットはMS用の武器をそのまま使い、簡易戦車を組み上げ実戦投入するというアイデアを思いつき、実行してしまったのだ。

MSを市街地近辺で使う事は出来ないが、『MS用の武器なら制限はない』。MWが主力となってから大口径の砲は支援火器のみとなっており、接敵した状態では使われなくなって久しい。かつての時代であれば120mmなど主力戦車に当然のごとく搭載されていたものだが、そのような大口径を現代のMW戦で見ることなど、ほぼ皆無と言っても過言ではなかった。

常識外の登場に呆けていたGH陸戦隊員達だったが、その砲口が自分たちに向けられていると理解してからの反応は早かった。

「そ、総員退避ーっ!!」

悲鳴のような命令が飛び、生身の兵達は慌てて物陰に隠れ、MWは押し合いへし合いしながら無理矢理後退しようとする。

だが勿論、遅い。

「撃（て）ーっ！」

ビスケットの号令が飛び、120mmの砲口は無慈悲に吠えた。突貫

工事で組み上げた関係上、アサルトライフルは本来の射撃速度での連射は不可能となっている。しかしそれを補って有り余る破壊力が、それにはあつた。

衝撃。爆発。派手な爆煙と破片をまき散らす。使用されている弾頭は市街地に及ぼす影響を考慮し威力を押さえた炸裂弾頭。とは言つても120mmだ、MWと歩兵が中心のGH地上部隊にとっては十分に脅威となる。あつという間に橋の根本に集中していた防衛陣は混乱に陥つた。さらに弾丸が撃ち込まれ、同時に鉄華団は残つたMWを前面に押し出し攻勢に移る。

機会は訪れた。

「今だー！ 一氣にいくぞお前らー！」

オルガの命が下り、待機していた突入班は一氣に河原へと飛び出す。

そのまま渡河をと河の中央あたりまで至るが。

「！ て、敵の別働隊だ！ なんとしても食い止めろ！」

砲撃に晒されながらも、突入班の存在を認めた一部の兵が危険を顧みず攻撃を敢行。水しぶきを上げて弾丸が降り注がれる中、オルガは舌を打つ。

「ちっ！ さすがに向こうも気合いが入ってやがる！」

このまますすなりと、とはいかせてくれそうにない。交戦を覚悟するオルガであつたが。

突如背後から放たれた砲撃が、GH部隊の動きを封殺する。

「はっはア！ 騎兵隊参上つてな！」

「お前らは？」

それは大口径の砲を搭載したMWの一団。その指揮を執っているのはテイワズ系列のコロニーで待機していたはずのユージンであつた。

「なんでここに？」

「名瀬さんに頼んで下ろさせてもらったのさ！ ここ一番つて時に仲間はずれつてのは面白くないんでなあ！」

道理で最近の通信では機嫌が良さそうだったわけだ。エドモント

ンに向かうときは俺をおいてけぼりとは何事だと憤慨していた癖に
と思っていたらこれだ。まったくこいつらも呆れた馬鹿野郎どもで
ある。

「ま、給料も出ない内に雇い主が死ぬとか勘弁して欲しいもんな」

一団に混じって参加したヒューマンデブリの少年、「アストン」が呟
く。オルガに大きな恩義を感じている彼らは、こぞってユージンの計
画に乗った。その士気は高い。

砲撃を続けつつ、ユージンはオルガに告げる。

「ここは任せて行け！俺達の仕事を成し遂げろ！」

「……ああ！」

力強く頷き、オルガは突入班を促して河を渡りきる。

そして。

「大将が市街地に入った、俺らはこれから打って出るぞ。敵をこっち
に引き寄せるんだ」

オルガたちの行動を伝えられたランディは、打ち合わせ通り攻勢に
出る。撤退を開始した鉄華団の支援とGHへの牽制を兼ねた襲撃。
全機一度に襲いかかってくるとの知らせを受けたコーリスは、いよいよ
よかと覚悟を決める。

「総員、ここが命の捨て時ぞ！奴らの腕一本足一本でも道連れにす
る覚悟で挑め！」

これまででない激しい戦いとなる。逃げ回るだけの消極的な戦法
ではとてもではないが乗り切れまい。例え全力で迎え撃つても同じ
事だが、彼らに手傷の一つも負わせれば良い土産話になると、開き
直って己を奮い立たせた。

だがそこに入った一つの知らせが、彼の運命を大きく変える。

「援軍だと？ 今更!？」

ランデイたちも『それ』に気付いた。

「新手か！ 速いな、それにこの反応……」

一方は覚えがある。ツインリアクター独特の反応は見間違えようがない。しかし。

「データにないリアクター反応……こいつ、こつちのど真ん中に突っこんで来る気か！」

もう一方は後先考えないような突貫を敢行してくる。そう見て取ったランデイは即座に判断を下した。

「各機散開！ 馬鹿一匹が突っこんでくるぞ、複数で囲んで対処しろ！」

その台詞を聞いた三日月達は即座に四方へ散る。次の瞬間、轟音を立てて『何か』が大地に降り立った。砲弾のごとき勢いで突っこんできたそれは、土煙の中ゆらりと身を起こす。

「……おいおい、なんだよありゃあ」

さしもののランデイも、啞然とした声を上げてしまう。

その機体は、異質であった。ボディだけ見ればグレイズであるが、その四肢は異様に長く、結果全高は30メートルに届こうかというくらいに巨体と成り果てている。通常なら、そんな巨体は動きが鈍くなり良いのと成り下がるだけなのだが。

「リアクターの反応と言い、こいつはヤバそうだな」

通常のリアクター出力を越える反応、そして本能的な直感がランデイに危険を訴えている。なにをおいてもこいつは仕留めなければならぬ。そう判断した彼は真つ先に挑みかかろうとしたが。

シユヴァルベ・グレイズの進路を遮るかのように銃撃が叩き込まれ、そして地を滑る影が割り込んだ。

「ここを通すわけにはいかない！ 貴様の相手は俺だ！」

紫色のガンダムフレーム。高機動形態のキマリスを駆るガエリオが、ランデイの前に立ちはだかった。

※今回のえぬじい

ビデオレターが届きました。

「ねえどんな気持ち？　してやったと思ってたらあっさり対処されて
どんな気持ち？」

「ムギヤーーーーー!!」

「か、カルタ様ご乱心!」

「メデイーツク!　メデイーツク!!」

カルタ様の入院が長引きました。

もうちよつとだけ続くんじゃないよ。

19・世の中ナメンのも大概にしとけ

エドモントン市街、アーヴラウ議会議事堂。

代表選挙直前の最中、控え室のアンリはぎりぎりど歯ぎしりしながら忙しなく部屋の中を往復している。

蒔苗さえいなければ勝てる選挙だと、彼女は『妄信』している。出来うることならば蒔苗本人を『病死』にでもさせたかったが、そうするわけにもいかない事情があった。

それは蒔苗の『人脈』。国内外に広く伝手を持つ彼を謀殺したとなれば、政治的な混乱が生じるだけでなく、そういった関連の人間がどう行動するか読み切れない。下手をすればつけ込まれ、状況が悪化することも十分あり得る。ゆえに現段階では蒔苗を始末するわけにはいかなかった。

現在蒔苗は雇った傭兵に連れられてエドモントン近郊まで至っているらしい。GHの警備を簡単に抜けられるとは思えないが、彼がここにたどり着く前に選挙を終わらせておきたい。しかし

「……蒔苗がいなければ十把一絡げの有象無象どもが……っ！」

ことはアンリの思うとおりに進んでいなかった。

「アレジ代表代行、蒔苗先生が市街地に入ったとの情報が」

「ふむ、後もう一息と言うところか」

ラスカーの元に蒔苗の現状が伝えられる。あとは蒔苗が議事堂にたどり着くまで持たせればいい。ラスカーは頷いて指示を出した。

彼らが今行っているのは議会の遅延工作。とは言っても大したことはしていない。野党議員を挑発してわざと騒ぎを起こしたり、議会での質疑応答を引き延ばしたりと、『議会が中止されないぎりぎりの』引き延ばし工作を行っているだけだ。

焼け石に水なのは百も承知。幾度か休憩を挟んでいるが、実際そろそろ限界に近い。だが何事もなければ間に合うはずだと、ラスカーは信じるしかなかった。

(蒔苗先生、頼みましたぞ)

エドモントン攻防戦。その終盤は混迷を極めた。

最後の勝負に打って出た鉄華団。オルガたち突入班と撤退するメンバーの援護を兼ねて行われた襲撃。それを敢行したランディたちの前に立ちはだかったのは。

「はん、監察局ってのはいつから女の尻おっかけるほど暇になった？」
地面を滑るように機体をホバリングさせながら、ランディは小馬鹿にしたような言葉を投げかけた。

対するはガエリオの駆るキマリストルーパー。ランディの機体を上回る速度で大地を駆け、長大なランスによる突撃（チャージ）を果敢に仕掛けてくる。

「今の俺は監察局の者ではない！ 一人の人間として、全力で貴様を止めるためにここにいます！」

ガエリオは、憤りの中にあつた。彼はアインの思いに感化され、その怒りを己の物のように感じている。尊敬する人物の仇討ちを誓い、己を人でなくしてまでもそれを遂行せんとする『正しき心を持つ者』が報われない。そんな理不尽を許容することなど出来るものかと、義憤に駆られているのだ。

2機のMSが戦いは、まるで太古の騎兵と戦士の一騎打ちがごとき様相を見せていた。地上での機動力、リーチ。その他多くの面でキマリストルーパーはシュヴアルベ・グレイズを上回る。事実果敢な攻めで、一方的にランディを蹴っているように見えるが。

「くっ、『弾かれる』か！」

ガエリオは歯噛みする。大重量のランスに加速の勢いを乗せた突撃は、並の乗り手ならろくに回避も許さず一撃で串刺しに出来ただろう。しかしランディは突き込まれるランスをすんでの所で見切り、幅

広剣を打ち付けて軌道を逸らすと同時に反動で回避を行っている。それをなすのにどれだけの繊細さと大胆さが必要か、それがわからないガエリオではなかった。

「だが、その集中力いつまでも保つものではあるまい！」

已然として状況は有利。この優位を保つことが出来れば最低でも時間稼ぎは出来る。己が勝利することに拘る必要はない。この男を仲間と合流させなければそれでいい。

(アイン、こちらは任せろ。お前は存分に敵討ちをなすがいい！)

濃紺と紫の巨人が鎬を削る最中、土煙舞う戦場ではそれぞれの戦いが繰り広げられている。

散開したおりに、昭弘のグシオンは運悪く仲間と分断されてしまった。

しかし彼はそれを悲観しない。

「は、『敵の真ん前』とはツイてる」

爆煙に紛れた形で移動した先は、鉄華団を迎え撃たんとしていた地上部隊大隊の眼前であった。急な援軍の登場に判断を迷ったコーリスは一旦部隊の前進を止めていたのだが、突然目の前に現れた敵の姿に、彼は瞬時に判断を下す。

「奇襲か！ 第1第2小隊で応戦するぞ！ 第3小隊はフォローに回り、敵の増援に注意を払え！」

即座に体勢を整えグシオンへと殺到するグレイズ。左右の腕にバトルアックスとシールド、サブアームにアサルトライフルを2丁構え、昭弘は咆吼を上げて迎え撃つ。

「おおおおおおー！」

力任せに見えて鋭く大斧が振るわれる。それは打ちかかってきたグレイズの剣を数本纏めて吹き飛ばし、盾で殴りつけるように剣を受

け止めいなす。アサルトライフルは的確に下がった機体を捉え、そして自身は射撃を喰らっても一歩たりとも引かない。

正しく阿修羅のごとき戦いぶり。コーリスは戦くなと己を叱咤し部下に発破をかける。

「怯むな！ 相手は1機、凌げば勝機はある！」

確かに凄まじいまでの戦いぶりだが、しかしこちらも今のところ致命傷を負ったものはなく、凌ぎきっている。恐らく敵はこちらの援軍に釘付けとなっているのだろう。であるならば今のうちに目の前の敵だけでも仕留める。数少ない機会だと、コーリスは奮起した。

だがそうは問屋が卸さなかつたようで。

「昭弘！」

未だ舞う土煙の中から飛び出してきたMSが、横合いから奇襲をかけてきた。

「ちっ、もう1機抜けてきたか！ そうそう上手いことはいかないと！」

歯噛みし後退しながらの遅延戦闘を命じる。敵の実力はこの2日間でいやと言うほど思い知らされていた。2機もいれば圧倒されるとは言わないが、引っかけ回されるには十分な数だ。援軍の戦力も不確定だし、ここで無駄に戦力を消耗するつもりはない。しかし予測していたことではある。コーリスは気持ちを切り替え、冷静な対処を心がける。

一方昭弘は突然現れた援軍に戸惑いながら口を開く。

「ラフタさん!? 三日月達は!?!」

その問いに、GH部隊へ牽制の射撃を行いつつ漏影を駆るラフタは応えた。

「3機も居れば大丈夫でしょ！ それより1人で連中纏めて相手にしようとする馬鹿の方が危ないじゃない！」

ラフタの言いざまに、ぐっと詰まる昭弘。彼から言わせればこうなったのは偶然の産物で、別に狙ってやったわけではないのだが。

「どっちみちこいつら放っておくわけにはいかねえだろう」

「だからって1人で仕掛けることはないでしょ。……ちよつと心配し

「ちやつたじやない」

ラフタの台詞の後半は小声で、昭弘に耳には届いていなかった。そもそも彼女は自分が何を呟いたのか自覚してなかったりする。

「ともかくー！ こっち押さえ込むわよ！ あんたとあたしが居れば2機でもなんとか……」

そうラフタが言いかけた時。

「!? 新手の反応!? ……これは!」

上空より降下してくるMSが2機。それは上空からGHの部隊に向かつて威嚇射撃を行いながら降り立つ。

「兄貴！ 助太刀に来たぜ!」

「昌弘!? その機体は!」

響く弟の声と降り立つた機体を見て目を丸くするしかない昭弘。その機体はマン・ロディではあるが、脚部が換装され地上でも運用できるようされたもののような。塗装も間に合わせであるその機体のもう一方から、また別の声が響く。

「タービンスの人らが突貫工事で仕上げたんだよ。……つたく、とつとと逃げりやいいものを、めんどくせえ真似しやがって」

半ば文句と化したその台詞を吐いたのはビトー。ぶつくさ言いながらもきつちり威嚇を続けているのは、なんだかんだ言っただけならなのだろう。

「俺達にも手助けさせてくれ兄貴。受けた恩、少しでも返す!」

「……ああ! 背中には任せませ昌弘!」

千人の援軍を得た。まるでそのような心境となった昭弘は、再び敵に対し突貫する。予想外のことにも呆気にとられていたラフタだが、我を取り戻しふう、と頬を膨らませた。

「むく、なんかこう、良いところを邪魔された的な感じでムカつく」
ともあれ援軍に現れた少年達を怒鳴り散らすわけにもいかず、彼女は前に向き直ってスロットルを開けた。

「覚悟しなさい、ちよつと八つ当たるわよ!」

コーリスの部隊は、さらなる苦戦を強いられることとなった。

降り立った巨大なMS。対する三日月たちは戸惑いながらも応戦を開始する。

「ただのでかぶつじやなさそうだけど!」

アジীর漏影がグレネードランチャーを放つ。それが命中する直前で、黒き巨体が『かき消えた』。

「なっ!？」

「後ろだアジীরさん!」

シノの声を聞くやいなや、アジীরは機体を横つ飛びに投げ出すがごとく操作。転げ回りながら回避を行ったその直後、背面から振り下ろされた大振りのマチェットが地面を穿つ。

「こいつ、速い!」

「この動き、阿頼耶識なのか!？」

その巨体からは想像もつかない機動性、そして有機的な動き。機体性能だけでは決して成すことが出来ないはずのそれを行えると言うことは、ほぼ間違いなく阿頼耶識システムを搭載していると言うこと。人体に手を入れることを禁じているGHがそれを行ったなどとは俄には信じられないが。

「出てきたって事は、やったってことだろ。どっちみち倒すだけだ」

迷わず言い放ち駆けるのは三日月。迎え撃つ巨体は土煙を上げ信じられない速度で真正面から挑みかかる。

「ふっ!」

横薙ぎに鋭く打ちかかったレンチメイスは、右のマチェットで受け止められ、間髪入れず左からの反撃が来る。それを横つ飛びに回避し、バルバトスは得物を振り回してから構え直す。

そうしたところでマチェットを振りかざす相手からの広域通信が入る。

「咎人どもよ! 特務三佐が与えて下さったこの力を持って俺は貴様

らを駆逐する！ その背負った罪諸共冥府の旅路にいかせてくれよう！」

芝居がかったと言うか、どこか熱に浮かされたような言葉。もちろんそんなものを三日月は歯牙にもかけない。嵐のような勢いで振り回されるマチェットを的確に受け止め、受け流し、弾き飛ばす。

「バルバトスよりもパワーがあるのか、こいつ」

グレイズ系のシングルリアクターではあり得ないほどの出力。黒い機体——「グレイズアイン」と称されるそれは、巨大化した機体を高速で振り回すために、専用調整されたリアクターを搭載している。その出力は通常出力のガンダムフレームと互角以上。そしてリーチも速度も普通のMSを上回るとなれば。

「三日月が押される!？」

全ての攻撃をいなしてはいるが、高速で動き回れぬよう押さえ込まれ、徐々に後退を余儀なくされている。それがどれだけのことか、三日月の強さをよく知っているシノには理解できた。

だが。

「……つってもてめえだってよそ見できねえだろうが！」

そう、三日月を倒そうと躍起になったのか、グレイズアインは脇目もふらずにバルバトスへとマチェットを叩き込み続けていた。ゆえに余所への注意が疎かになったと見たシノとアジールは左右から銃撃を仕掛ける。

しかしそれは、さくりと回避された。『全く攻撃を認識していない様子』にもかかわらず、である。

「な!？」

例え阿頼耶識を備えていたにしても、いや『備えていればこそ』確認しようとするれば頭を振るなど人間的な挙動が現れるはずだ。一瞬呆気にとられたシノの機体が背後に、グレイズアインは回り込む。

「見える、見えるぞ。貴様らの矮小な動きが手に取るように見える！」

我が眼はこれ全てセンサーであり我が肉体はこの機体そのもの！

この身は断罪の剣となり決して貴様らを逃しはしない！」

振り上げたマチェットが叩き込まれる——直前で横合いから打ち

込まれたレンチメイスが受け止められた。

「お前の相手はこっちだよ」

どこまでも淡々と、しかしながらその眼には闘志をみなぎらせ、三日月は立ちふさがる。

「おいおい、阿頼耶識搭載機だど？」

通信の内容は傍受していないが、横目で見える戦闘の様子から現状を把握したランデイが呆れた声を上げる。応戦しているガエリオが、それに応えた。

「そうとも！ あれこそが阿頼耶識の本来の姿！ MSと一体となったアインの覚悟は、まがい物の宇宙ネズミなど凌駕する！」

その言葉に、ランデイは眉を顰める。

「はあ？ 『逆恨み』もここまでくるとあれだな。……ぶっちゃけバカだろお前」

ランスを弾かれながらも、ガエリオはその言葉に反論を行う。

「逆恨みだど?! アインの命を賭けた意志をそんな陳腐な言葉で片付けられると思うな！」

「陳腐だろうが高尚だろうが言い方変えられただけで逆恨みは逆恨みだろうが。てめえから襲いかかってきて寝言ほざくなバカ」

左足を軸に旋回しながらシユヴァルベ・グレイズが打ち込む。それをシールドで受け流しながら、ガエリオはさらに激昂した。

「あの無法者どもが！ アインの上官の心情を汲んでさえいればこんな事にはならなかった！ 全ては奴らの自業自得！ 因果応報だ！」

「上官？ 心情？ ……おいまさかその上官つてのは、火星で鉄華団に決闘仕掛けてきたアホの事じゃあなかるうな」

その言葉に、かつとガエリオの頭に血が上った。

「クランク2尉の高潔な意志を愚弄するか！」

「するわあほんだらー！」

渾身の勢いで突き込まれたランスを飛び越えて、ランデイは勢いのままキマリスに跳び蹴りを食らわせた。

転倒しそうになって何とか体勢を立て直すキマリスに、びしすと指さしてランデイは言い放つ。

「なんで『決闘後に遺恨が残ってる』んだよ！ 決闘つてのはそもそも『遺恨を残さないためにするもの』だろうが！ 根回ししてなかったあのアホもアレだが、仮にもGHの上級士官であるてめえはむしろ諫める立場じゃねえかこのどバカ！」

決闘とは諍いを収め解決するためにある。結果の是非はともかくとして、それを後に引かないのが大前提だ。仮に決闘の結果が不服であったとしてもそれなりの作法という物がある。でなければ復讐が復讐を呼び、きりがなくなってしまう。決闘という物の本質、ガエリオとアインの行動はそれを無視したものだ。

これはクラランクの生真面目さと、ガエリオのお人好しさが招いたものである。上からの命令に忠実であり同時に人格者であったクラランクは、任務と情との間で板挟みになり、結果鉄華団に決闘を挑むという行動に出た。この時彼がしっかりとアインに釘を刺しておけば恨みを募らせることはなかったかも知れないし、そうでなくとも多少悪知恵が働けば行動の引き延ばしを計り解決策を模索する事も可能だったはずだ。

ガエリオはガエリオでアインの意志と彼から伝え聞いたクラランクの人格、そして二人の關係に感銘を受け、任務に乗じてアインの手助けをすることに決めた。だがそれは多分に感情的な物で、本来の役目からは逸脱した部分も多い。その執念深いと言える行動が、この結果を招いたと言えよう。

双方共に基本的に善人であり、その行動は善意からの物であった。だが善意からの行動が良き結果を招くものではない。そしてそれは、ランデイル・マークスという男に知られた時点で最悪を導く。

ガエリオが反論しようとしたタイミングを見計らったように、シュヴァルベ・グレイズは打ちかかった。

「そもそもが！ 火星本部長のぼんくらが不正バレにビビってクーデリア嬢ちゃんの命（タマ）狙ってきたのが悪いんだろがよ！ 相手がGHなら黙って殺されろってのかてめえは！ ああん!？」

岩をも砕くような一撃をかううじて凌ぎながら、ガエリオはむきになつて声を張り上げようとする。

「それは！ しかしクランク2尉を殺す必要などなかったはずだ！」

「エース級相手に整備もろくにしてねえほんこつMSで手加減出来る余裕なんざあるかバカ！ 第一決闘での生死は互いに恨みつこなしって不文律があるだろうが！ まるつきり無視してるてめえらのほうが決闘仕掛けたヤツの意志をないがしろにしてんじやねえかよ！」

その言葉に怯んだか、キマリスの動きにぎこちなさが生じる。その隙を見逃すランデイではない。肩口から体を当て、キマリスを弾き飛ばす。

「ドルトにしたってアリアンロッドのど腐れどもが仕込んだつてのは見え見えなんだよ！ ってか仕事しろって言ったよな監察局！ 目の前の不正見逃して逆恨み敢行してんじやねえよ素バカがア！」

たたらを踏んで体勢を立て直そうとしたキマリスを、シユヴァルベ・グレイズが『左の盾で』ぶん殴る。予想外の攻撃だったようで、それは機体の顔面に入って仰け反らせた。

「がっ！ ぐ、か、カルタが！ カルタの地球外縁軌道統制統合艦隊を真っ向から粉碎したのは明らかな犯罪行為……」

「んなモンに今更ビビるかボケエ！ それにてめえらがドルトで余計な事しなきゃ俺ら普通に地球に降りられてたんだよ！ どつちかつて言ったら迷惑被ったなアこつちだろうが！」

何とか反撃しようとしながら言うガエリオの言葉を切って捨てるランデイ。同時に下から斬り上げた幅広剣がランスを強かに打ち上げ、手から弾き飛ばす。

「この戦いも！ 金髪ン所の強欲オヤジが色気出してアーヴラウの実権握ろうとしてつから起こってるんだろがよ！ それに便乗した拳げ句禁じ手の阿頼耶識だア!? どの面下げて恥ずかしげもなく上か

ら目線で物言えたモンだなア坊や！」

言葉と共にさらに激しく打ち込み(ラツシュ)、打ち込み、打ち込み！
何とか剣を引き抜いたキマリスは、その乱打を凌ぐので精一杯だ。

「てめえらGHが真面目に仕事して余計なことしなきゃなア！ この件は前代未聞ではあっても『アーヴラウとクリユセ自治区の政治的な取引ですんだ話』なんだよ！ 基本から最終形まで全部、全部！ ぜんぶ！ 『GHのせい』だろうが！ あゝア!？」

「それは……っ！ 俺達は……っ！」

言いよどむ。ランデイの言葉は、目を背けていた現実を刃と共に叩き付けていく。首根っこをひつつかみ、逃げてるんじゃねえと無理矢理見せつけているがごとく。

そしてランデイは『とどめ』を放った。

「そのGHが不正を見逃すだけでなく、便乗してるてめえはなんだ！ その機体、その立場！ 与えられたのは身勝手を通すためだったか！ とことんどこまでも、『骨の髄まで腐ったGHだなんてめえは』！」

「……………っ！」

違う、と叫ぼうとした。自分は腐敗し墮落したものたちとは違うと、それを正そうとして――

『権力を振りかざし、我を押し通した』。

その事実気付いた時、ガエリオは絶望にも似た虚脱感を覚える。

目に見えて挙動が乱れるキマリスの様子に、ランデイはほくそ笑んだ。

彼は実の所、『怒りに駆られたりしていない』。激情のまま言葉を叩き付けているように見えるのは全て演技。はつきり言っつてこいつのやっていることの方がGHよりなんぼか酷いし、その自覚もある。

ここでガエリオを責めているのは、『その心をへし折るため』だ。殺そうとまでは思っていない。むしろここでガエリオを亡き者にしてしまえば、それを理由にしてGHは全面的に対策を取るであろう。『まだ準備が整っていない』現段階でそれは少々面倒くさい。ここは

心理的に叩き潰して、『GHの内部疾患となって貰う』。そういった算段があった。

徹底的にど畜生であるこの男。

(他人の影響をほいほい受けるからなあこの坊やは。実にいいカモだぜ)

ランデイから見れば、ガエリオ・ボードウィンと言う人物は実に『ヌルい』。根本的に善人でお人好し。目に見える邪悪には憤るが、隠された悪意にはとことん鈍感だ。同じくランデイと接したマクギリスやカルタとは根本的に違う。マクギリスには出生などを根幹とした『飢え』があり、カルタは置かれた立場から『危機感』とがむしやらかな『向上心』を抱いている。ガエリオにはそういったものがない。恵まれた立場に置かれたゆえに、そこからの目線『しか』持てないのだ。

だからランデイにとって、どこまでも彼は『坊や』でしかない。鍛え上げはしても、それは決してランデイを脅かすものにはなれなかった。技量の問題ではなく、基本的な心構えからして全く『足りていない』のだから。

ともかくそろそろ仕上げだ。いい加減三日月たちが相手をしていくでかぶつを放っておくわけにもいくまい。あっちのほうがよく面倒な存在だ。

「いい加減邪魔だ。とつとと失せろや三下(さんびん)の坊や!」

シュヴァルベ・グレイズが、幅広剣を高々と振り上げる。

そこで新たに状況が動いた。

「三日月! もうすぐ団長とクーデリアさんたちが議事堂に着く。それまで保たせてくれ!」

団員からの通信が、鏑迫り合いを行っている三日月の耳に飛び込む。そこまでは良かった。だがその通信は、接触回線にてグレイズア

インにも伝わってしまう。

コクピット内がアインの表情は動かない。いや、『特殊溶液に浸された』彼は、もはや表情を動かすどころか身じろぎすることも叶わない。だがその感情は猛り狂い、それは機体の行動に反映される。

許さぬと、彼は憤っている。敬愛する上官を殺害した宇宙ネズミたちを一匹残らず駆除しなければならないと、ただそれだけを目的に彼は生きながらえている。だがしかし現状はどうだ。特務三佐に与えられた無双の力を持ってしても、奴らはしぶとく生き延びている。なぜだ、何がおかしい。何が原因でやつらを殺せない!?

徐々に狂気に塗りつぶされる彼の耳（センサー）が、鉄華団の通信を傍受する。これは、そうだ。そもそもこうなった原因は――

「そうだ……そうです！ 忘れていました！ 申し訳ありませんクラ
ンク2尉！ クーデリア！ ああ、クーデリア・藍那・バーンスタイ
ンっ!!」

どん、と衝撃が奔り土煙が舞い上がる。それに乗じて死角に回り込むつもりかと、三日月やシノたちは後退し相手の出方に反応しようとするが。

「……………!? 逃げやがった?」

レーダーで確認される敵の機影は、高速でこの場を離れているようだ。何かトラブルでも起きたのかと、アジーなどは訝しむが。

「……………、任せる」

三日月は即座に動き出す。

「二人は昭弘やランディを手伝って。俺はやつを追う」

「お、おい、三日月!」

シノの声に応えず、三日月はスロットルを全開。彼は敵が消えた方角と、そして本能的な勘で敵の目的を察していた。

『オルガが危ない』。

「市街地で重火器だど!？」

MWの30mm砲で時折現れる警備兵たちを蹴散らしながら、オルガたちは目的地へと急ぐ。このままなら予定通り、いや少し早めにたどり着けるなど思案している最中、通信機にノイズが走り、街頭のテレビ画面がこぞつて砂嵐を映すようになる。

「電波障害!? これは、まさか!」

市街地全体に影響が及ぶような電波障害。それを引き起こせる物はこの状況では一つ。『MSに搭載されているレベルのエイハブリアクター』だ。

「連中、市街地にMSを突入させやがったのか!? 正気か!？」

無法者の自分たちですら使うことを躊躇した手段。それを堂々と使ったことに憤る間もなく日が陰った。

「散開しろ! アトラは車を路地に――」

オルガの指示は間に合わない。衝撃が奔り、MWが、装甲車が、為す術もなく吹き飛ばされた。

噴煙の中、ゆらりと身を起こすのはグレイズアイン。ひっくり返った装甲車から這い出したアトラとクーデリアの姿を、そのモニターアインがぎろりと睨み付ける。

「そうでしたクランク2尉、俺は貴方の命令に従ってクーデリア・藍那・バーンスタインを捕らえなければならなかったっ!」

その声を耳にしたクーデリアは、庇おうとするアトラを押さえて前に出る。

「わたくしがクーデリア・藍那・バーンスタインです! 何かわたくしにご用がおりますか!」

「ああ、クーデリア・藍那・バーンスタイン殿。以前CGSにお迎えに上がりましたときに貴女が来て下されば、クランク2尉は……。それも、貴女が独立運動などと……。ああそうか、貴女が、お前が! クランク2尉を!」

正気を失った言葉。しかし言いたいことを察しながらも、クーデリアは堂々と一歩も引かない。

「確かにわたくしの行動で、多くの命が犠牲となりました。……しかしなればこそ、わたくしは立ち止まるわけには参りません！ 多くの犠牲を無駄にせぬために、世界を変えるために！」

「その傲慢！ 我が手で終止符を打つ！」

咆吼と共に振り上げられた凶刃が振り下ろされんとする。

疾風（かぜ）が奔った。

轟音、衝撃。目を背けぬクーデリアを、その彼女の前に立ち刹那の間であっても盾になろうとしたアトラを、強き風が颯る。

立ちふさがるのは、白き鬼神。渾身の一撃をレンチメイスで受け止めたバルバトスのモニターアイが、力強い光を放つ。

「お前の相手は俺だって、言っただはずだ」

静かに、だが然りと、三日月・オーガスは宣った。

突然の銃撃が、シユヴァルベ・グレイズとキマリスを分かつ。

後退しだらりと構えた機体の中、ランディは不満げに声を上げた。

「……何のつもりだ、小僧」

応えるのは、天空から降り立った赤い機体。

「ご不満はありませうが、ここは私に譲って頂きたい」

グリムゲルデのкокピットで、微笑を浮かべながらも真剣な眼差しのモニターが、そう告げる。

事態は終盤。しかしながらまだ波乱は終わりを見せない。

※今回のえぬじい

冴えた議会の伸ばし方。

「フリーユ議員、その……ずれてますよ?」

「誰がツラだって証拠だよやるならやんぞ表でない!」

デリケートな部分に攻撃するのはやめておいた方が良いでしょう。お互い様だから。

ハゲてないぞ? いやマジで。(切実)

20・そろそろ締めるとしようかね!

コーリス率いる地球外縁軌道統制統合艦隊地上部隊は混乱の極みにあった。

「増援の機体が市街地に突入!? ええい、なにがどうなっている!?!」

今回の任務で予想外のことが起こるのは慣れたつもりであったが、いい加減勘弁してくれと頭を抱えたくなる。そんな気持ちを中心に押し込め、牽制の射撃を行いながら通信機向こうのオペレーターに問うた。

「敵が市街地に侵入したのではないのだな!?!」

「は、そのよう……いえ、今1機件の機体と接触した模様です。恐らくは交戦を開始したものと」と

「くっ、この状況では少し離れると通信の傍受もできんか。おまけに土煙で全体の戦況も確認できん」

MS同士の激しい混戦によりエイハブウェーブが安定しないため、少し離れるとまともに通信が出来ない状況であった。故に彼らは増援があつた事こそ察知したものの、どのような展開になっているかまでは把握できていない。

「ともかく陣地の撤収を急げ! こいつら相手では防戦にも限度が……」

「あ、新たに2機、こちらに來ます! 件の機体の相手をしていた連中です!」

「ちい! ボードウイン特務三佐は何をしている!」

何のための増援だと憤りながら、コーリスは弾の切れたアサルトライフルを投げ捨て、腰のバトルブレードを引き抜いた。

戸惑うガエリオのキマリスに刃を向けたまま、赤い機体——グリムゲルデはランディのシュヴァルベ・グレイズを油断なく見据える。

鼻を鳴らしてランディは言う。

「黙っていてもそれなりのケリはつく。このまま顔を出さなくてもよかつたんじゃないか？」

ある程度目の前に立つ人物の目的を予測しているのか、それともかまをかけているのか。ランディの言葉はどちらともつかないが、モンタークはこう返す。

「決着は己の手でつけたいのです。……お察し下さい」

沈黙。僅かな時間を経て、ランディは剣を収めた。

「貸しにしておいてやる」

「感謝を。いずれ必ずお返ししますので。……急いだ方が良い。あの機体の戦闘能力は本物です」

「おう。精々後悔しないようにな」

後退して離脱するシュヴァルベ・グレイズを見送るしかないガエリオ。突如現れた機体は敵なのか。ならばなぜランディを止めたのだ。先の論戦——と言うより一方的に言い負かされただけだが——のシヨックも抜けきっていない彼は、まだ混乱から冷めていなかった。その時、赤い機体から通信が入る。

「君の相手は私がしよう、ガエリオ」

その声に、ガエリオは目を見張った。

「……その声……ま、まさか、お前は」

グリムゲルデのコクピットで、鬘と仮面が取り払われる。その下から現れた顔は、紛れもなくマクギリス・ファリドのものであった。

「マクギリス……!? なぜ、なぜだ? なぜおまえが!?!」

混乱に拍車がかかる一方のガエリオ。対するマクギリスは淡々と言葉を紡ぐ。

「鉄華団とランディール・マーカスには勝利して貰わねばならない。我が目的を果たすためにもな。そして……」

グリムゲルデが、改めて剣先をキマリスに突きつける。

「君にはここで果てて貰う」

マクギリスは務めて冷酷に告げた。

受け止められた一撃。だがそれはこのほか重く、バルバトスの足下が地面を抉り膝が折れようとする。

機体の各所から軋む音が漏れる。まともに受けなければ良かった話だが、そう言うわけにはいかなかった。後ろにはオルガが、クーデリアが、アトラがいる。彼らが何とかこの場を逃げ出し安全圏に至るまで、一歩たりとも引くことは出来ない。

だから。

「出せよバルバトス、お前の力を」

つう、と三日月の鼻から血が伝わる。阿頼耶識の同調率を上げ、その対価に神経系への負荷がかかったのだ。バルバトスのカメラアイがより一層力強い光を放ち、リアクターが1オクターブ高い音を奏で出す。

がいん、と音が響いた。鏝迫り合いから、バルバトスが強引にグレイズアインのマチェットを弾き飛ばしたのだ。

「またしても！ またしても貴様か！ 罪にまみれた咎人が！ それをあがなうどころか罪を重ね、血にまみれる！ 貴様は永劫に救われなどしない！」

咆吼と共にグレイズアインは両のマチェットを嵐のように振り回し叩き付ける。三日月はそれを全て凌ぐ。

しかしまだだ、まだ『足りない』。もつとだ、もつとバルバトスの能力を引き出さねば。

「もつとだ、もつとよ……」

「条約も脳に残ってやがらねえかこのど阿呆がア！」

バルバトスの力をさらに引き出さんとしていた三日月だが、それは

怒声と跳び蹴りによって妨げられた。無論敢行したのはランディのシヴアルベ・グレイズだ。

横合いからの蹴りを、グレイズアインは難なくマチェットを振るって弾き飛ばす。が、ランディもそれを読んでいたのか蜻蛉を打ってあっさりと着地した。

「は、単に感覚を繋いだけじゃなくセンサーの類も直結しやがったか。どこまでいぢくってやがんだよ」

阿頼耶識については門外漢だが、機体の反応から大まかな状況は掴める。随分と非人道な真似をしていることだけは確証が持てた。

「ランディール・マークス！ リボン付きの悪魔！ その名の通り邪悪に落ち咎人に荷担するか反逆者！ 貴様も断罪の刃を受けざるを得ない！」

「しかもなんかラリってるときにやがる。条約どころかネジが全部すつとんでやがんな」

多分無理矢理接続した阿頼耶識の齟齬を誤魔化すため、投薬の類もされているのではないかと推測。もはやあのパイロット正気ではあるまいと、口車でどうにかするのは即座に諦める。

ならば少々『マジでやるしかない』。

「がらじゃねえんだよ、こういう真つ向勝負は。……三日月、まだいけるな？」

「当然」

「仕掛けるぞ。俺は右からいく、適当に合わせろ」

「ん、了解」

オルガたちが蒔苗を救出し、即座に立ち去ったのを確認した三日月は頷く。もうこれで後ろを気にする必要はない。2体のMSは電光の速度で左右に散った。

「何を……何を言っているんだ？」

呆然と言葉を放つガエリオ。心を折られた挙げ句にこれだ。彼は現状を受け入れることができなかった。しかしマクギリスは容赦なく。

「ここまで言えば、もういい加減理解できるだろう？」

「……まさか……まさか、お前は!？」

「そうだ。この状況の幾ばくかは、私の書いたシナリオだよ」

「裏切ったのか！ お前は、俺を！ GHを！」

理解すると同時にガエリオの心に怒りがみなぎる。彼はその心のまま、スロットルを開けた。

打ちかかってきたキマリスの剣を、グリムゲルデはなんなくかわす。そうしながらマクギリスは言葉を紡いだ。

「GHが提唱してきた思想と真っ向から相対する存在、阿頼耶識搭載機。それを自らの手で産み出してしまった。そしてそれは組織の歪んだ実情を示す生きた証拠となる。市街地で暴走する彼の姿は、多くの人間に恐怖を与え、GHに対する不信感は膨れあがるだろうな」

「それを提唱したのはお前だ！」

「ああ、そうだとも。しかし『それを決定したのは君だろう?』？」

「それは！ お前が！」

「お膳立ては整えたさ。だが『そうしろとは言わなかった』。最終的には、全て君の意志に委ねていたはずだ」

その言葉に、ガエリオの記憶が呼び起こされる。アイン延命させるため、阿頼耶識を使うことを決めたとき。地球に帰ってからもクーデリアを追うと決めたとき。復讐に燃えるアインを受け入れたとき。……いや、それ以前からずっと。

「ことあるごとに、選択肢を与えられ『決断させられた』。そのことに、やっと気付く。」

「お前は……ずっと前から!？」

「君の決断は、結果的に鉄華団とクーデリア・藍那・バーンスタインの名を轟かせる糧となる。そして蒔苗 東護ノ介は代表選で勝利するだろう。そうなればアンリ・フリユウと我が養父イズナリオとの癒着

は表沙汰となつて、GHの権威は地に落ち、その歪みと腐敗は白日の下に晒される。……なかなかのシナリオだろう?」

その台詞に、萎えかけていた怒気が再び燃え上がる。

「そんな……そんなことのためにアインを! あいつの誇りを利用して貶めたのか! お前が親友だとしても! いや親友だからこそ許さない! 許せるはずがない!」

謀を用いて他者の運命を弄んだ。そのことに、ガエリオは猛り狂う。

対するマクギリスはあくまでも冷たい。

「ではどうする?」

答えは、全身全霊の打ち込みとなつて放たれた。

「もう待てないわ! 蒔苗 東護ノ介は欠席! 選挙を始めなさい!」

再三の遅延工作に苛立ちを募らせたアンリがヒステリックに叫ぶ。与党の議員達はそれに反発し、アンリに従う野党議員は声を荒げて罵る。そろそろ殴り合いでも始めようかという空気の中、それを切り裂くような声が響いた。

「やかましいのう。ここはいつから動物園になつた?」

議事堂の影から堂々と姿を現す蒔苗。その姿にアンリは目を見張った。

「な!? 蒔苗!? ば、ばかな、なぜここに!? 正面にはGHがいるはず!」

「なぜもなにも、儂はこの代表じゃぞ? 抜け道の一つや二つ熟知しておるわ」

事実、彼は議事堂から少し離れたところにある政府所有のセーフハウスから設けられた隠し通路にてこの場に足を踏み入れた。それよ

りもと、老人の目が鋭いものとなる。

「面白いことを言うのおアンリ・フリユウ。GHがいるはず、じゃと？ 経済圏の政治には不介入であるはずのGHが、なぜ儂を狙う？ してなぜお前さんがそれを知っているのかのお。実に興味深い」
ぐ、と言葉に詰まるアンリ。そこで議長が蒔苗に声をかける。

「蒔苗先生、所信表明をお願い致します」

「おお、そうか。……しかしそれよりも、彼女に話をさせてやってくれぬか？」

そう言つて、蒔苗はクーデリアを指し示した。

「蒔苗先生!」

目を丸くするクーデリアに向かって、蒔苗は頷く。

「お前さんがこれまで見てきたこと、感じたこと。それらを纏めて色々と言いたいこともあるじやろう？ 儂の所信証明なんぞより、よほどためになる話であろうよ。一つぶちまけてやってください」

クーデリアは戸惑うが、そんな彼女の袖が引かれる。見れば彼女と共に蒔苗を送り届けたアトラが、力強く頷いてみせる。

腹は決まった。クーデリアは壇上へと立つ。

「誰よ!? 議会に関係ないものがしゃしゃり出て——」

「わたくしは、クーデリア・藍那・バーンスタイン。火星のクリュセ区から、ハーフメタルの採掘利権に関する交渉を行うため、アーヴラウ代表蒔苗氏の元を訪れたものです」

アンリの言葉を叩き斬るように放たれた台詞は、議会内にざわめきを呼ぶ。

「ここに来るまでの間、わたくしは幾度と無くGHの襲撃を受けました。そして今現在も、わたくしをここまで送り届けてくれた人たちが、戦いを続けています」

流石に議事堂の中まではその影響はないが、市民の多くがその戦いを目にしている。GHの横暴は、もはや隠し通すことなど出来ない。無力な小娘であるはずの、少女が言葉は続く。

「ただの交渉で終わったはずの話が、ここまで歪んだ。その歪みは、この地を、この世界を飲み込もうとしています。あなた方は、今この場

でその歪みと相対している。そしてその歪みを正す力を持っていません」

呑まれる。少女の言葉に野心を持つものたちは戦き、そうでないものも気圧される。現状を認識しているが故に。

今議事堂を支配しているのは、クーデリア・藍那・バーンスタインであった。

「選んで下さい、今この場で。己が胸を張って誇れる選択を。世界の、未来の希望となる選択を！」

クーデリアたちを議事堂に送り届けたオルガたちは、セーフハウスの屋上で『最後の仕上げ』に移っていた。

「ドローンの反応正常、LCSの回線を確保。団長、いけます」

通信の調整をしていたタカキが言う。オルガは頷いてマイクに向かって口を開いた。

「鉄華団全員聞こえるか!? じいさんとお嬢さんは無事議事堂に送り届けた! 依頼は成功だ! 繰り返し、依頼は成功したんだ! 俺達は勝ったぞ!」

勝利宣言。あえて『GHも傍受できるように』通信の迷彩は緩めた。通信機向こうから聞こえる雄叫びを確認して、オルガは最後の命令を下す。

「野郎ども、後かたづけの時間だ! とつとと『目の前の仕事』を片づけろ! 帰り着くまでが仕事だ、つまんねえドジ踏むんじゃねえぞ!」

その咆吼は、撤退する先陣にも届いていた。

「やりやがったな、オルガのやつ」

「ええ……」

輸送トラックのハンドルを握る雪之丞は上機嫌。その隣のメリ

ビットはほっと胸をなで下ろしている。

「お嬢様……成し遂げたのですね」

トラックの荷台で、負傷者の手当に従事していたフミタンが、口元を微かに緩めた。

そういった細かい反応は分からないまでも、概ね満足したオルガは身を翻す。

「団長!? どうするんですか!?!」

「ここは任せる。まだ『ケリつけてない』やつらがいるんでな、発破かけてくるさ」

表に出たオルガは、MWを駆って戦場に赴く。

まだ全ての決着はついていない。

議事堂が『掌握された』。その連絡を受けたコーリスは即座に決定を下した。

「停戦の信号弾を上げろ！ 陣地の撤収を援護しつつ、我々は撤退するぞー！」

「し、しかし市街地の陸戦隊は、増援のボードウィン特務三佐は？」

「目標が議事堂にたどり着いた以上、後はアーヴラウの問題だ。これ以上陸戦隊が留まる理由もないしそのような命令も下らん！ それでこちらの指揮系統でないボードウィン特務三佐に命令は出せん。向こうも引き際は心得ているはずだ！」

「は……はっー！」

勿論部下に言ったことは建前である。これ以上茶番に付き合っていられないと言うのが本音である。これ幸いと意義も大儀もないこの戦いから手を引きたいという思いからの判断であった。

それと同時に、ガエリオに対する不信感が芽生えている。

(カルタ様の旧知であるからと介入を許したが……配下の統制もまま

ならないとはな。とんだ『不良債権』だ。己のやらかしたことの責任
くらいは、取って貰おう)

流石に立場上、自分たちはどうすることも出来ない。しかし……
『今敵対しているものたちならば』。そのような薄暗い感情を抱いて
しまうのは、致し方ないのでは無かろうか。

(あるいは……彼らに面倒を押しつける……『借りを作る』ことになる
かも知れんな)

ある種の期待。それを押し隠して、コーリスは撤退を開始した。

撤退していく敵MS部隊。ビトーはそれを追撃しようとしたが、ア
ジーがそれを止めた。

「よしな、停戦信号がでてる。これ以上の戦いは必要ない」

「けどあいつらは好き勝手やって!」

『負け犬』をこれ以上追い立てる必要はないってことさ。それより
こつちも下がるよ。そろそろ残弾もガスも心許ない」

「けどよ、三日月とランディさんがまだ……」

シノが言いかけるが、アジーは首を横に振る。

「あたしらじゃ足手まといだ。あのでかいのに手も足も出なかった
ろ」

確かに先程の戦いでは三日月がいなければどうなっていたか。そ
れくらい理解できるシノは押し黙る。

と、そこで昭弘が口を開いた。

「あいつらなら大丈夫だ」

「昭弘……」

「兄貴……」

不安げな声を上げるラフタと昌弘。彼女らに頷きながら、昭弘は確
信を持って仲間に言う。

「ただ強いだけの相手に、あいつらが負けるものかよ」

視線を遠くへ向ける。当然ながら戦いの光景など見えはしないが、彼は三日月とランディの勝利を信じて疑わなかった。

乾坤一擲の一撃は、しかしあつさりと双剣にて弾き飛ばされる。

「足りないな。やはり君はここで死ぬ運命のようだ」

「なにをつ！」

「君が死ねば、アルミリアを娶る私がボードウィン家を次ぐこととなる。同時にイズナリオが失脚した後のファリド家も我が手中となり、彼が後見人を務めていたイシュー家も、カルタが失脚することによって私がその権限を預かることとなるだろう。セブンスターズ7家のうち3つまでを、私が押さえることとなる」

その言葉に動揺した一瞬の隙を突き、グリムゲルデの剣がキマリスの右手首を剣ごと斬り飛ばした。

「マクギリス！ 貴様！ 俺の、父の信用をよくも！ カルタをも裏切って！ あの高潔な誇り高き女は！ カルタはお前に恋いこがれていたんだぞ！」

「ああ、知っているさ」

「っ!？」

それは予想外の反応だった。言葉に詰まるガエリオに向かって、マクギリスは静かに言葉を紡ぐ。

「彼女の思いには、昔から気付いていた。恐らく彼女も、私が気付いていた上で素っ気ない素振りをしていた事を理解していただろう」

「だったら！ なぜ！」

「彼女は高潔で、純粋だ。そして君も。……だが！」

いきなりフルスロットルで飛び込んだグリムゲルデが、今度は左の盾を弾き飛ばす。

「その潔さと純粹さだけでは、『人は救えない』！ イノセンスでは世界を変えられないんだよ！ ガエリオ！」

その言葉に血を吐くような思いがこもっていることに、ガエリオは気付けたかどうか。彼はただ目の前の紅い機体が振るう剣を捌くのに必死であった。

「旧知であることに甘え、『俺』の言葉を疑うこともせず！ 己の目で、耳で、真実を捉えることを怠った！ だから食い物にされるのだ『お前』は！」

「友を！ 誰かを信じることを！ それすら否定するのか貴様は！ アルミリアをも、あいつが寄せる思いすらも裏切るといえるのか！」

「!?」

突如静かに、マクギリスが返す。

「彼女の幸せは俺が導く。その約束が、せめてもの手向けだ」

その言葉はどこまでも優しく、それでいて残酷なものだった。

「……マクギリスううううううううア!!」

咆吼と共にキマリスが突撃を敢行する。それを真っ向からマクギリスは受けて立つ。

「最後の最後まで、お前は言われなければ気付けなかったな」

交錯。そして破碎音。

コクピットに深々と剣を突き立てられたキマリスが、ゆっくりと地に伏せる。

「それでもお前は、俺のたった一人の友だったんだろう」

倒れ伏した機体の各所からオイルが漏れ落ちる。それは血のようにも、涙のようにも見えた。

「だがな……俺にはお前の友である資格など、最初からなかったんだよ。ガエリオ……」

その悲しげな言葉はコクピットの中に溶けて消えた。

激戦は続く。

鋭く放たれた回し蹴り。その足首から先が、ドリルのように高速で回転しつつ迫る。

「みようちきりんな仕掛けだが、当たるとミキサードなこりやア！」

火花を散らしながら盾でそれを逸らす。飛び退きながら、ランディは冷静に現状を再確認していた。

「千日手……と言うほどじゃないが、互いに決め手に欠けるか。向この攻撃も当たらんが、こつちも致命打が打てない」

出力はガンダムフレームと互角以上、リーチも上回り、反応速度も速い。そしてほぼ『死角がない』。三日月達が使う劣化阿頼耶識は、完全な感覚の同化には至っていないが、向こうは機体全てのカメラ、センサーとパイロットが完全に繋がっているらしく、360度全てを認識しているようだ。それ故に技量で上回るランディにも食らいついてきていた。そして本人の反応速度はともかく、機体の反応とパワーでは完全に負けている。ランディでなければ1分保つかどうかも怪しいところであった。

「サシじゃ無いだけマシってところだが……つと」

グレイズアインの肩部装甲が展開、現れたマシンガンが弾をばらまき、それを回避したところで背後に回られる。だがそれも難なくかわし、ランディは毒づいた。

「周囲の被害もお構いなしかよジャンキーが。……ま、動きにや慣れてきたが」

先程から相手は通信機向こうでわけの分からないことをがなり立てているが完全に無視。私怨に『酔っぱらっている』人間の戯れ言などぞに付き合っている暇はない。

と、レンチメイスでがつつちんがつつちんと打ち合っている三日月から通信が入った。

「ランディ、こつちはそろそろガスがない。そつちは？」

「ほぼからっけつだ。……いい加減決めねえとだが、動きにや慣れた

か？」

「慣れたけど、どうすんの」

動きには慣れたが、相変わらず隙がない。何か考えがあるのかと問う三日月に、ランディはにっと笑って見せた。

「隙がないんなら、作るだけさ。……仕掛ける。合わせろ」

「了解」

短くやりとり。戦闘に関してだけならこの二人、すでに阿吽の呼吸であった。

地を這うようにダツシユするシュヴァルベ・グレイズ。駆けながらその左腕の盾を、ランディは迷わず投擲した。回転しながら円盤のように飛ぶ盾を、グレイズアインは難なくマチェットで弾き飛ばし——
『弾き飛ばされた盾をワイヤーアンカーで掴んで』、強引に振り回し再びハンマーのごとく横薙ぎに叩き付けようとするランディ。

しかし。

「小細工など！ 卑劣な真似は通じるに価しない！」

不意をつかれることもなくグレイズアインは跳躍。そこから蜻蛉を打ってランディ機の背後に着地、振り上げたマチェットを叩き込まんと——

「どんぴしゃア！」

吠えるように言い放ったランディは、機体を『背後に向かって』ジャンプさせた。

「なに!？」

予想外すぎる行動に面食らい、懐に飛び込まれてしまうアイン。だが相手は背中を向けたまま。この状態で攻撃は出来ない。落ち着いて間合いを離せば……などと考えていたアインの正面視界一杯に、『シュヴァルベ・グレイズの背面可動スラストユニットのノズルが映る』。

MSの推進器であるエイハブスラスタは、高温で燃焼する推進剤とエイハブ粒子を吐き出して推進力を得る。ランディの機体に残されていた推進剤は僅か1秒にも満たない量であったが、それを全部フルスロットルでグレイズアインの頭部センサーユニットに極至近距

離で噴射すれば。

「ぎ、ああああああああ!!」

苦悶の悲鳴が上がり、グレイズアインは顔面に当たる部分を両手で押さえながら仰け反る。噴射の勢いでバランスを崩しつつも何とか機体を着地させたランディは、してやったりと会心の笑みを浮かべた。

「モニター越しならともかく、直結されてんならセンサー灼くのは効くだろうよ!」

目玉や鼻の穴に直接ガスバーナーを浴びせたようなものだ。ただ視界が失われるではすまない。

それは十分な隙となる。

「ぐ、ぐが……っ! おのれっ!」

画面が焼き付いたかのように白く染まった視界の端、投擲されたレンチメイスを確認したアインはかろうじてそれを左手で受け止めた。「何度も同じ手を食うと……」

言いながらレンチメイスを放り投げたときには、すでに太刀を抜きはなつたバルバトスが間合いに入っている。

するりと、風が駆け抜けた。

「は?」

「え?」

「!?!」

三者が驚きを示す。駆け抜けつつ担ぎの構えから袈裟懸けに振るわれた太刀は、取りこぼしたマチェットを回収した右腕を、綺麗に斬り飛ばしていた。

実は振るつた三日月本人が一番驚いている。彼の算段としては腕を弾いて体勢を崩すつもりだったのだが。だがすぐに我を取り戻し、返す刀で今度は逆袈裟に斬り上げる。それは殴りかかろうとしていた左腕を、同じように斬り飛ばした。

「……なるほど、こうか」

得心。先程まで振るっていたレンチメイスと同じような力の配分、振るう流れ。それが三日月の太刀筋にかちりと噛み合ったようだ。

剣を振るうと言うこと、それを体得したと言っても良い。

「この……化け物どもがあああああ!!」

「お前が言うなよ」

「よく言われる」

苦し紛れに咆吼するアイン。三日月は呆れて、ランデイはすまして返す。戦いの帰趨は決した。

「克蘭ク二尉のおおおお！ 俺はああああああア！」

肩のマシンガンを乱射しながらバルバトスに向かって突撃。最早それは悪あがきでしかない。

「三日月」

「ミカア！」

にとと牙を剥くように笑んだランデイが、MWで戦場に乗り付けたオルガが、同時に吠える。

『やっちまえー！』

応える三日月。バルバトスのカメラアイが力強く輝く。

疾風のごとく。電光の速度で突き込まれた太刀は、紛うことなくグレイズアインの胸部コクピットを貫いた。

夕日が街を染める。跪いたバルバトスの胸部により登ったオルガ。その目の前でコクピットハッチが開く。

「……おつかれさん」

「ん、オルガもね」

コクピットから這い出して、三日月は鼻血をぬぐいながらオルガに問うた。

「たどり着けたの？ 俺達」

「……ああ、ここもその場所の一つだ」

穏やかに応えるオルガ。三日月はコクピットの縁に腰を下ろして

眼下の光景を見回す。

「……綺麗だね」

「そうだな」

少年達は暫くその光景に見入っていた。

一方ランディは各種通信を傍受し、現状の把握に努めている。

「GHは全面的に撤退、議会もじいさんの圧勝か……首尾よくいったんじゃないかね」

く、と忍び笑う。

「さて、蜜月の時は終わる。ぬるま湯に浸っていたお前らの足下から崩れていくぞ。どうするんだ『ほら吹きども（ギャラルホルン）』」

その笑みは、正しく悪魔のごとく邪悪であった。

こうしてエドモンソン攻防戦は幕を下ろす。

この事件はアーヴラウにとって、いや、世界にとって大きな転換点となった。

※今回のえぬじい

「カルタはお前に恋いこがれていたんだぞ！」

「いやあのメイクとか無理だし」

「……ですよねー」

なんか和解決した。

「クケエー……!!」

「か、カルタさま暴走！」

「ま、麻酔銃を！ 逃げ！」
でも被害は甚大。

21・勝って兜のなんとやら

アーヴラウ事変。GHによる火星ハーフメタル利権交渉への介入から始まったとされるその事件は、GH部隊の撤退と、代表選挙の決着によって終幕を迎えた。

改めて代表に選出された蒔苗 東護ノ介は、早速アンリ・フリユウとイズナリオ・ファリドの癒着を公表。その上でGHに対し激しく抗議を行い、徹底的な追及と第三者機関による内部監察を要求した。

それを何とかのらりくらりとかわそうとするGHであったが、その社会的な信用と権威は地に落ち、今までのように煙に巻いた誤魔化しで済ますことは出来なかった。

『生け贄』は、必要だったのである。

「義父上、亡命の準備が整いました」

「マクギリス……っ！」

主犯格であるイズナリオの処分。GHに残るのであれば、それこそ地位の剥奪、裁判の末の実刑などは免れないであろうが、中立国に亡命するという形でそれを免れることは可能だ。

しかしこれは事実上の追放と言っても良い。それを逆手にとって処分はなされたと言い逃れするのでだろうが、イズナリオはよほどのことがなければ再起することは叶わぬであろう。

ここにいたって、彼は己の養子が策略に乗せられたのだと気付いていた。

「お前という男は……孤児であった所を引き取ってやった恩を忘れたか！」

「恩義を感じているからこそ、『この程度』で済むよう働いたのです。そもそもあなたがいらぬ欲を抱かなければ、このような事態にはならなかった。私はそれに便乗したに過ぎません」

臆面もなく言い放つマクギリス。歯ぎしりするイズナリオの両脇

を警務局のものたちが固める。拘束こそされないが、逃げ出すのは難しいだろう。

促され、退出しながらも、イズナリオは捨て台詞を忘れない。

「分かっているのだだろうなマクギリス。そのような生き方をしている貴様の先には、絶望しか待っていないぞ」

そう言い残して彼が去った後、マクギリスはひとりごちた。

「もとより、まともな終わりを迎えられるとは思っていないさ」

人並みの幸福など求むべくもない。すでに修羅道を歩んでいるこの身、前のめりの倒れるまで進むだけである。

ともかくイズナリオは退場した。元々以前から『裏』も含めてファリド家の実権は掌握しつつある。もうすでに彼は用済みに近かった。丁度良いタイミングの退場と言っても良い。これで、計画は一つ前に進む。

(贖罪は請わない。……例えそれが地獄行きの道であろうともな)

密やかな覚悟を胸に、マクギリスは野心の炎を燃やし続けていた。

諸々の後始末のため、状況が落ち着いた頃を見計らって名瀬を筆頭としたタービンの面々と、テイワズのものたちが地球を訪れた。

「兄貴、色々とご面倒をお掛けしました」

頭を下げるオルガ……の額に、名瀬のデコピンが放たれる。

いづつ、と面を上げるオルガに向かって、名瀬はにやりと笑いながら言った。

「何言ってやがる、お前はちゃんと仕事をやり遂げたじゃねえか。胸を張れ」

「……兄貴のおかげです。ユージンたちを寄越してくれなかったら、もつと被害が出ていた。そうでなくとも、死なせちまった連中だっています」

今回の仕事でも幾人かの死者が出ている。ブルワースとの、ミレニアム島での、そして、エドモンソン攻防戦の終盤にて、GH陸戦隊を引きつけるための戦いでも。その事実がオルガの心に影を落としていた。

それでもと、名瀬は諭す。

「オルガ、お前は前に言ったな？」「団員の死に場所は、団長として自分が作る」って。倒れた奴らはただ命じられて死んでいったんじゃないかね。お前の、その心意気に準じて、腹決めて逝ったんだ。……後は、お前らが『死んでいった連中に恥じない生き方』をしていくんだよ」

「恥じない、生き方……」

「そうだ。どんな形にしろ、人はいずれ死ぬ。お前も、俺もな。そんなとき先に逝っていた連中に、どうだ、俺はこんな風に生き切ったたぞって、胸張って誇れる生き方をな」

名瀬にも色々あったのだろう。飄々とした様子の中で、その言葉には重みがあった。オルガにはその全てを理解することは出来ない。ただ、言葉の重さがずしりと腑に染み込んでいくかのようだった。

「努力して、みます」

「まあ努力するモンでもないんだがな……つと？」

語り合う二人の元に歩み寄り影。誰あろうランディである。

「おう、大将に旦那。揃ってるたあ都合がいい」

気楽に話しかける彼に、オルガが問うた。

「何か用事か？」

「なに、今回の仕事は無事終わったってことで、これから先の契約をどうしようかってな。『俺はどっちでも良いぜ』？」

このまま雇われるか、解約するか。元々破格の契約だ、正直言って報酬のことだけ考えればランディに利は少ないというか無い。それを踏まえながらも雇われ続けて良いという事を匂わせるのは、何か考えがあるのだろう。そしてそれはきつと、ろくなものではない。

しかしそのことを理解していながらも、オルガは迷わなかった。

「ランディさんさえ良ければ、このまま続けて俺達と契約して欲しい。……俺達にはまだ色々、いや、『何もかもが足りねえ』。戦いだけ

じやなく、そう言った諸々の、色々なことを教えて欲しいんだ。報酬も含めて、俺達に出来ることはする。だから是非とも頼む」

そう言つて深々と頭を下げた。そして。

「俺からも、頼む」

「兄貴？」

オルガの隣で名瀬も頭を下げた。

「本来は兄弟分として俺が色々教え込まなきゃならないんだろが、こいつらにはきつと『それだけじゃ足りない』。もつとでかくなれる連中なんだ、お前さんのような人間の教えが必要だと思う。報酬の類ならこつちからも出す。だから受けちゃくれねえか」

オルガたち鉄華団に共感と将来性を見た名瀬の、本心からの懇願であつた。

それに対し、ランディは気楽な様子でぱたと手を振つた。

「そこまで大仰にするこたアねえよ。こつちにやこつちの都合もあるんだ。持ちつ持たれつでいこうぜ」

そう言つてから、にい、と邪悪に口元が歪む。

「地球に新しい伝手が出来るってんなら、色々面白いことも出来そうだしなア……」

（あ、兄貴。早まりましたかね？）

（けどよ、こいつから目を離れた方が怖くね？）

げっげっげっげつと明らかにヤバげな笑い声を上げるランディの前に、引きつった顔でこそこそと言葉を交わすオルガと名瀬。

微妙に不安は残るが、ともかくランディとの契約は続くようである。それがどのような影響を及ぼすか、まだ分からない。

ガエリオ・ボードウインの死は、任務上の殉職として処理された。彼の親族はその死を悼み、悲しみに暮れる。中でも妹であるアルミ

リアは精神的に不安定になるほど嘆き悲しんでいた。

「マツキーはどこにも行かないよね？ 居なくなったりしないよね？」

屋敷に戻ったマクギリスにしがみついたまま、涙目でそう問い続けるアルミリア。彼女を抱きしめながら、マクギリスは優しく言葉を放つ。

「ああ、どこにも行ったりしないさ」

これは嘘だ。誰よりもマクギリス本人がよく分かっている。そしてこれから先も嘘をはき続けなければならぬだろう。目的が成就するまで。

しかし。

「君の幸せは、私が導く。必ず」

この言葉だけは真実としなければならぬ。例え自分にこの少女を幸せにする資格はないと分かっているとしても。

それが、『友だった者とのただ一つの約束』なのだから。

事件を機に、世の流れは変わっていく。GHが権威の衰退。火星と地球の関係。経済圏のパワーバランス。これもそうだったものの一つだろうとマクマードは感慨深く思いながら、ノブリスと相對する。「……だいたいこんなモンか。後はお嬢さんが火星に帰ってきてから話を詰めることになるな」

「ノーマン・バーンスタインの失脚が前提となるが……彼女は出来るのかね？ 自分の父親を追い落とすことが」

「放っておいてもGH火星支部のガサ入れついでに芋蔓だろうさ。何よりクリュセの親元はアーヴラウド、風通しを良くするために膿は全部出し尽くす腹じゃねえか？」

GH火星支部とクリュセ代表首相であるノーマンの癒着はスキヤ

ンダルとして公表された。ノーマンも悪あがきしているようだが時間の問題だ。下手をすればクーデリアが火星に帰還する前に決着がついてしまうかも知れない。恐らく次の代表首相はアーヴラウの意向を強く反映する人物になるだろう。アーヴラウの益になるよう働けば、上手く取り入ることは難しくない。

そこから先は、『パイの取り合い』だ。どれだけが互いを、いや、これから介入してくる全ての勢力を出し抜き、己の利権を得るか。そういつた戦いになる。

無論、その勝負に負けるつもりはない。だがそれ以上に。

（あのお嬢さんがどう采配を振るうか。そいつが楽しみで仕方ねえてのは、俺も酔狂だねえ）

老いが見えてきた自分たちと若い世代。そのやりとりが楽しみである。とマクマードは思う。

老獪なる狸たち。あるいはこの勝負、ここで決していたのかも知れない。

鉄華団に与えられた報酬。それは金銭的なものに留まらなかった。

アーヴラウで設立される予定の防衛組織。その軍事オブサーバーとして正式に契約を結ぶこととなったのだ。

実質的には防衛組織の教導に加え、テイワズやノブリスが経営する軍需産業のプロモートと営業を行うこととなる。まだ規模は小さいが、これまで治安の維持をGHに頼るだけしかなかった経済圏の軍事バランスに一石を投じる仕事だ。その注目度は高く、鉄華団の名は注目株として急激に広まりつつある。

それはともかくとして、諸々の後始末を終えた鉄華団は帰還の準備を始めていた。軍事オブサーバーの窓口として地球支部を開設する関係上、幾人かは残らなければならなかったが、多くのメンバーは火

星に戻る。戻る連中も色々忙しいが、地球に残る面子は多分それ以上に忙しいこととなるだろう。

「悪いビスケット。面倒を押しつけちゃって」

「ま、俺が適任だろうしね。任せておいてよ」

地球に残るメンバーのリーダー——鉄華団地球支部長には、ビスケットが収まることとなった。オルガ以外で能力、人望、人格的に任せられるのは彼しか居ないと満場一致で名が上がり、彼自身もまたそうなるだろうなあと半ば納得と諦観が混ざった心境でそれを受けた。彼以外にも補佐としてチャドやタカキ、その他に幾人かが残って地球支部設立のために働くこととなっていた。

「クツキーとクラツカにはちゃんと言えておくれ。ああ、あんちゃんにも伝言があんならついでに寄っておくか？」

ユージンの言葉に、ビスケットは頭を振る。

「むこうもこっちもまだ暫くは余裕がないからね。取り敢えずメールで近況を知らせて、本格的なのは落ち着いてからにするよ」

「そうか。ま、半年もしたらこっちから交代要員を送るって事になったし、テイワズの方からも人手を出すって話が付いてる。そうなりや少しは楽になるだろうよ」

「……うん、交代要員の案が『ランディさんから出てなけりゃ』安心できただけだなあ」

ビスケットはなんか遠い目になる。そう、地球支部への交代要員を定期的に送り込んで人員の更新を計るという案を、あの男は出していた。何やら考えがありそうだが、どうにも不安になる。

「悪いことをするつもりじゃないことは分かっているんだ。それどころかきつと鉄華団の利になる事だと思う。けどなあ……」

「なーんか斜め上の方向にすっ飛んだことをするのは間違いないよなあ……」

ユージンもなんか遠い目にならざるを得ない。心配はないんだけど不安という、微妙な気持ちで彼らは虚空を見上げている。

そうやって不穏な空気が流れている一方で、穏やかに一時の別れを告げている者たちもいた。

「クーデリアさんも地球に残るんだよね？」

「はい、まだ交渉は始まったばかりですから、やらなければならぬことはたくさんあるのです」

スーツ姿のクーデリアとアトラがにこやかに言葉を交わしており、その傍らにはやはりスーツ姿となったファミタンが控えている。まだ苦労は多いだろうが、それでも大きな山場を乗り越えたことでクーデリアの心は晴れやかであった。

「年少組の子供達と三日月には、『宿題』を出しておきました。次に会うときは、そのおさらいをしましょうね」

「ん。頑張つとく」

クーデリアからタブレットを受け取った三日月は素直に頷いた。彼自身にも何やら考えがあるようで、文字を読めるよう積極的に学んでいる。その様子を微笑ましくクーデリアは見守っていた。

「三日月も体に気を付けて、無理はしないで下さいね」

「無理はしないよ。出来ることをやるだけ」

そう言いながらも彼はさくりと体を張って矢面に立つのだろう。命を賭けるのはこの少年にとつて『無理ではない』のだから。それももう痛ましくは思わない。自分は彼を信じて見守つていこう。クーデリアもまたそのような決意を胸に抱く。

彼女とアトラ、そして三日月の左手首には、揃いのブレスレットがある。アトラ手製のそれは、確かな絆を感じさせてくれた。

そう言った諸々の光景を、バルバトスが乗せられた荷台の上でオルガは見回し、頷いた。そして皆に告げるため、大きく声を張り上げる。「みんな、良くやってくれた！ 鉄華団の初仕事、お前らのおかげで成し遂げることが出来た！ けどな、これで終わりじゃねえ。これからももつと仕事をこなして稼いででかくなつてくぞー！」

そう言つてオルガはにかりと笑った。

「ま、そうは言つても次の仕事まで間がある。取り敢えずは成功祝いだ！ ボーナスは期待しとけよお前ら！」

団員達は一斉に歓声を上げた。皆が騒ぐ中、三日月がオルガの元に歩み寄る。

「……やっと終わったな」

「ん、そうだね」

一つの山場を越えられた。彼らはその手応えを改めて感じていた。荷台が上がった三日月はオルガに並び立ち、眼下の光景を見据える。

「なあミカ、これからどうすればいい？」

いつも違い、オルガが三日月に尋ねた。

「そんなの決まってるでしょ？」

言って三日月は、左拳を軽く掲げる。

「……そうだな」

ふつと笑みを零して、オルガは右の拳を軽く掲げる。

「帰るぞ、火星に」

「ん」

がつ、と音を立て、拳と拳が打ち合わされた。

そして――

激動の渦の中、まだ名も知れぬものたちも動き出す。

「ふうん？ 先輩が面白そうだって言うだけはありますねえ」

真実を世界に知らしめようとする鴉。

「マクちゃんもちよつと『戻った』かね？ アンタに声かけるつてのは」

「おいちゃん悠々自適にいきたかったんだけどねえ。……ま、お声がかかったつてんなら、それなりに働くとしましようか」

猛き時代の残滓が復帰する。

「お父様もおじいさまも意地が悪いわね。こんな面白そうな人たちのことを黙ってるなんて」

新たな世代の芽が、時代の風にそよいだ。

『リボンの人がやらかした件』

『あの人はいつかやらかすと思っていました』

『うんプロテインだね予定調和だね』

『多分我々も巻き込まれる予感』

『おいばかやめろ』

問題外。

うんまあそれはそれとして。

濁流は留まらない。そして人々の運命も。

※今回のえぬじい

「肉奴隷だと思っていた養子に好き勝手されるなんて……

でも、感じちやうつ！」ビクンビクン

最悪かこのシヨタホモ。

取り敢えず、一期は幕。

おまけ・こつそりとオリキャラの紹介なんかしてみちやつたり

ランデール・マークス

鉄血原作の展開に「これはひどい」と絶望した筆者の心から生まれ
た乱入者。

元ギヤラルホルンMSパイロットの傭兵で、機体に施すエンブレムから通称【リボン付きの悪魔】と呼ばれる凄腕。士官学校ではマクギリスやガエリオ、カルタらの先輩であった。

マルバとバルバトスを買収する話を進めていたが、コーラルの指示による襲撃でCGSが壊滅的被害を受けたと聞き慌てて飛んできたところで鉄華団の面子と遭遇。少年達を気に入らなかつ利用価値があると踏んだ彼は、自らを売り込み雇われることとなった。

能力は天才的だが人格は破綻している、実はエースパイロットにありがちな人物。(ほらどこぞの閣下とか大空の侍とか)ギヤラルホルン時代からやらかしまくった挙げ句謀殺されかけ、それすらも利用して乗機をパクリ逐電。傭兵家業に身をやつしながら『嫌がらせ』に打って出る機会を虎視眈々と狙っていた。

パイロットとしての腕もさることながら、彼が恐ろしいのは『戦術的な心理戦に長けているところ』。敵を小馬鹿にしつつおちよくっているように見せながら、冷静に罠に嵌め恐怖の渦に引き込んでいく、非常にいやらしい戦術を得意とする。彼にとつては圧倒的に有利な状況と四角四面のやり方になれているギヤラルホルンは良いカモでしかない。なお真っ正面から闘っても鬼のように強い。上記の戦術をとるのは、現時点だけでなく将来的にも有利な状況を生み出すためと言うこともあるが、多分に趣味なのでは無かろうか。

こんな人格でありながら意外に世話好きの部分があり、閑職であつたかつての同僚達や鉄華団の少年達を鍛え上げ、短期間でエース級に匹敵する技量に至らせた。ただし彼が鍛え上げ技量が上がると正比例して性格が汚染されていく傾向にある。実際かつての職場であつた通称【標的艦隊】の面子は、かなりイイ空気吸つてる連中に成り下がってしまった。鉄華団の将来が非常に危ぶまれるにげてー。

現在の所ギヤラルホルンからパクったシュヴァルベ・グレイズを駆る。機体の外見などはほとんど変わらないが、セッティングが控えめに言つても狂つているとしか言いようがないほどにピーキーかつシビア。反応速度は桁違いで、かなり真つ当じゃない人間でもなかなか扱えない。逆に言えば彼のセッティングを扱える者は同等以上のエースかその素質があると言ふことになる。

ちなみに彼の出身地はオセアニア連邦のとある港町であるが、そこはロシア系の女マフィアや中華系グラサンマフィアなどが銃撃戦したり二丁拳銃の女ガンマンが銃撃戦したり娼館を兼ねた酒場が月に一度くらい銃撃戦の果てに吹っ飛ぶような悪徳の都だったりする。そんなところで公然と違法の商売とかしてるジャンク屋のせがれでしたそりやこうなるわ。

なお本来のキャラクターモデルはガンダム系ではなく、漫画【愛気】の主人公【承久 國俊】。原典よりは若干マイルドになっている。

もう一度言う。若干マイルドになつてい

る。
ワン・チャン

歳星にて武器店を営む人物。(この話の中では、歳星は交易拠点としての側面もあり、結構外部の人間が出入りしているという設定)い

かにもな外見、変な言葉遣いなど、どうみても怪しい中国人にしか見えないうおっさん。つまようじから宇宙戦艦まで、およそ武器になりそうなものはなんでも扱うところから、おそらくは独自の広大なコネクションがあるのではと推測される。

ランディ等とも顔見知りでその人脈は広く、その上マクマードをマクちゃんなどと気安く呼ぶところからテイワズでもかなり古株で重要視されている様子。ただの変なおっさんではなさそうだ。

モデルはゲーム「ガンパレードマーチ」の「裏マーケットの親父」。

地球外縁軌道統制統合艦隊の皆さん（主にコーリス・ステンジャ）

別にオリキャラではないが、なんか「だれだこれエ!？」状態になってしまっているのて記す。

過去に標的艦隊（つてかランディ）との演習でボツコにされた挙げ句勝ちを譲られ、プライドをべつきべきにへし折られたが、不屈のカルタ様に率いられ訓練や戦術の根幹から徹底的な見直しが計られ、徹底的に心身を鍛え直し強者集団と化した。

特にコーリス。実は士官学校でランディの同期であり、その時点でモブ扱いで色々やられ恨みを募らせていたのだが、好機と思っていた演習で完膚無きまでにフルボッコ。心をへし折られてしまったが、カルタの不屈の意志に感銘を受け再起。以後自分自身を厳しく鍛え上げる。その結果忠誠心が高く強敵にも敬意を払う好漢と成ってしまった。なんだ全部ランディのせいじゃないか。

ともかくその錬度は原作に比べても高い。降下強襲戦闘に置いてはアリアンロッドをも凌ぐ。もし鉄華団が原作のままランディいなくなったら、軌道上の攻防で確実に止められていた。カルタ様だけ見ても、1対1なら原作状態の三日月では勝てない。もつよこモードで

なんとなかなるかと言ったところ。逃げ延びられるのは原作通りに出し抜けたユージン以下イサリビ組だけである。そう考えるとすげえなユージン。

残念ながら後一步と言うところで鉄華団を止められなかったが、その戦力のほとんどは健在で、カルタも重傷を負ったとはいえ生きている。今後の彼らの動向が、物語の鍵を握るのかも知れない……などと適当に思わせぶりなことを言ったりして。

年明けにいきなり嘘予告

火星に戻った鉄華団。

その団長たるオルガは、新たな事業への着手を決意していた。

「このままドンパチやってるだけじゃ先はねえ……これから鉄華団は、火星の再開発事業に参入する！」

無謀と思われた方針転換。だがしかし。

「阿頼耶識搭載MWの速く正確な土木作業を見やがれ！」

「ふはははは！ 鍛え上げた筋肉は伊達じゃねえぜ！」

意外にもそれは順調に進んでいく!?

「郊外だったらMSも作業に使えるんじゃない？」

『それだ!』

「えくつとマクマード会長。鉄華団からMS用の鍬とスコップの注文が来てるんですけど……」

「どういう事なの……?」

それは多くのものを巻き込んで意外な方向に向かう？

「このよあけのちへい……」

「ワレ耕したばかりの畑になにしよるんじやクラア！」

「いてこまずぞテメ何中だア！」

「ノガミマデテクったんぞこのダボがあ！」

畑を荒らすことは死を意味する！

これが、これが！　これがっ！　NOUMINだっ!?

「海賊の討伐を依頼する前に壊滅されてた件」

「もうあいっただけでいいんじゃないかな」

繰り返すが畑を（略）

これが（略）

「軍事オブサーバーの事務だと思っていたらなぜか農作業に従事していた。何を言っ（ry）」

「ぶつぶつ言っ（ry）てないで手を動かして下さいねラディーチェさん」

なぜかアーヴラウにまで飛び火が？

「代表が式典に参加してないと思っていたら農作業をやっていた。何を言つて（ry）」

「あく、こうやって剪定とかしとると心が癒されるのお……」

NOUMINは感染する!?

「お、叔父貴。なんかあいつら畑耕してますけど……」

「え？ あれ？ 立身出世狙うんちゃうん？ てっぺんとったるとかそういうのないん？」

ケツアゴも拍子抜けだ!?

「あの、火星の王……」

「うるせえそんなことよりツルハシだ!」

マクギリスの野望もここまでか!?

「火星の独立？ そんなことより寸胴です!」

「何言つてんの？ この人本当に何言つてんの!？」

「お嬢様……ご立派になられて……」

「そこ感嘆するところなんだ!？」

ついにクーさんまで重度汚染か!?

「良いかお前ら！　これから俺達は最後の決勝に出る！」
でもやっぱりシリアスがある――

「収穫だ！　出来高が良ければ、金も女も思うがままだ！」
『おおーっ！』
はずもなかった!?

果たして鉄華団の逝く○　末は!?

【THE・鉄血DASH!!　く鉄華団は火星を再開発することが出来るか】

「と言うことでこれからランディさんには出張鉄華団として各地の農家を手伝いに……」

「待て大將これ幸いと厄介払いしようとしてねえか？」

真相はいかに……？

だから嘘予告ですってば。

22・安穩無事とはいかないねエ

夕日が紅く火星の大地を照らす。

トウモロコシの穂が揺れる大地と、遠くに望むクリユセ市を見下ろす小高い岩山の上。そこに真新しい慰霊碑が建てられていた。

「良い景色だろうか？　こんなところが火星にあるなんざ、俺達も知らなかったよ」

碑の前に跪き、銀髪の少年が語りかける。碑に刻まれているのは、これまでの戦いで命を落とした仲間の――家族達の名前。その上に、紅き鉄の華を模したエンブレムが誇らしげに記されている。

「いつか俺達が、土産話を山ほどこさえてそっちに行くまで、ここで見守っていてくれ。俺達の、火星の……世界の行く末を」

碑の前に供えられた花束が、風に優しく揺れていた。

鉄華団。2年前に起きたアーヴラウ事変にて脚光を浴びることとなった民兵組織である。

現在火星にて「アイゼン・ブルーメ商会」を設立し、ハーフメタル事業の多くを取り仕切る才女、クーデリア・藍那・バースタイン氏を地球に送り届けるという、当時の常識から考えれば無謀に過ぎる任務を彼らは見事成し遂げ、さらにはアーヴラウ代表蒔苗 東護ノ介氏に協力し、アーヴラウに政治的な介入を試みたギャラルホルン総司令イズナリオ・ファリドの野望を打ち砕いた。

その後、彼らの発展はめざましいものがある。アーヴラウで設立される防衛組織の軍事オブサーバーを務めるために地球支部を開設。

さらにアイゼン・ブルーム商会と提携を結び、ハーフメタル採掘関連事業やインフラ整備事業などへの人材派遣。近隣農場との業務提携や孤児院、学校の設立への協力。デブリのサルベージ事業など様々な分野に手を伸ばしつつあった。その規模拡大を受け、後ろ盾である複合企業テイワズは彼らを正式に傘下企業として編入。関係の強化を図る。

順風満帆と言える彼ら。だがその影響は決して良い結果だけを生むものではない。彼らの活躍により少年兵の存在価値は高まり、またヒューマンデブリ、阿頼耶識システムの利用価値もあまねく広まることとなった。それは各勢力の戦力増加と安易な闘争を招くこととなり、ギャラルホルンの権威失墜もあって各地の情勢は不安定なものとなりつつある。また、有効な戦力としてMSの存在価値も高まり、各勢力はこぞってそれを求め、水面下での開発競争も激しさを増しているようだ。

台風の目。この情勢の行く末、その鍵を握るのが彼らだと確信した私は、火星に飛んだ。

「アヤ・アナンダ・アレン」。フリージャーナリスト、ね」

今時珍しい名刺を受け取ったオルガは、眉を顰めて目の前に座る女性を見る。

つややかな黒髪を肩口までのボブカットにした、美人と言うよりは可愛らしい容貌を持つ女性。洗いざらしのシャツにカーゴベストを纏い、キュロットを履いた活動的な格好。そして挑みかかるような笑みで向ける好奇心を隠そうともしない瞳は、確かに記者と言われればそう見えるが。

「ドルトネットワークと労働者組合からの紹介と聞いているが……なんでまたわざわざ火星にまで？　ここにやさほど目新しいものもない

と思うんだが」

自分たちのことを取材させて欲しい。目の前の女はそう申し出ていた。もちろん自分たちがそれなりに注目されているという自覚がオルガにもある。だがそれは所謂『出る杭』というやつで、いまはまだ時折生じる跳ねっ返りの部類でしかない、彼はそう判断していた。立身出世を目指す餓鬼など巷に溢れているのだ。わざわざ火星くんだりまできて取材するほどの価値が自分たちにあるのかと、その目はどこまでも訝しげであった。

対する女性——アヤは、にこやかながらもどこまでも挑戦的な色を瞳に乗せて、オルガと相對する。

「GHに喧嘩を売って、そして勝った。その事実だけで十分度肝を抜く成果だと思えますよ？ それはいままで誰も出来なかった事なのでですから」

「だれもやらなかった、の間違いだろ。無事に終わったのは、結局向こうのポカが原因だったってだけさ。俺らはそれに便乗したに過ぎねえ」

「そう簡単に出し抜ける組織であれば、とうの昔に誰かがやっていたでしょう。謙遜も過ぎると嫌味に聞こえますけど」

そんなつもりはねえんだがなあと、頭を搔く少年——いや、もう青年と言っているだろう男の姿を見て、アヤは微笑ましくも感じる。

瘦躯に臙脂色のスーツを纏ったこの青年は、言ってはなんだが見た目ヤクザの下っ端かチンピラのようにしか思えない。だがこの青年は、孤児達を率いて民兵組織を乗っ取り、困難というのも生ぬるい任務をやり遂げた。確かに運と多くの手助けがあつたればのことだろう。されどそれを成し遂げようと決めたのはこの青年だ。そしてそのことが、今の世界に幾ばくかの影響を与えていることは確かである。

しかしこの青年はそれに驕るどころか、大したことはしていないと本気で思っているようだ。自己評価が低いようには見えないのだが、務めて謙虚に考えるよう心がけてでもいるのだろうか。

面白い。ドルトで報道ネットワークのデレクターをしている先輩

から「まるで鴉みたいだな」と評された好奇心がむくむくと膨れあがっているのが分かる。それに従うまま彼女は言葉を紡ぐ。

「火星に帰還してからも、様々な事業を展開し規模を拡大していると聞きました。傭兵としてだけではなく企業家としても注目されているのですよ貴方は」

「やれることを『探している』だけさ。まだまだ手探りの状態だよ。いつまでもどんぱちばかりやってちや、落ち着いて暮らせねえしな」

できれば民兵組織から脱却したい。オルガはそう考えている。元々武力で成り上がったのだから即座にそれが出来るはずもないが、ゆくゆくは戦いから離れるべきだと思っていた。様々な事業に手を出しているのは、戦わなくとも飯を食えるだけの技術と実績を積み上げたいがためであった。

しかし、それが上手くいっているとは言いがたい。

「……それにどうしても持ち込まれる仕事は傭兵としてのものが多い。それにこの2年で新たに人を雇い入れたが、来るのはほとんどが戦闘要員や整備を希望してる連中ばかりだ。他の事業にやなかなか人手が回せねえ。軌道に乗ってるたあ言えねえよ」

民兵組織としては名が上がり、順風満帆であろう。しかしオルガとしては満足のいかない展開である。

焦っても仕方のないことだとは分かっているが、腰を据えてどつしりと構えるには、彼はまだ若すぎた。

「……まあともかく、こんな状況でよけりやあ取材してくれて構わないが……」

「もちろん。ありのままを見せて頂ければ、それで十分ですので」
「つつてもヤクザな商売だ。見せられねえところも記事にして欲しくねえところもある。その辺は考慮してくれるんだろうな？」

「その辺は魚心あれば何とやらという奴で。当然記事を上げる前には、団長さんに目を通して貰います。それでよろしいでしょうか」

「そこまで言うんなら、こつちとしても嫌とは言えねえな。まあ俺はともかく、団員は格好良く書いてくれや」

「ええ、それはもう見たまま感じたままに。ではよろしくお願いしま

す」

差し出されるアヤの右手をオルガはがっちり握る。ごつりとした、力強い手。戦う漢（おとこ）の手であった。アヤはにっこりと微笑んだまま、舌なめずりせんばかりの心持ちである。

（うん、数年もすればいい男になるでしょうね。……特等席で『魅せて』貰いますよ、オルガ・イツカ）

こうして、鉄華団を見守る一羽の鴉が降り立った。

彼女が紡ぐのは立身出世の物語か、それとも。

この2年間で、鉄華団もその規模を徐々に大きくしていったのは前述の通り。そして新たに入団したもののたちの多くが戦いで身を立てようと志しているのもまた同様。

団の方針としてはもう少し別の方面に秀でた人材（特に机仕事が出る人）が望ましかったのだが、だからといって折角入団してきたものたちを放り出すような真似はできない。それに実際傭兵家業は人手不足なほど盛況で、そう言った人材が必要なのも確かであった。

ともかく新規の団員達が『使える』ようになり、欲を言えば戦う以外の仕事も覚えて貰いたい。そういう思惑の元、新人達は基礎から鍛え上げられていた。

鉄華団本部周辺の岩山。そこでは教官役のシノに率いられた新人達が、ランニングを行っている。

「よーしここでストップ！ 10分休憩すんぞー！」

汗だくだが大して息を乱していないシノが振り返って声をかける。その後を付いてきていた新人達は、這々の体でへたり込んだり肩で息をしたりしていた。

「し、しんど……」

「思ったよりきつくないこれ……？」

「あんだけ上り下りあって、なんでシノさん平気なんだよ……」

よほど辛い行程だったのか、小声で話す様子もへたれている。まだまだ鍛え方が足りんなあと、シノは苦笑を浮かべていた。

と、そこに。

「よう、調子はどうよ」

そう声をかけながら、ユージンが現れた。新人達は「ふ、副団長?」と驚き慌てふためきながら姿勢を正そうとする。そんな彼らに「ああ、いいから休んどけ」と言って、ユージンはシノに語りかける。

「ちいと根を詰めすぎじゃねえ? 鍛えるに越したことはねえけどよ」

「なに、俺が嫌われ役になるくらいで丁度良いのさ。それに……」

そこでシノが、なんか沈痛な表情になる。

「この程度でへばってるようじゃ、ランディさんの『アレ』にや耐えられねえだろうし」

「まあ、それもそうだよな……」

ユージンもなんか深刻な表情になってしまった。え、なにということ、新人達の間にも不安が生じる。

微妙にどんよりとした空気が流れる中、ごうんと重い衝撃音が響く。何事かと顔を見合わせる新人達であったが、その疑問はすぐに払拭された。

「おっと、あつちはあつちで張り切ってるな」

「本格的なお披露目前の最終調整ってヤツだかな。……おうお前から、あつち見てみる。面白いモンが見られるぞ」

シノが指し示す先。火星の荒野にて、鋼の巨体が二つ、激しく鎬を削っていた。

「軽い分マン・ロディよりふらつくなア! 立て直しは楽だけど!」

「反応はいいっすよ! その代わり足止めての打撃戦になると踏ん張り効かねっすね!」

轟音が響く中で通信を交わしているのはダンテとライド。彼らが駆っているMSはティワズが最新鋭のフレームである「イオフレーム」を用いた機体、【獅電（しでん）】である。GH以外で唯一新規に

開発されたこのフレームは、鉄華団が鹵獲したグレイズと、ガンダムフレームをベースに設計されている。その特徴は徹底的な簡略化による整備性と拡張性、そして扱いやすさである。

基本性能はグレイズに一步及ばないという程度だが、チューニングとカスタマイズによってその能力を向上させることも容易であり、各部の簡略化によって整備がしやすく同時に強度も高くなっている。そして阿頼耶識システムの搭載にも対応しており、運用次第でグレイズ以上の能力を発揮することも期待されていた。何よりもこの機体、グレイズよりも何割かは安価だ。グレイズの廉価版である「フレック・グレイズ」とほぼ同レベルで、なおかつかの機体よりも扱いやすいというのが最大の売りだった。

ティワズはこの機体をアーヴラウの鉄華団支部に宣伝させ、売り込むことにしている。現在アーヴラウはフレック・グレイズと改装型マン・ロディ——「ランドマン・ロディ」を仮の主力として採用しているが、それは現在の所間に合わせと言っている。正式に主力機として採用するには安定した、なおかつ『GHに頼らない』供給元が必要とされた。GH以外でMSの生産能力を持つティワズは、アーヴラウにとって理想の取引相手と言える。

双方の思惑が合致し、獅電には大きな期待が寄せられていた。鉄華団としても今回の仕事はかなり力を入れている。直接戦闘に関わらない内容であるという事もあり、この仕事を足がかりに商売の窓口を広げられるのではないかという考えがあった。

そう言ったオルガの思惑を、シノやユージンはよく理解している。自然とその視線にも期待が籠もっていた。

「すげえ、良く動くなあ……あれが阿頼耶識か……」

新人の誰かが呆然と声を発した。確かに作業用のMS等の動きを見慣れていれば、獅電の動きは派手に映るだろう。シノはくく、と小さく笑う。

「いやいや、あれはコマースィアルモデルってやつだからな。阿頼耶識は積んでねえ」

『えっ?』

シノの言葉に新人達は目を見張る。それに構わず彼は続けた。

「鍛えりや阿頼耶識なしでもあれくらいは出来るようになるってこつた。パイロット張りてえってんなら、お前らも精進しろよ?」

その言葉に顔を見合わせる新人達。ざわめく彼らの中、誰かがぼつりと言った。

「じゃあ、阿頼耶識を付けたらあれ以上のことができるようになるって事——」

「そいつはあまりお奨めしねえなあ」

新人の言葉を遮るようにユージンが言う。彼は獅電が打ち合う光景から目を逸らさぬまま、至極真面目な様子で続けた。

「昔に比べりやマシになったとはいえ、阿頼耶識の手術にやあ依然危険が伴う。付けないに越したことはねえよ」

「で、でも『医者のじいさん』は8割は成功するって……」

「5人に1人は失敗するってこつた。良くて半身不随、悪きや死ぬ分の悪い賭けだ。そう言うのを目の当たりにしてきた俺らからすりゃ、とてもじゃないが付けろとは言えねえ。そも付けなくても済むように作られてんのが獅電だ。端末(ピアス)なしでも阿頼耶識付きを上回ってみせるくらいの気合いを見せてみな」

ユージンの言葉に、新人の一人——灰色の髪少年がぴくりと反応したが、誰にも気付かれることはない。

「……まあウチで一番強いのも阿頼耶識なしなんだが、あれは参考にならないから例外な」

「うん絶対真似すんなよ。真似できるモンじゃないけど」

なんだか再びどよーんとした空気を纏って話を締めるユージンとシノ。

この先一体何が待ってるの。希望や野心を胸に鉄華団の門を叩いた新人達の前に、早くも暗雲が広がりつつあるかも知れなかった。

「……つたく、なんで俺が伝令とか……」

ぶつぶつ言いながら灰色の髪の新入——【ハツシユ・ミデイ】は鉄華団本部の中庭に向かっていた。トレーニングが終わった後、ユージンから裏庭にいる人物の呼び出しを頼まれたのだ。

彼は『ある目的』の元、鉄華団に入った。その目的を果たすためには早く手柄を立てて成り上がらなければという思いを持っている。故に基礎訓練と雑用ばかりの現状に、不満を抱いていた。

当然のことだが入団したばかりの新人に早々活躍の機会があるはずもない。彼もそれは分かっているはずだが、どうにも苛立ちのような感情は抑えきることが出来ないようだ。

ともかくぶつくさ言いながらも彼は目的地である中庭へと出る。そこに広がるのは畑。様々な作物が、枯れたりしなびたりなんか変な成長の仕方をしたり様々な様相を見せていた。統一性ってモンがねえなあとか思いながら、ハツシユは声を上げて呼ばれる。

「三日月班長、三日月班長はいますかー？」

その声に応えて畑の間だからひよこひよこ顔を出すのは目的の人物ではない。かつて年少組と呼ばれた、ハツシユよりも先任の団員達だ。

「んー？　なんだよ新入り、三日月さんに用か？」

「あ……はい、副団長が呼んでこいって」

年下相手に敬語を使わなければならないということに、妙な感覚を覚えながらハツシユは応えた。団員達は顔を見合わせて言葉を交わす。

「あ、そういやバルバトスの改修がそろそろ終わるって言ってたな。それじゃね？」

「今回長かったもんなー。フレームにも手を加えてるんだっけ？」

「いよいよ三日月さんの本領発揮ってどこか」

「あ、あのお、それで、三日月班長は？」

話に割って入っておずおずと尋ねるハツシユに対し、団員達は揃って――

『そこで寝てる』

と一カ所を指さした。『ハツシユの傍らを』。

「うをつ!？」

中庭に通じる通用口。ハツシユが立つその横の地面。そこに無造作に寝つ転がっているもの。鉄華団のジャケットを羽織った小柄な少年——三日月・オーガスその人であった。

まさかそんなところにいるとは思わなかったハツシユは心底ビビる。と、騒ぎに気付いたのか、三日月はぱちりと目を開いてむくりと起きあがった。

「……ん、なに?？」

「ああ起きたつすか三日月さん。その新人が呼びに来たんすよ」

「あ、ええつと、副団長が呼んでますんで……」

「ん、分かった。ロビーだろ?？」

「は、はい」

立ち上がってぱたぱたと体に付いた汚れを払い、欠伸をしながら三日月は中庭を後にする。その背中を見ながら、ハツシユは眉を顰めた。

(本当にこんなのが、鉄華団で一目も二目も置かれてる人間なのか……?)

鉄華団遊撃隊長兼農業班班長。そんな肩書きを持つ彼だが、ハツシユは入団してからこつち、畑をいじっているか寝てるかしてる姿しか見たことがない。それだけ見ていれば遊撃隊長とかいう肩書きは名ばかりなのかと勘ぐりたくもなるが、話を聞くとところによれば地球へ向かったおりに、鬼神のごとき戦いぶりを見せたという。

どうにもぼんやりとしているこの男がそれほどのことを成し遂げられたのか。ハツシユには納得いかない様子である。それを見越したのか団員の一人が彼に言葉をかけた。

「疑わしいって顔だな?？」

「あ、いえ、それは……」

「ま、しょうがねーわ。新人はまだ三日月さんの本気見たことないもんな」

「本気……ですか？」

「おう、あの人はすごいぞ？　ま、戦闘班でやってくってんなら、そのうち見られるさ」

「はあ……」

どうにもぴんとこない。そう言いたげなハツシユの様子に、団員達は苦笑を浮かべ肩をすくめた。その内嫌でも見せつけられることになるさと。

その機会は、存外に早く訪れることになった

「そんなわけで、こっちはまあ順調だ。相変わらず戦闘班と整備班しか人こねえがな」

「机仕事の人手が足りないのはどこでも一緒だね。うちでもラディ―チエさんがひいひい言ってるよ」

「すまねえ。事務を何人か回せば良かったんだが」

「贅沢言っても仕方がないよ。団員で任せられる人間だって限られている。幸いこっちは慌てて規模を大きくする必要はないんだ。焦らずやるよ」

鉄華団の事務室で、オルガは定期通信を行うため回線を開いていた。相手は地球支部のビスケットと、そして。

「それで、ランディ『教官』の方は？」

「おう、航海訓練共に良好。明日にはデブリベルトでサルベージの講習兼作業に入る。順調にいきやあ来週には歳星に着けるな」

もう一方の回線には、火星と地球を往復しながら団員達に訓練を施したり各種技能を教え込んだりしているランディからのものだ。正式に鉄華団と契約を結んだ彼は、主にそうやって教官として働いて貰っている。かなりハードな教練を課しているが、年少組などが「ししょー」と呼んで慕っているところから、それなりに人望は厚いと思

われる。

「そうか。教官が帰ってきたら、いよいよ獅電を地球に送ることになる。そんな時に追加の人員も何人か回せるはずだ。ランディ教官はほとんど折り返して事になっちまうが」

「構わんよ。どのみち獅電の宇宙用データも蓄積せにやららんし、新人もまだ暫くはこっちで面倒見られるレベルにやらんだろう。その代わりデータ取りのために隊長格を一人預かりたいんだが」

「あ、だったらシノあたりをお願いできるかな。こっちの方でデモンストレーションやらせたいんだ」

「ああ、あいつなら愛想もいいし、隊長格の中じゃあ一番バランスが良いか。分かった、そう言う方向で話を纏めておく。何事もなげりやあ、来月中には地球に届けられるはずだ」

「了解。『半年くらいは』覚悟しておくよ」

「はは、こう言うときになんか起こるのはお約束だしな」

冗談めかして言葉を交わすが、実際現状ではシャレになっていない。各所で治安は悪化し、宇宙海賊や犯罪組織などの活動も活発になってきている。そして名を上げるため鉄華団に挑もうとしてくる連中も後を絶たない。いつどんな妨害が入ってもおかしくない状況であった。

今のところは全ての障害をはね除け順調にいつているが、この先もそうであるとは限らない。常に何かが起こる、それを前提にしろとランディの教練を受けた鉄華団の幹部は揃って肝に銘じている。

そしてそれは、当然のことのように的中した。

「ですから今こそ！ 貴女には起って頂きたいのです！ 火星の独立、その火を絶やさぬためにも！」

ソファーから身を乗り出し熱弁する眼鏡の男に対し、クーデリアは

にこやかに笑いながら内心辟易していた。

この男、火星独立運動組織の一つ【テラ・リベリオス】の代表を務める【アリウム・ギョウジャン】という人物だ。かつて独立運動の大大小小的な会合、ノキアスの七月会議以前からクーデリアとも顔見知りである。

2年前のハーフメタル関連の利権獲得に伴い、独立運動の多くが沈静化したり方針を転換したりしている。声を上げ気運を高めるより、この機に乗じて資金や人材を蓄え力を付け独立のために備える。そう言った方向に皆シフトしていったのだ。だがテラ・リベリオスを含む少数の独立勢力は、依然『独立運動を行うこと』に拘り、組織の低迷を招いていた。

運動によって独立を促すのではなく、運動そのものが目的として入れ替わってしまったという事態。そもそもこういった社会運動自体は生産性のないものである。ただ闇雲に続ければ資金難になるのは目に見えていた。それでも運動を『やめられない』彼らはなんと少しでも起死回生を計らねばならない。

ゆえに交渉成功の立役者であり運動の中心人物でもあったクーデリアに助力を願ったのだが。

「残念なこと、今の私は運動家としては動けません。商会の仕事も軌道に乗りこそしましたがまだまだ予断を許さない状況ですし、今ここで下手を打てば向上し始めている火星の経済にも打撃を与えるでしょう。まずは市民の生活を安定させること。改めて運動を行うのはそれからになると思います」

「しかしそれではモチベーションを維持することが……」

「私を含めネットなどを通じ草の根運動を続けているものは多くおります。7月会議のように大仰なイベントはなくとも、火星独立の気運はまだまだ下火になっていないかと」

暖簾に腕押しである。事実クーデリアは派手に独立運動で働きかけるよりも、今のように経済を回していく立場になってからの方が手応えを感じている。形が変わったにせよ独立の気運は絶えていないのだ。むしろ静かに燃え盛っていると言って良いだろう。いずれま

た動き出さなければならぬだろうが、今はその時ではない。

暫くアリウムは食い下がるが、クーデリアは頑として首を縦に振らない。やがて。

「……ではどうあっても、ご協力は頂けないと言うことですか」

「ええ、申し訳ありませんが」

これまでと違い押し殺したかのようなアリウムの声。その目の奥に見える危険な色に気付かなかったふりをして、クーデリアは毛ほども態度を変えずに応えた。

「分かりました、今日の所はこれまでとしましょう。……『気が変わったら』いつでも声をかけて下さい。お持ちしております」

そう言い残してアリウムは席を辞した。緊張が解かれ、クーデリアはやれやれと息を吐く。

「お疲れ様でした社長。……向こうさんはやはり資金繰りが苦しいようですね」

応接室のドアを開けてクーデリアを労うのは恰幅の良い中年女性——「ククビータ・ウーグ」。商会の事務を務める人物である。彼女に次いで、クーデリアの傍らに黙って控えていた女性が口を開いた。

「お嬢様、彼は裏社会の人間とも繋がりが多いようです。あの様子からすると何やらイリーガルな動きに出る可能性もあるのでは」

現在はクーデリアの個人秘書を務めるフミタンである。彼女はノブリスと裏の繋がりを維持したまま、それを利用して影に日向にクーデリアの助けとなっていた。

フミタンの言うとおり、アリウムは何かを企んでいる節がある。追いつめられた今、大胆な手段に訴えることは容易に予想できた。さほど考えるまでもなく、クーデリアは決断する。

「鉄華団に連絡を。対策を取ります」

「……それでこつちの方まで出向いて罨を張る、と。……あんたもなかなか凶太くなってきたな、お嬢」

数日後、ハーフメタル採掘場についての会合という名目で、クーデリアは鉄華団本部を訪れていた。勿論その情報をわざとフミタン経由で流出させた上で。

勿論事前にオルガには話を通してある。クーデリアとほぼ一蓮托生である鉄華団の団長は、苦笑しながらも彼女を受け入れた。

「現在火星で一番安全なのはここでしょう。成し遂げた実績、そしてテイワズという後ろ盾。これで手を出そうとするのはよほど無謀な相手と言わざるを得ません」

「火星の中に関して言えば、だが」

実際仕事の最中にちよつかいをかけてきたものはあれど、直接この本部に力チ込みをかけてきたものは未だ皆無である。火星内であればそんな馬鹿をやらかすものはいないだろうが。

「アリウム・ギョウジャンの伝手は火星の外にも伸びているようです。それに頼る可能性は大きいでしょう。テイワズの威光を知るものであれば手出しは控えると思いますが……」

「万が一は十分にあり得るな」

フミタンの言葉にオルガは頷く。どこにでも例外というものは存在するものだ。よしんばこの本部にちよつかいをかけなくとも、クーデリアが戻れば何かしらの手出しを行う可能性もある。暫くは彼女の周りに護衛の人間を派遣することで話は付いていた。

「ま、今期の新人を迎えたばかりでばたばたしてるが、大船に乗った気で任せてくれればいい。うちとしても新人に経験を積ませる機会だと考えることにするさ」

「ありがとうございます。……ところで三日月はいつこちらに戻るのでしょうか」

頭を下げてから即座に周囲を見回しつつ尋ねるクーデリア。オルガは肩をすくめながら応えた。

「バルバトスを受け取ったらすぐにでも戻って来るさ。遅くとも3日かかるってこたあないだろう」

そうですかと微笑むクーデリア。三日月への好意を隠そうともしない素直な態度である。

一方フミタンは、さりげなく視線を周囲に巡らし警戒しているようだ。

「ん？　どうかしたかいフミタンさん」

「いえ……『不埒な人物』がいないかどうか、気にする習慣のようなものですよ」

その言葉に、オルガはちよつとからかうような調子で言った。

「ランディさんなら、あと3ヶ月は帰ってこねえぜ？」

その途端、どぎゆんと凄いい勢いでフミタンはオルガに迫った。

「オルガ団長、私はあのフリーダム腐れ外道もとい傍若無人一人人外魔境な男のことなど一切合切毛ほども気にしていません。良いですね？」

「OK分かったちよつと落ち着け」

真顔で凄むフミタンの様子に、さしもののオルガもたじろぐ。その様子を見てクーデリアはくすりと笑った。

相性が悪いのかなんなのか、フミタンは顔を合わせるごとにランディと絡む。生真面目な彼女はランディからすればからかいがあるのだろうが、さしものの彼も敵だと認識してないからか全力でおちよくるような真似はしない。しかしながらやりこめられる形になるのが常である。

彼女は気付いているのだろうか、『そのやりとりが周囲の猜疑心を薄めている』ことに。そして『ランディが関わる』ときにだけ、目に見えて感情を露わにしている』ことに。

そんなオルガたちの様子を、離れた位置でアヤは窺っていた。

「あれがクーデリア・藍那・バーンスタイン。……彼女も時代の中心人物でしょうね」

革命の乙女。そう呼ばれた少女は今の火星をもり立てる原動力と言って良い。さほど遠くない未来、本当に火星独立に手が届くのは。多くのものにそんな希望を抱かせ、そしてそれを叶えんがため邁進している。

そんな彼女と鉄華団の繋がり深く、強いもののようにだ。ただの業務提携だけではない絆のようなものが感じられた。

その立場から、双方色々な意味で狙われている。だがただの小娘、子供と侮っているのは、痛い目に遭うのだろう。早速何やら面倒ごとだが、果たしてどう乗り切るのか。アヤは子供のようにわくわくしながら事の推移を見守っていた。

鉄華団の警戒網に反応があつたのは、早速その日の午後であつた。「エイハブウエーブが12！ 中隊規模のMS集団がこつちに真つ直ぐ向かってくるようです！」

地球帰還後に改装された鉄華団の本部。その地下に設けられたCIC（戦闘指揮所）で、オペレーターの団員が声を張り上げる。駆けつけたオルガは、鉄華団のエンブレムが入ったジャンパーに袖を通しつつ指示を飛ばす。

「総員戦闘態勢に移れ。非戦闘員は地下へ、新人でまだ訓練に入っていない連中もだ。整備班はMSの出撃準備を。MSが出るまでMW隊で足止めだ。『ネズミ花火』を前に出して攪乱しろ。新人連中は前に出すんじゃないぞ、後方からの援護を徹底させるんだ」

予想以上に規模が大きい。しかしオルガを始めとしてCICに詰めている人間は誰一人として動揺の欠片も見せなかつた。

「流石になれてますねえ」

感心したように、オルガの後を付いてきたアヤが言う。一通り指示を飛ばしたオルガは腕を組んで応える。

「ドンパチばつかが上手くなっちゃってな。……こういうのはどうにも尻が落ちつかねえんだが、ウチの教官、「頭が前線に出てどうすんだ」って、こんな所作らせやがった。まああんたも落ち着いて取材できるだろうし、じっくり見ていってくれ」

言葉の端から自信がうかがえる。これまで幾多の鉄火場を乗り越えてきた、歴戦の風格がすでにあつた。

「こちらユージンだ。今配置についた」

地表からの通信が入る。連絡を入れてきたユージンは、MWの上部ハッチから身を乗り出して現場の指揮を執っている。

「目標を望遠で確認、画像をそっちに回す。ああ、こっちは任せろ。……ようしお前ら、これより鉄華団は迎撃に移る！ 日頃の成果を存分に見せてやれ！」

檄を飛ばす中、ときばきと動く団員達にどやされたり宥められたりしながら、新人達も何とか配置につく。

「いいかお前ら、指示をしっかりと聞いてそれに従え。絶対に前に出るなよ」

まだ声変わりもしていないような団員に言い含められ、ハツシユは眉を顰めた。

(なんなんだこの人ら。まるで動じていねえ)

普段のどちらかと言えばのんびりした雰囲気とはうってかわって、歴戦の強者がごとき空気。突然の敵襲(事情を知らされていない彼らにはそう感じられていた)にもかかわらず、緊張感を漂わせながらもまるで日常の延長であるかのように淀みなく動いている。これが、鉄華団の本当の姿なのか。戦慄にも似た感覚をハツシユは体験している。

「なにやってんだ、急げよ」

「あ、ああ」

副座型であるMWのコクピットから急かすのは、同じ新人である【ザック・ロウ】だった。お調子者の彼もさすがにこの状態で軽口を叩く気はないらしく、真剣な表情である。ハツシユも気を取り直してガンナーシートにつくが。

「? あれ、あのMW……」

モニターを見れば、配置につく自分たちを尻目に、多数のMWが土埃を上げて荒野へと走り出す。見れば旧型のものばかりだ。迂闊に出れば的になってくれと言っているようなものなのに。

「ええつと……【エンビ】、さん？ あのMWいいんすか、あんなに前に出て」

通信を開いて自分たちに指示を飛ばしていた団員——エンビに問う。聞かれたエンビは自分のMWを遮蔽物の後ろに移動させ、トレードマークであるニット帽を弄りながら応えた。

「あれはあれでいいんだよ。まあ見てなつて、『派手な花火が上がる』からよ」

「……？」

どういう事だと首を捻るハツシユ。ともかく鉄華団側の準備は整った。無数のドローンが空を舞う中、ついに肉眼で敵集団の姿が確認できるまで迫る。骨太のがっしりとしたMS【ガラム・ロデイ】で構成された部隊の指揮官は、彼方に捉えた旧世紀の基地を見やり口元を歪めた。

「鉄華団、どれほどのものか見せて貰おう」

ここ最近急成長してきた民兵組織。GH火星支部や自治区にも協力し、海賊の討伐にも積極的なかの組織は最近目障りにもなつてきたところだ。依頼のついでに片づけることが出来れば名も売れるし一石二鳥という奴だろう。皮算用を腹に、彼ら——宇宙海賊【夜明けの地平線団】の精鋭は、蹂躪せしめんと進撃を開始しようとしていた。

「ふん、MWごときを前に出すか。やはりガキの浅知恵よな」

岩陰や窪地を渡りながらこちらに向かつてくるMWの群れを確認。牽制か足止めのつもりだろうが、MWの火器ではMSに損傷を負わせることは出来ない。ヒューマンデブリの使い捨てにしたところで時間稼ぎにもなりはしないと鼻で笑う指揮官。

「遠慮無く踏みつぶせー」

弾が勿体ないとばかりに、構うことなく直進。足下に寄りつこうとするMWを文字通り蹴散らし——

爆発の衝撃が、機体を揺るがした。

「な、なんだっ!？」

予想外のこと動揺する指揮官。いきなりのことに不意をつかれ、転倒するものすら出る。蹴散らそうとしたMWが『自爆した』。それ

を理解した彼は思わず声を上げる。

「正気か!? 鉄華団はヒューマンデブリの保護と解放を売りにしてはたはずだろうが!」

自爆特攻。それを行わせているのだと戦慄を覚える。

しかし当然ながらタネはありありで。

「ちよ、な、あ、あんな!?」

「な、あれ、じ、自爆って!?!」

慌てふためくハツシユとザツク。信じがたい外道を易々と行つた……ように見えたからだ。そんな彼らに向かつて、エンビはくすりと笑つてからこう言った。

「落ちて落ち着け、あれにや『人は乗ってねえよ』」

『……は?』

「あのMWは簡単な自動操縦機能とLCSの無線で動いてる。コクピットにやあプラスチック爆弾が山積みさ。油断して近づいたらどかんって代物だよ」

所謂自走地雷のようなものである。2年前のエドモンソン攻防戦にて使われた技術を元に開発された、通称ネズミ花火。このような地上戦に置いて、MWを舐めきっているMS乗りに対し有効なトラップとして用いられていた。事実襲撃してきた敵は混乱に陥っているようだ。

「おっしや、足が止まったぞ。各部隊砲撃開始! 奴らを釘付けにしてやれ!」

ユージンの指示が飛び、居並ぶMWが一斉に砲撃を開始する。威嚇を目的としているのか、その砲弾はMSの足下に集中し直撃弾はない

「ぐうおわっ!?!」

直撃はしていないのだが、地面が派手に爆発しMS部隊を翻弄する。明らかにMWの砲撃では生じない規模の爆発であった。

『地雷』か! やつらこのあたりに埋め込んだ地雷に向かつて砲撃してきやがる!」

対MS用に埋設された簡易地雷———というか爆薬の固まり。MW

の砲撃によって起爆させたのだ。地上戦になれていない夜明けの地平線団にとつて、悪夢のような光景であつただらう。

そしてそれは、致命的なまでの足止めになる。

「待たせたなユージン！ 【流星隊】、只今参上っ！」

スラスターを吹かして本部から飛び出していくピンクの獅電。シノの駆る【三代目流星号】である。各部にスラスターブロックを増設して機動力を上げたその機体は、頭部のバイザーを開いてセンサーを瞬かせた。そしてそれに数機の獅電が続いていく。

「勝手に変な部隊名つけないで下さいよ！」

「こっちはちいと重いんだ、置いていかなくてくれよ」

両腕にガントレットアーマーを備えたライドの機体と、頭部と背中に電子戦闘用のモジュールを追加したダンテの機体。さらに。

「こーら前に出すぎ！」

「調子に乗ってドジるんじゃないよ！」

獅電のデータ取りを名目に鉄華団へと出向してきているラフタとアジーが、阿頼耶識を備えていないノーマルの獅電で続く。

足止めを受けていたガラム・ロデイの群れに、獅電が襲いかかる。倍以上の戦力差に対して無謀とも思われる行為であつたが。

「は、トロクせえ！」

機動力を活かし、一撃離脱で敵を翻弄する流星号。

「装甲の厚さに頼りすぎなんだよ！」

射撃をかいくぐり、隙を見せた相手を殴り倒すライド。

「抜け出た奴のセンサーを一時的に潰す。止まったところをたのんます！」

「おっけー、任せなさい！」

「は、こりゃ鴨撃ちだ」

電子兵装を駆使して妨害を行うダンテと、その妨害のおかげで足が止まった機体に攻撃を喰らわせるラフタとアジー。

格が違う。数の差をものともしない戦いぶりに、新人達は啞然と見守るしかない。

そしてCICでは、オルガが次の指示を飛ばそうとしていた。

「後続を急がせろ。この機に押し込んで……」

「団長、おやつさんから通信です！」

割って入ったオペレーター言葉に、オルガはにっと笑みを浮かべた。

「来たか、早かったな」

「相変わらずこう言うところは逃しませんね」

傍らのクーデリアもくすつと笑う。

「まーた無茶すんな」

「このくらいならそうでもないよ」

降下中のシャトルから、一つの影が飛び出す。

連絡を受けたシノは、不敵に笑んだ。

「もたもたしてっから来ちまったぜえ、うちの『番犬サマ』がよオ！」
「なんだ!？」

上空より、襲撃者達に向かって銃弾が撃ち込まれる。次の瞬間、轟音を立てて隕石のように何かが大地に降り立った。

衝撃で吹き飛ばされる数機のガラム・ロデイ。噴煙の中、クレーターを穿ったそれがゆっくりと身を起こす。

各部に増設されたスラスト。全て新規になった鋭角的な装甲。細長い鉄塊のような得物をだらりと提げたその白きMS——【ガンダムバルバトス・ヴァイント】は、カメラアイを力強く光らせる。

鉄華団には【リボン付きの悪魔】ランディール・マーカスを筆頭に

幾人かの名付きエースパイロットが所属していた。

【阿修羅】 昭弘・アルトランド。【流星】 ノルバ・シノ。そして一番名が売れたのが彼だ。

【悪魔の直弟子】、【鉄華団の鬼神】、【白き破壊者】。数々の二つ名で呼ばれる中恐らくもつとも広まっていたのは、常に前線に立って仲間
に害をなそうとする敵の一切合切を噛み砕くような戦いぶりから付
けられたものだろう。

【地獄の番犬（ガルム）】 三日月・オーガス。

私はその戦いぶりを目の当たりにすることとなる。

「おかえり、ミカ」

「ただいま、オルガ」

※今回のえぬじい

「あれ？ 俺台詞だけ？」 ↑ 出番がすっぱり削られた外道。

「……名前だけしか出てねえ……」 ↑ がっかりしてる筋肉。

『纏めて出番が次に回された我々よりマシだろう』 ↑ セツタ。

よし続いた。

23・売られた喧嘩は買っただけ

デブリベルト。かつての厄祭戦が激戦の名残。戦いによって生じた多くのデブリが、未だに『生きている』エイハブリアクターに引き寄せられ、複雑な重力干渉帯の中密集して漂っている空域である。

危険極まりないそんな空域の中、そろそろと慎重に進む影があった。大型のシールドと追加のブースターユニットを備えた作業船と、カニやクモのように見える作業アームを取り付けた宇宙用MW数機である。その先頭を進む1機のMWから、通信が飛ぶ。

「よーしここにござらいた。厄祭戦後に『眠っちゃまった』リアクターの周囲には独特の癖がある。一旦集まったデブリが周りからの干渉で引っ張られて、広がっていくわけだな。見分けにくいけど、慣れたら何となく分かるようになる」

言いながら、ゆらゆらアームを動かし質量移動（アンバック）で方向を変える。

「あとは移動のコツだな。接近したらスラスター吹かすよりアームで掴むなりワイヤー打ち込むなりで移動した方が安全だ。こんな風にな」

言うが早いか、器用にアームを使って近場のデブリにしがみつき、そこからワイヤーアンカーを使ってひよいひよいとデブリの間を渡りいく。

「なあ、なんであのおっさん阿頼耶識も付けてないのにこんな重力おかしところひよいひよい動けんの？」

「んな事俺が聞きてえよ」

ひそひそと交わされる少年達の言葉を余所に、正しくクモか昆虫のごとくデブリの間を這い回るようにMWは奥へ奥へと進む。

「さてこのあたりだが……しかしMSにしちやちよつと規模がでかい

か？ 規格外の艦船あたりかね……つと」

MWのアームが密集しているデブリの隙間に差し込まれ、一つ一つを剥がすように退かしていく。中にはMWを遙かに上回る大きさと質量を持つものもあったが、サブアームを上手いことアウトリガーのように使って排除していた。やがてデブリの狭間に十分な『道』ができる。

「ほんじゃお宝とご対面〜つと」

デブリの狭間をすり抜け、密集していたその中央部——休眠しているリアクターを備えた『何か』の元にたどり着く。

そこに待っていたのは——

「ヒュウ、こいつは予想外の……しかも『都合の良い』お宝じゃねえか」
口笛が響く中、MWのライトに照らされたのは何かの残骸。一見MSのように見えるが明らかにフレームの形状が違い、その大きさもMSを越える。

制御中枢が完全に破壊されたそれは、ただ静かに眠っていた。

夕日に照らされた荒野に死屍累々と倒れ伏すMS。鉄華団の団員達はその回収作業に追われていた。

「オーライオーライ、ようし、そこで止まってくれ」

「そつちのでかいのは獅電に任せろ。MWはこつちに回つてくれ！」

MSやMWが破壊された機体や残骸を集め、運んでいく。今回の襲撃では物資以外の損害は無し。人的には、混乱の最中新人の幾人かが転けたりぶつかつたりして怪我をした程度で死者は全く出ていない。この2年で鉄華団の錬度が飛躍的に向上したと言うこともあるが——

「おいハッシュュ、ぼやつとすんな」

「お、おう」

作業の最中、あらぬ方向に視線を向けていたハツシユに向かつて、残骸にワイヤーを結びつけていたザックが咎めるように声をかけた。慌てて作業に戻るハツシユ。それを尻目にザックはぶつぶつ文句を言い続ける。

「まったく、こんなんばつかでいつになったら出世できるんだか、なあ？」

「む……」

ザックと共に作業をしている大男——同じ新人である「デイン・ウハイ」は困ったように唸った。彼らと共に作業を続けながら、ハツシユはこつそりと視線を先程の方向に向ける。

『胴体フレームが綺麗に断られたガラム・ロデイの上半身』。それを見ながら彼はつい数時間前の戦いを思い起こしていた。

土煙の中で身を起こした白い機体。その姿を確認した指揮官は、ギリ、と歯噛む。

「こいつが地獄の番犬か。舐めた真似を……」

言葉の最中に僚機が得物を振りかぶって横合いからバルバトスに襲いかかった。

次の瞬間、指揮官の視界から土煙を残して『バルバトスが消え失せる』。

ほぼ同時に轟音が鳴り響いて、襲いかかっていた僚機が『真横に』吹き飛んだ。

「……は？」

呆然としていたのは一瞬。だがその間にも僚機はほぼ地面と水平に飛んだ挙げ句、彼方で転がりジャンクと化す。『瞬時に駆け抜けたバルバトスに、横殴りで吹っ飛ばされた』。それを理解する間もなく、次の犠牲者が生じる。

真つ向からの唐竹割り。それはガラム・ロディの頭部を粉碎しただけだけでなく、そのまま地面に叩き伏せて陥没させる。それをなした白き機体の姿は、すでに次の獲物へと向かっていた。

速い。動きが、速度が、判断が。襲撃者たちが何かをしようとする先、何よりも速く一撃を食らわせる。神速の権化がそこにあつた。

その機動力を生じさせているのは、瞬発力を重視した足回りと大出力のスラスター。踏み出しと合わせてスラスターを吹かし、瞬時に音速に至る速度を叩き出す。さらに最適化された阿頼耶識はほぼタイムラグなしに乗り手の意志を反映させていた。

なによりも、乗り手の技量がおかしいくらい研ぎ澄まされている。土煙の中、襲撃者達の位置を的確に把握し、的確に打撃を叩き込んでいく。モニターとエイハブセンサーからの情報だけに頼らない。音、大気の流れ、大地からの振動。諸々の情報を捉え、正確に敵の位置を割り出す感覚と、相手の機先を制する勘働きと判断力。鍛え上げられたそれは襲撃者達の技量を軽く上回る。

結果生じるは疾風。捉えられず追いつけない暴虐の風（ヴァイント）が、夜明けの地平線団が精鋭たちを蹂躪していった。

ただの一撃でMSを木の葉のように吹き飛ばしていく得物は、一見どでかい大剣のようにも見える鉄塊。「シースメイス」と名付けられたそれは、ほぼ我流でありながら鋭く速い剣技によって振るわれる。防御や回避どころか認識すらも追いつかない太刀筋にて、1機1機が確実に潰されていく。

「な、なんだ、なんなんだこいつはア!?!」

マシンガンが無駄撃ちしながら指揮官は悲鳴のような声を上げる。聞いていない、こんなのは聞いていない。相手はまだ二十歳にも満たないガキどもだったはずだ。神出鬼没の宇宙海賊、地球圏にすら影響を及ぼす自分たちと比べて何するものぞと高を括っていた。

だが現実はどうだ。ろくに反撃も出来ず一方的に磨り潰されていく。まさか本当に怪物だったとでも言うのか。わざわざ『リボン付きの悪魔がいないことを確認して』襲撃を行ったというのに。

勘違い——と言うよりはランディの悪名が大きすぎたのだろう。

実の所鉄華団を危険視している犯罪組織の多くが、三日月たち鉄華団のエースはランディの戦績に乗っかる形で下駄を履かされている、と思いついでいる節があった。その上でテイワズという後ろ盾の威光を笠に着ている虎の威を借りる狐、実情は張り子の虎に過ぎないと。GH時代の実績を知るものは少なく、彼が育成者として一流というか頭おかしいキチ（ピー）だと理解しているものなど、ほとんどいないが故の『喜劇』であった。

ともかく真正面では敵わない。その上逃げることも後方を攪乱することもできない。

「こっちは通行止めだぜ！」

散発的に地雷を爆破させる砲撃、そしてシノやライドの駆る獅電がこの場を離れようとする機体を釘付けにする。

封じ込まれた。今になってやっとその事実気付く。ここは『狩り場』だ。あの怪物に喰わせる餌として自分たちはあると。

「ふざけるな……ふざけるなよ！ 我等夜明けの地平線団が、こんなガキどもの贄などと！」

なけなしのプライドが、恐怖を怒りに塗り替える。奴さえ、あの白い怪物さえ倒せばまだ活路は開ける。そんなありもしない勝機に縋らなければならぬほど追いつめられていると自覚はない。

「奴の動きを……」

止めると言葉が続けるより先に――

土煙をぶち抜いて、真っ向からバルバトスが飛び出してきた。

反応できたのは予想していたからではなく、ただ単に自棄になっていたからなのだろう。

「うおおああああああ!!」

自暴自棄の突撃。だがそれでも、僅かながらに間合いを詰めた。

振り下ろされたシースメイスは強かに指揮官機の肩口に叩き込まれる。機体は大きくひしゃげ、衝撃に耐えられなかった脚部は火花を散らしながら跪く。

だが間合いを詰めたことにより僅かながらも衝撃が和らげられ、撃破には至っていない。

「止めたああああ!!」

コクピットまで至ったダメージにより眉間から血を流しながらも、指揮官は悲鳴を上げる機体を無理矢理操り、シースメイスに縫り付くように腕を回す。

「今だ！…こいつをぶちのめせエー！」

バルバトスの背後から、運良く残っていた2機のガラム・ロデイが襲いかかった。指揮官は勝利を確信する。

そこから先の光景は、まるでスローモーションで流れる悪夢のようであった。

がきん、という『何かのロックが外れる音』。そしてメイスの柄が本体より離れる――

いや、『何か引き抜かれていく』。

じやりり、と金属同士の摩擦音が響く。現れるのは鈍く光る鋼の刃。そう、シースメイスとは正しく『鞘（シース）』。その中に収められているのは、以前マクマードより譲り渡された太刀を改めて打ち直した大太刀。【月牙】と銘打たれたそれを、バルバトスは振り返りざま目にも止まらぬ速度で振るう。

横一闪。振り抜かれた大太刀は、2機のMSが胴体フレームを一撃で叩き斬った。

「あ……な……」

信じがたい光景である。ほとんどのMSは腹部のフレームがむき出しになっているが、それは弱点とはならない。MSのフレームとはリアクターに次いで頑丈に作られているものだ。そう簡単に破壊できるものではなかった。

それを一撃で断ち斬る。どれほど異常なことか、想像に難くない。あまりのことに思考が停止した指揮官の眼前で、ずがんと音を立てて踏み出した足下の地面が陥没する。バルバトスが振り抜いた勢いを殺さずに、再び振り返ろうとしているのだ。それがどういう意味か理解したときには何もかもが遅い。

旋風がごとく横薙ぎの太刀を振るうバルバトス。その眼光に射すくめられ、指揮官は呻くような声を上げた。

「地獄の、番犬……っ！」

最後の1機。その上半身が回転しながら宙を舞う。

轟音を立てて地面に転がるガラム・ロデイの上半身。その横に、シースメイスの本体(鞘)が突き立つ。それに大太刀を収めながら、バルバトス——三日月は周囲を油断なく見回していた。

「残敵はなし、と。……『試し切り』にしては、ちよつと派手だったかな?」

これなら阿頼耶識を切つてマニュアル操作でも良かったかもしれない。そう考えているとシノから通信が入った。

「ようお疲れ。もちつと俺達に残しといてくれても良かったんだぜ?」

「それほどの相手じゃなかったしね。……で、こいつら何?」

「知らないで叩きのめしたのかよ。まあお前らしいっちゃらしいけど」

まるで買い物後の井戸端会議じみた会話。通信機越しに聞こえるそれに苦笑しながら、オルガはマイクのスイッチを入れる。

「状況終了! みんな、良くやってくれた。……臨時ボーナスは期待しとけよ!」

わっ、と歓声が上がる。そんな中、未だ啞然としているハツシユ。彼の目には、白き風が荒々しく舞う様が焼き付いていた。

「………ていた、つと。……うんうん、良い記事になりそうですね」

タブレットの表示画面を見つつ、アヤは満足げに頷いた。

書き上げた文章をセーブする。もちろん手元とクラウドに複数だ。ご丁寧にクラウドのものはアヤ本人が死んだ場合、集めに集めたヤバめの情報(おもにGH関係)と共にあちこちに拡散するよう細工が施してある。アリアドネを利用したネットワークは超光速の通信を可

能とするため、例え管理者のGHといえど拡散した場合対処は間に合わない。このような細工を構築しているアヤも、相当に強かな人間であった。

腕を組んで椅子の背もたれに体重を預け、彼女は鼻を鳴らす。

「ふむ、かの番犬どのは医務室で、団長さんは来客の対応ですか。……はてさて、次はどう動きますかね？」

「ねえ、まだ？」

枕に顎を乗せベッドでうつぶせになった三日月は、不満げな声を上げる。その体のあちこちには電極のようなものがぺたぺたと貼り付けられ、背中の突起端末（ピアス）には何らかのコネクタが接続されていた。

そんな彼に向かって、ベッドの脇で何らかの機器を操作していた人物が応える。

「ちよつとくらいは辛抱せい。おんしは特に念入りに調べにやいかんのじゃ小僧」

長めの白髪をオールバックにした白髭の老人。自称「ドクター・キシワダ」と名乗るこの老人は、専属医師として鉄華団に迎え入れられた人物である。

専門の医療関係者がいないと言うことに危機感を持ったオルガが、テイワズに頼み込んで招聘した医者で、おもにサイバネティクスによる義肢や人工臓器、ナノマシンによる治療を専門とする。もちろん阿頼耶識システムもその範疇に入っていた。

「そも環境が整つとらん施術で阿頼耶識三回とか普通死んでおるわい。今のところ異常はないが、何かの弾みで半身不随なんちゆうことにもなりかねんわ。そうなたらおんしも困るじゃろうが」

「MSさえ動かせれば、そうでもないけど」

「儂も変わっておる自覚はあるが、おんしガンギマつとるのお」

呆れた奴じやと鼻を鳴らして、キーボードを叩く。軽快な電子音が、走査の終了を告げた。

「うむ、これで終わりじやな。今センサーを外すぞい」

手際よくコネクタを抜き、電極を剥がしていく。起きあがった三日月はベッドの上であぐらをかき、ぐるぐると右の肩を回していた。

「さつきも言ったが今のところは異常なしじやな。ただ阿頼耶識の方に過剰なデータの蓄積がある」

「かじよう？ どゆこと？」

「おんしの阿頼耶識——体内にインプラントされたナノマシンは、通常の三倍量。増えた一部は反射神経機能の増幅などに使われておるが、多くは使われておらん。その使われていない部分にMSから干渉された情報が貯まっておるのよ。恐らくは不完全なシステムが齟齬を補おうとバイパスを構築しかけておるのさ。上手くいけば機体の性能を引きずり出すことができるかも知れんが、どのような影響があるかわからん。リミッターをかけておいた方がよさそうじやの」

「んく……別にいらんかな？ 強くなれるかも知れないんでしょ？」

言いながら三日月は思い出す。エドモントンでバルバトスから何かを引き出せそうだったあの感覚。多分そのあたりのことを言っているのだろう。

ドクターは眉を顰めた。

「いきなり心臓が止まるかも知れんのに、放っておくわけにもいくまいが。……まあすぐにどうこう言うわけでもないし、よく考えるのじやな」

言いながらも多分こやつ気にせぬだろうなと思う。っていうか多分話分かってない。まあ実際にすぐさま命に関わるものではないので、健康状態に関しては経過観察で構うまい。

それよりも、だ。

(前例のない三回施術の阿頼耶識……研究のしがいがあるのお)

内心でほくそ笑む老人、ドクター・キシワダ。

実はマッドよりの、ちよつとヤバげなじじいである。

日が傾いたが、まだ戦いの後始末が終わらず鉄華団本部の周囲は騒然としている。

そんな中、本部に現れた来客者とは。

「わざわざ『火星支部の本部長さん』が直々に顔を出すとは思いませんでしたよ」

対面の相手に向かって、オルガは微かに緊張感を漂わせつつ言う。応えるのは穏やかな態度を保った男。

「今回のことは我々の落ち度でもある。代表者が顔を出すのが筋というものさ」

現在火星支部を預かる本部長代理、【新江・プロト】。彼は鉄華団を襲った海賊たちの拘束と事情聴取を名目に部下を率いて訪れていた。

しかし居丈高に振る舞うのではなく、まずは団長であるオルガに事情を尋ねたいと部下を表に控えさせ、自ら対談に臨んだのであった。

「依頼の関係で何度か顔を合わせているが、こうやって会話するのは初めてになるな。……まずは礼と謝罪を。君たちには手間をかけたさ」

そうやって頭を下げる。マクギリスからの推挙で本部長代理に収まったというこの男は、コーラルのように横暴ではないが、どちらかと言えば淡々と職務をなしているというイメージが今までであった。一応のポーズということであろうかと、内心の警戒を解かぬままオルガは応える。

「いや、こちらとしても襲撃が予想できた時点で連絡をするべきでした。配慮が足らず申し訳ありません」

組織の代表として一応猫を被るようにとメリビットから睨られ、それなりに対応できるようになっているが、やはりどこかぎこちなさを

感じる敬語だ。それを気にした風もなく新江は話を続ける。

「まさか短時間であれほどの規模とは君たちも予想できなかっただろう。夜明けの地平線団、GHでも手を焼く相手だ。相手が君たち鉄華団であったからこそ対処ができたのだよ」

人員が一新してからこつち、GH火星支部はまるで別組織のように任務を忠実に果たしていた。その上で、必要とあらば民兵組織などの手を借りることも躊躇わない。なにしろ敵対したはずの鉄華団にすら声をかけてきたのだ。もちろんオルガたちは面食らったが、『鉄華団を推薦した人物』の名を聞いて、それなりに納得はしている。

「ともかく今回の戦果に対し、こちらから報奨金を出させて貰う。その代わりと言ってはなんだが、捉えた賊の身柄をこちらに引き渡しては貰えないだろうか。それと、出来るならば奴らのMSからデータの吸い出しを行いたいのだが。勿論その後は機体は好きにしてくれて構わない。火星や圏外圏のルールに示し合わせれば当然のことであるしな」

これまでのGHであればありえない、破格と言っても良い申し出である。現在の火星支部は、火星や圏外圏との関係改善を図るためか、各所に便宜を図り金をばらまいていた。その背後には、モニターク商会の影が見え隠れしている。

ハーフメタルの利権に食い込み、さらなる利益を求めてGHの後ろ盾となっているのだろう。多くの関係者はそう見ていたが、実情を僅かなりとも知っているオルガたちにしてみれば、なにやら別の思惑を感じられずにはいられない。そんな疑惑をおくびにも出さず、オルガは応えた。

「引き渡しに関してはすぐにでも。データの方はすでにこちらのほうで吸い出しを行っています。それで良ければもう暫くで提出できま

すが」
「それはありがたい。その分報奨金には色を付けよう。よろしく頼む」

「……言っはなんですが、随分と気前が良いようで」

皮肉ではなく純粹な疑問としてオルガはそう口に出す。事情があ

るにしてもサービスが過ぎると。

それに対して新江はにやりと笑みを浮かべた。

「なに、これから君たちにはご足労願わなければならぬだろうからな。ご機嫌取りだよ」

「依頼がある、と言うことですか？」

新江の笑みが深まる。

「ああ、程なく海賊退治の仕事が舞い込むだろう。……ファリド准将直々からの、ね」

GH本部、ヴィーンゴールヴ。その頂点にあるセブンスターズが面々は、現在専用の会議場に集っていた。

第二席ファリド家当主、マクギリス・ファリド。

第三席ボードウィン家当主、【ガルス・ボードウィン】。

第四席エリオン家当主、【ラスタル・エリオン】。

第五席クジャン家当主、【イオク・クジャン】。

第六席バクラザン家当主、【ネモ・バクラザン】。

第七席ファルク家当主、【エレク・ファルク】。

現在空席である第一席イシュー家以外の全党首が勢揃いし、会議は行われている。

「地球外縁軌道統制統合艦隊の再編成と、各経済圏との関係改善。見事な手腕だなファリド公」

アルミリアを通じて義理の親子関係を結ぶ形になっているガルスが、そう賞賛した。対してマクギリスは、すました態度で応える。

「いえ、皆様方のご指導と、なにより統制統合艦隊旗下隊員総員の努力がたまものでしょう」

「いやいや、統制統合艦隊を実働部隊として仕上げたのは確かにファリド公の働きによるものでしょう。いかがかな、これを機に『正式に

艦隊司令の席については』？」

エレクがそのようなことを口にする。そう、マクギリスは現在地球外縁軌道統制統合艦隊の『司令代理』の任についている。彼自身が司令官となることを辞退したのだ。その理由は。

「私はあくまで『本来かの席に座るべき人物』が復帰するまでの代役に過ぎません。人はそれぞれ果たすべき本分があるかと」

ちらりと空席に目を向ける。あくまでその席にあるものが地球外縁軌道統制統合艦隊の長なのだと、マクギリスはそう主張して譲らない。本当に彼女の復帰を信じているのか、それとも何か別の思惑があるのか。他の当主たちはその心情を計りかねていた。

向けられる視線を意にも介さず、マクギリスは『本題』を口にする。「そろそろ私も、己の本分を果たすべき頃合いでしょう。かねてからの『計画』、実行に移す許可を頂きたい」

「……『あらゆる状況下に置いて最先鋒を務める遊撃部隊の設立』、概念は理解できるが、本当に必要となるのかね？」

ネモが訝しげに問う。マクギリスが提唱したのは、かつて某国で立案されたストライカー旅団に近い、機動力を持って真つ先に事件、紛争等に介入する部隊の設立である。それはただの新設部隊という意味合いだけではなく、本来イシユール家が統率する地球外縁軌道統制統合艦隊以外の戦力——『ファリド家肝いりの戦力』が生じると言うことだ。私兵を囲い込むとも取られかねないそれは、ガルス以外を警戒させるに十二分な話であった。

「現状、地球圏は安定を取り戻しつつあります。ですが経済圏は独自の戦力を整えながら水面下での競争を激しく増しており、同時に火星圏、圏外圏の治安は不安を抱えるまま。GHの権威が低下した今、必要な一手であると愚考いたします」

「だが更新がため後方に回される予定であったハーブビーク級の改装艦に、同様に旧式となりつつあるグレイズ系の改装機体を主幹とするなどと、戦力に不安を感じるのだが」

「過剰な戦力よりも、むしろ『いち早く現場にたどり着き、解決しようとする姿勢』を見せつけることが肝要かと。要は切っ先。不穩に真つ

先に刃を突きつけ、敵わぬのであれば相応の武門が訪れるまでに時間稼ぎと威力偵察を行う。不埒を決して許さず、滅するという意思を表す。GHの権威復帰のためには、そういった実行手段が必要なのではありませんまいか」

理には適っているように聞こえる。

「現在ハーブビーク級改、及びグレイズ改装型〔スタークグレイズ〕の数は最低限揃いました。まずは試験的な運用の許可を頂きたく思います」

「むむ、それは構わぬが……どこにその戦力を投入するつもりかの？」

「はい、おもに火星近海にて活動を行う宇宙海賊、夜明けの地平線団。その討伐をお許し頂ければと」

「フアリド公！ それは我等アリアンロッドが職域を侵す行為だぞ！」

マクギリスの言葉に、イオクが咎め立てる。しかしマクギリスは淡々と応えた。

「火星近海での治安悪化は、そもそも私が監察局時代に行った摘発によって火星支部の弱体化を招いたが故の結果です。正義を執行したからこそその副作用と言えますが、責任は取らなければならぬでしょう」

それにと彼は続ける。

「現在アリアンロッドは月軌道及びコロニー群の治安維持活動に尽力しておられるようで。火星近海まで即座に戦力を展開させるのは難しいのでは？」

「む、それは……」

イオクは言いよどむ。マクギリスの言うとおり、現在コロニー周辺では治安の悪化が問題視されていた。正確には『反GH、反アリアンロッドの気運が激しさを増してきている』。

経済圏の支配下であるコロニーがその本国の意図を酌んで……と言う理由もあったが、主な理由はコロニー間で『アリアンロッドは以前よりコロニーを食い物にしたマッチポンプを行っている』と言う噂がまことしめやかに流れているからだ。結果コロニー関係はG

Hに対し頑なで非協力的な態度を貫いている。さしものアリアンロッドも手をこまねいている様子であった。

と、そこでイオクの隣に座っていたラスタルが声を上げる。

「そう構えるなクジヤン公。やる気があるようで結構な事ではないか」

「しかしラスタ……エリオン公！」

「我々GHは世界の秩序を守るためにある。『だれが』など些細な問題に過ぎんよ」

そう言つてラスタルはマクギリスの提案を支持した。

その数時間後、会議は終わりラスタルとイオクは会議場を後にした。表に出た彼らを、花壇に腰掛けて待ちかまえていたものがある。

「待たせたなジュリエッタ」

【ジュリエッタ・ジュリス】。ラスタルが市井より見出した子飼いのMSパイロットである。彼女はラスタルの元へと歩み寄った。

「いかがでしたか……と聞くまでもないようですね。イオク様の様子を見れば分かります」

「なにを、この猿がつ！」

「落ちてイオク」

代替わりしたばかりのイオクが後見人でもあるラスタルの言葉を無下にも出来ず、イオクは押し黙る。ラスタルは笑みを浮かべたまま、言葉を続けた。

「実際上手い手だ。地球外縁軌道統制統合艦隊に影響力を残したまま、独自の戦力を保有する。その上で、マクギリスは以前から火星や圏外圏に手を伸ばすことを目論んでいたようだからな。恐らくは火星を自らの拠点とするべく、その足がかりを作ろうというのだろう」

「ラスタル様、そこまで分かっているなぜ奴の提案を……」

「まだ直接我等と敵対するつもりはないようだからな。そうであったとしてもこのラスタル・エリオン、真っ向から受けて立つさ」

ラスタルはそう言つて歩き出す。

「よし、景気づけに肉だ。肉を食うぞ！」

「肉ですか!? 大好物です！」

「わ、私もお供します！」

忠臣二人を引き連れて歩くラスタル。その胸中は『未だ晴れぬ疑問』に向けられていた。

（てつきり奴ら……【元標的艦隊の面子】を招聘するかと思っていたのだがな。動員したのは身分の低い出自の者と、新規の隊員がほとんど。……何を企んでいる？）

読めぬ。であれば少々『つついて』見るか。まるで呼吸をするかのように巡らされる策謀。対決姿勢は静かに整いつつあった。

経済圏アーヴラウ、エドモントン郊外。

2年前の戦いで鉄華団が一時的な拠点とした廃駅。現在はそれを正式に譲り受け、鉄華団地球支部は設立された。

アーヴラウ政府の肝いりで施設は整備され、貨車による物資の搬入も可能となった。これによりテイワズ末端としての仕事も請け負える下地も整ったと言える。もっともまだそちらの方は本格稼働とは行かず、現在彼らは軍事オブサーバーとして、アーヴラウ防衛組織の教練に力を注いでいた。

本来は駅のロビーであった広大なスペースでは、居並ぶMWが蠢いている。いや、正確には『それ』はMWではない。台座に固定され、内部の操作に合わせて本体が稼働するシミュレーターである。旧式のMWを改装することによって作り出されたそれは、MSとMWの操作系がほぼ同一であることを元に、双方の基礎教練に使用されていた。

「はい、そこまでです！ 各員状況を終了して下さい！」

まだ声変わりして間もない少年の指示が飛び、シミュレーターが一斉に停止する。そして中から鉄華団の少年たちと、防衛組織の隊員たち（予定）が這い出してきた。鉄華団の面子は汗こそかいているものの、さほど疲労した様子はない。が、対する隊員たちは這々の体で疲

労困憊と言った様子であった。シミュレーターの監督を行っていたタカキが双方を整列させた。

「午前中の訓練はこれまでとなりませう。この後は13:00まで休憩と昼食。その後午後の座学に入ります。自主練は構いませんけど、午後に影響が出ないよう注意して下さいね。……それでは、解散！」

『ありがとうございます！』

一斉に礼。その後隊員たちは三々五々に食堂や休憩所へと向かっていく。残ったのはタカキと団員たち、そして。

「どうかね、大分揉まれては来たが」

「確実に技術は向上してきてますよ、マニングス隊長」

防衛組織実働部隊の隊長に選ばれた男、「マニングス」はそうかと頷いた。

「最初はどうかと思っただが、何とか形になるものだな。……いや、君たちの教官殿がいなければ、未だにまとまりが無かったかも知れんね」

「鉄華団は団長から僕らまで無茶苦茶しごかれましたからね。あのノリで教え込まれたら仲違いしている場合じゃないって嫌でも分かるでしょう」

3ヶ月から半年程度の期間ごとに地球を訪れるランディは、そのたびに特別コーチとして訓練を仕切る。もちろん真つ当な訓練であろうはずもなく、いつしか影でこっそりと「悪魔の毒々ブートキャンプ」などと呼ばれ、恐れられていた。

それを思い出したのか、ははははと力無く笑い合うマニングスとタカキ以下少年たち。熱い友情じゃない系の連帯感が、彼らにはあった。

と、そこに。

「ああ、午前の訓練が終わったところだったか」

「ふむ、こちらでも昼食を先にとって置いた方が良かったかね？」

「ビスケット支部長、それにシナプス司令」

恰幅の良い体にスーツを纏ったビスケットと、防衛組織の司令官を務めることになった人物「シナプス」。彼らは各所で調整や説明会な

どを行う関係上、行動を共にすることが多かった。特に防衛組織の正式な稼働が間近に迫った今、彼らはほぼ毎日共にあちこちを跳び回っている状況である。

その成果と言うわけでもないが、鉄華団地球支部とアーヴラウ防衛組織関係は良好であった。まあその、怖いお兄さんにどたまむんずと掴まれて「仲良くしろよ、な？」ってやられたら全力で頷くしかないんですけれど。

ともかく今の所大きな問題もなく、地球支部とアーヴラウ防衛組織の進展は順調であった。

「もしかして『例の話』ですか？　でしたら会議室で食事を取りながらでも」

「そうだな。ちと長丁場になるかもしれんし。マニングス君、いいかね？」

「は、小官に問題はありません」

「午後の講義はガットさんと外からの講師の方ですから僕も問題ないです」

「そうだね、タカキは当然として……アストンも頼めるかい？」

「え？　俺ですか？」

指名された頬に傷のある少年——【アストン・アルトランド】は目を丸くする。

「現場の意見も聞いておきたいんだよ。うちじゃ君が一番の成長株だからね」

「は、はあ……あざっす」

「後はチャド……だけど事務室かな」

「ええ多分。さつき本部から連絡が入ってたはずですから、それを受けてるんじゃないですかね」

その頃、チャドは事務室にて詰め寄られていた。

「どういうことですか獅電の到着が遅れるとは！　予定は守って貰わないと困ります！」

詰め寄ってきているのは【ラディーチェ・リロト】。地球支部設立以後にテイワズから送り込まれてきた事務員で、お目付役も兼ねる……

のだが、どうにも現状に不満を抱えているようだ。予定が狂えば苛立ち、団員たちが言うことに従わなければ嫌味や愚痴を平気でこぼす。おかげで支部内ではすっかり評判が悪く密かに嫌われていた。

「例の海賊騒ぎで、航路が安定するまでは正式なスケジュールが組めないと言ってるじゃないですか。そも搬入の予定が遅れるかも知れないというのは、最初から織り込み済みでしたよ」

どこか呆れた様子の副支部長であるチャド。そして事務所で作業をしている少数の団員たちも眉を顰めている。

「二度決定したことは実行して頂かないと。それにランドマン・ロディだけでは戦力が不足に過ぎます。一刻も早く獅電の配備を急がねば、防衛組織の方からもせつつかれて……」

「ふむ、そのような報告は聞いていないのだが……もしかしてそちらの方に直接物言いがあったのかね？　そうであれば詳しく話を聞きたい」

突如かけられた声に、ぎよつと振り返るラディーチェ。そこには防衛組織重鎮の二人と、地球支部長を始めとした幹部の姿だ。下手な言い逃れは聞かない面子である。ラディーチェは急にしどろもどろになった。

「い、いえ、そう言う空気があるという話で、具体的にはつきりとしたところまでは……と、ともかく納期を守るよう、本部には言っておきますからね！　失礼します！」

一方的に言い放って退出するラディーチェ。防衛組織の大人二人はわけが分からんと顔を見合わせ、鉄華団幹部二人は肩をすくめ合う。

「良いのかね？　獅電の輸送関連は『テイワズの』決定事項だったと記憶しているが。鉄華団に文句を言っても仕方なからうに」

「多分彼は、大口の手柄がないと焦っているんじゃないですかね。防衛組織の稼働がなれば、それこそ目が回るくらい忙しくなるって言うのに」

不満ならそれこそテイワズに訴えて配置換えでも願えばいいのにと、ある種の冷淡さを身につけたビスケットなどは思うのだが、まあ

なんぞ思うところでもあるのだろう。それに――

「なあ、なんつーかあのおっさん、裏切りそうな気配アリアリじゃねえか?」

こっそりとそう口にするアストン。問われたタカキはこう応える。

「まあ、そんな雰囲気あるけど……やる気になるとは、思えないんだよねえ」

「なんでさ?」

「だって、ここで僕らを裏切るってことは、『テイワズの顔にべっちより泥なすりつける』ような真似をするってことだよ? 命が10個あつたって御免被るね、僕なら」

「……っていうか10回蘇生されて11回殺されるな。そりや確かに御免被る」

そう、少し前ならともかく、現在のテイワズ――マクマードは「裏切り者絶許キャンペーン中」とでも言うかのように、内部肅正に力を入れていく、らしい。直参の勢力はまだしも末端で下らぬ真似をやらかしたら即座に首が飛ぶ（物理）ともつぱらの噂であつた。

しかしまあ噂は噂。実際の所どこまで本当か分からない。それでもそんな噂を聞いて裏切ろうと考えるような、無謀というか馬鹿というか脳の代わりに水虫でも繁殖してんのかっていうもう救いようもない愚か者はなかなか出ないだろう。

だから――ラディーチェ・リロトが鉄華団とテイワズを裏切るなんていう、ランデイすらドン引くような真似をやらかすなど、誰も予想していなかった。

もちろん、予定調和のように失敗は確定していた。

※今回のえぬじい

「出番……くすん」

「あーよしよし泣かない泣かない」

→隅っこでいぢける筋肉と、それなぐさめるツンデレ。

おまけの機体解説

ASW—G—08R ガンダムバルバトス・ヴィント

バルバトスを改修した機体。基本的にはルプスと同じだが、脚部のスラスターが大型化、腰のものは原作より短い。瞬発力の高いものに換装されており、肩のアーマーにもスラスターが増設されている。またバックパックのメインスラスターも上下2連装となっており、その両横のサブアームはグシオンに近い形状のものが折りたたまれる形で収まっていて、予備武装はそれに『掴まれる』形で保持される。そのまま運用することもできるので、グシオン同様の戦い方も可能。

ともかく機動力と反応速度を最優先としてセッティングされており、戦場を目にも止まらぬ速度で駆け抜ける様はまさに『疾風』。

メイン武装はソードメイスと外観はほぼ同じな「シースメイス」、そしてその中に内装されている大太刀「月牙」。最初から太刀にしておかないのは三日月曰く。

「MS斬るのは集中力いるから、最初からやってると疲れる」

と言う理由でこのようなことに。まあ敵からしてみれば、叩き潰されるかぶった斬られるかの差でしかない。

欠点としては機動力を重視したせいで推進剤（ガス）の燃費が悪く

なったことだが、それを補って有り余る戦果を叩き出す怪物マシン。
なお改修に関して多くの部分にランディが関わっている。やっぱ
り貴様か。

24・さてもたのしく海賊退治……といけばいいけど

歳星。テイワズの本拠地たるそこに、一隻の改装戦闘輸送艦が停泊していた。【サカリビ】と名付けられたその船は、中央ブロックを装甲強襲艦本体と交換した、鉄華団2番艦【ホタルビ】との同型艦であった。違うのはデブリ帯での航行を考慮しハンマーヘッドと同じようなシールドを備え、そして各種作業用のアームがいくつか備えられているところである。

地球との往復と訓練を兼ねた航海を終えたサカリビは、補給と修復のためにドックに収納されている。それを仕切る人物——ランディはと言うと、現在『とあるモノ』を前に歳星の整備長と言葉を交わしていた。

「モビルアーマー・ザドキエル」ねえ。……厄祭戦の元凶。人類の過半数を死に追いやった狂気の産物。つてのもこうなると、ただの休眠リアクター、か」

ぽりぽりと頭を掻きながら言う整備長。彼らの目の前には、ほぼ大破したフレームとリアクターだけになった殺人機械の残滓があった。

「むしろGH以外にMAの記録が微かでも残つてるところがあつたとはな」

「テイワズ、と言うか圏外圏は厄祭戦の被害が比較的少なかったからね。だからMS技術が残つてたりしたんだよ。……もつともMAのことなんか、洗いざらい資料をひっくり返さなきゃ出てこなかったけれど」

肩をすくめた整備長は、それだとランディに問うた。

「これ、どうするつもり？ いや、大体予想はついてるけど」

「ああ、このリアクター、『例の機体』に乗せてみようと思つてな」

「【エウロパフレーム】をベースに君が設計させてる、『アレ』にかい」

イオフレームとは逆に『機体の性能を追求した』試作フレーム。獅電開発の副産物と言えるそれを原型としてランディはある機体をテイワズに発注していた。だがそれは——

「これまでの標準型リアクターじゃ、あの機体の要求出力に足らねえ。だがこいつなら一回りでかい分ガンダムフレームのツイインリアクターともタメを張る。幸いにしてエウロパフレームはロデイ系と同じくバックパックにリアクターを搭載するタイプだ。加工すりゃいけるさ」

「機体バランスとか機動特性とか、無茶苦茶になると思うんだけど。……ま、君だったらなんとかしちゃうんだろうね。……それで、名前とかどうする？　なんだったら僕が格好良いのを……」

「ああ、もう決まってる」

しゃらりと言つてのける。えーそう、とか残念そうな整備長を余所に、ランデイはにい、と凶悪な笑みを浮かべた。

「ラーズグリーズ」。全てを終演に導く、死の女神さ」

火星、鉄華団本部。

先の騒動も冷めやらぬまま、新江が宣言したとおりマクギリスから直接の依頼の申し込みが舞い込んでいた。

「夜明けの地平線団の掃討、可能ならば首魁である「サンドバル・ロイター」の捕縛、か。それに協力しろってことだな？」

「その通りだ。これまでも君たちには海賊や犯罪組織などの討伐に協力して貰っていたが、今回はこれまでにない大規模なモノとなる。これはただのGHが示威行動ではなく、私が提唱した新設部隊の試験運用でもあるんだ。可能であれば成功させたい」

「いいのかよ、そんなんだったら自分たちだけの手柄にしときたいモンだろう」

「いままでのGHがやり方とは違う方向性、現地勢力との協力関係を築くことによってよりよい関係性と問題の解決力を持たせる。そういうった事を考えているからね。まあ理想論だが、実際GHの独力だけ

では限界が来ているのも事実だよ。功を焦って目的を果たせないで
は、片手落ちも良いところだ」

揶揄するように言うマクギリス。どうにも本気で今までとは違う
やり方を模索しているようだが、いまいち信頼しきれないのはやはり
どうしても胡散臭さを感じてしまうからか。

しかしながら、夜明けの地平線団を放っておくわけにはいかない。
海賊とはマフィアと同等かそれ以上に面子に拘る存在だ。一度その
襲撃を凌いだからには、鉄華団を滅ぼすか、自分たちが滅びるまで付
け狙い続けるだろう。出来るだけ早く決着を付けておかなければ、
延々と付け狙われる事となる。マクギリスの依頼は、絶好の機会であ
ることに違いなかった。

「そう言うわけでこちらとしても是非もない話だ。航路の安全を図る
ことは、テイワズにとっても願ったり叶ったりの話だしな。……問題
は、戦力だろう」

「こちらは新設部隊の動かせる全戦力、改装ハーブビーク級三隻とM
S部隊1個大隊を出す。数は心許ないように思えるだろうが、船も機
体も、そして人員も選りすぐりだ。多少の戦力差であつても後れは取
らないと自負している」

「そうか。……こっちはイサリビ……装甲強襲艦と、装甲強襲艦ベ
スの戦闘輸送艦が2隻……いや、1隻は地球から帰還したばかりで、
歳星で整備中。MS部隊は動かせる機体とパイロット合わせて1個
中隊つてところか。……そんで多分、『うちの最大戦力』は間に合うか
どうか微妙だ」

「むしろ彼の力ばかりを頼るわけにはいかないだろうね。情報による
と、火星近隣の海賊や犯罪組織は、君たちのことを彼の威を借りた狐
だと見ている節がある。テイワズの1配下としても、そう見られてい
るのは面白いことにはなるまい」

「その通りだ。教官なしでもやれるつてのを見せるのは、これから先
の事を考えても必要になる。……だがそうなると、数だけでも連中の
半分程度つて事になるな」

「そして連中の首魁、【月輪（がちりん）のサンドバル】か……」

通信の向こうで、マクギリスの目が細められたように思えた。

「名付きのエースでもある彼の實力と人望、強力なカリスマによつて纏まっているのが夜明けの地平線団だ。だが逆に言えば、彼を討ち取ることさえ出来れば幾ばくかを取り逃がしたとしてもその勢いは失速する」

「奴の首狙いの電撃戦。勝機があるとすれば、それだな」

勝ち目は、ある。であればこの流れを逃すのは、逆に因縁を払う機会を失う事となる。オルガは決断した。

「……了承した。鉄華団はそちらの依頼を受ける方向で行く。テイワズ本部に伺いを立てるが、恐らくうちの親父はGOサインを出すだろう。正式な沙汰が出たらすぐにも連絡をさせて貰う」

「ありがたい。こちらはすでに部隊を動かしている。問題がなければ、2週間ほどで合流できるだろう」

「2週間!? 早いな」

「それが出来る部隊ということさ。では、良い返事を待っているよ」

通信が切られ、オルガは面を上げる。彼の前には、副団長であるユージンと、お目付にして事務を取り仕切っているメリビットの姿がある。オルガの視線を受け、二人は大きく頷いた。

「名瀬の兄貴経由でテイワズに繋ぎを取る。忙しくなるぞ」

名瀬からの報告に、マクマードはくつと笑みを浮かべてみせた。

「良いタイミングで依頼が飛び込んできたな。こつちとしてもありがたい話だ」

夜明けの地平線団。テイワズとしても少し目障りになってきたところだった。丁度鉄華団が喧嘩を売られたと言うこともあり、対処を任せようかと考えていた矢先であったのだ。

確かにタイミングは良かった。しかしながら。

「だが、いささか都合が良すぎる話でもある。モンタークを通じてりや、こつちの動きは読めてるだろうがな」

やはり都合を合わせてきたと見る方が自然であろう。ハーフメタルの利権関係で食い込んできたモンタークは、地球方面の流通にて大きくシェアを占める形となった。商売相手としては持ちつつ持たれつつ。悪くない関係を構築していると言える。その上でGH火星支部に支援を行い、治安の維持にも協力を惜しまない彼らの評判は相応に高いものだ。今は敵に回すよりも味方に付けていた方が良いと言える。

鉄華団を通じて彼らの裏の事情にもある程度理解は及んでいる。何かを企んでいるようだが、それが自分たちにとって吉となるものか。マクマードは目の前の名瀬に問うた。

「モンターク——マクギリスという男と顔を合わせていたな？ お前さんは奴をどう見るよ名瀬」

「油断のならない男ですね。今のところはまだ利用価値がある……つて感じですが、隙を見せたら喰われかねない底の深さがあるかと。オルガの奴もそのあたりは気にしているようです」

「ふん、一筋ならねえ食わせ者ってことかい。だがまあ、敵に回すのは上手くねえ。それに都合が良いことには違いない」

葉巻を一吹かし。今回のことは鉄華団を山車にマクギリスの、GHの反応を見る良い機会でもある。それに鉄華団にもそろそろでかい仕事を回す切っ掛けになるだろう。なんだかんだ言っただけはよく働いてくれていた。勤勉で、しかも相応の結果を出しているというのであれば、見返りはあつてしかるべきだ。少年たちを気に入っている好々爺としてではなく、企業人としての計算から、マクマードは結論を出した。

「鉄華団に依頼を受けさせてやれ。……それなりにでかいヤマ、油断のならねえ相手だ。禰を締めてかかるように言っておけよ？」

「はい。しかと伝えておきます」

名瀬は深々と頭を下げた。

暫く後、テイワズ本部の廊下で名瀬はアミダと落ち合っていた。

「親父の許可が出た。早速オルガに伝えるとするさ」

「根回しもそんなにいらなかったねえ。最初(はな)からあの子らにやらせる腹だったんだらうけど」

「向こうさんの思惑に乗ってるってのは気がかりではあるが……今回はお手並み拝見というところだな」

二人は話しつつ連れだって立ち去ろうとする。がそこに声をかけるものがあつた。

「よう色男(ロメロ)、また親父のご機嫌伺いかよ」

妙に嫌らしげな調子の声。見れば幾人かを引き連れた、濃い顔と雰囲気の男だ。

「ジャスレイ・ドノミコルス」。テイワズの専務取締役であり、商業部門であるJPTトラストを仕切る組織の実質的なナンバー2と目されている男であつた。

趣味の悪い毛皮のコートを肩に引つかけたジャスレイは、にやにやと嫌らしい笑みを顔に貼り付けて名瀬に絡む。

「女の尻に敷かれているだけじゃあきたらず、今度はガキどものおもりかい？ いやはや物好きにもほどがあるなア」

その嫌味に対し、名瀬は済ました顔で返す。

「そのガキどもがでかい仕事を任せられることになりましたね。ケツ持ちでんでこ舞いってところですよ。まあ、叔父貴みたく暇を持てあまして悠々自適というわけにはいきませんや」

ここ最近大きな仕事を任せられていないジャスレイに対する揶揄が込められていた。ジャスレイの笑顔が凍り、取り

り巻きが「野郎……」といきり立つ。

一触即発の嫌な空気が流れるが、まるでそれを読んでいないかのような声がさらに響いた。

「おうおうおそろいだねエ。みんな商売繁盛してつかア？ ん？」

へらへらとした軽薄な声。現れたのは――

小太りでスタレ禿げで千鳥足。へろへろのスーツを身に纏った、どう見ても酔っぱらいの中年サラリーマンにしか見えないおっさんである。

それに対する反応は、ジャスレイと名瀬で覷面に差があつた。

「ちつ、うぜえのが来た」

声こそ小声であるが、明らかに嫌悪感を露わにするジャスレイ。「おおっと、『お目付』の叔父貴じゃないですか」

もみ手をせんばかりに愛想良く声をかける名瀬。

「ジョニー・マクラーレン」……と『自称する』男。最近になってテイワズの内部監査室長という名目であちこちに顔を出すようになった人物だ。

しかしながらその実情は、内部監査の名の下に接待という名目の呑み歩きを繰り広げる名ばかりの役立たずというもっぱらの評判で、事実出向先で集っているだけの人物だと見られていた。ジャスレイもまた彼の『洗礼』を受けており、しかしマクマードの旧知らしく邪険にも出来ない相手である。

へらへらとした態度のまま、ジョニーは二人に絡む。

「またちよつと寄らせて貰う気だったんだが、丁度良いやね。お前さんらのどつちかんトコに顔出させてもらおうかね?」

「だったらウチんとこに是非とも立ち寄って下さいよ。良い酒も揃えてますぜ?」

間髪入れず名瀬が誘う。ジョニーは相好を崩して応えた。

「おう、お前さん所の綺麗所で酌してくれんだろうな?」

「勿論。そのあたりは任せてもらいましょう」

馴れ馴れしく名瀬と肩を組むジョニー。そんな二人を呆れた様子で見ながらもついていくアミダ。

その姿を見送って、ジャスレイは唾を吐いた。

「親父の腰巾着風情が。調子にのりやがって」

いずれ痛い目に遭わせると心に誓い、肩を怒らせながら彼もまた立ち去る。

テイワズの中にも、不穏な空気は確かにあった。

夜明けの地平線団を討伐すると鉄華団が決めた後、クーデリアの身柄は密かにあるところで匿われていた。

【桜農園】。ビスケットの祖母である【桜・プレッツェル】経営する農場だ。鉄華団とはビスケットとの縁で提携し、元の規模を拡大して孤児院の経営なども行うようになった。その孤児院はクーデリアも経営に携わっており、時折顔を出しているのでこの場にいること事態は別段不自然なこともない。

ともかくフミタンと共に彼女は桜農園を訪れた。そしてその裏庭で、あるものを目に見ている。

「ここでも何か作っているのですね三日月は」

小さな畑である。そこには多種多様の作物が植わっていたが……その多くが収穫の時を待たず、枯れ込んだりしなびたりしているようだった。少し残念とばかりに肩を落とすクーデリアの両脇から、ひよこりと顔を出した少女たちが口を開く。

「食べられるものをどうにかして作れないかって、色々試しているみたい」

「でも沢山作ろうとすると、なんか上手くいかなくて枯れちゃったりするんだって」

【クッキー・グリフォン】、【クラツカ・グリフォン】。ビスケットの妹たちだ。鉄華団とアイゼン・ブルーメ商会が共同で創設した学校に通う学生だが、休日にはこの農場に顔を出し作業を手伝ったりしている。三日月にも懐きその畑の手伝いも積極的に行っていた。

「……どうして上手くいかないのでしょうかね」
「水だよ」

クーデリアの疑問に、背後から現れた桜が応えた。

「火星は元々土壤が良くない。その上で雨がほとんど降らないからね。水が土壤に十分に循環しないのさ。農業プラントなんかだと水を極冠から引っ張ってきて、用土自体を火星の土壤から切り離してるから作物を育てられる。でもそれだとコストがかかりすぎるんだよ。結局の所この土地でまともに育つのは、品種改良されて元々食用に向

かないバイオ燃料用のトウモロコシくらいさ」

桜の言葉に、クーデリアは眉を寄せる。

「水……ですか」

彼女は暫く考え込んで、傍らのフミタンに向き直った。

「フミタン、時間があるときで良いですから少し調べて欲しいことがあります」

「はい、何なりと」

なにかがもやりと、クーデリアの中で形を取り始めた。

それがどのような形になるかは、まだ見えない。

アリアンロット艦隊旗艦、スキップジャック級ネームシップスキップジャック。全長800メートルを超え、数百とも言われるMSの搭載量を誇る巨大戦艦である。

その格納庫の一角に、ジュリエッタの姿はあった。

彼女の視線の先には、1体のMS。鋭角的なデザインのその機体は、ガンダムフレームの特徴的なツインリアクターの他に、もう1基リアクターを背負っている。何か理由があるのだろうかジュリエッタには予想もつかない。

まあそのようなことはどうでも良い。彼女が気にしているのは、この機体の『乗り手』の事だった。

(ぼつと出でラスタル様の副官的な位置に抜擢される。……実績があるのならば納得も出来るけれど、経歴も明らかではないあのような怪しげな男が……)

彼女自身が自覚しているのかどうかは分からないが、それは嫉妬じみた感情であった。

市井からラスタルに才能を見出され子飼いの部下となった彼女は、ラスタルに対し信仰にも似た全幅の信頼を寄せている。だが今は突

然現れた人間が自分以上にラスタルと近い位置にいる。それが気に入らない。子供じみた感情であるが、それを押し隠すには彼女はまだ若かった。

と、そんな彼女の背後からかけられる声があった。

「調整中の機体など見ても、特に面白いことなどないだろう?」

振り返ればそこには一人の男の姿。いや、『多分男性であろう』人物。不確定なのは、その人物が頭部を丸ごと覆う金属製のマスクを付けているからだだった。

最近になってラスタルの側近として召し抱えられたその人物——自称【ヴィダール】は、件の機体にかかりきりで仕事らしい仕事も行っていない。なぜそんな人物が召し抱えられたのか、ジュリエッタならずとも疑問に思うものは少なくなかったが、ラスタルに物言える人間などアリアンロッドには存在しない。なりゆきのまま受け入れられているのが現状であった。

その人物の登場に、ジュリエッタはむっとした表情で応える。

「いつになったらこの機体が使えるようになるのか気になっただけです。『今回の作戦』にも不参加と聞きました」

マクギリスの行動に対し、ラスタルはアリアンロッド第2艦隊を率いるイオクに『様子見』を命じていた。表向きは火星方面への哨戒任務だが、事実上の『横槍』である。手柄を横取りできれば御の字、マクギリスの出方如何によっては今後の方策を決める切っ掛けとなるだろう。そういった目論見があった。ジュリエッタは自らその任務に志願したが、目の前の人物は何ら動きを見せない。それに対して妙な苛立ちを感じているのだった。

ヴィダールの表情はマスクに隠され分らない。だが特に何かを気にした様子は、その態度からは見受けられなかった。

「この機体はシステム周りが少々特殊だね。まだ暫く調整に時間がかかるんだ」

「随分と悠長なことだ」

「何事も焦りは禁物ということさ。物事をなすにはタイミングというものがある」

己の機体を見上げ、ヴィダールは言葉を紡ぐ。

「周りを見ずにただがむしやらに突っ走っているだけでは、足下に開いた落とし穴にさえ気付かぬものだよ。……今になって、それが分かる」

最後の言葉は小さく呟くようで、ジュリエッタの耳には届かなかった。

「それは私の事を言っているのですか？」

「いや、自戒のようなものさ。気に障ったのであれば謝罪する」

言いながら、ヴィダールは思考を巡らせている。

（俺やこの娘、そして『彼女』。ラストルは本格的な武力衝突を前提に駒を集め始めている。……やはりマクギリスと雌雄を決せねばならないと考えているのか）

彼はこの場にはいない、『もう一つの駒』について思いを馳せていた。

アリアンロッドのMS整備主任【ヤマジン・トーカ】は、1隻のハーフブーク級と共にどこにも知れない宙域へと赴いていた。

『ある機体』のテストのためである。一通りのタスクを終えたその機体が帰還し、彼女は早速整備班に檄を飛ばしていた。

「冷却を急いで！ 問題の洗い出しに入る、各班は冷却終了と同時に解析作業を始めて！」

作業員が忙しく動く中、件の機体のコクピットが開き、パイロットスーツの人物が飛び出してヤマジンの元へと向かって来る。

「どうだい、この子の様子は」

動くことなく問うヤマジン。問われた方は折りたたみのヘルメットをパイロットスーツに収納しながら応えた。

「反応は素直だねえ。けど、アタシとしちゃあ物足りない」

ショートカットの端正な美人と言える人物である。だがその目は

深く澱み、おぞましいような凄みを感じさせる。

「あと3割反応を上げられないかい？ そうすりやもう少し良い感じになると思うんだけど」

「並の人間ならとうの昔に限界を超えてる、最大で15Gを超える領域でも物足りないって？ あんたテストってこと忘れてるだろ」

「こいつの限界を洗い出すってのがアタシの役目じゃないか。その後の『ご褒美』のために頑張ってるのに酷い言いざまさ」

呆れたようなヤマジンの言葉もどこ吹く風だ。どうにもこの女性、常識の範疇にないらしい。澱んだ目のまま、どこか夢見がちな様子で己の機体に目を向ける。

「ああ、待ち遠しい。リボン付きの悪魔と熱く思いを交わせる時がさ」
血のような深紅に染め上げられた機体。後に「レギンレイズ・ジュリア」と名付けられる機体の同型機。いや、魔改造された原型機は、猛りながらその時を待つ。

それを駆る女の名は「マリイ・フォルク」。かつての演習でランディに敗北を喫しながらも、最後まで食らいついた女である。

約束通り2週間でマクギリスが派遣した部隊は火星圏に到達した。

だがそのまますぐに海賊討伐とはいかない。

「今回この作戦の指揮を執らせて貰う、石動・カミーチェ三佐だ。よろしく頼む」

「ごちうこそ。……ようこそ火星圏へ。大した歓迎も出来ないが、そこは勘弁してくれ」

火星軌道上宇宙港箱船。イサリビを筆頭に鉄華団の船が収納された一角に、部隊の指揮を執る石動本人がわざわざ顔を出しに来た。すぐには出陣できないと伝えに来たのだ。

「用意を急がせておいて申し訳ないが、出立は暫く待つて欲しい」

「どういう事だ？ 電撃戦を仕掛けるって話だったが」

眉を寄せて問うオルガに、石動は状況を説明した。

「まず夜明けの地平線団の動きが予想以上に鈍い。これを見てくれ」

言いながらタブレットの画面を示す。そこに映るのは広域の戦術マップであった。それを見るオルガの目が鋭いものとなる。

「火星支部とうちの諜報部、それと捕らえた敵の構成員の証言から割り出した大まかな現在位置だ」

「連中、大分広範囲にバラけてるな」

「恐らくはこちらの動きが早すぎて、集結が間に合っていないのだろう。このまま打って出れば各個撃破は出来るかもしれないが、サンドバルを取り逃がす可能性も高い。ある程度奴らの集結を待った方が良いだろう」

「確かに。しかしこの様子だと結局は通常の航海と大して変わらない時間まで待たなきゃならねえか」

「その分『色々と用意が出来る』。当然『君たちも』な」

「……なるほど」

得たりとばかりに頷くオルガ。早すぎると言うことが逆に徒になるとは思わなかったが、その分準備や情報収集に余裕が出来る。悪いことばかりではないと考え直した。

「そしてこれはこちらの都合だが……『送り狼』が遅まきながらもついてきているようだね。恐らくはこちらが動けばかち合うはずだ」

「それは……」

大体の状況をマクギリスから聞いているオルガは何となく察した。恐らくはアリアンロッドあたりが横槍を入れようとしているのだろうと。

「下らない足の引つ張り合いさ。だがこれは利用できる。数の差は依然あるからな、『先にぶつかって貰う』というのも悪くない」

「なかなかえげつない事を考えるじゃないか」

考えていることを見透かしたか、オルガがにやりと笑う。それに石動はすまして応える。

「ランデール一尉にしごかれれば、これくらいは思いつくさ」

「……あんたも『犠牲者』ってわけか」

ちよつとだけ渋い表情になるオルガ。そうしてから彼は石動に右手を差し出す。

「あんたとは仲良くやれそうだよ、石動さん」

「そうだな。……改めて、よろしく頼む」

決して友情ではない、同病相憐れむ的ななにかで彼らの協力関係は成った。

まあそれはともかくとして、彼らは改めて打ち合わせや準備を行う。

出立したのは石動たちが到着してから4日後。ほぼ通常航海で合流するのと変わらぬ時間が過ぎていた。

夜明けの地平線団の正確な位置が戦術ディスプレイに映し出される。それを見た一同の感想は見事に一致していた。

『罨だな』

オルガ、ユージン、石動はおろか普段は戦術に口を出さない昭弘や三日月までもが口を揃えてこれだ。あからさま過ぎるのもほどがある。

「旗艦を含めた3隻だけが合流してアステロイドベルト近海で速度を落とす。そこで他の船の姿は影も形もない。これが罨でなくてなんだつーの」

ユージンの言葉が全てを表していた。夜明けの地平線団が艦隊の総数は10隻を越える。旗艦と少数のみを残してあちこちに散らばり神出鬼没の海賊行為を繰り返すのは常套手段であったが、集結する時間はあつたはずだ。鉄華団がGHと組んで討伐に赴くという情報が流れるには十分な時間が経っている。こんな隙だらけの行動を取るような連中であれば、とうの昔に討伐されていただろう。

「だからといって手をこまねいているわけにもいかない……と、普通であれば焦りが出るところだが。……上手いこと『送り狼』が間に合ったようだ」

無表情に見えて、微かな笑みが口の端に浮かぶ石動。その目は戦術ディスプレイに現れた『新たな艦影』に向けられていた。

「そう上手いこと仕掛けるか？ 連中」

「まず間違いなく仕掛ける。『あの艦隊司令』ならほぼ確実だ。……無能なワンマン、と言えば理解できるか？ 明らかにああいう罠には引つかかるタイプさ」

馬鹿にして言っているわけではない。ただ淡々と事実を述べているだけだ。最低でも石動にとってはそうであった。

しかしオルガにとつては微妙に納得できない部分である。彼が相対してきたGHの上位——セブンスターズクラスの者は、食わせ者（マクギリス）であったり気合いの入った強者（カルタ）であったりしたのだから無理もなかった。まさか本物の馬鹿がその同格に位置しているなどと思えるものではない。

まあ目の当たりにすれば嫌でも理解するだろう。納得させる徒労を諦めて、石動は話を進めた。

「ともかくアリアンロッド艦隊が仕掛けると同時にこちらは動く。狙うはサンドバル・ロイターが首一つ。君たちはそれに集中してくれ」「アリアンロッドがこっちに仕掛けてきた場合は？」

「可能な限り無視だ。どうしようもない場合交戦は許可するが、一応こちらで用意した警告は全域通信で流してくれ。そして交戦記録も最初から最後まで録っておいて欲しい」

「被害を受けたら保証はあるんだろうな？」

「勿論だ。当面はこちらで立て替えるが、やらかしてくれたのであれば奴らの尻の毛まで筆つてやるさ」

最初から全開でやる気満々である。むしろどうやってイオク率いる第2艦隊をやりこめるか。作戦の成否はそこにかかっていると、石動はそこまで考えていた。

「ともかく奴らは味方じゃない。せいぜい夜明けの地平線団に対する

盾にしてやるしかない障害物だと心得てくれ」

「酷い扱いだが……まあ了解した。向かってきたら死なない程度に蹴散らせばいいんだな？」

「そう言うことだ。面倒だろうがよろしく頼む」

こうして、大体の作戦概要は決定した。後はタイミングを待つばかりである。

果たしてイオク率いるアリアンロッド第2艦隊は想定通りに動くのか。そして混戦が見込まれる中、オルガたちは目的を果たせるのか。

さて、その問題のたわけ……もといアリアンロッド第2艦隊司令、イオクであるが。

「ふん、賊どもの集結を待つて一網打尽にするつもりか。よほど新設部隊の戦力に自信があるらしい」

戦術ディスプレイを見ながら、訳知り顔でそう言った。

画面はオルガや石動たちが見ていたものとはほぼ同じ。ただ第2艦隊からの視点で展開しているという違いがある。しかし得られる情報に差はない。そこから彼が下した判断は。

「詰めが甘いな。旗艦が特定され、なおかつ向こうの戦力が集結していない今こそ絶好の機会ではないか。……だがこちらとしては都合が良い。奴らに先んじて賊どもに仕掛けるぞ」

あっさりと引つかかっている。彼は第2艦隊の司令官を拝命してまだ日が浅いが、それなりの教育は受けてきたはずだ。だが才覚云々よりも性格的などところに問題がありそうだった。

まあ本人はともかく部下にはそれなりに優秀なものもいる。恐る恐るながら具申しようとする兵があった。

「イオク様、敵の配置はあまりにも不用心なものです。場合によつて

は罠が仕掛けられている可能性も……」

しかしながらイオクは聞く耳を持たない。

「浅はかな賊が巡らす奸計など、取るに足らないものだろう。それに例え罠が張ってあったとしても、我等アリアンロッドが精鋭。真正面から食い破つてくれるわ！」

確かにアリアンロッドは実戦経験も豊富で錬度も高い。現在イオクが引き連れているのは第2艦隊の半数、5隻であるが、普通の海賊であれば十分に過ぎる戦力だ。イオクの言葉はあながち過信とも言い難い。

その上で、彼に従う部下たちもそれなりに自負があった。側近の多くはイオクと近い世代のもので固められていたが、多くのものは先代から仕える錬度の高い兵だ。その自尊心を刺激されるようなことを言われれば奮起もしよう。

まあそもそもが、クジャン家の御曹司たるイオクに強く出られる人間が周囲に配されていないというのが一番の問題であった。例えば経験豊富で、イオクを諫められるような人間を副官として配していれば、まだ状況は違ったであろう。だが現状は、恐る恐る具申する程度で彼の方針を曲げるところまでは行かない。今回も部下は戸惑いこそしたものの、結局誰一人反対意見を述べることはなかった。

確かにイオクが率いる兵は強い。だが……敵を過小評価したこと、この先の苦闘を招くことになる、彼は想像もしていない。

そして、この戦いから己の運命が大きくねじ曲がってしまうことも、神ならぬイオクには知るよしもなかった。

※今回のえぬじい

「イオク・クジャンの戦い方を見せてやろう。これが……ガチャを回すと言うことだ！」

おい中の人出てんぞ。

25・鍛え方が違うんだよ

小一時間ほどで、第2艦隊は夜明けの地平線団の艦隊を視認可能な距離まで詰めていた。

「敵艦隊、停止しています。こちらに応戦する模様」

「は、たかだか3隻で我等に立ち向かう、その度胸だけは認めて……」

「っ!? 敵艦隊後方にエイハブウェーブ反応! これは……敵艦隊はリアクターをスリープさせた僚艦を曳航していた模様! 敵艦隊の正確な数は……10隻です!」

「なに!?!」

出鼻をくじかれる。確かに第2艦隊は高い錬度を誇る。だが歴戦の海賊が倍の数で襲いくるとなれば苦戦は必至と言わざるを得ない。しかし。

「ふ、ふん! 味な真似をしてくれる!」

多少の動揺は見せても、イオクは引かない。プライドと自信、そして自覚のない過信が引くという選択を取らせない。

「MS隊を出せ! 私も出る、機体の用意を急がせろ!」

「しかしイオク様が自らお出になる必要は……」

「賊どもに我等が威光を示さねばならん! それに折角ラスタル様が気を配って新型機を優先的に回して下さったのだ。良い実戦テストとなるろう」

自分が敗北することなど欠片も考えていない。これまではそうしたいた相手と遭遇もせず、危ういときには部下がフォローに入ること
で危機を免れてきた。『本物の命の危機』というものを、彼はまだ体験
したことがない。

颯爽と身を翻し格納庫へ向かう。これから先が本当の戦場である
とイオクは理解しているのかどうか。

ともかく彼は、迷うことなく修羅場へと足を踏み入れる。

アリアンロッド艦隊の反応を見て、旗艦のサンドバルはにやりと笑みを浮かべた。

「ほう、やる気か。さすがはGH最大戦力といったところだな」

相手がアリアンロッドだと分かっているも何ら動じることはない。それほどまでに彼は己の持つ戦力に自信を持っていた。

「こちらもMSを出せ。ヒューマンデブリの兵を先行させろ」

そう言うってから彼は「そうそう」と付け加える。

「手柄を立てた奴には『IDを返してやる』と伝えておけ。その上で希望するなら正式に取り立ててやることもな」

それはヒューマンデブリたちに自由を与えるということだ。その言葉に背後に控える側近——双子の男たち、その片割れが問いを投げかける。

「いいんですかい頭目？　そこまでしてやって」

「なに、そう言えば死に物狂いで働いてくれるだろうさ。ここ以外に居場所がないとはいええ、自暴自棄になられても困る。目の前に人參ぶら下げておいたが良いだろう」

別に彼は嘘など言っていない。ただGHの兵相手では手柄を立てるどころか生き残るのも難しいであろうが。

「せいぜい連中を疲弊させてくれれば御の字よ。まだ戦力に余裕はある。連中の『後詰め』も控えているんだ。本命は取っておかないとなあ」

彼らも独自の情報網があり、今回の状況は大体理解している。アリアンロッドと新設部隊、鉄華団。共闘はしていないがどちらかが先に仕掛け、もう一方がそれに乱入する形になると踏んでいた。まあどのような形になるとしても十分な戦力を用意してある。纏めて返り討ちにし、夜明けの地平線団の名を世に轟かせてくれる。サンドバルはそう決意していた。

彼には野望がある。テイワズの下部組織である鉄華団、そしてGHを蹴散らし、自分たちの武威を示す。それで名を上げさらに夜明けの地平線団が規模を拡大し、新たな一大勢力——自分の『王国』を作り上げる。そのような目標があった。

今回の戦いは彼にとつての桶狭間、この先の行く末を決める大勝負である。それに勝つために彼は準備を整え、そしてそのことに自信を持っている。故に己の勝利を疑っていない。

だが、想像以上の『怪物』が待ちかまえているとは、夢にも思っていなかった。

最初の交戦から自力に勝るMS部隊が果敢に攻め込み、第2艦隊の有利に戦況が進んでいるように見えた。

しかし。

「自由だ！ 俺は自由になるんだああああ!!」

「死ね死ね死ね死ね死ねエ！」

「な、なんだ、なんだこいつらは!?!」

ガラム・ロディを主力としたMS部隊は決して強くはない。だが誰も彼も機体が損傷しようが四肢がもがれようが、果敢に、いや死に物狂いで襲いかかってくる。その気迫というか鬼気迫る勢いに、徐々に押され気味となっていた。

死兵と化した。そう言っても良いヒューマンデブリたちの奮起には理由がある。彼らがサンドバルの言葉を信じたのは、これまでも手柄を上げた者は相応に待遇を良くされたからだ。

基本ヒューマンデブリは使い捨ての兵として扱われるが、中には生き延びて技量を上げる者もいる。そう言ったものたちが反抗したりすれば面倒なことになるのは目に見えているので、それを防ぐために待遇を改善するのである。

目に見えた飴と鞭であるが、他に縋るものないヒューマンデブリにとつては天から垂らされた蜘蛛の糸も同然であった。そんな経緯があるが故に、彼らはサンドバルの言葉を信じ、死力を尽くす。どうせ元々ゴミのように扱われる命だ、それをかけて自由を手に入れられるのであれば安いもの。死か自由か。彼らが奮起し死に物狂いになるには十分な理由であった。

徐々に流れが変わりつつあるそんな戦場の一角で。

「もらったあああああ！」

「くっ！」

1機のガラム・ロデイが、体勢を崩したグレイズにとどめを刺さんと得物を振り上げる。

その刹那、横合いからの打撃がガラム・ロデイを吹き飛ばした。

「無事ですか!? 一旦下がって体勢を整えて下さい！」

「た、助かった三尉、恩に着る！」

割って入ったのは、一般のグレイズと同じく緑色に塗り上げられたGH最新鋭機「レギンレイズ」。試験的に実戦投入されたその先行生産機を駆るのはジュリエッタ。彼女はラスタルの直轄として単独行動を許されており、遊撃として戦力に穴が開いたところを埋めるべく奮戦していた。

だが先程からこのような事を繰り返している。徐々に押されつつある戦況を、彼女は肌で感じつつあった。

「こいつら、今までの敵とは違う。このままでは……」

一方。

「ふむ、敵もなかなかやる。我々も前に出るぞ！」

戦況を見ていた（理解しているかどうかはなはだ怪しい）イオクは、自ら戦場に飛び込もうとしていた。

しかし。

「お待ち下さいイオク様！ 指揮官が軽々しく前に出てはなりません！」

「兵たちを信じ、堂々と構えるのが上に立つものの器量。ここは兵たちにお任せ下さい！」

周囲の側近がもつともらしいことを言いながら必死で止める。イオクが乗っているのは黄土色の専用色に塗り上げられたレギンレイズ。しかしながら機体の性能はともかく、彼の技量はそこその域を出るものではなかった。試作の大型レールガンを専用装備としているが、射撃の腕は『ちよつと上手い』程度のもので、実の所接近戦をさせないために配下のものが口八丁で説得して装備させたのが真相である。

そんな彼が前線に出ればどのようなことになるか日の目を見るより明らかである。しかしながらGHではどういう訳だか若手の指揮官は前線に出たがる傾向があった。これに習ったのかイオクもまた前線に出たがる質だ。側近のものたちは毎回それをなんとかして食い止めるという苦勞があった。

「イシュー家のカルタ殿は、己の命を賭けて前線に赴いたという！セブンスターズが一角としてそれに習わずどうするか！」

「状況が違います！　どうかご自愛を！」

部下の機体になかばもみくちやにされるようにして藻掻く黄土色のレギンレイズ。そうこうしている間にも戦況は動いていた。

「あれが指揮官機！　奴を仕留めればア！」

防衛線を運良く潜り抜けた1機のガルム・ロデイが、目敏くイオクの機体を見出す。なにやら諍いを起こしているようだが絶好の機会だ。それなりに生き延び技量もあるせいで支給されていた大型のバスターブレード構え、その機体は後先考えない突貫を敢行する。

イオクの我が儘にかまけていた周囲の側近は反応が遅れた。気付いたときには致命的なまでに接近を許し、最早回避は不可能と思われた。

ならば主の盾になるとばかりに敵へと向き直ろうとしたところで。

「何をしているのですかイオク様！」

突如割って入った影が、横合いからガルム・ロデイを蹴り飛ばす。

言うまでもないがジュリエッタのレギンレイズだ。

「このようなことばかり……ラスタル様の兵とあろうものが情けないっ！」

「ジュリエッタ！ 助太刀は無用だと……」

「いいからイオク様は采配に徹してください！ ここまで攻め込まれているということは、状況は芳しくないのですよ！」

「い、言わせておけばこの山猿が……」

『落ち着いて下さいイオク様！』

いきり立つイオクの機体を必死で押さえ込む側近たち。それを尻目にジュリエッタは戦場に向き直った。

押し込まれてきている。損害はこちらのほうが少ないが、勢いと流れは完全に向こうのものだ。敵MSの数はこちらを少し上回る程度。だが艦数から考えればまだ余力があると見て良い。

（イオク様にラスタル様の半分も才覚があればっ！）

ラスタルならこのような無様は晒すまいと歯噛みする。ともあれ今はそんなことを言っても仕方がない。状況が好転するわけでもないのだ。

（味方のフォローにはいるのも限度がある……ならば、一か八か敵の旗艦を狙うか？）

あまりにも無謀な思考がジュリエッタの脳裏を掠める。

しかしそれが実行される前に、新たな動きが生じる。

「良い頃合いだ。オルガ団長、準備は？」

「ああ、こっちはいつでも行けるぜ」

「よし、では始めようか。……総員第一種戦闘配備、全艦最大戦速！

MS部隊を順次発進させろ。私も出るぞ」

石動が指揮する艦隊と、鉄華団が牙を剥く。

大型の推進ユニットを船体後方左右に増設されたハーブビーク改級3隻に続き、イサリビとホタルビが追従する。

先行するハーブビーク改級から次々と放たれるのは、増加装甲を備

えた上両肩や両足、後ろ腰などにスラストユニットを装備したグレイズ改造機スタークグレイズ。その指揮を執るべく石動は、マクギリスより譲り受けたシュヴァルベ・グレイズを駆る。

一方鉄華団も順次MSを出撃させていた。

「雑魚は適当に蹴散らせばいい。だが頭のサンドバルは生け捕りにしてくれと言うことだ。勢い余って潰さないでくれよミカ」

「苦手なんだけどな生け捕り。……まあ何とかしてみるよ」

「三日月さん、発進準備できました！ コントロール渡します！」

「了解。三日月・オーガス、バルバトス出るよ」

先陣を切って飛び出すのはもちろん三日月駆る白き鬼神。それに次ぐのは。

「行けるか、昭弘？」

「ああ、問題ねえぜ副団長」

「よし、そいつの初陣だ、派手にぶちかましてきな！」

「応！ 昭弘・アルトランド、〔グシオンリベイク・明王丸〕。出るぞー！ ユージンが指揮するホタルビから飛び出すのは、バルバトスと共に改装されたグシオン。全体的に無骨さが増したその機体は、主腕と背中副腕に4丁のアサルトライフルを構え、敵が近づく端から弾丸をばらまいていく。」

そして彼らに続いて獅電やランドマン・ロデイが次々と飛び出していく。

「これまでにない大規模戦だ、油断するんじゃないよラフタ」

「そつちもね。タービンス組、行くわよ！」

出向組の二人も躊躇うことなく戦場に飛び込む。

突然の乱入。それは決して第2艦隊の助けになるものではない。

「こちらはマクギリス准将配下試験遊撃艦隊。現在そちらと交戦中の目標は、当艦隊が討伐を予定していた賊のはず。一体どういう見か説明を頂こう」

「こちらはアリアンロッド第2艦隊。現在の状況はこちらが哨戒任務を行っていた最中に生じた偶発的な戦闘である。そも地球圏外の治安維持は我等が責務。非難されるいわれはない！」

それぞれの旗艦に残った士官同士が通信を交わす。お互い状況を理解している上での白々しいやりとり。それは決して友好的なものではない。

「先に接敵した以上、交戦権はこちらにある。邪魔をしないで貰おうか」

「そう言われてもこちらとて任務、引き下がるつもりはない。援護及び協力の要請が無かったことは記録させて貰う」

乱暴に切られる通信。試験艦隊の士官たちは、呆れた様子で鼻を鳴らした。

「やはり協力を申し出ることはなかったか。石動三佐たちの予想通りだったな」

「あれだけ押されているのに随分と強気で。余裕などないだろうに」
「縄張り意識とプライドが、手助けを許さんのだろうな。……MS部隊を援護する。敵艦隊に砲撃を集中、やつらの戦力を引きずり出すぞ！」

砲火が激しさを増す。乱入により一気に戦況が動いた。奇襲を受けた形になる夜明けの地平線団のMS部隊は、その戦力を削られていった。

「あつちもヒューマンデブリか……悪りいが、手加減してる余裕はなくてね！」

「シノ、できれば1機捕まえてくれ。データを吸い出して敵艦隊の正確な情報を割り出す」

「交戦中だ、十分気を付けろよ！」

ヒューマンデブリの保護にも力を入れている鉄華団だが、流星にこの状況ではそんな余裕もないし、第一完全に我を忘れて死に物狂いで襲いかかってくる相手に向かって投降を呼びかけても無駄だ。結局の所蹴倒していくしかない。

旗色は変わった。だが旗艦のサンドバルは全く余裕を崩していないかった。

「ふん、本命のお出ましか。……連中もなかなかやるようだ。ヒューマンデブリにや少々荷が重いな」

「頭目、では」

「ああ。……『正規』のMS部隊を出せ！ 糞がつてる餓鬼どもを返り討ちにしてやれ！」

海賊の艦から新たにMSが出撃していく。阿頼耶識が搭載された機体のように滑らかな動きではないが、洗練された技量を持つものたちだとはつきり分かる。

夜明けの地平線団が正規兵。神出鬼没の海賊行為を繰り返す彼らの錬度は、アリアンロッドと比べても勝るとも劣らないものだ。

「兵の錬度を底上げしていたのが貴様らだけだと思うなよ餓鬼ども！」

新手の登場に、しかしオルガは笑みを崩さない。

「は、来やがったか。……だがな、教官のしごきに比べりや屁でもねえんだよ」カクカクブルブル

「団長団長！ ちよつとトラウマってますから思い出すのやめましよう！」

「お、おう。悪りい悪りい」

オペレーター少年に突っこまれ、我知らずかたかた身震いしていたオルガは慌てて身を正す。

団員たちがある程度の技量になったら受けさせられるランディの教練。オルガたち幹部もそれを受けさせられている。いや、「幹部は一番きついところをやらなきゃならねえ」というランディの持論の元、『彼が全力全開の』教練を『一月』受けさせられた。

結果、ユージンは白目を剥いて魂を口の端から漏らし、シノはうけけけと壊れた笑い声を上げ続け、昭弘は斜めに傾いだまま暫く戻らず、ビスケットはゲッター線に汚染されたかのごとく瞳に渦を巻かせ、そしてオルガは真つ白に燃え尽きていた。

何しろ弱音を吐かない事には定評のある三日月をして、疲労困憊と言った様子で「……ちよつと疲れた」と言わしめたほどだ。メリビットが何をしたんですかとランディに詰め寄っても致し方あるまい。もちろんランディはすました顔でこう答えた。

「俺の知ってる技術、知識を三週間ぎつちり詰め込んで、残りの一週間不眠不休でこれでもかかっていう最悪の状況下の各種訓練及びシミュレーション漬けにただけだ」

ランディが全力全開で行ったそれがどれほどの地獄か想像に難くない。つーか殺す気か最後の一週間。当然ながらこの狂人は正座でメリビットの説教をたっぷり聞かされる羽目になったが、多分懲りてない。

それはさておき数回にわたって行われたそれは、幹部たちの正気度を削るのと引き替えにして、確かに技能、技量を向上させていった。しかしながら幹部たちのぶっ壊れっぷりから一般の団員には恐れられ、いつしかその地獄の教練は「ランディブートキャンプ・ルナティック」と称されるようになった。ちよつと反抗的な団員とかに「おめえルナティック受けさせんぞ」と言ったら即座に五体投地で許しを請うた、などというエピソードもあつたとかかなかつたとかいう所から、どれほど恐れられたかがよく分かるだろう。

とにもかくにもそんなモノを受けさせられたオルガたちから見れば、まだこの状況は温い。それは交戦を行っている面々にしても同様であつた。

「良い動きはしてるけど、タービンスの人たちほどでもないな」

バルバトスが両手に持つショートメイスでガラム・ロディを片っ端から殴り飛ばしながら、三日月が呟く。

現在の彼の技量であれば、いくら練度が高くてもそこらの海賊など

歯牙にもかけない。その上で、どうにも三日月の事が知れ渡っているのか、敵は前線で暴れるバルバトスに群がってくる。討ち取って名を上げようとしても言うのだろう。だがその行為は狼の前に子羊の群れを投げ込むがごとき真似でしかなかった。大体鎧袖一触つといった感じで蹴散らされていく。

単純作業のように敵を撃破していく三日月には、ぼやく余裕すらあった。

「しかしこの警告？　って奴、意味あんのかな？」

通信機のレコーダーから垂れ流しになっている全域通信。それは第2艦隊の兵に向けられたものだった。

簡単に言えば「こちらは民間の協力者。正規の依頼と契約に基づいて行動しているから責任はGHにあるし、下手に手出ししたら訴訟問題とかになるかもね」という内容を小難しい言葉で語るものだ。鉄華団の少年たちが直に語るには面倒だし正確に覚えられるかも怪しいと、ある種の気を使った石動のアイディアである。

まあ無視されるであろうが、一応警告を放ったという体は取れる。それで問題が起きればリアンロッドをやりこめる材料の一つに成るのであろうという目論見もあったが、三日月たちにとっては少々煩い言葉の羅列でしかない。

「まあいいや。そろそろダンテが旗艦の情報とか吸い出しているところ……」

眩く間に、背後から1機のガルム・ロデイが襲いかかる。バルバトスは振り返りもしない。パイロットは仕留めたと思っただろう。

がきり、とシースメイスを背負ったバックパックが展開する。メイスをホルドしたまま振り回されるそれは、新たに備えられたサブアーム。主腕と変わらぬ滑らかな動きでシースメイスを操り、ガルム・ロデイの打ち込みを弾き飛ばす。

即座に振り返ると同時にショートメイスが叩き込まれ、コクピット周辺を潰された機体が吹き飛ぶ。三日月はむ、と唸った。

「これ(サブアーム)便利だけど、慣れすぎるとマニユアルの時に癖で使いそうになって困るかなあ。出来るだけ使わないようにするか」

戦いの中で先のことを考える。本人に自覚は無いが、三日月は臆気ながら『将来のこと』を意識しつつあった。その変化が吉となるか凶となるかはまだ分からない。

まあそれはいい、今は目の前の戦いに集中だと、彼は意識を切り替える。

白き疾風は、留まることなく有象無象を吹き飛ばし続けた。

四方に正確な射撃を行って威圧するグシオンを脅威と見たか、海賊のヒューマンデブリが駆る機体が一齐に襲いかかってきた。

「ふん、三日月よりトロいと見られたか?」

雲霞のごとく迫り来る敵に対し、昭弘は余裕を崩さない。弾数が残り少なくなつたライフルを破棄し、腰の後ろに備えられたごついシールドのようなものを引き抜く。同時に射撃モードの頭部が展開、露わになつたマシンフェイスがカメラアイを力強く灯す。

弾丸を浴びる危険が無くなつたからか、敵は四方八方から飛び込んでくる。連携も何もあつたものではない出鱈目な突撃であつたが、それが逆に動きを読みにくくさせている。しかしそのようなことなど一切関係なく、グシオンは片っ端から手近なガラム・ロディをシールドで殴り飛ばしていった。

「この、こいつっ!」

「なんてえ。パワーだ!」

ただ無造作に殴りつけているように見えるが、その打撃は一撃で機体を行動不能に追い込んでいる。

「スピードは出ねえが、その分力は有り余ってるんでなあ!」

グシオンがパワーに振った調整を施されているのは確かだが、それ以上に昭弘の戦い方が乱雑に見えて巧みなものとなつていた。

格闘技などと言う『後の先』。先に動いた相手の機先を制して打撃

を叩き込む。昭弘は未熟なれどそのような戦い方を習得しつつあった。教練を受け自分でも鍛え試行錯誤した末、そういったやり方が性に合っていると判断したらしい。

それはどうやら正解であったようで、寄せる敵をもともしない。だが流石に敵も然る者ということか、死に物狂いで挑みかかる。

そして。

「くらああああー！」

1機のガラム・ロデイが、頭部を粉碎されながらも組み付こうとしてくる。その機体はすぐさま殴り飛ばされるが、そこに一瞬の隙が生じた。

「おおっー！」

「こいつだけでもっー！」

僅かな隙を見逃さず、周囲の機体が一斉に躍りかかり、グシオンへと組み付く。1、2機はふりほどけたが、獲物に集る蟻のごとくまとわりついたガラム・ロデイは埋め尽くすようにしてグシオンを拘束する。

そこに。

「よくやったお前ら！ そのまま押さえてろ！」

正規の海賊兵が駆る機体が、槍のような獲物を振り上げ襲いかかる。ヒューマンデブリの機体ごと仕留めようと言う腹だったのだから。

組み付かれた機体に埋め尽くされた下で、グシオンのカメラアイが一層力強い光を宿した。

どがむ、と衝撃が奔り、組み付いていた1機が吹き飛ばされる。それを成したのは左手の盾、その端から飛び出した杭——パイルバンカーだ。

「なにっ！」

海賊が怯む間に杭は収納され、代わりにじゃきんと刃——高周波ノコが飛び出し、別の機体の肩口に食い込む。同時にグシオンの両肩から垂れ下がったサイドアーマーと、長く伸びた腰部フロントアーマーが展開する。現れたのは細身の『腕』。主腕と背部の副腕、そして新た

に備えられた4本のサブアームが、とりついた機体たちをがっしりと掴む。

さらに加えて増設されたサブアームの先端からまばゆい光が生じ敵機の関節やカメラアイを焼き切っていく。鋼材の切断などに使われるレーザーブレードが仕込まれているのだ。

「おおるア!!」

昭弘はスロットル全開でまわりついた敵機を『引きちぎりながら』無理矢理拘束を解いた。その様はまさに阿修羅のごとく。まき散らされる機体の部品が、海賊兵のガラム・ロデイが打ち込みを阻害する。

「くっ、この化け物が!」

その兵は悪態をつけて後退しようとするが。

「逃がすかよ!」

シールドの先端を離脱しようとする機体に向ける。そこから飛び出すのはシュヴァルベ・グレイズのものに似たワイヤーアンカー。それは狙い変わらずガラム・ロデイの脚に巻き付いた。

「うおっ!」

力任せに引つ張られ、ガラム・ロデイは体勢を崩しグシオンの方へと引き寄せられる。スラストアーに火を入れ自らも加速しながら、グシオンはシールドを操作する。

がしやりと盾が変形を始めた。見る間に形作られるのは巨大な『鋏』。「マルチザー」と名付けられたそれは、鋏を中心に複数のツールを一体化させた武器であり『工具』である。構えられた巨大な鋏は、吸い込まれるようにガラム・ロデイの胴体フレームに食い込んだ。

「な、が、この!」

「おおおおおりゃあ!」

ガラム・ロデイは鋏から逃れようと抵抗するが、構わず昭弘は力を入れる。ほどなく食い込んだ鋏の間から火花が飛び散り、胴体フレームが切断された。

ふん、と呼気と共に蹴り飛ばされるガラム・ロデイの上半身。憤怒を持って仏敵を討つ明王の名を与えられた機体は、鋏を担いで戦場を

睥睨する。

「さあ、解体（バラ）されたい奴からかかってきな！」

思ったように有利な状況に動いていない。それどころか押され気味であることに、サンドバルは眉間に皺を寄せる。

「やつら思った以上にやりやがる。リボン付きの悪魔に頼ったネズミじゃないって事か」

だが、と彼はまだ諦める様子を見せない。

「逆に言えば、奴らの中核さえ倒しせりやまだ勝ち目はある。……ふん、ここは一つ『起爆剤』を突っこむしかないな」

「頭目」

「では？」

何かを期待したような双子の言葉に、サンドバルは力強く頷く。

「総員に伝えろ！ サンドバルが出るとな！」

その宣言に、艦橋が沸いた。

そして。

「おお、頭目が！」

「我等がサンドバルが出るぞ！」

戦況に危機感を覚え始めた海賊たちが色めきだつ。誰かが咆吼のように頭目の名を呼び、それはあつという間に仲間へと伝播する。

『サンドバル！ サンドバル！ サンドバル！ サンドバル！ サンドバル！』

「なんだ、何が起こっている!?!」

通信機越しの咆吼に、イオクが狼狽えた声を上げた。目に見えて勢いが変わる海賊たち。それを見て取ったオルガは舌を打った。

「ちっ！ ついに動きやがったか。ミカと昭弘は？」

「三日月さんは敵艦隊につっこめる位置にいます。昭弘さんは少し後

方、敵を引きつけてますからすぐには動けません」

「よし、サンドバルが出てきたらミカを向かわせて……」

「団長！・ ダンテだ」

指示を出そうとしたオルガのもとに、敵機を捕獲して後方に下がりデータの吸い出しと解析を行っていたダンテから通信が入った。

「敵艦隊のデータ解析が終わった。今そっちに送る」

「分かった、頼む」

応えるが早いかデータが送られてくる。それに目を通したオルガの眉が顰められた。

「これは……トロウ、石動三佐に通信を繋いでこのデータを送つてくれ！」

シユプレヒコールが響く中、夜明けの地平線団旗艦の上部カタパルトに現れるMS。

逆関節の脚部が特徴的なその機体はヘキサ・フレイムをベースにしたMS「ユーゴー」。オレンジに塗り上げられたサンドバル用の機体は、巨大な円月刀を背中に二振り背負っている。その姿から月輪のサンドバルと呼ばれるようになったのだ。

「見せてやろう、このサンドバルの戦いをな！」

轟、と勢いよく飛び出す。そのままサンドバルのユーゴーは、戦場のまっただ中に飛び込んだ。

「指揮官が飛び出すか！・ しかし好機！」

自分たちの司令のことは取り敢えず棚に上げ、臆することなく向かってくるユーゴーを仕留めんと、数機のグレイズが襲いかかる。

しかし。

「ふ……温いわ！」

目にも止まらぬ抜刀が、先行してきた2機の胸部をコクピットごと

裂く。

「な!?!」

驚愕して僅かに動きを鈍らせた後続の懐に瞬く間に飛び込んだユーゴーは、それをあっけなく蹴り飛ばす。

速い、そして無駄がない。荒くれ者の海賊を黙って従えさせるだけの技量を、サンドバルという男は確かに持っていた。

「ふはははは！ 準備運動にもならんな！ アリアンロッドもこの程度……む？」

哄笑するサンドバルだが、レーダーが急速に接近する機影を捉える。

「あれがサンドバルか。堂々と出てくるだけはあるようだ」

海賊の群れを抜き、突貫してくるバルバトス。ショートメイスを破棄し背中のシースメイスの柄に手をかけたその姿を見て、サンドバルは牙を剥くように笑んだ。

「噂の番犬か！ 貴様はそれなりに楽しませてくれような！」

ユーゴーもまた迎え撃たんとスラストを吹かし、2機は激突する——寸前で。

が、とバルバトスの打ち込みが受け止められた。

「こいつは私の獲物だ！」

割り込んだレギンレイズ。それを駆るジュリエッタは敵意と闘志をみなぎらせてバルバトスと相對する。

「邪魔」

無論三日月は即座に蹴り飛ばした。

※今回のえぬじい

ランディさんの用意したシミュレーションデータ（ルナティツク）って大体こんな感じ。

・飛来してくる数千発の核弾頭＋白騎士（×10）を全て撃墜せよ。打鉄で。

・単騎で7万の兵を食い止める。デルフブリンガー？ ガンダルーヴの紋章？ そんな甘えはない。

・MWでスツーカー乗った閣下の相手。
史実相手が一番無理げな罫。

おまけの機体解説

EB-06sr スタークグレイズ

旧式と成りつつある既存のグレイズを改装した機体。フレームの強化、そして装甲とスラスターを増設し防御力と機動性双方の向上を目指したもの。その性能はシュヴァルベ・グレイズに近いものとなったが、その分扱いが少々難しくなりパイロットにも相応の技量が必要となる。若手が多いマクギリスの艦隊だと持てあますのではと思われるが……？

先行生産型がマクギリス旗下の新設艦隊に配備されているが、この艦隊以外で運用される予定は今のところ無い。

なおその特性はレールガンを標準兵装としていたり大型対艦武器の使用を前提としていたり、宇宙空間での艦隊戦を意識しているようだ。そのことからマクギリスが将来的に何を見据えているか伺える。

某ゲスな仮面ライダーとは何の関係もない。ないったらない。

ASW—G—11R　グシオンリベイク・明王丸

本来であればフルシテイと名付けられるはずだった機体。

基本フルシテイの両肩にサイドアーマーが付き、腰部フロントアーマーが長く伸びただけに見える。しかしそれらはサブアーム、所謂隠し腕となっており、リベイクからの4本に加え計8本の腕を有する。さらに追加されたサブアームの先端にはレーザートーチが内装されており、接近戦用の武器として転用する事も可能。

出力に振ったセッティングを施されており、その膂力はレーザートーチを併用してとはいえ素手でMSの四肢を引きちぎるほどのもの。接近戦、特に組み付かれたときには無類の強さを発揮する。

メインの武器は腰の後ろに備えられた、シールドから変形する鋏マルチシザー。さらにこの武器は鋏の柄に当たる部分に複数の武器を兼ねたツールを内装している十徳ナイフのような『工具』である。この武器、そして機体の仕様は昭弘が『ある目的』のためにオルガに頼み込んで発注させた。

8本の腕を持って複数の武器を使い、阿修羅をも凌駕するという意味合いで明王丸と名付けられたこの機体は、その名に違わぬ力を見せる。

26・楽しませてくれるじゃねえか

海賊との戦闘は激しく、鉄華団の少年たちも疲労したり機体に損傷を受けたりする。イサリビの格納庫では、その対処に追われていた。

損傷したマン・ロデイが格納庫に上がり、コクピットからパイロットが這い出してくる。

「左肩をやられました！ パーツの交換お願いします！」

「おうー。各部のチェックを怠るなよ！ おかしな所気になるところがあればすぐに報告しろ！」

雪之丞の声が響き、整備班が一斉に機体へと取り付き作業を開始する。そしてパイロットの少年は……ちよつとマツドな医者に取り付かれていた。

「いいや、俺は大丈夫っすから！」

「おんしが大丈夫かどうかはええんじや。戦闘における負荷とか疲労とかそのあたりのデータを取らせんかい！」

キシワダは半ば押さえつけるようにして各種機器や阿頼耶識端末を貼り付けていく。至極迷惑そうな少年を、バスケット持ったアトラがまあまあと宥める。

「簡単な検査だと思つて、ね？ 取り敢えずご飯持ってきたからこれ食べておいて」

そう言つて携帯食のパックとドリンクを押しつける。そんな光景が繰り広げられる最中、借り出された新人たちも作業に追われていた。

「63番コンテナ出してくれ！ そつとだぞ！」

「う、うっす！」

船内作業用にコクピットが露出したMWを指示に従つて操るハッシュは、そうしながらも頭の片隅で愚痴をこぼしていた。

（くそ、あの人の戦いぶりが見たいのにな！）

戦闘班に配属となつたハッシュだが、まだ実戦に耐えうる技量では

ないために、今回は整備班の手伝いに回されていた。勿論彼としては大いに不満である。

功を焦っている、と言う面も確かにあった。しかしそれ以上に、三日月の戦いぶりをもう一度この目で見届けたいという思いが強い。先の鉄華団本部に対する襲撃のおり、三日月の戦いを目の当たりにした彼は大いに衝撃を受けた。心に焼き付いたと言っても良い。自分が阿頼耶識を付けたとしてもあのようになれるのか。あの領域までたどり着けるのか。とてもではないがそんな自信は持てなかった。

あの人の、三日月・オーガスの強さ。その源を知りたい。少しでもあの人に近づきたい。ハッシュはそのような思いに囚われていた。だから実戦に出たいと申し出たのだが、結果はご覧の通り。まあ自分でも無理だろうとは思ってはいた。が、やはり口惜しさのような、焦りのような気持ちがある。

そんなことばかり考えていたせいだろうか、MWの操作を僅かに誤り、運んでいたコンテナががこんと音を立てて揺れた。

「馬鹿野郎！ そつとつて言ったじゃねえか！」

「す、すみません！」

戦いを支えるものたち。彼らもまた戦場さながらの修羅場にあつた。

蹴り飛ばされたジュリエッタは、衝撃を堪えながら驚愕の言葉を吐く。

「この私が、虚をつかれた!？」

決して油断などしていなかった。だがただの一撃を避けることが出来なかった。

まるで意識の間隙を突かれたかのように繰り出された攻撃。これが命を刈り取るものであれば、今こんな事を考えることすら出来な

かっただろう。手加減、と言うよりはただ『邪魔を払いのけただけ』。相手にすらされていないという事実は、ジユリエッタのプライドをいたく傷つけていた。

己を鍛えてくれた『師とも呼べる人物』、その人物からお墨付きを貰い、実際配属されたアリアンロッドでは頭一つ抜け出た技量を誇っていた。これまで従事した任務は滞りなくこなし、相応の自信を持つに至っている。だが、それがまるで通じない。一瞬の邂逅にしてそれを見抜けるだけの目があったことは、果たして彼女にとって幸運であったのだろうか。

「これが、名付きか！」

隔絶した怪物たち。それが分かっているなお、彼女は何とか追いつかり紹介せんと化け物たちの舞踏を油断なく見据える。

「ランディやアマダほどじゃないけど、こいつも強い！ 全力だな」

1、2合打ち合っただけで相手の力量を見て取った三日月は、シースメイスから太刀を抜刀。全力を持ってサンドバルと相対する。

「まだ速度が上がるか！ 餓鬼の勢いだけじゃない。リボン付きめ、とんでもないのを仕込みやがったな」

戦慄を覚えながらも、どこか楽しそうにも見える様相でサンドバルは受けて立つ。

疾風と言うよりも、嵐のような勢いで打ち込むバルバトス。それを受けるユーゴーは防戦一方に見える。しかし。

「!? 打ち込みが、受け流される？ 太刀筋が見切られてる………だけじゃない」

柳に風。正しくそのような手応えに三日月は眉を顰める。確かに全ての打撃は受け流されていた。しかしただ攻撃が読まれ、的確な対処を行っているだけではない『なにか』が三日月の太刀を弾く。

「ふん、流石に『これ』と打ち合うのは始めてか？」

ユーゴーが持つ円月刀。ほぼ半円の刃を持つそれは、実の所攻撃より防御に適した武器だ。通常の刃物より極端に曲線で構成された刀身は、斬撃に対し被弾経始を考慮した装甲のような効果を発揮する。苦勞して刀身の角度を考慮しなくとも、受け流しやすい構造であるの

だ。

サンドバルの強さ、その理由の一つがこれである。ナノラミネート装甲の発展により、この時代では銃器の効果は薄い。相手に有効な打撃を与えようとすれば、接近戦となるのは必至であった。となればその接近戦にて優位を取るにはどうすればいいか、サンドバルなりの創意工夫の果てがこの得物である。

勿論、ただ得物に頼るだけならば名を轟かせることなどできはしない。

「こいつはな、こんな風にも使える！」

間隙を突いて、ユーゴーが始めて反撃の一打を繰り出す。それはバルバトスの太刀にて容易く受け止められた――
はずだった。

「っ！ こいつ！」

受け止めたはずの刃の切っ先が、バルバトスの肩装甲を削り、火花を散らす。

刀身をひっくり返し、湾曲した背中の方で斬りつけたのだ。古代ギリシヤの刀剣ハルパーがごとく、鎌のような刀身の中程を受け止めても切っ先は相手に届く寸法だ。これもまた、サンドバルが工夫の一つである。

このような得物を自在に使いこなす、粗暴に見えて技巧派。その上でサンドバルはこの戦いを楽に勝てると思うほど、楽道家ではない。
（こいつを倒せば御の字だが……そう簡単にはいきそうにないか。だが、連中の主力は上手いこと戦場に釘づけた。そろそろ『仕掛け時』か）

斬り結びながらい、とほくそ笑む。戦いはまだ彼の予想範囲内にあった。百戦錬磨の海賊は己の武威に酔わず、ただ勝つための算段を巡らせる。

（何よりも『リボン付きが動いていない』この好機、逃せないからな）
彼が何よりも恐れたのはランディの介入である。ゆえにわざわざ人員を割いて彼の動向を監視していた。流石にティワズのお膝元である歳星で身边を詳しく張るといわけにはいかなかったが、彼が指

揮を執っていた船は動いておらず、また小型艇やMSを用いた形跡もない。どういう理由からか彼は歳星から動くつもりが無いと見た。だからこそ戦力を整えこの戦いに全力を投じたのだ。

勝てる。いや勝つ。その気迫を持って、彼は次なる札を切った。

「っ！ 艦隊後方に新たなエイハブウェーブ！ 数は3！」

「何!? ど、どこから現れた!?!」

第2艦隊の士官に動揺が走る。突如現れた艦影は、背後から容赦なく艦隊に砲撃を加え、MSを吐き出して襲いかかる。

「馬鹿な、まだ戦力を温存していただど?! 一体どこに!?!」

驚愕の声を上げるイオク。無論タネも仕掛けもある。

この戦いに備え、新たに落ち目の海賊たちに声をかけ配下として加えていたのだ。そして前もってアステロイドベルトの周辺にて、船の動力を落とし、小惑星を模したバルーンで船体を包んで偽装を施し待機させていた。MSを前面に出し艦隊が手薄になったところで奇襲をかける。その策は成った。

その中の1隻、その艦長席でどつぷりと太った男が嫌らしい笑みを浮かべる。

「まったく、こんな機会に恵まれるとは世の中捨てたモンじゃねえな。たつぷりとお返しさせて貰おうかガキども」

かつてブルワースと名乗っていた海賊の頭領、ブルック・カバヤンである。鉄華団とタービンズに敗北してこっち、すっかりと落ちぶれていた彼であったが、サンドバルの勧誘を受け夜明けの地平団の傘下に収まっていた。絶好の復讐の機会を得た彼は、暗き恩讐の炎を燃やしている。

完全なる奇襲。これで戦いの流れは大きく夜明けの地平線団に傾くかと思われた。

しかし。

「データ通り3隻、出てきたぜ石動さん！」

ヒューマンデブリの機体から吸い出していた情報から伏兵の存在を察知していたオルガは、慌てず騒がず石動へ回線を繋ぐ。前線にて戦いながら指揮を執っていた石動は、ワイヤーアンカーで敵機を弾き飛ばしながら応えた。

「第2艦隊の背後を突いたか。こちらの軌道を離しておいて正解だったな」

敵ながら見事。これだけの戦力を集め、使う手腕。それだけであれば海賊にしておくのは惜しいとすら思う。

だがその手腕を犯罪行為にしか使わず、各方面に根回しも行っていないのであれば底が知れている。ここで倒れなくともいつかは躓いていただろう。それに関しては別に残念とも思わないが。

それはさておき未だ自分たちと鉄華団に大きな被害は出ていないとは言え、状況は芳しくない。手薄になった艦隊に奇襲を受けたことで、第2艦隊は戦力を引き戻さざるを得ない。そうなればこちらで交戦している戦力は減り、ただでさえ押されている戦況が寄り苦しいものとなるのは目に見えていた。なるほど上手い手だ。どこを突けば崩れるのかよく分かっている。

「横合いからぶん殴る。実に効果的な手段だ」

「俺達もデータを吸い出していなかったらヤバかったかもな」

だが、と二人の男は同時ににやりと牙を剥く。

『ならば殴り返させてもらおうか』

暗がりの中、モニターアイが灯る。

「全機スリープ解除。……さあて、おっ始めようか！」

ブルックが率いる海賊艦のブリッジで、オペレーターがそれに気付いた。

「直上にエイハブウェーブ！ 数は4！ MSです！」

「奴らも伏兵が増援か？ だがたった4機とはな」

かつて敗北したときとは違う、GHが精鋭アリアンロッドとすら互角の戦いを繰り広げる夜明けの地平線団の傘下に加わったブルックは、以前とは違う過信を抱いていた。かの頭目、サンドバルに従っている限り敗北はないと。

彼の不幸は、『相手が悪すぎた』事だろう。

交戦している艦隊から見て上方、目視できるぎりぎりの位置。よく目をこらせばそこに黒い影が浮かんでいる。

一見小型の輸送船のようにも見える。が、それは花開くように船体を展開させた。

MS輸送大型ブースターユニット「クタン五型」。クタンタイプの最新鋭機であり、一度に1個小隊4機のMSを運搬することが出来る。その開いたカーゴベイから次々とMSが飛び出す。

「ガット、クタンはホタルビに合流、ユージンの指揮を仰げ。昌弘、ビトー、エルガー。お前らは新手の艦隊に仕掛ける。連中のMSは俺がやる」

『了解！』

先陣を切るのは濃紺のシユヴァルベ・グレイズ。それを駆るのは勿論この男だ。

「んじゃ、派手にいくぜエー！」

獰猛な笑みを浮かべ、ランディはスロットルを開ける。

歳星から動いていないと見られていた彼がなぜここにいいのか。まあタネは単純なことで、歳星でこっそりタービンの輸送船に便乗させて貰い、適当なところでスリープモードのMSを積んだクタンで

離脱。航路から少し離れた位置で鉄華団を追跡していたのだ。(当然ながら監視には気付いていた) 何もなければ彼は待機したままであっただろうが、いざというときは来てしまった。あまり頼るのはよろしくないけど、いざというときの保険はかけておこうと考えたオルガの読みは、大当たりだったわけだ。

ランデイの機体に次ぐのはそれぞればらばらな機種。

「兄貴たちの前で、格好悪いとこ見せられないよな!」

昌弘・アルトランド駆る「グレイズ改・参式」。かつてグレイズ改二式、いや二代目流星号と呼ばれた機体をさらに改修したものだ。

「は、豚野郎(ブルック)の船かよ! こんなところでお礼参りたあな!」

高機動仕様に改装された「ランドマン・ロデイ強襲型」を駆るのはビトー・アルトランド。

「なんで俺ん時にこんな派手な仕事になるかなー、って」

双子の兄弟であるエンビと交代で「獅電汎用試験タイプ」を任されていたエルガーが、思わず愚痴をこぼす。

ランデイの教練ついでに各種テストや実機訓練、仮想敵機として用いる……という名目で魔改造された3機が、その全力(※なおパイロットはベリーハードまで経験済み)を持って増援の艦隊に襲いかかる。ただの4機。しかしそれは戦況の天秤を五分以上にしてしまう一手。

「な、リボン付きの悪魔だとオ!? 馬鹿なっ!」

その意味が分からぬサンドバルではない。というか目端の利く人間がそれを理解出来ぬはずもないだろう。

が、『その意味が分からぬどころではない』人間が存在した。

「ランディール・マーカスだと!? おのれ、この私の前で臆面もなく!」

イカレポンチの出現を耳にしたイオクは、なぜか激昂した。激昂してこう宣った。

『GHの理念に殉じ散った勇士の名を騙る不屈きもの』が! この私が引導を渡してくれる!」

その言葉は全域通信を通じて戦場全体に響き渡る。

それを聞いたオルガが、石動が、三日月が、昭弘が……つてかランデイを知るイオク以外の全員が、声にならない叫びを上げた。

(((((いつ馬鹿だあああああ!!??))))

イオクの弁護をするつもりはないが、彼がこんな壮絶なる勘違いをしているのは訳がある。彼はランデイが逐電した後に士官学校に入っており、その実情を知らない。かてて加えて朴訥というか人の言うことを表面上だけしか聞かないイオクは、公式的な情報——『ランデイ含む部隊が任務の果てに行方不明となった』、『現在のランデイは本人の名を騙るだけの傭兵』という話を真に受けており、一方的な正義感しか持たないこともあって『実情のランデイに敵愾心を抱いている』。本人大真面目だが、端から見れば馬鹿以外の何者でもなかった。そして彼の配下にとつては災厄以外の何者でもなかった。

「つつつつ~~~~~!!!」

側近の全員がムンクの叫びがごとき表情となったのは至極当然のことだろう。

で、さらに最悪なことに、イオクの言葉は腐れど外道の耳にも届いちやったりしてしまったわけで。

「くっ……」

呼吸を吐いて顔を伏せるランデイ。そして次の瞬間には。

「くはははははははは！　げーっはははははははははは！」

大爆笑である。その目は新しいオモチャを見つけた子供のように歓喜に輝いていた。どす黒いけど。

で、そんなランデイの反応に笑われたと思ったのか、イオクがいきり立つ。

「何がおかしい……何がおかしい！」

「お前の存在そのもの」

一瞬で真顔になってガチの答えを返すランデイ。その間にも海賊のMSを蹴散らしていくのは流石だった。

それはそれとして、予想外でストレートすぎる返しに「な……」とか言葉に詰まるイオク。そんな彼にランデイの口撃が容赦なく放た

れる。

「上級士官が表面上の情報丸飲みにするとか笑うしかねえだろ。それを高らかに宣伝するとか、自分は馬鹿でございと宣伝してるようなモンじゃねえか。なにそれ新手の自慢？」

「な、きつ、きつさまああああああ!!」

顔を真っ赤にして吠えるイオク。彼の人生の中ここまで面と向かって馬鹿にされたことはない。影ではどうだか知らないけど。

「ゆるさん！ この私の名誉にかけて貴様に決闘をもうしこ……」

『お止め下さいいいいい!!』

速攻で側近の機体が寄って集ってイオクのレギンレイズを羽交い締めにして押さえ込む。当然だろう。絶対に関わつちやいけないアタツチャブルなキチ（ピー）と、このアレでナニな主が絡んだらどのような惨劇が起こるか、目の目を見るより明らかである。それが本人だけ酷い目に遭うのですむのならまだしも、絶対第2艦隊、いやアリアンロッド全体に何らかの影響が及ぶ。そんなことはなんととしても食い止めなければならぬ。彼らは全力で必死だった。

「あれに関わってはなりません！ あれは、あれは人智を越えたおぞましいなにかです！」

「奴の言うことに耳を傾けてはなりません！ あれの言葉は悪魔の諫言でしかありません！」

「決してイオク様に関わってはいけないアレでナニで最低最悪の生き物です！ どうか、どうかここはご辛抱を！」

えらい言われようであった。事実だが。

もみくちゃになってるイオク機。その様子を見てランディはプゲラと笑う。

「プププ殿中でござるくってヤツみてえプププ」

「ぬがああああああ！ どこまでも愚弄するかああああああ!!」

『だからやめてとめてアレの言葉聞かないで下さいいいいい!!』

ああもうだめだおしまいだあの男完全にオモチャ扱いだ。オルガや石動、その他大勢は哀れみの視線を向けざるを得ない。

得ないけど。

「……まあ、矛先があっち向いてるうちは俺らに被害はないか」

「……そうだな。貴い犠牲と言うことで」

即座に見捨て意識を切り替えた。こいつらも結構酷いが、助けてやる理由などないしそんな余裕などない。戦況は予断を許さないのだから。

そういったごちやごちやをやってる間にも、やるべき事をやってる人間はいる。

「わりい昌弘、豚野郎は俺が貰う」

「ああ、俺達の方まで存分に喰らわせてやれ！」

一直線にブルツクの船へと向かうビトーのマン・ロデイを見送って、昌弘は機体を別の船に向ける。

腰部からフレームを介して保持される300mm滑空砲を両手に構え、敵艦の砲撃を避けつつ砲弾を叩き込んでいく。

「試作の徹甲焼夷弾だ。遠慮なく喰らいな！」

テイワズ工廠謹製の新型弾頭。試験運用を兼ねて遠慮なしに大盤振る舞いされるそれは、艦に致命傷を与えるほどではないが、少しずつ確実に装甲を削っていく。

一方昌弘と別れたビトーはブルツクの艦に執拗な攻撃を行っている。

「く、くそうあのガキ！ブリッジ周辺をしつこく狙ってきやがる！」

衝撃により発生する振動で揺さぶられる艦長席に必死でしがみつきながら、ブルツクが悲鳴のような声を上げた。

収納され装甲版に覆われたブリッジはそう簡単に破壊できないが、それでも近接の着弾はクルーにプレッシャーと恐怖を与える。対空砲火を巧みに回避し、ビトーはブリッジ周辺を集中的に叩いていた。

「お前らにゃあ世話になったからな！ たつぷりと礼を返させてもらうぜ！」

貫通力よりも着弾で与える衝撃を重視したグレネードランチャーをこれでもかとはばかりに打ち込む。さらに。

「おら懐かしいだろー！」

機体の両肩に備えられた砲が火を噴き、グレネード弾とは比べもの

にならない爆発と衝撃がブルツクの船を揺るがす。

「ば、バスターアンカーだとおー！」

かつてブルワース所属であったグシオンに備えられていた砲。改めて強襲型として改装されたマン・ロディに備えられたそれは、戦艦に対してでも有効な打撃を与える。致命傷にはならなくとも、ブルツクたちの肝を冷やすには十分なものであった。

そして獅電を駆るエルガーであるが。

「あいつらみたいに派手な真似はできねえなあ」

ぶつぶつ言いながらも、艦の砲撃をひらひらと避けている。彼の機体を持つのはMS用のバズーカーとショットガン。対艦装備としては心許ないように思えるが、MS部隊がランディに押さえられている状態であれば、十分に対応可能だと踏んだのだ。

「下手な鉄砲も使いようってね」

艦の砲塔が己の方に向けられるのが分かる。タイミングを合わせて、バズーカーの引き金を引いた。

装填されているのは拡散弾頭、つまりはでっかい散弾である。それは砲塔が吠える寸前で、その周辺に火花を散らす。

例えば発射される寸前、砲口の中に小さな破片の一つも飛び込んだとしよう。それは砲弾を阻害し、大概の場合腔発と呼ばれる砲身の破裂という事故を招く。技術が進んだこの時代の火器としてそれは免れない。そして大口径の砲に対し散弾であれば、それを生じさせるのは難しいことではなかった。

爆発。それは砲身を破裂させることこそなかったが、黒煙を吹き最低でもしばらくの間は使用不能な損傷を与えた。地獄一步手前の教練で、双子の兄弟が見出した対艦戦術。『艦に直接的なダメージを与えられない状態でもその戦力を削ぐ』。射撃がそれほど上手くなくとも、タイミングさえ合わせられれば砲塔を黙らせるその技術を惜しみなく披露したエルガーは、にひひと笑う。

「ブートキャンプに比べりゃヌルヌルだぜ。油断は出来ないけど、なっ！」

対空機関砲の弾丸をかわしつつ、エルガーは再びバズーカーの引き

金を引いた。

ランデイによってMS部隊が引きつけられているからこそその優位であったが、それを十全に活かせる技量を彼らは持っている。

勝負を決めるはずだった増援の艦隊は出オチ……もといその動きをほぼ完全に封じられた。

増援が完全に押さえ込まれている。その事態にサンドバルは己の失策と見通しの甘さを感じ取っていた。

「リボン付きの悪魔に頼っているのではない……『あの男すら使いこなす』か鉄華団！」

最初からランデイの武威を持って圧するのではなく、あくまで彼を札の一つとして扱い伏せる。恐らくはこちらが警戒し逃亡するのを防ぐためであろう。が、そうであってもなかなか出来ることではない。

ランデイの所在を誤魔化し、こちらの策を上回った。確かにGHとの協力関係があつてこそのことだ。だがそれを十全に活かし、アリアンロッドすら利用してみせる。認めざるを得ないだろう。鉄華団——オルガ・イツカという男は、若輩ながらも自分と互角以上の策士、『怪物』である。

このままでは泥沼の上、こちらが敗北する目は十二分にあつた。であればこそ、戦力がまだ残っているうちに撤退するべきだろう。

「……そう簡単には引かせてくれそうにないがな！」

思考している間にも、剣戟は続いている。今のところは互角だが、それゆえに離脱する隙がうかがえない。自分にこの相手を当てたのも、対処できると確信してのことだろう。部下たちもこちらに助力する余裕はない。共に出陣したはずの側近たちは、それぞれ別の戦力に引きつけられている。目の前の敵だけでもなんとかしなければ、詰み

だ。

ならばやむを得ない。

「俺に『こいつ』を使わせるとはな。地獄の番犬……褒めてやるぞ、よ
くぞ俺をここまで追い込んだ！」

コンソールの横に備えられたボックスから取り出したもの。それは
金属製の筒——無針注射器。それをサンドバルは躊躇なく剥き出
した首筋に押し当てた。

「くっ……」

苦悶のような声。それと同時にユーゴーの動きが鈍る。

「なんだ？」

訝しげに眉を顰める三日月は攻撃を躊躇する。絶好の機会だった。
だが何かが引つかかる。己の勘に従い剣を引いたその状況を、千載一
遇の機会と捉えたものがある。

「好機！・もらった！」

周囲の海賊たちを蹴散らしながら三日月たちの様子を伺っていた
ジュリエッタだ。動きの止まったユーゴーの背後から、最速で襲いか
かる。

ユーゴーのモニターアイが不気味に光った。

ゆらり。そうとしか表現できない緩やかな動きで振り返るように
見えたユーゴー。しかしその動きで、フルパワーで放たれたレギンレ
イズの一撃を弾いた。

「なっ!？」

驚愕の声を上げる間にも鋭い蹴りがレギンレイズの腹に叩き込ま
れ、ジュリエッタは吹き飛ばされる。明らかに先程までと『なにか』が
違う。一連の動きで三日月はそれを見て取った。

「頭目があれば使ったか！」

「可能な者は後退しろ、潮時だ！」

サンドバルの変化に気付いた側近の双子が、戦いながらも部下に指
示を飛ばす。流れが変化していく中、サンドバルはゆっくりと面を上
げた。

「くくく……見える。見えるぞ」

その両目は充血し、真っ赤に染まっている。鬼気迫る表情の彼は、今度は自らバルバトスに向かって斬り込んでいく。

その速度は決して速いものではない。だというのに。

「こいつ、『動きが読めなくなった』!？」

打ち込みが予想よりも『ずれる』。その上で、先程までより見切りが格段に正確な物となった。結果、三日月はユーゴーの円月刀を完全に捌ききれない。くるくると表裏を変えて打ち込まれる刃は致命傷こそ与えないものの、バルバトスの装甲を僅かながらも削っていく。

「はははは！ 貴様の動きが手に取るように分かるわ！」

狂ったように哄笑するサンドバル。彼が使用したのは通称「レッドアイ」と呼ばれる古い麻薬だ。基本的に精神高揚（アツパー）系の薬物だが、その最大の特徴は使用者の動体視力と反応速度を格段に向上させるところにある。ただでさえ技量に長けるものが使えば、その効果は推して知るべし。今この時サンドバルは、阿頼耶識込みの三日月が技量を凌駕していた。

しかしながら、三日月もただ者ではない。

「そうか、『機体そのものと四肢の動きが合っていない』んだ」

受ける一方でありながら、サンドバルの攻撃を凌ぎきれない理由を理解する。機体本体の動きと四肢の動き。それぞれの速度とタイミングが微妙にずれているのだ。阿頼耶識システムを用いていないからこそこの技術。見切りに長けていなければならないほど感覚が狂うそれは、サンドバルほどの技量を持つものでも薬の力に頼らねばこなすことのできない妙技であった。

「分かったからといって、見切れるものでもないか」

装甲が火花を散らし悲鳴を上げる。このままではじり貧だが、さしものの三日月もすぐさまに見切れる技ではない。こちらの動きもほぼ読まれているし、阿頼耶識を使っているが故に向こうの動きを真似することも出来ない。無かったからといって出来るものでもないのだが。

考える、刃を振るいながら考える。力押しなんかが通用する相手じゃない。必要なのは相手を出し抜く一手。『相手の予想を上回り、

見切ることの出来ない一手』。

「っ！ これなら」

三日月の眦が鋭く光る。

が、とユーゴーの蹴りを膝で受け、その反動を利用し距離を取るバルバトス。そして太刀を大上段に振り上げた。

「馬鹿め！ 破れかぶれになって大振りか！」

勝機と見て取ったサンドバルは大胆に、しかして油断なく機体を真正面から突っこませる。僅かにタイミングを変え振るわれる左右の円月刀。あの大振りでは太刀で防ぐことは出来ない。とどめを刺すとはでは行かなくとも、深手は負わせられる――はずだった。

がぎゆり、と金切り音を立てて、『打ち込んだ円月刀が、バルバトスの両腕に食い込んだ』。両腕を犠牲にして円月刀を止めた……『のではない』。

『太刀はどこにいった』……ぐうわっ!？」

その疑問が晴らされぬうちに衝撃が奔る。胴体に大きな損傷。それを生じさせたのは、バルバトスの『左脇から突き込まれた太刀の切っ先』。大上段に振り上げたように見せかけて、『背中に回した太刀を左のサブアームに持ち替えて脇から突き込んだ』のだ。

空いた手腕を円月刀に『叩き付ける』動き。完全に視覚範囲外の背面のサブアームの動き。それはサンドバルの慮外、『阿頼耶識を使いこなせる者でしか為し得ないもの』。それを認識するより先に、バルバトスのスラスタが全開で吠えた。同時に円月刀が食い込んだままの両腕で、バルバトスがユーゴーの肩を掴み押さえ込む。

「しまっ……」

丸ごと背中から旗艦に叩き込まれるユーゴー。肺から空気が全て吐き出されるような衝撃から冷める間もなく、モニターに映るバルバトスがサブアームから持ち替えた太刀を逆手に構え、容赦なく突き込んだ。

どがむ、と叩き込まれる切っ先は、ユーゴーの喉元を貫きその機能を停止させる。

イジェクトが働いて頭部コクピットからシートごと排出されるサンドバル。完全に敗北を喫し、薬が切れかけ感じられるようになった全身の痛みを堪えながらも、彼は眼前の白き鬼神に対し怨嗟の声を上げずにいられなかった。

「おのれ鉄華団！ おのれ地獄の番犬っ！」

対する三日月は、大きく溜息を吐いてこう零した。

「……あぶな。生け捕りつての忘れるとこだった……」

この後、サンドバルを筆頭に夜明けの地平線団の主要な幹部は捕らえられ、多くの構成員が降伏し戦いは終結した。

少数の者は逃れたが、旗印でありまた艦隊規模を維持する手腕を持っていたサンドバルが捕らえられたことによつて、組織の継続は困難なものとなる。すなわち夜明けの地平線団は事実上壊滅したと言つても良い。

しかし……この戦いですら、後に鉄華団の前に立ちはだかる困難の前菜にしか過ぎなかったのだと、この時の私は知るよしもなかった。

※今回のえぬじい

『団長！ 団長！ 団長！ 団長！』

「え、あの、喜んで良いところか……？」

某所で2位獲得おめでとうオルガ。

またまたおまけ

EB-06/tc3 グレイズ改・参式

グレイズ改式・流星号をさらに改装した機体。

イオフレーム開発のためのデータ取りから装備のテスト、さらに仮想敵機までこなすようにいぢりまくられている。基本的な性能は変わらないが、耐久性と航続距離は向上しており、また間に合わせであった阿頼耶識システムが本格的に調整され操作性、反応も良好となった。

教練を受けるメンバーが持ち回りで運用しているが、現在は主に昌弘が使用している。

なおシノが乗らなくなったため流星号とは呼ばれず、参式が通称。カラーリングも地味なグレー。

UGY-R41 ランドマン・ロデイ強襲型

ランドマン・ロデイの機能向上を目指して試験的に改修された機体。

フレームには手を加えていないので基本性能は同じだが、腰回りにスラストを、背中にプロペラントタンクを増設し、機動性と航続距離が向上している。また肩装甲にオプションラッチを備え、様々な装備を追加し火力や機動力を向上させることも可能。

現在は主にビトーが使用している。

STH-16T 獅電汎用試験タイプ。

獅電のチューニングや拡張性を追求するために改装された機体。様々な装備、パーツを次から次へと組み込まれるためそのたびに性能

が変わるが、基本シユヴァルベ・グレイズ並。その分操作性も悪くなつてはいるものの、どつかのあほうみたいな狂ったセツティングを施させているわけではないため、教練受けた人間は大概動かせる。

様々な試験を行う関係上ランディを筆頭に多くの人間が乗るが、主に担当しているのはエンビ、エルガーの兄弟。

試験機のはずなのになんかあっちゃあ実戦に放り込まれる割と不憫な機体。

27・休む暇すらありやしない

G H総本部ヴィーンゴールヴ。マクギリス主導の海賊討伐は成った。だが、彼らの『戦い』はむしろここからが本番である。

「任務は達成致しましたが、まだ多くの問題があることが浮き彫りにされました。時期尚早とは思いませんが、色々と改善するべき点は多いかと」

報告の席で、マクギリスはそう締めくくった。その言葉尻を捕らえ、憤りを隠さぬイオクが食って掛かるように言う。

「問題どころではない！ 我々の任務を妨害し成果を横取りするなど厚顔無恥も甚だしい真似をしておいて！」

対するマクギリスはあくまでも冷静、というか冷徹なまでに淡々と返す。

「海賊討伐はこちらの任務であると決定されていたもの。突如予定を変更し横槍をかけてきたのはそちらでしょう。それに部下の報告によればこちらの問いかけに対し非協力的で、さらには警告を発していた民間協力者に対し戦闘の妨害行為に及んだとのことですが、その真偽はいかに？」

当然ながら、『ランディの機体も警告は流しっぱなしにしていた』。そのことは試験艦隊はおろか第2艦隊のレコーダーにもしつかり記録されている。

「っ、それは！ その民間協力者とやらに元G H隊員を名乗る不埒者が存在した！ 見過ごすことが出来るはずは無かろう！」

「辺境の地においては、名の売れた者を騙る傭兵などごまんとおります。そのような相手に一々食って掛かっていては、それこそきりがない。指揮官としてはその程度の些末ごと受け流す度量が必要でしょう。余計な諍いを起こし、任務に支障を来すようでは本末転倒と言わざるを得ません」

「む、ぐっ……」

イオクの痴態とも言える様もすっかりと記録され、報告として提出されている。そこを指摘されればさしもの彼も言葉に詰まる。

そこでラスタルが口を挟んだ。

「……今回の『行き違い』についてはこちらにも非がある。責任者としてそこは謝罪しよう」

「らすた……エリオン公！」

「その上で、今回生じた損失はこちらで補填させて貰う。もちろん民間協力者に対する報償もだ」

イオクを押さえ、そして譲歩を申し出る。その言葉にマクギリスは頷いた。

「そこまでして頂けるのであれば、こちらは矛を収めましょう。今回の件に関しては遺恨を残し蒸し返すような真似はいたしません」

手打ち、ということだ。イオクとしては納得のいく結末であろうはずがない。だがラスタルが決めたことに異を唱えるような真似はできなかつた。不満を押し隠そうともせず彼は押し黙る。

「こちらの試験艦隊については本格的な編成を行い、正式に発足させると言うことで、皆様よろしいでしょうか？」

表面上の異議がないことを見て取って、マクギリスは微かに笑みを浮かべる。

（さて、ここからだ。表と裏で攻勢は増すだろうが……次はどう動く？ ラスタル・エリオン）

「そういうことで報償は滞りなく出る事になった。当然そちらの損害に関しても保証はされる」

「了解した。疑ってた訳じゃないが、やはりほっとしたぜ」

石動からの通信に、オルガは胸をなで下ろす思いであった。死者こそ出なかったが、先の依頼と夜明けの地平線団による襲撃で、鉄華団

はそれなりの損失を出している。……とは言っても、襲撃に関しては撃破したMSを鹵獲したおかげでむしろ黒字。あとは依頼に関する支出がきちんとしていれば最低でも損はないはずだった。

とは言っても団員たちを食わせていかなければならない立場としては、かつかつの支出は避けたいと思ってしまうのは当然であろう。そう言う視点から見れば十分な結果は得られた。だから『これ以上は贅沢だ』としても、オルガは問わずにはいられない。

「報酬の件は了承した。……それでだ、打診した『ヒューマンデブリの保護』についてなんだが」

「ああ、それに関してはすまないが、やはりそちらに預けるのは通らなかつた。所有物扱いとはいえ犯罪に荷担していた以上、無罪放免というわけには行かなくてね」

鉄華団はこれまで、敵対した組織の所属であつてもヒューマンデブリの人員を引き受けるようにしてきた。人道的なと言うよりはオルガたち主要なメンバーの気持ちと、物理的な人員不足を補うためという理由で行つてきたことだが、仮にもGHが絡んだとなれば早々簡単にはいかないようであつた。

「幸いというわけではないが、彼らはファリド准将の元での預かりとなるよう働きかけている。……決して悪いようにはしない」

淡々としながらも真摯な空気を感じたか、オルガは肩の力を抜いて応えた。

「分かつた、あんたを信じよう。夜明けの地平線団については全面的にあんたらに預ける。こつちはこつちで『落とし前』をつけなきやならねえ相手がいるからな」

「テラ・リベリオスだな？ その件に関してはプロト本部長代理に全面的な協力を約束させよう」

「無駄にGHの手を煩わせるような真似はしねえ。それはこつちも約束させて貰う」

その後、幾ばくかの会話を交わし通信は終わる。画像の消えたモニターを前に、石動は軽く息を吐いた。

（オルガ・イツカ……まだ荒削りだが、傑物の鱗片は見えるか。流石に

あの人の仕込みというところだな)

彼は先の任務での、わずかな『再会』を思い起こしていた。

「よう、景気は良さそうじゃねえか」

艦内の廊下にて、胸元をはだけたパイロットスーツ姿のランデイが気安く声をかける。事後処理の相談のためイサリビを訪れていた石動は、「お久しぶりです」と頭を下げた。

「おいおい、三佐殿が元一尉に頭下げていいのかよ」

「あなた相手に威張ったら、後でどんなにぢられ方されるか分かったものじゃありませんから」

からかうように言うランデイにすまして返す石動。そうしてから二人は同時にくく、と笑った。

「意外と大人しくしているようで驚きましたよ。……鉄華団、仕込みがいがあるようですね？」

「ああ、放っておいたら自滅しかねない連中だったが、様になってきやがった。『金髪の企み』にも十分対応出来るようになるぜ」

「准将も彼らを高く評価しているようです。あなたの仕込みという以前の部分でね。実際事を起こすにはもう暫く時間が欲しいところですが」

マクギリスが何かを目論んでいると言うことを察しているランデイ。そのことについて石動は驚く様子もない。野獣並みの感覚を持つこの人ならば当然だろうと、当たり前前のように受け入れていた。「相手はアリアンロッド、あの陰険ヒゲだ。そう時間をくれてやるとも思えんが」

「でしょうね。今回のことで向こうもすぐさま次の手を打ってくるのは間違いありません。まあ敵がこちらの都合に合わせてくれるはずもないのはいつものことです」

「分かってりやいいさ。……ところで金髪は俺らの『古巣』は誘っちゃいねえようだが?」

「かまかけにしても正確な認識ですな相変わらず」

「結成されたばかりの艦隊の情報がそう簡単に入手できるはずもない。どうせまた勘で正解を引き当てたのだろうと呆れる石動。勿論ランディは悪びれずらしい。

「艦隊とMS見てりや分かるさ。『ガルーダ』の連中くらいなら何とかなったろ。あいつら確か地球じゃなかったか?」

「下手に誘えば警戒されますのでね。細工はおいおいというところだ」

何か考えがあるのか、不敵に笑む石動。

『祭り』の時は近い。あなたにも満足頂ける舞台になるよう、精々努力させてもらいますよ」

返ってくる答えもまた、不敵な笑みと共に。

「期待させて貰おうか。金髪——ファリド准将閣下のお手並みってヤツをな」

「若気の至り……というには少々目に余る結果となったな。イオク」

「……申し訳、ごいません……」

執務室にてラスタルに頭を下げるイオク。その表情は悔恨と怨嗟によって歪んでいる。そんな彼の様子を見て、ラスタルは鼻を鳴らした。

「まあいい、これも経験だ。過信があり油断もあった。そして何より運が悪い。上手いかなないときはそういったものが折り重なって今回のごとき結果を生む」

「己の未熟、恥じ入るばかりです」

「それだけではない、と言いたげだな?」

ラスタルの言葉にぐ、と齒噛むイオク。

「……ランデイル・マーカス。あれが本物かどうかはこの際問題ではない。どちらにしろあれはお前が決して関わってはならない類の輩だ」

十中八九どころか確実に本人だと確信しているラスタルだが、一からそのことを説明する気はなかった。そんなことはどうでも良く、問題はそこではないからだ。

「あれは『毒虫』だ。その力で、その言葉で、的確に急所を刺す。まともに対すれば毒に蝕まれるがごとく心や戦力が削られるのだ。お前のような人間とは徹底的に相性が悪すぎる。あの男に拘り、大局を見失っては元も子もない。幸いにしてあれに対抗する手段は用意できている。お前はあれと関わらず、己の職務を全うすることだけ考えろ」

「で、ですが!」

「今回の任務についても、『得るものがなかったわけではない』。早々に忘れろとは言わんが、せめて失策を糧にして前向きに考えるよう努力しろ。……『次の策』も控えていることだしな」

「次、ですか?」

一瞬心に貯まっっていくものを忘れ問うイオク。ラスタルはにいと笑んで見せた。

「マクギリスとその協力者たち。確かに今は勢いがある。だがその分背後が疎かだ。火星周辺を橋頭堡とすべく尽力しているようだが、それ以外ではどうかな? 例えば……『この地球などは』」

「それは一体……」

「まあ見ている。すぐにでも動きがある。……場合によってはお前にも働いて貰うかも知れん。その時は存分に名誉挽回に励むが良い」

「っ! は、はい! お心遣い、感謝致します!」

機会を与えてくれるのだと、イオクは感じ入り全力で頭を下げる。チヨロイ。

まあこの未熟な配下に関しては取り敢えずこれでいいだろう。自分が釘を刺したからにはランデイル・マーカスに対してむやみに動

くような真似はすまい。あの男の動きには注意を払わなければならぬが、それよりも今はマクギリスだ。

彼はアリアンロットと直接事を構える、という状況を想定して動いてはいる。その到達地点はGHの覇権を握ること……だと思ふのだが、ラスタルはその確信を持ってないでいた。

それがなんなのか、まだ予測もつかない。だが単に頂点に立つことを目指しているのではないと、漠然とした予感はある。

(次に差す一手でそれが見えるとは思わんが。……何を考えているのか鱗片だけでも掴ませて貰うぞ、マクギリス・ファリド)

クリュセ市街の古めかしいビル。そこにテラ・リベリオスの本部があった。組織の長であるアリウムは、今とある来客を迎え、『窮地に陥っていた』。

「……そんなわけで、鉄華団はテラ・リベリオス……いや、あんたに今回の損害賠償を要求する」

臙脂色のスーツに身を包んだちんぴら——オルガが、尊大な態度で言う。僅かに身を震えさせつつも、アリウムは必死で反論を試みていた。

「よ、夜明けの地平線団のことと我々は無関係だ！　あくまで我々は火星の独立のために尽力を——」

「そんなお為ごかしはいい。連中の何人かはあんたの差し金だとゲロってんだ。今更逃げようなんて虫の良いことは考えんなよ」

「それは連中の言い逃れで！」

「……『テイワズが本気で乗り出す前に』話つけてやろうってんだ。今のうちに素直になっていたほうがいいと思うんだが？」

背筋が凍る。直接的な証拠はないはずだ。だが鉄華団のバックであるかの組織が動き出せば『証拠なんぞ必要ない』。場合によっては

『疑わしきものは全て対処される』。言い逃れは自分の首を絞めるだけだと、流石に理解せざるを得ない。

あ、くつ、とか言葉に詰まるアリウムの目の前に、オルガはタブレットを投げて寄越した。

「算出したうちの損失だ。耳揃えてとは言わないが、払ってもらおうか」

震える手でそれを確認したアリウムは、悲鳴のような声を上げる。

「こ、こんな法外な！ 我が組織が財産を全部処分したとしても出せるものか！」

「それだけのことをしでかしたと理解しろよ？ あんたはうちだけじゃねえ、『火星の未来も潰そうとした』んだ。……知れ渡れば、今後の活動どころじゃねえよな？」

アリウムの行動はクーデリアの命も危険にさらした。あわよくば鉄華団を襲い脅しをかけるつもりだったと言い逃れをするつもりだったのだろうが、自分の言うことを聞かない小娘なんぞ邪魔だ、排除されれば悲劇を演出し独立運動を焚き付けられると踏んでいたのは間違いない。でなければあんな大規模な襲撃などかけるものか。

とは言ってもオルガとてふっかけまくっているのは自覚している。払えるとは思っていないというか、『別にアリウムに賠償金を払って貰わなくても良い』。損失はGHから支払われる報奨金＋ α で十分まかなえる。これがもし団員に死者が出ていたならば話は別であっただろうが、この目の前の矮小な男に多くを求めてはいない。

「お願いですから急ぎ融資を……そ、そんな！ そこを何とか！」

時間をくれと頼み込んだアリウムはあちこちに金策のための連絡を取っているが、どうにも芳しくないようだ。当然といえば当然で、ただでさえテラ・リベリオスは落ち目であるのに加え、『クーデリアを通じて今回の話が金融関係に流れている』。融資を行う者などいるはずもない。

「さて、万策尽きたようだがどうする？ 金が出せないってんなら……せめて落とし前はつけさせてもらおうってことになるが」

オルガの言葉に応え、傍に控えていた三日月が迷うことなく懐から

拳銃を抜き出す。血の気が抜けたを通り越してどす黒い顔色となったアリウムは――

「た、頼む！ 何でもするからどうか、命だけはっ！」

恥も外聞もない土下座を敢行して命乞いを始めた。それを差して面白くもなさげに見下ろして、オルガは懐に手を入れながら言った。

「そうか。それじゃあ『この契約書にサインしてもらおうか』」

暫く後、テラ・リベリオス本部をGH警務局員が包囲する中、精根尽き果てたといった様相のアリウムが連行されていく。その様子を見ながらオルガは横に立つ新江に言った。

「ご面倒をかけますが、よろしく」

「まあこつちも余計な手間が省ける。持ちつ持たれつさ」

GHに逮捕されたという体のアリウムは、即日証拠不十分で保釈される――』ということになっている。そしてその後、すぐさまテイワズの資源採掘衛星に送られる手筈になっていた。衛星の鉱山で働き鉄華団への賠償金を支払う、オルガがサインさせたのはその契約書であった。まあ一生かけても払いきれものではないが、『余計なことをしないよう拘束できる』。

この流れは一種の癒着ではあるが。

「牢屋で飼っておくのもただじゃない。税金を無駄遣いするよりは、ましな対処じゃないかね」

新江の言葉が全てを語っていた。GHにしても予算は限られているのだ。ヴィーンゴールヴに屯っている連中ならまだしも、余計な荷物は背負いたくないというところが本音だろう。

ともかく微妙に後ろ暗い取引の後、GHの人員はアリウムとテラ・リベリオスの主要な人員を引き連れて去った。それを見送りながら、オルガは溜息を吐いた。

「兄貴の真似を試みたが、なんか上手いこといった気がしねえなあ……」

その言葉に、三日月が応える。

「オルガは名瀬じゃないでしょ？ 同じことやっても上手いくはずないじゃん」

「……それもそうか」

苦笑しながら片目を瞑って頭を掻くオルガに、三日月は問う。

「あいつ、殺さなくて良かったの？」

確かに今までのやり方であれば、アリウムは殺しておくべきだったのかも知れない。その機会であったことは間違いないがと思いながら、オルガは応えた。

「あの程度の小者、一々殺（や）ってたらきりがねえ。……殺さずにすむんなら、それに越したことはねえしな」

血生臭いことが避けられるのならはその方が良い。将来を見越したオルガの言葉に「そっか」とだけ返す三日月。彼にもまあ、思うところはあろう。

ともかくこれで一つの騒動は終結を向かえた。だが次なる試練は手ぐすねを引いて待ちかまえているのだった。

アリウムの処分が決定した。それを確認した後にノブリスはクーデリアと連絡を取っていた。

「残念です。いずれ独立運動再起のおりには、力になって頂きたかったのですが……」

クーデリアの言葉はありがち演技でもなさそうであった。実際余計な色気を出さず、地道な活動を続けていれば彼女はアリウムを見捨てなかったであろう。そう判断しているノブリスはさして疑問に思うことはなく言葉をかけた。

「勇み足、というには少々乱暴に過ぎましたな。ですがこれはあなたの責任ではない。あまり気に病まぬようにすることです」

「分かってはいるつもりです。……申し訳ありません、湿っぽくなっ
てしまいましたね」

「いやいやお気になさらずに。……ところで最近そちらの景気はいか

がですか？ お困りのようでしたらいつでも融資など申しつけて頂ければ」

本題に入る。アーヴラウとの交渉を終えて火星に帰還し、商會を立ち上げたクーデリア周辺の経済状況は順調であった。人も、資金も、独立運動を行っていた頃より集まり動いている。実の所融資を受けるところか、利権を回すことによつてノブリスに還元されているくらいだ。

受けた恩は返すと、ノブリスばかりでなく融資を行ってきた出資者たちは同じように利益を受けている。予定通りどころか想定以上の結果であつた。だが……。

「お気持ちはありませんが。ですがおかげさまで滞りなく回っておりません。これもノブリス氏を始めとする皆様のおかげです」

「そ、そうですか。順調で何より」

何もおかしな所はない、はずだ。怪我から復歸したというクーデリア傍付きの間諜からの情報からも妙な行動をしている様子は伺えない。だというのになんだろう、漠然とした不安がある。

GHという大口の取引相手を失つた（火星支部の後任である新江はノブリスとの接触を避けている）ノブリスは、武器商人としての規模を縮小せざるを得なかつた。全ての繋がりが途絶えたわけではないが、GH相手の収益は見込めそうにない。その代わりにハーフメタル関連の利権で相応の利益を得ている。だがそれはテイワズとモンターク商會が大きく関わり、全てを己が掌握し自由に出来るものではなかつた。

それに関してクーデリアが何か働きかけているのかも知れなかつたが、今のところ彼女は自分の采配で可能な限り利分を火星の企業などに回し、経済の活性化を計ることに尽力している。なにやら企む余裕など無いはずなのだ。

確かにクーデリアは何か特別なことをしているわけではない。色々なところに仕事と『情報』を回しているだけだ。その結果自身の信用を上げ密かに『誰かの信用を落としている』かも知れないが、まあそれが今後どうなるかはまだ分からなかつた。

まあそれはさておいて、彼女は笑みを浮かべて言葉を続ける。

「そうそう、今度テイワズの方で、大規模な採掘場を火星の傘下企業に任せるという話を聞きました。ノブリス氏の方にも流通などでお世話になるかと——」

歳星がマクマードの屋敷。そこにジャスレイが血相を変えて乗り込んできた。

「親父、どういうこった！ あのガキどもに火星の採掘場を丸々一つやっちまうつてのは！」

激しく机を叩いて言いつのるジャスレイに対し、マクマードは葉巻を吹かしながら応える。

「海賊退治の褒美、つてところさ。あいつらは良い仕事してくれてる。そろそろでかいヤマ任せても良い頃合いだと思つてな」

「あいつらまだひよっこもいいところの子供ですぜ!？ あの採掘場はこれからテイワズにとつての金の成る木——」

「まあ落ち着け。俺も身鼻肩ばかりであいつらに任せるわけじゃねえよ」

にい、と老獪なる男の口元が歪む。

「なんと言つても『適任』なのさ、あいつらが」

「ガキどもが適任？ どういうことですかい」

ジャスレイが眉を顰め問う。

「あの採掘場、ガワは出来つつあるが、まだまだものになるには時間がかかる。金も投資せにやらんし人も集めにやらん。そのためにこつちから色々と送り込むより『火星で集めた方が手っ取り早いし安上がり』なのさ。そして価値が高まりつつあるハーフメタル鉱脈を狙う輩が多い。それを守るための戦力があって、なおかつ火星で色々集められる伝手があり顔が利くもの、ついたらあいつらがぴたりと当て

嵌まるのよ」

他にも火星に傘下企業はあるのだが、事実上最大の規模を誇るのは鉄華団だ。現在飛ぶ鳥を落とす勢いで成長しているアイゼン・ブルーメ商会とも関係が深く、さらには大本であるアーヴラウとの繋がりもある。将来性という意味では比肩するものはなかった。

「俺達は将来的にあいつらが差し出す『あがり』を待ってりやいって寸法よ。10年もすればあいつらも採掘場もものになる。出すものは最小限であがりが確実に期待できる。そう考えればテイワズにとって美味しすぎるどころじゃねえ金の成る木だろう?」

確かに若輩者過ぎるといふ不安要素はある。それを考慮に入れてなお押し通すだけの価値があると、マクマードは論じた。

「ぬ……けど、なんかあつたときが……」

「ケツ持ちは名瀬にやらせるさ。あいつもいい加減女衞扱いから卒業する時期だろうよ。それなりの責任を負うってのはやってもらわにや困る」

むぐうと、表立って反対する理由を見いだせないジャスレイは言葉を飲み込む。こいつにとつても、もしかしたら分水嶺かもなあと、言葉に出さず思うマクマード。

現状のままであれば、ほぼ確実にテイワズを後継するのは彼となるはずだった。だがここにきて、余計な『色気』を出すようであれば……。

マクマードは冷徹に事の推移を見守り、思考を巡らせる。

テイワズからの報償として採掘場を一つ預けられた。その事實は鉄華団の団員たちを大いに沸き立たせる……とはいかず。

「こりやまたでつかいご褒美だよなあ」

「むしろ面倒くさくなってねえかこれ? 俺達だけじゃ回せねえから

人集めなきやないかんだろ。まあ仕事にあぶれてる連中は多いからすぐ飛びついてくるだろうけど、その分管理が大変だぞ絶対」

下見に現場へ赴いたシノとユージンの台詞である。確かに自分たちにとつて大きな収益源と成るであろう報償であったが、その分一気に負担が大きくなる代物でもあった。今すぐどうにかしろと言われているわけでもないのだから腰を据えてかかれるのだが、何しろこれだけのものを扱うノウハウは全くない。1から手探りで始めなければならぬと、真面目な幹部は頭を抱えている。

「穴掘れつてんなら今すぐにもやるんだがなあ」

「それだけで片づくものじゃないってのは、面倒だよな」

本部の食堂で、昭弘と三日月が言葉を交わす。彼らの周囲にはライドを筆頭として、昌弘、ビトー、エンビ・エルガー兄弟などの準エース級が集い、それ以外の団員たちは微妙に距離を取るといふ位置関係が生じていた。

別に誰かが何かしてそういう状況になった訳ではないのだが、エース級の人間は尊敬されて半ば崇められるような空気がある。そこで居心地の悪さを感じたり逆に凶に乗ったりするような人間がいないので、なんとなくそれで落ち着いているわけだ。

それはそれとして、彼らとて今後どうなるかは気になる。基本的にオルガの方針に従うのみではあるが、何も考えないで動くだけでは痛い目を見ると誰かさんの教練のおかげで骨身に染みて実感したせいで、こういった意見を交わすようになってきた。

「クーデリアに頼んで、潰れた鉱山関係の会社あたりから人引っ張ってくるって言ってたけど」

「任せつきりつてわけにやあいかないなだろうなあ。頭使う方じゃ、俺なんか糞の役にも立てねえ」

「大分みんなも作業用MWの扱いには慣れてきたんで、現場の仕事ならこつちからも人回せるっすけど、やっぱ事務とかそのあたりの人間欲しいっすよねえ」

へにやりとテーブルに突っ伏すライドが目下一番の問題点を指摘する。今はティワズから出向してきた人員を加えてなんとか事務関

係を回している状態だ。鉄華団の少年たちも必死で机仕事の勉強をしてはいるが、元々文盲の人間が多かったせいもあって、使い物になるにはもう少し時間がかかる。

大きな仕事を任せられるのは良いけれど、その分苦労も増えるものなど、しみじみ実感している少年たち。そんな彼らの様子を、少し離れた席でアヤは観察していた。

(脳天気の手放しで喜ぶような空気はありませんねえ。子供らしくないといえばそれまでですけど)

これまでに積み重ねた経験が彼らから子供らしさを奪った。そのように見ることも出来るし、その経験のおかげで若輩ながら大企業からの信用を得るほどに成長したとも言える。要は見方次第だが、はてさてどういう方向性で記事にしていくかと彼女が思考を巡らせていると。

(……ん?)

三日月たちの元に歩み寄るものがある。確か新人——ハツシユとかいう少年だ。彼の背後にはなんか居心地の悪そうなザックと、仏頂面のデインがついてきている。

何か覚悟を決めたような表情のハツシユは緊張感を漂わせて三日月に声をかけた。

「あの……三日月さん、お願いがあります」

「ん? 何?..」

応えた三日月の目の前で、ハツシユは深く深呼吸して——

「俺を、俺を三日月さんの弟子にしてくださいっ!」

見事な土下座を敢行した。

『……は?..』

見事に唱和した声が、食堂に響く。

さて、彼方地球がアーヴラウにて、鉄華団地球支部は修羅場の真つ最中であつた。

「MWの配備状況、確認は取れてますか!？」

「建物関係のチェックポイント、直接見に行くよう注意して!」

「弾薬の在庫は? ……OK、すぐ出せるように用意よろしく」

事務所だけでも大騒ぎであつた。アーヴラウ防衛組織の発足式、それが間近に迫り、その準備に追われているのだ。

そんな中、またしてもラディーチェがビスケットに詰め寄つて来た。

「獅電が発足式に間に合わないとはどういう事です!」

「だからそれはテイワズに言つて下さい。向こうもてんでこ舞いだつてのは分かり切つたことでしょう」

淡々と応えているように見えるビスケットだが、付き合ひの長い団員たちは彼がかなり苛立っているのが見て取れて、内心肝を冷やしている。

新たに採掘場を任された関係で、獅電の輸送は遅れに遅れていた。とは言つても元々発足式に出す予定など無く、正式に配備されるのはまだまだ先の予定である。今更少々遅れが出たところで問題はなかつた。

だというのになぜかラディーチェは発足式に間に合わせる事に拘り、ビスケット達を急かしていた。前にも言つたが輸送スケジュールを組むのはテイワズである。鉄華団の幹部をつついてもそれが変更されようはずのないというのに。

「あなた方がしっかりと上申しないからテイワズものりくらりと仕事を遅らせるのです! こちらにも予定というものがあるでしょう!」

「元々遅れることを見越してこつちもスケジュールは立てています。トラブルが続いて苛立っているのは分かりますが、我々に当たられても困ります」

その後も話は平行線。ラディーチェは苛立ちを隠さない様子で外回りに出かけ、団員たちはそつと溜息を吐いた。

溝が深まる一方だが、ああも頑なではこちらとしても相応の対応をせざるを得ない。困ったものだがしかしと、ビスケットは思考を巡らせた。

(やけに『獅電の輸送を急がせること』に拘ってるな。……どうにもきなくさい)

正直ラディーチェに対する信用は0に近い。テイワズから送られてきた人間でなければ、退職を促していたところだ。その上でどうにも『テイワズの思惑とは違うことを目論んでいる』ようにも見える。

一応の身内を疑うのはなんだが、彼には『嫌な大人』が纏う気配がある。保険はかけておくかと、ビスケットは気乗りしないまま溜息を吐いた。

クリュセ市にある繁華街。その一角にある酒場にフミタンは足を運んでいた。

『ある人物』と話をするためである。

「あんたが俺を呼び出すなんぞ、珍しい事もあるもんだな」

なんとランディであった。会社帰りのサラリーマンのような目立たない格好をした彼は、いかにもビジネスウーマンといった格好(なぜか微妙に胸元が開き気味であったりタイトスカートのスリットがちよつと深かったりしてるが)のフミタンに問う。

「そんで、話って何よ?」

「少々お尋ねしたいことがあります。元GHのあなたなら、もしかしたらご存じかとも思っています」

別に調べごとが行き詰まっているわけではないが、GH関連の人間であれば必要な知識を持っている可能性がある。情報を集めるのが円滑になればと思つてのことだ。他意はない。多分無い。

内心で自分自身に言い訳をしながら、フミタンは切り出した。

『火星に施されたテラフォーミング』。それについて何かご存じであれば、教えて頂けないでしょうか？」

※今回のえぬじい

「……抜け出るっ……この地獄から……っ！」

「……愉悦……最下層からむしり取り一時の快楽を得る愉悦……っ
！」

賭博黙示録アリウムと1日外出録マルバ、はっじまっるよ（嘘）

28・バレてる悪巧みつてのは救いようがねえ

リボンの4：そう言う顛末でしたがどうですかこれ

ひよこの4：あかん笑うw

わんわん4：相変わらずかいあの人

ひよこの4：むしろ変わつとつたら驚くわ。何企んでるのかつて疑うわ

リボンの4：ですよね〜

わんわん4：つーか常になにか企んでるだろあの人

ひよこの4：いや企んどるんとちやうねん。ナチュラルに性格悪いだけで

リボンの4：おまいう

わんわん4：おまいう

ひよこの4：わし扱い酷くない!?

※しれえさんが入室しました

しれえ：やつほお、しれえだよお

ひよこの4：キモい

わんわん4：ウザい

リボンの4：他の二人ほど外道ではないので控えめに言いますが、歳考えて下さい

しれえ：貴様ら仮にも元上官に向かって容赦ねえな

ひよこの4：何をいまさら

わんわん4：だが俺は謝らない（キリツ）

リボンの4：日頃の行いのせいでしょう。まあそれはそれとして、ちよつと面白い話があるんですが聞きますかってか聞けそして聞いたら逃がしません

ひよこの4：やつぱこいつがウチらの中じや一番タチ悪いわ

わんわん4：同感

しれえ：同上

リボンの4：褒めてもなにも出ませんよ？

ひよこの4：ほめてねえ

わんわん4：ほめてねえ

しれえ：ほめてねえから話せ、はよ

とあるチャットの会話。

現在大忙しの鉄華団。採掘場の受け渡しの手続き、そしてその後には状況が落ち着けば獅電の輸送という仕事が控えている。どれもこれも手は抜けないし、時間はいくらあっても足りない。

使えるものは猫の手でも使う。例えこの男でもだ。

「正直あなたをこういう感じで使うのは不本意なんですけれど」

脇目もふらず事務処理を行いながら、メリビットが零す。同じように対面でキーボードを叩いているのは。

「ちやつちやと済ませなきゃいかんことが多いからな。大将からすりやあ藁にも縫える思いだろうさ。……おつと、イーサン、こつちの提出書類確認してくれ」

「はい、分かりました」

机仕事が似合わなすぎる男、ランデイ。意外というかそこそこ事務処理をこなしており、任せられそうなものは団員たちに振るような気の使い方すら見せる。戦闘に比べ一騎当千というわけにはいかないが、十分な戦力となっていた。

「そりや士官ともなりや尻で椅子拭う仕事も増える。この程度はこなせなきゃ話にならない」

「正直納得はいきませんが助かります。……それにしても『思い切ったこと』を考えましたね」

「前々から考えていたことさ。丁度『弟子』も出来たようだし、ものは

試しってやつよ」

さて、ランデイが何を考えて実行に移したのかと言えば。

「んと、それじゃあ暫くランデイの代わりに俺と昭弘が戦闘班の教練を受け持つことになった」

『はいっ！』

直立不動で気合いの入った返事を返す団員たちを前に、三日月は困ったような顔で頭を掻いた。

そう、ランデイは自分が事務仕事を請け負い従事している間、教練を三日月たちに任せただ。勿論手が回らないという理由もある。それ以上に『そろそろ次の段階に進ませよう』と考えたのだ。

他人に教える、という行為は自分が学ぶという以上に神経を使う。そして自身を鑑みる機会でもある。三日月たちにはまだ伸びしろがあるが、己の意欲だけでは至れない領域にたどり着かせるためには必要だとランデイは考えたのだ。

さらには『自分だっていつまでも教えていられるか』という問題もある。いつ死ぬか分からない仕事であるし、それでなくても倒れることだってあるのだ。これからのことを考えれば教育できる人間がいるに越したことはない。という思いもあった。

で、ランデイが三日月たちに言い渡したことは。

「とりあえず俺が教えたことをそのまま教えて、後は『自分が最初出来なかったことを思い出しながら』やってみな」

それだけであった。三日月と昭弘はそれでいいのかよとか思いながら取り敢えず順番に団員たちをシミュレーターにぶち込む所から始めてみた。

「ほひよおおおおお!」

三日月に弟子入りを志願して「……まあいいけど」と適当なノリで受け入れられたハツシユの悲鳴が響く。その様子を外部モニターで見ながら、三日月と昭弘は言葉を交わしている。

「ああ、セッティングがわかんない状態でスロットル全開にしたのか」「そういやMWに最初乗ったときも、たまにああいうヤツがいたな」
今でこそあんな間抜けなと思うが、自分たちだって最初から上手く

できたわけではない。なるほど、そのあたりから思い出せば突飛とも思える結果が生じるのも分かる。何となくではあるが、ランデイの言いたいことがちよつと理解できるような二人であった。

そんな様子を予測し、ランデイはくつ、つと口元を歪める。

「俺の言ったことが分かるんなら、それなりに教えられるだろうさ」

「スパルタというか、無責任ですな」

「むしろあいつらもそろそろ責任ってヤツを覚えても良い頃じゃねえかな。それなりの成長はしてるんだしよ」

もつと先のことを見据えて物考えているような人間もいることだしなど、ランデイは思い返していた。

「ふうん？ ……お嬢さんの事業関係かい？」

意外に思える問いかけに対し、ランデイはそう尋ね返した。

「ええ。今すぐというわけではありませんが、将来的に必要な知識かと」

「……テラフォーミングとの関係が見えねえんだが」

どういふことだかいまいち予測しかねているランデイの表情を見て、フミタンはある程度の思惑を伝えることにした。

「……『雨』です」

「火星に降らせる、つてことか？」

ますます分からない。疑問符を浮かべるランデイに対し、この人でも分からないことがあるのだなとなんだか少し愉快的気分になるフミタンだが、勿論顔には出さずに彼女は説明する。

「火星の経済と生活を長期的に安定させるには、食料の増産が必須となります。ですが農業プラントの増設はコストがかかり、また限定されたフィールドでしか食料生産が出来ません。となれば火星の土壌を改善するしかないのですが、そのためには大規模な水の循環が必要

となる。理想的なのが火星の天候を変化させ、定期的に雨が降るようになることなのです」

現在の火星ではほとんど雨が降らないゆえに、土壤そのものを改善することが難しい。しかしそれをなんとかさせようとなれば、どうしてもテラフォーミング並の大規模な改善法が必要となるだろう。

なるほど、これはまたとんでもないことを考えた物だとランディは舌を巻く。それほどの大それた事をするのであれば、確かにそれを知る必要があるだろう。それは理解した。

「まあ、火星で行われたテラフォーミングに関する知識はあるんだけどな……」

うーむと腕を組む。GH時代、なんか役に立つだろうと組織に死蔵された技術的なデータや資料を漁ったせいで、そう言ったことに関する知識も大まかな概要ながら頭に入れている。

だが――

「技術的には可能だが、『現在では絶対に不可能な手段』だぞ？」

「どういうことですか？」

眉を顰めるフミタンに対し、これまた難しい顔のランディが告げる。

「まず『火星にこれでもかって小惑星を叩き込んだ』のさ」

厄祭戦のさらに前、増えすぎて地球やコロニーでは賄いきれなくなってきた人口を、無理矢理火星へ送り込むために強行された手段。

マスドライバーにて火星の極冠地帯を中心に火星全土に二酸化マンガンを多く含む小惑星をこれでもかと打ち込む。そうすれば地表は砕かれ多量の粉塵が火星全土に舞い上がるが、極冠では溶けた氷が水蒸気となり、また二酸化マンガンは火星の地中に多く含まれる過酸化水素水と反応して酸素を産む。それと同時に粉塵となった土壌を分解して窒素など大気成分を吐き出すよう改良されたバクテリアを火星全域に散布。こうすることにより数年で粉塵は地表に戻るが、水分や軽い分子は大気となって残る。

さらに火星の高軌道上に磁気を含んだ鉱石を粉碎して散布。目視しにくい土星の輪のような空域を人工的に作り、擬似的な電磁域――

―バン・アレン帯を形成、産み出した大気が太陽風などから吹き飛ばされるのを防ぐ。

そうしてから大気製造バクテリアの定期的な散布と、人工的な光合成を行う大規模なプラントを火星各地に建設。大気成分と密度を安定させてから入植が始まったのだ。

「……こうやって100年足らずのうちに、基本的なテラフォーミングは一応の完了を見た。勿論その後色々行われるはずだったんだが……厄祭戦がおきちまって、結局は最終的な完結を迎えずしてほったらかしにされてるってのが現状さ。今のままなら雨が降らないどころか、疑似電磁帯の欠損に従い1000年単位で火星の大気は徐々に失われ、いずれは人が住めなくなるかもな。もちろん俺達が生きてる間は大丈夫だろうが……」

そう言う問題じゃないんだろう？ とランデイが言う。予想以上に原始的というか、問題だらけ。当然数千万とも億とも言われる人間が住まうこの状態で地表に小惑星など叩き込めば大惨事どころではない話であり、火星の現状を改善する手段には決してならない。想像以上の困難に、フミタンは苦虫を噛み砕いたような表情で押し黙るしかなかった。

ランデイだって好きこのんで絶望を叩き付けたのではなかったが、流星に気が悪い思いであった。だからというわけではないが、『自分でも無理があると分かっていること』を、つい口に出してしまふ。

「机上の空論に近いが、『極冠の氷を融かして大気に放出し、なおかつ火星の大気の飛散を押さええる手段』がないわけでもないんだけど……」

「詳しく」

「OK分かった落ち着け近い近い迫るなのし掛かるな」

「……確かに、無理難題と言うしかありませんね」

フミタンから話を聞いたクーデリアは、残念そうに溜息を吐いた。ランデイが提唱した『机上の空論』、それも『技術的には不可能ではないが、現状不可能に近い』手段である。結局話は振り出しに戻ったわけだ。

「やはり以前専門の技術者が提唱した『極冠部から運河を掘り、火星の各地に水資源を域渡させる』というプランがもっとも現実的かと。それも火星の大気が失われていくという問題を解決できるわけではありませんが」

心なしか残念そうな様子でフミタンが言う。火星の再開発。以前の桜農場での出来事から思いついたそれは、困難どころか火星の大気の損失という新たな問題を浮き彫りにした。前途は多難。しかし。

「……それでもやらなければ、火星の未来はないのです。まずは出来ることから少しずつ手を付けていくしかありませんね」

鋭い目線で虚空を睨み付けるクーデリア。戦場とは違う、しかし絶望的な戦いに、彼女は臆することはない。

鉄華団の少年たち——三日月に、あなた達を幸せにすると誓った。その思いを決して裏切らないと言う意志と矜持がある。燃え盛る思いを胸に秘め、彼女は歩き続ける。

えらい人に弟子入りしてしまった。改めてそう思う。ハツシユは汗だくになりながら己の浅はかさを噛みしめていた。

三日月の部下として遊撃隊（とは言っても実質2人だけである）の配属となり、彼から些細なことでも学ぼうと同様の生活を始めてみたのだが、これがまたとんでもなかった。

まず日が昇る遙か前。団員でも1、2を争う早さで起きる。そこからまず怒濤のごとき基礎トレーニング。やりはじめれば昭弘やシノ、

その他戦闘班のエース組や、時折オルガやユージンなどが合流し大体1〜2時間ほど続けられる。

続いてシミュレーター訓練だ。こんな早朝になぜと思つて聞いてみたらば。

「昼間の教練は、ほかの団員たちに使わせなきゃいけないだろ？」

とのこと。彼ら自身がそういった訓練しているところを見たことがないと思つていたが、こういうからくりだったのかと納得すると同時に、この人らホントなんなのという思いが湧き上がってくる。

何しろ彼らの訓練、密度が濃い。基礎トレーニングからして馬鹿みたいな負担をかけ短時間で効率よく鍛えている。昭弘に至つては世界記録にでも挑戦するのかつてくらしいの有り様だ。シミュレータープログラムも一般の隊員たちが使っているものに比べ難易度が桁違いだ。試しにやらせて貰つたら3秒で撃墜された。なんでこの人たち平気な顔してこなすのか。日頃の積み重ねの賜物だと分かつていても、どこか納得できない自分がいた。

ともかく訓練を終えた三日月らはシャワーで汗を流し、朝食。ここらで一般団員と合流し、その後普通の戦闘訓練や職業技能訓練に移る。三日月は農業班の班長も兼ねているため、大体は桜農場の手伝いに赴いたり、中庭の畑をいじったりしている。

これがまた和気藹々にのんびんだらりと作業していると思いきや。

「新入り！ もうちょっと深く素早く鍬を振るうんだよ！」

「は、はい！ こうすか!？」

ガチの農作業であつた。桜農場はまだ大型作業機などを投入して大雑把に行う部分が多いが、中庭や農場端つこの試験農園はほぼ全て手作業である。様々な農法を試行している関係で、大型機械を投入できないのだ。そして一つ一つの作物に気を使わねばならない。作業に従事している班員たちは、戦場と同等かそれ以上に気を配つて作業していた。

そうでありながら班員たちは交代でこまめに休息を取るようになっている。大概はそこらに寝っ転がっているのだが、どうやらそれも訓練の一環らしい。

「いざって時に、少しでも休めるよう慣れておくのさ」

日陰に丸まって即座に寝息を立てる三日月を示して班員の一人がそう説明した。修羅場をくぐり抜け、さらにランディの教練を受けた彼らが学んだことだ。どれほど忙しくなるともちよつとの隙に5分でも10分でも睡眠を取れば効率が変わる。しかし神経が高ぶっている状態でそれを行うのは難しい。だから普段からその癖を付けていれば修羅場でも習慣的に休めるとのことだった。

道理でしょっちゅう寝ているように見えるわけだ。逆に大事なときに寝てないかという疑問は湧くが、最低でも班員たちはそれを問題と認識していないようである。

ともかく昼間の作業を終えれば夕食。その後は各々自己鍛錬に励んだり資格や技能の勉強などをして過ごす。三日月を含む幹部は時折、戦術などの勉強会やそれぞれの仕事の報告会などを行うことがある。そうなった場合は大体が夜遅く、下手すると明け方近くまで額を付き合わせている。その間ハツシュも先に休む気にはなれずトレーニングなどして過ごし、それが終わってやっとシャワーを浴び就寝となる。

はつきり言っただけで一苦勞であった。あの小柄な体のどこにそんな体力があるのか。理解も気力も追いつかない。

もつとも自分の訓練を終えた後平気な顔で団員たちの基礎訓練を指導するシノや、代表者として寝る間も惜しんで事務仕事をしたりあちこち跳び回っているオルガやユージンなど、他の幹部たちもおかしいや相当にタフなのだが、やはり共に行動している以上三日月の行動を主として見てしまう。

しかし実の所、別に仕事以外の訓練とかで三日月と行動を共にする必要は全くないのだが、ハツシュは弟子とはそういうものだと思いつ込んでいるようであった。

(慣れなきや辛いつのに、いきなり行動を真似するとか、へんなヤツ)

三日月は三日月で、そう言った指導を全く行うどころか思いつきもしていないようだった。まあ彼自身鍛錬は自分から進んでやり始め

た方だし、指導のやり方などランディの真似事くらいしかできない。普通の教練以上にやりたいんだつたら好きにしたら？　というスタンスだ。ゆえにハツシユは思いこみのまま必死で三日月に食らいつこうとする。確かに鍛えられはするかも知れないが、その前にぶつ倒れるのが先ではなからうか。

とまあハツシユがひいひい言ってる頃、オルガのもとには朗報が届いていた。

「本当ですか、兄貴」

「ああ、伝手を辿って鉱山関係者を何人が引つ張つてこれた。暫くはクーデリア嬢の下について貰うことになるが、採掘場の管理を任せられる人らだ。諸々の手続きが終わり次第お前らに預かつて貰う。それと同時に獅電の輸送スケジュールが正式に決定した。いよいよアーヴラウとの取引に一步前進つてわけだ」

採掘場の管理要員。名瀬が引き抜き紹介した人材は、鉄華団の欠けているところを補うためのものであった。同時に採掘場の方に目処がつけば、獅電の輸送も引き受けられる。手を尽くしてくれた名瀬に感謝し、オルガは頭を下げた。

「ありがとうございます、助かりました！　これで採掘場の稼働に目処がつく」

「まだまだやらなきやならないことも多いがな。それでも任せられりゃ一息付けるはずだ。そろそろ団員たちにも休暇くらいは取らせてやってもいいだろう？」

「はい、みんなも喜びます。重ね重ねありがとうございます！」

連絡を終えたオルガは、喜色を隠さず拳を握りしめガッツポーズを取った。

「っしや！　これでなんとかかなりそうだ。まだ油断ならねえが、ちつたあ仕事回せるようになるぞー！」

「ビスケットも半年待たせずに済む。名瀬さんにやあ頭が上がりねえな」

安堵の溜息を吐いてユージンが言う。オルガと揃って連日てんてこ舞いだつた彼も相当に喜んでる。

「さすがに防衛組織の発足式典にやあ間に合わなかったが、むしろ時期がずれて丁度良い案配かもな。……確かそろそろだろ式典は」

「ああ、ビスケットたちには俺らの名代として顔を出して貰う事になっていたが……あいつならそつなくこなしてくれるだろう」

「蒔苗のじいさんも、火星のハーフメタル増産にやあ期待してるっていうし、獅電の事も合わせて張り切らないとだな」

笑顔を見合わせ軽く拳をぶつけ合う2人。やっと堅気の仕事が軌道に乗ってきた。その手応えに希望を感じている。

その希望に水が差される……どころではない事態になろうとは、さしものの彼らも予想していなかった。

アーヴラウ防衛組織発足式典会場。式典を直前にしてその準備にスタッフは追われている。勿論彼らも。

「外のMWは？」

「すでにキャリアで裏の方に。展開は予定通り当日早朝で」

「警備のシフトを確認して穴の無いように。担当の人たちとは連絡をこまめに取るようにしてくれ」

「支部長、ラディーチェさんからシフトなど警備計画に変更はないかと問い合わせが来ていますけど」

「ああ、『一切変更は無し』って伝えてくれる？」

「え？　でも……あ、いいえ、分かりました。そう伝えておきます」

「警察から連絡来ました！　予定通りに市内の警戒に入るとのことです！」

「防衛組織の警邏隊に確認を取って。LCSの回線は常時繋がってる？」

「はい、通信レベルも安定しています」

「レベルは常に意識しておくように。通信のログも取っておいて。様

子がおかしかったらすぐ報告を」

仮設の警備詰め所で指揮を執るビスケット。ここ何日かろくに寝ていないが、まだまだ活力に満ちあふれていた。

そこに、部下を伴ってマニングスが姿を現す。

「取り込み中にすまないな。こちらのほうの進行状況とのすりあわせを相談に来た。そして『例の話』も」

「こちらこそ忙しなくてすいません。……タカキ、少し頼む」

「了解です、任せて下さい」

その場の面子に状況を任せ、マニングスを伴い奥の会議室へ向かうビスケット。席に着いた彼らは早速話し合いを開始する。

「こちらはスケジュール通りだ。……が、やはり緊張や高揚している者が多く、全体ではないが浮き足立っているところがあるな。やはり君たちを警備の中核に据えたいところだが……」

「こればかりは。我々は元々『外様』ですし。主役を差し置いて真ん中に居座るのはやはり問題になるでしょうから」

今回の式典では、鉄華団はあくまで式典警備の補佐という形を取り、会場のメインから一步離れた外側の警備を担当している。防衛組織発足の式典で重要な箇所を任されるのはその影響力が大きいと内外に示すことになってしまう。それは防衛組織としても鉄華団としても望むところではない。まあほとんど表向きの話で、警備プランの構築など重要なところで関わっているのだが。

「どこに行くにもSPがついていて窮屈だと、蒔苗代表はぼやいておられたがな」

「行く先々を細かくチェックされるのも神経質だと思われるでしょうけど、念には念を入れておかないといけませんからね」

く、と交わされる苦笑。そうしてからマニングスは真剣な表情となった。

「それで、『警備情報の漏洩』については？」

「……まだ確証には至っていません。色々泳がせて、『増援』なども頼んではいますが尻尾は掴んでませんね」

「すまないな、後ろ暗いことをさせている」

「いえ、『身内』を疑わなくてはならない僕たちの不徳です。お気になさらずに」

なにやら不穏な空気が流れる会話であった。

「何事もなければそれに越したことはないが。……まずは式典を無事に済ませることだな」

「はい。大概のことには対応できるはずですが、油断は禁物ですね」

会場には監視カメラも多いが全ての死角をカバーできるわけでもなく、また警備もまったたく穴が無いというわけではない。侵入者が何か事を起こすという可能性は0ではなかった。

その可能性を少しでも潰すべく、男たちは知恵を絞り、策を練る。式典を乗り越えれば、新たに状況を動かせると見越して。

だが式典そのものが潰えるどころか新たな国家の危機を迎える事態になるとは、流石に予測していなかった。

市街の住宅地。夜遅くになって2人の少年が家路に急ぐ。

「すつかり遅くなっちゃったね」

「ああ、大詰めだから仕方がない」

タカキとアストンである。彼らは住宅地の一角に部屋を借り、共同生活を行っていた。

彼らのように複数で部屋や家を借りて暮らしている団員は多い。家賃を安く上げるためという理由が大半だが、彼らの場合一人暮らしをしようとしていたアストンをタカキが迎え入れたという形だ。アストンは昭弘からアルトランドの姓を貰い、元ヒューマンデブリの少年たちの中にも『兄弟』となった者も多くいる。が、なぜだか彼はそんな仲間と一歩引いた位置にあらうとしていた。

何となく見かねたタカキが誘ったのだが、未だにアストンはどこか戸惑っているような様子を見せる。それでも大分慣れてきたなど、タ

カキは内心安堵を覚えていた。

「ただいま〜と。……寝てるだろうから静かに……」

「あ、お兄ちゃんにアストンさん、お帰りなさい」

そつと部屋のドアを開けた少年たちを迎えるのは、タカキによく似た容姿の少女。

「フウカ・ウノ」。タカキの妹であり、鉄華団地球支部開設後に火星から呼び寄せられ、現地の学校に入学している。兄以外身寄りが無く、またタカキが良い教育を受けさせたいと望んだためであったが、早くも馴染んできているようだ。

「起きてたのか。先に休んでいても良かったのに」

「放っておいたらお兄ちゃんたちご飯も食わずに寝ちゃうでしょ？」

駄目だよ体力勝負の仕事で無精してちゃ。ほらほら順番にシャワー浴びて。その間にご飯暖めとくから」

歳の割にはかなりしつかりした妹に急かされ風呂場に消えるタカキの姿を見て、アストンはいたたまれないような、くすぐったいような気持ちを抱えていた。

海賊に買い取られ消耗品として扱われ、死と隣り合わせの生活を送る内にすっかりと心がすり減っていった。そして鉄華団に救われ、少しずつ『何かを』取り戻してきているような、そんな気がする。

だが、今一步踏み入ることが出来ない。どうにも仲間と距離を置いてしまうのは、『また失ってしまうのではないか』という本能的な恐れからの物であった。本人はそれを自覚していないが、今の生活に暖かさを感じると同時に胸が締め付けられるような思いを抱いている。穏やかな生活が大切になってきていて、それが恐ろしい。矛盾した思いを胸に秘め、それでも恐る恐る歩んでいる。それが今のアストン・アルトランドという少年であった。

タカキとフウカのやりとりは微笑ましく、暖かい。この光景を大切にしたいと心の底から思う。それが失われることを想像するだけで胸が張り裂けそうになる。

護りたい。アストンはそんな思いを持ちつつあった。この光景を護る。そのためならば……。

ぐっと、胸元の拳が力強く握りしめられる。

「待たせましたか？」

「いや、時間通りだ。流石にしつかりしているな」

エドモントン某所。繁華街の隅にある酒場にて、ラディーチェはあ
る人物と待ち合わせをしていた。

髭面の、鋭い目をした男。気楽な様子に見えるが、密やかに油断な
く周囲に気を配っているところから、どうにもただ者ではなさそう
だ。

「それで、状況は？」

「予定通りというところですね。詳細はこちらに」

す、とテーブルの上に差し出されるメモリーカード。男はそれを受
け取り己のタブレットで中身を確認する。

「……十分だ。これならこちらでなんとでもなる。……しかし『荷物』
が間に合わなかったのは少々残念だったな」

「せっついてみたのですが、どうにもいい加減な対応でこのざまです。
まったく呆れた物で」

「慎重なんだろうさ。……あとは事が起こってからだ。手筈通りに頼
むぞ」

「ええ、任せて下さい」

その後暫く会話を交わし、幾度か杯をを重ねてから2人は別れを告
げる。

さして酔ってもいないラディーチェは、家路を急ぐ。と、路地の曲
がり角の所で軽く人とぶつかってしまった。

「これは失礼。申し訳ない」

「……いえ、こちらこそ」

さくりと謝罪する相手に軽く会釈して立ち去るラディーチェ。彼

と別れてしばらくの後、ぶつかった人物は『己の手中にある物』を確かめている。

それは『マイクロレコーダー』であった。

レコーダーに記録された会話を確認して、ビスケットは溜息を吐く。

「核心をつく会話はしていませんか……」

「メモリーカードを回収出来れば良かったのだが……どうにも向こうもそれなりの手練れのようだ。警戒域には踏み込めないね」

夜半を過ぎた支部の一室でビスケットが対峙しているのはラデーチェとぶつかった人物——ランデイの伝手で紹介して貰った『興信所の調査員』である。

行動が怪しいラデーチェを調べて貰っていたのだが、十二分に怪しくはあっても確たる証拠がない。頻繁に特定の人物と会っているのだが、その人物もどうやら『その手のプロ』らしくなかなか尻尾を掴めないでいた。

「しかし全く収穫がなかったわけじゃない。相手の素性が一応分かった」

「どのような人物で？」

調査員はテーブルの上に資料を広げる。

「[ガラン・モツサ]。各地の紛争などに顔を出している傭兵——戦争屋だ」

※今回のえぬじい

「そう言えば重力の事はどうなっているのです？」

「エイハブ粒子とかリアクターとかでなんとかしてんじやねーの？」

「そう言うことになった。(理屈を考えつかなかった訳ではない。決して)」

29・当然のことだと思っただが

テイワズが所有する木星圏コロニーの一角。そこにジャスレイの本拠はある。

彼はそこに取り巻きを集めて会合を開くのが常であった。いつもであれば酒も回り上機嫌である面子だが、この日はどうにも渋い顔で雁首を揃えていた。

「叔父貴、連中このまま調子に乗せていいんですかい？」

「ガキには過ぎた褒美でしょう。親父は何を考えてるのか」

気に入らないと言う感情を隠そうともせず、口々に不満を零す取り巻きたち。ジャスレイもまた渋面で不機嫌そうに葉巻をふかしていた。

「いいわけがねえ。親父め、耄碌したか……」

確かにマクマードの決定は筋が通っている。しかしそれが納得できようはずもなかった。新参のガキども、しかも前々から気にくわなかった名瀬の手下だ。そんな連中が手柄を立ててのし上がり、大きな顔をするのは実に面白くない。

その上で内心、自分でも気付かぬところで己の立場を危うくするのではないかという怯えもある。ジャスレイはそんな人間を蹴落とすことで立場を上げてきた部分もあった。度量があるように装っているのは、そう言った部分の裏返しであろう。

ともかく決定されたことに表立って異を唱える訳にもいかない。ジャスレイは組織のナンバー2と自他共に認める存在であるが、まだ確実に組織の跡目を継ぐと決まったわけではないし、他の幹部が全員それを認めているわけでもない。ジャスレイに反目している人間もいるのだ。下手な動きを見せれば足を引っ張られる恐れもあった。

「付け入る隙があったらどうとでもねじ込めるが。……あいつらがポカミスの一つでもやらかしてくれりゃあな」

面白くもなさげな態度で、ジャスレイは葉巻をロックグラスの中に突っこんだ。

アリアンロッド旗艦スキップジャック。その内部のトレーニングルームの一つで、ジュリエッタは汗を流していた。

まるで自分を追い込むような鬼気迫る様子に、近づくものは誰もいない……と思いきや。

「なかなか頑張ってるじゃないか。手も足も出なかったことが悔しかったかい？」

無遠慮に踏み込んでくる者が居る。マリイ・フォルク。ジュリエッタと同じようなトレーニングウェア姿だが、汗の一つもかいていない。

「……何かご用ですか」

トレーニングを中断し、ぶつきらぼうに言葉を放つジュリエッタ。マリイもまた彼女が気に入らないと感じる人物だ。軍紀などを無視したかのように飄々と好き勝手な態度を取る。GHに、アリアンロッドに、ラスタルに忠誠を誓い模範となるべく配慮しているジュリエッタにとって目障りな存在であった。

「なに、無駄な努力をしているなあって思ってます」

「己を鍛え上げることに、無駄などありません！」

小馬鹿にしたような言葉に、いきり立って食って掛かるジュリエッタ。彼女に戦いを教えてくれた人物の薫陶。それを否定されたような言葉が勘に障った。

目の前の女は意に返さない。鼻を鳴らして応える。

「ふうん？　ただ闇雲に鍛え上げれば、勝てる相手だと思ってるんだ？」

その言葉に、ジュリエッタは身を強張らせる。最早戦いですらな

かった敗北の記憶。そして彼我の力の差が分からぬジュリエッタではなかった。

『どう足掻いても、勝つイメージに繋がらない』。どこをどうすれば攻略できるのかが全く読めない存在と出会ったのは始めてであった。師である男にすら、勝ち筋を見出すことが出来たというのに。

それほどの才があったからこそ拾われたのだと言うことは自覚している。だからこそ己を磨き抜いた。恩ある人たちに報いるために。その全てを持ってしても届かない、などという事態は彼らの期待に対する『裏切り』と言っても良い。ジュリエッタはそのように思い込んでいた。

だからといってやむに鍛え上げても届かないという事実は彼女にだって分かってている。こうやって修練を積んでいるのは半分現実逃避に近い。その事実を指摘されたと感じたジュリエッタは、歯噛みしながら押し黙るしかない。

その様子を見たマリイの口元に笑みが浮かぶ。そうしてから彼女は俯くジュリエッタの耳元に口を寄せた。

「演習データNo.836d-1113」

「……え？」

はっとジュリエッタが顔を上げたときには、マリイは背を向けて立ち去ろうとしていた。

「ま、待って下さい！… 今のは……」

「ヒントはくれてやったよ。後は自分でなんとかするんだね」

啞然とするジュリエッタを置いて、マリイはトレーニングルームを後にする。部屋を出てから、彼女は口を開いた。

「盗み聞きとは趣味が良いねえ」

「割って入れる雰囲気ではなかったのね。気に障ったのであれば謝罪する」

ドア横の壁に背を預け、腕組みをした仮面の男。ヴィダールはその姿勢のまま、マリイに問う。

「君は誰かの手助けをするようなタイプではないと思っていたが？」
「弾除け」は一人でも多い方が良い。……とか言っておいたらいいか

い？」

に、と獣のような笑みを浮かべるマリイだが、その本心は窺い知れない。

「ま、腕の立つ人間が一人でも欲しいのは本当さ。マクギリス・フアードも鉄華団もナメてかかれる相手じゃない。……なにより、『あの人』がいる」

一瞬マリイの瞳に何かの感情が乗ったが、僅かの間のことのでヴィダールは気付かなかった。

「今はまだアリアンロッドの数で押し切ることが出来るけどね。その内手が付けられなくなる。うちの閣下もそのあたりは分かっているから裏を動かしているし、あたしやあんたみたいな『反則技』を用意してる。それでもあの人に向こうに付いている以上、どんな手を繰り出してくるか分かったモンじゃない。……ま、あんたは『本懐』を成し遂げられればそれでいいんだろうけどね？」

「……君はどうなんだ。外道の手段を選択し、何を成す」

ヴィダールの言葉に、マリイは肩をすくめて応えた。
「似たようなモンさ。『あたしはあたしの目的を果たす』。後は野となれ山となれ、ってね」

アーヴラウ防衛組織発足式典当日。式典に参加する鉄華団幹部のために用意された控え室に、タカキとアストンが訪れた。

「失礼します。タカキ・ウノとアストン・アルトランド、報告に来ました」

「いいよ、入って」

部屋の中にはスーツ姿のビスケットと。

「へえ、チャドさんも似合いますね」

「はは、お世辞でも嬉しいよ」

同じくスーツを纏ったチャドである。まだ着慣れない様子ではあったが、なかなかどうして様になつていた。

「ネクタイってのはどうにも落ち着かないな。団長の気持ちがちよつと分かった」

「順調にいったらこれから先そう言う格好をすることも多くなる。いまのうちに慣れておいてよ」

「こやかに会話が交わされている……ように見えて、その実『手早く筆記しながらメモ帳を示し合わせるやりとりが交わされていた』。』

『ラディーチェさんの様子は？』

『外回りの様子見を口実に席を外しています』

『分かった。みんなは現状の任務に集中して』

『いいんですか？』

『動きがあるとすれば今日ここだ。彼は別な人間に任せる』

盗聴に配慮した方法である。勿論事前に周囲を調べてはいるがそれも完全ではない。『こちらが気付いている』ということを経力悟らせないために、彼らはこのような小細工を行っていた。

「……じゃあ後は手筈通りに……」

情報のやりとりを終えて表向きの指示を出そうとしたところで、再びノックの音が響く。弾かれたように扉の左右についたタカキとアストンがさりげなく懐に手を伸ばすのを確認して、ビスケットは「はい、どなた？」と平常通りの返事を返した。

「失礼、ラスカー・アレジ副代表が挨拶に窺いたいとのことでお連れしました」

「これはわざわざご丁寧に。お入り下さい」

開かれたドアから現れたのは、SPを引き連れたラスカー本人。それを確認したタカキとアストンが密やかに安堵の息を吐いて下がる。それに気付いているのか居ないのか、ラスカーはこやかに言葉を放つ。

「お忙しいところを申し訳ない。式典の前に挨拶をと思ひましてな」

「わざわざ痛み入ります。こちらから出向きましたものを」

頭を下げるビスケット。蒔苗の懐刀と言えるこの人物は鉄華団に

かなり気を使ってくれていた。国を救ってくれた恩人と言うこともあるだろうが、それにしても過分な扱いだとビスケットたちは恐縮するかぎりであった。

「お気になさいますな。あなた達には世話になっただけで、その上面倒ばかりを押しつけて申し訳なく思っているところです。……そうそう、それでこのついでに紹介したい者がおりまして。これ、ご挨拶なさい」

ラスカーに促され、部屋に足を踏み入れる人物。真紅のドレスを纏い、先端にウエーブのかかったロングの黒髪を靡かせて、勝ち気な顔に花も綻ぶような笑みを浮かべたその女性が言葉を放つ。

「お初に。【イアンナ・アレジ】と申します。よろしくお願い致しますわ」

淑女の礼を行うその娘の横で、どこかしら自慢げにラスカーが言う。

「末の娘でしてな。留学から帰ってきたばかりなのですが、是非ともあなた方に目通りしたいと我が儘を申しまして。……親馬鹿と笑って下され」

一瞬凍る鉄華団一同。確かに予想外であったが問題はそこではない。

((娘え!?!))

外観に共通点が全くないってかこの人結婚して子供居たのか。いやおかしくはないのだけれどなんか納得いかない。世の中とはかくも面妖なものなのか。微妙な理不尽さを感じる少年たちであった。

まあそれはそれとして、とビスケットは小さく咳払い。そして気持ちを切り替えた。

「(丁寧に。民兵組織鉄華団地球支部支部長、ビスケット・グリフォンです。こちらは副支部長のチャド・チャダーン、それと団員のタカキ・ウノとアストン・アルトランドです。どうかお見知りおきを」

『よろしくお願いします』

ビスケットに促され会釈する少年たち。イアンナは笑みを湛えて彼らの元に寄り、ビスケットの手を取った。

「救国の英雄とお会いできるなんて感激です！ 留学先で事の顛末は見聞きしましたが、胸のすくような思いでしたわ！ まるで夢のよう！」

大仰なことを言いながらぶんぶかビスケットの手を上下に振る。ビスケットは戸惑って「ええ、あの、どうも？」と微妙な反応だった。そこに呆れた様子のラスカーが割ってはいる。

「これこれ、グリフォン支部長が困っているではないか。はしたないことはひかえなさい」

そう言われてからはたと気付いたかのように表情を変えたイアンナが、ぱっとビスケットの手を離し下がる。

「ご、ごめんなさい。つい興奮してしまって……」

ぺこぺこと頭を下げるイアンナに対し、「いえ、気にしていませんから……」と告げるビスケット。そうしながら彼は妙な『違和感』を覚えていた。

(なんだろう、『演技をしているような』感覚があるんだけど……?)
イアンナの態度にほんのわずかな『わざとらしさ』があるような気がする。公の場であるから猫を被っているのか。どうにもよく読めない人だ。

そんなことを考えていたとき、部屋のドアが再びノックされた。今度は随分と慌ただしい。

「グリフォン支部長はこちらででしょうか！ 警備部より緊急の用件があります！」

「……………どうしました？」

一瞬で気を引き締める鉄華団の少年たち。ドアを開け放つて姿を現した伝令の兵は、敬礼もそこそこに告げた。

「コード008の状況が確認されました！ シフトを『対テロ』に変更、式典の開催を中断し関係者を会場より退避させます！ 支部長は対策本部へお急ぎください！」

空気が一気に緊迫したものへと変わった。

この時から、「アーヴラウの最も長い1ヶ月」と呼ばれる騒動が始まることとなる。

時は少々遡って、エドモントン某所、市街地の一角にある酒場。真つ昼間だというのにまばらに客が入ってそこそこ繁盛している中、ラディーチェと髭面の男——ガランは言葉を交わしていた。

「君は心が痛まないかね？ 仮にも寝食を共にした子供たちが戦渦に巻き込まれることに」

からかうように言うガラン。どの口がそれを言うかという事実はさておいて、ラディーチェは淡々と返した。

「いいえ全く。彼らは野放しにされた獣のようなものです。言うことを聞かない獣に対して共感も同情も覚えませんね」

「獣は嫌いかね」

「私は動物にアレルギーがありましたね。特に宇宙ネズミとか」

ラディーチェには野心があつた。元々圏外圏とはいえエリートの出である。テイワズという組織で頭角を現し、いずれはそれなりの立場となつて采配を振るおうと、それだけのことが出来ると自負があつた。

しかし突然海とも山とも知れない小僧どもの世話役を押しつけられ、地球くんだりまで足を運ぶ羽目になった。かてて加えてその小僧どもは小生意気で言うことを聞かず、好き勝手に振る舞っていた。こちらとしては早いところ功績を挙げて上部から評価されたいというのに、のらりくらりと予定を先延ばしにしてのうのと過ごしている。鬱屈は貯まっていく一方であつた。

もつともテイワズの思惑としては、『それなりに期待しているからこの役目を申しつけた』のだが。何しろアーヴラウに、いや地球圏の様々な勢力に対して売り込みを計る大仕事である。その上でラディーチェに申しつけられたのはあくまで『お目付役』だ。事務を牛耳り腰を据えて構えていれば、そして順調に事が運べば自然と功績は

転がり込んでくるはずであった。なにも功を焦る必要はなかったというのに。

結果的にラディーチェ・リロトという人間の採用は、完全に見込み違いであったと言える。さらに彼は自身の能力に対し過信があった。『テイワズの目の届かないところであれば、背信行為などごまかせると考えるくらいには』。

己の能力、鉄華団の実力、テイワズの組織力。それらの見積もりが甘すぎる。その上間抜けなことに彼は『ランデイが行ってきたことを知ろうとしなかった』。というか基本的に鉄華団と防衛組織の教練に欠片も興味を示さず、様子を伺うことすらしなかったのだ。自分のテリトリー——事務的な采配と数値以外には関わろうとせず、宇宙ネズミの子供相手と言うことで上から目線の態度を貫き、まともな人間関係を構築しようと言う意志を持たなかった。嘗めてかかっているにもほどがある。

そんな実情ははつきり分からないにしても、組織の中で浮いていてこちらの話に乗りそうだからと声をかけたガランのセンスは間違っていたとは言い難い。彼らにとって悲劇だったのは、鉄華団が、いや『ランデイの薫陶を受けた人間たちが斜め上に最悪だった』ということころだろう。

待ちかまえているものを知らぬガランは、くく、と格好付けた笑みを浮かべて言う。

「なるほど、面白い男だな君は」

確かにある意味面白い。

「面白い男は好きだよ、俺は。まあ残念なことに『予定の荷物』を間に合わせる事が出来なかったのはマイナス点だが」

ラディーチェに獅電の輸送を急ぐように依頼したのは彼である。GH以外で開発された初のMSフレーム。アーヴラウを中心にさまざまな勢力へと売り込まれるであろうそれは、戦力的にもセールス的にもグレイズ、フレックグレイズの対抗馬となるだろう。そのデータを、出来れば機体そのものをくすねて入手し、GH技術部に持ち込んで解析、対策を立てさせるといというのが目論見であった。

しかし物が手に入らないのであれば仕方がない。元々あわよくばと思っていたことだ。あまり欲をかってメインの目的をし損じるなどとなつては困る。程々などころにしておくさと、思考を切り替えるガラン。

「だからといって約束を反故にすることはしない。報酬はちゃんと用意する。手筈通りにたのむぞ?」

「分かりました。よろしくお願いします」

「では、ここの払いは持つておこう。……そろそろ『花火』が上がる。楽しみにしておきたまえ」

そう言つて席を立ち、背中を向けひらひらと手を振りながら立ち去るガラン。レジで支払いを済ませ、店を出たところで――

「……おかしいな」

眉を顰める。予定ではラディーチェと別れるところで式典会場の『仕掛け』が動くはずだった。このあたりは式典会場にほど近く、騒ぎが起きれば耳に届くはずだ。だが未だに何の反応もない。

(しくじったか。……であればプランを変更するしかないな)

傭兵を装つた非合法工作員(ウェットワーカー)、それが彼の正体である。アーヴラウにて騒動を起こし、可能であれば蒔苗を排除した上で紛争の勃発によるアーヴラウ軍事力の削り取りを計り、介入を計るであろうマクギリスの謀殺を狙うという策略を企てていたが、どうにも初手で躓いてしまったようだ。

だが、仕掛けは二重にも三重にも用意してある。合わせてプランもいくつかのルートがあつた。故に彼は全く慌てる様子を見せない。

「……俺だ。プランをB―3に変更。ドウは式典会場の様子を探れ。折を見て『網』を潰す。MSはポイント3と5に運び込め」

携帯にて部下に指示を飛ばす。予定が変更されたことにより少々急がねばならないようだ。彼は足早に目的地へと急ぐ。

闇に蠢くものたち。彼らにとつても長くなる1ヶ月が始まろうとしていた。

蒔苗のために用意された控え室。その部屋に爆弾が仕掛けられていたようだ。前もって待機させていた爆発物処理チームによつてそれは対処された。

仕掛けられていた花瓶ごと液体窒素で凍らされて機能停止した爆弾は、専用設備で爆破処理される手筈だ。てきぱきと対処する処理班を見送つて、ビスケットと防衛組織の幹部たちは対策を立てる。

「マークス教官の指摘したとおりとなつたな。彼は予知能力者かなにかかね」

「GHのやり口を知っているからでしょうね。その上で底意地が悪い。『相手が嫌がるやり方』というのを熟知してるんですよあの人」

防衛組織の指導に置いて、まずランディが重視させたのは『テロ対策』である。戦力の増強、兵の錬度が先ではないかと問うてきた防衛組織の人間に対し、彼はこう宣つた。

「本来『いきなり武力衝突が生じることは、まずあり得ない』」

国単位の組織同士の諍いで、いきなり宣戦布告から戦争勃発なんてものが起こるものではない。『それが起こる前段階』というものがあると彼は言う。

「2年前に鉄華団がこなしたミッションの概略は見て貰つたと思うが、これはたまたま状況がかち合ひすぎたことなつたという異例だ。初手からして火星という中央の目が届きにくい環境と、火星支部長の馬鹿さ加減からああいう事態になつたんだが、『地球上ではどうだった？』蒔苗代表を失脚させる策略、『そういつたものを挟まなければ武力を捻出することはできなかった』んだよ」

GHのみならず、国家レベルの勢力が武力を動かそうとすれば『相応の理由が必要となる』。逆に言えば『そう言う理由を作らせないと、作らないこと』がまず要点になるとランディは主張した。

「テロリズムというものは、その理由を作り出すための手段となりうる。治安の悪化、要人の暗殺。それにつけ込んで疑心暗鬼を植え付け

ることが出来れば、付け入る隙が生じるんだ。ドルトコロニーが分かりやすい例だろう。空間も環境も限られた状況下なら、情報のコントロールも扇動もやりやすい。……このアーヴラウであれば、蒔苗代表を何らかの手段で黙らせることが出来ればどれほどの混乱が起きるか。覚えがあるだろう?」

ゆえにこのアーヴラウを目障りだと思ふものがあれば、まず蒔苗の周囲から突き崩しにかかる。その上混乱したところで様々な理由を付けて武力介入を行う。事実2年前はそうであった。同じ事はしないだろうが別方向からのアプローチは十分考えられる。

「アーヴラウは力を持ち始めた。それを目障りだと思ふところは多いが、いきなり殴りつければ非難を受け全てを敵に回すのは自分だ。だから先に『殴りつけるための理由を作る』。それこそ『バレなければ手段を選ばない』って考えておいた方が良い。殴り合うより先に、そういった可能性を潰していくことを考えた方が、結果的に無駄な被害を広げなくて済むと思うぜ?」

2年前という前例は、その台詞に説得力を与えていた。やはり恐ろしい人だとビスケツトは改めて思う。

ランディール・マーカスという男は、戦術、戦略眼を含めた『戦いに関するセンス』というものが図抜けている。ただ戦い勝つと言うことだけでは無い、『どうすれば勝てる状況に持つていけるか』、それを見出す感覚に長けているのだ。さらにそれを敵側に充てて思考し自身の勢力の欠点、補わなければならない部分を指摘することも出来る。正直この人物を手放したのは恐らくGH最大の失策では無からうかとすら感じてしまうほどだ。

事実彼が指摘した危惧は現状にぴたりと当て嵌まる。それを自分たちはどう乗りこなさねばならないのか。不安しかないがやらねばならない。ランディはおろかオルガも三日月も居ない現状でどこまでやれるか試されるのだと、ビスケツトは気を引き締めた。

「ともかく蒔苗代表の暗殺は防げましたが、2手3手と用意されているでしょうね。次はどう出てくるか」

「ほぼ黒である人間をまだ泳がせていなければならぬのが齒がゆい

な」

シナプスは苦虫を噛み潰したような表情で唸る。ラディイチェがガランに情報をリークしていることは間違いあるまい。しかしその2人を拘束して事態が收拾するものではなかった。

ガラン個人でアーヴラウを揺るがすほどの騒動が起こせるわけではない。必ず組織的な集団がある。それがどのくらいの規模でどれくらいの行動を起こせるのか、その概要だけでも掴まなければ迂闊な動きは出来なかった。かてて加えてラディイチェはともかく、ガランはプロであった。下手な尾行は感付かれそうになるし、その経歴を調べても不明なところが多く背後関係を調べるのも困難だ。今はまだ手を出せるときではないと、ビスケットたちは判断している。

「代表と要人の警護は強化していますから迂闊に手を出せるものではないと思いますが、油断は禁物ですね」

「そちらの方面に手を出せないと向こうが判断すれば……SAUとの国境付近で挑発行為を行い、武力衝突を誘発するなど考えられるか」
彼らの中では、ガランはGHの工作員であるということが決定づけられている。アーヴラウはGHを公然と非難し圧力をかけてくる目の上のたんこぶであり、その力を削ぎたいと考えるのは当然のことだ。政治的に対立関係に近いSAUなども怪しいと思われるが、非合法工作をしてまで関係を悪化したいと考えるほどではないだろう。まずGHの手のものだと考えて間違いないと睨んでいた。

だが、『GHの全てが敵というわけでもない』。

『伝手』に情報の提供を請うてみます。それと国境線付近での哨戒行動をそれとなく増やした方がよさそうですね」

「非公式のルートでSAUには警戒を促すよう動いているが……どこまで効果があるやら」

「打てる手は全て打ちましょう。好きにやらせるわけには行きません」

力強く言うビスケットの言葉に、シナプスを始めとした防衛組織の面々は頷く。ここまで積み上げてきたものを横合いから突き崩そうという行為は許し難いし、この程度の苦難を乗り越えられなければ防

衛組織としての意味がない。様々な思惑と事情で集った面々であるが、今この場でその意志は一つであった。

と、そこに伝令が駆け込んでくる。

「失礼します！ 式典会場の再チェックが終了しました。代表の控え室以外で爆発物などの存在は確認されていません。同時に監視カメラ記録映像の解析班から、疑わしい人物の映像が2、3確認されたとの報告が。現在警備状況と照らし合わせての割り出しを行っている最中です」

「ご苦労。そろそろ報道関係に一部情報を公開する。会見の用意は？」

「は、代表を含めた関係者の準備は整っております。状況が許せばいつでも」

「よし、1時間後に会見を行うと伝えてくれ。私もすぐに行く」

「はっ！ 了解致しました！」

敬礼し去る伝令を見送って、シナプスは帽子に手をかけ位置を整えた。

「さて……どう転ぶにしても、やらねばなるまいな」

1時間後、アーヴラウは防衛組織発足式典にて爆発物を用いた妨害活動が行われたと全世界に公表した。蒔苗はこれをテロ行為と断定し強く非難、事態の解決と背後関係の追求を訴え、アーヴラウ全土に非常事態を宣言。これにより国を挙げての警戒態勢へと移行した。

しかしその数時間後、事態は急変する。アーヴラウのアリアドネ通信網、それが突如沈黙したのだ。

「全く連絡が取れないってのか!？」

「勿論旧世代の有線通信網が生きている部分もある。だがそれも断片的な情報しか入ってこないし、タイムラグも生じる。直に確認しようにも、現段階では直接GHがアーヴラウに乗り込む事は出来ないから

な。そして拙いことにS A Uが戦力を準備しての警戒態勢に入った。今のところこちらで押さえてはいるが、予断を許さぬ状況だ」

アーヴラウとの連絡が途絶え数時間。各勢力はその対応に追われ、なんとかアーヴラウとコンタクトが取れないかと四苦八苦しているが、一向に状況が好転する兆しはない。オルガはマクギリスに連絡を取り現状を確認していた。

アリアドネの超光速通信網にほぼ頼り切った現在、それが断絶するなど誰が思うものか。それほど信頼性があつたというのに。

「こんな事が出来る存在はただ一つしかない。そもアリアドネの基幹技術はG H以外には秘匿されたもの。であれば今回の件は最初からG H……アリアンロッドの手によるものだろうな」

「アーヴラウを陥れるために、そこまでやるってのか」

G Hを非難し、独自の戦力を整えつつあるアーヴラウを警戒していたのは分かるが、情報インフラを断絶して孤立化までさせるとは。手段を選ばないにしても無茶苦茶すぎる。

「我々も、そこまでしないだろうという油断があつた。後手に回らされたわけだが、このまま指をくわえているわけにも行かない。私はS A Uに降りて、そこからアプローチを計ろうと思う」

「テロリストが暗躍している中で、S A Uとの武力衝突なんかさせるわけにはいかねえしな。……うちからも人を出す。そちらとは別口でコンタクトを取れないかやってみよう」

「いいのかい？ 手間も時間もかかることだ。流星にそちらが着くまでに事態を解決してみせるとは言わないが、無駄足になる可能性もあるぞ？」

「こいつは鉄華団(おれたち)だけの問題じゃねえ。アーヴラウとでかい商売しようっていうティワズの問題でもある。むしろ手を出さなきゃ俺達が親父に大目玉くらうさ」

「……感謝する。では鉄華団に依頼だ。現在アーヴラウで起こっている事態の解決に協力を要請する。君たちが通常使っている航路ではなく、正規航路を問題なく使用できるように手配しよう。今の時期なら3週間ほどで地球にたどり着けるはずだ」

「了解した。テイワズの許可を取った後、急いでホタルビをそちらに向かわせる。……あんたも無茶をするなよう？」

「心得ているさ。まだ死ぬわけにはいかないからな」

そのように言葉を交わして通信を終えたマクギリスは席を立ちながら石動に告げる。

「そういうことで私は地球に降りる。同時に地球外縁軌道統制統合艦隊にも協力を要請しよう」

「は。……しかしよろしいのですか？　アリアンロッドが裏で手を引いていると言うことは……」

「ああ、鉄華団を仲介にして間接的に私と協力関係にあるアーヴラウの力を削ぎ、あわよくば私を排除しようと言うのだろう。だが今回は、虎穴に入らなければならぬ状況だ」

いまアーヴラウの力を削がれるのは、マクギリスとしても都合が悪いのだ。出来れば早期に解決を図らねばならないが、そのためには『自分が的になる』のが手っ取り早い。こちらに意識が向けば、その分アーヴラウに対する工作が疎かになるのだから。

この程度は乗り切ってみせる。覚悟と自信を秘めた男は涼やかに笑ってみせた。

「艦隊は任せる。……それと、『彼ら』の反応はどうだった？」

「面白そうなら首を突っこむ気満々でしたよ。その分我々は派手な舞台を整えなければなりません」

「ではせいぜい、彼らの期待を裏切らないようにしようか」

男は往く。修羅道を立ち止まることなく。

正式に設立された新規の特殊機動遊撃艦隊「ヘイムダル」の介入。これによりSAUの行動は抑えられることとなる。

そして、沈黙せざるを得ないアーヴラウ内部でも新たな動きがあった。

(予定とは大分違っているが……悪くない展開だ。こいつらと防衛組織は対応に追われそろそろ判断力が鈍ってくる頃だろう。折を見てあの男の指示通り国境線の近場へ向かわせれば……)

連日止まることのない国内向けの臨時放送が流れ続ける事務所の一角で、何食わぬ顔で事務処理を行っているように見えるラディーチェは、内心ほくそ笑んでいた。

当初の計画では、爆破テロにより蒔苗と鉄華団幹部を処理して、その混乱に乗じガランたちを協力者として軍務に引き入れて内部から切り崩しを計る予定であったが、それは初動で対処されてしまった。しかし流石プロということだろう、ガランは即座に方針を切り替え国境付近でMSによるSAUを装った神出鬼没の挑発行動を繰り返し、同時に国外に向けた情報インフラを麻痺させてアーヴラウに混乱を招いた。

現在鉄華団と防衛組織は寝る間も惜しんでその対処に追われ、疲労が嵩んできている。自分がやっていることが露見する可能性はないだろう。

……などと思っているが実際は泳がされているだけだと言うことには全く気付いていない。己の立場が砂上の楼閣よりも危ういとも知らず、彼はコーヒーの入ったマグカップを口元に運んだ。

同時刻。密かに設けたアジトの一つで、ガランは臨時放送を聞き流しつつマグカップを傾けていた。

「今のところは順調。なかなか隙がないが、いつまで保つかかな？」

事は優位に運んでいると、彼はそう判断していた。初手を防いだところは見事だがやはり付け焼き刃。こうやって引っかければ混乱し身動きが取れなくなる。あとはマクギリスを引きずり出せば。着々と事が進んでいるとほくそ笑みながら、彼はコーヒーに口を付けた。

そして――

「今入った情報によりますと、アーヴラウ政府は傭兵を自称する人物、ガラン・モツサを今回の事件の重要参考人と断定。全国に指名手配すると発表しました」

ぶふーっ！ ×2

全く別の場所で全く同時に、2人の男がコーヒーを思いっきり吹いた。

※今回のえぬじい

「泣かす……今回のこと企んだヤツ絶対泣かす……」

→とばつちりで事務処理が増えて修羅場中のランデイさん。

30・ストレスの貯まるモグラ叩きさ

国外との通信が途絶えて数日。修羅場の中、ほぼ不眠不休で動いていたビスケットが、目の下に隈を作った顔で凄絶に笑みを浮かべた。

「……やっつ尻尾が掴めたか」

「はい、リモートである男のタブレットからデータを抜くのは一苦勞でしたけど、消された通信ログを復歸させてみたらどんぴしゃでした」

ダンテにハッキング系の技術を習った団員が、隙を見てラディエーチェの通信記録を抜き出し解析していたのだ。発覚を恐れ用心しながらの仕事であったため時間はかかったが、何者かと頻繁に連絡を取っているという確認は取れた。

しかし。

「……彼を拘束すれば、情報源の無くなったガラランとやらがどう動くか、読めなくなる危険があるな」

襟の汚れが目立ってきたシナプスが唸る。アリアドネの麻痺という形振り構わぬ手段を繰り出してきた相手だ、最悪の場合SAU側を挑発してこちらに侵攻させるといふ事も考えられる。いや、今だって時間をかけていればそのような手に打って出る可能性は十分にあった。

「アリアドネの復旧はどうなっている？」

「は、現在チャダーン副支部長を中核としたチームがアプローチをかけていますが、やはりプロテクトが嚴重で難航している模様です」

ダンテほどではないがチャドもその手の技術は得手である。が、さすがに現代の通信インフラが根幹を司るアリアドネのシステム、そのメインフレームに手を付けられるほどの技量があるわけではない。それでも何とかならないかと、彼は自ら先頭に立ち専門家たちを引き連れてアプローチを続けていた。

このままでは国外に向けて飛行機を飛ばすこともできない。国内はともかく長距離通信は全てアリアドネに頼り切りだった。それが

麻痺することがこうも混乱を招くのかと、関係者はほぞをかむ思いである。確かに有効な手段であった。ガラン・モツサ、間違いなくプロの工作員だ。

だがとっかかりは掴んだ。あとはこれをどうチャンスへと結びつけるかだ。

「ラディーチエには制限した情報を伝えていますから、ある程度状況をコントロールできますが……ガランの動きを制限できるほどではありませんね」

もはや本人の前以外では呼び捨てである。それはともかくとして、ガランの動きを鈍らせ、せめて時間稼ぎをしなければならぬ。そのためにはどうすればいいか。ビスケットたちは額を付き合わせて考える。

ややあつて。

「……これで動きを押さえられるかどうかは分らんが、やらないよ
リマシ、という手段を思いついた」

眉を寄せつばなしであったマニングスが、唸るように言葉を絞り出す。

「それは本当かね？」

藁にも縋るような思いで問うシナプス。それに対してマニングスは頷いてみせた。

「問題は、ガラン自身がフリーだということです。であれば『重しを付ける』……最低でも、堂々と町中を歩けなくするくらいのことでは
きるでしょう」

マニングスが語った策——ガラン・モツサの指名手配は、討議の末採用されることとなった。果たしてそれは打開策となりうるのか。

同じ頃、火星を発ったホタルビは地球へと向かう航路上にあった。

「妙な気分だな。堂々と正規航路使えるってのは」

諸々の処理と対応で火星に居残ったオルガに代わって指揮を執るユージンが、渋面で呟いた。

2年前の因縁からGHというかアリアンロッドあたりから睨まれている関係上、正規航路を使いにくい立場にあつた鉄華団は、これまで裏航路を使わざるを得なかった。それをこうもあつさりという思いがある。勿論船舶の登録データなどは誤魔化してあるが、マクギリスの手配が上手くいったからこそそのことだ。あの男、着々と勢力を伸ばしているようだなど、警戒心にも似た思いがよぎった。

まあそれはいいと、ユージンは思考を切り替える。

「あんたがあたしら呼び出すとか珍しいけど、何の用？」

ブリッジにはラフタとアジールの姿。今回の地球行きにも同行していた彼女らに、ユージンは尋ねたいことがあつた。

「ああ、2人は『あのおっさん』について何かご存じで？」

ユージンが尋ねたのは――

「おう、こりゃあ美味い。おじょうちゃん良い腕してるねえ」

「は、はあ……」

食堂でアトラが作った料理を着に一杯引っかけている薄ら禿げの親父、ジョニー。今回の依頼をテイワズに伝えたところ、マクマードから直々に連れて行けと頼まれたのだ。なんでこんな酔っぱらいの親父を……などと思っていたら、三日月と昭弘がこっそりユージンに告げた。

「あのおっさん、『ヤバイ』

と。

戦闘のセンスが凶抜けている2人が揃って危険視している。そんな人物がただの親父であるはずがないと睨んだユージンは、ラフタたちにジョニーの人となりを尋ねたのだ。

「あたしすら詳しい訳じゃない。ここ1〜2年かな？ 鉄華団が正式にテイワズに加入したあたりから、内部監察室長って名目であちこちに集ってるらしいね」

「エロ親父だよねー。でもなんかダーリンは愛想よく付き合ってるみ

「ただいだけ。ああ見えてマジ監察とかしてるのかも？」

「なるほど……すんません、つまらない話に付き合わせて」

道化を装った食わせ者か。ユージンはそのように見る。こちらが何かやらかさなければ動きを見せることはないだろうが、気には留めておかなければならない。なにしろ今回は『ランデイが同行していない』。自分たちだけの力でこなしていかなければならないのだ。

「あの人が居ない穴を埋められるかどうかが鍵だな。……アジーさん、ビトーの方は上手くやってますか？」

「ああ、ランデイの見込みは間違いなさそうだ。阿頼耶識の調整が終われば機体とのフィッティングと機種転換訓練をすぐにでも始められるさ」

結局、増えに増えまくった事務仕事からランデイは解放されず、彼が地球に向かう事は（メリビットを筆頭にした事務方から）許されなかった。その代わりと言ってはなんだが——

「こいつをくれてやる。使いこなしてみろ」

「……へ？」

地球行きの準備でてんこ舞いの格納庫。そこでビトーを呼び出したランデイは、自分の機体——シユヴァルベ・グレイズを前にそう宣った。

「阿頼耶識の搭載と調整、機種転換訓練も含めて3週間ありやあものになるだろ。ランドマン・ロデイの方はエンビカエルガーかに任せりゃいい」

「でもこれ……いいのかよ」

戸惑うビトー。ランデイは構わず。

「どのみち俺は暫く事務から離れられんし、それが終わったらラースグリーズ——新型を仕上げるので手一杯になる。こいつを遊ばせとくよりは使えるヤツに回した方が良さだろう。……心配すんな。お前はこいつをそこそこ扱える程度の腕前はある」

準エース級で一番伸びがいいのがビトーであると、ランデイは見ていた。シユヴァルベ・グレイズを預けるには十分だろうと判断したのだ。

で。

「その代わり、今回の下手人泣かしてこい」

「……え、？」

わしり、とビトーの両肩が掴まれる。覗き込むように彼と視線を合わせたランディの目は、なんかどす黒く渦巻いていた。

「いいね？」

「アツハイ」

あれは最初に声を聞いたときよりもヤバい感じがした。後にそう語ったビトーは、現在全力で機体を乗りこなせるよう打ち込んでいた。確かに今回の件、ランディは相当ストレスをため込んでいるようだ。解決しなければマジでアリアンロットを単身壊滅させに行ってしまうかも知れない。

「ビトーだけじゃなく、俺らも気を引き締めてかからなきゃいかんな。……へまこいたら、あの人暴走するかもわからんしなあ……」

思わず遠い目になってしまうユージンに、同情的な目を向けてしまおうアジーとラフタ。と、そこでオペレーターから言葉がかかる。

「副団長、テイワズのコロニー支部と通信が繋がりました」

「！　そうか、こっちに回してくれ」

観面に表情を変えて対応するユージン。まずは一步目、それを踏み出すために彼は気を引き締めた。

同時刻。三日月は食堂でくつろいでいる……ように見えて、食堂の一角で一杯引っかけてるおっさんを監視していた。

（プレッシャーかけてるってのに、欠片も動じない……）

あからさまに敵意を込めた監視の目を、全く気にすることなくジョニーは悠々と杯を傾けている。気付かないはずはないので、かなり図太い神経をしているのだろう。それとも自分ごととき相手にもならないと思っっているのか。

「ランディよりもやっかいなヤツだな……」

「ランディさんがどうしたって？」

仕事が一段落付いたアトラが、三日月の向かいに腰掛けながら問う。三日月はすました顔でこう答えた。

「ごつちに来られなくてストレスたまってるだろうなーって」

「ああ、うん。たまってるですまないかも」

そのまま2人は雑談に興じる。そうしながらも三日月はジョニーに対して警戒することを怠っていないかったが。

と、そこになぜか腿上げをしながら食堂に入ってくるハツシユ。彼はそのまま腿上げしながら三日月たちの元に寄ってきた。

「三日月さん！ 今日の分のトレーニング終わりました！ 次はなにしたらいいですか!?!」

言いながら腿上げは止めない。シユールな光景だった。

「いやその前に、なにしてんの」

「はい！ 少しでも鍛えようと思って！ これなら移動中にでもトレーニングできます！」

「そこまでやったら逆に体痛めるから。……ともかく1時間インターバル取ってからシミュレーション。今日はそれで終わり」

「え!?! そ、そんな程度で……地球じゃ何が起こるか分からないってのに……」

啞然とするハツシユだが、三日月はいつものようにぼんやりとした様子で。

「だから余計な疲れが残るようなことはしない。……地球に着いたら、休む暇なんてないから。多分」

アリアンロッド旗艦スキップジャック。ラスタルの執務室にて、ジュリエッタはガラン指名手配の話の間かされていた。

「そんな……おじさまが……」

「事実のようだ。流石に詳しい状況までは分からないがな」

ラスタルもアリアドネに頼らない独自の情報網を持っている。しかし情報の精度や伝達の速度はどうしても低下してしまう。ガラン

の件がラスタルの元に伝えられたのは、指名手配から数日経ってからのことであった。

「思い切った手を打ったものだ。私の元に伝わったということは、恐らくSAU側——マクギリスの耳にも入っていることだろうな。ガランの動きはかなり限定されることになる」

「ではおじさまの支援をするべきです！ 指名手配などと、そんな不名誉を晴らし……」

激昂したように訴えようとするジュリエッタの言葉が力無く尻すぼみとなる。彼女も気付いたようだ。『ガランの行っていることが露見すれば、指名手配など当然である』と。

なにしろ『非合法』工作である。法を犯しているのだから犯罪者扱いされてしかるべきであった。

「恐らくははったりではあろうが、『容疑が事実である』事には違いない。ガランも早々捕縛されるものではないし、いざというときは『心得ている』が、最低でもこちらからアクションを起こすことは出来ない。自力で何とか乗り越えられることを祈るのみだ」

「おじさま……」

ジュリエッタは意気消沈したように見える。何も出来ない己をふがいなく思ったのだろうか。それを余所にラスタルは思考を巡らせていた。

ガランに対する支援を行わないどころではない。彼との関係を徹底的に断ち切りこちらに累が及ばないようにしなければならなかった。ガランとラスタルが繋がっている決定的な証拠はない。だが僅かでも関係を匂わすようなものがあれば、マクギリスはそこを突いてくるだろう。アーヴラウもそれに便乗するのは間違いない。

2年前以降の失策と言って良い。ラスタルの擁護をするわけではないが、彼もまたある意味優位に慣れすぎていた。新設の組織に手練れの部下が遅れは取るまいと甘く見ていた部分がある。

しかしまだ勝負は決まっていな思っていた。己の盟友であれば、困難は乗り切れるであろう、最悪でも証拠を残さず散ってくれらるだろうと。その上で、全ての繋がりを断つ。それがどういう意味を持

つのか、彼は自覚していない。

(すまんな、ガラン……)

己が『諦めた』事にすら気付かず、ラスタルは冷徹に友を切り捨てた。

ガラン・モツサが指名手配されてから2週間。アーヴラウを取り巻く状況は徐々に好転しつつあった。

まず国境での入出国が緩和された。とは言ってもIDなどの身分証明は厳しくチェックされ、少しでも不審な点がある者は拘束されるという厳しいものではあったが。(これによりいくつかの密輸入業者が摘発されたがそれは置いておく)

それに乗る形で限定的ながらもSAUとの情報のやりとりが行われる。タイムラグや情報の制限がある面倒くさく手間がかかる手段であったが、ここで蒔苗は大胆な手段に打って出る。

『アーヴラウ防衛組織に所属する全てのMSを含む兵器、兵員の登録情報を丸々SAU側に伝えた』のだ。かてて加えて彼は。

「この情報にないMSとか兵器類とか兵士とかは、テロリストだから撃っちゃっていいよ」

要約するとこのようなメッセージを付け加えていた。国境付近でのSAUに対する暗躍を封じるためである。

これによりSAU側に越境して挑発行為を行おうとしたガランたちは、国境付近で展開していた地球外縁軌道統制統合艦隊地上部隊による熱烈な弾雨のおもてなしを受けることとなった。この段階で地上部隊の指揮を執っていたのがコーリス・ステンジャであったというのが彼らの不幸を増長する。

アーヴラウにとって自分たちが受け入れがたい存在だと自覚しているコーリスは、状況を冷静に判断し決して配下に国境を越えさせることを許さなかった。一步でもアーヴラウ側に立ち入れば即座に国

際問題となる。ゆえに国境付近に現れた不審機を深追いせず、追いつくだけに留まらせたのだ。

もちろんSAU側にもラスタルの息がかかった作業員はいる。が、それらの動きはSAU政府に直接働きかけているマクギリスによって封じられていた。

現状でアーヴラウが国外との情報通信を自ら断絶する理由はなく、またSAUとの武力衝突を望むはずはない。マクギリスはこう各所に訴え冷静さを保つよう尽力した。その成果もあってSAUは緊張を保ちつつも浅慮な行動は慎んでいる。国境付近の警備をGHに任せているのはそのためであった。

こうなると途端にガランたちは追いつまされていく。指名手配の影響でアーヴラウ各所の警戒が強まり、『見覚えのない人物』は疑念の目で見られるようになった。アーヴラウ内部ではガラン本人だけでなく配下も身動きが取りにくくなったのだ。その上でSAU側がこの反応。MSでの越境は難しく、偽造のIDと身分証明を使っても経歴が怪しいのは変わらないため正規の出国も困難だろう。結果アーヴラウから脱出することも市井に紛れることも出来なくなっていく。

しかしガランにはまだ勝算があった。ラディーチェからもたらされる情報により、アーヴラウ防衛組織の行動はある程度把握できおり、その裏をかいて物資の集積所などを襲撃し混乱を招くと同時に物資を補給して糊口を凌ぐ。また裏で取引のある闇商人などを利用して物資や情報を集め戦力の維持を図っていた。アリアドネの復帰にはGHが専門の技術者と、セブンスターズクラスの高官の立ち会いが必要となる。となれば必ずマクギリス本人がアーヴラウを訪れなければならぬ。それまでゲリラ戦を展開して粘り、マクギリスの首を取ることが出来ればこちらの目的は果たせると、そう目論んでいた。

だが、彼は知らない。ラディーチェからもたらされる情報が制御されたものであることに。そしてすでにマクギリスと鉄華団地上支部が綿密な打ち合わせを行い、対策を練っていることに。

「しかし上手いことを考えついたものだ、彼らは」

『ビスケットから送られてきたメール』を読み終え、マクギリスはふふ、と微笑を浮かべる。

通常の通信手段が回復したわけではなく、また入国監査を経たものでもない。これは『静止軌道上に待機したテイワズ所有の船舶を利用した、大出力LCSを仲介としたもの』であった。

マクマードのお墨付きを得てテイワズのコロニー支部に連絡を取ったユージンは、近接コロニー間の連絡に使われる大型LCSシステムを積んだ船舶の借用を要請し、衛星軌道上からダイレクトに鉄華団地上支部へ連絡を取らせたのだ。そしてエイハブウェーブ下での戦闘を想定して展開していたLCS通信網を介し、地上支部とのコンタクトを取ることに成功。以降晴れ間限定ではあるがかなり詳細な情報のやりとりが可能となった。

これにより、LCS、超光速通信、ホタルビと遠回しではあるがアーヴラウとSAUは連絡を取り合い、はびこるテロリストに対して反撃の準備を整えつつあった。その中核となるマクギリスは、目の回るような忙しさでありつつも高揚感のようなものを覚えている。

「彼ら自身で決着を付けることも可能であっただろうに。気を使われたかな、これは」

自分を関わらせることによつて、アーヴラウとの関係を保たせようというのだろう。勿論ただの厚意ではなく打算がある。それでも相応の信用はしてくれているようだ。ならば応えなければなるまい。

「准将、そろそろお時間です」

「そうか、今行く」

部下に答えマクギリスは席を立った。これから行うのは命を賭けた綱渡り。だがそれを渡りきってみせると、彼は決意を新たにす。

「……ええ、そう言うことです。くれぐれもこの話は内密に。まだ確定したことはありませんから」

支部事務との通信を終えるビスケット。勿論相手はラディーチェである。鼻を鳴らしてビスケットは振り返り、注視していた皆に告げた。

「これで向こうに計画の概要が伝わるはずです。前線から戦力を引き、集結を始める様子なら引つかかったということでしょう」

ほう、と誰かの呼気が漏れる。対策本部の中に蔓延していた緊張が、僅かながらも和らいでいた。

「ここまで、長かったな……」

「しかしここから先が本番と言っても良いでしょう。事には細心の注意を払わなければ」

疲労の色が濃いシナプスとマニングスが言葉を交わす。ガランたちの暗躍を食い止め、なおかつアーヴラウ国外への逃亡を防ぐのに、彼らは尽力していた。そのために少なくない代償を払うこととなったが。

死者こそ出ていないものの負傷者は多数、そしてMSを始めとする兵器の破損、物資の損失など決して安くない損害が生じている。向こうのゲリラ戦術が上手くいっていると誤解させるため、わざと被害を受けるようし向けたのだ。その上で、ラディーチェが漏らした情報通りに襲撃が行えるよう、手筈を整える念の入りようであった。

指名手配により、ガランたちは市井に潜り込んでの補給や情報収集が困難になっていくはずだ。であれば疑わしい面があるともラディーチェの情報に頼る部分が多くなる。それがほぼ間違いなく襲撃のためになったとなれば、疑念も少しずつ解けていくことだろう。まさかこちらがある程度の大損害覚悟で策を巡らせているとは思えない。

1ヶ月に満たない時間、しかし恐ろしく長く感じられる中、彼らは

神経を削る思いで忍耐の時を過ごしていた。ようやくそれが報われようとしている。

「政府からの人員が送られてくれば、用意は整う。後は勝負を賭けるのみか。……それで、ラディーチェ・リロトの処遇は決まったかね？」

シナプスの言葉に、ビスケットは渋面となった。あれでもラディーチェは一応曲がりなりに『鉄華団に所属している』。そんな人物がテロに協力していたと公に知らしめれば、鉄華団はおろかテイワズにも累が及ぶ。つまりあの男がやらかした事は絶対に公表するわけにはいかない。アーヴラウとしても、そんなことが露見すればとてつもなく面倒なことになるのは目に見えていたので是非とも避けたいことだ。とことんまで迷惑な男である。

結局内々で処理しなければならぬのだが。

「それに関しては、テイワズから送られてくる内部監察室長に対処させたいとのこと。もちろんアーヴラウ側が納得し許可を得られればの話ですが」

「どのみちこちらで密かに処刑、というわけにもいかんだろう。一応は法治国家だ、我々が処理するのであればどうしても法的手続きが必要となるし、記録に残ればどこから情報が漏れるか分からん。テイワズ社内の問題として、『適切に処分』してもらうしかあるまいよ」

つまりは私刑など行っても目を瞑るということである。実際シナプス以下アーヴラウ関係者たちも八つ裂きにしてやりたいほどの苛立ちがあったが、先も言ったとおり立場というものがある。苦汁を飲む思いで『裏社会の流儀』に任せるより他無かった。

ともかくSAU側のマクギリスとも協力しあい、反撃の準備は整いつつある。あとはこれまでの鬱憤を晴らすまでだ。

……とか思ってたらまさか『もう一悶着』あるとは、流石に誰も予測してなかった。

(やつとか。首尾よく行けばこんなところからはおさらばだ)

ビスケットからの連絡を受けたラディーチェは、周囲に見られぬようひっそりとほくそ笑んだ。

ガランの指名手配からこつち、自身も拘束されるのではないかと怯えていたラディーチェであったが、一向にその様子はなく何の変化もなかった。誰も彼もがテロ対策で殺気立っていたが、自分に構う様子など無く平常通りであったのだ。(※注 もちろん皆今すぐぼてくり回したいのを堪えてる)

それと成しにガランの事を調べてみれば、出自の怪しい傭兵がうちよろしているという事で目を付けられたらしい。幸いにして、自分との繋がりには露見していないようだ。(※注 してる)

ガランの方でも疑念を抱いていたようだが、流した情報によって成果が上がるとそれも薄らいだ。どちらにしろ現状でラディーチェは数少ない情報源の一つである。頼らざるを得ない部分は多いのだろう。

己の背信が露見せず、なおかつガランにとって利用価値が残っているうちに決着が付くのが望ましい。そしてその機会は巡ってきた。

事がなれば混乱に乗じてこの地を脱し、報酬である金銭と偽造IDを受け取って別人として生きる。そしてそこから新たな人生を始めるのだ。

(こんな自分を認めないヤクザものと、いつまでも付き合っていられるか。私は抜けさせて貰うぞ)

壮大なフラグがどかんと立った。そりやもうこれ以上ないってくらいに立った。

そしてそれが折れることはない。

テロ対策及びアリアドネ通信網の回復を図るため、マクギリス・フアリド准将が極秘にアーヴラウに入国し、アーヴラウ要人が国境付近まで出迎える。そしてその護衛を鉄華団が務めるといった情報が漏れた。当然ながら故意である。

マクギリスは己の命が狙われていると言うことは承知であり、それ故にテロリストたちをおびき寄せる格好の餌になると自ら申し出たのだ。色々と思惑は見え隠れしていたが、そこまでやるとなればアーヴラウの方もある程度信用せざるを得ない。またビスケットからの取りなしもあり、彼の申し出は受け入れられる事となった。

そしてアーヴラウ側であるが。

「……えい!? あなたが!」

「はい、父の名代として私が参ります」

アーヴラウ側の要人として現れたのは、なんと動きやすい服を纏ったイアンナである。これには鉄華団の面々はおろか、シナプスやマニングスなど防衛組織の面々も啞然とした表情だ。イアンナお付きらしいSPはもうなんか色々諦めた様子であった。

「い、いや! 政府重鎮のお嬢さんを戦場に連れて行くなんて真似は……」

「あら? クーデリア・藍那・バーンスタイン氏もかなりお若い女性ですけど、修羅場を潜ってらっしゃいますわよね? 2年前」

はたと我を取り戻し、思いとどまらせようとするビスケットであったが、イアンナは勝ち気な笑みをにっと浮かべて返した。

「彼女がよくて私が駄目、などという話は通らないでしょう? それに私はアレジの末の娘。それなりの立場にありますが同時に『失つても痛手のない人間』でもあります。今回の作戦にはうってつけの人物だと思えますよ?」

「そんな! 危険が分かっています!」

「誰が行っても危険なことには変わりありません。それに、『護つて下さるのでしよう』? ビスケット・グリフォン支部長」

強気な表情に真剣な眼差し。これがこの女性の本性なのか。これでは梃子でも動きそうにない。

(多分これはラスカー氏や蒔苗代表も説き伏せられたんだろうなあ……)

またどうにもあくの強い人間が関わってきたようだ。ビスケットは色々諦めざるを得なかった。

「……分かりました。ですが作戦中はこちらの指示に従って貰います」

「ビスケットさん!? いいんですか!」

護衛を務める一人であるタカキがビスケットに問うた。応えるビスケットは肩をすくめて。

「確かに彼女の言うとおりに、誰が来たってやることは一緒だ。ここでもめるよりは腹を決めてかかったほうがいい。多分彼女は梃子でも動かない。分かるね?」

「……なんかすつごくわかりました」

ビスケットの目に諦めというか疲労というか、澁んだ色を見てタカキは得心した。抵抗しても無駄だこれ。

「……その、なんだ、すまんね支部長」

「大丈夫です。慣れてますからこういうの」

居心地悪そうに言うシナプスに対し力無く返すビスケット。イアンナが背後で「……どういう意味かしら」と笑顔にお怒りマーク貼り付けて呟いているが無視だ無視。

「ともかく後は任せるよチャド。面倒かけて済まないけど」

「ああ、こっちは任せてくれ。……みんな、気を付けろよ?」

ビスケットを筆頭に護衛を担当するものたちは力強く頷く。実際には護衛というよりテロリストどものとの交戦を前提とした精鋭だ。その中にはタカキとアストンの姿もあった。

(俺がどうなっても、タカキだけはフウカの元に無事帰さなきゃな)

密かに決意を固めて拳を力強く握りしめるアストン。己の命を賭けて共を護る覚悟を彼は持っている。そのことが果たしていかなる結果を招くのか、いずれにしても後悔するつもりはさらさら無かった。

とにもかくにも、一悶着ありはしたがイアンナを中核とした一行は

国境付近の合流地点に向かって発つ。

1ヶ月に及ぶ混乱。それは一気にクライマックスを迎えつつあった。

アーヴラウとSAUが国境付近の一角。森林の狭間に草原が点在する地帯に、ガランたちは散開して潜んでいた。

各所で挑発行為を繰り返していた部下たちを一堂に集めた、必勝の構えである。今日この時こそが起死回生の一打になると、ガランは勢い込んでいた。最初の指名手配でこそ動揺したが、その後の立ち回りは何とかこなしてきた。向こうもアリアドネの沈黙という予想外のアクシデントがあったせいで対応が甘くなっていたのだろうが、それを差し引いても相応の損害は与えてきている。追いつめてきているという手応えはあった。

その上で今回のマクギリスの動きである。順当といえば順当であるが、やつとかという思いがないわけでもない。それほどに今回の任務はプレッシャーを感じていた。ともかく機会は巡ってきた。ここで決着を付けるとガランは決意を新たにす。

「隊長、確認しました。アーヴラウ側の交渉役です。装甲車2台にMWが8。MSが2個小隊」

合流ポイントを監視していた部下から有線の通信が入る。情報に間違いはないようだ。

「よし、そのまま待機。監視を続けてSAU側が現れるのを……」

「っ！ 来ました！ ヘイルダムのMS部隊です！ 1個小隊！」

森林の影で監視を続けている部下の眼前に、森を割ってスタークグレイズの小隊が姿を現す。先頭の青い機体がアーヴラウ側の前へと進み、跪いた。そのコクピットが開くと同時にアーヴラウ側の装甲車の上部ハッチが開いた。

「確認しました。マクギリス・ファリドと鉄華団地上支部支部長です。間違いありません！」

「よし、貴様も後退して戦闘に加われ。……無線封鎖解除！ 総員機体を起こせ、これより我々は目標の殲滅に入る！」

命じるが早いか、ガランは己の機体に火を入れた。

スリープしていたリアクターが次々と目覚める。そしてそれは即座に察知されていた。

「支部長来ました！ 数は24、2個中隊規模です！」

「総員応戦！ 第2小隊は装甲車の直衛に！ タカキ、第1小隊は任せる！ 防戦に努めて時間を稼ぐんだ！ ファリド准将！」

「心得た！ こちらは気にするな、そちらの自衛に努めてくれ！」

襲撃を読んでいたビスケットたちは即座に反応。四方から迫る襲撃者に相対する。数の上では倍、その上相手は手練れだ。状況は不利であったが、しかし誰一人として気圧されるものはいない。

車内に飛び込んで装甲車のハッチを閉じながら、ビスケットはオペレーターと言葉を交わす。

「通信の状況は？」

「広域LCSはジャミングされました。向こうもドローンを展開しているようです」

「友軍機との通信だけは確保して。それと常時敵の位置を把握。向こうはSAU側には展開できない、いざとなればそっちに逃げ込むよ」

「了解。現在SAU側の機体が交戦を始めたようです。第1小隊も接敵。散発的に反撃しています」

「深追いはさせないで。数だけが多いから囲まれないように」

いつもの穏やかな様子とは違い、鋭い眼差しで矢継ぎ早に指示を飛ばすビスケット。その様子を見やりつつ、イアンナは微かに笑みを浮かべた。

(不謹慎だけど、こういう場の方が生き生きして見えるわね)

この1ヶ月足らずの修羅場より、命を賭けたこの場の方が映えて見える。全身全霊を込め、必死だからだろう。これほどまでに自分が必死になったことがあっただろうか。いや、ありはしない。

体を張って生き抜き、そして自分たちの国のため命を賭けてくれる彼ら。それに対し自分は何が出来るのだろうかという密かな考えが、アンナの中にあつた。

まずは彼らを知らなければならぬと思う。伝え聞いた英雄がごとき彼らではなく、そのものの彼らを。まだ少女の面影を色濃く残した女性は、期待を込めた目で少年たちの働きを見守る。

「反応は良い！　だがその数ではなあ！」

一気果敢に攻め込むガランの部隊。鉄華団とマクギリスたちは無理に立ち向かおうとせず、防戦に努めていた。

「さすがに、やる。攻め込まれないようにするのが精一杯か」

こまめに位置を変え、囲まれないよう留意しながら反撃を行っているタカキ。彼も相応に訓練をこなし技量を上げているが、いかんせん地上支部で人の世話ばかりしていることが多く、実戦からは少々遠のいていた。それでも倍以上の数を相手取って五分に持つていけるのは大したものだが。

「手慣れてやがる。裏でこそこそするだけのゴキブリ野郎ってわけじゃねえか」

タカキとバディを組んで応戦しているアストンは、冷静に敵を観察している。彼の技量は地上支部の中でも頭一つ抜けているが、三日月や昭弘などのトップエースのように無双ごっこができるほどではない。そのあたりは彼も自覚している。

しかし。

(タカキを前に出させないようにしないとな)

友を気遣う心が、無自覚に己の中の優先順位を決めつけている。その範疇に『自分の命はない』。我知らず死兵となりかけているアストンは、その全能力をタカキを護るためだけに振り分けていた。

幸い、と言つてはなんだがガランたちの目的はタカキを仕留める事ではない。

「そうだろう。私を亡き者にすれば、すべての片は付くのだからな！」
自分に向かつて集中的に群がる敵兵に対し、マクギリスは不敵な笑みを見せる。

アーヴラウで起こした混乱は、最終的にはマクギリスを戦場に引きずり出すため『だけ』にあった。ここで彼を仕留められれば最上。成らずとも失態に価する損害を与えればいい。ガランたちの任務はそれで達成される。マクギリスを引きつけ、その隙を突いてアーヴラウの要人を始末するだけでも十分であるが、自分たちが有利なこの状況であれば積極的にマクギリスの命を狙うであろう。

「もつとも、簡単に討ち取られてやる気はないがね」

するりと青いスタークグレイズが二本の剣を抜く。彼の機体は外見こそ配下のもものと変わらないが、中身はフルチューニングを施した別物である。ガランたちが用いる旧世代のMS「ゲイレル」もその実態は現用機と変わらないが、すでにこの時点で差が生じていた。

かてて加えて。

「遅い」

ゆらりと舞うように、双剣が奔る。打ちかかってきたゲイレルの1体、その得物を左で弾き飛ばし返す刀でコクピットを一突き。流れるようなその動作だけで1体が地に伏した。

一切の無駄がない。ランディのように超絶の反応を追求するのはなく、最小限の動作だけで最大の効率を引き出す技術。以前から高い技量を持つマクギリスであつたが、さらにその腕は磨かれているようである。

機体も乗り手も格が違う。その上彼が引き連れている配下も相当の技量を持っているようで、マクギリスほどではないにしろ優位を保って敵と相対している。彼らに襲いかかったものたちは、一方的な苦戦を強いられることとなった。

「くっ、これほどは」

次々と葬られていく部下の様子に、顔を顰めるガラン。想像以上の

技量を持つマクギリスの立ち回りに戦慄を覚えずにはいられない。まだ数の上では有利であるが、イニシアチブは向こうが握っている形だ。このままでは形勢逆転と言うこともあり得るだろう。

「ならば……第1小隊、俺に続け。アーヴラウ側の装甲車を始末する」
『了解』

目標を変更。マクギリス本人が手強いのであれば、弱いところを切り崩す。幸いにして鉄華団の方はマクギリスたちほどの技量ではないようだ。こちらは数で一気に押し込めばいけると、機体を方向転換させるガラン。

「あれは、隊長機か。一気に押し込んでくる気だな」

「……俺が前に出て引っかき回す。援護を頼む」

「アストン!?! ちよつと待って……」

タカキの静止を振り切つてアストンは機体を加速させる。

地を這うようにホバリングする機体を蛇行させつつマシンガンを散発的にばらまく。そうしながら彼は左腕でナタのような武器を引き抜いた。

「阿頼耶識付きか。宇宙ネズミにしても良い動きだが!」

突っこんでくるランドマン・ロディに対し、ガランは部下を四方から襲いかからせた。鈍重そうに見えて機敏に動く機体は、四方からの打ち込みを危なげなく回避する。大振りで振り抜かれたツルハシのような得物をすり抜けざまに、相手の手首あたりをナタで強かに打ち付け得物を取り落とさせた。同時に極至近距離からマシンガンを手ゲイルールの顔面に叩き込み、乗り手が怯んだところを蹴倒す。

次いで襲いかかってきた敵の得物をナタで受け止め、そのままスタターを全開で吹かし真正面から体当たり。装甲の厚いマン・ロディだからこそでできる荒技だ。吹っ飛んだ機体が見向きもせず、アストンは次の敵に襲いかかる。

型も何もあつたものではない、荒々しいその戦いぶりは野生の獣がごとく戦場を蹂躞する。しかしそれはまだ青く荒削りなもので、勢いに任せたものだ。そして焦りにも似た死兵の鍍金は、ガランほどの技量があれば見抜ける。

「流石の錬度ではある！　しかしなあ！」

ガランは倒された僚機を踏み台にして跳躍した。そしてそこから大上段に打ちかかり――

「そんな大振りが！」

「通じないだろうな！」

『打ち込みが払いのけられる寸前で、スラスターを全開にして真横に跳んだ』。

真つ向からの技量は己に迫るかそれ以上だろう。そんな相手とともに勝負してやるような真似はしない。単純ではあるが不意を突くその動きは、一瞬とは言え鉄華団の少年の虚を突いた。それを逃さず着地と同時に強引な機動で得物を振るう。

ガランの笑みが深まる。

「獲った！」

「させない！」

たたらを踏んだランドマン・ロデイのコクピット目がけて振り下ろされるツルハシ。それが届く寸前で、横合いからの体当たりがアストンの機体を吹っ飛ばした。

それを成したのはタカキ。アストンがタカキを護ろうとしていたのと同様に、タカキもアストンを護りたいと思っていた。我を忘れて身代わりになろうとするくらいには。

だめだ、いけない。吹っ飛ばされる機体の中、アストンの時間は引き延ばされていた。己の手が届かない、ゆっくりと流れる景色の中で、ゲイレールの得物が体勢を崩したタカキの機体に叩き込まれる――

寸前で『ゲイレールが吹っ飛ばされた』。

「……………え？」

時間の流れが戻り、尻餅をついた機体の中で　アストンは現状が把握できないまま眼前の景色を唾然と見るしかない。

ゲイレールを吹っ飛ばしたのは、『上空から叩き込まれた砲弾の爆発』。その爆煙を吹き飛ばし、落下してきたものが着地の衝撃波をまき散らす。

即座に身を起こした機体から、威勢の良い声が響いた。

「待たせたな、兄弟！」

咆吼し牙を剥く昭弘は、グシオンが手に持つハルバードを振り抜く。

同時に次々と着地する獅電を主にした鉄華団本部のMS部隊。その中核となる白い機体が、穿ったクレーターの途中で身を起こし、モニターアイを光らせる。

「早速だけど、潰すよお前ら」

地獄の番犬が、その牙を剥く。

※今回のえぬじい

ならば……答えは一つだっ！

→特に意味もなく内海つぽくアストンのフラグをへし折る筆者。

びーどばーびーどばー♪

31・狐狩りといこうじやないか

国境へと赴いたビスケットたちが襲撃を受けた。その『予定通りの知らせ』を受けた鉄華団地球支部はにわか慌ただしさを増す。

そんな中、密かにほくそ笑むラディーチェ。事は上手く推移していると、彼は信じ切っている。と、そこで彼にかかる声があった。

「ラディーチェさん、ちよつといいですか？」

ビスケットの留守を預かるチャドだ。深刻な表情を『作っている』彼に伝えて、ラディーチェは内心の嘲りを押し隠し振り向く。

「なんでしよう副支部長」

「ええ、この状況でなんですが、ラディーチェさんに渡しておくものがあります」

「？」

なんだと首を傾げるラディーチェに向かって、チャドはにっこり笑って見せた。

『『これ』です』

不意打ちで放たれたチャド全力の右フックが、ラディーチェの顔面に突き刺さる。

「おるア！ ナメた真似しれくれたじゃねえかゴミ屑がア！」

「カスがふぎけてんじやねえぞコラア！」

「ぶべら！べらっ！べらアっ!？」

第一回ラディーチェタコ殴り大会が開催されました。

爆発に吹き飛ばされながらもなんとか機体を立て直したガランは、瞬時に状況を把握する。

嵌められた。ここにきてやっと彼はそれに気付いた。全ては自分達を一網打尽にするための策。指名手配も情報のリークも全てはその伏線だったと。

不覚である。あまりにも前例のない状況であったとはいえ、我知らず冷静さを失っていた。疑うべき所はいくらでもあったというのに、裏工作で自分を上回るはずがないと高を括ってこのざまだ。優位であった戦力差ですら逆転されている。最早この場で勝ち目はない。

そう判断してこの場を切り捨てる判断を行えるのは流石ではあった。

「状況破棄、総員散開！ それぞれ独自に各ポイントへ向かえ！」

そう命じながらスモーク弾をばらまきこの場から離脱しようとする。慣れない降下の影響でふらつきながらもそれを察知したハッシュが、あとを追おうとするが。

「追わなくていいよ」

淡々とした三日月の声が、それを押し止める。

「け、けどー」

離脱するテロリストたちの機体とバルバトスを交互に見ながらハッシュが戸惑った声を上げる。応える三日月はどこまでも冷静であった。

「どつちみち、あいつらに逃げ場はないんだ」

淡々としながらもどこか凄みを感じさせるその言葉に、ハッシュは背筋が総毛立つような感覚を覚えた。と、そこにバスケットからの通信が入る。

「良いタイミングだったよ。流石だね三日月」

「俺は言われたとおりに降りてきたただだから。……それで、どうするのこの先」

その言葉にバスケットは凄絶な笑みを浮かべる。

「さつき二日月も言ったろ？ 逃げ場の無くなった獲物を追い立てて、狩るのさ」

ラディーチエの個人端末に記録されていたデータの中には、ガランたちが用意していた拠点に関する情報も含まれていた。それを基に鉄華団と防衛組織は手分けして追跡を始める。

そうとは知らないが、最早作戦は失敗し拠点を割り出されるのも時間の問題だと判断したガランは、幾人かの部下と共に拠点の一つでこれまでのデータや資料を処分していた。

「全てのデータは破棄だ。紙の一片も残すなよ！」

紙の資料はドラム缶に突っこんで燃やし、端末や機器内のデータは一度完全に初期化したあと記録媒体そのものを物理的に破壊する。ともかく自分達が存在したという痕跡を根こそぎ消し去らねばならない。

当然のことなのだが、ガランたちの表情にはこれまでにない焦りがある。それはただ追い立てられているからではなかった。

（全てのルートでラスタルとの繋ぎが取れなくなった。切り捨てにかかったか）

遠回しに間接的なものではあったが、ラスタルと関係するコネクションとの繋がりが断たれた。ガランももちろん覚悟していたことであつたが、実際にそうなることや再び動揺を感じずにはいられない。それは心のどこかに暗い澱みを生じさせるようであつた。

覚悟のあつたガランでさえそうなのだから、配下も当然同等以上の動揺があるに違いない。今は考えさせる余裕を与えず、窮地を脱する事のみ集中させていた。

と、そこで周辺に仕掛けていたセンサーに感。

「！ 見つかったか。総員MSで脱出だ！ 残りはこの場ごとナパームで焼き払う！」

慌ただしく資料の残骸や空き缶などを踏み散らかしつつ、ガランたちは外に飛び出して待機させていたMSに飛び乗る。モニターが灯れば、木々の隙間から砲火の花火が上がり、周囲に着弾する。しかしこちらの正確な位置はまだ特定できていないようだ。

「ナパームの制限発火は？」

「仕掛けました。5分で起爆します」

「よし、離脱するぞ。ポイント2方面へ移動。可能であればそちらの資材も処分する」

散発的な砲撃が続く中、敗走者たちは密やかに密林を駆け抜ける。

「だ、だから私は鉄華団を護るために……」

「鉄華団どころかテイワズからアーヴラウまでどすげえ迷惑じゃねえか。どこが何を護るってんだコラ」

顔に青アザ作って椅子に縛り付けられたラディーチェが呻くように言い訳してるが、団員の少年たちは鼻で笑ってこづき回してる。

最早ラディーチェに隠す必要もなくなったので、現在チャドを筆頭に事務系とIT系の技能を持った者総出で事務所のデータを総ざらいしている最中だ。ラディーチェがやったことの証拠を集めるだけでなく、出来ればガランの背後関係を少しでも洗い出したいという目論見からの作業であったが、どうにも芳しくなさそうだ。

と、作業を行っていた一人の手が止まる。

「……副支部長、今会計関係のデータ調べてたんですが……なんか微妙に収支の合っていないところがあるんですけど。主についていうか全部このおっさんがやったところで」

ぎん、と全員の殺気だった目が一斉にラディーチェの方を向き、彼は青い顔ですくみ上がりながらぶるぶると首を振る。

「し、知らない！ 会計を誤魔化して差額を懐に収めたりなんかして

いないぞ私は！」
がたり、と全員が椅子から立ち上がる音が響く。

「良い度胸じゃねえかこのゲロ虫がア！」

「汚物は消毒すんぞごらア！」

「あべしたわばひでぶっ!？」

ラディーチエタコ殴り大会セカンドステージが開催されました。

小隊規模に別れたガランたち。だがその一つ一つが執拗な追跡に絡め取られ追いつがられる。

エンビを小隊長として構成された通称【ごちやませ隊】もまた、逃走中の小隊を捕捉し、交戦を開始していた。

「ビトー、突っこみすぎるな！」

「好きで突っこんでんじゃねえよ！『こいつ』が速すぎるんだ！」

蒼き機体が、まるで嵐のように戦場を駆けめぐる。それを操っているビトーは、唸るように愚痴をこぼした。

「8割まで反応落としてこれかよ！ あのおっさん本当に人間か!？」

ランデイに合わせたセツティングでは、ビトー位の技量だと阿頼耶識を使用してもコントロールしにくいことこの上ない。仕方なく可能な限り性能を維持したままで制御しやすいようデチューンしたのだが、それでもフルスロットルに近い領域では手に余りそうになる。

が、流石に見込まれただけはあって、実戦の最中ビトーは徐々にコツを掴みつつあった。

「FCSが間に合わねえ。レティクルだけ表示、阿頼耶識とマニユアルで合わせる。正面から打ち合ってちやこいつの機動性が死ぬ。今の俺じゃあ一撃離脱しかねえか」

微調整しながら戦い方を組み上げていく。自分の出来ること、出来ないこと。それと機体の特性を寄り合わせていくように。

「昌弘、ヒット&ウェイで連中の鼻っ柱を叩く！ 援護してくれ！」
「行けるのか？」

「大体分かった！ 何とかする！」
「了解、でかいのかますから当たるなよ！」

グレイズ改・参式が放つ300mmが吠え砲弾が降り注ぐ中、ビトーのシュヴァルベ・グレイズが稲妻のごとき機動で迫る。

「リボン付きの悪魔……じゃない!? ばかな、奴と同レベルのパイロットがいるとでも!?!」

蒼き機体の左肩に特徴的なエンブレムが無い事を確認した兵の一人が驚愕の声を上げる。ガランの部下の中にもランディの事を知っている人間はいた。直接見知っている者こそ居ないが、流石に作業員。かなり正確な情報を持っていたようだ。その知識を持つ者からすれば、シュヴァルベ・グレイズの機動はランディそのものに近いと感じられる。

もつともランディであればもつと『えげつないこと』になっているのだが、そこまでの実態を知るものはいない。どちらにしる、翻弄され一方的に攻められることには変わりがないのだから。

「は、やるねえうちの成長株は」

「んじゃあこちらは地味に的確な仕事しようか」

獅電とランドマン・ロディという見た目は凸凹だが双子ならではの息のあったコンビネーションで、ビトーと昌弘のバディをフォローするエンビとエルガー。結果ゲイレールの小隊は離脱を許されず、その場に釘付けとなる。

ほどなくして、4体のMSが沈黙した。

防衛組織のフレックグレイズを引き連れた三日月の遊撃隊もまた、追いついた敵部隊と交戦を開始していた。その中で、ハツシユは狼狽している。

「くそ、なんで、こんなー！」

思ったように機体が動かせない。まるで学んだことがすつぽりと頭から抜け出てしまったかのようだ。訓練とはまるで違う。いや、やることは同じはずなのに頭と体が動いてくれない。

実戦の空気に飲まれたのだ。なんだかんだ言って、ハツシユは殺し合いに慣れていない。自分が育った路地裏であれば、そのような場面になったらばまず逃げていた。だがこの場では逃げ出すわけにはいかない。腹をくくるくらいには生真面目な少年である。そのことが余計に緊張と硬直を産む要因なのだ。

例えもつと訓練を積んでいたとしてもスムーズに動けたかどうか。自己判断するまでもなく状況は動く。

打ちかかってきたゲイレールの打撃を真正面から受けたハツシユの獅電は弾き飛ばされ、たたらを踏んで体勢を崩す。そこが好機とばかりに相手はさらなる追撃を敢行しようとした。

「しま……」

「言う前に動く」

ハツシユが声を上げようとしたところで、横合いからの衝撃がハツシユの機体を吹っ飛ばす。

すでに何機か仕留めてきた三日月のバルバトスが、獅電を蹴り飛ばしたのだ。そのまま打ち込んだできたゲイレールの一撃を受け流し、すり抜けざまに太刀を一閃。機体を上下に両断するまでを流れるような動きでこなしながら、三日月は淡々と言葉を投げかけた。

「無理にこっちについてくるな。防衛組織の人らの方がお前より慣れている。一緒に動け」

言うが早いか白き機体は密林の間を駆け抜けあっという間に消え

る。その先で響く衝撃音からまた即座に交戦を開始したのだろう。尻餅をついた機体を立て直すことすら忘れ、ハツシユは啞然と見送るしかなかった。

「大丈夫か？ 動けるのであれば……」

「あ!? ええ、大丈夫です」

押っ取り刀で現れた防衛組織の隊員がハツシユの機体を助け起こす。体勢を立て直し三日月の援護に向かおうかと考えたが、どうにもその必要はなさそうだ。

次々と消えるレーダー上の敵機。全く環境の違う地球上だというのに、バルバトスの動きは全く衰えない。いや火星だろうが宇宙だろうがどこでも同じだ。まるで環境の差など関係ないとばかりに、常時その時点での最高を叩き出す。機体ではない、技量だけでもない。格の差というものをまじまじと見せつけられていた。

「凄まじいものだな。あれが地獄の番犬か」

我知らずと言った様子で隊員の零した言葉がハツシユの耳に届く。彼らとて訓練を積み鍛え上げられてきた。しかしその目から見ても到底真似できるようなものではないと映る。

ハツシユもまた、我知らず言葉を零していた。

「やっぱすげえぜ、三日月さんは……」

資材や天幕を展開し、装甲車を中核にした臨時の前線司令部が構築されている。その傍らに跪いた電子戦仕様の獅電がバツクパツクから、大出力レーザー発信器とパラボナアンテナが展開した。

「角度調整……捉えた! ビスケット、イサリビとの直通回線が繋がった! そっちに回す!」

通信回線を調節していたダンテの言葉を受け、天幕下のビスケットは回線を開く。

「こちら地球支部ビスケット。イサリビ、聞こえる？」

「おう、副団長ユージンだ。感度は良好。GPS、エイハブセンサーも同調した。連中のケツが丸見えだぜ」

軌道上から戦艦の索敵機能を使って地表を観測しオペレートを行う。これにより搜索範囲は爆発的に拡大し、追撃はさらに精度を増す。統制統合艦隊が用いる手段であるが、少年たちは己の創意工夫でその手段にたどり着いていた。

「テロリストどもの動きは随時へイムダルの方にも伝えて。国境越えをさせる気はないけれど、自棄になったら何をやらかすか分からない連中だ。確実に追い込む」

「統制統合艦隊と共闘するのはなんだか複雑な気分だが……敵じゃねえ分心強いと思っておくか。ともかくこっちの追尾は抜かりねえ。存分にやってくれ」

「了解。もう長々と付き合っつてやるつもりはないさ。ここでケリをつける」

不敵に笑むビスケットの横顔を見ながら、イアンナは思う。

(MSを通信設備として使うなんて。……いえ、これも一つの運用法なんですよ)

想像もしなかったMSの使い方に驚きながらも得心する。既存の運用法にこだわらない、そういった所も彼らの躍進が要因であろう。学ばなければならぬ部分は多いと感じる。そこでなにやら新たな通信が入ってきた。

「支部長、1番小隊……流星隊からの報告です。『パターン12』の状況が発生。指示を仰ぐとのこと」

「っ！……そうか。シノには『回収物』をもって帰投するように伝えて。それとフアリド准将に連絡を」

「了解」

(……?)

漂う妙な緊張感に、イアンナは首を傾げた。

ガランの部下が一人。その男は非合法工作員らしからぬ感情に支配されている。

「なぜだ、なぜこんなことに……」

仲間と共に移動中追いつがられ交戦。だが奮戦虚しく仲間は次々と打ち倒された。こんな事が起こるはずはない。自分達は工作員に身をやつしてはいるが、GHでそれなりにならし、修羅場も潜ってきた。だというのになぜこうも一方的に圧倒される!?

彼は自覚していなかったが、これまでになくプレッシャーのかかった工作活動は、心身に想像以上の負担を強いられていた。特にガランの指名手配による犯罪者扱い、これが意外にも効いている。

彼らとて自分達が後ろ暗い事をしていているという自覚はある。だがそれはGHのために、ひいては秩序の維持に必要なことだという矜持のようなものも同時にあつた。それがはつきりと明言されたわけではないが犯罪者——『秩序の敵』として扱われることによつて、揺るがされたのだ。

自分達のやってきたことは間違いではないはずだ。正しいはずだ。そう己に言い聞かせても、無言の圧力がじりじりと心を削る。かてて加えてラスタルからの完全な『拒絶』がひび割れた心に楔を打つ。

ガランに付き従うものたちは、GHというよりラスタルに忠誠を誓い、その意志に殉ずる覚悟はあつた。だが一部のものたちは、己が任務の果てに朽ち果ててもなんらかの形で報いてくれるという期待が心のどこかにある。あるいは最後の最後まで見捨てず『逃げ口』を用意してくれるだろうという楽観的な甘さがあつたろう。これまで——『ろくにまともな対策も行えなかつた相手に対する任務』であれば、それは間違いではない。

だがこの状況は、『ラスタルにとつても前代未聞』であつたのだ。いや、彼としては想定外の範疇であり、いざとなれば工作員は切り捨てるという当たり前の行動を取つたに過ぎないのかも知れない。ガラン

を含む多くの作業員は何やら心の中にわだかまることがあってもそれを飲み込んだ。しかし『全員が全員そうではない』。この場に残った作業員は最後の最後で何かを惜しむくらいには『人間であった』。そう言うことなのだろう。

「撃つな！ 降伏する！」

機体の武器を投げ捨て、両手を上げながら全域通信で訴える。『ここで討ち取られ、そして名も知れぬ犯罪者として歴史に残る』。そうなってしまふことに恐れを抱いてしまったのだ。良心の呵責ではない、功名心じみたものではない。己の存在が汚物のようなものとして後世まで伝えられる、その事実能耐えきれないと思ってしまった。微かに残った人間としての感情が、男にその道を選ばせた。

「シノさん、これって……」

「そのまま機体を跪かせろ！ コクピットを開いて、リアクターをスリープ。武器を全部捨てて出てこい！」

包囲してきたMSの隊長格らしき機体が、銃口を向けて命じてくる。それに素直に従って男は両手を上げながらコクピットから身を現した。

「ようし、妙な真似はするなよ？ こつちの手の上に乗って横に寝そべれ。こつちが良いって言うまで動くんじゃない。動いたら撃つ」

銃口を向けられたまま、差し出されたMSの掌に寝そべる。機械の指に締め付けられる感覚に顔を顰めながら、男は苦笑を浮かべた。

(ぶざまなものだ。……こうなっては是非もない、せいぜい俺が知りうることを高く売りつけてやるさ)

綻びが裏切り者を産んだ。打ち込まれた楔は、ことのほか大きな亀裂を生じさせたようである。

テロリストの掃討は順調に進んでいるようだったが、支部事務方は

殺気立っていた。

有り体に言えば作業が増えた。微々たるものではあるがラディーチェが横領などを行ったことよって、事務関係の資料を全部洗い直す必要が出てきたのだ。一応まがりなりにも企業としての形がある以上、税金関係など不備が生じれば色々問題がある。いくら対処をテイワズに任せる事になるとはいえ、そういったところをはつきりさせしておかなければ信用に関わる。まだまだ未熟なれど、そのあたりメリビットからきつちり叩き込まれていた。

「副支部長ー、おっさんの部屋から洗いざらいもって来ましたー」
「おう、そっちの机の上に置いてくれ」

ラディーチェの個室から押収した資料はダンボールで3つほど。その中には事務関係と関係ないものも混ざっているが、横領した金の使い道なども調べておかなければならなかった。事務処理もまだ十分な域に達していない少年たちにとって、凄まじく面倒な作業である。そりやストレスもたまつて来るってモンだ。

部屋の端っこで顔に青タン作って呻いているおっさんに殺気を見ながら、ダンボールを運んできた少年が荒々しく荷物をテーブルに置いた。

と、閉まりきっていなかったダンボールの上面の端から、何やら小さな紙切れがふわりと床に落ちた。

「？ なんだこれ？」

拾ってみれば、それは安っぽい名刺。それは――

いわゆるキャバクラ嬢の名刺であった。

これがユージンやシノのように信頼関係を構築していてなおかつネタに出来るような人間であれば、後々までいぢくりまわす材料になったのであろうが、この状況では殺意を盛り増す着火材にしかならない。

名刺を回覧した少年たちが、眼窩に紅く光を灯しながらゆらりと立ち上がる。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア！」

「ドラドラドラドラドラドラドラドラドラア！」

「ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリイ！」

「オボロメタヤダツパア!？」

ラディーチェタコ殴り大会Ⅲ　　くそして伝説へく　　が開催されました。

可能な限りの物的証拠を処分したガランは、残った少数の部下を引き連れて逃亡を再開していた。

行く当ては、ない。正確に言えばアーヴラウを脱出する当てはあるが、そこから先の見通しが立っていない。ラスタルはもう自分達と完全に手を切るつもりだろう。この窮地を切り抜けることが出来ればまた接触があるかも知れないが、望みは薄い。ともかく国外に脱出し整形で顔を変え身を偽ればとりあえずは凌げる。しかしそれこそ本物の傭兵にでもなるしか道はなかった。

ラスタルの対応に思うところがないとは言わない。だが元々覚悟の上であつたことだ。これはまんまと罠にかかった自分達が自業自得。ゆえに己の力だけで切り抜けなければならない。それが叶わなかったときには……。

思考を巡らせていたその時、レーダーに感。

「散開！　各機はそれぞれ独自に脱出を計れ！」

全機がばらばらにその場を飛び退く。一瞬遅れて砲火が大地を抉った。

「もう追いついてきたか！　ラディーチェめ、こちらの情報を吐いた

な!？」

恐らく身柄を拘束されたであろう男に毒づく。確かにラディーチエから得た情報にてガランたちの拠点は大まかに割り出されていたが、衛星軌道上からの索敵を駆使した追跡網にてどのみち長いことなく追い込まれていただろう。そんなことを知るよしもないガランは、目の前に降り立ったMSに対して足を止めざるを得なかった。

「アジーさん、ラフタ。残りの連中は頼む。俺はこいつを仕留めるー!」
重々しく大地にハルバードを叩き付けるグシオン。それを駆る昭弘は牙を剥いて唸るように言った。

「兄弟たちが世話になったみてえだな。たつぷりと札をさせて貰おうか!」

「ちっ!」

逃れられないと悟ったガランは機体の腰から棍棒のような武器を引き抜く。攻めて一人でも道連れに、と思ったかどうか定かではないが、まだ諦めるつもりはないようだ。

が、と耳障りな金属音が響く。重量で劣る棍棒で、ハルバードを受け流したのだ。そのまま2度、3度と力任せの打撃を弾き飛ばす。

「はっ、力んでいるなア。それでは俺を殺せんぞ!」

嘲り嗤うように挑発する。実際技量だけならガランは昭弘を上回るどころかランディに迫るほどであったかも知れない。だが潜伏しながらの工作と、ほとんど休みのない逃亡劇は、ガランの心身に少なくない疲労を与えていた。早々に決着を付けなければ拙いと、焦っているのは彼の方であったのだ。

この期に及んでまだ生きることにしがみついている。それに対して自嘲している余裕はなかった。

「やってみなけりゃ分からねえさ!」

挑発に対し、昭弘はむきになることもなくハルバードを振るい続ける。若さと勢いがあり、そして迷いが無い。今のところは均衡を保っているが、長引けば不利と見たガランはさらに挑発を続ける。

「使い捨ての傭兵が勤勉なことだ! お前たちもこの国が自力で防衛可能となれば、用済みとなるのは目に見えているだろうに! いや、

所詮は余所者と疎まれるやも知れぬなあ！」

言いながら無理を押しつけて攻め込む。動揺を誘うと同時にイニシアチブを握ろうと企む。そうしながら言葉を止めない。

「無駄なのだよ！ お前たちのやっていることは！ 力を持って争いの火種は消えん！ いや、力を持ってばこそそれを巡ってまた争いが起きる！ どこまでも終わることはない蟻地獄よ！」

ここぞとばかりに攻勢を増す。無理を押しつけた甲斐があつたか攻守が入れ替わり、今度はガランが攻め手となった。こうなると大物のハルバードが仇となり、昭弘は受けるので手一杯となる。

「結局俺とお前は『同じ者』だ！ 力に縋り、乱の中でしか生きられない！ いや、お前だけではない！ 鉄華団そのものが！ アーヴラウに、テイワズに！ 力ある者に使い潰される運命よ！ 俺のようになあ！」

咆吼と共に放たれた一撃が、ハルバードを弾き飛ばした。重々しく大地に突き刺さるそれを残し、グシオンが後退する。

「昭弘！」

ガランの部下をいち早く片づけたラフタの獅電が、助太刀をしようと駆け寄るが、それをグシオンは手で制した。

そこから唸るような昭弘の言葉が響く。

「……おれは馬鹿だからな、てめえの言ってる事は半分も分からねえ。……だが！」

がきん、と後ろ腰から外れたマルチシザーをグシオンは手に取った。そしてそのままガランのゲイレールに殴りかかる。

「てめえは畑を耕したことがあるか!？」

「っ!？」

重い一撃が、ゲイレールの獲物を弾き飛ばす。

「寝る間も惜しんでどうやって仲間を食わせるか、頭を悩ませたことはあるか!？」

高周波ノコが予備の武器を手に取ろうとした左手首に食い込む。

「右も左も分からねえガキに根気よく付き合っつて、仕事を回してくれたことはあるか!？」

ノコを振り払って後退した機体の右肩に、パイルバンカーが突き刺さった。

「自分の国を護るために、俺達みたいなガキに頭を下げたことはあるか!?!」

肩の装甲をパーズ。さらに後退したところでグシオンの得物が変形し、巨大な鋏となる。

「てめえぶことき外道風情が!」

「があっ!?!」

フルスロットルで一氣に間合いを詰めたグシオンの振るう鋏が、顎(あぎと)のごとくゲイレールの胴体を捕らえた。

「何ができるか必死に探している連中を! 俺たちみたいなガキを信頼してくれた人たちを!」

もがくゲイレールを無理矢理天高く持ち上げ――

「訳知り顔でこきおろしてんじゃねえ!!」

「ぐがあっ!!」

強かに地面に叩き付けた。

己のことを言われただけなら昭弘はこうも激昂しなかつただろう。だが己と兄弟たちを人として扱ってくれる仲間を、そしてそんな仲間と己を信用してくれる恩ある人たちを、目の前の外道に侮辱されるのだけは我慢ならなかつた。

虎の尻尾を踏んづけた。動揺どころか激怒させてしまったことを悟るがすでに遅い。地面にクレーターを穿つ勢いで叩き付けられた衝撃で全身の骨が何力所か砕け、折れた肋骨が肺に突き刺さったようだ。もはやこれまでかと、ガランはごぼりと血を吐きながら、震える手を伸ばす。

「ラストアル……俺は……」

一瞬の迷い。それを経て、自爆のスイッチは押された。

とどめを刺そうとしていたグシオンを巻き込んで、ゲイレールが爆発四散する。炎と爆煙がグシオンの姿を覆い隠し、見守っていたラフタは悲鳴のような声を上げた。

「昭弘!」

「……大丈夫だ」

燃え盛る炎の中から、悠然と姿を現すグシオン。ラフタはほっと胸をなで下ろす。

「もう、一瞬しんぱ……びっくりしちやっただじゃない。馬鹿」

「この程度じゃ、俺は死なねえ。……こんな奴なんぞに、殺されてやらねえ」

静かな怒りが込められた声。始めて目の当たりにした少年の怒気に、ラフタはきゆう、と胸が締め付けられるような思いを感じていた。戦いはテロリスト集団壊滅という結果をもつて幕を閉じる。だが、それで全てが解決するわけではなかった。

少年たちの苦難は続く。

※今回のえぬじい

『どうぞ支部長！ 煮るなり焼くなりお好きなように！』

→ すつきりした顔で、原形を留めぬ有り様となりモザイクかかったラディーチェを示す団員たち。

「俺のやるところ残ってないじゃない」

→ がっかりビスケット

32・あとの始末が大変だ

嵐のような一夜が明け、それでも前線の人間は目まぐるしく動いていた。

撃破したテロリストたちの機体。そのほとんどが証拠を残さぬよう自爆していたが、何らかの情報が得られるかも知れないと回収されることになっている。

「敵ながら見事……とも言えんね。ただ騒ぎを起こし、失敗した。哀れなものだよ」

ガランのゲイレール。その残骸を見ながらマクギリスは言う。その傍らの三日月は興味なさげに火星ヤシの実を口に放り込もうとして……ポケットの中に残っていないことに気付く。どうやらうっかり入れ忘れてきたようだ。

ジャンパーのあちこちを探る三日月の様子にくすりと笑みを浮かべて、マクギリスは懐から包みを取り出した。その中には一口サイズのチョコレートがいくつか包まれている。

「良ければどうかかな?」

「ん、あんがと」

遠慮無く一つつまみ、包みを解いて口に頬張る三日月。視線を前に戻したマクギリスは再び口を開く。

「君たちのおかげで騒動を収めることが出来た。ありがとう」

「仕事だから。礼ならオルガやビスケットに言ってよ」

「はは、そうだな。……あるいはアグニカも、君たちのような人間だったのかも知れないな」

「あぐにか……誰?」

「アグニカ・カイエル」。最初にガンダムフレームを駆り、厄祭戦を戦い抜いた男。GHでは英雄視……ほとんど崇拜されている人物さ」

「ふーん」

ぴんと来ない話だった。そも昔の人間なんぞに興味のない三日月

である。まあそんな反応だろうとマクギリスも気に留めない。

「それはいいとして、ともかく回収した機体や僅かに残った遺留品、そして確保した生き残りからの情報を集め分析し、裏を取らなければならぬ。君たちにも協力を仰ぐこととなるだろう。あとで私から話をするが、君の方からもよろしく言っておいてくれ」

「ん、分かった」

戦いは終わったが、まだ全てが終わったわけではない。いや、ここからが始まりである。

少なくともマクギリスはそう感じていた。

もつとも、彼が画策していた展開とは少々違う方向に事態は推移していくのだが。

アーヴラウを襲った前代未聞のテロ事件。それはテロリスト一味の壊滅にて一応の終結となった。

マクギリスが引き連れてきたGH技術陣によりアリアドネ通信網が回復した直後、蒔苗は全世界に事件の終息を宣言すると同時に、テロリストの背後関係を徹底的に追及すると表明した。これにマクギリスも同意。限定的ながらGH警務局との協力を確約する。

このことが、各方面に様々な影響を与えていく。

「……以上が報告となります。テロリスト関係の捜査は警務局に引き継ぎ、地球外縁軌道統制統合艦隊とヘイムダルは通常任務へと復帰しました」

ヴィーンゴールヴ、セブンスターズ会議室にて、マクギリスはアーヴラウ騒動の報告を行っていた。本来であれば事件解決を喜ぶべき場なのだが、満足げに頷いているガルス以外の反応は芳しくない。

今回の件で『アーヴラウの勢力が全く衰えなかった』からだ。表立っては言わないが、半数は目の上のたんこぶであるアーヴラウが弱

体化するのを望んでた節がある。その一角においては黒幕だ。面白いはずも無かろう。

「ふむ……しかし今回の件は不自然な点が多いのお。特にアリアドネ通信網の断絶などというあり得ない事態。あるいはアーヴラウの自作自演だったという可能性も考えられるのではないか？」

「左様。報告にあったガランなにがしというテロリスト首魁の存在もあやしいものだ。果たして実在していたのかどうか」

ネモとエレクがそう口にするが、マクギリスは動じる様子もなく。「ガラン・モツサについては、アーヴラウ入国管理局においてその存在が確認されております。そして防衛組織の一部と接触を図っていたという確たる証拠もありました。……確かにGHが秘匿であるアリアドネに干渉するなどということは俄に信じがたいことであります」

「すう、とマクギリスの目が細くなる。

「最低でもアーヴラウにアリアドネへ干渉する技術はありません。百歩譲って彼らの主導であったとしても、『アリアドネに干渉することの出来る存在が、GH以外にあった』。この事実はゆゆしき事態だと愚考致します」

白々しいとも言える言いざまであった。分からないのはガルスとイオクだけだ。『GH以外に出来ないのであれば、GHが関わっているしかない』と言うことを。

正道という建前を纏ったマクギリスは、言葉という駒を盤上に差す。

「幸いにして、というわけではありませんが、警務局だけでもアーヴラウに介入させることが可能となりました。これを奇貨として事の真相を探るべく尽力するべきかと」

捕虜を捕らえ裏取りしていることなどおくびにも出さず言う。あるいはラストルも察している事なのかも知れないが、そう簡単には動けない。下手をすれば自分が黒幕だと露見してしまうのだから。

しかしラストルもまた、臆面もなく。

「確かにアリアドネに干渉できる存在があるとすれば、GHの沽券に

関わることだ。この件に関して、我々に出来ることがあれば協力する
としよう」

堂々と言つてのける。己とガランたちとの関係が露見しないと言
う自信からか。あるいは『露見しても構わない』と考えているのか。
マクギリスにはまだ判断は付かない。が、これで大人しくしているよ
うな人間でないことは確かだ。

「感謝致します。それでは今後の活動方針についてですが……」

上辺だけのやりとり。水面下で交わされる見えざる刃。

野心を持つもの。それに対抗しようとするもの。己の安寧だけを
願うもの。安泰であると過信するもの。ただ己が信奉する存在に従
うだけのもの。様々な思惑が、今のセブンスターズを形作っている。

とうの昔に亀裂は入っていた。砕け散る時は、そう先のことではな
い。

ラスタルの執務室。深々と椅子に腰掛けて、ラスタルは深く息を吐
いた。

「こうも見事にしてやられるとはな。やつらの力量、甘く見すぎたか」
やつらとはマクギリスであり、アーヴラウであり、鉄華団であった。
一つ一つが相手であれば、出し抜けただろうという確信がある。だが
彼らはアリアドネの断絶という状況の中で互いに手を取り合い、協力
し合つて窮地を切り抜けた。相応の信頼関係がなければできないこ
とだ。そしてそこまでの信頼関係を構築していることを読み切れな
かった。敗因はそこであるとならばラスタルは考える。

正直、マクギリスが他者と強い信頼関係を結ぶとは思っていない
かった。彼は他人を信じない。『根本的にそう言う人間だと、思い込
んでいた』。

初めての接触はまだマクギリスがイズナリオに引き取られて間も

ない頃で、己も若い時分の頃である。木陰で本を広げていた瘦せっぽっちの子供。その襟元に『殴りつけられたような青痣』があるのを見て取ったラスタルは、親切を装ってなにか欲しい物はあるかと問うた。少年の答えは『バエル』。GHが支配者たるものの証……』と思いだまれている『存在であった。それを宣った少年の目。暗く澱んだその瞳。他者を拒絶し絶対的な力を欲するその色は時を経て色褪せたように見せて、その本質は変わっていないと思っていたのだが。

「時を経たことと変わったとは思えないものだが、認めざるをえんな」かつての少年とは違う。時を経た変化ではなく『何か』が劇的に違う。ここにきてやっとラスタルはそれを認識した。

切り札の一つである旧友を用いてアーヴラウの通信網を叩き斬った策。アーヴラウ首脳陣とマクギリスの排除を狙った大がかりなそれを乗り切られたからには、最早生半可な小細工は通じまい。やもすれば想定よりも早く『正面切つての武力衝突』を考慮に入れる必要があるだろう。彼はまだ逆転の機会があると睨んでおり、諦めてなどいなかった。

ラスタルにも現状を憂う危機感と、理想を追い求める意志はある。それ自体は間違いでなく、むしろGHを改革するにふさわしい理念であった。だが『それに至る道筋の是非を問われる』。そんな事が起こるとは、この時点で予想もしていない。

ここから先の策謀が己の首を絞めることとなると、さしものの彼も見通すことは出来なかったのである。

ガランの死を伝えられてから、ジュリエッタはシミュレータームにほぼ籠もりっぱなしとなっていた。

師として、あるいは育ての親として慕っていた男の死は、彼女の心に悲しみと憤りをもたらしている。確かにアーヴラウのものたちが

らしてみれば、彼はただのテロリストで犯罪者であったのかも知れない。だがジュリエッタにとっては、かけがえのない存在であり恩人であったのだ。

そして彼は大儀のために密やかな戦いを続けていた。たとえ世界が罪人と咎めようとも、秩序を保つため戦い抜いて散つたのだ。それを世に知らしめることが許されないのが悲しく、口惜しい。そういった鬱屈を晴らさんとするかのように、彼女は自己鍛錬に没頭していた。

とは言つても、今までのやり方ではいくら鍛錬しても劇的な技量の向上は望めない。それぐらいは判断できる理性は残っていた。であればどうするべきかと考えたところで思い出す。

マリイに示唆された演習データ。資料室のデータバンクから捜し出したそれは他でもない、地球外縁軌道統制統合艦隊と標的艦隊の演習記録であった。

まず映像記録をみたジュリエッタは啞然とするしかなかった。僅か1個中隊が、数倍の相手を蹴散らしていく。それを成す最先鋒は濃紺に染められた1機のグレイズ。まるで電光のように戦場を駆けめぐり、有象無象を寄せ付けない。追いつがれたのは数機のみで、それも次々と脱落していく。

見ただけで理解できた。格が違う。あるいは以前戦った海賊や民兵組織のガンダムフレームよりも上。何もかもが自分なんぞの手が届く範囲にない。真正正銘の怪物だと、ジュリエッタは戦慄を覚えずにはいられない。

興奮冷めやらぬまま、ジュリエッタ演習のデータをシミュレーターに落とし込み、実際に体感してみることを試みる。

瞬殺であった。データ上の敵機はパイロットの技量を含む全てのスペックを發揮できるわけではない。だどいうのにまるで歯が立たなかった。まるであざ笑うかのように攻撃を避け、スリのように懐に潜り込み、雷のような打撃を喰らわせて消える。その一連の流れが分かっている、回避も反撃も許されない。瞬きの一瞬すら隙になるような、でたらめな強さ。それは本来反応が間に合わないような高速域

で機体を自在に制御しているからこそそのものだ。

恐らくは相手の動きを全て予測しているからこそその事。かのパイロットから見れば一般兵の動きなど止まっているも同然なのだろう。再現データでこれなのだ、実物はもつとんでもないだろう事は容易く予想できる。

今の自分の戦い方では逆立ちしても敵わない。嫌でもそれが分かかってしまう。それでもどこかに打開策を見いだせないかとシミュレーションを繰り返し、演習記録を何度も見返す。そして。

「……この機体」

彼女が注視したのは、最後まで蒼の魔人に食らいついた1機。アリアンロット部隊所属であるその機体は、ランデイル・マーカスほどではないにしろ確かに高い技量を持っていた。だがその機体が最後まで食らいつけたのはそこが理由ではない。

一撃でパイロットを気絶に追い込む蹴りに対し、腕を、脚を、自らぶつけることによつて相殺を計っている。もちろん損傷し、最後には達磨もかくやという姿になって結局は撃墜判定を受けていた。だがそれでも最後まで食らいついたことには変わりなく、何よりコクピットと主機さえ無事なら機体なんぞ磨り潰しても構わないとも言えるような気迫を感じ取られた。

ランデイル・マーカスとはまた違う、狂気じみた何かすら感じさせるその機体。パイロットデータまでは公開されていなかったが、その機体に印された『片翼の妖精』のエンブレム。そこから辿れば素性が分かるかも知れない。

（この機体と同じ事が出来るとは思えませんが、参照にすることは出来るでしょう。できれば本人に会って話を聞くことが出来れば……）
眉を寄せ厳しい表情で考えるジュリエッタ。と、その傍ら、テーブルの上にことりと缶コーヒーが置かれた。

「精が出るのは結構だが、適度に休まなければいざというとき働けないぞ？ それは君も望むところではあるまい」

仮面の男、ヴィダール。ジュリエッタの鬼気迫る様相に誰もが近づく事を躊躇った領域にするりと入り込んだ男は、気安く言葉をかけて

きた。その有り様になにか苛つく物を覚えて、ジュリエッタは刺々しく言葉を返す。

「そんなことは分かっています。己の限度をわきまえられない人間だと思われるのは心外ですね」

「ならばいいいさ。……コロニーの独立運動過激派を鎮圧する任務が、近々第2艦隊に命じられる。丁度機体の調整が終わったから『慣らし』のついでに俺は参加するつもりだが……君はどうする?」

ラスタル直下とされているジュリエッタは、アリアンロッドの権力下で自由裁量を持つ。だがその意志は、果たして『自由』であるのかどうか。

「勿論参加します。ラスタル様の大望がため、ひいてはGHの大儀のため、私は止まるわけにはいきませんから」

缶コーヒーを無造作に飲み干すジュリエッタ。そんな彼女の様子を見ながら、ヴィダールは声に出さずに呟いた。

『GHの大儀』か。……果たしてそれは『本当に大儀と言える物』なのかね)

仮面の男にも、思うところはある。全てを押し隠してラスタルに従う彼の目的は、果たしていかなるものなのか。

無表情な仮面に隠された感情は、やはり無機質に覆い隠されたまま。その意志は、ようと知れない。

争乱の終結直後、地球に降り立ったユージンたちがまず行ったのは、ラディーチェの『引き渡し』であった。

鉄華団団員がこぞって殺気を向ける中、へらへらと現れたジョニーは、縛り上げられた上監禁され床に転がされていたラディーチェの顔を覗き込む形でしゃがみ、にい、と笑う。

「おーおーお。随分とまあ男前になって。欲かきすぎた挙げ句がこれ

とは、ざまあねえな」

最早原形を留めない形となったラディーチェは「た……たすけ……」などと呻いているが、もちろんジョニーはにたにた笑っているだけだ。

そこに、紙媒体とメモリ媒体の双方を持ったビスケットが現れる。「お待たせしました。こちらが鉄華団地球支部開設以降の各資料。およびラディーチェ・リトロの背任及び横領の証拠です。ご確認下さい」

「おう、あんがとさん。後で確認させてもらおうわ」

そう言いながら懐に資料をしまい込む。その様子を見てビスケットは眉を顰めた。

「すぐに確認されなくてもよろしいのです？」

「その辺はお前さんらを信用してるってことよ。テイワズ相手に下手な誤魔化しするほど馬鹿じゃねえってな」

ちらりと転がってる馬鹿（ラディーチェ）に視線を向ける。たしかにこれと一緒にされるのは不愉快だけど、ビスケットは微妙に納得できない様子であった。それに構わずジョニーは続ける。

「ま、こいつに関して後はおいちゃんに任せてくれや。鉄華団にはちいと泥被って貰うことになるが、ケツ持ちは全部こっちで責任もってやらさせてもらおう。後にやあなるが損失の補填も考えるってマクマード会長直々の言葉だ。信じちゃくれねえかね？」

「……いえ、自分達のような若輩者には過分な言葉です。後のことはお任せしますので、よろしくお願いします」

ビスケットが頭を下げ、周りの団員たちも慌ててそれに習う。皆納得したわけではないようだが、ビスケットの決定に反論するつもりもいよう、大人しく退室していく。

少年たちが去った後、「さてと」とか呟いてジョニーは再びラディーチェの顔を覗き込む。

「お前さんやあまだ色々と歌ってもらわにやならんことが山ほどある。テイワズの看板に泥塗った馬鹿の末路、じっくり味わってもらわぜえ」

ぬたりとジョニーの口元が歪む。意識が朦朧としているラデイー
チエがそれを認識できなかったのは果たして幸運だったのか。

その表情は、地獄の鬼もかくやというほどの凄絶な笑みであった。

この後、ラデイーチエ・リロトは背任と横領の責任を問われ、解雇
された……というのが公式記録である。

それ以降の行方は、ようとして知れない。

今回の顛末を知ったジャスレイは、内心浮き足立つ気持ちを押さえ
マクマードの元に向かった。今回の件は明らかなる鉄華団の失点に
なると、彼は見ていた。いや、『屁理屈であったとしても失点としてね
じ込む』算段であったのだ。彼とて伊達や酔狂でNo.2に居座っている
のではない。特に他人を引きずり下ろす手管に関しては一流といっ
ていいだろう。鉄華団の失点を理由にタービンスごと蹴落としてみ
せると、意気揚々としてマクマードの元にはせ参じたのだが。

その勢いは、マクマードと面会した途端にしぼむ。

何しろ親分さん、『ごっつい機嫌が悪かった』。

「あん？ つまらなねえ用事だと八つ当たるぞジャスレイ。俺ア今腹
だたしくて仕方ねえんだよ」

忙しなく出入りする側近。そしてテーブルに山と積まれた資料。
複数のタブレットと睨みっこしているマクマードは、射殺しかねない
視線をジャスレイに向けた。口調がいつもより乱雑になっているの
を自覚しているのかどうか。とっとと出て行けでなきや殴るとでも
言いたげな親分の様子に腰が引けながらも、ジャスレイはなんとか言
葉を紡ぐ。

「お、お忙しい中申し訳ありませんが、アーヴラウの顛末について言い
てえことが……」

「今『それ』をやってる真つ最中だよ。お前さんは直接なんの関係もね

えだろうが。なんか口出しする事があるってエのか？」

「いや、組織の重鎮として、知らぬ存ぜぬじゃあいられねえと……」
「資料は回したろうが。よりにもよって『テイワズ直々に選出したお目付役が、裏切りやがった』。クソが俺達の顔に泥塗るだけじゃなく、『アーヴラウとの商売も台無しにしやがった』んだよ。鉄華団のおかげで首の皮一枚繋がったが、暫くは商談をねじ込むのも難しい事になっちまった。それが全部『あのクソがやってたようになちっちな横領なんかを見逃してた』せいよ。手前の甘さに腹が立つわ！」

ラディーチエがテイワズを甘く見ていたのは、『能力的に優秀な人間が些少の不正を行う事を見逃していたテイワズの方針』にある。要するにあの男、以前から不正をしていた上で見逃されていたため、調子に乗っていたようだ。

これは元々テイワズがマフィアの組織から成り上がった事に起因する。そういう組織なものだから臍に傷を持つ連中が多いというか、マクマードを筆頭とした経歴のやばい人間が幹部を占めているような状態だ。そういういたものだから倫理的な感覚が世間一般とはちよつとずれている。ゆえにか能力があれば多少の不正は見逃しておく、などと言うことも一部では横行していた。

もつともマクマードはそのあたりが問題になっていると考えており、少々手荒いくらいに引き締めを計っていた……矢先にこれだ。しかもやらかしがやたらとどでかい。そりゃあキレル。これ以上ないってくらいにキレル。

「ともかくあのクソは豚の餌だが、話はそれじゃ済まねえ。商談は暫く凍結、鉄華団の地球支部も規模を縮小しなきゃならんだろうな。結局骨折り損のくたびれもうけよ。黒幕を捻り殺してやりてえくれえだ」

想像の中でどこぞの陰険ヒゲを締め上げながら毒づくマクマード。滅多にない怒りを露わにした様は、ジャスレイに冷や汗をたらだら流させるには十二分であった。

「しゅ、縮小ですかい」

「ああ、あいつらに責はねえとはいえ、まがりなりにも所属している人

間がやらかしたんだ。アーヴラウに対して誠意を示す必要もある。形だけでも何らかの処罰は下さにやららん」

それにとマクマードは続けた。

「どのみち商談が凍結するんだ。今のアーヴラウじゃ奴ら防衛組織の教練と再編成の手助けくらいしか出来ねえだろうよ。暫くは地球じゃ大人しくさせとくしかあるまいさ」

「さ、さいますか」

処罰があつて勢力が弱まるというのであれば、ジャスレイとしてもそれ以上の難癖を付けるわけにはいかなかった。何より今のマクマードをあまり刺激したら自分に矛先が向くかも知れない。ジャスレイは薄氷の上を歩む思いで、マクマード前からそそくさと消えた。

とにもかくにも、地球での騒動は圏外圏にあるテイワズ本体にも影響を及ぼした。おかげでマクマードを始めとした多くの人間が忙殺され、あほとヒゲ2人に対して怨嗟の声を上げたとか上げなかったとか。

なおしばらくの後、テイワズ内でこそ不正を行っている者たちの元に、あるデータが送られた。なんのことはない、『豚の餌の製造過程が、懇切丁寧に記録された動画』である。

不正は格段に減った。

あとなぜかミンチマシンの見たら発狂する人間が増えた。

事態の終結から一月。ようやくオルガはアーヴラウへと足を踏み入れた。彼がまず行ったことは、蒔苗との面会である。

「この度のことは、誠に申し訳ございませんでした。鉄華団代表として謝罪させて下さい」

直立不動から深々と頭を下げる。その様子を見て蒔苗はぱたぱたと手を振った。

「お前さんに神妙な態度をされると調子が狂うわい。……謝罪は確かに受け取った。これ以上お前さん方に責は問わぬよ」

まあ座ってくれと向かいの席を勧め、オルガが座したところで改めて話を進める。

「正直鉄華団には救われた。状況が状況でなければ盛大に礼をしたいところじゃが……流石にうるさいのが多くてのお。すまんが『テイワズの決定に便乗させて貰う形』となった。悪く思わんでくれ」

「いや、形だけでも地球支部を残してくれるのはありがたいです。そちらも大変でしょうに」

表沙汰にはならなかったが、ラディーチェを抱え込んでいた鉄華団になんのペナルティもないという事を納得できない人間だっている。責任を取るといふ形は必要だった。

それに今回のことでアーヴラウも相当の痛手を喰らった。人的損害はほぼ負傷者だけで済んだが、テロで受けた損害はそれなりに大きく、またアリアドネを一月近くに渡って停止された事による損失も馬鹿にならない。そう言った事情もあつて、獅電の大量購入という商談は白紙に戻すしかなかったのである。

結果鉄華団は軍事オブサーバーを外され、規模の縮小を余儀なくされる。具体的には支部長であるビスケットと副支部長のチャドを解任、駐留する戦力を減らし、一介の傭兵団としてアーヴラウ政府に雇われる形に変更されることとなった。

これによりアーヴラウ政府に首根っこを掴まれ、その影響力は減退した形だ。実質的には蒔苗が直接の支配下に置かれ庇護されているのであるが。

アーヴラウとしてもテイワズとの繋がりが断たれるのは避けたいし、テイワズの方でも大口の商売相手となるアーヴラウとの関係を保ちたい。そんな両者の思惑から鉄華団地球支部の存続は決定された。状況が落ち着けばテイワズとの商談は再開されるだろうが、鉄華団が元の規模になるかどうかは不明瞭である。

「今回の件で防衛組織が十分に機能すると証明されましたからね。俺らの役目も果たされたと言っている。解雇されないだけでも御の字

ですよ」

「恩人たちを早々簡単には放り出せんで。……それで、バスケット君の後任は決まっているのかね？」

「ええ、暫くは支部長代理という形になりますが……」

「はあ!? 俺……僕が支部長代理!?」

素っ頓狂な声を上げるのはタカキ。言いつけたユージンは「そうだ」と頷いた。

「団長やバスケットとの協議の結果だ。全員一致の意見だったぞ、地球支部を任せられるのはタカキしかいねえってな」

「いや、そんな……僕なんて……」

狼狽えるタカキに対し、ユージン以下幹部たちはにやりと笑みを浮かべた。

「じゃあみんなの意見を聞くが、どうよ?」

そうやって話を振れば、地球支部に携わった団員たちが口々に言い始める。

「え? 普通にありつしょ」

「バスケット支部長あちこち跳び回って、よく代理してたじゃん」

「訓練とか演習とか仕切ってたのタカキだし、問題ねえな」

「防衛組織の人たちとも仲良いしさ」

「俺らん中じゃ擬音じゃなくて理屈で戦術とか説明できるのタカキだけだしねえ」

「なんだかんだ言っつて、一番地球支部の事分かっていて貢献してるんじゃない?」

否定する意見が無いどころか全員が推してるようだ。ますます狼狽えるタカキだが、バスケットがにっこりと告げた。

「見ている人は見ているし、評価もするさ。君の働きは十分信頼に価

する。みんなそう感じているからこそだよ。勿論俺もね」

「それは……ありがたいことですけど」

まだどうにも吹っ切れないタカキ。その肩にぼんと手を置く者がある。

アストンだ。彼はタカキの目を見つめて頷いた。

「タカキならやれるさ。俺が保証する」

ぶつきらぼうだが信のこもった言葉。タカキはそれを受け、諦めたかのように大きな溜息を吐く。そうして面を上げれば、彼の目には決意の光が灯っていた。

「分かりました。どこまで出来るかは分かりませんが……支部長代理、慎んでお受けします」

おお、と団員たちが歓声を上げる。喧噪の中にと笑ったアストンと、しようがないなあといった笑みを浮かべたタカキが、軽くこつんと拳をぶつけ合った。

「あ、それと支部長代理補佐はアストンな」

「なにい!？」

「あ、それも問題ないっすね」

「タカキアストンコンビなら安心して支部預けられるってもんよ」

「実質地上支部のエースだしなあ」

「色々資格取るために勉強してんだろ？ フウカちゃんが言ってたぞ」

「ちよつと待てお前ら俺に補佐押しつけようとしてない!？」

まあそんなこんなで、地球支部の再スタートは滞りなく進みそうである。

「なるほど。確かにタカキ君であればそつなくこなすであろうよ。……暫くはアリアンロッドも、ファリド准将の相手でこちらにちよつ

かいを出す余裕はなさそうじゃしおう」

「……あの男が、何か？」

すう、とオルガの目が細められる。蒔苗が返してきたのは、意外な言葉で。

「非公式で詫びを入れてきよった。今時GHでは珍しい男よ。テイワズの会長も同じ事をしてきたが、立場が違う。何よりGHで詫びを入れるという発想が出来る者が何人おる事やら。律儀ではあるようじゃが……」

蒔苗の眼光もまた鋭いものとなる。

「オルガ団長、あの男どう見る」

「確かに律儀なところはあります。だが未だに何を考えているのかが読めねえ。単純に覇権を掴みてえのか、それとも他の目的があるのか。……ただ言えるのは、GHの内部抗争を平穩無事に済ますつもりはねえって事です。まず間違いなく武力衝突を前提として動いている」

「そのための利用価値が、我々にはあるということかの。鉄華団の戦力とアーヴラウからの政治的圧力。そのあたりを当てにしていると言うところか。そしてその先に何を成すか。……ふむ、やはり油断のならぬ男のようだ」

蒔苗は鼻を鳴らして髭をしごいた。

「どうにも鉄華団にはまだまだ苦難が待ちかまえているようじゃの。君たちには世話になっておるし、アーヴラウの中にも恩義を感じている者は多い。助けが欲しいときにはいつでも言うてくれ。可能な限りの力を貸そう」

「ありがとうございます、代表」

深々と頭を下げるオルガ。蒔苗はうむうむ頷いていたが、不意に何かを思い出したように手を打った。

「そうそう、その話とは別じゃが、一つお前さん方に頼まれて欲しい事があってのう……」

「火星での研修。経験を積ませると言うことですか」

「そうじゃ。今激動の時を迎えている火星。その実態を目の当たりにしたいと本人も言うておる。そして地球圏外から俯瞰の目でアーヴラウを見る視点も得られるじやろうて」

オルガに次いで蒔苗と面会したクーデリアもまた、鉄華団と同じ事を頼まれていた。

『とある人物を火星で学ばせて欲しい』。その人物はいずれアーヴラウの将来を担う……かも知れないとのことであったが。

「儂の後継者……と言うにはまだまだ未熟なひよっこよ。その目はあるかかも知れぬという程度さ。どちらかと言えば、お前さんの方がまだ儂の跡を継ぐのに向いておるだろうよ」

「……それは過大な評価であるかと」

「そうでもないと思うがの……まあお前さんは火星の発展に全力を尽くすことが本懐じやろうから、振られることは当然なのだがな」

くく、と蒔苗は笑む。

「いずれにせよ国の中核を成す人材を育成することは急務じゃ。彼女だけではない、儂がおらんようになってからも国を滞りなく動かせる人間を育てるため、色々手を尽くさねばならん。協力してくれればありがたい」

「勿論お受け致します。蒔苗代表から受けた恩、少しでも返せれば幸いですか」と

「こちらはこちらで恩を受けっぱなしだと思っておるのじゃがな。……特に鉄華団には足を向けて寝られんわい。儂だけではない、防衛組織の面々など今回の処置で具申してきた者が多かつたわ。2度も国を救ってくれた恩人たちをすげなく扱うのはいかがなものか、とな」

鉄華団を擁護する声は意外に多かつた。彼らがそれだけアーヴラウに溶け込み、信用されていた証だろう。地球支部の残留でもつとも

喜んだのはそういったものたちであるかも知れない。

そんな鉄華団との関係を維持していきたいと思っっているのは蒔苗だけではない。何か事があれば、アーヴラウは総力を挙げて鉄華団の援護を惜しまない体制であると言っても過言ではなかった。

それを理解しているのかどうなのか、クーデリアはくすりと意味ありげな笑みを浮かべた。

「その彼らの手助けになるかも知れない話があるのですが、聞いてみますか？」

騒動の後始末と支部の縮小による整理などで、オルガたちは暫く忙しい日々を送ることとなる。

そんな中、オルガの元を尋ねてきた者がいた。

「忙しいところをすまないね。君が地球にいるうちに話をしたかったんだ」

仮面の男モンターク。しかし商談を口実に現れた彼は、仮面と鬘を折り払いマクギリス・ファリドとしての素顔を露わにしてオルガの前に立った。

「君たちには……いや、アーヴラウ、テイワズ。先の件に関わった全ての者に迷惑をかけた。謝罪してすむものではないが、ひとまず頭を下げさせて貰いたい」

「そいつはもういいさ。蒔苗代表、そして『うちの親父にも』詫びを入れたんだろう？ 十分に過ぎる。……本題を聞かせてもらおうか」

マクギリスの謝罪を遮って話を促す。急いていると自分でも思うが、目の前の男相手に悠長なことをしている余裕はないと危機感を感じた物があった。その反応に何を思ったか、マクギリスは薄く笑みを浮かべる。

「この間の件で実感したと思うが、アリアンロッドの、いやGHの横暴

は留まるところを知らない。己の目的を果たすためであれば形振り構わず何者をも巻き込む有り様だ。もはやGHをこのままにしておく訳にはいかないだろう。血を流し痛みを伴ってでもGHにメスを入れる。それは私自身の目的のためにも必要なことだ」

薄い笑みが消える。鋭い眼差しに真剣な色を載せ、マクギリスは言葉を紡ぐ。

「鉄華団にその手伝いを依頼したい。具体的にはアリアンロッドとの武力衝突のおり、援軍として参戦して貰いたいんだ。GH最大戦力である彼らを打倒することが出来れば、私が頂点に立つことに反する者はいなくなる。ただその一戦を勝ち抜くため、力を貸して貰えないだろうか」

深々と頭を下げる。その態度は真摯なものであったが、未だその内面を計りかねているオルガは渋面のままだ。

「……それだけの大仕事となれば、報酬も生半可なものじゃ済まねえ。何を差し出すつもりだアンタは」

「相応の金銭、そして私が全てを掌握したならば、『GH火星支部の権限全てを譲渡しよう』」

「っ!？」

流石にオルガも面食らった。予想外に過ぎる提案であったからだ。

「勿論一度に全てというわけではなく、段階的に民間委託からという形になるだろうが、火星支部の権限を受け継ぐと言うことは実質的な火星の支配者……火星の王とも言える存在となるだろう」

そこまで言ってマクギリスは、にやりとした笑みを見せる。

「その権限を君たちがどう使おうと自由だ。『誰かに権利を譲る』も良し、『交渉の材料として使う』も良し。報酬として悪くないと自負しているがどうかかな?」

悪く無いどころではない。破格と言ってもよかった。それ以前に辺境とは言えGHの権限を他者に譲るなどと言い出すとは。GHの全てを掌握したいのではなかったのかこの男は。

内心軽く混乱しているオルガ。マクギリスはさらに話を続けた。

「とは言ってもこの段階では口約束にしかならない。だから手付け

……と言うわけでもないが、これを渡しておこう」

そう言つて彼は懐から取り出したものをテーブルの上に置く。それは大容量のメモリーカードであった。

「……これは？」

「GHで密かに研究されている阿頼耶識システムの研究データだ。これを使えばより安全に阿頼耶識の施術を行うことも可能であろうし、『阿頼耶識手術によつて障害を得たものの治療』にも役立つだろう。地球よりサイバネイクスの技術が進んだ圏外圏や火星であれば、使いこなせる組織や人間があるはずだ」

「そいつは！ それこそ秘匿技術じゃねえのか!？」

思わず立ち上がつて言うオルガ。地球圏で禁忌とされている技術を取引材料に使うなど、正気すら疑わしい話だ。

だがマクギリスはすました顔で。

「私は阿頼耶識を『禁忌の技術だと思つていない』。人の命に関わることだから慎重でなければならぬと思うが、あくまで技術の一つとしか見ていないよ。安全性さえ確保できればどれだけの恩恵があるか、君たちはよく理解しているはずだ」

そう言われると黙るしかない。確かに自分達はその恩恵でここまでやつてこられた部分があるし、便利なものであることには違いがない。自分達は人には勧めないが、安全であるならば自ら望んで施術を受けたいと思うものも多いだろう。確かにこのデータ、その価値は計り知れないものであった。

「そのデータは依頼を受ける受けないにかかわらず君たちに進呈しよう。好きに使つてくれ。依頼の方も今すぐ返事というのは難しいだろう。有り余るほど時間があるわけではないが、じっくり考えて欲しい」

「……分かつた。すぐには言わないが、必ず返事をさせて貰う」

相変わず目の前の男が何を考へているのか分からない。分からないが、生半可な覚悟ではないと、それだけは伝わった。

果たしてオルガの判断は――

鉄華団施設会議室にて、オルガは鉄華団の主立った面子とクーデリアを集め、事の次第を説明した。そして。

「正直うさんくさい。……だがこの話、乗ってみてもいいんじゃないかねえかと思う」

「は？ マジか？」

ユージンが眉を顰めて問う。次いでビスケットが口を開いた。

「火星の王なんて言葉に惹かれた……わけじゃないよね？」

「ああ、そも事が成ったからと言って言うとおりに権限を譲渡してくれるかどうか。疑いだしたらきりはないが……」

ことりとテーブルの上にメモリーカードを置く。

「覚悟と信用、それを見せられた。このデータは使いようによっちゃあ、あの男を破滅させることだつて出来るだろう。それを理解していて俺達に預けた。なまなかな覚悟じゃねえ」

禁忌のほずの阿頼耶識システム研究データを、さらに持ち出して漏洩させる。その意味が理解できない男ではない。よほど鉄華団を信用していなければ出来ないことだ。

「そしてあの男の言うとおり、GHを……アリアンロッドをこのままにしておくわけにはいかねえ。あいつらは国一つ、『全く関係ない無数の人間まで巻き込んで』マクギリス一人を始末しようとしやがった。放っておけばこの先どれだけの人間が奴らの身勝手に振り回されるか。それに俺達が巻き込まれる可能性は高い」

何しろ再三GHの策謀を叩き潰してきたのだ。ことあるごとに何らかのちよつかいをかけてくることは間違いないだろう。

「だからあの男の話は渡りに船とも言える。この際火星の権限云々よりも、GHの勢力と権限を削ること。それが今後のためには必要だと思ふ。そのために奴の話に乗ってみることだ」

オルガの言葉に、団員たちは理解の色を見せた。

「なるほど、確かにな」

「こつちにちよつかいを出せないようにしたいってことか」

「戦力的なことは考える必要があるけど……うん、勝算はありそうだ」
「オルガが決めたんなら、やるだけさ」

前向きな言葉を放つ団員たち。しかし難色を示すものもいた。

「そんな重要なことを勝手に決めていいのでしょうか。タービンスにも話を通さずに……」

眉を顰めたままなのは、事務手続きを仕切るため同行してきたメリビット。そんな彼女にオルガは頷いてみせる。

「もちろん兄貴には話を通す。いや、兄貴だけじゃねえ。テイワズ、火星の各勢力。そういった沢山の人間を関わらせたい。その中心になるのは……お嬢、あんただ」

「わたくし、ですか？」

突如話を振られて目を丸くするクーデリア。語るオルガの目には力強い光が宿っている。

「これまで俺は、鉄華団をでかくすればいいと思っていた。だがきつと『それだけじゃ足りない』。今回の騒動だって、ただ俺達がでかくて強ければ解決したってモンじゃないだろう。多くの人たちと手を取り合って、力を合わせたからこそ成し遂げられたことだ。」

その言葉にタカキとアストンが頷く。オルガは皆を見回しながら、強く言葉を紡いでいく。

「だから多くの力を寄り合わせる。言い方は悪いが、火星の王とやらの権限を餌に、多くの人間を巻き込むんだ。それを取りまとめ牽引できるのはクーデリア・藍那・バーンスタイン、あんただけだろう。あんたが進む道を、俺達が造る。目指す先は——」

ぐ、とオルガの拳が力強く握りしめられた。
『火星を中心とし、GHに対抗するだけの力を持った一大勢力』。四大経済圏、圏外圏に次ぐ『第六の経済圏』

「第六の——」

「——経済圏」

ごくぐりと誰かが唾を飲んだ。それは突拍子もないように見えて、実

現可能ではないかという光明が確かに伺えた。

決意と覇気をみなぎらせ、男は未来に鋭い眼差しを向ける。

「それが、俺達の目指す道だ」

夜遅くになって、オルガは自室で通信回線を開いていた。

「そういう結論になった。……アンタのお眼鏡には適ったかい？ 教官」

通信の相手は勿論ランディである。スピーカーからはくく、と男の忍び笑いが漏れた。

「その様子だと、気付いてたみてえだな」

「アンタが『事務仕事を言い訳にわざと地球に来なかった』ってんなら、最初からな」

考えてみれば当然で、その気になったら事務員ではランディを止められない。意図的に出張らなかったと考えるのが自然だ。

「俺達とアーヴラウだけで乗り切ることが出来るのか。それを見たかったんだろ？」

「その通りだ。その上でどう判断するか。今後どうするか。……思った以上だよ、お前さんら」

「どうやらお眼鏡には適ったようである。オルガはふう、と息を吐いた。」

「その上で、『アンタが何を考えていたか、大体分かった』。『俺が今回提唱したようなことを、誰かにやらせようとしていた』んだな」

「ま、薄ぼんやりとだがな。ここまで早く事が進むとは思ってなかったさ」

「で、そう言った勢力がGHとにらみ合いを始めたところで……『横合いからぶん殴る』、と。やっぱえげつねえなホント」

「こんな事理解したくはなかったがと、溜息を吐くオルガ。大分ラン

デイに染められているという自覚は、なんとというか悲しいものがあつた。

対するランデイはくつくつと笑う。

「上等上等。お前らはもう『いっぱし』さ。がむしやらに進むだけじゃねえ、『石橋を叩いて壊して新しく架ける』くらいのことは出来るだろうよ」

「褒められている気がしねえんだが」

「事実を言ってるだけだからな」

笑いを含んだ声が、引き締まる。

『ここからだ』団長。アリアンロッドはなまなかじゃねえぞ?」

「ああ、勝ち取りに行くさ。……俺達自身のためにな」

※今回のえぬじい

そう言つて彼は懐から取り出したものをテーブルの上に置く。

それはチョコが沢山詰まった袋だった。

「あわわ間違えたア!」

「アンタいつもそれ懐に入れてんのかよ」(呆れ)

33・根回しは、派手に地道に。

一連の騒動の後片づけも一段落付いて、アーヴラウはようやく平穩を取り戻した。

そんな中、鉄華団地上支部支部長代理に就任したタカキとその補佐であるアストン、そしてマニングスはある目的のため、エドモントン郊外の空港を訪れていた。

「しかし信用できるものかな。『モンターク商会推挙の傭兵』とは」先の騒動によるアーヴラウ防衛組織の戦力低下。それを危惧したという理由でモンターク商会とはある傭兵部隊を紹介し推薦していた。確かにモンタークの紹介ともなれば疑いの眼差しを向けざるを得ないが。

タカキは苦笑を浮かべる。

「心配ないと思いますよ。モンタークの配下と言うよりは……」

そこに4人の人物が現れる。がっしりとした体格の男と、筋肉質の女性。そしてグラスンをかけくちやくちやくとガムを噛んでいる態度の悪いチンピラ。その三人を従えているのは中肉中背だが鋭い目をした男。彼はタカキたちの前に進み出て、さつと型どおりの敬礼を行い口を開く。

「お出迎え痛み入ります。自分は傭兵部隊【ガルーダ隊】隊長を務めます【ブラウン】一尉相当官であります。TACネームは【タリズマン】。以後防衛組織の指示に従うよう依頼を受けました。よろしくお願い致します」

残りの三人もそれぞれ敬礼を行う。かつて標的艦隊の一角を務めた——『ランディの元同僚である怪物』たち。鋼鉄の神鳥はアーヴラウの地に舞い降りた。

テイワズ本拠歳星。幹部たちを一堂に集めた会議場で、名瀬は鉄華団から持ち込まれた『商談』を呈示していた。

「……………いつはまた、でかい話じゃねえか」

GH火星支部の全権譲渡。アーヴラウ騒動の影響が冷めやらぬ間に叩き込まれたその話に、マクマードは呆れたとも感心したとも取れる調子で言葉を放った。

名瀬は神妙な態度のまま、淡々と続ける。

「勿論今の段階では口約束に過ぎませんが、マクギリス・ファリドと言う男、口先だけの人物ではないかと。現段階で実際に、火星支部の権限の一部を鉄華団に委託する、試験的な試みを申し出てきています」

「ふむ、限定的とはいえ先渡しのもりか」

「マクギリスと言う男、確かに一角の人物と聞いているが」
幹部たちの多くは反応も悪くはない。それを確認した上で、名瀬は『さらなる燃料を投下した』。

「事が首尾良く運べば……鉄華団代表は、『看板だけを自分達と火星の代表勢力に貰い、実際の権限をほぼ全面的に親父に預けたい』と申し出ています」

しん、と会議場が凍った。何を言っているか全員が一瞬理解できなかったからだ。

最初に動いたのは、堪らぬと言った様子で笑い声を上げたマクマード。

「ははははは！ そいつは剛毅な判断だ！ 言ってみりやあ『テイワズが実質的な火星の支配者になれる』って事じゃねえか！」

その言葉に幹部たちがざわめく。己が手に出来るであろう莫大な権限を、親とは言え他人に譲渡する、そのような発想など誰がするものか。欲得ずくの泥にまみれた世界で生きてきたものたちには理解が及ばない。

それでも、納得できないのか自尊心的に堪えられなかったのか、声を上げるものはいる。

「そんな絵に描いた餅みてえな話、乗ってやるってんですかい！」

組織のNo.2であるジャスレイが椅子を蹴立てて吠えるが、マクマードは落ち着いた様子で言う。

「二十歳にも満たねえガキどもの言うことだ。与太話にやあ思えるが……逆に考えてみる、『あの歳でこんな与太話を持ち込める』。そいつはなまなかじゃねえんじやねえか？」

にいい、と笑みを浮かべるマクマード。その迫力に、ジャスレイも、幹部たちも押し黙る。

「俺があいつらぐらいの歳の頃は、箸にも棒にもかからねえ下つ端だった。こんなでかい話を上に持ち込む事はおろか、手前の組織を立ち上げるどころでもなかったさ」

煙草の煙を一吐き。そしてぎろりと会議場を睥睨する。

「おめえら、『二十歳前頃にやあ何やってた』？」

だれも何も言えない。食って掛かったジャスレイもだ。それを確認してマクマードは厳かに告げる。

「いいだろう。その話乗ってやる。……だが、へま打ったときの覚悟はあるんだろうな？」

その言葉に対して、名瀬は真剣な面持ちのまま応えた。

「いざというときは自分達を切り捨てて構わないと鉄華団代表は言っています……その前に、俺が腹を切ります」

会議場から退室した名瀬を、外で待機していたオルガが出迎えた。

「お疲れ様でした、兄貴」

「おう。首尾良く話は纏まった。親父も大分乗り気だし……思った通り『目の色を変えた奴』もいたぜ」

名瀬はく、と唇を歪めた。

「ここまでは『お前の筋書き通り』だな。権限を親父に預けることで、

『幹部連中の反目を軽減し』なおかつ『鉄華団に直接ちよつかいを出しにくくする』。よく考えついたモンだぜ」

火星支部の権限全てを手中に収める。それがどれだけの権力を手にすることになるか理解できないものはいないだろう。その力を危険視する人間は必ずいる。だがその権限のほとんどをマクマードに預けてしまえば、下部組織としての筋を通したことにもなるだろうし、妨害などを行えばマクマード本人に敵対するも同じだ。そんな無謀な真似をするものもそういないだろう。

その権限を巡って幹部連中は色々と考えを巡らすであろうが、そも鉄華団が首尾良く事を運ばなければそれこそ絵に描いた餅でしかない。利を得ようと思つたら鉄華団を妨害することは出来ないのだ。

言い方は悪いがマクマードを利用し、テイワズ内部からの妨害を防ぐ盾とした、とも言える。しかしこの発想、『オルガ一人で考えついたものではない』。

「大筋はクーデリアのお嬢さんと、うちのビスケットで協議したものですよ。俺だって最初は眉に唾塗りましたからね」

「ビスケットはともかく、クーデリア嬢は未恐ろしいな。『親父がどう判断するか見切ってる』ように思えるぜ。……やっぱり女は敵に回すモンじゃねえわ」

クーデリアの発想。それは『火星に秩序と豊かさをもたらすのであれば、誰が支配者になってもかまわない』というものだ。これには鉄華団一同も目を丸くしたが、いち早くビスケットが理解を示した。

確かに火星支部の権限を譲り受けたとしても、クーデリアと鉄華団だけで何もかもを回せるわけではない。むしろ持てあまし悪ければ破綻することは目に見えている。であればその権限を誰かに預けるのは『あり』だと。

その場合預ける先として真っ先に思い当たったのがマクマードであった。彼はテイワズという組織を纏め上げ取り仕切っているという実績があると同時に、『火星を丸ごと手中に収めて支配しようとは思わない』と、クーデリアは見ていた。そんな欲望を持つならば『まず圏外圏を完全に支配しているはず』だからだ。自分達の考えを読ん

だ上で采配を行うだろうという信用がある。

「この考えすらも親父は、もしかしたらマクギリスも読んでいるかも知れませんが。俺らの小賢しい考えなんぞお見通しだという前提で事を運ぶ。そう肝に銘じてやっていくつもりです」

「だな。……事が成れば、親父は俺を若頭として取り立てる予定だ。『お前たちのお目付を兼ねて、な』。意味は分かるな？」

真剣な顔になって名瀬は言う。鉄華団には個人的な好感を向けているマクマードだが、組織の長としては注意を払わなければならないと考えているのは理解できた。

「お前たちが力を持つのは構わない。だがテイワズを敵に回すような真似はするなよ？ ……俺は親父を裏切れねえ」

その言葉は、重金属のように重く響いた。

夜も更け歓楽街以外は眠りについた歳星。マクマード邸の一角で、一席設けている男たちの姿があった。

「この俺を妨害除けの盾にしようなんぞ、面白れえことを考えやがる」
くつくつと上機嫌に笑い、マクマードは杯を傾ける。空いた杯に徳利で酒を注ぐ人物もまた、にやりと笑みを浮かべた。

「昔のマクちゃんでもやらなかった事よ。まあそこまででかい上も居なかつたけどね」

まんま怪しい中国人にしか見えないおっさん、ワン。そしてこの場にはおっさんがもう一人。

「あの底意地の悪さは、間違いないリボン付きの薰陶さね。『悪徳の都』の連中はどいつもこいつもろくでもねえ」

手酌で己の杯を満たすのはジョニー。実はこの怪しいおっさん2人、テイワズ創設以前からマクマードの兄弟分で、テイワズの『真の幹部』とも言える懐刀であった。いざとなれば『テイワズを経済的物

理的に一掃する』くらいのことはやってのける怪物である。

そんな怪物を飼い慣らしている男は、楽しそうな様子で葉巻に火を付けた。

「その上で、クーデリアの嬢ちゃん』とんでもねえ話』を個人回線で持ち込んできやがった。……下手をすりや『GH火星支部の全権限なんぞ霞と吹っ飛ぶ儲け話』よ」

「……それはまた眉唾ものね。どんな話か」

「そいつはまだお楽しみつてところさ。……だが、万が一俺が欲かいて火星支部の権限を独占しようとしたときを考えての牽制策だろうな。あの嬢ちゃんともんでもないタマになりつつあるわ」

「なるほど、上手いこと采配しねえと、その儲け話には関われねえぞ、と」

得たりとばかりにジョニーが膝を叩く。クーデリアが何を考えたかまだ不明であるが、闇雲にマクマードを信頼しているわけではないようだ。マクマードが『叛意する気を起こさせない餌』を保険として用意し、対立することを防ぐ。あるいは彼女が持ち込んだ話、はつたりかも知れないが『対立する気をなくせれば十分な役割を果たす』。

商會を自分で仕切り、多くの者と渡り合い、なによりランデイという規格外の極悪人を間近で見学んだ彼女は、テイワズをも手玉にするような策士と成りつつあるようだ。実に……『わくわくさせてくれるではないか』。

マクマードは紫煙を吐き出し、言葉を放つ。

「となれば……そろそろ俺の跡目も考えなきやならんなあ。連中と長く付き合うとなりや、いつまでもじじいの出番でもなからうさ。……でだ、『おめえらから見てどうよ』?」

マクマードの言わんとする事を察したワンが、丸いサングラスの下に隠された目をぎらりと光らせる。

「正直ジャスレイのあほは薦められないね。テイワズを『継ぐだけ』なら十二分な才覚はあるよ、けどアレ欲かいて調子乗ったら組織ごと身潰すタイプね」

仮にもテイワズグループの専務を務め、商業部門JPTトラストを

恙なく仕切っている人間である。決して無能ではない。だが組織の利益と個人的な欲望を天秤にかけられたらその判断は怪しいと言わざるを得ない。

かてて加えて彼ののし上がり方は『己の敵対者を蹴落とす』という形がほとんどだ。己の意にそぐわぬ者は排除しイエスマンばかりを取り立てる。テイワズ以外の勢力と渡り合うのに、その性根は不向きであるとワンは判断していた。

「俺のお薦めは、やつぱ名瀬だねえ。あいつが一番『捌けている』。……問題は本人がテイワズを継ぎたがらねえってところだろうが」

わずか10年かそこらでタービンズという組織を構成員5万という一大組織に育て上げた手腕。下に見られ軽く扱われていた女性を雇用し実績を上げる目の付け所。年齢から見ればまだ若手と言える立場でありながら、テイワズにおける収益の割合は決して小さなものではない。鉄華団のことが無くとも、そう遠くない未来に幹部として昇格していただろうことは間違いなからう。

その上で『自分(ジョニー)という存在の危険性を嗅ぎ付け、当たり障り無いように接している』。その才覚はまだ成長過程にあるが、将来性は十二分にあるとジョニーは睨んでいた。

が、同時に彼はテイワズを背負うなどと言う責からは逃れようとするだろうとも見ていた。無責任なのではない、『責任というものの重さを理解しているからこそ』のものだ。

女性ばかりの組織を運営していくと言うことは、並大抵でない苦勞を強いられる。タービンズの福利厚生や雇用条件は事細やかに配慮されたもので、恐らくは名瀬の側近の女性たちが大きく影響しているのだろうが、名瀬自身の気の配りようもなまかなものではない。それはテイワズの他勢力と比べて類を見ないものである。自分の抱え込んだ者に関してでは最大限に責任を取るが、望まず押しつけられた場合にはその采配が振るえるかどうか。最低でも名瀬自身はその器ではないと判断している節がある。

「継がせるんなら『逃げられない状況に持っていく』しかないんじゃないかね。まあ他にめばしい人間が居るってんなら無理強いしなくて

もいいだろうが」

鼻を鳴らして杯をあおるジョニー。彼の感覚では他の幹部は五十歩百歩といったところだ。継がせられないと言うわけではないが、この先起こるであろう状況の変化に付いていけるかどうか不安が残る。

ふむ、と頷くマクマード。大まかには自分の見立てと同じだ。地球で起こるであろう激動。その影響は世界に大きな変革を与えることになる。それを乗り切るためには誰を後釜に据えるのが的確なのか。老齢にさしかかった男は思考を巡らせる。

少し前であればそこまで気を配らなかつただろう。テイワズ内に蔓延る不正だつてよほどのことがなければ放っておいたに違いない。テイワズをここまで大きくし、己の引退も視野に入れ始めたあたりで、マクマードは所謂燃え尽き症候群に近い心境にあつた。もう自分はやるだけやった。後は野となれ山となれとは言わないが、成るようになんか任せようとすら考えていた。

そんな自分の心に再び火を入れたのは、火星に生まれた若者たちの行動と――

『……見てみたい、とは思わねえか?』

くく、とマクマードは苦笑する。

「与太話に、まんまと乗せられちまつたなあ……」

時代の転換点。それに大きく関わり世界を動かす要因の一つとなる。歴史に残るかも知れない場所に居るといふその事実が、ぞくぞくするほど楽しい。

「全く、すっかり昔どおりね」

「ま、年寄りの冷や水も、たまには良からさ」

ぼやくように言うおっさんどもも、なんだかんだで楽しそうだ。昔の血が騒ぐという奴だろう。血で血を争う修羅場をくぐり抜けたのは確かに昔。だが男たちはその時分の熱さを取り戻しつつあつた。

それが蠟燭の消える寸前の勢いなのか、それとも古参兵の戦線復帰であるのか。果たして。

地球近海のコロニー群。その一角で勃発した戦闘があった。独立運動派の武装蜂起。それを討伐すべく派遣されたアリアンロッド第2艦隊との武力衝突。マッチポンプの出来レースであるそれは、やはり一方的な蹂躪劇の様相を見せている。

「この程度の戦力で、本当に勝てると思っていたのか！」

レギンレイズを駆って参戦していたジュリエッタは、手応えの無さに怒りのような感情を覚えていた。当然ながら相手は素人しかいない状況で、強敵との交戦なんぞ望むべくもない。それが分かっているも、少しでも技量を鍛え上げたい彼女にとっては時間の無駄にも思えてしまうのだ。

傲慢である。彼女は敵の事情を酌んでやるような視野の広さを持っていない。一介の兵士としてそれは問題になることではないのだが、思考せずにただ忠誠に従順なだけでは大きな間違いを起こすこともあり得ると、そんな危険性など想像もしていなかった。

ともかく彼女の心境は荒れ気味であったが、その戦いぶりは余裕のあるものだ。ゆえに余所へと思いを振り分けることが出来る。

「あれは……ヴィダールか」

水色の装甲を持つガンダムフレーム。パイロットと同じ名を持つそれは、流れるように宙を駆け、獲物に襲いかかる。

コロニー近隣での戦闘を考慮してアンカーガンを装備したフレック・グレイズ。決死の勢いで襲いくるその機体が攻撃を難なくかわし、すり抜けざまに右手のサーベルを一閃。一撃でコクピットを貫き沈黙させる。

2度、3度と滞りなくそれは行われ——そして4度目で止まる。身をよじってコクピットの直撃を避けたフレック・グレイズの1体が、サーベルの刀身を掴んで動きを封じたのだ。苦し紛れの行動であったが、それは確かにヴィダールの足を止め——

かきん、と軽く刀身とグリップが切り離された。そのままグリップ

を腰のサイドアーマーにはめ込めば、サイドアーマー自体がスライドし、新たな刀身を備えたサーベルが現れる。

再びの一閃。今度こそフレック・グレイズは沈黙した。が、その間にも足を止めたヴィダールに狙いを定めたミサイル艇たちが、一斉に攻撃を行う。

放たれた無数のミサイル。ヴィダールはサーベルを収納し、腰のフロントアーマーから2丁のハンドガンを取り出した。それを無造作に左右に向けると、狙いも付けないまま連射。放たれた弾丸は、吸い込まれるようにミサイルの群れを捉えた。

爆発の閃光が宙を彩る。圧倒的な強さを見せつけるヴィダールの姿に、ジュリエッタは一瞬目を奪われた。

「……美しい」

流麗、とも言える動きであった。無駄が無く、かつ洗練されている。相当の鍛練を積んだものと見た。飄々とした普段の様子からは想像も付かない戦いぶりに、ジュリエッタはヴィダールの『影』を見たような気がした。

「機体も自分も真の名を隠す。何か事情があるとは思っていたけれど。……あの戦いぶり、相当の覚悟を持って鍛え上げられたよう」

何を背負っているのか。それが気になったジュリエッタは――

「この私と互角に渡り合うとは！ 相手にとつて不足無し！」

『お止め下さいイオク様ア！』

「ええい放せー！ 私は強敵と渡り合い強く成らねばならんのだ！」

背後で何やらごちゃごちゃやってるイオクたちのことなど、完全に意識に入っていなかった。

「……以上が事の顛末となります。状況証拠でしかありませんが、これまでのごこと照らし合わせますと、ほぼアリアンロッドの自作自演

と考えて間違いないかと」

第2艦隊が行った任務。その一部始終……どころか限定的ではあっても『裏の事情』まで解説し終えたサヴァランは、反応を待つ。ややあつて応えたのは。

「……なるほど、確かにGHの所業であるようだ。……しかしどういうつもりかね？ この私——『コロニー独立反対派である人間』に話を持ち込むとは」

そう、サヴァランが話を持ち込んだのはドルトコロニー群を所有するアフリカユニオンの担当者の中でも、独立反対派の重鎮とも言える人間であった。

勿論何の考えもないわけではない。サヴァランに促され、共に訪れていたナボナが口を開く。

「我々が望んでいるのは、あくまで『給与関係を含んだ全般的な地位、環境の向上』であり、独立など視野にありません。むしろ現状では、自治はともかく独立など自殺行為と言っても過言ではないでしょう。それだけの地盤をコロニーは持っているのですから。これはドルト労働組合の総意と取って貰って構いません」

その言葉に継いでサヴァランが言う。

「最低でも今後、ドルトでは自発的かつ武力を伴った独立運動は行わないと、カンパニーと労働組合間で契約が結ばれました。それが誘発されるような動きがあれば……」

「外部からの横槍。その筆頭容疑者はアリアンロッドということか。……なるほど、独立反対派の私に渡りを付けることによって、ドルトとカンパニー、ひいてはアフリカユニオンとの関係悪化を事前に防ぐというのだな？」

担当者の男は頷く。独立などと戯けた寝言を言い出さない代わりに地位、環境の向上に尽力しろと、そう言う取引を持ちかけられていと男は理解した。これは同時にアリアンロッドの自作自演を防ぐ一手でもある。今後ドルトで後先考えずに独立などと言い出す輩がいれば、それがアリアンロッドが介入してきたと見られるのだから。「話は分かった。ユニオンのほうにも働きかけてみよう。すぐにどう

「こうというものではないことは理解して貰いたいが」

「ありがとうございます。腰を据えてかからなければならぬ事だと我々も承知しておりますので、なにとぞよろしくお願いします」

ナボナと共に頭を下げながら、サヴァランは内心で拳を握りしめる。

（ビスケット、お前たちのように正面切って戦うことは出来ないが……俺は俺のやり方で、GHを追いつめて見せる）

男の静かな戦いは、密やかに進んでいた。

「……しかし地球のことといいGHからの委託業務といい、すっかり私蚊帳の外じゃないですか。いや記者ですから外様には違いないですけれども」

鉄華団本部の一角。己のために用意された部屋で、アヤは記事を纏めながらひとりぶつくさ呟いていた。

地球での騒動やマクギリスからの話に、彼女はほとんど絡んでいない。地球の件はアーヴラウの機密に大きく関わることだったので、報道関係は全体的に規制されていたし、マクギリスとの契約もまだ大きく表沙汰には出来ないものだから仕方がないのだが、なんだか仲間はずれにされたようで面白くないと思ってしまう。

元から鉄華団に『入れ込んでいる』からこそその感覚だが、それでも一応理性は残っているので愚痴をこぼす程度に留まっている。

と、そんな彼女の部屋のドアを、軽くノックする音が響いた。

「はい？ どなた？」

「うっす、ライドっす。アヤさんに会いたいってお客を連れてきました」

「お客？ ……分かりました、どうぞ」

火星に知り合いは居なかったのだがと首を傾げつつも、入室を促す

アヤ。ライドに伴われて現れたのは。

「初めましてミスアレン。私はこの度アイゼン・ブルーメ商会で『研修』させていただく事となりましたイアンナ・アレジと申します」

「これはご丁寧に。フリージャーナリストのアヤ・アナンダ・アレンです」

そう、大方の皆様が予想されたとおり火星くんだりまでやってきたイアンナであった。彼女と挨拶を交わしながらアヤは内心首を傾げる。

名前からしてアーヴラウの重鎮であるラスカー・アレジ副代表の縁者であろう。それが何かを学びに火星までやってくる。そこはいい。2年前とこの間の騒動で鉄華団とアーヴラウには強い繋がりがあるので彼女がこの本部を訪れてもおかしくはない。そこもいい。だが自分に何の用事があるというのだろうか。ただの挨拶回り？ ペーパーのジャーナリスト相手にわざわざ？ イアンナの意図が分からず警戒してしまう。

イアンナの方はそんなアヤの内心など気付いたふうもなく、にこにこ言葉を放つ。

「貴女の書いた記事、読ませて頂きました。臨場感溢れる内容で、思わず読みふけてしまいましたわ。機会があれば直接お会いしたいと思っていたのです。それがこんなに早く叶うなんて」

その言葉にアヤは慌てる。

「え!? あれ、ネットの端っこのサイトでしかも匿名でやってるのになんで私の事を!?!」

とは言っても知る人ぞ知る人気サイトで広告料とかでかなり儲けてるのだがそれはそれとして、正体が割れるようなヘマはしていないはずである。仮にも情報で食おうとしているのだ、その辺はぬかりない。

イアンナは片目を瞑って人差し指を立てる、茶目っ気のあるポーズで得意げに言った。

「蛇の道は蛇、ってことですの。こう見えてもそれなりの伝手はあるので」

ドヤ顔で言うイアンナの背後で、そっぽを向いたライドがだらだらと脂汗を流していた。

言えねえ。この人（イアンナ）案内している途中で鉄華団の記事の話題が出て、思わず「あ、それ書いた人ならここにいるっすよ」とついバラしちまったなんてとても言えねえ。

しょーもない事実を知るよしもないアヤは戦慄を覚え、目の前の女にますます警戒心を抱く。僅かに緊張感を漂わせ始めたアヤの様子に、イアンナはにとと挑みかかるような表情へと変わる。

「……なにが目的ですか？」

珍しく真剣な口調で問うアヤ。得たりとばかりにイアンナは話を進める。

「では遠慮無く。鉄華団の事を調べるに当たって、当然クリユセや他の自治区の事について調べておりますわね？ その中でもしめぼしい人材や組織があればぜひとも教えて頂きたい。特にハーフメタル関連で」

「……アーヴラウはアイゼン・ブルーメ商会を通じてハーフメタル事業に深く関わっていると記憶していますか？」

ここで人材を集める意味があるのか。イアンナの意図が分からず問うアヤ。

答えは満面の笑みと共に。

「現状では確かに。ですけれど将来的……『火星が独立などした場合』、伝手は多い方が良くないかと思ひまして。何しろ火星に自治区を持つているのはアーヴラウだけではありませんので、今のうちに手を打っておくべきかと」

他の経済圏に先んじて将来のために動こうというのか。しかしアヤにも矜持はある。

「お話しは分かりました。ですがこう見えても文屋の端くれ。飯のタネになりそうなことをそう簡単にはいはいと……」

「勿論相応のお礼は用意させて貰いますよ」

「……で、どういった人材をご要望で」

「うわこの姉ちゃんチョロっ!?!」

あつさりと矜持は引つ込んだ。

「ふふ、なかなかお話の分かる人のようですね」

「魚心あればなんとやら、という奴ですよ」

「貴女とは仲良くやれそうです。……ところで某恰幅の良い元支部長の個人的な情報などは手に入りまして？」

「もちろん、相応のものを頂ければ」

『ふふふふ』

がちちりと固い握手が交わされた。

もしかしたらこの人たちを会わせたのは致命的な間違いだったかも知れない。でっかい汗を後頭部に流すライドは、後悔しながらもなすがままに任せるしかなかった。

とまあ本部の端っこでそんな事が起こっている間にも、団員たちは忙しなく動き回っている。

「装甲と装備の換装、順番に仕上げていくぞー」

格納庫に運び込まれたランドマン・ロデイが次々と装甲をはぎ取られ、強襲型に改装されている。低下した地球支部の戦力を補うのとデモンストレーションのため、元々配備される予定であった獅電はそのまま支部に譲渡され、入れ替わりで本部に回収されたマン・ロデイを強化しているのであった。

その作業の様子を、昭弘と彼の姓を貰った少年たちが見守っている。

「こいつはアストンの使っていた機体か。……デルマ、本当に良いんだな？」

昌弘の問いに丸顔の少年——【デルマ・アルトランド】は頷く。

「ああ、教官から許可が出た。こいつの方が使い慣れてるしな、足手まといにはならないつもりだ」

アリアンロッドと事を構える前提で、鉄華団は戦力の増強を計っている。これまで予備パイロット扱いで他の仕事に従事していた団員たちも、多くが戦いに加わることを望んだ。

オルガなどは折角堅気の仕事をしていたのにと、少々気に病んでいたのだが。

「そりや普通の仕事をこなせてりやそれに越したことはないけどな。だが今度のは俺達全員の将来がかかった大仕事だ、少しでも力になりてえ」

デルマの言葉に、同じく志願した少年たちは頷いて同意を見せた。団長からは貰いっぱなしで少しも恩を返せていないと彼らは感じている。

幸いにしてと言うわけでもないが、暫く採掘場の方は専門家たちの仕事しかない。手の余った人間をマクギリス関係に回す余裕はあった。

正直命の危険に晒したくないと言う思いは昭弘にもある。だがそれ以上に自分たちを人間扱いしてくれた団長に、ひいては鉄華団に報いたいという思いは痛いほど分かる。だから彼らを止められない。

だからこう言う。

「……頼りにしてるぜ、兄弟」

信じる。自分の兄弟たちは強かであると。背中を任せるに価する強者であると。

ぶつきらぼうで不器用な言葉。それを聞いた少年たちは一瞬顔を見合わせ――

揃って不敵な笑みを浮かべ、応える。

『まかせろ、兄弟』

その様子を離れた場所で見えていたラフタは、こう零す。

「つたく、格好つけちゃって」

その表情が軟らかく優しい微笑みであったことに、本人は気付いていない。これは暫く秘密にしておこうと隣のアジーは思った。

戦力増強は既存の機体を改修するだけではない。

「よーし全部運び込んだな。順番に立ち上げてセッティングしてく

ぞー」

「阿頼耶識搭載機はあとでおやつさんが最終調整するから後回しだ！基本セツティングが終わったらカスタムパーツのすりあわせからやってくれ！」

テイワズから新たに購入した獅電の群れが、次々と立ち上げられていく。本来アーヴラウに卸す事になるであろう生産分であったが、商談が中断してしまったことにより宙に浮いた形となってしまうのだ。それを格安で譲り渡してやるとワンから打診があり、戦力を欲していた鉄華団はそれをありがたく受け入れたというわけだ。

「あのおっさんにも気を使わせちゃったなあ。大量購入のおまけに1機つけてくれるとか、ありがたい話さ」

キャリアの上でカバーが剥がされ姿を現した機体。銀色の下地塗装がままのそれは、おまけという名目で押しつけられた機体であった。どう見ても急造で仕上げられたそれに、ユージンはマクマードやワンのせめてもという気遣いを感じていた。

同時に寄せられる期待、プレッシャーを理解していたが。

「火星の利権どうこうよりも、GHの増長に危機感を覚えてるんだろうなあ」

「そりゃ経済圏のインフラぶつぶつして混乱を計る、なんてとんでもねえ輩が出てくるんだ。最低でも牽制しとかなきゃ何されるか分かったモンじゃない、ってな」

溜息混じりで言うユージンの言葉に、シノが頭を掻きながら応える。世界の情勢、戦略的なものの見方をランディから叩き込まれた彼らは、自分なりにその思考を昇華させつつあった。

とは言っても根本的なところは彼らのままで。

「ま、俺達のやることあ変わらねえ。オルガが決めて、三日月が斬り込んで、俺達が道を造る。いつも通りさ」

「ちいとばかし、やりがいがありすぎるけどな」

くく、と揃って笑う2人。困難が予想されていても彼らは、いや、鉄華団は止まらない。

世界を相手取るそれは悲壮感に彩られたものではなく、希望と闘志

に満ちあふれるものであった。

「で、オルガはそろそろ話が纏まってるころか」

「ドンパチやるよりもよっぽど面倒かもなあ」

2人が見上げる空の先では――

火星軌道上、GH火星支部が本拠地、軌道ステーションアールレスにて、オルガは幾人かの有力者たちと顔合わせを行っていた。

「……若輩者ですが、微力を尽くし務めさせて頂きます。どうかよろしく」

「鉄華団の勇名は聞いている。期待しているよ」

頭を下げ、握手を交わし、有力者たちを見送ったオルガは、ネクタイを首元で緩め、ふう、と息を吐いた。

「何度やっても慣れるモンじゃねえな」

「こういうのは気が付けば慣れるものさ。何にせよ数をこなす事だね」

オルガの呟きに、改めて正式に本部長へと就任した新江が言う。今日オルガがこの場を訪れたのは、『ある権限』を火星支部から委託され、その手続きと関係各位に面通しするためである。その権限とは。「捜査権と逮捕権の委託業務……『賞金稼ぎ制度』なんてものを復活させるとはな」

そう、警察権の一部解放。その管理権限を預けられたのだ。所謂賞金稼ぎの受付窓口を務めるということになる。火星支部と有力者たちを元締め、賞金稼ぎ制度を復活させ環境を整える。これはマクギリスが発案したことだ。

「以前から協力者に報奨金をばらまいていたのは、この下地作りと言っても良い。元々火星支部だけでは手の回らない部分も多かったんだ。火星や圏外圏の気風から考えても、妥当な制度だと思うがね」

確かに火星の現状は、かつての西部開拓地に似ていないこともない。それに未だ信用を完全に取り戻せていない火星支部よりは、鉄華団が仕切る賞金稼ぎ達の方がよほど信用されるであろうとマクギリスは見ていた。それは新江も、地球から訪れていた石動も同意見である。

石動は窓の外に見えるアーレス宇宙港を見ながら言う。

「いずれはここも船で埋まることになるかも知れないな。そこまでもり立てられるかは……オルガ・イツカ、君たち次第だ」

いつもの無表情に見えて、その瞳には強い光が宿る。

「それもこれも、全ては事をなしてからだな。……最早後戻りは出来ない。我々も、君たちも」

その言葉に、オルガは不敵に笑んだ。

「するつもりもないさ。未来を掴むためには、前に進むしかないんだから」

超望遠で撮影されたアーレス。その窓に有力者たちと握手を交わすオルガの姿が映っている。

「政治家気取りかよ。三下のガキが小生意気な」

手下からの報告に、ジャスレイは不機嫌さを隠そうともせず紫煙を吐く。

先の幹部会議では一度矛を取めたジャスレイであったが、当然ながら納得したわけではない。流石に組織自体の利益には成りそうだという理解は及んでいるが、改めて突きつけられた成長性に危機感と嫉妬を滾らせられるのは止められない。それを自身で分かっているかどうかははなはだ疑問だが、ともかく彼は組織の利益を置いて己の感情のまま動かんとしていた。

「どうしますか、叔父貴。このままやつらをのさばらせておくのは

……」

「ふん、当たり前だ。……GHに伝手があるのはやつらだけじゃねえ。暫く前に代替わりはしたが、古い伝手に繋ぎを取る」

「いいんですかい？ 下手をすりゃ親父の勘に障るかも知れませんか？」

「なに、あいつらだつてGHを後ろ盾にしようつてんだ。俺が繋ぎ取ったところで親父も文句を付けられねえよ」

それにと、ジャスレイは言葉に出さずに続ける。

（親父が俺を切れるわけがねえ。テイワズをここまで大きくした立役者である俺をな）

確かにテイワズが成長した要因の一つはジャスレイの商才もある。だがそれは一部に過ぎない。己の能力と立場に対する過信。そして今の自分の立場がそれほど盤石ではないという自覚の無さ。自ら薄氷の上に足を踏み入れた自覚のないジャスレイは、すぐそこに破滅が口を開いて待ちかまえていることに終ぞ気が付かなかった。

鉄華団本部に戻ったオルガは、早速幹部を集めて今後の方針を相談していた。

「ランディ教官は歳星に行ったか」

「ああ、例の機体の仕上げに入るつてよ。暫くは缶詰だな」

オルガと入れ替わるように、事務仕事を一段落付けたランディは歳星へと向かった。あの人の意見も聞いておきたかったんだがと少し残念に思うオルガだが、自分達を一人前と認めたからには余計な口出しはしないということだろうと、思考を切り替える。

「それじゃあ早速火星支部からの委託業務についてだが……」

少年たちが額を付き合わせて話を始めようとしたその時、会議室のドアが勢いよくノックされた。

「っ!? なんだ?」

「し、失礼します団長! 緊急事態です!」

泡を食った様子で入って来た団員は、興奮冷めやらぬままに告げる。

「採掘場で試掘していた技術者と団員からの連絡です! 採掘の途中、なんかよく分からないどえらいものと、MSを発掘したそうで……MSは、ガンダムフレームのようです!」

「な、なんだと!?!」

完全に予想外の事態が、鉄華団の運命をさらに混沌へと落とし込む。

※今回のえぬじい

『……………』

ソ●●ア●バー

→掘り出されたなんかよく分からないどえらいもの。

「見なかったことにするんだー!」

「賛成だ俺もそう思う!」

このパロディネタ誰が覚えているというのか。

34・空気読めよ、いやマジで

歳星の工房にて、ランディは整備長と意見を交わしている。

「スラスターバインダー」と「イナーシャーコントロール」って代物がなければここまで手こずることはなかったんだけどねえ」

可動式シールドユニットと大出力エイハブスラスターを組み合わせた4基のスラスターバインダー、そしてグレイズ系のコクピット左右に備えられている慣性制御装置「エイハブコンデンサー」を機体各所に配して、機体そのものの慣性を制御し機動性を向上させる機構イナーシャーコントロール。他のMSにはないその装備を備えることよって、ラズグリーズの要求出力は並のリアクターでは賄えないほどのものとなった。

「こいつらがなけりやあ、ただの『頑丈なシュヴァルベ・グレイズ』つとところではかねえからなこの機体は。ノーマルリアクターの中身にまで手が出せりやあ話は別だったんだが」

機体性能を追求したエウロパフレームではあるが、ノーマルリアクターを搭載した状態では耐久性こそ凶抜けるものの、それ以外はシュヴァルベ・グレイズと大差はない。そもそもが『テイワズの技術でガンダムフレームに匹敵するMSを構成する』というコンセプトであったのだが、技術的にツインリアクターの再現が不可能であったことと、リアクターそのものが改造できないことが要因でこの程度の性能に収まっている。

現時点ではリアクターの調整は可能でも、中身にまで手を出すことは出来ない。車のエンジンで言えば吸気系や排気系を弄ったり交換したりすることである程度能力向上は見込めるものの、エンジンを解体しボアアップなどの根本的な大出力化は出来ないと言ったところだろう。それが出来るのは、製造技術を持つGHだけだ。

「MAのリアクターなんてわけの分からないものを搭載することで解決したけどねそのあたりは。けど予想通りバランスが滅茶苦茶さ。」

それだけならまだいいけど……」

整備長は溜息を吐いた。

「こいつが最大出力を出したら、エイハブスラスターは完全に粒子だけで推進力を得られる。つまり『ガスがいらなくなって無制限に加速できる』わけだ。理論上だけで言えば亜光速までいけるかもね」

エイハブスラスターが推進剤を必要とするのは、『粒子だけでは推力が足りない』からだ。勿論理論上出力が足りれば粒子だけでも推進力を得られるのだが、十分な推進力を得ようとすれば、今度は『機体に回せる出力が足らなくなってしまう』。スラスターバインダーとかイナーシャーコントロールローラーなんて代物を搭載すれば余計にだ。例え今回のように馬鹿みたいな出力のリアクターを備えそれが解決したとしても、今度は『別な問題』が生じる。

「しかしそうになると、『コクピット周辺の慣性制御が許容量を超える』。亜光速までもっていきこうものなら即座にペしゃんこさ。そこまで行かなくても君がお得意の3次元機動を全力でやったりしたら、ざっと20G以上が四方八方からかかることになるね。機体は十分な耐久力があるから保つけど、君さすがにそれ無理でしょ」

「……3分くらいなら、保つかない」

「だからやめときなさいって。……悪いけどこれリミッターかけさせてもらうからね。そうすれば機体のバランスも落ち着くし。それでもシユヴァルベ・グレイズよりよほどじゃや馬になる……」

「ランディさん！ 大変です！」

突如手伝いでランディと共に歳星を訪れていたヤマギが声をかけてくる。泡を食った彼の様子に、ランディは眉を顰めた。

「何があった？」

「それが、うちの採掘場で、MSとわけの分からない代物が発掘されたようなんです！ そのわけの分からないものってのは、もしかしたらランディさんの言っていたMAかも知れません！ しかもスリープモードで『まだ生きてます』！」

「……はア!?!」

ランディの悪魔じみた推測能力は、現状の様々な状況を鑑みてあら

ゆる展開を想定するからこそそのものだ。

その彼をもつてしても、生きているMAが偶然発掘されるなんて状況は、想定外どころの騒ぎではなかった。

発掘より1日が経過。

「……確かにMA——正確には、その端末である『ブルーマー』と呼ばれる機動兵器だな。まさかこの時代まで生き残っている個体があるうとは」

火星から緊急の連絡を受けたマクギリスは、深くため息を吐いた。「それで、採掘場の地下に本体らしき反応があるのは間違いないのだね？」

「ああ、土壤に含まれているハーフメタルのおかげで走査は手こずったが、大出力エイハブリアクターを持つ何かが埋まっているのは間違いないねえ。反応を見る限り生きていることもな」

スリープモードのままではほぼ完全体のMAが確認されたとい状況を、オルガはごまかし無くマクギリスに伝えていた。

「採掘場の技術者は全員クリュセに避難させて採掘場の周囲は封鎖した。今は鉄華団（うち）の団員だけで監視と、いざというときのための準備を整えている。火星支部の方も協力してくれるそうだ」

「懸命な判断だ。軽率にMSを投入しないことも含めてね」

「ランディ教官に嫌と言うほど叩き込まれたからな、MAの恐ろしさは。あの人が手を出すのを躊躇する代物を相手取るってのはぞつとしねえ」

「状況は理解した。すぐにでも対策チームを組みそちらに行かせる。……いや、私も出よう」

「おいおい良いのかよ。そつちはそつちで立て込んでいるだろうに」「万が一のことがあって君たちに被害が及べば、計画が水の泡だ。そ

れにそちらで色々用意するにしても、私が直接指示を取った方が通りがいいだろう。なによりGHの端くれとして、生きているMAと存在を感知しながら他人任せなどやっていいことではない」

「……分かった。可能な限り現状の維持に努めさせて貰う。だが万が一が起きたら、全力で対処させて貰うぞ?」

「それはもちろんだ。願わくばそうならないように祈っているよ」

その日のうちに、マクギリスは火星でMAらしきものが発掘されたという事実を、セブンスターズ各位に緊急会議にて知らしめ、調査の名目で火星に赴くと宣言した。

マクギリスにとっても予想外であったこのアクシデントは、状況を濁流のごとく変化させることとなる。

マクギリスが宣言してしばらくの後。

「どうやらマクギリスの報告、本物のようだな」

「はっ、『圏外圏の協力者』からの情報によれば、間違いないことかと」
リークされた情報をラスタルに提示したイオクは、しゃちほこばつた態度で頷いた。そうMA発見の報はマクギリスとほぼ同時にイオクの元に届いていた。その情報源は言うまでもなく。

「ジャスレイ・ドノミコルスか、気の利く男のようだ。覚えておこう」
テイワズも一枚岩ではなく、崩しかけられる隙があると分かったのは僥倖であった。ラスタルにも伝手はあったが、その相手は油断ならない人物で駆け引きが面倒な相手だ。与しやすい相手と取引が出来るのであればそれに越したことはない。

と、イオクがラスタルに問いかけた。

「ところでラスタル様、そのMAというのは……?」

その質問に、同席していたジュリエッタが呆れたような声を上げた。

「まさかGHの上級士官ともあろうものが、MAの事を知らないなど」「も、勿論知っている！ 確認のためだ！」

むきになって言い返すイオク。GHの士官教育の過程で、MAに関する基本的な知識は教えられるし、その情報を閲覧することも推奨されている。艦隊司令ともなれば詳細を知っていて当然のことであった。

まさかイオクが所詮は過去の遺物などと侮って、ろくに話も聞いていなかったことなどつゆ知らず、ラスタルはMAの種類を問うているのだと判断して語り出す。

「タイプ【ハシユマル】。オーソドックスな殲滅型のMAだな。子機の生産能力と、それを利用した自己修復能力を持ち、場所を問わない広域での活動を可能とする。まさか生き残りが存在していたとはな」

「そのようなものを、マクギリスはどうしようというのでしょうか。今更そんなものを直接赴き破壊したところでどうなるか？」

「……【七星勲章】」

その言葉を発したのは、腕を組んで部屋の壁により掛かっていたヴィダール。

「MAを撃墜したものに授与される勲章。その授与数に応じてセブンスターズの次席は決定されたと言う。当然ながらこの300年間授与されたものはいないが……」

「なるほど、現在でそれを授与されるような殊勲を上げれば、GHの頂点に立つ足がかりとなるか」

得心したラスタルが頷く。その様子を見て、イオクが声を張り上げた。

「ラスタル様！ 私を火星に行かせて下さい！ マクギリスの野望、この手で阻止して見せましょう！」

「ふむ……」

ラスタルは考える。このところマクギリス陣営にしてやられてばかりで、風向きが悪い。この上で奴に手柄を立てられてしまったらさらに状況は悪化するだろう。横槍を入れるのは悪い手ではないが、イオクの能力だと若干不安が残る。

「ジュリエッタ、ヴィダール。イオクについていけ。己の目でMAを確かめることは今後のためにもなろう」

「はっ、了解致しました！」

「了解した。……よろしく頼む、クジャン公」

「ラスタル様！ 感謝致します！」

感極まって最敬礼を行うイオク。己の意見を取り立てて貰ったことがよほど嬉しかったのか、目を輝かせてやる気に満ちあふれている彼の様子に、ラスタルは内心嘆息する。

彼の能力は全く信用していない。だが部下たちはイエスマンばかりとはいえ優秀であるし、万が一を考えジュリエッタとヴィダールを付けた。よほどのことがない限り、失態を演じる事はないはずだ。そう自分に言い聞かせた。親友の息子であり、幼い頃から可愛がってきた手前もあつて、どうにもイオクには若干甘くなってしまうことを自覚してはいたのだが。

この時ラスタルは最低でも確認を取るべきであつた。繰り返して言うが、イオクがGH士官として必須である、MAの基礎知識すら記憶していないとは思ってもよらなかったのだ。

当然それが余計な騒動を招く。

MA発掘より18日目。

火星に降り立ったマクギリスは、石動と技術スタッフを率いてMAが発掘された採掘場へと向かっていた。

「軌道上における艦隊の配置は滞りなく。……しかしよろしいのですか？ 1個中隊とはいえ『彼ら』を投入して」

「あくまでいざというときの切り札さ。出番がないに越したことはない。……MS部隊の備えに手抜きはないな？」

「はっ、全機に滞空装備及び対艦レールガンを用意しました。いつで

も出撃可能です」

「できれば【ダインスレイヴ】を用意したかったのだがな。……さすがに条約禁止兵器を持ち出す許可までは出なかったか」

「例えMAが動き出したとしても、お偉方は自分の尻に火が付けられるまで許可を出さないでしょうね。もつとも己の都合で条約などいつでも踏みにじるでしょうが」

「違いない」

皮肉めいた上層部批判に、マクギリスは苦笑を浮かべる。そうこうしている間に、一行を乗せた車は採掘場へとたどり着いた。

「お待ちしておりましたマクギリス准将、ようこそ火星へ。……つと、挨拶はこんなモンで、早速本題といこうか」

採掘場で待ちかまえていた鉄華団。その代表であるオルガは挨拶もそこそこに、掘り進められた大地の大穴が縁へとマクギリスたちを案内した。

「あんたと教官の指示通り、採掘場から半径20km四方は局地災害の危険性と言う名目で関係者以外退去させた。本体の周囲に爆薬をセットしていつでも起爆できるようにしてあるが……情報通りなら、こいつも気休めなんだろう？」

「それでも足止めの効果ぐらいはある……と思いたいがね。それで、ランデール先輩は？」

姿の見あたらない狂人。その所在を尋ねてみれば。

「歳星の方で回収したプルーマーの解体の指揮を執ってる。それも終わったそうだから、てめえの機体の調整が終わり次第こつちに向かうってよ。あの人の出番なんざ来ないほうがいいんだが」

「同感だな。……ともかくまずは我々の技術者による調査と、可能ならば早々に解体作業に移りたい。中枢部とリアクターの切り離しができればあとはこつちのものだ。奴を刺激しないよう慎重に……」

そうやって話し合っていたその時、石動のタブレットにどこからか連絡が入った。

「私だ。……なに？ ……そうか、分かった。臨戦状態を維持したまま指示があるまで待機。こちらからの連絡が途絶えたら、独自の判断

で行動しろ」

通信を終えた石動は、緊迫した様子でマクギリスに声をかける。

「准将！ アーレスから緊急の連絡が入りました。先程火星圏内に突如GH艦隊が侵入。火星支部に何の許しもなくMSの射出体制に入ったとのことです。艦はブースター付きのハーフビーク級が3。所属は第2艦隊です！」

「なんだと？」

マクギリスが眉を顰めるその上空、火星軌道上に許可無く陣取った艦隊から、次々とMSが射出される。それらはシールドグライダーを用いて一気に大気圏に突入。目指す先は――

「……ホントに来た」

慌ただしく採掘場から撤収作業が進む中、オルガの護衛で共をしていた三日月が、空を見上げて呆れたように呟く。

空にきらめく光。それは徐々に大きさを増し、やがて人に酷似した姿を取る。

乗り捨てられたシールドグライダーが大地に刺さる中、次々と降り立つのはGH最新鋭機レギンレイズ。その先鋒を務めるのは、試作大型レールガンを備えた黄土色の機体。

「イオク・クジャン……なんのつもりだ」

万が一のためにと人員を避難させながら、マクギリスは苦虫を噛み潰したような面持ちで呟いた。そんな彼の姿をモニターに捉えたイオクは、意気揚々と声を張り上げた。

「そこまでマクギリス・ファリド！ 貴様の野望、ここで潰えると知れ！」

「何のことだクジャン公！ それよりも現状が分かっているのか！」

イオクの注意を惹くためにあえて応えるマクギリス。そんな彼の思惑に気付くことなく、イオクは言いつのつた。

「ええいしらばつくれるな！ 貴様がMAの殲滅を名目に、七星勲章を得ようとしていることは明白！ 潔く縛につくが良い！」

「七星勲章……？ そうか、それでか……」

別に犯罪行為を起こしていないのに頓珍漢な事を言い出すイオク

の事を放っておいて、マクギリスは一瞬考え込む。

その態度が勘に障ったのか、イオクは――

「どこまでもしらばっくれると……」

言いながら機体を一步踏み出させようとした。

「っ！　そこから動くな！」

気付いたマクギリスが警告の声を放つが遅い。ずしやりと機械の脚が大地に踏み込み、そして。

地中に埋まった何かのモニターアイが不気味な光を放った。

ずず、と僅かに大地が震え、その次の瞬間轟音と共に採掘場そのものに激震が走った。

「っ!?　な、なんだ!？」

「いかんっ！」

突如揺れ始めた地面に驚くイオク。　歯噛みし人員の退避を急がせるマクギリス。

大地が揺れる中、それでも彼らは冷静さを失わず。

「オルガ団長！」

「ああ！　一斉起爆しろ！」

マクギリスの言葉を受け、オルガが団員に命じる。

掘り広げられた採掘場の壁面。その一角が轟音と共に吹き跳ぶ。爆煙と共に大きく崩れる岩肌。その様子を見たユージンが嘆く。

「ああくそ、折角あそこまで掘り進んだつてのに……」

「だがこれで時間は稼げるはずだ、いまのうちに後退を……」

その時、再び轟音が響き、そして。

閃光が、天を貫いた。

大地から湧き上がる光の奔流。それは崩れ落ちた岩塊を『溶解させながら』吹き飛ばす。

「な、なんだありゃあ！」

「ビーム兵器か！　あれほどの威力とは……」

戦慄の空気の中、三日月は眦を鋭くし呟いた。

「……来る」

どう、と一際大きな轟音が響き、噴火のように土煙が吹き飛ぶ。

その中から悠々と姿を現すもの。白を基調とした機体、左右に広がる翼のようなバインダーユニット、長く伸びた鳥類を思わせる脚部。鳥の嘴のような頭部をゆっくりと巡らせて、それは怪鳥のような咆吼を上げる。

きゅいいいい、と耳障りな音が響く中、トラックに分譲した鉄華団とマクギリス率いる調査団は脇目もふらず採掘場を後にする。その背後で、姿を現したMA——ハシユマルに対し、イオクはさらなる思慮のない行動に出ようとしていた。

「くっ、これがMAか……だが相手にとって不足はない！」

彼は果敢にMAへと挑むつもりであった。無謀に過ぎるところではないその行動は。

「お止め下さいイオク様！」

「今の装備ではあれに対抗することなど叶いません！　ここは撤退を！」

配下の機体がイオクのレギンレイズを羽交い締めにし、残ったものが前に出て主君の盾にならんとする。

「ここは我等が！　イオクさまはお下がりを……ぐわあっ!？」

殿に立とうとした機体が、横殴りに吹っ飛ばされた。それを成したのは蛇のごとくのたうっ何か。「テイルブレード」と称される、特殊ワイヤーによつて自在に動く遠隔兵装であったが、それを認識する間もなくまた1機レギンレイズがコクピットを貫かれ犠牲となる。

「き、貴様アー！　私の部下をよくも！」

激昂したイオクは配下の機体を無理矢理引き剥がすと、機体を前に出しレールガンを構えて――

テイルブレードに吹っ飛ばされた。

「うぐわア!!」

しかし機体は左腕がちぎれ飛んだだけで、致命傷は受けていない。くそ、妙なところで運の良い奴……ごほんごほん。吹き飛ばされたイオクの機体は、為す術もなく地面に叩き付けられる。

「ぐおっ！　ま、まだ……」

軋む機体を起こそうとすれば、イオクを護ろうとして配下の機体が

前に立つ。

「ここは我等が食い止めます！ イオク様、撤退を！」

「貴方様が倒れば、クジャン家はどうなるのです！ 今はまず生き延びることをお考え下さい！」

命がけの訴えに、さすがのイオクも我を押し通すことはできなかった。一瞬の迷いの後――

「すまぬ、ここは任せるぞー！」

機体を翻して脱兎のごとく逃げ出すイオク。その背後で、絶望的な戦い――いや、蹂躪劇が繰り広げられる。

「ここは通さ……があつ！」

「足を止めるな！ 的になるぞー！」

大蛇のようにつたうつテイルブレードに1機、また1機と数を減らされるレギンレイズ部隊。最新鋭機がまるで子供扱いであった。

しかしながら立ち向かう兵たちも無能ではない。今回イオクのお守り……じゃなくて率いてきたのは1個中隊。全員が第2艦隊の選りすぐりだ。圧倒されながらも勝機を諦めはしなかった。

やがて何人かの犠牲を経て、ついにハシユマルの猛攻をくぐり抜けた1機がその背中に飛び乗る。

「ここならばあの武器も使えまい！」

頭部と背中との合間。自身も傷つけかねないこの位置ならばテイルブレードは使えないと踏んだのだ。それは当たりだったようで大蛇の牙は襲いかかってこない。貰ったと確信した兵は機体の獲物を振り上げた。

そしてそれは、四方から飛びかかってきた影に押さえ込まれる。

「な、なんだこいつらはー！」

土煙から飛び出してきたのはハシユマルの端末兵器であるブルーマー。昆虫を思わせるそれは、レギンレイズに組み付いてトーチの花を散らせた。

「こ、この、離れろ……うわあー！」

ブルーマーを引き剥がそうとした機体はバランスを崩し、地面へと落下する。そこへあつという間にブルーマーの群れが殺到し、飲み込

まれた。

「ばかな、端末兵器がこれほどとは！ 一体どこに……」

「イオク様が安全圏に逃れるまでは……うわあ！」

怒号と悲鳴が響く中、僚機のシグナルが一つ、また一つと消えていく。

「私の部下たちが……おのれ、おのれエ！」

イオクは涙を流しながら怨嗟の籠もった声で呻く。

その目には危険な光が宿っていた。

鉄華団とマクギリス一行は、あらかじめ設営されていた仮拠点へと移動していた。

「状況はどうだ？」

「乱入してきたMS部隊は全滅。現在採掘基地でプルーマーとかいうのが好き勝手やっています」

仕掛けておいたカメラやドローンの映像からは、採掘施設の給油設備や燃料タンクを破壊し集まっているプルーマーの姿が映し出されている。それを見てユージンが天を仰いだ。

「あくあ……折角の設備が全部台無しじゃねえか……」

採掘場を担当していた身としては嘆くどころではない光景であった。その横で映像を見ていたマクギリスは鋭い眼差しのままで解説する。

「推進剤と駆動油を補給しているのだな。……これほどの数が存在していたと言うことは、恐らくあの採掘場は奴の『巣』だったのだろう」
ハシユマル自身の修復や補給を行う拠点であったと、そう分析するマクギリスは、内心の緊張を押し隠して言葉を紡ぐ。

「多分一緒に埋まっていたガンダムフレームを囮にして、飽和攻撃を叩き込み地中に埋めたのだろうか。それで仕留めきれなかったとい

うことだ。……だがまだ奴は完全ではない」

「そうなのか？」

「ああ、完調であれば自力で大気圏を脱することが出来るほどの化け物だ。自在な飛行もまま成らずろくな移動速度も出ないということでは、全力を出せない状況にあると言っている。叩くなら、今しかない」

マクギリスの言葉を受け、オルガは頷いた。

「だったらパターン4で対処しよう。奴が近場の人口密集地を襲うつてんなら、間違いないクリュセに向かう。空を飛ばない今なら絶対このあたりの渓谷を通過するしかねえ。いくつか谷を潰して進路を誘導。こっちの有利な地点で迎え撃つ。准将、そっちの戦力は？」

「対応装備を調べた2個中隊を下ろし、1個中隊を予備として軌道上の艦に待機させる。降下させた戦力と空港に下ろしていた私たちの機体で対処しよう。合流ポイントはここだ。渓谷なら、空中からの制圧で優位を取れる。そのあたりをこちらが受け持とう」

「分かった。俺達は渓谷で迎え撃つ戦力と、出口で防衛線を敷く部隊に分ける。奴をクリュセに向かわせるわけにはいかねえ。ここで仕留めるぞ」

「団長、例のガンダムフレームも使うんですか？」

オペレーターが一人の問いに、オルガは応えた。

「今は少しでも戦力がある。出せるなら出すさ。……シノからは？」
「調整に手間取っているようです。なんでも『今までのフレームになる機能』がついているってことらしくて」

「無理はさせるなど伝えてくれ。……ミカ、昭弘。聞いている通りだ、後方で待機している連中と合流して戦闘準備。こんな下らねえどんぱちはとつととケリ付けるぞ」

「ん」

「了解！」

「では私も準備に入る。作戦ポイントで会おう」

男たちは動き出す。鼻を鳴らして高揚する気持ちを抑えるオルガ。その彼に同行していたメリビットが声をかけた。

「気負いすぎないようにして下さいね。はい、お忘れですよ団長」

そう言う彼女の手には、丁寧に折りたたまれた鉄華団ジャンパーがあった。その気遣いにふ、と一瞬目尻を下げてから、オルガは不敵に笑んだ。

「ありがとな。これで気合いが入るってモンだ」
ばさりと、男の背中に鉄の華が翻る。

クリュセ郊外の宇宙港にて、マクギリスたちは用意していたMSを受け取る。

マクギリスは蒼いスタークグレイズ。そして石動に用意されたのは。

「ヘルムヴィーゲ・リンカー」。私のグリムゲルデを改装し、対MA用に設計された機体ヘルムヴィーゲを再現したものだ。君なら使いこなせよう」

騎士の甲冑を思わせるその機体。機体の出力を臂力に振り、パワー重視にセッティングを変更されたその機体を見上げながら石動は問うた。

「よろしいのですか?」

「この機体のセッティングは私には向かない。ならばより使いこなせそうな人間に任せるがいいのさ。当てにしているよ、メビウス4」

「はっ、微力を尽くします」

細かい調整を終え、2人は早々に合流ポイントへ向かう。その途中で会話が交わされる。それは愚痴の言い合いのようである。

「まさかイオク・クジャンがあればほどの愚物とはな」

「予想外に過ぎますな。悪い方の意味で」

「これ以上状況が悪化しないことを祈るしかないな。……それにしても、七星勲章、か」

くく、とマクギリスは忍び笑う。

「そんなものに、今更何の意味があるというのかね」

それは明らかに、嘲笑であった。

と、そこでレーダーに反応が生じる。

「データにない周波数？ GHのもののようなだが……」

その機体はマクギリスたちが進む先、小高い岩の上に姿を現した。

水色のMS——ガンダムヴィダール。訝しげに眉を顰めるマクギリスの機体を庇うように、ヘルムヴィーゲが前に出る。

「こちらはGH特殊機動遊撃艦隊ヘイムダルである。そちらの所属と目的を聞かせて貰いたい」

いつでも腰の前面に装備されている大型バスターソードを抜けるようにしながら石動が問うた。その言葉にヴィダールは応えない。僅かな沈黙の後、彼は呟くようにこう口にした。

「……分からない。友と信じていたものを謀殺しようとしたお前と、火星のために命を賭けようとするお前。どちらがお前の本当の顔なのか……」

(この声？ ……まさか)

仮面と通信機越しではあったが確かに聞き覚えのある声に、マクギリスは表情を厳しいものとする。「何を……」と石動が問いたただそうとする前に、ヴィダールは機体を翻して姿を消した。

「……追いますか？」

「いや、今はそれどころではない。合流ポイントに急ごう」

気になるどころではない。だがこの場を乗り切らねば、それを追求することもできないのだ。

僅かに後ろ髪引かれる思いを押し殺し、マクギリスは目の前の脅威を排除することに意識を向けた。

300年の眠りから蘇ったMAハシユマル。かつて世界を地獄に

陥れたその存在は、再び猛威を振るわんとしていた。
対するは鉄の華を背負った少年たちと、若き野心家。
火星を舞台に、厄祭戦の残り火が燃え盛る。

※今回のえぬじい

「七星勲章って何の意味があつたんじやー！」

「あつたんじやー！」

「あつたんじやー！」

「あつたんじやー！」

「あつたんじやあああああ！」（なぜか泣き崩れるマツキー）

「ごっつは面白かったね。」

35・狩りの、時間だ

クリュセ市街、アイゼン・ブルーム商会本社では、鉄華団から情報を受けたクーデリアたちが対処に追われていた。

「関係企業各所に連絡を！ 保有するシエルターを民間に開放するよう呼びかけて下さい！」

矢継ぎ早に指示を飛ばすクーデリア。もともと火星の各都市には、希に起きる大規模な砂嵐（ストーム）対策としてシエルターが備えられている。それを解放し住人を避難させるよう、彼女は働きかけていた。

MAがどれほどの脅威か、まだ彼女らに実感はない。しかしながら、あの傍若無人なランデイが最大限に警戒していたと言う事実が、否応なく危機感を募らせる。

焦ってはいけない。しかし出来る限り多くの人間を安全に避難させなければならぬ。時間との戦いを制するために、彼女たちは可能な限りの手を打つ。

「……はい、ええ。オルガ団長からは許可を得ています。いざというときには『例の地下道』を使うことなりそうですから、その時は市民の誘導をお願いします」

クーデリアが連絡を取っているのは、鉄華団本部に残っている団員。本部を改装した際発見された厄祭戦時代の地下坑道。クリュセ市街まで続くそれはいざというときの脱出経路として密かに整備されていたが、それを逆にクリュセ市街から市民を脱出させるための経路として使わせて欲しいと頼んでいたのだ。一応鉄華団の機密ではあるが、背に腹は代えられないとオルガも同意している。使わなければそれに越したことはないのだが。

「ではクーデリア社長、私は庁舎へ向かいます」

「お願いします」

「はい、吉報をお待ちになって下さいね」

一分の隙もなくスーツを着こなしたイアンナが、クーデリアと言葉を交わし足早に出掛けていく。彼女が向かうのはクリュセ代表首相の元である。今回の件でアーヴラウに繋ぎを取った彼女は、ラスカーから名代として市民の避難誘導に協力するよう命じられたのであった。いきなりの大役であったが、むしろ望むところとばかりに勢い込んでいる。

待たせていたタクシーに乗り込んだイアンナは、混乱こそ起こっていないものの緊張感に満ちてざわつく町中の光景を見やりつつ、懐からタブレットを取り出す。

「さて、向こうはどうなっているかしらね。……ハロー、アヤさん。状況は？」

MA対策仮設陣地。忙しく準備を整える団員たちをカメラで撮影しながら、アヤは左の頬と左肩で挟んだタブレットに向かって受け答えしていた。

「今鉄華団のMS部隊が準備を整えつつあるところです。後はGHの部隊が……来たようですね」

ハシユマルに察知されないよう、大回りして地上をホバー移動してきたマクギリス率いる部隊が姿を現す。跪かせた機体から飛び降りるように降り立ったマクギリスは急ぎオルガたちの元に駆け寄る。

「すまない、遅くなった」

「いや、十分間に合ったさ。……あんたの頼み通り、ジャーナリストを連れてきた。彼女だ」

オルガに促され、アヤはマクギリスに会釈する。

「初めましてファリド准将、アヤ・アナンダ・アレンです」

「ああ、よろしく。今回は無理を言って済まない」

「ですがよろしいのですか？　MAとはGHの最高機密だと聞いていますが」

「それについてはかまうことはない。今回の戦い、細大漏らさず記録していただく。もちろんすぐに公開して貰うわけにはいかないが、必ずその働きに報いると約束しよう」

マクギリスは第三者の報道関係者であるアヤに今回のことを記録して貰うよう頼み込んでいた。その思惑は分らないが、アヤにとってはまたとない機会である。一も二もなく即座に話に乗った。

それはさておいて、彼らは早速作戦の打ち合わせを行う。

「予想通り奴はこの渓谷地帯を通過するようだ。渓谷の奥まった所、ここで迎え撃つ。我々の部隊は上空からレールガンにて制圧支援、私と石動、そして君たちの中から何人かで直接戦闘。残りの人員で奴を誘導し追い込む。このような感じだ」

「それでいけそうだな。うちで直接戦闘に加わらせるのは昭弘と、間に合えばシノ。そして誘導に回すミカを合流させる。頭数よりも少数精鋭で行く」

「ガンダムフレームをぶつけるか。対MA戦のセオリーと言っても良い。君たちの技量であれば問題なく対処できるだろう」

「よし、早速始めるぞ。ミカ、作戦に変更はない。ハッシュとライドをつれて先行して……」

「団長！　MAに接近する機影が1……いえ、渓谷内にもう1機！

どちらもGHの機体のようです！」

「なんだと!？」

突然の横槍に、オルガは顔を顰める。モニターを覗き込んでレーダーの画像を確認したマクギリスは、小さく呟く。

「あいつか……単騎でMAに挑むつもりとでも？」

画面の中で、一つの光点がMAへと一直線に向かっていく。

ホバリングというより地面すれすれを飛行しているのはガンダム
ヴィダール。それを駆る仮面の男は、一人呟いた。

「さて、寄り道した分働いておかなければな」

数々の強権執行に対し猛烈に抗議を入れてくる火星支部の対処を
イオクの部下に任せ、彼は火星に降り立った。その際マクギリスの所
在を確認してしまったため、矢も楯もたまらず彼らの前に姿を現して
しまった。やはり自分は感情的で単細胞なのだろうと自嘲する。

ともかく今は動き出してしまったMAを何とかするのが最優先だ。
並のMSであれば一蹴されるであろうが……ヴィダールとその愛機
には『切り札』がある。そもガンダムフレームとはMAと戦うために
産み出された物だ、勝算はあると踏んでいた。

「見えた、あそこか」

大地を割る亀裂——渓谷部の上面が見える。その狭間からのぼる
土煙はMAの所在を示していた。

「上空から一撃離脱。奴の間合いへ無闇に踏み込みさえしなければ」
状況を最大限に生かした戦術を持って、ヴィダールはハシユマルへ
と挑みかからんとする。

しかし、渓谷の上面から一撃を食らわそうとしたところで異変が起
こった。

『システム』に異常!? なんだこれは!？」

ハシユマルに接敵したところで警告音が鳴り響く。ガンダムヴィ
ダールに搭載された機構、それが突然作動不良を訴えたのだ。

「ちいっ!」

舌打ちしてフルスラスト。強引に機体を制御し離脱しながらヴィ
ダールは臍を噛む。

「これではまともに戦えん! 『外法のシステム』ではこいつと対峙す
る資格はないということか!」

切り札が使えない。さすがにそれで戦い抜けれると思うほどヴィ
ダールは楽観的ではなかった。口惜しいがここは引くしかあるまい
と、後ろ髪引かれる思いで戦場を離れる。

「機体からの干渉……ヤマジン主任も予想外だったろうなこれは。こ
うなつてはやつらに任せるしかないが……」

「ヴィダール！……こんなところでなにをしているのです！」

撤退するヴィダールの前に現れたのは、ジュリエッタの駆るレギン
レイズ。彼女はヴィダールに次いで火星に降下したが、GPSの一時的な
フリーズがおり、大幅に降下地点をずらされたのであった。幸
いにしてGPSはすぐに復帰したが、MAの再起動に間に合わなかつ
たようである。

「すまない、機体に異常が生じたようだ。MAとの交戦は無理だな」

「こんな時に！ 欠陥品ですかその機体は！」

「返す言葉もない。クジャン公の部隊も壊滅状態だし、この状況では
撤退するしかないだろう」

「何をのんきな！ 私一人でもMAを仕留めてみせます！」

「あ、おい！」

止める間もなく、ジュリエッタは機体を翻してMAの元に向かう。
ヴィダールは舌を打った。

「今の戦力でまともに戦える相手ではないというのにつ！」

一方ジュリエッタは、勢いのままMAに立ち向かおうとしていた。
しかしその先で。

「MAが方向を変えた？ ……イオク様か！」

MAが方向を変えた渓谷の分かれ目。その先ではイオクのレギン
レイズが煙を吐くレールガンを構えたまま佇んでいた。

「二矢報いたぞ。……我が部下たちよ、これでお前たちも浮かばれる
であろうか……」

一発当てただけで感慨にふけり、一筋の涙を流すイオク。己の意志
を込めたその一撃が、MAに痛打を与えた物と彼は信じて疑わなかつ
た。

当然ながらそんなはずもなく。

くか、とハシユマルの頭部が顎を開くかのように展開する。現れる
のは帯電した砲口。そこから光の奔流が迸った。

「……………え？」

棒立ちのレギンレイズに向かって、ビームの奔流は迫り――

「なにをやっているのですイオク様！」

あわやと言うところで飛び込んできたジュリエッタのレギンレイズが、イオクの機体を横抱きに抱えその場を離脱する。その直後にビームは溪谷を貫いていった。

そこから少し離れた岩場で、ジュリエッタはイオクの機体を叩き付けるように降ろす。

「あの程度の攻撃が、MAに通用するはずがないでしょう！」

「馬鹿な、レギンレイズの最大出力だぞ?!」

そんなことも分からないのかと苛立ちを覚えるジュリエッタ。MAの装甲はMSよりもさらに頑強に出来ている。条約に違反しない程度の威力に押さえられたレールガンごときでは、まともにダメージも入らないだろう。

「ともかくイオク様はここで大人しくしておいて下さい！ MAは私が倒します！」

「！　そうか、お前は私の部下の敵を取ってくれるというのだな！」

「……はあ？」

何を言っているのかこの男はと、一瞬状況を忘れて呆れるジュリエッタ。イオクは構わずむせび泣きながら言う。

「その決意、覚悟に敬意を表する！　これで部下たちも浮かばれよう！」

付き合っていられない。ジュリエッタは早々に会話する努力を放棄し、機体を翻してその場から飛び立つ。

「頼むぞ！　部下たちの無念を晴らしてくれ！」

後ろでイオクが何やら言っていたが、すでにジュリエッタに耳には届いていなかった。

本隊から先行しハシユマルの侵攻を阻害しようとしていた三日月たちは、目の前の溪谷を貫くビームの奔流を見て一時足を止めた。

「……手間が省けた、かな？」

がらがらと崩れる溪谷。元々周囲を崩して道をふさごうと考えていた三日月は、呟くように言う。

「三日月さん、この先には農業プラントがあります」

「避難するように言われているはずだけど……ハッシュ、一応様子を見てきて。もし逃げ遅れてる人がいて被害を受けてるようだったら救助を頼む」

「了解です！」

散々しごかれた末、こういつた周囲に気を配るような事も出来るようになった三日月である。このあたりに成長が窺われた。

それはともかく、三日月は機体をビームが放たれた方向へと向けた。

「俺達は奴を追い立てる。ライド、援護よろしく」

「うっす！」

バルバトスと獅電が大地を滑るように駆ける。ほどなくしてハシユマルとブルーマーの群れが発する土煙が目に入った。

「崩れてるのもお構いなしでこっちに向かうつもりか。農業プラントに気付いた？」

「こっちでもっと壁を崩します！ 三日月さんは奴を！」

「ん、了解」

ライドの獅電が両肩に構えたバズーカーを放つ。次々と起こる爆発が溪谷の壁面を崩していく中、バルバトスはシースメイスを構え溪谷に飛び込んだ。そして上から一撃を食らわそうとして――

どぐんっ！

「くっっ！」

心臓を鷲掴みにされたような衝撃が、三日月の体に奔る。同時に脳を書き尽くさんとするかのような情報の奔流が阿頼耶識を通して流れ込み、機体の出力が勝手に上昇していく。

「まずいつ！」

一瞬の間。それについてハシユマルのテイルブレードがバルバトスを襲う。鼻血を垂らしながらも身体を襲う不都合を無理矢理ねじ伏せて、三日月はテイルブレードを弾き飛ばしその勢いを利用して溪谷の上へと後退する。

「三日月さん!？」

泡を食ったライドの機体が傍による。三日月は油断なく溪谷の方を見ながら呟いた。

「奴も下がったか……進路を潰されたからか、こいつの『これ』に反応したのか」

ハシユマルからはなれたせいか、バルバトスの異常な反応は収まってく。アクシデントはあったが一応の目的は果たした。だが、新たに生じた問題は、とても見過ごすことなど出来そうにない。

「ライド、一旦陣地に戻る。……どうにもやっかいだな、これ」

陣地にて事の報告を受けた一回は、驚愕しながらもともかく事の原因を探ろうとバルバトスの調査を始める。

その結果分かったことは。

「これ機体の方の制御プログラムが原因つすね。MAに接近すると自動的にリアクターの出力リミッターが外れて、機体が超過駆動モードに入るみたいで。それがどういう訳だか阿頼耶識を通じてパイロットの生命維持に干渉するらしいつす」

原因を探り当てたのは整備を担当していたザック。意外な人物の意外な能力に、周囲は目を丸くする。

「ザック、お前結構すげえ奴だったんだな……」

半ば啞然とした顔で言うユージン。ザックはへへ、とまんざらでもなさそうな顔で応えた。

「俺これでも学校では優秀な方だったんすよ」

「お手柄だザック。……でだ、もしかしてグシオンも」

「あ、はい。多分同じようなことが起こると思うっす。このままじゃガンダムをM Aの前に出すのは危険っすね」

ザックの言葉に一瞬考えるオルガ。僅かな思考を経て、彼は三日月たちの方を向く。

「ミカ、昭弘。『マニュアルでいけるか』？」

その言葉に2人は頷いた。

「やれるよ、任せて」

「ああ、教官にしごかれたのは伊達じゃねえってところを見せてやる」
阿頼耶識を使わずにマニュアルでM Aに立ち向かえと言われても、2人に動揺の一つもない。その程度のことなど障害にならない、それだけの物を積み上げてきたという自負があるからだ。

「よしおやっさん、バルバトスとグシオンのマニュアル変更を頼む」

「15分、いや10分くれ！ ザック、おめえにも手伝ってもらうぞ」
「へ？ あ、いやおやっさんちよつと引つ張らないで……」

早速作業が開始される。同時に天幕からビスケットが顔を出した。
「遅滞戦闘にシフトを変えたよ。……ファリド准将が矢面に立つて」

「そう言うところはGHの士官だな。大人しくしておいてくれたのは無理な相談か。……ごちゃませ、じゃなかった三番隊をフォローにつけてやってくれ。先鋒の頭はチャドだな？」

「無茶はしないと思うけど、地球支部の事でちよつと責任感してるどころがあるからね。釘は刺しておく」

「いざとなったら形振り構っちゃいらねえが、あんなの相手に死に急がせるわけにはいかねえ。重々自重するように言っておいてくれよ。」

「了解。幸い溪谷って言う限定された空間だ。やりようはあるさ」

「よし。10分だ。10分稼げばミカと昭弘が往く。あんな旧世代のがらくたなんぞに俺達は負けねえ！ とつとカタあつけるぞ！」

オルガの発破に団員たちはおお、と氣勢を上げる。

誰も彼もが臆さない。その光景をアヤは然りと記録していた。

これは本当に、歴史に残るかも知れない偉業に立ち会ってしまったのかも。彼女は興奮を覚えながらも機器を操る手を止めない。

当然ながら彼女は鉄華団が敗北するなど欠片も思っていないかった。

ゆつくりと侵攻するハシユマル。その足をさらに遅らせるため、鉄華団とヘイムダルの混成部隊は果敢に挑みかかっていた。

「そら、こいつはどうだよー！」

先鋒の指揮を任されたチャドの駆る強襲型ランドマン・ロデイを筆頭とした部隊が、正面から相手取る。チャドの機体が投げつけたナタは、本来インパクト時に威力を増すためのロケットモーターから火を吐きながら、高速回転しつつハシユマルへと迫る。

しかしながらそれは、テイルブレードに容易く弾かれる。そしてお返しとばかりに開いた砲口から、ビームが放たれた。

それをチャドは後退しながら回避……したりせずに、真正面から受けてしまう。

「熱ちィー！　これがビーム兵器か。だがー！」

閃光の奔流がやんだ後も、ランドマン・ロデイは健在。元々装甲が厚い上に、ビーム兵器はナノラミネート装甲に対し効果が薄い。よほど長時間照射されなければランドマン・ロデイには有効打を与えられないだろう。

「話に聞いていた通りだ！　こいつのビームはランドマン・ロデイには通じねえ！　俺達で前を押さえるー！」

それを確認するためにわざと攻撃を喰らったのだ。チャドの言葉を聞いたランドマン・ロデイ乗りが、次々と前に出てハシユマルに対し威嚇と牽制の射撃を浴びせる。

それを受けるハシユマルの方は、プルーマーの群れを前面に押し出し数を持って圧倒しようとする。

だがそれは、溪谷の上空から降り注ぐ砲撃に妨げられた。

次々と粉碎されていくプルーマーの姿に、チャドは思わず口笛を吹いた。

「さっすがファリド准将の部下だ。良い仕事してくれるぜ！」

滞空装備を備えたヘイムダルのMS部隊が、上空から支援射撃を行う。その攻撃に反応しハシユマルが上空に向かってビーム砲を放とうとするが、スタークグレイズの群れは即座に散開しそれを妨げる。そう言った行動の一つ一つがハシユマルの侵攻を遅らせていく。

対峙しているものたちは、決してテイルブレードの領域に踏み込まない。それは同時にハシユマルに対して有効打を与えられないということであるが、時間を稼ぐだけなら十分対抗できる。

もしハシユマルが感情を持っているのであれば、苛立ちという物を覚えていただろう。全力を出せない状況、しかも敵は自身の特性を知り迂闊に攻め込んでこない。精神的なプレッシャーはかなりのものとなる。

しかしながらこの殺戮機械に感情という物はない。ただ本能（プログラム）に従い、黙々と破壊活動を繰り返すだけだ。確実に速度を鈍らせながらも、ハシユマルはただ無機的に反撃しつつ機会を待ち続ける。

決戦が想定されたポイントで、マクギリスたちは緊張感を漂わせ待ちかまえていた。

ほどなくして。

「……来たか」

爆音と振動、そしてもうもうと立ち上る土煙が敵の接近を示す。

最初に土煙から飛び出してきたのは後退しながらマシンガンやグレネードランチャーを撃ちまくるランドマン・ロディの部隊。

僅か数分であるが、彼らは確かにハシユマルの足を遅らせ、プルーマーの数を減らして見せた。

「よくやってくれた。後は我々の仕事だ」

「ああ、任せる！」

溪谷の出口に向かい防衛線を張るチャドたち。それを背中で見送ってマクギリスは気を引き締め直した。

「さて、今の私でどれだけのことが出来るか」

ゆらりと土煙から姿を現すハシユマル。それに続きプルーマーが次々と飛び出してくる。大分数を減らされ、しかも戦闘中のため再生産することは不可能のはずだが、よほどの数をため込んでいたのか、その勢いはまだまだ衰えたようには見えない。

「死力を尽くすしかあるまいな。石動、往くぞ」

「はっ！」

どう、と大地を蹴って2機のMSが駆け出す。それに向かってプルーマーの群れが一斉に襲いかかった。

奔る剣線。

一つは双剣。2刀を持った青いスタークグレイズが、舞うようにプルーマーを斬り刻んでいく。

一つは轟剣。身の丈を越えるほどの大剣を振り回すヘルムヴィーゲが、飛びかかって来るプルーマーを纏めて断ち割り吹き飛ばしている。

柔と剛。まるで協奏曲のような剣舞は天使の舞羽根をことごとく蹴散らしていくが。

びゅお、と野太い風切り音が響く。

「ほう」

「むう」

土煙の中から襲ってくるテイルブレードに弾き飛ばされた。いや、受け流した2機はそれぞれ左右に散った。

「これは確かに見切りにくい。なるほど、本分はビーム兵器による広

域殲滅なのかも知れないが」

『『それを行うために、敵を寄せ付けけないこと』。開発者はよほど性格が悪いと見えますな』

ハシユマルという兵器の特性を見抜いた2人は、不敵に笑みを浮かべて得物を構え直す。その眼前で、ハシユマルはずしりと両足を地面に降ろした。

ぞう、とマクギリスの背に悪寒が走る。

「石動！」

「心得て！」

声を掛け合った2人が脱兎のごとくその場を飛び退き散る。ほぼ同時に『ハシユマルの姿がかき消えた』。

轟音、打撃。

青のスタークグレイズの背後に回ったハシユマルが回し蹴りを放ち、同時にテイルブレードがヘルムヴィーゲを襲う。常識外の速度、そのからくりを、攻撃を受け流したマクギリスは見て取った。

『『高出力に物を言わせた慣性制御』か！ 機体の機能が回復しつつあると！』

MA本来の能力を取り戻しつつある。時間をかけるわけにはいかなかったと判断するマクギリスの元へとプルーマーが殺到し――

雨霰と降り注ぐ射撃に阻害される。

「雑魚は任せろ！ あんたらはその化け物を！」

エンビ率いるごちやませ隊を筆頭としたMS部隊、そして上空からヘイムダルの援護射撃がプルーマーを押し止める。それに脅威を感じたのか、ハシユマルはビーム砲を展開して充填を始める。

「ランドマン・ロディ以外だと直撃は拙い、各機回避を――」

「任せて」

放たれる閃光の奔流。しかしそれは突如割って入った『何か』に妨げられ、割り砕かれた。

四方に散る閃光が爆煙を上げる光景を背後に、その機体は悠々と立つ。

焦げ臭い煙をたなびかせながら振り向かれるシースメイス。モニ

ターアイを紅く輝かせるバルバトスの中で、三日月はいつも通りの調子で飄々と言った。

「お待たせ。遅れた分は働くよ」

「ああ、頼りにさせて貰う。まずは——」

「おいしい良い所じゃねえか、俺も混ぜろや」

長距離用試作ブースターが切り離される。

大気圏突入の摩擦熱で紅く染まる楔形のシールドグライダーが、蹴り飛ばされ回転しながら真っ直ぐに落下していく。

それは再びビームを放とうとしていたハシユマルを強かに打ち据え、大きく体勢を崩した。

地面に突き刺さるシールドグライダー。熱風が、砂埃を巻き起す。

「はは、当たるモンだ。盛り上がってるかおめえら！」

響き渡るは悪魔の声。

鋼の刃がごとき4基のスラスタターバインダー。左手にはエッジの効いた盾。右には大口径のショットガン。

黒と蒼に染められたその機体は、滞空しながらモニターアイを光らせる。

「メビウス1、エンゲージ。進んでやり合いたい相手でもねえが、精々派手に往こうか！」

計画を破壊する宿業を持った死の女神が、火星の大地に降り立った。

※今回のえぬじい

あなた達は次にこう言う。「余計なことすんなジユリエッタ」と！
(ドーン)

→ 奇妙な冒険つぼく指さす筆者。

おまけ

S T H | 1 8 s r ラーズグリーズ

※図はイメージです

イオフレームと同時に開発されたエウロパフレームをベースに制作された機体。

元々ティワズの技術によってガンダムフレームを再現するというコンセプトの元設計された高性能のフレームに、MAのリアクターを載せ大出力のスラスタユニットと新型の慣性制御機構を備えた高機動仕様機。

そのスペックは全力を出せばパイロットを殺しかねないほどの物で、またバランスが完全に無茶苦茶なため、リミッターをかけて機体の安定性を計っている。それでも基本性能はシュヴァルベ・グレイズを上回り、レギンレイズ・ジュリアとほぼ同等である。

その外観は図の通り、フレームアームズ『ゼルファイカル／ナイトエッジ』ほぼそのまんま。最大の差違は背中にMA用のリアクターを収め左右に冷却システムを備えたバックパックを背負ってるところ。あとカラーリングが黒と蒼を基にしたものとなっている。

なおなんでゼルファイカルなのかと言うと

1・機体のコンセプトとレイアウトがジュリアと似てる。

2・頭部の形状がどこもなく悪魔っぽい。
という理由により採用された。

36・宴終わって後始末、と。

ヴィーンゴールヴ、セブンスターズの会議室にて、イオク・クジャンは窮地に陥っていた。

「この不始末、どう責任を取るおつもりか」

静かな。しかし怒りを湛えた言葉が放たれる。放ったのはテーブルに肘をつき、口元で手を組んだマクギリス。彼にしては珍しく、というかセブンスターズの前で始めて怒りを露わにした様子であった。

火星にて発掘されたMAハシユマル。その確認と、状況が許せば解体し回収することを目的としていたマクギリスの思惑を妨害し、あまつさえハシユマルの覚醒を促し危うく火星を滅ぼしかけた。言い逃れの出来ぬ大失態であるとマクギリスは詰め寄っていたのだ。

その怒気に気圧されるイオク。しかしなけなしのプライドが、ぎこちなくも反論を産み出す。

「それは！ 貴公が七星勲章を得んがための我欲から生じた物で……」

はん、と鼻で嗤う気配。イオクの言葉を叩き斬るように、マクギリスは言う。

「そんなもの』に目が眩んだのは貴公ではないのか？ この時代に置いて七星勲章などどれほどに意味があるものか。厄祭戦時代の遺構など、今を生きる人間には無為に過ぎる。ましてや被害を被った民草に対して何の慰めにもならない代物でありましょう」

その言葉に、ラストルは密かに眉を顰めたが、気付いていないのか気付いていてあえて無視しているのか、マクギリスは一瞥もくれずに話を続けた。

「その結果が『これ』だ。貴公の行動はただ火星を窮地に追いやっただけではない。『アーヴラウが後押しし圏外圏の企業が参入して開発された採掘施設の壊滅』。これによりアーヴラウとの関係は悪化、加えて関連企業から損害賠償を要求されている。こちらに誠意が見られ

ない場合には、訴訟も辞さないとかかなり強硬な姿勢だ。さらにはほかの経済圏も同調する動きを見せているところがある。GHの信用は揺るぎ権威は再び地に落ちてしまった。これはもはやただの失態ではすまされない事態であると理解されよ」

ぐう、と言葉に詰まるイオク。無駄に部下を失い同僚の足を引つ張った。彼のやったことを簡単に言えばそのようになる。しかしイオクからしてみれば、マクギリスの奸計を打ち破らんがため戦いを挑み、しかしMAをけしかけるなどと言う卑劣な手段にて部下を失い撤退せざるを得なかった、と言う風に受け取られていた。状況を理解していないと言うよりは自分の都合の良いように曲解しているのだから。

MAの力を目の当たりにし、部下を目の前で失った彼は、我知らずのうちにその憤りをマクギリスに向けていた。己が無能で無力だったからという事実から目を背けたかったということもあるし、本来憎悪をぶつけるべき相手であるMAは『すでに討伐された後』であり拳の振り下ろし先がないということもある。しかしこれは完全に八つ当たりであった。そのことをイオク自身がどこまで自覚しているかは分からないが、本能的には察していたようで、ゆえに言葉に詰まる。しかしそれでも行き場のない憤りは、彼に激情のままの言葉を放たせようとする。それを制したのは。

「——今回の責任は、クジャン公を派遣したこの私にある。改めて謝罪しよう」

そう言つて頭を下げたのはラスタル。その行動にイオクは面食らうどころではなかった。

「ラスタ……エリオン公!?!」

狼狽えるイオクを尻目に、ラスタルは淡々と言葉を紡いだ。

「加えて、今回の件で生じた被害、損失に対しては、エリオン家とクジャン家の固有資産から賠償する事にしよう」

「エリオン公……それは――」

セブンスターズの各家は、それぞれが資産家である。下手をすれば小国の国家予算に匹敵するほどのものであるが、それでも今回の件で

賠償するとなれば相当の痛手になるであろう。それが分かっている
即断できるというのは大した胆力であるが。

「過ちを犯したのであれば、責任を取らねばならない。それが上に立
つ者の責務だ。良いなクジヤン公」

「くっ……承知致しました」

ラストルに諫められ、口惜しげに矛を収めるイオク。恐らくは状況
を理解したからではなくラストルに言われたから大人しくした、と
言った程度であろうとマクギリスは判断する。ラストルはイオクを
庇うと同時に少しでも自分達が有利な方向へと話を持つていくつも
りだろう。そういったやりとりに関しては、まだ自分が及ぶところで
はない強敵だと感じていた。

（やれやれ、『あの戦い』とは別の意味で苦戦しそうだ）

苦虫を噛み潰したような心境で、マクギリスは火星での戦いを思い
返していた。

天空から降り立った機体。その姿を確認したハシユマルは、戸惑つ
たかのように動きをぎこちなくした。

「へえ、周波数は細工してるんだが……分かるのか、こいつの心臓がて
めえと同じ物だったのが」

にやりと嗤うランディ。そんな好機を彼が見逃すはずがない。

「金髪、頭執れ！ 俺と三日月でぶっ叩く！」

「承知。我等2人とガンダムフレーム以外は下がって援護に集中！
奴をここから逃すな！」

マクギリスが指示を飛ばす中、黒と白の機体が電光のように駆け
る。

自身と同じMAのリアクターを感知し多少の混乱を見せていたハ
シユマルだが、流石に攻撃を受けるとなれば反応する。くか、とビー

ム砲を展開すると同時にテイルブレードを奔らせた。

「こういう鞭系の武器ってのはなァ！」

どん、と大気を割ってラースグリーズが加速。蛇のようになねるテイルブレードに向かって自ら飛び込み――

「らァッ！」

先端のブレード部をかわすと同時にワイヤーを盾で殴りつけた。

地面に叩き付けられるテイルブレード。勿論すぐに復帰するが、その間にバルバトスの接近を許す。

「ふっ！」

バルバトスがシースメイスを振るい、その本体（鞘）が真っ直ぐにハシユマルへと跳ぶ。テイルブレードはラースグリーズへの対処に回されており、それを防ぐ手段はない――

訳ではなかった。

飛び出してきたプルーマー。大分数を減らしたがまだ本体の護衛をするには十分な数が残っている。シースメイスに打ち砕かれながらも1体がそれを止め、さらに次々とバルバトスに群がろうとする。

三日月は焦らず動じず、それに応えるバルバトスは抜刀した太刀を担いで、まるで階段を上るかのように飛びかかってきたプルーマーを足場にして跳躍。ハシユマルの直上に出る。

一閃。迷い無き一撃は、確かにハシユマルの頭部を捉えた。

しかし。

「!? なんだ!?!」

間違いなく太刀はハシユマルの頭部に叩き込まれた。だが装甲を断ち割るはずのそれは、凹みを作っただけに留まる。

確かにMAの装甲はMSに比べても頑強な物であるが、三日月の技量であれば切り裂けるはずであった。しかし通じなかったその原因を、当の三日月は察する。

（阿頼耶識！ 打ち込みのタイミングがちよっとだけ『ずれる』のか！）

バルバトスに施されたマニュアルセッティングは、ランディのものをベースに三日月に会わせてある。当然ながらその反応はやたらと

敏感で、使いこなせさえすれば阿頼耶識システムを接続したのと同様の反応速度をたたき出せる。

だが『感覚』はそうはいかない。指先まで一体化したかと思わせるような神経接続がないのだ。勿論機体の制御システムは三日月のモーションパターンを記録しており、動きそのものは阿頼耶識を接続していたときと全く同じ物になる。しかしそれは、『操作してからの反応』だ。どうしても、ほんの僅かながら遅れが生じてしまう。かてて加えてリミッターを解除された高出力が、機体に『余計な力』を生じさせる。

元々三日月のMSすら両断する剣技は、卵を縦に積み重ねるような繊細さの上に成り立っているものだ。阿頼耶識を介しない僅かな『ずれ』、機体の出力差。それは『三日月の剣技を成り立たせない』！
「くっ！」

刹那。打ち込んで1秒も経たないその間に、三日月はそれを理解して後ろに跳んだ。

途端にビームが、テイルブレードが、プルーマーが、一齐にバルバトスへと殺到する。その全てを切り裂き切り払い、バルバトスは地面に降り立つ。

「三日月！」

「ミカア！」

ランディとオルガが同時に声を上げる。

やれるのか、いや、『斬れるのか』と。

応える声はいつも通りで、しかし自信に満ちて。

「いけるよ。一度で斬れないのなら、何度でもやるだけさ」

その答えに漢（おとこ）たちは揃って不敵に笑んだ。

真っ先に吠えたのはマクギリス。

「三日月・オーガス、ランディール先輩！ 2人はそのまま畳み掛ける！ 大口径の砲を持つ者は奴の予測行動範囲にありつただけの弾丸を叩き込め！ 2人なら何とかする！」

「応！ まかせろ！ ちよいと遅れた分サービスだ！」

バルバトスに遅れて崖の上に現れた昭弘のグシオンが、両手に持つ

300mm滑空砲を容赦なくハシユマルの周囲に叩き込む。それに追従して上空のスタークグレイズ部隊、大口径の砲を備えた鉄華団のMS部隊が次々と攻撃を加える。それはハシユマルに大したダメージを与える事はなかったが、その動きを阻害し行動範囲を狭めた。

そして弾雨の狭間を縫って2機のMSが駆ける。

「ははー、こりゃ派手でいいー！」

獣が牙を剥くような笑みを浮かべて、ランディは高速でハシユマルへと肉薄し――

「おらよー！」

すり抜けざま、ほぼ0距離でショットガンを撃ち放つ。狙いは足下。大口径のクラスター散弾は、大雑把な狙いでもその役割を果たす。

蹴りにて迎撃を行おうとしていたハシユマルはその一撃で僅かにバランスを崩した。MAのリアクターを積んでいるラズグリーズに対しては反応が鈍るという理由もあるが、それ以前に動きが早い。結果対応が僅かに遅れ、隙が生じる。

そこにバルバトスが飛び込んだ。弾雨の狭間をすり抜け、襲ってくるテイルブレードをかいくぐり、ハシユマルと接敵。

一撃。快音ではなく鈍く重い音。装甲はやはり切り裂けない。しかし先程よりも深く歪んだ。

「今度は『早い』、か！」

反撃を受ける前に後退。一撃離脱、それを行いながら三日月は機体との齟齬を修正しようと試みていた。

「ふ、あの調子なら、後数回打ち込めば有効打が生じる、か！」

戦況を見ながらマクギリスは双剣を振るいプルーマーを蹴散らす。

「こちらは通行止めだ。煉獄（よそ）に向かうがいい」

多少の茶目つ気を発揮しつつ、石動が轟剣を振るう。

徐々にハシユマルは追い込まれていく。この様子なら、程なく討ち取れる。誰もがそう感じていた。

その精神的な隙を突いたかのように、乱入者が現れる。

「このタイミングなら！ 貫った！」

ジュリエッタのレギンレイズである。彼女はレーザー有効範囲のぎりぎりから、スラストを全力で吹かし弾道軌道にてハシユマルの頭上から襲いかかったのだ。

それが出来る技量と判断力は確かに並ではない。事実彼女はハシユマルの肩口に飛び込み、その首元に両手のロッドを逆手で叩き込む芸当をやつてのけた。

悲鳴のような声を上げるハシユマル。高出力の電磁ロッドを長時間喰らえばさしもののMAも耐えられるかどうか。そして位置的にテイルブレードは使えないし、プルーマーは数を減らした上周りの戦力に押さえ込まれている。戦果の横取りであろうが、汚名を返上することはできると、ジュリエッタは勝利を掴まんと足掻く。

が、状況はさらなる変化を見せる。

ぎゅい、と咆吼したハシユマルは大きく仰け反つて――

そのまま自ら後転し、『頭から地面に叩き付けた』。

セルフバックドロップ。知るものがいればそう表現していただろう行動。何もない状況であれば単なる自爆に過ぎなかったが。

「く、ぐあー!」

首元に取り付いていたジュリエッタからすれば堪ったものではない。強かに地面に打ち付けられた衝撃で、肺の中の空気が一気に吐き出される。なんとかかがみつき振り落とされることはなかったが、それでは終わらない。

間髪入れず、慣性制御を全力で使つて今度は前転するハシユマル。再び頭から地面に叩き込まれた衝撃は、一瞬ジュリエッタの意識を飛ばす。

再びハシユマルが身を起こすと同時にレギンレイズが首元から剥離した。突然のことに一瞬啞然とするランディたちであったが。

「ちいっ! 余計な真似を!」

即座に攻撃を再開しようとする。ジュリエッタの機体には構ってられない。救助などしている余裕はないしそんな義理もない。死んだら自業自得と割り切った。

そのジュリエッタの機体を、『ハシユマルが蹴り飛ばす』。

糸の切れた人形のように吹っ飛ぶ先は、バルバトスの真正面。
「邪魔」

苛立ちを隠そうとしない声で吐き捨て、飛来したレギンレイズを払いのける三日月。

だがその背後には、レギンレイズを隠れ蓑にするようにテイルブレードが迫っていた。

この位置では絶対に回避できない。

「ミカあー！」

戦況をモニターしていたオルガの声が飛ぶ。

バルバトスは吹き飛ばされ、背面の岩壁に叩き付けられた。

「申し訳ございませんでした。何の役にも立てず……」

頭に包帯を巻いたジュリエッタが、沈痛な表情でラストルに頭を下げる。口惜しさがにじみ出しているかのようだ。

ラストルはその様子に対し、密かに溜息を吐いた。

「少し功を焦り過ぎたな。ヴィダールが撤退を決めた時点で従っておくべきだった」

「返す言葉もございません」

「まあいい、お前が無事だったのは不幸中の幸いだ。今回のことで責任を感じているというのであれば、次の働きで汚名を返上してみせろ」

「はっー！」

「……ついだというわけではないが、損壊した機体の代わりを用意させた。お前が具申していた『あの機体』だ」

ラストルの言葉で、ジュリエッタは靦面に表情を変える。

「ラストル様！ では！」

「現状において戦力の強化は必至となる。……使いこなして見せろ」

「了解致しました！」

ジュリエッタの退室後、ラスタルは深々と息を吐きながら椅子に身を沈める。

「イオクを甘やかしすぎたか。自業自得であるが」

イオクがものを考えずラスタルへ盲目的に従っているのは、本人の気質もあるが、『ラスタルがそのように誘導した』という面も確かにあった。

同格であるセブンスターズの1席、それを思うとおりに動かせることがどれほどの影響力を及ぼすか。当然ながらラスタルは理解している。クジャン家に恩を売りつけイオクに目をかけて、その目論見は概ね叶った。『何事もなければ』ラスタルの立場は盤石の物となったであろう。

だがマクギリスという乱世の姦雄の存在が、そして目まぐるしく動く状況が、それを揺るがしている。ここにいたってイオクの存在は逆に足枷となりつつあるのかも知れなかった。

しかしイオクを切り捨てるという選択は取れない。情はある。それ以上にまだ『彼には利用価値がある』からだ。

イオクの人望、というよりはクジャン家の求心力は大きい。先代の尽力に寄るところであるが、アリアンロッドの何割かはクジャン家に付き従う者だ。無闇に切り捨てれば彼らの信奉を失い、勢力の弱体化を招くのは目に見えている。

悩ましいところである。加えてマクギリスはなかなかのやり手だ。内部はともかく、対外的には正しく『GHの模範とでも言うべき行動を取っている』。様々な勢力と協力関係を結び、秩序の維持に尽力を尽くしていた。それが『結果的にGHの弱体化を招く物』だとしてもお構いなしだ。火星支部の一部権限の委託など良い例であろう。

本気で平和と秩序のために、と言う人間では決してない。だがGHの権力を全て手中に収め頂点に立つという方向性でもなさそうだ。七星勲章を些末ごとのように切り捨てる有り様からそれは見て取れる。

未だに本懐が見えぬ不気味さ。ラスタルはそれをひしひしと感じ

取っていた。

「MAの事件で、その鱗片でも掴めれば良かったのだがな」

結局あれは、『火星に余計な力を与えてしまったと確認するだけのことだった』と、ラスタルは臍を噛む思いで記録映像を思い返す。

「調子こいてんじゃねえぞオラあ！」

ラーズグリーズがハシユマルを蹴倒す。バルバトスが一撃喰らったことに対して動揺の一つもない。

が、全員が全員そう言うわけにはいかなかった。皆の不安を感じ取ったか、マクギリスが声を張り上げる。

「総員現状維持！ 三日月・オーガス！ 無事だな！」

その問いに答えが返る。

「なんとか。悪い、油断した」

壁面より身を起こすバルバトス。しかしその姿は。

「ちっ、右肩に喰らったか」

肩の装甲が丸ごと損失し、ほとんど根本からちぎれかかった右腕。テイルブレードを回避できないと判断した三日月は、とっさに機体を捻り肩口からテイルブレードにぶつかったのだ。これより致命傷は避けられたが、思った以上のダメージを受けてしまった。

「右腕をパージ。一旦引いた方がよさそうなんだけど、なっ！」

右腕を切り離れた途端、散々ラーズグリーズに打ち込まれ体勢を崩しながらもハシユマルがビームを放ちテイルブレードを打ち込んでくる。どうやらダメージを受けたバルバトスから先に始末しようとしているようだ。

閃光と刃をかいくぐりながら、三日月は苛立ったのか眉を寄せる。

「これじゃ背中を向けられないか。太刀も落つこととしたし、素手で何とかするしかないかな」

流星にこの状況で土煙に紛れた太刀を捜し出している余裕はない。三日月はさらりと命を張る判断を下す。と、そこで。

「三日月・オーガス！ 使え！」

石動のヘルムヴィーゲがバスターソードの柄尻に備えていたメイスを切り離し、剣をバルバトスに向かって投げる。無手で迎え撃たせるよりはという判断であった。

空中でそれを受けとった三日月は、にっと軽く笑む。

「さんきゅ、借りるよ」

先程よりもはるかに重い得物、片腕を失ったことにより大幅に崩れたバランス。それらの不利をリミッターの外れた大出力に物を言わせ強引にねじ伏せて、疾風と化したバルバトスはまたしても一撃を食らわせる。

ハシユマルは大きく傾ぎたたらを踏むが、太刀を使っていたときよりもダメージは少ないように見える。

「片腕じゃ打ち込みの精度が落ちる。……ならこうだ」

三日月の手がコンソールの上を走る。背中に折りたたまれていた右側のサブアームが展開、前方に回って剣を掴んだ。

多少不恰好ではあるが、片腕よりはマシだ。そして三日月にとっては『それで十分』だ。

一息。そして疾駆。幾度とない焼き直しのような一撃が打ち込まれ、再びハシユマルがよろける。まだだ、まだ『届かない』。苛つきも焦りもなく、ただその事実だけを確認して三日月が後退する。

その穴を埋めるように死の女神が舞う。

「おぢさんとも遊んでくれよ、なっ！」

真正面から飛び込み——『突然軌道が垂直上昇へと変化する』。

イナーシャーコントローラーによる慣性制御。何も無い虚空を『蹴りつけ』常識外の軌道偏向を産む。ハシユマルの頭上へと躍り出たラーズグリーズは、旋回しながらショットガンを破棄し、盾に仕込まれた刃広剣を引き抜いた。

落雷のような一撃が強かにハシユマルの頭部に叩き込まれる。嘴のような先端が大きくひしゃげ、ビーム砲が歪んだ。

次々と打ち込みは繰り返される。追い込まれていくハシユマルだが、しかし人類を滅亡の危機に追い込んだ一角は容易く討ち取られるをよしとしなかった。

体勢を崩しながらも両のバインダー、その根本が展開する。現れるのはマイクロウェーブ照射器。本来であればプルーマーの充電に使われるそれを、前面広範囲に向け最大出力で作動させた。

紫電が奔る。

「なにっ!？」

まるで空間そのものに圧力がかったこのような感覚を覚え、マクギリスは舌を打つ。

土煙の中に含まれるハーフメタル。マイクロウェーブを受けたそれはチャフのような効果を発すると同時にエイハブウェーブに干渉する力場を形成する。その影響でMSの機能が若干低下したのだ。

空間に放電現象が起きる中、マクギリスは散開し体勢を整えるよう指示しようとした。

その時。

「待たせたな！ 四代目流星号只今見参、つてな！」

「シノさんー！」

溪谷出口付近で展開している防衛線から飛び出したのは、ピンクに塗り上げられたMS。四代目流星号こと『ガンダム・フラウロス』。それを駆るのはシノだったが。

「動かしながら調整とか、無茶を言うんだから」

「はは、すまねえな。あとでなんかおごってやつから勘弁してくれ」

シノの膝の上。横抱きになるような形で座しているのはヤマギである。採掘場から発掘された後、失われていたコクピットブロックをMWの物で補い急いで機体を修復したが、阿頼耶識なしでの機体の調整に手間取り、結局は調整しながら無理矢理出撃したのだ。

この状況で出来ることなどそう多くはないが、『一撃喰らわせるだけ』なら十分な能力がフラウロスにはあった。

『例の機能』を使う。フォロー頼むぜ」

「子供扱いしないでよ。……んもう」

がしがし頭を撫でてくるシノの手を払いのけるヤマギの頬がちよつとだけ赤く染まっていたがそれはそれとして、戦場が視認できる位置までたどり着いたフラウロスは――

がきんと下半身が反転を始める。両腕のガントレットアーマーがスライドし、獣の爪がごときクローユニットが展開して大地に食い込む。

バックパックが頭部を覆えば、瞳のようなノーズアームも相まって四つ足の獣のようにも見える姿となった。砲撃形態への変形。高出力の大口徑レールガンを運用するために持たされた機能だ。

両肩のレールガン。その基部にカートリッジを兼ねた動力ユニットが接続される。装填されているのは条約禁止すれすれの高硬度レアアロイ弾頭だ。

「誤差修正、出力安定。バレルの電磁加圧正常値。いつでもいけるよシノ」

機体に接続されたタブレットの画面を叩きながら最終調整を行っていたヤマギが告げ、シノは頷いた。

「んじゃ、一発ぶちかますぜエー！」

一呼吸。そしてそつと引き金は引かれた。

轟音。一陣の閃光は、吸い込まれるようにハシユマルの肩口へと叩き込まれた。

派手な破砕音と共に左のマイクロウェーブ照射器が粉碎され、ハシユマルは大きく後方へと傾ぐ。

マイクロウェーブの効果は減じ体勢も崩した。しかしハシユマルに諦めるという思考はプログラムされていない。周囲に群がる敵を排除するために、テイルブレードを奔らせるが。

「もうそいつは読めてんだよオー！」

ラズグリーズが上からテイルブレード本体を殴りつけ地面にめり込ませる。それを尻目にバルバトスが駆けた。

剣を左肩に担ぎ、一息。これまで幾度と無く行った打ち込みで、『そろそろコツが掴めた』。

(出力を上げるんじゃない、絞るんだ)

力まずに跳躍。

(速くなく、遅くなく。剣の行きたい方向に合わせて――)

流れるように――

(振り抜く)

一閃。

ぎん、という驚くほど小さな音が響き、剣を振るったバルバトスはハシユマルの背後に抜けた。

途端、時間が停止したかのように動きを止めるハシユマル。

ずるり、と頭部と左翼を含めた機体上部が『ずれ』――

蒸気のような物が噴き出すと同時に、参戦していたMS全機のセンサーが一斉に警告音を響かせた。

「エイハブ粒子の異常発生!? これは……」

マクギリスが驚愕の声を上げると同時にハシユマルのリアクターが緊急停止。蒸気――噴き出したエイハブ粒子の残滓を纏わせながら、両断された機体がどう、と地面に倒れ込む。

寸時の静寂の中、ランディが呆れたと言った様子で乾いた笑い声を上げる。

「はは……なんてこつたい。三日月のヤツ、外殻とはいえ『エイハブリアクターを斬りやがった』」

その言葉の意味を理解した者は少数だったが、戦いが終結したことは誰の目にも明らかであった。

一瞬の後、どつと歓声が上がる。天地をひっくり返したかのような大騒ぎの中、いつの間にかジュリエッタの機体が姿を消したことに、ほとんどの者が気付かなかった。

「……以上が今回の顛末になります」

歳星。屋敷の一室で、オルガはマクマードに事件のあらましを報告

していた。

話を聞き終え、マクマードは鼻を鳴らす。

「それで、今回倒した機体が『最後の1機とは限らねえ』ってのは本当か？」

「あくまでその可能性がある、っていう程度の話ですが、可能性は0じゃないとファリド准将は判断しているようです。デブリ帯で見つかった残骸の事もありますし、与太話とは言い切れないかと」

「ふん、こつちへ准将から呈示された資料にも警告があつたな。見つけても完全に死んでる場合以外は無闇に手を出すなど。……で、どうよ。奴は信用できそうなのか？」

その言葉にオルガは一瞬言いよどんだが、意を決して言葉を放つ。「決して信用できるとは言い切れません。ですがあの男は『本気で命を賭けて火星のために戦った』。無論打算って物はあるでしょうが、同時にかなりの覚悟を持っているものと感じます。……力を貸すだけの価値はあるんじゃないかと」

「奴の依頼、本気で受ける気になつたか」

「どのみちアリアンロッド、いえGHをこのままにしておくわけにはいきません。ここは乗って勝負を賭けるべきだと俺は思います。……その上で、親父にはこれを預かって貰いたいんです」

オルガが恭しく差し出したのは、桐の小箱。それを受け取ったマクマードが開いて中を確認する。

白磁の杯。それはオルガと親子の契りを交わした杯だ。

「この勝負負けるつもりは毛頭ありませんが、勝てるという確証もありません。もしも俺達がヘマを打ってテイワズに類が及びそうになつたときには、その杯を割って下さい」

それはつまりマクマードとの、テイワズとの絶縁を意味する。もしもの時には自分達をスケープゴートにしてテイワズの延命を計ってくれと、オルガはそう言っているのだ。

ふん、と鼻が鳴る。顔を上げたオルガの直近にマクマードは立っていた。

静かな、だが深海のような重圧がこもった視線。気圧されそうにな

りながらも、オルガは腹に力を込めてその瞳を真つ向から見つめ返す。

ややあって。

「……生意気な面になりやがった」

ふ、とマクマードが力を抜く。その表情は悪戯な子供を見守るようなものであった。

「いいだろう、こいつは預かっておく。精々割らせないように気張れよ？」

「……はいっ！」

オルガは深々と頭を下げる。

そう言ったやりとりの後、退室したオルガを待っていたのは名瀬であった。

「どうだ、親父は怖かっただろう？」

「ええ、MAなんぞよりはよほど肝が冷えました」

くく、と名瀬は笑ってから、不意に真剣な表情となる。

「GHとの戦いに、タービンズもテイワズも直接的な力にはなれねえ。お前たちとマクギリスたちだけで勝ち取らなければならない戦いだ。下手をしたら……『俺がお前たちを始末しなければならなくなるかも』だ。そうはさせないでくれよ？」

「そうならないように全力を尽くします。……ですがもしもの時は、面倒でしょうが介錯をお願いします」

「気が早ええよ。……団員たちは悪いようにはしねえ。後のことは考えずに思いつきりやんな」

覚悟は決まった。道は定められた。

しかしそれに『余計な横槍』が入るとは、男たちは予想もしていなかった。

クジヤン家の私邸にて、イオクは俯き唇を噛みしめていた。

謹慎、とまでは行かないが失策を反省し自重しろとラストルに言い含められたのである。その際去り際に言われた言葉が頭から離れない。

「これ以上私を失望させてくれるなよ」

期待に応えられなかった。そのことで己を不甲斐なく思うと同時に怒りがこみ上げてくる。

「マクギリス・ファリド……鉄華団！ やつらのせいだ……っ！」

まごうことなき逆恨みであった。もつとも本人は正当な怒りだと信じて疑っていない。己が正義であり、立ちはだかる者は悪。そんな二元的な物の見方しかできないイオクの了見は狭いものだ。『そう考えるように誘導されていた』とはいえ、人の上に立つ者としての適性に欠けることおびただしい。

彼はただ己の憤りに任せるまま、その恨みを晴らさんとする。

「ジャスレイ・ドノミコルスに連絡を取れ！」

正しき怒りの元に、悪を討つ。本人にとってはそのような行動であつただろうが――

どう考えても虎の尻尾を踏みつけに行く愚行でしかなかった。

※今回のえぬじい

「ちよ、なかなか火が消えな……あつっ！ めっさあつっ！」

→みんなが戦ってる間ずっとプラントの火消しをしていたハツシュ君。

37・ここから先を、どうするって？

圏外圏の一角。いつものごとく手下を集め会合を開いているジャスレイは妙に機嫌が良かった。

「ようやっど運が向いてきたってこった」

取り巻きに状況を説明したジャスレイが杯を傾ける。話を聞いた取り巻きたちは、不安げに顔を見合わせた。

「その、大丈夫なんですかいその話。下手をすりや……」

「前にも言ったが、鉄華団は良くて俺が駄目じゃ話が通らねえだろ。親父も文句は言えねえさ」

くく、と笑いながら「それにしても」とジャスレイは続ける。

「馬鹿な連中だぜ。GHの最大戦力、艦艇だけでも半数を牛耳るアリアンロッドを相手取るうだと？ まともにもやり合えるわけがねえし、裏工作もやれる相手だ。『今回』みてえにな」

ジャスレイは勝利を確信していた。確実に邪魔者である名瀬を排除し鉄華団を潰せると。

「勝ち馬に乗るのが賢いやり方よ。ガキどもとはひと味違うって所を見せてやらあ」

一気に干されたロックグラスが、だん、と力強くテーブルに叩き付けられた。

某所にあるGH研究施設。撃破されたハシユマルの残骸はそこに運び込まれていた。

解体しつつ調査を行っているその様子を眼下に納めながら、マクギリスは傍らの石動に語りかける。

「目新しい情報はなかったか」

「システム構成、プロトコルはデータバンクに記録されていた物と変化無し。予定通りに事は進みそうです」

戦闘終了の後、ハシユマルの使えそうな武装、部品などは報酬の名目で鉄華団へと密かに譲渡されていた。これは『ラスタル側に余計な情報を与えない』という理由もある。

この研究施設を含む一連の『暗部』は、マクギリスが取り仕切っているわけではない。セブンスターズ共同で運営されている物だ。当然ながらここでの研究成果は『ラスタルも閲覧できる』。中枢とリアクターを含む『構造がすでに分かっている部分のみ』を持ち込んだのは、情報を制限し彼らに解析させないためであった。

まあ持ち込んだ部分だけでも『信じられないような情報』はあるわけだが。

「それにしても見事な物です。まさかリアクターを外殻の一部とはいえ破壊するなどとは」

珍しく表情に驚きを乗せて石動が呟く。理論上物理的には破壊できないとされるエイハブリアクターに、一部だけとはいえ損傷を与えた。俄には信じがたいことである。だがマクギリスはその事実を『ありえることだ』と判断していた。

「ガンダムフレーム、いや『ツインリアクター機のコンセプト』から考えれば不可能ではないよ」

ツインリアクターとは、単にMAの大出力に対抗するため開発された物ではない。二つのリアクターを共振させることによつて発生する特殊なエイハブウェーブ、リミッターを外された状態で放たれるそれは、『他者のナノラミネート装甲とエイハブリアクター自体の防御力を低下させる効果がある』のだ。

エイハブリアクターが異常なまでに頑強なのは元々の素材がとてつもない強度を誇るという理由もあるが、自身が産み出すエイハブ粒子による重力偏向の効果で外部からの物理衝撃を緩和するからという理由がある。その効果を応用したのがナノラミネート装甲であり、それらを備えるMAは物理攻撃に対して絶大なる防御力を有するこ

ととなった。

これを打倒するために厄祭戦当時の技術者たちは研究を重ね、その結果『エイハブ粒子の効果をエイハブ粒子にて相殺する』手法を編み出した。それをもっとも効果的に運用するために開発したのがツインリアクターであり、そしてそれを阿頼耶識システムを効率的に運用するための人型機械、MSの原型と組み合わせ産み出されたのがガンダムフレームであった。

「MAに対して近接戦闘を仕掛け、自身が発するエイハブウェーブによってMAの、リアクターの防御力を低下させ、リアクターに直接作動不能に陥るほどのダメージを与える。それがガンダムフレームの初期のコンセプトだった。リアクターを一時的にでも止めてしまえばMAは作動停止に陥る。そうやって多くのMAが撃破された。ダインスレイブが開発されるまで近接戦闘主体の機体が多かったのはそういう理由さ」

まあだからといって、そう眩きながらマクギリスはくく、と笑う。「斬る、なんてことをやってのけた人間は当時でもいなかったのではないかな。アグニ力を含めて」

「理論上不可能ではないのと、実際やってのけるのは違いますからね。いやはや末恐ろしい」

「改めて敵に回したくないと思うよ彼らは。……それに、ふふ……ライズグリーズとは、流石に皮肉が効いている」

よほど愉快であったのか、ついにくすくすと笑い声を漏らすマクギリス。石動は肩をすくめた。

「あの人らしいと言えばらしいネーミングですな。計画を壊す者。グレイズなどと振って名付けるよりは、よほどストレートで分かりやすい」

二人はランデイが己の機体に付けた名に思いを馳せる。

古い北欧神話にて謳われた戦女神の一角。計画を壊す者を意味するそれにあやかってグレイズはネーミングされていた。その原典を名付けることよって、己が死の女神の本質だと主張しているのか。それとも原典の役目に従い計画を破壊してみせるといふ意気込みな

のか。

まあ実際は多分単なる揶揄と嫌味を込めてのネーミングでしかないだろうが、本人の思惑以上にその名には意味があるように感じられる。最低でもこの二人にとっては。

「その名にふさわしい舞台となるかね。我々のやろうとしていることは」

「相手がアリアンロッドですから。ふさわしいかはともかくあの人に満足して貰えるステージにはなるのでは、と」

石動は、我知らず微かな笑みを浮かべていた。

『細工は流々』、用意は調いつつあります」

アーヴラウ議会議事堂の一室にて、蒔苗 東護之介はとある報告を受けていた。

「なるほど。やはり武力衝突は避けられぬか。後は互いがどれだけ有利な環境を整えられるか、それが勝敗の鍵になるのう」

密かに持ち込まれたGH内部動向の情報。それを告げたのは。

「は、ラスタル派は状況を優位にするため、アーヴラウに対しても何らかのアクションを取る可能性があります。十分に注意して頂きたいと」

直立不動の姿勢のまま言うのは傭兵部隊ガルーダ隊長、タリズマンことブラウン。彼らは単にランディの顔見知りだから雇われたのではない。ネットの秘匿チャットなどを通じてマクギリスからの情報を伝えるという役割を依頼されていたのだ。

勿論彼らの本義ではない。そもこのような役目など不得手だとブラウン自身が思っている。しかし逆にそれが目くらましになると、敢えて頼み込まれたのであった。

「そうか。こちらもフェアリド准将の計画に呼応する用意はあるが……

大分計画は前倒しになりそうじゃな。そのあたり君はどう見る？」

「自分個人の意見を、ということでしょうか」

「うむ、プロの兵の考えを聞いておきたい」

「では私見となりますが……ラスタル派、フアリド准将双方の勢力にとって、MAの件が決定打となったのではないかと。偶発的な事件でありましたが、フアリド准将はMAをも打倒できるほどの武威を示したことになり、流れは自分達の方に来ていると感じているでしょう。対してラスタル派は信用を落とし、加えて経済的なダメージを被ることになった。これ以上時間をかければ数の優位をいつまで保つていられるかも分からない。早期の決着をと考えてもおかしくはありません」

ブラウンの言葉を聞いて考え込む蒔苗。GH内部抗争、その武力衝突は避けられないようだ。だがどうにも『引つかかる』。

(ラスタル・エリオンは分かる。あれは苛烈で己の前に立ちはだかる者には容赦をせぬ男だ。しかし……マクギリス・フアリド、さほど短絡的な人物ではなさそうなのだがな)

マクギリスはただ武力衝突のために準備しているだけでなく、自分達が優位を取るため様々な根回しをしていた。ブラウンを通じてアーヴラウに情報を流しているのもその一環だ。その気の回しようは細心の注意が払われており、誠意すら感じられる。

アーヴラウだけではない。彼は様々な勢力と接触し、最低でも敵対しないよう働きかけている。それだけのことが出来るのであれば――

『GHの上層部にも働きかけ、武力を伴わない改革を推し進めることも可能ではないのか？』

なぜ穏当な手段を取らず、武力衝突を誘発するのか。その目的が読めない。力を示し覇権を握る。そのような短絡的な発想であれば戦力だけを整えればいい。彼は潤沢な資金源を持っているとはいえ、それも無限ではない。人員だって限られている。各勢力に働きかけるだけでも相当の労力と負担がかかっているはずだ。己の優位を維持するだけにしては手が込みすぎている。

(分からぬが、こちらにとつても有益なのは事実。話に乗っても良いと思わせるくらいには勝ち目もある)

正体の分からぬ不気味さを飲み込んで、賭に出るだけの価値はあると蒔苗は腹を決めている。しかしただ乗せられるのは面白くない。

(ちと小細工をしたい所じやのう。……さて彼女は上手くやれるかどうか)

クリュセ市街の一角。高級マンションの自室にて、イアンナはアリアドネの通信を繋いでいた。

「久しぶりね。そちらの景気はどうかしら」

普段と違い随分と碎けた言葉遣い。通信向こうの相手はと言えば。

「ぼちぼち……と言いたるところだけれど、とても順調とは言えないわ。今立て直してでてんてこ舞いに行ったところ」

相手もまた気安い口調だ。声の様子からすると女性らしいが。

「でしようね、話はそれなりに耳にしているわ。……それで、『この間送ったデータ』が貴女の助けになれるかしら？」

「……意地の悪いことを言うのね。今の私に、危ない橋を渡れと？」

「そちらもGHとは一悶着あったらしいじゃない。このままだと定期航路取得の件、難しいんじゃない？」

暫しの沈黙。そして溜息が吐かれる。

「確かに交渉が遅々として進まないのは、『ザルムフォート家との件』が多少なりとも影響を及ぼしているからでしょうね。だからといって『盤をひっくり返すような真似』に、早々容易く荷担できる物でもないのよ」

「何も手を貸せと言っているのではないわ。ただ出来るだけ情報が欲しいの。賭けの勝率を上げるためにね。見返りと言ってはなんだけど、GH火星支部には伝手があるからそれなりに口添えすることは出

来ると思う。航路習得の手助けにならないかしら?」

再び沈黙。ややあつて通信向こうの女性は言葉を放った。

「……こちらで調べられるアリアンロッドの動向。出せるのはそれくらいしかないわ」

「十分。火星（こちら）からすれば信頼できる情報源は千金の価値だもの。期待させて貰うわよ」

その後、いくつかの取り決めを交わしイアンナは通信を切る。ふうと一呼吸の後、小さく笑みを浮かべる。

「さて、『種を蒔いてみた』わけだけど……芽吹かせるかしら、彼女は」
一方、火星より遙か彼方で通信を切った女性は、深くため息を吐いていた。

『友人』からもたらされた情報は、自分達にとって特效薬にも猛毒にもなりうる。静観しておくのが無難ではあるが……彼女の指摘したとおり、現在自分達の状況はあまりよろしくない。大幅な状況改善を目指すのであれば、彼女の話に乗ってみるのも手ではあるが……。

暫く考え込んでいた女性は、デスク上の内線電話機に手を伸ばす。
「ジャンマルコ顧問？　少し相談に乗って欲しいことがあるのですけれど……」

かつてイアンナの学友であった、現タントテンポ頭目「リアリナ・モルガトン」。彼女もまた激動の中に巻き込まれようとしていた。

さて、鉄華団はM A事件の解決からこつち、てんてこ舞いである。何しろ譲り受けた採掘場は完全に崩壊し、その立て直しにどれくらいの間と金額がかかるか分からない。幸いというか、集めた鉱山関係の技術者たちは残留し、一から鉱山を作り直すつもりで働かせてくれと申し出てきていた。ほかになかなか仕事も無く、鉄華団から離れてしまえば再就職の当ても少ないと考えてのことだろうが、オルガたち

にとつてはありがたいことだった。特に採掘場を担当していたユー・ジンは、五体投地せんばかりの感謝ぶりである。

しかしだからといって仕事が減ったわけでもない。採掘場再建に關してやらなければならぬのは現場のことだけではないし、その上でGH火星支部から委託される事業の準備も進めなければならなかった。これもすぐさまどうこうしろと言う物ではないが、今のうちから多くの根回しが必要になる仕事だ。採掘場再建の業務の傍ら、時間を作つたあちこち飛び回るオルガに休む暇など無い。

「……私が言うのもなんですから、働き過ぎじゃありません？」

「みんなそう言うんだよ。それでそう言うことを言う連中に限つてどいつもこいつも忙しいと来てる」

制作した記事をチェックして貰うためにオルガの元を訪れたアヤは、疲労困憊と言つた様子の彼に対して思わず一言物申した。オルガの返事に眉を顰めるが、まあ確かに自分も相当忙しい。次々と起こる事件を記事に纏め、方々に配信する作業でまともに寝る暇もないほどだ。流石にMAに關係することはまだマクギリスのGOサインが出ていないため表沙汰にすることは出来ないが、現在の火星や鉄華団の状況を記事にするだけでも膨大な量となる。(そんな中でも人前——特にオルガの前に出るときはしっかりと身なりを整えるところは流石といふかなんというか)

お互い様だと笑うオルガは、疲労の割りには随分と余裕がありそうだ。どういう事だろうと思つたアヤが問うてみれば。

「委託業務の件だが、ランディ教官を通じて『信用できる人材』を集められそうだ。全部丸投げつてわけにはいかねえだろうが、ある程度は任せられる目処がつく。根回し關係の話も大分纏まってきたし、ようやく一息付けるつてわけさ」

まあすぐにまた忙しくなるんだけどなど、オルガは言う。アヤの表情が引き締まった。

「フェアリド准将の依頼、ですか」

「ああ、あれに關しちゃどれだけ準備しても用意しすぎてこたあねえ。嘗めてかかれる相手じゃねえからな。……タービンスの人たち

も、引き上げることだしな」

そう言つて、オルガは天を見上げた。

「あたし完全に忘れ去られてない!? 出番超遅くない!?!」

突然柳眉を逆立てて言いつのであるエーコに対し、ランディはきよとんとした表情を見せた。

「お前さんずつと鉄華団で整備の指導したりなんやかんやしてたじゃないか。何言つてんだ」

「そうだけどきそうだけどきあ」

なんか妙なストレスでも溜まっているのか。まあ女には色々あるしなあとランディは生暖かい視線を向ける。まあそれはいいとして。

「しかし思った以上のダメージだなこりや。今のこいつにやツインリアクターのフルドライブは相当の負荷になるらしい」

ランディたちの前には、装甲の大半を外されたバルバトスの姿がある。先のMA戦にて右腕を丸ごと失うほどの損傷を受けたバルバトスだが、問題はそれだけではなかった。老朽化したフレーム自体が、リアクターの全力稼働の影響で各部にガタが生じ始めていたのだ。

もちろんちゃんとした整備を受け続けていればそんなことはなかったのだろうが、厄祭戦からこつち火星の砂漠に放りっぱなしだったバルバトスは特に老朽化が激しく、歳星の技術スタッフの力を持つてしても整備に限度があった。さらに言えば、GHを除けば現在最高峰の技術者が集う歳星のスタッフからしても、リミッターを外した負荷がこれほどの物とは予測の範疇になかったらしい。

「僕らのミスかなあこれは。ヴィントがここまでぼろぼろになる戦闘なんて想定していなかったからねえ」

「……ああ、バルバトスのことか」

「誰もその名前呼んでなかったから分かんないって技術長。それはそ

れとして、これフレーム造り直すところからやらないとダメなんじゃない？」

頭を掻きながら機体から降りてくる技術長に言うエーコ。それに対して技術長はにやりと笑った。

「もちろんさ。それにただ直すだけじゃない、リアクターのフルドライブに耐えるようにしてみせるよ。幸いにして『原型は出来てる』」

その言葉に、ランディは口元を歪める。

「エウロパフレーム……いや、『ラーズグリーズの設計を元にする気』だな？」

「イエスその通り！ 元々エウロパフレームは僕らでガンダムフレームを再現しようとした設計だ。相性は悪くない。その上で、リアクターのフルドライブに対応できるよう色々『ぶっこんで』みよう。面白いことになるよこれは」

「そいつは楽しみだ。……あとは」

「ああ、『阿頼耶識がどうなるか』だね」

二人が向ける視線の先には――

「ふむ、このデータの出所に関しては聞かん。じゃがこいつは今までの阿頼耶識の常識を覆すところではないことは理解していような？」

下手をすれば余計な争乱を産むかも知れぬぞ？」

「その上で先生に預けるといいうのが、団長の意向です。むしろ先生以外にこのデータを有効利用できる人間はいないでしょう」

渡されたメモリーを弄ぶキシワダに対して、ビスケットはすまして応えた。

言いよるわと、キシワダは皮肉めいた笑みを浮かべる。

「まあええわい。取り敢えずは『ガンダムフレームの問題』を解決すればいいんじゃない？ それならある程度の目処はついたわ」

「は!? 本当ですかそれは!？」

まさかこれほどあっさりと言断されるとは思わなかったビスケットは、素っ頓狂な声を上げる。キシワダはすぴしと人差し指を立てて見せた。

「そもそもMSと阿頼耶識を接続した状態でパイロットに負荷がかかるのはなぜかと言うところからじゃな。……なんのことはない、『パーツが足らなかった』のよ」

「パーツ？」

「これまで阿頼耶識搭載機を調べ、さらにこのデータと照らし合わせて分かったことじゃが、本来ガンダムフレームのコクピットはセーフティとリミッターを兼ねた制御システムが備えられていたはずなんじゃ。それが現在無いのはまあ当然と言えば当然で、現在ガンダムフレームで使われておるコクピットブロックは、そのほとんどがMWなどを流用したもので『本来のコクピットブロックではない』。パイロットの安全を守るための機構がすぽんと抜けておるわけじゃ」

「じゃあなんで本来のコクピットじゃないのに阿頼耶識を接続できるんですか？ それにMWとかガンダムフレーム以外の機体も動かせるのは」

「そりゃMSの原型であるガンダムフレームの根幹プログラムが『阿頼耶識接続を前提としておる』からよ。その根幹プログラムは後発の機体やMWなどにも流用されておる。じゃからダイレクトな接続も可能だったと言うわけじゃ」

「要するに最初からガンダムフレームは阿頼耶識システムを搭載していたんですか……」

「GHがそれをひた隠しにし、阿頼耶識を禁忌の技術とした理由は分からん。いずれにせよ現在流通しておる阿頼耶識システムは本来の物のデッドコピーで安全性など二の次じゃ。じゃがこのデータと今まで儂が蓄積した技術があれば、本来の阿頼耶識に限りなく近いシステムを構築することが出来る」

そこまで語って、キシワダは傍らに向かってにやりと笑いを向けた。

「そういうわけできりきり働いてくれい」

「働きますけど、働きますけどさあ……俺ホントこんなんで出世できないのかな……」

ぶつくさ言いながらキーボードを叩いているのは、キシワダに連れてこられたザック。ガンダムフレームの不調、その原因をいち早く見抜いた感性。そして普段の様子からは想像できないような高い技術者としての能力。そのあたりに目を付けられ助手として抜擢されたのだが、ほぼ休む間もなく新たなシステムの構築に従事させられていた。

そんな彼の様子を見て、ビスケットはまあまあと宥める。

「働いた分ちやんとボーナスは出るから。それにこれが上手くいったら阿頼耶識の調整関係を任せる班長にするって話も出てるし」

「……それ、出世じゃなくて仕事押しつけられてるって言わねっすか？」

「ダイジョウブダヨーシュツセダヨーホントダヨー」

「ぐるぐる目で迫らんでください!?!」

「まあそれは冗談として」

ホントに冗談だよな、などと戦々恐々とするザックを尻目に、ビスケットは言う。

「ともかくここは任せますね。俺はワンさんの所に行つて物資の買い付けと、サカリビの改修について話を付けてきます。……三日月も退屈だろうけど我慢してくれよ?」

そう言つて振り向けば、部屋の片隅でもきゅもきゅとソイバーを口にしていた三日月が頷く。

「余計な心配なく戦えるようになるんなら、文句は言わないよ。ちやんと終わるまで待たせ」

「それならOK……ってあれ? ハツシユは?」

三日月の付き人としてついてきていた少年の姿が見あたらないことに気づき、ビスケットは三日月に問う。それに応える三日月は、小首を傾げた。

「なんかこう……そう、あれだ、『葛藤』? してるみたい。よく分か

んないけど」

工房から少し離れた人気がない通路の片隅で、ハツシユは壁により掛かり溜息を吐いていた。

なんというか、凄く鬱な空気を纏っている。ただでさえ暗い気配の中近寄りが見たいこと夥しいのだが。

「……こんなところで、どうした？」

空気が読めているのかいないのか、あえて語りかけてくる者が居る。ハツシユやザックと共に歳星に訪れていたデインだ。彼としては雑用の合間、たまたま見かけた様子のおかしいハツシユに声をかけただけであつたのだが。

それに応えるハツシユはなんだか力無く。

「う、ああ、なんでもない……わけでもないんだけどな」

迷いながら、それでもなにか吐き出すところが欲しかったのだろう。ハツシユはぼつりぼつりと語り出す。

かつてスラム街にいた頃、ハツシユには兄貴分がいた。【ビルス】と言う名のその少年は、立身出世を志しCGSへと入隊。阿頼耶識の施術を受けた。しかしそれは失敗し、半身不随の障害を負ったビルスは役立たずのそしりを受け、捨てられるようにスラム街へと戻される。

弟分たちへの希望となるべく起ち、挫折した彼は絶望の末自ら命を絶った。その彼の志を継ぎ、スラムの仲間たちが希望となるべくハツシユは鉄華団に入隊したのだ。

入隊した初期三日月に対して対抗心のような物を持っていたのは、運良く阿頼耶識が適合した程度で、という嫉妬に似た感情があつたからだ。実情を見て体感して、その感情は一気に敬意へと変化したのであるが。

「……さつき聞いたんだよ。『阿頼耶識手術の失敗を、治療する手段が

ある』『ってな」

ずるずると壁沿いに腰を落とし、ハツシユは座り込む。

「どうしようもなかった、ってのは分かってんだ。……けどな、『あと1年早ければ、ビルスは助かったのかも知れない』って、どうしても考えちまう」

タイミングが悪かった、としか言いようがない。実際の所技術的には可能と言うだけで、現状実例は0の技術だ。本格的に実用化するにはまだまだ多くの時間と実績が必要になるだろう。たとえ1年早くかの技術もたらされていたとしても、ビルスが助かっていたかどうかは怪しい。

それが分かっているとしても、わだかまりが晴れるわけではない。ハツシユは悶々とした空気を抱え込んだままで、それをつい吐き出してしまった。情けないと彼は自己嫌悪してひとり落ち込んでいく。

と、黙って聞いていたデインが口を開いた。

「……分かるな、それ」

どかりとハツシユの隣に腰を下ろし、デインは言う。

「何であるの時ああならなかったのか。俺もそんな事を考える。多分大なり小なりみんな考えたことがあるんじゃないか、鉄華団（ここに）に来た人間は」

じつと自分の両手を見つめるデイン。そう言えばこいつの過去を何も知らないなど、今更になってハツシユは気付いた。

「過去は変えられない。忘れることだって出来ない。このままでいいのか、って思うときもある。……それでも生きていければ、死んでるよりは何かが出来るって、ランディ教官は言ってた」

デインの言葉には重みがあった。それを感じ取ったハツシユは暫く思いにふける。

ややあつて。

「……あの人や三日月さんは、俺達みたいな事で悩んだことはねえのかな」

ほつりと言うハツシユ。デインはむう、と小さく唸った。

「想像もつかないな」

「確かに」

ハツシユは小さく笑った。何がどう変わったわけではない。わだかまりが消えたわけでもない。

ただ……色々吐き出したせいかな、少しだけ気持ちが楽になった。

「デイン」

「ん？」

「……ありがとな」

「……どういたしまして」

鉄華団に派遣されていたタービンスメンバーの引き上げは滞りなく進んでいた。後はバルバトスの改修に携わっているエーゴがそれを片づければ終了だ。

「ホントありがとうございます。長々とお世話になっちまって」

愛想良くタービンスの女性たちに頭を下げるシノ。彼を筆頭とした幾人かが、鉄華団に出向していたメンバーの引き上げを手伝っていた。

「なに、弟分たちの面倒を見るのが上の仕事さ。あんたたちもよく頑張ったよ」

出向メンバーの代表としてアジーが応える。実際彼らは技術の習得に精を出し結果を出してきた。それは自分達出向メンバーの力だけではないが。

（ランデイが鍛えた地金があったとはいえ、よくぞこの短期間で組織としてそれなりの形になってきたもんだよ）

最早鉄華団はただの下部組織では収まらなくなってきている。色々と横槍やアクシデントがあったが、それを乗り越え大きく成長した。ここから先は少し離れた立場から見守らなければならないが、彼らがどこまで行けるのか、楽しみではある。

(まあそれもこれも、この子らがGHとの戦いを終わらせてからの話だけだね)

そのことに関しては、立場上決着がつくまで距離を置かなければならないと言うのが少々歯がゆい。彼らのことは信用しているし、勝ち目のある戦いだというのも分かってはいる。だがそれでも、家族も同然の弟分だ。気にかけるのは致し方あるまい。

「ともかくあんたらはこれからが正念場なんだ、気を抜かずにしつかりとやんな」

「あざつす。暫く忙しくなりますけど、落ち着いたらまた団長共々顔出しに来ますんで」

軽い言葉だが、必ず帰って来るという意気込みが含まれている。一丁前に言うようになったと、アジーは微かに笑みを浮かべた。

そんな感じで会話を交わしている間にも。

「……これで荷物は最後だな」

「悪いわね。全部運ばせちゃって」

「世話になったんだ、これくらいはやらせてくれ」

ラフタと彼女の荷物を運んでいる昭弘である。いつも通りの昭弘と、どこか残念そうなラフタ。その姿を見て。

ぎゅびいんと、シノとアジーはアイコンタクトを交わした。

「ようおつかれおつかれ。でよう昭弘、ちよつと」

「? どうした?」

手招きされた昭弘は、そのままシノに肩を組まれて端っこの方へと連れ去られる。

「な、なんだ?」

「おう、お前さんラフタさんにさんざ世話になったろ? だからちよつと一杯くらいおごって来いや」

「は? なんで俺が? そりや確かにラフタには世話になったが、それはアジーさんたちもそうだし、お前らだって世話になったろうが」
「お前さんは特に世話になったじゃん。シミュレーターにつきつきりで指導して貰ったり、差し入れして貰ったりよ。……しばらくは会えねえんだ。ここで恩を返しておくべきじゃねえ?」

言葉巧みに昭弘を誘導するシノ。一方アジ―はラフタになにやら言い含めている。赤くなったりわたりわたりしたりするところを見ると、多分ろくなことではない。

結局シノに言いくるめられた昭弘は、ラフタを誘うようだ。苦勞して彼女に言葉をかけている昭弘の様子を横目で見つつ、シノとアジ―たちはこそこそと会話を交わしていた。

「へっへっへ、」要望通りにはしておきましたぜ姉さんがた

「みんなちよつとやきもきしてたからねえ。小学生かあの子らは、つて」

「……それにしてもいんすか？ ラフタさんも名瀬さんの嫁だつつのに」

「来る物は拒まず去る者は追わず、つてのがあの人さ。……ラフタの事はラフタ自身が決めるべきだ。どう転ぶにしても、良い機会じゃないか」

「そんなもんすかね。……ところでアジ―さん、あいつら上手くいかどうか、賭けねえすか？」

に、と笑むシノに応えて。アジ―とともについてきた女性たちが、同じような笑みを浮かべた

「上手くいく方に50」

「あたしはいかない方に100」

「暫く平行線じゃないの？ 何も無いに70」

「あんたらね……」

アジ―は呆れた様子で鼻を鳴らした。

「あんまり人をおもちやにするんじゃないよ。……上手くいく方に150」

歳星が繁華街の一角。居酒屋……というには少々上品な店に、昭弘

とラフタの姿はあった。

「へえ、なかなかいい雰囲気の店じゃない」

「始めてここに来たとき慰労会をやった店だな……」

その節はご迷惑をかけましたという意味を込めて会釈すれば、いえいえお構いなくといった雰囲気を込めて会釈を返すバーテンダー。なかなか人間が出来ている。

まあそれはそれとして、軽く飲み物とつまみを頼んで……二人の会話が途切れた。

うむどうしよう。シノに乗せられてラフタを誘ってみたものの、昭弘は完全にノープランである。ここからどうしたものかまったく分からない。

ええつと、どうしようかしら。なんか適当にアジーたちに乗せられたラフタもまたノープランである。当然ここから先の展開なんて考えてない。

暫く互いに悩んだ末、口火を開いたのはラフタだった。

「仕事……」

「ん？」

「この先の仕事、とか、GHの件が片づいたら、あんたやりたいこととかある？」

それは単なる思いつきであったが、即座にラフタは言い訳をでっちあげる。多分昭弘は将来のこととかあまり考えていないんじゃないか。だったらこう、タービンス関係の仕事に引き抜くとかすれば近くにいられるかもしゃいやいやだからどうだってわけじゃないけれど。一瞬にしてそんな捕らぬ狸のなんとやらを組み上げるラフタであったが。

「ああ、あるな。やりたいことが」

その言葉に、ラフタはぴくりと反応した。予想外。え、ちよつと待ってと口にする前に、昭弘が語り出す。

「交易船団……いや、船に関わることをしたいと思ってるんだ」

昭弘は元々交易船団を率いていた一族の出である。海賊に襲われ一族のほとんどは死別。唯一残った昌弘とは運良く再会できたが。

「船団を再建できる……とは思えねえ。俺は馬鹿だし、昌弘に任せるにしたって途方もない時間と金がかかるだろう。だったら少しでも、交易船団の人たちの仕事を手助けできるようなことをしてえ」

頼んだ水割りをちびちびと舐めながら、昭弘は己の『夢』を語る。

「今は新しい大型交易船を造れないから、古い船を改修するかレストアするしかなくて、船団を組む人たちは苦勞していると聞く。……タービンスも確かそうだったよな」

「あ、うん……古い船の改修はどうしても限度があるしね」

エイハブリアクターを新規に製造できない関係で、民間では惑星間航行に用いられる大型船舶の新規製造はできない。(新しい船を手に入れられるのは、GHにコネがある者だけだ) 結局現在ある船舶を改修するしかないのだが、当然組織の規模が大きくなれば数は足らなくなるわけで、きちんとした船舶の取り合いなどは頻繁に起こっていた。

それを解決する手段は今のところ一つ。『デブリベルトなどからサルベージした船舶や、リアクターを再利用するしかない』。当然ながら、それには多くの危険が伴い、サルベージ業者も船舶クラスのリアクターを狙うには二の足を踏む。

昭弘はあえてその業務に従事したいと考えていた。

「そのために、団長には無理を言った。なんか喜んでくれたけどな」

昭弘の『夢』を相談されたオルガはこのほか喜んだ。ヒューマンデブリであった昭弘が、自分自身のやりたいことを見つけた。それが自分のことのように嬉しかったのだ。

そうしてオルガは昭弘の希望を出来るだけ叶えるべく、将来的な業務の一環として船舶用のリアクターをサルベージする事を本格的に検討し始めた。その話が進んでいく中で、昭弘がランディと相談し仕上げさせたのがグシオンリベイク明王丸である。そう、かの機体に改めて搭載された機能とマルチシザーは、『デブリベルトの中で船舶の解体作業を行うための物』であった。

「上手くいけば大口の仕事になる、ってメリビットさんやデクスターさんも太鼓判を押してくれた。昌弘や、ほかの兄弟も乗り気で手伝

うって言うてくれる。……それに、この話がうまく行くんなら、ヒューマンデブリだった連中の、受け入れ先になれるかも知れねえ」
確かに阿頼耶識手術を受け、MSやMWを手足のごとく扱える彼らならば、きちんと訓練を受ければデブリベルトの中でも自在に働ける作業員になれるだろう。それはランディの教えを受けた少年たちが証明している。そう言ったものたちを受け入れられる場所を作る。昭弘はそんなことまで視野に入れていた。

そのことに驚くと同時に、何となく寂しいというか置いてけぼりにされたような感覚を覚えるラフタ。しつかりと将来のことを考えて歩き始めた昭弘が一回り大きく見えて、そして少し遠のいたような気がする。

その様子に気付かず、少しアルコールが入ったせいもあってか、昭弘はいつになく饒舌に言葉を重ねる。

「俺は鉄華団に入ってからこっち、団長やみんなに恩を受けっぱなしだ。ラフタ、あんたにもな」

「あ、あたしはその、大したことしてないじゃない」

「それでも、三日月以外に安心して背中を任せられると思ったのはあんたが初めてだ。そういった諸々含めて、鉄華団やタービンスに恩を返せるようなことっていったら、やっぱり力仕事しか思いつかねえ。俺のやるのが、巡り巡ってみんなの、誰かのためになっただら少しでも恩が返せるんじゃないか……そんな気がする。こう、上手く言えないけれどな」

そうか、ラフタは何となく理解した。昭弘は己の道を歩き出した。だがそれは、自分達から離れていくための物ではない。

目指す先、歩む道は違っていても、その道は『自分達と続いている』。義理堅く、恩を忘れることのない昭弘だから、その行く先はきつと自分達と交わっている。そう感じた。

ふ、と表情を和らげ、ラフタは微笑む。

「じゃあさ、もしも……もしもなにかピンチになることがあったら、あたしの背中を護ってよね」

その言葉に対する答えは分かっている。案の定、昭弘は迷い無く、

力強く応えた。

「ああ、必ず」

分かり切った答え。小さな約束。それは少女じみた外観を持つ女性の心に、ほのかな暖かみをもたらした。

夜も更けた頃合い、名瀬はハンマーヘッドの一室で静かにグラスを傾けていた。

「相変わらず好きだねえ、その酒」

名瀬が座するソファアの端に体重を預け、アミダが言う。グラスの中身はなんと言うことのない、そこらのコンビニでも売っているような安酒だ。だが名瀬は懐にかなりの余裕が出来てからもなお、それを愛飲している。

「こいつがいいのさ。お前と出会ったときにも飲んでたこいつがな」
鈍く光るグラスの反射を見ながら名瀬は応え、過去を思い起こす。

かつて、名瀬は単身でハンマーヘッドを駆り輸送業務に従事する個人業者であった。とある仕事で海賊が横行する航路を使わざるを得なかったとき声をかけたのが、当時傭兵として名を上げ始めていたアミダである。

仕事の最中、華麗とも言える技量で海賊どもを討ち取っていくその様に、名瀬は惚れ込んだ。惚れ込んで、口説いた。

アミダの協力を得て、名瀬は己の組織を立ち上げる。それはいままで見向きもされなかった人材、女性のみを雇用していくという形態の物だ。宇宙生活者や圏外圏などでは女性の立場は低く、ヒューマンデブリと大して変わらない扱いを受けているのが常であった。そんな女性たちを拾い上げ、その才能を開花させて人材とする。そうやって組織を少しずつ拡大させていく。さらに彼は雇い入れた女性たちを庇護するために、彼女らと婚姻関係を結ぶという手段を取った。

それは書類上だけの関係という者も多かったが、本気で名瀬に惚れ込んだ者も少なくない。事実名瀬は多くの『妻』たちと関係を結び、子をなしてさえいる。そんな彼をアミダはしようがないなあといった感じで支え、妻たちの筆頭として組織を仕切っていた。女たちが名瀬に惚れ込むのは分かるし、自分もなんだかんと言つて同じなのだから。

そうして拡大していった組織——タービンスの立場を確たる物とするため、名瀬はテイワズの傘下に収まることを決意する。

「あれから大分経った。……タービンスも大所帯になつちまつた」

今やタービンスは構成員5万を誇り、テイワズの輸送業務を担う一角となった。それまでは紆余曲折があつたし、未だに名瀬のことを女術だのヒモだの見下す人間は組織内でも多い。(主に某ケツアゴの勢力)しかしマクマードや一部の幹部は名瀬のプロデュース能力を買つており、あるいは将来の跡目候補として考えている節があつた。

しかしながら、名瀬自身はその器ではないと感じている。ここいらあたりが己の限界だと。

「……もつたない話だと思わないでもないけどね。まああんたがそう判断したんならそうなんだろうさ。……ところで、ラフタと昭弘が良い感じだつて話をアジーがしてるんだけどね？」

悪戯つぽく笑うアミダに、名瀬もまた笑みを持つて応える。

「昭弘なら文句はないさ。まだまだ未熟だが……あいつはいい男になる。ラフタを任せていいつてくらの、な」

タービンスに集つた女性たちを、名瀬は妻として扱うと同時に自分の娘のようにも感じていた。もし自立し、己の意志で自分の元を離れるのであればそれで構わない。事実名瀬を利用しようとする人間も多くいる。だがそれらを全て名瀬は受け入れ庇護を与えた。

そんなものは男社会でも一緒だ。むしろ女性の立場が軽んじられる状況にありながら、そのバイタリティは見事な物ではないか。そう笑い飛ばせるのが名瀬という人間だった。

「ま、簡単に嫁にやってやるつもりはないがな。……最低でも、GHとの戦いから生きて帰つてくれるくらいはやつてもらわねえと」

「……歯がゆいもんだね。見送るしかできないってのは、さ」
「親父はもつと歯がゆいだろうさ。……だから嫌なんだよ、上に立つてのは」

からん、とグラスの中の氷が鳴った。

バルバトスの改修が始まって2週間が過ぎた。

フレームの多くを造り直すことになった関係上、改修は今までになく手間と時間がかかり、その間阿頼耶識システムの調整なども度々行われていたが、三日月は多くの時間をもてあましていた。勿論ただぼんやりしているようなタマではなく、トレーニングなどを続けてはいたが、それでも時間は余る。

そんな彼を、マクマードは呼び出し話を聞いていた。

「……ほう、あの化け物相手に一步も引かねえとは、マクギリスって男も大したタマじゃねえか」

「きちんと整備したガンダムフレームがあつたら、アレ倒してたかもね」

機嫌良さそうに三日月の話を聞いているマクマード。三日月の隣で甲斐甲斐しく世話をしているアトラは――

(なんかお孫さんの相手をしているおじいちゃんみたい)

といった感想を抱いているが、マクマードからすればそのようなものなのだろう。

「ほれこっちの菓子も食べ喰え。それで、こういう感じであの化け物を仕留めた……」

「会長、お話し中の所を失礼します」

突然、マクマードの言葉を遮って側近の黒服が声をかけてくる。一見通常と全く態度は変わっていないように見えるが。

(……?　　なんか『焦ってる』?)

黒服が妙に緊張しているのを三日月は感じ取っていた。そして。
「……なんだって？ アリアンロッドがタービンスにガサ入れただと
!？」
事態は、風雲急を告げる。

今回のえぬじい。

「あら、学食で3回おごってあげたじゃない」

「私は17回おごらされたわ」

多分お嬢様方の関係ってこんな感じ。

嘘予告ですが何か。

某月某日、ある二人の男が突如呼び出される。

「一体何なんだ、我々をこんな所に呼び出すとは」
「ラストル様の命令でなければこんな所になど……」

「は。ガエリオ・ボードウィン。イオク・クジャン。彼らの前に現れたの

「今日からおまえらの担当教官となるー、ランデイル軍曹じゃー」
「あ、もうすでにこの時点で超嫌な予感する」

果たして彼らが導かれる先は。

「ここがお前らが勤務するー、『ガス黒光りギヤラルホルン本部』
じゃー」

→ドヤ顔でキメてる某ネオジオンパイロットの銅像が建つ建物前。
「ギユネイー!?!」

そして始まる、笑いの地獄！ 次々と襲いくる刺客たち！

「ゆうたいりだつー」

→例の芸を行うステンジャ兄弟。

「古っ！ 微妙に古っ！」

「……………ぶふっ！ (イオク、アウトー) あ待って待っていまのちが
(スパーン!) あふあつ！」

「……はい、そんな風に段取り付けますんで、はい。ほいたら担当はわたくし、軽井沢の軽に田んぼの田、軽田がうけたまわりました。はい、都合よう段取り付けますんでよろしゅうに」

→やたらと某女芸人の真似が上手いカルタ。

「ちよwwwこれヤバ（ガエリオ、アウトー）いや笑うってこれは（スパーン！）ぐあっ！」

「……………ふひゅっ！（イオク、アウトー）笑ってない息漏れただ（スパーン！）ひぎいっ！」

「現在治安の悪化は降下曲線を描く一方と言っても良い。この状況を打開するためには思い切った改革が必要となるだろう……………」

→至極真面目な顔で真面目な話をするラスタル――

の後ろで全身タイツを纏い、無言のままくねくね踊るマクギリス。

「……………ふはっ！（ガエリオ、イオク、アウトー）おま、ちよ、マクギリス（スパーン！）うぎっ！」ラスタル様それ卑怯（スパーン！）あひゃあっ！」

さらに過酷な試練が彼らを襲う！

「なになに、ガ・エ・リ・オ、ミ・ケ・ロ。……ミケロお!?」

「ハイパー銀の脚スペシャルうううあ!」

「タイキツク梓これぐはアっ!」

「ガツデム! ガツツツデム!」

「ちよつと私この立ち位置なの待つて待つて死ぬから東方不敗とか粉微塵になつちやうから（スパーーーンツ!!）ぶべるアっ!!」

ちよつと本気で笑えない状況もあつたり!

「今日からこの方が、わたくしの新しいお兄様になります」
「アルミリアは、私の妹になってくれる女性だ!」

→ドヤ顔のアルミリアとその隣に立つノースリーブグラサン。
「おいちよつとカメラ止めろ」

「調べた情報によれば、イオク・クジャンは実の所士官学校の成績が最下層だったのではないかと疑いが……」

「成績表まで出すとかプライベートの侵害も甚だしくない!？」

あるいは笑いに命すらかける！

「うわー閉じこめられてもうたー。おまえら助けてくれー」

→フル装備で二人を追いかけ回すランディの乗ったグレイズ。

「あんた楽しんでるだろ！ 絶対楽しんでるだろおおお！」

「実弾っ！ これ実弾っ!!」

果たしてその結末はいかに！

【笑ってはいけないギャラルホルン24時！】

君は、生き延びることが出来るか。(かなり真剣に)

388・殴り返すぞ？ 答えは聞いてない。

アリアンロッド第2艦隊旗艦。その作戦司令室で、イオクはふんぞりかえってモニターを眺めていた。

モニターに映るのは運搬されていく『何か』。MSの全高ほどもあるそれは、GHにて秘蔵されていた『兵器』であった。

それが運び出される様子を見守っていた部下の一人が、恐る恐る具申を行う。

「よろしいのですかイオク様。条約禁止兵器を許可無く持ち出すなど……」

その言葉に対して、イオクはふんぞり返ったまま応える。

「正義を執行するためには、時に法を超越した判断を下さなければならぬのだ！ これはそう……政治だ！」

宣うイオク。部下たちはなにか言いたげに顔を見合わせるが、結局それ以上彼に物申す人間は現れなかった。

この時——いや、最初からイオクに意見し、あるいは諫めることが出来る人材を彼の傍に置いておけば、運命は変えられたかも知れない。

それが無かったが故に、イオクは己の死刑執行書に我知らずサインを記してしまった。

「……うーん、扱いやすいんだけど、特徴が無さ過ぎってどうか、特徴がないのが特徴って感じよね」

タービンス本拠に帰還したラフタたちは、早速新たな仕事に従事していた。獅電に次ぐテイワズの新型MS『辟邪』そのテストを請け

負ったのだ。

獅電よりも高性能の量産機として位置づけられた機体だが、性能が向上した分開発に時間がかかった。阿頼耶識システム搭載機に対抗すべく高い操縦性と追従性を兼ね備えるが、テストパイロットを受け持ったラフタには、少々物足りなく感じられている。

「全体的に獅電より性能が一回り上なのは分かるよ？ けどなんかそれだけって言うか……うくん、なんだろ」

自分でもよく分からない感覚に、ラフタは首を捻る。そんな彼女に向かつて、アジーは声をかけた。

「そりゃあんたが『じゃじゃ馬に慣れてる』からだよ。調整もしていないフラットな機体だと、『物足りない』のさ」

ラフタは百里を始めとした癖の強い機体を好んで使っている。鉄華団の教練及びカスタマイズのテストのために供給された獅電も彼女用に調整されたものだ。かてて加えて鉄華団幹部連中ほどではないにしろ、ランディのシミュレーションに挑み続け技量が向上している。そんな彼女にとって扱いやすさを重要視した辟邪は、逆に違和感を感じさせるものとなっていた。

「あんまり自覚無いんだけどなあ。ランディのシミュレーション、成績横這いに近いし」

（あのシミュレーションプログラム、技量に合わせて難易度がちよつとずつ向上してるって気付いてないんだね）

バラしたら多分ラフタが荒れるだろうから、黙っておこうと堅く心に誓うアジーであった。

と、そこに泡を食った様子でエーコが飛び込んでくる。

「大変なことになったわ！ うちの輸送船がGHの臨検受けて、条約禁止兵器を積んでたって検挙されたって！ コロニーの事務所もガサ入れを受けてるらしいわ！」

突如降って湧いた凶報。それはタービンを窮地に陥れる。

タービンス船検拳の報は、各所に大きな影響と衝撃を与えた。特に直下組織である鉄華団は天地をひっくり返したような大騒ぎである。オルガたち幹部は、団員たちの動揺を抑えて回ると同時に、各関係機関と連絡を取り合って状況を把握し対策を練ろうとした。しかし。「いいか、お前たちは動くんじゃねえ」「ですが兄貴!」

彼らが動くことは、当の名瀬から封じられた。

専用の回線から放たれた名瀬の言葉に、オルガは歯噛みする。

「言うまでもないがこいつはあからさまな罠だ。今お前たちが動けばテイワズはおろか、一から積み上げてきた物が全部おじやんだ。それは分かっているだろう」

「けど! タービンスになにかあれば!」

「テイワズはある程度の痛手を受ける。だが『それだけだ』。ここで手を出して大やけどをするよりは、俺達を切り捨てた方がましだし、『そうあるべき』なんだ。……まあお前たちのケツ持ちが出来なくなっちゃうってこういう心配はあるが、そのあたりは親父が上手くやってくれるだろう」

「そう言う事じゃなくて!」

「いいから聞き分ける。この大事なときにこういう事を仕掛けてくるって事は、向こうさんは焦っているってことだ。この機会を逃せば、それこそ今までやってきたことが無駄になっちゃうかも知れねえ。……なに心配すんな。そう簡単にこの首をやつらに取らしてはやらねえよ。精々やつらを一部なりとも引きつけておくさ。……じゃ、達者でやれよ」

「兄貴! まってくださ……」

通信が切られる。その後は着否されたようで、うんともすんとも反応がない。

「がんっ!」と拳がデスクに叩き付けられる。ぎしりと歯をを噛み鳴らすオルガの口から、唸るような言葉が漏れ出た。

「……このままで、済ますかよー！」

その目は燃え上がるような光を湛え、虚空を睨み付ける。それは決して諦めた者がするような目つきではなかった。

三日月はマクマードの屋敷にて彼と面会していた。タービンスの件でどうするのかと尋ねに来たのである。

マクマードは忙しい最中でありながら、三日月と対面した。その答えは。

「俺は動かねえ。そしてお前たちが動くのも許さねえ」

仏頂面で言い放つその言葉に対し、三日月は「あつそ」とあつさり席を立った。

「え!?! ちょっと三日月さん!?! いいんですか!?!」

泡を食ったのは一緒について来たハツシュだ。そんな彼に構わず、三日月はマクマードをただ真つ直ぐに見つめながら言う。

「目を見てたら分かる。あんたは梃子でも動かない。いや『動けない』。今動けば全部ご破算だつて分かつてるから」

その言葉に、眉をぴくりと動かしてマクマードは答えた。

「その通りだ。テイワズの全部を危険にはさらせねえ。責任つてのはそういうモンだ」

「分かってる。邪魔したね。……ハツシュ、行くよ」

「三日月さん!?! ま、待って下さいってば!?!」

あつざりと退出する三日月を、慌ただしくハツシュが追う。その姿を見送ってマクマードは溜息を吐いた。

「……見透かされてるねえ」

「ああ全く、子供の成長つてのは早いモンよ」

突然かけられた声に、マクマードは慌てず応える。物陰から現れたのはジョニー。いつものようにへらへらした態度で気安く言葉を紡

ぐ。

『裏は取れた』ぜ。まったくあの間抜け、自分が使ってる通信機器が『どこの製品』だかすつかり頭から抜けてると見える」

「やはり、か。タービンスの裏航路がどっから漏れたのかと思つてたら、面白くもねえオチだな」

そこまで言葉を交わして、ジョニーの目がすう、と細められた。「で? 『どうする』?」

それに応える言葉は迷い無く。

「決まってる。『いかなる者でも裏切りは許さねえ』。そいつが俺らの不文律(ルール)だ」

一方退出した三日月たちだが。

「いいんですか三日月さん! マクマード会長を説得しなくて!」

ハツシユの言葉に、三日月はきよとんとした表情を見せる。

「え? なんて説得すんの」

「は!? そのために会長の所に行ったんじゃ!」

「おっちゃんがどういうつもりか確認しに行っただけだけど」

「はい!」

間抜けな表情を晒すハツシユに向き直ることもなく、三日月は言う。う。

「テイワズが動くんなら俺達もそれなりのことをしなけりやならない。けどそうじゃないってことは、今やってることをやり遂げろってことだ」

「け、けどタービンスを放っておく訳には……」

「オルガが何も考えていないわけがないだろ。おっちゃんは自分達は動けないし、俺達にも動くなつて言った。けど……『それ以外なら、問題は無い』。オルガならやるさ」

その言葉には絶対的な信頼がある。気圧されたハツシユは、納得しきれないまでも黙るしかなかった。

三日月は迷わず前を向いて歩く。

今はただ、己が成すべきを成すために。

アリアンロッド基地内MS格納庫。そこは俄に活気づいていた。タービンの摘発。その名目の元、第2艦隊が大規模な作戦行動を起こそうとしているのだ。

喧噪の最中、格納庫の一角で、ハンガーに固定されたMSのコクピットハッチが開いた。

「再調整をお願いします！　反応を0.3、出力を2.8まで上げて下さい！」

飛び出してきたのは、パイロットスーツ姿のジュリエッタ。疲労の色も濃く汗だくの彼女は、それでもぎらぎらとした色を瞳に乗せ、休む様子を見せない。

と、キャットウォークに身を寄せた彼女の元に、歩み寄る影がある。「精が出るな。だが少々無理をしているように見える」

かけられた言葉に、むっとした表情でジュリエッタは返す。

「多少の無理を押さねばこの機体は使いこなせません。むしろこの程度を無理と言っているようでは、これから先の戦いに立ち向かうことは出来ないでしょう」

見上げる機体は、レギンレイズを核として、大型のシールドスラスタユニットなどを増設し一回り巨大化したもの。正式名称『レギンレイズ・ハイムバー2号機』、乗り手の名前になぞらえて『レギンレイズ・ジュリア』と銘づけられたその機体を見上げるジュリエッタの瞳に迷いはない。

その様子から見て取れる、盲目的に身を削る意志。それを懐かしむかのように、声をかけた仮面の人物——ヴィダールは言葉を零す。

「……君と似た男がいたよ」

「貴方の知り合いにそのような人物がいたとは予想外ですが……その方は？」

「……もういない」

「……戦死、されたのですか」

「まあ、そのようなものさ」

俺が殺したようなものだがな、という言葉がヴィダールは飲み込んだ。かてて加えて『その怨念を利用するような真似をしている』などと、今は言うべきではないだろう。

「ともかく気を付けるに越したことはない。第2艦隊の任務についていくのであれば、ランディール・マーカスとかち合う可能性がある。あれとまともに戦おうなどとは思わないことだ」

「だから楽しいんじゃないのさ」

不意にかけられた言葉に、ジュリエッタとヴィダールは振り向く。そこにはパイロットスーツを胸元も露わに着崩した女——マリイの姿があつた。

「君も、行くのか」

「ああ、『あの子』も良い感じで仕上がってきた。まだ『本命』の調整は残っているけど、折角の機会だろう?」

彼女の背後。格納庫の奥に鎮座しているのは真紅に塗り上げられた機体。ジュリアアの原型、『レギンレイズ・ハイムバー1号機』。

改めて銘づけられた名を『レギンレイズ・モルガン』と言う。

マリイはくつくつと嗤いを零しながら、ヴィダールに語りかける。

「あんたも来ればもつと楽しめたかもねえ? 機体の徹底的な再調整

とか、良い言い訳が出来たじゃないか」

それに応えるヴィダールは、迷いも動揺もない。

「俺は臆病者だからな。万全の状態でなければ、いや、そうであつたとしてもランディール・マーカスとかち合うのは避けたいよ。彼とやるとすれば、最後の最後。雌雄を決するときだけだ。……その前に、『先約』もあることだしな」

「は、だったらあたしが先に『食つちまつてもいい』つてことだね?」
「好きにすればいい。喰えるものならば」

挑発的なマリイの物言いを、ヴィダールは柳のごとく受け流す。そのやりとりに妙な苛立ちを覚えるジュリエッタであるが、それを口に出すと何か負けたような気がして押し黙った。

ともかくにも、第2艦隊は出立する。その報告を受けたラスタルは苦虫を噛み潰したような表情であった。

「目の付け所は悪くない。だが……イオクを『諦める』ことも覚悟しなければならぬか」

その言葉に、ヴィダールは動揺した様子も見せない。もつとも仮面に隠れてその表情は分からないのだが。

「手塩にかけておいて、冷酷だと思おうか?」

「……俺には何も言う資格がないだろう。貴方よりはよほど残酷な判断を下し、それでも臆面もなく生き延びている」

「それでも果たさなければならぬと思つてのことではないか。その意志を利用してゐるのは我々だ。……ともかくこれで少しは時間が稼げよう。艦隊の再編成と『新規兵』の慣熟を急がせる」

「俺の機体は間もなく再調整が終わる。この間のようなことは起こらないはずだ」

「期待している。……それにしても、未だマクギリスの真意が見えてこない」

現段階で普通に考えるのであれば、マクギリスはクーデターを起こしGHの『象徴』を手中に収め、己を正当なGHの支配者だと宣うのだろうと推測されよう。しかし、彼が主張するであろう『正当性』は、『容易くひっくり返せる札』でしかない。今の彼がそれに気付いていないはずはないのだが。

GHの支配が最終目的ではないと疑うところが、そういった不安要素である。いくらアーヴラウなどの外部勢力の賛同を得たからと言つても、GH内部の支持がなければ意味はない。ただ瓦解するだけで終わる。そのような砂上の楼閣が頂点に立って良しとするようには、とても思えなかった。

「いずれにせよ、もはや衝突は避けられまい。お互い備えようではないか」

「分かっている。全ての決着をつける、そのために」

いかなる事情があろうとも、もはや相容れない。ヴィダールの拳が固く握りしめられた。

「……ああ、やり口はともかく彼らの行動は正当な手順を踏んだ物だ。こちらから手を出すのは難しい」

「やっぱりそうか」

オルガからの連絡を受けたマクギリスは、現状を告げていた。

「恐らくはフラウロスのレールガンが条約禁止兵器であったという体を持っていきかかったのだろうが、それについてはこちらで手を打っているので君たちに類は及ぶまい。だがタービンズに関しては、どうにも出来そうにないな。済まない」

「いや、無理を言ったのはこっちだ。出来るだけのことはやってみるさ。ただそっちの計画に支障が出る可能性はある。なるべく影響がないように持っていていくつもりだが……」

「分かっている。こちらのことより、まずはそちらを優先してくれ。可能な限りの情報は流す」

「済まねえ。片が付いたらまた連絡する」

「ああ、健闘を祈るよ」

通信を切り、マクギリスは溜息を吐いた。傍らの石動が口を開く。「窮鼠に噛まれたな」

「油断したよ。路傍の石と馬鹿にした挙げ句がこれだ。腐ってもセブンスターズの一角であったか」

マクギリスの目が細められた。

「だがこれで、イオク・クジャンの命脈は断たれた。『現在のテイワズの危険性』を、彼は理解していない」

少し前——鉄華団を傘下におさめる前であれば、マクマード・バリストンはタービンズを切り捨て、水面下の交渉にてGHと手打ちを打つてい事を荒立たせずに終わらせただろう。

だが今の彼はかつての気性を取り戻したかのように組織の肅正と

立て直しを積極的に行っていると聞く。そして最盛期の彼であれば、立ちほだかる者に容赦はしない。例え今動かなくとも、必ず敵対者に対し報復行動に出る。たとえばGHの一角であったとしてもそれを免れるとは思えない。

かてて加えてイオクが手を出したのは鉄華団の、『ランディール・マーカスが荷担している組織の』後ろ盾である。地雷を踏んだどころではない。核弾頭で自殺を図るようなものだ。状況からしてテイワズの内通者から手引きがあつたのだろうが、まず確実に内通者ごと破壊する。賭けても良い。

「それすらもラスタルは利用するだろうな。楽に勝たせてはくれまいが」

お互い猶予はないと、マクギリスは判断する。

『彼ら』に伝達を。少々急ぎになるが、幕を上げる用意をしよう
「はっー！」

予想以上に早く展開する状況。だが男たちは腹を据えて前へと進む。

深夜。マクマードの元へ密かに連絡が入った。

「申し訳ありません、親父。ハマ打ちちまいました」

「気にすんな。後ろから撃たれりやだれだつてそうなる」

通信の向こうには名瀬。彼はマクマードに謝罪するために繋ぎを取っていた。そして。

「親父、預けていた杯を割つて下さい」

態度を改めて、マクマードに『縁切り』を願ひ出る。その言葉にマクマードは眉をびくりと動かした。

「随分と諦めが早いな？」

「今テイワズと鉄華団は大事な時です。俺が足を引っ張るわけにはい

きません。ただ……俺の女房たちはなんとか助けてやって下さい。俺の首一つGHに差し出せば、言い訳は聞くはずです。我が儘言つてすみませんが」

「はん、俺が今までどれだけお前の我が儘を聞いてきたと思ってる。……嫁さんたちの事は引き受けた。任せろ」

「ありがとうございます。面倒をかけますが、親父も達者で……」

「まあ待て。このままはいおさらばってのは、ちよいと面白くねえ」
今生の別れを告げようとする名瀬。それをマクマードは押し止めた。

彼の口元は、なんだか悪戯げに歪んでいる。

「名瀬よ、一つ賭けをしようじゃないか。……もし万が一お前さんがこの窮地を乗り切ることが出来たら、『俺の我が儘を一つ聞く』。つてのはどうだ」

「親父、それは……」

「もちろん俺は手を出さないし、鉄華団にも動くなと言ひ含めてある。お前さんはお前さんで嫁さん逃がすので手一杯だろう。普通に考えりゃ、十中八九どん詰まりだ。……だが、世の中はどう動くか分かつたモンじゃねえ。それに……」

マクマードは忍び笑う。

「二度くらいは俺の我が儘を聞いてくれても、バチは当たらねえんじゃねえか？」

この言葉を、名瀬はマクマードなりの気遣いだと判断した。最後まで諦めるなど、そう言っているのだと。

「……生き延びられたら、何でも聞きますよ。俺に出来る範疇であれば」

「おう、確かに聞いたぜ」

当然名瀬はこの状況をひっくり返せるとは思っていなかった。例えオルガたちが言いつけを聞かず何らかの行動をとっても、それが決定打にはならないと考える。

しかしまあ、思ってもみないことと言うのは、結構容易く起こった

鉄華団本部。打てるだけの手を打ったオルガは、焦燥の中それでも静かに待っていた。

やがて、時が来る。

「団長！ 上手くいったぜ！ 手続きが通った！」

ドアを蹴倒すような勢いで飛び込んだのはシノ。次いで慣れない運動をしたおかげで息も絶え絶えとなったデクスターが現れる。

「ぜーぜー言いながら疲労困憊といった様子を見せながらも、彼は笑ってみせた。」

「だ、『ダミーの輸送会社をでっち上げてきました』。クタン参型と五型を高速輸送船として登録してあります。ついでに依頼と言う形でMSの輸送をねじ込んでおきましたから、いつでも出せますよ」

オルガが打った手の一つ。鉄華団という組織が動けないのであれば別な組織を作ればいいじゃない。という屁理屈。だが屁理屈でも何でも貫き通せれば理屈たり得る。そして——恐らくは『マクマードもそれを期待している』。

多分自分達の動きに合わせて何か事を起こすつもりなのだろう。それが何かは分からない。言い方は悪いが自分達は目くらましとしての役割も望まれているのではないか。

まあそこまで考える必要はない。ともかく今は動ける理由が出来た。オルガは早速指示を飛ばす。

「シノ、お前の隊と昭弘ので出てくれ。装備は好きな物を持っていけ」

「おう！ 俺の流星隊と筋肉隊にまかせな！」

「……人の部隊に勝手な名前付けるなよ」

シノたちに次いで姿を現した昭弘がぼやくように言うが、もちろんシノは聞いていない。

「後はランディ教官の方だが……」

「おう大将！ こっちも繋ぎが取れたぜ！ ご注文の傭兵部隊、運び屋付きで出血大サービスつてよ」

さらに現れたランデイが、手に持ったタブレットをひらひらと振ってみせる。オルガが用意させたもう一つの手段。外部の傭兵を雇いタービンスの救助に向かわせるという策を任されていたのだ。

「運び屋のほうは……まあちいと『条件』をつけてきたが、何とかなる話だろ。ともかく腕は保証できる連中だ。あとは間に合うかどうかさ」

「ああ、時間の勝負になる。教官、あんたにも出て貰うぜ」

「おうとも。俺達は早速方舟に上がる。特急便で駆けつけるさ」

「……兄貴たちを、頼んだ」

深々と頭を下げるオルガに頷き、ランデイたちは駆け出す。それを見送ったデクスターは、オルガに向かって笑いかけた。

「では我々は我々の仕事を。まずはダミー会社にて『ハンマーヘッドの船籍をでっち上げましょうか』」

事が上手くいって逃れることが出来たハンマーヘッドの行く先を誤魔化す一手。ダミー会社を含む複数の船籍を用意することによって、データ上からの追跡を困難にさせる、海賊がよく使う手段を彼らは行おうとしていた。

当然ながら違法である。だがタービンスを救うために、オルガは迷い無く危ない橋を渡る。

「悪いな、無茶をさせる」

「なに、前線で戦うよりはよほど気楽な仕事ですよ。ばれても精々が牢獄だ」

「はは、そうさせないように努力させて貰うぜ」

不敵に笑みながら、今できる全てを彼らは尽くす。

『家族』を救わんがために。

火星軌道上の方舟。その鉄華団が借り受けている一角にて、急ピッチで出撃の用意は調えられていた。

「ブースターの接続完了！ レールガンはグシオンに！」

「五型のウエイトバランスに注意しろ。この間とは違うぞ」

「流星号の固定を急げ！ 途中で落つことされたらかなわん、チェツクはしっかりな！」

「グシオンとラーズグリーズのブースターは新型だ、念入りに見ておいてくれ」

4機のMSを積んだクタン五型。そしてその隣には上半身だけを砲撃形態に変形させた流星号（フラウロス）を乗せているクタン参型が並ぶ。

流星号のкокピットで最終調整を行っているシノが、参型にMSごと乗り込んでいるライドの通信を繋いだ。

「どうだ、その機体には慣れたか？」

「大体癖は掴みました。いけるっす」

現在ライドが乗っているのは、シノから譲り受けた三代目流星号ごとカスタム獅電。彼はそれに自分用の装備を搭載して調整し、カラーリングを黄色系統に塗り替えて【雷電号】と名付けていた。

元々がシノ用にちよいとじゃじゃ馬に仕立て上げられた機体だ。扱える人間も限られている。結局一番相性の良かったライドが乗り換える事となったのであった。

「クタンは任せた。頼りにしてるぜ」

「乗り心地は保証しねえっすよ。……おっと、ししよーたちも出てきましたね」

ハンガーからグシオンとラーズグリーズが姿を現す。グシオンは外装型のブースターを備え、一見小型宇宙艇のような様相に変わっている。一方ラーズグリーズは腰の背部に大型ブースターを尻尾のごとく備える形だ。

機体のチェックを行いながら、ランディが告げる。

「全員聞いているな？ 俺達は新型ブースターのテストを請け負って

いる最中、『偶然』タービンスへの襲撃に遭遇し、非戦闘員の救助を行うこととなった『善意の第三者』ってことになる。まあ建前だが、積極的に艦隊を狙うのは止める。あくまで防戦に徹するんだ」

「教官、連中は本当にタービンスの本拠に来るのか？ あそこはティワズの企業機密でもある。正確な位置は公表されていないはずだ」

昭弘の問いに、ランディは頷いた。

「来る。間違いなくな。裏航路がバレてんだ。本拠の位置も割れて、速攻で艦隊送り込んでるだろうよ」

言葉の裏に内通者の存在を匂わせている。まあうすうす誰だか察してはいるが、それは後回しだ。今は一刻も早くタービンスのもとへ向かわなければならぬ。準備を整えながらランディは思考を巡らす。

（どうにもやな予感がするぜ。……あの陰険ヒゲが俺の存在を知っていつまでも放っておくはずがねえ。そろそろ対抗策を突きつけてくる頃合いだろう。それとかち合うかもだな。……と、準備が出来たか）

「全機スタンバイ、カウント入ります。ご武運を！」

オペレーターの声が響き、カウンターの数字が減り始めた。

それがゼロに至ったとき、ランディは咆吼する。

「Here we go！」

全てのブースターが一斉に炎を吐き出し、2機のMSと2体の輸送ブースターは、矢のごとく方舟を飛び出した。

歳星では、バルバトスの最終調整が行われようとしていた。

「よいか、これより新しいシステムを通しておんしとバルバトスを接続する。身体に影響が出ないよう細心の注意を払っておるが、もし何か異常を感じ取ったらすぐに言え。即座に作業を中断する」

改装されたバルバトスのコクピットには、新たにセーフティを兼ねた制御システムが搭載されている。これを触媒とし、さらに三日月の体内にある余剰のナノマシンに新たな制御プログラムを打ち込むことでフィードバックによるダメージを無くそうとしているのだった。

これが上手くいけば、リミッター解放時に三日月へダメージが及ぶことはなく、さらには任意でリミッターを解除できるようにもなる。応用すればグシオンやフラウロスにも同様の処置をすることが出来るはずだ。

三日月は特に緊張することもなく、頷いてみせる。

「いつでもいいよ、やって」

「うむ、ではいくぞい。……3、2、1、コンタクト」

接続した瞬間、三日月の意志は闇に落ちた。

※今回のえぬじい

「おう！ 俺の流星隊と筋肉少女隊に任せな！」

「少女どっから出てきた」

まあふぎけんじゃねえと立ち向かってるしね。

39・楽をさせては、くれねえか

「ミカが!? そりゃ一体どういう事だ!」

ランディ達を送り出した直後、歳星のビスケットから通信が入る。それはオルガを仰天させた。

バルバトスの最終調整で、機体のシステムと接合された途端、三日月が意識を失ったというのだ。神経質なまでに安全の配慮をし事に挑んだというのに、なんでそうなるかオルガは食って掛かるが。

「先生が言うには、安全的には問題ないって事らしい。ただ何で意識が失われたのかまではまだ分からないって」

「……本当にそれは大丈夫なのか?」

「ともかく今は、作業としては順調にいつているっていう先生の言葉を信じるしかない。オルガはタービンス関係のことに集中して。状況が変わったらまたすぐに連絡を入れる」

「分かった。頼んだぜ」

通信を切ったオルガは、大きく息を吐きながら天を仰ぐ。

「次から次へと……なんだってんだよもう」

そんな彼の様子を見て、作業中のメリビットが声をかける。

「少し休まれたらどうです? 大分参っているように見えますし」

「……わりい、気を使わせた」

姿勢を直し、オルガは苦笑した。

「下手に休んだら、色々考えて逆に疲れちまいそうさ。先にやるべきことをちやっちゃと済ませるさ」

そう言つてデスクに向き直り、作業を再開する。「またそうやって根を詰める……」などと呟くメリビットは不満そうだが、オルガの言うことにも一理あると思つたのか、意見を押しつけるつもりはなさそうさ。

キーボードに指を走らせながら、オルガは祈るように思う。

(なんだかよく分からねえが……ミカ、お前はこんな所で立ち止まってるタマじゃないだろ?)

そして歳星では。

「バイタルデータは安定しておるの。レム睡眠に近い状態、か?」

「システムの書き換えとプログラムの打ち込みは正常です。気を失うほどの急激な進行じゃないはずなんですけどね」

三日月とシステムチューニングの課程をモニタリングしているキシワダとザックが揃って首を捻る。

作業自体は順調すぎるほどに順調だ。だがなぜ三日月が意識を失っているのが分からない。阿頼耶識システムにおいては右に出る者が居ない技術者と、システムエンジニアリングに関しては図抜けた才能を持つ秀才の二人をもつても分からない事態。当然周囲のものたちは不安に思う。

「先生、三日月は大丈夫ですよね?」

三日月の世話をするために歳星に居座っていたアトラが、涙目でキシワダに詰め寄る。

その様相にさすがのキシワダもたじろいだ。

「う、うむ大丈夫じゃぞ? 多分、きつと」

「多分やきつとじゃダメでしょお!」

「げ、原因は分からなくともデータ上は安定しておるし、異常は見あたらんのだじゃ! 上手くいっておると判断するしかないじゃろお!」

半ば逆ギレし始めるキシワダ。そんな光景を背後に、あくもくほつとこうとか思っているザックが各種データを再チェックし――

「……ん? もしかして……先生!」

「大体こういう場合目覚めたら覚醒するものと相場が……つてなんじゃい」

「いやこゝ、三日月さんのピアスと機体のメインシステムのやりとりなんですけど、データ量は今までと変わらないんですが、『やたらと重い』んですよ」

ぱっと見やりとりしているデータ量が変わらないので気がつかなかったが、明らかに速度が遅い。その事実にはキシワダの表情が真剣な

物となる。

「ザック、機体のシステムの書き換え状況を洗い出せい。儂は三日月の方を確認する」

「了解っす」

暫くして。

「なるほど、こちらで行っているセッティングに合わせてるように進行していたから気付かなかったんじゃない。ピアス——三日月の体内にある阿頼耶識ナノマシンと、メインシステムが相互にデータの書き換え……『自力での最適化』を行っておる」

「どういう事ですかそれ？ やっぱり異常事態なんじゃあ？」

心配そうに問うビスケットの言葉を、キシワダは否定する。

「いや、恐らくはこれが『本来のフィッティング』じゃ。以前からその兆候——『自力でバイパスを形成している様子』はあったが、本来の物に近いシステムを媒介することによって本格的な経路を形成しておるのじゃろう。……速度が遅く、三日月の意識が持つて行かれとるのは、それこそ本式のシステムではないからじゃ。逆に儂らが組んだシステムを媒介しなければ、三日月は廃人になっておったかも知れぬ」

例えばエドモントン攻防戦での最終決戦で。例えばMAを前にしたとき機体が超過駆動モードに入った時点で。強引に阿頼耶識の最適化が行われたとしたら。

安全性を全く考慮していないそれは、三日月の神経系に甚大なダメージを与えていただろう。キシワダはそう断言した。

「本来のナノマシンとシステムであればもつとスムーズに、それこそ瞬時にフィッティングが終わっていたかも知れん。じゃが時間がかかっているとはいえ基本的には同じ事が行われておる。焦らず待てば滞りなく完了するであろうよ」

「本当ですね!? 本当に大丈夫なんですね!？」

「じゃーかーらー、大丈夫だと言うとるじゃろうが！ 嫁なら嫁らしく旦那を信じてどっしり待っておい！」

騒ぐアトラとキシワダを尻目に、ビスケットはモニターを食い入る

ように睨み続ける。

(信じているからね、三日月)

気がつけば、どことも知れない空間の中、三日月は座り込んでいた。阿頼耶識を接続したところまでは覚えている。その後何が起こったのかはさっぱり分からない。分かるのは、自分が意識を失っているだろう事と……。

「これ、今までやった戦いの記録……だよな?」

目前にいくつも浮かぶ映像が、自分がこれまで行ってきた戦闘の記録だということだけだ。

「システムの最適化がどうこうじいさんは言ってたけど、こういうもんなの? 分かんないや。ともかくのんびりしてるわけには……ん?」

どうにかしないと、そう思っていると画像の一部に変化が現れる。それは全く覚えのない戦いの記録。多くのガンダムフレームと共闘し、様々なMAと激戦を繰り広げる。いつしか三日月は、それらを食い入るように見ていた。

「そうか、これ、『厄祭戦の記録』か」

話に聞いていた、300年前の戦い。その映像記録の一つ一つが、まるで染み渡るように三日月の脳裏に焼き付いていく。そして——

三日月は振り返る。背後に何者かが佇む気配を感じたからだ。それは薄ぼんやりとした影のような何か。しかしそれが肩に担ぐ獲物——メイスだけははつきりとした形を取っている。そして、いつの間にか自分の周囲に様々な武器が突き立てられていることに、三日月は気付く。

「なるほど、戦(や)れってことか」

そう言って彼は、手近にあった得物、太刀を引き抜いた。

「あまり時間はかけられないんだ。とつとと終わらせる……よっ！」
迷い無く、影に向かって斬りかかる。
がぎん、と激しく金属音が鳴った。

元々資源採掘用であった小惑星を改装したタービンス本拠。そこは今、『夜逃げ』の準備で大わらわであった。

「子供らと非戦闘員を優先して1番艦に！ 積みきれない物資とMSは破棄で良い！」

アリアンロッドの強制執行を予測し、その前に退去しようと言う腹だ。その状況をハンマーヘッドのブリッジで見守っていた名瀬は、しかめっ面のままだった。

「ここを引き払う、なんてことは想定してなかったからなあ。海賊とかならよほどの相手でもない限り蹴散らせるんだが」

「でも名瀬、ここまで急がせなかったらもう少し余裕があったんじゃない。出払ってる船が戻ってくるまで待ってた方が……」

オペレーターの一人がそう具申するが、名瀬は頭を振る。

「いや、この位置は向こうさんに筒抜けだろう。裏航路も仕事で使ってる奴は全部押さえられてると思うていい。ほどなく連中意気揚々と現れるだろうさ」

誰が内通したのか。もはやそれは言うまでもない。ブリッジの中に殺気じみた気配が満ちる。

それはぱんぱんと手を叩く音で霧散した。

「はいはい、ムカつくのは分かるけど、まずはここを乗り切ってからだよ。索敵に集中しな」

ブリッジに入ってきたアミダの言葉である。彼女は本拠にいた子供たちを宥めあやし、避難させる作業にさつきまで従事していた。それがやっと一段落ついたと名瀬に告げる。

「悪い。今俺がここを離れるわけにはいかねえからな」

「後でちゃんと子供たちのご機嫌取つとくんだね。……で、状況は？」

「まだ姿は見えないな。もう少し——」

「！ レーダーに感！ ハーフビーク級が6。間違いなくアリアンロッドの艦隊です！」

オペレーターが声を張り上げる。画面の端では6つの光点が自己主張を始めていた。

それを見た名瀬は、『わざとらしく顔を顰めてみせる』。

「ちつ、予測よりも早いか。……お前らみんな、ハンマーヘッドから降りろ。少しでも退去を急がせるんだ。こっちは俺がなんとかする」

『え!?!』

いつになく緊迫感を漂わせた名瀬の物言いに、オペレーターたちはつい驚きの声を上げた。いかなる時にでも落ち着き払って余裕を見せていた彼が、焦ったように急かすことなど今までない。

「で、でも名瀬一人じゃあ……」

「なに、お前らが来るまでは、一人でこいつ（ハンマーヘッド）を切り盛りしてたんだ。まだ腕は錆び付いちやいねえよ」

苦笑を浮かべてみせる名瀬。冗談めかしているが、その言葉には有無を言わさぬものがこもっている。これは本当に急いだ方が良さそうだと判断したオペレーターたちは、後ろ髪を引かれつつも退去を始める。

「アミダ……任せた」

「ああ……まったく、『下手な芝居』だねえ」

くすりとした笑みを残して、最後にアミダが去る。それを確認してから名瀬は肩から力を抜いた。

「付き合いたい長いとあっさりバレちまうか。ま、目的を果たせたらよしとするさ」

焦ったように見せたのは、抜き差しならない状況だと思わせ、オペレーターたちを退去させるためであった。まあ半分は演技ではなく、本当に抜き差ししない状況であるのだが。

「さてと、んじやあ最後の航海といきますか」

言って名瀬はスーツのジャケットを脱ぎ、自ら操舵席に着く。久しぶりの感覚を懐かしく思いながら、彼はメインスラスタに火を入れた。

ゆつくりとハンマーヘッドが本拠から離れる。己の女房たちが安全圏に離脱するまでは、まだ暫く時間がかかるだろう。最低でもそれまでは囷となる必要があった。

そしてその後は……。

「弟分（鉄華団）ばかりに良い格好はさせられねえし、なく、とニヒルな笑みが口元に浮かぶ。」

アリアンロッド艦隊に向けて動き出したハンマーヘッド。それにいち早く気付いたのは、辟邪を駆り輸送艦の護衛を行っていたラフタであった。

「ダーリン！ まさか一人で突っこむ気!？」

泡を食ってハンマーヘッドに追いつくがろうとするラフタ。それを眼前に出没した影が押し止める。

「まずは輸送艦を安全域に逃がすことが先決だ、あんたらはここを離れるな！」

アミダの百鍊だ。しかし制止されたラフタはアミダに食って掛かる。

「でもダーリン一人じゃ！」

「名瀬のことはあたしに任せな。なに、あんたらが無事離れたら、とつとつケツまくるさ。」

何でもないことのようにアミダが言う。いつもと変わらぬ様子に、ラフタは大丈夫だと思ってしまった。『思ったかった』だけなのかも知れない。

「……分かった。気を付けて、姐さん」

「ああ」

機体を翻し、アミダはハンマーヘッドを追う。それを見送るラフタだが、胸にわだかまる不安は晴れてくれなかった。

そして、アミダが追いついてきたことに、名瀬は苦笑を浮かべる。「まったく、ここまで付き合わなくてもいいんだぜ?」

「どうせ投降するふりをして引つかき回すつもりなんだろう? お楽しみを独り占めとかずるいじゃないか、あたしも混ぜな」

「……ホント、いい女だよ。お前は」

くく、と二人して笑う。悲壮感などない。男と女は覚悟を持って死地に足を踏み入れる。

しかし敵は、彼らの思惑を越えて最低であった。

「敵本拠より艦艇1、強襲装甲艦です」

「ふん、迎撃の用意は調っていなかったか。やはり兵は拙速に限ると言うことだ」

第2艦隊の半数、6隻という兵力を持って襲撃をかけたイオクは、満足げに鼻を鳴らす。彼は悪の牙城を崩し正義を示す行為だと信じて疑っていない。そのためには『いかような手段を使っても構わない』とも。

「MS部隊を発進させろ。『例の部隊』も展開を」

「やはりあれを使うのですか。後々問題となるかも知れませんが」

「獅子は兎を狩るのにも全力を尽くすという。圏外圏に巣くう悪を根絶やしにするためにも、出し惜しみをしている場合ではない」

不安げに具申しようとすると部下の言葉を切って捨てるイオク。ここで部下が黙り込むから矯正されないのだが、この場にそれを咎める人間はいなかった。

と、そこで相対している敵艦——ハンマーヘッドに動きがあった。打ち上げられる信号弾。それは——

「停戦信号です。敵艦に随伴しているMSは1機。武装を展開している様子もありません。投降する模様ようですが……」

「ふむ、我等の偉容に恐れをなしたか。だが情けは無用。MS部隊攻撃開始!」

容赦なく向かってくる敵部隊の様子に、半ば呆れたような表情を見

せる名瀬。

「警告や宣言なしに堂々と停戦信号を無視してくるか。折角投降の台詞考えてたのによ」

「海賊だつてもうちよつとお上品さ。ま、こつちも容赦しなくて良さそうだ」

にいい、と笑みを浮かべたアミダは、機体の腰にマウントしてあったアサルトライフルとブレードを取り出す。すでに敵の機体からロツクオンされている警告ががなり立てているが、かまわずスロットルを開ける。

加速。ハンマーヘッドに先行して、敵部隊の真正面に躍り出た。好機とばかりに先行してきたMS部隊は射撃を開始するが。

「はは、遅い遅い。ランディに比べりや止まっているようなモンキー」
舞うような機動で全ての射撃を回避。最盛期を過ぎてなお、圏外圏最強と謳われたアミダの技量は衰えない。それどころかランディとの模擬戦を幾度と無く行つたおかげで、ますます冴え渡っているようにすら見える。攻撃を機体に掠らせる事すら無く、敵部隊に肉薄。そして。

閃光が奔つた。

一瞬で、1個小隊が吹き飛ばされたのだ。2度の蹴りと斬撃と射撃。それをほぼ同時に行い、4機のMSに打撃を与える。言葉にすれば簡単だが実際にそれを行える者はごく少数に限られる絶技。それに対応できる者も、ごく少数に限られる。

「たとえ隔絶した相手であろうとも！ 私は引けない！」

稲妻のように奔る閃光に向かって挑む影が一つ。緑色の高機動MS、ジュリエッタのレギンレイズ・ジュリアだ。全てのスラスターを全開にして、強引にアミダの百鍊へと追いつがり、両腕の得物を振るう。

ワイヤーによって細かい刃を繋いだ蛇腹剣。正しく蛇のようにならうち見切りにくい軌道で迫るそれを、アミダは難なくかわして見せた。

「面白い武器を使う。けど使いこなせないんじやねえ！」

まだ己の武器になれていない。そう見て取ったアミダの銃撃が、ジュリアのコクピット周辺に火花を散らす。

「くっ！ 装甲が強化されていなければ直撃だった！」
「見かけ倒しじゃないってことかい！」

双方が同時に舌を打つ。ジュリエッタは容易く倒せない強敵の存在に。アミダは面倒な相手の存在に。苛立ちと不快感を覚える。

そしてさらに戦場をかき回す存在が、この場に姿を現す。

大口径の弾雨が、戦場に巻き散らかされる。それを回避するため、アミダとジュリエッタはその場を飛び退いた。

「何のつもりです三尉！ 『私諸共とでも言うつもり』ですか！」

そう、その射撃は『味方であるジュリエッタを巻き込むことなど躊躇しない』ものであった。柳眉を逆立てて噛み付くジュリエッタをよそに、紅い凶風が舞い踊る。

「ちゃあんと避けられるように撃ったよ？ 実際アンタ避けたじゃないか」

くつくつと嫌な笑い声を上げながらその女——マリイは宣った。

ジュリアとほぼ同型。機体そのものの違いは頭頂から前方に向かって伸びるセンサーアンテナが増設されている所のみだが、その右腕には大型のガトリングガンが備えられており、左腕には盾——にしてはやたらとごつい何かを保持している。

真紅の機体、レギンレイズ・モルガン。同型でありながらまるで別物のような機動を見せる機体を駆りつつ、マリイは言う。

「こいつはアタシが引き受けた。アンタは船を押さえな」

「くっ……了解！」

吐き捨てるように言い放ち、機体を翻す。先の僅かな交戦で、技量の差をはつきりと思い知った。『自分はある機体には勝てない』、否が応でもそれが分かる。

機体の性能差のおかげで、討ち取られる可能性は少ないだろう。だが自分の腕では相手に攻撃を掠らせることも難しいと悟ったのだ。このまま戦い続けていれば良くて千日手。それでは任務を果たせない。

「訓練を重ねたというのに、まるで届かないとは……っ！」

歯噛みしながら呻くジュリエッタの背後では、紅と桃色の機体が壮絶に火花を散らしていた。

「同じ機体だったのに、まるで別物だねこいつは！」

「はっはア！ あの人の逢瀬の前に、丁度良い前菜さ！」

まるで稲妻がぶつかり合っているかのごとき戦いが繰り広げられている。技量は僅かにアミダが上回り、機動力ではやはりモルガンに分がある。互いに決め手に欠け、うちがあかない。先程の同型機よりもよほど厄介な相手だと、アミダは判断した。

「なら……こういうのはどうだい？」

く、と突如百鍊の軌道が変わる。誘うようなその動きに、構わず追いつがるマリイであったが。

「敵機がこちらに!! は、速い！」

アミダが向かったのは、ハンマーヘッドに攻撃を加えんとしていたMS部隊のど真ん中。乱戦に持ち込めば、そう簡単に射撃は出来まいと踏んでのことであったが。

にい、とマリイの口元が歪む。そして。

容赦なくガトリングが火を噴いた。

「なっ!!」

「さ、三尉!! 貴様なんのつもりだ！」

泡を食って回避するアミダ。そして弾雨に晒されるMS部隊。

本気で味方を巻き込むことに躊躇しないそのやり方。外道をなしてマリイはなんの反省も見せない。

「ほらほら、とろとろしていると一緒くたに撃つちまうぞお」

「き、貴様！ 軍法会議にかけてやる！」

「それまで生き残ってたらねえ！」

無茶苦茶だ。マリイのイカレっぷりに、さしものアミダもちよつと引いた。しかしすぐさま気を取り直す。

「そういうんなら、やりようはあるさー！」

そう言つて再び敵部隊へと肉薄し接近戦を仕掛ける。すぐさまモルガンからの射撃が襲いくる。それを回避し、あるいは敵機を盾にし

てアミダは凄いだ。

味方にすら躊躇しないと言うのであれば、それを利用して戦場を攪乱する。元々こちらは己一人。仲間が巻き込まれることを心配する必要はない。

たちまち戦場は混乱に陥った。一方ハンマーヘッドに向かったジュリエッタであるが。

「くっ！ 戦艦の癖にちょこまかと！」

ハンマーヘッドに対し、有効な打撃を与えられず苦戦していた。

名瀬が行っているのはなんと言うことはない。艦を上下左右に蛇行させ、振り回しているだけだ。当然だがそんなことをすれば航行速度は落ちる。だが戦艦の巨体でそれを行えば、MSなんぞが取り付けるはずがない。下手に近づけば弾き飛ばされるところか即座に宇宙の藻屑だ。

この状態では拿捕どころか有効な打撃を与えるのも難しい。加えてジュリアには戦艦に有効打を与えられる火力がない。GHの艦のように戦闘中もブリッジを展開していれば話は別だったのだろうが、生憎とGH以外でそのような真似をするのはごく少数だ。結局の所、手をこまねくしかないのが現状であった。

「まさか彼女は、これを分かっている！」

時間稼ぎも出来ないことが分かっている、艦の相手押しつけたのか。マリイの思考を邪推し、歯噛みするジュリエッタ。

そして、歯噛みするほど苛立っているのは彼女だけではなかった。

「ええい、たった一隻と一機に何を手間取っている！」

旗艦のブリッジでふんぞり返っているイオクだ。彼の算段としては出てきた艦を即座に下し、返す刀でタービンス本拠を押しやる腹であったのだが、予想外の抵抗に苛立ちを覚えている。

押し取り刀でこちらの艦隊も砲撃を開始したが、小馬鹿にしたように蛇行する敵艦にはまともに当たらない。そのことが余計に勘に障った。

「あの野猿は足止めすらも満足にできんのか！ MS部隊を回せ！ 敵艦の足を止めるのだ！」

「イオク様！ 敵拠点より輸送艦が2隻。どうやらこの空域を離脱する模様です」

「なに!? であれば目の前の連中は囷か!」

珍しくイオクは正確な判断を下す。そして戦術的に考えるのであれば、この後の判断も間違いではなかった。

『手段を別にすれば』。

「例の部隊を使う！ 目標、敵輸送艦!」

「で、ですが非武装の艦にあれを使うのは……」

「ここからだと言艦の砲ではまともな命中弾を得られん！ それにやつらの首魁を逃しては元も子もない！ 情けは無用だ!」

まさか囷の艦に首魁が乗っているとは欠片も思わず、イオクは容赦なく命を下す。それに応えて艦隊の前面に位置取る部隊があった。

機体そのものはグレイズであるが、その左腕は丸ごと巨大な『砲らしきもの』に換装されている。整然と居並ぶ2個小隊8機、その頭部が展開し大型の望遠レンズが彼方を捉えた。

前触れもなく、一斉射撃。放たれた何かは、瞬時に空を駆け――

衝撃が、輸送艦を揺るがした。

「な、なに!? 砲撃!」

「2番艦の機関部大破！ 損害不明、足が止まる!」

「そんな、ナノラミネート装甲をこんな簡単に!」

瞬時にパニックへと陥るタービンスの面々。予想していなかった攻撃。その正体を名瀬はいち早く理解した。

『「ダインスレイブ」!? 馬鹿な、条約禁止兵器を使ったってのか!」

野郎!」

高硬度レアアロイ製の特殊KEP弾を電磁式射出機で投射するレールガン。ナノラミネート装甲を容易く貫通するそれは、あまりの威力ゆえ条約で使用を禁じられていたはずのものだ。それを容赦なく使い己の『家族』を傷つけた。さしもの名瀬もそれには激昂する。「ただじゃおかねえ。……この借りは高くつくぞアリアンロッドオ!」

そして一気に窮地に陥ったタービンス側は、必死なあがきを見せて

いた。

「2番艦総員、1番艦に退避！」

「隔壁を降ろすだけでいい！ 消火は間に合わないから！」

「怪我人を優先して！ ……ダメだった子は、せめて、遺品を……っ
！」

決して軽くない損害。それに艦の足を止められたというのが痛かった。乗員の救助などに時間を取られては、逃げるに逃げ切れない。

「1番艦を2番艦の影に！ あれの直撃を防ぐんだ！」

「MS隊、前が出るわよ！ あいつら、許さない！」

アジーとラフタが指示を飛ばし、仲間を率いて本拠の前に出る。少しでも艦の盾になろうとするかのごとく。

旗艦の出力を上げ、名瀬は敵の旗艦に狙いを定める。

随伴機であるフレック・グレイズによって、ダインスレイブの次弾が装填される。高い威力と引き替えに小回りがきかず、また単発であるため連射は出来ない。だが確実に、鋼鉄の槍はその穂先を目標に向け――

「こんにはそして死ねやア！」

突如馬鹿みたいな速度で突つこんできた何か――切り離された大型ブースターが、ダインスレイブ部隊のど真ん中に突つこみ、2機ほど巻き込んで吹っ飛ばした。

何事、と反応する間もなく、嵐が吹き荒れる。稲妻のような機動力を持って、瞬く間にダインスレイブ部隊を文字通り蹴散らしたのは。

「だ、大出力のリアクター反応！ データに無い機体です！」

「馬鹿な、どこから現れた!？」

驚愕の声を上げるイオク。モニターの先、ジャンクと化したMSが漂う空域のど真ん中で力強くカメラアイを光らせるのは、勿論減速なしで戦場に飛び込んできたラースグリーズ。コクピットの中では、ランデイが凄絶な笑みを浮かべていた。

「メビウス1、エンゲージ！ ……なかなか愉快なこと、してくれん
じゃねえか。ええ？」

高速域で戦場に飛び込む最中、ダインスレイブ部隊の存在を見て取った彼は真っ先に潰しにかかったのだった。かの兵器がどれほどのものか、理解しているからだ。そしてそれを容赦なく使うような相手を、見過ごすような人間ではない。

「各機、予定変更だ。お前らは輸送艦とハンマーヘッドを守れ。こいつらは……俺が相手する」

「りよ、了解！」

真っ先に応えるのは昭弘。彼はブースターを切り離し、ラフタたちの前へと躍り出る。

「昭弘!? どうしてここに……」

啞然と言葉を零すラフタを背に、グシオンリベイク明王丸——昭弘は言い放つ。

「約束したろうが！ お前の背中俺が護る！」

その力強い言葉。百人力、いやもっと力強い頼もしさを覚えて、目の端に涙を浮かべたラフタは満面の笑みで頷く。

「うん！」

僅かに遅れてハンマーヘッドの全面に展開した鉄華団のMSを確認し、名瀬は毒づくように言う。

「お前ら、来るなって言っただろうが」

「へへ、そいつを素直に聞く奴はうちにやあいねえですよ！」

流星号のkokopittでにやりと笑うシノが応える。

「大人しくピンチを救われてくださいよ。言ってる間にランディ教官が……」

そう言つて戦場に目を向けたシノだったが——

「……なっ!?!」

一転して驚愕の声を上げることになった。

「ランディ！ 気を付けな、そいつは……」

「あははははは！ 待ってたよオこの瞬間(とき)をオ！ ランディール・マーカスうううううア!!」

アミダの警告の音が響くとほぼ同時に、ランディの元へと飛び込んでくる影。全ての状況をかなぐり捨てて向かってくるのはレギンレ

イズ・モルガン。その場から電光のごとき機動で離脱しようとしたラ
ンデイだが、紅き機体は張り付くように追従してきた。

「こいつ、この機動……あん時粘つてきた奴か」

ランデイの脳裏に奔るのは、かつてアリアンロッドと地球外縁軌道
統制統合艦隊を手玉に取った演習で、最後の最後まで食らいついてき
たグレイズの姿。死に物狂いというか『自分と同レベルで頭おかし
い輩』と眼前の敵機が同じ物だと判断した彼は、獣のように歯をむき出
す。

「リベンジマッチつてわけかよ。あの陰険ヒゲごういう手札か」

「そうさア、貴方のために、貴方だけのために！ アタシはラスタルの
猟犬となった！ さあ受け取ってくれよ、この滾る思いをよォー！」

アミダとの壮絶な交戦すら遊びであつたかと思わせるような、目
にも止まらぬ攻防戦が始まる。それを目にしたシノは唾然と言葉を零
す。

「うっそだろ……教官と互角だつてのかあれ」

思わず動きを止める流星号。それに向かって駆けるのはレギンレ
イズ・ジュリア。

「たかだか数機の増援でー！」

振るわれる蛇腹剣。慌ててそれを弾き飛ばし、シノは毒づく。

「くそ、楽勝つてわけにやあいかなくなつたか！」

タービンスの窮地。それはまだ終わりを見せない。

※今回のえぬじい

「待つてたよオこの瞬間（とき）をオー！」

ぎやりぎやりぎやりぎやり！

「おいそのツルハシどつから出したそしてなぜ宇宙空間で火花散る」

じつは結構前から考えていたネタ。

40・思い通りにや、させねえよ

クタン五型。花開くように展開したそれから3機のMSが飛び出す。

「ディオス、そっちは任せた！俺とデルマは昭弘に合流して輸送艦の離脱を援護する！ダンテはハンマーヘッドのフォローを！」

「了解だ！輸送艦離脱後は手筈通りに！」

1番隊と2番隊はそれぞれ3機ずつの編成である。今回参戦したのは8機。ランディを抜かせば1機余る計算だが、その残った機体は

「アヤさん、いけますか？」

「任せてください。MSはともかく撮影機材なら扱い慣れてますし」

クタンに残ったその機体は獅電のようだが、妙に胸部が大きく、両肩に大型のセンサーやカメラ類を備えた風変わりな機体だ。

【獅電偵察仕様】。戦闘に加わらず戦場を観察し情報を収集するためのものである。復座式のコパイロットシートに座しているのはなんとアヤ。彼女はオルガを説き伏せ、戦場で直接取材を敢行すべくこのような行動に出たのだ。

「敵がこっちに感付いたら逃げます。リアクターの出力を押さえたいるとはいえあり得ることですから、その辺は覚悟しておいて下さいね」

「その辺は任せます。いざというときは気にせず振り切って」

言葉を交わしながら機材を操作。複数のモニターには、被害を受けた輸送艦の様子や、撃破されたダインスレイブ部隊の様子が映し出されている。

そして。

「……なんなんですかあれ。ぜんぜんカメラが追いつかないんですけど」

追尾機能が追従しきれない速度で飛び交う閃光。彼方で行われている戦いは、いつ果てるともなく続いていった。

「ちっ、なるほど、『俺の足止め』には十分すぎるってか!」

舌を打って言葉を放つランディ。彼の算段は大幅に狂っていた。相対している敵——マリイは、これまでにない強敵であったのだ。

技量だけなら自分が上回っているという確信はある。そして機体の性能はほぼ互角だ。だが『決め手』がない。張り付くように追従し、要所でガトリングガンを放ち、こちらの動きを阻害する。仕留めるにしても時間にかかる相手であった。

さしもののランディも、この相手を放つて余所にちよっかいを出す余裕はない。『勝てないまでも十分に邪魔が出来る存在』。そう言った相手を見出し育て宛うラスタルは、やはりなまなかな策士ではないと、改めて思う。

「正直ナメてた。やってくれんじやねえか!」

「あははははは! そうじやなきや張り合いがないだろう!? じゃあ『もう一つギアを上げようか!』」

狂ったように笑うマリイ。彼女は己の機体に命じる。

「フェイズ1。『阿頼耶識システム、接続』っ!」

パイロットスーツの背中に繋がったコードが、どくりと鳴動する。く、とマリイが苦悶の声を上げた次の瞬間、モルガンがぶるりと震えた。

背筋に奔る悪寒の命じるまま、ランディは反射的に回避行動を取った。

だが。

「っ! 『俺より前に出た』!?!」

ラーズグリーズが機動の先。ランディの反応を越えたその先にモルガンは割り込んだ。咄嗟に蹴りがでる。が、それは相手の蹴りで相殺される。同様に刃が、盾が。全て割り込まれ弾かれた。その絡繰りを、ランディは即座に見抜く。

「阿頼耶識か！なるほどいっぱしの乗り手に使いりや俺並にもなる！」

「そうさア！ どうするどうする！ この程度で終わるのかい!？」

まさかだ。ランディール・マーカスと言う男がこの程度であるはずがない。

「はっ、上等。『ギア残してんのが、てめえだけだと思ふなよ』？」

ががかと、それまでスローテンポのジャズを奏できるように操作されていたコントローラーが、ハードロックを刻むように激しく操られる。

その瞬間、マリイは確かに『ラースグリーズが2体に増えたのを見た』。

「な、にっ！」

本能の命ずるままに蹴りを放つ。手応えはあった、だが軽い。

「今のアタシに見切れない!? いや、これは……」

ランディがなした絡繰りを、彼女もまた見抜く。

『センサーとカメラが追いつけないほどの急激な軌道偏向』！ それを『先行入力した』のか!」

カメラ越し、センサー越し。僅かに生じる機械的なタイムラグ。そのごく僅かな合間に無理矢理軌道を偏向させる。そうすれば例え阿頼耶識を用いたとしても、パイロットからは一瞬分身したようにも見えるだろう。だがそれをなすには相手の反応を想定してからでは間に合わない。思考より先、『数瞬先の機動を先んじて入力しなければならぬ』。しかも『相手の反応関係なしに』。

ほんの僅かな刹那に相手の虚を付けるだろうが、一歩間違えば自滅しかねない技術。かてて加えて瞬時とは言え、かかる慣性はイナーシャールコントローラーをもってしても1.5Gを越える。しかし『その一瞬があれば十分』だと、それを理解しているたランディは、あつさり躊躇なく行動に移して示し、獣のような笑みで言う。

「さてこれで五分だ。突貫工事のピアス付きがどこまで食い下がれるか、見せてもらおうぜエ！」

あくまで己が強者であり挑戦を受ける立場であると、それを崩さな

い悪魔の態度に、マリイもまた笑う。

「あははははー！　そうだよそうでなきやア！　さあ戦（舞）い踊ろうぜエー！」

2体のMSは、まるで嵐のように戦場を駆けめぐる。

それはもはや、誰にも介入できない舞踏であった。

「頭おかしいどころのレベルじゃねえぞあれ!?　なんであんな狂った機動についてけるんだよ!?!」

視界の端でランディたちの戦いを認識しているシノは、悲鳴のような声を上げた。

ランディがおかしいのは今更として、それに食い下がれる相手がいとは思わなかった。しかもなんか互角以上の戦いを繰り広げている。あんなキチ（ピー）が二人もいるとか世の中どうなってるんだ。半ば混乱したような考えが頭をよぎる。

もつとも自身が追いつけないまでも、彼らの戦いを認識できる時点でシノも大分おかしいのだが、もちろん自覚はないし指摘されても絶対認めない。

とにもかくにも。

「まあ……こっちはこっちでやつかいなんだけどなつ！」

のたうち予測しにくい軌道で迫る蛇腹剣を、流星号の両腕に備えた得物、トビグチブレードにて弾き飛ばしつつシノは舌を打つ。

相対している敵機。見たところランディと交戦している機体の同型機のようなだが、その技量は格段に落ちる。だがそれでも自分達3機と互角に戦えるだけの腕はあり、なおかつ機体の機動性はこちらを遙かに上回る。決して嘗めてかかって良い相手ではなかった。

さらにその上。

「ちっ、姐さんの所から何機か抜けてきたか」

見れば敵方の援軍がハンマーヘッドに向かってきている。アミダも獅子奮迅ぶりの戦いを見せているが、流星に全ての敵機を片づけるとまではいかないようだ。

と、そこでダンテの機体が前に出た。

「増援の足止めは任せろ！ あのですばしっこいのは任せるぜ『隊長』！」

「……おう！ 頼んだ！」

電子戦用の装備を備えたダンテの獅電は、直接的な戦闘能力は低い。その分敵部隊を効率的に『邪魔する』装備を調べていた。

「なんだ!? モニターとセンサーが!？」

迫り来ていたレギンレイズ部隊の機器にノイズが走る。大出力のレーザーを広域に照射するジャマーだ。エイハブウェーブを発するMSは通常の電子索敵が使えない。ゆえに光学系とレーザー系の索敵機構を主軸にしているのだが、高出力の特殊レーザー光波を照射することによってそれらは阻害することが出来る。もちろんGHのMSのセンサー関連技術は機密であり、阻害可能な波長を探り当てることは普通出来はしないが、ランディとマクギリスを通じそのあたりは鉄華団の知るところであった。

かてて加えてこのジャマーは。

「くっ、機体同士のリンクも!？」

僚機間のネットワークも阻害する。結果、連携が取れなくなりまともな攻撃すらおぼつかなくなる。

そんなものは。

「良くやったダンテ！ 良い狙い所だよ！」

とって返したアミダの的だ。瞬く間に蹴散らされる僚機を確認し、ジュリエッタは歯噛む。

「あの機体！ 邪魔だ！」

ダンテの機体が危険性を察した彼女は、真っ先に潰すべく駆ける。しかし。

「させねえよ！」

流星号の砲撃が的確に機動を阻害し。

「速くても動きが読めてりやあなあ！」

ライドの雷電号が果敢に接近戦を挑んでくる。

それぞれの技量は自分に劣る。しかしながら連携という点に関してはアリアンロッドの兵すら凌ぐほどのものだ。己を倒せずとも、その行動を阻害するには十分すぎた。

「くっ！ 新型を与えられてこの体たらくとは！」

情けなさに涙すら滲ませるジュリエッタ。だが相對しているシノたちも、言うほど余裕はない。

（くそ、こいつのおかげで余所に気を回せねえ。時間が経てばこっちが不利だ）

逆に言えば、自分達もジュリエッタの対処に手をこまねき、釘付けとされている状態だ。全体的に見れば敵MS部隊を翻弄し、戦局は有利に見える。だが敵艦隊は健在。それを対処できそうなランディは絶賛死闘中である。

もし形振り構わないで艦隊を前面に押し出し攻め立ててきたら、一気にこちらが不利になってしまう。そうされる前に逃れなければならぬのだが。

（姉さんがたの船が離脱するまでまだ暫くかかる。俺達だけだと足止めで精一杯。……教官が頼んだ『援軍』を当てにするしかねえか）

ランディの企みがし損じたことは今まででない。ならば今回も当てるにさせて貰うしかない。少々情けねえけどなど、シノは密かに苦笑した。

「……せめててめえは、ここで立ち往生していてもらうぜ！」

流星号がトビグチブレードを振るい、それは蛇腹剣と激しく火花を散らした。

次々と撃破されていく配下のMS。思わしくない戦況に、イオクは

ヒステリックな声を上げた。

「ええい！ 何をやっているあの野猿と狂犬は！」

少数の敵に手をこまねいている（ように見える）ジュリエッタとマリイ、二人の戦いぶり。戦況の悪さも相まってイオクを激昂させているのだった。

実際ランデイが押さえられているおかげでイオクたちは生きながらえているのだが、そんな事実など全く理解していない。ここまで来ていて目的を果たせないでは立つ瀬がないと、彼は無茶を押し通そうとする。

「残りのMS部隊も全て出せ！ 私が陣頭指揮を執る！」

「イオク様！ お気を鎮め下さい！」

「艦隊ははまだ無傷で健在です！ 目の前の戦況だけに囚われてはなりません！」

必死で諫めようとする側近。状況は未だ有利であると、説き伏せようとする。

しかしながら切り札たるダインスレイブ部隊は壊滅。MS部隊は一方的に消耗していく有り様だ。このままでは目標を取り逃がしてしまう、と言うこともあり得た。

その状況に一石を投じたのは、とても意外なことにイオクであった。

「ええい！ であれば艦隊を二手に分け、一方を敵首魁の捕縛に向かわせろ！ ここで陣取っているだけでは埒があかん！」

それは一見まともな発想に思えた。いやイオクにしてはかなりの確かな判断だったのではないだろうか。ともかくブリッジの部下たちは（やつとイオク様が戦術的な思考を！）と感動すら覚えていた。

しかし。

「ああ、ブリッジは収納させるなよ。殻に閉じこもるような臆病者に、我等の勇姿と威光を見せつけねばならないからな！」

ドヤ顔であほのような念押しがされる。鉄火場に部下を送り出すと言うことが分かっていないようだ。

やはりイオクはイオクであった。

「ちっ、動きだしやがったか」

本拠に向けて艦隊の半数が動き出したのを見て取ったランデイが舌を打つ。

「よそ見している余裕があるのかい!？」

僅かな隙を見出し、マリイが攻め込む。左腕の盾らしきもので殴りかかり――

その先端が、がばりとカニの鋏がごとく展開した。

「!」

咄嗟にそれをシールドで受け、破棄して離脱。シールドはぐしやりと鋏に握りつぶされ――

瞬時に『何か』で討ち貫かれる。

「パイルバンカー! いや、『近接戦用のダインスレイブ』か!」

小型化しゼロ距離でMSを粉碎するために改良されたダインスレイブ。射撃には使えないが一撃でMSを仕留められるその正体を一瞬で見抜く。その洞察力にマリイは笑みを深めた。

「さすが、そうでなきやあ!」

「好感度と殺意が正比例して高エなてめえ」

狂乱の度合いを高めていくマリイに対し、ランデイの精神は冷めていく。

ここまで食い付かれたのは久方ぶりであった。己と互角に持つてくる、そのような相手が現れたことに苦笑を浮かべた。

「一方的なのに慣れすぎていたか。俺様ちよつと反省」

まあ『ちよつと反省しただけ』だ。何一つ懲りてはいない。

「そういうことで! そろそろこの場は締めにしようかね!」

幅広剣を振り回し迫るモルガンの攻撃を打ち払う。そして後退して間合いを取った。その様子にマリイは期待を抱く。

「へえ、掛け値なしの全力を見せてくれる気になったかい?」

その言葉に、ランディはぬたりとした笑みで応えた。

「んなわけねえだろ阿呆」

コクピットのモニターの端、そこにはLCS回線によるごく短いメッセージが刻まれている。

『ウォードッグ隊見参』と。

轟、と減速なしで戦場突つこんで来る高速輸送艇。そのブリッジで一人の男が言葉を発していた。

「ヘイボーイズ、良い案配だ。こっちはこのまま全速で鉄火場を抜ける。お前さん方の『プレゼント宅配』後、予定通りのコースで回収するぞ。ハマこいたら遠慮無く置いていくからな」

「了解した。心配しないでも定刻には間に合わせるさ」

冷静ながらもどこか茶目つ気を含んだ声が応える。ブリッジの男はにやりと笑う。

「オーライ、それじゃ派手にクラッカーを鳴らそうか！」

輸送艇のコンテナが爆発するように展開する。中から現れたのは4体の鋼鉄。そのカメラアイがぎょうんと光を放つ。

「スリープ解除。ミッションスタート」

リアクターが起きると同時に4機は飛び立つ。それはGH払いおろしの旧式MS、ゲイレルのように見えた。だが脚部はブースターユニットに換装され、両腕には大型のミサイルランチャーを備えている。

高機動宇宙戦仕様。戦艦や要塞などに対し一撃離脱で大火力を叩き込むためのものだ。それは高速で艦隊に突っこむ。

「エイハブリアクターの反応が4！これは……艦隊の『下』からです！」

「なに!?!」

艦隊の死角からの強襲。2機ずつがそれぞれ分かれた艦隊に向かい、そして――

「プレゼントだ、全部持っていけ」

艦隊の間をすり抜けざまに、ミサイルが全弾放たれた。それは近接雷管の反応で艦に当たる前に炸裂し、『赤黒い噴煙』を巻き散らかした。その正体をマリイは即座に看破する。

「『ナノミラーチャフ』かい！ 最初からこいつが目的か！」

「おうともよ！ ぎりぎりだったがどんぴしゃの良い仕事してくれたぜ！」

良い笑顔を見せるランディ。そのことを見通しているのか、ミサイルをぶっ放してそのまま飛び去る4機――元標的艦隊所属、【ウォードッグ隊】隊長【ブレイズ】は苦笑を浮かべる。

「お仕事終了、と。後は任せるぜ【デイモン】」

そして奇襲によりナノミラーチャフをもろに喰らった艦隊は、一気に混乱が生じていた。

「レーダーが効きません！ 通信も断絶！ このままでは！」

「砲撃でチャフを吹き飛ばしつつ効果範囲から脱しろ！ 奴らを逃すな！」

イオクの命に従いチャフを振り払おうとする艦隊であったが。

「な、れ、レーダー及び通信回復しません！ 視界も!?!」

チャフの煙幕から抜け出たはずが、ブリッジのウィンドウはうつつらと赤黒く曇り、レーダーも不調のままだ。

そう、今回使われたのはただのナノミラーチャフではない。とは言ってもこれまでのものと違う点はただ一つ。

『塗料に混ぜ込んである』のだ。

ミサイルの爆発により霧状になった塗料は、艦体や機体にべったりと付着する。当然混入されたチャフの粒子も同時に。つまり『煙幕から抜け出ても有視界を阻害すると同時に、レーダーや通信を妨害する効果が続く』ということだ。この特製チャフの受領に手間取りウォードッグ隊は遅刻気味となったのであるが、その効果は靦面であった。

「一体何がどうなっている！ 早く回復させろ！」

がなり立てるイオクだが、部下たちとてなにが起こっているのか分からない状態で、半ばパニックに陥りつつある。勿論こんな状態で艦隊がまともに機能するはずもない。

その状況を見て取ったランデイは、名瀬に向かって告げる。

「旦那！今のうちだ、とつと逃げな！さっきの輸送艇が先導してくれ！」

「だが、あいつらを置いて……」

「あんたがここに留まってちゃ、嫁さんたちも逃げられねえだろうが！殿は俺達がやる。任せろ」

ランデイの台詞に乗っかって、アミダも言う。

「意地張っている場合じゃないだろ名瀬。ここは素直に従っておこうじゃないか」

その言葉に、名瀬は息を吐いて肩の力を抜いた。

「格好悪いいたりやありやしねえ。……格好悪いついでに、乗らせてもらおうとするか」

操舵桿が操作され、ハンマーヘッドは離脱を開始する。

「お前ら！必ず迎えに行くから良い子で待ってろよ！」

「アジー、帰るまで指揮は任せる。うまいこと仕切んな」

ハンマーヘッドに随伴する形でアミダの百鍊も離脱していく。

「逃がすわけには！」

それを追おうとするジュリエッタ。強引に流星号と雷電号を振り切り、ハンマーヘッドを――

そこで強烈な打撃が、ジュリアを襲った。

「邪魔はさせねえよ」

がぎんと、狙撃モードから通常モードに変形するグシオンの頭部。なんと昭弘は、離脱する輸送艦の側からレールガンでジュリアを狙撃したのだ。流石に予想外であったジュリエッタは直撃を喰らってしまふ。

「良い仕事だ昭弘！」

間髪入れずシノが間合いを詰める。叩き込まれたトビグチブレードは、狙撃を受け大きく歪んだ左肩のシールドユニットに深々と食い

込んだ。

「くっ！」

即座にシールドをパージし、離脱。これ以上の戦闘は危険域だと判断できる理性は、まだ残っていた。どのみち目標の艦は戦域を脱しつつある。追撃しきれるものではない。

「追ってこないか。……倒すべき敵とも見られていないとは……っ！」

敵の追撃がないことは僥倖であっただろう。だがジュリエッタは、それが無性に悔しかった。

そして、もう一方の激戦も終幕を迎えつつある。

「やってくれたねエ。けどこのまま帰すと思ってるのかい!？」

戦況がひっくり返されたことに動ずるところか、むしろ楽しそうに笑うマリイは全開でラーズグリーズに襲いかかる。

「帰らせて貰うさー！ 祭りの本番はまだ先なんだからよー！」

ランデイも迎え撃つ。2機は真っ向から激突——する寸前で、差し出されたラーズグリーズの左腕装甲が展開し、ぽん、と『何か』が放たれた。それは虚をつかれたマリイ——モルガンの眼前で、『炸裂し強い閃光を放つ』。

「フラッシュグレネード！ くっ！」

センサーやカメラと阿頼耶識を通して接続している以上、その効果からは免れない。視界を潰されながらもマリイは直感に従い回避行動を取る。

強い衝撃。すり抜けざまに打ち込まれた幅広剣が、右の肩口からシールドユニットごと右腕を切り飛ばしたのであった。

それを認識したときには、ラーズグリーズの姿は彼方。これから追いつがったとしても、まともに戦えはしない。マリイは俯き失望したように見えた。

「……逃……この……赦さ……」

通信妨害の影響で、イオクのがなり立てる声が途切れ途切れに伝わるコクピット。その声をかき消すようにくつくつと沸騰するような音が沸き立つ。

それは笑い声だった。暫しそれが続いた後、爆発するような勢いでマリイは天を仰ぎ、哄笑を響かせる。

「ははははははは！ いいね、いいじゃないか！ まだまだ続く！ まだまだ終わらない！ まだ遊ばせてくれるんだねえええええ!!」
狂乱の戦鬼はただただ歓喜と狂気に酔う。

ともかくにも、イオクが画策したタービンスへの襲撃は失敗に終り、ハンマーヘッドとタービンスはいずこかへ逃れた。

そしてその事実、奈落への扉を開く。

「そろそろ片づいている頃か。後は御曹司からの連絡があれば……」

イオクの作戦が失敗に終わっているなどはつゆ知らず、ジャスレイは自室で取り巻きと共に一杯引っかけていた。

作戦が上手くいけば名瀬を蹴落としタービンスと鉄華団の力を大きく削ぐことが出来る。その勢いをもって他の幹部たちに圧力をかけ跡目の席を確たる物にする、という捕らぬ狸のなんとやらを思い描いてほくそ笑む。もしマクマードが洩るようであればイオクの力を利用して……などと考えながらグラスを傾ける……が。

突然、部屋の扉が蹴破られた。

何事、と誰かが反応する前に、ぱすぱすとタイヤから空気が抜けたような音が響いて――

取り巻きたちの頭に赤い花が咲いた。

突入してきた何者かが、サイレンサー付きの銃を撃ち取り巻きたちを始末したのだと、一瞬理解できずにグラスを傾けた姿勢のまま凍り付くジャスレイ。我を取り戻したときには、覆面を被った数人の男たちから銃を向けられていた。

グラスがこぼれ落ち、絨毯に染みを作る。

「な、な、なんだてめえら！ お、俺を誰だと思っている！ ジャスレ

イ・ドノミコルスだぞ?!

目に見えて狼狽え、それでも虚勢を張りながらジャスレイは震える声で喚く。その声に応えながら、一人の男が姿を現した。

「もちろん分かっているよ。おぢさんたちやお前さんに用があつて来たんだから」

現れたのはジョニー。いつも通りのへらへらした態度だが、死屍累々の状況下に置いては、その態度が不気味なものに見える。

「な、て、てめえ! なんの真似だ! 事と次第によつちやあ……」
「まあそう慌てなさんな。すぐ済む」

虚勢を張るジャスレイの言葉を飄々と受け流す。そうしてからジョニーは眼差しを鋭い物に変えた。

「お前さん、名瀬を売ったな?」

底冷えのするような気配。背筋に氷柱をぶち込まれたような感覚を覚えたジャスレイは、「ひい」と小さく悲鳴を上げる。目の笑っていない笑顔で、ジョニーは続ける。

「いけねえなあ。いくら仲が悪いつっても、やつちやいけねえ事つてのはある。反則技は御法度つてもんさ」

「……て、鉄華団だつてGHと連んでるじゃねえか! 俺となにが違う!」

「ぜんっぜん違うだろお? 鉄華団はテイワズに儲け話を持つてきた。お前さんは身内を売った。……比ベモンには、なんねえよなあ?」

言いながら、見せつけるかのようにゆつくりと懐から銃を抜き、スライドさせるジョニー。ジャスレイは必死で訴えかける。

「お、俺が死んじまつたら! JPTトラストは、テイワズは! どうなると思つてやがる!」

「なあに心配なさんな。お前さんの後釜はいくらでもいる」
「親父に! 親父が許すはずがねえだろうこんなこと!」

「その会長から伝言だ」

淀みなく銃口が額に突きつけられた。ジャスレイは恐怖のあまり失禁しながら目を見開く。

「裏切りは許さねえ。それが何者であったとしても、だ」
ぱん、と乾いた音が響いた。

刃が奔り銃火が飛び交い鉄塊が火花を散らす。

斬り込み撃ち放ち叩き付ける。出しうる全てを出し、学ぶべき全てを学ぶ。それはいつ果てるともなく続き――

唐突に制止した。

己の持つメイスがパイルバンカーを射出する寸前で相手の喉元に突きつけられ、相手の太刀が己の頭上ぎりぎり留められている。相打ちではない、自分と相手の『やる事が完全に重なった』。それを何となく理解した三日月は、構えを解いて得物を引く。相手も同じく太刀を引いて下がった。

「これで終わり？　なんとなく大丈夫ってのは分かるけど」

その言葉に答えを返すでなく、影は踵を返して背中を向け、歩み去っていく。同時に世界が陽炎のように歪み始めた。

徐々に消え去る意識。その中で、三日月は『やつと気付く』。

「なんだ……お前だったのか、『バルバトス』」

世界が消え去る中、首の上だけで振り返ったマシンフェイスは、確かに笑っているように見えた。

ゆっくりと意識が浮上する。

真っ先に捉えたのは、涙でぐしよぐしよになったアトラの顔だった。

「…………おはようござい」

「おはようじゃないよもう！ 心配したんだからア！」

わつと泣きながら抱きつくアトラの頭をよしよしと撫でながら、三日月はコクピットの傍らで呆れた顔になってるビスケットへと語りかける。

「悪い。待たせたかな」

「やきもきしたよ。……でも、良いタイミングだ」

「何かあるの？」

三日月の問いに、ビスケットはにやりと笑みを浮かべた。

「アリアンロッドに『やり返す』。そう言う話さ」

※今回のえぬじい

「アイテムなんぞ使ってるんじゃないやねえ！」

「バルバトスちがくない？ 訓練にはなるけどさ」

なんかどっかの世界と回線が繋がりました。

おまけ

EB—08jjc—0 レギンレイズ・モルガン

レギンレイズ・ジュリアの同型機、と言うよりはプロトタイプ。

ランディと因縁のあるパイロット、マリイ・フォルクが駆り、限界性能を突き詰めた頭おかしいチューニングが施されている。

機体自体はジュリアとほぼ同じだが、血のような深紅に塗り上げられ、頭部に一本角のようなセンサーアンテナが増設されている。武装は右腕には120mmガトリングガン、左腕には相手を挟み込んでぶちかます仕様の近接用ダインスレイブが備えられており、ジュリアとは

異なる戦術を想定しているようだ。

なおこの機体には阿頼耶識システムが搭載されているが、どうにもそれだけではなさそう……？

41・万倍にして返してやんよ

惨敗。そうとしか言えない状況のイオクの元に、個人回線で通信が入ってきた。

「面倒なことになりましたな。こちらとしても予定が狂ってしまい困っております」

画面にはジャスレイ・ドノミコルスの名。苛立ちを隠せないイオクは恨み言を叩き付けるように返答する。

「他人事のように！ 貴様の根回しが十分でなかったから介入を許したのであろうが！」

「申し訳ない。こちらでもテイワズの全てを掌握しているわけではございませんで」

「言い訳はいい！ この始末どう付けるつもりだ！」

「もちろん挽回の目はあります。……『タービンス首魁の行く先』。追わせております」

通信の向こうの声に、イオクは眉を顰める。

「それはまことか？ だがまた横槍が入るのであれば……」

「鉄華団とて危ない橋を渡ったのは一緒。これ以上の誤魔化しは難しいでしょう。何よりタービンスの首魁が逃げ込んだのは「サルガツソー」。デブリ空域の最奥、並の艦隊であれば寄りつくことすら難しい領域です。勇猛なるアリアンロッド艦隊であればなんとかなるでしょうが、向こうが過剰戦力を投入できるとは思えませんな」

ますます渋い顔になるイオクであったが。

「むう、し、しかしだな……」

「そちらも成果無く帰還できぬでしょう？ こちらもこのままであれば立場が危うい。……先導はうちから出します。この機を逃せば、我々も厳しい立場に置かれるんですよ。これが最後の機会だと思つて頂きたいのですが」

判断は下され、通信は切られた。ジャスレイの執務室であった部屋で、男が溜息を吐く。

「……追い込まれているとは言え、『ボイスチェンジャー』ごときで誤魔化される』かねえ」

言葉を発した男は勿論ジャスレイではない。ただ『物真似に秀でただけの人物』だ。声質ではなく、真似する人物の語り口や細かい癖を模倣することに特化した人物。『ボイスチェンジャーを通して通信越しに会話したならば、当人と全く聞き分けが付かないレベル』の。そんな『部下』に向けて、ジョニーは親指を立てて見せた。

「上等上等。上手くいったらなんでも御の字よ。……さて、あとの『悪巧み』に勤しもうかね」

へーいとか、ういゝとかいう気の抜けた返事と裏腹に、ジョニーの部下たちは弛まず己の仕事をこなしていく。

『アリアンロッドの一角を崩す』。今までにない大仕事に対し、誰もが緊張の欠片もない。

この時点ですでに『結果が見えていた』から。

オルガは密かに歳星を訪れていた。マクマードからの呼び出しがあつたからだ。

すでに歳星にて待ち受けていたビスケット。(※三日月はまだ意識を失っている最中)そして伴ってきたユージン、シノ、昭弘という中核幹部を一同に、オルガはマクマードと対面する。

その場で口火を切ったマクマードの言葉は、オルガの度肝を抜く。「テイワズはアリアンロッドと正面切つて事を構えることにした。これからはお前らを全面的に支援する」

は？ と声を漏らしたのは誰だったのか全員だったのか。啞然とするオルガたちを前に、マクマードは寧猛な笑みを見せる。

「いい加減堪忍袋の緒が切れたってことよ。今回の件は見逃せねえ。きつちりと落とし前を付けなきや示しがつかないと考えるのは、俺だけじゃねえのさ」

マクマード個人の考えではなく、テイワズ幹部全体の方針だと匂わせる。実情はどうか分らないが、最低でもそう言う方向に舵を取っていくと、そういう決断が下されたのだとオルガは理解できた。

これまでとは掌を返したような反応であるが、恐らく『それだけの理由』が出来たのだろう。それは多分、タービンズが襲撃を受けたからではない。何か別の、『アリアンロッドに対する勝算』ができたのだろう。そう言った思考を巡らせている間にも、マクマードは次の言葉を紡ぐ。

「その上で、お前さんら——鉄華団に頼みたい『仕事』がある。こいつは断つちまつても構わねえ。良く考えて判断しな」

マクマードから依頼されたのは、確かにオルガたちを悩ませるものであった。

即座に判断出来なかったオルガは——

「なるほど、親分さんそうきたか」

相談されたランディは、さして驚く様子も見せずに応える。先の戦いからこつち、彼は暇を見てはラズグリーズの調整を兼ねてシミュレーターを走らせ鍛練を重ねていた。現在は小休止を兼ねてオルガの話の聞いている。

「親父の思惑は理解できる。……だが、どう言いつくろつても『汚れ仕事』には違いねえ。親父は断ってくれても構わないと言ったが、『もつとも適任なのは俺達だ』。それが分かかっていて、言ってるんだと思う」

オルガの言葉に、ランディはふむ、と頷いてこう言った。

「なあ大将。なんだつたらいつそ、『俺に全部預けてみる』か？」

「それは……」

ランディは不敵に口元を歪める。

「俺なら『できる』。容赦なく、徹底的に。親分さんも『誰がやれ』とは言っていないかったろう？　そういう手もありだっただってことさ」

その言葉に、オルガは暫く黙って考え込む。ややあつて。

「……いや、そいつはダメだ。教官に手伝って貰うにしても、俺がいかなきゃ片手落ちだろう。こいつは『鉄華団に依頼された仕事』なんだ。誰かに丸投げつてのは筋が通らねえ」

彼なりに責任というものについて考え方があつた。任されたものを誰か一人に押しつけるのは抵抗があつた。迷つたのは汚れ仕事であつたからで、それも「だからといって丸投げして良いはずがない」と、すぐさま思い直すくらいには真面目で真摯に考えていた。

「そうか。じゃあどうする？」

「断るのはなしだな。俺達以外にも戦力は捻出できるだろうが、確実性がねえ。この機会を逃せば手札が一つ潰れちまう。俺達がいくしかないが……行きたくねえ奴まで巻き込むことはない、か」

少しずつ考えが纏まってきているようだ。そんなオルガを見守るランディは、いつものものにやにや嗤いながらも、どことなく満足げに見えた。

鉄華団との話を終えた後、マクマードは一人酒杯を傾けていた。

「リボン付きめ、面白い連中を紹介してくれたもんだ」

鉄華団を呼び出すより先、『ランディからの紹介』という名目でマクマードの元を訪れたのは一人の男。ランディが依頼した『運び屋』、その営業だと名乗る男は、一見どこにでもいるサラリーマンのように見えた。

「で、危ない橋を渡った引き替えに俺と交渉したいって話だが……な

にが望みだ？」

正面には威圧感を漂わせたマクマード。そして周囲には強面の黒服が居並んでいる。そんな中でも男は微笑を浮かべ、話を切り出す。「現在そちら（テイワズ）では、タービンスが業務を停止せざるを得ない状況下と思いますが、そうなると運輸関係は手が不足しているのでは？ もしよろしければ、我々が運輸業務を一部なりとも『代行』いたします。いかがでしょうか」

「ほう？」

確かに現状でタービンスは活動することができない。運輸関係は大きなダメージを受けているのは確かである。しかし。

「……生憎と、輸送をやっているのはタービンスだけじゃねえ。それに他の会社にも伝手がある。お前さんらの出番はないんじゃないかなるかね」

余裕はないが、ぎりぎりなんとか業務を回すことは出来る。仮にも圏外圏最大の企業だ。配下の一つが動けなくともカバーできるだけの力はあった。

それが分かかっていてなお、男は余裕を崩さない。

「そうですか？ まだ手が足りていないところがあるでしょう。例えば……『大つぴらに出来ない商品』とか」

その言葉に黒服たちは一斉に懐に手を突っこもうとしたが、マクマードはそれを手で制す。

やはりか、という思いがあった。『裏社会の人間』であれば、この『商機』を逃すはずはない。あるいはこの状況、ランデイが画策したものではなく『目の前の男がこの機に割り込んだ』のかも知れない。

そうだとしても、乗ってみる価値はあるかも知れないと感じる。

（あのリボン付きが、欲に乗じただけの益暗を紹介するはずはねえ）

信頼とは違う確信がある。マクマードは話の続きを促した。

「今アリアンロッドに睨まれている状況で、後ろ暗い運輸は滞っている。実の所この状況、『我々の後ろ盾』も困ってしまいましたね。圏外圏や火星産の『安いお薬』なんかが回ってこなくなった。商売あがったりどころじゃない、というのは理解して頂けるでしょう」

マクマードに許しを得てから煙草に火を付ける男。話は分かる。圏外圏や火星の貧困層などを利用して製造される『特殊なお薬』などは、確かに地球圏で製造されるものより原価が安く仕入れられるだろう。そしてテイワズの暗部にとって間接的ながらも資金源の一部となっている。流通が滞っているのは、テイワズと地球圏の裏組織、双方にとって損失となるのは間違いない。

かてて加えて。

「その上で、そちらは『表と裏の切り離しを考えている』。具体的には再起させたタービンスには裏の業務から全面的に引かせ、表の看板にしたいと思っっているのでは？」

「ふん、なんでそう思う」

「名瀬・タービン。後釜に据えるんなら『汚れを落としておいた方が都合が良い』。でしよう？」

そこまで読んでいるかと内心舌を巻く。確かに今回のことで、表も裏も同様に扱うのは危険ではないかとマクマード以下幹部たちは判断し、業務の分断を考えていた。そして女性を積極的に雇い入れ、福利厚生などもしっかりしたタービンスは、後ろ暗いことから足を洗わせれば十分に看板としての役割を果たせる。確かにそのような目論見があった。

「改めて雇い入れる裏の方も、出来れば『尻尾切り』しやすい方が良い。その上でそれなりの信用……と言うよりは損得勘定で裏切らないような相手ならベター。丁度我々のような、ね」

「お前らが裏切らねえ、って保証は？」

「そりゃあ、裏切りなんてしようものなら地球圏の裏組織とテイワズ双方を敵に回すって事になります。そこまでの度胸なんてとてもでも」

わざとらしく両手を広げて宣う男。理には適っている。だがその言葉の全てを信じるにはまだ足りない。それを理解しているだろう男は、『次の手を打ってきた』。

「それに……もはやアリアンロッドは『脅威に値しない』んですよ」

胸のポケットから取り出したメモリーを、ことりとテーブルに置

く。それはなんだと言いたげなマクマードの視線を受け、男は言う。「『アリアンロッドが編成の詳細と、行動の予定』。そのデータです。ご入り用ならリアルタイムのものも提出できますよ?」

「おいおい、どっからそんなもの持ってきやがった」

とんでもない手みやげであった。内心の驚愕を押し殺して問うマクマードに、男は笑みを深めて応える。

「人間3人もいれば派閥が出来る。ましてや万人も集まれば、1人や2人心底性根の腐った奴も混ざる。アリアンロッドも例外じゃないってことですよ」

それでなくともGHには、モンターク商会を始めとした後ろ暗い伝手があつた。さらには現在権威そのものが揺るがされ、組織の秩序自体が崩れ始めている。隙を突くのは容易いことではなかったが、不可能でもない。

「今度の武力衝突。アリアンロッドが勝つても負けてもGHの権限が低下することは避けられない。表と裏の切り離しが出来ていけば、後ろ暗い仕事も切り抜けやすくなる。ましてやアリアンロッドの動きが完全に読めていけば……言うまでもありませんね?」

これはなるほどぐうの音も出ない。十分な勝算があつて、なおかつ男の組織にはテイワズや裏組織を裏切る旨みがないとききている。勝ち馬に乗るのではなく『勝ち馬が負けたときのことを考慮した商談』を持ちかけてきた。ただの博打打ちに出来ることではない。

そんな交渉の様子を思い出して、マクマードはくく、と忍び笑う。「どうしてどうして、まだまだこれから面白くなりそうじゃねえか」

後10年若ければ。そのように己の老いを嘆きながらも、老獪なる男は未来に期待を寄せていた。

方舟にて、鉄華団は出撃の準備を整えている。

今回の仕事でオルガは『志願制』を執った。いかなる事をするのか団員たちに説明し、参加を希望する者だけを率いることにしたのだ。しかし蓋を開けてみれば、どうしても残らなければならない人員と、ごく一部の例外を除いたほぼ全員が参加を望んでいた。

アリアンロッドのやり方に、ただ反感を覚えただけではない。先の場合で、タービンズの人員に少数ながら犠牲者が生じていた。公私共々恩あつた彼女たちの仇を討つ。古参のメンバーにはそういった気持ちもある。

まだ入団して日の浅いものたちにはそこまでの思いはない。しかし危機感を覚えている者は多い。これ以上アリアンロッドを好きにさせていたら、今度は何をされるか分からない、と。

結局予想以上の大所帯となり、改装中のサカリビを除いた全戦力を持って鉄華団は発つこととなった。正直皆に手を汚させたくないと言う気持ちもあったが、腹に据えかねるものがあるのは自分も一緒だ。ならば嫌な仕事は早々に片を付けようと、オルガは準備を急がせている。

当然ながら、復帰したばかりの三日月も用意を調べていた。

「よう、どうだ調子は」

MSハンガーで機体の様子を確かめていた三日月に、オルガは声をかけた。コクピットから出てきた三日月がそれに応える。

「うん、良い感じだよ。俺も、こいつもね」

そつかと一安心し、オルガは機体を見上げる。

「しっかし、なんか厭つくったなあ」

今までより一回り大きくなった体躯に、背中に追加された尻尾のようなパーツと4基の可動スラスターユニットがドラゴンのごとき異形のイメージを与えている。造り直され生まれ変わったバルバトス。その名を――

「ガンダムバルバトス・ゲブリュルヴィント」、ねえ。長い上によく分からねえ名前だな」

「『吠える風』って意味だつて」

「……吠えんの？」

「らしいよっ。」

ああそういうものなんだと、深く問いただすのを諦めて——ついでにバルバトスの隣で鎮座する、刀身だけで機体の全高を超えるばかりかい鉄塊を見なかつたことにして、オルガは三日月に言う。

「……すまねえな。病み上がりだつてのに」

それに返すのは、いつも通りに飄々とした言葉で。

「別に病気じゃないし。それに相手は待つちやくれないよ。やれるときにやれるんなら、やるだけさ。……それで、『どこまでやればいい』？」

改めて問われ、オルガは迷い無く応える。

「完膚無きまで容赦なく、徹底的にだ。イオク・クジャンはここで『終わらせる』」

報告を聞いたラスタルは、深々と溜息をついた。

「帰還するつもりはなさそうだな。……あからさまな罠だと言うことも分からんか」

「それで、どうします閣下。貴方のご命令ならクジャン司令も思いとどまるかも知れませんが」

通信向こうから響くからかうような声。密かにラスタルへ報告を行っているのはマリイであつた。彼女の言葉にラスタルは頭を振る。「いや、そのまま行かせてやれ。お前は艦隊の補給に乗り、ジュリエッタと共に帰投せよ」

「多分クジャン司令は艦隊ごと『消失しますが』、よろしいんですね？」
「……たかだか6隻だ。だがお前たちは失うわけにはいかん。ランデール・マーカスに対抗するためにはな」

「さすが分かつていらつしやる。では」

通信が切られ、ラスタルはこめかみに指を当てる。

「こうも使えんとは。……いや、敵の方が一枚上手だったということか」

これがもし、タービンスの首魁を始末、あるいは捕縛していれば話は違っていた。任務を達成したという口実が作れるし、テイワズ、ひいては圏外圏にプレッシャーをかけられただろう。だが蓋を開ければこのぎまだ。このままイオクが帰還すれば、マクギリス派やその他の派閥にとって絶好の攻撃材料になる。それよりはいつそ……と考えても致し方あるまい。

それに第2艦隊は、実の所『イオクという人間がない方が扱いやすい』。先代のクジャン公が尽力により艦隊人員の忠誠心と士気は高いのだが、肝心のイオクがあれである。それでもこれまでなら制御は出来ていたのだが、このところの不手際続きでイオク自身が焦りだし、勝手な行動を取り始めた。彼に対しイエスマンしかない第2艦隊はそれに逆らえない。このままだとアリアンロッドの運用そのものに支障が生じる……などと考えていた矢先の事であった。都合がよいとも言える。

もはやイオクが死んだものとして、今後の対策を練るラスタル。こうしてまた彼は一人切り捨てた。そして彼はまだ気付かない。今のアリアンロッド——ラスタル派は、己以外にはものを考える人間も、決定権を持つ人間もないことを。

そしてそれが、どのような結果を招くことになるのかを。

補給を受け、イオク率いる艦隊はジャスレイの部下との合流地点に向かっていた。

「肝心なときに機体の不調とは……やはり機能だけを追求した試作機など信用ならんな」

機体の損傷と不調を理由に、マリイとジュリエッタは補給艦隊と共

に帰投した。そのことに関して何の疑いも持たないイオクは、迫り来る危機の存在など知るよしもないし予想すらしていない。

「イオク様、予定通り案内の船が現れました。船籍を照合、ジャスレイ・ドノミコルス所有のものに間違いありません」

デブリの合間を縫うように現れたのは、金色の塗装が施されたハーブビーク級の改装艦。【黄金のジャスレイ号】と名付けられたそれは、重装甲が施され艦橋の収納機能がオミットされた……控えめに言つて趣味の悪い船であった。

しかしそれを見たイオクは、なぜか感心した様子でうんうんと頷いてみせる。

「艦橋を収納するなどと言う女々しい機能を殺し、不退転の意志を見せるか。上に立つものはかくあらねばならん」

我が艦隊でも見習うべきかななどと、そら恐ろしいことを考える。ともかく件の船との通信が繋がった。

「お待ちせしましたクジャン公。ドノミコルス専務の代理として参りました」

「ふむ？ 彼はどうした」

「歳星にて色々と手続きを。先にお待ちしているとのことです」

「なるほど、タービンスの次は本丸を……と言うことか。なかなか用意が良いな」

「なにしろ叩けばいくらでも埃の出てくる組織ですので。……では早速ですが案内を。ここから先はデブリの間隔が狭まります。ご注意ください」

黄金のジャスレイ号を先導に、イオクの艦隊はデブリ帯へと足を踏み入れる。先に進めばなるほど、デブリがかなり密集している。おまけにリーダーも効きづらい。

「こういう空域ですので、海賊や裏社会のものが一時的に身を隠すにはもってこいというわけですよ」

「追いつめられた鼠どもが考えそうなことだ。だがそれゆえに己の逃げ場を失うこととなる」

「まったくもってその通りで」

進むうちに益々航行しにくくなってくる。ややあつて。

「この先です。流石に当方が真つ先に姿を現すと問題になりますので、案内はここまでとさせて頂きますが」

「む、だが案内がないのでは……」

「この先はどん詰まりのようなものです。逃げられはしませんよ」

「そうか、ご苦労だった。吉報を待つが良い」

「はい、ご武運を」

何一つ疑うことなく、イオクは艦隊を先に進める。まあ確かに、案内人は『何一つ嘘は言っていない』のだが。

なんとか戦闘が出来る程度の間隔を空け、艦隊は進む。さすがにデブリが折り重なるその先、古ぼけた浮きドックのようなものが見えてきた。

「エイハブウェーブを確認します。この状況ですので少し時間がかかりますが」

「急げよ。さすがにここで逃げ切れると思うほど愚かではなからうが……ん？」

拡大された強襲装甲艦の映像。よく見ればブリッジ付近から発光信号を放っているように見える。

「あれは……救難信号？ 今更命乞いのつもりか？」

「イオク様、目標のエイハブウェーブを確認致しましたが……」

「どうした。はっきりと報告せよ」

「は、登録されていた目標のものと、微妙に違うようなのですが」

「なに？」

「どうということだと首を捻るが、深く考えることなくイオクは答えを出した。

「周波数に細工をしたか。みみっちい真似を。……MS部隊出撃用意！ 私が陣頭指揮を執る！」

「イオク様！ それは……」

「この空域であれば、敵も機動力を活かせん。であればMSの数が多いこちらが圧倒的に優位となる！ まさかこの程度で怖じ気づくような人間はおるまい？」

この前は自分が陣頭指揮を執っていなかったから不覚を取ったのだと、イオクは信じて疑わない。事実をねじ曲げて己の都合良いように認識しているのだろう。だがその思いこみからの行動を強くを留める人間がいないため、結局は彼の無謀を許してしまう。

次々と発艦しフォーメーションを取るレギンレイズの群れ。その中央に位置する黄土色の機体から、イオクが命じる。

「各艦砲撃を開始せよ！ 奴らの逃げ場を封じ一気に制圧するぞ！」
ゆつくりと距離を詰めながら、艦隊が砲撃を始める。目標のハンマーヘッドと思わしき艦は反撃することもなく一方的に攻撃を受け続けるのみだ。いくら何でもここまで来れば、部下たちにもおかしいという疑念が沸いてくる。イオクに具申しようかどうか、彼らが迷いだしたその時に、異変は起こった。

「目標が所定の位置に入った。起爆しろ」

どっ、と一斉に『艦隊の周囲のデブリが爆発した』。

砕けたデブリは、雪崩のように艦隊へと襲いかかる。突然のことに反応が遅れたMSが押しつぶされ、艦は回避行動を思うように取れず慌てふためく。

「なんだ！ 何が起こった！」

「イオク様、お下がりに下さい！ これは罠です！」

今更ながら部下が声を上げるが遅い。完全に体勢を崩された艦隊の周辺から、次々とエイハブウェーブの反応が立ち上がる。

スリープモードから目覚めたMS、そして2隻の改装型装甲強襲艦がデブリの影から姿を現した。

「総員、手加減も容赦もなしだ。叩き潰せ！」

イサリビの艦長席でオルガが命じ、鉄華団は一斉にイオクの艦隊へと襲いかかった。

「敵討ち、なんて殊勝なこととは言わねえが、姉さん方に喰らわせてくれた分は返すぜ！」

「徹底的に潰す。もう二度と、タービンを手出し出来ないようにな」
砲撃形態になった流星号とレールガンをも2丁構えたグシオンを筆頭に、四方八方から銃撃が叩き込まれていく。まずは射撃戦で相手の

足を止める腹だ。

大口径の砲撃が雨霰と叩き込まれる中、駆け抜ける影が二つ。

「悪いが今回お遊びは無しだ。一から十まで悉く、屠殺場の家畜のよう
に死ぬ」

一つは闇夜のごとき濃紺。右手に巨大なランスらしきものを備えた
ラースグリーズ。

「それじゃ、試し切りといこうか。バルバトス」

一つは鮮烈なる白。機体の倍ほどもある長大な得物、「対艦ソード
メイス」を担ぎ宙を駆けるのは、バルバトス・ゲブリユルヴィント。
腐った果実が落ちるがごとく、斜陽が沈むがごとく。当然の結果と
して、イオクの命運はここに尽きた。

※今回のえぬじい

「ガンダムバルバトスルプスレクスイクスアクスオックスソックス
ボックス……」

「長っ！ ホントに長っ！」

奇をてらいすぎるとよくある。

おまけ

ASWG—08RR ガンダムバルバトス・ゲブリユルヴィント

※イメージ画

ハシユマル戦にて破損したバルバトスを改修した機体。

フレームの約6割がラズグリーズの設計を元に新造され、残りの部分も補強が入っており、全体的に一回り大きくなった。そして両肩、両肘、両膝の部分に強制冷却機構が備えられ、リアクターのオーバードライブにも十分耐えられる強度を得た。

背部のバックパックにはハシユマルの残骸から移植されたテイルブレードを備え、その両側に可動スラスタユニットが2対4基追加された。サブアームは腰のサイドアーマーに位置変更された。胸部には新型のリアクティブアーマーが追加され、防御力も向上している。

また阿頼耶識システムに安全機構を兼ねた触媒が追加され、さらに改装を担当したものたちにも予想外の同調現象が起こったおかげで、システムは安全性を確保しつつも大幅に性能が向上し、本来のものと同等以上の能力を発揮できるようになった。加えて当然ながらラズグリーズと同様にイナーシャコントロールを備えているため、機動性、反応速度は格段に向上しているようだ。

武装はシースメイスを始めとした基本的なものは変更されていないが、刀身だけで機体の全高を超える巨大兵装、対艦ソードメイスが追加されている。当然MS1機分は軽くありそうなこの巨大な武器を振るってなお有り余るほどのパワーを持つ。

テイワズがもつ技術をつぎ込んで生まれ変わったこの機体は、性能的に現存する全てのガンダムフレームを凌駕する。

42・そのままそこで朽ちていけ

イオクの討伐へと向かう最中、艦内にてザックは機体の整備に追われていた。

なにしろ阿頼耶識システム担当班長として抜擢され、給料が上がると同時に責任を負わねばならない仕事が増えた。泣き言を言いそうになりながら、デインを助手として引つ張り込んで、なんとか仕事をこなしていく。一息つく頃には汗だくだった。

「ふいふ、やっとうこさ片づいたか」

「お疲れ。ほい」

一言ねぎらいの言葉をかけたデインがドリンクチューブを差し出す。それを受け取って封を切りながら、ザックは言う。

「さすがにグシオンとフラウロスは手間取ったな。バルバトスほどじゃないけど」

「新型のシステムだからか……けど」

デインは首を傾げる。

「バルバトスだけやたらと手間取るのはなんでだ？ システムは同じはずなのに」

「ああ、そりゃ『三日月さんの方が面倒なのさ』」

どういふことだとデインが訊ねれば。

「三日月さんは3回阿頼耶識の手術を受けてる。で、システム変更後は3倍量のナノマシンが活性化して、やりとりするデータ量が桁違いになってんのさ。その分調整も面倒ってわけだ。まあかわりに性能も桁違いなんだけど」

「じゃあみんな追加で阿頼耶識の手術受ければ……」

「同じ事聞いたら、そいつは無理って先生(キシワダ)言ってたぜ。なんでも阿頼耶識を複数回施術すんのは『本来想定されていない』んだと。受ける回数が多いと性能が上がるっていうのはこれまでの無茶苦茶な環境の中で偶然発見された要素で、実際の所安全性が上がった

今でもヤバいらしい。三日月さんの3回つてのはもう奇跡とかそういう領分だつてよ」

三日月のような成功例の裏には、恐らくとてつもない数の犠牲があったはずだとキシワダは見ていた。ゆえに研究が進み安全性が確立されるまでは複数回の施術は禁止すると宣言している。そして今のところ確立する目処は立っていない。ほぼ唯一の阿頼耶識システムが権威をしてそう判断せざるを得ない危険性がどれほどのものか。想像に難くない。

と、そんな話をしている所に、自分の機体の調整を行っていたチャドとダンテがやってくる。

「お、そっちも休憩か」

「はい、何とか一通り片づきましたんで」

「あとは再チェックだけか。……頼むぜ、今回の仕事はマクマード会長直々の依頼だ。手は抜けねえからな」

なんとという事のない会話。そんななか、デインが妙に浮かない顔をしていることにチャドが気付いた。

「どうしたデイン、なんか気になることでもあるのか？」

「あ、いやその……」

問うべきかどうか躊躇っていたデインだが、意を決して疑問を口にする。

「その、マクマード会長の依頼ですけど……なんでまた今回に限って『敵の殲滅』っていう指示が出されているんでしょうか？」

これまでマクマードが鉄華団に戦闘系の依頼を出したことは幾度かある。しかし今までは相手の処遇に口を出すことはなかった。鉄華団も、降伏した相手をむやみに虐殺するような真似はせず、手当すらして火星支部に引き渡すなりしていた。

だが今回に限ってGH艦隊を殲滅するよう言い含められている。これまでにない強気の姿勢に、デインは疑問を抱いていたのだ。

彼の問いにチャドとダンテは顔を見合わせてから、応える。

「そうだな……いくつか理由はあるんだがまず一つ。『見せしめ』、だな」

「徹底的にGHと敵対するという意思表示。同時にGHと敵対するであろう他の組織に対して実力を示し同調を促す、ってことを目論んでるんだろ」

チャドは2本目の指を立てた。

「二つ目。『相手の戦力を削る』。情報通りなら相手は6隻。ハーフビーク級だけで40隻以上っていうアリアンロッドからすれば一部でしかないけど、それでも第2艦隊の半分で、司令官も乗ってる」

「片づけられりゃ後が楽になるって寸法さ。最低でも第2艦隊はまともにも機能しなくなるから、向こうも立て直しが必要になるだろ」

そして、とここから先は声に出さずに、二人はマクマードの思惑を推察する。

(多分、『俺達を護りやすくする』って理由もあるんだろうなあ)

本気で敵対するならば、容赦なく叩き潰しに来る。たとえ相手がこの世界の事実上の支配者、GHであろうとも。そのような組織であれば、大概の組織は手を出すことを躊躇するだろう。もちろん危険性を理解し搦め手で何とかしようという輩も出てくるだろうが、そういうのはテイワズの領分だ。いずれにせよ、余計な手出しをされる可能性はぐんと減る。そう言った目論見もあるのだろうと二人は、いやオルガを筆頭に幹部連中は睨んでいる。

「ま、いずれにしろ今回の仕事はきっちりカタに嵌めなきゃならない」「そういうこった」

そう締めくくり、二人はダストボックスへ飲み干したドリンクチューブを放った。

「そうは言うものの、こうも一方的だと少し哀れになってくるな」

「楽なのは良いことだぜ。多分」

デブリを遮蔽物にしてレールガンを打ち込むチャドの言葉に、突出

してくる敵機の妨害をしているダンテが応える。

確かに戦況は一方的と言って良いものであった。デブリに囲まれ身動きが取れなくなつた艦隊と、同じく思うように動きが取れずほぼ防戦に徹しているMS部隊。かてて加えて重力の異常が感覚を狂わせ、まともに機動することも難しい。デブリでの活動に慣れた鉄華団にとつては、鴨撃ちにも等しい状況だ。

「ハツシュ、前に出すぎるなよ。こつちに突つこんできたのだけ相手すりゃいい」

「う、うつつ」

ダンテに注意され、機体を留めるハツシュ。大分揉まれて技量を上げた彼であるが、幹部連中から見ればまだまだ危なっかしいと言つたところだ。この戦況でも油断させるわけにはいかない。

『この戦いは前哨戦にしか過ぎない』。幹部たちはそれをよく理解していた。

片やハツシュであるが、この戦いの背景などはよく分かつていない。ただ彼は、三日月がどれほど強くなつたのか。そしてその戦いぶりを目に焼き付け、少しでも己の糧にしようとするこゝしかな頭になり。

「来るか……どれくらいのものになつてるんだ？」

その三日月駆るバルバトスは、戦場を見下ろすような位置にあるデブリの上で対艦ソードメイスを担いで跪き、戦況を伺っている。

「なるほど、よく見える。……いや、『感じる』」

カメラアイが捉える光景が、センサーやレーダーから送られる情報が、『感覚として感じ取れる』。そしてそれが『情報として理解できる』。

数値の羅列ではなくどの数値が何を示してどういった風に感じられるか。全てが理解できていた。完全に同調した機体のメインシステム、そして補助脳として機能する三倍量阿頼耶識ナノマシン。それらが単なる一体化ではなく、より完成度の高いシステムとして成立している。半ば偶然であるが、それは本来の阿頼耶識システムと同等以上の性能を發揮していた。

それに三日月の鍛え上げられた技量とセンスが加われば。

「……そこだ」

複雑に移動するデブリ。交戦するMSの位置と機動。艦隊の配置。手に取るようにそれらを読みとり——『道を見出す』。

デブリを蹴り、跳ぶ。瞬時に最大加速。

群雲のように漂う無数のデブリ、その隙間を縫うように、最小限の蹴りつけで軌道を調整し、一直線に敵艦へと向かう。それは雷光よりも速く——

「て、敵MSはんの」

オペレーターの台詞ごと、ブリッジがまっぶたつに断ち割られた。その一撃は艦橋を破碎するに止まらず、艦の竜骨にすら歪みを与え、致命傷を与える。

一瞬、そしてただの一撃。それだけで、ハーフビーク級が沈黙した。その事実にはGHの隊員たちはしばし惚けてしまう。

「……ばか、な」

そんな彼らの目の前で、爆煙からゆらりと姿を現す影。眼窩に赤い光を灯した、白き鬼神。

「う、うああああああ！」

「この、この化け物め！」

錯乱した兵が策も何もなく銃を乱射する。着弾の火花が散る中、バルバトスはゆっくりと睥睨し——

駆け抜ける。

一閃にて、3機のレギンレイズが『粉碎』された。MS1機分はある重量物が目にもとまらぬ高速でぶちかまされたのだ。その威力の前では、ナノラミネート装甲など紙にも等しい。さらにその勢いを殺さぬまま——

次なる艦の、艦橋が根本に刺突。先端が食い込んだソードメイスの中心線に、紫電が走る。

仕込まれているのは、電磁射出式のパイルバンカー。その破壊力は、一撃で艦橋を根本からへし折る。襲撃された艦はたちまちに沈黙させられた。

瞬く間に2隻が潰された。それを遠目で確認しながら、ランディは笑い声をあげる。

「はっはア！ やるじゃねえか、こいつは負けてられねえなア！」
負けず劣らずの電光がごとき機動で、敵艦に向かって突撃。真横からランスつぽい得物を突き込み装甲をぶち破る。

それは300mm滑空砲にランス状の外装を備えた、筒素といってもいい急造武器であった。しかし筒素ながらそれは歪まず曲がらず深々と突き刺さり、そしてためらいなく引き金が引かれる。

装填されていたのは徹甲炸裂弾頭。内部構造を貫き中枢に至ったその弾頭の中身は、『サーモバリック爆薬』。

固体の化合物を気化させることで粉塵と強燃ガスの複合爆鳴気を作り出し、これを爆発させる爆薬。酸素が無くても自己分解のエネルギーだけでも爆発する物質を生成するため、酸素が不足する燃料過剰の状態、あるいは真空中でも爆発させることが可能。このため、空気の量が限られている密閉空間内でも爆発する。それが艦内で炸裂すれば、結果は言うまでもない。

爆発と共に、艦が『まっふたつにへし折れた』。それを背後にいち早く離脱したラーズグリーズが、次なる得物を求めてカメラアイを光らせる。

「お代は見てのお帰りだ。ただし三途の川の六文銭だがなア！」

艦隊の半数があつという間に沈黙した。そしてほどなく残りの艦も同様に沈められるであろう。たった2機のMSでそれを成す。絶望と言うにも生ぬるい現実が、イオクに叩き付けられていた。

「ばかな……こんなばかなことが……こんなことがあつてたまるかっ！」

声を張り上げ目の前の現実を否定しようとする。当然そんなことで状況が変わるわけではない。

「イオク様！ ここはお下がりがりください！ 旗艦へ！」

「この場は我々が！ 恥を忍び、捲土重来を期して撤退を！」

イオクを庇い果敢に前へと出る部下たちの機体。しかしそれも満身に反撃できず、1機、また1機と沈黙させられていく。

そして艦隊の残りも。

「2つ目エー！」

1隻がへし折られ。

「3つ」

1隻が叩き潰される。

残すは旗艦のみ。

「張り切ってるじゃねえか三日月。機体の方も上がり調子みてえだしよ」

「さつさと終わらせて帰って、アトラの飯が食いたいから。仕事の仕事だから今回連れてきてないしね……っつと」

「この悪魔がああああ！」

高速機動の最中気楽に言葉を交わすランデイと三日月。そこにデブリを盾にして数機のレギンレイズが襲いくる。

しかし三日月はあわてず騒がず。

「見えてるよ、全部」

きゅば、と何かがバルバトスの背から射出される。それは複雑な軌道を描いて、死角から敵部隊に襲いかかった。

「ぐぎゃー!」

「なんだ!?! なにがつー!」

コクピットを貫かれ、デブリに叩き付けられ、あつという間に1個小隊が壊滅する。それを成し終え、バルバトスの背中に戻る物。銛のような形状をしたそれは、大破したハシユマルから移植したテイルブレードである。テイワズの技術陣はそれを、阿頼耶識システムを応用した思考誘導兵器として再生したのであった。

そしてバルバトスが敵を一蹴する間に、ラズグリーズは旗艦の懐へと潜り込んでいる。

「回避！ 回避を……」

「じゃあな」

隊員たちが何をしようとも間に合わず、艦橋の真上からランスが深々と突き刺さる。そして無慈悲にトリガーは引かれた。

爆発。そして轟沈。これでイオクが率いてきた艦隊は壊滅となる。

「あ……あ……」

次々と散る部下。そして蹂躪された己の艦隊。否応なく叩き付けられる現実には、イオクは魂を失ったように惚けていた。しかしやがてその表情が歪む。

「おのれ……よくも、よくも私の部下たちを！ 私の艦隊を！」

涙を流し、怨嗟の声を上げるイオク。憎悪に歪んだ顔で、モニター向こうの戦場を睨み付ける。

「許さんぞ鉄華団！ 卑劣な罠で我々を貶めた報い、今ここで！」

これまでなら、周囲の部下たちが全力で止めていただろう。だが今はそれもなく、また生き残っているものたちも戦場のあちらこちらで苦戦し、とてもではないがよそに気を回している余裕はない。

つまり、イオクを止める者は誰もいない。

「うおおおおおおお！ 我が乾坤一擲の一撃をおおおお!!」

レールガンを撃ちまくりながら、イサリビに向かって突撃を敢行するイオク。その無謀は、当然ながら通じない。

突如、強烈な衝撃が横合いからイオクを襲う。

「がっ!？」

そのまま機体ごとデブリへと叩き付けられた。レッドアラートが響き、各所から火花が散るコクピット。乱れるモニターの映像は、レギンレイズを踏みつけるような形でのしかかるMSの姿を映し出している。

「色が違うから隊長機かと思って不意打ちしたんだけど……なんだこいつ、俺より素人じゃないか」

それはハツシユの獅電。不用意に飛び込んできたイオクの機体をインターセプトしたのであった。

そうとは知らないイオクは「貴様！ 卑怯な……」などと言いつつ抵抗しようとするが、当たり所が悪かったらしく機体はうまく動かない。それに構わず獅電は得物のトビグチブレードを振り上げる。

「悪いな、今回は情け無用なんだってよ」

「ま、待て……っ！」

通信が通じていないことも分からぬままイオクが制止の声を上げ

るが、当然止まるはずもない。

勢いよくトビグチブレードがレギンレイズの胸部に突き刺さった。

「敵MS部隊、全機掃討しました。敵艦も全て沈黙。生き残りが内火艇で脱出を図っているようですが、どうします団長」

「放っておけ。なぶり殺しにするつもりはねえが、わざわざ助けてやる義理もねえ。どのみちここから生きて出られやしねえよ」

このデブリベルトの奥地、内火艇では脱出どころかまともに航行することだつてできはしまい。少し離ればアリアドネは疎かLCSの通信すらまともに届かないこの空域に救助の手が伸びる可能性は低く、脱出を図った彼らは緩慢に死んでいくしか道はなかった。

ふう、と小さくため息。そうしてからオルガは全員に通信を開く。「状況終了、撤収するぞ。テイワズの艦と合流後、歳星に向かう。忘れ物すんなよ?」

戦いが終わったことを告げると、一気に場の緊張感が解ける。やはり皆気を張っていたらしい。

元々ゆるんでいた首元のネクタイをさらにゆるませるオルガの元に、ホタルビを仕切っていたユージンから通信が入った。

「お疲れ。こっちは滞りなく撤収作業に入った。損失損傷は無し、全員無事だ」

「ああ、こっちも問題ない。……なんとかやりこなしたな」

「だな。……けど本番はこっからだぜ」

「分かってるさ。だが今は少しでもみんなを休ませてえ」

「おう、じゃあとつとと引き上げるか」

多分ユージンも、いやこの仕事に従事した多くの者が後味の悪さを覚えていることだろう。一方的な虐殺など、気分のいい物ではないのだから。

この思いは忘れてはいけないと、オルガは思う。忘れてためらいなくこのような仕事をこなすようになってしまえば、『GHと同じような物になってしまふ』という危惧があった。必要でなければ、決して手を染めてはいけないと改めて自戒する。

「……できればこんな仕事は、これで最後にしたいもんだ」

小さな呟きは、しかし存外重くブリッジに響いた。

イオク・クジヤンはまだ生きていた。ハツシユが打ち込んだ一撃は、機体の機能をほぼ停止させたものの、コクピットを完全に潰すまでは至らなかったのである。

これは機能を停止させればそれでいいと事前に言い含められていたゆえに、完全にとどめを刺されなかったからであるが、それは幸運でも何でもなかった。

「くそ、くそー！ うごけ、動いてくれエー！」

赤く染まりアラート音ががなり立てるコクピットの中、半狂乱がちやがちやと操縦桿を動かすイオクであったが、機体はうんともすんとも反応しない。

ここまで窮地に陥ったことなど今まで一度もなかった。訓練を重ね経験を積んでいけば、最低でも無謀な突撃など選択せず、たとえ機体が機能停止に陥っても脱出を計るくらいはやってのけただろう。しかし部下におんぶでだったことといった具合であったイオクは、パイロットとして基本的なサバイバルの方法すらろくに覚えていなかった。

「だれか！ おいだれかいなのか！」

部下に通信を繋ごうとするが、受け取る相手はすでにいない。内火艇にて脱出したものたちはイオクの行方を懸命に捜そうとしていたが、内火艇の非常用通信機器ではデブリベルト奥地で機能を発揮しき

れず、また思うように航行できないため難航しているのであった。
(それ以前に彼ら自身がすでに詰んでいるのだが)

救いのない窮地に、イオクは正気を失っていく。歪んだコクピットハッチを叩き、無駄な叫び声を上げ続ける。

「だれか……だれかア！ 返事をしろ！ 私はここだぞー！」

彼は気付かない。この期に及んで『誰一人部下の名前を呼んでいないことに』。『信を寄せ頼れる配下など、一人もいないことに』。もつとも気付いたところですでに手遅れだ。

涙と鼻水を垂れ流し、彼は無意味に声を張り上げ続けた。

「私は、私はここで……こんな所で！ だれか……だれか！ ラスタル様！ いやだ！ こんな所はいやだああああー！」

ゆつくりと黄土色のレギンレイズを乗せたデブリは流れゆく。デブリベルトの奥へ、奥へと。

「ラスタル様ア！ だれかア！ 私は！ 私を！ たすけて……！」

真空に声は響かず、イオクの機体は闇の中へと消えていく。

いずれ電源は落ち、酸素は尽きるだろう。それまでに助けが来る可能性はきわめて0に近い。いや、『ほぼ確実に来ない』。

イオク・クジャンは、誰にも顧みられることなくじわじわと朽ちていく。

鉄華団が歳星に帰還してすぐ、テイワズの幹部会が開かれた。帰還したばかりのオルガも呼び出され、末席に座している。

「今日お前らを呼び出したのは他でもねえ。今後の方針について話しておきたいと思ってな」

「それは構いませんがね親父、ジャスレイの旦那が見あたりませんが？」

前置き無く切り出したマクマードに、幹部の一人が問いかける。そ

れに對して、マクマードはこともなげに応えた。

「ああ、ヤツは『大病を患つて』な。多分もう『病院から出てこれねえ』」
その言葉に、マクマードの全盛期を知る幹部たちは震え上がった。事実確かにジャスレイは病院のベッドの上だ。しかし『頭半分吹っ飛ばされて、無理矢理機器で心臓を動かされている状態』を生きていると言えるのかどうか。

財産関係を処理するのに必要な生体認証などを行うためだけになされている処置。それはマクマードが最盛期に裏切った部下やら打倒した敵組織の利権を奪うときによく使った手段だ。今後自分達が裏切ったりすれば『容赦なくやる』。言外にそう示しているのだと、否応なしに理解せざるを得ない。

戦慄する古株の幹部。そうでないものたちも、ただならぬ空気に緊張感を漂わせる。重苦しい雰囲気の中、マクマードは敢えて軽い口調で言う。

「余計なことをしなければ、『病氣』にはならんさ。気を付けろよ？
……それはともかくとして本題だ。これより先、テイワズはマクギリス・ファリドを支援し、アリアンロッドと雌雄を決する方向で舵を取りてえと考えている。異存のある者はいるか？」

唐突な宣言に会議場がざわつく。GH最大戦力であるアリアンロッドは、その武力で圏外圏にすら多大なる影響力を与えてきた。直接ではないとはいえ、対立の姿勢を取るのは無謀ではないか。そういった空気が流れる。

それを見やつて、マクマードは再び口を開く。

「不安になるのも仕方がねえ。だが……ついこの間、第2艦隊6隻を、司令官ごと始末させた」

ざわめきが大きくなる。疑心暗鬼になる者も多かったが、次なるマクマードの行動で沈黙するしかなかった。

スクリーンに映し出される、第2艦隊の壊滅。その光景は何よりも雄弁に事実を伝えている。

「このように、罫に嵌めてな。たしかに条件を整えてやつたのことに見えるが、逆に言えば『条件さえ整つてしまえば、アリアンロッドに

も十分対抗できる』。やつらは不死身でも何でもねえ。なりはでかいが俺達と同じ人間だ。そして……俺はマクギリスという男が、連中と事を構えるに十分な力を持つてしていると判断した」

手元に渡った資料を見ながらマクマードの言葉を吟味する幹部たち。数値だけ見れば彼が集められる戦力はアリアンロッドの半数ほど。それに鉄華団が加われば、やりようによつては勝てる戦力差ではある。だがこれが決め手になるものなのか。まだ疑念を持つ幹部たちに、マクマードは『燃料』を投下する。

「この戦力だけじゃねえ。マクギリスは『アーヴラウを筆頭に経済圏をいくつか抱き込んでいる』。GHに反旗を翻すと同時に、政治的な圧力をかけるって寸法さ。テイワズもそれに便乗させてもらう」

再び場がざわめく。単に武力によつて制圧するのではなく、GHが孤立する包囲網を敷いて追い込もうというのだ。GHの図抜けた武力であれば戦いを切り抜けることは出来るかも知れないが、その後の政治闘争で勝ち目があるかどうか。

「要はこの戦、戦場の勝ち負けじゃねえんだ。受けた時点でアリアンロッドは不利になる。やつらは絶対戦いに負けられねえが、マクギリスはそうじゃねえ。敗退してもやりようがある。言ってみればもう『勝ち筋は決まってる』のさ。ここまでお膳立てされて、見逃すにやあ惜しい話だと思わねえか？」

幹部たちの目の色が変わった。確かにこれならばアリアンロッドを圧することが出来そうだ。その後の利権にどれだけ食い込めるか。勝負のしどころであることには違いない。

大分場の雰囲気乗り気に色づいてきた。それを確認してマクマードは――

「多分俺の最後の大事な事だ。派手にやりてえよな」

『己の引退をほのめかした』。

今度はざわつくどころか目に見えて驚愕の声を上げる幹部たち。まあまあと幹部たちを宥めて、マクマードは話を続ける。

「こんな大事な事だ、俺もかなり骨を折らなきゃならない。さすがにその後いつまでも頭張ってるって訳にはいかねえ。いい加減隠居も考

えるってもんよ」

そこでだと、にやりと意味ありげに笑みを浮かべる。

『有望な奴を、養子にしてみた』。……おう、挨拶しな」

促され会議場に入ってきたのは、マクマードと同じく羽織袴姿の男。その男は深々と頭を下げてから、緊張しながらも堂々とした態度で言葉を放つ。

『名瀬・バリストーン』と申します。若輩者ではございますが、皆様にはなにとぞお引き回しのほど、よろしくお願い致します」

幹部会が終わってすぐに、オルガは名瀬に呼び出され個室で杯を交わしていた。

「驚きましたよ。親父も大胆な手を打ったもんです」

『圏外圏だからこそその裏技』さ。まあ俺もこんな事になるとは思っていなかったんだが」

迂闊なことは言うもんじゃねえと、少しの後悔を含んで名瀬は言う。

圏外圏は正式にどこの経済圏に属しているというわけではない。ゆえに戸籍データなどは『一応』共有していると言うだけで、いくらでも誤魔化しようがあった。そも宇宙生活者であった名瀬の個人データは元々いい加減なものである。一度死んだことにして新たなデータをでっち上げることなど容易い。

とは言っても堂々とこのようなことをやってのけるのだ。アリアンロッドに対する意趣返し of 意向が多分に含まれているのだろう。同時にマクマードの『本気』が感じ取られた。

「GHの武力闘争。それに乗じた大規模の変革。親父はそれに真っ向から立ち向かう気だ。そのために俺を後釜に据えた。……そして自分分は『テイワズの暗部を一手に引き受ける』腹積もりなんだろう」

「テイワズ自体も変えていく。確かに親父は前からそんな素振りを見せていましたね」

「ちまちまと不正を潰していくだけじゃ埒があかねえと思たんじゃねえかな。アーヴラウでやらかしてくれただ阿呆のこともあるし」

あのような手合いを出さないためにも、組織は改革するべきだ。しかも大胆に。今回のことはそれに都合が良かった。そう言うことなのだろうと名瀬は判断している。

「どっちにしろ、俺はもう迂闊に動けなくなった。タービンスの再編成の事もあるしな」

名瀬自身もタービンスも、軽率な行動は出来ない。GHの闘争に関しては、全面的に鉄華団へ任せるしかなかった。

済まないと、名瀬は頭を下げる。

「俺は自分の女房たちの仇も討てねえ、情けない男だ。かてて加えて面倒を全部お前らに押しつけちまう。……だがそれでも、頼む。命を張ってくれねえか」

もちろんオルガの答えは決まっていた。名瀬に面を上げさせ、彼は力強く言う。

「兄貴が気に病むことはありません。これはもう俺達の戦いだ。必ず、アリアンロッドに一泡吹かせて見せます」

その言葉に迷いはない。

ラスタルの元に、とある人物から連絡が入った。

「あんたらとは金輪際縁を切らせて貰う」

開口一番に縁切りを申し出たのはマクマード。元々薄い繋がりを保っていた彼らであるが、その細い線すら断つと彼は宣言する。

内心の動揺をおくびにすら出さず、ラスタルは応えた。

「クジャン公の独断専行については申し訳なく思っている。もちろん

相応の補填もさせてもら——」

「3度だ」

ラスタルの台詞を、マクマードは容赦なく叩き切った。

「アーヴラウとの商談。火星のハーフメタル採掘場。そしてタービンズ。うちの商売をことごとく潰してくれたよなあ？ 仏様でもぶち切れるってもんさ」

今のマクマードは最盛期に近い気迫を持って相對している。加えてアリアンロッドに對して勝算もあつた。もはやラスタルの顔色を窺う必要もないと強氣である。

「グジャン家の御曹司が独断だつた、つてなら尚更だ。あのお坊ちゃん、真つ先に非武装の輸送艦を襲わせたそうだぜ。手下の躰も出来なような人間、商売人としても個人としても信用がならん」

ぎ、と微かにラスタルの口元から歯ぎしりの音が聞こえた。イオクを教育しそこねたのがこういう形で響いてくるとは。直接的な被害ではないが、圏外圏とのルートが失われるのは痛い。かといつてこの調子では交渉するのも難しかろう。

「まあ、あんたが今度の騒ぎを乗り切つたんなら先のことを考えても良いが……まずはてめえがどうやったら無事で済むか考えるんだな」
そう言つて通信は切られる。みしりと席の肘掛けが鳴つた。

ラスタルは、アリアンロッドは追い込まれていく。じわじわと真綿で締め付けられるかのごとく。

ヴィーンゴールヴ、ヘイムダルのために用意された区画の一室にマクギリスと石動は赴いていた。

ドアが開けばそこに待ちかまえていたのは、幾人かの青年將校たち。監察局、警務局、艦隊など様々な部署の所属らしい彼らは、一斉に敬礼を行つた。

「お待ちしておりました、ファリド『代表』」

一人の将校の言葉に、マクギリスは頷く。

「諸君、よく集まってくれた。……それでは始めようか、慎ましくな」

※今回のえぬじい

「え？ あれ敵の大將だったの？ ……マジで？」

→実は大金星を上げていたが相手が相手だったのでいまいち実感のないハツシユ君。

43・祭りの始まりだ

テイワズの幹部会から10日、鉄華団は地球へと発った。歳星からそれを見送るマクマードは、隣に立つ名瀬と言葉を交わす。

「あとは連中に任せるしかねえ。……聞いている話じゃ勝率は高そうだがな」

「勝負は水物、何が起こるか分かったモンじゃありません。出来る限りのことはしましたが……」

「臆病なくらいが丁度いい、つてな。ごたごた考えても仕方がないと分かってたつて、不安は付いて回るモンよ。……それで、タービンの再編成はどうなってる」

「頭目直下の組織として根回しを始めているところです。俺の名代にはアジを。補佐にビルト、クロエ、エヴァを付けます。裏の方は例の運び屋に引き継いでもらうよう調整に入りました」

「そつなくこなしてるじゃねえか。上等上等。……一つ一つやりこなしていけば、実績つてのは積み上がっていくモンだ。焦るなよ?」
「心得て」

跡目を継ぐというプレッシャーに潰されるなよと、一つ言っておく。名瀬もそれを理解しているようで、迷い無く応えた。

この様子ならテイワズの方は滞りなく次世代へと受け継がれていくだろう。あとは鉄華団とマクギリスが首尾良く事を運べば問題はないのだが。

(さて、あいつらは上手いことやれるかねえ)

完全に親の心境で、少年たちのことを思うマクマード。
なんだかんだ言っても、彼だって心配だったのである。

地球へと発った鉄華団だが、航路の最中でも準備を整え戦いに備えている。

そんな中、ハツシユは『機種転換訓練』に勤しんでいた。「すげえ……全然扱いやすさが違うな。それに反応が良い」

先の戦いにおいてイオクを撃破するという大金星を知らぬ間に成し遂げていた彼は、臨時ボーナスと同時に新たな機体を受領していた。それはアジーが使っていた辟邪である。

単純に褒美としてこの機体がハツシユに回されたわけではない。彼はそこそこの技量を持ち、そして操縦に妙な癖がない。辟邪の運用データを収集するのにうってつけだと白羽の矢が立ったのであった。「調子は良さそうね。この分ならすぐに慣れるわよ」
「機体が扱いやすいおかげですよ。たしかにこれなら、そこいらの阿頼耶識付きくらい余裕で渡り合えそうです」
訓練を終え機体を降りたハツシユに声をかけたのはエーコ。タービンスの再編成で忙しいはずの彼女がなぜここにいるかと言えば。

「出番を稼ぐため……げふんげふん。名瀬がせめてもの手助けってことで送り出してくれたのよ」

「あの、どこ向いて何言ってるんすかエーコさん」
それはさておき。

「ともかく良い感じだからって調子に乗るんじゃないわよ？ 機体は直せても、人は直せないんだから」

「うっす。気を付けます」

「まあこっちの機体は大体調整終わったけれど……」

言いながら振り返ったエーコの見る先には、もう1機の辟邪。そのコクピットから降りてきたのは。

「よーしやつとセツティングできた。これで遅れは取らないわよ！」
当たり前のように鉄華団のジャンパーを羽織っているラフタである。エーコは一応タービンスから出向してきたという形だが、彼女はなんと『タービンスを退職してきた』らしい。

なんでまたそんなことをと目を剥くオルガたちを前に、ラフタはド

ヤ顔で語る。

「あんなでつかい借りを作っておいて、返せないってのは女が廢るでしょ？　かといってタービンスの看板背負ったままじゃ色々制約あるし」

エーコはまだ裏方なので言い訳は効くが、戦場に出るのであれば話は別。以前地球で機体を誤魔化したときは訳が違々と主張する。筋は通っているように見えて強引すぎる理屈であった。

「そんなことはどうでも良いのよ！　今度はあたしがアンタの背中を護るんだから！　覚悟しなさい！」

「お、おう」

詰め寄られてたじろぐしかない昭弘。あ、これはなんか止められない。いわゆる押しかけ女房的なあれやそれで。昭弘以外の全員が瞬時に諦めた。こうしてなし崩し的にラフタは参戦することとなったのである。

「そっちも終わった？　随分早く仕上がったじゃない」

「整備班の子らが頑張ってくれたからね。かなり腕を上げてるわよ？」

その言葉に、エーコは少しだけ誇らしくなった。自分達の教えたことが、確かに少年たちの血肉になっている。そう言った手応えを感じたからだ。

「こりゃあちよつと負けてらんないわね。おねーさんとしてはひとつお手本でも見せておかないと」

袖をまくりながらやる気を見せるエーコ。

「今から張り切りすぎると倒れちゃうわよ？　ほどほどに……あ、昭弘」

格納庫に姿を現した昭弘を見つけた途端、すっ飛んでいくラフタ。昭弘に窮地を救われてから、すっかり彼の方に意識が向いている。

快く彼女を送り出した名瀬やアミダ、タービンスの面々のことを思い出し、エーコは苦笑を浮かべた。

「やれやれ、やっぱ賭けは本命か」

大した儲けにならないわねーと、肩をすくめるエーコであった。

地球に向かう間にも、マクギリスとの打ち合わせが繰り返し行われる。

地球圏に到達してからだ、まずイサリビが先行しマクギリスの配下と合流、軌道上からMSにてヴィーンゴールヴを強襲。蜂起したマクギリス派と共にその場を占拠し、セブンスターズを含めた首脳陣の身柄を確保。そしてマクギリスが声明を発表した後、アリアンロッドと雌雄を決する。と言うのが大まかな予定である。

「ラスタルはヴィーンゴールヴに立ち寄る様子もなく、艦隊の集結を急がせている。こちらの動きを察しているのだろうか？」

「船籍とエイハブウェーブを誤魔化してるからと言って、俺達は連中が集まつてる真ん前を突っ切れるのか？」

通信ごしに言葉を交わすマクギリスとオルガ。懸念はすぐさま否定される。

「戦力が整っていない状況で迂闊に手を出すほどラスタルは愚かではないさ。何しろ彼らは『後がない』。戦力の小出しは控えるはずだ」

決戦に際して全戦力を注ぎ込み、数の優位で押し切るつもりだ。その上でいくつか切り札を用意していることだろう。マクギリスはそう判断している。

すでにアリアンロッドの信用は地の底だ。経済圏にはマクギリス派からリークされた情報が流れその存在を疑問視されつつあり、コロニー群では排斥の動きも起こり始めている。ここで勝たねば、いや『戦力を多く残した状態で勝てねば』叛意を持つ多くの勢力から政治的にも物理的にも袋たたきにされるだろう。もはや事はGH内の内部抗争では収まらないのだ。

そして――

「私がヴィーンゴールヴを押さえ、バエルを手中に収めれば、『GHの

正当性は根本からひっくり返る』。そうなれば彼らの立場は益々危ういものとなるだろうさ」

「そんなに凄いものなのか？ そのバエルってのは」

「象徴という名の骨董品だよ。だがその能力ではなく、存在そのものが『GHにとつてのウィークポイントとなる』。……ま、詳しくは事を起こすときのお楽しみにおこう」

言葉だけでなく実際に楽しそうな様子で言うマクギリス。その表情が引き締まった。

「とにもかくにも、『ラスタル・エリオン本人を討てれば我等の勝ち』だ。出来れば最上、叶わなくとも彼を追い込んでいく方針は出来上がっている。だがそう容易く首を取らせてくれる相手でもない。最低でもダインスレイヴをありつたけつぎ込むくらいはしてのけるだろうな」

「それに関してはこつちも『対策を取らせて貰った』。送った資料を確認してくれ。……無駄に終わってくれば良いんだが、そうはいかないんだろうな」

「向こうも必死さ。何しろ存亡どころか己の存在意義がかかっている。死に物狂いでかかってくると思ってくれていい。それを『出し抜けばいい』のだから、こつちはまだ気楽だろう。油断は出来ないが」

「言ってくれるよ。……そつちから送られてきた資料は確認した。概ねこの方針で問題ないと思う」

「了解だ。では何事もなければ定時に連絡を入れる。よろしく頼むよ」

通信を終え、オルガは溜息を吐きながらシートに身を預ける。

準備は整いつつある。だが不安はぬぐい去れない。どうしようもないことだと分かつてはいるのだが。

「ホント、何考えているんだろうあの男」

未だマクギリスは最終的な思惑をぼかしていた。自分達に不利益となる事ではないと思う。だがそれも確信はない。

相変わらずの不気味さはある。だが彼は自分達に——いや、『GH以外の友好的な勢力』に対して、誠実に接していた。胡散臭さは払拭

できないまでも、それなりに信用している者は多い。かく言う自分達も、相応の信用があるからこそ彼の話に乗ったのだ。

いずれにせよアリアンロッドを討伐しなければならぬと言うところで利害は一致している。それをなした後どうするのか……そのビジョンが全く見えてこないところに幾ばくかの不安を感じる。

「やつがヴィーンゴールヴを占拠した後の声明、そこで思惑を見せてくれるのかどうか」

果たしてマクギリスは世界に何を知らしめるのか。新たな支配体制の設立か、それとも。

月軌道上。アリアンロッドはその戦力を集結している最中であつた。

旗艦であるスキップジャック内の格納庫。各機体が整備に負われる中、レギンレイズ・モルガンの前でマリイとヤマジンは言葉を交わしていた。

「悪いね、『例の装備』はもうちよつと時間がかかる。あと1、2回はこの状態で回してよ」

「焦らしてくれるねえ。決戦には間に合わせてくれるんだろう？」

「もちろん。それまでに死なないでちょうだいな」

互いに狂気を孕んだ笑みだ。まともな人間は関わり合いになろうとするどころか近づきさえしない。

つまりこの場に近寄るのはまともじゃない人間で。

「三尉！ ここにいたんですか！」

物怖じもせず歩み寄るのはジュリエッタ。実の所先の作戦以降、彼女はマリイと顔を合わせていなかったりする。

帰還した後、マリイは医務関係に押し込まれ徹底的に検診されていた。そしてやつと数時間前解放されたのだが、ジュリエッタは今まで

探し回っていたらしい。

途中で誰かに聞くという考えは浮かばなかったのか。いやそうじゃなくて、ともかく何か勢い込んでいるジュリエッタは、詰問するように言葉を放つ。

「あなたに聞きたいことがあります」

「なんだい藪から棒に」

「以前見させて貰った演習記録。最後まで粘っていたのは……あなたですね？」

睨め付けながらの言葉に、マリイはあつさりと応える。

「そうだよ？　今頃気付いたのかい」

「なぜです!?!」

ジュリエッタが上げた声は大きく響き、近くにいた整備兵たちはびくりと身を震わせ、そのままそこそと離れていった。そんなことに気づきもせず、ジュリエッタはマリイに詰め寄る。

「あれだけの技量、素質。鍛錬を積み重ねればランディール・マーカスと互角に持つて行けたはず！　なぜ外法なあら——」

「はいそこまで。それ以上は機密だよ」

す、と人差し指でジュリエッタの言葉を押しさえるマリイ。そこでヤマジンが言葉を発した。

「これに関しては、ラスタル閣下が直々に許可を出されたことだ。迂闊なことを口にすればあんたでも処罰の対象になる。わかるねジュリ?」

ぬたりと口の端を歪めるヤマジンの言葉に、思わず押し黙ってしまったジュリエッタ。納得がいったわけではない。だがラスタルが絡んでいると聞けばそれ以上踏み込めないのが彼女であった。

不満げな表情のジュリエッタを見て、くすりと笑うマリイ。「まあそういうじめないでくれよ」とヤマジンに言い、ジュリエッタへと語りかける。

「なんでかって理由ぐらいは応えてやるさね。……『まともやり方じゃ追いつけない』からさ」

誰にかは言うまでもない。

「彼は紛れもない天才だ。アタシも自分には才能があると思っていた。だけど彼とあって身の程つてのを思い知らされたよ。……あの人はもう、存在自体の格が違う」

それを理解できたのは、マリイにも図抜けた才能があったからだ。ランディール・マークラスという存在を理解できるだけの才覚があったのは果たして幸運だったのか。いや、彼女自身は『幸運と信じて疑っていない』。

「体が震えたよ。もし厄祭戦時代にあの人がいたならば、アグニカをも凌ぐ伝説になっていたかも知れない。アタシはあの人に追いつきたかった。あの人と同じ所に行きたかった。……けどねえ、分かっちゃまうんだよ。どう努力しても、『後一步の所で追いつけない』って」

常に一步先、そこにランディイがいる。単なる強さの話ではない。底知れぬ隠し札をいくつも持ち、その上で正々堂々真っ向からいかさまで出し抜く。あれはそう言った手合いだ。

であるならば、こちらもいかさまを使うしかない、マリイはそう判断したのだ。

「外法上等。どんな手を使ってでもあの人のいる高みに登る。アタシはそう決めた。だからラスタル司令の話に乗ったのさ」

にい、と笑むマリイ。その瞳の奥に渦巻く狂気を見て取ったジュリエッタの背筋に、ぞっと冷たいものが奔った。

しかし同時に――

「強さを求めるには、そこまでしなければならぬ物なのですか……」
思う。自分は弱い、と。鉄華団の少年たちにはあしらわれ、MAには手も足も出なかった。鍛えても限度があると、己の行き詰まりに悩んでいる。であればいつそ……と、そこまで考えが至ったところで。

「自分も（阿頼耶識の）施術を、とか考えているようだな」
突如かかった声にぎよっとして振り返れば、そこにはいつの間にも現れたのかヴィダールの姿があった。

盗み聞きでもしていたのかと妙に苛立った気持ちになって、ジュリエッタはきつめの口調で言う。

「やめておくと、そう言うつもりですか？」

「……いや、そういうわけではない」

ふうん、と面白がっている表情のマリィが、茶々を入れてくる。

「おやおや、アンタなら止めに入るかと思っていたんだけどねえ？」

「俺にそんなことを言う資格はないさ。いかなる手段を持ってしても目的を果たしたい、という気持ちは分かる」

仮面の下の表情は分からない。だがその言葉には、なにか『重いもの』が乗っていた。

「しかしそれを行うのであれば、相応の覚悟が必要となる。何しろ我々にとっては禁忌、加えて上手くいかなければ廃人だ。その上でなさねばならぬほどの物を君は持っているのか？」

「それ、は……」

ある、とジュリエッタは断言できなかった。ラスタルのために命を賭ける。ガランの仇を討つ。戦う理由はあった。だが『廃人となって戦えなくなる可能性』を考えると、二の足を踏んでしまう。

戦えなくなることが怖かった。役に立てずに見捨てられることが怖かった。自覚はなかったが、彼女はそんな恐れを抱いてしまった。

ジュリエッタの躊躇を見て取ったか、ヤマジンが苦笑しながら口を挟む。

「まあ、どのみち時間がないから施術出来る余裕なんかないんだけどね」

「……それを先に言って貰えませんか」

文句を言いながらもどことなくほっとしたような気配を見せるジュリエッタ。分かりやすいなあど、残りの三人は生暖かい目で見守っている。

「とにもかくにも、君は君のまままで戦うしかない。微力を尽くし自分の出来ることを、だ。そうすれば結果は付いてくる」

どのような形にしろ、という言葉をヴィダールは飲み込んだ。本来であれば彼女に物申すことなどおこがましい。私事のためにアリアンロッドを利用し、我を貫き通そうとするこの自分が言えたことかと自嘲する。

(閻魔に舌を抜かれる、では済まないな。どちらにしる地獄行きか)
それでも、なしたいことがある。だからこの道を選んだ。
それに関して後悔はしない。ただ。
ジュリエッタの真つ直ぐさが、少しだけ羨ましかった。

ヴィーンゴールヴ。セブンスターズの会議室にて、ラストルを除く
現役の当主たちが集められていた。

「急な呼び出しにもかかわらずお集まり頂けたこと、感謝致します」
微笑を浮かべたマクギリスの言葉に、ネモが眉を顰めてみせる。

「まだエリオン公が来ていないようだが」

その問いに、ふ、と微かに嗤って、マクギリスは応えた。

「ええ、彼は必要ありませんので」

その言葉が放たれた途端、ばんつ、と会議室の扉が開け放たれ、武
装した警務局の隊員がなだれ込んでくる。

幕は切って落とされたのだ。

「三日月、俺達の目標はMSだけだ。後は金髪の手下がなんとかする」
「了解。さっさと片づけようか」

シールドグライダーを破棄し、2機のMSが降下してくる。シールド
と幅広剣を備えたラーズグリーズと、対艦ソードメイスを担いだバ
ルバトスだ。

軌道上からの強襲降下。地球外縁軌道統制統合艦隊の十八番をそ
のまま真似て、彼らは一気にGH本拠地へと襲いかかる。

押っ取り刃で警備のMS部隊が対抗しようとするがすでに遅い。

「派手に花火を上げるぜエー！」

幅広剣とソードメイスが勢いよく叩き込まれる。

一斉蜂起したマクギリス派の兵は、ヴィーンゴールヴを含む地球圏の主要拠点を一気に制圧した。兵力で言えばGH総数の2割に満たない数だが、各所の中枢を短時間で押さえたことにより効率的な占拠を行う事が出来たのだ。

軌道上にて展開しているヘイムダル艦隊と合流したホタルビで報告を聞いたユージンは、ほっと安堵の溜息をついた。

「第一段階は成功、っと。問題はここからだ。……アリアンロッドはどうなってる？」

「月軌道上で集結してるみたいです。まだ動く様子はありませんね」

「監視を緩めないでくれ、頼むぞ。暫くはまだにらみ合いだろうが……」

「副団長、ヘイムダル艦隊から、指揮官が到着しました」

「お、来たか。ブリッジに通してくれ」

ほどなくしてブリッジに訪れたのは数人の青年将校。その代表格に向かってユージンは軽く挨拶を行う。

「初めまして、ですかね。鉄華団副団長のユージン・セブンスタークです。いまうちの団長は地球に降りてまして。申し訳ない」

「とんでもない。こちらこそ忙しい中時間を割いて貰ってありがとうございます。……現在ヘイムダル艦隊を預かっている「ライザ・エンザ」一尉です。よろしく」

凡庸な顔をした青年であるが、その瞳には力強い意志が宿っているように見える。差し出された手を握り返しながら、ユージンは注意深く将校たちを観察していた。それに気付いているのかいないのか、ラ

イザは語る。

「勇名を馳せる鉄華団と共闘できるとは、感謝極まりない。あなた達のおかげで我等は勝利に一步近づいた。礼を言わせて貰う」

「……まだ気が早いですよ。勝てるよと決まった訳じゃない」

「ああ、これは失礼。どうにも気が逸っているようで」

照れ隠しに笑うライザを見てみると、どうにも反乱などに加わるような人間には見えない。マクギリスの口車に乗せられた類じゃねえだろうなど、内心疑うユージンであったが。

「……今回の戦い、本来であればGH内部で決着を付けるべきだった。しかし我々だけでは力が足りない。あなた方には面倒をかけることになったが……この戦いを勝ち抜くため、どうかよろしく頼む」

真剣な眼差しで頭を下げる。その様子からして、どうにもただ闇雲にマクギリスに従っている訳でもなさそうだ。

「……了解しました。俺達にも戦う理由があります。気兼ねなく頼ってください」

ついそのようなことを口にするユージンも、やはりどこかお人好しのだろう。相手がかなりの信用を寄せていると言うこともあったが。

「しかし……失礼ですが、随分と俺達を買っているようで」

ちよつと信用しすぎじゃない？ とか思いつつ問いかけると。

「信用するには十分な戦果を上げていると思うが？ それに……」

なぜかドヤ顔になって、ライザは言う。

「君たちは『あの』ランデイル・マークスが鍛え上げた戦士だ。これ以上ない助太刀だと自分は確信している」

あのおっさんが原因かい。妙なところでハードルを上げられて、ちよつと頭を抱えたいユージンであった。

戦闘の爪痕が深く残るヴィーンゴールヴ。破壊されたMSが死屍累々と倒れている中、その光景を産み出した2体は周囲の警戒を続けていた。

「今のところ反応する地上勢力は無し、と。金髪の奴、上手い具合に要所を押さえたな」

機体の索敵機能だけでなく、各種通信、ネットワークを駆使して現状の把握に努めるランディ。今のところ、マクギリス派の制圧は上手くいっているように見える。

「油断は出来ないが……と、大将か？」

どうやらオルガが地上に降りてきたらしい。場合によってはヴィーンゴールヴでの籠城となることも視野に入れているため、戦力の一部を降ろしてきたのであった。何事もなければそのままとんぼ返りとなってしまうが、用心はしておくに越したことはない。

「おう、教官。こっちは問題なく降りてこられた。そっちは？」

「今のところ順調だ。順調すぎて疑っちゃうくらいにはな」

「だよなあ。……引き続き警戒していてくれ。ミカ、お前の調子は？」
「ん、こっちも問題なし。機体も良い感じ。まるで最初からこの出来だったみたいには違和感がないや」

「そいつは結構。俺達は暫くここで警備って事になる」

「チョコの人が骨董品引つ張り出して宇宙（うえ）に上がるまで、だっけ」

「ミカ、一応雇い主なんだからファリド准将って呼んでくれ。誰に文句言われるか分かったものじゃない」

「別に構わないさ。好きなように呼んでくれ」

唐突にかけられた声。オルガが驚いて振り返れば、そこには石動を伴ったマクギリスの姿があった。

「ヴィーンゴールヴへようこそ。まあゆつくりしている暇もないのだが」

「おいおい、あんた忙しいんだろうに、こんな所で油売っていいのかよ」

「バエルが存在する機密区画のロックを解除するのに少々手間取って

いてね。まあほどなく終わると思うが、それまでに少し時間が出来た」

機嫌が良さそうなマクギリス。これからが本番だというのに緊張感がねえなあと、オルガは微妙に呆れていた。

「これまでは順調な流れだ。だが、いささか順調に過ぎる」

「……教官も同じ意見だ。なんかあるなこりゃ」

「アリアンロッドもそろそろ集結する頃だが、艦隊を動かせば目立つ。やるとすれば小規模な動きだろうな」

少し考え、オルガが結論を出す。

「なら狙うのは……『ここ』か？」

「恐らく。向こうとしては私の行動を邪魔したいだろうし、決して屈しないという意志を内外に示すことも出来る。横槍を入れるなら絶好のタイミングだろう」

「戦力を降ろしておいて正解だったと言うことか。……状況は分かった。展開を急がせる」

「頼む。こちらの主力は軌道上に上げている最中だ。対応は君たちに任せる」

と、そこで石動のタブレットに着信。

「……代表、機密区画のロックが解除されたと、連絡が入りました」

「分かった。ではくれぐれも用心してくれ」

「ああ、了解だ」

ヴァインゴールヴ内に向かうマクギリスを見送ってから、オルガは眉を寄せた。

「代表……？ どういうこった」

マクギリスが機密区画に赴いてから10分も経たないうちに動きが生じた。

「副団長！ こっちの軌道の反対側から地球に突っこむ反応が二つ！」

「ちよつと待て、なんか速度出過ぎてねえか!? あんな下手すりゃ大気圏で燃え尽きちゃうぞ!」

迎撃を防ぐためか、常識外の速度で大気圏に突入する正体不明機。シールドグライダーを2重に備え、ブースターを増設したそれらは、減速するどころか加速する勢いで真っ直ぐにヴィーンゴールヴを指す。

「おいマジか。つーか正気か」

ランディをしてこう言わせる無謀。しかしながらその行為は反撃を封じる。

「総員対ショック！ やつらシールドをミサイル代わりにするつもりだ！ 直撃はなくとも衝撃波が来るぞ！」

相手の思惑を見て取ったランディが警告を飛ばす。迎撃をしようとしていた団員たちは、慌てて衝撃に備えた。

ほどなくして轟音と共に爆発したような水柱が吹き上がり、衝撃がヴィーンゴールヴを揺るがす。

いきなりのスコールがごとく海水が降り注ぐ中、三日月は舌を打つた。

「今ので索敵がパーだ。やってくれる」

どこから敵が来るか分からないと、警戒する三日月。一方ランディは。

「ハッハア！ ヴィーンゴールヴに被害が及ぶのもお構いなしか！ となれば……」

降り注ぐ海水のスコールをぶち抜き上空へ躍り出るラーズグリーズ。エイハブリアクターによってある程度慣性と重力を制御できるMSは、個体差もあるが大概飛行能力を持つ。推力過多なラーズグリーズがどれほどの物かは言うまでもない。

「やはりてめえか、マリイ・フォルク！」

「うれしいねえ、名前を覚えていてくれるとか！」

飛び出してきたラーズグリーズに挑むのは、これまた当然のように

飛行能力を持つレギンレイズ・モルガン。2機のMSは空中で激しく火花を散らし斬り結ぶ。

「今回はちよつとした挨拶さ！ お坊ちゃんがご対面を果たすまで、ちよつと遊んで貰うよ！」

「つてこたあ……やっぱ生きてたのかよ、あの坊や」

会話を交わしながらも激しくぶつかり合う2機。彼らが話題にしているもう一人は――

ロックが解除された機密区画。その通路をマクギリスは一人歩む。護衛の一人も付けないのは、『必要がない』からだ。基本機密区画にはセブンスターズの人間以外は立ち入れない。セキュリティ以上の危険は存在しないはずだった。

途中にはだかるいくつかの隔壁を暗証番号と専用のカードでもって開き、マクギリスは機密区画の中核に至る。

ドーム状の広い空間。周囲を囲む壁にはセブンスターズ各家の紋章を記したゲートがあり、その中央には一体のMSが座している。

「ガンダム・バエル」。72体のガンダムフレームが1番機。全てのガンダムが原型たるその白き機体は、ただ静かに佇んでいた。

神像のような機体を見上げ、マクギリスは語りかけるように呟く。「暫し隠遁は終わりだよバエル。今一度、その老骨を役立てて貰おうか」

そう言つて一歩踏みだし――

突如響いた轟音に足を止めた。

「やはり来たか。……そうでなくてはな」

破損した構造材が降り注ぎ、地底湖のごとく場に満たされた水面から水柱が立ち上る。それでも余裕の表情をマクギリスは崩さない。

区画の天蓋をぶち抜き、何者かが降り来る。

青きMS。ガンダム・ヴィダールの姿を目の当たりにして――
マクギリスは不敵に笑んだ。

※今回のえぬじい

「名瀬の格好を真似したら、なんか周りからすごくときめいた視線を向けられるんだけど」

ズカ的な意味でアジーさんの好感度が上がりまくってます。
格好良いから仕方ないね。

44・こいつはまったく驚いた

目の前に降り立ったヴィダール。まだバエルに乗っていないマクギリスを討つ絶好の機会……だというのに、人工湖に着水しアイドリ
ング状態となる。

そのコクピットハッチが開くのを見て、マクギリスは瞬時苦笑し
た。

(そう言うところだよ。相変わらず甘い)

姿を現したのは、勿論仮面の男ヴィダール。マクギリスは余裕の態
度を崩さないまま、語りかけた。

「戦場から回収されたとしてボードウィン家に返還されたキマリス
は、フレームを真似ただけの偽物。ということだな」

それには応えず、ヴィダールは己の仮面へと手をかける。

かしゅ、と機械的なロックが外れる音。その仮面の下から現れたの
は、深い傷跡が残る男の貌。

幾分鋭さを増していたが、それはたしかにガエリオ・ボードウィン
その人であった。

そのことにマクギリスは驚く素振りもない。

「やはりな。お前の運が良かったのか、それとも俺が甘かったのか
……」

強い眼差しを向けるガエリオは、務めて冷静さを保ちながら言う。

「……マクギリス。バエルに乗れ」

「それがどういう意味を持つのか、分かって言っているのか？」

「当然だ。お前がそれに乗らなければ何も始まら……む？」

会話を交わしている中、再び天蓋から響く音と、降り注ぐ構造材。

新たに降り来たるのは、白きMS。

「ごめん。抜かれた」

勢いよく着水しながら淡々と言う三日月。その視線は油断なく

ヴィダールに向けられている。

バルバトスの襲撃を察知して瞬時にコクピットに飛び込み機体を後退させたガエリオ。即座にサーベルを引き抜き構えた。

水面を割って駆けるバルバトス。その一撃をかるうじて回避したヴィダールが反撃しようとするが、大重量のソードメイスが想像以上の早さで斬り返され、後退を余儀なくされる。その反応を見て、三日月は悟った。

「当たらない……あつちも阿頼耶識付きか」

尋常ではない反応速度。そして特徴的な動き。自分達と同じ物を備えていると、見て取った。

しかしそれは機構的に五分になったと言うだけのこと。鍛錬、そして実戦をくぐり抜けた経験値。その差ははつきりと出る。ガエリオは回避に手一杯で反撃することは叶わない。技量の違いは明らかであった。

「やはり俺では届かない、か」

一気に距離を取る。間合いを詰めようとする三日月であったが。

「……謝罪しよう、お前たちを侮り見下していたことを」

「何？」

オープン回線で告げられた言葉の意味が分からず眉を顰める三日月。構わずガエリオは言葉を紡ぐ。

「お前たちに相対するため、俺は外道と成り下がろう。……悪いが付き合って貰うぞ『アイン』。俺の体、存分に使え！」

ガエリオのうなじあたりから伸びる配線が鳴動し、シートと一体化した機構が唸りを上げ始めた。ヴィダールのカメラアイが不気味に輝く。

途端にヴィダールの動きが変化した。打ち込まれたソードメイスに対して蹴りを放ち、その反動で跳ぶ。さらに施設内の壁を蹴って連続跳躍。バルバトスの背後から襲いかからんとする。

「速い、けどー！」

三日月が対処できない速度ではない。ヴィダールの爪先と踵からブレードが展開され、それを打ち込むように放たれる踵落としを、

ソードメイスで防ぐ。その動きに既視感を覚えた。先程までの機動とは明らかに違うのに。

「今の動き、どこかで」

どこでかは覚えていない。だが確かに『一度戦った相手の動き』だと、三日月は確信する。

それをなしたのは、ヴィダールに搭載されている機構。アーヴラウにて戦死したアイン・ダルトンの脳を利用した改良阿頼耶識システム【阿頼耶識Type E】。フレーミングした敵に対してシステムが機体をパイロットの肉体ごと強制的に操作することで、『従来の阿頼耶識の欠点である脳神経への負荷を克服しながら、機体性能を限界まで引き出すことを可能としている』。そしてこれは同時に『二人分の思考演算を同調して行うことで、反応速度と戦術の幅を拡大していた』。その能力はバルバトスの阿頼耶識システムと互角に渡り合えるほどのものだ。

だが。

「機体の性能差はいかんともしがたいか！」

速度で追いつけても機体の地力が差を生み出す。膂力、強度、追従性。全てにおいてバルバトスはノーマルのガンダムフレームを上回る。万全の整備を受けていても『偽装』でしかないヴィダールは一步劣ってしまう。

不利を察したガエリオは撤退を選択。繰り出されるソードメイスの突きをかわし、そのまま上空へと飛び去った。

「逃げるか。けど」

それを追ってバルバトスもまた飛翔する。その背後で――

マクギリスはシートに座し、上着を脱ぎ捨て上半身の裸体をさらけ出す。コクピットの様相は現存する他のガンダムフレームとは違う。

厄祭戦当時のものがそっくりそのまま残されているのだ。

当然『備えているシステム』も。

「原初にして最強。俺がその力を得るにふさわしいかどうか、試してみるのがいい。バエルよ」

そう嘯くマクギリスの背中にある物。それは『阿頼耶識システムのコネクター』。自動でシートから伸びたコードが、それに接続される。「うっ、く……」

微かに呻く。マクギリス個人用に調整され、原初に近い物を再現した阿頼耶識ナノマシンが機体とアジャスト。1分足らずの時間をもって、彼はバエルを把握する。

「同調率87%。鍛錬したかいはあったか。……では、往こう」

背部のウイングスラスターを広げ、伝説は再び空を舞う。

天空に飛び出るヴィダール。そしてそれを追ってバルバトスも空中へと躍り出た。

「ミカが追い出してくれたか！ 各員は援護に集中。巻き込まれたら吹っ飛ばされるじゃ済まねえぞ、注意しろ」

オルガの指示を受け、獅電部隊が対空砲火を放つ。それをかいくぐりヴィダールは海上へと逃れた。

「フォルク三尉！ 離脱するぞ！」

「ちっ、早いねえ！ もうちよつと楽しみたいって……新手？」

モルガンのレーダーに反応。それはヴィーンゴールヴの中央、ヴィダールが飛び出してきたあたりから現れる。

翼を広げた純白の機体。ゆっくりと上昇してくるその姿は天使のようにも見えた。

その機体——バエルから、オープン回線にてGHの全て……いや、全世界に向けて言葉が発せられる。

「私はマクギリス・ファリドである。見ての通りGHの象徴たるガンダム・バエルは我が手中に落ちた。この意味が理解できる者は抵抗を止め、我が軍門に降る事を勧める。翌朝、私が正式な声明を発表するまで待とう。……賢明なる判断を願う」

それは降伏勧告であった。しかし聞き入れられるとマクギリスは思っていない。

これは『狼煙』だ。これから始まる戦いの。終わりを告げ、そして変わっていく世界の。

むしろこれは『宣戦布告』であると、ガエリオは感じる。逸る気持ちを押さえ、彼は撤退を選択した。

「決着を付けるのはこの場ではない。宇宙（そら）へ向かう」

「応よ！ 悪いねえ、続きは上でって事さね！」

チャフとフレアをばらまきながら、離脱を計るヴィダールとモルガン。追撃するべきかと三日月は一瞬迷うが。

「追わなくても良い。こちらの目的は果たした。あとは真っ向から決着を付けるさ」

マクギリスがそれを押し止める。まあそんなことだろうと思っていたランディは、肩をすくめつつ個人回線で口を挟む。

「良いのかよ。ここで仕留めておけば後が楽になるかも知れんぜ？」

「流石に衆人環視の中では、ね。それに『大衆に分かりやすい決着』を付ける方が、後のためになる」

「まーた何か企んでやがんなお前」

「全ては織り込み済み、と言っておきましょうか。……では、次なる仕込みの準備といきましょう」

意味ありげに笑い、ゆっくりとバエルを降下させるマクギリス。ヴィーンゴールヴ上に降り立ったとき、石動から通信が入った。

「代表、大気圏を離脱するシャトルから、全域で通信が放たれております」

「奴か。……こっちにも映像を回してくれ」

モニターの端に現在放たれている映像が映し出される。ヴィダールのコクピットに座したままのガエリオが、全世界に向けて言葉を

放っていた。

「私はボードウィン家のガエリオ・ボードウィン。先ほど放たれたマクギリス・ファリドの勧告を、我々は承諾しない。マクギリス・ファリドは私とカルタ・イシュュー、そしてイオク・クジャンの謀殺を図り、養父であるイズナリオ・ファリドをその席から追い落としした。その上でファリド家、ボードウィン家、イシュュー家の権限を篡奪し、GHを手中に収めんと画策している。そのようなやり方を私は認めるわけにはいかない。ゆえに私とアリアンロット艦隊はマクギリス・ファリドを逆賊と認定し、その討伐を行うことをここに宣言する！」

堂々と宣う。その言葉を聞いたマクギリスは、眦を鋭くする。

「そう来ると思っていたよ。……いいだろう、受けて立つ」

雌雄を決するときが来た。マクギリスには一片の迷いもない。

占拠されたヴィーンゴールヴ。しかし中枢以外は穏やかであり、隊員たちの行動も限定的ではあるが自由を許されていた。

「セブンスターズ3家の後継を害しようなど……」

「だがバエルは起動した。ファリド准将が認められたと言うことは……」

各所で隊員たちが意見を交わしている。彼らの戸惑いも無理はない。GH内で『事実』として流布されている伝承によれば、バエルにはアグニカ・カイエルの魂が宿っており、正当にGHを継承する者にしか動かせないとある。事実これまで幾度かセブンスターズの者が起動させようとしたが、全く反応しなかったという記録があった。

そのような事情で静かに混乱が生じているのだ。それとは別に中枢部——セブンスターズ会議室でも事態は動いている。

「我々はアリアンロットに与しない。だが君にも協力は出来ない」

兵に挟まれ銃口を突きつけながらも、ネモはそう告げた。隣に座す

るエレクも同調して頷く。

「それぞれに言い分があり、そしてお互い正当な理由と根拠があるのだろう。だがどちらに付くにしても戦火が拡大することには間違いない。そのような選択を取るわけにはいかぬのだ」

その言葉をマクギリスは平然と受け止めた。

「でしようね。あなた方ならそう言うと思っていましたよ」

実の所マクギリスは彼らには何の期待もしていなかった。事なかれの日和見を決め込むだろうと予想していたからだ。

口ではもつともなことを言っているが、どちらが勝つても己の被害を最小限に収めたい、そのような保身しか考えていないと理解している。敵に回らなかつただけ御の字だと、彼は二人を早々に『切り捨てた』。

もちろんそれで済まされない人物もいる。

「どういうことだマクギリス！ ガエリオを！ お前は！ 我等を裏切り謀っていたというのか！」

兵に押さえつけられながらも吠えるガルス。彼はマクギリスが部屋に現れた瞬間掴みかかろうとしたが、それは叶わなかった。それでもなお激昂し続ける。

「答えろ！ ガエリオを、お前は亡き者にしようとしたのか！」

怨殺せんばかりのガルスに向かい、マクギリスは平然と返す。

「今になってそれを言いますか。2年ばかり遅い」

「なんだと!？」

「この2年、あなたは何をしていたのです？ ガエリオの死に疑問を抱くこともなく、返却されたキマリスが偽物であったことに気付くこともなく、ただ与えられる情報を鵜呑みにしていた。私のような者を妄信して」

「何を……」

言い返そうとしたガルスの目を、マクギリスは真っ向から見返す。その視線に、ガルスは気圧された。

その瞳に乗っていたのは、侮蔑と嫌悪。汚らしい何かを見る視線。これまでの人生で始めて向けられたその視線に、我知らず怯えのよう

な物すら覚える。

「あなたには何も期待していない。ただそこで、事の行く末を見届けると良い」

吐き捨てるように言い放つマクギリスに対し、何も言い返すことの出来ないガルス。

と、そこで。

「……では、私に対してはどのように評価するのかしら？ あなたは」
こつ、こつ、と廊下を突く固い音が響き、入り口を警備していた兵が道を空ける。

現れたのは上級仕官服を纏い、部下に支えられ杖を突いた女性。飾り気無く、しかし凜として真っ直ぐな視線を向けるその女性に対し、マクギリスは軽く笑みすら浮かべて言う。

「待っていたよ。カルタ・イシユ」

帰還したヴァイダールとモルガンが、整備用のハンガーに運び込まれる。

「ヴァイダールは偽装を解いて決戦仕様！ モルガンは増加パーツを取り付けて最終調整に入る！ 急ぐよ！」

ヤマジンが指示を飛ばし、整備兵や工作機械が一斉に機体へと取り付く。ヴァイダールのコクピットからキャットウォークへ降り立ったガエリオは、ふう、と息を吐いた。

そこでジュリエッタが声をかけてくる。

「セブンスターズの御曹司とは思いませんでした。それなりの身分であらうと推測はしたのですが」

「黙っていて悪かった。ぎりぎりまで正体は伏せていたかったのですね」

「いえ、事情があつたのことでしょうから。気にしてはいません」

言いながらジュリエッタはガエリオの顔を見る。

「……俺の貌に何か？」

「その、案外普通だなど思いました」

「隠されていた物が実は大したことがない、なんていうのはよくあることだ。期待に添えられなくて申し訳ないが」

微かに笑って返すガエリオ。その表情が引き締まる。

「ともかくこれで双方後戻りは出来なくなった。あとはマクギリスが何を表明するかだが……」

「恐れる物など何もないでしょう。兵力はこちらが上回り、そして我々には大儀があります。確かに強敵ではありますが、全力で当たれば倒せない相手ではない」

楽観的とも言えるジュリエッタの言葉。もちろん『強がり』と言った部分はある。彼女は鉄華団の強さを肌で実感し、一筋縄ではいかない相手だと理解していた。

だがそれ以上に、ラスタルに対する忠誠と信頼がある。この程度の苦難を乗り越えられる才覚があるという思いが。そして自分達は大儀を背負っている——『正義』をなすものだという自負がある。正義を成す者は苦難を乗り越え最後には勝つのだという、子供じみた信念が。

対してガエリオの表情は晴れない。

「……だと良いのだがな」

日が傾き茜色に色付き始めたバルコニー。そこでマクギリスとカルタは二人きりで相対していた。

「悪いわね。長時間立っているのはまだつらいのよ」

言うカルタは車椅子に座していた。最新の再生治療をもつてしても、完全に治せないものはある。例えば脳幹系。例えば脊髄の損傷。

例えば……『生殖能力』。

たった2年で、杖頼りとはいえ自力で歩行できるまでどれほどの苦難があつたか。カルタは語らず、そしてマクギリスも問うことはない。

「私が生きているのは、あなたの計算外だったのかしら？」

「否だ。だが死んでも構わないと思っていた」

いきなり斬り込んだカルタの言葉に、マクギリスは率直に返す。敢えて感情を押し殺すように、マクギリスは言葉を続けた。

「最低でも君たちの失脚は、『俺』が事を成すための必須条件だった。3家を牛耳り賛同するものたちを募って勢力を纏め上げる。そのためには、君たちの存在は障害だったんだ。GHの次世代を背負うに足る、君たちは」

セブンスターズの後継であるガエリオとカルタはその存在だけで一つの派閥を形成できる。加えてカルタはその才覚が順調に成長すればGHの頂点にも立てたかも知れないほどの傑物だ。マクギリスはその才能を恐れていた。

「あなたにとって、私たちは邪魔者で……『憎悪の対象』だったのね」
マクギリスの『出自』に関して、カルタは独自に情報入手していた。そして彼がなぜこのような行動に出たか、大まかに推測している。しかしそれを口にするつもりはない。

「そうだな、憎かった。……憎くて、羨ましくて、眩しかった。日の当たる世界で幸せに暮らしていた、君たちが」

確かに最初は憎悪と嫌悪があり、それを押し隠すのに苦労したものだ。だが暖かな空気についての間にか心を許していたように思う。己の野望を忘れそうになるくらいには。

だからこそ余計に二人を切り捨てなければならなかった。冷酷に徹さねばならないと心を鬼にして。

その上で、『通さねばならない筋を通す』。

「……地球外縁軌道統制統合艦隊の指揮権は君に返そう。あとは君の判断で好きにすると良い」

敵に回る可能性は高かったが、あえてマクギリスはそれを選択し

た。最後の義理であり、果たすべき事だと。

それを受けたカルタは少しだけ驚いたような表情になり、それから表情を柔らかく緩めた。

判断は迷い無く、即決で。

「私はあなたにもガエリオにも与しない。『後始末』をする人間は必要でしょうから。……けれど『部下には自分の判断で選択して貰う』。どのような道を選ぼうが咎めも止めもしないわ」

誰が勝者になろうとも、その後の事を考えなければならぬ。カルタはそのために準備している。だが部下までそれに付き合わせるつもりはなかった。マクギリス派と同じく現状に不満を持っている者もいるだろう、逆にマクギリスの行動を許せぬと考える者もいるだろう。ただ闇雲に己の考えに従わせるだけでは齟齬が生じると見たのだ。この判断は事実上地球外縁軌道統制統合艦隊の解散を表明したと言っても過言ではない。

その判断に対してマクギリスは「……そうか」と言うに留めた。

共に歩むことはもはや叶わない。戦場で相見えることも。己が『敗者』であると自覚しているカルタは、マクギリスを見送ることしかできなかった。

「……最後に聞かせて。マクギリス、あなたは……」

彼女がどのような問いを放ったのか、そしてマクギリスがどう答えたのか。それは二人にしか分からない。

マクギリスが去った後、カルタは一人バルコニーから夕日を見つめている。

その頬を、一筋の涙が流れていった。

「どうか！ 我々に先陣をお任せ下さい！」

「イオク様の無念、この手で晴らさなければ死んでも死にきれません

！ なにとぞ、なにとぞ！」

ラスタルへ必死に御訴えているのは、第2艦隊の士官たち。イオクの末路を（不完全ながらも）知った彼らは、仇を討たせてくれと直談判を行っていた。

一通り彼らの訴えを聞き、ラスタルは鷹揚に頷く。

「諸君らの志は分かった。要望には可能な限り応えたと約束しよう」

『感謝致します！』

最敬礼にて答える士官たち。彼らが去った後、ラスタルは苦笑を浮かべた。

「死してなおあの忠義か。……そういった面では、惜しいことをしたかも知れんな」

その言葉にガエリオは。

（『忠誠心に縋るしかなかった』とも言えるが）

そのような感想を抱く。イオク亡き今、配下であった彼らの行く末は不透明。穿った見方をすれば、ここで手柄を立ててラスタルに売り込もう、などと考えている輩がいなくても限らない。

俺も随分捻くれたものだど内心自嘲してから、ガエリオは口を開く。

「彼らを前面に押し出すつもりか？」

「いや、先鋒は『新設部隊』にやらせる。餌に釣られて十分な働きをしてくれよう。……それはそれとして、君は良いのかガエリオ。マクギリスの真意を確かめなくて」

ラスタルの言葉に、ガエリオは軽く頭を振って答えた。

「ここに至って対決は避けられないさ。どのみち明日には嫌でも奴の真意は知れる」

答えてから、さらに心の中で続ける。

（俺の予想が合っているのであれば、恐らく奴は——）

日が暮れ夜の闇に包まれたヴィーンゴールヴ。そのセブンスターの邸宅が存在する一角。マクギリスは石動のみを伴い己に与えられた屋敷へ赴いていた。

屋敷に足を踏み入れた途端、老齢の執事が声をかけてくる。

「お帰りなさいませマクギリス様。……じつは早急にお耳に入れたいことが」

そう前置きされてから告げられた話に、マクギリスは眉を顰める。

「……分かった。すぐに向かう」

足早に歩を進める。屋敷の一室、その前で侍女がおろおろと途方に暮れているようだった。主の姿に気付いた侍女が何か訴えようとするのを手で制し、マクギリスは部屋に足を踏み入れた。

部屋の主は、靦面に反応する。

「来ないで！ マッキーー！」

声を張り上げたのはアルミリア。彼女は震える両手でナイフを握り、その切っ先をマクギリスへと向けていた。

「アルミリア……」

「なぜ……なぜお兄様を殺そうとしたの！ 信じていたのに！ お兄様も、お父様も！ 私だって！」

涙を流しながら訴えるアルミリア。ガエリオの事を知ったのだろう。想定していた反応ではある。マクギリスは敢えて淡々と応えた。

「言い訳はしないよ。ガエリオを陥れたのは事実だ。私の野望のためにね」

「そんなことのためにお兄様を！ 今まで私に嘘を付いていたの!？」

「……そうだ。私はずっと嘘を付いていた。己の目的のために君たちを騙し、権力を手に入れたんだ」

マクギリスの言葉に、アルミリアは絶望の表情を浮かべる。そして。

「だったら……私は、あなたを！」

ナイフを腰で構え、踏みだそうとするが――

思い出が脳裏をよぎる。出会ってから慕い、婚約から二人で過ごし

た日々のが。

それは確かに暖かい日々だった。その全てが嘘だとは思いたくなかった。

踏み出そうとした足が止まる。胸が詰まる。怒りと思慕の狭間で、アルミリアは苦しみ悩む。

このような状況を作り出したマクギリスは憎い。しかしそれ以上に想いを寄せていた。こんなに辛いのであれば。こんなに苦しいのであれば。

「この想いが、邪魔だてするのであれば！ 私は！」

衝動的に切っ先を己の喉元に向ける。

鮮血が散った。

「……あ……」

呆然とするアルミリア。瞬時に間合いを詰めたマクギリスが、己の右手を貫かせる形でアルミリアのナイフを留めたのだ。

「……君を苦しませたのは申し訳なく思う。謝罪して済むものではないが」

優しくナイフを取り上げる。その声、その表情は、いつもの優しきマクギリスのものだ。

戸惑うアルミリアに、マクギリスは語りかける。

「私のような人間には、君を幸せにすることは出来ない。その資格もない。……何より、『ここに君の幸せはない』」

「何を、言って……」

「……私に出来るのは、君に『幸せの道標』を残すことだけだ」

「幸せの、道標……？」

「いまはまだ分からなくても良い。この戦いが終われば、それは自ずと見えてくるだろう」

そつとアルミリアをソファアに座らせ、マクギリスは立つ。そして侍女を招き入れ、「済まないが任せる」と告げ、別れの言葉もなく部屋を出た。

待機していた石動が、声をかけてくる。

「……代表、お怪我を」

「安い代償さ。これくらいで済んで御の字だよ」

腹の一つも刺される覚悟だったと冗談めかして言う。そうしてから真剣な表情で執事に向き直った。

「後のことを……アルミリアを、頼む」

「承知致しました。……ご武運を」

深々と頭を下げる執事。それに「ああ」と短く応え、マクギリスは歩み出す。

これまで得た全てを置き去りにして、彼は進む。

迷いは、ない。そう自分に言い聞かせて。

夜が明け朝日が照らす中、ヴィーンゴールヴ内に設置された会見場には記者や報道関係者が集っていた。

その中にはアヤの姿もある。

(GHの報道陣だけでなく、『経済圏やコロニー、圏外圏の報道陣』も招き入れている。正しく全世界に向けての言葉を放つわけですか)

GHの手が入ったファイルター越しではなく、生の言葉を叩き付ける。そのような意図があるのだと見た。果たしてマクギリスはどのようなことを話すのか。記者としてだけでなくこの時代を生きる一人の人間として興味をそそられる。

ややあつて、マクギリスがその姿を現した。威風堂々と壇上に立つ彼に向かって、フラッシュが無数に焚かれる。それに気後れした様子もなく、マクギリスは口を開いた。

「私はマクギリス・ファリドであります。この会見を聞いている皆様、暫く私にお時間を頂きたい」

全世界が注目する中、彼の言葉は続く。

「私は昨日、GHが象徴たるMS、バエルの起動に成功致しました。伝承に寄れば、この機体は厄祭戦の英雄アグニカ・カイエルの魂を宿し、

その魂に認められた者のみが起動させることが出来るとあります。そしてその者こそが、GHの正当なる継承者である、と」

「そこまで告げてから――」

「……しかしそれは、虚偽であります」

爆弾を投下した。

「その証拠は、私自身。……なぜならば、私はイズナリオ・ファリドが己の欲望を満たすために人身売買組織から購入した、セブンスターズとは縁もゆかりもない孤児なのだから！」

その言葉と同時に、全世界に向けてあるデータが公表される。それはマクギリス自身の遺伝データ。それは確かに、イズナリオはおろかセブンスターズのどの一族とも全く関係がないことを示すものだった。

「そんな私がなぜバエルを起動することが出来たのか。それは元々バエル――ガンダムフレームという兵器が阿頼耶識システムを備えており、専用ナノマシンをインプラントした上で蓄積した戦闘データが適応すれば、誰にでも動かせるからに他ならない！」

次いでガンダムの阿頼耶識システム関連データが公表される。300年もの間秘匿され続けていたデータの開示は、注視していた全ての者を動揺させずにはいられない。

集った報道陣も動揺を隠せずざわめく中、マクギリスはそつと目を伏せた。

「それらが秘匿され禁忌とされたのは、恐らく厄祭戦後の混乱時に余計な技術が流布するのを防ぐための、創設者たちの『優しい嘘』であったのでしよう」

悲しげな言葉の後に、マクギリスは力強く目を開く。

「だが！ 現在のGHはその優しさに甘え墮落した！ 信念を持って務めている多くの兵の思いを余所に、一部では弱者を食い物とし、己の地位と立場を維持するためだけに奸計を巡らせて、事実上の圧政を強いてきたのです！」

さらに開示されるのは、これまでGHが行ってきた不正と奸計の情報。警務局や監察局が掴み、しかし握りつぶされてきた事実。その中

にはドルトやアーヴラウでやらかしたことや、アヤが取材し目の当たりにしたものも含まれている。

一呼吸おいて、マクギリスは続けた。

「私は孤児であった時代、地獄を見ました。そしてイズナリオに買われてからのし上がることでだけに腐心してきた。そのために、友と信じられたものを裏切り謀殺すら図った。……しかしそれなりの地位を得てから見た光景は、私が成してきたこと以上の、あまりにも酷い現実でした」

鋭い眼差しを、世界に向ける。

「私が見た地獄を！　そして未だに弱き人々が見ている地獄を！　産み出した一端がGHにあることが許せない！　許せるはずがない！」
ゆえに、とマクギリスは吠える。

「私は今この場を限りにファリドの名を捨てましょう！　そしてGHに、この世界のあり方に反旗を翻す！　私はただのマクギリス、『反逆者マクギリス』として、GHの罪を弾劾し、世界のあり方を変えろと！　ここに宣言致します！」

後の世に言われる反逆者マクギリスの乱。その幕は切って落とされた。

「……くか……」

その宣言をコクピットで聞いていたランディは、獣のような笑みを浮かべる。

「くかかかか、面白れえ、おもしれえ。あのやろう、『GHの権威を今この場で全部ぶっ壊しやがった』」

『バエルが権威として何の意味も持たない事を示し』、その上で『GHの大儀の裏に隠された暗部をぶちまけた』。これでGHの積み上げてきた全てのものが破算となる。この時点で『マクギリスの勝利は

決まってしまったのだ。肉を切らせて骨を断つどころではない。事が終わったとて『マクギリス本人も無事ではすまないであろう』諸刃の剣。しかしこれは『マクギリスにしかできない手段』であった。孤児から拾い上げられ、その上でのし上がり、GHの現状を表裏双方から見続けた彼にしか。

「認めてやるよ、確かに『権威を蹴っ飛ばす』って意味で俺を上回ってくれた。……さてどうすんよラスタル閣下」
くかかかと、楽しげで邪悪な笑い声が響く。

※今回のえぬじい

その仮面の下から現れたのは――

「17代目シ●ケンレット！」

「誰だよ」

「メ●ブルーでも可！」

「いやホント誰だよ」

中の人だよ。

45・誰にだつて理由はあ

マクギリスの声明は、世界に激震を招いた。

混乱するGH内部。GHを、セブンスターズを非難する方向に傾く世論。そんな中、各経済圏の首脳陣は冷静を保って行動していた。

経済圏は共同で声明を発表。公表された情報の真偽を確かめるよう要求を出し、マクギリス派——【反逆軍】に対して外部からの監察を受け入れるよう迫った。マクギリスはこれを受け入れると同時に、経済圏へ今後のGHの方針についての意見書を提出した。

GHの規模と権限の縮小を主軸にした意見書。その中には一部権限の委託——火星支部の権限を民間組織（鉄華団）に事実上譲渡するという項目も記されていた。

「なるほどのう。彼らへの報酬をこのような形で盛り込んできたか」
意見書に目を通した蒔苗は、ふむふむと頷く。

「あのような暴露、ちと驚いたが考えなしというわけではなかったようじゃの。大胆ではあるが妥当でもある」

事前の根回しによって経済圏の対応は決定されていた。しかしGHの不正と腐敗を公表するとは聞いていたが、あそこまでさらけ出すとは流石の蒔苗も思っていなかった。そこまでする必要があるのかと考えもしたが。

「GH内部の志気を低下させると同時に世論を味方に付ける。現状の体制をひっくり返す妙手。ただの数分で自分に有利な状況を作り上げよった。自身の進退を考えなければこれ以上ない王手よ」

マクギリスは権力を握る気はないと、蒔苗は結論づける。現体制を破壊し新たな秩序を作り上げるために己の全てをかける気のような。でなければ己の出自や禁忌の技術に手を出したこと、セブンスターズの後継を謀殺しようとしたことを公表などすまい。事が終われば身を引くどころか裁かれるのも覚悟だと見た。

「ですが、ここまですればGHは解体せざるを得ないのでは。そうすると治安の悪化が懸念されますが」

同じく意見書に目を通していたラスカーが言う。蒔苗は片眉を上げて応えた。

「GHのような組織は必要じゃ。少なくとも今暫くはな。わがアーヴラウを含め経済圏は独自に戦力を整えつつあり、自力で治安を維持しようとしておるが、それにはもう少し時間もかかる。意見書にもあるとおり規模と権限を縮小することは考えているが、GHの解体そのものは考慮に入れておらん。ただ闇雲に旧体制を破壊しようとしておるのではないようじゃ」

「クーデターはあくまで内部粛正のため。組織そのものの解体を行うためではない、と」

『儂らが突きつけた取引』を非公式ながら呑んだ時点で、マクギリスはGHの優位点を残しておくつもりはないと知れる。現状での解体ではなく勢力を弱まらせ、時間をかけてと望んでいるのだろう。とはいえある程度治安が悪化するのには避けらんない」

仕方のないことであるがと息を吐く。混乱が生じるのは望むところではないが、それ以上にGHの横暴を見逃すことは出来ない。特に蒔苗は一時的とはいえその立場を追われ、命すら狙われた。国家元首としても個人的にも許すつもりはなかった。

「さて、ラスタル・エリオンはどのように反応するかな？ マクギリスの主張、一切合切認められぬと思うが」

ほどなくアリアンロット艦隊司令ラスタル・エリオンが声明を発表する。

彼はまずマクギリスの行動を非難。いかなる理由があろうと武力によって権力を篡奪するなど以ての外と断言する。そしてアリアンロットが行ってきた非合法は、治安を維持するためのやむを得ない超法的な活動であると宣った。

あくまで自分達は己の役目を果たしただけであり、そのためには法を犯すことも躊躇しないと言い放つ。開き直ったと言うよりは、そうとでも主張しなければアリアンロット自体が崩壊する可能性があるからだろう。

各経済圏はアリアンロットに対しても反逆軍と同様の要求を突き

つけた。それに対してラスタルは「まずはマクギリスを討伐するのが先決である。監察については討伐の後、GH内部の混乱を収めてから検討したい」と返答した。詰まるところ要求を突っぱねると言っているのだ。

あくまで強気な態度を崩さない。崖っぷちに立っている自覚があるからこそなのか、それとも。

「言うほど余裕があるわけではないのだがな」

会見を終え自室に戻ったラスタルは、深々と席に身を沈める。

正直マクギリスがあのような手に打って出るとは思わなかった。おかげでGH内部は大分揺るがされたことだろう。アリアンロッドは『分かってやっている』者も多く、またラスタルのカリスマで統率されていることもあって、表面上は落ち着いているように見える。

しかし内心は動揺している者もいるだろう。士気は確実に落ちていくはずだ。

「ヘイムダルという名。『ギャラルホルンの所有者である』と主張しているのかと思えば、『終末の角笛を鳴らす者』という意向だったとはな。戦意をくじくと言う意味では確かに効果的だ。……しかし分かっていいのか。GHを解体に向かわせると言うことは、治安の悪化だけでなく『経済的にも大きく打撃を与える』と言うことに」

GHの資金源はセブンスターズを始めとする名家の事業。とりわけエイハブリアクター関連を始めとする技術の独占が大きい。GHが縮小化するだけでもそれらの事業に打撃が与えられ、世界経済にも少くない影響が出る。それは混乱に拍車をかけるだろう。下手をすれば厄祭戦と同等の戦乱が起こりかねない。

「改革は必要だった。だがそれは世界に与える影響を最小限とした、緩やかな物でなければならぬ。……奴には出来たはずだ。なぜこ

のような手段を取ったと思う?」

問うた先は、傍らの壁に背中を預けたガエリオ。彼は厳しい眼差しで応える。

『痛みを伴う必要がある』。そんなところではないかな。GH（我々）も世界も、ずっと目を背けていた事実を目の当たりにし、罪を精算する必要があると。アリアンロッドはスケープゴートと言ったところか。分かりやすく『悪を成してきた勢力を討伐する』。そういったものを世界に見せ、その後を誘導しやすくするなど考えているのだろうか」

「一概に二面性で語れる物ではない所を、そう見せかけると言うことか。愚かな……とは言えんな。確かに大衆には分かりやすい。その上で混乱による負担を世界に背負わせるつもりか」

逆に考えると、GHの衰退は新たな事業を展開するチャンスとも言える。GH事業の後釜を巡って企業や経済圏の国家は激しく鎬を削るだろう。

そこまで考えて、ラスタルは気付く。

「まさか……マクギリスは、『エイハブリアクター関連技術を公開する事を考えている』のか!」

GHにとって生命線とも言えるエイハブリアクターの技術。それを流布させるつもりではないかと危惧したのだ。良く考えればその可能性は高いと思えた。

ガエリオが意見を述べる。

「あり得ない話ではないな。奴の目的はGHの力を弱め、最終的には解体することだ。リアクター関連技術の解放は、それを加速させる」
「……だとすれば絶対奴に屈する訳にはいかん。あれが広まれば下手をすると厄祭戦の焼き直しだ。なにがなんでも阻止せねばなるまい。どのような手を使ってでもな」

思考にふけるラスタルを見やって、ガエリオは思う。

（そう判断するだろう。あなたはマクギリスと同じく、『根本的に他人を信じない』）

危険な技術は自分達が管理しなければならない。そう言う思いに

囚われている。それは責任感もあるが、『流布すれば悪用する者が必ず現れる』という前提で物を考えているからこそだ。間違いではないだろうが、その考えに囚われているがゆえにラスタルは『自分の意に物申すものをそばに置けない』。組織の思考を統一し、場合によってはイリーガルな手段を用いてでも異端を排除して己の意を行き渡らせる。そうしなければ平穩は保てないという理念があるのだ。

合わせ鏡の裏表。ラスタルとマクギリスはそのような物だったのだろう。状況が違えばあるいは意見をすりあわせることが出来たのかも知れない。しかしマクギリスが『少しだけずれた』。だからこの衝突は起こってしまった。そのように感じる。

(いずれにせよ俺は今一度マクギリスと相對しなければならぬ。そのためあなたを利用して貰うぞ)

鋭い目のガエリオが見つめているのを知ってか知らずか、ラスタルはさらに策を巡らせる。

「奴らの一翼を担う鉄華団、その動きを押さえることが出来れば。……であれば銃後に狙いを定めてみるか」

「クーデリア・藍那・バースタインの行方が掴めない？」

秘書からの報告を聞いたノブリスは眉を顰める。

彼は伝手を頼って密かにラスタルとコンタクトを取り内通していた。いざというときがあればラスタル派の有利になるよう動くという密約も交わしていた。

そしていざというときは来たのだが。

「はい。鉄華団本部、桜農場など関連施設は残存する団員とテイワズからの増援により警備されていますが、そのどこにもクーデリア・藍那・バースタインの姿は確認できません」

ラスタルからクーデリア、あるいは鉄華団関係者の身柄を押さえる

よう要請されたのであるが、関係各所はきつちりと警戒され、なおかつテイワズも出張ってきている。迂闊に手を出すわけにはいかなかった。

それにしてもクーデリアの所在が知れないと言うのはどういう事だ。彼女には――

「間諜はどうした？ 彼女の行動を逐一連絡させていたろうが」

その問いに対し、秘書は何か言いにくそうな感じで応える。

「それがその……先程このような物が郵送されてきました」

差し出されたのは封筒。それにはこう書かれてあった。

『退職願』と。

受け取ったノブリスは暫く唾然としていたが、やがてぶるぶると身を震わせ、そして。

「ワシを謀ったかあの女あああああ！」

咆吼しながら封筒を床にたたきつけ、げしげしと踏み始めた。

その様子を見ながら秘書は思う。そろそろ転職の準備を考えていた方が良さそうだと。

で、肝心のクーデリアはどこにいるのかと言えば。

「今頃ノブリス氏は大あわてでしようね」

優雅にコーヒーカップを傾けるクーデリア。その向かいの席で、インナはくすりと笑みを零した。

『『このような場所』というのは盲点でしょう。私も度肝を抜かれました』

そんな二人の様子を見るフミタンは複雑な表情だ。

（あの男の影響を受けすぎではないでしょうか）

かく言う彼女も一方的に退職願を送りつけてノブリスを煽ってる時点で五十歩百歩である。

そんな彼女らが居座っているのは。

「私も驚きました。ですがあなた方の身を護るのはマクギリス代表の意に叶う事。事が終わるまでの安全は保証しましょう」

苦笑しながら言うのは新江・プロト。そう、クーデリアはマクギリスが事を起こすと同時に、GH火星支部本拠地である静止軌道基地アーレスに身を寄せていた。

ラスタルのやらかしそうな行動を予測し、先手を打ったのだ。ここであればノブリスには考えつきもしないだろうし、察したとしても手出しは出来ないだろう。盲点と言えば盲点であるが。

(やれやれ、このお嬢さん本当に末恐ろしい)

新江は内心驚嘆している。実の所彼はラスタルから密かにマクギリスを裏切り自分につくよう要請されている。誠実なように見えてその本性は損得勘定で動いている新江は、双方を天秤にかけ、どちらかの優位が確定したところで方針を定めようと考えていた。

しかしクーデリアの行動で楔を打たれた。彼女は新江に保護を依頼するとき、につこり笑ってこう宣ったのだ。

「いざというときは、『私のこの身が取引材料として使える』でしょう」ラスタルが勝利した場合、火星や鉄華団に累が及ばないよう、自身を人身御供として差し出す覚悟だと、そう言っただけなのである。これには度肝を抜かれた。

一見新江にとっては有利な取引材料となるように思える。だが彼女は火星独立派のシンボルであり、現在は商会の活動を通じて各所からノブリスよりも多くの信頼を寄せられている。かてて加えてバツクについているのは鉄華団とテイワズだ。目先の利益に目が眩んでラスタルに差し出せば、火星全土と圏外圏が敵に回る。そのような愚行を犯せるはずがない。

かといって彼女の申し出を断れるはずもなかった。表向きはマクギリス派に属している人間だ。彼らの意向からしてもクーデリアの安全は保証しておかなければならない。受け入れざるを得ないのだ。

まあ、何のかんの言っただけで新江に不満はなかったのだが。

(マクギリス代表が勝てば済むこと。彼らの勝率は高い。……それに

これほどの人物、人身御供にするには惜しい)

別段情にほだされたわけではない。総合的に考えて、彼女らについて方が利を得ると判断したのだ。

例えばスタルが勝利したとしても、彼を取り巻く状況は厳しい物となる。その隙を突いて火星と圏外圏の勢力を動かすくらいはやってのけるだろう。乗るだけの価値は十二分にある。

密かにそのような算段を巡らしている新江の思惑は、当然のようにクーデリアにも読まれていた。と言うか前もってマクギリスから忠告されていたりする。

新江が腹に一物あると知っていて重用するマクギリスもマクギリスだが、その懐に飛び込むような真似をするクーデリアも大した度胸だ。イアンナは社交辞令でなく本心で舌を巻いていた。

(まあ『あんな発想』をするくらいだから、この程度やってのけて当然と言った感はあるけれど)

少し前に行われた『会合』のことを、イアンナは思い返す。

アイゼン・ブルーメ商会の社長室。フミタンとイアンナが控える中、クーデリアは通信回線を開いている。

「通信回線越しとはいえ、こうやって言葉を交わすのは初めてになりますな。蒔苗先生」

「そうさの。一度話してみたいと思うておったよ。マクマード・バリストン会長」

クーデリアの端末を中継点とした三元通信。その相手は蒔苗とマクマードであった。

以前よりクーデリアは二人に対して『ある提案』をしていた。GHの諍いがいよいよ本格的になろうとしているのを機に、彼女は本格的に話を詰めるべく場を設けたのであった。

「お時間を頂きありがとうございます。早速ですが例の話を。蒔苗先生、フアリド准将に話を持ち込んでいかがだったでしょうか」

「うむ、あっさりを受け入れよった。条件も何も無しでな。不気味なほどじゃよ」

「そいつはまた妙な話ですな。GHが優位を保てる最大の要因でしように。そう簡単に手放すとは思えません」

クーデリアの提案。それはマクギリスにエイハブリアクターの情報を公開するように迫る、というものだった。まずはこの提案にどう反応するかで、マクギリスの思惑を読みとろうという考えがあったが、驚くことに彼は事が終われば条件なしで技術情報を公開する用意があると返したのだ。これはさすがのクーデリアも予想外である。

「一部、あるいは段階的な解放であればまだしも条件なしとは……彼は本気でGHの解体を目論んでいるのですか」

「恐らくは。どうやら自分が頂点となって権力を握ることなど考えてはおらぬようじゃ。あるいはラスタルと差し違える覚悟なのかも知れん」

「となると……『例の話』、現実味を帯びてきましたな」

マクマードが顎をしごきながら言う。マクギリスの思惑はさておき、技術情報が解放された先のことをクーデリアは考えていた。それは『各経済圏とテイワズを中心とした企業の共同でリアクターの技術を研究、開発を行う』というものだ。

前提条件からして無茶な話である。クーデリアとてGHがエイハブリアクターの技術を容易く開示するとは思っていなかった。そもそもが『各経済圏を抱き込むための策』であつたのだ。

リアクター技術は莫大な資金源となる。それが全ての経済圏に行き渡ればその恩恵は計り知れない。それが分かっている経済圏は乗っってくるだろうし、共同してGHに圧力をかけることも出来るだろうと踏んだのだ。実際ある程度の圧力と取引があれば一部なりとも技術情報を引き出すことも不可能ではない。そう考えていたのだが、マクギリスの反応で状況は一変した。『ある計画』が実現可能となるかも知れないのだ。

元々経済圏に説得力を与えるため、クーデリアたちは技術開示後の事をかなり細かく考えていた。その一つに『火星の再開発にエイハブリアクターを利用する』というものがある。

発電所クラスのリアクターを極冠に設置、発熱によって氷を溶かすと同時に、重力波によって水蒸気を広範囲に散布する。これにより運河などの労力を使わずに火星全土へ水を行き渡らせることが出来るのではと考えたのだ。さらに軌道上にエイハブリアクターを備えたオービタルリングを建造。疑似電磁帯の替わりにし大気の損失を防ぐ。これで火星の天候は大幅に改善することができ、なおかつ将来的な問題のほとんどが解決する……という計画であった。

専門家の見立てても『技術的には』可能であると太鼓判を押されたこの計画。実はフミタンがランデイより聞き出した物がベースとなっている。だが実現させるには最低でも艦船級のリアクターが数十基必要となる計算だ。船舶の奪い合いすら生じている現状では、どこにもそんな余裕はない。地道にデブリベルトから回収しレストアしたりアクターを集められれば何とかなるかも知れないというレベルだ。それも何十年かかるか分からない。

しかし新たにリアクターを造る事が出来るのなら、この計画は現実味を帯びてくる。テイワズなどの企業にとっては大規模な公共事業や投資を行うチャンスとなるし、将来的なことを考えれば経済圏にも恩恵がある。

現在火星の主幹産業はハーフメタルの採掘くらいしかないが、火星の環境が変化し大規模な食料生産が可能となればその価値は大きく跳ね上がる。よしんば独立したとしても、いや、植民地として管理するために地球からの『持ち出し』が無くなる分、独立させた方が得になるかも知れない。これに乗らない経済圏はあるまい。

生涯をかけて成し遂げたい夢が形を取り始めた。しかしそれに逸るクーデリアではない。彼女は冷静に状況の推移を見定めていた。

「あくまでファリド准将が勝ち残れば、の話です。彼が亡くなった場合に約束が果たされるのか。そしてラスタル・エリオンが勝った場合にはどう動くべきか。まだまだ詰めなければならぬことは多いで

しよう」

「そうじやの。ラスタルは十中八九リアクターの情報公開を拒否するであろうよ。彼に対しては圧力をかける札の一つにしかならん」

「だが弱体化した状態でどこまで拒否できるのか、ですな。彼は確かに傑物でしょうが、『同様の政治力を持つ者は、マクギリス・ファリド以外に存在しない』。彼一人で四面楚歌を乗り切るのは難しいと思いますがね」

マクギリスを失えば、考える頭はラスタル一人となる。一枚岩となつたと言うことも出来るだろうが、恐らくは低下する戦力。そして世界中から疑念と敵視の視線を向けられ圧力をかけられる状況で、どこまで持ちこたえられる物か。

そこまで考えているとすれば、マクギリスも相当の狸であろう。それはともかく今は、先のことを考え話を詰めていこうと、三人は『悪巧み』を続ける。

(最低でもアーヴラウとテイワズ、クリュセ自治区を含めた火星の主な勢力は協調して事に当たる。ラスタルを手こずらせるくらいは出来るわね)

内心でくすりと笑うイアンナ。彼女もまたいざというときにはクリュセの自治区で蒔苗の代理として権限を振るうよう命じられている。テイワズの方も鉄華団をフォローするためコロニーや地上で色々と用意を調べているようだ。

誰もが己の役目を果たし全力を尽くしている。砲火を交えない静かな戦いがそこにはあった。

ヴィーンゴールヴでは、反逆軍の戦力を宇宙に上げるための準備が着々と進んでいた。

「俺達で最後か。……しかしもつと騒ぎがあるモンだと思っていたが、大人しくしてんな」

シャトルに積み込む最後の荷物を確認して、オルガは鼻を鳴らす。マクギリスの演説後、ヴィーンゴールヴは一時騒然とした物だったが、それもすぐに収まった。別に武力で脅しているわけでもなさそうだし、聞き分けが良すぎると訝しんでいたのだが。

「ああ、そりゃカルタ・イシューが言い聞かせてるんだろ」

さくりと疑問に応えるのはランディ。実際混乱していた内部を沈静化させたのは彼女とその配下である。他の首脳陣が右往左往している中、カルタは一人冷静さを保ち各所へと働きかけていた。次々とシヨッキングな事実を叩き付けられた隊員たちは、存外に大人しく彼女の指示に従う。ある種の依存的な心理なのかも知れなかった。

「無闇に騒動を広げるつもりもなからうさあの女は。最低でも今回のケリがつくまでは大人しくしているだろ」

「むしろ隙を見て何をやらかすか分からない相手のような気がするんだが」

以前してやられたことを思い出してオルガは顔を顰める。油断のならない人物の復帰に懸念を覚えたのだ。

と、そこに三日月が姿を現す。

「準備できたよオルガ。後はチョココの人待ち」

「そうか。……しかし妙な心持ちだぜ。あの男も孤児だったとか」

マクギリスの演説には、オルガも少なからず衝撃を受けていた。生まれつきの上流階級にしては妙な気配が所々にあつたような気はしていたが、ああいった出生だったとは。これからどう接するべきか、少し構えてしまいそうだった。

などと考えているうちに、当の本人が姿を現す。

「すまない、待たせた。時間的にはまだ余裕はあるだろうが、準備が出

来ているのなら早速発とう」

いつものように石動を従えたマクギリスだ。その仕官服の襟元には、本来あるべき階級章が存在しない。

すこし躊躇いつつも、オルガは彼に語りかけた。

「あ、ああ、それはいいんだが……MSを全部引き上げて良いのか？
ここが手薄になるが」

「構わないさ。カルタ・イシユーは漁夫の利をかすめ取るような、姑息な人間ではないよ」

「……随分と信用しているんだな」

「彼女の誇りはね。それにここに残るものたちも、相応に出来る者ばかりさ。……例え『俺』がいなくとも、事を成せる人間を集めたつもりだ」

「あんだ……」

自称が変わっていることに気付いているのかいないのか、マクギリスは続ける。

「俺達は様々な思いを抱いた人間の集まりだ。立身出世を願う者、己の才を世に知らしめたい者。GHの在り方に不満を持つ者。一人一人がそれぞれの目的の元動いている。俺はそれを束ねているだけにすぎない。だから『代表』なのさ」

自身の出自など気にせず、己の目的を持ち、轡を並べて戦ってくれ
る人間。マクギリスはそう言う人材を集めてきた。勿論策を巡らせ
たり思考を誘導したりと色々やってきたが、基本は自分がいなくなっ
ても事を成す覚悟を持ったものたちばかりだ。最後の一兵までとは
言わないが、己の死くらいでは留まるまいという自信はある。

それは同時に、己の死も覚悟した不退転の構えと言うことでもあつ
た。

口調は軽いが、込められた覚悟は思った以上の重さがある。オルガ
は気圧されたように感じた。

と、三日月がぽつりと言葉を零す。

「チョコの人、なんかすつきりしたって顔してるね」

「……そう見えるかい？」

「うん、話し方とか表情とか変わった。なんかその方が『らしい』や」
その言葉にきよとんと目を丸くするマクギリス。そうしてから彼は笑みを浮かべた。

「……ああ。これが『俺』だ」

自分に言い聞かせるように言う。その表情は今までになく晴れやかな物だった。

くく、と笑うランディ。肩をすくめる石動。オルガは片目を瞑って頭を掻いた。

(確かにこう……取っつきやすくなっただ感はあるな)

色々つぶつちやけた上で、被っていた猫を脱いだのか。そうするとこれが本性と言うことになるのだろう。

まあいい。肩を並べて戦うのに文句はない。今のマクギリスならばそれくらいの信用は出来るだろう。オルガは気持ちいを改める。

「何も問題がないんじゃないいさ。……そろそろ行こう。上で最後の仕上げだ」

「そうだな。よろしく頼むよ」

シャトルに乗り込む一同。ようやくここまで来たと、席に着きながらマクギリスは思い返していた。

どことも知れぬ貧民街。マクギリスはそこで生まれた。

親は誰とも知れぬ。物心ついたときにはすでに弱肉強食の世界に放り込まれ、ただ生き残るために必死で足掻いた。食うために殺し、殺されかけ、ぼろ布を纏っただけの獣としてはいざり回る。

その日もいつものように見知らぬ誰かに錆びたナイフを突き入れ、奪った腐りかけの林檎をむさぼり食っていた。背後に誰かが近づいていることにも気付かずに。

後頭部に衝撃。意識を刈り取られたその時を境に、彼の生活は一変

する。

孤児院を装った人身売買組織。所謂『人狩り（マンハント）』に攫われたのであった。そこから即座に意識を切り替えられたのは、やはり才覚があったからなのだろう。自身が『商品』になる価値があると悟り、その価値を高めるため貪欲に学び、肩を並べそうな者を蹴落としていく。

マクギリスと言う名を与えられたのもそこだった。頭角を現し高価な商品と目された彼は、イズナリオに買われる事となる。

金髪の美少年を痛めつけ蹂躪する性癖のあるイズナリオの元で、マクギリスは陵辱される日々を送りながらも虎視眈々と牙を磨く。そんななかで見つけたのはアグニカ・カイエルの伝記。

その内容に、マクギリスは心引かれた。伝記に記されたアグニカの圧倒的な強さ。それを手に入れることが出来れば……。少年らしい憧憬と、憎悪によって鍛え上げられた野心は、やがてバエルを手中にしGHを我が物にするという目的へと昇華する。

己の野心をひた隠しにし、少しずつファリド家とモンターク商会の実権を掌握。そして表向きには穏やかな好人物を装いガエリオやカルタと友誼を結び、イズナリオの野心に便乗する形でボードウィン家やイシユール家とも繋がり築いていく。

魅力、知力、腕力、財力……。力と名をつく物を貪欲に求め、ガエリオやカルタに絆されそうになりながらも、マクギリスは邁進し続け、士官学校にまで至る。

そして、出会った。出会ってしまった。

ランデイル・マーカスに。

優秀な成績を修めながらも破天荒。自身の家柄や地位に増長するものたちを敵に回してそれを蹴散らしていく有り様は、四角四面なものたちを浚面にさせた。カルタなどはことあるごとに突っかかり、ガエリオは時折それに巻き込まれ、マクギリスはその様子を苦笑して眺めつつ……。ランデイルを注意深く観察していた。

その強さ。そしてカリスマとは違う人を引きつける何か。何よりも『自由』である。アグニカとは違うが英傑の質であると、マクギリスは見て取った。

己の力としたい。マクギリスがそう考えるのは自然な流れだった。彼と接触し繋がりを深めようとする中で、このように問う。

「アグニカ・カイエルをどう思うのか」と。

答えは予想外であった。

「めんどくせえ立場にされちまったよなあ。まあ本人死んでるんだから文句のいいようもないが」

思わず眉を顰めた。力を振るい頂点に立ち、伝説となったことが面倒などと。表情に出た不服を読みとったのか、ランディはからかうような調子で続ける。

「だってお前、厄祭戦の生きるか死ぬかって状況で、後のことなんて考えていられるかってんだ。それこそ死に物狂いだっだろうよ。結果最大の戦績を叩き出しただけで、後世に名を残したかったとか考える余裕なんかあると思うか？」

確かに残されている伝承は戦績と『他者から見た視点』ばかりで、アグニカ自身が残した記録など何もない。言われて始めてそれに気付いた。

「実際アグニカが何を考えていたか分かりやしねえよ。義憤に燃えていたかも知れねえ、金に釣られたかも知れねえ、強要されて泣きながら戦っていたのかも知れねえ。……あるいは、『俺やお前みたいな人間だったかも』知れねえ」

向けられた視線に全てを見透かされたかのような感覚を覚える。微かにびくりと身を震わせたマクギリスを余所に、ランディは言う。

「いずれにせよアグニカは結果を残した。それを評価し記録に残し、後々まで伝えたのは他の人間だろうさ。別段『伝説』になりたくてなかったわけじゃない』……んじゃねえかな。まあ俺だったら伝説にされるなんぞ面倒くさくて御免被るっただけだが」

くかかと笑うランディ。

「やりたいことか成すべき事か、死力を尽くした結果がああなった。

本人の意志にかかわらずな。伝説なんてのはそういうモンなんじゃねえの？」

彼としては後輩の言葉に対し適当に応えただけなのだろう。しかしその言葉は、マクギリスに衝撃を与える。

『英雄にはなりたくてなるものではない』。自分を否定されたという思いと同時に、なにかがすんと腑に落ちる感覚を覚えた。だれもがアグニカを英雄視し崇拝する中、フラットな視線で意見を述べられるのはランデイしかない。自分自身も視野狭窄に陥っていたと、マクギリスは目が覚める思いだった。

そこからランディール・マーカスという人間をより深く知ろうとした。生い立ち、思考、望み。その出生や幼少期などにも驚かされたが、彼の思考に驚嘆させられた。

ランデイはGHに『職場以上の価値を見出していない』。闘争の狂気を孕んだ己が堂々と生活できるからという理由だけでGHに入隊し、出世や権力闘争などに興味を示さない。もし己に不必要だと思えたなら、『GH自体をあつさりで見限る』だろう。（事実彼は後にバツクレ感覚でGHから逐電している）

世界の支配者とも言えるGHを己が本性の隠れ蓑程度にしか思っていない。自分とは全く違う価値観。だがマクギリスはそれを快なりと、そう思ってしまうのだ。

権威を蹴り飛ばし、どこまでも自由。だがただの悪漢ではない。それは多くの人間がなんだかんだ言いながらも彼を慕っていることから分かる。下層から入隊した隊員たちなどは、その破天荒な行動に喝采を上げ英雄視すら始めていたりする。

（英雄など面倒くさい、どの口で言うものか）

マクギリスは笑う。その笑顔が本物になりつつある事に気付かず。彼自身も少しづつ変わり始めた。野心はそのままに、その行く先を、己が本当に何をしたいか、何をすべきかを。そういうものを改めて考えていく。

そうして得た結論は、『このまま成り上がっただけでは何も変わらない』。ということだ。

例え己が頂点に立ちGHを改革せしめたとしても、全てを思うとおりに動かせるものではない。それに将来己が死んだ後、いつまで改革後の体制を保っていられるものか。喉元過ぎれば熱さは忘れ去られ、いずれは元の木阿弥になるだろう。

『痛み』が必要だ。過去の暗部をさらけ出し、罪は罪として罰せられ、未来にそれを残していかなければ同じ事が繰り返されるだろう。GHも、世界も。

そして……『自分ならばそれができる』。その存在そのものがGHの暗部とも言える、マクギリス・ファリドであれば。

世界は混乱の渦に陥れられるだろう。己自身も無事では済むまい。だが――

痛快ではないか。かつて己を蹂躪した権威を破壊し尽くし、新たな世界の礎となつて後々の世まで語り継がれるのは。それはきつと、アグニカと同等かそれ以上の偉業となる。そう思いついたとき、背筋をぞくぞくと振るわせる何かを感じた。

(ああそうか、俺はあの男が羨ましく、そして焦がれたのだな)

いつしかランデイの背中を見ていた。彼に追いつき越えたいと。

彼が標的艦隊に配属され、カルタラを蹴散らしラスタルから引き抜かれ、逐電するまでの間、マクギリスは密かに賛同者を集め戦力を整えていった。実の所幹部たちの目星を付けるのはそうたいした苦労ではなかった。ランデイの話を振って、忌避や拒絶の反応を示さず話に乗ってくるものは大概『当たり前』であつたから。石動やライザなどもそうやって引き抜きをかけたのだ。

集めた賛同者の幹部には、折を見て己が出生の秘密を明かし、それ以外のものたちにもそれとなく匂わせる。同情心を煽る算段であつたが、思ったよりあっさりと言ひ受け入れられ拍子抜けしたものだ。己の出自など大したことではないと、笑い飛ばせるようになったのもこのあたりだった。信頼関係ではなくあくまで互いを利用し合う損得勘定のみの繋がりと言ひマクギリス自身は考えているが、存外人望はあるのかも知れない。

順調に人材は集められる。だがしかし……友であるガエリオやカ

ルタとは、袂を分かっしかなかった。ガエリオは純粹で真つ直ぐで、自分自身以外の『悪』を認められず、カルタは己の責と立場を捨てることが出来なかったのだから。

内心後ろ髪引かれる思いであったのを無理矢理押し殺し、準備を整え邁進を続ける。そしてついにこの時を迎えた。最早自分が倒れてもこの流れは止まらない。後は命を賭けて決着を付けるだけだ。

(ここまでこられたのはあなたのおかげだ。礼は『最高の舞台』というところだな)

シート越しにランデイの後頭部を見据え、マクギリスは密かに笑んだ。

最後のシャトルが天に向かう。

それを見送るカルタは何も語らない。車椅子に座したまま、いつ果てるともなく噴射炎の跡を見つめていた。

※今回のえぬじい

「ハツタリ企画がガチ採用されそうなんだが……」

「特定されそうなスレ立てはお止め下さいお嬢様」

46・『せいぎのみかた』なんてどこにもいない

彼方へ消えゆくシャトルを見送って、タカキとアストンは言葉を交わす。

「行っちゃまったな」

「彼らが団長たちの力になってくれればいいんだけど」

「大丈夫だろ。あの人らはなんて言うか……」

アストンは眉を寄せた。

「教官と同じにおいがする」

「あく、うん。何となく分かる」

そりやそうだあの人の知り合いなんだから。只人でないのは間違いないと苦笑を交わす。

「さて、それじゃあ議事堂に戻るか」

「今こつちに手を出す余裕があるとは思えないけれどね。用心はしとかなきゃ、だ」

言いながら空港を後にする。アーヴラウは厳戒態勢を取りつつ彼方の戦いに注視している。この戦いで世界は大きく動くと、誰もが確信していた。

月軌道上。そこでは二つの勢力が真っ向から激突しようとしていた。

対峙する艦隊。片や月外縁軌道統合艦隊アリアンロッド。ハーフビーク級戦艦だけで40隻を越える大艦隊は威風堂々と構える。

片や特殊機動遊撃艦隊ヘイムダルを中核とした反逆軍。その数は鉄華団の艦艇を合わせても20と数隻。アリアンロッドの半数であ

る。しかしながらアリアンロッドから見て地球を背に構える彼らの偉容は勝るとも劣らない。

そして、その彼らに僅かながらとはいえ合流するものたちがあつた。

「正直、我々は貴方の行った行為を許し難いものだと思つている」

乗艦から内火艇にてヘイムダル旗艦【ヒミンビョルグ】に乗り込み、マクギリスに対して挨拶もそこそこにいきなりぶちまけたのはコーリス・ステンジャ。

彼は明らかに憤懣やるかたないが我慢していると云つた様子を見せながら続ける。

「だが、現状を捨て置けぬという志は分かる。そして出血を強いてでも改革しなければならぬと言ふ覚悟も分かる」

そう云つてコーリス息を吐いた。

「ゆえに我々はこの一戦においてのみ、貴方たちに助力しよう」

「……了解した。信念を曲げてまでの助力、感謝する」

す、と握手のために右手を差し出すマクギリス。しかしコーリスは頭を振つた。

「勘違いをして貰つては困る。この戦いが終われば、我々は貴方の罪を徹底的に糾弾する所存だ。……最低でも、地球外縁軌道統制統合艦隊の全員から決闘を申し込まれるくらいは覚悟して貰おう」

その言葉に、マクギリスは苦笑を浮かべる。

「肝に銘じておく。……私が生きて帰れたならば、受けて立とう」

こうして、コーリス率いるMS中隊、【クロウ隊】の参戦が決定した。そしてこのような増援があつたのは反逆軍だけではなかつたのである。

「——我等中隊とハーフビーク級一隻、参戦のお許しを願いたくまか

り越しました。なにとぞ許可を！」

画面の向こうで懇願する士官の様子に、ラスタルは内心で苦笑を浮かべる。

「貴官らの申し出を受けよう。配置はおって知らせる、奮闘を期待するぞ」

「はっ！ 感謝致します！」

通信を切り、息を吐くラスタル。傍らのガエリオは僅かに眉を顰めて問うた。

「良いのか？ 彼らは……」

「ああ、我々に賛同したわけではないだろうな。だが、『この状況で我々に味方するものが現れた』。その事実は士気を高める効果がある。そして彼らの性質からして裏切りなどはすまいよ。最大限に利用させて貰おう」

まずはこの戦いを勝ち抜かねばならない。それしか拠り所のないラスタルにとって、一部とはいえども『地球外縁軌道統制統合艦隊からの援軍』は、蜘蛛の糸にも見えたことだろう。

『その思惑が、いかなるものだったとしても』。

（彼らのような者を『真の忠臣』と言うのだろうか。分かっているもラスタルに真似はできないか）

盲目的な忠誠と、己の真意を押し殺してつくす忠義。己の行動と配下に対する気遣いの差。ラスタルとカルタの違いが明確なものとなった。

ガエリオは安堵を覚える。例えこの戦いがどのような結果を迎えても、彼女になら後を任せられると。

（何もかもを押しつけてしまうことになる。すまないな、カルタ）

いささかの罪悪感を胸の底に押し込め、ガエリオは戦いのことに意識を向ける。

元々の戦力差でも倍ほど。しかしながら銃後を狙ったラスタルの策はどうやら空振りに終わり、これ以上優位を確保することは出来なさそうだ。マクギリスと鉄華団は戦力差だけで圧倒できる相手ではない。ラスタルもまだ切り札を伏せているが、それは向こうも同じ

事。決定打と言うほどではないだろう。

しかし結局の所、ガエリオにとってはマクギリスとどう相對するかが問題だった。もちろんラスタルには命を救われた恩がある。力を貸すつもりではあるが、マクギリスが目の前に現れればそちらを優先してしまうだろう。

だがまあ、マクギリスを討てばラスタルの意にも添うだろうと開き直る。そのためだけに生き恥をさらしてきた。最早今更善人ぶりなどしない。

これは正義の戦いでは断じてないと、ガエリオは思っている。

自分にとつては、ただの私怨による私闘だ。

ぎしりと拳が固く握りしめられた。

反逆軍に参陣したコーリスは、単身イサリビのオルガの元へと足を運んでいた。

「わざわざ話をしに来た？　なんでまた俺達に」

訝しがるオルガだったが、コーリスは襟を正して口を開く。

「これだけは言っておかなければならないと思っただよ。……君たち鉄華団が設立される原因となったCGS襲撃事件。あの時GH側の指揮を執っていたのは、私の弟だ」

ざわりと、ブリッジに詰めていた面々が動揺を見せる。それを手で制して、オルガはコーリスに問うた。

「なぜわざわざそれを言う？　謝罪でも求めるつもりか？」

「まさかだ。わが弟は君たちの同胞の命を奪い、結果返り討ちにされた。それは自業自得に過ぎないし、戦場の習いでもある」

ただまあと、コーリスは続ける。

「後で露見して気まづくくなるより、先に言っておいた方がよいと判断したのだ。この一時だけとはいえ背中を預ける身。余計な不信感を

抱かせるような真似は避けたい。それに、言わずにおくのは不誠実だ
と思う。個人的な拘りだが」

幾度か鉄華団と関わり、彼らが若輩ながら敬意を払うべき戦士たち
だと見て取ったコーリスが下した判断。自己満足に過ぎないこと
だがと、彼は不器用な律儀さを見せた。

オルガはいつものように片目を瞑り、頭を掻いた。

「……あんた、変わってるな」

「変わっている、と言うより『変わった』のだろうな。……昔の私であ
れば、このようなことはしなかった」

「まあいいさ。これがあんたなりの『筋の通し方』だっていうのは理解
した。頼りにさせて貰う」

差し出された手を、今度はしっかりと握り返すコーリスであった。
(そしてそのシーンは、ちやっかりブリッジに居座っていたアヤに
しっかりと撮られているのであった)

そして帰路につこうとするコーリスだったが。

「よう、久しぶりじゃねえか双子の兄」

「貴様か」

チエシヤ猫を思わせる笑みを浮かべたランデイに対し、コーリスは
渋面で応えた。

士官学校時代に散々凹まされ、数年後の演習やアーヴラウでの戦い
にてしてやられた。苦手意識どころではない、天敵にも等しい相手。
そんな相手を前に内心では若干引き気味になるコーリスだったが、表
向きにはそれを出さずに相対する。

「不要な絡みはいらんど。最低でも今、貴様を敵に回すつもりはない」
「別にそんなつもりはねえよ。昔の知り合いに声をかけちゃいかんの
か」

「貴様の場合声をかけるイコールおちよくるだろうが」

「なんだ、分かってんじゃねえか」

くつくつと笑うランデイ。コーリスの顔は益々渋いものとなる。

「なに、良い面構えになったと思つてな。……カルタ・イシユー、仕え
甲斐があるようだ」

「……その様子だと、我等の思惑なんぞお見通しか」

溜息を吐く。コーリスたち、『アリアンロッドに降つたものたちを含めた』地球外縁軌道統制統合艦隊の一部士官たちの思惑。『どちらが勝つたとしても、自分達が助力したという事実を持って戦後カルタの立場を少しでも有利なものとする』という考えは、この男に見破られていたようだ。

いや、恐らくはマクギリスやラスタルも理解しているだろう。浅はかな考えだからかわれるかと思つたのだが。

「俺には出来ん覚悟だ。お前さんらのような人間を、本物の忠義者と言うんだらうさ」

「き、貴様が人を褒めるとか、どういう風の吹き回しだ!? 何が目的だ!？」

思わず動揺して声を上げるコーリス。ランデイの言葉は、あまりにも予想外すぎた。

「別に褒めたんじゃねえが。……まあいい、気合いを入れるのは結構だが、ちよいと力みすぎてやしないかとな。ま、その分ならそう心配することもねえか」

そう言つてランデイは踵を返す。

「つまらねえ死に方をすんなよ『コーリス・ステンジャ』。死んだら一人分、カルタ・イシユウが苦勞すんだからよ」

言いながら手をひらひらと振り去つていく。残されたコーリスは啞然とした顔をさらしていたが、やがて再び澁面となった。

「あの男……発破をかけたつもりか」

どうにも妙に気に入られたようだ。あるいはおちよくりがいる人間が死んでしまつてはつまらないと思つてのことかも知れなかつたが。

「やはり奴めは、腹が立つ」

こうなれば意地でも生き残つて一泡吹かせてやると、コーリスは改めて誓つた。

ラストルから指示された配置に艦を就かせ、「シユネー中隊」隊長
イツヒ一尉は息を吐きながら席に身を沈めた。

そうしてから、ブリッジに詰めたものたち——いや、己に従った全
員に向かって懺悔するように告げる。

「すまないな皆。自分の我が儘に付き合わせてしまった」

彼はコーリスたちと同じくカルタのためにラストルに降った……
というのは表向きの理由だ。実の所『ランディと再戦したくてマクギ
リスと敵対した』という部分が多くを占める。

イツヒはカルタと共に雪原で鉄華団を襲撃した部隊の生き残りだ。
命を賭けて事を成した、そう思った直後に逆転された一部始終を目に
している。そして重傷であったところを治療され、途中で解放され
た。

屈辱であった。カルタに勝利を捧げるため全てをかけ、敗北した上
に情けをかけられた。いっそのこと戦死した方がよかったと思える
ほどに身を震わせる自分達に向かって、ランディはこう言い放つ。

「悔しかったらいつでもかかって来な。お礼参りは随時受け付け中だ
ぜ」

歯牙にもかけていない言いざまだと、憤りを覚えた。いずれ目にも
のを見せてやる。その思いを胸に恥を忍んで生き延びた末に訪れたの
がこの機会だ。

この機を逃せば、もう奴と相對する事はあるまい。そう思ってし
まったらもう自分を止められなかった。だから状況を利用してこの場
に赴いた。たとえ奴と直接戦えぬ結果に終わる事になってもだ。

カルタへの忠誠心が無くなったわけではない。だが意地が上回っ
てしまった。それに自分達が奮戦すれば、ラストルが勝利した場合に
カルタへ配慮してくれるよう進言することも出来るだろうと言いつ
じみた打算もある。

後悔はない。ただ、一部とはいえ同胞を巻き込んでしまったのは済

まなく思う。結局自分もつまらぬプライドを捨てられない人間なのだ
だと自嘲するイツヒであったが。

「なんの、我々も奴に一矢報いたいのは同じ事」

「ランディール・マーカスが鍛え上げた戦士ならば、相手にとって不足
無し。目にも見せましよう」

次々と告げるイツヒに付き従うものたちもまた、覚悟を決めて事に
臨んでいる。あの男に一泡吹かせたい。只そのために集った大馬鹿
野郎どもであった。

まったく愚かなことだ。ならば愚か者は愚か者らしく腹を据えて
往くとしよう。イツヒは獰猛な笑みを浮かべた。

「ならば、皆の命を貰うぞ。シユネー中隊ここにありと、奴に、いや世
界に示せ！」

おお！ と鬨の声上がる。

戦いを前に、マクギリスは各部署を周り兵を激励していた。

各部のコンデイションを確認するという目的もあったが、まめな行
動である。彼は多くの兵をスカウトするときも大概自身が顔を出し
直接相對することを好んだ。

そして今、彼はあるMS大隊の前に言葉を放つ。

「皆良くここまで来てくれた。感謝する。……IDの返還は確認した
な？ この戦いが終われば……いや、『もう君たちは自由だ』。戦果を
上げてくれれば、後は好きにしてくれて良い」

兵たちがざわめく。何やら戸惑っているかのようだ。

と、その中の一人が意を決した表情でマクギリスに語りかける。

「代表、貴方……『あんた』には恩がある。俺達を『人間にしてくれた』
恩が。戦える者には軍属を与え、そうでない者には手に職を与え仕事
先まで紹介してくれた。体をやった者には治療まで施してくれ

るありさまだ。自由になったからと言ってはいさよなら、つてやるには、あまりにもでかすぎる恩だ」

その言葉にマクギリスは苦笑した。

「それもこれも、俺の目的のためだよ。……言っただろう？ 『俺は君たちを利用する。だから君たちも俺を存分に利用すればいい』と。妙に義理立てする必要はない」

「義理立てってわけでもないさ。自由にしていいんだろう？ だったら最後まで付き合わせて貰う。それぐらいの恩は返させてくれ」

男の言葉に、兵たちの多くが頷いてみせる。全く、変わり者ばかりだと妙なくすぐったさを覚えるマクギリスだが、ある種自業自得だ。

彼らに対してだけではない。マクギリスは味方に引き入れる者や協力関係になれそうな相手には誠実で律儀な対応を貫いていた。彼自身は他人を信用することが出来ないと思っっているが、『他人に信用されるように行動することは出来る』。己の目的のため信頼されるべき者には相応に心を砕いて接していた。

それは何も演技というばかりではない。彼は自覚していないことだが、養父であるイズナリオを始めとするセブンスターズの重鎮のよくな、『唾棄すべき大人』と同じような人間になりたくないという思いが心のどこかにあった。ガエリオやカルタに対して冷徹さを捨てきれない部分があるのは、情だけでなくそのような思いがあるからなのだろう。

ともかく彼の行動は結果的に人望を集めることとなる。当然だろう、信用されるよう行動すれば信用されるのは当たり前だ。味方に對し互いに利用し合う立場、などと嘯ってはいるが、そう思っ彼の味方についている人間は少数派と言っいいい。

「分かった。君たちの厚意に改めて感謝する。この戦を勝ち抜くため、力を貸してくれ」

また自覚無く人望を上げていることにも気付かず、マクギリスは頭を下げた。

ヘイムダル特殊大隊「スカーフェイス」。マクギリスの忠臣と言っても良い戦士たちもまた、戦いに身を投じる。

ジュリエッタは荒れていた。機体をシミュレーションエンジンに繋ぎ、闇雲に己を痛めつけるがごとく鍛錬を続ける。

しかし流石に疲労を感じたのか、シミュレーションを中断しコクピットから、はい出てきた。汗まみれで荒々しく息を吐き、殺気だった目で乱暴にドリンクチューブの封を引きちぎり一気にあおる。その鬼気迫る様子に、彼女に近づく者はだれも――

「おやおや、精が出るねえ」

何事にも例外はあると言わんばかりにナレーションを無視して、ジュリエッタに語りかけるのはマリイ。チエシャ猫のような笑みを浮かべ歩み寄る彼女を、ジュリエッタはぎろりと睨み付ける。

「何用ですか。見ての通り今忙しいのですけれど」

その態度に、マリイは笑みを深めた。

『自分達の大儀が、世界に否定された』。それで気持ちぐしやぐしやになつてる、つてところかい？」

「っ！」

言葉に詰まるジュリエッタ。マリイは邪悪な笑みを湛えたまま、続ける。

「足下がいきなり崩されたら、そうなるだろうねえ。純粹で真っ直ぐつてのも考えモンさ」

その言葉に、かっと血が上がった。

「あなたに！ あなたに何が分かるのです！ 私は……」

「正義の味方の『つもり』、だったんだらう？ そのつもりで戦ってきた」

けどねえと、からかうような調子の言葉は続く。

「アタシらに『殺された』人間からすりゃ、そんなことは全く関係ないだろうねえ。むしろ『自分達が正義』だと思ってたんだらう。……今

だって同じ。マクギリスは『自分の正義のために立った』。どっちも正義を背負ってるのさ」

その言葉に息を飲むジュリエッタ。ややあつて彼女はこう問うた。「……あなたにも、正義があるのですか？」

返す言葉はあつげらんかんとしたもので。

「ん？ 強いて言うならランディール・マーカスと戦うつてのが、アタシの正義だねえ」

「そんなものが正義だというのですか!？」

「その程度のモンなんだよ。正義つてのは」

冗談めかしていたマリイのトーンが、不意に真剣なものに変わった。

「命を賭けて戦いに赴くものは、大なり小なり『自分の正義』つてものを背負ってる。それは大儀つてやつだったり、命令だったり、金だったり、ただ生き延びるためだったり、色々さ。それは大ききじやない、その人間にとって『命を賭けるだけの価値があるか』、それだけだよ。『戦場では誰もが等価値』。あとは運と実力。正義で弾は当たっちゃくれないのさ」

気圧されたのか、押し黙るジュリエッタ。やがて彼女は俯いたまま、ぽつりと言葉を零した。

「……ならば私は、どうすればいいのですか」

迷い子のような声。マリイはいつもの調子に戻り、肩をすくめて何でもないように言った。

「好きにすりゃいい。なんたつて隠していた情報が大つぴらになっただけで、『状況は何も変わっちゃいない』。やることはいつも通り。ただまあ、勝つても負けても面倒なことになるとは思うけどね」

にい、と再び笑みを浮かべる。

「しかし勝たなきやにうちもさつちもいかない。ならば勝つしかないだろう？ そこでふさぎ込んでるか奮戦するかは……アンタ次第さ。ま、精々後悔しないようにするんだね」

そう言つて踵を返す。ジュリエッタは俯いたまま。その手がぎゅつと握りしめられる。

去ったマリイの方はと言えば、歩きながらぽりぽりと頭を搔き、溜息を吐いている。

「やれやれ、らしくない事しちまったねえ……」

説教など自分のキャラではないと、自嘲する。気まぐれにしても余分すぎる行動であった。

なぜそんなことをしたのだろうと自問自答しているうちに、ふと思い当たる。

「……ああ、『これで最後だから』か」

進む先は格納庫の最奥。バリケードでふさがれたブロックの中に足を踏み入れる。

そこに鎮座しているのは、レギンレイズ・モルガン『だった物』。頭部とボディフレームだけが原形を残し、それが増加されたパーツ群に埋め込まれるような形で配されている。

未だ最終調整最中の機体。その姿はまるで――

ホタルビの格納庫。その一角で少年たちが集っている。

「アストンたちは貧乏くじ引いたな」

「ああ、折角の稼ぎ時に勿体ないって、今頃臍を噛んでるさ」

彼らはブルワース戦で鉄華団に受け入れられた元ヒューマンデブリたち。アルトランドの姓を貰い受けた『兄弟』だ。

円陣を組み、リーダー格である昌弘が言う。

「みんな、ここが恩の返し時だ。けど団長は俺達の無駄死にを喜ばない。だったらどうすればいいか、分かるな？」

その言葉に応えるのはビトー。

「ああ、石にかじりついてでも生き延びる。生きて勝って、未来を掴む！」

不敵な笑みでもって断言する。かつて絶望の中情性で生きてきた

奴隷はもうここに居ない。希望を抱き、夢を持って、未来を見据えて歩く少年たちが在った。

力強く頷くのはデルマ。

「そうだ。生きてこそ恩が返せる。団長が、鉄華団のみんなが。……ランディ教官が教えてくれた。だから、ここで死ねねえ！」

昌弘が拳を突き出す。全員が合わせて拳を突き出し、がっりとぶつけど合う。

「生きて帰るぞ！ 俺達の夢を、明日を！ ここで終わらせないために！」

『応っ!!』

その様子を見ていたシノが、からかうように傍らの昭弘に向かって言う。

「気合い入ってんじゃねえか。流石だな」

返す答えは至極真面目な調子で、しかしどこか誇らしげで。

「ああ、自慢の兄弟たちさ」

第7艦隊の一部は再編成され、新たに加えられた部隊が参入している。

その母艦となっているフェアライトのブリッジ。乗員が一新され、雰囲気が変わったようだ。どことなく荒んだ空気の中、艦長席に座った男が通信を開いている。

「どうよ、調子は」

「ああ、悪くはない。機体にもなれた」

「そいつは重畳。準備は万端って訳だ」

椅子に座っているとと言うより埋め込まれたような肥満体を揺らし、男はくつくつと笑う。

「こうやって機会を与えてくれるたあ、ラスタル・エリオンも剛毅な

こつた。感謝しねえとなあ」

「まあ、『俺達のような者』を取り立てなきやならないほど追い込まれているとも言えるがな。その分恩を売りやすい」

「そういうこつた。しっかり頼むぜサン……おっと、『エイロー隊長』殿」

新設部隊【エイロー隊】。どうやら訳ありらしいこの部隊の参戦は、戦いにどのような影響を与えるのか。

様々な人間が、様々な思いを胸に秘め決戦に挑む。

誰もが正義を背負っており、そして誰かの正義を踏みつぶさんとする悪を背負っている。

互いの準備が整い、一色触発という状況の中、ラスタルは己の艦隊に向けて檄を飛ばしていた。

「アリアンロッドの勇士諸君！ 今我々はかつて無い窮地に追い込まれている！」

それは己の不利を認める言葉から始まった。ラスタルにしては珍しいと言うか、今までになかったことである。

しかしながら当然、これで終わらせる男ではない。

「マクギリスは我々を悪と断じ、その暗部をさらけ出した。確かに我々は法の目をくぐり抜け、悪事と呼べる策も採った。それは認めよう。……だがそれらは、『誰かがやらねばならないこと』であった！」
堂々と、そう言う。

「誰かがやらなければ、秩序と平和を守ることなど出来なかったであろう！ 例え泥にまみれてでも、平和という花を咲かせてきた。それは我々の誇るところである！ 我々はただ題目を唱えるのではなく、行動で今現在を築き上げた！ それをただ表面上の正義とやらで否定されて良いのか！ 良いはずがない！」

あくまで自分達に義があると吠える。その言葉は迷いを持っていたものたちの士気を確かに向上させていく。

あるいは『その言葉に縋りたかった』だけなのかも知れなかったが。「我々は示さなければならぬ！ GHの大儀は決して間違いではないと！ そしてそれを支えてきた我々は正しいのだと！ 総員、不義を正義と偽るものたちを打ち倒し、それを証明してみせるのだ！」
今更の、お為ごかしである。

だがそれは確かに、アリアンロッドのものたちを沸き立たせた。

此方反逆軍。その旗艦となったヒミンビョルグの甲板上に、マクギリス駆るバエルの姿があった。

備えられている双剣の片方を甲板に突き立て、その柄尻に両手をおいた姿勢。純白の機体はほぼオリジナルのままだが、ただ左肩に記されたギャラルホルンの紋章が、紅い塗料でべつとりと×に塗り潰されている。

コクピットでラスタルの宣言を聞いたマクギリスは、ふっ、と鼻で嗤った。

「総員、今の言葉を聞いていたと思うが……面白くもない言い訳だと思わないか？」

静かに、だが然りと揶揄する。

「ああ確かに、この300年は表面上平和を保ってきた。……だがその裏側で、どれほどの悲劇が起こってきたか、どれほどの人間が踏み

つけにされてきたか、我々はそれを知った。その上で黙っていることなどできようか」

大きく張り上げた声ではない。だがそれにはぐるぐると様々な思いを込めた『熱さ』が乗っている。

「そして我々がそれぞれ個々に抱いた思いを、願いを、貫くためには目の前に立ちふさがる者を打倒しなければならぬ。でなければ歴史の繰り返しだ」

眦が力強く引き締められる。

「戦おう。どれほどに目の前の敵が強固であろうとも、戦わなければ道は切り開けない。命を賭けて、我々は前へと進む！」

引き抜かれた剣が、真つ直ぐにアリアンロッド艦隊へと突きつけられた。

「力を貸してくれ、集いし戦士たちよ！ 傲慢なる過去の遺物を叩きのめし、世界の目を覚まさせよう！ 未来を勝ち取るために！」

アリアンロッドほどの熱狂はない。しかし同等以上の覚悟を持って、反逆の戦士たちは応える。

イサリビのブリッジ。双方の言い分を聞いたオルガは、ふん、と鼻を鳴らした。

「なんにも知らなきや、ラスタルの言い分も正しく聞こえるが、な」何も関わりがなかったなら、後ろ暗いところのある自分達が物言う資格はないように思う。だが、彼らに散々ちよつかいを出された身としてはふざけるなど言いたいところだ。

世間の荒波に揉まれ、様々なことを学び成長した今なら分かる。ラスタルの言う秩序や平和とは、枕詞に『自分に都合の良い』と付くものだと。

例えばドルトの件。何も武装デモを誘発しなくても、アリアンロツ

ドの武威を背景に労働組合とカンパニーの仲裁をすることも出来たはずだ。あるいはアーヴラウの件。マクギリスの命を狙うだけであれば、通信インフラを止め国に甚大な被害を与えなくても、首脳陣の何人かと内通し彼を罠に嵌めればよかった。

配下を実戦を経験させ武功を得るため。アーヴラウの国力を削りあわよくば蒔苗の命を奪うため。自分達の都合のために人を陥れ戦乱を招く。その上で築き上げた秩序や平和？　クソ食らえと吐き捨てたくなる。

むやみやたらとそんな思いを口にしなくなっただけ分別が付くようになったオルガであるが、胸にわだかまる憤りはどうにも気分が悪い。マクギリスの言葉で少しだけ溜飲が下がったが、許されるのであれば直接ラスタルを一発ぶん殴りたいくらいには腹が立つ。（なお『鉄華団全員で一発ずつ』である）

と、そこにブリッジ内で撮影と記録を続けていたアヤが声をかけてくる。

「おや団長さん、これから大勝負って時にしかめっ面なのはいただけませんかねえ。絵になりませんかよ？」

からかうようなその言葉に、少しむっとした様子を見せるオルガ。

「……緊張してんだよ。それこそここ一番の大勝負だからな」

その言葉にふむふむと頷くアヤだったが、意味ありげににやりと笑いこう告げる。

「であれば緊張をほぐすためにも、ここで一発団員さんたちに櫓を飛ばすというのはどうです？」

「そんなモンで緊張が解けるかよ」

「緊張をため込んでいるよりは発散した方が幾分かマシですよ。それにラスタルの宣言に皆さんも思うところがあるでしょう。気分の良いことを言えばすつきりと戦いに赴けるのでは？」

実はオルガの心境などお見通しであるアヤの唆し。微妙に納得は出来ないが、一理はあるかと、片目を瞑り頭を掻いたオルガはマイクを手取る。

「団長のオルガだ。皆聞いてくれ」

機体のチェックをしていたヤマギとザックが耳を傾ける。

「俺達に大したお題目はねえ。この戦いも、依頼されたから参戦しているだけのこと……ただの仕事だ」

打ち合わせをしていたごちゃ混ぜ隊の面々が顔を上げる。

「けどな、この仕事は世界を変える大仕事だ。いろんな人たちが、色々な思いを、預けて、託して、任して、俺達はここにいる」

エーコとラフタが顔を見合わせる。

語っているうちに、オルガの中で何かが纏まっていく。それは怒りではない。今まで積み上げてきた物が何かの形を取りつつある。そんな感覚だ。

「……俺は、『俺達の居場所』が欲しかった。いつかどこか、たどり着いて、みんなで馬鹿みたいに笑っていたい。そう思ってた」

シノとライド、ダンテの3人が頷いた。

「気付いたんだ。今の俺達は目の回るように忙しくて、やるが多すぎて、厄介ごとばかりが押し寄せてきてる。だけど……飯は腹一杯食えるようになった。給料も十分出せるしボーナスだってある。こんな俺達を信用してくれる人も増えたし、信用できる人も増えた。……そしてなにより、みんな笑えるようになった」

昭弘が、チャドが、デルマが、顔を見合わせ頷き合う。

『『ここ』なんだ。今居るこの場所が、俺達の目指していたどこか。たどり着いていたんだと、そう思う』

山ほどの戦闘食を調理しながら、アトラが得心したような表情を浮かべる。

「だが、これで終わりじゃない。まだ『これから先がある』。俺達は生きていく。そのためには飯も食わなきゃならないし、金も稼がなきゃならない。仕事をしなきゃ生きてはいけない」

ホタルビのブリτζェで、ユージンが「そりゃそうだ」と呟いて笑みを漏らす。

『歩き続けていくんだ』。今この場所に満足するんじゃない、もっと良くなるように、もっと笑えるように。俺達の居場所を護って、もっと良い場所にするように」

「サカリビの指揮を執っているビスケットは、うんうんと頷いてみせた。」

すう、とオルガは息を吸い込んだ。

「だからお前ら……『止まるんじゃねえぞ』!」

最終調整する手を休めずに、ランディはくつ、と唇の端をつり上げる。

「この仕事は多分これまでの中で一番きつい仕事だ。だがそんなモンで俺達は止まらねえ! てめえの事しか考えてない骨董品なんぞに止められてたまるか! だから、勝ちに行くぞ!」

コクピットの中で、三日月は「……ああ、そうだね」と呟き、微かに微笑んだ。

「俺達は生きる! 連中はただの障害物だ! 踏みつけて乗り越えて前に進む! 気合い入れていけよ!」

どつと、咆吼のような歓声が上がった。

なおこの演説はアヤの手によってリアルタイムで動画配信されており、後にその事実を知ったオルガは、羞恥のあまりのたうち回ることになる。

「各艦、砲雷撃戦用意! ウエポンズフリー!」

「MSは順次発進! 進路を開けろ!」

「空域が狭くなる! 味方に当たるなよ!」

一気に双方の艦隊が動き出す。砲撃が散発的に開始される中、次々とMSが発つ。

「ここで少しでも戦力を削ければ、カルタ様に有利となろう。……シユネー、イツヒ。出陣する!」

グレイズリッターで構成されたシユネー中隊が斬り込む。

次にカタパルトへ上がるのは、両肩を黄色く塗装された部隊。

「ふん、妙に気合いの入っているのが居るが、手柄はくれてやれんな。……エイロー、レギンレイズハイムバーで出る！」

両腰に半月剣を提げたレギンレイズハイムバー3号機に率いられたレギンレイズの部隊が駆ける。

そして。

(私は、なぜ戦うのかまだ分からない)

カタパルトに上げられる機体の中で、ジュリエッタは自問自答していた。

(けれど、答えを出すまで戦場は待ってくれない。答えを出すなどと、悠長なことを言っている暇はないんだ)

だから。

「今は、まず戦う！ ジュリエッタ・ジュリス、レギンレイズジュリア！ 行きます！」

ジュリアが発った後、カタパルトに上がる機体。

巨大なランスを備えた、騎士を思わせるその機体は「ガンダム・キマリスヴァイダール」。

厄祭戦で使われた仕様を再現し、さらにこの戦いのため再調整されたキマリスの決戦仕様。それを駆るガエリオは、落ち着いた物だ。

「これで、全ての決着をつける。キマリスヴァイダール、出るぞ！」

次々と発進するアリアンロッドのMS。対する反逆軍も同様に。

「恨みはないが、許せよ。……クロウ隊、続け！」

コーリス率いるクロウ隊が飛び出す。

「メビウス4、ヘルムヴァーゲ・リンカー。出る」

口数少なく告げた石動のヘルムヴァーゲが発艦する。

そして鉄華団も。

「へっ、派手なパーティになりそうだ。……メビウス1、デイモン。ラースグリーズ出るぞ！」

かつてのコールサインとTACネームを名乗り、ランデイの機体が駆ける。

「数が多いが、みんなビビるなよ。やる事アいつもと同じだ。流星隊、行くぜエ！」

シノの流星号を筆頭に、ライドの雷電号とダンテの獅電が続く。

「無理はするな。機体の損傷が3割を越えたらサカリビに退避。俺達はこんな所で死ねないんだからな！ 昭弘・アルトランド、グシオンリバイク明王丸。出撃する！」

飛び出す2番隊……の背後から追いつがる1機。

「ちよつとお、置いていかないですよ！」

「ラフタか」

辟邪を駆るラフタはちよつと膨れている。

「アンタの背中を——」

「分かっている。護ってくれるんだろう？ 頼りにしてるぜ」

突然の不意打ち（自覚無し）に、ラフタは赤くなつて「分かつてりやいいのよ分かつてりや」とか言いつつそっぽを向き、チャドとデルマは砂を吐いていた。

最後にカタパルトへと上がるのは、バルバトス。

そのコクピットの中で、三日月は静かに目を伏せている。

「ミカ、俺達の予想が当たつてんなら、連中は必ず『でかいの』をカマしに来る。そいつを乗り越えてからが本番だ、頼むぜ！」

「分かっているよ、オルガ」

伏せていた目を開ける。その眸には闘志が宿っていた。

「オルガは約束を守ってくれた。今度は俺の番だ。……三日月・オーガス。バルバトス出るよ」

巨大な剣を携え、白き鬼神が飛び立つ。

正義の味方なんかどこにも居ない。

ただ人間だけが、戦場（そこ）に在る。

※今回のえぬじい

ラストルは己の艦隊に向けて檄を飛ばしていた。

「諸君、私は戦争が好きだ」

『!?』ガビビーン!

だいなし。

47・チップは命の賭博場

火星、鉄華団本部。ここでは事務を預かるデクスターを中心に、裏方の人間が各種作業に追われていた。

前面で戦うことだけがやることではない。テイワズに任された探掘場の再建など、少しずつでも進めなければならぬし、そうでなくても各種事務手続きや根回しなど、やることは山とあった。

だからといって、24時間働きづめという訳にもいかない。大きな作業が一区切り付いたところで、共に作業していたメリビットが「そろそろ休憩しませんか」と提案し、皆が手を休めた。

「どうぞ。インスタントですけれど」

「ありがとうございます」

メリビットが入れたコーヒーマグカップを受け取り一口。そうしてからデクスターはふふ、と小さく笑みを浮かべた。

「その様子だと、上手くいっているようですね」

「ええ、鉄華団の資産の3割を隠し財産として、テイワズ系の金融機関に分散しました。これでいざというとき通常の口座を凍結されても、『引越し』くらいはできるでしょう」

それだけではなく、鉄華団所有の船舶登録に複数のダミーを用意したり、圏外圏に団員たちのIDを用意したり、『敗北したときの用意』を彼は整えていた。それらをすべて『自分の責任となるよう細工した』上で。

「でも少し気負いすぎではないですか？ なにも全部の責任を被る必要はないでしょうに」

少し眉を寄せてメリビットが言う。応えるデクスターは微笑むまで。

「なに、罪に問われても精々終身刑くらいですよ。戦場で命を張っている皆に比べればなんということはない」

それにねと、彼は続ける。

「団長たちは、全てを私に任せてくれた。CGS時代、社長たちに怯えてろくに手助けも出来なかった私を信用して。それに応えたいんです」

かつて無力であつた自分を引き入れたのは、他に事務仕事が出来た人間が居なかつたからだろう。だが日々を積み重ねるうちに、確かな信頼関係が出来上がっていった——仲間だと、家族だと認めてくれた。それを嬉しく思う。

「勝つても負けても、戻ってきた彼らに『おかえり』と言ってあげたい。そのための苦勞ならいくらだってしますよ。家族なんですから」

戦えない自分の、せめてもの責任だと、デクスターは談じる。この場所を護るのが自分の仕事だと胸を張って。

(まったく、男の人ってみんな変なプライド持ってるんだから)

メリビットは心の中で嘆息。 どの時もこいつも困つたものだから。自ら好きこのんで苦勞を背負い込んでいく。見守っているものの気持ちも考えて欲しい。

(言つて止まるような人たちではないって、分かっているのだけれど) 彼方でオルガが止まるんじゃないやねえぞと檄を飛ばしていることなどつゆ知らず、どうしたものかと呆れつつ悩む。人のことを何のかんの言っているが、テイワズを退職し鉄華団に入り直してとことんまで付き合う腹を決めた時点で、同じ穴の貉では無かろうか。

(雪之丞さん、ちゃんと手綱を取って上げて下さいね)

遠く離れた交際相手に祈る。もつともブレーキになるどころか下手するとアクセルになりかねないとは分かっていたのだけれど。

心配しているようで実は煽っているのかも知れないメリビットであつた。

戦力が展開すると同時に、オルガは指示を下す。

『コンテナ』の放出を開始。サカリビは放出と同時に所定の位置へ後退だ。連中の動きから目を離すなよ」

鉄華団艦隊それぞれのカーゴブロックから、多量のコンテナが放出されていく。それはワンから大量に買い付けた急造ミサイルランチャーもどき。アポジモーターで微妙に進路を変更しながら、それらは漂っていく。

その存在は、アリアンロッド艦隊にも捉えられていた。

「ふむ、何やら小細工か。……観測班、あの漂流物に留意しておけ。何をしてくるか分からん」

ラスタルは油断を見せずに指示を飛ばす。そうしてから「しかし」と呟く。

「二つ艦を後退させた。損傷した機体や負傷兵を收容し、いざとなれば離脱するためのものか。先に落としておくべきかも知れんが、位置が悪いな」

艦隊の射程距離外。MSで襲撃しようにも鉄華団は十重二十重と防衛陣を築いている。彼らの技量は嘗てかかれるものではないし、そこにだけ戦力を集中させるべきではないと理解しているラスタルは、即座にサカリビを狙うのを諦めた。

その代わりというわけではないが。

「ヘイムダル艦隊に合流した艦に攻撃を集中させろ。やつらはまだ連携が取りにくい。いまのうちに叩く」

各所から反逆軍に合流した艦。寄せ集めとも言える彼らはまだ連携が取れていないと見たラスタルは、そう指示を下す。

「団長、敵は合流した艦の方に攻撃を集中させ始めました」

「そのパターンできたか。……反逆軍艦隊に通告。『例の仕掛け』を使う。索敵管制に注意しろとな」

万全ではないが、対策はある。オルガは即座に動いた。

アリアンロッド艦の砲座が敵艦を捉える。自動制御によりセンサーで捉えた艦影に照準を合わせ砲弾を吐き出す――

寸前で、『突如センサーが別の艦影を捉えた』。

いきなり現れた複数の反応。それにより火器管制システムは一時的に混乱する。

「何が起こった？」

「さ、先程放出されたコンテナです！ あれからいきなり艦船のエイハブウェーブ反応が！」

オペレーター言葉に、ラスタルはすぐさま状況を察知する。

『エイハブコンデンサ』か！ 艦船の周波数で粒子を一気に放出し、ダミーとして使ったと」

MSの慣性制御に使われるコンデンサは、一時的にエイハブ粒子を蓄積しておくことが出来る。それに細工して、艦船の周波数で粒子を一気に放出できるようにしたものを、コンテナに詰めて放出していたのだ。

短時間しか効果のないダミーだが、これにより自動制御される火器管制システムは混乱し、一時的にフリーズしてしまう。それを悟ったラスタルは対策を講じた。

「火器管制をマニュアルと光学照準に切り替える！ 命中精度の低下は数で補え！」

「コンテナにはどう対処しますか？」

「放っておくしかあるまい。所詮はダミーだ。それに一々潰して回ったのでは手間になる。この状況で余計な戦力は割けん」

コンテナを放置するという判断を下したラスタル。その選択はオウルガたちも見て取った。

『上手いこと判断してくれた』か。油断はならねえが、まず第一段階はクリア。……MS戦はどうなってる」

「1番、2番、3番隊。遊撃部隊。そしてランディ教官。それぞれ敵と交戦中。残りも順次交戦に入ります」

「長丁場になる、無理はさせるな。3割以上の損傷を受けたら即座に後退だ。焦らず粘るぞ」

まだ始まったばかりだ。これからは積み木を一つずつ積み重ねていくような慎重さと、敵の虚を突く大胆さが同時に求められる。オウガの肩には多くの命が乗っていた。その重みに負けぬよう神経を研

ぎ澄ませる。

「艦の足を止めるなよ。装甲が増加された分ちよつと動きが鈍って
る。当たらないことより受け流すことを意識するんだ」

決戦に赴くに当たって、鉄華団の各艦は前面の装甲を増加してい
る。それにより機動にも幾ばくかの影響が出ていた。火星からの航
行中に慣らしはしたが、油断はするべきではない。

「団長、合流艦にヘイムダルからフォローが入りました。部隊名はス
カーフェイス。敵MS部隊と交戦に入ります」

「例の部隊か。話は聞いているが……どうにも妙な気持ちだ」

『俺達と同じ』って事ですからね。マクギリス代表は信用できますけ
ど、気持ちは分かります」

「あいつらが自分から望んでここにいて、って言葉を信じるしかない
か。……ともかく合流部隊のフォローはやつらに任せる。俺達は迎
撃に集中するぞ」

壮絶とも言える叩き合いは続く。戦場に秩序など無い。誰もが必
死、誰もが命がけの綱渡りだ。

そこでは冷静さを失ったものから落ちていく。

「イオク様の仇をおおー！」

「く、こいつら、後先考えずに突つこんでくる！」

合流艦隊と真つ先に接敵したのは、第2艦隊の残存部隊であつ
た。本来先陣を切るのは彼らではなかったはずだが、イオクの仇を討
つと血気に逸っており、戦術を半ば無視する形で突出していた。

上官を失う、などということを彼らは今まで経験したことがない。
それどころか想定すらしていなかった。イオクさえ居れば『自分の立
場は盤石』、そう考えていた節がある。

だがイオクは討たれ、第2艦隊はラスタル預かりとなった。ここで
彼らは危機感を覚える。これから先自分達はどうなってしまうのだ
ろうかと。

真つ当な忠誠心を持っているものは本気で敵討ちを狙っていたが、
そうでないものはラスタルに取り入るため、功を焦る。そう言ったも
のたちが真つ先に斬り込み、まともなものたちもそれに引きずられ、

飛び出す。結果彼らは先陣を切って交戦を開始することとなったのだ。

彼らの士気は高い、というか死に物狂いだ。忠誠心の高いものたちは、なんとしてでもイオクの仇を討つと息巻いているし、そうでないものは少しでも手柄をと貪欲だ。その勢いは反逆軍の兵たちを押ししていく。

だが勢いだけで勝てるほど、戦場は甘くない。

横合いからの奇襲。銃弾の雨が第2艦隊のMSたちに降り注いだ。

「無事か？　こちらはスカーフエイズ隊だ。ここは俺達に任せて引き、体勢を立て直してくれ」

「おお、代表直下の。援護を感謝する」

「お互い様だ。後で返してくれよ」

「了解した。生きて帰れたら一杯おごろう」

損傷を受けた機体が後退し、代わりにスカーフエイズ隊が交戦を始める。明らかに通常の機体と違う動きをするスタークグレイズ。その動きを見た第2艦隊の兵は目を見開いた。

「あの動きは、まさか『阿頼耶識』!？」

そう。スカーフエイズ隊とは、マクギリスが保護したヒューマンデブリから希望者を集い、訓練を施して兵としたものたちの部隊だ。

元々が戦場を生き抜いた経験のあるものも多く、そして戦い以外に自分の道を見つけられなかったものも多い。マクギリスはそう言ったものたちを正規のGH兵として採用し、訓練と教育——人としての生き様を与えた。自分たちを価値ある人間だと認め、力を貸してくれると請われた。彼らはそれに多大なる恩義を感じ、忠誠を誓っている。そしてマクギリスの力になるため、この日のため、己を磨き続けてきたのだ。

「我等が命、今日この日のために在り、つてな！　総員、死力を尽くすぞ！」

「」「了解っ！」「」

第2艦隊の兵をやもすれば上回る気迫。そして並の兵を凌駕する技量を持って、スカーフエイズ隊は挑みかかる。

ヘイムダル旗艦ヒミンビョルグ。艦隊の指揮を執っているライザは、戦況を示すディスプレイを見ながら呟いた。

「見事な物だな。阿頼耶識付きの兵、味方にすればこれほど頼もしい」
反逆軍では阿頼耶識システムに対する拒否感などはほぼ無い。流石に自分が施術される立場になれば躊躇するだろうが、ヒューマンデブリや少年兵に対する偏見は無と言ってよかった。

元々身分の低いものや、後ろ暗い出自のものも多く、阿頼耶識を備えたものたちを実地で知っているものもあつた。実態を知り、そして共に同じ目標に向かって切磋琢磨すれば理解も出来る。

彼らにとって阿頼耶識を持つものは敵か味方が重要であつて、備えていることそれ自体は何の問題もない。鉄華団がすんなりと受け入れられたのもそれゆえのことであつた。

「ともあれあまり彼らに任せる訳にもいかないか。体力や精神力は我々と差があるわけではないのだから。……合流艦隊はヘイムダルと鉄華団のフォローに回るよう通達してくれ。向こうに突き崩す隙を与えるな」

「エンゼー尉。こちらのMS部隊に損害が出始めています。……これは?!」

「どうした。報告は正確に頼む」

オペレーターは、焦りのようなものを見せつつ報告を行う。

「敵部隊の中に、『阿頼耶識を備えたものが多数確認されたようです』
!、こちらのMS隊が圧されている模様!」

「なんだと?!」

ライザは驚愕の声を上げたが、すぐさま眦を鋭い物に変える。

「ラストル・エリオンも『代表と同じ事』を考えたか! 鉄華団に通達。余力が在ればこちらに回してくれるよう要請してくれ」

その時前線では、暴虐の嵐が吹き荒れていた。

「はっはっはア！ 脆い、脆いぞー！」

電光のような速度で戦場を駆けめぐり、二つの半月刀を振り回して刈るように反逆軍を蹴散らしていくのはレギンレイズハイムバー。それを駆る男——エイロー隊長は上機嫌で哄笑する。

「阿頼耶識！ 馬鹿にしていたものだが、こうまで使えるとはなア！」
ラストルが切り札の一つとして取った手段。それは『海賊などのMS戦闘になれているものに阿頼耶識手術を施し、兵にする』といったものだった。

一般に流布している阿頼耶識ナノマシンと違い、成人に施すものはそれぞれ個人用に専用調整する必要があると言う手間はあったが、実戦経験豊富な人間をより強化することが出来ると言う利点があった。裏から手を回し収監されていた犯罪者たちをかき集めるといふ危険を冒してまで成し遂げた策は、想定通りの効果を生みつつある。

「このまま一気に防衛網を突破する！ 旗艦を沈めればさしものやつらも……」

エイロー隊長の皮算用は途中で寸断された。

リーダーに感。それを感覚として感じたと同時に、本能に従ってエイロー隊長は回避行動を取る。

「……そう容易くは行かせてくれないようだな」

寸前まで己の存在した空間をぶち抜いたのは白と黒。

「ちっ、勘が良いな」

「はっはア、なかなか面白い趣向じゃねえか！」

三日月のバルバトスとランディのラズグリーズである。それに次いで鉄華団の主立った戦力が敵を蹴散らし駆けつけてきた。

眼前の敵を睨め付けながら三日月は言う。

「ランディ。こいつは俺が相手をする」

「ほう？ 珍しいなお前が敵を選ぶなんぞ」

「あんたは『もっとヤバイの』相手にしなきゃ、だろ？ それに……」

三日月は鋭い眼差しを向けたまま続けた。

「こいつは多分、『俺が仕留め損なったヤツ』だ。てめえのケツはてめ

えで拭う。そうでなきやって言ってたよね」

その言葉に、ランディはニイッと満足げな笑みを浮かべた。

「OK任した。……そいつは強エぞ、しくじんなよ」

「分かってる。油断も容赦も手加減もなし、だろ」

ラーズグリーズはその場から飛び去る。対艦ソードメイスを構えたバルバトスの姿を見て、エイロー隊長は獣のように笑む。

「早速のリベンジマッチとはな。……『以前』のようにはいかんぞ地獄の番犬！」

エイロー隊長——かつて夜明けの地平線団を率いていた男サンドバル・ロイターは、電光のような速度で斬り込む。

円月刀の連撃をソードメイスで器用に捌きながら、三日月は淡々と言う。

「前の時は生け捕りにしなきゃならなかつたけど……今回は縛り無しだ。ここでケリをつける」

激しい剣戟が、火花を散らして果てなく続く。

フェアラートのブリッジ。この場だけでなく艦のスタッフはほぼ全て元海賊や元犯罪者である。それを取り仕切っているのは。

「三度目の正直、ってわけでもねえが、纏めて借りを返させて貰うぜエ」

肥満体をGH仕官服に押し込んだブルック・カバヤン。艦隊指揮能力を買われて、サンドバルらと共に第7艦隊にねじ込まれたのだ。

いくら何でも今度こそ、という慢心がある。反逆軍の倍はある戦力。そしてただでさえ高い技量を阿頼耶識によって嵩ましされたエイロー隊。確かにラスタル——アリアンロッドは苦しい立場だ。しかし腐っても鯛、戦力自体は維持しているし、苦しい立場ならばなおのこと手柄の稼ぎ時だとも言える。ここでラスタルの覚えめでたけ

れば、成り上がることも……そのように考えていた。

捕らぬ狸のなんとやらを地でいつているブルックは、自分達が採用された『もう一つの理由』に気付けずにいる。それがどのような結末を導くのか、まだ定かではない。

エイロー隊に便乗する形で、ジュリエッタは反逆軍艦隊に肉薄せんとしていた。

「指揮の要を叩く！ 倒せなくとも足止めが出来れば！」

MS隊の指揮を執るものを優先的に相手取る。自身の腕がトップエースに及ばないと自覚を覚えた彼女は、ともかく相手の行動を妨害することで活路を開こうと目論んでいる。

しかしそれすらも、上手くいかないようである。

「あれは、鉄華団のガンダムフレーム」

エイロー隊と交戦を始めたグシオンと流星号。その姿を確認した彼女は一瞬迷う。

彼らは指揮の要とは言えない。しかしながらグシオンは遠距離から正確無比な射撃を行う能力があり、流星号はダインスレイブタイプのレールガンを備えた機体だ。どちらも条件さえ整えば『スキップジャックに一撃を加えることが可能』であった。

いまのうちに討つべきか。彼らならまだ自分が相手取ることもある。そして目の前の敵に集中しており上手くすれば隙を突くことが出来るかも知れない。

思考の末彼女は。

「賭けてみる！」

不意打ちを選択した。最大加速でグシオンの背後を取らんと――

「させない！」

横合いからの銃撃が、ジュリアの行動を阻害する。それを成したの

はラフタの駆る辟邪。そのまま辟邪はジュリアへと肉薄し、ブレードを引き抜いて斬りかかった。

「この機体、タービンスの！ 邪魔をして！」

ジュリアも蛇腹剣を展開し、迎え打つ。のたうつ刃を捌き、辟邪は一度後退して仕切直す。

「生憎と、あいつの背中までは通行止めよ！ あたしが居る限りここを通れると思わないでよね！」

見得を切る。半分ははったりだ。レギンレイズジュリアの性能は、タービンスの騒動で見知っている。乗り手はまだ未熟だが、その機体性能でもって『アミダと互角に至っていた』。未だアミダの域まで至っていない自分では、辟邪の性能を加味しても五分まで持っているかどうか。

だが、『それがどうした』。

未来を見据えて夢を見る男がいる。その夢は苦労が多くて、あるいは命がけのものだ。

でも暖かくて、関わる皆が希望を持って従事できる。そんな夢だ。命を張って護るに価する、小さくて大きな夢。その夢を邪魔はさせない。

だから――

「あんたごのときに！ あいつの夢を止めさせるもんか！」

脚部を展開しスラストユニットを全開にして、ラフタの辟邪は果敢にジュリアへと挑みかかる。

「へ、やっばいい女だよなア！」

襲いくるエイロー隊のMSを捌きながら、シノが言う。

それに応える昭弘はどこか誇らしげで。

「ああ。存分に背中を任せられるっ！」

ハルバードを構え、サブアームには2丁のレールガン。さらに展開した隠し腕の先にレーザートーチの光を宿らせて、グシオンは展開したカメラアイの輝きを強め敵の群れを睥睨する。

「応えるしかねえだろう！ でなきや男が廃るってモンさー！」

己の思いも、向けられた女の思いも自覚しないまま。しかしして昭弘は明王のごとく威風堂々吠える。

「さあ！ 解体されたい奴からかかってきな！」

MS戦は本格的な激突を見せ始めた。

敵味方入り交じる中、ガエリオのキマリスヴィダールが接敵したのは、大剣を担いだMS、石動のヘルムヴィーゲであった。

「墜しておきたいところだが……機体も乗り手も随分と手が入っているな」

「マクギリスの側近か！ 相応の技量がある！」

淡々とした石動の様子に、ガエリオは苛立ちのようなものを覚えた。マクギリスへの妄信のようなものを抱いているからこそその不動。そのように感じたのだ。

だからこのような言葉が口をついて出る。

「分かっているのか！ マクギリスはお前たちをただ利用するだけなんだぞ！」

その言葉を鼻で嗤う石動。何を言うか、『分かっているのはお前の方』だと。

「その通りだ。そして『我々も代表を利用して』」
「なにっ!？」

大剣が、回転して襲ってくるドリルランスを弾き飛ばす。

「互いにそうだと割り切った関係。我々はそうだったものだ。中には本物の忠誠心を抱くものもいるが……最低でも私は、忠義や義理立て

などであの方に付き従っているのではない」

「ならば、なぜっ！」

斬り結びながら、石動は淡々と言葉を紡ぐ。

「貴方には分かるまい。……いや、『分かっている意味はないふりをしている』のか？ どちらにしる、私の答えなど聞いても意味はないだろう」

石動は、コロニーの下級市民の出である。ゆえにそれなりの才能を持ちながらも、血統がものを言うGHでは冷遇され、挙げ句に標的艦隊に押し込まれた。

そこでランディと出会ったのは幸運だったのか不幸だったのか。ともかく彼の部下として小突かれおちよぐられ鍛え上げられるうちに、随分と凶太い性格となった。そして標的艦隊が解体されランディが逐電した後、知り合いを誘ってGHを辞め、一旗揚げようかななどと考えていった矢先、マクギリスに声をかけられたのだ。

マクギリスの誘いに乗ったのはなんとということはない。彼がランディのことを『楽しそうに』話題にしたからだだった。そう言う人間は大概ろくなものではない。つまり『自分達の同類』だ。話に乗って悪巧みするのも面白いと思ってしまった。

それにマクギリスの成すことに便乗し、自分がどこまでやれるのか試したいという気持ちもある。GHの力が減退し、迎えるであろう波乱の時代。そこで何を成し遂げられるのか。限界に挑戦し自分が世界の未来を作り上げていくのだと、そう言った野心のようなものを抱いている。

が、と一際大きく火花が散って、ヘルムヴィーゲは後退した。『この相手には勝てないと、石動は理解している』。彼とてランディの直弟子と言える男だ。相応の技量を誇るが、阿頼耶識TypeEを備えフルスペックが出せるキマリスヴィダールに勝てるほどではない。

しかし。

「こんなものか。『時間は稼いだ』」

その言葉の意味をガエリオが問いただす前に、レーダーに感。高速で飛来してくるMSが1機。マクギリス駆るバエルだ。

「待たせたな石動。後は俺の仕事だ」

「了解しました。ご武運を」

場所を譲る形でヘルムヴィーゲは撤退していく。バエル右手の剣を突きつけ、マクギリスは言う。

「さて、出てきてやったぞガエリオ。相手をしてやるから、かかってくるの良い」

からかうような、挑発的な物言い。ぎり、とガエリオは歯噛む。

「どこまでも見下して……っ!」

「お前は一度俺に敗れている。これはいわば敗者復活戦だ。であれば相応の態度で臨むものだろう?」

余裕を崩さないマクギリスに、ガエリオは激昂した。

「マクギリスううう!!」

咆吼と共にキマリスが打ちかかる。

大重量のドリルランスを豪快ながら巧みな槍捌きで扱うガエリオに対し、2刀でもって華麗に凌ぐマクギリス。斬り結びながら彼らは論戦を繰り広げる。

「知力、腕力、魅力、暴力! お前は『力』と名の付くものしか信じていない! それゆえに人として大切な何かを投げ捨てた!」

「そう言うお前は人情、愛情、友情、感情……『情』に流され、大局を見ることを怠った。だから破滅を招いたのだ」

厄祭戦当時の性能を維持しているバエル。最新鋭の阿頼耶識システムを搭載し現状最強ランクの性能を誇るキマリス。

互いにまだ様子見レベルの交錯。しかしながら場の空気は溶鉱炉のごとく熱く、ぐるぐると渦巻いている。

「人としての情を捨てた大局など! それこそ破滅を呼ぶものだろうが!」

「GHとて、人の情けのない大儀に踊らされているだろう。……それに俺は人として全てを捨てたわけではない」

「なんだと!」

『憎悪と憤怒』。GH、イズナリオ。いや世界の有り様に対する憎しみと怒り。それが俺の始まりであり、今もって貫き通す原動力だ。お前にも、いや誰であろうと否定させはしない」

「怒りと憎しみだけで、この世界を破壊しつくすつもりか！ マクギリス！」

「そうだとも。そしてお前にも否定させないと言ったぞガエリオ。なぜならお前は俺に対する憎しみと怒りを持ってこの場に在るのだから」

火花が一際派手に散り、双方は一瞬の間合いを取った。

「敗北し、全てを奪われ、形振り構わず足掻こうとするほどの憎悪と憤怒を抱いた。ここでやっとお前は俺と相対する資格を持ったんだよ。」

『我が宿敵』よ！』

「戯れ言をほざくな！ どうであろうと人として許されない行いをしたことは間違いないだろうが!!」

相容れない二人は、再び激しく火花を散らす。

※今回のえぬじい

「酒ないっっちゃあ暴れる。女いないっっちゃあ暴れる。機嫌の良いときでも人ぶん殴るからなああの人は」

「分かります分かります。あと無茶振り酷いし」

ヤンキーの先輩を語るときの後輩の会話ってこんな感じ。

48・出すのはエースかジョーカーか

アーヴラウの代表官邸。国を挙げての厳戒態勢が取られている中、鉄華団地上支部の面子は代表たる蒔苗の身辺警護を任された……という名目の元、官邸に詰めていた。

勿論お題目通りに蒔苗の警備を行ってはいるのだが、それ以上に『彼ら自身の身を護る』という理由があった。

何しろ相手は策謀に長けたラスタル・エリオン。決戦の裏で何をやらかすか分からない輩だ。実際に未確認情報であるが、火星の方で何やら工作しようとしたらしいという情報もある。地上支部の少年たちも自分の身を護るくらいは出来るが、念には念をと言う奴だ。

「申し訳ありません代表。妹まで……」

「なに構わんよ。君たちと儂らは一蓮托生のようなもの。それ以前に国の長というものは国民を護るものじゃやて」

蒔苗の執務室。恐縮して頭を下げまくりタカキに対し、蒔苗はかんらんかんらんと鷹揚に笑う。アーヴラウの庇護は、鉄華団団員周辺にまで及んでいた。とは言っても身内が居る者などタカキくらいだ。だったら一纏めにした方が手取り早いと、タカキの妹フウカも官邸にて保護されていた。(なお現在フウカは官邸のVIPルームにて手厚くおもてなしされている)

現在執務室には蒔苗とSP、そしてタカキとアストンの姿がある。そして壁に備えられたいくつかのモニターは、現在軌道上で行われている決戦の様子を映し出していた。

蒔苗が少年二人をここに呼び出したのは、保護するためだけではない。

「さて、君たちにちいとばかしこの戦況を解説して貰いたい。なにしろ儂は戦術に関しては素人も良いところじゃからのう」

言いながら髭をしごく。この戦いの行く末によってアーヴラウの舵取りも左右されるだろう。出来うる限り正確な状況を把握しておきたいという思惑からのことであった。

その申し出に顔を見合わせるタカキとアストン。瞬時の戸惑いの後、アストンがおずおずと問うてきた。

「あの、タカキはともかく俺なんかが……」

「謙遜するものではないぞアストン・アルトランド。聞けば防衛組織におけるMSの運用原則（ドクトリン）を組織幹部と協議し構成しているそうではないか。なかなか出来ることではあるまい」

「お、俺の名前を……？」

「鉄華団団員の名は全員記憶しておる。ま、じじいの自己満足さ。……ともかく君たちは地上支部の責任者とエースじやろう。解説にはうってつけと思うておるのだよ」

鉄華団の団員たちを少年だと甘く見ているような人間は、最低でも蒔苗の周りには居ない。彼らは修羅場をくぐり抜け、実績を積み上げてきた。そしてそれに驕ることなく努力を続けている。アーヴラウの防衛組織とも深く関わる彼らは、もうこの国の重鎮と言っても過言ではない。

とにもかくにも、蒔苗の言葉を聞いた二人はまあそういうことならと、一応納得する。

そうして戦況の分析が始まる。様々な報道関係や各勢力の情報機関など、情報源は山と在る。それらとモニターから見とれる現状に目を通し、二人の少年は見解を纏めていく。

「現時点で、双方の艦隊戦力比は倍ほどの開きがあります。通常真正面からのぶつかり合いでは、倍ほども差が在れば優位は揺るぎません。しかし今回の場合、戦端が開く前にマクギリス代表の工作によってアリアンロッドの士気は格段に下がりました。かてて加えて鉄華団を含むエースパイロット級の投入。これで戦力は五分、とまで行きませんがかなり差が埋まったことになります」

あくまで戦場だけを見て、最低限の要因のみで語るタカキ。実際はもっと複雑な状況だが、素人である蒔苗にも分かりやすいよう要点のみを告げていた。

「しかし、艦隊戦においては艦艇の数というのも重要ですけど、もっと重要なのが艦載機——MSの数です。アリアンロッドはスキップ

ジャック級だけで反逆軍全体を上回る数を保有している。そして向こうのエース級も0ではありません。これに反逆軍がどう対処するか。そこにかかっているでしょうね」

この時点でタカキたちはエイロー隊などの存在を知らない。しかしながらそれを差し引いてもアリアンロッドの数は脅威だと認識していた。覆すのはエースの存在……などと楽観視してはいない。

タカキに促され、今度はアストンが説明に入る。

「えつと……鉄華団のエースは教官を筆頭に並の乗り手が束になっても叶わない腕前を持っているんだ……です。それでも、100機の敵を倒したとしても向こうは200機の敵を出してくる、そんぐらいの戦力差がある……です」

敬語になれていないので、どうにも拙い説明だ。蒔苗はそれを微笑ましく見ている。

「鉄華団のエース級、その平均が並のパイロットの5、6人分。それは6倍を相手取れると同時に、『6倍消耗する』って事だ……です。阿頼耶識を付けていたところで体力や精神力が増える訳じゃない。数の不利を覆すどころか、持久戦に持ち込まれたらヤバ……危険です。当然うちの団長もマクギリス代表もそれは理解しているでしょう」

拙いまでもアストンが説明を引き継いだのは、MS戦に置いては誰よりも造詣が深いからだ。この戦いにおける要をいち早く理解している。

「だから『伏せ札』がある。そしてそれを見越したラストルも同様のものを用意しているはずです。この戦いは長引かないと同時に——」

モニターを見ながら説明するその目が、鋭く細められた。

「可能な限りカードを伏せ、可能な限り効果的な場所を切る。互いがその機会を巡って駆け引きを行う。そんな戦いになります」

断言。その言葉は果たして的中するのであろうか。

一見互角。現在の状況を評するとなればそうなる。

単純に艦艇の積載量を考えると、鉄華団を含めた反逆軍が300弱。アリアンロッドは1000を超える。三倍以上の開きがあると同時に、アリアンロッドの速度は高い。かてて加えてエイロー隊やシュネー隊などの存在もある。普通に考えれば一方的な流れになるはずだ。

それを押し止めている要因の一つは、当然ながらこの男。

「どうしたどうした！ お礼参りどころじゃねえなア！」

「くっ、この機体、格が違いすぎる！」

からかうように言い放ちながら電光のようにラーズグリーズを駆るランデイ。それと交戦しているのはシュネー隊である。

上手くかち合ったと、歓喜と同時に警戒心を抱くイツヒ以下隊員たち。『上手くいきすぎている』。ランデイと直接戦えるのは願ってもないことだったが、そう簡単にかち合えるとは思っていなかった。たとえ遭遇したとしても、まともに相手取る事はないだろうと予想していた。

だがランデイは、『真正面からこちらの相手をしている』。いつも通り人を小馬鹿にしたような言葉を吐きながらであるが、戦闘自体はしごく真つ当なものだ。『だからこそおかしい』。

こちらを嘗めてかかっている？ そのような男ではない。あれは傲慢だが、慢心とは無縁の思考回路をしている。であればこのようないつもと違う戦い方を選択した理由があるはずだ。

すぐさまそれに思い当たる。

『我々をここに釘付けにする気』か！

クロウ隊を知ったランデイがこちらの存在を察しただろう事は想像に難くない。そして自分達の思惑も。

自分達は戦果を必要としている。当然ながらそれを得るために、敵を数多く撃破しなければならぬ。そして自分達は、GHの中でもかなり高い速度を誇るといふ自負がある。鉄華団やマクギリス直下の兵はともかく、一般の兵や合流組には荷が重い。そう判断し自ら相手

をしに来たのだ。

ランディを無視して他の相手をするなどということは、シュネー隊にはできなかつた。なにしろ彼と一戦交えたいがために意に添わぬ戦いに身を投じたのだ。本懐を無視することなどどうして出来ようか。このような心理を読まれていることなど百も承知。愚かだとは思うが、意地と矜持が引くことを許さない。

同時に――

「この我々を、『自ら足止めしなければならぬほどの敵』と見て取つた！ そう判断するぞランディール・マーカス！」

気圧されるものかと挑発的な言葉を投げかける。自分達をフリーにすれば、味方の損害も馬鹿にならないと見て取つたのだろう。それだけの力を持つ兵だと『認めた』。あのランディール・マーカスが！

その事實は、イツヒに、シュネー隊の面子に、高揚感を与えている。

勝てるとは思わない。だが死力を尽くして悔いのない戦いだ、全員がそう感じていた。対するランディは。

(言うほど楽な仕事じゃねえんだよな)

心の中で苦笑を浮かべている。

確かにシュネー隊は『それなりの敵』だ。殲滅するには全力を出さなければならぬほどの。

それをやらないのは顔見知りだから手心を加えている……などという理由ではない。殲滅したって別にかまいはしないのだが、それをやれば自分は相当に消耗するであろう。『その後が控えている』身としては、それは避けておきたい。

結果、手加減をしていることとなつてしまつたが、それで倒せるほどシュネー隊は甘くない。準エース級一個中隊を手加減して膠着状態に持ち込んでいるだけでもうアレだがそれはそれとして。

シュネー隊は非常に『ねばり強い』。これは地球外縁軌道統制統合艦隊全体に言えることだが、損失を最小限にし目的を果たすこと、そういう戦術に長けている。そうなのはランディとの関わり合いに寄るところが大きい。部下を無闇に消耗したくないカルタの思惑があつてこそそのことだろう。

戦場で勝つことよりも『負けな』戦術。そして手加減しているランデイと、その戦術は相性が悪かった。膠着状態に陥ってしまうくらいには。

だが、それでも。

ランデイは確かに、『楽しんでいた』。

彼らだけではない、ぬるま湯に浸った表向きの平穏な世の中では決して現れなかったであろう強者たち。それが育ち、頭角を現してきている。

激動の時代だ。闘争の幕開けだ。戦乱の狂気に犯されているランデイにとっては、実に喜ばしい事態となりつつあった。

理性では面倒だと苦笑するが、その闘争本能は歓喜を押しえられない。

だから彼は、満面の邪悪な笑みを浮かべ、こう言う。

「さあさあ！ もっと俺を楽しませろよ！」

有力な戦力であるシユネー隊が押さえられると同時に、エイロー隊もまた膠着状態に落とし込まれていた。

いや、むしろ――

「ば、馬鹿な!? 『俺達が圧されている』だど!？」

気が付けば、少しずつ戦力を削られている。俄には信じられないことだった。

エイロー隊に集められたのは歴戦の海賊や犯罪者たち。元々高い技量がある上、阿頼耶識に高い適性を持つていた選りすぐりだ。その実力は通常の阿頼耶識付きなど歯牙にもかけない――はずだったのに。

何がおかしいのかと言えば、相手が鉄華団だったから、としか言いようがない。

「こいつら……以前戦ったときよりも確実に技量が上がっている！この短期間で何をした!?!」

別に何か特別なことをしたわけではない。いつも通りの訓練を重ねてきただけだ。

……ただちよつと、決戦に向けて鍛錬の濃度を上げるために、『シミュレーションの仮想敵戦闘データがランディのものになってた』だけで。

想像してみよう。『複数で襲いかかってくるランディ』。

地獄だった。

「温いんだよ！ 阿頼耶識付けただけで勝てるほど俺たちや甘くねえぞ！」

「つかアレに比べりゃクソに集るハエだぜ！」

獅電が、ランドマンロディが。性能で上回るはずのレギンレイズを押し返していく。実戦よりも数倍しんどい鍛錬を重ねていれば、そりゃあ技量も上がる。元々並の兵より濃密な鍛錬を重ねて来た身だ。今の彼らは数ヶ月前の彼らではない。

しかしながら、やはり中には例外も居るわけで。

「やるじゃねえか。気合いの入ってるのも居る！」

「こいつら、確か夜明けの地平線団の連中だ」

背中合わせになった状態でシノと昭弘が言葉を交わす。

対峙しているのは、それぞれ蒼のラインと朱のラインが入った2機のレギンレイズ。銃剣と一体化したライフルを備えたそれらは、高度なコンビネーションを駆使して昭弘たちを翻弄していた。

前衛と後衛が変幻自在に入れ替わり、攻防共に付け入る隙を与えない。相對することが出来るのは、それこそエース級のみであった。

「崩しきれないな。さすがは鉄華団といったところか」

「以前よりもさらにキレをましている。今の俺達と互角とは」

その2機を駆るのは、サンドバルの副官であった双子である。サンドバルの威光に霞んで目立たなかった二人であるが、実力主義の海賊団で副官を張っていたのは伊達ではない。阿頼耶識を得てからのその力は、鉄華団エースたちとも互角に渡り合えるほどのものだ。

かてて加えて双子ならではのコンビネーションを駆使した戦法は、昭弘とシノを持ってしても手こずるほどのものであった。

「互いに押し切れねえなあ。決め手がない」

「だがこいつらを野放しにも出来ない。俺達で押さえ込むしかないだろう」

隙が見出せず、また油断も出来ない。神経をすり減らすような戦いをシノと昭弘は強いられていた。

別の場所では。

「しづとい！ 性能ではこちらが上回っているというのに！」

「性能だけで勝てるほど、世の中甘くないのよ！」

レギンレイズジュリアと辟邪が死闘を繰り広げていた。

双方共に得手は機動力を活かした戦術。しかしながら性能的には全ての面でジュリアが上回る。

だというのに押し切れない。いや、やもすれば自分が押し負けている。

攻撃が当たらないわけではない。事実辟邪の装甲は結構な損傷を受けている。だが一つとして致命傷はない。数こそ多いが全て装甲を浅く削った程度のものだ。ジュリアも似たようなものだが、それは完全に互角に渡り合っているという証明に過ぎない。

その理由は――

「このおー」

ジュリアが剣を振るう。それは細かく分離し、ワイヤーで繋がれた蛇腹状の形状に変化して、複雑な軌道を描きつつ辟邪に迫る。

「なんのおー」

迷わず辟邪は前に突っこんだ。迫る刃をブレードで払い軌道をずらす。しかしそれも一部分。のたうつつ刃は容赦なく襲ってくる。

構わず前に。一部の刃が頭部を掠め火花を散らす、怯むことなくすれ違いざまに銃撃を放った。

「くっ！」

ジュリアの装甲を銃弾が叩く。致命傷にはほど遠い、かすり傷と言っても良いほどのものだ。だが毎回、交錯するたび『確実に当ててくる』。

損傷を恐れないのではない。『損傷を最小限にして、カウンターで合わせてくる』のだ。そのために、あえて懐に飛び込んでくる。相当の度胸と集中力、そして見切りを必要とする行為だった。

性能で上回る相手に対して互角の戦いをしているのは、それだけの理由ではない。相手——ジュリエッタ本人にも問題があった。

「私は……まだっ！」

一言で言えば精彩に欠ける。まだ心に迷いがあるのだ。

これがもし、GHの正義が大つぴらに否定されていなければ。アリアンロットが全体的に冷静さを保っていたら。彼女はその本領を發揮できていただろう。だが、司令であるラスタルですら精神的な余裕はない。表面上を取り繕うだけで精一杯だった。

ラスタルに余裕があれば、大事な任務の一つも任されていただろうし、ジュリエッタ自身も揺るぎがなければ格上の相手だろうが食い付く気迫を見せる。だが今はそれが無い。迷いの中振るわれる剣は鋭さを欠き、それはラフタに付け入る隙を与えている。

「そんな剣じゃ、アタシは止められないよ！」

さらに今のラフタには勢いがある。ただがむしやらに突っこむだけではない。成すべき事を成そうとする強い意志と、実戦と鍛錬で培った実力。技量なら彼女は今のジュリエッタを上回る。逆にジュリアと辟邪の性能差があるから互角の戦いで済んでいるのだ。これが同格の機体であれば、早々に雌雄は決していたかも知れない。

「こんな所で、留まっているわけには！」

「墜ちろとは言わないけど、余所にはいかせない！」

女たちは火花を散らして舞い続ける。

三日月とサンドバルもまた、激戦を繰り広げていた。

「技量、そして機体の性能。以前とは比べものにならないか」

「地味に強くなってる。機体と阿頼耶識だけじゃないな」

対艦ソードメイスを軽々と振るい、嵐のような斬撃を連続して叩き込むバルバトス。それをレギンレイズハイムバーが2刀で凌ぐ。

以前戦ったときは攻防が逆だ。あの時三日月は速度で負けじと最初から太刀に切り替えていたが、いまのバルバトス——ゲブリュルヴィントは通常出力でも以前を上回る脅力を発揮する。その速度は太刀を振るうより劣るが、近い速度でMSを粉碎する破壊力を産み出す。

それを何気なく凌いでいくサンドバルも大したものだった。捕縛されてからこつち鍛錬を続けられたわけでもないだろうに、確かに技量が向上していた。

「ふん、強さなどどこでも培える！ 例え牢獄の中であるともな！」

実際に技量が上がっている以上、凄まじく説得力のある台詞であった。三日月も「そういうものか」となんか納得している。

しかし見た目の激しさに比して、双方共にまだ本気ではない。現在展開している戦力だけが全てではない、互いにそう理解し伏せ札を警戒しているからだ。目の前の敵は強敵だが、それだけに拘っていると足下を掬われる。まだ全力を出すときではないと判断していた。

（それにラスタル・エリオン、あれは我々を囮か足止めにする気なのかも知れんしな）

口に出さずに呟くサンドバル。彼はラスタルを欠片も信用していなかった。自分達のような人間を使うからには、腕が立つという以外にも相応の理由があると踏んでいる。そしてそれはろくなものではない。あるまい。

途中で逃げるにしても何にしても、余力は残しておきたい。そのよ

うな算段があった。

片や三日月は。

「向こうも本気じゃない。今はこの場に釘付けにしてるだけでよしとするか」

冷静に状況を見ていた。彼が見ているのは『自身の戦いだけではない』。機体のレーダー、センサー類から捉えられる情報、索敵班やダンテの機体から送られるリンクデータ。それらから戦場全体を俯瞰するように把握していた。

安定し性能が向上した三日月の阿頼耶識システムはただのマン・マシーンインターフェイスには留まらない。戦闘の思考とは別に情報を統合、分析し乗り手に伝える戦術補助機構としての機能を得ていた。実の所、これは普段からランディがやっている戦術思考と似通ったものであり、今の三日月は彼に比肩しうる戦況判断能力を持つに至っている。

その彼はサンドバルを『余所に向かわれたら面倒な相手』と見ていた。サンドバルはプライドも高いが同時にクレバーな男だ。何が何でも三日月と再戦し雪辱を果たしたい、そう思うほど因縁に拘っていない。こちらが見逃そうとすればあっさりとその戦いを放棄し、もつと与しやすい相手の元に向かうだろう。そうなれば被害が広まるのは目に見えている。

「ここでケリを付けたいけどね」

かといって全力を出しても、そう容易く仕留められる相手でもない。状況が動くのはこちらか敵、どちらかがカードを切ったときだ。早々にこの場での決着を諦め、三日月は激しく剣戟を繰り広げつつ機会を伺う。

白と紫の機体が、激しく鎬を削り合う。

キマリス・ヴィダール、66番目のガンダムフレーム。厄祭戦の後半、ガンダムフレームの中でも後発に位置するその機体は、初期のフレームに比べ完成度が高められている。

かてて加えて本来の阿頼耶識システムを部分的に上回るType Eを備えたことで、全ての性能を発揮できる状態にあった。

バエル。ガンダムフレームの1番機にして全ての原型（オリジン）。機体の性能こそ厄祭戦当時のものを保っているが、臂力以外は後発の機体に劣り、またメインの武器である双剣は本来のものではなくレプリカである。

しかしながらオリジナルの阿頼耶識システムを備え、それを使いこなせる乗り手を得たことでキマリスに劣らない戦いぶりを見せていた。

「なるほど、確かにその機体の性能を引き出せるに至っているか」

「お前と相対するためにな！俺だけの力では至れなかったことなど重々承知だ！」

打ち込まれた剣を、背部から可動アームで伸びた盾を使い器用に打ち払うキマリス。お返しとばかりに、ランスに内装された200mm砲を放つが、それは危なげなく避けられた。

「そうだ、それでいい。言葉だけで理想を『騙る』者よりも、外道に堕ちてでも力を手に入れようと渴望する強者の方が、戦う価値がある！」

「どこまでも俺を見下す！あくまで己が絶対強者だと嘯くか！」

回転しながら突き込まれるランスを、両の剣で絡め取るように弾く。そして背中の翼に内装された電磁砲を放つバエル。

強引に振り回したランスでそれを防ぐキマリス。たしかに重装甲で大重量の機体を、軽装のバエルと同じレベルでガエリオは反応させている。

「そうだとも！最早この戦いの結果如何に関わらず世界は変わらざるを得ない！俺はそれを成し遂げた！お前たちの背負う大儀などすでに意味はなく、ただ足掻くしかないと知れ！」

「……大儀？ 足掻く？」

不意にガエリオの雰囲気が変わった。それを感じたマクギリスが訝る。

は、と吐かれる息。ガエリオの口元が、獯猛に歪んだ。

「勘違いをするなマクギリス。『俺はそんなもののために戦わない』。……GHの大儀？ どうでもいい。この戦いの行く末？ 知ったことか」

「なんだと？」

予想外の言葉であった。外道に堕ちてもガエリオの本質は変わらないと思っていたが、どうにも様子が違う。

キマリスが槍を振り抜き、ガエリオが吠える。

「この戦いは俺にとつてただの私闘！ ただの逆恨みの八つ当たりだ！ そのためにラスタルを、俺自身の名を利用して俺はここにいます！ 今更正義だの大儀だの『つまらないこと』を背負うものか！」

どこまでもただ個人の都合だと言い放つ。ただ一人の人間として、私怨を晴らすためだけに全てを利用し投げ捨てたのだと。

ただただマクギリスと決着が付けられればそれでいい。今の自分はエゴを体現したものと、ガエリオはそうのように決めつけている。

マクギリスは驚くと同時に……得心した。

ガエリオの行動。妙に違和感を感じてはいたが、まさか完全な私怨だけで動いているとは思わなかった。今までの彼であつたらばラスタルの大儀を擁護する台詞の一つも吐いていただろう。それがなかったと言うことは、最低でも言葉に嘘はなさそうだ。

マクギリスもまた、獯猛な笑みを浮かべる。

「お前が大儀ごときなどと言うとはな。……だがそれで、背負うものを全て無くして、俺に勝てるっても？」

「しがらみがあるから勝てるというものでもあるまい！ それにお前には、『取るに足りない人間から打ち倒される』という方が効くだろうが！」

「小さいな、ガエリオ」

「元々大きくなど無かつたさ！」

言葉と刃が交わされる。似て非なる、妥協のない意志のぶつかり合

い。それは留まるところを知らないように見えた。

「何とか互角に持ち込んだ。だがこの状況、長くは続かん」

艦隊間近まで後退し全体の指揮を執っている石動は、そのような判断を下した。

上手い具合に、相手のエース級にはこちらのエース級が当たっている。それ以外には数の不利があるが、スカーフフェイス隊やクロウ隊が上手く立ち回っており、侵攻を良く食い止めている。だが長々と波状攻撃が続けば先に消耗するのはこちらだ。崩れるとすればそこから、そしてラスタルはそれを見逃すまい。
であるならば。

「まずは一枚、切らせて貰う」

頃合いだと見て取った石動は、指示を飛ばす。

散発的に艦艇の反応が現れては消える。時折思い出したかのように作動するコンテナダミーの存在に、アリアンロッドの索敵担当士官たちは慣れ始めていた。

（またダミーか。一々報告するのも面倒くさい——）

だから、『それ』に感付くのが遅れる。

「……っ！ 反応が、消えない！ これは本物！ ラスタル司令、敵の増援らしき艦艇が現れました」

ラスタルは慌ても騒ぎもしない。

「ふん、増援の接近を誤魔化すためにあのような手を使ったのか。……それで、規模は？」

「はっ、数は……一隻？ せ、船籍を照合……」

単艦という事に対して訝しげに眉を寄せていた士官の目が見開かれる。

「か、艦名は……『ケストレル』！ ケストレルです！」

「なんだと……う？」

太陽を背に現れるたった一つの艦影。威風堂々と現れた旧式艦のブリッジで、老齢の男がにやりと笑い、宣う。

「イエス、ケストレル！」

※今回のえぬじい

「しまった！ 弟が生きていれば双子同士のネタ合戦が出来たというのに！」

「お前は何を言っているんだ」
わりと兄弟多いよね鉄血。

49・イカサマはお互い様

ドルトコロニー群。現在その全てのコロニーで、大規模なデモ活動が行われていた。

労働者が住まうドルト3……だけではない。労働者、カンパニー関係なく『全てのコロニーで』デモ活動が行われているのだ。

彼らは声高く主張する。「GHの腐敗、不正を許すな」と。「アリアンロッドをコロニーから追い出せ」と。

ドルトに駐留する陸戦隊は動けない。今アリアンロッドは決戦の真つ最中だ。そうでなくてもGH自体が末端に命令を下せる状況にない。自分の頭で考えることをしなかつたものたちが反応できないのも、やむかたないことではある。

これはドルトだけではない。地球圏のコロニー群のほぼ全てが同調し同時に行われている事であった。滞りなくすすむ状況を見て、サヴァランは安堵の息を吐く。

そうしてから彼は傍らの人間に声をかけ頭を下げた。

「ありがとうございます。貴女のおかげでタントテンポの協力を得られた。感謝極まりない」

「よしてくれよ、アタシはただの連絡係さ。感謝するなら頭目のお嬢に言っとくれ」

ぱたぱたと手を振って応えるのは少し幼げに見える女性、「キム・セリリアン」。ドルトの若い女性を纏めていた人物だが、訳あつて暫くタントテンポに身を寄せていた。連絡係などと自称しているが、今回のデモに際してコロニー間の繋ぎを取るのに大きな役割を果たしている。

謙遜することでもないのだがとサヴァランは思うが、この人にも色々都合とか何やらあるのだろうと察する。

「ともかくドルトはアフリカユニオンからの支援も得て、自衛する戦力も整いつつあります。この機に乗じてアリアンロッドの勢力下から脱したいというのが上の判断でしょう」

G Hの信用度が下がると同時に、各経済圏は自力で防衛力を強化し、G Hの影響下から抜け出そうと試行錯誤していた。その影にはモントーク商会などの暗躍があり、情報と戦力が融通され、経済圏は静かに力を蓄えつつある。それは経済圏間の緊張も呼んだが、まずはG Hという脅威に対抗する為にそれは一旦棚上げされ、各勢力は協調して水面下で動いていた。

そしてマクギリスの蜂起を機に、一斉に動き出す。それに同調していくつかの企業——テイワズやモントーク商会、そしてタントテンポなどが協力を開始。G Hに対して圧力をかけ始めたのであった。

「首尾良くいけば、タントテンポとの取引を前向きに考えるとユニオンは申し出ています。あとは交渉次第ですね」

「そこまでしてくれれば向こうは十分。……それで、『こつちの話』は？」

「ええ、女性団体への支援も予算に組み込むとのこと。もちろん一度になんでもかんでも出来るわけではないので、優先順位をしっかりと考えて貰わなければなりません」

「分かってる。お互い腰を据えてかからなきゃならないことだからね」

「ええ、長い付き合いになるとは思いますが、よろしく頼みます」

「こつちも素人ばかりだから迷惑をかけると思うけど、よろしく頼むよ」

固く握手が交わされた。

決戦の裏側でも、アリアンロッドは追いつめられていく。

彼らの帰る場所は、なくなりつつあった。

継ぎ接ぎだらけの艦体。しかしながら威風堂々と姿を現したケストレルのブリッジで艦長席に座るのは、「アンダーセン」「元」一佐。2

年ほど前に閑職を辞して野に下ったはずの人物である。

「ふん、よくぞこのルートルをお祭り騒ぎに引っ張り出してくれたな小僧ども」

口調は憎々しげにも聞こえるが、その表情は不敵に笑んでいた。と、そんな彼にブリッジのスタッフが声をかける。

「司令、アリアンロッドから通信が入ってきましたが」

どこか面白がっているような問いに、アンダーセンはふむ、と考え、こう呟くように言う。

「……ここは「ばかめと言ってやれ」にするか、それとも「おかけになった電話番号は現在使われておりません」にするべきか……」

「司令司令、シリアスぶっ壊すのは止めましょうや」

「冗談だ。まあそれはそれとして無視しておけ。どうせうるさいことをぐだぐだ言うだけだろうよ」

実際アリアンロッド艦隊はケストレルの存在に揺るがされていた。なにしろこの艦、本来であれば『廃艦された後に解体されているはず』なのだから。

種を明かせばどうということはない。廃艦処分が決まり艤装を解かれた時点で、マクギリスが裏から手を回し密かに保存されていた、というだけだ。

だが、この艦が現れたと言うことは『その次』を想像することは容易い。『元標的艦隊の旗艦』であるケストレルが現れたと言うことは

「全機を出せ。派手に引っかき回すぞ」

かつて『ランディが所属していたときの』標的艦隊司令であった男が命を下す。それを待っていたとばかりに飛び出すのは10機のMS。

「やれやれ、いい加減便利屋扱いは勘弁して欲しいんだがな。……ガルーダー1、タリズマン。エンゲージ」

神鳥の長に続くは3機。

「新型というわけではないが、良い機体だ。タリズマンに続くぞ。ガルーダー2「シリウス」、エンゲージ」

「張り切ってるねえ。んじゃ、適当に頑張るとしましょうか。ガルーダ3【サザンクロス】、エンゲージ」

「かったつぱしからアリアンの連中墮とせばええんやろ？ 派手にいこうやないか。ガルーダ4【ラウド】エンゲージ！ ヒヤツホウ！」
ガルーダ4のкокピットに備えられたスピーカーから流れる大音量ユーロビートをBGMに、4機のスタークグレイズが戦場に飛び込む。

「さて観客は満員、良い舞台になった。精々派手に踊ろうか。……ウオードッグ1ブレイズ、エンゲージ」

牙を剥く戦場の狗に従うは3機。

「了解。近いところから食い付くわ。ウオードッグ2【エツジ】エンゲージ」

「慣例だからって女の子にこのTACってどーなのかしら。ウオードッグ3【チョッパー】、エンゲージ」

「また多いこと多いこと。俺ちゃん生きて帰れつかな。……ウオードッグ4【アーチャー】エンゲージ」

そして――

8の字を横倒しにしたような、メビウスの輪を模したマークの上に2と3の数字が刻まれた2機のスタークグレイズ。

「稼ぎ時だな。……まあ殺しやしねえ。無事で済むかはしらねえが。……メビウス2【ロツソ】、エンゲージ」

「偵察任務以外は久しぶりだ。鈍ってなければいいが。メビウス3【スノーウィンド】エンゲージ」

かつて標的艦隊でGHの度肝を抜いた3小隊。その全員がこの戦場に揃ったのだった。

「なるほどなるほど。こういう趣向か」

「ば、ばかな！ 奴らいつの間を集結を!?!」

交戦しながら口笛を吹き鳴らすランディ。対してシユネー隊は目に見えて動揺を見せた。当然だろう。なにしろ事前の情報では、標的艦隊の面々はばらばらな道を進み、積極的に連絡を取り合ったり集結したりする様子を見せなかったのだから。

実際はマクギリスや石動が手を回し、秘匿チャットや人づてを通じて連絡を取り合っていた。そして決戦が始まるぎりぎり直前になって集結したのだ。

完全に不意打ちである。ランディを含む少数以外は予想外と言ってもよかつた。

「お気に召して頂けたかな。これくらいは読んでいただろうエリオン公」

秘匿チャットでリボンの4を名乗り管理人を務めていた石動はちよつとドヤ顔だ。

それはさておき、交戦しながらもランディは古巣の面子と言葉を交わす。

「よう元気そうじゃねえかおめえら！ 良い空気吸つてつかア!?」
にやりと笑つて応える丸サンングラス中年男、ロツソ。

「ああ、久々の鉄火場だ。精々楽しませて貰うとするさ」

石動以上に表情を動かさないスノーウィンドは淡々と言葉を放つ。
「任された以上役目は果たす。いつも通りでいいんだろう？ 『隊長』」

本当に良い空気を吸うようになった。ランディの表情がチエシヤ猫のような歪みを見せる。

「オーライ、じゃあ好きにやってくんな！」
「二応！」

メビウスのマークを背負つたものたちが、群がる敵陣に挑みかかった。味方が圧されかけていた部分。的確にそれを見出して引つかき回し始める。それはガルーダ隊とウォードッグ隊も同様。戦線は大きく揺るがされ始めた。

「くっ、怯むな！ たかだか一個中隊足らずだ、冷静に対処すれば戦況を覆すほどのものではない！」

味方に檄を飛ばすイツヒ。確かにそれは正しい判断であったが、それに対応できるものは驚くほど少なかつた。

アリアンロッドの中でも、標的艦隊の『えげつなさ』を実感として知るものは少ない。大体が『尾鰭の減つた噂話』でしか知らないだろ

う。ゆえに不意を打たれる。虚を突かれる。混乱に叩き込まれる。

何しろ彼らはランデイが手ずから鍛え上げ、彼と同等か準ずる技量を誇る。面子の中で『石動が一番弱い』と言えば何となく分かるのではないだろうか。ともかくそんな連中が戦場を引っかき回すのだ。冗談抜きでランデイが10人増殖したようなものである。

とはいえイツヒが指摘するとおり冷静さを保って対処すれば、最低でも足止めを喰らわせることくらいは出来るはずだった。しかし誰もが彼らのように対処できるわけではない。むしろこてんぱんにされて再起できたカルタと統制統合艦隊の連中がおかしいのである。彼らの檄も虚しく、あつという間に戦線は押し返されていく。

それにいち早く危機感を覚えたのは、サンドバルであった。「先手を打たれた。ここは一度引いておくべきか」

剣戟の勢いを利用して距離を取り、彼は信号弾を打ち上げた。

「下がれだど？　今こそ手柄の稼ぎ時って奴じゃねえのか？」

ブルックを含む幾人かが訝る中、理解を示すものもいる。

「頭目……いや、隊長が下がるか」

「潮時だな。次の手を打たれる前に俺達も下がるぞ」

双子の機体が状況を放棄し、一目散に離脱する。

「こつちの援軍が来たから、じゃねえな。……昭弘！」

「ああ、計画通りに」

想定通りであれば、『次のでかいの』が来る。そのために備えなければならぬと男たちは頷き合った。

そして。

「なるほどな！　彼らを次なる動きの布石としたか！　贅沢な布陣だ！」

「金も人脈も惜しみなくつき込ませて貰った。……それで、お前は俺の首に拘るか？」

剣戟を繰り広げつつガエリオとマクギリスは言葉を交わす。

「無論拘るとも！　だが『後ろから撃たれる危険』を犯してまでではないさー！」

キマリスの膝蹴り。そこから飛び出したドリルパイルバンカーを

回避したバエル。その隙を突いてガエリオは離脱を始めた。

「この勝負、一時預ける！ 次に相見える時こそ決着だ！」

マクギリスはそれを追うようなことはしなかった。

「今ので一撃入れられただろうに。やはり甘いよ、お前は」

そんな戦場の動きを、黙ってみているラスタルではない。

「標的艦隊をこのように使うか。スタークグレイズは阿頼耶識を備えたパイロットだけでなく、彼らのために用意したもののようだな」

不意を打たれはした。だが想定していなかったことではない。

『「仕込み」を動かせ。同時に『例の部隊』を展開させろ。……フォルク三尉はどうなっている」

「は、間もなく準備が整うようです」

ふむ、と思考を巡らす。そしてラスタルは告げた。

「それと『聖剣』の用意を」

「は？ し、しかしあれは、まだ満足にテストもしておりませんが」
「使わなければそれに越したことはない。だが用心はしておかなければな」

次に打つ手を通れば、反逆軍に大打撃を与えることが出来るだろう。だがそれが上手くいくとは限らない。さらなる手札を用意するのは当然のことであった。

そしてラスタルの反撃は、反逆軍側から始まる。

「三佐、『例の機体』が動きました」

「そうか。モニタリングを忘れるな。……各艦に通達。『花火』が上がる。それを合図に陣形を変える、と」

ライザと石動がなにやら言葉を交わす。その間にも、密かに艦の影から姿を現す機体があった。

「……反逆軍の、ために」

その機体は色こそ反逆軍のものであったが、右腕を丸ごと変更した装備が違う。

ダインスレイブ。『反逆軍が接收していないはずの武器』を備えたそのグレイズは、迷うことなくアリアンロッド陣営に穂先を向け、引き金を引いた。

『その行動が、最初から全て記録されていることなど気づきもしないで』。

閃光が奔る。幾ばくかの戦力を巻き込んだそれにいち早く気付いたジュリエッタが、非難の声を上げた。

「ダインスレイブを!? イオク様のような真似をして……通信!」

憤慨する間もなく、緊急の通信が入った。なんとかラフタの猛攻を捌きつつ聞き取ってみれば。

「一時撤退!? そうか、ラスタル様はあれを使うか」

流石に直属だけあって事前に何をするか聞かされていた彼女は、即座にラフタを振り切って逃れようとする。

「逃げる!? させ……」

「追うなラフタ!」

追撃しようとしたラフタを、昭弘が留める。

「こっちの増援に呼応してやつらが手を打ってくるようだ。俺達も一旦引くぞ」

「けど!」

「奴らの手を凌いだら今度はこっちの番です。ここは俺らに任せて下さい」

話に割って入ったのはエンビ。敵の主要な戦力が一時後退したのを見て取った彼らが前に出てきたのだ。

「あんたら、前に出てきて大丈夫なの!」

「艦の正面に位置しなきゃそうそう当たるモンじゃないっしょ。それに『最初から撃たせる気はねえっすから』。団長たちは」

「俺らも成長してるって所見せてやるさ。そうそう落とされやしねえよ」

エルガーの言葉に次いで、ビトーもぶつきらぼうながら自信をみなぎらせた言葉を放つ。むう、と呻き声を上げたラフタは、ほどなく折れた。

「分かった。任せたわよ! けど無茶すんじゃないわよ!」

グシオンの後を追って帰還する辟邪を見送り、昌弘がく、と笑みを零す。

「さて、任されたからにはここを通すわけにはいかないよな！」
「応とも。ごちやませ隊、行くぜ！」

全く不揃いな4機が、散開し未だ戦線に残る敵機に挑みかかった。

反逆軍の陣形が変わっていく。

4隻の艦を先陣に、残りがその後ろに並ぶ縦列隊形。正面への打撃力を完全に捨てたそれは、この先に何が待っているか理解しているからこそのものだ。

「全艦ブリッジを収納！ 先頭の艦の退避を急げ！ 残るスタッフはノーマルスーツの着用を！」

「タイマーをセット。向こうの反応如何に関わらず、スラスターに火を入れます」

報告を聞きながら、ライザは頷いた。

「向こうの動きから目を離すなよ。……鉄華団艦隊に通達。こちらの背後に……」

「いや、それには及ばねえ」

突如割って入ったオルガは、通信向こうで不敵に笑う。

「こっちの正面装甲は『一発だけなら耐えられる』ってテイワズ技術長のお墨付きだ。そっちは自前の艦を護るのに集中してくれ」

鉄華団の艦に増設された追加装甲は、ただの増加装甲ではない。テイワズのメモリーバンクを総ざらいして技術長が再現した、『対ダインスレイブ用の複合装甲』である。その性能は本来のものより低下しているが、1度だけなら確実に食い止められると技術長は保証している。

と、そこでイサリビの前に割ってはいる艦影。ホタルビだ。

「ユージン!? お前何で……」

「一応向こうさんにも『対処しているっていうふり』して見せとかねえと怪しまれんだろ? それに『予定通り』ならどこにいたって一緒だ」

まあ、方が一つのこともあるしなど、声に出さずに呟くユージン。ここまでできてしくじりは許されないし、それによってオルガが失われるなどあつてはならないことだ。危険性は可能な限り排除しておく。

それが副団長たる自分の役目だと、ユージンは腹を決めている。

反逆軍艦隊の動きはアリアンロッドのほうでも確認されていた。

「こちらが何をやるか分かっていて被害を最小限に食い止める腹か。恐らくは先頭の艦を盾にすると同時に、こちらに向けて特攻させるのだろうな」

なるほど、こちらの打つ手を良く理解している。一撃を乗り切れれば勝機があると、そう踏んだのだろう。

しかしそれでは一手足りない、ラスタルはほくそ笑む。

「司令、部隊の配置が整いました」

「よし、全艦隊に回線を開け」

ばさりとマントを翻し、ラスタルは堂々と言う。

「アリアンロッド艦隊総員に告げる。見ての通り反逆軍は条約で禁じられた兵器、ダインスレイブを警告も放たずに使用した。許し難い蛮行である」

実行犯は自害したが、彼が反逆軍に加入する以前の経歴から事を起こすまでの行動——『アリアンロッドの仕込みであるという状況証拠』がしっかりと取られていることなどつゆ知らず、ラスタルは続けた。

「ゆえに我等は報復を行わねばならない。目には目を、歯には歯を。無法には相応の手段を持って報いよう」

彼が用意した『報復の手段』。艦隊前面に配置された2個大隊72機のダインスレイブ装備型グレイズ。これを3分し3段撃ちを敢行する。これなら一度に放てる数は少なくなるものの、次弾を装填する間に生じる隙を大幅に減少することが出来る。要するに昔の鉄砲隊がやったのと同じ運用法であった。

大昔の戦術であるが、ダインスレイブと火縄銃は驚くほど運用方法が似ている。ゆえに戦術が回帰するのは当然の流れと言えた。

ダインスレイブ隊の姿は反逆軍の陣からも確認できる。一時後退を指示されたコーリスなどは怒りを隠そうともしない。

「厚顔無恥にもほどがあるぞラスタル・エリオン！」

見るものが見れば丸分かりのマッチポンプ。しかもご丁寧に『阿頼

耶識を備えた部隊には後退を命じていないようだ』。足止めのつもりなのだろう。感付いたエース級などが自己判断で退避したりして上手くはいつていないようだったが。

ともかく、布陣は成った。

『思惑通りに』。

「そう、こちらが『艦隊ごと反応してみせれば、それが対策だと思うだろう』？」

にい、と先頭に位置する艦の甲板上でバエルを立たせたマクギリスが笑む。

同時にイサリビのオルガも。

「そして、アンタらは『その位置にしかダインスレイブを布陣できない』」

アリアンロッド艦隊から見て地球を背にしているように見える反逆軍だが、ここで真正面からダインスレイブを放つても『地球に当たるわけではない』。なぜなら双方の艦隊は静止しているように見えて、その実衛星と同じく凄まじい速度で軌道を周回しているからだ。逆に言えば真正面から撃てば『絶対に地球には当たらない』。今更手遅れとはいえこれ以上各勢力との関係悪化を避けたいアリアンロッドは『真正面にダインスレイブ隊を配置するしかなかった』。

「ここまでお膳立てが整えば——」

「——対策の一つも思いつくさ」

イサリビにて、『スイッチが押された』。

「ダインスレイブ隊、第1制射……」

ラストルが命を下すその直前で、双方艦隊の狭間を漂うコンテナラUNCHャーの一部が起動。もしここで射撃管制がオートのままであったらば、この後のことは防げたかも知れない。だがマニュアルに切り替えた砲座は咄嗟に反応できなかつた。

放たれたのは、数十発に及ぶ巡航ミサイル。それは狙い違わずダインスレイブ隊の元へと殺到し、何らかのアクションを起こす前に近接信管が作動。赤黒い煙幕が広がると同時に、癩癩玉のような小爆発が無数に生じた。

「なにっ!? いかん、砲撃……いや、全艦回避行動を取れ！」

ゆつくりと広がる煙幕の正体を悟ったラスタルが即座に指示を出し、艦隊が泡を食って回避し始めた。

煙幕の正体はどうぜん特製ナノミラーチャフ。そしてそれと同時に硬化レアアロイ製の散弾が混入されたクラスター爆弾がたたき込まれたのだ。結果は当然。

「だ、ダインスレイブ隊、沈黙。全機から応答がありません」

騒然とする中で、オペレーター言葉が重く響く。ゆつくりと移動する煙幕の中から現れるのは、ずたぼろになり赤黒く染まったグレイズの群れ。一目で戦闘不能だと見て取れるほどの損傷具合であった。

「各艦、牽制の砲撃をしつつ陣形を立て直せ！ 敵がつつこんでくるぞ。距離を維持しながら迎撃せよ！」

混乱しつつある艦隊に向けて命じるラスタル。うかつなとほぞをかむ思いであった。ダインスレイブを読むであろうこと。そしてそれに対処するだろう事は当然読んでいた。だがダインスレイブ隊を一網打尽にする手段を用意していたのは計算外である。

艦隊からの砲撃、あるいはMSによる強襲。それらの対しては十分の警戒していたが、ダミーだと思っていたコンテナをあのように使うとは。いや、最初からその算段で、ダミーとしての機能は見せ札であったのだろう。注意がそれたところで距離を詰めさせ、こちらが完全に油断したところで射程内に納めたミサイルを放つ。最初から全て計算尽くで仕込まれていたようだ。

やってくれる。これで札が一つ完全に潰された。ダインスレイブがまともに使えれば、間合いを詰められるまで相手にそれなりの被害を与える事ができただろう。まさか1発撃つことすらできずに叩き潰されるなどと誰が予想するか。

だが、まだだ。ラスタルの眼差しは、諦観とはほど遠い。

「聖剣を……『エクスカリバー』を使う！ 敵艦隊の動きにタイミングを合わせろ！」

「司令！ フォルクス三尉の準備が整ったとのことです！ いつでも出られますが」

どうやら運はつきていない。ラスタルは不敵に笑むと声を張り上げる。

「よし、フォルク三尉を出せ！ 攪乱にはちょうどいい。彼女だけでなく前に出られる者は全部だ！ ただエクスカリバーのタイミン
グだけは徹底して注意させろ！」

『了解っ！』

まだ我らの勝利に揺るぎはない。ラスタルの態度からそう確信した隊員たちはにわかには活気づく。

痛打は与えた。しかしながらまだ致命傷には届かない。

ダインスレイブ隊を退けた影響で僅かに生じた空隙。その間に鉄華団の主力は補給と機体の換装を行っていた。

「流星号のブースターは変形させてから取り付けろ！ グシオンとは違うぞ！」

「グシオンの方は基本的に前と同じでいい！ 得物だけ積み替えろ！」

「バルバトスは両腕のランチャーとシースメイスだけだ。ブースターはいらないってよ」

「ラーズグリーズは教官とおやつさんに任せとけ。俺らで手エ出せるモンじゃねえぞありゃあ」

突貫工事で仕上げられる機体。コクピットに乗り込みながら、シノはヤマギの説明を聞いている。

「ブースターに火が入ったら、後は全部機体の方がやってくれる。色気を出して手柄を、なんて考えちゃダメだよ？ 多分そんな余裕ないから」

「分かってらい。行って帰ってくる。そんだけでいいんだろ？」

口うるさいくらいに注意事項を述べるヤマギの頭を、がしがしと乱

暴になでるシノ。「だから乱暴にしないでつてばあ」などと文句を言いながらも、ヤマギはまんざらでもないと言うような様子であった。

一方グシオンの昭弘はと言うと。

「こいつの加速なら一瞬で事は終わります。一応レールガンの調整もしましたけれど……」

『まあまず当たらない』か。……それでいい、奴らの意識を引きつけられれば十分だ」

グシオンの調整を任されていたデインの説明に、昭弘は頷いて答える。シノもそうだが、今の彼は対G機能を強化したパイロットスーツに身を包んでいた。なにやらブースターを使った作戦に従事するようだが、今の会話からはそれがいかなる物か伺い知ることはできない。

と、そこに辟邪の補給を終えたラフタがよってきた。

「昭弘ー、そつちはどう？」

「ああ、今終わる」

「そ。……アタシはついてけないけど、無茶するんじゃないわよ」

「まあそんなことをやってる時間もないんだが……注意する」

ホント気をつけなさいよねー、などとぼんぼん昭弘の肩をたたきながら言う。その様子にデインは何か『違和感』のような物を覚えていた。それを気にしている間にも、会話は進んでいく。

「こつちの方は頼む。奴らも死にもものぐるいで攻めてくるだろうからな」

「任せときなさい。イサリビにもホタルビにも近づけさせやしないわよ」

自信満々に言い放つラフタを見て、デインは『それ』に気付いた。

(……なんか『ラフタさんの頬がちよつと赤い』?)

そうそうそれで、とラフタはさりげなさを装って話を変える。

「アンタに渡しておきたいモンがあるのよ」

「? なんだ？」

きよとんとした表情を見せる昭弘。その胸元をひつつかんで強引に顔を近づけたラフタは――

ホットサンドをスープで流し込む。腕を上げたアトラの料理は、舌をやけどしない程度でありながら確かに温かかった。よほどきちんとタイミングを計っていないとできない芸当である。

「次も暖かいのにするね」

「ありがと。楽しみにしてる」

手を振りながら次の差し入れに向かうアトラを見送って、三日月は指に付いた食いかスを嘗め取りつつ呟く。

「次の飯までに、ケリつくかもだけど」

そして、一番換装に手間取っていたのがラズグリーズである。

「足首の交換、終わったぞ！」

「オーライ。アジャストする、いったん離れてくれ」

ラズグリーズの足首は、バルバトスと同じようなヒールの高い物に交換されていた。蹴りつけの衝撃を和らげるための物であるが、最終調整に手間取って今まで装備されていなかったのである。その他にも腰の後ろに尻尾のような追加ブースターを備え、マシンショットガンやグレネードランチャーなどを提げていた。

「おし、いける。後は実地でやれるな」

「また戦闘中に調整する気かよ。やめろたあ言わないが」

この男には何を言っても無駄だと、諦め気味に肩をすくめ雪之丞がコクピットに身を寄せる。

『例の仕込み』は2発だけだ。使いどころをしくじるなよ？」

「使わなきゃそれに超したことはねえがな。……下がってくれ。そろそろ出るぞ！」

「もうかよ？ 攻勢に出るまでにはまだちよつと余裕あんぞ？」

雪之丞の問いに、ランディはにっこりと笑みを浮かべ答えた。

「多分そろそろ『本命のお客さん』がくる頃さ。デートに遅れるわけにやあいかなだろ？」

艦隊の立て直しが続く中、スキップジャックに備えられた大型貨物搬入用のハッチが開く。

そこから現れたのはMS……『ではない』。中央部にレギンレイズのボディが埋め込まれ、無数のスラスター群と武装で構成された巨大な金属塊。通常のカタパルトが使えないため、このような形で射出されるのだ。

それは金属のドラゴンにも、宇宙から飛来した未知の昆虫にも見えた。深紅の機体がコクピットに納まったマリイは、浮つく心を抑えられないような表情で、熱い吐息のようににも思える口調で告げる。

「レギンレイズ・モルガン・ブライド」。出るよ」

狂気を内包した鋼の魔獣が、今戦場に舞い降りる。

*今回のえぬじい

「いやアレマジで役立てる人間いるとは思わなかったアルよ」

→ものすごい数の在庫が処分できたのでほくほく顔の某武器商人。

50・反則技で、勝てると思うなよ？

アリアンロッドと反逆軍の決戦、その様子は圏外圏や火星圏を含む全世界に向けて、様々な手段で中継されている。

もちろんラスタルは方々に手を回し、報道関係を抑え自分たちに都合のいい情報しか出回らぬよう細工していた。しかし報道に細工したのはマクギリス側も同様。と言うより彼は手を回したマスコミ関係者に対し、「好きなように報道してくれ」と許可を出している。

この戦場で起こるあるがままを。後に支配者になるつもりのないマクギリスは、『自分たちの戦いを見るすべての者に、この世界のいく末を考えさせるべきだ』と考えていた。ゆえに『隠し立てなどしない』。自分たちによって脚色されたものではない『真実』を見せつけようとしていた。

そして戦いの様子を彼方から見守っている者たちとはと言うと。「なるほど、ダインスレイブをあのように完封するとは。これでラスタル司令の切り札が一枚減らされたわけですか」

卓に肘をつき、戦いの様子を見守っていた新江がつぶやくように言う。この火星支部本部長執務室だけではなく、様々な場所で多くの人間がこの戦いを見守っているのだらうと、彼は頭の隅で考える。

まあそれはさておいてと、新江は意識を切り替えた。

「ですがまだ手札を残しているのですよねラスタル・エリオンは」
映像から目を離さずにクーデリアが言う。これまでの鉄華団とのやりとり、そして集めた情報から彼女はラスタルの人となりをそれなりに掴んでいた。

彼は尊大だが用心深く、戦うときは必ず『勝てる状況』に持ち込んだから戦端を開く。しかし今回において彼の工作は、その多くが覆されている。

それは相手——マクギリスや鉄華団が彼と同等以上の策を持って相対しているからであった。実のところラスタルは、知力、政治力、武

力、そのほか諸々を含めて『自身と互角以上のものを相手取ったことはほとんどない』。今回の戦いは、彼にとっても未知の領域であり、苦戦するのもやむかたない事だった。

だがそれでも、勝てるとは断言できない。未だ戦力差は大きく、リアンロッドはまだ余力を残している。なにより未知の領域である、それだけで優位に立てるほどの男は甘くないだろう。彼の用心深さは折り紙付きだ。『切り札が一枚だけなど、ありえない』。そう断言してもいいと、クーデリアは思っている。

「では、どのような手段に打って出ると思われます?」

モニターと言うよりも、それに見入っているクーデリアを興味深そうに見つつ、イアンナが問う。クーデリアは振り向くことなく、思考しながら答えた。

「ダインスレイブは恐ろしい武器です。一度放てばMSはおろか戦艦ですら瞬く間に轟沈させるほどの。切り札として用いるのは当然でしょう」

すう、とクーデリアの目が細まる。

「であれば、次に用意されているのはダインスレイブと同等以上の威力を持つか、同等以上に『やっかいな代物』ではないでしょうか。一見では対処が難しい、そのようなものではないかと」

その言葉を聞いた新江とイアンナは同じ感想を抱く。

(やはりこの人は未恐ろしい)と。

クーデリアに軍事的な知識はほとんどないはずだ。いままで鉄華団などから聞きかじり、そして自分の目にしたこと耳にしたことだけで戦術的な判断が下せている。そしてそれは的外れどころか大分正鵠に近いものだと思われた。

このセンスを保ったまま成長を続ければ……その未来予想に新江は戦慄し、絶対に敵に回すべきではないと改めて誓う。一方イアンナは内心でほくそ笑んでいた。この人は益々面白くなっていく、と。

その様子を見守っているフミタンは、表面上すました顔ながらも、内心では暮雨の涙を流している。

(お嬢様があの男の影響を受けすぎているう……)

クーデリアの戦略眼は、間違いなくどつかのキチピーの影響であると確信している彼女自身も、かなり影響を受けていると思うがそれはさておいて。

ともかく凶太くアールレスに居座っている(もうこの時点で誰かさんの影響バリバリだと思われ)彼女らを含めた、あらゆる者たちが戦いを注視している。

そんな中、戦場は新たな動きを見せようとしていた。

ナノミラーチャフが叩き込まれ、陣形を崩したアリアンロッド。この隙にと反逆軍の主力は補給を行い、残りは反撃に出るであろう敵に対して迎撃網をしく。

「……来た。全然数が減ってるようには見えねえや」

イサリビの近くで迎撃のため待機していたハッシュは、ゴクリとつばを飲む。

先ほどまでは視界に三日月の存在があつた。ついて行くことはできないにしても、その存在が側にあるだけで随分と支えられてきたのだと、今になって思う。

バルバトスが補給を行うわずかな間。それだけだというのに、まるで真つ裸で宇宙空間に放り出されたような心細さを覚える。依存していたのだと、自分の甘さを突きつけられたようだった。

だが。

「落ち着け……落ち着けよ、俺。あの訓練(ランディ数人)を受けたのは伊達じゃねえんだ。落ち着けば、やれるさ」

ハッシュとてこれまで生き抜いてこられたのは運や偶然だけでもない。最初はそうだったかもしれないが、鍛え上げ、経験を重ね、それらを確かに己の糧として成長してきたのだ。今の彼は、三日月の金

魚の糞などではない。

「当たらなけりや、死にはしない！ 俺とこいつならできる！」
辟邪の脚部が展開し、ブースターユニットが炎を吐き出す。

アリアンロッドの反応を見て、マクギリスはふむ、と考える。

「艦隊が徐々にだが後退している？ 残っているのは相変わらず阿頼耶識付きを中核とした部隊だけ、か」

そのことに罨の存在を感じ取った彼は、石動に通信をつなぐ。

「石動、1艦だけ『タイマーを繰り上げすぐに出せ』。何か仕掛けがある」

「様子見ということですか？ こちらの手が露見しますが」

「それで種が割れば帳尻は合うさ。それにラスタルも予想している事だろう」

もう少し、戦場が混迷してから打つつもりであった札。それを切る判断を迷いなく下す。切り札とは最後までとっておくものではない、出すべき時に出すものだ。そう考えているマクギリスは、ラスタルがどのような手を繰り出すか、冷静に見極めんとする。

その彼をしても、予想外の札が切られた。

「敵改装型ハーブビーク級1、突出してきます！」

「様子見のつもりか。しかし放っておけるものではない。……全艦、突出してくる艦に砲撃を集中！ エクスカリバーの準備はできているな？」

「はっ、いつでも照射可能です！」

「臨界で待機。敵艦が止まらず艦隊に突っ込んでくるようであれば、使うぞ」

陣形が整い本格的に反撃へ、としたところで敵艦が一隻、飛び出してくる。ブリッジを収納したそれはおそらく自動操艦。ミサイル代わりに特攻させようというのだろう。その手段自体は予想していたことである。

アリアンロッドは大艦隊が逆に徒となり、機敏な回避行動をとりにくい。それを見据えての策と見た。だが艦の数に限りがあり、そう何度も使える手段ではないはずだ。様子見のためだけにこれを行ったマクギリスの度胸には呆れるやら感心するやらだ。

しかし油断もしなければ容赦もしない。次々と自軍のMSが飛び出していく中、砲弾の雨が特攻してくる艦に降り注ぐ。が、元々ナノラミネート装甲を持ち耐久性の高い艦艇は、少々の打撃では墜ちない。ましてやブースターを追加され通常のハーブビーク級より速度の出る改装型だと、当てることそのものが難しくなってくる。

となれば。

「敵艦、速度落ちません！ 本艦に向かって進路を調整している模様！」

「やはり自動誘導くらいはしてくるか。……タイミングを合わせ、エクスカリバーを照射せよ」

「はっ！ ……目標、有効範囲まであと7秒。有効範囲から友軍機は待避。……エクスカリバー第一射、照射開始せよ！」

割合静かにラスタルが命を下す。それを受けた部下は、緊張を隠せないままそれを遂行した。

「砲撃が止んだ？ それにMSが散開してる」

電子妨害と索敵を担当していたダンテがそれに気づく。特攻していく艦に対するアクションをやめた……いや。

「回避じゃない、あの艦から『離れてる』のか？ ……なんかヤバいぞ。……団長、ダンテだ！ MS部隊に後退を——」

直感で危険を察した彼が進言するより早く——

『光の壁が、眼前に立ちはだかった』。

「な、なんだ!? うわっ!」

何が起こったか把握する前に、レッドアラートが鳴り響く。電子戦用ユニットのいくつかが、過負荷を受けダウンしたのだ。

そしてそれにとどまらない。光の奔流はアリアンロット艦隊に飛び込もうとしていた特攻艦を飲み込み、そして。

爆発。推進剤と積み込んでいたプラスチック爆薬が一気に発火したのだ。

双方ともに簡単に爆発するような代物ではない。それが一瞬でなどとはにわかには信じられなかった。皆があっけにとられる中、マクギリスと反逆軍の幾人かが光の正体に気づいた。

『ガンマ線レーザー』! 月衛星基地の実験施設か! 完成していたとは」

核反応からエネルギーを得て放たれる大出力レーザー兵器。外惑星進出などに用いる比較的安価な推進システムとして応用できないか研究する、と言う名目で開発が進められているとは聞いていた。しかしどうやら手に入れた情報は虚偽のものだったらしい。ここに来てやってくれるとマクギリスは舌を打った。

「総員、むやみに敵艦隊へ踏み込むな! あれを食らえば機体はともかくパイロットは一瞬で蒸し焼きだ! 残った特攻艦のタイマーを解除。戦術を立て直す!」

その声を聞いて機敏に反応する反乱軍。しかし多くのものが動揺を隠せない。そんな中でも、オルガは鋭いまなざしのまま冷静さを保ちマクギリスに問う。

「代表、あれがこっちの艦隊を直接狙ってこないってことは、『撃つ』には条件がある』ってこったな?」

「ああ、恐らく。強力な兵器であるが、磁気や重力の影響を受けやすいものでもある。角度が0.1度でも違えばどこに飛んでいくかわからない代物だろうさ」

その推測は当たっていた。地球や月、コロニー間の位置関係。さらに重力や磁気帯の影響もあって、このレーザー兵器——エクスカリ

バーは展開したアリアンロッド艦隊前面の限られた空域にしか撃ち込めない。もちろん地球やコロニーに与える被害や影響などを度外視すればその限りではないが、『今のところ』各勢力を真つ向から相手取るつもりのないアリアンロッドは、それを行わないだろう。

だが制限はあるとはいえ、強力無比な兵器であることには違いない。これによって反逆軍は攻勢に出ることが難しくなった。

「照射後の影響はどうか」

「核ジェネレーター、および照射システムに問題なし。現在急速冷却中。次射まで280秒」

「旧世代の遺物であるが、故に対処法も限られる。……それに、『二の太刀を放つまでの隙など与えん』」

ここでたたみかける。ラスタルの口元が、獰猛に歪んだ。

出鼻をくじかれた形となった反逆軍は、打開策が生じるまで防戦に努めざるを得ない。

「こつちが攻め込めないからと調子に乗って！」

しかし士気は下がっていない。ラスタルが札を隠し持っていたのは百も承知だ。ただ予想外であった、それだけだと自分たちに言い聞かせる。

何より代表であるマクギリスが欠片も諦めておらず、逆襲の時を伺っている。盲信ではなく信用した上で、彼らは己の役目を果たさんとしていた。

しかし。

「リーダーに……なんだ、これは!? は、速い！」

不可思議な反応——同一座標に固まっている『3つ』のリアクター反応が、とてつもない速度で向かってくる。そしてその方向から雨霰と弾丸がうち放たれてきた。

「ブースターをつけた敵の部隊がいるとでも……」

1機のグレイズが回避しつつ反撃しようとライフルを構えたところだ。

赤い閃光が奔った。

瞬時に伸びてきたそれは、反撃しようとしたグレイズの頭部に命中する。だが目に見えて損傷はない……ように見えた。

「な、なに!? モニターが!? センサーも! さ、サブシステムに切り替え……があっ!?!」

突如衝撃が機体を揺さぶる。目視では到底追いつけない速度で飛び込んできた巨大な影。その側面にある巨大なカニのハサミを思わせる何かに捕らえられたのだ。そして次の瞬間。

『粉碎された』。

比喩抜きで、リアクター以外の上半身が粉みじんに吹き飛んだのだ。それをなしたのも——巨大な杭が収納され、紅き巨体は身を翻す。

「はっはっはア、ご機嫌だねエー!」

絶好調で哄笑するのは紅き怪物を駆る女、マリイ。そんな彼女が駆る機体の画像がやっとの事で捉えられる。不鮮明ながらもそれは艦隊と主要なMS乗りたちに送られた。

それを見たオルガが唸るように声を漏らす。

「こいつは……っ!」

マクギリスも同様だ。

「コアとなっているのはレギンレイズのようなだが、これはまるで……」

機体の半分以上を占めるスラスター群。両サイドのハサミのごとき武装の他にリニアガンやグレネードカノン、ガトリングガンなどをこれでもかと備えたそれは、テイルユニットを振り回し、竜の頭部にも嘴のようにも見える上部ユニットを巡らせる。

「さあてもういっちょ行ってみようかア!」

上部ユニットの先端、そこから先ほどの閃光が再び放たれた。そしてまた、1機のMSが先ほどと同じ流れで犠牲となる。その光景を見て、オルガは吠えた。

「ビーム兵器だと！　じゃあやつぱあは！」

「いや、小規模なものだがレーザー兵器だな。だがオルガ団長の見立て通りだろう」

努めて冷静さを保とうとするマクギリス。そう、現れたのはもうMSと呼べる代物ではない。

レギンレイズ・モルガン・ブライド。モルガンを中核にし、『有人型でMAを再現した機動兵器』である。

さすがに自己修復能力やプルーマーのような子機を生産し従える能力はないが、その機動力、攻撃力は本来のMAに勝るとも劣らないものだ。その上で阿頼耶識システムを備え、マリイという超級のパイロットを得たことで、その戦闘能力は凶悪の一言に尽きる。正しく死を呼ぶ天使、いや死神と言っても過言ではない。

「お次はこいつだよ！」

もはや備えられているだけのように見える脚部。その先端からジャックナイフのように刃が飛び出す。

大型の高周波ブレード。それはすり抜けざまにまた1体MSを屠った。MSの数倍はある巨体でありながら、その機動力は目で追いきれないほどのもの。そのからくりを見抜いた者たちがいる。

「エイハブスラスター！　あの機体、あの規模のスラスターをガスなしでドライブしてやがる！」

「本当に複数のリアクターを積み込んでいるのか。ガンダムフレームのように同調しているんじゃない。機動、機体そのものと武装、慣性制御に振り分けて運用してるんだな」

ロツソとスノーウィンド。彼らはモルガンの機能を正確に推測し、味方に伝える。

「阿頼耶識付き以外は下がれ。アレは正攻法じゃどうにもならん。ガルーダ、ウォードッグを中心に迎撃のフォーメーションを……」

眦を鋭くし真剣な表情となったアンダーセンがMS部隊に指示を出そうとする。と、それを遮るように声が響いた。

「おーっと司令、アイツあ俺の獲物だぜ？」

「ふん、やつとお出ましか」

レーダーには、モルガン・ブライドに劣らぬ速度で戦場に飛び込む反応があった。もちろんフル装備のラーズグリーズである。苦笑を浮かべるアンダーセン。

「総員、指示を変更する。あの化け物から全力で離れる。特大の馬鹿が食らいつくぞ。巻き込まれたら粉みじんじやすまん」

それを聞き入れ即座に散開する元標的艦隊の面々。

「任せたぜ。そいつはしやれにならんぞ、気をつけな」

「武運を祈る。……勝てよ、隊長」

ロツソとスノーウィンドの二人がそう声をかけ後退した。

「ああ、任された。……さあてお待ちかねだ、メインディッシュを食らわせてやんよ！」

獰猛な笑み。応える女もまた、鏡に映したかのように同様の表情を浮かべている。

「……待ったよ。本当に待ったよ。この日を、この時を……この瞬間をお！」

がうお、とスラスターが吠える。残像を残す勢いで、モルガン・ブライドはただ一直線に加速した。

並の人間であれば、何が起こったか分からぬうちに餌食となるであろう速度。だがそれをラーズグリーズはひらりと回避――

「っ！」

――しない。盾で受け流しはしたものの、確かに一撃を食らってしまう。ランデイの口元から唸るような声が漏れた。

「てんめエ……『俺が避けたら、艦隊蹂躪するつもりだったな』？」

当たって弾かなければ、反逆軍艦隊のど真ん中に飛び込むコースだった。

答えは悪びれることなく、楽しそうに。

「ははははは、そうさあ。こうでもしないとまともに当たってくれないだろう？ ……さあさあ、避けるとお仲間が死んじまうよお」

ランデイと正面切って戦うためなら手段を選ばない。その悪逆さに対し――

「……くか」

悪魔は、嗤う。

「くかかかか。おもしろエ。情熱的じゃねエかよ。……いいぜ乗ってやる。乗ってやるから……楽しませろよ?」

ぞう、と総毛立つような狂気が漏れ出した。マリイに負けず劣らず、いや、それ以上に闘争に飢えた男が、その本性をさらけ出す。

相對する女は、歓喜に震えた。

「そうだよ、そうでなきゃあ! かかってきな! come on!」

狂乱の舞踏が、幕を開ける。

「システムの一部がダウン! 戦闘に支障はないが、やばいぞこれ!」
「くそ、なんなんださっきのは! オレあ聞いてねえぞ!」

アリアンロッド艦隊から突出した形になっているフェアラート。指揮を執っているブルックは焦り、混乱していた。

エクスカリバーの直撃こそ食らわなかったものの、照射域に近いところに位置していたフェアラートは結構な影響を受けていた。すぐさま戦闘に影響するようなものではないものの、最前線での機能低下などしやれにならない。

加えて彼ら犯罪者上がり組は、エクスカリバーはおろかダインスレイブの存在すら知らされていない。完全に捨て駒にする気満々の配慮であった。

「ど、どうする。どうすりゃいいんだ」

頭を抱えるブルック。下がれば先ほどの『何か』に巻き込まれるかもしれない。しかし前に出れば袋だたきだ。進退窮まった彼はただ狼狽え怯えるしかなかった。

「そのままそこを動くな。頃合いを見なきゃ逃げることも出来ん」

突然入ってきた通信。その言葉に、ブルックはすがりつく。

「さ、サンドバル! 助けてくれるのか!」

「逃げるにしても足があったほうがいいからな。ブリッジを収納した

まま適当に反撃してる。離脱のタイミングは追って知らせる」

「本当か!? 本当だな!」

「ああ、任せろ」

涙と鼻水でぐしよぐしよになったブルックがモニターから消える。サンドバルは苦笑を浮かべた。

「まあ多少なりとも目を引きつけておいてくれりゃあ、それでいい」
彼は最初からブルックに期待などしていなかった。運がよければ沈まないだろうくらいの感覚でしかない。

自身も逃げ出す方向で考えているが、それにはタイミングというものがある。この戦場でどちらが優位となるか。はつきりとどちらかの勝ちが見える状況にならなければ逃げるに逃げられない。それがはつきりするようになれば戦場も大分混乱してくるはずだ。そのときまで粘れば。

そのように算段していると、リーダーに感。

「……ちっ、奴か」

やはり因縁はついて回るようだ。特徴的なツインリアクターの反応の主は、すぐさまモニターに捉えられる。

「見つけた。きっちりと始末はつけさせてもらう」

腰にシースメイスを提げ、両腕に砲を追加したバルバトス。それを駆る三日月はサンドバルのレギンレイズ・ハイムバーを射貫くように見ていた。

この男——サンドバルは危険だと、三日月は判断している。技量だけではない。その生き汚さ、阿頼耶識を受け入れ使いこなす柔軟性。そして人を従えるカリスマ。ここで取り逃がせば、いずれ力を蓄え再び自分たちの前に立ちはだかつてくる。そういう予感があった。

いい加減ここでこの因縁は断ち切っておかなければならない。本人は気づいていないが、三日月は恐らく初めて『自発的に』殺意を抱いていた。

その覚悟を見て取ったのか、サンドバルは苦虫を噛み潰したような表情だ。

「そう何度も逃げ切れるものでもなさそうだ。年貢の納め時、という

奴かも知れんな」

それは一見諦めたかのような台詞に思える。だが、次の瞬間に彼は歯をかみ鳴らしていた。

「ふざけるなよガキ。ここで終わらせる？　嘗められたものだ」

プライドなどドブに捨てたつもりだった。使えるものは何でも使い、生き残つてのし上がる。そのためにはラストルの靴だって舐めて見せよう。そこまで墜ちたはずの男が憤っている。

結局割り切ったつもりでも、心の中に火種は残っていたのだ。子供にしてやられたという事実は、存外根深い恨みとなつて澱のようにこびりついていたらしい。そして、彼もまた鉄華団を将来的な障害だと見ていた。

ここで逃げ延びても彼らが存在する限りいずれ衝突することになるだろう。どうかこの戦いを利用して彼らを始末せねばなるまい。いや、その前にこの目の前の敵を退けなければにっちもさっちもいかない。

このままでは逃げ切れないと理解したからこそ、サンドバルの中にあつた『甘え』は払拭された。飼ひ慣らされた犬ではない、かつて猛者たちを率いていた獰猛な野獣の本性が目覚めます。

「まともな勝負になど拘るか！　なんとしてでもここで叩く！」

「本気……いや、開き直つたか」

目に見えて挙動を変えたレギンレイズ・ハイムバー。対する三日月は淡々と、しかし瞳に力をみなぎらせてスロットルを開ける。

一端補給を受けたジュリエッタは、再度出撃し戦場に向かつていた。

「エクスカリバーまで使うことになるとは。だがこれで、こちらは優位を取り戻した。ここで押し切る！」

エクスカリバーは本来、地球外軌道に向けて使用する兵器だ。月軌道以内で使用することは想定されていない。(と言う建前) 故に使用は限定されているものの、その威力は反逆軍の攻勢を押しとどめるに十分すぎた。

この機会こそ乾坤一擲。反逆軍を駆逐するチャンスだと彼女は闘志をみなぎらせている。

「フォルク3尉は交戦中。相手はランディール・マークスカ。あの砲撃能力を持つ2体のガンダムは見当たらない。補給中なのか。今のうちに叩いておきたいが」

倒せずとも、砲さえ使えないようにしてしまえばラスタルに被害は及ぶまい、などという考えがあった。しかしそれがかなわぬとなれば。

「この機体は対艦戦闘に不向き。ならば兵力を削っていく！」

下手にエース級に関われば時間を食われるだけだと、先の戦闘で痛感したジュリエッタは、比較的戦力の薄い部分を探していた。とりあえず己の中の迷いを棚上げしている彼女は戦うことに集中し、堅実に戦果を上げようとしていた。

と、そのとき。

「……あの機体は」

レーダーが捉えた反応をモニターで拡大してみる。そこにはデータの獅電電子戦仕様機の姿があった。

かの機体には以前、散々攪乱された。直接的な打撃力はないが支援機としてはかなり優秀な機体だ。倒しておけば少しでも貢献できるだろう。

見れば何やらトラブルを起こし、立ち往生しているようにも見える。周囲に護衛機の姿はあるが、ガンダムフレームや先に戦ったタービンス機などの姿は見えない。これならば。

「トラブルだろうが情けは無用！　ここで墜とす！」

そのわずかに前。

「システムチェック、再起動。……よし、なんとか動いたが……電子兵装の半分以上がおしやかか。こりやここでリタイヤだな」

機体の機能を回復しようとしていたダンテはため息ををく。

エクスカリバー照射のおり、索敵機能を全開で使っていたダンテの機体はもろに影響を受け多くの機能が失われた。電子偵察機が至近距離でEMPを食らったようなものである。

通常の機体であればそこまで影響受けなかったのであるが、強力であるが繊細な部分を持つ電子機器類を多数搭載していた分、ダメージも大きかった。何しろ本来であればシールドされている本体機能も一部ダウンしてしまったのである。おかげで機能回復に今まで手間取っていたのだ。

しかしながら、とりあえず機能を立て直したものの、援護は出来そうになかった。戦闘力も低いことであるし、これ以上とどまるは不可能であると判断せざるを得ない。以前のダンテであれば意地を張って残ろうとしたかもしれないが。

「すまない、俺はここまでだ。サカリビに向かう」

「分かった。エスコートはいるか？」

「そうだな。ここで後ろから撃たれちやかなわん。悪いが補給ついでに安全圏まで送ってくれや」

「応よ。まあ大船に乗った気で——」

チャドと言葉を交わしている途中でレーダーに感。

「くそつ、言ってる間にか！ チャド！ デルマー！」

「奴はこの前の！ ダンテ、おまえは……」

「逃げろってのはなしだ。こいつは奴より大分足が遅い。逃げるより反撃した方がまだ分がある」

「……分かった。無理だと思ったら蹴飛ばしてでも逃がすぞ。デルマ」

「分かってる。やらせるかよ」

獅電とマン・ロディがダンテの機体をかばうように前に出る。そこに襲いかかるレギンレイズ・ジュリア。

機体の性能差などものともせず、少年たちは強敵に立ち向かう。

戦況を見ながら、マクギリスはふうむと考える。

「膠着状態に陥ったな。あんなものがあればうかつに攻め込めなくなる。上手いことやったものだ」

エクスカリバー。その存在は彼にとっても予想外であった。何よりもそのスペック、全貌を推測できないというのが痛い。

最大の威力はどれほどのものなのか。効果範囲は？ 射程距離は？ どれくらいの間連続照射できる？ 次の照射が可能となる時間は？ 命じてから照射に至るまでのタイムラグは？ 本体の耐久性は？ ただの一撃では、その性能を把握することは出来なかった。おそらくはカウンターでしか使えないものだ。なりふり構わなくなればそのかぎりではないが。逆に言えばなりふり構わなくなる前に決着をつけなければならぬ。そのためには。

マクギリスはしばし時を待つ。『打った手がどう転ぶか』、それを確かめるまで。

ややあって。

「代表。タントテンポ代表より返信です。「依頼を遂行する。条件を忘れるな」と」

どうやら風はこちらに吹いた。石動の言葉を受けたマクギリスは、ふっと微笑む。

「条件はすべて飲んでやれ。……これ以降、全権限を君とライザに預ける」

「了解しました。……武運を」

後顧の憂いはもはやない。あとは、雌雄を決するだけだ。

鋭い視線を眼前に向ければ、まっすぐにこちらへと突っ込んでくるMSの姿がある。

「そろそろ終わらそう。この戦いも、おまえとの因縁も」

両手にランス、両の腰に剣を提げたキマリスヴィダール。ただマクギリスを討つためだけにすべてを捨てた男は、ただバエルだけしか見

ていない。

「マクギリス！　これで最後にする！　俺は俺のすべてを持っておまえに挑もう！」

もはや勝ち負けすらどうでもいいのかもしれない。ただ全身全霊をぶつけ、雌雄を決する。確かにそれは八つ当たり。大義名分もへつたくれもない、エゴをぶつけるだけの『わがまま』でしかないのだろう。

それで良いのか悪いのかすらも、男たちには関係ない。ただ目の前に立つ『こいつ』をたたきのめさなければ気が済まない。それだけの、実につまらなくてくだらない『喧嘩』だ。

それすらも自覚しているのかいないのか。ただ二人は死力を尽くしてぶつかり合った。

甲高い音を立て、火花が散る。

※今回のえぬじい

「え？　ボツ台本？　……結婚を申し込む!?　花束買ってある!?　なにこれ!?!」

→実は某PJ的な立場と顛末にされるところだったハツシユくん。セーフ。

51・出し抜いてやるさ

ヴィーンゴールヴ。ほとんど護りらしい護りもなくなったそこでは、ほとんどのものが固唾をのんで天空の戦いがいく末を見守っている。

いや、息を潜めていると言ってもいいだろう。施設内での行動は制限されていないが、ヴィーンゴールヴより外に出ることはかなわず、あちこちで警務局の歩哨が目を光らせていた。

マクギリスを認められるほど柔軟ではなく、さりとて反抗するほどの気概も持たない。ネモやエレクは己の保身しか考えておらず、ガルスは現実には打ちのめされ意気消沈し、決戦に対して動きに出る様子もなかった。

セブンスターズの重鎮からしてこれである。トップダウンに準備しか出来ない者たちは、内心に何を抱えようが、あるいは口に出して愚痴ろうが、実際の行動に出るものなど皆無と言っている。

しかしながら、大多数を無視するかのように行動を続けている者たちもいる。

「ここままでふぬけているとは情けない話だ。……しかし我々にとっては都合がいいともいえるな」

「はっ、おかげで事がスムーズに運んでいます。上の決着がつくまでには、大方片付くかと」

側近と、監視のために追従している警務局の者たちを引き連れ車椅子を進めるのはカルタ。彼女はGH内部の様々な資料をまとめ上げ、今後いかなる状況に移行しても即座に対応できるよう準備を整えていた。

決戦の結果がどうなろうと各方面からの干渉は防げない。いや『防ぐわけにはいかない』。マクギリスのやり方を全面支持するわけではないが、組織に大鉈を入れることは必要だった。例えばラスタルが勝つ

たとしても介入を妨げる気はない。場合によっては彼の敵に回ることも辞さない覚悟をカルタは持っている。

それに多くの部下が追従してくれるのはありがたいことだ。統制統合艦隊の事実上の解体をカルタは隊員たちに知らしめたが、ほとんどの者たちは彼女の元を離れようとはしなかった。

統制統合艦隊の司令官ではなく、カルタ・イシューという一人の人間に仕えてきたのだと部下たちは胸を張り、最後まで仕えさせてもらいたいと申し出てきた。家ではなく自分自身という人間を見て、評価し、その上で仕えたいと訴える彼らに対し、「物好きどもが……」とか言いながら目頭が熱くなったことを密かに隠すカルタであった。

ともかく部下たちの協力もあって、事は滞りなく進んでいる。意外だったのが、監視役の警務局員たちがなんの妨害も口出しもしてこなかったことだ。確かにマクギリス派にとって助力となるであろう行動をとってはいしたが、何もリアクションがないというのも少々不気味に感じられた。邪魔をしないというのはありがたいことではあったが。

「我々も少し余裕が出来た。各員を交代で休ませよう。本番は戦いが終わってからなのだから」

「二両日中には決着もつくでしょうな。こちらもそれまでには目処がつくかと」

「有るものを掘り出すだけだ。そう考えれば楽とも……ん？」

道すがら、通路に面した大窓の外、小さな人が影がたたずんでいた。

人工的に作られた草原の中、ただひたすら空を見上げている少女。それを見たカルタは、傍らに控える警務局員に声をかける。

「少し席を外す。良いかしら？」

「はっ！ 小官らは監視対象のプライベートまで干渉するよう命じられてはおりません。ご自由に」

敬礼とともに間髪入れず返された言葉。随分と気を利かす人間を回してくれたようだ、若干マクギリス派の評価を上方修正し、カルタは車椅子に備え付けてあった杖を手を取った。

その少女はただ空を見上げている。祈りはしない。呪詛を口にす

るでもない。ただひたすらに、悲しげな視線を空の彼方に向けている。

こつりと、堅い音が響いた。

「少しよろしくて？ アルミリア・ボードウィン」

かけられた声にはつと我を取り戻して振り返ってみれば、そこには上級士官服をまとった長身の女性。

杖をつきながらもしゃきりと背を伸ばし、優しげな表情を浮かべるその人物に対し、アルミリアは慌てて淑女の礼をとった。

「も、申し訳ありませんカルタ・イシユ様！ 非礼をお詫びいたします！」

「気遣いは無用よ。……もうセブンスターズやら何やら無意味なのだから」

別段非礼でも何でもないのだしと、カルタは小さく苦笑する。そうしてから彼女はアルミリアに問う。

「ここで何を？ 戦いの様子であれば中で見られるでしょうに」

各報道関係から垂れ流される戦場の様子は、ノーカットでヴィーンゴールヴにも伝えられている。見ようと思えばどこでも見られるはずだ。

こんなところで空を見上げていても、何が分かるわけでもあるまい。そう思つての言葉。

アルミリアは小さくかぶりを振る。

「私は……戦いを見ても何も分かりません。セブンスターズの一角を担う家の娘でありながら、何一つ」

それは当然のこと、そう言いかけてカルタは自分に言えたことではないと口を噤む。意地とプライド、危機感と飢餓感に突き動かされ、女だてらに軍勢を率い、敗北した自分には何も言う資格がない、と。

「マツキー……マクギリスが何を考え蜂起したのか。兄が何を思つて姿をくらし、戦うことを選んだのか。それを理解できる知識も経験もないのです。……何も分からないまま、戦いの現状を見るのがつらくて、悲しくて。……こんなところに逃げ出すしか有りませんでした」

そうか、とカルタは理解する。この少女は『どこにも行けない』のだ。もちろん物理的にという意味ではない。アルミリアはボードウイン家……『ギャラルホルンという籠の中しか知らない』。家や組織に守られているのではなく、押し込められている。平穩で、狭い世界しか知らないから、それが崩れ去ればオロオロと途方に暮れるしかなかった。

(まるで……いえ、マクギリスは分かっていたのでしようね)

彼女とマクギリスとの間にあったことをカルタは知らない。だが彼の過去と心情を知れば、予測できることである。

どうせ格好をつけて突き放したりしたのだろうあの男は。まったく、色々引き寄せるくせにアフターケアがなっていない。まあ『昔に比べれば大分ましになった』のだけでも。

内心でマクギリスをこき下ろしつつ、しようがないなど言いたげな風情でカルタは口を開いた。

「……そうね。今の貴女は何の力もない、子供だわ」

「……っ！」

「でも、『これから先がある』」

俯いて唇をかんだアルミリアが、はっと顔を上げる。彼女の見たカルタは優しげな目で、しかしどこか苦いものを噛み潰したかのような表情で語りかける。

「これから先GHは、いえ、世界は激しく揺り動かされるわ。そしてGHは終焉に向かうのでしょうか。……でも貴女はこの先の道を選んでいくことが出来る。自分が何をすべきか、何をしたいのか。貴女自身を考え、新たな未来を作っていくことが」

カルタの言葉で、アルミリアは思い出す。

「……マクギリスは言っていました。ここに私の幸せはない、と。……私に幸せの道標を残す、とも」

「あの男らしい物言いだこと。……多分貴女に対する何らかの方策が残されているのでしょうか。今はそれに甘えておきなさい」

「それは……でも」

「良いのよ。これだけの迷惑をかけてくれたのだからあの男の財産を

使い込むくらいでなければ。貴女にはそのくらいの権利はあってよ」
「良いのでしょうか、そのようなこと」

「かまわないでしょう。そして……」

言いながらカルタは天空の彼方——決戦が行われているだろう方角を見上げる。

「いつか、あの男が袖にしたことを後悔するくらいの良い女になりなさい。きつと貴女にはそれが出来るでしょうから」

「カルタ様……」

カルタにつられるように、アルミリアも空を見上げた。

男をとどめることが出来なかった女二人が見上げる先、彼方の戦いは未だ終結する様子を見せない。

嵐のように襲い来るレギンレイズ・ジュリアの猛攻を、3体のMSはなんとかしのいでいた。

「速い！ しかも攻撃が読みづれえ！」

蛇腹剣を弾き飛ばしつつ、チャドは吐き捨てるように言う。

彼は地球支部時代からマン・ロデイを使っていたが、今は獅電に乗り換えている。それは元ブルワースの面子に使い慣れている機体を回すという意図もあったが、それ以上に獅電の方が『性に合っていた』からだ。

防御よりも回避。操縦の癖からそちらに向きであり、機体は重いより軽い方が良い。事実機種転換のおりマン・ロデイよりも適性が高いと示された。素直にそれに従ったのは確かに当たりではあったが。

「反応はともかく基本性能が違いすぎる！ 凌ぐので手一杯だったの！」

カスタムチューニングを施した機体でも、基本性能の差はどうしようもない。阿頼耶識システムを搭載している分反応速度だけは勝つ

ているが、出力と機動性は天と地ほどの差がある。

「しかもこっちの格闘武器が届かない位置から攻撃してきやがる！銃も当たらない！」

チャドとバディを組んだデルマも苦戦を免れない。

彼の乗るマン・ロディは強襲型に改装してあるが、小回りは獅電に劣る。ジュリアクラスとの高機動戦闘ともなれば、どうしても受け身にならざるを得なかった。

その上で、ジュリアの蛇腹剣に手こずる。変幻自在の軌道をとり、そして間合いも広い。獅電やマン・ロディが持つ格闘用の武器だつて当たればジュリアにダメージを入れられるだろう。しかし絶対的なリーチ差はそれを許さない。ましてや銃撃など論外。FCSも追尾するのが精一杯だ。

「くそ、こっちの装備が生きてりや邪魔することも予測射撃も出来るつてのに！」

格闘用の武器を持たず、マン・ロディ並に機体が重いダンテが一番苦勞していた。

電子装備を捨てればそうでもないのだが、間が悪いことに装備をパージする機能も死んでいる。機体そのものは問題なく動くが、相当のハンデであることは間違いない。

3機は背中越しに固まって防戦一方の様相であった。まともに反撃もおぼつかないが、それでも。

「ここにくたばってたまるかよ。……デルマ、ダンテ。弾は？」

「半分切った。あと10分は保つ」

「こっちもまだ残ってる。当たっても大して効きやしねえけどな」

「黙って飛ばされるよりはマシさ。……それに堪え切りや、チャンスもある」

誰一人、諦めていない。彼らの目は鋭く、虎視眈々と勝機を窺っていた。

対するジュリア——ジュリエッタであるが。

「しぶとい！ ただの電子戦機、ただの雑兵ではないと！」

粘る3機に苛立ちを隠せない。

相手は改装はしてあっても量産機。性能ではこちらと比べものにならない。数の不利など問題にならないはずであった。

だが連携が上手く、致命傷どころかまともなダメージも入れられなかった。互いの死角をカバーし合い、隙を作らない。デッドウェイトとなった電子装備を背負っている獅電ですらたいした損傷を受けていなかった。

技量も性能もこちらが上なのに、倒せるはずなのに。『確実に倒せる相手を選んだはずなのに』！

ジュリエッタには自覚がなかった。功を焦るが故、『自分より確実に弱いと思われる相手』に狙いを定めていたと。そしてそれを仕留められないことが焦りを生み、視界を狭めていると。

だから『それ』に気づくのが遅れた。

レーダーに感づいたときには、すでに懐に飛び込まれている。

「っ!」

ぎやりんっ! と火花が散る。

打ち払われる蛇腹剣。巨大な剛剣を振り抜いたのは重装の騎士を思わせる機体。

「遅くなった。無事か?」

少年たちの眼前に立つのは、最強の中の最弱。石動・カミーチエは微かにだが、しかし確かに不敵に笑んで言う。

「石動三佐!! 指揮を執ってたんじゃない!」

「なに、もう大体戦況は決まる。それにこのまま何もしないのでは、古巣の面子に啜られるのでね」

そうなるとあとまでいぢられると、冗談めかして問いかけてきたチャドに応える。

「ここは私に任せてくれ。君たちは機体の修復と補給を」

「分かった、助かる。……そいつは機動力と得物が面倒だ。気を付けてくれ」

素直に後を託し撤退する3人。戦績にも面子にも拘らない。技能だけでなく精神的にも鍛え上げてくれたようだ。あの人が見いだしてくれただけはあると、石動は感服したような誇らしいような、妙な

気持ちを感じていた。

そこから気持ちを切り替え、眼前を見据える。

「さて、選手交代だ。今しばらく付き合ってもらおうか」

振るわれる大剣は明らかに重く、その機動力は低く見える。しかしジュリエッタは石動の駆るヘルムヴィーゲ・リンカーに脅威を覚えた。

「マクギリス・ファリドの懐刀……ここに来て、これほどの相手っ！」
だが下がれない。ここで下がるといふ選択をジュリエッタはとれない。それほどに追い詰められているという自覚が、彼女にはなかった。

「相打ちでも、貴様を墜とせばっ！」

半ば自暴自棄に近い心境で、ヘルムヴィーゲに挑みかかる。振るった蛇腹剣が、バスターソードに絡みついた。

「……ふっ」

無造作に、いや、『わざと蛇腹剣を絡ませるように』剣を振るう石動。そのまま勢いよく振り払う。

そうなれば結果は当然のことだ。

「なっ！ 引っ張られる!？」

蛇腹剣はジュリアの腕部装甲に直接取り付けられている。咄嗟に離すことが出来ない構造上、一度絡まれば離脱することが難しい。ましてや機体の膂力が同等であれば。

「く、このっ！」

絡め取られた左腕の蛇腹剣を装甲ごとパージ。攻撃力は下がるが、この場合やむを得ないという判断だった。

「なるほど、思い切りは良い」

石動は特に心を動かした様子もなく呟く。さすがにラスタルの子飼いだけあつて技量も判断も悪くない。

しかしそれだけだ。

「機動性だけでは優位とならんよー！」

一度距離を離し、幻惑するような機動でヘルムヴィーゲに再度挑むジュリア。だが。

「私の前に!？」

機動の先、そこに大剣が叩き込まれ回避を余儀なくされる。慌てて機体を翻し、ジュリエッタは驚愕の声を上げる。

「どうやって先に回り込んだ!? 機動性では明らかに差があるというのに!」

パワー重視のセッティングにされたヘルムヴィーゲは、通常のグレイズと大して変わらない機動力しか持たない。それでジュリアの機動を上回ったなど、にわかには信じられなかった。

石動は大したことをしているわけではない。彼がやったのはジュリアの機動を予測し、その行く先に一步踏み込んで攻撃を『差し込む』。それだけだ。

ジュリエッタは技量こそ高いものの、操縦に妙な癖がないし、策を練ったり裏をかこうとしたりしない。故にその行動は読みやすく、後の先を取ることは難しくない。(とは言ってもそういう行動をあつさり出来る石動も大分おかしいのだが)

一癖も二癖も有る者たちと渡り合ってきた石動にとって、さほど苦戦しない相手。ジュリエッタはそう見られていた。

「この程度か。……ラスタル閣下も目が曇ったな、この程度の乗り手に虎の子を預けるとは」

淡々と言葉を放つ石動。それを耳にしたジュリエッタの頭に、かっとな血が上がった。

「私のみならず、ラスタル様をも侮辱するか!」

真つ向から蛇腹剣を振るう。それを難なく弾き飛ばし、飛び込んでくるジュリアに向かってヘルムヴィーゲは頭部の角を突きつけた。

電磁衝角。プラズマをまとったそれは、危ういところですり抜けるジュリアの装甲をかする。途端に警告音が鳴り響いた。

「伝達系に一時的な異常?! 機体の機能を麻痺させるのかあの武器は!」

本来であれば突き刺して内部機構に電子的なダメージを与える武器である。それが外れたにもかかわらず、石動は余裕を崩さない。

「避けたか。そのくらいは出来る」と

「どこまでも、馬鹿にして！」

再びの交錯。しかし完全に冷静さを失ったジュリエッタの攻めは単調なものとなり、石動に軽くあしらわれていた。

「どうした。それでは私の命には届かんで」

「このっ！」

淡々と、余裕を崩さない石動。その態度が益々勘に障る。いきり立つジュリエッタの様子に、全く与しやすすい相手だと石動は鼻を鳴らす。

「強敵に会った途端冷静さを失う。猪と変わらん。喚いているだけで実力差は埋まらない」

そこまで言ってから、思いついたように言葉を続ける。

「そういえば貴官はイオク・クジャンの元にいたことがあったな。彼に学んだか？」

今度こそ、頭が真っ白になるほどに怒りを覚える。はつきり言っているジュリエッタはイオクを見下していた。ラスタルに仕えていて、その才覚の十分の一も学ばない彼に、常々失望を覚えていたと言つてもいい。

『その彼と、同格に見られた』。それは本人が思っている以上に、プライドというか存在価値そのものを揺るがすほどの屈辱と感じられたのだ。

「貴様あああああ!!」

咆吼とともに嵐のような攻撃を繰り出すジュリエッタ。それを冷静に捌きながら、石動は内心でため息をはいた。

(やれやれ、どうにもシンプルに過ぎるな)

この程度の挑発など、ランディや他の標的艦隊面子に比べれば生ぬるいにもほどがある。それで周りが見えなくなり躍起になるとは。技量はともかく精神面での鍛錬が全くなっていなかった。

まあこちらにとつては都合が良い。これで『釘付けに出来る』。曲がりなりにラスタルの子飼。冷静さを取り戻せば『残った仕掛け』に感づくかもしれぬ。邪魔をさせるわけにはいかない。それにもはや状況は自分の手を離れつつある。後は時間を稼げば良い。油断

ではない余裕が石動には有った。
ランデイの元で得た経験と薰陶。それは確かに彼の血肉となっている。良い意味でも悪い意味でも。

月軌道上某所。3機のMSが周囲を索敵しながらゆつくりと進んでいる。

「さて、指示のあったポイントはこのあたりなんだが」

「ごてごてとした装備を身にまとう、無骨なMS『ガンダムアスタロト・リナシメント』。それを駆るのは目つきの鋭い青年『アルジ・ミラージ』。月のアバランチコロニーにある企業タントテンポに属する傭兵であった。」

彼は雇い主であるタントテンポ頭目リアリナに命じられ、『ある施設』を探している。

「このあたりは小惑星を引っ張ってきた施設も多い。そう簡単に見つかるか？」

青と黄色の外装をまとうMS『ガンダムウヴァル・ユハナ』を駆るのは、アルジと同じくタントテンポに雇われた傭兵『サンポ・ハクリ』。元々アルジたちの敵対勢力に従っていたが、紆余曲折の末タントテンポに雇われる形となった。

そして同じ事情で雇われているのもう一人。

「大体座標が分かっているんだから、結構すぐ見つかるんじゃない？」

サンポの妹、『ユハナ・ハクリ』。彼女が駆るのはガラム・ロデイを改装した『ハクリ・ロデイ』。どこかの戦闘で破棄されたものを手に入れた己のものとしたらしい。

そんな三人に下された指示は、『エクスカリバーを擁する衛星基地を特定すること』。イアンナやドルトコロニー群を通してつながりの出来たモニターク商会ごしの依頼である。元々今回の決戦に際して

警戒していたこともあり、その上で位置的に月軌道衛星群に近いので、彼らに頼めば早期に特定できるはずとマクギリスは読んだのだ。だからといってなあと、サンポは少々やる気なさげで。

「んなほいほい見つかるとも……」

「あつた！ 位置的にアレじゃね？」

「……見つかったよ」

ユハナが指し示す先をズーム。確かにそこには小惑星らしきものがあつたが。

「ホントにあれかよ。通信基地に見えるんだが」

複数の大型パラボナアンテナ。周辺に太陽光発電パネルが多数浮かんでいるそれは、確かに一見通信基地のようにも見える。

しかしアルジは眼差しを鋭くしたまま、センサーを働かせ画像を表示する。

「いや……」

温感センサーに捉えられた映像だと、中央のパラボナアンテナが異様に高い温度を示している。そして周囲のパネルも発電用ではあり得ないほどの熱を発していた。

間違いなく中央のものはレーザー発信器であろう。そして周囲のパネルは偽装した放熱板だ。アルジはそう確信を得る。

「ビンゴ。……このデータと座標をモニタークへ送る。GHにバレル前に俺たちも引くぞ」

「了解、座標は受け取った。こっちもすぐに2機の改装を終わらせる。終わり次第すぐに行かせるさ」

ヒミンビョルグとの通信を終え、オルガは改めて指示を出す。

「例のばかでつかいレーザー砲の座標が分かった。昭弘とシノに送ってくれ。……二人の準備は？」

「突貫工事を終えて、今最終調整に入っています。ぶつつけ本番になります……」

「あいつらを信じるさ。やってくれるってな。……二人の準備が終わり次第、もう一度特攻艦が仕掛ける。それを合図に二人を出すぞ。連中の切り札を叩き潰してやる」

その言葉にブリッジは活気づいた。オルガの言葉は強がりではないと、確信があったから。

それを証明する者たちは、最後の準備に追われていた。

「ランチャーの固定はしっかり確認しろ！途中で落つことされる訳にやあいかないんだからな！」

「ブースターの接続ライン、OKです。粒子の供給、電圧も正常」

「想定よりも距離が違う。耐Gシステムは念入りにな」

グシオンリベイク明王丸と流星号。グシオンは以前装備したものと似たような、流星号は変形した下半身を丸々覆う、ブースターユニットを装備していた。本来であれば『アリアンロッド艦隊に突っ込み、スキップジャックの正確な座標を図る』ために用意されたものだが、エクスカリバーを叩くため急遽仕様を変更されていたのだ。

セッティングの変更と同時に、対艦ミサイルランチャーを増設されている。一応レールガンなども備えているが、『予定通りの性能を発揮できるのであればFCSが追いつかずまず当たらない』。あくまで万が一の備えといった意味でしかなかった。

「基本は最初の計画と同じです。ランチャーの発射はオートですけど、対空火砲を回避するのは昭弘さんがやらなきゃなりません」

「こつちの速度に追いつけるとも思えないがな。まあやってみせるさ」

仕様の変更点や注意事項についてティンから説明を受ける昭弘。同じようにシノもヤマギに説明を受けていた。

「向こうにMSがいても絶対交戦しないで。帰りは軌道の関係上、10分はかかるから」

「おいおい、それじゃ帰ってきたら全部終わっちゃうよ」

「反撃を受けないようにするにはそれしかないんだから仕方ないで

しよ。それに無茶な軌道を取ったらどこ吹っ飛んでいくか分からないんだし」

一発勝負、とは行かないまでもそうそう何度も連続して行える手段ではないし、危険度もそれなりにある。だがこの二人ならやり遂げられると皆信じていた。

「よし全部のチェッククリアだ！二人は乗ってくれ、カタパルトに上げるぞー！」

雪之丞ががり立て、異形と化した2機はカタパルトへと向かう。

用意が調ったと連絡を受けたライザは頷き、指示を出した。

「特攻艦を再起動させろ！30秒の時間差をつけてぶつける。向この目をこちらに引きつけるんだ」

無人の艦が再び動き出す。今度は2隻、時間差をつけて、エクスカリバーの連射能力を測ろうというのか。ラスタルはそう見て取った。

「出力を50%まで落とし、可能な限り長時間照射せよ」

「120秒の連続照射が可能です。完全冷却に600秒ほどかかりませんが」

「クールダウンが完全でなくともかまわん。出力30%で120秒、いや90秒以内に次を打てるように用意させろ。この戦が終わるまで保てばいい」

「はっ！」

ここは無茶を押し通すところだ。それをどこまで押し通し、どこまで押さえられるか。ギリギリの戦いを彼も強いられている。

その彼を、若き戦士たちは上回る。

聖剣の閃光が放たれた。それは先に突出した艦を飲み込み、そして続いてきた艦も同様に焼き尽くした。

「照射時間が長い！だが次まで幾分余裕があるはずだ。オルガ団長！」

「昭弘、シノ、行け！」

ホタルビのカタパルトから、グシオンと流星号が射出される。2機は艦隊からある程度の距離まで慣性で移動。十分に離れたと判断して次の行動に移る。

「リミッター……」

「……解除！」

改良阿頼耶識を搭載した2機は、パイロットの負担なしに任意でリアクターのリミッターを解除することが可能となった。反応速度は三日月のバルバトスに劣るが、出力と粒子放出量は同等。そして新たに組み上げられたブースターユニットは、大型のエイハブスラスタをメインにしたものだ。ツインリアクターのフルパワーによって運用されるそれがどれほどの加速力を持つか、言うまでもなからう。

二人の意思に応え、それぞれのリアクターが獰猛に唸りを上げる。そこから発生する電力とエイハブ粒子はメインスラスタに注ぎ込まれていく。

「出力最大……オーバードライブ！」

「端っから全開で行くぜエー！」

轟、とスラスタが吠え、2機は一気に加速を始める。

「ぐうっ!？」

「んぎゃ……」

途端、慣性制御と耐Gスーツ重ねてなお、すさまじい重圧が二人にのしかかった。何の用意もなければ即座に骨が砕けてもおかしくないほどの加速。それをもって2機は一直線に彼方へと向かう。

エクスカリバーが放たれても当たらないコース。通常よりも少し遠回りになるが、専用ブースターの加速はそれを補って有り余る。あっという間にモニターが目標を捉えた。

「見えた、あれだ」

「ランチャーの作動範囲ぎりぎりをかすめる！ ドジンじゃねーぞ昭弘！」

「そっちなー！」

押っ取り刀で目標の基地から対空砲火が放たれる。しかし常識外の速度はそれをかすらせもしない。そしてその速度からすると0.01度も角度が狂えば基地にぶち当たるぎりぎりの位置を2機はすり抜けようとした。

レーザー測定式であるミサイルランチャーの自動発射機構が作動。

ロックが外され対艦ミサイルが矢のごとく放たれる。
それは狙い違わず、エクスカリバーの本体周辺に炸裂した。

※今回のえぬじい

「……やっぱりこの眉が悪かったのかしら。だったら隈取りとか？」
「そういうとこだぞ」

世間知らずでもそれくらいのはツツコミは入れられるアルミア
だった。

52 まず桂馬。それともナイトかな？

「エクスカリバーが攻撃を受けただど!? 被害は!？」

エクスカリバーに直接攻撃を受けたという知らせを聞いたラスタルは声を荒げる。

さしものの彼もこれは予想外であった。戦闘の混乱の中、艦隊から離れてエクスカリバー施設を強襲した2機の内容は感知できなかったのだ。想定を遙かに超える速度で隠蔽していたはずの施設を奇襲するなど予測は難しかろう。ミスと言うよりは相手が想像を上回ったのだ。

「正体不明の襲撃者により施設に攻撃が加えられた模様です！ 損害は……損害は軽微！ 軽微です！」

緊迫したブリッジの空気がわずかに和らいだ。内心で安堵のため息をはいたラスタルは、部下の不安を払拭することもかねて新たな命を下す。

「よし、充填を続けよ。いつでも撃てる態勢に……」

「し、司令、それが」

ラスタルの言葉を遮った通信士の顔が青ざめている。

通信の向こう、エクスカリバーを擁する衛星基地は今、修羅場の真っ最中であった。

通信機に向かってスタッフは告げる。

「確かに損傷は軽微ですが、その損傷がどれほどの影響を与えるかがまだ判別できません。完全な復旧には時間をいただくしか」

エクスカリバーは頑強な施設である。が、同時に繊細な代物でもあった。先にも言ったが0・1度でも角度が違えばどこに飛んでいくか分からない。わずかな損傷でも、それが甚大な影響を与えることだって考えられるのだ。ゆえにすぐさま使うというわけにはいかなかった。

その上『事実上試射ができない』という問題もある。どこに飛んで

いくか分からないものをそう簡単に試し撃ちできるものか。下手をすればスキップジャックに直撃なんて事もありうる。

「各部をチェックし直してシミュレーションしなければ正確な射撃は不可能です。下手をすれば核動力の暴走などと言うこともあり得ますので」

エクスカリバーを管理する者たちは冷静であった。それは危険な施設を運用する者たちとしては適切なのだろうか、前線で戦っている者たちには何の救いにもならない。

ラスタルは再びこみ上げてきた焦燥を押し殺して、新たに命じる。

「……ならば一刻も早く復旧するよう努めよ。基幹にダメージを食らっていないのであれば、照射は可能なはずだ。持ちこたえれば必ず挽回の目はある」

部下たちはその言葉を信じた。『信じるしかなかった』。正義を背負い、苦難を乗り越えてきた自分たちが敗北するはずはないと。

その思いに応える義務がある、と思ったかどうかは分からないが、ラスタルは背筋を伸ばしたまま、次なる命を下した。

「艦隊の前衛を進める。敵の攻勢を押しとどめよ」

さすがにブリッジがざわめいた。艦隊を前進させると言うことはつまり、『味方がエクスカリバーの射撃範囲に入る』ということである。まさか味方を犠牲にして……などという考えが頭をよぎったのは一人や二人ではない。

それをなだめるかのように、ラスタルは続けた。

「エクスカリバーが復旧するまでだ。恐らく奴らは行った攻撃が有効かどうかまだ分かるまい。こちらが前に出ることによつて攻撃が成功したと思わせ、エクスカリバーが復旧したところで前線を下げ奴らを射撃範囲に引き込む」

おお、と先ほどとは違った意味でブリッジがざわついた。さすがはラスタル様、この状況すら利用してみせるかと隊員たちは活気を取り戻す。

士気を上げることに成功したとみたラスタルは内心で安堵する。まるっきりの嘘ではないが、いざというときは味方を犠牲にすること

を躊躇うつもりはなかった。

勝たなければならぬ。勝ちさえすれば何とでもなる。ラスタルの視野は狭められていく。

詰め将棋のように追い込まれていく自分を、ラスタルは認められなかった。

味方の艦隊が前進するのを見て、ブルツクは安堵の息を吐いた。

「やつと攻め込む気になったのかよ。あんなのでかぶつ持つておいて悠長が過ぎるぜ」

ブルツクはエクスカリバー周りの事情など何も知らないし聞かされていない。元が使い捨てのデコイと見られていたのだ。最初の命令以降「現状を維持せよ」という指示しか受けておらず、サンドバルの言葉にすぎるしかない状況だった。

それがここに来てやつと味方が動き出した。先の訳の分からない攻撃——エクスカリバーの威力に戦意を向上させたのだろう。現金なことだとブルツクは勝手に結論づける。

ともかくこれで生き延びる目が出てきた。便乗する形で手柄の一つもとれば後のためにもなると、捕らぬ狸のなんとやらで算段。先ほどまでの怯え方が嘘のように調子づく。

「よし、敵の防御が厚いところに適当に撃ち込め。MS部隊はどうなっている」

「大半が優勢になったとみて戻ってきたぜボス……艦長。反撃に出てる」

「エイローは？」

「例の番犬と交戦中だ。敵艦隊の方でやらかしてる」

「そうか……このままヤツが番犬を討ち取ってくれば……」

皮算用は皮算用でしかない。ブルツクは薄氷の下に地獄が待って

いることを忘れていた。

2機のMSが高速で切り結ぶ。

速度ではレギンレイズハイムバー。機動性ではバルバトス。総合力では今のところ互角である。

しかし。

「こいつ……っ！」

三日月はわずかながらも焦りのような気配を見せる。

現在2機が切り結んでいるのは、反逆軍艦隊の間近。サンドバルは反逆軍を巻き込もうとし、三日月はそれを妨げる形だ。まんまと策に乗せられたわけである。

「味方を見捨てない。感動的だ。だが無意味だ！」

挑発の言葉を口にしながら一撃を入れ、離脱。これを繰り返す。三日月はそれを受けざるを得ない。

抜かれれば、艦隊に被害が及ぶのは目に見えている。以前の三日月であれば鉄華団の仲間以外は放置していたかもしれないが、彼も成長している。反逆軍の戦力低下は自分たちの首を絞めるようなことになる、そういう戦術的な見方をする事が出来た。

故に手こずる。背中に注意を払いながら圧倒できるような、生やさしい相手ではないのだから。

サンドバルはほくそ笑む。このまま押し切れるとは思えないが、最低でもこの強敵を押さえ込んでおくことは出来る。そして仲間を気にし続けるようであれば、必ず隙が生まれるだろう。馬鹿なことだ。情や義理などに縛られるから、全力を出せないでいる。それは弱さだと、サンドバルは思っていた。

人は結局のところ一人だ。他者は利用するべきもので、情など信用できるものではない。あくまで損得勘定の元に、あるいは飴と鞭を使

い分け、あるいは媚びへつらい、己のためだけに使いこなす。そうやって生き延びてきた。そしてこの戦いも生き延びて、のし上がる。目の前の敵はそのための踏み台でしかない。そう自分に言い聞かせている。

だが、『世の中そんなに上手くないかない』。

突然の砲撃。それがハイムバーの機動を揺るがす。

「なに!? 近接信管!」

次々と叩き込まれる弾雨に、一端距離を取らざるを得なくなる。その攻撃を放ったのは。

「こちらクロウ隊、可能な限り援護する! 艦隊の方は任せてもらおう!」

コーリスを筆頭とするクロウ隊だ。ハイムバーの機動域に対して艦隊を護るように布陣を敷き、ありつたけの弾丸をばらまいている。

「出し惜しみなく弾幕を張れ! ヤツを近づけるな!」

倒すことなど最初から念頭になく、艦隊を防衛し強敵を寄せ付けなためための戦い。功に焦るものには出来ない、己の役割を果たさんとする男の戦い方だった。

それを理解した三日月は微笑を浮かべる。味方とも仲間とも言えない間柄。この戦いの後何かあれば敵対するかもしれない連中だ。だがそれを見据え戦力を温存するような真似をせず、『とりあえずの味方』の盾となる。なかなか出来る真似ではないと、素直に感服したのだ。

ならば――

「助かる、任せるよ。……だからこいつは俺が仕留める」

応えよう。ただ仲間のためだけではなく、もう一つ『何か』を背負った三日月の睨が鋭さを増す。

気配が変わった。援護を受け、攻め手に転じると判断したサンドバルは、ついに『出し惜しみをやめる』。

「終わるものかよ、終わらせるものかよ! 貴様らはまとめて俺の踏み台だ! 蹴散らしてくれ!」

吠えながら無針注射器を取り出し首筋に押し当てて。躊躇いなくトリガーを引けば、すぐさま効果が現れた。

「お、あ……あ」

見開かれる目は瞳孔までもが赤く充血しているように見える。レッドアイの最上级品『ブラッディ・アイ』。ラスタルの伝で手に入れたそれは、期待通りかそれ以上の効果をサンドバルにもたらす。

「く、おおおおお！　これで俺は、貴様を、駆逐する！」

レッドアイよりもさらなる反応速度と動体視力がもたらされるが、同時に体に相当の負担がかかり精神にも変調を来す、諸刃の剣。禁断の刃を抜いたサンドバルは、後先かまわずに襲いかかろうとする。

同時に、三日月も。

「阿頼耶識システム、フルコンタクト。全リミッター解除。……往こうか、バルバトス」

全力で、迎え撃つ。目の前の相手は死んで良い奴じゃない。『絶対に倒さなければならぬ敵だ』。ここで勝負を決める。

白き悪魔の両眼が、力強く紅い光を放った。

活気づいたエイロー隊は、反撃に移る。しかしながら反乱軍艦隊の防御は厚く、なかなか出し抜くことが出来なかった。

鉄華団とスカーフェイス。阿頼耶識を備え高い練度を誇る彼らが中心となって迎撃態勢を整えていた。基本的な性能が同等であれば、後は数がものを言う。勢いに乗ったからと言ってそれはたやすく覆されない。

「とは言っても、こっちもなかなか攻め込めないんだけど、なっ！」

敵のレギンレイズに一発入れながら、ライドは苦笑する。

敵も然る者。生き馬の目を抜く裏社会で生き抜き阿頼耶識の適性を勝ち取ったのは伊達ではない。協調性こそなかったが個人の技量

では決して引けを取るものではなかった。

実際今ライドが殴りつけた相手も、上手いこと攻撃を受け流してダメージを最小限に抑えていた。守れはするが攻め込めない。千日手と言うほどでもないが手こずっているのは間違いなかった。

それに相手にも頭一つ抜け出た技量を持つものだっている。

「こいつら、強えエー！」

「俺ら以上に連携が上手い！」

エンビとエルガーの二人は2機のレギンレイズを相手取っている。色違いのその2機は、双子のお株を取るようなコンビネーションを見せつけ果敢な攻めを行っている。負ける、とは言わないが機体の性能差もあり押され気味になっているのが現状だ。

二人だつて準エース級だ。阿頼耶識をつけただけの『インスタント』に後れを取るはずはない。当然ながら相手は――

「こいつらもしぶといー！」

「正規兵よりも練度があるとはな」

サンドバルの副官を務めている双子だつた。頭目であつたサンドバルの影に隠れていたが、彼らも海千山千の海賊を束ねていた男の懐刀。相当の技量を持つ。

偶然にも同じ双子を相手取っているとは互いに気づかず鎬を削る。エイロー隊は突出している(させられた)フェアライトを中核に陣形を取っており、全体的に見れば攻勢に出た他の艦隊の先頭となって反乱軍艦隊に楔を打ち込んだような形であつた。結果的にそうなっているというだけだが、反乱軍側からすればこの状態に持つて行くために踏みとどまつたようにも見える。

ここでフェアライトを沈めることが出来れば流れを変えるきっかけにもなるが、エイロー隊の奮戦もあつてなかなか難しい。勢いを突き崩す何かがあれば……とライドが思案していたそのとき。

「悪い遅れた！」

大口径の砲火が降り注ぐ。両手に滑空砲を備えた昌弘の参式だ。エンビたちと同時に補給を受けていたのだが、少し手間取っていたのだ。

昌弘は援護射撃を行いながら、皆に言う。

「遅れた分の仕事はするぜ。ビトーが『いいモン』借りてきた！」

昌弘は長物の補給に手間取られ、そしてビトーは『あるもの』を引張り出すのに手間取られた。それは。

「バランス無茶苦茶じゃねえかこれ！ あのおっさんよく使いこなせたな!？」

全速力で戦場に駆けつけたビトーのシュヴァルベ・グレイズが携えているのは、以前ランデイが使用したでっち上げランス。扱いの難しいそれをもって、彼は敵艦に挑むつもりだった。

それを確認したライドはヒュウ、と口笛を鳴らす。

「あれを使うかよ。良い度胸してる。……こちら筋肉……鉄華団2番隊ライド！ ウチのが一人敵艦に突っ込む！ いまやり合ってる相手を押さえてくれ！ 手の空いてるのは援護を！」

付近で戦っている僚機に全域で告げた。三日月をはじめとするエース陣は今ここにいない。しかし年少組の取りまとめ役の一人であった彼は、地道に指揮の才能を得つつあった。彼らがいなければ代わりに指示を出すこともする。

そして仲間もそれに応えられるだけの柔軟性があった。

「いかせる……ぐうっ!？」

「こいつら、邪魔を！」

「横やりは入れさせねえよ！」

「勝てないかもしれないが、負けもしねえぜ！」

双子のレギンレイズを妨害するエンビたちを筆頭に、攻勢に移る鉄華団と反逆軍。その合間を縫って蒼いシュヴァルベ・グレイズが駆ける。

「道は空ける！ 往け、ビトー！」

蒼き機体が取るのであろう予想進路上へ矢継ぎ早に砲弾をぶちまける昌弘。応えようとするビトーはしかし、苦心していた。

「重量バランスが、まっすぐ飛ばねエ！」

本来ラーズグリーズが使用することを前提としたでっち上げランスは、シュヴァルベ・グレイズでは持て余しそうになる。何しろ機体

出力も推進力も違いすぎた。このままでは有効な打撃を与えることが出来るかどうか。

だが、さすがというかランディ直々に機体を預けられたビトーは、とっさの機転を利かせた。

『こいつが重くて振り回されるってんなら……』『こいつを軸にする！』

機体ではなくランスを重心の真ん中に置いた機動に切り替えた。同時に8割ほどに落としていた機体の反応を全開に。さすがピンポールのような無茶苦茶な機動が生じる。

『うおっ！ とっ！ こなくぞー！』

とんでもない方向に飛んでいこうとする機体を強引にねじ伏せる。無茶をやった甲斐あって、敵機も艦の砲台も反応が追いつかない。阿頼耶識を使つてなおレッドアウトした視界の中、収納されたブリッジ上の装甲を捉えた。

『いつ、けえええええ！』

フルスロットル。肺の中の空気がすべて押し出されるような感覚。歯を食いしばり、機体のブレを押さえ込んで、螺旋を描きつつ突貫。

それはフェアラートにも捕捉されるが。

『艦の直上！ 1機突っ込んでくる！』

『対空砲火は何をしてる！ 早くヤツを……』

間に合わない。

ブルックが最後に見た光景は、ブリッジの天井を貫き己に迫る鋭い鉄塊の姿だった。

分厚いナノラミネート装甲を貫き深々と突き刺さったランスの引き金を引く。放たれたサーモバリック弾は内部を引き裂き炸裂。シヴアルベ・グレイズが離脱すると同時にフェアラート中枢部分で大規模な爆発が発生、轟沈する。

『してやった』ぜ！ ざまあ見さらせ！』

少しクラクラする意識を気力で支えつつ、ビトーは中指をおっ立てた。

彼は気づいていなかったが、かつての仲間の仇——ブルックを討ち

取り座艦を沈めるといふ大金星を見事果たしたのである。

その事実はエイロー隊に衝撃をもたらす。

「ば、かな……ブルックの大將が……」

「戦艦を、一撃だとお!？」

エイロー隊の面子は、イオクの艦隊が壊滅した顛末を知らない。ゆえにブリッジを収納した戦艦がただの一撃で沈んだという事実には、驚愕と動揺を隠せないでいた。自然とその動きが鈍り出す。

それに活を入れようとしたか、双子の副官が声を張り上げた。

「落ち着け！ まだだ、まだ終わっちゃいない！」

「俺たちには頭目……隊長が、サンドバルがいる！」

エンビとエルガーの攻撃を弾き飛ばしながら吠える彼ら。その言葉にエイロー隊は活気を取り戻していく。

「そうだ、サンドバルなら」

「あの頭目なら、やってくれる！」

一度敗北したとは言え、エイロー隊の中では未だサンドバルの雷名は陰りを見せない。凶抜けた実力とカリスマは未だ健在であり、かてて加えて阿頼耶識を備えた今の彼はパイロットとして以前より遙かな高みにいる。

であるならば、彼が再び敗北することなどあり得ない。その信仰にも似た信頼が、活力と気力を取り戻させていた。

これならまだいける。双子はそう確信を得る。母艦は落とされたが勢いはまだ死んでいない。この流れに乗れば勝てる戦いだという手応えがあった。

二人はサブモニターに目を走らせる。そこには敵を圧倒するサンドバルの姿があるはずだ。

映像を認識し理解した二人の目が見開かれる。

「なんだ……」

フフフフフフ……。

「なんなんだ……」

フフフフフフフフ……。

「なんなんだこいつはあああああ!!」

文字通り血走った目でサンドバルは叫び声を上げる。

技量では負けていない。反応速度と動体視力でもだ。機体だって最新型、性能では劣らないと思っていた。

だのに何で『追いつけない』!?

確かに目と体の反応は追いついている。だが機体が間に合わない。いや、『己の行動、機体の機動の先に割り込まれている』ように感じた。自分の先読みのさらに先を行っているとしても言うのか。

それに。

フフフフフフフフフフフフ!

「ざつきからなんなんだってんだ、この『音』はあ!!」

コクピットに響く音。明らかに自機のものでないそれは、バルバトスが全力機動を始めたときから響きだした。それはまるで咆吼のようにも聞こえる。

宇宙空間で音が伝わるはずがない。バルバトスのエイハブウェーブがかなりの変化を見せているが、それと関係があるのかもしれない。しかしそれを考察している余裕など有るはずもなく。

「このおー」

半月刀を振るう。今までなら相手を翻弄してきたはずの太刀筋。それはたやすく弾き飛ばされ、あるいは回避された。その原因はバルバトスの機動が『先ほどと全く違う』からだ。

全開出力で稼働している機体各所のイナーシャコントロール。それを十全に使いこなせれば、『足場なしでランデイのけたぐり機動を再現できる』。つまり全く予測のつかない軌道偏向が可能となると言うことだ。

事実バルバトスの機動は、すでに常人では追い切れない。エイハブスラスターの推進炎と機体の残像だけがかろうじて確認できる程度

だ。動体視力と反応速度が桁違いに向上しているサンドバルだからこそ目で追える。しかしいくら高性能でも通常の機体の延長線上の機動しか出来ないレギンレイズ・ハイムバーでは、追従するのは無理がありすぎた。

まるで宇宙（そら）に吹き荒れる嵐。濁流の中に飲み込まれた木の葉のように、サンドバルは弄ばれる。

「あんな、でかい得物でっ！」

MS1機分はあろうかという巨大な対艦ソードメイスも重荷にはなっていない。そしてそれが十全に振り回せると言うことは。

「がつ!？」

予想外の方向から反応できない勢いで一撃。左肩のシールドユニットが歪む。ほとんど勘だけで取った回避行動で致命傷こそ逃れたものの、攻撃そのものは避けられない。

そして次々と矢継ぎ早に攻撃が叩き込まれる。防戦一辺倒とはいえ、一撃でMSを粉碎するソードメイスの打撃を緩和しているだけでもとんでもない技量であるが、反撃できないのであればいずれ墜とされる。状況は手詰まりに近い。

しかしながら、サンドバルは諦めが悪かった。絶え間ない衝撃に揺るがされる中、その血走った目は鋭く機会を窺う。

「ヤツとて、無敵でも不死身でもない。必ず隙が出来る」

どれだけ集中していても、意識の間隙というものは必ず生じる。それこそが勝機だと耐え凌ぐ。

そして、機会は訪れた。

幾度めかの打ち込み。それを行ったバルバトスがソードメイスを持ち替えようとする。それは恐らく、まともな有効打が撃ち込めないと見てやり方を変えるためなのだろうと踏む。

持ち手がわずかに緩もうとするその瞬間。それこそが待ち望んでいた好機であった。

「おおっ！」

裂帛の気合いとともに全力で打ち込む。狙いはソードメイスの柄。わずかに力が緩んだそこを強打すれば。

がぎい、と火花が散る。狙い変わらず、バルバトスはソードメイスを手放した。そしてそれだけでは終わらせない。

「次の得物など用意させるものかよー！」

きしむ機体を無理矢理駆動させ全力機動。バルバトスが他の武器を準備する前に攻勢に出れば優位をとれると勢い込んだ。

バルバトスのお株を奪うような変速機動で迫るハイムバー。その腕が半月刀を振り上げ――

『何かに絡め取られた』。

「なにっ!？」

動きを阻害され驚愕するサンドバル。ハイムバーの右腕に絡みついたのは、バルバトスの背後から伸ばされたワイヤー――テイルブレード。そう、サンドバルが三日月を出し抜こうとしたように。

「こつちもそれくらい考えてるさ」

三日月もまた、同じ事を考えていた。確実にサンドバルを討ち果たすために。

間髪入れず、バルバトス左腕に備えられた200mm迫撃砲が吠える。装填された炸裂弾は有効なダメージこそ与えられなかったが、ハイムバーの体勢を崩すには十分。

「お、おのれエー！ 地獄の番犬つつつつ!!」

怨嗟の音が響く中、シースメイスから大太刀が引き抜かれる。

銘打たれた名の通り、月光に輝く牙を思わせるそれは、目にもとまらぬ速度で振るわれた。

一閃。太刀を振り抜きハイムバーの背後に抜けるバルバトス。

振り抜いたまま残心。バルバトスの周囲を推進剤の残滓が花吹雪のように舞う。

そして、レギンレイズ・ハイムバーは炎に包まれる。機体に残った推進剤が発火したのだ。

一太刀でコクピットごと斬り捨てられたサンドバルは即死であっただろう。爆発四散する機体を振り返ったバルバトスの両目が、通常の色に戻る。撃破を確認した三日月は、ふう、と息を吐いた。

「分かってたけど、疲れるな、これ」

強敵を討ち取った事に何の感慨も抱かず、三日月は次の敵を探すべく機体を翻した。

戦いはまだ終わらない。倒した敵に意識を割っている暇など、今はないのだから。

サンドバルが討たれた。その事実は今度こそエイロー隊に絶望をもたらした。

「ば、かな……頭目が……」

「嘘だろ……」

唾然とするもの。

「うわああああ！ もうおしまいだあああ！」

「冗談じゃねえ、頭目倒すような連中とこれ以上やり合えるかってんだ！」

我先に逃げ出すもの。

そういつた絶望に支配され我を見失ったものから次々と撃破されていく。

本来エイロー隊は犯罪者の寄せ集めだ。ラストルから提示された餌と、サンドバルの統率力によってかろうじて部隊として成り立っていた。母艦を沈められ、その上彼が討たれたとなれば、当然のように瓦解する。

それでもなお戦おうとするのはごく少数で。

「おまえら！ 下がるな！ 下がればやられるぞ！」

「ここは押し込むんだ！ 後続が来れば立て直せる！」

サンドバルが討たれたことに動揺しているのは双子も同じだ。だが逃げ出せば余計に命が危ないと、それくらいの判断力は残っている。

ゆえに彼らは攻め込むことで打開を試みた。しかしすでに流れは

反逆軍にあり、そして彼らだけで状況が変えられるほどの力はない。

「隙あり！ もらった！」

「ぐあつ！」

集中力が欠けていた双子の片割れに、エンビの獅電試験タイプが組み付く。

「貴様！ この……」

「てめえはこつちだよ！」

もう一方にはエルガーのマン・ロデイが打ちかかった。引き剥がされれば双子得意の連携はとれなくなる。そして、数の優位はすでに鉄華団のほうにあった。

「助太刀するぜエンビ！」

援軍に雷電号が現れ。

「こつちはこいつだ！ たつぷりくらいな！」

昌弘の駆る参式が極至近距離で300mmをぶつ放す。

抵抗はしばらく続いたが、程なくして双子の機体は沈む。

それはエイロー隊の壊滅を意味していた。

「ふえ、フェアラート轟沈！ エイロー隊も壊滅状態です！」

オペレーターが悲鳴のような声で報告する。その言葉に、ぐ、と歯を食いしばって声高らかに告げる。

「狼狽えるな！ 彼らは劣勢の中、敵軍を押しとどめるといふ大任を果たした！ その彼らの意思を無駄にするな！ 彼らの働きによって敵軍も幾ばくか消耗している。期を逃さずに押し込め！」

下がりかけた士気が持ち直す。ラストル自身もお為ごかしだと分かっているが、ここで士気を下げるわけにはいかない。

（まだだ。彼らは元々捨て駒として考えていた。これは予定通りのことに過ぎない。戦力はまだこちらが上。それにエクスカリバーもあ

る。この程度で勝利は揺るがん！)

言い訳するような思考。己が焦っていると薄々理解しているラス
タルだが、まだ勝負は決まっていないと自分に言い聞かす。
たしかに戦力そのものは未だ差が埋まってははいない。

『それがひっくり返る要素』は、まだ表に姿を現してはいなかった。

※今回のえぬじい

「ちよつと!?! アタシら最後まで名前でなかったわよ!?!」

「どういうことなのよ責任者出てきなさいよ!」

あの、なんでお●ぎとピ●コの真似……………?

「いやせめてキャラ立てておこうかと思って……………」

53・王手を打つか、打たれるか

フェアラートの轟沈とエイロー隊の壊滅。アリアンロッドの最先鋒を潰した形となったその結果、反逆軍優勢へと流れが変わって行く。

エイロー隊と交戦していた鉄華団とスカーフェイスがフリーになった。彼らが空いた穴から進撃を開始する。

同時に、この老人が動く。

「ふむ、好機だが……あのレーザー砲が沈黙したと見せかけて、こちらを引き込むぐらいはやるか。……各MS部隊に通達。攻勢に出た坊主どものフォローに回れ。ただし深追いをさせるな。件のレーザー砲の照射範囲に留意し、敵部隊が不自然な動きを見せたら迷わず退かせろ」

ケストレル艦長アンダーセン。彼は配下のMS部隊に積極的な行動を控えさせていた。

彼ら標的艦隊の面子が全力を出せば、ラスタルの首まで届くかもしれない。しかし今の彼らはあくまで傭兵であり援軍。反乱軍本体を差し置いて手柄を得るような真似をする気もなく、またそれが自分たちの役目ではないと自覚している。

ゆえに配下にはアリアンロッド戦力の『削り取り』を徹底させていた。目に見える戦力低下ではなく、熟練したパイロットたちを消耗させる戦術。パイロットの育成には当然ながら手間と金がかかる。仮にアリアンロッドが勝利を収めたとしても戦力の補充に手間取るくらいに戦力を削っておけば、後々『やりやすく』なるだろう。色々と。そう言ったわけで、地味だが後になって効いてくるボディープローのような戦いを続けている。そして流れは変わってきたが、それに乘じて積極的な攻めを行うつもりなどない。

かつて出自を理由に疎まれ、閑職に押し込まれて才能を腐らせていたアンダーセンは、本来ラスタルに匹敵するであろう戦術家としての才能を持っていた。ランディとの出会いによってその才能は開花し

だが、いかんせん遅咲きに過ぎたと自己判断している。

故に彼は自己の判断を過信しない。有利な状況こそ落とし穴があるものだと自戒していた。戦場の動きには呼応するが、流れに乗って果敢に攻め入るような真似は『できない』。

だが彼のような人間こそ戦場には必要だ。自分を抑え、状況を見極め、いつでも味方の窮地をフォローできるよう備えられる。そのような人物だからこそマクギリスは彼を指揮官として招聘したのだ。

老獪なる軍人は確かに遅咲きだろう。何しろ表向きには隠居となつたところを引つ張り出されたのだから。

しかしその才は、確かに花開いている。

無数の剣戟が火花を散らす。

方や二つのランスを豪快に振り回す紫の機体。

方や二本の剣を巧みに操る純白の機体。

大重量の槍を木の棒のように振り回すキマリスも大分おかしいが、それと互角に切り結び一歩も退かないバエルもおかしい。双方ともに機体も乗り手も異常な力を見せていた。

「オリジナルに近い阿頼耶識！ やはりデッドコピーとは違うと言うことか！」

「システム的なことを言えば、そちらの方が優れているだろうな。惜しむらくは真似をしたものではないと言うことだ」

激情をたたきつけるガエリオ。飄々といつても良いほどに余裕を見せるマクギリス。

技量ではマクギリスが勝っているが、阿頼耶識Type Eによってその差は埋められていた。それはシステムの的にキマリスの方が上回っているという証明だ。

だというのに、いや『だからこそ』マクギリスは笑わずにはいられ

ない。

「しかしやつとこの領域とはね。外法を行うのであれば、余裕でこちらを上回るくらいはしてほしかったものだ」

「外法を良しとするか！ 手段を選ばぬ貴様らしい物言いだ！」

火花を散らしてランスを退けながら、マクギリスはかぶりを振る。

「違うな、ガエリオ。そういうことではない」

「なに？」

「分からないか？ ……300年、300年だ。厄祭戦から300年で、やつとオリジナルの阿頼耶識に等しいシステムが出来た」

戸惑いが、わずかに動きを鈍らせる。だがマクギリスはそこで追撃するような真似はしなかった。ただ語り続けていく。

「これまでの歴史であれば、300年もあれば様々な新しい技術が生まれていただろう。だが現実には、やつとかつての技術に追いついただけだ。それも外法の手段を使った焼き直しにすぎない」

誰もが気づかなかつた。いや、気づいていても問題視していなかった。そのような疑問をマクギリスは語る。

「阿頼耶識だけではない。この300年、『技術的にはほとんど進歩していない』。厄祭戦時のフォーマットがそのまま使用され、当時から放置してあつたMSが少し手を入れた程度で現役として使用可能になるありさまだ。他にも医療、農業、工業……何一つとして発展を見せていない。それがどういふことか。なぜなのか」

言葉とともに刃を突きつける。

「すべてはギャラルホルンに原因がある。諍いの芽を潰し、表向きの平穏を維持してきた結果、『人類が発展する余地を根こそぎ奪つた』。向上心、闘争力。それらは確かに争いの種になるだろうが、同時に進化の原動力ともなる。それらを否定し仮初めの平和を築き上げた結果がこれだ。秩序を維持するための暴力装置が、人々の歩みを止める枷となったのだよ」

「それは一方的なものの見方だ！ 厄祭戦の事実を知り、その技術が脅威であると理解すれば、誰でも慎重になる！」

その反論はGHを擁護したと言うことではなく、マクギリスに反発

したかったからと言う気持ちが多かったのだろう。それを分かっているのかマクギリスは冷静に続けた。

「ならばなぜ、『阿頼耶識に取って代わる技術が生まれなかった』？ 危険であり、禁忌であるとするならば、それより安全で、便利で、使い勝手の良い技術を生み出そうと考えるものがいてもおかしくはないだろう」

現実的には禁忌とされていても、『阿頼耶識システムの使用を禁ずる法はない』。もちろん法整備したところで使う輩は出てくるが、それにしたところで取り締まりがあるのとないのとは流布の規模が違う。ではそれをしなかったのはなぜなのか。

「思うに『阿頼耶識であればGHが対処できるから』、だろうな。禁忌としながらも研究を続け、同時にデッドコピーが流通するのを留めない。安易に誰でも手が出せるのであれば、多くはそれ以上の性能追求などしないし、その上で自分たちは優位を保てる。GHが最も恐れるのは、阿頼耶識を超える技術——『自分たちが対処できない技術が現れること』に他ならない」

これはマクギリスの私見に過ぎない。だがあながち外れてもいないだろうという思いがあった。

現在の科学者、技術者の中には『突出した技術を研究、開発しているものはいない』。独自にMSを開発していたティワズですらも、既存の技術を超えるものを生み出してはいないのだ。(バルバトスの阿頼耶識は偶然の産物に過ぎない)

阿頼耶識を含めた過去の技術を禁忌とし、発展を妨げてきたのはGHの働きによるものだ。その上でエイハブリアクター——『現在のエネルギーインフラの根幹をなす技術』を独占して他の干渉を認めない。技術が停滞する土壌はこうして作られ、そして今日に至るまで押さえ込まれ続けた。あるいは裏で新たな技術が生まれようとするのを封殺してきたのかもしれない。現在のGHのあり方からすればあり得ることだとマクギリスは考える。

「進化が止まり停滞を続ければ、その先に待つのは緩やかな衰退だ。今のGHが行っているのは、『遠回りな人類の自殺行為』と言ってもい

い」

「……そうか。マクギリス、おまえは秘匿された技術を公開し、経済圏同士の競争心を煽ることで『世界の技術レベルを発展させよう』として『いる』のか！」

それこそがマクギリスの真の目的だと察するガエリオ。

「その過程でどれだけの犠牲が生じると思っている！ それこそ貴様が主張する、GHが踏みつけにしていた人間たち以上の悲劇が起こるぞ！」

「……そうかもしれない。人類はそれほど賢くもないし、信用できないものなのかもな」

マクギリスは未だ他人を本当に信用できないと思っている。人の心は移ろいゆくもので、状況が変わればすぐに旗色を変えるものだ。

だが、それでも――

「だからこそ、罪は罪であると知らしめ、罰せられ、記録に残していかなければならない。例え世界の支配者であろうと間違いは正され、相應の報いを受けるのだと知らしめ、人々の心に楔を打つ。たやすく悲劇を起こさせないために」

期待を裏切られ、道を違えても人を信じ、前に進んでいかなければならないという言葉を読み込む。それは己が言うべき言葉ではない。そう語るにふさわしい人間は他にいる。だからマクギリスは自分の中で育ちつつある『本心』を封じた。

「早々思い通りに行くとしても!? 一度たがが外れた人類がどれほどのものか、厄祭戦を見れば分かるだろうに！」

「何度も同じ過ちを繰り返すようならば……それこそ人類など滅びてもかまわない。そう思わないか？」

「驕るな！ マクギリス！」

再びの剣戟。激しく火花を散らして切り結ぶ2機は、徐々に戦場の最中で位置を変えていく。

それは双方の軍勢に確認されていた。

「マクギリスー！ 前に出すぎだー！」

イサリビのブリッジで、オルガが腰を浮かせながら叫ぶ。

主戦場から離れて戦っていたはずのマクギリスが、徐々に最前線へと戦いの場を移しつつあった。まだ戦いの終着点が見えていないうちに彼を失うのは拙い。通信の状況が悪い中、声が届くことはないと分かっていてもオルガは言わずにはいられなかった。

彼の言葉に応えるのは、別な方向から。

「いや、『代表はあれでいい』。我々は前線を維持しつつ、機会を窺う」
声をかけたのはライザだ。彼は旗艦で指揮を執りながら、マクギリスの状況を認識していた。

彼の言葉に、オルガは顔をしかめる。

「だが、今アイツが倒れたら……」

「……覚悟の上だよ。代表も、我々も。だからこそ代表は我々に後を託した」

その言葉は重く響く。

「自分の存在を利用して敵を引きつけるつもり、か」

「それもあるだろう。だがそれ以上にここで決着をつけておきたいのだよ代表は。個人的にも、反逆軍を立ち上げた責任者としてもね」

命を捨てたと言うよりは、己の命を利用し尽くす覚悟。そういったものがマクギリスにはある。それを最大限に生かすには指揮を執る立場は邪魔であると、そういった大胆な判断すら躊躇いなくやってのけるのだ。

「我々はその覚悟を尊重し、そして代表が作った機会を最大限に利用しなければならぬ。でなければこれまでのすべてが無駄になる」

確かにマクギリス自身が出てくるとなれば、アリアンロッドの軍勢は無視することは出来まい。あの戦いに割って入るなどと言うことは簡単にできないだろうが、隙あらばと機会は窺うだろう。あるいは交戦している相手とまとめて、そう考えてもおかしくはない。

首尾良く敵の一角は崩した。その上で相手がマクギリスに意識を持って行かれるのであれば、確かに都合が良い。色々と思うところはあったが、オルガは乗ることにした。

「……分かった。こっちは準備に入る。出来ればスキップジャックの正確な機動パターンの割り出しをしたかったところだが……まあ完全な一発勝負ってわけじゃねえ。できるだけ戦力を釘付けにすりや2、3回かませる時間も稼げるだろう」

「了解した。こちらでも戦力を引きつける。焦らず用意を頼む」

ライザとの通信を終えたオルガは、改めて回線を開いた。

「ビスケット、そっちはどうだ」

「観測機を飛ばして2点から座標を割り出してるよ。やっぱりシノたちを送り込めなかったのが痛いね」

阿頼耶識にて艦の姿勢を微調整しつつビスケットは応えた。

密集した艦隊に対し正確な位置座標を割り出そうとした場合、単なる目視とセンサー類による測定だけでは微妙に誤差が出てくる。これは艦の発する重力波が干渉し合って、光や電波がわずかに捻じ曲がるため精細な光学測定が出来ないと、艦隊が微妙に機動して位置をずらし続けているからである。

足を止めて砲雷撃戦をしているように見える双方の艦隊だが、実際は相手の砲撃に当たらないよう移動を続けている。特にアリアンロッド艦隊は密集しているように見えて、僚艦が撃破されても被害が他に及ばないような位置取りをを保ち続けている。

それでも単純に艦の座標を特定するだけならさほどの苦労はしないが、ビスケットたちは『ある理由』により精密な位置座標を必要としていた。

と、そこに。

「状況は、どうなってる?」

パイロットスーツのままのダンテが現れる。ビスケツトは振り向かないままに応えた。

「今スキップジャックの機動パターンを割り出してる。こっちからの測定だからちよつと手間取るかな」

それを聞いたダンテは頷き、空いているシートに座って作業を始めた。

「だったらスキップジャックの推定機動限界と、艦隊のフォーメーションから絞り込みをかける。光学測定と組み合わせればかなりの精度が出せるはずだ」

「出来るの!?!」

「ああ、こんなこともあろうかと俺の機体で観測を続けてた。途中でデータは吹っ飛んだが、こっちに送ってたバックアップでいける」

「分かった、任せる。……各員に通告。本艦はこれより『砲撃準備』に入る。各作業の繰り上げ、および中断の後、耐衝撃態勢に移行。艦内重力と居住区画の電源を一時停止。リアクターの出力をアイドリングからミドルパワーへ。『切り札』に電力供給開始」

館内放送と同時に慌ただしく艦内の人員が動き始める。居住区画の明かりが次々と消え、リアクターが唸りを上げていく。

ざわつく中、ビスケツトは再びオルガとの回線をつなぐ。

「オルガ、座標確定の目処があった。早速立ち上げをやってる。……ダンテ、どれくらいでいけそう?」

「10……いや、7分くれ」

「聞いての通りだ、7分で準備が出来る」

「分かった。可能な限り敵を引きつける。それとサカリビに幾分か回すぞ」

「いや、補給と修理が終わった機体を直衛に回す。下手にこっちに戦力を集中させたら感づかれるかもしれない」

「……それもそうか。だが向こうが先にそっちを狙うようなら、かまわず戦力を回す。それでいいな?」

「頼むよ。俺は艦の指揮になれてないんだ。ぼろが出ないうちに終わ

らせたいよ」

下手な冗談に双方とも笑みをこぼす。笑えるならまだ余裕がある。そして油断もない。細工は流々、流れも悪くない。慌てず騒がず、勝ちに行く。

鉄華団は一丸となって、王手をかける準備を着々と整えていた。

マクギリスの存在を確認したラスタルは、思案する。

(好機だが……誘いである可能性も否定できんな)

反逆軍首魁であるマクギリスを討てば流れは大きく変わるだろう。しかし相手もそれは分かっているはずだ。であれば何らかの罠を仕掛けてきた可能性もある。迂闊な手出しはするべきではないと判断する。

『マクギリスが討ち取られても、反逆軍は機能を保ち、勢いを損なわない』。その事実を知らないラスタルは深読みをせざる得なかった。まあ、ワンマン体制を敷き己がいなくなれば機能不全を起こしてしまいう組織構造を、半ば無意識的に作り上げてしまったラスタルには理解の範疇外であっただろう。

(あの戦いに割っては入れるのはフォルク三尉だけか。……だが彼女にはランディール・マークスを討ち取ってもらおう役目がある。呼び戻したところで素直に応じることもないだろう。であるならば……)

思案の末、ラスタルは口を開く。

「第3艦隊から第5艦隊に通達。敵艦隊中央に砲撃を集中。中央から切り崩していくぞ」

彼の言葉にオペレーターが狼狽える。

「しかし攻撃範囲にボードウィン卿の機体が……」

「彼ならばなんとかするだろう。それに先ほどから膠着状態に陥っている。援護にもなるはずだ」

「りよ、了解いたしました」

慌てて通達を行う部下を尻目に、ラスタルは戦況を睨み続けた。

（これで討てるとは思えんが……罨であった場合何らかのリアクションがある。さてどう出てくるマクギリス）

もはやマクギリスが戦況とは関係がなくなりつつあるなどつゆ知らず、ラスタルは次なる策を巡らそうとしていた。

『それ』に気づいたのは、マクギリスが先であった。

「艦砲射撃がこちらに集中している？　ラスタルめ。俺をガエリオもろとも始末する気か」

同時に最低でもエクスカリバーはまだ使用可能な状態にないと推測。使えるのであれば、どのような犠牲を払ってでも自分を照射範囲内に留めようとするだろう。それをしないとすることは今のところ使えないと言うことだ。

しかし最前線にいる自分を無視できるものでもない。生半可な兵力の投入は単に損耗するだけだと見たのか、艦砲射撃の集中による火力であわよくばと考えたのだろう。罨を警戒しているだろうし選択としては悪くない。

「こちらに注視してくれば好都合。しかし砲撃を避けながらガエリオの相手は少々面倒だ。……ん？」

モニターの端に『あるもの』の姿を見つけ、マクギリスは軽く笑む。「ちようど良い。あれを盾に使わせてもらおう」

それは轟沈したフェアライトの残骸。ほぼ真つ二つになっているものの、艦体はまだ形を保っている。デブリと化した破片も合わせれば、十分に砲撃に対する盾となる。そう見たマクギリスは機体を翻した。

「逃げるか！　マクギリス！」

集中砲撃に気づいていないのか、それとも些末ごとと無視しているのか。ガエリオは周囲の状況にかまわずマクギリスのバエルを追う。「急くなよガエリオ。邪魔が増えたので場所を変えるだけさ」

残骸の影に入ったところで、スラスターを吹かし四肢を派手に振り回して機体を振り返らせる。

「さあ続きだ。存分にやり合おうか！」

「そうやって、お前は、いつもー！」

ぎしりと歯を噛み鳴らし、ガエリオは打ちかかる。打ちかかりながら激白する。

「お前はそうやって！ 『すべての物を置いていく』！ カルタの思いも！ アルミリアの思いも！ 俺たちすべてをかなぐり捨てて！」

嵐のように打ちかかるランスを捌きながら、マクギリスは返す。

「当然だ。最初から俺はそういうものだった」

「違う！ そうじゃない！」

吠えるガエリオに、マクギリスの眉が寄る。

「お前には出来たはずだ！ 『拾い上げることが』！ お前ほどの才覚があれば、人望があれば！ カルタを、アルミリアを、俺たちを！

言葉を尽くし理解し合い、ともに歩むことも出来たはずだ！ そうでなくとも、偽りで騙したとしても！ 味方に引き入れることは出来たはず！」

言葉とともに打ち込まれたランスが、受け流しきれなかったバエルを弾き飛ばす。

「必要な物以外すべてを無駄だとお前は斬り捨てた！ カルタの！

アルミリアの！ 俺の思いを無視して！ 「友になる資格などない」などどどの口で言う！ その資格をかなぐり捨てたのはお前自身だ！」

その言葉に、わずかに目を見開くマクギリス。

「……聞こえていたのか」

「急所を外してくれたおかげでな！ ……そんなお前が！ 誰よりも奪われることを知っているお前が！ 俺たちから信頼と希望を奪った！ それはラスタルと、お前が否定したギャラルホルンと何が違う

！」

みし、と僅かな音がした。それはマクギリスが奥歯を噛みしめた音。

「……お前が言うか」

「なに？」

「お前が言うか！ ガエリオ・ボードウィン！」

それは今までにない、マクギリスの咆吼。その剣幕に、今度はガエリオが眉をひそめた。

「何を言って……」

「セブンスターズの一員でありながら現実を見ることをせず、偽りの光景と偽りの言葉で満足していたガルス・ボードウィン！ そして俺を盲目的に信用してきたお前！ その立場と人脈を使えばもつと違う形で改革も出来た！ だが俺という存在がなければGHの歪みにさえ気づかなかつただろう！ イズナリオという男の本質を見抜けなかつた時点で底が知れる！」

がつ、とランスが弾かれた。今度はバエルが攻勢に出る。

「そしてアルミリア！ お前たちは10にも満たない幼子を、俺のような男に押しつけた！ 家同士の繋がりを強めるという理由で！」

「それは！ お前を信じて……」

「話を急ぐ必要はなかつた！ イズナリオの言葉に踊らされ、たいした考えもなく賛同したろうが。俺からは断りにくいと踏んだ上でな！ これが長子であつたら簡単にはいかなかつたはずだ。カルタのように！」

勢いに乗せて左のランスを蹴り飛ばす。すぐにキマリスが剣を引き抜くが、その動きは僅かに精彩を欠いている。

「己の家族を、子を、家のための道具としか見ていない！ 悪意を持つてではなく、『それが幸せと信じ疑うことすらしない』！ 相手が野望を胸に秘めていようと見抜くことすら出来ずに！ それはヒューマンデブリなどと呼ばわり子供たちを商品として売りさばく者たちと、俺のような孤児を食い物にした者たちと！ どこが違う！」

そう、マクギリスは実のところ、イズナリオと同等以上にガルスに

嫌悪感を覚えていた。

確かに彼は善人だろう。だが『それだけだ』。能力的に秀でたところがあるわけでもなく、セブンスターズの一族として生まれたからという理由だけでその席に収まっている。そして性善説を信じているのか、表面に出ない悪意や野心に対して非常に無頓着だ。人の上に立つには非常に不向きと言わざるを得ない。

それでいて、愛娘を平気で一回り以上年の離れた相手に押しつけるような真似をする。もちろん本人はよかれと思ってやっているのだろうが、ただでさえ周囲から色々陰口をたたかれていたのだ。幼きアルミリアですらそれを耳にして心を痛めていたというのに、都合の悪いことは耳に入らない質なのか、一向に気にした様子もない。

かてて加えて押しつけた相手がこれだ。人を見る目がないどころではない。もし娘の幸せを本当に願っているのであれば、相手を調べられるくらいはしても良いはずだ。ガルス立場であれば、調べる手段は事欠かさなかったであろうに。

表面上の物事しか見えない、善人という名の愚物。マクギリスはガルスをそう断じる。

「マクギリス……お前は」

マクギリスが抱く思いの一端を、ガエリオは悟る。

彼のアルミリアに対する思いは愛ではない。『同情』だ。かつての自分と重ね合わせて彼女を見ている。だからこそ最後まで冷たく拒絶することが出来なかったのだ。

キマリスの挙動が目に見えて衰える。それを好機と、自分の思いを押し殺しマクギリスは剣を振るおうと——
ずぎん、と痛みが走った。

「な、に……う？」

阿頼耶識によつて緩和されているはずの痛覚。それが生じたのは右手——『アルミリアによつて傷つけられた』右手だ。

まるで悲鳴のようなその痛みに、マクギリスは思わず苦笑する。

「……まったく、困った女だ」

一瞬、ほんの一瞬だけの停滞。

それが運命を定めた。

絶え間なく続く砲撃。その一つが偶然フェアライト残骸の内部に飛び込み、残っていた弾薬庫に直撃する。

発火。誘爆。結果予期せぬ大爆発を起こす。そしてそれは残骸の近くで交戦していた2機に容赦なく襲いかかった。

「なっ！ しまっ……」

突然のことにガエリオは焦る。残骸にあまりにも近づきすぎた。爆発の衝撃と飛来する破片は、巻き込まれればMSとてひとたまりもないだろう。そして回避するにはあまりにも遅すぎる。

だが、『突然の衝撃が、機体を強引に吹き飛ばした』。

「ぐあっ!?!」

吹き飛ばされる中、ガエリオは見た。『蹴りを放った態勢のバエル』を。

そしてマクギリスは自身の行動に驚愕していた。なぜ咄嗟に、このままで2機とも巻き込まれると判断した瞬間に、『キマリスを逃すように蹴りつけてしまったのか』。

「そうか、俺は……」

すべてを悟ったかのようにマクギリスは目を伏せ――

爆煙と破片の雪崩の中に、バエルは飲み込まれた。

その光景を啞然と見るガエリオ。僅かな間硬直していた彼だが、やがて身を震わせ、絶叫する。

「マクギリスうううううううう!!!」

そして、ほぼ同時刻――

「電力、電圧、正常値」

「重力制御による疑似カウンタウエイト、準備OKです」

「艦の姿勢制御、各サポート問題なし！」

「測定誤差プラマイ10メートル。これが限界値だ」

各所からの報告を聞いたビスケットは、伏せていた目を開ける。

「鉄華団および反逆軍総員に通達。これより本艦は砲撃態勢に入る。戦線に展開している機体は射線想定範囲より速やかに離脱。各員と本艦周辺の機体は衝撃に備えろ」

指示が飛び、サカリビ正面の空域が空く。その彼方、望遠で捉えるのはスキップジャックの姿。

揺らめくように動く。その動きは正確な砲撃を難しい物にしていた。しかしサカリビの照準は、そのブリッジを的確に捉えている。

「サカリビ、砲撃態勢へ！ 全システムオールグリーン！」

「コントロールをビスケット艦長代理に。カウント入ります！ 30, 29, 28, 27……」

数字が刻まれる短い間、ビスケットは深く息を吸って、吐く。

（これは俺一人の『敵討ち』じゃない。俺たちにいろいろな物を預けた、すべての人たちの想いが乗った一撃だ）

カウントがゼロを刻まれ、眈を鋭くしたビスケットが吠える。

「目標スキップジャック艦橋！ 「ストーンヘンジ」、撃（て）ー！」

改装によりサカリビのコンテナ下部に増設された物。左はジェネレーターからの電力を変換するコンデンサシステム。そして右には長大な電磁加速レール。ワンの店で埃を被っていたマスドライバー。それに手を加え、無理矢理艦載に仕立て上げた長距離砲撃用大型レールキャノン、ストーンヘンジ。

終焉を呼ぶ火矢が、強い反動と衝撃を生み出して放たれた。

弾殻は細長い輸送コンテナ。それは途中で分解し、中から巡航ミサイルが飛び出してさらに加速。

それはダインスレイブに匹敵する速度で宇宙（そら）を駆け、そし

て――

「バエルの反応、ロスト！ 詳細は分かりませんが、撃破した可能性が
あります！」

興奮したようなオペレーターの報告に、喜色を隠せないラスタル。
「そうか、ボードウィン卿がやってくれたか！ ……全軍に通達！
この機を逃さず……」

彼が新たな指示を下そうとする前に、オペレーターの一人が焦った
様子で報告をしようと振り返る。

『そこで終わった』。

リモート信管が作動。それに従い巡航ミサイルは爆散。
弾頭はクラスター爆弾と硬化レアアロイのニードル散弾。
それらは容赦なくスキップジャックの艦橋を襲い、爆発四散せしめ
た。

※今回のえぬじい

「そりやお前、こんな一回り以上差とか、周囲からも色々言われるやん
か。俺完全にロリ扱いやし」

「や、その、正直すまん」

「まあロリなんは否定せんけどな」

「せんのかい！」

要約（違）

54・ちよいと地獄（そこ）まで付き合えよ

マクギリスとラスタル。両軍のトップが墜ちるその少し前。

誰も介入できない。誰も近寄ることが出来ない。壮絶な戦いがいつ果てるともなく続いていった。

「速い。純粹に速度が、ということもある。だがそれだけではない。反応が。取り回しが。先読みが。常識外に速い。相手との先の読み合い、常に先手を繰り出そうとする、いわば『先の先』の取り合い。それを常人では追いつけないほどの速度でこなしている。」

2匹の怪物の舞踏は、止まらない。

「はっはっはっはア！ いいねいいね最高だねエ！」

狂った笑い声を上げながら、モルガンを振り回すマリイ。通常のMSの数倍はある巨体だが、慣性制御および推進剤なしで駆動するスラストー群のおかげで、とんでもない機動性を見せる。

「はっ、機嫌がよろしくてなによりだ」

皮肉めいた口調で言うランディ。機体自体はレギンレイズ・ハイムーバーと同程度の大きさだが、その動きはまるで別物だ。空間を蹴飛ばしながらモルガンと存分に渡り合っていた。

互いにまだ余裕があるように見える。未だ様子見の域を出ていないようだ。特にランディは、相手の機体を考察できる余力もあった。（しかし、よく破綻なくあんなモン振り回せる。阿頼耶識をつけていても……いや、『つけているからこそ、負担も大きい』だろうに）

阿頼耶識は本来MS——『人型の機械』を動かすための物だ。より正確に言えば、『阿頼耶識を介して人間を制御中枢としたため、MSは

人型となった』。人間の思考、運動中枢を利用するためナノマシンを使った神経接続システムが生まれ、それを最も効率よく運用できるのが人型の機械だったのだ。人体が動いたための物を利用するのだから当然と言えば当然である。

逆に言えば、元々阿頼耶識システムは『人型以外の物を動かすようには出来ていない』。MWや宇宙船が動かせるのは、それらの操作が『人体よりも単純』で負荷が少ないからだ。（さすがに複数同時制御とかなると難易度が爆上がりし、ユージンのようにぶっ倒れる羽目になる）

一応人型の範疇にあったレギンレイズ・ハイムバーならともかく、可動スラストと武装の塊と言ってもいいモルガン・ブライドは人型の範疇から大幅に外れており、その制御は本来複座以上でなければ難しい物だろう。阿頼耶識を用いれば確かに一人で運用することも可能だろうが、かかる負荷は並大抵の物ではあるまい。阿頼耶識システムに関しては門外漢のランデイでも、それくらいは推測できる。それをまあ自分と互角のレベルで振り回すとは。感嘆と言うよりは呆れ気味の心境で鼻を鳴らす。

対するマリイは実のところランデイほどの余裕はない。

（よくこの機体に追いついてくる！ あれからまだ腕を上げてるってのかい！）

以前戦ったときより明らかに技量が向上している。ハイムバー状態のモルガンと互角程度であったはずが、『強化されたモルガン・ブライドと互角にまで上がっていた』。以前に手を抜いていたのではない。それが証拠に『分身を思わせるような機動偏向を使っていなかった』。

通常の機動（イナーシャ・コントローラーを使った三次元機動が通常なのは甚だ疑問だが）のみで追いつがる。それが出来る理由は何のことはない、『ランデイが鍛練を重ねた』。それだけだ。

イオク率いる第2艦隊がタービンス本拠を襲撃した際の戦闘。それ以降ランデイは暇を見て機体の調整と自己鍛錬を続けていた。しかもシミュレーターの難易度を桁違いに上げて、である。

自分と互角に戦える相手が出てきてむかついた……からではない。単純に勝率を上げるためである。闘争に狂っているランディであるが、その一方で慢心を反省しそれを生かして次につなげるクレバーさもある。彼にとつて戦場は楽しい遊び場であるが、最大限に楽しむためには相応の準備と努力が必要であると、妙な生真面目さのようなものもあった。

結果以前にも増して技量が上がっている。より無駄なく、より鋭く。それを体感すると同時に、マリイは『機体と自身の限界』を感じ取っていた。

すべての面において爆発的な性能の向上を果たしたモルガン・ブライドだが、その機動特性は『今までの延長線上でしかない』。確かに速く、小回りもきく。だが言ってみれば『それだけ』なのだ。その動き自体は今までのモルガンとさしたる差はない。

それは機体の能力のせいばかりでもなかった。マリイ自身がこの化け物を『使いこなせていない』のだ。

先にランディが推察したとおり、現状の阿頼耶識ではモルガン・ブライドの制御に負担がかかり、そのスペックを完全に生かし切れていない。それでも一般兵からすれば束になってかかっても対処不可能な性能差がある。現在のランディのように対処できるのが異常なのだ、その異常な相手をなんとか出来なければ話にならない。そのためだけに生み出された物なのだから。

相手を上回るべく手に入れた力。それにあっさりと追いつかれた。そのことにマリイは――

「ふひ、ふふふふふ……」

歡喜の表情を浮かべる。

これだ、これでこそランディール・マークス。たどり着きたい高みだ。目指すべき頂点だ。

こんなもんじゃない。この程度の化け物に易々と屈するような人間じゃない。もっと上が、もっと先がある。『それを追い続けられ

る』。背筋に、胎の底に、ぞくぞくと快感が奔る。この余裕のなさ、この綱渡りの感覚が、追い求め続けた至福の時。彼女は幸福の最中にあった。

実際にはた迷惑な狂いっぷりである。しかしながら余裕のないのも事実。様子見のはずが、このままでは先にマリイが力尽きてしまうことは必至だ。

ではどうするのか。

当然ながら『その先がある』。

狂った女はぬたりと嗤う。

「そろそろ良い感じで温まってきたねえ。じゃあ……生本番といこうか！ 【阿頼耶識システムType B】、フェイズ2！」

かしゆ、と音を立てマリイの首元に備えられた注入機構が、彼女の体内に薬液を投入する。

かつてエドモンソンで鉄華団の前に立ち塞がったグレイズ・アイン。それには肉体を切り刻んでシステムの中枢とする外道な手段の他に、反応速度の向上および接合の齟齬を緩和するため、精神に異常をきたすほどの薬剤投与が行われていた。

それを改良し応用したのが、モルガン・ブライドに搭載された阿頼耶識システムType Bである。反応速度と動体視力を向上させる薬物の最高級品ブラッディ・アイをベースにした薬物を投入することによって、阿頼耶識を用いることによって生じるシステムの、物理的負荷を『忘れさせる』機構。パイロットの知覚、反応を鋭敏化すると同時に阿頼耶識が元々備える痛覚緩和を補って負荷を『認識できなくなる』が、負荷がなくなるのではなく知覚できなくなるだけなので、パイロットの限界を超え自壊してしまう危険性があった。

諸刃の剣どころではない。明らかに死地に向かう片道切符を、彼女は迷うことなく死神に差し出した。

「……あはア♪」

甘美なる毒が脳髓に満ち、彼女は蠱惑的な声を漏らす。

ゆつくりとした動作でモニターを捉える目は、瞳孔までもが紅く染まっていた。

モルガン・ブライドの姿がかき消える。同時にランディは機体を無茶苦茶な動きで退かせた。

一瞬で数度。リニアガン、ガトリング、グレネードカノン、そして高周波ブレードが、ラーズグリーズの存在した空間を薙ぐ。複雑な機動をしながら矢継ぎ早に武装を放ったのだ。咄嗟に分身機動に持ち込まなければ、どれかに当たっていた。

「慣性制御とスラスターを全開にしたか。だがGと制御負荷はどうしてやがる。下手すりや神経が焼き切れちまうぞ」

後先考えないような機体の振り回し方だ。機動特性こそ変化はないが、速度と反応が桁違いに向上している。多分これが本来の性能なのだろう。だがそれは人の限界を遙かに超えた物だ。たとえ阿頼耶識があるうとも、それを操る負荷が消え去るわけではない。

そのからくりには、ランディは目敏く気づいた。

「……薬物投与（ヤク）、か。痛みを感じなけりや確かに限界を超えられるだろうよ。それにこの反応、レッドアイかそこら辺だな。エドモントンの時と同じって事か」

そう言っている間にも嵐のような猛攻は続いている。残像を残しながら回避するランディだが、回避に専念するしかなく反撃がおぼつかない。速度と反射、それだけでランディは押さえ込まれていた。

そんな状況に彼は――

「……おもしろエ」

嗤う。

ここまでする。『ランディール・マーカスという個人を始末するためだけに』。それを判断したラスタル・エリオン、それに乗ったマリイ・フォルク。外道の選択を躊躇わず実行してみせる『敵』に笑いが止まらない。

実にろくでもない。この事実を世間に知らしめれば、それだけでラスタルは苦境に立たされるだろう。それよりも自分を殺すことを優先したのだ。たった一人のためになりふり構わず後先も考えない。消すことが出来れば何とでもなると思ったわけでもないだろう。そうしなければならぬほどの必要性を認めたとのことだ。『ここで

仕留めておかなければ、何をされるか分からない』。出し惜しみをしている場合ではないと見たのだろう。

滑稽ではある。だが正しい判断だ。このくらい狂っていないければランデイル・マーカスという男を仕留めることはできない。ランデイル本人もそういつた認識であった。そしてこのような状況は大歓迎である。

「いいじゃないか。これで俺も……『掛け値なしの全力』ってのが出せそうだ」

『任意でリミッターを解除できるようにしてくれ』？ いや言っちゃあなんだけど、正気？」

「正気じゃないかも知れんが、本気だ」

地球に出立する前、歳星でラースグリーズの調整を行ったおり、ランデイルは整備長にそのような依頼をしていた。

「前にも言ったと思うけど、リミッターなしの状態で君が全力出したら20Gくらいかかるよ？ それに折角整えたバランスも無茶苦茶さ。まともに制御できる代物じゃなくなる」

技術屋としては乗ってるだけで死にそうな代物を仕立てるのは抵抗があった。その心情を理解しているのかいないのか、ランデイルは機体を見据えたまま応える。

「まともな相手だけなら今まででも構わないんだがな……今度は『まともじゃない相手』が出てくる可能性があんのさ」

思い返すのはマリイのこと。彼女が駆っていた機体は阿頼耶識を使用するという条件があるものの、現状のラースグリーズと互角の性能をたたき出していた。そしてどうにも『まだ先』があるように見受けられる。

加えて言えば『自分に対する対抗策が彼女一人とは限らない』。あ

あいつた輩をしかも複数、現状のまま相手をするのは……それはそれで面白そうだが、自分一人の戦いでない以上、楽しむにしても少しは真面目にやる必要があるだろう。

「出てこないのならそれに超したことはねえが……用心はしておくに越したことはないだろ？ 何しろアリアンロッドとの正面勝負だ、やれそうなことは全部やっておく」

整備長は渋い顔つきであったが、ややあつて諦めたようにため息をはいた。

「分かった、分かったよ。……でもそれやると追加パーツの合わせやってる時間なくなるかもだよ？」

「そっちの方は地球に向かう最中にでもやるさ。現物合わせはよくやったからいけんだろ」

「行き当たりばったりだねえ……」

そのような会話を思い出し苦笑。さすがにマリイのようなのが複数はいなかったようだが、予想を上回る化け物として目の前に立ちはだかつてきた。

ならば応えてやろう。

「全リミッター解除。さあ、派手に行こうゼラーズグリーン！」

解き放たれたリアクターが甲高い音を立ててオーバードライブへと移行。同時にバックパック左右の強制冷却機構が解放。赤外線に変換された熱が放出され陽炎を産む。

スラスターに供給される推進剤がカットされ、すべてがエイハブ粒子によってまかなわれる。噴出炎が虹色に変わった。

機体各所に備えられたエイハブコンデンサが互いに連携しない全力稼働を始める。感覚的に言うならば、一步踏み出したらあちこちからベクトルがかかるようになると言ったところか。まっすぐ進むだ

けでも困難と言った状況になる。

すでにこの時点であちらこちらから押しつけられるような感覚を認識しつつ、ランデイはスロットルを開けた。

「it's Show Time!!」

宇宙に大気はない。だが確かに、轟と空間が唸った。

閃光が、奔る。

残像どころではない、一瞬にて機動の残滓だけがかろうじて認識できる疾走。次の瞬間に、ラーズグリーズの姿は『モルガン・ブライドの隣にあつた』。

がつ、とラーズグリーズがもつショットガンと、モルガン・ブライドが備えるカニのハサミ——「カズィクル・ベイ」と名付けられた接近戦用ダインスレイブユニットがぶつかり合い火花を散らす。

互いに複雑な軌道を描いて後退。マリイは笑いながらのたまう。

「はっはっはあ！ アタシの反応が遅れた!? なんてでたらめ！」

ランデイは苦悶とも笑うともつかない複雑な表情だ。

「はっ！ トリガーを引き損ねちまったか！ 当たっても大して効きやしねえだろうがな！」

双方ともに機動するだけで神経をすり減らし命を削るような負荷がかかっている。それに臆するような様子は全くない。

瞬時に体勢を立て直し、再びの交錯。モルガン・ブライドはありとあらゆる武器を、でたらめに見える有様で矢継ぎ早に放ち、ラーズグリーズはそれをかいくぐりながら『射撃武器をすべて捨てる』。

「当たらねえモンはいらねえからなア！」

シールドからいつもの幅広剣を引き抜く。もはや目に見える得物はそれだけだ。まともにダメージを入れるのには相当の運と機会が必要となるだろう。

だが臆さない。そんな必要はない。『そんな思考がそもそももない』。ランデイル・マークラスという男はある意味恵まれていた。『悪い意味で』。

生まれは厄祭戦の前から存在する都市。そこは一見風光明媚な港町だったが、その実ありとあらゆる悪徳を煮詰めたような、犯罪都市

であった。そんなところで生まれ、泥のような悪逆にさらされて生きてきた。

幸いと言って良いのか、町の顔役にも通じるジャンク屋というそれなりの家庭ではあった。それでも幼少の頃から、こそ泥を対人地雷で吹っ飛ばしたり強盗を高圧電流で黒焦げにしたりしなければ命を失っていたかも知れない。一瞬前まで笑っていた隣人がいきなり銃をぶっ放してくるなんて日常茶飯事であったのだ。

そんなわけで命のやりとりはなれきっている。なれきった末に彼は『自身の苦痛を無視できる』という特性を持つに至った。

腕の一本折れた、腹にナイフが刺さった。その程度で怯んでいるようでは生き残れない。むしろ苦痛を置いてけぼりにして死闘を楽しむくらいでなければならなかった。で、できあがったのがこんな人間だ。今更Gで押しつぶされそうになろうが引きちぎられそうになろうがどうって事はない。『死ななきや痛いだけだ』。苦痛を無視して己の限界を超える。彼の本気とはそういった物であった。

GHが苦心して人間を戦闘機械として仕立て上げようとしていた。その領域に、すでに彼はある。

「思い切りが良い！ さすがだねエー！」

マリイ・フォルクという人間はランデイに比べれば平凡な出自だ。せいぜいが『代々軍人を輩出してきた家系』というくらいで。

当然ながら一般家庭よりは戦いについて学ぶ機会は多かった。しかしそれだけだ。常識から逸脱したような教育を受けてきたわけでもないし、死地に身を置いて育ってきたわけでもない。GHの士官という進路を選んだのは、成績が良かったからと周囲に勧められたからである。そして水があったのか彼女は飲み込みが早く、頭角を現してアリアンロッドに推薦され、エリートへの道を歩み始めた。

しかし標的艦隊との演習で全てが狂う。

圧倒的な技量差による蹂躪。それをなした怪物たちの中核にいる男。

その強さに、その狂気に、『魅入られた』。

欲しい、そう強く願う。それがランデイ個人のことなのか彼の強さ

なのか、マリイには判別つかない。ただひたすらに、『それ』へと手を伸ばし、気づけば彼に挑みかかっていた。

己の学んだことは、何一つ役に立たなかった。ただひたすらに致命傷を回避し、食いついていくのが精一杯。だが一打を受けるごとに、彼が先に行くことごとに、獣のような欲が湧き上がっていく。結果的にマリイは完膚なきまでに敗北したが、それ以後はまるで人が変わってしまったかのようであった。

脇目も振らず、血眼になつて強さを求める。幸か不幸か彼女には才能があつた。エースと言えるだけの鍛練も積んだ。それでもランデイには追いつけないという自覚を覚えた頃にラスタルからの誘い。悪魔の契約に等しいそれを、マリイは迷いなく受けた。

全ては己の欲望のため。遙かなる高みに至るため。あの日手を伸ばし、欲しいと望んだ物を手に入れるため。

今日この瞬間のため！

「出し惜しみはなしき！ 今日こそアタシは『たどり着く』！」

スロットルを開ける。MAと言う存在の再現を目指したと同時に、機動兵器というものの限界性能を測るため持てる技術の全てをつぎ込んで制作された実験機であるレギンレイズ・モルガン・ブライドという機体は、パイロットの安全性など最初から考慮に入れていない。

設計段階からそれらは指摘され、可能な限りの安全性を確保しつつグレイズ・アインをベースにして大幅に機能を削り再設計されたのがハイムバーという仕様だ。元になったブライドのパーツ群は実験やテストのために一応制作されたものの、設計者たちはそれが実戦投入されるなど夢にも思わなかったであろう。

ラスタルとマリイのgori押しで1機だけ完成し、阿頼耶識Type Bを搭載することによってその性能を全て発揮できるようになった。それと引き換えに、パイロットの——マリイの命は秒刻みで削られていく。

それが分かっている彼女が笑う。この瞬間に全てをかけて悔いはないと。

舞うように、それでいて速く、鋭く。その巨体に似合わぬ俊敏な機

動でラーズグリーズの先へ回り込もうとしながら武器を放ち続ける。対するラーズグリーズは空間を蹴りつけ、レーザーの反射にも思える軌跡を残しながら全ての攻撃を回避しモルガン・ブライドへと肉薄せんとする。

最高速、火力、反応速度。基本スペックは全て上回るモルガン・ブライド。ラーズグリーズが勝っているのはトリッキーな機動性と小回りだけだ。火砲が尽きてもモルガン・ブライドには高周波ブレードとカズイクル・ベイがある。どちらもありち、威力双方が幅広剣などより上。全てをかいくぐり致命傷を入れるには、ランデイの技量を持ってしても難しいと言わざるを得ない。

その上。
「く〜、やっぱGがきついわ。こりゃ長引かせるわけにやあいかねえか」

全身の骨がきしみ内臓が潰されるような感覚を覚えながら、ランデイが呟く。

いくら痛覚を無視できるからと言っても、『物理的に体が壊れてしまえば意味がない』。操縦に支障が出るほどのダメージが生じてしまえば、否が応でも戦力は低下する。その辺の見極めもかなりシビアであろう。

事実ランデイの口の端からは、微かに血がにじみ始めている。超人的なタフさを持っている彼にしても、やはり肉体的な限度はあった。であるならば短期決戦しかない。戦いを楽しむ本能とは別な、冷静な部分でそう判断を下す。実際はマリイが『壊れる』まで粘れば自動的に勝ちが決まる。それまで待たないのは自身の肉体がそこまで保つかどうか断言できないのと、『冷静じゃない部分』が『面白くない』と断じたからだろう。

ゆえにランデイは仕掛ける。

ラーズグリーズの機動が変化を見せる。モルガン・ブライドの先を取ろうとする動きから、その背面を取ろうとする動きに。わざと速度を落として見せたその動きを、マリイは見逃さない。

「背中なら対処できないってエ!? どこ情報よそれエー！」

モルガン・ブライドに急制動をかける。びきりと体のどこかが悲鳴を上げるが構っていられない。そのまま『後ろにカズイクル・ベイを向け直す』。見た目に寄らず、自由度の高いサブアームによって懸架されたこの武器は、機体の死角をほぼカバーできる。今の制動はランデイにとって『急に目の前で後方に加速した』ように見えるだろう。これで仕留められるとは思わないが、戦術の幅を狭めることはできる

どがん、と言う衝撃が機体を揺るがした。

「!? っ!？」

迷わず再加速しその場から離れる。推進器群のど真ん中に『何か』を食らったようだが、ダメージはほとんどない。目まぐるしく動く光景を見据えつつ、今の一瞬を捉えた映像ログを視界の端に呼び出す。

画像の中で急激に迫るラーズグリーズ。カズイクル・ベイがそれを捉えようとした寸前で――

『左のシールドの下から何かが飛び出し、爆発した』。それを見て思い出す。

以前の戦いで、ランデイにしてやられたときのことを。

「腕の『仕込み』かい！ いや、シールドにも仕込んでいるのかねエー！」
以前は閃光弾だったが、今回はグレネードらしい。構造上、腕には3発も仕込めまい。シールドの方も似たり寄ったりだろう。多くても10発はないはずだ。

そしてそのサイズのグレネードでは、よほど当たり所が良くなければダメージにならない。モルガン・ブライドのように電磁加速で打ち出しているわけでもないので射程距離も短いようだ。

つまり、『懐に潜り込まなければ有効打は出せない』。何の事はない、剣と大して変わらないようだ。しかしながら『手段が一つ増えた』。ランディール・マーカーという男はそれを2倍にも3倍にも思わせる人間だ。むしろこちらが迂闊に間合いを詰められなくなった。

いや全く、『実に楽しい』。

「普通の銃が当たらないんなら、当たる物を当たるように使うか！」

らしいねえ、ゾクゾクするよ！」

己の利点を最大限に生かし不利を覆す。そのための仕込みも怠らない。この状況はランディに『作られた』ものだ。接近戦を警戒していることなど計算ずくであろう。

もはやすでに罠にはまっている。一体どういう仕掛けを用意しているのか。そしてそれをどう凌ぐか。これほどわくわくして楽しいことなどあるものかよ。無邪気な子供のように目を輝かせて、マリイは死力を尽くす。

距離を引き離して射撃に集中しても早々当たる物ではない。第一FCSなどとうの昔に役立たずだ。今のマリイは複数の武器を同時に扱うことが出来るが、阿頼耶識を用いた正確無比な射撃をもつてもランディを捉えることは難しい。

であるならば、あえて接近戦に持ち込むのも手だ。しかし真つ向からではあっさりと対処されるだろう。そして罠に食いつかれるのは間違いない。

必要なのは、『ランディの予想を上回る一手』。一瞬でもいいから彼の意識をそらし、隙を生じさせる。それがいかに困難であるかは分かっている。

「分かっちゃいるけどやめられない、つてねエ！」

つう、と瞳の端から一筋こぼれ落ちる物。涙ではない、血だ。

毛細血管が切れ、あふれ出てきたのだ。体もあちこちが感覚を失いつつある。それでもマリイは全く構わず機体を振り回す。

機動しながらの砲撃が増す。接近戦を諦めたのではない、むしろ砲撃でこちらの動きを牽制して接近戦に持ち込むタイミングを計ろうというのだろう。そしてそれだけではない『何か』を、ランディは感じ取っていた。

ならば。

「乗ってやるさー！」

あえて踏み込む。自分の仕込みとマリイの狙い、どちらが上回るのか。名残惜しいがそろそろ決着の時だ。

閃光のごとく駆ける。無数の機動偏向によって翻弄されそうにな

るが、マリイには分かる。いや、『分かるようにやっている』。

狙いは『真正面』。こちらの狙いを読んだのか、それとも最初から計算していたのか。『どちらでもいい』。ただ全力をぶつけるまで。

「そこおー」

ラーズグリーズが正面に至る寸前で、モルガン・ブライドの核となつている機体の両肩に備えられたグレネードカノンをパージ。同時に急制動。吹っ飛んでくるグレネードカノンをラーズグリーズは回避――

する前にガトリングガンが吠え、『カノンの弾倉を打ち抜く』。残つていた弾薬に引火。爆発が生じる。

ランディは躊躇わない。爆発の衝撃と破片が機体を揺るがすのも構わず、まっすぐ突っ切ろうとする。

衝撃が奔った。

「取ったアー」

ラーズグリーズの上方にモルガン・ブライドの姿はあつた。正面から来るラーズグリーズを乗り越えるように動き、両のカズィクル・ベイで機体の両腕を捕らえたのだ。

機体そのものでなくとも、『両腕を砕けばラーズグリーズの攻撃力は消失する』。ただそれだけを狙ったマリイの仕掛けは九割九分成つた。後はトリガーを――

『俺がな』

捕まれた両腕を軸に、体操選手のように蹴り上げてくるラーズグリーズ。マリイは構わずトリガーを引いた。

衝撃が機体を揺るがす。カズィクル・ベイの反動ではない。『何か強力な攻撃を食らった』のだ。

レッドアラートが鳴り響く中、マリイはダメージをチエック。本体の左腕、そして左のカズィクル・ベイが、サブアームの基部からごっそりと引きちぎられている。戦闘続行は可能だが、様々なダメージが性能に影響を与えていた。

『咄嗟に機体をひねらなければ、コクピットに直撃を食らっていただろう』。

「はっ、仕留め損なつたか。さすがにやる」

ラーズグリーズは右肩のスラスタバインダーと左腕のシールドを損失。さらにバランスが狂い性能も幾分落ちているはずだが、見た目動きに支障はなさそうだ。

その右足の踵からは、何やら砲撃をした後のような煙がたなびいている。「ヒールバンカー」。ハシユマルの両足に備えられていた武装、【運動エネルギー弾射出装置】を参考に開発され新たに備えられた武器だ。

バルバトスも同じものを備えているが、ラーズグリーズのそれはリミッター系の調整を優先されたため、取り付けられたのが決戦の真っ最中という急場しのぎにもほどがある状態であった。しかし機能はきちんと作動したようで、威力はご覧の通りである。

互いに直撃は食らわなかったが、それぞれ当たれば一撃と言う得物を備えているのが知れた。ここで一端仕切り直し——『などしない』。「そうだよ……もつと、もつとおオ!!」

心底楽しそうな狂乱の笑みを浮かべ、迷わず踏み込むマリイ。残った銃器を乱射しつつ右のカズイクル・ベイをセット。そして脚部のブレードを展開し振り回す。

「愛してるんだよ！ ぶち殺したいほどにイ!!」

対するランデイもにい、と壮絶な笑みを浮かべる。

「は、情熱的だなアー！」

あえて正面。実は双方とも、もはや小細工する余裕がない。無茶な高機動を続けたことによる負荷、そして先ほどの激突の時に相当の衝撃を受けた。骨の数本はすでに折れている。もうそんなに長いこと戦えないだろう。

これで最後。そう決めて真っ向から2機はぶつかり合う。

宇宙（そら）を揺るがすような激突、衝撃。そして——

「……くはっ」

マリイは吐血する。衝撃で内臓のどこかが損傷したようだ。

カズイクル・ベイは左腕に内装されたグレネードで放った左腕諸共破壊され、両足のブレードは片方が右足を膝から引きちぎり、もう一

方は残ったヒールバンカーでへし折られていた。

胸元が付き合うほどの極至近距離。そして、『ラーズグリーズの右腕はフリーだ』。

ランディは口の端や目元から血を流しながら、告げる。

「楽しかったが、これで終いだ」

突き込まれた幅広剣が、モルガン・ブライドのコクピットを貫いた。

※今回のえぬじい

以上、ヤバイ系ヤンデレが花嫁衣装を着て刃傷沙汰を起こしたという、痛ましい事件でした。

「いや、間違ってるようなそうでないような……」

大筋であってる。

おまけ

EB—08jjc—00x レギンレイズ・モルガン・ブライド

レギンレイズ・モルガンを核に、MAを有人機として再現した機体。リアクターを3基搭載しているが、ガンダムのように同調させているのではなく、それぞれ機体の慣性制御、武装、スラスターと機能を分散して運用している。おかげさまでかなりの凶体ながらエイハブスラスターをガスなしでドライブすることが可能となり、慣性制御も相まって狂ってんじゃないかと思わせるほどの機動力を誇る。

またその能力を十全に生かすため、レッドアイの最上級、通称【ブラッディ・アイ】を投与してパイロットの反応速度を向上させ阿頼耶識システムを補強する機能、【阿頼耶識TypeB】を備える。もちろん体にすごく悪い上、慣性制御を超えた負荷を相殺できるわけでもないのでマリイさんの命はがりがり削られていく。

多くの武装を持つが、特徴的なのは機体上部に備える【自由電子レーザー砲】と、カニのハサミのような近接用ダインスレイブ【カズイクル・ベイ】。レーザー砲は機体を直接破壊するというよりは、センサーなどの電子機器を潰すのを目的としたもの。目潰ししたところでカズイクル・ベイを叩き込むというのがそもそも戦術。そのほかにも大口径グレネードカノン、高出力リニアガン、脚部に仕込まれたジャックナイフ状のヒートブレードなどを持つ。

デザイン的には見ての通りデイトラストライカーとペーネロペーをパクって足して2で割ったような感じだが、運用法としてはデンドロビウムに近い。

なおこんななりであるが、大気圏内での運用も可能である。

555・どう終わらせるのか、見せてもらおうか

「マクギリスの所在が不明となり、時を同じくしてラスタルが討たれた。その事実を両軍を揺るがす。加えて――」

「教官のシグナルがロストしたのだと？」

「は、はい！　同時に交戦していた敵機のシグナルも途絶えています！

あ、相打ち……なんでしょうか？」

報告したオペレーター少年が不安げな表情となっている。オルガは意外にも落ち着き払って口を開く。

「あの人がそう簡単に死んだとは思えねえな。……誰か足の速いやつを反応が消えたあたりに向かわせてくれ。機体のトラブルって可能性が一番高い」

ランデイの場合、直接死体を確認しない限りは死んだなど信じられないとオルガは思っている。いや、場合によっては死体だと思つてたら息を吹き返したなんてことすらあり得ると、半ばオカルトじみた確信があった。

まあそれはいい。オルガは思考を切り替える。

（マクギリスの所在不明、こいつは予想範囲内だ。皆覚悟している。だが狙い通りにラスタルを討つた結果、これがどう出るか。確かに軍勢として統率がとれなくなることは確かだが……）

大金星どころではない決定打。それをたたき出してなお浮かれず騒がず、オルガは冷静に状況を窺う。

凶報と吉報が同時に訪れた。この状況で一番冷静だったのは、決めの一打を放ったサカリビ――ビスケット以下の面子である。

「次弾装填！　アリアンロッド分艦隊それぞれの旗艦をターゲットイ

ングしつつ、別命あるまで砲撃体制のまま待機！」

スキップジャックのブリッジを粉砕した、それを確認してなおビスケットは警戒を解かない。

『ブリッジを粉砕しただけで、ラスタルの生死は確定していない』。そう思っているからこそその判断であった。最悪の場合、別の艦どころか艦隊の外から指示を下していたなんてこともありうると、用心を重ねている。かてて加えて。

「ダンテ、例のどかいビーム砲。あれの位置はマークしたままだよね」

「ああ、追尾は続けてる。……『こつから狙い撃つつもり』か？」

ダンテの言葉にビスケットは頷く。

「場合によってはね。大将を失つてもいなくても、連中がどう出てくるか分からない。どう出ても対応できるようにしておこう」

常に最悪を想定し、即応出来るよう心がける。地上支部支部長として積み重ねた経験、そしてアーヴラウで行ったテロとの戦いは、着実にビスケットの糧となっている。

風貌に似合わぬ鷹のような鋭い目で、彼は事の推移を見逃さぬよう注意深く観察していた。

マクギリスが生死不明になったとの知らせが行き渡るが、反逆軍は動揺した者こそ出ているものの、秩序を保っていた。

「代表より指揮を譲渡されたエンザ一尉だ！ 総員、現状を維持せよ！ 代表は命を賭けて敵の目を引きつけ、その結果ラスタル・エリオンは討ち果たされた！ 我々は代表の意思を引き継ぎ、この戦いの決着をつけなければならない！ その意思がある限り、頭を失った烏合の衆に我々は負けぬ！ 奮起せよ！ ここからが本当の戦いだ！」

あちらこちらから雄々しき声上がる。とりあえずこれでこちらが瓦解することはないと、ライザは密かにため息をはいた。

「……私のがらではないのだがな、こういうことは」

艦隊の指揮能力を見いだされてこの役目を引き受けたものの、ライザ自身は人を引きつけるカリスマなど全く持たない。あくまで『マクギリスから直に命じられた』という背景があるからこそ、皆がその言葉に従うのだと言うことを誰よりも本人が理解している。

虎の威を借る狐。しかしながら、それで戦意が保てるならばその立場に甘んじ演じきってみせるしかない。この一戦を乗り切れば、マクギリスと自分たちが切り開こうとしていた未来に手が届く。それまでやりきれば良いのだ。

半ば開き直りにも似た心境のライザ。その彼の元に通信が入る。

「なかなか見事な演説ではないかね」

「穴があつたら入りたい心境ですよ。どちらかと言えば一佐殿のほうが向いているのでは？」

「向いていなかったから干されたのさ」

モニターの向こうでアンダーセンがにやりと笑う。ライザは冗談めかしたため息をはいてから、真剣な表情となった。

「これから一佐の部隊も前に出てもらいます。ラスタル・エリオンの生死が不明な今、敵の混乱をつく絶好の機会ですので」

「ふむ、スカーフフェイスは？ 前に出ていないようだが」

「彼らには代表の搜索を。無事であればそれに越したことはないでしょうが……せめてバエルは回収する必要があります」

「そうか。……やれやれ、年寄りをこき使ってくれる。……了解した。これより標的艦隊残党は攻勢に移らせてもらおう。攻め手は得意ではないのだ。期待するなよ？」

「ご謙遜を。……今しばらく、お力添えをお願いします」

反逆軍はマクギリスを失ってなお、前に進む。彼の作った乾坤一擲の機会を逃すものかと。

攻勢が勢いを増す。頭を失い艦の数は減ったものの、その流れはとどまるところを知らない。

「か、各員現状維持！ 現状維持！」

「ラスタル様は、スキップジャックはどうなっている！」

対するアリアンロッド艦隊は混乱の極みに墜とされていた。

総司令であると同時に精神的支柱でもあるラスタルが討たれた。動揺どころではない、何をどうすれば良いのか誰にも分からなくなってしまうかのようだ。このようなときのために取り決めやマニュアルがあるはずなのだが、艦隊司令クラスの人間ですら狼狽えが先に来る。

まともに思考するのがラスタル以外にいなかった。その弊害がここに来て表面化する。

「と、ともかく隊員たちを落ち着かせろ！ まだラスタル様が倒れたと決まったわけではない！」

順当に行けば指揮を受け継ぐはずである第3艦隊の指令は、具体的な指示を出せずスキップジャックとの通信を再起しようと躍起になるだけだった。

他の艦隊も似たり寄ったり……かと思いきや。

「おのれ……イオク様に加えてラスタル様までも！ 我らが命に代えでも反逆軍を討つ！」

第2艦隊残存兵たちがいきり立っていた。元々イオクの敵討ちのために参戦した彼らはそもそもの士気が高い。が、反面現実が見えていない部分があった。

MS部隊は無謀な攻めを続けその半数以上が撃破。結果ラスタルから機会が訪れるまで防衛に回るよう指示され、彼らは不承不承ながらもそれに従っていた。しかし彼が討たれたことで、そのたがが外れてしまう。

「第2艦隊全艦、前に出るぞ！ ぶつけてでもヤツらを仕留める！」

他の艦隊が躊躇する中、猛り狂った彼らは後先考えずにむやみに砲撃を繰り返しながら突貫していく。

その様子を忌々しげに見る者たちがいた。

「愚かな、あれでは的になるだけだぞ」

イツヒ率いるシュネー中隊である。彼らはランディやスカーフェイス、標的艦隊の面々などと交戦しながらも、艦を含め全員が健在であった。

手堅い戦いを繰り返してきた成果である。防戦に関して言うならば、彼らはすでに一流の域だ。それ故に第2艦隊の無謀さが理解できた。

無策で突っ込めばただ餌食になるだけ。戦いを続けるにしろ何にしろ、体勢を整えるのが先決だろう。しかしながらシュネー中隊に彼らを止める手立てはない。イツヒたちは所詮外様だ。興奮状態にある第2艦隊の面々は警告しても聞く耳を持たないだろうし、下手をすれば利敵行為を取ったと攻撃対象にするかも知れない。

現状を考えれば停戦を申し込むのが一番良い手立てだろうが、果たしてアリアンロッドのどれだけがそれを理解できるものか。どうすれば無駄死にを減らせるか、イツヒが考えていると。

「二尉！ 敵陣を強引に突破しようとする機体が1機！」

「早まった真似を……っ！」

ここからでは後を追うことも出来ない。このままだと突出したものに釣られて前に出るものが増え、戦闘は続くだろう。指揮系統が混乱している今のアリアンロッドでは、各個撃破されていくのが関の山だ。

後でどう処罰されようと、強引に介入して戦闘を停止させるべきか。イツヒは腹をくくろうとしていた。

「う、あああああああああああ!!」

ラスタルの死。それを知らされたジュリエッタは吠えた。

「貴様ら、貴様らが！ ラスタル様をおおお!!」

フルスロットル。戦況とか、目の前の敵とか、そのようなものではすでに目に入っていない。ラスタルを奪われた。ただその事実だけが彼女の意識を占めている。

憤怒に囚われた彼女はただまっすぐにラスタルを討つた下手人——サカリビに向かおうとするが。

「させんよー！」

石動のヘルムヴィーゲが立ちはだかる。ただ闇雲に加速しようとするレギンレイズ・ジュリアに向かって大剣を振るうが。

「なに?！」

ジュリアは『回避しなかった』。まるで大剣が見えていないかのよう
に真正面から突っ込み、そして。

胴体を大きく切り裂かれる。

コクピットは外れ、致命傷には届いていない。しかし大きな損傷には
違いない。響くレッドアラート音を完全に無視して、ジュリエッタ
は機体を加速させヘルムヴィーゲの横をすり抜けた。

「くっ、抜かれた! だが!」

予想外の行動にジュリアを取り逃がしてしまう石動。しかし『彼が
最後の壁ではない』。

「1機抜けてきた! サカリビに向かっている? 行かせねえ!」

「弾幕を集中しろ! 勢いづかせるな!」

鉄華団のMSが、コーリス率いるクロウ隊が、雨霰と銃弾や砲弾を
浴びせていく。雪崩のような弾幕をもろに受けるジュリアだが、衝撃
に弾き飛ばされ装甲を抉り取られながらも速度を緩めない。

ジュリエッタは前しか見ていない。ただただラスタルの仇を討つ
ために、彼を殺した下手人を討ち果たすためだけに。

あるいはそれは一種の現実逃避であったのだろう。信じていた全
てが粉微塵に碎かれ、心のよりどころを失ってしまった。喪失、絶望、
そして怒りと憎悪。全ての感情がごちゃ混ぜになって自身を制御す
ることが出来ない。ほとんど発狂していると言ってもいい。

だから己が受けるダメージなど一顧だにしなかったし——

『レーダーの反応など意識の外であった』。

「やらせねえよ！」

突然の衝撃。それをなしたのはハツシユの辟邪。横合いからぶつかるように、ジュリアへと組み付いたのだ。

通常であれば避けるなり迎撃するなりしたのであろう。だが怒りに囚われ前しか見ていなかったジュリエッタは、ハツシユ決死の行動に反応できなかった。

「こ、のおおおお！ 邪魔をするなああああああ!!」

吠え猛りながら機体は無茶苦茶に振り回し、蹴りや拳を辟邪に叩き込む。装甲が歪み火花を散らしながらも、ハツシユは必死で組み付き続けた。

「やらせねえって、言った！」

「理念も信念もない、塵屑がああああ!!」

「そんなモン知らねえけどな、意地があんだよ！」

すげえ人たちがいる。自分はその何分の一も出来るかどうか分からない、取るに足らないちっぽけな小僧だ。

「だけど、それでも。」

今までいろいろなものを積み上げてきた中で生まれた、『譲れない何か』が、確かにある。その小さな、なんだか自分でもよく分からない何かのためだけに、ハツシユは意地を張って見せた。

その意地も、長くは続かない。

「いい、かげんっ!!」

蛇腹剣を強引に振るい、左のシールドユニットごと辟邪の右腕を切り飛ばす。踏ん張りがきかなくなると同時に推進剤の爆発を至近距離で受け、辟邪は堪らず引き剥がされた。

ジュリアの足が鈍ったのはほんの僅かな時間。しかし、ハツシユは『その僅かな時間を稼ぐだけで良かった』。なぜならば――

「三日月さんっ！」

『ケツを持ってくれる人間は、ちゃんという。』

「よくやった。任せろ」

バルバトスがジュリアの前に躍り出る。最初から『三日月が追いつく時間を稼ぐために』、ハツシユはジュリアへと挑みかかったのだ。

もちろんジュリエッタはそんなことなど気づかない。目の前に立ち塞がったものが『口では絶対に勝てない相手』だということも認識できていないのだろう。

「おおおおおおおー！」

ただまっすぐに、邪魔だと言わんばかりの無造作で、蛇腹剣を振るう。それは確かにこれまでにない鋭い太刀筋であったが。

「当たらないよ」

三日月とバルバトスには通用しない。するりと蛇腹剣を避けてジュリアの懐に飛び込み、すり抜けざま太刀を一閃。

一瞬の交錯の後――

ジュリアの上半身と下半身が分かれた。

「な……っ!?!」

ガクンと落ちる速度。パラメーターを示す全ての表示が赤く染まり、機体が戦闘能力を失ったことがいやでも知れる。

しかし、それでも。

「わたしはっ！　まだああああ!!」

上半身だけとなり、ろくに剣も振るえなくなった機体。それでも前に進むと、ジュリエッタは足掻いて――

「しっ……い」

がん！　という強い衝撃。バルバトスに思い切り蹴り飛ばされたのだと言うことに気づく前に、ジュリエッタは意識を失った。

タブレット上に記されていたシグナルサインが消え、ヤマジンのはため息をはいた。

「ジュリーもか。……これでハイムバーは全滅、と……」

気落ちしている。己が手がけた『作品』が、全て敗退した。口惜しさとも無念ともつかない陰鬱な感情が胸中にあった。

だが、そのような感情に囚われている場合ではない。

「主任！ 脱出の準備が整いました！ お急ぎを！」

焦った様子の兵が声をかけてくる。ブリッジを失ったスキップジャックは即座に轟沈するわけではないが、指揮能力を失った艦はまともに戦闘することは出来ないし、反撃もおぼつかない艦では的にしかならない。統率を失っていた隊員たちではあるが、それくらいは理解できたようで、泡を食って脱出を始めていたのだった。

「分かった。今行く」

落とせるだけのデータを端末とメモリーに落とし、ヤマジンもその場から離れる。持ち出したデータがこの先役に立つのかどうか。いや、そもそも自分の身の振り方がどうなるかすら分からない。

それでも、技術主任としてやらなければならぬことはしておかねばならなかった。この後アリアンロッドが、いやGHそのものがどうなったとしても、それが彼女の矜持であった。

「のこるはヴィダール……いや、ボードウィン卿だけか……」

足を速めながら一人呟く。もはや数だけのアリアンロッドに勝ち目は薄い。そして、いかに高性能であってもキマリス1機だけで戦況をひっくり返せるものではないだろう。

ヤマジンはこの時すでに敗北を予測していた。しかし――

幕引きは、まったく予想外のものになる。

停滞から活性化する戦場。その様子を見ながらガエリオは苦悩していた。

「マクギリスに拘った結果がこれか。……俺が拘らなければというものではないだろうが」

彼からしても、ラスタルが容易く討たれるとは思っていなかった。もしそうなるのであれば、もつと戦場が混迷した状態であろうと予想

していたからだ。

速すぎる瓦解。その上で、自分の戦いがあのような形で終わりを迎えるとも思っていなかった。もちろん容易く死ぬつもりはなかったが、死ぬ覚悟はあった。しかし蓋を開けてみれば戦いは中途半端な形で幕を閉じ、そして自分は意味もなく無事である。何もかもが無駄だったような虚無感。ガエリオはそれに囚われていた。

しかし、だからといってこの状況を見捨てておけるものではない。虚しさを押し殺して戦場の中央に向かおうとするが。

「……だが、『俺はどうすれば良い』？」

戦いをやめろ、と言ったところで止まるものではない。それくらいは理解できる。それ以外で自分が行えることなど、何も思いつかなかった。

マクギリスと相對することだけを考えて、それ以外を完全に捨て去った弊害である。ガエリオは戦闘以外のほぼ全ての技能を持たない。混乱状態にある兵をなだめ、統率することなど出来るはずもない。

しかしながら、『他人がどう見るかは別問題だ』。

「ボードウィン卿!? ボードウィン卿ですか!？」

突如入ってきた通信。先鋒艦隊からのものだ。ガエリオは回線を開く。

「こちらガエリオ・ボードウィンだ。戦況は……」

「ボードウィン卿! 艦隊の、艦隊の指揮をお願いします! もう貴方しかいないのです!」

「……なっ!？」

何を言われているのか、一瞬理解できなかった。己に統率能力がないことなど……そう否定しようとして気づく。今この現状、アリアンロッドの中で、『自分が一番立場が上なのだ』と。

単に階級的なものではない。GHの頂点に立つセブンスターズの後継。ラスタルとほぼ同格の立場にいる自分は、兵たちから見れば『血統的に格が上』なのだ。ラスタルが倒れた今、神輿……いや『抛り所』としたすがつてしまうのも当然と言える。

それが理解できたが故に、否定の言葉を放つのが躊躇われてしま
う。その間にも、事態は進んでいく。

「おおー。ボードウィン卿ならば！」

「マクギリスを討ち取ったと聞いております！ その偉功を持って反
逆軍に鉄槌を！」

「ラスタル様の弔い合戦を！ どうか！」

次々と士官たちが訴えてくる。それに対して「やめてくれ」とはと
ても言えなかった。

彼らは『自分と同じ』なのだ。正義を信じ、悪を懲らしてきたつも
りでいた。そう信じていたものが崩れ、途方に暮れ、何かにすがらな
ければならなかった。自分の場合はそれが復讐心で、彼らはセブンス
ターズの血統という違いはあれど、本質的には変わらない。

骨の髄までギャラルホルン。かつてランデイに言われた言葉が胸
中によみがえる。確かにその通りだった。だからこそ彼らを見捨て
るという選択を選べずにいた。

かといって何か具体的な打開策があるわけでもない。どうすれば
いい。どうするべきなのか。ぐるぐると思考は堂々巡りし、時間は容
赦なくガエリオを追い立てる。

自分はただ、マクギリスと雌雄を決することだけを考えてきた男
だ。GHの行く末などどうでも良いと思っていたろくでなしだ。そ
んな自分がアリアンロッドの命運を背負うことなど出来ようか。た
だ私怨を晴らすためだけに全てをかけてきたようなものが、できるこ
となど……。

いや、あつた。『ただ一つだけ、出来そうなおことがあつた』。

それは愚策だ。アリアンロッドの面子から支持を受けられるかも
分からないし、反逆軍が乗ってくるかも定かではない。だが、それ以
外に無駄な犠牲を食い止める手段など思いつかなかつた。

ガエリオは深く息を吐き、覚悟を決めた眼差しで告げる。

「……アリアンロッド全軍、一度後退して体勢を整えよ。この場はガ
エリオ・ボードウィンが引き受ける！」

おお、と士官たちから声上がるがそれを半ば無視。ガエリオは艦

隊の最前線に躍り出て、全方面に向かって回線を開く。

「私はガエリオ・ボードウィンである！ 我らが総司令であるラスタル・エリオン閣下は討たれた。しかしながら、私はこの手で反逆者マクギリスを討ち果たした！ そしてアリアンロッドの勇士はまだ多くが健在であり、未だ我らが戦力的に優位であることは疑う余地もない！」

悪あがきか、と反逆軍の多くは反感を覚える。彼らが何か反応するより先に、ガエリオは言葉を続けた。

「しかし、このまま戦えば勝利したとて我らも無事では済むまい。そして反逆軍の者たちよ、貴公らも泥沼の戦いを望んでいるのではないだろう。ゆえに私は慈悲を持って――

貴公らに『決闘を申し込む』！」

ガエリオが思いついた、戦いを泥沼化させず終わらせる方法。はっきり言えばやけくそに近いはったりだ。まともな戦力が自分しか残っていないのならば、自分が矢面に立ち敵を引きつければ良い。決闘という手段は、自分がとれる手段の中で最も手っ取り早いものだった。

賭けとも言えない博打。反逆軍が受けなければ成立せず、それ以前にアリアンロッドの者たちから支持を受けなければ意味はない。賭けが始まるより先に賭場が立つかどうかすらも怪しい、そんな状況であつたのだが。

「こちらシユネー中隊。我々はボードウィン卿の支持を表明する。……ボードウィン卿の判断は勇気ある英断だと我々は見た。その覚悟に敬意を表する」

真つ先に乗ってきたのはイツヒだった。彼はガエリオの支持を表明することによって、この後の状況に口を挟める立場を得ようとしていた。

（渡りに船、と言ったところか。突飛に過ぎる発想だが、便乗させてもらおうか）

うまくすれば無謀な戦いを止められるかも知れない。イツヒはこの状況を最大限に利用するつもりである。

アリアンロッド艦隊がざわめく。戸惑いながらも流されるままにガエリオを支持しようとするもの。どうすれば良いのか分からずに狼狽えるだけのもの。自分自身の手でラスタルの仇を討ちたいが、セブンスターズの御曹司に逆らうのはいかなものかと悩むもの。反応は様々であったが、声高に反対意見を述べる者はいないようだ。そう見て取ったガエリオは、ここぞとばかりに声を張り上げ勢いで押し切ろうとする。

「私は逃げも隠れもしない！ この場で策を持って討ち取るというのであればそれも良いだろう。しかしそんな手段を執ったその瞬間、貴公らは塵にも劣る畜生に成り下がると知れ！ ……さあ、私と正面切って剣を交えようという、強者はいないのか！」

そう嘯きながらも、ガエリオの心中は祈るような面持ちであった。（反乱軍よ、お前たちが本当の改革のために起ったというのであれば、俺の真意をくんでくれるのであれば。 ……頼む、この申し出を受けてくれ）

身勝手な言い分だというのは分かっている。それでもなお、ガエリオは願わずにはいられなかった。

ガエリオの行動によって水を差された形だが、アリアンロッドも反乱軍も一端体勢を整える余裕が生じた。

体勢を整えながらも、反逆軍内ではガエリオの申し出にどう対処するか、その論議が交わされている。

「受ける必要はない、と自分は思いますが。むしろ向こうが混乱しているうちなら、我々は確実に勝てた。そしてこれから互いに体勢を立て直しても、勝率は低くはないはず」

淡々と意見を述べるのは石動。次いで口を開くのはライザ。

「確かに我々に決闘を受けるメリットはないに等しい。だが向こうもそれは分かっているはず。体勢を整える時間を欲しているのかも知れません」

件のレーザー施設のこともあると述べる。「意見をよろしいか」と口を挟んだのはコーリスだ。促され彼は言う。

「ボードウィン卿は腹芸の出来る人間ではないと思われる。彼の性格からすれば、これ以上余計な犠牲を出したくないという想いからの行動ではなからうか。愚策も良いところではあるが」

他に打つ手を考えられなかったのだらうと、うがった意見を上げ締めた。ふうむと、議長のような立場に置かれたアンダーセンは思案する。

「どちらにしろこちらは戦力的に問題はないな。レーザー施設に関しては打つ手もある」

サカリビの用意と、先ほど帰還した2機のガンダムフレーム。破壊するには至らなくとも邪魔するには十分だとアンダーセンは考えている。それも踏まえれば、真正面からぶつかつたとしても勝てる戦いだと踏んだ。

「決闘に関して言うならば、うちの連中を出してもいい。むしろやらせろと言う勢いさ。まあヤツらでも十分ではあるが……」

自然と皆がオルガの方を注視する。個人戦力で最強を擁しているのは鉄華団だ。ランデイと、そして三日月駆るバルバトス。

ランデイは今のところ消息不明だが、あれが簡単に死んでるわけがないと皆意見を同じくしていた。例えば半死半生でもあれが敗北するところなど想像もつかない。適当に放り込めば勝ちそうな気がする。

とりあえず今この場にはいない人間は置いて、ランデイ以外にガエリオとの決闘で確実に勝てそうなのは三日月だけだろう。シノや昭弘、標的艦隊の面子であれば互角には戦えるかも知れないが、『確実に勝てるかどうか』は断言できない。何しろ相手はオリジナルの阿頼耶識を使っていたマクギリスと互角に戦っていた相手だ。馬鹿げたことをやらかしてはいても、舐めてかかれる相手ではなかった。

万全を期するのであれば、三日月が戦うというのがベストであろう。その三日月に命が下せるのはオルガだけだ。

皆の視線を受けるオルガ。そして。

「どうするの？　オルガ」

通信越しに問うてくる三日月。その目はいつも通りの圧がある。

少し考えてから、オルガは口を開いた。

「……ミカ、『お前が決める』」

「……？」

「『お前が決めて良いんだ』」

意外な言葉に鉄華団の面子は目を丸くする。いつもなら「任せた」と即決で決めているところだ。この期に及んでなぜと、疑問が浮かぶ。

それに答えるかのように、オルガは言葉が続ける。

「この戦い、俺たちは勝てる。『どつちに転んでも』だ。決闘を受けても良いし受けなくてもいい。俺たちが総力をもってすれば、ラストルのいねえ連中なんぞ相手にならないし、1対1であんな相手に負けるお前じゃねえ。そうだろう？」

過信ではなく確信。驕りではない自負がオルガにはあった。それを踏まえた上で、けどなと言う。

「これが鉄華団（俺たち）だけの戦いだったら、俺は迷わずお前に任せた。だがこの決闘は、この大勝負の全部を……いや、ギャラルホルン、経済圏、火星。全部含めた世界の先がかかっている。そんな戦いを、勝てるから、やってくれるからお前一人に任せるのは……何か違うと、そう思う」

どのような戦いであろうとも、オルガが任せると言えば三日月は応えるだろう。それでも三日月一人に世界を背負わせるのはおかしいと感じる。『世界の中には三日月も含まれるはずだ』。そこに三日月の意思がないのは間違っているのではないか。

様々な経験を経て、オルガの意識も変わりつつある。今回のことはその発露と言っても良いだろう。そのような自覚があるのかどうかは定かではないが、オルガは三日月に問うた。

「ミカ、『お前は どうしたい?』」

圧力をかけるのではない、ただまっすぐな視線で三日月を見据える。

三日月が考えたのは僅かな間で。

「……やるよ。俺」

迷いのない、答え。「いいんだな?」と念を押すオルガに対して、三日月は頷いてみせる。

「みんなで戦っても勝てるの確かだ。けどそうすれば犠牲も出る。この戦いは『手段』だ。戦うことが目的じゃなくて、『その先にあるもの』を掴むための。ここにいるみんながそれぞれの目的を持つてる。ならみんながそれを叶えられるのがいい」

己の家族は鉄華団だ、という意識は変わらない。しかし家族以外に多くの人間と接し、それぞれが様々な思いを抱いて生きていけると言うことを理解しつつある。敵に関しては相変わらず容赦がないが、とりあえずでも味方についた人間には気を配れるようになっていた。

三日月の意識もまた変化している。少しずつ、自分の考えをまとめるように、彼は言葉を紡いだ。

「それに俺は一人で戦うんじゃない。オルガが、鉄華団や反逆軍のみんなが、蒔苗のじいちゃんが、マクマードのおっちゃんが、ランディが、クーデリアが。他にもいろんな人たちが『勝ち筋』をつけてくれた。……だから勝つ。絶対に」

様々な思いを背負うんじゃない、様々な思いを持った人間が『支えてくれている』のだと。漠然としたものではあるが、三日月はそう感じていた。

三日月の言葉を聞き、オルガは力強く頷く。

「分かった。……聞いての通りだ。鉄華団は三日月・オーガスに全権を委任し決闘を任せたい。反逆軍の意見を伺わせてもらおう」

真っ先に答えるのは、ライザ。

「こちらに異存はない。全てを押しつける形になってしまおうが……頼む」

次いで石動。

「三日月・オーガスならば勝てると思ってる。我々の全てを、託す」
コーリスに異論があろうはずもない。

「我々はそちらの決定に従うだけだ。任せよう」
そしてアンダーセンは不敵に笑う。

「さすがはヤツの直弟子といったところか。たいしたタマよ」

襟元をただし、告げる。

「了承した。我々標的艦隊残党と反逆軍は、鉄華団と三日月・オーガスに全権を委任しよう。勝敗の如何に関わらず、全身全霊を持って相対することを期待する」

全ての意思が、三日月に預けられた。その一方で石動はライザとアンダーセンに秘匿回線を開く。

「二尉、一佐。頼みたいことが」

「分かっておる。万が一の時はかの少年を救出し、『鉄華団諸共逃がせ』というのだろうか？」

茶目っ気が乗った表情で言うアンダーセン。ライザも頷いて同意する。

「元々は我々だけでけりをつけなければならなかったことです。最後まで彼らを付き合わせる必要はない。……それに、彼らはこの先の希望となり得る存在。ここで失わせるわけにはいきません」

負けるわけにはいかない戦いだ、勝つばかりとは限らぬ。大人たちはそれを見越して、万が一に備えようとしていた。

ともかく反逆軍の総意にて、決闘は承諾された。両軍が睨み合う真っ只中で、2機のMSは対峙する。

目の前に立つ白きMSに対し、様々な思いを抱くガエリオ。火星での最悪とも言える出会いから、地球に至るまでの戦い。そして敗れ去り、再起してからここまで。

最初は怒りがあった。見下していた。相手の事情などまるで考慮に入れていなかった。今では傲慢だと思ふ。しかし同時にこいつらがいなければという恨みに似た気持ちもないではない。

そういったごちゃごちゃとした気持ちがあつてなお、ガエリオは頭を下げた。

「……感謝する」

短い言葉だ。しかしそれも嘘偽りない、紛れもなく本心である。己の自分勝手な意思で売った喧嘩を真つ向から応え買ってくれる。こちらの意思に応えたのではなく、都合があつたからかも知れない。それでも、涙が出そうになるほどありがたかつた。

対する相手は何も応えない。ただ太刀を肩に担いだまま、じつとこちらを見やっていた。油断も隙も見せず、最初から全力で挑みかかる気満々だ。しかしそれでいい。勝てるとはとても言えない相手だが、負ける気で挑むのは礼を欠くし、何より双方納得するまい。全身全霊を賭けて戦つてこそ、その結果に意味が出る。

息を吐く。そして力のこもった視線を向け、ガエリオは告げた。

「ギャラルホルン、セブンスターズが一角ボードウィン家。ガエリオ・ボードウィン！」

対峙する三日月も、迷いなく。

「鉄華団遊撃部隊隊長、三日月・オーガス」

誰もが固唾をのんで見守る中――

「参るっ！」

最後の戦い。その幕が上がった。

※今回のえぬじい

「飲み屋のツケをどうか！ ボードウィン卿！」

「合コンのセッティングをお願いしますボードウィン卿！」

「女房に三行半を突きつけられそうなんです何とかありませんかボードウィン卿！」

「さて貴様ら全部背負うってそういうことじゃないだろ」

「「ラストタル様はやってくれましたよ?」「」
「マジで!?!」

56・お前の旗（意思）を掲げろ！

双方の軍勢が睨み合っている主戦場から離れた位置。ラーズグリースのシグナルが消失した空域に、ライドとビトーは急行していた。

「ししよー！ どこっすかア!？」

「おい死んでんじゃねえだろうなおっさん！」

そんなことを言いながら探索していた彼らが見つけたのは。

ボロボロになってピクリとも動かない、死に体に見えるラーズグリースであった。

「え!?! ちょっと、ししよー！ ししよー!？」

「おい待てマジ死んでんじゃねーだろうなふぎけんな!？」

泡を食って二人は機体をラーズグリースに取り付かせ、機体を飛び出しコクピットへと向かう。

「ライド！ ハッチの開閉ノブはどっちだ!？」

「確かこっちの方に……」

焦りまくっている二人の前で、外部ハッチが爆発ボルトで吹っ飛び

「だあらっしやあくソオルア!!」

インナーハッチが蹴り開けられ、何者かが這い出てくる。そのヘルメットシールド越しの顔を見た二人は、思わず抱き合ってから後退した。

「うわあ化けて出たあ!？」

「足はついてるってんだよ、G過多で内出血してるだけだっつーの」

這い出てきたランディの顔は殴り合いをした後のように血まみれで腫れ上がっていた。本人言うように内出血が酷すぎて打撲傷のよくな様相になっているのだが、それ以外にも各所に骨折や罅が入っているはずだ。だというのにその動きには支障がなさそうに見えた。元気なことである。

「この程度飯食って再生ポッドで寝てりやすぐ治るわい」

「そ、そーっすか。……でもなんで動かなかったんすか？ シグナル

も消えてるし」

「リミッター外してぶん回したら、システムに負荷がかかりすぎてシャットダウンしちゃったんだよ。戦ってる最中じゃなかったのが不幸中の幸いってヤツだ」

モルガンブライドを仕留めた後、まるで力尽きたかのようにラーズグリーズのシステムは落ちた。この戦いにおける己の役目は終わったと言わんばかりに。近くにモルガンブライドの姿がないのは撃破された後どこかに流されたのだろう。回収している余裕はなかったはずだから。

それからここまで放っておかれたのは、アリアンロッド艦隊が混乱していたからだ。通信機器も使えなかったのでそこら辺の事情が分からないランデイは、二人に問う。

「で、状況はどうなってる」

かくかくしかじかと説明がなされた。

「なるほどな。……もう俺の出る幕はなさそうだ」

機体と同様に、自分の役目は終わったとランデイは判断する。それは『この戦いにおいてだけではない』が、とりあえずそれは置いて、二人に声をかけた。

「ともかくこっちは動けねえ。悪りいがサカリビまで曳航してくれや」

「うっす。了解しました」

「怪我人なんだから大人しくしといてくれよ？」

そう言つて二人は自分の機体に戻り、作業を始める。それを背景にランデイはコクピットの縁にどっかりと腰を下ろした。

「過去を背負った者と、未来に突き進む者のカードつかか。……まあ三日月は、もう俺なんぞ超えちまつてるかも知れねえが」

彼方の決戦場を見据え、ランデイは頬杖をついてにやりと笑う。

「『魅せて』みな三日月。お前の可能性を」

機体を疾駆させたガエリオは、その全能力を解き放つ。

「すまないなアイン……もう少しだけ付き合ってくれ！」

シートと一体化したシステムが唸りを上げ、リアクターが出力を上げる。機体のスペックはともかく反応速度は同等、戦術の幅はキマリスが上回っている。戦いようはあるはずだ。

対する三日月は、静かに太刀を引き抜いて。

「やるぞバルバトス。最初から全開だ」

油断も手加減も出来ない相手だと見越している三日月は慌ても騒ぎもしない。淡々とシステムをフルコンタクト。リミッターを解放。解き放たれたリアクターがオーバードライブを始める。

同時に――

フ……フフフフ……。

咆吼のような音が響く。それは決闘を注視していた両艦隊の元にも届いていた。

「な、なんだこの音は？」

「真空中だぞ？ 攻撃が当たったわけでもないのに音が響くなど……」

「バルバトスからか？ エイハブウェーブが変化している？」

皆がざわつく中、イサリビの艦長席に座し腕を組んで見守っているオルガが、ふ、と笑んだ。

「……風が吠えたか」

バルバトスが変化を始める。両眼が赤く染まり、放電現象が生じる。次いで両肩の装甲が跳ね上がり、両肘と両膝についた突起物が展開。現れるのは過剰な熱を赤外線と電磁波に変換して空間に放出する強制冷却機構。機体の周囲に陽炎が沸き、轟音はさらに大きく響き渡った。

フフフフフフフフフフフフフフフフフフッ！！

ガンダムフレームのツインリアクターは、元々対MA用に他者のリアクターによる防御力を低下させるエイハブウェーブを放つが、改装

されたバルバトス・ゲブリユルヴィントはフレームそのものから大幅に手を入れられた影響か、オーバドライブ時に発生するエイハブウェーブが周囲のナノラミネート装甲と共振現象を起こす。そのときに装甲自体を僅かに振動させ、咆吼のような音が響くのだ。

『吠える疾風』と名付けられた由来である。サンドバルとの戦いは混戦中だったため全体からは認識されていなかったが、その鬼神のごとき姿は今度こそはつきりと白日の下にさらされていた。

「こけおどしではあるまい！ 様子見などなしだ！」

構わずガエリオは突っ込む。回転するドリルランスを振るい、全力で打ちかかった。

耳障りな金属音。全力で打ち込んだランスは、しっかりと受け止められる。

いや。

(受け流された……?)

僅かな時間の間にガエリオは見る。ガンダムフレームの膂力でもって打ち込まれた大重量のランスが、比すれば細柳のような太刀にて留められている。真正面から受け止めるのではなく、流れに逆らわず柔らかく衝撃を吸収した。ただの技術ではない。機体の各所に備えられたイナーシャ・コントローラーによる慣性制御をも十全に利用した総合的な結果。全てが分からないにしても大まかなところを見て取った刹那の次には、ゆらりとバルバトスが動きを見せる。

「っー」

ガエリオ本人よりも早くシステムの『本能』が機体を下がらせる。その胸先を、太刀の切っ先が掠めた。

一瞬にして斬り込んだのだ。その太刀筋は、もはやただの我流ではない。

今の改良阿頼耶識を最初に接続調整したとき、意識を失った三日月とバルバトスは互いに持つ戦闘情報をやりとりした。その際三日月は厄祭戦の戦闘経験を、バルバトスは三日月が重ねてきた戦闘経験を、それぞれ得て同調率を向上させていた。

今の三日月とバルバトスは単に阿頼耶識で接合されているだけで

なく、正しく人機一体の境地にある。運動性能とトリッキーさだけであればラースグリーズに軍配が上がるだろうが、総合性能は上回っているだろう。

無論なんの代償もなく能力を行使できるわけではない。身体に障害が出るほどの負荷はなくなったが、その分精神的な集中力を要する。十全に力を振るおうとすれば、例えば機体各所のイナーシャコントロールを一つ一つを満遍なく制御しなければならぬのだ。三日月をして数分戦った程度で疲れると言わせた負担がどれほどのものか。想像に難くない。

ともかく予想以上の難敵だとガエリオは判断する。勢いに任せた攻めはむしろ危険だ。距離を取り牽制の射撃を浴びせながら彼は思案した。

「懐に飛び込まればこちらが不利か。機動戦で一撃離脱を挑む！」

僅かな時間で決断。重さに乗せた一撃ならばこちらが上だが、相手はそれを受け流す技量がある。ならば休む間もなく『受け流させ続けよう』。制御するのが人間であれば、疲労も蓄積しいずれは粗が出てくる。それは自分も同じ事。どちらが先に根を上げるか、それとも戦いを切り替えるか。戦術も思考も出し惜しみせず全てをぶつける。攻め方が変わった。強烈な一撃を繰り出して離れる。それを繰り返すつもりかと三日月は即座に見破った。

「こつちを疲れさせるつもり？ なら、こうだ」

相手の打ち込み、離脱に合わせて、ひゅぱ、と空を奔る何か。それは離脱しようとしたキマリスの足に絡みつく。

「なにっ!?! ……うおっ！」

ぐん、と強く引つ張られる感覚。それをなしたのはバルバトスの背中から伸びるテイルブレード。キマリスの死角から絡みついたそれは、ガエリオの虚を突いた。

無造作に放り投げられるような形で体勢を大きく崩すキマリス。それに向かってバルバトスは斬りかかるが。

「なんとおー！」

膝から飛び出したドリルパイルバンカーが太刀を弾き、ランスが振

るわれバルバトスが避ける。さらに後退しながら可動シールドに備えられたマシンガンで牽制射撃を行うキマリスの様子に、三日月は少しだけ眉を寄せた。

「今の動き……『二人分』？」

癖の違う二つの動きが、今の一連の流れにあつた。それ自体はたいした問題ではないと見る。いくら動きが複雑であろうと、『機体の限界は超えられない』。ランディから叩き込まれたことだ。同じガンダムフレームである以上、その能力は三日月の想定範囲内に収まり、全力を出した自分とバルバトスなら十分対処できる。

脅威ではない、はずだ。動きの一つは以前エドモントンで戦った大型MSのものに酷似しているが、あのとときのような『圧』を感じられず、機械的なもののように思える。もう一つはあの機体本来の乗り手が鍛え上げたものなのだろう。合わせても自分には届かないと見た。だというのに。

「いやな予感がするな。まだ何か隠し札がある」

三日月の嗅覚は、奥の手の存在を感じ取っていた。バルバトスのような機能向上か、それとも何らかの武器か。やもすれば一発逆転を狙える何か。そのような物があると。

相手も戦力差はそれなりに理解しているはずだ。だというのに諦観もやけになった様子もない。なんらかの『勝ち目』があるから諦めていないのだ。

そのような相手はなめてかかれない。勝つために、目的を果たすために全力を尽くす。長々と時間はかけられない。だが同時に勝負を焦ってもいけない。すう、と三日月は呼吸を整えた。

「……いつも通りにやるだけさ」

目的を果たすために全力を尽くす。それはこちらも同じ事である。今出せる最善をたたきつける。世界の運命を背負っているながらも、彼は全くいつも通りであった。

相対しているガエリオは、厳しい表情である。

「強い。……マクギリスと同等か、それ以上」

マクギリスとの戦いで手を抜いたつもりはない。だが全てを出し

切る前に中途半端なところで戦いは中断された。互いにまだ余力はあったのだ。

その余力を全て出し切ったところで目の前の相手に勝てるか。同じガンダムフレームであるが『完成度は向こうの方が高い』。キマリスヴィダールはいくつか改修しているが、基本的には厄祭戦当時と大きな差はない。しかしバルバトスはフレーム部分から大部分が手を入れられ、別物と言ってもいい。当然ながら性能も向上している。

そして乗り手もマクギリスに劣らない戦士だ。幾度か戦った相手だが、そのときに比べ技量は格段に向上していた。阿頼耶識Type Eをもつてしても届くかどうか。

「いや……諦めてしまえば、届くものも届かなくなる」

この戦いを始めたのは負けるためではない。『終わらせるため』だ。凄惨な血みどろの結果よりはましな終わり方をさせる。そのために。

自覚が薄かったとは言え散々好き勝手振る舞ったあげく、死に損ない道を踏み外した自分が今更何を、そう思わないではない。ランディあたりが相對していたならば、その辺りのことで散々おちよくり煽りまくったことであろう。

それでも、だ。偽善であろうと何だろうと、アリアンロッドの隊員たちを見捨てることは出来なかった。自己満足と言わば言え。なりふりなど構うものか。今はただ、死力を尽くすのみ。

もう二度と、後悔しないために。

マクギリスのことも、ラスタルのことも。……アインのことも。もつと自分が真剣に、全力を尽くして相對していれば。そのような悔いがある。

もつとも自分が全てを変えられた、などと自惚れているわけではない。だが自分は『関われる立場にいた』のは間違いないことだ。少しでも、あと一步でも踏み込めていられたら。ちよつとでも何かが違うていたかも知れない。

詮無いことだ。感傷と言ってもいい。だが後悔だけを胸に抱え、何も出来なかった自分を嘆き悲劇的な結末を見過ごす。そのような真似だけは出来なかった。

多くのものを取りこぼしてきた自分だが、まだ出来ることがある。そのために最善を尽くそう。どうせ一度死んだ身だ。ここで使い潰しても構うものか。開き直りにも似た覚悟。ここに来てやつとガエリオは迷いを捨てたのだ。

「出し尽くす。全てを……っ！」

リアクターが唸りを上げ、キマリスは咆吼する疾風の化身に食らいつく。

目にもとまらぬ激戦が続く中、それを見守るアリアンロッド艦隊の中央付近。第3艦隊旗艦の艦橋は緊張感に包まれていた。

その中核となっているのは艦隊司令だ。本来であればラスタルから指揮権を引き継ぎ、アリアンロッドを引きいらなければならぬ立場だが、全てにおいてラスタルに劣り、その上家柄とラスタルに対する忠誠心だけを買われて要職に就いていたためか、咄嗟の判断が出来ない。結局狼狽えているうちに、ガエリオへ全てを押しつけるような形となってしまった。

しかしそれでも艦隊司令を任されているのは伊達ではない。落ち着きを取り戻せばそれなりに『やるべき事』も見えてくる。

見えては来たのだが。

「……では、『エクスカリバーは使えない』というのか？」

密かにエクスカリバー設置施設に連絡を取り状況を確認している。もし使用可能であればあわよくば……そのような思いからであったが、どうにも状況は芳しくない。

「発射なら可能です。しかし部品の一部に僅かな歪みがあり、射撃範囲が確定できません。このまま撃てば、どこに飛んでいくか」

完全な致命傷ではなかったが、使用するのには難しい損傷。嫌らしいダメージの与え方だ。苦々しく眉を寄せながら、指令は続けて問う

た。

「修復は出来ないのか？ 例えば部品を交換するとか」

「損傷箇所の交換は可能です。しかしそれには最低1時間は必要かと。その上で調整を加えれば、射撃が可能になるまで2時間はいただと思います」

憎々しいまでに冷静な受け答え。ラスタル相手でも同じ事であっただろうが、指令は侮られているようにも感じた。

だがラスタルほど剛気ではない彼は、強く意見を述べることなど出来なかった。

「……ならば修復を。決闘が長引けば、使える場面があるかも知れん」
確実に戦力とする方を優先とした、そういえば聞こえがいいが問題を先送りにしたとも言える。決闘が長引く、とは言っても2時間以上続くとはとても思えない。そしてどのような形にしろ『終わればその先がある』。互いが納得し矛を収めればそれでいいが、そうでなかった場合は。そしてそのときに自分はエクスカリバーを撃てと命じることが出来るのか。

すでにその存在、威力は露見し、あらゆる組織が脅威と見るだろう。これから先エクスカリバーを使うのであれば『全世界が敵になる』。そう言っても過言ではない。

ラスタルはやった。後に全世界から敵視されることが分かっているながらも、今ここで勝利しなければ意味がないと。だが同じ事が出来るのか。血塗られた覇道を歩むことが。

それほどの器ではないと自覚がある。加えて『エクスカリバーは無敵の兵器ではない』と言うことを理解していた。欠点も多く、対処法はいくらでもあった。そのようなものに全てをかけられるほど豪胆ではない。

指令がこの機に全てを掌握しようという野心家でなかったのは、果たして幸運だったのかどうなのか。ともかく彼は戦いを続けることに対し二の足を踏んでしまっている。

今はただ、じんまりと重くなってきた胃の辺りをさすりながら、戦いを見守るしかなかった。

新江は、にこやかなまま態度を変えることのないクーデリアに声をかける。

「決闘とは予想外の展開ですが、彼は勝てるのでしょうか」

三日月の實力は知っている。しかし決闘で勝てるかどうかは別問題。實力に差があつてもひよんな事から隙を突かれる、ということもなきにしもあらず。そしてこの決闘で本当に決着がつくのかどうか。新江から見れば不確定要素はまだあるように思えた。

応えるクーデリアは余裕を崩さない。

「勝てますよ。必ず」

断言する。それは過信でも強がりでもない、彼女自身は信じていた。

手首に巻いた三つのミサンガが、優しく揺れる。

コトコトと煮込まれる鍋。オーブンが開かれ焼きたてのチキンが次々とパンに挟まれていく。

「チキンサンド上がったよー！ 持って行ってー！」

「りょうかいー！」

ある意味もう一つの戦場であるキッチンで、待機組手下に仕切っているアトラは、いつも通りであった。

彼女も三日月が決闘に挑んだことは聞いている。しかしその勝利を微塵も疑うことはなかった。

「絶対おなかすかせて帰ってくるから、おいしいもの用意しておかないきゃー！」

そう言つて張り切る彼女の手首でも、ミサンガが揺れている。

斬り結ぶ、斬り結ぶ、斬り結ぶ。

いつ果てるともなく続く交錯。しかし徐々に、戦況は動き始める。

「弾切れか。腕部砲、パージ」

バルバトスが両腕に供えていた砲を破棄する。これで飛び道具はなくなつた。

「くっ、右のドリルが！」

キマリスの右膝に仕込まれたドリルパイルバンカーが折れる。バルバトスの太刀と幾度も打ち合った末、ついに限界を迎えたのだ。

少しずつ、少しずつ。互いの戦力は低下していく。バルバトスは太刀とテイルブレードのみ。キマリスもドリルパイルバンカーの片方とブレードを一本失い、火器の残弾も心許ない。しかしながら、双方ともに闘志は欠けていなかった。

「よく粘る。……似てるな、誰かに」

戦いの中、三日月はキマリスに誰かの面影を見る。力の差が分かっていながら挑み、最後まで諦めず、虎視眈々と勝機を窺う。そういった戦い方には、確かに覚えがあつた。

「そうか、アーヴラウの時の」

2年、いやもう3年近く前か、地球に降り立ったとき、ミレニアム島で、アーヴラウの雪原で。食い下がってきたあのグレイズリッターと似ているのだ。

勝とうという、『命を賭けて目的を果たそうとする強い意志』を感じる。それに懐かしさのようなものを覚える三日月だが。

「ならやっぱり、一瞬たりとも気の抜けない相手だ」

気を引き締め直す。あの雪原の時のように、最後の最後で出し抜かれる訳にはいかない。神経を尖らせる。拳動の一つも見逃すな。全

身で敵を感じ取り、打ちかかれ。

バルバトスの動きは益々鋭さを増していく。

「警戒されているか。当然だが」

切れ味を増す太刀筋に、ガエリオは三日月の意図を見た。

こちらに隙を与えない。仕留めるよりも何よりも、それに重点を置いた戦い方に思える。恐らくは切り札の存在を本能か勘かを感じ取っているのだろう。むやみに勝負をつけようとして、大きく隙を作ればカウンターを食らうと見ているのだ。

良い勘をしている。そして今までにないクレバーな戦い方だ。勝負を焦らず、こちらの勝ち目を潰していくような戦い方。確実に勝利するために腰を据えて持久戦を挑んでいる。このような戦い方が出来るまでに成長しているのだと、いやがおうにも理解できた。

「しかしそのおかげで、こちらも保たせられる！」

一気に勝負をつけようとしな分、一つ一つの打撃はまだ凌いでいける。徐々に武器も残弾も失いつつあるが、戦闘に支障のある損傷はまだ受けていない。戦える。戦い続けていける限り、勝機はある。

それが例え爪先ほどに小さな可能性であっても――

「まだ終わらない。俺が諦めない限りは！」

その小さな可能性を引き寄せる。我知らずカルタと同じ判断と覚悟を持って、ガエリオは戦いに没頭した。

腰部に備えられたもう一本のブレードを引き抜かず、ドリルランスを両手持ちで振り回してから構え直す。この得物の重量と特性にも助けられていた。あるいは対艦ソードメイスが残っていたならば、圧倒されていたかも知れない。そういった運にも恵まれていた。

太刀と打ち合う。受け流され続けるが、重量差のある得物を受け流し続けるのは相当に精神力を削られるだろう。そして回転するドリル部は、うまく凌いでも太刀の刀身に負担を与える。事実バルバトスが振るう太刀は僅かながらも刃こぼれが生じ始めていた。もう武器も残り少ない状況でそのようなことに気を配らなければならぬとなれば、いつまで集中していられるか。

こちらとて僅かな隙が致命傷になるだろう事は重々承知。そもそ

もいつでもひっくり返される力量差なのだ。粘って粘って粘りまくるしかない。

互いが耐えしのぎ、読み合い、攻める。端から見れば、互角の戦いに見えるだろう。そもそもが目で追えるものなどごく少数なのだが。ともかく千日手にも思える激戦の中、ガエリオは気づいた。

『根元に近づいてきている』……っ！』
ランスを受け流す位置。それが先端から徐々に根元の方へと変化していた。

『僅かずつ踏み込んでいる』のだ。二人分の特性が入れ替わり立ち替わり組み変わるこちらの技量を見切り、そして己の技を成長させながら。

阿頼耶識Type。アイン・ダルトンの脳を利用したシステムは、ガエリオの負担を可能な限り軽減するが、『現状以上には成長しない』。どちらかと言えば本能に近い、『最適化した技術を条件反射的に振るうもの』だ。そしてガエリオ自身の技量はすでに限界に近い。未だ成長過程にある三日月に後れを取り始めるのは当然と言えた。

だが。

『それでいい』！』

敗色が見えてきてなお、ガエリオは諦めない。

対する三日月は、優位にありながらも眉を顰めていた。

「一端距離を取るか？……いや、仕切り直しこそが狙いかも」

ここまで追い込まれながらも、未だ切り札を切らない相手に不気味さを覚える。そろそろ相手のパターンは見切った。そして相手もそれを理解している頃だ。いつでもとは言わないが、折を見れば一瞬にして勝負が決まるところにまで来ていた。

こちらが勝負に出るところを狙っている。そうとも思えた。そうでないように見えた。勝負をつけようと思えばつけられる。余裕ではなく事実が、迷いとも言えない迷いを生む。

『ここだ』

隙が生じたのではない。斬り結ぶ最中、前触れも誘いもなく唐突に強引に、『切り札をねじ込む』。ここまで詰まった距離、そしてこの夕

イミングでしか虚をつけない。ガエリオはそう判断したのだ。

胸部左右の装甲がはじけ飛ぶ。現れるのはリアクター直結型の圧縮回路と冷却機関を備えた機構、「マルチスロットアクセラレーター」。本来であればガンダムフレーム特有のエイハブウェーブを前面に集中照射し、MAに対する防御力低下の効果を増幅する近接戦闘用の補助装備だ。あくまで対MA用の装備であり、同じガンダムフレームに対しては効果が薄い。

しかし、効果が薄いだけで『全く効果がないわけではない』。

「な、に?！」

ほんの僅か、バルバトスの動きそのものが鈍る。集中照射されたエイハブウェーブが、慣性制御の効果を僅かに打ち消したのだ。それ自体は致命傷にもならない、ごくごく刹那の遅延でしかなかった。

攻撃であるかと思いい、切り払いながら体勢を立て直そうとしていたバルバトスの動きに戸惑いがでた。勝負を賭けるなら、ここしかない。

「おおおっ!」

ランスを構える。同時にサブアームに備えられているシールドがスライドして内部機構が露出。ランスの基部に接合された。

そこから刺突（チャージ）。旋回するドリルランスをまっすぐに突き込む。

「弾く……!?!」

切り払おうとして気づく。センサーが捉えた反応。ランスの基部に生じたそれは、どこかで見覚えがあった。つい最近……いや、『この戦いの中で』。

『『ダインスレイブ』!』

リアンロット艦隊の前に布陣していたダインスレイブ隊。それと同じ反応だと察する。そう。キマリスヴィダールはフラウロスと同じく、対MA用にダインスレイブ砲を備えていた。それはシールドと一体化している弾倉を兼ねた動力ユニットを接続することによって使用可能となる。装填されているのは特殊KEP弾頭が片方4発ずつ。威力はグレイズで使用していたものより劣るが、発射速度で上

回り、加えて連射が可能だ。

詳しい性能まで三日月には分からない。だが熱反応を見ればもう発射できる状態にあると知れた。この位置からでは完全に回避できず、その上かすただけでも戦闘に支障が出るダメージを食らわさせてくる代物だ。刹那でそれを理解。回避できないのであれば――

バルバトスが構えを変える。

ほぼ同時にダインスレイブが放たれた。たぐり寄せた勝機。乾坤一擲の一撃はしかし。

ぎやりん！ と耳障りな金属音と共に、飛び散る火花。ガエリオは驚愕の声を上げる。

「太刀でっ！ 『ダインスレイブ弾を斬った』だと!？」

砲口に向け、タイミングを合わせて太刀を振るつたのだ。避けられないのであれば斬ればいい。三日月とバルバトスの超絶な反応速度はそれを可能とした。

だが、それと引き換えに。

ぱきり、と太刀が中程から折れる。

緩和していたとはいえ、大重量かつ粉碎機能を持つドリルランスを受け流し続けダメージが蓄積されていた。その上で超高速の特殊KEP弾頭を真正面からぶった切るなんて無茶をやらかしたのだ。当然の結果と言える。

「……拙いか」

三日月が呟く。一気に天秤が傾いた、と言うほどではないが、バルバトスの戦力が落ちたことには変わりがない。折れた太刀を破棄し残る武器はテイルブレードのみ。一応両手の指先も硬化レアアロイ製で武器として転用できるが、懐に飛び込む必要がある。テイルブレードでどこまで牽制できるか。算段しながら三日月は機体を上方に飛び出させる。

真正面からではダインスレイブに対して不利。機動力で攪乱し、改めて機会を窺う。そのもくろみを阻害せんと、ガエリオはランスをバルバトスに向けようとすが、

「くっ、この、尻尾か！」

テイルブレードに邪魔をされる。それを振り払う間にも、バルバトスは縦横無尽に駆けた。

その最中、三日月は『見つける』。

「……はは、ツイてるな」

珍しく、本当に珍しく彼は小さな笑みを見せた。

『それ』を力強く手に取る。バルバトスは電光のごとき機動でキマリスに迫った。

「素手で挑みかかるつもり……なにっ!？」

があんと、したたかにランスを打つ衝撃。それをなしたのは、『以前バルバトスが装備していた大型メイス』だ。

「いつの間!?」 一体どこから!？」

それは偶然にしてもできすぎであった。3年近く前、大気圏突入の時。キマリス相手に戦っている最中破棄したそれは、あてどもなく漂った末にこの戦場に流れ着いていたようである。正しく天の采配と言えよう。

ともかく新たに獲物を得たバルバトスは、先ほどまでの消極的な戦いとうって変わって果敢に攻め込む。切り札たるダインスレイブをこれ以上使わせないためだ。その上で、マルチスロットアクセラレーターを警戒し、真正面に位置取らないよう立ち回る。

再びの形勢逆転。ガエリオは歯噛み、堪えた。

「武器の重量ならばこちらが上だ! 打ち合いに持ち込めば!」

渾身を込めてメイスと打ち合う。その重量差は確かにバルバトスの打ち込みをはじき返したが。

どがむ、と追加の衝撃。バルバトスが蹴りと同時にヒールバンカーを撃ち込んだのだ。その狙いはランスとサブアームの接合部。引きちぎられたシールドが、勢いよく吹っ飛んだ。

だがシールド——ダインスレイブの発射機構はもう一つある。後退しながらランスを持ち替えるキマリス。そうはさせじと追うバルバトス。

そこでキマリスが、『ランスを投げつけた』。

「これでっ!」

3年前とは逆。バルバトスの虚を突きながら、キマリスは腰に残ったブレードを抜き打つ。狙いは胴体。決まれば最低でも相打ちに持ち込める。これが最後の勝負だと、ガエリオは全てをかけた一閃を放った。

ランスがあさつての方向に弾き飛ばされ、そこからがつ、と衝撃が奔る。バルバトスが逆手に構えたメイスは、先端から左胸のマルチスロットアクセラレーターを押しつぶす形でとどまり、キマリスのブレードはバルバトスの胴体に……『届いていない』。

「悪いね。『こつちも4本腕なんだ』」

必殺の一撃を防いだのは、バルバトスの腰部サイドアーマーから伸びたサブアーム。ガエリオの誘い込みを、三日月は読み切ったのだ。

メイスに仕込まれたパイルバンカーが作動。胸部が貫かれる。

キマリスのカメラアイが、光を失った。

※バトルシーンで筆者が力尽きたので、今回えぬじいなし。

57・明日は未来（あした）の風が吹く 前編

マクギリスの乱。その最終決戦にて行われた決闘は、バルバトス――
――叛逆軍の勝利に終わった。

その直後、あるいはアリアンロッド艦隊の中には報復行動に出ようとしたものがいたかもしれない。しかしそれは他ならぬ当事者の一方、『ガエリオ・ボードウィン本人の敗北宣言』にて押さえ込まれる。

歴史に残る戦い。それは予想以上に早く、少ない被害と死傷者で幕を閉じる。

そして――

『アリアンロッドを下した叛逆軍は、そのままGHを掌握。セブンスターズの権限を凍結すると同時に、全軍に指揮下へ入るよう要請。一部を除いて従う事となった兵たちに引き続き治安維持に努めるよう指示し、その一方で各経済圏の介入を承諾。組織の改革に乗り出した。

その際臨時の総司令代理として推挙されたのはアンダーセン元一佐。彼を暫定的な代表として新体制はスタートを切った』

「貴官ら、最初からこうする予定だったな？」

総司令の席で書類の山やタブレットの壁と格闘しているアンダーセンが、恨みがましい声を出す。同室で同じように仕事を成敗しながらライザは済まして答えた。

「当然でしょう。我々はまだ経験不足の若造に過ぎない。この困難を乗り越えるためには経験豊富な人材が必須。何のためにご老体を引きずり出したと思っておられるのですか」

「いいよるわこの野郎馬鹿野郎。折角悠々自適に隠居生活としやれ込んでおったのに」

「あと10年は引き延ばしていただきたい。彼が来る前の標的艦隊でサボっていた分、きつちりと仕事をしていただきますよ」

「あのイカレ小僧に影響受けすぎだろう貴官ら」

渋面になるアンダーセンだが、強く拒否しないところを見るとなんだかんだでやる気のような。元々現体制に不満があつて腐つていた人物である。それを自らの手で覆せるともなれば、それなりに思うところもあつただろう。トップに据えられるとまでは思っていないかっただろうが。

「ともかくやるべき事は多い。儂ばかり働かせず貴官らもきりきり働けい」

「言われるまでもなく。一つ一つこなしていきますよ。……今まで通りにね」

『セブンスターズを筆頭に、多くのGH幹部たちはその立場を追われる事となる。しかし中には例外もあつた。

カルタ・イシュー。反逆軍に協力的であつた彼女は、セブンスターズとしての権限こそ失つたものの、オブサーバーとして改革に参加することとなる』

「こちらの資料のまとめは終わった。司令部と、そしてコピーを経済圏の監察に。詳細はクラウドのデータバンクに上げておいたので、そちらを確認するようにと伝えろ」

「はっ！」

別室にて、アンダーセンたちと同じように、資料の山相手に奮戦しているカルタ。彼らと違うのは警務部の監視（実質的には護衛）がついており、行動が制限されているところだろう。それに対し彼女は何をいうでもなく、統制統合艦隊が解散してからも従う配下たちと共に、GH内で秘匿されていた資料を引っ張り出し整理。提出を繰り返していた。

反逆軍との軋轢などがあるかと思われたが、秘匿されていたものの中に、セブンスターズであった彼女の協力がなければ引き出せない物もあったため、オブザーバー参加はむしろ歓迎されている。

「事前に手をつけていてこれか。まったく、どれだけ後ろ暗いことがあるのやら」

一区切りつけたカルタはコーヒーマグカップを傾けつつ眉を寄せる。

己が持つ権限を維持するため、GHがどれだけのことを行ってきたか。そして裏でどのように動いてきたか。300年の間によくもまあこれだけと呆れ返るような内容のものが、際限なく掘り出されていた。

「貴女のおかげでGHの暗部が多くを表沙汰にすることが出来そうです。ありがとうございます」

カルタの元を訪れた石動が深々と頭を下げる。カルタはふ、と笑みをこぼした。

「立つ鳥跡を濁さず、というでしょう？ やり残しのないようにしておきたいだけよ」

「……やはり、残ってはいただけませんか」

心なしか残念そうな様子で石動が言う。新体制が整えば、カルタはオブサーバーの立場からも身を引き、GHから離れることを決めていた。

「元よりセブンススターズのメンバーはGHから離す予定。私だけを残すのも筋が通らない話でしょう」

「残念です。貴女が希望するならば我らの幹部を説き伏せる心づもりでしたが」

「気持ちだけ受け取っておくわ。過去の遺物に頼らなくとも、自力で未来を切り開く気概を見せてご覧なさい」

「金言、ありがたく」

後ろ髪引かれる思いがないわけではなかった。しかし個人としても組織としてもけじめはつけておくべきだろう。過去と決別し、未来に向かって歩く。足踏みばかりしているわけにはいかない。

（そうね、これが終わったら、本格的に身の振り方を考えなければ、ね）
幸いにして個人資産までは没収されていないし、職を辞するとすれば時間は腐るほどある。

秘めたる想い——かつてマクギリスに抱いた思慕は、全てが昇華されたわけではない。奥底に、残り火のように疼き続けている。それとどう折り合いをつけるにしても、時間は必要だった。

じっくりと考えよう。色々と思うところはあるけれど、そうやって想いを持って余し巡らすこと。それはきつと、GHで肩肘張って生きてきたときに比べれば、贅沢な時間の使い方だろうから。カルタは前向きに未来へ思いをさせていた。

カルタの配下たちも、多くが職を辞して彼女について行くつもりのようにであった。

しかし中には例外もある。

「貴官も残るとはな。意外だったよ」

「こちらの台詞だ。お互い物好きなことさ」

コーリスとイツヒ。彼らは実働部隊としてGHに残留することとなった。反逆軍に協力した実績と、ガエリオの言葉に便乗しアリアンロッドが報復行動に出ようとするのを抑えた機転を買われたのだ。

もちろんからら全員がそっくりそのまま、というわけではない。部隊は細かく分けられ、それぞれが別々の部署に配置されたり、指揮官級は階級を下げられたりしている。コーリスたち自身も階級を下げられ一士官として再編成されていた。

「反逆軍、いや今ではGH改革勢力か。彼らはよく頑張っていると思うが、人手不足は否めまい。我々は猫の手といったところだな」

事実多くの人間が強制的、あるいは自主的にGHを辞することとなったため、人手は不足しつつある。元々改革で規模を縮小し人員も整理する予定ではあったが、経済圏からの介入は想像以上に厳しいもので、身動きのとれない部分も多かった。GHが横暴のしつぺ返しといったところであるが、ともかく実働できる人間を一人でも多く欲していたため、首脳部が問題ないと判断した人間は積極的に再編成に組み込まれている。

とはいえ、二人も望めばカルタについて行くことは出来ただろうが。

「人手不足につけ込んで、誰か不埒な輩がいらぬ事を企むやも知れん。そのようなものがはびこるのは我慢ならんしな」

「そして実績を作っておけば、万一の時に『カルタ様がお帰りになりやすい』、か」

もし万が一、改革されたGHが再び権力に取り付かれ暴走を始めたならば、いかなる立場にあらうともカルタは必ず戻ってくる。そのときに受け入れやすい体制を作っておくことは、決して無駄ではないと彼らは思っていた。

側にいることだけが忠義ではない。彼らは実地でそれを示さんとする本物の忠臣と言えた。

「折角拾った命だ。有意義に使ってみるさ」

「そうだな。……いづれあの男に、借りを返すためにも」

地球外縁軌道統制統合艦隊は解体されたが、『終わったわけではない』。形を変え、その意思は生き続ける。

男たちはそう信じて歩み続けた。

『その他のセブンスターズは早々にその立場を失い、権力者の立場から墜とされた。しかし立場を失ったものの、資産などまで没収されたわけではない。その先の人生をどう生きるかはそれぞれの手に委ねられた。その中の一人、アリアンロッドの中核を一時的にもなったガエリオ・ボードウィンもまた、己の人生を歩んでいかねばならない。生き残ってしまったのだから』

某国にある保養地。その総合病院の中庭で、車椅子に座したガエリオは傍らの人物に話しかけていた。

「中々に難しい物だよりハビリというものは。カルタはよくぞあそこまで回復して見せたものさ」

車椅子に備えられた杖を軽く持ち上げ苦笑する。阿頼耶識の恩恵にて常人と変わらぬ身体能力を保持していた彼であるが、戦いが終わった後システムの除去手術を受け、そして改めて再生とナノマシンを組み合わせた新たな治療を受けていた。リハビリを受ければ常人並の身体能力を取り戻せるというその治療を、一度は辞退しようとしたが。

「あなたには義務がある。代表が命を賭け、築こうとしていた未来を見守る義務が」

そのような発破を石動にかけられたのだ。そもそも敗者たる自分が生きながらえただけでも儲けものだ。複雑な思いはあったが、結局は申し入れを受け入れた。

とにもかくにもまずは動けるようになるところから始めよう。戦いを終え、目的を失っていたガエリオは、少しずつ気力を取り戻しつつある。

そんなガエリオの元を訪れたのは。

「それで、わざわざ見舞いに訪れたわけでもないだろう？ 君は」
「……お見通しですか」

私服姿のジュリエッタ。バルバトスに敗北し意識を失っていた彼女は、偶然接近した内火艇に救助されたのだ。その内火艇がヤマジンの乗ったものだったことがまたよかった。ひしゃげた機体からジュリエッタを引きずり出すのは、結構な技術を要したのだから。

彼女はラスタルの直属であったことから危険視され、GHから追われた。一応退職金と失業保険はもらっているので即座に飢え死にするようなことはないが……彼女は生きる目的そのものを失っていた。

あの戦いの中にあつた滾るような復讐心はもうない。なりふり構わぬ全力を出し、それでも届かず路傍の石のように蹴散らされた事により、心が折れたのだ。彼女がその気になれば、野に下ったGH残党を集め、反抗勢力を作れたかも知れないが……そのような気力など持ち得ない喪失感が、心を支配している。

何も、出来なかつた。己は弱く、無力だつたと後悔ばかりが押し寄せる。行く当てもなく、やるべき事も分からない。GHという箱庭から放り出された彼女は、何の力もない一人の女に過ぎなかつた。

「あなたもGHを辞したと聞きました。その体では仕方がないことではありますが、これからどうするつもりなのか、参考までに伺いたいと思ひまして」

藁にもすがる思い、なのかも知れなかつた。ガエリオとて不自由な体で、己のことで手一杯であろう。それでも何か言つて欲しくて、わ

わざわざ出向いてきたのだ。

ガエリオも、八つ当たりじみた復讐心は失せている。その対象がいなくなっただけと言うこともあるが、全ての力を出し切った戦いの結果を、彼は自分でも驚くほどすんなりと受け入れていた。

結果的に自分が望んだとおり、事態を軟着陸させることが出来たから。とも思えるし、力を出し切って燃え尽きたからとも思える。いずれにせよ改革勢力に対し何らかのアクションを起こそうという気はない。

『今のところは』。

「そうだな……もうセブンスターズも何もない。財産を没収されなかっただけありがたい話さ。父は落ち込んでいるけどな」

ヴィーンゴールヴから中立国に用意された邸宅に移ったガルスだが、すっかりと意気消沈して引きこもっているようだ。これまで何もしてこなかった男は、これから何をすればいいのか分からず途方に暮れているのだろう。あるいは全てに裏切られたかのような失望感に囚われているのかも知れない。

他のメンバー——ネモやエレクも似たような状況に追いやられている。監視もつけられ早々派手な動きは出来ないが、彼らはそもそも事なかれ主義で日和った人間だ。資産が保証され多少不自由であろうとも身の危険がないのであれば、それなりに妥協も出来る。いずれにせよ、今は何か事を起こす気力もあるまい。

「多分セブンスターズ関連で一番前向きなのは、カルタと『うちの妹』だろうなあ……」

そうこぼしたガエリオは、遠い目で虚空を見上げた。

「アルミリア・『モンターク』と言います。右も左も分かりませんが、皆さんよろしくお願いします！」

ぺこんと頭を下げるアルミリア。彼女は今、地球から遠く離れた火星の地で、一学生として学び始めようとしていた。

GHの改革を見越していたマクギリスは、抱き込んだファリド家の家令にアルミリアの身元保証人となるよう頼み、モンターク商会を利用して個人的に蓄えた莫大な資産を、彼女に譲り渡したのだ。

「マクギリス様からはギャラルホルン、ボードウィン家からも離れ、自由生きるようにと。そのように言付けを預かっております」

アルミリアには新たな戸籍すら用意されていた。籠から解き放たれ、己で学び、己で道を選択すること。それが本当の、自分自身の幸せにつながる。マクギリスはそのようなメッセージを残していた。その力になるようにと頼まれた家令や使用人たちは、どこか誇らしげな様子だった。

「あの方は誰も信じぬと嘯いておられましたけど……貴女を託しても良いと思うくらいには我々に信を置いていただけ。それがうれしいと、年甲斐もなく思ってしまうのですよ」

やはり彼は悪い人間ではないと、アルミリアは改めて思う。でなければここまで慕われはしまい。その彼が用意した道は、やもすれば勝手に生きろと放り出されたようにも見える。しかし彼女はこう思うのだ。『私ならばきつと自力で立ち歩いて行けると見込んだのではないか』と。そう、信じたかった。

ならば行こう。見も知らぬ世界で、知らなければ学び、分からなければ聞き、少しずつ己を高めていく。そして――

(いつか……あなたに誇れる私になれるように)

顔を上げて、前を向いて歩こう。籠から解き放たれた少女は、未来へと進み始めた。

「結局、家族であるはずの俺は何も出来なかったよ。……まあ、あの戦

いを『生かされた』俺は、無力なものなのだろうがね」

「生かされた……？」

ガエリオの言葉に眉を顰めるジュリエッタ。あの戦い、生き残ったのは実力のおかげでも三日月が手加減したからでもない、ガエリオは言う。

最後の一瞬、覚悟を決めたガエリオの意思に反して、『機体は僅かに身をよじった』。

そのおかげでコクピットは直撃を免れ、阿頼耶識Type Eの完全破壊と引き換えにガエリオは九死に一生を得たのだが、生じた結果に何らかの意図を感じずにはいられない。

生きてくれという望みなのか、それとも生きて苦しめという呪いなのか。システムの破壊と共にその意図は失われた。もつとも全ては偶然で、システムは単に条件反射的な作動を行っただけなのかも知れない。

「だが俺は、自分が生き残ってしまったことには意味があると、そう思いたい。善意か悪意かは分からないが生きろと、そう願われたのだ」と

そして敗北を宣言した彼を、三日月は、鉄華団と反逆軍は生かした。もちろんそれはアリアンロッドに降伏を促すためであっただろう。その後、大した処分もなく放逐されたのも結局は向こうの都合だ。その都合が、生かしておくという選択につながったに過ぎない。

何よりも……己を宿敵とまで言い放ったマクギリスが、最後の最後で生かそうとしてくれた。そのおかげで今、ここにある。

色々な要因が重なって、生きている。その生に意味を見いだそうと、ガエリオは前を向き始めたところだ。

「君も生き延びた。どういう事情があるにせよ、死んでるよりは何か出来る。幸いと言うべきか、時間はあるんだ。ゆつくり考えたらいいんじゃないか？」

「私にできるのでしょうか……何かが」

自信を喪失しているジュリエッタの顔は暗い。それを元気づけるつもりか、ガエリオはことさらに明るい調子で言う。

「とりあえずは、俺に雇われてみないか？」

「……え？」

「こんな有様だからね。リハビリを手伝ってくれたらありがたい。それに一応こんななりでも元セブンスターズの一角だ。気心の知れた人間が身辺を警護してくれたら助かるんだけど、どうだい？」

しばらく考え込む。ジュリエッタ。やがて彼女はおずおずと答えを返した。

「お役に立てるかどうかわかりませんが、私で良ければ……」

「そうか！ うん、良かった」

相手を崩すガエリオ。自信を失い目的を見失ったジュリエッタは非常に不安定に見えた。下手をすれば良からぬ方向へ足が向きかねない。手の届くところにおいて何か役目を与えておけば、落ち着くだろうという目論見があった。それを抜きにしても今の彼女を放っておくという選択は出来なかったのだが。

「とりあえずはそうだな、飯でも食うか。無論驕るよ、何がいい？」

ガエリオの言葉に、僅かな懐かしさを感じた。鼻の奥につん、と感じたものを誤魔化すかのように、ジュリエッタはぶつきらばうな様子で告げる。

「肉を。肉を所望します」

「そうか、そいつはいい。君も少し肉をつけた方がいいだろうしな」

笑いながら言うガエリオの言葉に僅かばかりむっとした表情を見せたジュリエッタは、彼の背後に回ると、乱暴に車椅子を押し始めた。

青空の下にひゃあ、という悲鳴が響く。

ジュリエッタには言っていないことがある。

決戦の際機能停止したキマリスは、武装を取り除かれ阿頼耶識システムを外された後、ガエリオの元に返却されていた。

「我々として人間。完全な正義の執行者ではない。もしかしたら道を違えるときがあるかも知れません。……その意味が分かりますね？」

石動に問うたときの答えだ。つまりは自分に『監視者になれ』と、そう望まれているようだった。前任者たちのように権力に取り付かれ、たりした際には起ると、そのようなことを期待しているらしい。

今のガエリオにはまだその覚悟はない。果たしてそのときが来たときには自分は起てるのか。マクギリスのように。

まだ分からないが……いまは事態を見守ろう。そしてじっくりと考えよう。

それもまた、生きる意味となるのだろうか。

『反逆者マクギリスであるが、決戦終結の後、彼が駆ったガンダム・バエルの残骸は発見された。しかし損傷が激しく、特にコクピット周辺はえぐられたかのように完全損失していた。搜索もむなしくマクギリス本人の存在、遺体もその一部すらも確認されず、彼はM I Aと断定された。』

しかしながら遺体が発見されなかったことにより、彼の生存説はまことしやかにささやかれ続けられている』

月軌道上のコロニー群に向かう航路。その上を漂う一隻の輸送船があった。

そのゲストシートに座している男は、苦笑を浮かべて言葉をこぼす。

「生き延びることは想定していたが……こういうのは予想外だったな」

目を覆うサングラス、そして顔半分に残った痛々しい火傷の跡によつて様相は変わっているが……男は確かにマクギリス・ファリドと呼ばれていた人物であつた。

あのあと爆発に飲み込まれたバエルは、高熱の奔流と瓦礫の雪崩に翻弄された。

いかにガンダムフレームと言えどもそれには耐えきれず、機能停止に追い込まれるダメージを受け、そしてマクギリス本人は瀕死の重傷を負つた。それを救つたのは。

「へへ、さしもの旦那も、こういう風に『恩返し』されるたあ思つてやせんでしたか」

にたりと笑いながら言うのは、トド。そして船のブリッジに詰めているのはスカーフフェイス——『元』スカーフフェイスの面々だ。

彼らは重傷にて意識を失つたマクギリスをコクピットブロックごと回収し、密かに匿つていた。実際に生死の境を彷徨い、一時は本当に危険なところまでいってから何とか回復したマクギリスが意識を取り戻したときには、すでにMIAとされており事実上の死亡扱いであつた。

ともあれ生き残れば諸々の責任を被るつもりであつたマクギリスは、GHに戻る気であつたのだが、それは救出した面々と、一枚噛んでいたらしい石動から止められる。

「誰かをスケープゴートにして万々歳、などという真似は、我々からしても『恥』なのですよ」

石動の言葉は、反逆軍の総意と言っても良かった。確かに自分たちはマクギリスの言葉に乗つて事を起こした。しかしそれは自分自身の目的があつての上でだ。そして加担した以上、マクギリスだけに責任を押しつけ知らぬ顔をするのは無責任という物だ。なによりそのようなことをすれば『かつてのGHと大した差はない』。戒めるためにも自分が背負える物は背負っていく。皆がそのように考えたらしい。

一人の誰かによって導かれるものではない、新たな組織の形を見せる。そのためにマクギリスというカリスマが戻ってくるのは、ある意味都合が悪いとも言える。かといって秘密裏に『処分』などするのは論外だ。そのような真似がいやで起ったのに本末転倒という物だろう。

こういった事情でマクギリスは逃された。要するにどいつもこいつもお人好しであったわけだが、本人たちに聞いたならば「代表も似たような物でしょう」と返されるに違いない。ある意味人望を集めまくったマクギリスの自業自得だ。

ともかくにも、マクギリスが再び表に出ることはかなわない。不承不承であるが、本人もそれを認めざるを得なかった。反逆者マクギリスは全ての罪を背負い、死んだのだ。『そういうこと』にしておくことで、改革がスムーズに進んでいるという部分が、確かにあるのだから。

後ろ髪引かれる思いがないではない。

ガエリオ、カルタ、アルミリア。あるいは今からでも彼らと理解し合うことは出来たかも知れないが……それをすれば、『彼ら自身の可能性を阻害する』ようにも思えた。自分という存在に関わり続けることで、彼らの行く先を狭めてしまうのではないかという懸念がある。

石動たちの気遣いに甘え、姿を隠すのは、自分自身の臆病さから来る卑怯な選択だとも思う。だが同時に、自分に拘らずそれぞれの道を歩んで欲しいという真摯な想いが胸の奥にあるのも確かだった。

「それで旦那、これからどうしやす？ モンターク商会は解体しちまったが、財はたんまりある。改めて一旗掲げることも容易くできませぬ」

トドの言葉に、思考を改める。

改革と共にモンタークを含むGHの裏を司る組織は解体される手はずであった。その際様々な物を処分して生じた利益の一部は、退職金的な名目でマクギリスに『押しつけられて』いる。莫大な財であるそれを使えば、悠々自適に暮らすことも、新たに勢力を築き上げる事も出来るだろう。

マクギリスはしばらく考えて、応える。

「……そうだな、表に戻りにくいのであれば、いつそ闇に潜み、『逃げた魚』を追うのも悪くない」

改革でGHを離れた、あるいは離された者はセブンスターズを含めかなりの数である。多くは素直に市井に下ったり、半軟禁生活に甘んじているようだが、一部は行方をくらまし、恐らくは地下に潜った。

そして、裏を司っていた者たちの中にも、同様に姿を消した連中がいた。元々裏の者たちはGHから独立した位置で、どっぷり裏社会に浸っていたのも多い。どさくさに紛れて逐電するのは難しくないだろう。

そのような連中が再起を期して、または私怨で新たに築き上げようとしている秩序を乱す可能性は十分にあつた。そのような者たちの痕跡をたどり、監視し、場合によっては相手取る。マクギリスはそういった役目を請け負おうと考えていた。

日の目を見ない、あるいは終わりの見えぬ長い戦いになるかも知れない。しかしどのみち表には戻れぬのだ。そして出自などから裏には顔が利く自分に取っ手はうってつけな役目だろう。加えて折角新たな時代を切り開けるよう尽力したのに、邪魔をされるのも業腹だし、築き上げた物を密かに護るといのは、一種の責任の取り方ではないかと、そのようにも思う。

何よりも……かつての友と、己を慕ってくれた女性たちに累が及ぶのは赦せるはずがない。それは多分に――

「――自己満足、という自覚はあるがね。……君たちまで付き合う必要はないぞ?」

その言葉に返す答えは決まっている。

「何言つてやすか。そんな面白そうなこと、一人で楽しませるはずがねえでしょ」

トドが言えば、ブリッジに詰めた連中もそうだと同意する。

「俺たちやあなたについて行くって決めたんだ。地獄の底までお付き合いたいしますぜ」

スカーフエイサーを名乗っていた男が、不敵に笑みを浮かべながら

言う。まったく物好きばかりだとかぶりを振るマクギリス。そんな彼も確かに笑みを浮かべていた。

「どうやらまだまだ面白いことになりそうだな。トドはほくそ笑む。」

腐った生き方から一転、随分とやりがいのある人生になった。そのような生き方を与えてくれたこの御仁には感謝している。決して言葉には出さないが。

「ところで旦那、『新しい名前』はどうしやすか？　今までの名前は使えねえでしょ」

確かに。最早マクギリスと名乗るわけにはいかなかった。それは同時に今までの自分との決別を意味する。

待ち望んでいたことだ。とうの昔に忘れ去った生まれたときの名、人身売買組織で与えられたマクギリスと言う名、商会を運営するために使ったモンタークという名。そのどれとも違う新たな、『本当の名前となる名』。それをやっとな乗ることが出来ると気づかされた。

「そうだな……4番目の名前と言うことで、クワトロでも名乗るか？」

男は闇に潜んで生きることを決めた。二度と日の当たる場所には現れない覚悟で。

しかしその表情は、晴れやかな物だった。

『マクギリスだけではない。ラスタル・エリオンを筆頭に多くの兵が命を落とした。』

それは予想されていたより大幅に少ない数ではあったが、それでもこれまでにない規模の『内乱』であったことには違いがない。それによって人員を失い、加えて規模を縮小されていくGHは、驕れる者久しからずと言う言葉通りに衰退していくのだろう』

ヴィーンゴールヴ内技術開発施設。秘匿されていたそれは開示され、各勢力から監察と技術者が送り込まれていた。

そんな中でヤマジン・トーカは目まぐるしく働いている。

「ここも随分寂しくなったねえ」

施設の最奥、セブンスターズのガンダムとバエルが置かれていた封印区画。そこは最早がらんどうであった。

回収されたバエル。そして封印されていたガンダムフレームの全ては、技術研究の名目で持ち出され、各勢力の技術者によって解体。調査、研究されていた。各勢力に平等にMS技術をもたらすためという建前だが、その実情は『偶像』となるものをGHに持たせないためだ。

バエルとアグニカ・カイエルに対する信仰。そのあり方がGHの存在を歪めた部分がある。その間違いを繰り返さないため、そして信仰に依らない組織改革を行うため。この処置は改革勢力の強い要望もあつて行われたことだった。

ヤマジンはキマリスの改修、そして新型阿頼耶識の開発に深く関わった人間である。その責任を問うという話もなかったではないが、それよりも優秀な技術者であることに目をつけられ、技術の開示、研究に協力させた方が利があると判断された。ゆえにこき使われている。

「ここで持ち出せる物はもうないようだね。施設の閉鎖を。ただしロックはいつでも開けられるようにとの要望だ」

配下の技術者たちに告げ、作業を始める。

ガンダムフレームが持ち出されたこの区画は、最早用をなさない。いずれは何らかの施設に取って代わられるかも知れないが、しばらくは閉鎖するしかなかった。

作業を指示しながら、ヤマジンは思う。

(結局、技術は人を超えられなかったって事か……)

彼女が手がけた機体は、全て敗れ去った。レギンレイズ・モルガンブライドに至っては性能面で完全に凌駕していたにもかかわらず、である。

レギンレイズ・ハイムバーの残骸は全て回収されたが、ジュリエッタ以外のパイロットは死亡。サンドバルは骨も残さず焼き尽くされた。そしてマリイは何とか死体は残った、と言う状態であったが、その死に顔は満足げな物であつたらしい。

ともかくジュリア以外に使われた強化阿頼耶識技術は全て破棄された。ただの阿頼耶識ではなく外法の産物であるそれらを残しておくのは危険だと判断されたためだ。一人の技術者としては惜しいと思わないでもなかつたが、その完全消失と引き換えに処罰を受けなかつたようなものだ。文句を言える立場ではない。

そしてダインスレイブやエクスカリバー施設なども接收され、多くが解体、処分される流れとなつた。万が一のため対MA用として最下限のダインスレイブは残されるが、今後はそれらの武器を新たに製造、所持されることに関して罪に問われる事になるかも知れない。これは反逆軍に協力した鉄華団にも適応され、流星号のダインスレイブやストーンヘンジレールガンも解体処分するよう要請、受諾されている。

加えてGHが保持している全ての技術。武器、艦船とエイハブリアクターの技術は順次各勢力へと開示されていく予定だ。これによりGHの優位点は失われ、以前のような権力を保持するのは難しくなっていく。いずれはただの国際警察的な機関となり、衰えていくだろう。力任せに叩き潰されるよりはマシな展開ではある。

(マリイ、あんたはあのとき死んで良かったのかもね。……これから先はきつと生きづらいだろうから)

彼女のような人間は、縮小していくGHだとこれから先どんどん肩身が狭くなっていくだろう。市井に下り、裏社会でも生きればその限りではないだろうが、いずれにせよ長生きできそうにはない。誰かに排除されるか、野垂れ死ぬか。あるいはそんな刹那的な生き方の方

が彼女には合っているのかも知れないが。

かぶりを振る。いつまでも死者に囚われているわけにはいかない。ヤマジンは生きている。どのような道を歩むにしても、生きていかなければならない。

「……どっかの経済圏で、技術オブサーバーでもやるかねえ……」

生きていけるだけのタネはある。まあ何とかなるさと、あえて気楽に彼女は前を向いていた。

『GHの衰退は、当然ながら各経済圏にも大きな影響を与える。彼らはGHに頼らない、独自の治安維持の手段を模索していかねければならなくなったのだ。それは同時に経済圏同士の緊張を高め、際限のない軍事力拡大につながっていく恐れがある。際限なくそれが進めば、いずれ武力衝突へと発展する可能性もある。』

これまで存在したGHという枷が外れ、各勢力は互いに様子を窺いながら、力を蓄えていくだろう。それが『良き競争』となることを、願うばかりである』

機上の人となった蒔苗は、シートに深々と身を預け、息を吐く。

「やれやれ、まだしばらくはゆつくり出来んのお」

蒔苗が向かうのは、四大経済圏の代表が集う会議。GH改革勢力が組織の再編成を始めた事を受け、各経済圏がこれからの方針を語り合い、意見をすりあわせるための物である。

GHを追い込むために、四大経済圏は一時的に手を結んだが、本来

は競争相手同士。頭を押さえるGHが弱体化し、経済圏の監視下に入ったことによって競争と対立は激しくなるだろう。

だからと言っていがみ合い続け、溝を深める訳にはいかない。衝突など起こそう物なら折角GHを改革した意味がなくなる。互いに妥協するべきところは妥協して、対立をほどほどに押さえる必要があった。共存共栄とまでは行かないが、いがみ合った末に共倒れなどもつてのほかだ。ゆえに言葉を尽くし、それなりに理解し合うことは必要であった。

(儂が生きている間に、ある程度の地ならしはしておかねばなるまい)

経済圏同士の事だけではない。世界の治安維持。火星やその他地球外圏勢力との関係の見直し。ヒューマンデブリなど、不景気と貧困が招く諸問題の解決。やらねばならないことは山とある。己が生きている間にどれだけのことが出来るか。時間との勝負だが焦るわけにはいかない。人生の終盤に来てやたらと忙しくなってしまうたと、蒔苗は苦笑を浮かべる。

後は自分の意思を、仕事を、しっかりと継いでくれる者が育てば良いのだが。

(ラスカーの娘はすっかり火星が気に入ったようだからもう。しばらくは戻ってくるまい。となると他に候補が必要となるな)

ひげをしごきながら思索していた蒔苗は、不意ににやりとした笑みを浮かべる。

「そうさの……めぼしい人間を一から育てる、というのも面白いかも知れん」

「へいっくしよいつ!」

「なんだ? 風邪か?」

「いや、なんか背筋に妙な悪寒が……」

ぶるりと軽く身を震わせて、タカキがキョロキョロと周囲を見回し、アストンが眉を寄せて心配げに声をかけていた。

彼ら地球支部は決戦の後も地球に残留し、アーヴラウ防衛組織の再編成と規模拡大に協力することとなった。

アーブラウの、いや地球の秩序を護ることは、火星の秩序を護ることにつながる。それでなくともアーヴラウとの繋がりは切っても切れないほどの物となった。積極的に協力するのは当然の流れと言える。

とは言ってもアーヴラウだけが突出して軍事力を上げるのも都合が悪い。主な目的は治安を維持するためとは言え、やり過ぎれば他の経済圏から見れば危機感を煽る物になるだろう。そして他の経済圏も、危険と思われない程度に軍事力を向上させる必要があった。

「ブラウンさんたちや、今頃オセアニアか」

「僕らよりこなれてるとは言え、少人数だからねえ。苦労してるんだらうなあ……」

各経済圏と、GH改革勢力が協議を重ねた結果、それぞれの経済圏が独自に正式な防衛機構を設立し、アーヴラウと同じように教練を受け形にしていくという方針が、暫定的ではあるが決定された。

そして教練に必要な人材をGH側から提供、あるいは推薦するという形で送り込むこととなる。その中にはガルーダ隊も含まれていた。癒着などを防ぐため、彼らはある程度のサイクルを持って経済圏を渡り歩き、教練を施していく。時間はかかるだろうが、各経済圏の戦力はある程度足並みをそろえて成長していくはずだ。

まあそれもこれも上手くいっただらの話である。何をやるにしても初めてのこと。トラブルはついて回るだろうし、しばらくは治安も安定しないだろう。しかしながらアーヴラウは先んじて防衛組織を整備したことで多少の余裕はある。タカキたちもすぐさま忙しくなることはあるまい。

「今のうちに体勢を整えておかないと。シナプス長官やラスカー先生とも話を詰めておきたいよ」

「ラスカーさんやたらと俺らに目をかけてくれてるからなあ。なんか自分の子供みたいに扱ってるような……」

「はは、そんな感じだよね」

まさか自分が後継者的な意味で狙われているとはつゆ知らず、タカキは朗らかに笑う。

鉄華団は、自分たちは一つ大きな波を乗り越えた。世界はまだ落ち着きを見せないが、大きな戦いは早々起きない、いや、『起こさないようにしていく』。団長であるオルガが言ったように、止まらず、歩いて行くのだ。この世界がもつと良い物になっていくように。

「しばらくは火星の方も忙しいから、交代要員の都合がつくようになるまで僕らが頑張らないとね」

「まずはシフトの整備だな。気を張りすぎて誰かが倒れたなんて事のないように……」

「あ、おにーちゃん！ アストンきーん！」

「フウカ！ 今帰りか？」

制服姿のフウカが手を振りながら駆け寄ってくる。二人は笑顔で彼女を迎えた。

世界の戦機はまだ不透明である。しかしながら、少年たちは未来に向かって確かに一步を踏み出していた。

『そして地球圏の外、火星や圏外圏では、大きく事態が動き出している。その中心にいるのは当然鉄華団。彼らを軸として、様々な物が巡り始めた——』

58・明日は未来（あした）の風が吹く 後編

『火星を取り巻く環境の変化、その要因は鉄華団の活躍によるもの……GH管轄権限の譲渡を含めた自治権利の向上だけではない。』火星の価値そのものが上がったから』だ。『エイハブリアクターの技術公開と、経済圏および企業の共同開発研究』。大々的に行われるそのプロジェクトがハーフメタルの価値を高め、必然的に最大の産出地である火星の存在価値は向上した。そしてそんな火星の処遇を巡り、企業や経済圏の動きは活発化していく』

テイワズの本拠地歳星。次々と入港する輸送船を見ながら、マクマードと名瀬は言葉を交わす。

「ハーフメタルを掘り出すだけ掘り出して、精製はこっちでやる、か。間に合わせの策にしちや上出来だ」

「本当に間に合わせですがね。とりあえずは地球圏（向こうさん）の要量を確保できそうです。早いところ鉄華団に預けた採掘施設が再建できりゃいいんですが」

「報告じや予想より早く再建できそうだがな。上物はぶつ壊されたが、用立てた土地はそのまま使える。それにあのMA（バケモン）のおかげで上手いこと鉱脈が露出したようだしな」

壊滅的な被害を受けた鉄華団採掘施設であったが、怪我の功名というか、MAハシユマルの足を止めるために行った発破に加え、ハシユマル自身が地下を脱するために瓦礫を吹き飛ばしたおかげで大きく土地が掘り返された。その跡にハーフメタル鉱脈が露出したのである。恐らくハシユマルは己の修理やプルーマーの製造に使うため、ハーフメタルを採掘できる地を選んで拠点としたのだろう。これは

関係者にとってうれしい誤算であった。

このことによって採掘施設の再建は想定した以上の早さで進んでいくこととなる。それは同時に、火星の再開発への追い風となるだろう。

「これからハーフメタルの消費量は増えていく。今の段階でも鉄華団が持ち込んでくるあがりだけでうちは丸儲けさ。つくづく良い拾いものをしたじゃねえか名瀬よ」

「全くです。……しかし親父、いいんですか？ 折角オルガが譲ってくれた権限を、『クーデリア嬢を代表とする火星の独立勢力に預けちまう』なんて」

GH火星支部の権限は、約束通り鉄華団へ段階的に譲渡される運びとなった。そしてその権限を、これまた約束通りオルガはマクマードに預けようとしたのだが、マクマードはその権限を経済圏の後押しで設立されることとなった火星の暫定自治機構に譲ると言い出した。

これには名瀬を含むテイワズ幹部、オルガ、そして自治機構の代表に推薦されたクーデリアも驚いた。もちろん反対の声は上がったが、マクマードは悪いようにはならねえと、なだめすかして押し通した。その真意を名瀬は改めて問うている。

「確かにありやあ一見俺たちが火星を支配して総取りできるように見えるがな、同時に火星が抱えるだろう莫大な『借金』も背負っちゃまう」
「借金？ ……ああ、なるほど」

名瀬も合点がいったようだ。火星はこれからまずハーフメタルの産地として発展し、その利益を開発に回していくことになる。その事業のために各方面から莫大な融資を受けなければならないわけだが……これは言わば借金。事業が発展していくにつれ様々な形で返済していかなければならない物だ。火星の実権を握るといふことは、そういった負債も背負わないといけないという事である。

テイワズがいくら巨大な企業だとは言え、そのような負債を抱え込むには大きなリスクが伴う。各経済圏もそう考えたのだろう。言い方は悪いが借金を背負う立場になるより貸し付ける立場の方がいい、ということだ。経済圏が火星の独立を推したのはそういった事情も

ある。

「元々火星の統治は、経済圏の持ち出しで保っている部分も多かった。余計な金食い虫のGHが衰退し、火星自体も利益が出る見込みは出来たが、それにしたって形になるのは先の話だ。自分たちでリスク背負うってんなら是非ともやってくれって考えるのも無理はなからうさ」
それとは別に、マクマードには火星の権利を自治機構に譲る理由があった。

「……オルガが提唱した第六経済圏の構想、クーデリア嬢の火星再開発計画。俺にやあそんなこと思いつきもしなかった。絵に描いた餅にも思えるが、あいつらにはそれを成し遂げられると思わせちまうバイタリテイがある。何よりも、『夢』があるじゃねえか」

「夢、ですか？」

「応よ。夢つてのは大事だぜ。自分たちの目標にもなるし、魅力的かつ現実的なら多くの人間を呼び込める。高けりや良いつてモンでもねえが、生きるのに張り合いが出てくるだろうよ」

自分はもうやりきった感があり、名瀬も家族第一で冒険をしない部分がある。そんな自分たちより若い者に任せた方が上手く回る。長年生き馬の目を抜く世の中を渡ってきた企業人として、そして一人の人間としてもマクマードはそう判断した。まあひいき目という部分があるのは否めなかったが。

「これから先があいつらの人生の本番さ。ドンパチやるのとは違う、世間の荒波ってヤツが待ち構えてる。それをどうやって乗り切るか……そいつもまた楽しみよ」

無論舐めたことをしてとち狂ったら遠慮なく『喰わせてもらう』がな、と悪い大人のようなことを言いながらも、その顔は子供が巣立ったような感じで実に楽しそうである。自分も同じような顔をしているのだろうなあと、名瀬は苦笑いを浮かべた。

「さあて、これからまだまだ忙しくなる。ハーフメタルの取引だけじゃねえ、エイハブリアクターの共同開発もでかい商売だ。ぬかるなよ？」

「ええ、最終的な目標はインフラに使える大型リアクターですが……」

まずはMSサイズの物からですね。テストベッドとしてエウロパフ
レームのガラ（骨格のみ）を提供する予定です」

「次世代機の開発も見越してか。良い判断だ。その調子で頼むぜ」
「心得て」

発想では若い者に抜かれたが、まだまだ簡単に道を譲ってやれな
い。男たちは夢ではなく、積み上げてきた実績と経験で未来の礎とな
る覚悟を持っている。

まあ要するにおっさんどもの意地であるが、彼らは悲壮感もなく子
供のように目を輝かせていた。

男つてのはいくつになってもこんなもんだねえと、二人の背後で着
物姿のアミダが肩をすくめている。

活気づいているのはテイワズだけではない。火星に根付いた多く
の組織、企業がてんでこ舞いの最中にあった。

その中で最も多忙であるのがアイゼン・ブルーム商会であろう。

「こっちの資料とサンプルデータを比較して確認を！」

「は、その件は自治機構の方に移行しまして。はい、はいそうです。お
手数ですがよろしくお願いします」

「7番の棚にあった記録簿は全部詰めました。段ボールに書いてあり
ますから」

「ここからここまでを一週間で。時間に余裕はありますけど出来れば
早めに」

「オリンポス社とエリユシオングループからの打診ですけど、例の
件と絡めて……」

ひっきりなしに電話が鳴り響き、バイトも含めた社員たちがせわし
なく行き来している。

ただ事業が活性化したのではない。クーデリアが暫定自治機構の

代表として起つ事が決定された時点で、商會が手がける事業の多くが自治機構預かりとなる事となり、その移行作業に追われているのであった。

元々商會が手がけていた事業は、本来公共でやるべきであった物も多い。これまでは人手の足りていないクリュセ自治区から委託されるような形で事業を回してきたが、經濟圏の自治区を一纏めにし、本格的な独立を前提とした組織作りが始まったことで、本来の形に戻そうと言うことになったのだ。

商會そのものは残るが、その事業形態はかなり変わるだろう。そしてクーデリア自身も自治機構の代表となることで商會からは距離を置くこととなる。そしてククビータが商會を預かる事となった。

(とは言っても社長に比べれば大分楽な仕事になると思うけれどね)
仕事をさばきながらククビータは苦笑した。商會を立ち上げてからこつち、クーデリアがどれだけの仕事をこなしてきたか彼女はよく知っている。それがごっそりお役所に持って行かれることは、むしろありがたいとすら思う。ただでさえクーデリアは抱え込みすぎな上、これから先は自治機構代表として働かなければならないのだ。誰かが代わりに請け負ってくれるのであれば、少しは負担も減るだろう。

そう、これからは『誰かに任せるだけではないけない』。クーデリアにしる鉄華団にしる、負担が過ぎていると思う。彼女らに頼るだけではなく、自分たちで歩まなければ。オルガが止まるんじゃないと言ったように。それが出来てこそ、火星は本当に自立したと言えるのではないだろうか。

これからだ。世界は変わり始めたばかりで先行きは不透明。今上手くいっているからと言ってこれから先も上手くいくとは限らない。上手くいかないどころか大きな障害が待ち受けていることもあるだろう。

それでも、諦めずに歩いて行けば、きつと。

ククビータは窓の外を見上げる。空は青く、高く、そして果てがない。クーデリアの、そして自分たちの未来も、この空のようであれば良いと彼女は願った。

さて、上手くいつているところもあれば、上手くいつていないところもある。

「ええい、どいつもこいつも役立たずが！」

がん、と分厚いテーブルを叩いて不機嫌な声を上げるのはノブリス・ゴルトン。彼は現在、己の事業を立て直すことで手一杯であった。

GHに改革のメスが入るまで上手く回っていた事業が不調となつたのは、『旧ラスタル派閥と通じ私腹を肥やしていた』という噂がまことしやかに流れ、一気に信用を落としたから……というのには『理由の一つ』。全体的に大まかな感じで言ってしまうえば、『取引相手の多くがノブリスを見限った』のだ。

ラスタルに内通したり、クーデリアや鉄華団関係者を拉致しようとした行動は、それとなく匂わす形で様々な場所に伝えられる。気の回るところは裏を取り、その話が事実であると確証を得ていた。

彼らも慈善事業ではない。天秤にかけ、ノブリスの行いが利になるとなれば彼に協力するのもやぶさかではなかつただろう。しかし彼に協力しても自分たちの利は薄いと判断せざるを得なかつた。

火星支部がマクギリスの派閥で再編成されてから、横暴はなりを潜め火星周辺の治安維持とそれに伴う経済の活性化に力を入れ、そして相応の成果を上げてきた。ここでまたラスタル派閥に取って代わられたりすれば、以前と同じとまでは言わなくとも景気の好調に歯止めがかかるかも知れない。是が非でも反逆軍には勝つてもらわねば。多くの有力者がそう考えたのだ。

加えて経済の発展に尽力してきたクーデリアを売るような真似をしてみせる。これが致命的だった。彼女は火星周辺の経済界にて重要なキーマンであり、そして火星独立の旗印でもある。ここで彼女が失われるような事があればどうなるか。それで得するのは『ほぼノブ

リスのみであろう。』

彼はそもそもが武器商人だ。治安の悪化は飯の種である。その上介入理由をでっち上げてでも武力投入を厭わないラスタル派と繋がりがあるとなれば、世情が不安定な状態であったほうが都合が良い。そう見られるし事実だ。

彼に協力することは、平穩が遠のき健全な商売がしにくくなることにつながる。GHが過去のままであったなら致し方なしと判断する者も多かっただろうが、情勢は変わりつつあった。反逆軍と鉄華団という勝ち目のある馬に乗った方が良いと多勢は判断し、結果ノブリスの周辺から離れていく。アリアンロッドとの戦いが終わり、GHの改革が始まった頃には、彼と商売を行おうとする者は格段に減ることとなった。

潮時と見て取ったのか、彼の側近も幾人か職を辞している。そして人手が足らなくなつて事業が回らなくなり、その影響で労働条件が悪化しさらに人が離れていくという悪循環が生じ始めていた。ノブリスは落ち目だと、経済界の人間はそう判断しはじめている。

時勢を見誤り、人を見誤った。もつとも彼の自業自得と言うばかりではない。クーデリアが己を手玉に取るほどの傑物となるなど予想の範疇外であつただろうし、鉄華団がこれほどに勢力を拡大させようなどは思つても見なかつた。ぶつちやけ大体は各所に影響を与えまくつたランディのせいなのだが、それこそ予想など出来るものか。たつた一人の存在が、碁盤をひっくり返すような事態になるなどと。

ともかく彼は坂道を転がり落ちるかのように勢いをなくしていく。クーデリア辺りにでも泣きつけば、歯止めはきくかも知れなかつたが……彼女がどこまで知っているのか、そしてどこまでが彼女の手によるものなのか。それが分からなければ手を結べない。下手に手を組めば途端に身ぐるみ剥がされるどころか、命の危険もあつた。それだけのことをしてきたという自覚はある。むしろどうやって鉄華団、ひいてはその背後にいるテイワズの手が届かぬところに逃れるか。そういう算段をした方が良さそうであつた。

こうしてノブリスは身を持ち崩していく。火星に残つていられる

かどうかすらも怪しく、先行きは暗い。果たして別の世界線で暗殺されるような結末とどちらが良かったのか。それは誰にも分からなかった。

『そして世界を大きく変える立役者となった鉄華団自体はどうなったのかというと……』

朝日が差すなか、土埃が舞い張り上げた声が響く。

「よし、ほんじゃあ今日も安全第一ではりきっていつてみようか！」
『ういーっすー！』

ヘルメットを被ったユージンの号令の元、作業を司る者たちが一斉に仕事を始めた。

鉄華団採掘場。破壊された施設の復旧と同時に、露出した鉱脈の採掘が並行して行われていく。それは大分手間のかかることであったが、作業に従事している者は皆不服をいうでもなく、むしろ積極的に仕事を進めていた。張り切りすぎるのを注意しなければならぬほどである。

「今のところ掘れば掘るだけ金になるからなあ。そりゃ張り切るってモンさ」

「問題はこの先安定して採掘できるか、ですがね」

予算関係で各部を飛び回っているデクスターと状況を話し合うユージン。鉱脈が露出したことにより施設の再建と同時に採掘が始められたわけだが、こんな状況が今後も続くわけではない。一通り表

面が片付けば、また地面を掘り進んでいく作業が待っている。鉦脈自体はまだかなりの埋蔵量があると推測されるが、それを上手く採掘できるかはまた別問題だ。そのことはユージンも理解している。

「鉦脈が表に出てるうちに作業用MWの操作に慣れさせる。丁度良いトレーニングになるはずさ。そこから改めて掘り返すんなら大分安定して作業できるだろう。……方が一ここがダメになっても、よそに出向させられる技量はつく」

「なるほど、施設の再建で建築作業の経験も積める、と」

技術や資格。そういった物を身につけておけば、これから先食うには困らない。この採掘場だけでなく火星全土でハーフメタルは採掘が始まっており、この先技術者は引く手あまたとなろう。団員にここで経験を積ませ、ゆくゆくは技術者として各所へ派遣する業務に就かせることも……などと、ユージンは事業戦略のようなものまで考え始めていた。

「教官がよく言ってた、技術を身につければ食うに困らねえって言葉の意味が、やっと分かったような気がするぜ」

「良いことです。これからハーフメタル事業はしばらく右肩上がり。今のうちに経験を蓄積しておくのは、きつと役立つ」

二人は笑い合う。やっと地に足のついた仕事をこなしていけそうだ。ここで経験と資産を稼ぎ、次の糧としていく。真つ当な仕事は軌道に乗ってきたことに、安堵と喜びを覚えていた。

「こういう仕事は安定して出来るように、『上』も頑張ってもらいたいモンさ」

「今のところは上手くいっているようですよ。体制も整ってきたように」

見上げる空は、高く青い。

火星軌道上。GH火星支部本拠アーレスは、いくつかの船舶が停泊し活気づいていた。

火星支部の警察権、それを代行する事業が本格化し、賞金稼ぎや契約保安官などが認可を得て活動を開始したのである。

その業務で鉄華団の責任者となったのがビスケットだ。彼の他には補佐としてチャドとダンテ、実働人員としてビトーやライドが従事している。

「何とか形になっていましたね。やっと本格的に動けそうだ」

一息ついて椅子に体重を預け、ぐるぐると肩を回すビスケット。同じく休息に入った新江が口を開く。

「事前に大まかな運営方針を決めていたのもあるが、『助っ人』の働きも大きい。ありがたいことだよ」

多くの権限を委託する形になったとは言え、それを取りまとめ仕切るのは未だ火星支部の仕事であった。いずれはそれも自治機構に譲渡していくことになるのだろうが、しばらくはこの形であろう。GH、自治機構、そして鉄華団に代表される民間組織。この三つが共働して治安維持事業は新たなスタートを切った。もちろん試行錯誤の部分も多く、対立や諍いなどが起こる可能性もあったが。

「ビスケット主任、パトロールと慣熟訓練のスケジュール、シフトの見積もりが上がってきた。目を通してくれないか？」

入室しながら声をかけてきたのは、ウォードック隊長ブレイズこと「シャイアン」一尉相当官。彼らは自治機構に雇われる形で、火星の治安維持事業に参加していた。

彼らだけではない。賞金稼ぎや契約保安官の幾ばくかはGHから『天下り』してきた者たちだ。縮小していくGHに見切りをつけ、希望退職が募られたのをこれ幸いと職を辞し、火星に赴いてきたのだ。

一旗揚げようという者から責任感を覚えた者まで理由は様々だが、元々GHの所属であったので、それなりに統率はとれている。また荒くれ者の多い賞金稼ぎたちにそれとなく目を光らせ、諍いなどが起こらないよう気を配っている。

「お疲れ様です。……助かりますよ。本来シャイアンさんは裏方じゃ

ないっていうのに手伝ってもらって」

「なに、昔取った杵柄というヤツさ。それに賞金稼ぎに慣れてるやつもいる」

そのころアールズのMS格納庫では。

「結局標的艦隊の半分がこっち（火星）に来ちまったな」

苦笑するのは、固太りした壮年の男、ロツソ。トレードマークの丸グラサンを押し上げながら、傍らの相棒にいう。

「ま、しばらくはこっちで稼ぐとするかね」

「確かに地球圏よりも治安は不安定だろう。稼げはするが、忙しいぞ？」

瘦躯の男、スノーウィンドが肩をすくめる。彼らはGHを辞してから、賞金稼ぎや傭兵として身を立ってきた。そっち方面ではそこそこ名が売れ、相当の腕利きとみられているせいか、いつの間にかアールズに集った賞金稼ぎたちのとりまとめ役のような形に収まっている。「なあに、若いモン働かせりやいいだろ。オヤジがいつまでも出しやばることあねえ」

「そう言いつつ面白そうな賞金首いたら、真っ先に狩りにいくでしょこのおぢさん」

半眼でいうのはウォードッグ隊エツジ。一見少女のようにも見える容姿で、最初は賞金稼ぎたちに営められていたが、実力でたたき伏せ黙らせた女傑だ。

「わりと戦力過多になってない？火星支部。下手すりゃGH改革前より充実してるわよ」

「前から火星支部の手が回ってないのは分かってたんだ。投資家や企業が金ぶっ込んで大々的に人集めりゃこんなモンだろ」

ロツソのの言葉にスノーウィンドは頷く。エツジは微妙に不安よ

ねと眉を寄せているが、残りの同僚も気楽な様子で。

「ガラの悪い連中ばかりだから不安になるのも分かるけど、なんかあったら私らでシメリやいいじゃない」

「そーそ。それによ、デイモン（ランデイ）が来る前の俺たちよかマシじゃね？」

チョップパーとアーチャー。気があつてる様子の二人だが、実はこの間籍を入れたばかりだったりする。このリア充どもめがとじと目で睨むエツジだが、もちろん二人は堪えない。

「そんな目で見るくらいなら、はよブレイズにこく……」

「おいそれ以上言うと戦争やぞ」

「OK謝るからそのホルスターに伸ばした手を引っこめくださりやがれ」

余計なことを言つて地雷を踏んだアーチャーが、両手を挙げて降参の意を示す。

「若いねえ」

ロツソはくく、と笑い声を上げ、スノーウィンドは肩をすくめた。

愉快的仲間たちの様子を思い返ししながら、シャイアンは茶目つ気を乗せて言う。

「それにこわーい『お目付』もいることだしな。良い印象を与えておくに越したことはない」

火星支部、いや再編成されたアリアンロッドなど地球圏外を活動範囲とするGHとその管理下にある勢力には、経済圏からの監察が付けられている。不正行為を防ぐためだ。

そして、この場で監察を受け持っているのは……。

「あら、何も悪いことをしなければ、私も目くじらを立てたりはしませんよ」

執務室に居座り紅茶のカップを傾けているのは、スーツ姿のイアンナ。なんかすごく既視感のある光景なんだけど、と新江は思っているが、口には出さない賢明さがあつた。

ともかくコネを使いまくって彼女は火星支部監察官の席をぶんどつて居座っている。何がこの人をそうさせているんだろうとビスケットは不思議に思っているが、新江やシャイアンには大体その理由は理解できていた。

(……狙われてるなあ)

色恋の意味でか人材的な意味でかは分からないが、どうにもイアンナはビスケットにご執心だと感じている。知らぬは当人ばかりなり。周囲では密かにトトカルチョの対象にされたりする。

とにもかくにも、心の中で舌なめずりしながら、イアンナはビスケットに誘いをかけていた。

「どうですビスケット主任、仕事が引いたら食事にも……」

「あ、すみません。今日は早めに上がりたいのでまた今度にも」

「……あら、何か用事が？」

心なしかちよつと不機嫌になったようなイアンナの様子に気づくことなく、ビスケットはうれしそうな様子で応えた。

「ええ、兄がこつちに来ているんですよ。仕事の都合で」

クリュセ市街から少し離れたところにある墓地。そこにグリフォンの家の墓はある。

サヴァランは、祖母である桜と妹二人を伴い、そこを訪れていた。「親父、お袋。遅くなつてすまない。けれど……二人が果たしたかったことが、やつと実を結びそうだよ」

優しい眼差しで、墓に向かつて語りかける。ドルトでもハーフメタルの精製、加工を請け負う目処が立ち、エイハブリアクター開発に参

入できる下地が整った。各勢力にそれを売り込むため、サヴァランを含む多くの人間が各方面に働きかけを始めている。

参入できれば、いや、その技術力があると示すだけでも多くの事業と関わる事が出来るだろう。それはドルト労働者の生活環境向上にもつながる。サヴァランはそのために方々を飛び回っていた。今回火星に赴いたのはその一環であるが……めったにない機会だからと、時間を取って身内の元に赴いたのだった。

一通り墓参りを終え、連れだつて帰路につく。疲労の色はあるが、穏やかに見えるサヴァランの様子に、桜は安堵の息を吐いた。

「何とか上手くやってるようだね」

「ビスケットたちのおかげさ。GHの横やりがなくなって、随分と風通しが良くなった。俺の仕事もやりやすくなったよ」

労働者とカンパニーの軋轢は、徐々になくなりつつある。もちろん全てが円満に、とは行かないが、武力衝突が起こるような事態は最早訪れまい。

状況は、良くなってきている。それが下り坂にならないよう努めるのが自分の仕事だ。少しでも良い明日になるように。父も母もこのような思いだったのだろうか。自分のやっていることが手向けになれば良いのだがと、サヴァランは思いをはせる。

「それでね、下級生に地球から転校してきた子がいてね」

「なんていうかこう、お嬢様って感じの子。クーデリアさんみたいな上品っていうか、そんな感じで」

「そうか。きつと分からないことばかりなんだろうな」

「うん。でも一生懸命みんなに話しかけてる。周りも分からないことは教えてあげてるみたい」

「すごく良い子だよ。早く火星になれてくれると良いな」

分かれていた時間を埋めようとするかのよう双子の妹は語りかけてくる。つないでいる小さな手。それでも別れたときに比べれば随分と大きくなった。桜とビスケットがここまで育ててきたのだ。この二人が、いやこのような子供たちがこれから先、健やかに暮らしていける世界。そういう物を作っていく一端にでもなれば良いと、

サヴァアランは思う。

「帰ったら、おばあちゃんがシチュー作ってくれるって」

「大兄ちゃんが来てくれたからね。私たちも手伝ってたくさん作るよ」

「はは、そいつはごちそうだな」

今は仕事のことは忘れよう。ともかく腹が減ってきたと、サヴァアランは屈託無く笑った。

デブリベルトでのサルベージ事業。それは鉄華団が火星に帰還し、状況が落ち着いたら頃を見計らって本格的に始動し始めた。

とは言ってもまだ手探り状態の物。デブリベルトに詳しいタービンの監督下で、まずは手頃なりアクターをサルベージするところから始めている。

「よし、この辺りからバラしてくぞ。まずは邪魔なデブリを取っ払う。デルマとエルガー、手伝ってくれ」

「はいよ」

「まずはでかいのか？ 順番の指示をくれ」

マルチンザーを担いだグシオン、それに乗る昭弘が指示を出し、団員たちは作業を開始する。

彼らが駆るのは作業用に装備を変えた獅電。グシオンと同じくレーザートーチを備えたサブアームを両肩に持ち、機体各所にワイヤーアンカーを備えたその仕様は、グシオンで得られたデータを元に開発された。

MSを戦闘のためではなく、大型の作業重機として扱う。ロディフレームやヘキサフレームなどそういった目的を考慮に入れて開発されたものはある。獅電もまた、そういった換装も行えるようになっていた。その上でデブリ作業に慣れた阿頼耶識付きの人間が駆使すれ

ば、その作業効率はMWなどとは比較にならない。

サルベージ業務に就いたのは、主にアルトランドの名をもらった者——昭弘の『兄弟』と、元ヒューマンデブリたち。それに加えて幾人か『デブリベルトでの作業に慣れた人員』が加わっている。皆昭弘の夢に賛同し、力になりたいと申し出てきた者たちだった。もちろん当然のようについてきている人物もいる。

作業にかかる彼らの背後、待機しているサカリビの前で指揮を執っているのは、ラフタの辟邪だ。

「昭弘たちがでかいの掘り出すから、針路上の邪魔になるデブリを片付けるわよ。下手な方向に流すと予想外の進路取っちゃうかも知れないから、サカリビの作業アームで一旦回収させるように。いいわね？」

「……はい姐さん！……」

「誰が姐さんか。……アタシにはまだ早いわよ」

時折茶目つ気めいた会話も入れつつテキパキと指揮を執るラフタの顔は生き生きとした物だった。仲間と一緒にデブリの除去作業を行いながら、昌弘は思う。

（とうちゃん、かあちゃん。もしかしたら近々、家族が一人増えるかも知れないぜ）

そうなつたらきつと、もつと騒々しくなるだろうなど、彼は自分の想像に対し笑みを浮かべる。

そのような感じで鉄華団の面子が作業している様子を、新たにレストアされた「ハンマーヘッドⅡ世」のブリッジでアジーたちが見守っていた。

「大分様になっているじゃないか。ランデイのヤツ、かなり本格的に仕込んでたね」

かつての名瀬と同じように帽子の端を指で弾きながらアジーは言う。そういう彼女自身も名瀬の真似をした格好と仕草が様になっているというかハマってるが、多分指摘すると恥ずかしがるので誰も口にしらない。目の保養になるし。

後で写真焼き増ししてタービンス内で売りさばこうとか考えてる

エーコは、すました顔で応えた。

「ジャンク屋があの人の実家だからねえ。一番教えやすかったんじゃない？ それに阿頼耶識付けた人間に向いてる作業だろうし」

多分現状みたいに上手くいかなくても、何とか食べていけるだけの仕事になるから教え込んだのだろうと見た。頭おかしいくせに妙なところでリアリストだと、感心しているのか呆れているのかよく分からない評価をエーコは下している。

「ま、ともかく仕事自体は問題なさそうね。艦船級のリアクターは、まだ引く手あまただろうし」

GHの技術公開によってリアクターの製造技術自体は広まったが、まだ本格的に生産するノウハウを積み立てている最中だ。新規製造のリアクター、それを搭載した船舶が民間に出回るのはかなり先のことになる。出回りだしたとしてもそのコストが引き下げられるのはさらに先のことだ。それまでは大型リアクターのサルベージ事業が廃れることはないだろう。

出回りだしたとしてもコストを低く抑えられるレストアリアクターの需要がなくなることはあるまい。リアクターの需要がなくなる頃には昭弘たちも技術を蓄積し、新たな事業に乗り出すことも出来るはずだ。もっとも一生かけてもレストアリアクターの需要がなくなるかどうか怪しいところではある。要するに当分この事業で食いつぶぐれることはない。

それに――

「今稼げるうちに稼いで経験を積み上げれば、サルベージの需要がなくなっても他の事業に転換しやすい、か。あれで色々考えてるじゃない、昭弘」

おぼろげながらではあるが先のことまで考えられるようになっていく。アリアンロッドとの戦いが終わり余裕が出来てきたからだろう。昭弘だけでなく鉄華団の少年たちは未来を見据え歩き出しているようだ。

「もう少ししたら、良い甲斐性持ちになるね。嫁をもらえるくらいには」

そう言つてエーコは、いたずらげに笑みを浮かべる。

「ね、昭弘とラフタがいつくつつくか、賭けない？」

その台詞に、ブリッジに詰めている面子が乗った。

「半年以内に100」

「早すぎるつて。2年に150」

「甘いね、結構引つ張ると見た。5年に100」

キャイキャイと騒ぐ面子に、アジーは呆れたような様子でため息を
はいた。

「だからあんまり人をおもちゃにするんじゃないつて。……3年以内
に200」

変わったところもあれば変わらないところもある。

「しばらくはドンパチもねえだろうが……その分作業用のMS、MW
の整備がよそからも回ってきやがる」

「整備事業でも立ち上げてみますか？ GHとテイワズ以外ならここ
が一番技術を持っているでしょうし」

格納庫で作業の間に言葉を交わす雪之丞とメリビット。恋人同士
と言うよりは夫婦の貫禄があった。

「そいつはオルガの采配一つだろうが……しばらくは事業の拡大もな
かろうさ。十二分に忙しすぎる」

「だと良いのですけれど。あの子たちは無茶をするから」

少し沈んだ表情になるメリビット。雪之丞はその頭をぽんぽん、と
なでる。

「そう心配すんな。命を張る仕事は格段に少なくなるんだ。あいつら
が過労で倒れない程度に見張ってりゃいい」

「本当、困った子供たちです」

二人は笑い合う。何のかんの言つても、戦いとか離れた仕事が軌

道に乗っているのは安堵している。子供たちの未来が少しでも良い物になればいい。彼らのスタンスはほとんど変わっていない。

「さて、あいつらに負けちゃいられねえ。続きだ続き」

「もう若くないんですから、雪之丞さんこそ無理しないでくださいね」
「おうさ、気を付けるとするぜ」

ひらひらと手を振る雪之丞を見送るメリビット。

整備班はちよつと砂を吐いていた。

GHが開示した技術は、リアクターなどの大規模なものだけではなく。様々な遺失技術が限定的ではあるが公表され、各勢力はそれを解析し物にしようと研究を重ねる。

そんな中でも、あまり力を入れられていない物はあった。あえてそれを研究しようとするのは変わり者と言えよう。

「まあ現状でも問題は無いと思う者は多いじゃろうし、今まで忌避されていた技術じゃ。深く研究しようと考えるのは儂くらいじゃろう」
「それ自慢になるんすか先生」

新たに造られた病院兼研究施設。キシワダはその主として勤めることとなった。ついでにザックとティンが引きずり込まれた。

彼が主に研究しているのは当然ながら阿頼耶識に関することだが、他のところが成人に施術できる阿頼耶識システムの研究開発を行っているのには目もくれず、『現状の阿頼耶識の施術成功率を引き上げる』事と、『同等以上の確率で安全に阿頼耶識の除去が行える技法の確立』。そして『阿頼耶識手術の失敗によって生じた障害の治療法』を研究開発していた。

「しかし地味というかなんというか……先生だったらもつとすごい阿頼耶識とかの開発もできるんじゃないやねえすか？」

マッドがやるにしていは地味というか真つ当というか真面目という

か。ともかくキシワダらしくないように思える研究内容を疑問に思ってザックは問うた。

「ふん、なんか勘違いしておるようじゃがのう……そもそも儂が目指しているのは阿頼耶識が眼鏡や入れ歯のごとく『当たり前前の拡張機能』として流布する事よ。その上で技術としての研鑽、発展を進めていければと、そう思うておる」

GHの働きのせいで、阿頼耶識は禁忌として忌避されており、アンダーグラウンドで流布する物となっていた。だがキシワダはこのシステムを『使いこなせればこの上なく便利な物』と見ており、そしてまだまだ発展の余地があると考えていた。

すぐに忌避感が取り払われるわけではないが、『容易く安全に的外しが出来、何かあってもリカバリーが効く環境が整えば』、徐々に広まっていくだろうという手応えがある。そういつた土台を作ることがまず先決だとキシワダは考え、阿頼耶識システムの安全性を向上させようとしているのだ。

『誰でも危険無く簡単に恩恵を受けられる技術』。儂は阿頼耶識をそういう物にしたい。そしてその先……もっと便利な形、例えばピアスを介した接続型ではなく、非有線の接触型になれば使いやすくもなるうさ。まだまだ先のことになるじゃろうが、ゆくゆくはそういった方向で開発していきたいのう」

「一体何歳まで生きる気なんすか先生」

老いてなお未来に夢を見る男。まともに見えるが実は大概狂っているその様子に、ザックは呆れるしかなかった。まあ下手をすれば自分たちより長生きしそうな気がするのは間違いないが。

ところで、キシワダが研究しているのは阿頼耶識ばかりではない。その他のサイバネティクスや医療技術など、多岐にわたっている。GHから開示された技術の中、医療関係総ざらいといった感じでデータを集め解析、習得せんとしていた。

そういつた多岐にわたるデータの整理のため、鉄華団から何人か得手な人間をかり出していたのだが。

「うふふふふふふふふ……」

かり出された人間の一人、ヤマギがモニターを見据え不気味な笑い声を上げている。

(な、なんですかヤマギさん、明らかにおかしいんですが)

(俺に聞くな俺は知らん)

(目を合わせるなよ。なんか知らんがアレはヤバい)

怯えるデインが臨時で手伝ってるダンテとチャドに相談してるが、二人は触らぬ神にたとやらず、あらぬ方向を向いている。

ヤマギが注視しているのは、再生治療や遺伝子チューニングなどを応用した『ほぼ完全な性転換技術』。多くは言わないが孕める。以上。「うふふふ待つててねシノウふふふふ……」

陰った眼窩にぎゅぴいんと光を点して、ヤマギは一心不乱にキーボードを叩き続けていた。

こえーよ。

「いえつくしい！」

晴れ渡った空に、豪快なくしゃみの音が響く。

鉄華団の訓練場。多くの新人たちを前にして、シノは鼻をこすつた。

「誰か噂してんのかあ？　ったく、モテる男はつれーぜ」

「また夜の店出禁になったからそれじゃねえすか？」

「なんで知ってるの誰から聞いたの」

訓練の補佐をするライドが茶々を入れる。鉄華団の基礎訓練はシノが教官役として定着しているが、時折自主鍛錬を兼ねて他の団員たちが手伝いに赴く。今回はライドとビトーの番であった。

鉄華団を取り巻く環境は変わったが、入団してきた団員たちが最初に行うことは変わらない。

「んじゃ、気を取り直してっと。……お前らにはこれからしばらく、

体力作りをやってもらう！　まずは走り込み、そして各種トレーニングを一通りやってから、各自の疲労具合とか見てそれぞれ個別にトレーニングメニューを組む！　この基礎訓練で最初の適正とか図るから、戦闘班目指してるヤツは気合い入れろよ！」

活を入れるシノ。そこで新人の一人がおずおずと手を上げた。

「あ、あのく、俺、事務仕事希望なんですけど……」

実に珍しい、かつ貴重な人材だった。ライドとビトーは密かにガッツポーズし、絶対確保せなと勢い込んでいるが、シノは構わず告げた。「何をするにせよ、体力はいるからな。最初はみんなと同じ事をやってもらおう。安心しろ、どんだけ出来るか見て、それで希望の仕事に合わせてトレーニングと訓練のメニューを組む。体力付けるだけじゃなく、机仕事のもの、な」

にツと笑って、シノは声を張り上げた。

「戦闘班希望のヤツも戦う訓練だけじゃねえ。希望すりや事務仕事や、その他の資格免許の勉強も出来る！　やりたいことがあるんならばしばし言ってくれ！　いっぱしになるまで俺らが責任もって鍛えてやる！」

おお、と幾人かがやる気のありそうな反応を見せた。恐らくは手っ取り早く稼げそうな戦闘班で稼いでから、他の道に進もうと考えていた、と言ったところか。随分とやる気のありそうなヤツもいるじゃねえかと、シノは内心でほくそ笑みながら、ぱん、と手を叩く。

「どにもかくにも、まずは走るぞ！　一に体力二に体力！　三つ以降は走り抜いてからだ！」

ランニングが開始される。新人たちの先頭に立って、追いつがれる程度の速度を保ちつつ駆けるシノ。最後尾からついて行くライドとビトーはその様子を見ながら言葉を交わす。

「シノさんも結構張り切ってるよなあ」

「張り切りすぎてやり過ぎる……って心配もなさそうだ。新人にきっちり気を配ってるし」

「そういう気の配り方を女の前ですりやモテンのに」

「気い抜くと調子に乗るからだろ。ありやもう治らねえ」

走る彼らの足取りは軽い。足搔いて、倒れて、それでも這い上がって走り続けてきた彼らは、試行錯誤しながらも人を導き育てられるくらいには成長した。

彼らは走って行く。これまでよりはペースを落として。それでもしつかりと。

立ち上がったばかりの暫定自治機構であるが、地球の経済圏や様々な資本の後押しを受け、ハーフメタル採掘権の管理をはじめとする大規模な公共事業に着手している。

その中の一つ、クーデリアが最も推していた火星再開発事業は、鉄華団の協力を得て開始された。

火星極冠近く。遠くに氷の平原を臨む辺境の地にて、大地に轟音が響く。

MSの両腕が振り下ろされ、手に持つ得物が大地を砕いた。それは巨大なツルハシ。MSサイズであつらえられたそれを用いて大地を拓き、道筋を作る。火星再開発の初期計画、極冠から各所に水資源を行き渡らせるために運河を築く。その建設作業にMSを導入しているのだ。

とはいっても、いきなり本格的な施工を始めたわけではない。何しろ大規模な工事だ、それをいきなり築き上げるノウハウなど鉄華団はおろか火星のどのような勢力も持つてはいなかった。

地球から関連技術を持つ人間を招くと言う話もあるが、さすがに遠方過ぎて難航しているらしい。それに地球とは環境の違う火星でどれ位違いがあるのか、それがどれだけ影響を及ぼすのか、そういった不安要素はいくらでもあった。

ゆえにまず試して小規模な運河と、そこから水を流入する農地を整備し、技術の蓄積と問題点の洗い出しを図ることにしたのだ。

元々鉄華団にはCGS時代からMWで陣地を築くノウハウはあった。そして火星にも大規模ではないが灌漑工事の経験を持つ者はいる。それにMSを導入すれば、人が行うような細かいことを大規模で再現ことが出来る。前例のないやり方でもあることだし、一から試行錯誤で技術を組み上げて行く方が、地球の技術を応用するより効率的なのでは。そのような意見もあり試行が開始された。

MSの作業を指揮し率先してツルハシを振るっているのは三日月のバルバトス。CGSや農作業で培った経験を元に、迷い無く作業を進めていく。

「深さはこれくらい? ……分かった。掘削した土を運び出してMSで踏み固めるから水平出して。その後でMWを入れてみよう」

技術者たちと連絡を取り合い、細かく作業を切り替えながら様子を見る。大まかなところはMSで出来るが、精度を必要とする作業や仕上げは人の手やMWを入れる必要があった。

手探りで、少しずつ。先の見えない作業ではあったが、従事している者たちは気力に満ちあふれ、笑顔すら浮かべている者もいる。己の力で土地を拓き、未来を拓く。それを実感し、希望を抱いている。自分たちの手で火星の将来を作っていくのが楽しい。そういった心境なのだろう。

その様子を、SPを引き連れたクーデリアは見ている。

忙しい最中ではあったが、この計画は彼女自身が発案し、推したものだ。責任者として現場は見ておかなければならないと、時間を作つて訪れたのだ。

「順調に見えますね」

「うん、今のところ大きな問題はないみたい。この辺りは土壌が硬いからしつかりした溝が掘れるんだって。その分農地にするには手間がかかりそうだって、三日月言ってた」

エプロンを着けたアトラが、工事の状況を簡単に説明した。少しずつだが確かに技術が上がっていると、三日月たちは手応えを感じているようだ。

そのような説明を聞き、一通り視察してから関係者たちと昼食を共

にする。クーデリア手ずから配膳を手伝い、技術者たちは恐縮しまくっていたが、三日月たちは慣れた物だ。思い思いに彼女の周りで腰掛け、話に花を咲かせている。

「極冠部に試設するリアクターの手はずが整いました。昭弘たちがサルベージした物を回してもらったのですが、まずはそれで極冠の氷をどれだけ処理できるか、ですね」

「うん、聞いてる。そっちには別口で氷を砕いたり運んだりするスタッフが要るね。うちから回すか、改めて雇うか、オルガと相談しなきゃ」

言葉を交わしながらクーデリアは思う。三日月も少し変わった、と。

これまで彼は、己の考えを積極的に話すことは少なかった。しかし今は、自分の思ったことを他者に伝え、コミュニケーションをとろうとしているように見える。考え方が変わったのではない、人との接し方を変え始めたのだ。

それは彼の世界が変わってきたからだろう。オルガを中心とした鉄華団だけの世界から、多くのものが関わる世界へと踏み出した。それを理解し成長しているのだと。いや、もしかしたらこのように己の思いを拙いながらも一生懸命に話す姿こそが、三日月の『本当の姿』なのかもしれない。クーデリアはそのようにも感じていた。

この少年がもつと色々なことを感じて、もつと色々な表情を見せられるようになって欲しい。そう願う。そのためには、三日月が穏やかに暮らせるような環境が、世界が必要だと思う。戦いに明け暮れる必要の無い世界。そういう物を作っていくのが己の使命なのだと。

だが焦る必要は無い。それこそ作物を育てるように、少しずつ、一歩一歩。手の届くところから世界を変えていく。クーデリアはそう心得ている。

「……じゃあいきなり何か食えるモン作るんじゃないんすね？」

三日月と共に食事を取っていたハツシユの言葉。それに応える三日月は。

「うん、最初は土を耕起して水を流す。それを繰り返すと土がこなれ

てくるらしい。そこから肥料や有機物を投入して、また耕起してから土の毒素を吸い上げる植物を植える。土の成分が安定してから本格的な畑作りを始めるんだ。多分1年2年の仕事じゃないな」

「やっぱ農業って、手間つすねえ」

「楽な仕事なんて早々無いさ。それに弾が飛んでこないだけ、農業の方が万倍はマシだろ？」

「……言われてみりゃあ、確かに」

ど、と三日月以外の少年たちが笑う。クーデリアが見たいと望んでいた光景が、そこにはあつた。三日月が表情を変えないのは、少し残念ではあつたが。

そこで、アトラが口を挟む。

「ねえ三日月、その毒を吸い上げる植物って、何を植えるか決まってるの？」

「ん？ いや、いくつか種類はあるみたいだけど、まだどれにするか迷っているところ」

「じゃあさ、お花の咲くのにしようよ！」

突飛なことを主張する。きよとんとする少年たちに対し、アトラは力説した。

「折角植えるんなら、ただ生やしてるだけじゃ勿体ないよ！ それに畑いっぱい咲く花なんて火星じゃ見られる事なんてないし！ きつとすつごいきれいだよ！」

それこそひまわりのような笑顔で両手を広げるアトラ。その背後に、満面の花畑が見えるような気がした。

と、ぽそりと三日月が呟く。

「……いいね、それ」

彼もまた、広がる花畑を幻視したのか、その顔は――

『優しく、微笑んでいた』。

しん、と場が静まりかえる。目を丸くして皆が注視していることに気づいた三日月は、いつもの顔に戻って問う。

「なに？ どうしたの」

信じられない物を見た、と言った様子の少年たち。アトラは震える

声で三日月に言う。

「み、三日月……今、笑ってたよね？」

言われてきよとんと目を丸くする。

「……俺、笑ってた？」

「笑ってたよ!? え!? なに初めて見た!」

ぺたぺたと自分の顔を触る三日月。興奮状態で騒ぐアトラ。虚を突かれ唾然としていたクーデリアもまた、我知らず笑みを浮かべる。

アトラはすごいと、そう思う。突飛で、それでいて夢のある発想もそうだが、その発想で三日月の笑顔を引き出して見せた。自分には簡単にできないことだ。それは小さな事だけど、きつと大切な、大事なことだと感じる。

……まあその、一緒に三日月のお嫁さんになろうとか子供たくさん産もうとか、そういつた突飛なことも提案してくれたりするのだが決していやというわけではなく心の準備とか育児環境とか色々と考えなきゃいけないことがあるわけで諸々クリアされればぼっちこいというかええなんかそういう感じで。

なんか勝手に熱暴走を起こして茹で上がるクーデリア。それをよそにアトラが三日月に詰め寄ってる。

「もう一回、もう一回笑って見せて!」

「えと……どうしたら良いの?」

「ハッシュ君! 手本!」

「は? え、その……ゲッハッハッハ!」

「それランディさんの真似でしよやっちゃいけないヤツでしょ!」

「……げっはっはっは?」

「真似しちゃダメえ!」

なんかカオスになってきた。しばらく收拾がつきそうにない。

しかし内容はともかく、その光景は少年少女たちの年相応であるう、優しく温かい物だった。

ひとまず纏まった草稿に目を通していたオルガは、ふう、と息をはく。

「特に問題はねえ、と思う。自分たちのやつてることだとは思えないような、面白い文章だ。文才つてのはこういうのを言うのかね」

「お褒めにあずかり恐悦至極……と言いたいところですけど、まだまだ未熟な物ですよ。元の題材が良かったからこそです」

謙遜しながらも、えへんと豊かな胸を張ってみせるアヤ。己の未熟さはともかく、人心を引く書き物は出来たという自負がある。

「でも大分調子が良いようですね。火星の発展、青写真が見えてきたのでは？」

いたずらっぽく言うアヤに対し、オルガはまだまださとかぶりを振った。

「道筋が見えて来たってだけだ。そも今作ろうとしている運河は計画の前段階。本格的な大規模リアクターの建造はまだまだ先のことだし、オービタルリングについてちや未だ絵に描いた餅だよ」

ひよっとしたら俺たちが生きてるうちには終わらねえかも知れないなあと、オルガは遠い目になる。自分で言ったことだが、第六経済圏などとよくもまあ大風呂敷を広げた物だ。生涯をかけて悔いは無い、と思える大風呂敷ではあるが。

「ともかく、これで今までのことは纏まったわけだが、この記事はどうするんだ？ もう匿名でネットに上げる必要も無いよな」

「ええ、ですからどこかに持ち込んで、本にまとめられたらな〜って。伝を使って出版できれば良いんですけど、上手いかなかったら自費出版でも良いか、と」

そう言つてアヤは、片目を瞑つて人差し指を立てる。

「題名は、『鉄血のオルフェンズ』なんてどうですかね。で、これから先の続編は『希望の花』、とか」

「おいおい、まだここに居座る気なのかよ」

「ええ、一生をかけてもいい価値が、あなたの側にはあると思っていま

すから」

呆れた様子のおルガ。彼には済まして答えるアヤの内心なんか見通せるはずもない。気がついたら外堀が完全に埋められている、なんてことにならなければ良いが。

「……まあ、好きにしてくれりゃいいさ。あんまり派手なことをしなけりゃな」

「ん？ 例えば格好良い台詞を言っているところを生配信するとか？」

「それやめてホントやめて」

思わずキャラクターを崩して止めに入るおルガ。アリアンロッドとの決戦のおりぶちかました演説。それが全世界に配信されたおかげで、彼は一躍有名人となった。何かとおりにつけ話題にされ、本人としては穴があつたら入りたいどころかブラックホールに閉じこもりたいような心境になることが時折ある。

しかし、かの演説が多くの人間に感銘を与えたのは間違いなく、そしてそのおかげで様々な事業の話が進みやすくなったという事実もある。だから関係者や取引相手から演説の話が出るのをおルガは顔から火が出る思いで耐えていた。そういうのがこれ以上増えるのは勘弁して欲しい。

「格好良かったのに。……はいはい許可なくそう言うことはしませんから、そんな恨みがましい目で見ないでください」

嫌われたくはありませんからねくと、アヤは冗談めかして言う。いまいち信用できないなあその辺りはと、おルガはため息をはくしかなかった。どうにも困った人物だが、嫌いになれなくらいには絆されているのだと、自分で気づいているのかいないのか。

と、壁に掛けてある時計に目をやったおルガは、「そろそろ時間か」と話を切り上げて席を立つ。

「もうそんな時間ですか。……いなくなると分かれば、妙に寂しい物ですね」

「いつか来る日だとは分かっていたんだが、な。どうにも落ち着かないモンだ」

片目を瞑り頭をかくオルガ。ひとつ息を吐いてから、しゃんと背中を伸ばし前を向く。

「湿っぽい雰囲気漂わせても仕方がねえ。しっかりと見送ってやるぞ」

鉄華団本部の正門前。普段は各所に散っている団員たちだが、今日この日ばかりは地球組を除く全員が勢揃いしていた。

『契約が切れ、鉄華団を去るランディを見送るため』である。

これまで再三契約を更新し居座っていたランディだったが、鉄華団がアリアンロッドとの戦いを終え火星再開発事業に着手した頃合いを見計らって、契約を更新しない意向を示した。

「もう俺のやれることは全部お前ら自身で回せるだろうからな。これ以上居座ったらただの穀潰しになっちまう」

仕込めることは全て仕込み、そして相応のレベルになった。己が教えるべき事は最早無いと、彼はそう主張する。

正直引き留めたかった。まだまだ教えて欲しいことは山ほどある。少年たちは振り回されつつも、彼を慕っていることには違いない。それだけの恩があった。

同時に引き留めても止まらないだろうという確信がある。そういう人間だと言うことはいやというほど分かっていた。

ならば胸張って堂々と見送ろう。ランディがそれを望むかどうかは知らないが、自分たちの『けじめ』だ。

「また大仰にしてくれるな」
「それだけのことだったことさ。アンタが俺たちにしてくれたのはな」

荷物が入ったバッグを肩にかけたランディが片眉を動かす。オルガは頬をかきながら、どこか照れくさそうに言葉を紡いだ。

「……教官、アンタには感謝してる。箸にも棒にもかからねえガキだった俺たちを、ここまで鍛えてくれた。もしアンタがいなかったら、俺たちはどこかで野垂れ死にしていたかも知れねえ」

ランデイはただ仕事のやり方や戦い方を教えてくれたのではない。人との接し方、世の中の渡り方、大人と上手く付き合う方法。そういった様々なことを学ばせてくれた。だからこそこの結果がある。いくら感謝しても足りないと思う。

金銭や完璧に仕上げ直したラーズグリーズ、その他諸々渡せるだけの物理的な礼は渡した。後はいくら言葉で言っても蛇足ではある。しかしながらせめて、全身全霊の感謝の意は述べておくべきだ。オルガは居住まいを正し、直立不動で声を張り上げた。

「鉄華団総員、傾注！」

ぎ、と団員たちがオルガに倣い整列する。そして。

「ランデイール・マーカス教官に、礼っ！」

『ありがとうございますっ！』

一斉に、頭を下げる。ランデイは目を丸くしてから――

「……はっ、最高だよ、お前ら」

いつものいやらしいものではない、邪気のない笑顔を浮かべる。

頭を上げた少年たちは、次々と彼に声をかけた。

「ししよー！ 体には気を付けてくださいよー！」

「妙なところでくたばるんじゃないぞ」

ライドやビトーをはじめとする年少組。

「船が欲しかったらいつでも言ってくれ。良いリアクターを都合させてもらう」

昭弘たちサルベージ組。

「たまにや顔出してくれよ。訓練の成果つてのも見てもらいてえからな」

「おっと、ブーツキャンプは勘弁な」

肩を組んだシノとユージン。シノの傍らに隠れるようにして、ヤマギが黙礼している。

「傭兵を続けるんだったら、また僕らと関わり合いになるかも知れま

せんね。そのときはよろしくお願いします」

ビスケットとダンテ、チャドが揃って頭を下げた。

「今度来たときは、美味しい野菜をぐちそうするよ」

うつすらとだが笑みを浮かべて三日月が言う。それに「期待してるぜ」と応えてから、ランデイはオルガに向き直った。

「じゃあな団長、達者でやれよ」

「ああ、アンタもな」

ぐっつ、と拳と拳が打ち合わされる。そうしてランデイは後ろ髪引かれる様子もなく身を翻した。

歓声が響く中、背中越しにひらひらと手を振りつつ男は往く。その背中を見送りながら、オルガの隣に立つアヤは口を開いた。

「行っちゃいましたねえ」

「ああ。人と別れるのは初めてじゃねえが、やっぱりどうにも寂しいもんだ」

頭をかくオルガ。アヤの反対側に立つ三日月は、ランデイの背中に視線を向けたまま言葉を放つ。

「また会えるよ。死に別れてるわけじゃないんだ、会おうと思えばいつでも、ね」

「そうか……そうだな。俺たちは生きてるんだ。生きてりやいつかは道が交わることもあるだろうさ」

穏やかな笑みを浮かべるオルガ。その顔を満足げに見てから、アヤはランデイの背中にカメラを向けた。

ぱしやり、とシャッター音が響く。

『男と、少年たちの物語はここでひとまず幕を閉じる。』

しかし、その歩みは止まらない。彼らが前を向く限り、彼らが停滞を選択しない限り。

彼らは進んでいく。まだ見ぬ未来に向かって。
その先に希望が花開いていることを、私は切に願う』

今回のえぬじい……じゃなくて、多分エンディングテーマとスタッ
フロールが流れ終わってからの話。

荒野を進むランディの足が止まった。

「……で、お前さんなんでついてくんの」

頭だけ振り返れば、そこには動きやすい格好でボストンバッグ一つ
だけを持ったフミタンの姿があった。

彼女はいつも通りの表情を取り繕って、言う。

「お嬢様にはお暇をいただきました。ノブリス氏を挑発して裏切った
形になったので、火星にとどまるのは危険かと思ひまして。落ち目と
はいえ彼はまだそれなりの勢力を保っています。報復行動に出る可
能性を考慮すれば、お嬢様に危機が及ぶかも知れませぬので」

ぶつちやけ建前である。鉄華団やテイワズ、その他各勢力から警護
の人員が送り込まれているクーデリアの周囲は、下手な国家元首より
もガチガチの警備体制が整っている。彼女の側を離れる方がむしろ
危険であった。

「それで何で俺んここに来るのか、そこが分からない」

「あら、好き好んであなたにちよつかいを出す人間は大概返り討ちにされるでしょう？　世界で最強の『虫除け』だと思えますけれど」

えらい言い様であるが大体合っている。しかし好き好んでランデイの側にしようとするフミタンもかなり道を誤っているような気がするが。

分かっているのかいないのか。いや分かっている態度変わらないだろうランデイは、呆れたような様子で言う。

「お前さん、大分凶太くなったなあ」

「誰かさんのおかげです。ですので責任は取っていただかないと」

「……ま、色々と芸達者な人間がいれば、俺も少しや楽できるか。ついてくんなら好きにきな」

言って歩き出す。それを追うフミタンは、ランデイに問うた。

「それで、これからどうするのです？　世界は平穏に向かっていますから、傭兵の仕事は減るのでは」

「それでもねえさ。火星や圏外圏、経済圏の手が届くところは落ち着いてくるだろうが、『それ以外』はむしろ騒がしくなる」

GHはたしかに腐敗していたが、それでも世界を管理してきた。その影響力が低下すれば押さえつけられていた勢力がうごめき始める。裏社会や辺境では政治的にも物理的にも抗争が激しさを増すだろう。そして各勢力もそれとは無関係ではいられない。

ランデイは不敵に笑んだ。

「まだまだこの世界は『遊べる』ぜ」

どうしようもないわこの人。呆れるフミタンだが、自分の顔が小さく笑みを浮かべているとは気づいていない。

「まずは月か、あの辺りはタントテンポがなんか面倒抱えているらしいからな」

「金星の方も何やら不穏な気配があるようですが……」

男と女は歩いて行く。その足取りに迷いはない。

世界は平穏を目指しながらも、その裏で争いは続いていく。
そしていくつかの闘争の最中、炎渦巻く鉄火場にて、濃紺のMSの
姿を確かに見た者がいるという。

完っ！

第2部からのオリキャラ紹介

アヤ・アナンダ・アレン

鉄華団のことを記事にするために火星を訪れたフリージャーナリスト。20代前半。

ドルトネットワークのプロデューサー、ソウ・カレの後輩に当たり、彼に話を聞いて鉄華団に興味を持った。非常にアクティブで押し強い人物。

鉄華団に関わる一連の動きを取材し纏めたドキュメンタリー【鉄血のオルフェンズ】の著者。そして残りの人生を彼らと火星の発展を取材することに費やす……と言う名目で火星に居座り続ける。

ボブカットに小柄で割と巨乳。外観のイメージは東方シリーズの【射命丸 文】。名前は特攻野郎Aチームの紅一点【エミー・アマンダ・アレン】から。情報戦にて鉄華団に貢献する予定だったが、あまり前に出ずに終わった。しかしオルガの演説を生配信したりやらかすところはやらかしてる。

エスコンいうたらジャーナリストの語りやろ！ と言う理由で投入されたキャラだが、あまりエスコン感を出せなかった。とにもかくにも2期は彼女の言葉から始まり、そして一応彼女の言葉で締めくくられると言う風にしたかった。結果はご覧の通り。

なおオルガの外堀を埋め始めている。何のためかは不明。(白々)

ドクター・キシワダ

医者がないことに危機感を覚えたオルガが、テイワズを通じて招聘した医師。

阿頼耶識を中心としたサイバネティクス医療の専門家だが、医療全体と阿頼耶識システムで運用する機器のハードソフト双方にも造詣が深い。

その目的は阿頼耶識の進化と広い流布。結構マツド寄りの人物だが、やるべき事はちやんとやる。

マクギリスからもたらされたデータを元に、三日月の阿頼耶識強化に貢献した。この件に関しては本人も分からない部分が多いが、むしろ研究要素が増えたと喜んでいる。

三日月に『己の身体能力と引き換えにしてバルバトスの力を引き出させない』ために筆者が用意した人物。ギャラルホルンの研究者よりは良心的だと思う。

モデルは漫画【岸和田博士の科学的愛情】より【岸和田博士】。原作よりかなりマイルドになっている。もう一度言う、原作より（ry

マニングス

アーヴラウ防衛機構の実働部隊隊長に選抜された人物。

元々警察の特殊部隊を取りまとめており、MWの操縦、指揮経験もある。本来は彼が選抜されるはずではなかったが、経歴と実績を見たランデイが推薦し、実働部隊を預けられた。

自他共に厳しく冷静な人物だが、鉄華団の少年たちに一目置き、率先してアドバイスを請う柔軟性もある。彼が隊長に収まったことで鉄華団と良い関係が築けた部分もあったようだ。割と功労人気質だが表には出さない。

モデルは【ガンダムセンチネル】より【ストール・マニングス】。キャラ的にあんまり原作と変更点はないと思う。

シナプス

アーヴラウ防衛機構の指揮官に収まった人物。

元々沿岸警備隊の幹部で、艦隊規模の指揮を執ったこともある。で、ランデイに推薦された。鉄華団と諍いを起こしにくい、それでいて優秀な人間を放り込んだ疑いがある。

見立て通り鉄華団と協力して防衛機構の設立に尽力し、ガランの騒動時には先陣に立って采配を振るい続けた。

モデルは「ガンダム0083」より「エイパー・シナプス」。彼とマニングスが採用されたのは、苦勞人気質だからである。(酷)まあ原典よりはマシな扱いで生き延びられたから勘弁して欲しい。

ジヨニー・マクラレン

マクマード直属の内部監察室長という肩書きの元、各所に集りまくる酔っ払い親父……と見せかけたマクマードの懐刀。ワンと共にテイワズ創設以前から裏に表に働き続けた、テイワズの真の幹部とも言える人物。

暗部の実働部隊を率いる武闘派であり、中年太りに見える肉体は鍛え上げ固太りした物。マクマードと同年代でありながら現役でドンパチやらかせる。またテイワズの株を何割か所有しており、ワンと組めばテイワズを資金的物理的双方で締め上げることも可能。

近年はその活動を控えていたが、やる気を出したマクマードの要請により活動を再開。ジャスレイのやらかしたことを裏取りし、始末した。

外見的にはデブったブルース・ウイリス。名前は当然世界一運の悪

い刑事から。原典ばりのアクションも可能な動けるデブ中年。

マリイ・フォルク

本作のヒロイン。(大嘘) もといランディを付け狙っていたギャラルホルンMSパイロット。

元々軍人の家系で普通にエリートコースを歩み、アリアンロッド第7艦隊に配属された。

が、そこで地球外縁軌道統制統合艦隊と標的艦隊との合同演習に参加したのが運の尽き。善戦しながらも敗北し、その上でランディと言う存在に魅入られ、狂気を宿す。

演習後、己の技術向上に邁進、結果腕を見込まれ対ランディの要員としてラスタルにスカウトされる。そこから阿頼耶識の成人移植に志願し、さらにレギンレイズ・ハイムバー1号機モルガン(ジユリアのプロトタイプ)、それを強化したレギンレイズ・モルガン・ブライドのパイロットを請け負い、ランディに挑む。

アリアンロッドと革命軍の決戦にてランディのラーズグリーズと死闘を繰り広げ、互角の戦いを演じたが敗北、戦死。作中でランディに負傷を与えた唯一の人物。

作中でははすっぱな性格であったが、元々は素直で真面目な性格だった。ここまでヤンデレるとはこのリハク(ry 外観のイメージはゲーム「メトロイド」シリーズの「サムス・アラン」が髪短くしてやさぐれた感じ。名前に関しては「エースコンバットZero」に出てきた「片翼の妖精(ピクシー)」の本名(?)、「ラリー・フォルク」から。彼女がピクシーの子孫かどうかは分からないが、かつて彼女が使用していたエンブレムは片翼の妖精を象ったものだった。無理矢理ぶっ込まれてあまり生かされなかったエスコン要素である。

イアンナ・アレジ

ラスカー・アレジの娘。アーヴラウ事変の時にはドルトコロニーに留学していた。外伝月鋼のヒロイン「リアリナ・モルガトン」の友人。

2期開始前にアーヴラウに帰還。以後は政治家見習いとして父の仕事を手伝っていた。アーヴラウを救う力となった鉄華団に興味を持ち、父親を介してビスケットたちと接触する。最初は猫を被っているが、すぐさま勝ち気な本性を現し、アーヴラウが混乱に陥っている中、自ら囮として前線に赴いたりした。

アーヴラウの騒動が終結した後、研修の名目で火星に赴き、クーデリアと行動を共にする。その際火星のアーヴラウ勢力に働きかけると同時にリアリナ——タントテンポなどと連絡を取り合っており、鉄華団や反逆軍を陰で支える一端となった。GH改革後は監察官として火星に残り、暫定自治機構の動向に目を光らせたりビスケットにアプローチしたりしてる。

外見のモデルは某あかい悪魔。名前は女神イシユタルの別名「イアンナ」のもじり。（筆者の趣味）なお肝心なところでポカしたり、だわが語尾の姉妹がいたりはいはしない。

『政治的なアプローチからリアンロットを追い詰めるため』に筆者が用意したキャラだが、あまり活躍できなかった。もちつとはつちやけさせても良かったかも知れない。

運び屋の人たち

ランディの伝で引つ張り込まれた密輸とかやってる裏家業の人たち

ち。ウオードツグ隊を戦場に送り届け、その後マクマードと交渉し地球圏へご禁制の品を運ぶ仕事を請け負った。

高速輸送船を駆るグラサン黒人の親父と、やたらと肝の据わったサラリーマン風の営業を名乗る交渉人が出てきたが、さらに二人ばかりメンバーがいるかも知れない。

本拠地はもちろんランデイの出身地たる港町。

イツヒ

地球外縁軌道統制統合艦隊に所属しているパイロットで一尉。アリアンロッドと革命軍の決戦ではアリアンロッド側につき、どちらが勝利しても戦後カルタの有利になるよう動いていた……と見せかけて、本音はランデイに一泡吹かせたかっただけだったらしい。忠義は本物であるようだが、意地と矜持が勝ったようだ。決戦時にはアーヴラウ戦後に編成されたシュネー中隊を率いて参戦した。

実は1期でも登場している。カルタと共に鉄華団へ襲撃をかけ、ランデイと交戦したあげくシャイニングウイザードくらつて沈んだMS小隊長が彼である。ランデイに撃破されながらも生き延びた、実は結構すごいヤツ。

彼やコーリスなど、いや地球外縁軌道統制統合艦隊の面子ほとんどが忠誠心の高い好漢と化しているが、筆者がイメージする忠義者とはこう言うものだろうという趣味が出てきてしまったからだと思われる。多分。

戦後もGHに残留し、治安の維持と革命勢力の監視に努め、万が一の時にはカルタが戻ってきてても良いように尽力を尽くす。

キャラクターのイメージは考えていないが、カルタの側近だから多分美形。

ヘイムダル特殊部隊スカーフエイズ

マクギリス直下の特殊部隊。その正体はマクギリスが直々にスカウトしたヒューマンデブリなどの阿頼耶識システムを持つ者たち。正規の訓練と教育を受けた彼らは、エースパイロットの一端と見て良い。

マクギリスの切り札の一つで、スタークグレイズは彼らのために用意された。

自分たちを人間として扱い自由を与えてくれようとしたマクギリスには、全員が多大な恩義を感じており、最後まで彼に付き合うつもり満々である。戦後は揃ってGHを辞し、マクギリスと共に歴史の陰に消えていく。

部隊名はもちろんエースコンバットより。しかし出てきただけでエスコン感がほとんど無い。つかエスコンから引つ張ってきたのは大体出しただけで終わった。筆者の技量不足のせいである。すまぬ。

元標的艦隊の愉快な人たち。

登場時期はバラバラだが、纏めて紹介する。

●アンダーセン元一佐

元標的艦隊司令官。たたき上げであったがGH内部の政争に敗れ、閑職に回される。ランディが配属されるまでお気楽極楽に腐っていたが、彼に説得されたりなだめすかさされたり脅されたりでケツを叩かれ、やる気を出す。

その結果演習で事実上勝利し……またトバされた。しかしながらなんか気が晴れたようで、閑職に甘んじながらも後進を育成したり標的艦隊の面子と連絡を取り合っただけでも動けるよう備えていた。本来の才覚を取り戻し、GHがこのまま現体制を維持するのは難しいと推測したためである。

そして予想通りGH内乱が発生し、マクギリスの招聘に応えモスポール保存されていた標的艦隊旗艦ケストレルにて参戦。反逆軍の一翼を担った。

戦後は改革されたGHの暫定代表を押しつけられ、後処理とかにヒーヒー言ってる。早いところ石動辺りに席を押しつけない。

リボンの4こと石動が主催する秘匿チャットでの名はしれえ。

モデルはエースコンバットにて空母ケストレルの艦長を務めた【ニコラス・A・アンダーセン大佐】。

●メビウス隊メンバー

標的艦隊時代のランディの同僚。彼に匹敵するようなエースを、とか言う理由で引っ張られてきたキャラたち。予定よりごっそり出番が削られてしまったのでほとんど顔出しただけで終わってしまった。これも捻れ骨子ってヤツのせいなんだマジだよ。

メビウス2・ロツソ。【パゴット】二尉。

ランディより年上のベテランパイロット。旋回機動にて敵の背後を取る戦術を得意とする。飄々としながら所々が格好良いおっさん。標的艦隊解体後は賞金稼ぎとして暮らしていた。戦後も賞金稼ぎとして火星に居座る。モデルは【紅の豚】より【ポルコ・ロツソ】。

メビウス3・スノーウィンド。【フカイ】二尉。

石動と同年代のパイロット。偵察と電子戦闘を得意とする部隊の目。口数は少なけどやるときはやる男。GHからおっぽり出された後は傭兵として活動していた。ロツソと共に火星にて治安維持に尽力する。モデルは【戦闘妖精雪風】より【深井 零】。

●ガルーダ隊メンバー

ランディの元同僚。標的艦隊に配属されていた3小隊の一つ。標的艦隊解体後は傭兵部隊として各地を巡りつつ、裏で石動などと連絡を取り合いGHの動向を窺っていた。マクギリスの依頼に応じて一時アーヴラウ防衛組織の教練や再編成を手伝いつつ、密かに連絡役として活動していた。

戦後はGHの下請けとして、経済圏各地を飛び回り教練やアグレッサーをこなしている。

やはりちよつと顔出しした程度のエスコン要素……に見せかけて中身は別のところから引つ張ってきた人たち。近藤組。

ガルーダ1・タリズマン。ブラウン一尉。

ガルーダ隊長。たたき上げのパイロットであり、ランディに迫る技量を持つ。下級市民の出なので疎まれて標的艦隊へ。真面目で堅物だが冗談は分かる男。なおかなり悪運しぶとく、機体が撃破されても大概生き残る。モデルは漫画【新MS戦記】より【フレデリック・F・ブラウン】。

ガルーダ2・シリウス。【マイヤー】二尉。

ガルーダ隊エースで『シリウスの魔女』という二つ名で呼ばれる。腕前は良いが気性が荒く、よく上官とぶつかるため標的艦隊へ。やたらと勘が良いが全然そんなところ表現されなかった。モデルは漫画【機動戦士ガンダム ジオンの再興】より【マイヤー】。

ガルーダ3・サザンクロス。【クルツ】二尉。

ブラウンやマイヤーに勝るとも劣らない凄腕のパイロット。一応それなりの家の出だが、周囲とそりが合わず標的艦隊へ。多分見た目と言動は軽め。モデルはマイヤーと同じく機動戦士ガンダム ジオンの再興より【クルツ】。

ガルーダ4・ラウド。【ドルク】二尉。

この隊に配属されるだけあつて結構な腕前のパイロットだが、性格がかなり悪い。多分そのせいで疎まれて標的艦隊送りとなった。しかしランディとは一番気が合う人物。つまりろくでなし。関西弁にグラスン、ガム噛みながらコクピットに仕込んだスピーカーで大音量を垂れ流すヤンキー。モデルは近藤和久版Zガンダムより【ドルク中

尉】。なお秘匿チャットではひよこの4を名乗っている。

●ウオードツグ隊メンバー。

標的艦隊3小隊の一つ。ガルダ隊と同じく傭兵家業を行っていたようだが、地球とは距離を置いていたようだ。だがやはり古巣のメンバーやランディとは連絡を取り合っていたらしい。ランディからの依頼を受けてタービンスの窮地を救い、その後決戦にて反逆軍と合流、ほぼ無傷で戦い抜く。戦後は纏めて火星で賞金稼ぎとして治安維持に努めているようだ。

やっぱり出番が削られたエスコン要素と見せかけた余所からの流用キャラども。小林組。作中でチョツパーが匂わせていたが、古いエース部隊とTACネームを名乗るのは一部の慣例らしい。

ウオードツグ1・ブレイズ。シャイアン一尉。

ウオードツグ隊リーダー。ブラウンと同じくランディに匹敵するたたき上げのパイロット。真面目に見えるが結構お茶目らしい。名前はOVA〔ドラゴンズヘブン〕から主役メカ〔シャイアン〕より。戦場に現れたときに「●●より龍一匹!」とかやらせたかった。

ウオードツグ2・エツジ。【イクール】二尉。

シャイアンとコンビを組む女性パイロット。幼げな容姿だが割と苛烈で、火星治安維持機構の荒くれどもを締め上げた。モデルはドラゴンズヘブンのヒロイン、【イクール】。シャイアンに絡むときにはやたらと生き生きしてる。原典でのこの二人の掛け合いは中々良かったので使ってみただけ。

ウオードツグ3・チョツパー。【ベネトン】二尉。

ちよつとひねくれたところはあるが、彼女も凄腕。任務で何度かニラサワの窮地を救い、その結果猛烈な攻撃（恋愛的な）を受ける。最終的にはプロポーズを受け入れ入籍した。モデルは漫画【Gの伝説】より【カービニアン・ベネトン】。原典では非人型ミュータントであったが、さすがにそれはなかりうと普通の女の子に。

ウオードツグ4・アーチャー。【ニラサワ】二尉。

標的艦隊の中では石動に次いで弱い男。（もちろん平均的なレベル

からすれば凄腕)そのせいか窮地に陥ることが度々あり、その都度ベネトンに助けられる。で、彼女に惚れ込み猛烈にアプローチ。最終的には撃墜(恋愛的に)することに成功。もげろ。モデルはGの伝説から「ニラサワ・バン」。原典ではミュータントであるベネトンの姿を見てどんびくどころか逆に惚れ込みプロポーズするという剛の者。この話好きだったんだよ。なお秘匿チャットでの名はわんわん4。

最終的な後書きという名の言い訳

ここまで読んでくださった読者の皆様にもまずは感謝を。おかげさまでまをもちまして当物語は終演を迎えることが出来ました。ありがとうございます。

この話を書き終えて、色々反省するべき点や書きたかったことや書けなかったことが次々と思いつかびます。最後ですのでそれらを一部なりとも明らかにしたく、筆を取った次第です。

……とまあ堅苦しいのはここまでにして、ぶっちゃけまくりの反省会（反省するとはいつていない）いつてみよー。

●まずなんでこんな話書いたの。

事のはじめは原作放映時。当時終盤を迎えていたオルフェンズのストーリー展開に絶望を感じていた捻れ骨子が、「……久しぶりに二次創作やっちゃうか」と思いついたところからです。鉄華団の少年たちを救いたい。その一心から筆を取ったわけなんです。さて救うにしてもどすればいいのか。オルガたちが自力で強化するのは無理そうだし、話が制御できなくなるレベルの強力すぎるオリキャラをぶち込むのも拙い。……そーいや鉄華団には兄貴分はいても、師匠的なキャラはいないな。よし、そういう立場に収まるオリキャラにしよう。だが普通に『いい人』を当て込んで、あのアクの強い鉄華団の面々が素直に言うことを聞くだろうか。であれば、同等以上にアクが強くと、それでいて味方には世話焼きの人間が適任だろう。

……ヤザンか。

とまあ真つ先に思いついたのが野獣さんでしたが、さすがに本人そのままってのはどうよ。似たような系統……焼け野原ひろし。ダメだヤツあ洗脳したあげく自爆特攻させる。あ、そういや余所に曲がりなりにも師匠的なことやってたクソ外道いるじゃん。ってことで愛気の承久をモデルに。ヤツからスケベ成分抜いてややマイルドに仕立て上げたのがランデイさんです。

さらにわかりやすく凄腕と示すにはどうしたら良いか。戦闘シーン？ 短編でだらだらと書けるかい。手短かに理解させるには……あ、エスコンとかから名前だけひっぱってくれば超凄腕ってわかりやすくてね？ そんな軽い思いつきでランデイさんはメビウス1の看板背負うはめに。

そして話の続きが思い浮かんだ物だから連載を始めちゃおうと。こんな適当なノリでスタートを切ってしまった訳なんです。

●ランデイル・マーカスという男。

さて、オリキャラ主人公であるランデイさんですが、彼はただ強いだけでなく『鉄華団に足りない物を補う』役割を持っていました。『勝つための環境を整える』これです。

戦術だけでなく、コネを造り、味方を増やし、戦う前から勝てる要素を積み上げる。さらには万が一の時には逃げられる道筋を作っておく。原作の鉄華団は、排他的であったがためにそういったことに手が回っていませんでした。ですからそのような部分を補うべく、ランデイさんはやたらとコネがあつたり器用だつたり面倒見が良かったりしたわけです。

で、鉄華団だけを強化しても周りの環境に追い詰められたら孤立するだけでしよう。それを防ぐために『作品が始まる前から色々な人に影響を与えまくった』という土台を造ったら鬱フラグブレイカーに。

結果マッキーがバエリストやめてガチ有能になったりカルタ様がめっさいい女になったり地球外縁(略)艦隊の面子が忠臣かつ好漢になったりと魔改造されてしまいました。各キャラクターの魔改造のレベルでどれだけランディさんに影響を受けたかが分かります。鉄華団を含め、影響を受けた上で学習し成長した人間の運命が大幅に変わっていると言うことですね。

実のところラスタルがランディさんの謀殺に成功していても、すでにマッキーとカルタ様は魔改造済みなので手遅れだったというw この物語の通りにはならないでしょうが、原作とは大幅に展開が変わってくるはずです。

そして、ランディさん個人の強さに関してですが、本来の主人公たる三日月君を食わないように、『とてつもなく強いが欠点もある』レベルに設定してます。総合力では成長した三日月君に劣りますね。鉄華団の少年たちの成長も見せたかったので、『いずれ追いつき、追い越していける』。そういった人間として設定しました。最終決戦で三日月君の戦いを見守る彼の台詞が全てを表しているかと。

戦闘適性が図抜けている以外は特殊能力など全く持っていませんが、ある世界ではベルゼルガ、またある世界の精神仏理学では修羅、などと呼ばれる存在なのかも知れません。

●設定が死んだ！ この人でなし！

一応この話を書くに当たって、色々とオリ設定とか考えました。しかしながら、生かし切れなかった物や泣く泣く削りまくったところもあります。

代表的なのがエースコンバット感。ランディさんをメビウスーとしたついでにエースコンバットとクロスオーバーさせちやおうと考

えたまでは良かったのですが……エースコンバット要素はほぼ名前出てきただけの小ネタで終わってしまったという体たらく。

もつと色々絡めたかったのですが、そうすると無駄に文章の量が増え制御できなくなると判断。泣く泣くエピソードを削る羽目になりました。己の力不足ですね。力量ない人間が下手なクロスオーバーをしようとするところくな目に遭わないという実例です。でも多分またやる。(懲りてない)

そしてもう一つ。気づいて指摘された方もおられましたが、アーブラウが『アーヴラウ』だったり、グレイズの兵装がアックスでなくマチェットだったりする細かな設定の差異がいくつかあります。

実はこれら、『この物語が正当な原作の分岐ではなくパラレルワールドであることを示すアイコン』のつもりだったんですが、ナチュラルに筆者の誤字脱字が多かったせいであまり意味をなさなかったというごまでした。どれが間違いでどれがわざとなのか、無駄に読者の皆様を混乱させただけですなすまぬ。最低でも人名は元のままですので、そこが間違ってる場合はマジの間違いです。

他にも色々活かし切れなかったり書き損ねたりした部分はありますね。もし次回作があるのであればこの辺りを反省し活かせるようにしたいと思います。

●割を食った人、食わなかった人。あんまり変わってない人。

物語の結末が大幅に変わっているので、当然ながら登場人物の運命は多くが変わってしまいました。

中でも一番割を食ったのは当然ながらラスタルでしょうね。原作での勝ち組体制から一転、お亡くなりになってしまった上に、多分

色々あること無いこと押しつけられてるに違いない。踏んだり蹴つたりの酷い有様です。おかしいマリイさんやサンドバル取り込んだりエクスカリバー建造したりして原作より戦力は上がっているのに。マツキーおよび鉄華団がそれを上回ってしまったのが敗因でした。

実のところキャラクター的には嫌いじゃないんです捻れ骨子。ただ、選択する手段が他者の犠牲を前提にしているってのが気に食わない。本作中でも書きましたが、根本的に他人を信用していないんでしょうね。そしてその上で、実のところは臆病な人間だったのではないかと思います。原作で執拗なまでに鉄華団を追い詰めていった要因は、己の命が一瞬でも脅かされたからだと自分は睨んでいます。

で、彼ほどではないにしろ割食つてんのがジュリエッタ。良いところ全くなく路傍の石扱い。とりあえずは生き残りしましたが、原作とは違う落ちぶれようです。正直原作ではもつとはつちやけたキャラになると思っていたんですよね。いきなり蝶食ってるし。しかし蓋を開けてみたら単なる純粹まつすぐちゃんじゃないですか。返せよ俺の期待。

ここでぶつちやけますが……実は最初、マリイさんの役を彼女にやってもらおうかなっていう発想がありました。原作ではつちやけられなかった分ここでやつても良いかな、と。しかしそうするとラスタル側にネームドパイロットが少ないままだという事に。ですので改めて設定されたのがマリイさんというキャラです。そういった意味でもジュリ子割を食いまくってたり。いいじゃないの生き残れたんだから。

逆に運勢爆上がりしてたのがマクギリスと革命軍（反逆軍）。そしてカルタとコーリスを代表とする地球外縁軌道統制統合艦隊の人たちですね。

マクギリスは原作前期の大物感を維持したまま最後まで突っ走って欲しかったんですよ。そのためにはバエル手に入れただけで満足してしまうような人間ではあかんかったわけなんです。で、過去の英雄と目の前の背中を追い抜くために邁進する、本物の野心を持つ男へ

とジョブチェンジ。己の凄惨な生い立ちすら武器にして優位を作り出す強かな戦略家になつてしまいました。

元々他人に影響を受けやすい人間だと思つたのですよね彼。そもそも原作でバエリストになつたのはアグニカに憧れすぎたせいです。だつたらランディさんみたく現実で権威や何やらをぶち壊していく人間が目の前にいたら、影響を受けないはずはなからうと。なんか本人自覚していないのに人望を集めてしまうところまで似てしまいました。

そして上がりまくつたカリスマでもつて人を集め身内を鍛えまくつた結果、革命軍こと反逆軍も強者に。石動さんは元々ランディさんの手下だつたという設定になつて魔改造されてしまつてましたが……あ、ライザとか結構ランディさんの影響受けてたわ。やつぱヤツのせいじゃん。実のところ石動さんは「三日月・オーガス！ 使え！」をやらせてみたかっただけだつたり。ヘルムヴィーゲもろとも見せ場があつてもいいじゃない。いいじゃない。

最終的に生き残つて勝者となつた反逆軍ですが。それは同時に原作でラスタルがやつた苦勞を背負い込むことでもあります。まあGHは縮小の方向ですし、ラスタルがやつたことを皆で分散してやるので、ラスタルよりは苦勞しないでしようが。マッキーもちやつかり生き残つてますけど、表の世界には帰つてこないし、こられないでしょうね。もし表に姿を現すとすれば、世界かアルミリアになんかあつたときでしょう。

次いでカルタ様一同。自分で書いといてなんですが、カルタ様いい女になりすぎてない？ いや好きなキャラクターだつたしこれくらいポテンシャルはあつただろと思つてますが。最眞目だつたのは自覚してます。あとあのメイクが何とかなれば完全生命体じゃなからか。

彼女は元々お飾りだつた地球外縁軌道統制統合艦隊を実戦向きに仕立て上げた実績がありますから、努力の方向性を間違えていなければかなりの強者になつたんじゃないかと。初恋こじらせたのが原因なんだなあ、だつたらそれ以上のショック与えて負けん気を良い方向

に誘導すれば良いじゃない。てことでランデイさんと絡むことに。結果ああなった上で辛くも生き残りました。生きている以上、彼女は何か出来るでしょう。それはコーリス以下部下たちも同様です。

特にコーリス。統制統合艦隊がまるごと強者になっていると示すのに都合が良いから分かりやすく変わってもらったのですが……最後の最後まで忠義者かつ好漢だぞおい。自分で書いててびっくりだよ。ランデイさんに影響を受けたのは間違いないはず……ああ、ヤツを反面教師にしたからか。そりゃ好漢になるわ。多分本作品の中で一番の出世頭じゃないでしょうか。

同じく生き延びて幸せになる(断言)のが名瀬さんとアミダ姐さん、ラフタ。この三人は絶対に生き残らせると最初から決めてましたので、話の展開に全く迷いがなかったですね。まあ名瀬さんはテイワズの跡目押しつけられてしまいました。まああれです、幸せになるには代償がいるって事で。たくさんいる妻子を養わなきゃならないからね、しょうが無いね。アミダ姐さんも一緒に頑張るから大丈夫だよ。多分。

ラフタは昭弘と問答無用に幸せになりなさい。これは義務です。代償？ 知らんなあ。手のひらぐりんぐりん返すけど私は謝らない。むしろ昭ラフは正義だから。俺が見たいモン書いて何が悪いんじやあ！（開き直り）

おっと、地味にサヴァラン兄さんとかも生き残って頑張ってますね。彼やドルトの人たちも報われて欲しかった。当然ながらこの後も苦労が待っておりブラック体制まっしぐらですが、原作と違って生き残り、希望があります。よりよき未来を手にするため、頑張っしてほしいものです。

しかしやたらと出番が多くなったのに報われなかった人もいます。サンドバルです。（ついでにブルック）

ラストル側にネームドを増やすためキャラを強化した上で再登場となったわけですが……強くなっただけの噛ませ犬状態。強敵感は出てたと思うんですがねえ。原作状態だったら大暴れしていたと思いますが、すまない鉄華団も強化されてるんだ。

しかしここまでサンドバルが出世した作品は他にありません。強い悪党とか良いじゃん、良いじゃん。結局最後は倒されてしまいました。強敵が書いて私は満足です。

……ブルック？ ああいたねなぜか2度も再起しやりましたが。ホントこいつ何のために出てきたんだろいなあ。(自分で書いててもうエロフに搾り取られてろよ。)

逆に生き残ったのに微妙な人もいますな。アリウムとノブリス、この二人。アリウムは原作通りにやらかしましたが、鉄華団が夜明けの地平線団をほぼ無傷で返り討ちにしてしまったため、それほどの恨みを買わずにすみました。が、一生返せない借金に苦しむこととなります。まあマルバとともに帝愛地下……もとい採掘衛星で元気に労働していることでしょう。

ノブリスは便所で暗殺などという目にこそ遭いませんでしたが、これから坂道を転がり落ちるような没落ルートが待っています。果たして暗殺されるのどちらが良かったのか。

まあ鉄華団のことがなくても彼あちこちから恨まれてそうですからねえ。権力が無くなった途端今までの因果がまとめて……などと言うこともあるかも知れません。頑張って生き延びてほしいものです。(他人事)

こんな感じで大きく運命が変わった人たちが多いのですが……色々あったのに、最終的にはあんまり運命変わっていない人もいます。

例えばジャスレイ。うん、この人やってることも結末も大して変わらないや。始末を付けたのが親分さんの懐刀だったってだけで。名瀬さんが生き残ってタービンスのダメージがそれほどないのに厳しい措置過ぎるかも知れませんが、問題はヤクザ組織で裏切り行為を働いたって事なんだよなあ。そりゃ落とし前つけなきゃでしょ。インガオホー。

そしてイオク。原作よりも早い退場となってしまいました。結末は一緒。まあ圧死と発狂の末の餓死とどっちが良いのかは分かりませんが。彼も良いキャラしてたと思うんですが、ラスタルの傀儡状態

なうえに方向性がアレでしたからねえ。条約禁止兵器持ち出して免罪ふっかけたあげく皆殺し図るとか、普通にやらかしてると思う。やはり始末しなきゃ。シヨギヨムツジヨ。

で、なんか本作でラスボスまでやったはずなのに結末そんなに変わらなかった人いますねえ。お前だよガエリオ。

最初彼とマクギリスとどちらをラスボスにするか迷ってたんですが、キマリスヴィダールのほうが色々ギミック多いしダインスレイブも備えているしで、彼がラスボスに決定。それであんな展開に。彼が決戦で生き延びたのは話の都合ですけどねえ。結局原作と違う終わり方というのが想像できなかったのですよねえ。頼まれても改革に関わりそうにないでしょうし、神輿として担ぐにも何か一つ足りないような。そんなわけで大して変わらない結果となりました。……あれ？

自分のせいかな？ すまぬガリガリ君。

しかしまあ、自分でやって何ですが一番納得していないのがガルス。前にも書きましたが筆者このおっさんが一番嫌いなものになって原作と大して変わらない終わり方なんだよ！ 何にもしてないからですね。いやだってこのおっさんが物語の流れを変えるような行動起こすとはとても思えないんだもの。逆にむやみやたらと人に恨まれるような行動も出来ないでしょうが。そういうところやぞ。精々失望のまま早めに老け込むと良いよ。

残りのセブンスターズ？ 知らんなあ。

ま、なんだかんだ言って一番運命変わったのが鉄華団とその周辺。彼らを全力で幸せにするのが捻れ骨子の使命でした。(大げさ) 激動の時代はまだ続き、苦難は山と待ち構えています。ですが彼らは前に進み続け止まらないでしょう。悲しみの果てではなく、未来に咲く『希望の花』を目指して。

●で、この後みんなどうなっていくんでしょうかね

さて、後日談とか書けるかどうか分からないので、キャラクターたちが今後どうなっていくのかその辺りを。

まず鉄華団ですが、四苦八苦しながらも成長していくでしょう。そのうち火星圏でも有数の企業になるのでは。

オルガなんかはそこから政権への参加を請われたりするでしょうが、多分それは遠慮するでしょうね。あくまで一企業の経営者という立場で火星の発展、治安の維持に尽力していくと思います。過ぎた権力は身を滅ぼすと理解してますから。あと常に女性ジャーナリストが側にいたりしますが、関係性はどうかになっていくのか神のみぞ知る。

三日月は基本火星DASH。火星の開発と農業の発展に邁進していくことでしょう。もちろん何か事が起これば真っ先にバルバトスを駆って飛び込んでいくのは間違いない。そのうち火星農業の父とか火星の守護神とか、そういうった呼び名がつくかも知れません。もちろん嫁は二人。多分アトラがクーデリア巻き込んで、いつの間にかつり外堀が埋められてみると。暁君の誕生は遅れるでしょうが、その分兄弟姉妹がたくさん出来るぞ。

ビスケットは治安維持組織で大忙し。そのうちなんか総責任者とか押しつけられてそう。もちろん相変わらずイアンナがくつついています。彼女に政界とかへ引きずり込まれるのか、それとも彼女がビスケットの側に居着くのかは不明。

ユージンは意外と堅実に業務に努めてるのでは。調子に乗らずにシリアスが維持できれば、相応に有能な人間だと思います。ただシリアス維持するのが無理っぽいけど。(酷)意外にお見合い話とか来るんじゃないですかね。飛ぶ鳥落とす勢いで成長している企業の幹部ですから、結構目を付けられてると思うのですよ。ハニトラに引つかかるなよ？

ハニトラに引つかかりそうで意外に切り抜けてそうなのがシノ。ヤマギにターゲットイングされてるしね。頑張れよ。仕事自体は基本に忠実だと思われ。今日も今日とて体力作りと基礎訓練に明け暮れ

てるでしょう。体力と精神力は付けておくに越したことはない。いざというときそれが役に立つと重々理解しているでしょうから。

ダンテとチャドはSE関係強いんでしょっちゅうあちこち呼び出されてるんじゃないですかね。裏方仕事でかなり忙しいのでは。多分年少組とか新人にも教練しているはずなんだけど、育つものには時間がかかるだろうからしばらくは忙しいまま。給料はいいはずだから頑張るよろし。

昭弘はラフタと幸せにやってるよ。うん当然じゃん、昭ラフは大義だから。(迷いのない澄んだ目)結婚まで秒読み。賭けは誰がかつか。もちろん昌弘をはじめとする『兄弟』たちも元気に頑張ってることでしょう。アルトランド家は今日も平常運転です。

地球支部は狙われている！ 主に後継者的な意味で！ とまあ冗談めかしていますが、実はあまりしやれになってないかも。普通にタカキとかアストンとか有能だし。タカキは政治関係、アストンは軍事関係から目をかけられてるでしょう。オルガの元にラスカーあたりが土下座つて引き抜きの話持ち込んでくる日は近い、かも。あとアストンはフウカちゃんあたりと怪しい。でも多分タカキは喜ぶ。

その他年少組はそれぞれ色々なところで成長を続け、次世代をになう人材になっていくんじゃないでしょうか。ライドとかビトーとかは治安維持組織で活躍してくれることでしょう。ライドはリーダー格かな。ビトーも結構優遇されていますが私は謝らない。

ハッシュ、ザック、デインの三人組は地道に頑張ってると思われ。ハッシュは主に三日月と火星DASH。そうしながらスラムの環境改善を手伝ったり人材の発掘に精を出したり阿頼耶識の手術などで障害を負った者の治療や手助けに尽力していると思います。自分たちのような苦勞をする子供たちを少しでも減らすために。ザックは阿頼耶識担当責任者という名目でキシワダにこき使われます。医療技術はともかくハードとソフトに関しては叩き込まれまくるんじゃないですかね。ある意味後継者と見なされてる可能性もあります。デインも裏方としてあちこち顔を出してる感じ。重い過去を表に出すこともその機会もないでしょう。そのうち折り合いを付けられ

ば良いのですが。

鉄華団はこんなところで、その他の人たちはというと。

クーデリアは火星の独立に向けて経済の発展と再開発を推し進めていくでしょう。まずしっかりと地盤を固めてからの独立を、と考えているので、時間がかかるでしょう。その分しっかりと発展していくと思います。あと三日月の嫁は確定。忙しさの合間にポコポコ産むと良いよ。

テイワズは名瀬さんを中心にした体制を移行。タービンを前面に押し出して表向きの健全な業務を拡張すると同時に、裏の方は闇に潜んでいく感じですかね。そっちの事業を縮小するのではなく、より狡猾になっていく感じで。新たな時代に向かっていく中、強かに生き残っていく方策を練っているようです。まあ鉄華団関係でよくほくですし、裏の業務を強く押していく必要はあまりないでしょう。

アーヴラウを筆頭とする経済圏は自力で防衛力を整えつつ、互いの様子を窺いながら技術力を上げていくでしょう。緊張は保ったままですが、余計なことをするGHは大人しくなりましたし、厄祭戦の記録とかもどしどし公開されていますので、戦力の行使に至る度胸を持つところはないのでは。その間に蒔苗じいさんとかはヒューマンデブリの廃止とか色々動いています。原作見たく大げがしてないので、もうちよつと長生きするんじゃないですかね。でもタカキはロツクオン。イアンナいつ帰ってくるかわかんないしなー。

経済圏の活発化によりドルトなどコロニー群も経済が発展しているのでは。ともかくハーフメタル関係と工業系は忙しいでしょうし、ノウハウを得るためにどこも技術力を高めていくかと思います。忙しさと共に生活環境も向上していければと、サヴァラン兄さんとかが頑張ってる感じですね。

ギャラルホルン関係は基本組織の整理と権限の縮小を推し進めていきます。治安維持関係を経済圏や下請けに譲渡し、警察権と非常時の武力介入および指揮権限のみを保有していく感じで。国際警察的な組織に移行するわけですね。そういった組織はまだ必要でしょうから、しばらくは存続を許されるでしょう。過去にやらかしたことは

死んだラスタルやセブンスターズの面々に押しつける感じですかね。まあ責任取って血統主義者を全面的に排除する代わりに不起訴、と言う形で収まるかな、と。多分石動さんやライザ君辺りが次代を背負っていくことになるでしょう。

カルタ様はGHを辞した後、孤児や貧困層を援助する基金とか設立してそう。何事もなければ穏やかに暮らしていくんじゃないですかね。ただし一端GH関係で騒動が起これば万難を排し立ち上がることでしよう。もちろん地球外縁軌道統制統合艦隊の面子もそれに習います。マッキー関係は……生きてるって気づいたら何らかの動きを見せるかも。

ガエリオはジュリ子の手助けを受けながら、ちまちまと有事に備えるのでは。しかし一人で事を起こすほどの用意は出来なさそうなので、いざとなったらカルタに合流するとみた。自分が大したことの無い人間だという自覚はあるので、その辺り簡単にプライドかなぐり捨ててるんじゃないでしょうか。そうなった場合むしろジュリエッタの方が奮起しそう。彼女をなだめる方に労力取られるかも知れず。

マクギリスは裏社会に潜み世界の動きを監視していくことでしよう。サングラスノースリーブかは不明。まあなんかことあるごとに鉄華団やランディさんと絡んでいるような気はしますが。精々カルタ様やアルミリアに生きてることがばれないようにしろよ？ 追いかけられるですめば御の字だろうから。

で、アルミリアは普通に学生してると思いますが……将来は意外に鉄華団とか就職先に選びそう。そうなった場合ガリガリくんとか複雑な心境。マッキーはよろしく頼むと菓子折とか送ってるかも。もちろんマッキーの生存を知ったら追いかけるぞ。下手をすると協力者が増えるぞ。

標的艦隊の愉快的な連中は、それぞれお気楽極楽にやりつつも、なんかあったら首突っ込んでくると思います。多分泌匿チャットは引き続き連絡網とかで使われてるんじゃないやねえですかね。

そしてランディさんとフミタン。変わっていく世界。その水面下でうごめく者たち相手に戦いおちよくり小馬鹿にし叩きのめしてい

くランデイさんを、呆れつつもサポートしていくファミタン、といった感じで良いコンビになるんじゃないですかね。主任とキャロリんな関係になるとみた。世に争いの種は尽きまじ。一見平穏に見えても彼らが活躍する場はいくらでもあります。まあ本当に平穏になったらジャンク屋でもやって生き延びるんじゃないですかね。その場合ラズグリーズには偽装が被せられる事に。(スカルハート感)ともかく強かに世を渡っていくことは間違いない。

とまあこのような感じで、物語が終わった後もキャラクターたちはそれぞれの人生を歩んでいくことでしよう。

●最後に

ここまでだらだらと書いてきましたが、まだまだ書き足りないことやこうしたかったと思うようなところがあります。しかしこれ以上書くのも蛇足かな、と言う気持ちもありますので、一旦ここで幕を下ろすとしましょう。

この先は基本皆様の想像にお任せしますが、気が乗ったら外伝っぽい話とか、あるいは別な新作とかがひよこつと生えてきたりするかも知れません。そのときはまたよろしくお願いいたします。

それでは、ここまでお付き合いくださった事に、感謝を。

捻れ骨子

あ、普段はなろうで、婚約破棄されたお姫様がロボ乗って暴れる話とか書いてますんで、お暇でしたら探してみてくださいください。

嘘予告

月軌道コロニー群アバランチ。そこを拠点とする企業、タントテンポは新たにある傭兵を雇い入れる。

「M&Aマーセナリーサービスのご利用、ありがとうございます」
「いつの間になんな名前ついてんの。名刺も出来てるし」

ランディール・マークス、フミタン・アドモス。この二人が、新たな騒動の渦中に飛び込む。

「……アルジ・ミラージだ。アンタの噂は聞いてる」
「は、どうせろくなもんじゃねえだろ？ 大体事実だが」
「少しは己を顧みたらどうです」

「ガンダム・セーレ？ ……いや、聞いたことはねえな。最低でも傭兵じゃねえ」

「そうか。つまらないことを聞いた」

「ふん、敵討ち、つてところかい？」

「……っ！ なぜ分かる」

「そんなに殺気だつてりや当たりもつくさ。……で、詳しい話する気、ある？」

「ランデイル・マーカス！ あなたに決闘を申し込む！」

「ガンダム・グレモリーね。……名家とやらがGH追い出されたのは俺のせいじゃねえんだけどな」

（巡り巡って最終的にはこの人の影響では）

「そりやデータチップ埋め込みや知識と技術は詰め込めるが……体壊してまでやる事かよ」

「あときは、それしか手がないと思って……」

「とりあえず人格は保証できないが、腕の良い医者紹介してやつから。人格は保証できないが」

「なんで2回言ったの。ねえなんで2回言ったの」

そして動き出す、歴史の闇に潜んでいた者たち。

「見たことのないMSフレーム……ヘキサでもロデイでもねえ、なん

だこいつは」

「あれは……間違いない、セーレー！」

「アルジ！ おい、一人で突っ込むな！」

「ちっ、しゃあねえ。メビウスーエンゲージ！ フミタン、お嬢さんを頼む！」

「ごつちの行動が読まれている？ まさか内通者が！」

「いや、そういう空気はねえな。……向こうに頭の切れるヤツがいる。そしてその考えを実行に移せる財力と人員。結構でかい相手かも知れんな」

一企業から発した騒動は、やがて様々な勢力を巻き込み始める。

「はア!? エウロパフレームのガラが強奪されたア!？」

「ああ、研究施設に運び込まれる寸前でな。リアクターは積み込まれてねえが……一応うちの最高機密だ。出来れば取り返すか破壊しておきたい」

「はっ、次から次へと騒動が起こりやがる」

「ビスケット、今そつちで空いてる腕利きは何人いる？」

「いきなりなんです!? ……もしかして、厄介ごとですか？」

「ああ、しかもとびつきりだ。……楽しいぞう？」
(この人が楽しんでるってガチだわ)

「アレにだけは連絡取りたくなかった。ホント避けたかった」

「あなたがそこまで言う人とは一体……」

「……………親父だ」

「……なにやってんの金髪」

「はっはっは、私は「マイク・クワトロ」。しがない投資家ですよ」

「OKルールは分かった。それで、何の話を持ち込んできた？」

「現在あなた方が相手取っている者たち。その情報売り込みに」

長き時をかけた陰謀。

「ギヤラルホルンの影に隠れ、我々は時を待った。……ふむ、すでに角
笛は鳴らされた後であるが、「ロキ」とでも名乗るかね」

巡る因縁。

「あら、久しぶりではないですか。フミタン・アドモス」
「ナナオ・ナロリナ!? あなたが、なぜ!?!」

生まれ出ずる災厄。

「このフレームに【オセ】のツインリアクターと、MAのAIを積んでみると……面白いことになると思わないか?」

宿敵との邂逅。

「なるほど、家族の仇だったと言う訳か。……『それは悪かったな』」
「……っ！ 貴様ぐがっ！」
「簡単に乗せられんな阿呆。てめえも分かって煽ってんなよ。……おちよくりがいがありすぎるじゃねえか」
「冗談には聞こえんなりボン付きの悪魔。……まあ今はそちらとやり合う気は無い。これはほんの挨拶代わりだ」
「っ!? こいつ、無人機か！」

広がる戦火。

「オイオイ冗談だろ……月面都市の半分が占拠されたって」
「どうやら前もって準備されていたようですね。しかも周到に」
「こいつは面白がってばかりもいられなさそうだ」

破滅の足音。

「こいつが実行されると……『月が砕ける』」

「ちよつとまで！ それじゃあ！」

「未曾有の大災害、どころじゃねえな。下手すりや地球圏は壊滅だ」

そして集いし強者たち。

「全く、我々がヤツの手助けをする羽目になるとはな！」

「だが、やらねば世界の破滅だ」

「何でまた僕は艦長席に座っているのだろうなあ……」

「文句は連中に言ってください」

「ついでに砲弾叩き込んだんじやるわい」

「ウォードッグ1より各機。MSには目もくれるな、例の『楔』を確実に破壊しろ」

「了解！」

「ウォードッグが突っ込む。俺たちは道を開くぞ。ガルーダーエンゲージ！」

「久々にチーム戦と行くか隊長！ メビウス2、仕掛けるぞ！」

「メビウス3、攪乱する。……尻は任せたメビウス4」

「了解。存分に」

「火星から超特急で来た甲斐があつたってモンだぜ。頼むぞミカ！」
「任せて。バルバトス出るよ」

「派手になってきたねえ。……アルジ、お前はセーレだけに集中しろ。
ケツは俺たちが持つてやる」

「すまない、感謝する！」

「生きて帰れたら一杯おごれ。それでチャラにしてやらあ」

空前絶後の戦い。その行く末は。

『イントロード・デイモン 月鋼編』

「メビウス1エンゲージ！ さあ s h o w T i m e といこうか！」

絶対やらない死ぬるし。